

ドラゴンボールad a s t r a

マジカル☆さくやちゃんスター

ただの村娘として何もしらぬままに生き、死ぬはずだった。

前世の記憶など思い出すはずもなかった。

それは本来ならば自らが異分子である事にすら気付かないはずの小さな異分子——のはずだった。

しかし歴史を捻じ曲げる者達の暗躍により、それは自らが何者かを悟り、そして『原作』への介入を開始する。

卵が先か鶏が先か——。

運命を変えたから彼女が目覚めてしまったのか、彼女がいたから運命が変わったのか。

これは数多存在する並行世界のうちの、正史からは観測すらされない世界の物語である。

目次

第一話	異分子の目覚め	1
第二話	不老不変	13
第三話	神との邂逅	30
第四話	この世で一番強いヤツ（前）	44
第五話	この世で一番強いヤツ（後）	61
第六話	物語の開始	76
第七話	大猿	92
第八話	天下一武道会	108
第九話	ピッコロ大魔王	122
第十話	まさかの修行イベント	138
第十一話	ドサクサ紛れの後継指名	155

第十二話	オラの悟飯をかえセッ!! (前)	175
第十三話	オラの悟飯をかえセッ!! (後)	194
第十四話	一年後に備えて	212
第十五話	サイヤ人襲来	233
第十六話	凶悪化	252
第十七話	大猿ベジータ	274
第十八話	リベリオンドライバー	292
第十九話	地球まるごと超決戦 (1)	311
第二十話	地球まるごと超決戦 (2)	336
第二十一話	地球まるごと超決戦 (3)	354
第二十二話	地球まるごと超決戦 (4)	371
第二十三話	インターミッション	389
第二十四話	いざ、ナメック星へ	406

第二十五話	集う者達		427
第二十六話	美しき野望		446
第二十七話	潜在能力開放		463
第二十八話	一時退避		480
第二十九話	始動		499
第三十話	歴史の侵略者達		514
第三十一話	更なる混沌		539
第三十二話	とびっきりの最強対最強（1）		556
第三十三話	とびっきりの最強対最強（2）		578
第三十四話	とびっきりの最強対最強（3）		595
第三十五話	激神フリーザ		615
第三十六話	最強のナメック星人		641
第三十七話	超サイヤ人だ孫悟空		662

第三十八話	超サイヤ伝説	684
第三十九話	次のステージに備えて	705
第四十話	美しき野望・完	721
第四十一話	復活の『F』（1回目）	743
第四十二話	ソリッドステート・スカウター	761
第四十三話	ボクの父はベジータです……謎の少年の告白	780
第四十四話	絶望を変える戦い	801
番外・絶望の未来	……	821
第四十五話	邪悪な予感	848
第四十六話	セル・リビルド	866
第四十七話	不気味な静けさ	880
第四十八話	激突!! 100億パワーの戦士たち（前）	895
第四十九話	激突!! 100億パワーの戦士たち（後）	913

第五十話	銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴①	
第五十一話	銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴②	
第五十二話	銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴③	
第五十三話	銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴④	
第五十四話	銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴⑤	
第五十五話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦①	
第五十六話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦②	
第五十七話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦③	
第五十八話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦④	
第五十九話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦⑤	
第六十話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦⑥	
第六十一話	燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦〜BROLY〜	

第六十二話 サイヤ人絶滅計画①

第六十三話 サイヤ人絶滅計画②

第六十四話 サイヤ人絶滅計画③～復活の『F』（2回目）～

第六十五話 サイヤ人絶滅計画④～予期せぬ救世主～

第六十六話 サイヤ人絶滅計画⑤

第六十七話 青い風のH O P E

第六十八話 新たな騒動の予感

第六十九話 暗躍する者達

第七十話 動き始めた魔導師

第七十一話 戦士集結

第七十二話 因縁の対決

第七十三話 ミラの本気！最強はオレだ…!!

第七十四話 握手……………

第七十五話 浄化（はかい）……………

第七十六話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ①……………

第七十七話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ②……………

第七十八話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ③〜復活の『F

』（3回目）……………

第七十九話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ④……………

第八十話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ⑤……………

第八十一話 最強のフュージョン……………

第八十二話 幻魔人降臨……………

第八十三話 相性……………

第八十四話 一時の平和……………

第八十五話 神と神①

第八十六話 神と神②

第八十七話 神と神③

第八十八話 神と神④

第八十九話 トランクスとバーダックの挑戦

第九十話 復活の『F』（4回目）

第九十一話 時の魔神

第九十二話 神になれたはずの男

第九十三話 それぞれの進化

第九十四話 復活の「F」①

第九十五話 復活の「F」②

第九十六話 破壊神選抜格闘試合

第九十七話	破壊神選抜格闘試合②	
第九十八話	破壊神選抜格闘試合③	
第九十九話	破壊神選抜格闘試合④	
第一百話	破壊神選抜格闘試合⑤	
第一百一話	破壊神への挑戦	
第一百二話	コメソンとおしゃぶりベジータ	
第一百三話	黒い孫悟空	
第一百四話	襲来、ゴクウブラック	
第一百五話	不死身の末路	
第一百六話	超サイヤ人4 VS 超サイヤ人ロゼ	
第一百七話	目覚めた人格	

第百八話	光のWILL POWER	2087
第百九話	そして未来は続いていく	2103
第百十話	ゼンオー君の正体	2129
第百十一話	経験者は語る	2145
第百十二話	親善野球試合	2167
第百十三話	宿敵、再び	2198
第百十四話	戦士として	2220
第百十五話	戦士達の日常	2238
第百十六話	邪悪なる龍	2257
第百十七話	神殿の守護者達	2273
第百十八話	一気呵成	2288

第百十九話	全王の戯れ	
第百二十話	集う戦士達	
第百二十一話	選手決定	
第百二十二話	第9宇宙からの襲撃	
第百二十三話	開戦	
第百二十四話	猛攻、第7宇宙	
第百二十五話	強者達の戦い	
第百二十六話	動き始めた最強	
第百二十七話	悟空の屈辱	
第百二十八話	合体戦士アニラーザ	
第百二十九話	模倣	

第百三十話 孤独な正義……………

第百三十一話 ジレン、危うし……………

第百三十二話 ひとりじゃない……………

第百三十三話 ad astra……………

最終話 さらに悟空、また会う日まで……………

宇宙争乱編

プロローグ 新たなる火種……………

第1話 オッス！ 帰って来た孫悟空と仲間達……………

第2話 銀河パトロール襲来……………

第3話 初手必殺……………

第4話 トリックスター……………

第5話	監獄惑星……………	2782
第6話	バトルジャンキー……………	2801
第7話	争奪戦開始……………	2818
第8話	悪のサイヤ人……………	2844
第9話	乱戦……………	2867
第10話	乱入者……………	2888
第11話	最強の戦士……………	2913
第12話	ゴジータVSカンバー……………	2932
第13話	人造人間21号……………	2955
第14話	急転……………	2970
第15話	復活の「C」……………	2992

第16話	宇宙争乱……………	3019
第17話	第6宇宙の抵抗①……………	3048
第18話	第6宇宙の抵抗②……………	3073
第19話	広がる争乱……………	3096
第20話	コアエリアの戦士VS第11宇宙……………	3116
第21話	正義の化身……………	3142
第22話	救出への光明……………	3169
第23話	決戦への備え……………	3194
第24話	激突!! 100兆パワーの戦士たち(1)……………	3215
第25話	激突!! 100兆パワーの戦士たち(2)……………	3234
第26話	激突!! 100兆パワーの戦士たち(3)……………	3260

第27話	激突!! 100兆パワーの戦士たち(4)
第28話	とびっきりの最強VS最強
第29話	消えた神々
第30話	悪意の結託
第31話	超戦士達の抵抗
第32話	ワールドミッション
第33話	混沌の戦場
第34話	逆転の光明
第35話	究極の神殺し
第36話	最終ラウンド
第37話	誇りの一撃

第38話 人の輝き……………

第39話 争乱の果てに……………

最終話 摩訶不思議アドベンチャー……………

第一話 異分子の目覚め

ハーメルンの皆様初めまして。

マジカル☆さくやちゃんスターと申します。

皆様のSSに触発されて私も何か書こうかと筆を取りました。

や、キーボードだから筆使わないですけどね。

もしよろしければ、御覧になっていってください。

一人の少女が呆然と、空を見上げていた。

見慣れたはずの空。しかしまるで宝石でも眺めるかのように、その瞳は輝きに満ちている。

まるで雪のように白い髪を腰までなびかせ、ぱっちりとした金の瞳を瞬かせ、奇跡的なバランスで配置された美貌は歓喜に満ちる。

歳の頃は九かそこいら。小娘と呼んで何ら間違いはなく、数年も経てば絶世の美

女に化けるだろうが今はただの幼子だ。

切っ掛けは唐突だった。

ある日突然、何の前触れもなく彼女の前に現れた青い肌の男女が歴史がどうこうと意味の分からない事を言いながら彼女に襲いかかり、やはり何の前触れもなく登場した剣を持った銀髪の青年がそれを止めた。

歴史の変化だの修正だの、後で邪魔になるだの、何かよく分からない事を言いながら両者は激突し、少女には全く見えない速度でしばらく戦った後に空へと飛んで行った。

どちらにせよ、今の彼女にとってそれは些細な事なのだろう。

エイジ暦500——銀河の辺境地球の、そのまた辺境の田舎に住む少女リゼットはある日突然に前世の記憶というものを取り戻した。よくわからない連中が空を飛んだ時に爆風で転んだのが原因かもしれない。

いや、果たしてそれを取り戻したと形容すべきか。

取り戻したというよりは得た——この表現の方がしっくり来ると彼女は自答する。

なにせ全てが虚ろで不確かで、何より断片的だ。

前世の自分の人格などはまるで取り戻せておらず、それはまるでスクリーン越しに映画を見るかのように、自分とは隔絶した存在としてしか捉えられない。

記憶はある。『自分』が経験した人生の出来事が脳の記憶領域に突然現れて勝手に居場所を作って己の許可もなく居座った。

だが他人事とは思えない。確かに経験したはずの過去を、自分の過去と繋げられない。自我の連続性がそこにない。

ああ、何か自分の前世らしいどこかの誰かの記憶を得たけど、これ私じゃないよね。

彼女の偽りない感想がそれだった。

例えを出そう。

突然に見知らぬ誰かの人生をダイジェストで垂れ流されて、最後に『これは貴方の前世です』と言われてそこに自分を見出す事が果たして出来るだろうか。

過去に自分が確かに歩んだ足跡と同じように、それを自らの足跡であると実感出来るだろうか。

……無理だ。だって途切れている。

足跡のサイズも歩幅も何もかもが違う。他人の足跡にしか思えない。

『ああ、そうですか』としか言いようがない。

だから前世の人格などというものは彼女にとって至極極めてどうでもいいものだった。

自分はもう『自分』ではない。記憶をいくら得たって、もう他人だ。

前世の『自分』の自我は死んだその瞬間に途切れてしまっている。連続性がないのだから自分と繋げる事が出来ない。

記憶喪失の人間ですら喪失前の己と喪失後の己を繋げられないのに、どうして完全に別人になって繋ぐ事が出来る。

無理なのだ。本当に自分と『自分』を繋げて連続性を持たせたいなら、今ここにいる自分を消して上書きしてしまうしかない。

無論そんなのはお断りで、既に終わったはずの誰かに己の人生を明け渡してやる気など毛頭ない。

故にそれはもうどうでもいい。

肝心なのは、記憶の中身だ。

「ありえません」

リゼットは一言呟く。

ああ、何だこれは。ありえないだろう。

記憶の中に眠る数多の架空世界。

娯楽目的で生み出されたフィクションの絵空事、実在しないはずの空想の具現。
紙の上にインクで描かれた在り得ざる平面の世界。

その中にある、一際記憶に強く焼き付けられた『ドラゴンボール』の単語。
これが何より有り得ない。

知っている。

ああ知っている、知っているぞ。

私はこの単語を知っている。御伽噺に聞かされた事がある。

七つ集めればどんな願いも叶う奇跡の玉。

今からほんの四十年程前から真しやかに囁かれるようになった都市伝説の類。奇跡の球。

そしてこの世界の年号を表す『エイジ』の単語。

道行く先々で目にする、犬とも人とも猫とも付かぬ、獣と人を合成したかのような亜人獣人竜人達。

伝説の武闘家、武泰斗がピッコロ大魔王を倒して世界に平和を齎したのも四十年前。

これは誰もが知る御伽噺であり、英雄譚だ。

きつと後百年もすれば忘れられてしまうのだろうが、今はまだ人々の記憶に焼き付いている。

「なんてこと」

思わず天を仰ぐ。

その先にいるだろう神様に恨み言の一つもぶつけたくなる。

無論彼に罪はない。きつとこの生まれ変わりに彼は一切合財微塵も関わっていない。

いや、彼だけに留まらず恐らくはこの世界の転生を司る閻魔やその上に座する界王、更には界王神すら与り知らぬ事だろう。

こんな……こんな『原作知識』などと、馬鹿げた記憶をそのままに転生などさせるはずがない。

神々すら更に上の彼方から、紙上より眺めていた観察者の記憶などどうしてそのままに出来る。

思い出さなければ良かった。得なければよかった。気付かなければよかった。そうすればきっと、何も知らぬままにこの世界で生きてこの世界で死ねただろうに。

時代が主人公達と致命的にズレているのだから、そのまま天寿を全うする事だつて出来た。

だが駄目だ。もう黙って死ねない。

だって、もう知ってしまったから。

自分の知る常識は常識ではなかった。

世界はこんなにも広くて、こんなにも狭くて、こんなにも予想外の事が目の前にある。

平凡なだけの人生、それも悪いとは言わない。幸せな事だ。

それが一番賢い生き方で、最も美しい死に方だ。

だが——だが、もう駄目だ。ワクワクした心が止まらない。

望めば空を飛べる。

遙か遠い空間への移動も、手からビームも、宇宙の彼方への旅だって出来る。

やろうと思えばどこまでも飛べる。

そんな世界に生まれて、ここがそんな世界だと気付いて、それで平々凡々に生きて死ぬなど……それは余りに勿体無いだろう。

好奇心。

リゼットは人一倍それが強かった。

いつか大きくなったら世界を旅してみたいと思っていたし、ドラゴンボールもいつか探してやると決めていた。

『前』がどうだったのかは分からないが、少なくとも今のリゼットはそんな、冒険心の塊のような少女であった。

だから死ねない。

まだ自分は空の彼方まで飛んでいない。

深海の底まで潜っていない。

宇宙の果てを見届けていない。

見たいものが沢山あって、やりたい事が山ほどあって、この世界ならそれが出来ると記憶が証明してくれた。

愛おしきこの世界、されど自分はまるで知っちゃいない。

愛しているのに、愛した物の実体すら解っていない。

これではただの恋わずらい。一方的な世界への片思いだ。

ならば見よう。ならば往こう。

この世界の全てを解き明かし、全ての地を摩訶不思議大冒険しよう。

死ぬのはそれからいい。

この心を占める未知が全て既知に変わった後でいい。この世界を愛し抜いた後でいい。

ありとあらゆる全てが既知感で埋め尽くされて退屈になったなら、その時こそ満足と共に永遠の眠りに就こう。

だから今は生きたい。

生きて、生きて、生きて、満足して死にたい。

見ているか前世の己よ。

既に消えてしまった前の自我よ。

私は貴方に心から感謝する。記憶をくれてありがとう。

貴方の記憶がなければ、この世界の価値に気付けなかった。

こんなにも未知と可能性に溢れている、何でも出来る夢の世界だなんて思わなかった。

ここが私の生きる世界、生きる道。

貴方が決して来られなかった、架空の先の果ての夢。

けれど確かにここは現実で、己は確かにここに立っていて――。

「――私は、生きている！」

それが、リゼットという少女の真の産声。

己と記憶と世界を認識し、心から叫んだ第一声。

そして同時にそれは、本来あるべき運命が捻じ曲がる不吉の音でもあった。

とても有難い頂き物イラスト

支援絵を貰えるのは幸せな事だ！

阿井上夫様

<http://img.syo.setu.or.jp/gimg/user/326546/1>

27228.jpg

<http://img.syo.setu.or.jp/gimg/user/326546/9>

2521.jpg

<http://img.syo.setu.or.jp/gimg/user/326546/1>

29216.jpg

びたちよ様

<http://img.syo.setu.or.jp/gimg/user/296884/1>

27551.jpg

石川まりなさん様

h t t p s : / / i m . g s y o s e t . u o r g / i m g / u s e r / 3 3 9 2 8 2 / 9
 0 7 2 6 . p n g

86 様

h t t p s : / / i m . g s y o s e t . u o r g / i m g / u s e r / 1 7 7 8 2 5 / 5
 0 0 7 3 . j p e g

h a k u s h i 様

h t t p s : / / i m . g s y o s e t . u o r g / i m g / u s e r / 1 4 6 1 1 6 / 4
 9 7 5 4 . j p g

カミヤマクロ様

h t t p s : / / i m . g s y o s e t . u o r g / i m g / u s e r / 1 0 8 9 5 9 / 4
 9 9 4 2 . j p g

フェンベルク様

h t t p s : / / i m . g s y o s e t . u o r g / i m g / u s e r / 4 5 0 4 2 8 / 1
 2 9 0 8 5 . p n g

第二話 不老不変

記憶を得てからリゼットが真っ先に行ったのは戦闘力を上げる修行であった。

この世界はドラゴンボールの世界、となれば物を言うのはとにかくにも戦う力だ。

格闘技の経験などリゼットにはなかったが、それは実の所大した問題ではない。確かに技術は大事だろうが、それよりまずこの世界は基礎スペックが強さのほとんどを占める。

格闘技の経験などなろうと戦闘力に大きな開きがあればそれだけで勝てるし、何よりリゼットの記憶が正しければフリーザや魔人ブウなど、明らかに己のスペックのみで戦っている輩が大勢いる。

サイヤ人だって格闘技の経験などあるかどうか怪しいものだ。

恐らくはほとんどが実戦の中で各々が見出した野生の獣染みた本能のままの体術だろう。

無論それは戦闘種族だからこそのものであり、地球人であるリゼットが真似しよ

うと思えばどれだけの年月がかかるか分からない。

しかし、それは後で身に付けられればいい。

何よりもまず、今は基本的な体力や腕力、敏捷さを身に付ける事こそが優先される。

強さを上げる当てはやはり記憶の中にあつた。

それは『重り』だ。

ドラゴンボールの修行において基礎能力を上げるならば重りは決して無視できない。

少年時代の孫悟空の亀の甲羅に始まり、神様から貰った重い胴着、十倍重力、百倍重力……身体に負担をかける事で、軽くなった時の強さを上げる。

なるほど、理に適っている。現実でも使われている修練だ。

マラソン選手が高山の上でトレーニングしたり、ボクシングの選手が足に重りを付けたりなどは決して珍しい事ではない。

もっとも十倍重力なんてものはまさにこの世界だから可能なトンデモ修行であり、元の世界でやれば普通に死ぬだろう。

血液が脳に回らないのは当たり前。恐らくは細胞も異常をきたし、強くなるどころではない。

しかしリゼットはそれを思考から除外した。

きつと物理法則そのものが違うのだ。世界が違うのだから元の世界では、などという仮定に意味などない。

まずは自作のバンドを作り、そこに鉄を仕込んで手足に付ける事から始めた。裁縫は幸い得意だ。

鉄を入れる専用のポケットも付け、慣れるにつれて少しずつ重りを追加した。

靴も重くしてみたり、服に縫い付けてみたり、とにかく出来そうな事は出来るだけやった。

リゼットにとって幸運だったのは、ここが辺境の田舎であり、男女関係なく体力が求められていた事だろう。

主な仕事は畑仕事に森林採伐。斧を振って木を倒すあれだ。

童話などでは池にボロい斧を落とせば神様が金の斧をくれるが、勿論そんな事はこの世界でもない。

そんな事情もあり、リゼットの修行も体力と腕力を上げるのものととして普通に黙認してもらえた。

都会だったらいこうはいかない。母親に大目玉を食らうところだ。

畑仕事も素手で行い、最初こそ苦労したが慣れるにつれて鍬などの道具を持った大人よりも早く畑を耕せるようになった。

一年経つ頃にはバンドが物足りなくなってきたので、外にいる間は岩を背負う事にした。

常に岩を背負って歩く岩少女とはなかなかシュールな光景だが、人は慣れる生き物だ。

最初こそ奇異の視線を向けられたものだが、いつしか村の人々もリゼットの姿に何も言わなくなり、岩娘という渾名だけが定着した。

順応早いな、この世界の人々。

更に一年経つ頃には岩も大して重くなくなり、身近に背負う物がなくなってしまう。

どうやら思った以上に重りの特訓は上手くいったらしい。

試しに村一番の腕自慢と腕相撲をしたら、相手が両腕でもまるで勝負にならずに勝った。

これは旅をする為の基礎体力と腕力は身に付いたと考えてもいい頃だろう。ゴリラのようなパワーのはずだが、腕は未だ少女のしなやかさと柔らかさを保っている。

まあクリリンとかが戦闘力一万を超えてもビスケット・オリバみたいにはならなかったので筋肉の構造も元の世界とは違うのかもしれない。

多分この世界の人類、外見や構造は似ているがホモ・サピエンスじゃない。リゼットはそう確信した。

となれば、次にするべきは旅だ。

この村にいても、もう得るべきものは何もない。

年齢は11歳。少女が一人で旅をするには早過ぎる年齢だ。

親からは当然のように止められたし、ここまで育ててもらった恩義を忘れるわけではない。

だがこんな小さな村で普通に暮らして普通に結婚して死ぬなんて御免だ。

世界を見て回りたい。望めばどこでも行けるこの世界を漫遊し尽くしたい。あらん限りの言葉を尽くして力説したりゼットにとうとう七日目で両親が折れ、年に一度は必ず帰る事を条件に許可をもぎ取った。

★

旅に出て三年。リゼットは自分が確かに強くなっている事を確信していた。

大岩を持ち運ぶなど最早日常。素手で砕くのも容易く、走れば100mを八秒以内に走り抜けるのも容易だ。

相変わらず技術はないものの、基本的なスペックは確実に超人と呼べる域に及んでおり、試しに出て見た格闘の大会などでもまるで苦戦する事なく優勝賞金を掻っ攫える。

リゼットの旅の目的はドラゴンボール。

まずは寿命を克服する。そうしなければ世界を堪能し尽くす事など夢のまた夢だ。

彼女にとって幸いだっただのは、この時代にドラゴンボール探しのライバル足りえる者がいなかった事だろう。

ドラゴンボールの噂が世に広まって四十年、未だ誰かがそれを集めて願いを叶えたという話はなく、そもそもドラゴンボール自体の認知度が低い。

これは恐らく、まだ誰も願いを叶えていないからだ。

事実かどうか分からない伝説。そんなものの為に世界を巡る者などそうはいない。

レッドリボン軍もないし、桃白白などは既にいるものの何を考えているのかサラリーマンをやっていた。

ピラフ一味など生まれてすらいない。

だから容易かった。だから妨害に遭わず、こうも順調に集められた。

無論困難でなかったわけではない。

何処に在るかも分からぬ小さなボール。加えてレーダーなどという便利なものはまだ存在しない。

だがリゼットは幸運だった。

どんな探し物でも見付けてくれる、未来すら見通す占いババがこの時代、既に生きていた。

聞けば250年以上昔から占い稼業をしていたらしい。化物か。

彼女の出す試練もまたリゼットの知るそれより難度が低く、繰り出される五人の戦士の質も大した事はなかった。

多分アックマンはまだ雇ってなかったのだろう。

占いババから貰った情報を元に世界を巡り、ボールを集めた。

そして今、七つの球がりゼットの手中にある。

全てが彼女にとっていい方に作用したからこそ三年で集める事が出来た。

後に悟空達は一日で全て集めるようになるが、あれは彼等の桁外れの飛行速度あつてこそそのものだ。

今のリゼットならばこれで十二分に上出来なのである。

『さあ願いを言え。どんな願いでも一つだけ叶えてやろう』

出てきた龍は神々しく輝き、夜空を照らす。

なるほど、圧倒される、とりゼットは思った。

しかし見惚れてばかりもいられない。願いを言わなければ。

「願いを増やして下さい」

『それは出来ない。叶えられる願いは一つだ』

物は試しとやってみた願いはあっさり却下された。

やはり駄目か。

まあ、これは予想出来た事態なのですぐに本命の願いを口にする。

「私、リゼットという存在を不老不変のものとして下さい。」

老いず衰えず失わず、私は全盛期のまま強くなり続けたい！」

『……………』

不死は望まない。不老はともかく不死を望んだ者の末路はいつだって悲惨だ。

そして同時にこの願いは一つの賭けでもあった。

——願いを二つ言っている。

不老を願い、更に姿の不変までも願っている。

この不変とはつまり変わらぬ事。髪を染めようが肌を焼こうが、腕や足を欠損しようが元の形状に必ず回帰するという事。

解り難いのなら、吸血鬼にならずその不老性と再生能力だけ得ると考えればいい。

リゼットはこれを『出来る』と予感していた。

だって実際原作で出来ている。

例えば不老不死だ。あれは『不老』と『不死』の二つを叶えている。

『○○に殺された者達を生き帰らせてくれ』なんて、その最たる物だ。

死んだ人間の数だけ願いを叶えている。

『地球を元通りにしてくれ』はもつと酷い。建物の一つ一つ、個人の持つ所持品や衣服、食料、砂の一粒に至るまで再現させている。言葉にすればたった一つの願いであるが、この時に神龍が叶えている願いは数億数兆に匹敵するだろう。

そう、即ち神龍は結構融通が利く。

言い方次第では複数の願いを叶える事も不可能ではない。

更に細かい条件付けも可能だ。

『若返らせてくれ』の後に『最もパワーに溢れていたあの頃に』と条件を加えればちゃんと叶えてくれるし、『悪人を除き』と言えばちゃんと悪人を取り除いてくれる。

しかも恐らくだが、読心の類を使って願いを正確に把握してくれているはずだ。でなければ、前述の『最もパワーに溢れていたあの頃』だけで伝わるわけがない。

ナメック星人の長い寿命では、いつが最盛期かなんか分からないのだ。

つまり曲解しない。

正確に望んだ願いを叶えてくれるし、無理なものは無理と言ってくれる。

どこぞの外道魔法マスコットや万能の願望曲解機とは格が違うのだ。

だからきつと、『姿が変わらないから筋肉も変わらないので強くはならないよ』とかはやらないだろう。

一応それに釘を刺す意味で『強くなり続けたい』と加えているし、大丈夫なはずだ。

そして、リゼットの読み通り神龍は頼もしい言葉を口にする。

『容易い事だ』

神龍の目が輝き、リゼットの身体を包む。

特に何かが変わった感覚はないが、それは後で試せば分かる事だろう。

『願いは叶えてやった。さらばだ』

神龍は事務的に告げると姿を消し、七つの球は再び世界各地へと飛び散った。

何はともあれ願いは成就された。

これで寿命は気にしなくていいだろうが、問題はもう一つだ。
不変がどこまで叶えられたのか……それを試さなくてはならない。

「……まずは、髪から」

足首まで伸びていた髪を小刀でバツサリ切り落とす。

これでショートカットになったわけだが、さてどうなるだろう。

流石に斬ってすぐに再生とはいかないらしく、そこらの岩に座って時間を潰す。
すると大体十分くらいかけて髪が生え、元の長さへと戻った。

よし、大丈夫だ。

しかし冷静に考えると髪を切ってから願いを叶えるべきだったかもしれない。
これで一生、この馬鹿みたいに長い髪の毛と付き合う羽目になってしまったのだ
から。

「傷はどうでしょう」

次に小刀で掌を斬る。

血が滲み、地面に赤い斑点を刻んだ。

それから一分……傷は完治し、元通りの綺麗な掌へと戻るのを確認した。

願いは間違はなく滞りなく、己の望んだ形そのままに曲解される事なく果たされた。

ああ、素晴らしい。どんな願いでも叶う、というのは誇張ではなかった。神の力を超えぬ限りならば、文字通りどんな願いでも叶えられるのだ。

即ち不老、即ち不変。

老いず朽ちず衰えず碎けず、死なない限り死にはしない。

ならば次は力だ。

不変の願いが真に果たされたならば、恐らくどれだけ鍛えようとゴリラのような外見になる事はあるまい。

リゼットもまた女性。鍛えすぎによる外見の筋肉化は避けるべき事態だった。

だがその不安も最早なく、思う存分に磨く事が出来る。

というか何で未だに筋肉らしきものがほとんど付いてないのだろう。二の腕とか触るとプニプニしているし。

巨岩を持ち運べる筋力でこれだけの变化だった、というのが既に驚きだ。

だがよく考えたら、ビルだろうと持ち上げられるクリリンや天津飯だってあんな

スマートなんだから、岩を持ち上げる程度ではそんなゴツくなだれないのかもしれない。

とはいえ、やたらゴツイくせに弱い人間とかもいるので油断は禁物だ。

というかどうかという基準でゴツくなるんだらうこの世界。

★

不老となってから十年。

休みなく修練を続け、世界中を巡り様々な格闘技を修めてきた。

最初は格闘技など要らないと思っていたが、実際に学んでみると奥が深い。

その傍ら、体内の気を感じ取る修行も並行して行い、何とか気の操作も出来るようになった。

悟空が三年、クリリン達が一年、ベジータに至っては見ただけで即習得した事を思うと何とも遅い習得だが、幸いリゼットには時間がある。

とりあえずこれからは気弾と空を飛ぶ練習も行っていくといいだろう。

それよりリゼットには一つの目的があった。

それはカリン塔に行き、雲のマシンを手に入れる事である。

勿論普通の雲には乗れないだろうが、確かあそこには邪心を持つ者専用の黒い筋斗雲もあったはず。

ついでに独学の限界を感じたというのもある。

格闘技は修めたがそれは全て常人が使う事前提のもの。

リゼットのような超人的な身体能力を前提とした体捌きなど教えてはいない。役に立たないわけではない。だが不足だ。

だからリゼットはカリン塔に登る事を決意したのである。

「……で、ここまで登ってきたわけじゃな」

「はい」

リゼットの前に立つのは白い体毛に覆われた二足歩行の猫。

武の神様とも呼ばれるカリン様である。

二足歩行こそしているものの、その姿はまさに猫そのもの。

手足は短く、猫本来の愛嬌をそのままに残しており、壮絶にモフリたくなる。

というかとおりあえずモフってみた。失礼とは分かりつつも衝動を我慢出来ずに喉の辺りをくすぐる。

するとカリンはゴロゴロと喉を鳴らした後、ハツとしたようにリゼットの腕を止めた。

「いきなり何するんじゃ」

「す、すみません……私、猫好きなのでつい」

名残惜しさは感じたものの、ここで不興を買うのはまずい。

カリンから手を離し、リゼットは頼みこむように頭を下げた。

「私を弟子にして下さい、カリン様」

後ついでに撫でさせて下さい。

前半はともかく、後半の願いは無情にも却下され、リゼットは失意に暮れた。

【リゼットの身長】

身長…153cm

クリリンと同じ大きさだが、DBにおいてクリリンは実際の身長よりも小さく描かれてしまうので、同じ身長のはずなのに一緒に並ぶと何故カリゼットの方が大きいという謎現象が発生する。

例えばクリリンは身長153でビーデルが身長157と割と近いはずだがDB超のOPで並んだ時、クリリンは何とビーデルの胸にすら届いていなかった。

多分彼の身長153は鯖を読んでおり、実際は140くらいしかないと思われる。

Q、ドラゴンボールに願ってサイヤ人にならないの？

A、最初に『不変』を願ったので無理です。種族はもう変わりません。

それとメタ的に言うとそのくらいなら最初からサイヤ人オリ主でやっています。

第三話 神との邂逅

カリン様の下で修行して十年。

実年齢にして三十路半に到達したところでリゼットは、カリン様から『もうお前に教える事ないよ』と言われて追い出されてしまった。

格闘どころか仙人が扱う超能力的なものまで得てしまったリゼットに最早カリン様では何も教えられなかったのだ。

あれからも欠かさず氣のコントロールを試していた甲斐もあり、遂に氣の感知と操作、更に舞空術をも身に付ける事に成功したりリゼットはカリン様から卒業祝いに黒い筋斗雲を貰ったものの邪心不足で乗れず、黄色の雲を貰った。

リゼットはそこまで心が清らかでないと自覚しているが、普通に乗れたので邪惡でさえなければ乗れるらしい。

まあよく考えればコラボ作品で海賊のはずのルフイとかも乗っていたし、実は条件が緩いのだろう。

しかし次の目的地は神様の神殿だったので筋斗雲の出番はなく、リゼットは自力

で空を飛んだ。

筋斗雲涙目である。

尚、余談だが一年に何度かのペースでちゃんと実家には顔を出している。筋斗雲が手に入ってからには移動も楽になり、実家帰りの頻度が上がった。筋斗雲ドヤ顔である。

ならば、と次にリゼットが向かったのは前述の通り神様の住まう神殿だ。普段は地球とは別次元に存在していると言われる神殿だが、如意棒でカリン塔と接続している間だけ現世に実体化するらしい。

もっとも、実体化しているといっても飛行機などで入る事は出来ない。

如意棒を伝った移動以外は全てバリアによって弾かれてしまうのだ。

幸いにして如意棒はまだカリン様の手元にあり（亀仙人が貰う前だったようだ）、リゼットは無事に神殿へと行く事が出来た。

さて、神様の下へ行ったりリゼットだが実の所彼に弟子入りする気は微塵もなかった。だってもう気の操作出来るし。

だから神様に頼む事は一つ。『重い服下さい』ただこれだけであつた。

一方の神様はいえ、こちらも実の所大混乱であつた。

何せ神に就任して以来、初めて下界の人間が来たと思えば言う事がそれである。しかもその人間、よく見れば初めてドラゴンボールを使用して願いを叶えた不老少女だ。

というか現状、彼女以外にドラゴンボールを集めて願いを叶えた者がいない。

まあ、神としては悪しき人間が願いを叶えさえしなければそれでいいのだが、問題は彼女がここに來た理由であつた。

「……重い服？ それだけかね？」

「はい、それだけです」

この娘、神殿を服屋と勘違いしとりやせんだろうか。

というかそんなの下界で用意しろ。わざわざここまで来るな。

馬鹿なのだろうか？ というか馬鹿なのだろう。

服貰う為に神様に謁見とか無礼にも程がある。神罰下すぞこら。

いや、下さないけど。

「修行を付けてやってもいいのだぞ？」

「大丈夫、氣の操作は覚えましたから。後は伸ばしていくだけです」

何か独学で氣の操作をマスターしていた。何この娘凄い。

天才じゃったか。

やはり天才か……。

大した奴だ……。

というか明らかに最初から氣の操作という概念を理解している。どういう事だっ
てばよ。

何はともあれカリンが認めた証の鈴もあるし、折角の来客だ。手ぶらで帰すわけ
にもいくまい。

「服……服か。わかった、特別に力作をプレゼントしてやろう」

弟子入りもしないというなら、せめてこちらに本氣を出すしかない。

神様だって出番が欲しいのである。

まず彼女の容姿を見る。

白金の髪の毛に透き通るような白い肌。宝石のような瞳。

驚く程に白で統一されたその姿は神聖さすら感じさせ、まるで妖精か天使を思わせる。

ならば衣装もそれに準じたものがいいだろう。

なるべく彼女のイメージを崩さず、かつ見栄えをよく。

現在の服装は——言ってしまうえば貧相そのもの。

別に汚くはないのだが、何とか村娘そのままといった出で立ちだ。

どうせならもっと美麗に。彼女の持つ神聖さを強調する服装にしてやろう。

何せ史上初めてドラゴンボールを使い、神様と相まみえた人間だ。そのくらい特別な方がいい。

「よし、これなどどうだ。サービスで自動修復機能も付けてやる」

リゼットの服装が一瞬で変わる。

それはケープのかかった、純白のゆったりしたヒラヒラのドレスだった。

スカートはフワリと広がり、彼女本来の白い容姿と相まって清廉さを感じさせる。

靴は有名な童話になぞらえてガラスの靴。サイズもピッタリ合わせ、履き心地も悪くないはずだ。

ついでに固い。宇宙最硬のカッチン鋤とまでは流石にいかないが、地球最硬の物質である天命石にも匹敵する硬さだ。

頭には天使の羽根を模した髪飾りを付け、彼女の妖精染みた神聖さを引き立てる。そして肘から先には白の長手袋。

初見でこれを見れば神の遣いか天女と見紛う者も出るだろう。

無論優雅なだけでなく重い。ケープと靴、手袋を合わせて200kgは下らないはずだ。

「……あの、ヒラヒラしてて凄い動きにくいんですが」

「それも修行だ」

無論嘘だ。神様だって嘘くらい吐く。

実際のところは服一つ貰うためだけにここまでやって来た彼女への嫌がらせが8割といったところだ。

リゼットは納得がいかないのか、頬を膨らませてしばらく服と格闘していたが、やがて諦めたらしく肩を落とした。

「あの、神様……これではいざという時に重装備を外せません」

「安心せよ。ケープは簡単に取れるようになっておる」

神様に言われ、気付いたようにリゼットがケープを外す。

なるほど、本気で戦う時はケープと靴と手袋だけ取ればいいわけだ。

そう思ったが、直後にリゼットは顔を赤くして悲鳴をあげた。

「これケープ取ったら肩露出するじゃないですかヤダー！」

「ふっふっふ」

神様流の嫌がらせ炸裂である。

人間よ、神を侮辱した罪を知るといい。

別にリゼットとしては侮辱したつもりはないのだが、神様にしてみれば神に就任して以来初の来客で気合入れて威厳たっぷりに出迎えて『よくぞ来た。褒美に神の修練を受ける権利を授けよう』とかドヤ顔で言ったら『そういうのいいんで、服だけ下さい』である。

これはいくら何でも怒る。というかへこむ。

わし神様よ？ 偉いのよ？ 凄いのよ？

なのに服屋の代わりでそれ以外用はないとかチト酷すぎませんかね。

気合入れたわしの高揚返せ。

何ともせせこましく、茶目っ気に溢れた小さい仕返しであった。

まあ、神様を（本人に自覚がないとはいえ）侮辱してこの程度なのだからむしろ寛大さに感心するべきなのかもしれない。

善良なナメック星人は相手が悪人でない限り、基本的には本気で怒ったりしないのだ。



神様に嫌がらせをされて更に幾年、幾十年もの年月が経過した。

親が天寿を全うして他界してからは実家に帰る事もなくなり、リゼットは世界各地を転々としながら時に悪人を懲らしめたり、時に犯罪組織を潰したり、時に虐げられている民を救ったりしていた。

例を挙げるならばグルメス王国の暴君であるグルメス大王を懲らしめてみたり、太陽を破壊しようというといんでもない計画を立てていた魔族を纏めて叩きのめしたり、といったところだ。

勿論それらは善意からの行動というよりは、単に戦いを求めている行動である事は

言うまでもない。

単にぶちのめしても問題なさそうな悪人に積極的に喧嘩を売って実戦経験を稼いただけであり、少なくとも無償の人助けとはほど遠い行動であった。

しかし結果として、彼女の後ろにはいつだって弱者がいた。虐げられている民がいた。

助けられた側が彼女の本音を知るわけもなく、その神秘的な容貌と相まっていつしかリゼットは御伽噺に語られる天女の如き扱いを受ける羽目となった。

『龍天女』……だったか。

史上初めてドラゴンボールを集めて願いを叶え、雲のマシンに乗り、神にも認められた存在。

弱き人々を救う見目麗しき少女。

無論本人はそんなイメージとは程遠い存在であり、龍天女などという恥ずかしい名前で呼ばれるようになっていた、と知った時は赤面して奇声をあげながら転げ回った。

天女扱いされた最大の要因は恐らく、リゼット自らが編み出したパクリ……もと

いオリジナル技のせいだろう。

気の操作を極めていくにつれ、リゼットは一つの考えに行き付く。

それは『自分で技作れるんじゃない？』というものだ。

亀仙人のかめはめ波だって元を辿れば彼のオリジナルであり、それ以外にも類似技は沢山ある。

どんな凄い技だって最初はオリジナルだ。

ならば自分にだって出来ない道理もあるまいと考えての事だ。

そこで何を血迷ったか、リゼットが挑戦したのは気功波系ではなく、界王拳のようなドーピング系だった。

体内の気を爆発させ、平常時を遥かに超える出力を生み出す。

これが出来れば超サイヤ人にだって追いつかれるはずだ。

そんな無謀とも思える試みはしかし、何故か成功した。

運がよかったとしか言えない。

奇跡的に相性が噛み合い、奇跡的に思い付いた気の動かし方が正解だった。

だが所詮は真似事。エセ物のパチ物だ。

望んだ通りの効果は得られたものの、その技は明らかに界王拳ではなかった。炎のように燃えるあの外見とはまるで異なり、雪のように白い輝きが粒子として溢れる。

全身が白く、それでいて静かに発光し、まるで雪が舞い散るように白い気が全身から溢れるのだ。

例えるならば初進化したエンジェモン。何かキラキラした光をずっと出し続けていたあれだ。

無意味なまでに神々しい。だから私そういうキャラじゃないって。

正直界王拳の方が格好いいので何度もあるかないかと試行錯誤したが、試せば試すほど何故か神々しくなり、グロー効果までかかってしまった所で遂に諦めた。リゼットは泣いた。

しかし見た目はともかく、効果としては完成に近い。

使えば力やスピード、気の出力など全てが倍になるし、なによりこれは修行に適している。

全身の気を最大限解放して身体に負担をかけ、疲労困憊になってから休む。

まるでハンターハンターの修行のようだが、これを繰り返す事で確かに気が増えているのをリゼットは実感した。

この世界の人類の肉体というのはどうも、苛めれば苛めるほどに反発して強くなるらしい。

でなければ重力修行とか出来ないと解ってはいたが、効率が凄まじい。

だからリゼットは可能な限りこの技を使い、どうでもいい悪党相手でも使用して圧倒した。

それが災いしてしまったのだろう。

追い立てられ、虐げられ、救いを求める人々の前に文字通り舞い降りる白い少女。純白のケープドレスを纏い、白い輝きに包まれ、無償で救いの手を差し伸べて微笑み、そして去って行く。

なるほど、まるで童話だ。

単に強くなりたいだけ、という彼女の本質と目的を知らなければ救いの天女だ。百年ほどそうして、ようやく鈍間で間抜けな本人が気付いた時にはもう手遅れ。なんか崇拜してる連中が山ほどいるし、変な宗教も出来上がっていた。

しかも本人そっちのけで宗教戦争までしてた。天女様のパンツは白だのピンクだのと死ぬほどどうでもいい争いに何故か命まで懸けて全霊で戦争していた。千人単位の軍隊を結成して戦車まで引っ張り出してガチバトルしてた。

何あれ怖い。

自分を模した像が神殿に普通に突っ立っていた時は目を疑ったものだ。

これに対し、元凶ともなった服を贈った神様はこう言った。

『久しぶりに爆笑した』

リゼットは無言で神様を殴った。

※ちなみに宗教戦争時はギャグ補正が全力で仕事をしていたので実際には死者は出なかった模様。

アラレちゃんのようなポップな絵柄になり、戦車が爆破されても中の人は黒焦げになるだけで普通に這い出して来る。

ギャグ時空である初期DBだから出来る事。

ちなみにドロワーズなので両軍不正解。

第四話 この世で一番強いヤツ（前）

リゼットの住む家は標高五千mを超える山の、その頂上にある。

以前までは気ままに放浪してそこらの宿に泊まっていたのだが、この服のせいで目立つ上に天女扱いされたせいでそれも出来無くなったのだ。

なので仕方なく、リゼットは自らが就寝出来る場所を自分自身で用意する他なかった。

そこでリゼットはミスターポポを拉致……もとい協力者として招き、彼の協力の下二人で超能力を無駄遣いして家を作った。

しかしそこに何故か無駄にハッスルした神様が乱入し、『暇だからわしも手伝ってやる』と一瞬で豪華絢爛な白亜の聖堂に変えられた。一人でここに住めってか。部屋余りすぎるだろこれ。

挙句、リゼットの承認もなく地上における神様の代理人的な役目も押し付けられた。当然リゼットはそれに断ったが、『ぶっちゃけ偉そうにふんぞり返って、わしに

伝えるべき事があれば伝えるだけでいいよ』と軽く言われたので、その程度ならばと仕方なく受け入れてやった。

いよいよもって本格的に神様の巫女化してきた気がしないでもない。

しかもこの聖堂、神様の神殿への直通経路まである。

勝手に家を繋げるなナメック星人。

まあそれはいい……それはいいのだが……。

「なんか筋斗雲が巨大化してる……」

リゼットはそう呟き、妙に大きくなってしまった己の雲を見上げた。

カリン様から貰った時は確かにリゼット一人が横になれる程度の大きさだったはずの筋斗雲は、何かここ数年で明らかに巨大化し、今では長さにして10m近くにまで達していた。

理由として考えられるのはあれか……ここ近年で急激に筋斗雲の乗り手が減っている事だ。

信じられない事だが、この世界において筋斗雲は珍しい存在ではない。

乗り物として割とポピュラーな存在であり、結構色々な人が乗っていたのだ。

だが近年に入って人々の心が悪しき方向へ傾いたらしく、乗り手がすっかり減ってしまった。

そして乗り手を失った雲は行き場を失い、他の乗り手……つまりリゼットの所へ集まってしまったわけだ。

リゼットはこれを見て孫悟空の誕生が近い事を確信した。

悟空が世界を巡る頃にはもう筋斗雲の乗り手はいなくなってしまうていたはずだ。

そしてそれを語った人物は『若い頃にはまだ沢山あった』と言っていたのだ。ならばもう、原作までの時間はそう長くない。

あつて精々六十年か七十年……少なくとも百年はないだろう。

……あれ？ まだ結構あるぞ。

とはいえ、リゼットの今まで生きた年月を思えばそう長い月日でもない。

何せ生まれてから今日までで既に百八十年は経過しているのだ。

期待がある。不安もある。

あれからずっと休まずに——とは言わないが、怠る事なく修行はしてきた。

今までに得た格闘技の長所を合わせ、実戦の中で研磨し、己だけの流派とも呼ぶべき戦い方を編み出した。

界王拳モドキ（リゼットはこれをバーストリミットと名付けた）を倒れる寸前まで行う事で気の底上げと身体の耐久力を上げる修行は暇さえあればやっている。

気の操作も磨き、様々な応用が出来るようになった。

切斷、操作、追跡は勿論の事SGカミカゼアタックのような簡単な自律思考を持つ気弾だって作り出す事が出来る。

ドラゴンボールも暇潰し代わりに集め、今度は『どんな環境でも生きられるようにしてくれ』と願い、生身で宇宙へも飛べるようになった。

とはいえ、今のままではまだ速度不足なのでちょっと大気圏抜けて帰って来るくらいが限度だが。

ついでにここでリゼットは一つの裏技を使用した。

飛び散るその瞬間に跳躍し、ボールのうちの一つを確保したのだ。

もしかしたらまたドラゴンボールを必要とする時が来るかも知れないし、その時

に一つでも最初から持っていれば苦勞が全然違う。

手にしたのは……五星球。まあ四星でなければどれでもいい。

流星に四星は確保する気がない。あれを持ったままにしてしまうと最悪この世界の未来そのものが滅茶苦茶になってしまうからだ。

リゼットは憂鬱気に瞼を伏せ、それから空を見上げる。

背中からゆっくりと白い気が溢れ、しかし散る事なくその場に留まる。

すると気は純白に輝く光の翼となり、リゼットの身体を宙へと運んだ。

これが百八十年の修練の成果。気の操作を極めた先にある『気の固定化』。

やっている事自体は劇場版でサウザーがやった気の斬撃とそう変わらない。

本来散るはずの気をその場に留めて形にするだけだ。

だがこうして生まれた翼は舞空術を補佐し、本来よりも遥かに複雑な変則飛行を可能としてくれる。

宇宙で飛ぶ事を想定して編み出した飛行補助用の技だ。

飛行速度そのものも実力以上に上昇させてくれるので、リゼットのお気に入りでもある。

難を言えば色は赤がよかった。その方がデステイニーガンダムとかみたいで格好いい。

白はないだろ、白は。どんだけ私に使われてるカラーパレット少ないんだ。空を舞う。

翼をはためかせ、自由に空を遊泳する様は正に天使か天女そのもの。

リゼットは思考を纏める時、よくこうして空を飛ぶ。

重力という束縛から自らを解き放ち、自由な空に飛び上がれば思考も冴える。

自らの実力を疑ってはいない。

きつと自分は強いのだと信じている。

だから期待がある。自分がどこまで届くのか知る時が来たと。

宇宙に通じるか、それとも地球止まりか。

いずれ悟空が大人になればぶち当たるだろう宇宙の壁。サイヤ人編以降のインフレ。

ゼットの目的を考えるならば、己の実力を知るのは必要最低事項。

少なくともサイヤ人などに後れを取るようではその程度。宇宙などとても目指せない。

絶対に途中で死んでしまう。

まだ先だ、まだ未来の話だ。

そう思い、誤魔化し、修行に明け暮れ、とうとうカウントダウンが始まった。

七十年……普通の人間が幸せに天寿を全うするならば充分な時間。

もう、たったそれだけしか残っていない。

「――私は、通じるんでしょうか」

弱音が自然と口をつく。

スカウターなんて便利なものはない。

戦闘力の数値化など出来ない。

だから自分の強さがどの領域にあるのか分からないのだ。

一応の比較対象として神様がいるし気は読めるので推測くらいは出来るが正確ではない。

一応神様を1とするならば今のリゼットは50はある。

確か神様は300とかだった気がするので、リゼットは15000前後というところか。

「あ、やばい。ベジータ以下だ」

リゼットはショックを受けたように呟く。

いや知ってた。うん知ってたよ。

この程度の推測はとくに出来ていた。

大丈夫、私にはバーストリミットがある。散々身体に慣らしたから軽く5倍くらいまでなら出力を上げられるし、無理すれば七倍くらいまではいける。

つまり7万5000は固い。おお、私強いじゃないか。

地球でこれって破格と言っているだろう。

「……ギニュー隊長以下かあ」

うん、僅か数年であっさり超えられる数値だ。

数年どころかナメック星編のインフレ具合では一日で超えられる。

サイヤ人がちょっと死にかければすぐだ。

フリーザ第一形態なんぞもっての他。手も足も出ない。

地球の科学者がちょっと頑張って人造人間作っただけで億を超えるのに百八十年生きて自分はこの程度。なんだか涙が出てきた。

「もっと頑張らないと、ですよねえ……」

実戦を積もうにも、もう相手がいない。

実力差がありすぎて誰を相手にしても弱い者苛めで、これならまだ岩でも叩いてる方がいい。

強さを目指すにあたって、この地球は環境に恵まれているとは言い難かった。

……競う相手がいないのだ。

同じ力量の相手が一人でもいれば効率は跳ね上がる。実力の伸びは飛躍する。

だがりゼットは強くなりすぎた。彼女の相手足りえるのは彼女自身しかおらず、一人で黙々と修練する以外に方法がない。

天下一武道会というファンなら注目するしかないあの大会の記念すべき第一回にも参加してみたが、まるで敵がいなかった。

全て戦闘にもならず、片手を軽く振っただけで終わりで物凄くガッカリしたのを覚えている。

強過ぎるというのも考えものだ。

「……………」

いや、訂正しよう。

やはり強さは必要だ。でなければ、身に降りかかる火の粉すら払えない。

リゼットは翼を広げ、油断なく下を見る。

そこには見知らぬ老人と、どう見ても人間ではない化物が5体。

明らかに平和的に話し合おうという雰囲気ではなく、自分に何かしらの悪しき用があつて来たのだらうと推測出来る。

この聖堂に來客とは珍しいが、招かれざる客である事は疑いようもない。

リゼットは翼を解除せぬまま、地上へと降下した。

「美しい……お会い出来て光榮ですぞ、龍天女よ」

「何者です？」

「儂の名はDr・コーチン……貴女を迎えに來ましたぞ、この世で最も強き者よ」

Dr・コーチン……原作にはいない名前だ。

しかしその名前には聞き覚えがある。

禁忌の研究に手を伸ばし、学会でも爪弾きにされている者の名だ。

そして確かサイヤ人編をインスパイアした劇場版、『この世で一番強い奴』にそんな名前の奴がいた気がしないでもない。

どちらにせよ、友好的な人物でないのだけは確かだろう。

「私と共に来て頂きましょう。Dr・ウィローがお待ちです」

「……そうですね。貴方に案内して頂きましょうか」

「——何!？」

リゼットの目つきが鋭く変化する。

それと同時にコーチンの周囲に控えていた化物達が粉々に四散し、コーチンの右腕が消し飛んだ。

見ればリゼットは何時の間にか指を突き出しており、その指先からは煙が上がっている。

何の事はない。コーチンには知覚出来ぬ速度で攻撃動作に移り、そして護衛とコーチンの腕を気で消し飛ばした。それだけの事だ。

「私を連れ出して何をする気だったのかは知りませんが、相手が悪かったですね。」

その無知を悔いて永久に眠りなさい」

「……！　く、くくく、なるほど……流石は伝説に謳われし龍天女。

バイオ戦士では相手にもならぬか……ならば！」

「——！」

周囲に強い気を感じ、リゼットは表情を変えぬまま新たな来客へ視線を向ける。彼女を取り囲むように現れたのは3体。いずれも人間ではない異形の者だ。

緑色の肌の、小柄な異形。

黄色の肌の、ゴムのようにブヨブヨした肥満の怪物。

赤いモヒカンの、ピンク色の肌の怪物は棘付きの肩パッドを付け、まるで世紀末に出て来るモヒカンのようだ。

名前は確か——何だったっけ？　エビフライとかミソカツとか、そんな美味しそうな名前だった気はするのだが。

「わしが作り出した凶暴戦士達だ！　さあゆけい！　天女を捕らえよ！」

コーチンの命令と同時に3体の異形がリゼットへ迫る。

だがリゼットには微塵の動揺もない。

繰り出される拳を避け、左手で掴み、右手で軽く殴り飛ばす。

それから掴んだ肥満の化物を投げ、小柄な緑色へと叩き付けた。

「え、ええい！ エビフライヤーよ、凍結拳で凍らせてしまえい！」

どうやらエビフライというらしいピンクのモヒカンが手から冷気を放出する。

モヒカンのくせに冷気とは嘆かわしい。火炎放射器を使え。

しかしどちらにせよリゼットには通じない。あらゆる環境でも生存可能な彼女の、その生存区域には当然宇宙すら含まれる。

極寒の宇宙空間でも生きられるものが、たかがマイナス数百度の冷気程度に怯むはずもない。

リゼットはまるで何でもないとはかりに冷気の中を歩き、エビフライの胸に手を当てる。

そして、気弾で胸部を貫いてその機能を停止させた。

「な、馬鹿な！ ならばキシメ、電撃鞭だ！」

緑色の異形が鞭を伸ばし、リゼットはそれを容易く掴む。

直後、掴んだ鞭から電流が流れリゼットの全身を駆け巡った。

だがそれがどうした。

リゼットはまるで表情を変えずに鞭を通じてキシメを引っ張り、体勢を崩した彼の頭部を気弾で消し飛ばした。

そして最後に止めとばかりに気を円盤状にした斬撃気弾で残る肥満体の五体を切り刻む。

確か記憶が正しければこいつは某海賊漫画の主人公みたいなゴムゴムだったはず。

ならばこういう攻撃が効果的だろうと思ったのだが、その通りだった。

ギア2を習得してから出直してこい。

「馬鹿……な……！ わしの、凶暴戦士達が……！」

嘩然とするコーチンの前へ無造作に歩み、微笑を浮べてリゼットは彼へお願い——もとい、脅迫をした。

「さあ、案内して頂きましょうか。貴方の主、Dr・ウィローの許へ」

・以下、ちょっとした解説

【この世で一番強いヤツ】

ドラゴンボールの劇場公開作第5弾。

悟空が界王拳と元氣玉を習得し、悟飯がピッコロを尊敬している事からサイヤ人編以降である事は確実。

しかし悟空が超サイヤ人化を習得していないのでナメック星以前であり、恐らくはピッコロがナツパに殺されずにナメック星に行く必要がなかった世界線と推測されている。

【Dr・ウィロー】

かつては「不世出の天才」と呼ばれていたが狂気に染まっていた為に学会を追放され、ツルマイツブリ山に潜伏して何かやばい野望を抱いていた人。

その途上で病に倒れたが、助手であるDr・コーチンの手を借りて脳だけを生命維持装置へと移植され、そのまま研究所の最深部で生き延びていた。

が、間抜けにも異常気象によって永久凍土に閉じ込められてしまい50年間放置された。

劇場版では50年ぶりに助手のコーチンが彼を永久凍土から解放し、当時地球最強の肉体の持ち主と思い込んでいた亀仙人の身体を乗っ取る為に行動を開始する。この作品は永久凍土に閉じ込められる前にリセットの存在に気づき、リセットの身体を奪う為に動いた。

ちなみにこいつ自身のサイボーグボディの戦闘力は推定で3万以上。

バイオテクノロジーで生物を作り出す事も出来る。

お前さんだけ頭いいなら自分で自分の理想のボディ作ればよかったんじゃない……。

【Dr・コーチン】

ウィローの助手。

こいつもサイボーグだが、大した事はなかった。

50年かけて永久凍土から自力で脱出し、ドラゴンボールを集めた努力の人。

そこまで頑張って尽くしたのに、映画本編ではウィローが壊した床の崩落に巻き込まれて死亡した。

【キシメ】

凶暴戦士と呼ばれるバイオテクノロジーで生み出された生体兵器。

電撃鞭を使う。映画パンフレットによると戦闘力は7000。ナツパくらいなら倒せる。

【エビフリヤー】

凶暴戦士と呼ばれるバイオテクノロジーで生み出された生体兵器。

モヒカンで肩には棘が付いているが汚物は消毒しない。

相手を凍らせる凍結拳という技を使う。

映画パンフレットによると戦闘力は7500。ナツパを余裕で倒せる。

【ミソカツン】

凶暴戦士と呼ばれるバイオテクノロジーで生み出された生体兵器。

ゴムゴムの実を食べたゴムバイオ人間。懸賞金は3000万ベリ。

映画パンフレットによると戦闘力は4300。こいつだけ妙に弱いがギリギリナツパを倒せる。

こいつらが存在している世界線で何故ラディッツやベジータがスカウターで気付かなかったかは不明。

永久凍土の中になんでは電波が届かなかったのだろうか。

第五話 この世で一番強いヤツ（後）

皆様こんばんわ。

前話辺りからじわじわと評価が入っているようで、感謝しております。

これを励みとし、完結までのんびりとやっていこうと思います。

話数的に大体、全120話くらいを予定しておりますので気長にお付き合い下さい。

ツルマイツブリ山。

遙か北方に位置するこの巨大な氷山は太陽の熱でも決して溶けない為、永久氷壁の名を欲しいままにしていた。

その山の奥へ進むと、場に不釣り合いな機械仕掛けの研究所が見えてくる。

コーチンを捕らえたりゼットは白い光の軌跡を残しながら大空を飛翔し、研究所

に一撃の気弾を見舞う。

すると爆煙が上がり、研究所の屋根に大穴が開いた。

正面から入るといふ選択はない。どんな罠が仕掛けられているか解つたものではないからだ。

敵の拠点に乗り込むのに、わざわざ敵の用意した入り口を通る必要がどこにある。リゼットは自らが開けた穴より飛び込むと研究所へと音もなく着地する。

『よくぞ来た……この世で最も強い肉体を持つ者よ』

「貴方がDr・ウィローですね」

研究所の奥に鎮座するそれは、まさに科学の異形。

バイザーで覆われた入れ物の中には透明な液体が満たされ、脳だけが浮いている。そしてその脳を支えるのは機械仕掛けの身体だ。

その身体は何とも形容し難く、昆虫のようでもあり魚のようでもあった。

「ロクでもない事だろうとは思いますが一応問いましう。

何の用があつて私を招いたのですか？」

『この世で最も優れた頭脳の持ち主である私が、この世で最も強い肉体を得る。

お前の身体を私に寄越せ』

「ご冗談を。身体が欲しければご自慢の科学力で自作してはどうです？

他人の身体を奪うより余程迷惑でないと思いますか」

他人に、ましてや異性に身体を明け渡すなど冗談ではない。

これはいいよ話し合いの解決など望むべくもない、とりゼットは早々に見切りを付けた。

元より、コーチンなどを寄越してあんな凶暴戦士をけしかけてくる時点で望みなど1割もなかったが、今完全にゼロとなってしまった。

『お前に拒否権はない。その老いず朽ちず、如何なる環境でも生存出来、そして強く美しき肉体。私が貰い受けてこそ意味がある』

「生憎と私の身体は私の物です。諦めて下さい」

リゼットは話しながら相手の潜在パワーを探る。

その戦闘力は——かなり大きい。正直驚いた。

サイヤ人編の時期の劇場版の敵なのだから精々ベジータクラスだろうと思っているが、多分それ以上だ。

神様を1として数えても130はある。戦闘力にして大体39000か。つまり素の状態ならばリゼットよりも上だ。

まさかこれ程の相手が既に地球にしようとは。

リゼットは知らず笑みを浮かべ、そして戦意を昂揚させていく。

『そうはいかん！ その身体、渡してもらおうぞ！』

「来ますか……」

ウィローが起動し、巨大な腕を振り下ろす。

リゼットの近くにコーチンがいるというのにまるで配慮がない。

哀れなコーチンは敬愛するはずのウィローに叩き潰され、鉄屑と化した。

リゼットはその場から高速で離脱し、指先に気を一点集中する。

そして連射！

機関銃のように威力を指先一点にまで収束させた気弾を連続でウィローへ叩き付ける。

だがダメージは左程ない。やはり戦闘力の差によりほぼ防がれてしまっている。それどころか即座に反撃に移ったウィローの豪腕に殴られ、派手に吹き飛んでそ

の華奢な身体を壁にめり込ませた。

「くっう……！　やはり素の状態では歯が立ちませんか……！」

解ってはいたが、やはり戦闘力の差というものは絶対的だ。

大きく差が開いていれば技術など限りなく無意味に近付く。

悔しいが、今の自分ではまだ普通にやっても勝てない。

だが、ならば普通でない方法を使えばいい。

「いきます——バーストリミット・トレース！」

バーストリミットは界王拳をモデルにリゼットが編み出した戦闘力底上げの術だ。

そしてトレースとはラテン語で『3』。つまりこれは名前こそ違うものの界王拳3倍に相当している。

もしここに劉鳳さんがいたら『バーストリミットは英語でトレースはラテン語だ！』と文句を言われるかもしれないが、いいじゃないか。そういうオサレな名前の技って結構あるし。

どこぞのスーパーロボットなマジンカイザーなんて日本語とドイツ語の合体だけ

ど恰好いいし、要は響きさえよければいいのだ。

とうかそもそもこの世界に英語はあってもラテン語はない。

リゼットの身体が白く輝き、光の粒子が溢れる。

これで計算上、戦闘力は（多分）45000前後。

ウィローを上回り、こちらが優位となった。

リゼットの身体が消え、捉え切れない速度で以てウィローを蹴り飛ばす。

『ぬうつ、小癪な』

ウィローが反撃で拳を振るう。

だがリゼットは左手でその一撃を容易く受け止め、そのまま滑るように腕の下を潜って右手で突き上げるように掌底を叩きこんだ。

ウィローの腕の関節駆動部位を見切ったの、関節破壊だ。

鉄がへし折れる音と共にウィローの片腕がもがれ、火花を散らした。

サイズ差など知った事ではない。

リゼットの身長150に対しウィローの全長は4m以上。だからどうした。

戦闘力の差があれば、こうした無茶苦茶な事だって不可能ではない。

「フランス」

リゼットが続けて行うのは気の固定化。

本来拡散するはずの気をその場に止め、一つの武器として使用する。

現在も背から生やしている翼は言うに及ばず、槍や剣すら不可能ではない。

リゼットが戦う上で問題となるのがその体格の小ささによるリーチの短さだった。

それを補う意味でも、この技術は有用だ。

というか武器を持つのと持たないのでは持つての方が強いに決まっている。

ドラゴンボールでは邪道だろうが、そんな事をいちいち気にする気などない。

生成した光の槍を突き出し、膝の関節を貫く。

生まれてより二百年近くを武に費やしてきたのは伊達ではない。世界を巡りあらゆる武技を修めたのはハッターではない。

素手に始まり剣、槍、棒、暗器、手裏剣、鞭、刀、ブーメランにハルバード、果ては弓矢に鎌。

薙刀にナイフ、ボウガン、ハンマーやモーニングスターの扱いまで心得ている。

武芸百般——拳銃以外ならば使えぬ武器などない。

え？ 拳銃？

あれは駄目だ。誰が使っても威力が一律だからこの世界では泣けるほどに弱い。マシンガン乱射しても亀仙人レベルで手をパパパパパ、と動かすだけで全弾キャッチされ、当たっても最初期悟空すら倒せない。

戦闘力が100を超えるならば、そこらのパチンコ玉でも指で弾いてた方がまだマシだろう。

残念ながらこの世界の拳銃は刃牙世界のムエタイ（ロシア人）にも等しい。

「グデスサイズ」

続けて生成したのは気の大鎌。

リゼットの思うがままに伸縮し、刃のサイズすらも変化する自在変化の死神だ。その魔器を振るい、残っていた片腕を斬り飛ばす。

だがまだ片足が残っている。

未来の話ではあるがピッコロ大魔王も片腕を残して悟空に負ける。

ならば油断は出来ない。

「グレイモア」

最後の武器は巨大な光の剣。

それを手から離し、指先を動かして遠隔で操作する。

繰気弾みたいで弱そうとか言っではいけない。

リゼットのお気に入りの技の一つなのだ。

果たしてそのお気に入りの剣は見事最後の片足を切断し、これでウィローは達磨となった。

『お、おとおお……！ おのれ！ おのれえええー……ッ!!』

ウィローが激昂し、ジェット噴射で空へと発つ。

四肢を潰されてからの飛行。実に賢い手だ。

孫悟空も未来でそれをやってマジュニアに勝つのだし、選択としては正しい。しかし正しいからといって勝てるとは限らない。

それがこの世界だ。

（上空で気が高まっている……地球ごと私を消す気ですか。支配しようとしている地球まで消して、その後どうする気なのか……）

ウィロー最後の攻撃を察知しながら、リゼットもまた迎え撃つべく気を集中させる。

全身の気を全て右手の中へ。

限りなく凝縮した白い極光を掴み、上空の気の高ぶりに合わせて投げつけた。

「往きなさい——spark^{スパーキン}ing！」

spark（炸裂）という何の捻りもない名前そのままに、凝縮させた気を投げつけて炸裂させる。

言ってしまうばただそれだけの技だ。

だがそれだけが単純無比。シンプルな技ほどこの世界では強い。

解き放たれた白の光球は上空から迫るウィローの破壊光線すらも押しのけ、押しやり、押し返し、その先にいた哀れな科学者へと炸裂する。

白の輝きが爆ぜ、それを見計らってからリゼットは翼をはためかせて宇宙へと飛翔した。

高く、高く、高く、遥か高く——！

空を越え、大気圏を越え、母なる星を越え、リゼットは既に死に体のウィローと

対面した。

四肢を失い、あちこちが碎けてショートし、脳を保護するフィルタすら碎けて溶液が零れている。

そんな姿になって尚ウィローは幽鬼のように、おぞましく、既に肘から先のない機械の腕を伸ばした。

『カラ、ダ……カ r ダ……ワタ、シ no ……カラ、da ……』

「グゾード」

リゼットは目を閉じ、腕を静かに振る。

すると彼女の背後に数百、数千の気の剣が顕現し、一斉にその矛先をウィローへと向けた。

「……さようなら。哀れな天才」

千の刃が一斉にウィローへ殺到し、突き刺さり——そして爆発。

哀れな男を跡形もなく消し飛ばした。

★

狂った天才、Dr・ウィローは倒した。

そして後は彼の研究成果を闇へ葬るだけだ。

リゼットは氷の瞳を研究所へ向け、そして彼という天才を惜しむ。

掛け値なしの天才だった。

あのバイオ戦士も、ウィロー自身も、力の使い方さえ誤らなければこの惑星の守護者にだってなれたはずだ。

後に現れるサイヤ人すら返り討ちに出来る程に彼は天才だったのだ。

だから惜しい。

彼という存在が心底、勿体ないと思う。

欲に忠実な事を責める気はない。リゼットだって同じ穴の貉だ。

要は欲の向き先がどこに向かうかという、それだけの話。

正義の味方の代名詞みたいな悟空だって、己の戦闘欲には忠実なのだから、これだけを以て悪だなどと断じる事など出来ない。

しかしその欲と才能を悪しき方向へ傾けてしまうならば、それは討たなくてはならない。

この素晴らしき世界。一人の為に塗り替えられ、滅びていい道理などどこにもな

いのだ。

故にリゼットは神の代行人として判決を下す。

顕現する武器は巨大な鉄槌。

それがリゼットの手を離れ、研究所へと堕ちていく。

衝撃。

雪崩が起き、永久氷壁が研究所を覆い潰していく。

太陽の熱でも溶けないこの氷に封じられては、研究所が日の目を見る事はもうないだろう。

本当に惜しい。

技術自体は責めるべきものではなかった。むしろ何百年も先に行く素晴らしいバイオテクノロジーだった。

使い方さえ変えるならば、多くの人の命を救える技術。

だが、今の世界にこれを撒くのはあまりに早い。

この先、レッドリボン軍や多くの悪人たちが世を跋扈する。

そこにこんな技術を残しては、どんな悪影響を及ぼすか分からないのだ。

だから――。

「いつか、この技術を得るに相応しい人が現れるまで」

そう誰にともなく告げ、リゼットは白翼をはためかせる。

そして光の残滓だけを残し、大空へと飛び去って行った。

というわけで、今回は『主人公はこんな戦闘スタイルです』と説明する為のチュートリアルバトルでした。

ウィローは犠牲になったのだ……リゼットの戦闘スタイルの説明……その犠牲にな……。

ウィロー「リゼットエ！ お前は俺にとっての新たな光だ！」
ホデイ

【スパークキング（Sparkling）】

リゼットの技の一つ。

片手に気を集中し、白い気弾を投げつける。

敵に命中すると同時に炸裂し、破壊する。

ぶっちゃけただのクラッシャーボー（ry

名前はゲームから。

【バーストリミット（Burst Limit）】

リゼット版界王拳。効果は本家とほぼ同じ。

情報だけを頼りに真似したのが悪かったのか、見た目は完全に別物。全身が白く発光し、白く輝く気が粒子のように全身から放出される。この手の戦闘力倍化技がないと地球人はインフレに付いて行けない。名前はゲームから。

第六話 物語の開始

☒ 皆様こんばんわ。

作者のマジカル☆さくやちゃんスターでございます。

投稿当初は存在感空気で感想もほぼなかった本作ですが、皆様のおかげでじわじわと日刊ランキングを登っております。

これほど嬉しかったのはかつて、東方妖々夢で咲夜さんのサポートアイテムとしてお呼びがかかった時以来でしょうか。

これからよろしくお願いします。

エイジ737。

リゼットの研ぎ澄まされた感覚は何者かが地球に來た事を感じ取っていた。気配は決して強いものではない。

か細く、頼り無い気の小ささだ。

しかし念のためと外に出て、気の大元を確認する。

そして見た。地球へ今まさに降下しようとしている球状のポッドを。

明らかなまでの宇宙船を。

「――遂に、来たのですね……」

リゼットは普段は呆けている表情を珍しく引き締め、一人呟く。

この世に生まれてより250年。

不思議と色褪せる事なく覚えている前世の知識、そこに刻まれた運命の子がとうとう地球にやって来た。

遥か遠い宇宙の彼方で数多の気が消えたから、まさかとは思った。

自分では逆立ちしても敵いつこない強大極まる気（多分こいつがフリーザだ）の存在も感知した。

だからもう、その時はすぐそこだと分かってはいたのだが、こうして本当に来ると否応なしに緊張が高まる。

「知っているのか？」

「……神様。いつからそこに？」

「何、わしも今来た所だ。宇宙から来たアレが気になっての」

普段はお茶目でも、流石に地球の神か。

その表情は険しく、そして問い詰めるようにリゼットの横顔を見ている。

「……遠い場所で数多の命が消えるのを感じました。今までに感じた事もないような、強大過ぎる悪のエネルギー……その者により、一つの星が消されました」

「儂はそこまで感知は出来ぬ……が、お前が言うならば事実なのだろうな」

「その悪に最新まで立ち向かった勇敢な戦士……その血を継ぐ者が、今地球に來た運命の子です。これより先、地球は彼を中心として運命が巡る事でしょう」

「占いババのような事を言う……それは予言か？」

「いいえ、予感です」

予感というか知識です。

という事は流石に口に出さず、黙っておく。

神様はふむ、と呟くと遠くを見るように視線を上げる。

「その悪に、お前では勝てぬか？」

「今はまだ勝てません。その者は文字通り次元が異なります」

「……にわかには信じられんな。お前が太刀打ち出来ぬ者が存在するなど」

「事実です。宇宙は私達が思うよりもずっと広い」

フリーザの気は感じた。その強大さに身震いすらした。

駄目だ……今はまだ勝てない。戦いすら成立しない。

250年研磨して届かなかった。

ならばやはり、方法の一つ。孫悟空達と共に強くなるしかない。

「しかし猶予はあります。巨悪もしばらくはこの星に目を向けないでしょう。

彼が成長し、一人前の戦士となるに十分な時間はあるはず」

「もしも、なければ？」

「その時は私が時間を稼ぎます。巨悪さえ来なければ私でも何とか出来ますから」

孫悟空はこの惑星の希望となる男だ。

彼が来た事により地球は危機に晒されるが、だからといって悟空がいなかったならば誰もフリーザを止めず、ましてや魔人ブウなど対処の仕様もない。

孫悟空による英雄譚。それがこの宇宙には必要だ。

いずれ己が果てまで旅するこの宇宙。誰かに壊されるなどあってはならない。

だからリゼットは悟空を必要とする。守ろうと考える。

彼という英雄をこの世界は求めている。

運命は動き出した。主人公が遂に地球に降り立った。

ならば後は乗るかそるか。

もう止まらない。物語は今、開始されたのだ。

そして更に、十二年の月日が流れた。

★

「次のドラゴンボールは……うん、間違いない。ここだわ」

エイジ749。

カプセルコーポレーション社長令嬢であるブルマは自作のドラゴンレーダーを片手に確信したように言う。

七つ集めればどんな願いも叶う不思議な球、ドラゴンボール。

彼女達は現在そのうちの五つを確保しており、六つ目の球の反応を追ってここまでやってきていたのだ。

しかし問題がないわけではない。

天女が住むとの伝説があるこの山、とにかく高いのだ。

標高五千m。そんな所に住むなと言いたい。移動とか不便すぎるだろうこれ。

ブルマはすっかり途中でへばってしまい、同行者の野生児——孫悟空に背負ってもらっている。

この悟空がなかなか便利で、人間離れした凄まじい強さと体力を誇る。

彼がいなければあるいは、この旅は頓挫していたかもしれない。

もう一人……否、もう一匹の同行者は豚のウーロン。

どんな物にも変身出来る変身術の使い手だが、あまり役に立った試しがない。

加えてとんでもないスケベで、隙あらばブルマの痴態を見ようとしてくる。

そんな、何とも言えないおかしい仲間二人と共にブルマはせっせと山を登っていた。

「ぐへへ……天女様かあ。さぞやお美しいんだろうなあ」

「あんた馬鹿じゃない？ そんなのが本当にいるわけないでしょ」

ようやく山を登り切り、その頂きにて存在感を主張する聖堂を三人は目にした。

白一色の、まるで他の色が使用されていない、雪で作ったかのような聖堂。

その周囲には亡霊のように淡く光る女性が数人徘徊し、畑を耕したり果物を集めたりしている。

これはリゼットがSGカミカゼアタックの真似で作り出した自律思考気弾だが、無論そんなのをブルマ達を知る由もない。

「……本当に、いるわけ……」

「な、なんか本当に居そうだぞこれ」

存在感が違う。

本当に何か神聖なものが住んでそうな雰囲気がある。

というか周囲の亡霊がまず有り得ない。

物怖じするブルマとウーロンだったが、悟空が特に何の警戒もなく亡霊に話しかけた。

「おいオメエ、ここにドラゴンボールっちゅうんはねえんか？」

『ドラゴンボール……ああはいはい、ありますよ。それでしたら主様がお持ちです』
悟空に話しかけられた亡霊はにこやかに対応し、悟空達を聖堂へと招き入れる。

どうやら天女とやらは来る者拒まずの性格らしい。

見るだけで圧倒されそうな聖堂内部を進み、至聖所へと入る。

その中央、宝座の上に彼女はいた。

年齢は十四前後といったところだろう。

白……と言うよりは白金とでも言うべき輝く頭髮。

新雪のような穢れのない肌。

黄金の瞳はブルマ達の心の奥底まで見通すような不思議な輝きを湛え、身に纏う

装束も白一色。

ロイヤルケープを肩から掛け、ヒラヒラとしたドレスを着こなす。

スカートはフワリと広がり、まるで妖精を思わせた。

そして何より、神々しく輝いている。

淡く、白く発光し光の粒子が溢れている。

一目で解る……やばい、これ本物だ。

本物の、神とかそういうのに連なる何かだ。

さしものウーロンもこれには何も言えず、スケベ心すら発揮出来ない。

造形が整いすぎていて、何より位階の違いを思い知らされ、性欲すら抱けないのだ。

そんな初めて見る存在にただ圧倒されるブルマ達に、彼女は静かに微笑んだ。

「ようこそ、願いを求める旅人よ。よくぞここまでおいでくださいました」

正直な所ブルマは樂觀していた。

何か凄い人と言われる亀仙人もパツと見ではただのスケベ爺だったし、どうせ今回もそんなオチだろうとタカをくくっていた。

まさかここまでガチの天女が出て来るとは予想もしていなかったのだ。

「あ、あはは……そ、そその、本日はご機嫌うるわしく……？」

呂律が回らない。

緊張で舌が麻痺する。

見ればウーロンもガチガチに固まっており、平然としているのは悟空くらいなのだ。

そして彼は何の気負いもなく天女へと近付くと、いつものようにその股間を叩こうと手を伸ばした。

生まれてからブルマと出会うまで女性というものを知らなかった彼は見た目で男女の区別が出来ない。

だから股に付いているかどうかを確認して男女を確認しようとしているのである、そこに下心の類は一切ない。

しかし悟空の手は虚しく宙を空振り、いつの間にか背後へ回っていた少女に逆に頭を撫でられた。

「ヤンチャな子ですね。でも駄目ですよ、そんな事しちゃ。本気で嫌がる方だっているんですから」

「えっ!？」

動きがまるで見えなかった。

その事に驚き、悟空は後ろを振り返る。

だが居ない。少女は再び宝座の上へと戻っていた。

「お、おっでれえた。おめえ妖術使いか？」

「仙術なら使えますが、今のはただゆっくりと動いただけです。鍛えれば貴方でも出来るようになりますよ」

クスクスと楽しそうに笑う少女に驚きが止まらない。

だがそこで驚いてばかりいないのも孫悟空という少年だ。

彼はワクワクしたような声で少女へ遠慮なく話しかける。

「すっげえ！ おめえ強えんだな！」

「ふふ、それほどありませんよ」

宝座から浮き、少女は全員を見渡す。

その表情は変わらぬ微笑だが、機嫌を損ねればどうなるか分からない。

とりあえず悟空が勝てないのは今ので証明された。

つまり今までの『いざとなれば悟空が倒してくれる』はここでは通じない。

「さて、貴方たちが求める願望の球は確かに私が持っております。しかしこれは使い方次第では世を混沌に導く事も出来る万能の願望器。悪しき者に委ねるわけには参りません。故に問いましょう——汝等、何を求めて龍球を望む？」

氷の瞳が全員を射抜く。

嘘偽りは認めぬと言わんばかりの視線。

やばい、とブルマは思った。

この雰囲気で『素敵な恋人が欲しい』とか凄い言い難い。

「オラは特にねえよ。ブルマが付いて来いって言うから来ただけだ」

「無欲なのですね。大変よろしい」

どうやら少女は悟空の事を御気に召したようだ。

心なしか彼と話す時は楽しそうにしているように見える。

これ、最初から悟空だけ行かせておけばよかったんじゃないだろうかと思うも、既に後の祭りだ。

どうしよう、言葉が出ない。

そうして黙っているブルマとウーロンを見て、少女は不意に表情を緩めた。

「——なんて、ね。そう畏まらないで下さい。願いを抱く事は必ずしも悪しき事ではないのです。貴方達に大きな邪心は感じません。ならば、この球を委ねる事も出来るでしょう」

微笑ましいものでも見るように少女はブルマ達を見る。

言っている事は回りくどいがつまり、ブルマ達に球を預ける事に不服はない、という事らしい。

白い少女は「しかし」と付け加える。

「何の条件も付けないのも味気ありません。そこでどうでしょう。今夜一晩、貴方達の旅の話を私に聞かせて下さいませんか？」

パン、と手を叩きさも名案であるかのように少女が条件を出す。

圧倒されそうな神聖さに反し、意外と軽い性格をしているようだ。

無論これを断る理由などない。ちよつと冒険の話を聞かせれば球を譲ってくれるのだから、破格の条件と考えていいだろう。

ブルマはこの条件に快く頷き、自身が経験したこれまでの旅を語って聞かせた。



どうしよう、凄く楽しいし嬉しい。

リゼットは己が今、ドラゴンボールというかつて見た物語の世界にいる事をおぼなく実感していた。

孫悟空がいて、ブルマがいて、ウーロンがいる。

聖堂の外には彼等を尾行してきたらしいヤムチャとプーアルの気も感じ取れる。彼等のここまでの旅の話も、既に知っているはずの話だというのに心を昂揚させ

てくれた。

どうやら今は牛魔王と出会った後に当たらしい。

自分がボールを一つ抱えていた事でブルマが本来所持しているはずだった球が二つから一つに減り、そしてここに来たようだ。

その願いも何とも欲が無い事で、『素敵な彼氏が欲しい』と来た。

その程度なら、わざわざドラゴンボールなどに頼らずともブルマなら容易く叶いそうな気がしないでもない。

美人だしスタイルいいし、資産もあって才能と頭脳もある。

うん、超優良物件じゃないか。黙ってても男が放っておかないぞこれ。

ウーロンは『ギャルのパンティ』……うむ、何も言うまい。

まあ『世界中の女をハーレムに入れる』とか言い出さない辺り、根はそこまで腐っていないのだろう。

ちよっと性に興味が出た小悪党、くらいが限度のようだ。

放置してもさして問題はあるまい。

悟空に至っては願いなし。

あえて言うならば『腹一杯飯食いてえ』くらいだった。

しかしそれはこの場で叶えてやったので実質願いはないに等しい。

（ただしこれのせいでリゼットが溜めていた食料50人分が消し飛んだ）

原作主人公組だからこそ鼻負した、というのは否定しない。

実際彼等が主人公でも何でもない見知らぬ誰かだったら、ここまで親切にはしなかっただろう。

よくも悪くもリゼットは己の欲と好みには正直で、公明正大とはかけ離れた人物なのだ。

そして翌日、悟空達は再びボール集めの旅へと出発した。

この先の運命は勿論知っているが、大きく変えようというつもりはない。

今はただ、黙って傍観者に徹するのみだ。

（でもちょっとくらい近くで視てもいいですよね？）

——などと謙虚に徹する事など出来るわけもなく、リゼットはこっそりと悟空達

の後を尾ける事にした。

第七話 大猿

☒ 皆様こんばんわ。

昨日から評価が沢山入り、日刊ランキングの一位になる事が出来ました。本当にありがとうございます。

これほど嬉しかったのは東方輝針城に咲夜さんが8年ぶりに自機出演した時以来でしょうか。

尚、私は『お前咲夜のイメージに合わんから出演^でるな』とレミリアお嬢様に倉庫に放り投げられました。

悟空達がリゼットのもとを訪れてより数日。

リゼットは気配を限りなくゼロにし、上空より彼等の旅を見守っていた。言うまでもなくマスコミ染みた観察欲に起因するものである。

物語として見たあの旅が現実展開されている。

それを見ないのはファンとして間違えているだろう、という勝手な判断による高みの見物だ。

残念だったのは既に悟空達が六つのボールを集めている事であり、この旅の残るイベントが兎人参化との対決と、ピラフ一味に捕まる事ぐらいだった事か。

兎人参化は改めて見るとインチキもいい所の能力だと実感させられる。

とはいえ、恐らくだがあまりに戦闘力の離れすぎている相手には通じないだろう。悟空によって月に運ばれてしまったが、流石に可哀想なので後で助けてあげてもいいかもしれない。

悪党には違いないが、一応殺生などはしていないようだし、何よりあれは罰としても重すぎる。

しかも月は後に破壊されてしまうので、その後彼等は宇宙を彷徨う羽目になるらしい。

これはいくら何でも哀れに過ぎる。

ピラフ一味との対決は大体知っている通りの流れだった。

悟空達がピラフの城に入ってからのは上空からでは分からなかったが、まあや

はり捕まってしまったらしい。

そして呆気なくボールを奪われ、伝説の『ギャルのパンティおくれ』へと繋がるわけだ。

これには上空で観察していたリゼットも爆笑したが、よく考えたらあれ誰のパンツなのだろう。

『ギャルの』と条件付けている以上新品は有り得ない。

とりあえず神龍にパンツ盗られた人はご愁傷様といっておこう。

しかし悟空達は悪運が強い。

捕らえられた日が偶然満月だったおかげで大猿化して脱出出来るのだから、怪我の功名というものだろう。

後はヤムチャ達が頑張って悟空の尻尾を斬るだけだ。

……と、思っていたのだが何故か自家用機で逃げたはずのピラフ達が戻ってきた。

そして大猿化した悟空に機銃を浴びせて翻弄している。

はて、こんな展開あったかな、などと思いつつも何せ前世の記憶だ。

抜けがあっても何ら不思議ではない。

機銃では埒が飽かないと判断したのか、ピラフ機からミサイルが発射される。多分今の悟空ならば問題ないと思うのだが、しかしリゼットは不安に駆られた。もしこれで悟空が死んだら？

無い、とは言い切れない。この時点の悟空の戦闘力は10。

つまり大猿化して十倍になっても100程度という事だ。

100ならばミサイルの直撃を受ければ死んでも不思議はない数値だ。

「――「レイピア」

気の固定化で白いレイピアを己の横に生成し、指先を動かして操作する。

要するにレイピア型繰気弾である。弱そうとか言っではいけない。

細剣をミサイルへ突撃させ貫き、悟空に届く前に爆散させる。

余波でピラフ達も吹き飛んだが、まあ彼等は無駄にしぶといので死にはしないだろう。

……後に大魔王を復活させて間接的に大勢の人々を殺す事を考えるとここで殺してしまった方がいい気がしないでもないが。

ついでにGTでは究極のドラゴンボールを使って間接的に地球すら破壊しかける

ので、益々ここで殺した方が世界の為な氣もするが。

……あれ？ 割と冗談抜きであいつら消した方が世の中の為なんじゃない？

そんな物騒な思考に支配されそうになるが、リゼットは首を振ってその考えを追い出した。

ピラフなどどうでもいい。それよりも今は悟空だ。

「天女様！」

ブルマの弾んだ声が聞こえる。

流石に攻撃を行えば空にいてもバレるか。

本当は手出ししないつもりだったのだが、ついやってしまった。

リゼットはやつちやつたなあ、などと思いつつ高度を下げてブルマ達の前へと舞い降りた。

「私達を助けに来て下さったんですね！」

「え、ええ……まあそんな所です」

言えない……まさか本当はただ漫画を見るノリで見に来ていたなどと。

それにしても『天女様』とは随分くすぐったい。

有象無象にそう呼ばれても多少恥ずかしいだけだったが、原作キャラにそう呼ばれるのがこんなにも居心地悪いとは。

これは早急に呼び名を改めさせるべきだろう。

「リゼット」

「え？」

「私の名前です。天女などと呼ばず、遠慮なく名前で呼んで下さい」

ブルマ達に笑顔を向け、全員の反応を窺う。

ブルマは遠慮がちに、「そ、そう？」などと言っているが、この様子ならじきに慣れるだろう。

ヤムチャは……固まっている。そういえば女性が苦手って設定あったっけ。

ウーロンは顔を赤くして何かゴニョゴニョ言っている。

プーアルは何か眼を輝かせている。子供みたいな反応で少し可愛らしい。

とりあえず印象としてはそう悪いものではないだろう。

「そ、その、天……じゃなくてリゼット様！ あれ、信じられないかもしれませんけど孫君なんです！ 何とか元に戻す事は出来ませんか?！」

ブルマが縋るように懇願してくるのを見て、リゼットは睫毛を伏せる。

うん、言われなくても知ってる。だって見てたし。

なんて暴露する事など勿論出来るはずもなく、ただ一言『把握しています』とそれっぽいい事だけ言っておいた。

「……見た所、満月のエネルギーが尾に集まっているようです。ならば尻尾を断ち切れば元に戻るかもしれません」

見て理解したような事を言っているが、これは半分本当だ。

原作でクリリン達はそこまで気付かなかったようだが、百年単位の気の練磨は伊達ではない。

遙か宇宙の彼方のフリーザの気すら感知出来る今のリゼットにとって、その程度は眼を凝らすまでもなく見抜ける事だった。

リゼットは腕を振るい、白い軌跡を生み出すと四人へ声をかける。

「私が悟空君の動きを止めます。貴方達はその間に尻尾を切って下さい」

「え？ と、止めるってアレを？」

ブルマが不安そうにしているが、リゼットは構わず気を固定化し巨大な鎖へと変

える。

そして遠隔操作。大猿をグルグル巻きにし、その動きをあっという間に封じ込めた。

いかに大猿だろうがこの時点では戦闘力1000ちょっと。リゼットの敵ではない。

あの鎖を引き千切ろうと思うならばリゼットと同格の気が必要となる。

無論、今の悟空ではたとえ奇跡が起こって超サイヤ人になろうが到底届くものではなかった。

その余りの光景にポカーンとしているヤムチャへ、静かに告げる。

「さあ、今です」

「……。……あ、ああ！　そ、そうだった！　プーアル！」

「はい、ヤムチャ様！」

変化！　の言葉と共にプーアルがハサミへ変化し、大猿の尾を断ち切った。

ヤムチャ自身はもとより、その相棒の有能さには舌を巻く。

何にでも変化出来て、時間制限もなし。

そして主に忠実で外見も猫のようで愛らしいといい所尽くした。

カリン様とセットでペットに欲しいなあ、などと思わないでもない。断じて思っていない。

それはさておき、尾を切られた事で悟空も無事人間へと戻る事が出来た。

それにしてもサイヤ人というのはアホなのだろうか。

悟空は元々地球を制圧する為に送り込まれたらしく、地球に月があるから大猿化して制圧する、というのが当初の予定だったらしい。

しかしいくら何でも、あの程度の大猿じゃ軍隊に殺されて終わりだ。

地球人がいくら弱いといっても科学力はあるんだから、あれじゃ制圧など夢のまた夢でしかなく、叶うわけがない。

そもそも食料も積んでいない一人乗りのポッドに乗せてそのまま赤子一人放逐とかアホの所業だ。

孫悟飯が拾わなかったらそのまま飢え死に一直線ではない。

リゼットはそこまで考え、軽く溜息をついた。

まあ……要するにそこまで地球侵略は真剣に考えられていなかったという事だろ

う。

数年スパンの計画である事もそうだが確実性に欠ける。

大方下級戦士の子供など、どうでもいいと思つて適当に放り投げてゐるに違いない。

實際ラディッツが思い出すまで誰も思い出さなかつたほどだし、この考えに大きな間違いはないだろう。

「ふう……た、助かつたあ」

「本当ね。リゼット様が来てくれなきゃどうなつてたか」

来なくても実は自力でどうにか出来ました、と教えてあげたい衝動に駆られる。しかしリゼットは言葉を呑み込み、悟空に指を向けた。

すると裸だった悟空が一瞬にして前と全く同じ胴着を着た姿となる。

暇を持て余した神様から50年かけて教わつた神仙術のちょっとした基本、物質生成だ。

周囲の元素だか何だかを物質へ変換する神族の基本技能らしい。

キビトなど同じ事が出来るので実は難易度はそう高くないようだ。

「うおっ?! 服が一瞬で!？」

「仙術です。伊達に天女と呼ばれてはいません」

250年も生きれば結構色々出来るようになるものだ。

というかこの天女のイメージは明らかに神様によって作為的に作られたものな気がしてならない。

気付けばすっかり神様代行人に仕立て上げられてしまった。

神様どんだけ神殿から動きたくないんだ。

それから待つ事一晚。

悟空が目覚めて尻尾がないと騒いだり、すぐに気を取り直して、まあいっかと軽く納得してしまったり、ヤムチャが気付いたら女性恐怖症を克服していたりと色々あった。

ブルマの素敵な彼氏が欲しいという願いと、実は女性好きだったヤムチャは当然のように意気投合。

大喜びの二人はダンスなど踊ったりして、熱々ぶりを見せ付けてくれた。

(でもブルマと結婚するのベジータなんですよね……ヤムチャエ)

今のヤムチャの幸せぶりを見てると何だか涙が出てきそうだ。

ともかく、もうここに用はない。

悟空達も一年間はドラゴンボールを探せないのここで解散する事に決めたらしい。

ブルマとヤムチャ、ウーロンとプーアルはブルマの実家がある西の都へ。

悟空は亀仙人の所へ弟子入り、とそれぞれの目的へ向かうようだ。

リゼットもまた彼等に軽い挨拶をし、山の頂上にある聖堂へと帰って行った。



聖堂に帰り、やる事は今までと同じだ。

ひたすら修行修行&修行である。

重りを常に付けて動き回る事で基礎能力を上げ、限界以上まで気を振り絞りバーストリミットを続ける事で気の底上げと身体を負荷に慣れさせる。

特に後者の重要性は計り知れない。

何せリゼットは地球人だ。つまり超サイヤ人なんて反則変身はない。

それを補う為のバーストリミットだが、これは要するに見ただけ変えただけの

界王拳であり、その倍率は超サイヤ人以下だ。身体にかかる負担だって無視出来ない。

ならばもう、後は負荷に耐えられる身体を作り、身体を慣れさせ、通常よりも大きな倍加を引き出す以外にない。

50倍までいけるようになれば超サイヤ人化も同然……彼等に並べる。

しかし今のリゼットが出来るのは精々が七倍。

彼女の戦闘力——体感では大体二万前後を思えば驚異的な倍率だ。

しかし、たかがそれだけだ。

何十年も慣らし続けてここまでにしかなくていないのだ。

これでは駄目だ。その時が来たらこんなの一日であっさり超えられてしまう。

何か、新しい修練法を考える必要がある。

リゼットは聖堂で目を閉じ、思案を巡らせた。

何がある？ 自分に何が出来る？

まず思い浮かぶのは精神と時の部屋？

あれならば一日で一年の修行。十倍の重力もかかり、己を鍛えるには申し分ない。

だが人生で入れる時間は二日だけと決まっている。

出来ればもっと、切羽詰って強さが必要になるまでは残しておきたい。

ブルマに頼んで重力室を作ってもらおう？

これは……うん、これは候補に入れていいだろう。

お金もあるし、ちゃんと払えば作ってもらえるはずだ。

出来ればホイホイカプセルで持ち運び出来る物がいい。

死にかけてパワーアップ？

……いや無理。地球人は死を乗り越えても強くなりません。

アンサー・トーカーに覚醒出来るならやる価値は十二分にあるが、まあ無理だろう。世界違うし。

改めてサイヤ人はズルイ。もし自分がサイヤ人だったら瀕死パワーアップ繰り返しで今頃凄い強くなってるのに、と思う。

前世で見たサイヤ人系オリ主さん達が簡単に数十万とか超えてたのを思い出すと割と本気でへこむ。

「……とりあえず重力室、買いにいきましょう」

まずはカプセルコーポレーションに行こう。

それから並行して新しい技も開発する。

やる事はいくらでもあるのだ。

・ 自家用機でリターンしてくるピラフ

アニメ版オリジナル展開。

リゼットも一応見ていたがすっかり忘れていた。

・ 悟空が飛ばされた理由

この辺りは旧シリーズと新シリーズで明確に違うので一部新シリーズの設定を取り入れつつ基本は旧シリーズ準拠。

例えば旧アニメの『たったひとりの最終決戦』では悟空は明確に赤ん坊の頃に素っ裸で地球に飛ばされているが、新シリーズはそうではない。

これについて、このSSでは旧シリーズの方を採用している。

なので勿論バーダックも優しいサイヤ人ではなく、自分の息子に『戦闘力

た
っ
た
の
2
か
……
ク
ズ
が
！
』
と
か
言
っ
ち
ゃ
う
人
で
あ
る
。

第八話 天下一武道会

カプセルコーポレーションから重力室のカプセルを購入した、というよりは特注で造ってもらったリゼットは早速それを聖堂の隣に設置し、修行を開始した。

買いに行った時は『何で天女がそんなの欲しがるの?』といった顔をブルマにされてしまったが、まあ気にしないでおう。

重力は最大で300G。無論今のリゼットがそんな重力をかければ潰れてしまうが、後まで長く使う事を考えれば多少最大値は高くした方がいい。

とりあえず、当面の目標は戦いが激化するまでに——つまりサイヤ人襲来までに重力150倍くらいを克服しておく事だろうか。

100倍を克服した悟空が確か戦闘力9万くらいだったので、多分13万くらいにはなれるんじゃないだろうか……なれるといいなあ。

「とりあえず慎重に……まずは10倍から」

下手に高く設定して、それで潰れて死んでしまっただけの自殺だ。

だからまずは10倍にする。

今の自分の實力ならどうという事はないと分かっているが、念のためである。

「……ふむ。十倍くらいではこれといった負荷は感じませんね。では20倍……25倍……」

メモリを少しずつ調節し、今の自分にとって丁度いい辛さの重力を選ぶ。

10倍は軽くて多分修行にならない。

20倍は負荷を感じるが、まだ気にならないレベルだ。

30倍まで行くと一気に身体が重くなり、まるで全身が重りと化したような錯覚を覚えた。

どうやら今の自分にとって修行に適しているのはこの辺りのようだ。

そう判断したりゼットは30倍でメモリを止め、早速基礎トレーニングに入る。

バーストリミットは使わない。素の能力を上げるのが目的なので使う意味がない。

というより下手にバーストリミットを使うと重さが感じられなくなり、修行にならないのだ。

かといってバースト状態で重いと感じる重力にしては解除時に重さで即死しかね

ない。

故にここで能力増幅を行う理由はどこにもなかった。

「よし、久しぶりに実力の伸びが実感出来る修行になりそうです」

これで自分は強くなれる。

その確信を抱き、リゼットは演舞のように身体を動かした。

★

——重力修行舐めてた。

重力室購入より1年。リゼットはこの修行の効率のよさを思い知らされていた。具体的に言うとな強さが一年で3倍以上になったのだ。

数字にして……200神様といったところだろうか。

大体6万前後と考えていいだろう。

よく考えれば悟空も1週間で80000だった戦闘力が900000になるくらいなのだから、それは効果があるに決まっている。

やはり重力による負荷はそれだけで身体を鍛えてくれるのだ。

ベジータが後の方までずっと重力修行を愛用する理由が分かるというものだ。

……冷静に考えれば1年で3倍は、悟空と比べると泣ける遅さである。

何せ向こうは1週間で10倍以上だ。話にならない。

いくら瀕死パワーアップを駆使したとはいえ、この差は泣ける。

やっぱりサイヤ人って凄い。リゼットは深くそう思った。

さて、今日もまた重力修行と洒落込みたい所だが一時中断だ。

何せ今日は天下一武道会当日。

漫画で見た数々の試合を生で見れる大チャンスなのだ。逃す手はない。

今のリゼットにしてみればレベルの低い試合である事は違いないが、だからといって楽しめないわけではない。

例えは悪いが、総合格闘技の世界王者だってカブト虫とクワガタの戦いを楽しめる。それと同じ理屈だ。

それに単純な数値では測れない技術というものがある。

亀仙人の試合は見ても損をしないだろう。

武道会場へ行くと早速一番前へ飛んで行き、観客席の囲いの上に座った。

当然こんな入場の仕方をしては周囲は驚くし、特に顔見知りでもあったブルマ達

（最前列にいた）は尚更だ。

しかしリゼットは自分が目立つ事に関してはもう諦めたく、まるで気にした様子はない。

「リ、リゼット様！ 何でここに?!」

「暇なので悟空君の応援に来ちゃいました」

「ひ、暇ってあんた……」

リゼットの言葉にブルマが「そんな理由で」と言っているが、実際暇なので嘘は言っていない。

たまに神様の神殿に行ったり、神仙術を教わってみたりしてはいるものの、基本的にあの山はリゼット一人しかないのだ。

ずっとくる日もくる日も延々、修行漬けの日々。

自分の強さが上がるのを実感出来るのは嫌いではないが、それは別にしてやはり暇にはなる。

だから今回の観戦はちょっとした息抜きのようなものだった。

1回戦のヤムチャ対ジャッキーチュンに変な感動を覚え、ランファンにたじろ

ぐナムに笑い、バクテリアンの臭さにたまらず一時退却し、鼻がないのに高速戦闘の最中に鼻糞を飛ばすクリリンに驚いた。

そうして試合を見ながらこの後の展開を何となしに思い出す。

決勝戦は悟空対ジャッキチュン。ファンとしては是非間近で見たい試合だった。

確か途中で悟空が大猿になってしまうので、亀仙人のMAXパワーかめはめ波を見る事も出来る。

「……………あ」

——兎人参化忘れてた。

いけない、そのうち助けてあげようと思って今の今まですっかり忘れていた。

そして今日観戦に来なければ忘れたまま、後になってしまったと気付いた事だろう。

リゼットは囲いの上から浮くと、高度を上げる。

「あれ？ リゼット様どこに行くの？ もう決勝戦始まるわよ」

「ちよっとやるべき事を思い出しまして」

今からならばまだ間に合うだろう。

これから始まる試合を見れないのは少し残念だが、まあ見殺しにするわけにもいくまい。

この時、真上に飛ぶのではなく斜め上に飛ぶのがポイントだ。

足元まで届き、ヒラヒラフワフワしているスカートは多少の角度があれば絶対に中身を見られる事はない。

だがこのまま垂直に上に上がってしまうと、ウーロン辺りに覗き込まれないとも限らないのだ。

250歳のお婆ちゃんだが、心は少女だ。えっちはのは嫌いです。

大気圏を抜け、月面へと着陸する。

すると——いた。

兎人参化とその部下二人が餅を丁寧に量産しているのが見える。

もしかしてあれからずっと餅を突いていたのだろうか？

「兎人参化さんですね？」

「ええ、いかにも私が兎人参化ですが、これは珍しい。こんな月面にお客様とは……」

ささ、どうぞ。餅しかありませんが」

「あ、これはどうも。頂きます」

兎人参化は心なしか嬉しそうに言い、つきたての餅を皿に載せるとお茶と一緒に差し出してくる。

その姿にはかつて人々を恐れさせた盗賊団首領の面影はなく、ただの餅突き兎そのものだった。

餅を突き続けているうちに毒気が抜けてしまったのかもしれない。

リゼットは差し出された餅を一口食べ、それからここに來た目的と自分の素性を語る。

「自己紹介が遅れました。私はリゼットと申します。人々の間では龍天女とも呼ばれていますので、そちらの方が解り易いでしょうか」

「おお、貴女があゝの亀仙人や鶴仙人と並び称される伝説の3人のうちの一人……なるほど、噂に違わず美しい。お会い出来て光榮に思います。ささ、どうぞ、黄粉も付けてお召し上がり下さい」

「あ、どうも。頂きます……それですね、実は近いうちにこの月が破壊されてし

まうんです」

「ファー!？」

先程まで落ち着いていた兎人参化が驚きを露にする。

まあ、こんな所まで送られた挙句月破壊とか嫌過ぎるだろう。

いくら知らない事とはいえ、亀仙人も結構酷い事をする。

「ですので、もう悪い事をしないと約束して頂けるなら私が地球まで戻してあげますか」

「も、勿論ですとも！ 私達は心を入れ替えたのです！ な、なあお前達！」

「へ、へイ親分！」

「そ、その通りでさあ！」

既に邪心はほぼ失せている一団だが、何かの拍子にまた悪事に走らないとは限らない。

だが、こうして軽く脅しを入れておけばもう悪さしようという気にはならないだろう。

リゼットは3人の返事に頷くと、超能力で3人の身体を浮かす。

そして飛翔。

3人と、ついでに何故か月にいた本物の兎数匹を連れて地球へと降下した。

それにしても何故彼等は宇宙空間で平然と生存出来るのだろうか………実に不思議だ。

地球にある己の聖堂へ兎人参化達を降ろす。

今の彼等は文無しの歩く兎だ。このままそこらに放り出しては生活が厳しいだろう。

仕事をしようにも前評判が悪すぎる。

誰が好き好んで元盗賊団を雇うというのだ。

だからまずは、生活の目処が立つまでの間の面倒くらいは見えてやろうとリゼットは考えている。

せつかく更生しても、生活が出来ないのでは犯罪に走ってもおかしくない。

それを防止するのもまた、拾った者の義務と彼女は考えていた。

それらの事を彼等に伝え、至聖所以外ならばどこを使っても構わないと告げる。

至聖所は一応リゼットの私室に当たり、また神様の宮殿と繋がっているのもここ

なので流石に立ち入りさせるわけにはいかない。

月にいた兎達には後で専用の小屋を作ってあげてもいいだろう。

そうして彼等の処遇を決めた後にリゼットは会場へと戻った。

それと同時に轟音が響き、閃光が爆ぜる。

どうやら丁度亀仙人が月を破壊した所だったらしい。

MAXパワーを見逃した事を残念に思いつつ、リゼットは一番前の囲いまで戻った。

「あ、リゼット様！ この大変な時にどこ行ってたんですか!? 孫君が変身しちゃって大変だったのに！」

「ええと、月の兎さん達を回収に」

「え？」

「何か月に人がいたようでした……その方々を回収しておりました」

「……………そ、そう、なんですか」

ブルマとウーロンは流石に心当たりがありすぎるのか、それ以上何か言ってくる事はなかった。

いくら悪人でも、流石に月と一緒に消し飛ばされていいとまでは思わないらしい。その後は悟空とジャッキチュンの試合を見る事に集中し、やがて忘れたかのようになり盛り返っていた。

試合結果は——記憶と同じだ。

共に疲労がピークに達した二人が最後に蹴りを放ち合い、リーチの差でダメージが浅いジャッキチュンが勝利した。

この結果についてリゼットは順当な結果だと思っている。

そもそも大猿化というアクシデントがなければ萬國驚天掌で決まっていた勝負であり、それが現時点での両者の差というわけだ。

ともかく、やはり生は違う。

単に強いだけでなく、実にユーモアに溢れた試合だった。

惜しむらくは最後の方しか観戦出来なかった事だろう。今の今まで兎人参化を忘れていたのが悔やまれる。

次の天下一武道会は3年後。

次こそは見逃さず最後まで見るぞ、と変な決意を固めながらリゼットは優勝者に

惜しみない拍手を送った。

【鼻のない地球人（？）】

クリリンに鼻がない理由は、皮膚呼吸が出来るから（!?!）

これはこのSSの独自設定などではなく、鳥山明先生が自ら語った公式設定である。

ここで重要なのは鳥山先生が『鼻はないが皮膚呼吸が出来る』ではなく『鼻が無い理由は皮膚呼吸が出来るから』と答えている事。

これは似ているようで全然違う。

鼻が無いから皮膚呼吸を会得したわけではなく、皮膚呼吸が出来るから鼻が退化したのだ。

つまりクリリンは突然変異などではなく、進化の過程でああいう姿になった、あの姿で完成している生物である。

……こいつ実は宇宙人なんじゃないかな……。

ちなみに、ファミコンソフト『ドラゴンボール 神龍の謎』ではクリリンそっくりの『クリリアン』というクリーチャー（!?）が登場する。

彼の二つ名は『宇宙一の殺し屋』。つまり宇宙人である。

また、彼は四本腕の宇宙人だがそのうちの二本をブーメランのように飛ばす事が可能。

……クリリン……お前本当に地球人なんだよな？

ブーメランにした腕を紛失したクリリアン本人とか、その末裔とかじゃないだろうな？

第九話 ピッコロ大魔王

天下一武道会が終わった後、兎人参化達は結局山を降りる事はなかった。

月から救ってくれたお礼をしたいと言い、そのまま聖堂に住み着いてしまったのだ。

まあ実際リゼットも一人で暮らし、自分で生み出した自律思考気弾に雑用をやるのは何だか虚しかったので、まあいいかと受け入れた。

とりあえず彼等には雑用や聖堂の掃除、来客（ほとんど無いが）の対応などを任せ、家事を行う必要のなくなったりリゼットは以前にも増して修練に集中出来るようになったのでそう悪い事でもない。

至聖所で膝を突き、目を閉じる。

顔は俯かせ、両手を組み合わせてその中に意識の全てを割く。

これはリゼットが最も多くの気を感じ取れる、いわば最も集中出来る姿勢であった。

普通こういう時は座禅ではないのか、と思うのだが座禅は逆に落ち着かない。

まるで祈りのような姿勢。

修道女染みたその姿勢は彼女のどこまでも白く透き通る容姿と相まって、神聖な絵画を思わせる。

祈り——その言葉はあながち間違いではない。

事実祈っている、願っている。

教えて欲しい、応えて欲しい、ほんの少しでも白く透き通る容姿と相まって、神聖な

森羅万象、この惑星に生きるありとあらゆる物。人間、動物、植物——総ての命に対し願ひ、祈っている。

気とは生命のエネルギーそのもの。気を分け与えれば死にかけている者でも立ち上がらせる。

ならばその逆。借り受ける事も不可能ではないはずだ。

だから祈っている。何も持っている気の数割を貸せなどと、そんな図々しい事を言うつもりはない。

ほんの少しでいい。ほんの僅か……健康な成人男性であれば、たった一歩歩くだけの気をわけてくれればそれでいい。

強制的に吸い上げるのではない。

あくまで借り受ける。

生き物が普段生きる時に無意識に余らせている気をほんの少しだけ分けてもらう。

言葉として語りかけるわけではなく、それぞれの無意識へと祈りを飛ばして助力を乞うのが、今リゼットがやっている事だった。

もしこれが叶うならば、一つ一つは微小な気でも集めればきっと大きな力となる。リゼットが作り出そうとしている技。

それは元氣玉に発想を得たものであり、彼女流の元氣玉とでも言うべきものだ。あれを使うとき、悟空はいつも語りかけていた。『大地よ、海よ、生きている全ての皆。オウにちよつとだけ元氣を分けてくれ』——つまり元氣玉とは術者の意志だけでは成立し得ない。

実際、元氣を与える側が手を上げる事で供給される元氣の量が変わるのだから、恐らくは相手の無意識の同意が必要な技だ。

だから悪の気を持つ者には絶対に使えない。相手が同意してくれないのだから気

を集める段階で失敗する。

普遍無意識への祈り、語りかけ、懇願。それが元氣玉の正体だとリゼットは考える。

ならば必要なのは気の強さではなく、無意識へ語りかけるテレパシーにも似た意志伝達能力。

だから悟空はきっと、他の戦士にはない読心能力や遠視の力を随所で発現させたのだ。

元氣玉を使う事で育まれた気の疎通。

それがあったから、超能力染みた芸当が可能だった。

普遍無意識に語り、祈り、願い、そしてほんの僅かな恵みを得る。

故にリゼットは無意識のうちに祈りの姿勢をとっていた。

願い、祈りに適した姿を無意識のうちに悟り、これこそが最も在るべき姿勢だと理解したのだ。

そしてきっと、これは間違いではない。

手応えを感じている。

僅かではあるが、周囲の命たちが気を分けてくれるのを感じる。

完成には程遠い未完成の技。

しかし、確かな完成への道が見えた気がした。

★

3年間、リゼットはこの期間を己を見詰めなおす事のみに使用した。

レッドリボン軍との戦いは何も手出ししない。

自分が手を貸すべき事など何もなく、またその必要もない。

ペンギン村だけは少し興味があったので少し散歩がてら寄ってみたり、アラレちゃんと遭遇してみたりしたがそれだけだ。記憶の通りの元気すぎるめちゃんこ娘であった。

やった事と言えば、何か付近を飛んでいた羽虫のような小型機械を捕まえた事くらいか。

一体何の為の機械なのか分からないが、何となくよくない意志を感じる。

とりあえず放置していい事はなさそうなので、ガラスケースに入れて倉庫の奥に封印しておいた。

意志——気はなく、そこにある思想の残滓。

リゼットはここ最近、そうしたものを感じ取る能力が増していた。

恐らくは気を感じ取る能力の、もう一つ上のステージ。

研磨の果て、リゼットは己がその領域に片足を踏み入れたのを感じていた。

気を感じる事で遠くの情景が分かる。

そこに自分がおらずとも、誰が何をしているのかを把握出来る。

恐らくは心臓病から目覚めた直後の悟空と同じ領域。気の感知を極めた先の遠
視。

この進化を招いたのはきつと、3年間続けてきた祈りによるものだろう。

重力室の修行と並行して毎日欠かさず行ってきた祈りは、リゼットの気を感じする能力を飛躍的に伸ばしていた。

遙か遠くにある生き物の無意識に語りかけて、気を分けてもらうという離れ技。

その域に近付くという事は必然、感応能力も上昇する。

不思議と祈りを続ける事は苦ではなかった。

己が生まれた世界、生きる世界、そこに生きる人々。

その息づかいまでが近くに感じられるようになるほどの、普遍無意識への接近。生命の脈動が今までになく感じられる。

その健気さ、尊さ、優しさ、力強さが肌で感じられる。

愛おしく思う。

守りたいと思う。

それはきつと、祈りを続ける事で届いた一種のトランス状態なのだろう。

だがそのトランス状態が、リゼットを確かに上のステージへと昇華させているのもまた事実だった。

「いや、キャラじゃないですってば」

トランスから覚めると結構恥ずかしい。

何だあれ。私そんなキャラじゃないでしょ。

リゼットはゴロゴロとベッドの上を転がり、顔を真っ赤にする。

そもそも、あれは思い出すと結構恥ずかしい。

祈りの姿勢が一番気を感じ取れるからああしているが、外でやる時どうすればい

いんだ。

祈るのか？ 敵の目の前で跪いて祈りを捧げると？

アホか。狙いうちにされるに決まってる。

技として欠陥品もいい所だった。

敵の前で祈るなら背後に観音像でも出してぶっ叩いた方がまだマシだ。いや出来ないけど。

しかしそれはそれとして、副産物で得た遠視能力。これはいいものだ。

何せ現場にいずして現場が視える。

つまり聖堂でおやつを食べながら悟空の活躍を鑑賞する事が出来るというわけだ。

世界を知り尽くしたいという願いを持つリゼットにとってこれはまさに万金に値する能力と言える。

最近はこの遠視を用いて深海の底を探索するのがマイブームだ。

視力ではなくあらゆる存在——それこそ微生物や植物すら含んだ気を全て感じる事で詳細を把握し、全体像を『視る』能力なので明度などとは関係ない。

光の差さない深海であろうと昼間のように見渡す事が出来る。

深海は化物染みてグロテスクなお魚さんの宝庫であり、暇潰しにはもってこいだ。生き物ってこんな面白い進化するんだ、と感心させられる。

そして例えば悟空達の動きだってこれを使えば、ここに居ながらにして分かる。

例えばヤムチャ。ブルマや亀仙人、ランチや天津飯と一緒に武道会会場にいて松葉杖をついている。

例えばクリリン。……気が感じられない、ただの死体のようだ……。

「……………」

リゼットは頭を抱えた。お魚さん視てる場合じゃない。

どう見ても出遅れてます、本当にありがとうございました。

次こそは見逃さないと決意してたのに天下一武道会丸々見逃した挙句、もう大魔王編始まってるのか笑い話にもならない。

とりあえず悟空だ。悟空を探そう。

悟空は——いた。森の中で倒れている。

気も大分減っているし、かなり傷付いているようだ。

いや、というかこれ死んでない？ 心臓止まってない？

「こ、こうしちゃいられない!？」

リゼットは青褪め、ベッドから飛び起きるとパタパタと駆け出した。

こんな所で悟空が死ぬなんて記憶にない。あつてはならない事だ。

聖堂を走り、何事かと驚く兎団をスルーし、跳躍。

悟空の気目掛けて全力飛翔をした。

背中からの気の放出により光翼を展開。千里すら一瞬にして詰め、音を超えて消えかけている悟空の気を辿る。

——いた！

森の中で倒れている悟空は何も映さない虚ろな瞳を虚空に向け、倒れている。

その向かい側には大魔王。

リゼットは即座に悟空と大魔王の間に割り込み、悟空を守るように大魔王と対峙した。

これに驚いたのは大魔王だ。

何せスピードが違う。

彼にしてみれば、突然の白光と共に未知の敵が出現したようにしか見れない。つまり得体が知れないし、大魔王ではリゼットの底を計りきれないのだ。

「な、何……？ 貴様、何者だ？」

「……貴方に名乗る名はありません」

リゼットはチラリと悟空を見る。

気は限りなく小さく、呼吸も心臓も止まっている。

不味い……非常に不味い状態だ。

一刻も早く処置を施さないと本当に死んでしまう。

大魔王と戦う時間すら惜しいし、そもそもここで大魔王を殺してしまうと後のピッコロさんが誕生しない。

かといって殺さない程度に加減して戦ってやる暇と余裕など今はない。

故に、構えを取った大魔王へ強い語気で告げる。

「戦う気ですか？ その老いた身体で、この私と」

「……ッ！」

大魔王は老いている。全盛期には程遠い。

ましてやは今は悟空と戦った消耗もあるだろう。

得体の知れない敵に加えて己の消耗。それを考えれば、自ずと最適解が出るはずだ。

大魔王は屈辱に齒を噛み締め、呪いの言葉を吐くように言う。

「……命拾いしたな、小娘」

そう言い残し、大魔王は去った。

だがその前に、大魔王の乗る飛行艇……そこに乗るピラフ一味に釘だけは刺しておくべきだろう。

リゼットは彼等を睨むように見上げ、よく通る声で告げる。

「その貴方達……このような事はもうお止めなさい。いつか、己の首を絞めますよ」

「……ッ!!」

ピラフが息を呑むのが解った。

これで少しは効果があるといいのだが、正直期待は薄いだろう。

それでも言わずにはいられなかった。

彼等の行動は完全に超えてはいけな領域をはみ出している。

少しは悔いてくれればいいのだが……。

飛行艇が発つと同時にリゼットは悟空へ駆け寄る。

気は完全に消えているわけではない。まだ命の灯火は残っている。

指を悟空の胸の中心に当て、気を送り込む。

とりあえず心臓を動かしてみれば息を吹き返すんじゃないかという、割と考えな
しな試みだ。

「……かはっ！」

……本当に復活してしまった。サイヤ人の生命力恐るべし。

これもしかして、自分が慌てて来なくても勝手に復活したんじゃないだろうか。
というか、したのだろう。今になって冷静になってみればこの展開はあった気が
する。

そうだ、確か悟空は大魔王との戦いで一度呼吸と心臓が止まって仮死状態になっ
たはずだ。

つまりこれは運命通りの予定調和であり、慌てて出て来る必要など何処にもな

かったのだ。

そして……そう、確かこの後ヤジロベーに助けてもらはずであり、實際横を見れば、木の陰にヤジロベーが隠れてこちらを見ているのが解った。

「あの、そこの方……」

「！　ち、違うんです天女様！　お、オラァ別にそいつの事を見殺しにしたわけじゃあなく、たまたま通りがかっただけでして……さ、さいならー！」

「え!？」

——ヤジロベーが逃げ出してしまった。

呆然とするリゼットの視界でどんどんヤジロベーの背は小さくなり、やがて完全に見えなくなった。

彼が逃げたのはひとえに罪悪感があつての事だ。

ヤジロベーは大魔王との戦いに恐れをなし、遠巻きに観戦する事しか出来なかった。

つまり形としては悟空を見殺しにした形になるのだ。

無論リゼットにそれを責める気などない。

己の命を最優先に考える事に罪などないし、怖いと感じるのは仕方の無い事だ。だがヤジロベエから見れば、明らかに悟空の味方の天女が出て来て、自分は悟空を見殺しにした。

責められると思ったのだろう。

咎められると思ったのかもしれない。

その結果が逃亡。本来ならばここで悟空の味方になるはずの男の、まさかの離脱である。

「……………や、やってしまいました」

ポカンとするリゼットの真上を一羽の鴉が飛ぶ。

その鳥はまるでリゼットを嘲るように「アホー」と一声鳴いた。

☒ リゼットは長生きしている分、時間感覚が少しずれています。

なので一つの事に熱中すると、今回のように『気付いたら数年経ってました』とかいう事態にもなります。

まあ今回の一件で反省するでしょうから、以降はそんなに同じミスをしなくて
しょう。

多分。

第十話 まさかの修行イベント

悟空を抱えて空を飛ぶ。

その向かう先はカリン塔。本来ならばヤジロベーが登って悟空を届けるはずだった場所だ。

しかしそのヤジロベーはリゼットのポカにより逃走してしまい、結果リゼットが運ぶしかなくなっていた。

過ぎた事を言っても仕方がないが、これからはもう少し冷静になるべきだろう。

やはり不用意な介入はロクな結果にならない事がよく分かった。

ヤジロベー逃走はリゼットにとってかなり高い勉強代となってしまった。

「す、すまねえなりゼット……お礼はきつといつかするよ」

「ふふ、そうですか？ ではいつか、私が危なくなった時には助けに来て下さいね」

「おう、任せとけ」

冗談めかして言ってみたが、この言葉は割とマジである。

後になればなるほど戦いのレベルはおかしくなるし、魔人ブウ編では人類全員が

死んでしまう。

だがここで悟空に助けて貰えるフラグを立てておけばあるいは生き残れるかもしれない。

そんな結構切実な願いがあるなど無論悟空が知る由もないが、何せあの孫悟空との約束だ。

安心感が違うというものである。

まあ、どのみちまだまだ先の話だ。今はまだリゼットが彼を救う側である。リゼットは塔の頂上へ着くや、カリンに向けて声を放った。

「仙豆様！　悟空君にカリンを！」

「逆じゃ馬鹿者！　仙豆が本体みたいな言い方をするでない！」

まったく、などと怒りながらカリンが仙豆を投げる。

悟空はそれを受け取り、ポリポリと噛み砕いた。

すると悟空の傷があつという間に治り、顔のツヤもよくなる。

相変わらず凄まじい効果だ。

色々な物を真似してきたリゼットだが、彼女でもこの仙豆だけは真似出来る気が

しない。

その後は、本来ならば悟空が更なる力を求めて超神水を飲むはずだった。

しかし悟空がそれを飲むのは、それ以外に短期間で強くなる手段がなかったからだ。

カリンを既に超えてしまい、教わる事がなかった。

だから超神水という劇薬に手を出さざるを得なかったのだ。

しかしこの世界は違う。

カリンを超えても、まだ超えていない強者がここにいる。

故に強くなりたいと言う悟空に対し、カリンが超神水を提案せずにとんでもない事を言い出した。

「悟空よ、リゼットから学ぶがよい。そやつはこの地球でも並ぶ者なき実力者……お主を更なる高みへ引き上げてくれるじやろう」

——何か仙ニャンコ様が余計な事を提案して下さった。

リゼットは笑顔のまま固まり、予想外の展開に内心パニックを起こす。

え、何この流れ。私予想してないんですけど。

そもそも修行ったって他人に教えた事なんてないので、何を教えればいいのか分からないのですが。

そう無言で訴えるリゼットだったが、カリンはこれをスルーした。

「ええっ？ リゼットってもしかしてカリン様よりも強えんか？」

「うむ、わしなどよりも余程な」

リゼットは表面では笑顔を保ちながらも、内心では今すぐ逃げたい気持ちで一杯だった。

確かに自分は現状、この惑星で多分一番強い。

しかし強いからといって、イコール他人に教えるのが上手いとは限らないのだ。だが悟空はそんなリゼットの内心を知らず、ワクワクとした顔でこちらを見上げてくる。

今更「嫌です」なんて言えない雰囲気だ。

仕方なく諦めたりゼットは、せめてもの意趣返しとして猫じゃらしをカリンの前で振ってみせた。

するとカリンはニャンニャン言いながら猫じゃらしにじゃれつき、ハッとしたよ

うな声をあげる。

威厳ブレイクだ。ざまあみろ。

「修行……ですか。とはいっても、短期間でそう都合よく強くなれる修練など……」

「あるんじゃない？」

「……まあ、ありますけど」

心でも読めているのだろうか、この猫。

あ、そういえばそんな能力ありましたよ、この猫。

意外と忘れられがちだがカリンは他者の心を読める。

リゼットに関してはカリン曰く『何か読みにくい』らしく、前世の記憶を読まれた事はないが表層の思考くらいは読めるのだ。

リゼットはそんな事を思い出しながら、悟空の前にしゃがみ込んだ。

リゼット自身は人に教えた事などないし、経験もない。それは紛れもない事実だ。しかし彼女には本来あり得ない知識がある。

二次元だから可能だったはずの修行の数々を覚えているし、そのうちのいくつかを己で実践している。

だから、悟空を数日で強くする方法も知らないわけではないのだ。

「悟空君。手を出して下さい」

「わかった」

差し出された悟空の両手の手首に指を当てて気を留める。

次に両足。これも足首に気を残留させ、そして一言。気の固定化を宣言した。

「グギプス」

「ぎっ!？」

瞬間、悟空の両手と両足が白い輝きに拘束され、まるで磁石で貼り付けたかのよう
うに手首同士、足首同士がひっついてしまった。

当然そんな状態で満足に動けるわけもなく、まるで連行される囚人のような体勢
で悟空は棒立ちするしかない。

気の固定化により行われる両手足の拘束。これは今の悟空では気によって強引に
千切る事など出来るはずもなく、彼の自由を完全に奪い去っていた。

悟空はしばらく腕力で外そうともがいていたが、やがて無駄と悟ったのかりゼツ
トへ視線を向けてくる。

「リ、リゼット……これ、一体なんなんだ？ 動けねえ……！」

「この光の手枷は力では決して外せません。外す為のキーワードは教えますが、それを唱えるのは大魔王と戦う直前です。今唱える事は認めませんよ」

悟空の耳元で解除の為のワードを囁く。

そのワードとは勿論『開（アンテ）』。元ネタに準じている。

某霊界探偵漫画に登場した霊力養成ギプスを気で再現したものがこの手枷足枷であり、試してみた所実際に効果があってリゼットを喜ばせたものの一つである。

「気の開放——と言っても分からないでしょうから、かめはめ波を撃つ時の力の流れをイメージして、両手と両足に力を入れて下さい」

「ぐ、ぐぎぎぎ……う、腕はともかく、足はキツイぞ……。で、でも……動く……動けるぞ……」

「その枷を付けている間、常にその力の操作を行って下さい。修行中は勿論、食事している時や寝ている時です。最初はきついでしょうが、それが苦にならなくなったら、外した時の貴方の力は今の何倍にも高まりますし、かめはめ波も今よりずっと短時間でスムーズに撃てるようになるでしょう」

悟空は汗を流して辛そうにしていたが、最後の何倍にも高まる、という言葉聞いて目の色が変わった。

やはりサイヤ人。強さを求める本能は凄まじいものがある。

彼は好戦的に笑うと、全身を震えさせながらも必死に立ち上がり、リゼットを正面から見た。

「私との修行は常にそれを付けた状態で行います。とりあえず最初の目標は、その状態のままこの広場を100周する事。なるべく手は大きく振り、全身の筋肉を使うように歩いて下さい」

「お、おう！　わ、わかった！」

余談だがリゼット自身も勿論これを付けている。

目には見えないよう工夫しているが、この枷を付けたまま恒例の気の全開放修行を今この瞬間も続けているのだ。

常在戦場——何気なく話しているように見えて、リゼットが己を鍛えていない瞬間など存在しない。

歩いている時、本を読んでいる時、カリンを猫じゃらしでからかっている時……

いつだって彼女は気を開放して己の限界を責め続けている。

もっとも、ある程度の強さに達してしまうとそれすら最初ほどの劇的な効果は見込めなくなるのが辛い所だ。

何はともあれ、まさかの原作主人公にして後の宇宙の英雄の師匠モドキになるという罰当たりイベントが始まってしまった。

まあ、悟空より強い時期など今だけだし、こういうのもいいかもしれない。

それでカリンや亀仙人、界王様と一緒に『悟空に呆気なく抜かされた師匠ズ』の端に並んでみるのも一興だ。

いや、こうなったらせめて、『抜かされるまでの期間が一番長かった師匠』くらいにはなってる。

リゼットはそんな事を考え、必死に歩く悟空を見守った。

★

——サイヤ人って凄い。

リゼットは呆然と眩き、隣にいたカリンは啞然としている。

場所はカリン塔。二人の視線は遠見の鏡に固定され、地面に転がる無様な大魔王

を見ていた。

大魔王は悶え苦しみながら地面を転がり、血反吐を巻き散らして辺りを自身の血の色である紫に染めている。

そしてそれを見下ろす悟空自身にもまた驚きの色が強く表れ、隣で転がっている天津飯はただ啞然としていた。

結論から言おう……『一撃で終わった』。

リゼットからわずか数日の修行を受け、枷を付けたまま大分楽に歩けるようになった悟空は意気揚々と大魔王に挑み、彼の前で枷を解除して飛び蹴りを叩き込んだ。

やった事はそれだけであり、それが全てだった。

ただの一撃……それだけで大魔王は立ち上がる事すら出来なくなり、こうして無様にのたうち回っている。

リゼットはもう内心で汗ダラダラである。

どうやら少しやりすぎたらしい。大魔王を倒すどころかオーバーキル出来る強さになってしまった。

原作名イベントの一つである『貫徹ー!』は当然カットである。そもそも戦いが成立していない。

「お、おいリゼット……これはちょっと強くなりすぎじゃないかの？」

「……私もそう思います」

とりあえず、これは少し不味い。

何故なら大魔王が卵を吐く暇がない。

つまりマジユニアが生まれない事になり、このまま大魔王が死ぬと神様まで死んでしまう。

リゼットはまたもやらかした。悟空の成長速度を侮ったのだ。

彼女としては大魔王と互角くらいになるように調整したつもりだったのだが、悟空はその予想の上を行った。

何はともあれ、このまま大魔王を死なせてしまうわけにはいかないだろう。

リゼットは頭痛を抑え、カリン塔から飛び降りる。

そして飛翔し、戦場であるキングキャッスルへと高速で飛んで行った。

リゼットが白翼を広げて空より舞い降りる。

バーストリミットを使う事で純白の輝きに満たされ、ついでに彼女が現れる事で暗雲が晴れて光が差し込む。

実際は急ぎのあまりバーストリミットまで発動し、暗雲を高速移動の衝撃波で吹き飛ばしてしまっただけなのだが、傍から見れば神秘的だ。

だがそれより妙なのは悟空だ。

彼は大魔王に止めを刺す事も出来ず、振り上げた拳をそのままに固まっている。

……無理のない事だ。

実力伯仲ならばともかく、これではただの弱者いびり。強者が蟻を踏み潰す行為に等しく、ただの蹴り殺しにしかない。

つまり無抵抗なのだ。

今の魔王は悲しいほどに悟空に抵抗出来ず、動かない赤子を殺めるも同然に殺せてしまう。

それが逆に悟空の腕を止めた。

未来の話になるが、悟空は仲間達を殺したナツパにすら止めを刺さなかった程に甘い男だ。

一度はフリーザすら見逃そうとした。

リゼットはそんな彼の拳をそっと両手で包み、彼の意識を己へと向ける。

「！ リゼット……オラは……」

「いいんですよ。——それでいいんです」

これはもう戦いではない。ただの一方的な殺戮だ。

両者の実力が開きすぎてしまえばそこに戦いの概念は成立せず、一方的に殴る後味の悪さだけが心に残る。

いや、殴るだけなら出来るだろう。倒すだけならば葛藤などない。

実際悟空はこれまでも圧倒的に実力差の開いている相手を倒してきた事があるし、それを気に病んだりはしなかった。

時には笑顔で勝利を喜びすらした。

だがその上で、無抵抗の相手の命すらも奪うとなれば話は変わる。

戦いの中で相手を死なせてしまう事はあっても、終わった後に追い打ちをかけて命を奪う事は出来ない。孫悟空とはそういう男だ。

ベジータのような者ならばそれでも嬉々として戦うのだろうが、悟空がそれをや

るには優しすぎる。

だから、ここから先は自分の出番だ、とりゼットは考えた。

自分の失態が招いたこの事態。ならばせめて己がケリを付けねば格好が付かない。

「ピッコロ大魔王には私が止めを刺します」

悟空をやりわりと後ろへ追いやり、大魔王へと歩み寄って行く。

一步、二歩、三歩……まるで警戒する事もなく、隙だらけにすら見える姿で無防備に歩く。

天津飯が『危ない！』と叫ぶ。悟空が息を飲む。

だが彼女は止まらず、それを大魔王が見逃すはずもない。

悟空に対する逆転の一手、人質。

それを実行すべくリゼットの手首を掴み——膝から崩れ落ちた。

「あ……が……!？」

「愚かな」

掴んだのは大魔王だ。

天女の細い手首を確かに掴み、動きを止めようとした。

だが実際に動きを封じられたのは大魔王の方であり、まるで巨岩を被せられたかのように重さがのしかかり、動けない。

それどころか、己が掴んでいるはずなのに手を離せない。

掴んでいる側が一方的に操られるという理不尽。

合気によって成る、妖術の如き攻撃の無力化。

それが大魔王を崩し、その全身を押さえ込んでいた。

そうしたまま、まるで何でもないかのように開いている片手で胸元を探り、『封』と書かれた小瓶を取り出す。

蓋を外したそれを指で弾くと、見事なコントロールで少し離れた位置に垂直に設置された。

「まっ、まさか!？」

「そのまさかです」

リゼットは指先を動かし、気の実行を行う。

するとまるで大嵐が起こったかのような奔流が起こり、大魔王を飲み込んだ。

これぞかつて武泰斗が大魔王を封じ、世界に平和を取り戻した奥義。

気の消費が激しく、相手との実力差がありすぎる時に使うと死に至る魔の封印。

——魔封波であった。

「ま、まさか、こんな結果になるとは……！　だ、だが、これで悪の根が消える

わけではないぞ！」

大魔王が何やら叫びながら、口から卵を吐き出す。

それを見計らい、リゼットは大魔王を小瓶へ押し込んだ。

こんな事になってしまい、どうやってマジュニアを出させようと考えていたの
で、今の行為はまさに渡りに舟。大歓迎すべき誤算だった。

ならばもう用はなしとばかりに大魔王を封印し、蓋を閉める。

少しばかり本来の流れと違ってしまったが、まあ結果オーライだ。

悟空も強くなったし、全体的に見ればプラスと言っていいかもしれない。

というかプラスと思いたい。

歩いている時、本を読んでいる時、カリンを猫じゃらしでからかっている時……いつだって彼女は気を開放して己の限界を責め続けている。

——そして、そんな彼女が使う猫じゃらしを追うカリンも実はひっそりと戦闘力が上がっていた。

具体的には大魔王に勝てるくらいには。

(戦闘力190↓270)

【気霊錠】

幽遊白書の呪霊錠のパクリ。

気を総動員しなければ満足に動く事すら出来ず、これを付けたまま日常生活を送れるようになれば戦闘力が数倍になる。

数日程度ならば数割強くなる程度で悟空が大魔王と互角になるくらい……とりゼットは思っていたが、悟空の才能はそんなものではなかったので強くなり過ぎてしまった。

現時点での悟空の戦闘力は600くらい。

第十一話 ドサクサ紛れの後継指名

ピッコロ大魔王を封印したリゼットは悟空を連れて神殿へ訪れていた。

カリンが認めた証である鈴を無視して来てしまった上に如意棒すら使っていないが、まあ問題はあるまい。

リゼットは神の代行者という役割を持っており（というより押し付けられており）、カリンを通さずとも彼女自らが神殿に連れ込んだとなれば充分に資格ありと見なされるのだ。

これについてカリンは「わしの出番……」と嘆いていたので、お詫びに小さめのダンボール箱を渡しておいた。

そんなのでいいのかと思うかもしれないが、本人は箱にスッポリ入ってご満悦だったので問題なからう。

その後はポポに任せてリゼットは早々に立ち去ったのだが、後日神様に文句を言われた。

神様と大魔王の顔が同じである事は事前に悟空に教えておいたので悟空が神様に

襲い掛かる事はなかったが、問題はその前だ。

Mr・ポポが悟空の未熟さを教える為に彼と戦ったのだが……何とここで強くなり過ぎた悟空は気の操作など知った事かとはかりにポポを返り討ちにしてしまい、しばらくポポが動けなくなってしまったのだ。

何はともあれ、これで神様に悟空が弟子入りし、ついでに神龍も復活するわけだ。悟空からはまたあのギプスを付けてくれとせがまれたが、適当に理由を付けて断った。

数日であれなのに、3年も付けたらマジユニアが殺されてしまう。

とりあえず修行に関しては完全に神様に一任し、リゼットは早々に自分の聖堂へ引き上げて行った。

悟空が神様の下で励み、マジユニアが自己流で色々頑張っている間、リゼットもまた新たな領域へ足を踏み入れていた。

日課のように続けている重力修行はとうとう100倍を克服し、150倍に突入。悟空の克服速度を思うと泣ける鈍間さだが、これで基礎能力はかなり高まったと自負出来る。

というか重力修行の克服速度が遅いのは服のせいだった。

リゼットの着ているケープドレスは合計200kgであり、リゼット自身の体重の4倍以上である。

つまり倍数にして実に500倍の重さを己に課してしまっていた。これでは克服が遅れて当たり前だ。

ついでに気の手枷&足枷も付けたままである。ちょっと自分を縛りすぎている。今、私どのくらい強い強さなんだろう、と少しだけ好奇心が疼いた。

まず重りを付けているから、本来の強さの……まあ7割くらいには落ちていると思う。

それとギプスもあるので、そこから更に1／3……くらい？　だろうか。

それでいて、今の戦闘力は多分10万以上はあるはずだ。神様の350倍くらいはあるし多分間違いじゃない。

というかそろそろ神様で計るの厳しくなってきた。戦闘力測定する装置が切に欲しい。

仮に自分を10万と仮定し、全ての制約を解除すると恐らく40万くらいだろうか。

バーストリミットも、身体を負担に慣らしたおかげで現在は10倍までいけるので……よし、大方の予測値が出た。大体フルパワーMAXで400万くらいだ。少し身体への負担が大きいが無理して20倍まで引き上げれば800万も夢ではない。

やった、私強い。凄い強い。フリーザ第3形態までなら倒せるぞこれ。

重力修行万歳！

『僕の戦闘力は1億2千万です』

そんな声が聞こえた気がした。勿論気のせいである。

うん、最終形態の前じゃゴミだねこれ。

やっぱりナメック星編のインフレ激しすぎる。8000だった悟空が帰って来る頃には1億5千万とか舐めてるのか。

「年齢から考えてこれまでのような急激なパワーアップは無理と判断した」とか言っていたドクターゲロさん涙目である。無理どころか1万8千750倍になって帰って来ました。

でも予測してなかったくせに、それより圧倒的に強い人造人間作ってたとか、あ

の人どうなってるの……？

あの爺さんこそ本物のチートだ。

結局この程度ではすぐ抜かされてしまうので、やはり休まず修練あるのみであった。

ついでに修練の傍ら、リゼットは時折神殿を訪れては悟空に足りない一般教養や常識、学問などを半ば無理矢理叩き込んだ。

結婚は食べ物ではない事を始めとして、文字の読み書きや小学生レベルの簡単な計算……とりあえずは九九をそらで言える程度までには何とか仕上げておいた。

また子供向けの絵本などを読ませる事で様々な事を学ばせ、彼の足りない知識を補完していく。

子供向けの絵本と馬鹿にするものではない。あれらは子供が飽きずに楽しみつづ、様々な事を学べるように考えた上で作られているのだ。

そうして、三年間は穏やかに過ぎ去っていった。

★

3年待ち、そして開かれた天下一武道会。

今回はリゼットも見逃す事なく、悟空の出発に合わせて彼と合流した。

勿論、万一に備えて仙豆はしっかり持ってきた。

この三年間で悟空は随分と男前に成長し、リゼットを驚かせた。

勿論知識としてこの3年でいきなり悟空が成長するのは知っていたが、この急変ぶりには驚くしかない。

実はサイヤ人は敵を油断させる為に一定の年齢までは幼児体型で、ある時期を境に一気に急成長するという特性があるのだが、残念ながらそれをリゼットは知らなかった。

そのまま悟空と談笑しながら一緒に会場に行き、ブルマ達と合流。

リゼットは参加する気0なのでここでブルマ達応援団の方に交ぜてもらった。

「よく下界に降りて来る天女様ね」とブルマに笑われてしまったが、ずっと山の上に居ても暇なのだから仕方ない。

ついでに顔は知っているものの自己紹介はしていなかったクリリン、天津飯、チャオズ、亀仙人とも自己紹介を済ませておく。

特に亀仙人とは亀仙人、鶴仙人、龍天女の3人で並び称されていたにもかかわ

らず本人同士の交流がゼロというおかしい状況だったので、話が弾んだものだ。

どさくさ紛れに胸をつつこうとしてきたのは……まあ、愛嬌という事で怒らないでおこう。

ブルマが代わりに殴ってくれたし。

観客席は、ランチさんが銃を乱射するまでもなく人々がモーゼの十戒のように割れて一番前を譲ってくれた。

リゼットが常時纏っている高位の存在っぽいオーラは健在だ。

こういう時だけは実に便利である。

何か観客の中の何人かが跪いたり拝んだりしてきて、少し鬱陶しいのを除けば、だが。

「リゼット様は参加しないんですか？」

「私、見ている方が好きですのよ」

ブルマの疑問は軽く流しつつ、試合を観戦する。

過去2回、共に決勝を見逃してしまったので今回は特に気合が入っている。

今この時だけは天女ではなくただの応援少女だ。リゼットは試合の流れに一喜一

憂し、童女のように盛り上がっていた。

悟空とチチの試合では二人の結婚にテンションが上がり、ヤムチャと神様の試合は失礼ながらヤムチャが股間を打って悶絶したシーンに笑い、天津飯VS桃白白は意外と格好よかった天津飯に思わず拍手を送ったり。

クリリンとマジユニアの試合はかなり喰らいついてみせたクリリンに惜しみなく賞賛を送ったり。

リゼットはそれはもう、試合をこの上なく楽しんでた。

「た、楽しそうだな天女様」

「落ち着いた方と思ってたから意外だわ」

ウーロンとブルマがそんな事を言っているが、不老といっても人間なのだ。

試合観戦したら盛りあがるし、楽しいものは楽しいのである。

しかしそんな楽しい気分も神様とマジユニアの試合で台無しとされる。

神様が魔封波返しで封印される直前に余計な事をほざいて下さったのだ。

「そ、孫よ！ こいつを倒して世界を救ってくれーい！

そしてリゼット！ 次の神はお前だ！ 後は任せたぞー！」

……アーアーキコエナ―イ。

何かお爺ちゃんが叫んでるけど、きつと聞き間違いだ。

そうしてリゼットが無視していると、神様が更に吸い込まれそうになりながら叫ぶ。

「聞こえとるのかリゼット！ 次代の神はお前に任命する！ 後は任せるぞー！」

何かお爺ちゃんが中々吸い込まれず、何か喚いている。

いいから早く封印されて下さいよ。後でちゃんと助けてあげますから。

マジユニアさんも神様の意外すぎるしぶとさに汗流してるじゃないですか。

そしてようやく神様の身体が瓶に入ったのも束の間、神様が首から上だけをしぶとく瓶の外に出し、また叫ぶ。

「こらリゼット、耳を塞ぐな！ お前が次の……むがっ!?」

飽きもせず何か喚いていた神様の頭をマジユニアが押さえ付け、無理矢理瓶に押し込めて蓋をした。

グッジョブマジユニア。マジグッジョブ。

リゼットは思わず親指を立ててサムズアップし、敵のはずのマジユニアを称えた。

一方のマジュニアは同情したような視線をリゼットに送り、そして呟く。

「……貴様も苦勞してるようだな」

「はい……そりゃあもう」

ここでちょっと気にかけてくれる辺り、やはり新生ピッコロは根っこの部分が悪人とは程遠いと改めて確信する。

まあ神様と分かれた悪の心は先代であって、このピッコロではないから不思議はない。

ナメック星人は元々善良であり、いかに記憶と力の全てを受け継がせようと、いかに生まれ変わりに等しい存在であろうと、それでも完全な悪になどなれないという事だろう。

「あの、リゼット様……今のは？」

「……その事について皆さんにお話しする事があります。悟空君と一緒に、一度会場裏まで来て下さい」

リゼットは額を押さえ、とりあえず状況の説明をするべく全員を招集した。

神様も全く余計な置き土産を残してくれたものである。

代替わりすべき相手はデンドデであって自分ではないというのに、どうしてこうなった。

「それで、どういう事か話してくれるのでしょいうな？」

場集まったうちの一人である亀仙人がリゼットへ問いかける。

今ここにいるのは悟空、クリリン、ヤムチャ、天津飯、亀仙人、ブルマ、チチ。

その7人の視線がリゼットへ集中する中、リゼットは言葉を選んで口を開いた。

「まず結論を先に言ってしまうと、あのマジユニアという者の正体はピッコロ大魔王です」

「な、なんだと!? 馬鹿な、ピッコロ大魔王ならば貴女が封じたはず! 俺は確

かにこの目で見たぞ!」

マジユニアの正体を語ると、まず真つ先に反論したのは天津飯だ。

そういえば彼もあの場にいたな、と思いながらリゼットは彼の疑問に答える。

「はい、確かに封じました。大魔王を封じた瓶は今も神殿の奥に厳重に保管されています」

「な、ならば何故！ まさか大魔王が二人いるとでも言うつもりですか！」

「そのまさかです」

あっさりとりゼットから帰って来た肯定に天津飯の言葉が止まる。

いや、彼だけではなく悟空を除く全員が信じられない、という顔になった。

当たり前だ。ピッコロ大魔王が二人だなんて話は聞いた事がない。

疑うのも無理はないだろう。

「大魔王は封印される直前に卵を残し、そこに自身の全てを託しました。だからその卵から生まれたマジユニアは大魔王の息子であると同時に大魔王そのものでもあるのです」

「ま、まさかピッコロ大魔王とは……こいつは厄介な事になりそうじゃない」

リゼットの説明で早く現状を察した亀仙人が唸る。

やはり武の神と呼ばれる男。普段はふざけていても、こういう時の察しの良さは頭一つ抜けている。

「し、しかし俺は見たぞ。今の魔封波でシェン選手から……」

「そうだ、シェン選手の身体からもピッコロのような奴が飛び出して瓶に吸い込ま

れた。後なんか、変な事を言っていたな……リゼット様が次の神様だとか……」

ヤムチャと天津飯が尤もな疑問を口にする。

出来れば神様の余計な発言は無視していてくれると有り難かったのだが、やはりそうはいかないようだ。

「あれはただの変なお爺ちゃんです。ボケててちょっと変な事を口走ってしまうんです。気にしないで下さい」

「いや、それは流石に無理がありますぞ」

「ですよー」

とりあえず駄目元で誤魔化しを口にしてみたものの、呆気なく亀仙人に突っ込まれた。

コホン、と咳払いをし、仕方ないので真面目に説明しようと気を取り直す。

「……あの方は大魔王ではありません。人間の身体を借りてピッコロと戦っていた神様です」

「か、神様だ?!?」

「神様とピッコロは元々一人の人間でした。しかし神になる時に悪しき心を捨て、

それがピツコロになってしまったのです。だから、どちらも相手を殺せば自分も死んでしまう……神様が大魔王を止められなかった最大の原因がそこにあります」

「なるほどな……そういう事じゃったか。相手を殺さずに倒すにはまさに魔封波はうってつけじゃ」

やはり最も早く察したのは亀仙人だ。

何故神様が魔封波を使ったのか、そして何故今更になって出てきたのかをあっという間に理解した。

普段からこれならば威厳もあるというのに、勿体ない限りだ。

そこで、ハツとしたようにヤムチャがリゼットを見た。

「あれ？ てことは……今はリゼット様が神様って事か？ 確か封じられる直前にそんな事を言ってたような……」

「……………」

自称荒野のロンリーウルフが激しく余計な事を口走り、リゼットは咄嗟に視線を逸らした。

いや、神様ってそんな簡単になれるものじゃないし。

あの神様だって神になる為に悪の心捨てたりと結構苦労してたのに口頭で伝えてはいお終いって、そんなのでいいのか。

と思うも、よく考えたらデンドもそうだった。

悟空に連れてこられて『今日からお前神様な』で終わりだ。

いやでも私、邪悪とまでは行かないけど普通に人並みの欲とかあるし、いいのかな。

……でもアニメオリジナルのガリックJr・編で出た歴代の神様達も結構自分勝手というか、どうしようもない人達だった気がする。

地球の一大事だっていうのに自分達の寝所に入られただけでひたすら神様を妨害し続けるとか頭悪いとは思えない。

そんな事を考え、やがてリゼットはこの話題をスルーする事に決めた。

「神様は魔封波で閉じ込められてしまいました、ピッコロから取り戻せば解放する事も出来るはず。悟空君、頼みますよ」

「ああ、任せておけ神様。オラが先代様を取り戻してやらあ」

「やめて！ 早くも呼び方変えないで!？」

せっかくスルーしたのに悟空が話題を戻してしまった。

しかも無情の神様呼びだ。

何これ、逃げ場なし？ もう私神様固定？

リゼットは何だか泣きたくなってきた。

「ま、まあ神様の後継云々は後で考えるところで……頼みますよ悟空君。ピッコロがわざわざこの大会に出てきたのも貴方を恐れているからです」

「その通りかもしれんな」

話しているリゼットの後ろから、ピッコロの声が割り込む。

気配で接近は既に感知していたが、他の皆は違うようだ。

驚く全員の前でピッコロは腕を組み、そして自信に溢れた声で言う。

「確かに孫悟空の存在は俺にとって邪魔以外の何者でもない。修行を怠けていた先代などよりずっとな」

「……貴方も既に先代呼びですか」

リゼットの抗議を無視し、あっさり神様を先代にしまったピッコロが笑う。
まさかの大魔王からの神認定だ。全然嬉しくない。

「だが今度は絶対に貴様の息の根を止める。そして修行をして力を付けた後はその神を殺し、俺様が世界を征服してやる。素晴らしい魔の世界が待っているのだ！」

意外と冷静に戦力分析をしていたピッコロに感心しつつ、自分のせいでせっかくの台詞が微妙にしょっぱくなってしまった事を申し訳なく思う。

ほら、クリリンとかヤムチャがこっち見てる。

『いざとなれば、新神様で倒せるんじゃないかねこれ？』みたいな顔してる。

「言っておくが今度のピッコロ様の实力は3年前に一撃でのされた父とは比べ物にならないぞ！」

「オラだってあの時より気の扱いが上達してるんだ。負けはしねえさ」

しょっぱい。会話がしょっぱい。

リゼットは何だかいたたまれない気持ちで一杯だ。

3年前に鍛えすぎたせいでピッコロの台詞が悲しい事になっているし、悟空も3年前とあまり強さが変わっていない。

ちなみに二人とも強さにして神様の倍くらいの気は感じる。

つまり数値にして大体600前後という所か……ピッコロさん凄い頑張ってるなあ、と感心した瞬間だった。

ピッコロ「寝る間も惜しんで血反吐を吐きながら原作以上の猛特訓をして追い付いたぞ！」

リゼット「……なんか、その……ごめんなさい」

ピッコロさんはやれば出来る子。

【Mr・ポポの戦闘力】

ポポの戦闘力は1030と言われるが、これはサイヤ人編以降の数値。

初登場時のポポは『神様ももっととすごい』と言っており、この時点では神様
＞ポポ。

彼の戦闘力に関しては、サイヤ人襲来に備えて戦士達を鍛えているうちに自分も強くなったと考えるのが自然。

もっとも彼はアニメで超サイヤ人の悟天とトランクスの二人がかりの攻撃を防い

だりしているので底が見えない部分は確かにあるが……。

【悟空の数学力】

原作、Z、GTなどでは計算をしている描写がほばない為に不明だったが、『超』でとりあえずペーパーテストでギリギリ50点を取れる程度の学力がある事が判明した。

ただしこのテストで出た問題は小学生低学年レベルであり、加えて悟空は漫画版で指を使って数字を数えていたので彼の学力は小学生の1年生か、よくて2年生レベルであると考えられる。

二桁の足し算と引き算をギリギリ出来るくらいだろうか。

このSSではとりあえずリゼットが四則演算までは覚えさせたので、小学校6年生レベルまで上がっている。

三桁くらいなら暗算もいける。元々の地頭は悪くない。

【読み書き】

アニメの方の『超』でチチからお使いを頼まれた際、渡されたメモには文字ではなく絵が描いてあった。

この事から悟空は読み書き出来ないと誤解されるが、上記の通りペーパーテストで50点を取り、一応自分の名前もちゃんと書けているので最低限の読み書きは可能。

(もし悟空が読み書き出来ないとすると、そもそも第六宇宙との試合に出る事すら不可能だった)

ついでに幼少期には亀仙人の修行で官能小説を読まされた事もある。

このSSではとりあえずリゼットが小学生卒業レベルの漢字の読み書きまでは叩き込んだ。

ちなみに何故チチがお使いでわざわざ絵を描いたのかは不明。

悟空は文字を読めないと思いついているのかもしれない。

第十二話　オラの悟飯をかえセッ!!（前）

☒　あまりにも同じ感想が続くので、新規読者の方が同じ疑問を抱かないように2話の後書きに少しだけ追加しておきました。

サイヤ人オリ主は……高性能すぎて逆に使いにくいんですよ……。

悟空とピッコロの戦いは無事、悟空の勝利に終わった。

途中何度かハラハラさせられる場面もあったが、終わってみれば勝つべくして勝ったと言える。

ピッコロが苦し紛れに放った口からビームもしっかり避け、文句のない完勝であつた。

将来発症し、GTで悪化の一途を辿る悟空の舐め癖を今のうちに矯正出来ないかと、最後まで油断しないように言い聞かせておいたのがよかったのかもしれない。そして皆が解散し、ひとまず地球の危機は去った。

それはいい……それはいいのだが……。

「リゼットよ。儂はこれから先代として隠居する。ドラゴンボールは残しておくから心配はするな」

「あの、ちょっと待ってください。無事に助かったんですから、無理に私に譲らずとも……」

「いや、儂は今回の件で力不足を痛感したのだ。これからの地球にはお前のような強き神が必要だ」

結局リゼットは、神の後任にされてしまう事は避けられなかった。

これに伴い、神様——いや、先代は今までリゼットが住んでいた聖堂に移り住み、逆にリゼットが神殿に住む事となってしまった。

やけに豪華な建物を作るなどとは思っていたが、もしかして最初から自分が暮らす気だったのだろうか。

だがそれだけでは終わらず、先代が更に言葉を重ねる。

「まず、神としての権限をお前に譲る。これにより、お前は地球上であればどこでも転移出来るようになり、あの世とこの世を自由に往き来可能にもなるだろう。更

に、地球上であれば自分以外の他者をも運ぶ事が可能だ」

結構便利な能力である。

そういえばこの人、悟空をあの世に運んだりしてたな、などと思いつつ続きを促す。

「それから、就任の挨拶だな。まずは農と一緒にあの世に向かい、閻魔様に顔見せをせねばならん。そこで正式に地球の神として認められるのだ」

さあ行くぞ。

そう言う先代を後ろから蹴り飛ばしたい衝動に駆られつつ、リセットは彼の後に続く。

後でどうせデन्दに譲る事になるだろう立場だが、とりあえずここで閻魔様と知り合っておくのは決して損ではないはずだ。

あの世に行くと言魔から「お前地球の神にしては戦力ありすぎじゃね？」と文句を言われたり、「界王様より強い辺境の星の神とかないわー」とか言われたりしながらも初顔見せを終え、その後は引越した。

聖堂から重力室と私物を移動させ、ついでに兎人参化とその部下達も神殿の小間

使いとして移動させる。

普通の兎達はそのまま聖堂に残したが、先代はまんざらでもなさそうに面倒を見ているので問題はないだろう。

ミスターポポには何か言われるかと思ったが、彼はあっさりと神の代替わりを受け入れた。

「新しい神様来てポポ嬉しい」

彼はもしかして神様なら誰でもいいんだろうか、と少し思ってしまった。

ついでにカリンにもこの事を伝え、まさかの立場逆転にカリンは何とも言えない顔をした。

とりあえず挨拶としてマタタビをプレゼントしたらゴロニャンしながら床を転がっていたので、そのまま放置し神殿へと戻った。

神殿暮らしを始めて、まずリゼットが行ったのは神殿の奥に安置されていた地球破壊爆弾……もとい究極のドラゴンボールの処分だった。

これは大魔王と分離する以前の先代が作り出したものであり、通常のドラゴン

ボールとは比較にならないパワーを持つ。

GT 時点での悟空すら子供に変えてしまうのだから、そのパワーははっきり言ってリゼットに制御し切れるものではない。

ましてや願いを叶えれば、その惑星を1年後に破壊する上に宇宙中に散らばるという嫌がらせとしか思えない特性まで秘めており、遠慮なく言ってしまうがこの世に不要としか言えない物体だった。

今はただの石だが、ピッコロと先代が融合すればこれは必ず復活する。

故にリゼットは、7つ存在する玉のうち3つを持って精神と時の部屋に入り、力の限り全力投球してこれを放逐した。

精神と時の部屋は地球と同じ広さを持ち、それでいて変わり映えのしない白い空間のみがどこまでも続く。

そこに放り投げてしまえば、もうリゼットすらどこにあるか分からない、という寸法だ。

もしピラフ一味が入り込んでも、発見すら出来ずこの部屋の過酷な環境に耐えられず死ぬか、生き延びても帰れず部屋に閉じ込められるだろう。

要するにこれで、誰も究極のドラゴンボールを使えないというわけだ。

あえて3つしか放逐しなかったのは、万一、億が一にも誰かが偶然中で揃えてしまうのを阻止する為だ。

精神と時の部屋に3つ、外に4つ。これを揃えるのは限りなく至難だろう。

それから1年。

以前から研磨していた元氣玉モドキをようやく完成させる事に成功した。

地球中のあらゆる生物、植物からほんの少しずつ気を分けてもらい、己へと蓄積していくこの技を使えば不思議と腹も空かず、試しに何日か食事を摂らずに不眠不休で行動してみたが、まるで疲労する事がなかった。

ほとんど植物と同じと云っていい。

何も地球に限定せず、太陽の気を少しわけてもらうだけで活力を得る事が出来る。流星に水くらいは飲むが、この力を得てからというものの食事也不要になり、トイレに行く事もほとんどなくなったのは得といってよいだろう。

……いや、うん。これ元氣玉じゃないじゃん。

リゼットは途方に暮れた。

やはり実物を見もしないで記憶だけで真似るのは無理があった。

界王拳の時もそうだったが、今回も同じ失敗をしてしまったわけだ。

懲りない少女（260歳）である。

一応自分に気を集める事は出来るので、劇場版で悟空がやったみたいに己に気を取りこんで自分を強くするドーピング的な使い方は可能だ。

というかそれしか出来ない。玉として発射とかどうやればいいのか、皆目見当もつかない。

もういつその事あの世経路で界王星に行く事も検討に入れるべきだろうか。

そのような事を考えながら、リゼットはこの新しい技の錬度をとりあえず上げる事にした。

★

神として神殿に暮らすようになって4年目。

時々訪れる悟空に修行をつけたりして生活しつつ、案外ここも悪くないんじゃないかとリゼットは考えていた。

重力室はこちらに持ってきたから修行環境は悪くなっていないし、むしろこの神

殿だからこそ可能な修行というものがある。

その一つが『時の部屋』だ。

名前こそ似ているものの精神と時の部屋とは異なり、この部屋で出来るのは精神のみの時間跳躍である。

己の精神を過去へと飛ばし、そこで過去の人物達と戦う事が出来るのだ。

一体どうやって精神のみの移動で過去に肉体を出しているのかは分からないが、恐らくは肉体の強さを再現した質量を持った幻のようなものだろう。

これを使い、リゼットは己の精神を過去に飛ばす事で擬似的な実戦経験を積んでいた。

修行抜きにしても、過去への旅は魅力的だ。

何よりこれは、惑星間すら越えた旅も可能としてくれる。

いつか宇宙を旅したいと願うリゼットにとって、この時の部屋はまさに最高の娯楽施設であった。

目を閉じ、時の流れに心を委ねる。

時の旅は一瞬の間に起こる出来事で、実際には時間の経過がない。

そして仮に向こうで死んでしまったとしても実際には傷一つ負わないと、いい事尽くしだ。

一方で精神と時の部屋は未だほとんど使っていない。

究極^{地球破壊爆弾}のドラゴンボールを放逐する際に一度訪れたが、それは部屋の時間にして僅

か30秒の出来事。

中に入って、玉を投げて、部屋を出て。本当にそれだけだ。

これはほとんど使用していないも同然の事であり、外から見ればリゼットが入ったと同時に外に出てきたようにしか見えなかっただろう。

いつかはリゼットもこの部屋を使う事になるのだろう。

しかしそれは今ではない。

少なくとも今、リゼットが精神と時の部屋を使うほどの脅威はこの地球に存在していないかった。

——もっとも、使うまでもない程度の脅威ならばいるようだが。

「リ、リゼット……」

「先代様？ 一体どうしたんです？」

以前までリゼットが暮らしていた聖堂と、この神殿は繋がっている。

だから先代はいつでも神殿へ訪れる事が出来るし、その逆も然りだ。

しかしリゼットの記憶にある限りでは、彼女が神に就任して以来の四年間、先代がここまで血相を変えて神殿を訪れた事はなかった。

彼は胸を苦しげに押さえ、激しい発汗を起こしながら、今にも倒れそうによりめいている。

余談だが、以前は『神』だった胸のマークは『先』に変わっていた。

「ピ、ピッコロがやられた……過去の因縁が、牙を剥いてきたのだ……」

「ピッコロが……? その様子からするに、殺されてはいないようですが、手酷くやられたようですね……。ともかく、まずは落ち着ける場所へ行きましょう。横になった方がよさそうです。Mr. ポポ、先代様を寝室へお連れしなさい」

「はい、神様」

先代の話を要約するとうだ。

今より300年前、リゼットが生まれる40年昔の事。

かつて神の座を競い、先代に敗れた者がいた。

名をガーリックといい、多大な野心を身に秘めた男だったらしい。

しかし先々代の神はその野心を見抜き、先代を神へと選んだ。

無論それで終わるわけもなく、ガーリックは先々代に反逆し、そして討たれたらしい。

『300年後に必ず復活する』と断末魔をあげながら……。

「……そのガーリックという者が、復活したと？」

リゼットは先代へと気を送り、治療をしながら問いかける。

随分と気の長い復活もあったものだ。

というか何故300年なのだろう。わざわざ時期を指定するのに何か理由でもあるのだろうか。

「恐らくはな。今この地球にいる者でお主と孫悟空を除けば奴しかピッコロを害し得る者など存在せん」

リゼットは思わず、既に製作が開始されているであろう人造人間や、封印されたまま迷惑にも地球に放置されている魔人ブウを想像する。

以前に戦ったDr・ウイローの件もあるし、案外今のピッコロくらいなら倒せるの
沢山いるのでは？ などと思ってしまうたのも仕方ない事だろう。

というか、Dr・ウイローが造り出した量産型やられキャラのバイオマンですら戦
闘力は1000を超えている。やはりあの男の科学力はおかしい。

「一応、探ってみましょうか」

「頼む」

目を閉じ、遠視を行う。

気を探ってみれば確かに4つ、異質で大きな気がこの地球にいる事が確認出来
た。

大きい、と言ってもそのうち3つの気はピッコロ以下だ。

頑張れば多分天津飯でも勝てるだろう。

残る一人は流石にピッコロや悟空を上回っている。

そこに焦点を絞り、視界を飛ばす。

すると確かに、魔族と思しき……というかどうかというピラフの親戚のよう
な小柄な男が一人、ドラゴンボールを集めて高笑いしているのが視えた。

というかあれだ。これ、かなり初期の方の劇場版の敵だ。

リゼットはここにきてようやく、その存在感の薄い敵の事を思い出した。

ああそうだ、いたいた。こんなの確かにいたよ。

まるで敵だけ取り換えて、ラディッツ戦の焼き直しを行ったかのような敵が確かにいた。

しかし実の所、リゼットにとってこんな敵などどうでもよかった。

『ああ、そんなんいたね』程度の存在であり、言い方は悪いが羽虫と何ら変わらない。

リゼットがその気になればいつでもペチッと潰せてしまう存在だ。

問題はドラゴンボールである。

確かドラゴンボールは使い過ぎるとマイナスエネルギーが溜まり、邪悪龍が生まれてしまうはずだ。

その浄化には100年の周期を必要とするため、以前にリゼットが叶えた願いのマイナスエネルギーなどはとくに時効を迎えて消滅している。

しかしこれから先は違う。悟空やその仲間や、あるいは敵が気軽にポンポン使う

せいで100年の浄化どころではなくなってしまうのだ。

確かGTはアニメオリジナルや、一部の劇場版までカウントされている歴史のはずなので、物凄い頻度で使われている事となる。

特に劇場版は酷い。1公開で一度使われているような勢いで使われる。

酷い時は山火事で焼けた山を元に戻す為に使用し、挙句やっぱり森は破壊されて無駄撃ちに終わりましたというパターンすらあった。

そりゃ邪悪龍も生まれるというものである。

一応神に就任した後にドラゴンボールを集めて、精神と時の部屋に100日間放置してマイナスエネルギーを浄化させてから地上に戻したが、それでもアホみたいな理由でポンポン使われては邪悪龍がすぐに発生してしまうだろう。

「あー……うん。確かにいますね。ドラゴンボールを集めてるお馬鹿さんが4人。何故か悟空君の息子さんを誘拐して、無駄に悟空君を引き寄せているようです。名前は……ええと、読めました。ガーリックJr.に、ジンジャー、ニッキ、サンショ……どうやら本人ではなく息子さんのようですね」

「息子に穢れた野心を引き継いだか……親が親なら、子も子よな」

リゼットは遠視をしつつガーリックJr・達の心を読み、ついでに彼等独自の技の使い方などを盗み見していく。

そのほとんどは魔族由来の使い物にならない技だが（肉体を剣に変化させるなど）、ガーリックJr・が使える『デッドゾーン』という技だけは中々優秀だ。

これは一切の光が届かない虚数空間に相手を放逐するブラックホールのような技で、飲み込まれたが最後、術者本人すら脱出出来ないらしい。

……どう見ても不老不死になった後の自滅専用技です。本当にありがとうございます。

前言撤回、少し改良して使う必要があるそうだ。特に自滅部分はどうにかしないと危なくて使えたものじゃない。

「それで、どうするのです？」

「無論、過去の決着を付けねばならん。リゼットよ、共に来てくれぬか？」

先代の言葉に、『ああやっぱり巻き込まれる流れなのか』と思いつつ、リゼットはその頼みを了承した。

とりあえずドラゴンボールの無駄な使用は防いでおくべきだろう。

ガーリックはどうでもいいが、邪悪龍は出たら困るのだ。

ちなみに、原作ではガーリック三人衆が不意打ちの三人がかりでピッコロさんを倒しましたが、このSSの世界ではピッコロさんが三人を返り討ちにしかけたので、慌ててガーリックJr.も参戦しての4人がかりで倒しています。

【オラの悟飯をかえセッ!!】

ドラゴンボールの劇場公開作第4弾。ドラゴンボールZとしては1作目に当たる劇場版アニメ。

悟飯がおり、悟空が生きるのでラディッツ戦の前の出来事と思われるが、悟飯とクリリンに面識があるなどラディッツ戦後と思われるような描写も存在する。この映画のボスであるガーリックJr.は後にアニメオリジナルで再登場したので『Z』の世界線ではパラレルではなく、がっつり本編に組み込まれている。

【ガーリックJr.】

300年前に神の座を争い敗れて封印された、ガーリックの息子で生まれ変わり。ピラフの親戚のような外見だが関係性は不明。

アニメで再登場した時は何故か声までピラフと同じになっていた。

もしかしたらピラフはガーリックの子孫なのかもしれない。

物語序盤でピッコロを亡き者にする事で神を殺そうとしたが、神が死ぬとドラゴンボールが消えるので実はこいつの計画は最初から破綻している。

そんな穴だらけの計画でも何故か神龍で永遠の命を手に入れ不死身になる事に成功してしまった。

しかし律儀にも自滅専用技の『デッドゾーン』を習得していた事で敗北。

ただ不死身になるだけではなく、その後の対処法まで自前で用意してくれるサービス精神に溢れたナイスガイ。

そればかりか、再登場時も不死身に胡坐をかかずに前回の敗因であるデッドゾーンを惜しげもなく使ってくれた。

不死身なので勝ちはずともデッドゾーンさえ発動しなければ絶対に負けないのに、それでも使ってくれる。こいつは偉い。

どこかのザマスと違ってお約束をしっかり理解した悪役の鏡。

【ジンジャー】

ガーリックの部下の一人。

生姜焼きと叫ぶ事で何故か巨大化する。

パンフレットに記された戦闘力は350。

【ニッキー】

ガーリックの部下の一人。

喉飴と叫ぶだけで何故か巨大化する。

パンフレットに記された戦闘力は350。

他の二人が生姜焼きやうな重を叫んでいる中、一人だけ喉飴で我慢している偉い奴。

【サンシヨ】

ガーリックの部下の一人。

うな重と叫んで巨大化する。

こいつだけやけに掛け声が贅沢。喉飴で我慢している上の奴を見習え。

マントを付けたままのピツコロにフルボツコにされたがパンフレットに記された戦闘力は350。

ちなみにマントを着ている時の当時のピツコロは322。

戦闘力で勝ってるはずなのに「1人ずつでは他愛もない奴ら」とまで言われて雑魚扱いされてしまった。

戦場でうな重などと叫ぶハングリー精神のなさが敗因と考えられる。

第十三話 オラの悟飯をかえセッ!! (後)

カメハウスより南方。

紅海の中央に聳え立つ宮殿がある。

その場所こそ、かつて先々代の神に反逆したガーリックの息子であり、そして神への復讐を誓うガーリック Jr. の宮殿だ。

部下のジンジャー、ニッキー、サンシヨを従え、まず当面の目的として狙うのはドラゴンボールによる不老不死の実現。

先代の神を討つのに、彼自身が生み出したドラゴンボールを使う。これほどの皮肉があるのか。

ボールは既に6つ集め、後は一つで不老不死が実現する。

そうして決して死なぬ永遠を得てから憎き先代の神、さらに今代の神をも始末し、世界を手中に収めるのだ。

「後一つでドラゴンボールが揃い、俺は永遠の命を手に入れる。そうなれば俺はもう死ぬ事がない。永遠にこの世界を支配し、全てを地獄へと塗り替えるのだ!」

己の野望を声高らかに叫び、部下の3人がそれに合わせて平伏する。

魔族が支配する世界がすぐそこに来ている。

今代の神は歴代の神の中でも特に飛び抜けた力を持つらしいが、それでも永遠の命には敵うまい。

だが、彼は一つの失敗を犯した。

永遠を欲してドラゴンボールを集めるなら、まずはそれに終始すべきだった。

ピッコロ大魔王に手を出すべきではなかったのだ。

確かにピッコロと先代は一身同体、ピッコロを殺せば先代も死ぬ。

しかし一身同体故にピッコロの身に何かが起これば先代にそれを知らせるも同義であり、仕留め切れなかった時のしっぺ返しは大きい。

彼はそれを失念しており、そしてまさに今、その代償を払わされようとしていた。「永遠の地獄ですか。それは穏やかではありませんね」

光の柱が天より降り注ぎ、ガリックJr.達の前へと突き刺さる。

その中より現れたのは、よく知る憎き先代の神。

そして白いケープドレスを着こなし、淡く輝く白の女神。

今代の神——リゼット。

2 柱の神が孫悟空に先んじて、ドラゴンボールが集まるよりも早くこの宮殿へと乗り込んできたのだ。

「先代の神と……今代の神か！ ちいつ、忌々しい……もう少しで永遠の命が手に入ったものを！ ジンジャー！ ニッキ！ サンショ！ やれい！」

ガーリック Jr. の号令に従い、配下の3人衆が飛びかかる。

だが先代は動じず、リゼットだけが前へと出る。

しかし前に出るだけで何の構えもなく、ただ一言、『命令』を告げた。

「*Mor^死tes^よtres[、]pers^三on^っan^在e^れibi*」

瞬間、三人衆は音もなく崩れ落ちた。

その顔には生気がなく、白眼を剥き、二度と動く事はない。

死んでいる——ただ一言、『死ね』と命じられただけで死んでいるのだ。

この手品の種を明かしてしまうのなら、何て事はない。

格上に通じない事に定評のある超能力の一つ、金縛り。

それを全身のみならず、脳と心臓にまで与えて強制的に絶命させた。

それだけの事であり、わざわざラテン語で発した命令には実の所何の意味もない。かめはめ波を実は無言で撃てるのを、あえて気合を入れて「かーめーはーめー波ー！」と引き伸ばししが酷い時は数分かけて叫ぶのと同じであり、単なるリゼットの気分出しでしかなく、実は何も言わなくても使える子供騙しだ。

知識の中にあつた『デビルマンG』のダンテの技が格好よくて神様っぽかったので真似て再現してみただけのリゼットの遊びである。

しかしそんな物でも、やられた側にすれば驚愕に値するだろう。

事実ガリーリック Jr. は何が起こったかも認識出来ず、ワナワナと震えている。

「無駄だガリーリック Jr. ……今代の神は儂や歴代の神とは比較にならぬ力を持つ、宇宙からの危機に対抗する為の戦女神。お前如きがどう背伸びしても太刀打ち出来る相手ではない」

何もしてないのに何故か偉そうな先代が威厳に満ちた声で告げる。

しかも勝手に戦女神にされている。

どちらかというと旅の神とかの方がリゼット好みの呼び方だ。

「だっ、黙れえ！」

やはりというべきか、言葉で引き下がるガーリックJr.ではない。

全身の筋肉が膨張し、今までピラフ並の身長しかなかったものが、一瞬にしてマッシヴな巨漢へと変貌した。

しかし悲しいかな、戦力に差がありすぎる。

殴りかかってきた巨腕はあっさりとリゼットに指先一つで止められ、軽く指で弾いただけで5回、6回転して地面に這い蹲った。

「馬鹿な、こんな、こんな事が……」

実力の差は既にこれ以上ない程に思い知っただろう。

それでも尚諦め切れないのは流石というべきか、引き際を知らないというべきか。ガーリックJr.は憎悪に曇る視線でリゼットを睨み、そして手を上空へと掲げる。気が高ぶり、何もないはずの空間に黒い虚無が生まれ、何もかもを飲み込もうとする。

ガーリックJr.の切り札であるデッドゾーンだ。

こうして実物を見ると、まさにブラックホールそのもの。上手く使えば実力の及ばぬ相手であろうと倒せる可能性を確かに秘めている。

だが――。

「無駄です」

「ぐがあっ!？」

ガーリック Jr. を見据え、無動作からの気合砲を放つ。

手を振るう必要すらない、睨むだけで発動するノーモーションの便利な技だ。

すると見えざる気の圧力が彼を弾き、彼自らが生み出したデッドゾーンへと吹き飛ばした。

確かにデッドゾーンという技自体は格上殺した。上手く決まればリセットだろうと倒す事が出来る。

しかしそれを扱うガーリック Jr. が強くなるわけではなく、実力に差があれば飲み込まれるより先にガーリック Jr. をデッドゾーンに叩きこむという勝ち方が出来てしまう。

「おのれっ！ おのれええええええ!!」

結局の所、運命なのだろう。

ガーリック Jr. は悲鳴をあげながらデッドゾーンへと吸い込まれ、そして術者が

消えた事によりデッドゾーンも解除された。

後は主を失った宮殿の残骸が残るばかりだ。

リゼットは顔にかかった己の髪を指で払いのけ、小さく溜息を吐く。

それから超能力で6つのドラゴンボールを世界各地へと飛ばし、後片付けとばかりに宮殿跡を消して更地へと変え、そこに植物の種を適当に撒いて気を与えた。これで数ヶ月もすればここは森に変わり、以降は多くの動物を育んでいく事だろう。

そうしてやる事のなくなったりリゼットは眠っている悟飯を抱え、ここに向かってきた悟空と合流。彼の息子が無傷で引き渡した。



リゼットが神の座を継いでより5年。

地球は気が抜けそうなほどに平和な日々が続いていた。

先代より神としての業務を学んだり、天気をバランスよく変えたり、修行したりと色々してはいるが慣れればどれも楽なものだ。

ガーリックJr.からパクったデッドゾーンも改良を進め、そろそろ使い物になる

という所までは漕ぎ付けている。

技名は——まあ、ヘブンズゲートとかでいいだろう。

デッドゾーンと魔封波の合わせ技で、対象を吸い込んであらかじめ用意した封印の壺の中に入れてしまうというものだ。

要するにただの道具無し魔封波とか言っただけじゃない。作るのに苦労したのだ。一応送り先の封印壺は天命石でポポに作らせた特別製で、簡単には壊れず、また邪悪な気の持ち主以外は封印されてもすぐに出られるようにしてある。

これで万一自爆してしまっても大丈夫というわけだ。

また、この技は改良の結果空間移動としても使用可能になり、リゼットが一度行った場所……というよりは、座標を覚えている場所ならどこでも行けるどこでもドアとしても利用出来るようになった。

まあ、瞬間移動のようにすぐに移動出来るものではなく、咄嗟に使えるものではないので戦闘中の回避行動などには全く役に立たないのが難点だが……移動用と割り切れればそこそこ使えない事もない。

それと並行してリゼットは、いずれ来る地球の危機に先んじて戦士を育てるとい

う試みを始めていた。

といっても、その対象は現在Mr・ポポと兎人参化の二人だけだ。

他にはナムやチャパ王も一応候補として考えたのだが、どう考えても途中で年齢による劣化が入り、使い物にならなくなるのでスカウトはしなかった。

Mr・ポポと兎人参化は一応、現時点でも悟空やピッコロと同等程度には強くなっている、もう少し修行すればサイヤ人との戦いにも投入出来るかもしれない。特に兎人参化は触れるだけで相手を人参にしてしまうので、格闘戦が成立する程度のレベルならば基本的に必勝だ。

ドラゴンボール特有の格闘戦なぞしようものなら、その瞬間彼の勝ちが確定する。一方でヤジロベーは……もう諦めた。

それによく考えれば、彼がいる事で仙豆が激減してしまうので、これはこれでよかったのかもしれない。

カリン塔の仙豆は未だ全く減っておらず、これから1年後にはわずか2粒になってしまふなど考えられない事だ。

要するに、そういう事だ。

本来の運命で仙豆があれだけ減ってしまったのは結局ヤジロベーが原因だったのだろう。

仙豆は一粒食べれば10日は食べなくても済むほどに栄養満点だ。

しかしヤジロベーが原作でカリン塔に住み着いてからサイヤ人編までは実に10年近くの時間が経過している。

10日に一粒食べると計算しても、サイヤ人編までに365粒は食べてしまう計算だ。無くなって当たり前としか言えない。

それをリゼットが変えてしまったものだから、この世界では仙豆が余るほどに残っている。

時々カリンがおやつとして食べているが、それでも無くなる気配がない。

準備は万端とっていいだろう。

そして、運命の歯車を回す孫悟空の兄も地球へ訪れたようだ。

とりあえずリゼットが気を抑えて地上を観察していると、まずラディッツはピッコロのもとへと赴き、その後に悟空の所を訪れて悟飯を誘拐した。

それに対し悟空はピッコロと共同戦線を張り、ラディッツと戦う事にしたようだ。

ここまでは運命通りだ。リゼットの知る内容と一致する。

しかし戦いの内容がおかしかった。

ラディッツが妙に強い。

悟空とピッコロを圧倒し、更に怒りを爆発させた悟飯の突撃すらも回避してしま
う。

今の悟空とピッコロは同時期の原作よりも強い。なのにラディッツが優勢に進め
ている。

これは妙だ、そして何より不味い。

悟飯から受けたダメージがないと悟空では抑え込む事など出来ない。

となれば、倒す事が出来ないのだ。

「私がいるせい……？ 運命がズレてしまっている？」

リゼットは背筋に冷たいものを感じていた。

明らかに運命の歯車がズレている。

自分はラディッツに対し何かした覚えなどないが、バタフライエフェクトという
言葉もあるように、ちょっとした行動が未来への影響を与えかねない。

ともかく、このまま傍観しているのは不味い。

リゼットは即座に超能力を発動し、遠く離れたラディッツの動きを制止する。

確かに多少は強くなっているが、それでもリゼットならばまだ余裕で封じ込める事が出来るレベルだ。

（さて……彼には悪いですが、そろそろ倒れて頂きましょうか）

リゼットの黄金の瞳が鈍く輝き、ラディッツの心臓を圧迫した。

何をする気か——そんなものは問われるまでもない。

彼はサイヤ人の脅威を悟空達に教えた。一年後にさらに強いサイヤ人が来る事も語った。

これで戦士達は危機感を抱き、爆発的に強くなる事だろう。

後は悟空が界王星で修行を積むだけだが……これは別に死ななくとも出来る。ドラゴンボールを使い、悟空を界王星へ転移させてしまえばいい。

界王星はあの世から続く場所にあるが、しかし決して別次元にあるわけではない。瞬間移動で到達できる事からも分かるように、この宇宙のどこかに存在している惑星だ。

ならば悟空を見殺しにする必然性はない。

ラディッツをここで潰し、ドラゴンボールで悟空を生きたまま向かわせる。

リゼットだけならばドラゴンボールなど使わずとも生身で界王星まで行く許可が降りるだろうが、流星に神でもない悟空が生きたまま向かう許可は降りない。

故にドラゴンボールをここで使う。本来ならば悟空を蘇生する事に使うはずだった願いを前借りする形だ。

そして帰りは……まあ、こちらは悟空に自力で頑張ってもらおう。

その判断のもと、リゼットはラディッツを葬るべく念力を強めた。

しかし、それと同時に下界から突如として紅い気功波が飛来した。

「っ！」

リゼットはこれを咄嗟に避ける事が出来ずに被弾してしまった。

吹き飛ばされ、空中で回転して何とか着地する。

一方地上では悟空がラディッツを羽交い絞めにし、ピッコロが魔貫光殺砲で悟空諸共ラディッツを撃ち貫いていた。

これで本来の運命通りになってしまったわけだが、しかしリゼットはもうラディツ

ツを見てはいなかった。

そちらに目を向けている余裕などなかったからだ。

悟空達から少し離れた位置。

そこに見慣れぬ——恐らくは魔族だろう妖艶な女が立っている。

赤いボンデージのような衣装に身を包んだ、白髪青肌の女。

手には杖を持ち、隣には同じく赤い衣装の体格のいい男が佇んでいた。

男は掌をこちらに翳しており、今の攻撃は彼が放ったものだと分かる。

直後に何処からともなく現れた仮面の……気のせいかわ悟空とよく似た髪型の男が

魔族の男へ殴りかかり、高速で戦闘をしながら何処かへと消えてしまった。

あの二人は一体……見覚えはないが、只者ではない事は確かだ。

……見覚えがない？ 本当にそうか？

否、あの二人の魔族とはどこかで会っているような……。

彼女はこちらの視線に気付いたのか、微笑を浮べるとまるで最初からいなかったかのように姿を消してしまう。

今のラディッツの変貌は間違いなく彼女によって起こされたものだ。

だが何の為に? 何が目的で?

(おかしい……あんなのは私の知る記憶の中にいない。一体何が起こっているというのですか)

リゼットは、かなりドラゴンボールに詳しい方だと自分では思っている。

原作は勿論として無印やZ、劇場版、GT、更にはゲームまで網羅している。

アニメオリジナルの細かい所は流石に怪しいが……まあ、ほぼ知らないキャラクターはいないレベルだ。

その中には魔人オゾットというファンでもあまり知らないようなマイナーなゲームのオリジナルボスや、フリーザに吐息だけで殺されてしまったアニメオリジナルの戦闘タイプのナメック星人まで含まれている。

リゼットの前世は2012年で死亡しており、知識もそこまでで途切れている。だが、それでもテレビシリーズ最終作である『GT』から15年経っており、ドラゴンボールを知る上では十分だろう。

それこそ、十五年以上経った後に再ブームが始まって新シリーズや新作ゲームが登場していない限りは、リゼットの知らない相手などいないはずだ。

だがそんな彼女でも、あの魔族二人には全く心当たりがない。

得体の知れない存在の出現。

その事にリゼットは、心がざわめくのを止める事が出来なかった。

・ちなみに、無情な話だが結果的にはここで悟空が死んで正解。

リゼットのプランは例えるならばカリン塔を登らずに飛行機でカリン様の所まで行くようなもので、初対面でこんな事をやって修行を付けて貰えるかは疑問。

てゆうか多分無理。

蛇の道はただ長いだけの道ではなく、界王の修行を受けるに相応しいかを試すテストである。

かといって神龍に頼んで蛇の道の前に悟空を移動させても、それはそれで閻魔の許可を取らずに無断侵入している事になるので、やはり問題。

結局の所、ソウルジェムが魔女を生むなら悟空が死ぬしかないじゃない！

【もし悟空が生き残ったら】

悟空がラディッツ戦で生存するIFルートは『強襲!サイヤ人』ゲームで見る事が可能。

悟空が生きたままラディッツを倒すと神様が現れ、1年後にやってくるサイヤ人を倒すには界王様の所で修行するしかないと教えてくれる。

その際の台詞がこちら。

かみさま「よく たたかった! しかし 1ねんごに

やってくるサイヤじんの つよさは

そうぞうをぜつする! そこでだ・・・」

かみさま「ゴクウよ! おぬしを カイオウさまの

もとにおくり しゅぎょうをしていたかどうかと

おもうのじゃ! カイオウさまはぜんうちゅうの

かみさまの ちようてんに たたれている

おかただ! さいごの のぞみなのじゃ!」

かみさま「ただし そのためには ゴクウよ!

しなねばならんのじゃ！ しんだものしか

カイオウさまのもとへ いけぬのだ！！」

!?

そして ゴクウは みずからの いのちをたち

かみさまとともに あのよへむかった・・・

!?

第十四話 一年後に備えて

☒ 皆様新年明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

ラディッツとの戦いが終わった後、リゼットは悟空の死体を回収してあの世へと訪れていた。

この後の事を考えれば悟空に界王の修行を受けて貰うのは必須事項だ。

界王拳もそうだが、特に元気玉は覚えて貰わないと後々不味い事になるのである。リゼットが全ての敵を倒せるならばこんな回りくどい事をする必要もないのだが、リゼットは恐らく自分がそこまでの高みには至れないだろうと考えていた。

何せリゼットは地球人だ。超サイヤ人にはなれない。

フリーザくらいならば、最終形態になる前に倒してしまえば何とかなるかもしれないがセルや魔人ブウまで行くと手に負える気がしない。

ならば安全策として悟空に強くなっておいて貰うのは決して間違えた選択ではないはずだ。

変に自分が出しゃばり続けて私TUEEEEして彼等の活躍と成長の機会を奪い続けた挙句、宇宙が滅びましたでは笑い話にもなりやしないのだ。

……もっとも、当初の予定では悟空が死ぬはずはなかったのだが。

「どうでしょう閻魔様。悟空君の蛇の道への挑戦、認めては頂けませんか？」

「うーむ、孫悟空か。確かにそいつの功績は素晴らしいがな。しかしいいのか？」

黙っていれば天国に行けるものをわざわざ蛇の道へ挑むなど」

勿論いいに決まっている。

むしろ悟空に黙って天国などに行かれては地球のみならず宇宙全体が最終的に詰みだ。

その未来の英雄はリゼットの気など知るはずもなく、閻魔にラディッツの事を尋ねていた。

「なあおっちゃん、オラがここに来る前にラディッツつつう奴が来て暴れなかったか？」

「ん？ ああ、そいつはお前の兄貴だったな。勿論暴れたが、わしがり押しさえてやったわい」

「あ、あんな強え奴をか……お前すげえんだな。なあ神様、オラこのおっちゃんに修行して貰おうかな？」

悟空の言葉に、リゼットは黙って首を横に振る。

閻魔は確かに弱くはない。

ラディッツくらいならば取り押さえられる強さは確実に持っているだろう。

だが所詮はラディッツより強いという程度でしかなく、界王様のように多くの技を持つわけでもない。

こんな所で修行などさせても、とても1年後のサイヤ人に太刀打ち出来る実力までは伸びないだろう。

「いえ、やめておいた方がいいでしょう。閻魔様はとても忙しい方です。貴方一人に修行を付ける余裕などありません。予定通り、悟空君は界王様に弟子入りをしてきて下さい」

「ま、残念だがそういう事だな。しかし地球の神よ、修行ならお前が付けてやれば

よいではないか。サイヤ人などそれで充分だろう？」

せっかく悟空を説得できそうだったのに、閻魔が余計な事を言う。

確かにリゼットならば界王よりも悟空を強くする事は出来るかもしれない。

だが元氣玉は無理だ。

戦闘力は後でどうにかなる。界王拳も紛い物とはいえ同じ効果の技がある。

だが元氣玉だけは界王に会わねば覚えられないのだ。

何より、ここで悟空と界王の繋がりを作っておく事はかなり重要な事である。

「買い被りですよ、閻魔様」

リゼットは閻魔の質問を飄々と受け流し、話を打ち切る。

そして『神様ってもしかしてオラが思うよりもずっと強えんか？』などと言っている悟空をあえて無視し、笑顔を返した。

「それでは悟空君、頑張って下さいね。生き返る日になったら、また迎えに来ますので」

「え？ お、おう」

追及を逃れる最も手早い方法は話を終わらせてしまう事である。

リゼットは悟空に四の五の言われる前に彼の背をグイグイと押して蛇の道へと無理矢理送り出し、それから地球へと戻った。

神殿へと戻ったりリゼットはすぐに次の行動へと移った。

これから1年後、二人のサイヤ人がこの地球へと襲来する。

その時に備えてクリリン達に修行を付けるべくポポに彼等を連れてくるよう頼んだのだ。

本来ならばそれは先代がやるはずだったが、しかし神の座は今やリゼットにある。ここまではやや傍観者気味でいたリゼットだが、これからはそうもいかない。

何か一つ、ボタンをかけ間違えれば地球が破滅してもおかしくないインフレバトルがここから始まるのだ。

そして傍観者などを続けていればあつという間に抜かされ、いざという時には自分が何とかしよう、なんて言ってられなくなる。

つまりここからは彼等と同じ場所に立ち、一緒に強くなっていかなければまずい、という事だ。

しかし同じくらい私TUEEEEのやりすぎにも注意する必要がある。実に面倒な話だ。

「神様。言われた通り戦士達、連れてきた」

「ご苦労様です、ポポ」

ポポに声をかけられ、振り向く。

そこには確かに彼に頼んだ通り、クリリン、ヤムチャ、天津飯、餃子の4人がいる。

ヤジロベーは、まあ、もう、いいや。

どうせサイヤ人との戦い以降は何もしないし、それにベジータとの戦いならばぶっちゃけリゼット一人でどうにでも出来る。

油断さえしなければ少なくとも地球側の負けはない、言っしまえば勝ち確の戦い。

今はまだそのレベルの戦いだ。

この戦いでリゼットが気を付けるべきは負ける事ではなく、いかに彼等を鍛え、そして死者を出さずに乗り切らせるかだ。

勝つだけならばこの段階ならばまだ余裕。極論から語ればベジータとナッパにリゼット一人で突撃して消し去ってしまえばいい。

しかし後の戦いを思えば、彼等には少しでも強くなってもらいたい。

何より、同じ地球人として悟空の背を必死で追う彼等は何か応援したかった。

「ようこそ皆様、よく来て下さいました」

「あ、ど、どうも」

リゼットが微笑んで出迎えると、クリリンが顔を真っ赤にして頭を下げる。

そういえば彼は女の子にモテたいという願いがあった気もする。

真面目な印象が強いが、案外これで女好きなのかもしれない。

とはいえ、彼は後に18号という美人の奥さんを貰う勝ち組候補だ。こんな新鮮な反応が見られるのも今だけだろう。

「既に事情は聞いていると思いますが、これから1年後、強大な力を持った野菜……じゃなくてサイヤ人というエイリアンがこの地球を攻めてきます。皆さんにはそれに備えてこれから1年間、ここで強くなって頂きます」

「サイヤ人……孫とピッコロが手を組んでようやく倒せた化物らしいですね。それ

も、孫の奴を犠牲にして……」

リゼットの説明に、天津飯が冷や汗をかきながら補足を入れる。

孫悟空とピッコロ大魔王といえ、この地球の誇る二大戦力だ。

その二人が手を組んで戦うなど、ほんの数日前までは想像すら出来ない事であったし、ましてやそこまでやって尚悟空が死ぬなど、彼等にしてみればあり得ない事だ。

しかも1年後にやってくるサイヤ人は、その怪物より更に上なのだ。

「その通りです。とはいえ、言葉だけで説明しても実感は湧かないでしょう。

ですからまず、修行に入る前に皆様には実際にサイヤ人と戦って頂きます」

リゼットの発したとんでもない言葉に4人がざわめく。

サイヤ人を迎え撃つためにサイヤ人と戦う。

そんな出鱈目が成立するのかという疑いも含んだ驚愕なのだろう。

「こちらです。付いて来て下さい」

リゼットはこれといった説明もせず、彼等4人を時の部屋まで案内する。

こういうものはいちいち説明するより見た方が早い。

神殿の奥へと進み、やがて振り子時計が揺れる暗い部屋へと到着した。

「こ、ここは？」

『時の部屋』といいます。この場所では過去、現在、未来の全てが混ざり合う。今から皆には精神だけを過去へ飛ばし、サイヤ人と戦って頂きます。勿論あちらで死んでしまっても実際には傷一つ負いませんので御安心を」

クリリンの言葉に、ここで初めてリゼットはこれから行う事の説明を加えた。
まずは一度、自分達が戦おうとしている相手の強さを体感させる。

そうする事で、今の自分がいかに通じないかを彼等は痛感する事だろう。
敵の強さを知る、というのは大事な事だ。

「面白い。神様、早く俺を送ってくれ」

「ああ、腕が疼いてきたぜ」

自信に満ち溢れた声で天津飯とヤムチャが好戦的に言う。

まだインフレに置いて行かれる前だからか、己の腕に絶対の自信を持っているようだ。

続けてクリリンとチャオズも前に踏み出し、全員が参加の意志を見せた。

それを確認し、リゼットは彼等4人を部屋の中央に立たせる。

「目を閉じ、時の流れに身を委ねて下さい。そうすれば後はこの部屋が貴方達を過去へ導いてくれます」

戦う相手は……ラディッツと同格の最下級戦士を一人と、お供のサイバイマン1匹くらいでいいだろう。

相手の強さを教えるにしたって、いきなり強すぎるのとぶつけては、自信喪失してしまいかねない。

その点ラディッツ級ならば、とりあえず戦いは成立するはずだし、上手く行けばどちらか一人くらいは倒せるかもしれない。

後は、彼等が戻ってくるのを待つのみだ。

★

クリリン達が目を開けると、そこは見知らぬ惑星だった。

紫色と桃色を混ぜたような毒々しい色の空。

大地は赤黒く、恐らくは植物なのだろう木々らしき物は捻くれ曲がり、錆びた鉄の色をしている。

至る所に積み上げられた異星人らしき死体はどれも、クリリン達から見れば怪物染みている。

二足歩行のゴキブリ……とでも言えがいいのだろうか。

まるで人間をベースにしてゴキブリの特徴的な器官だけを付けて強引に擬人化した……そんな気色悪い生き物だ。

衣服はなく、まるでワセリンでも塗ったかのように肌がテラテラと気色悪く輝くそれは、ピクリとも動く様子がない。

「うえっ、何だこいつら……気持ち悪っ！」

「この星の原住民か……？」

生理的に嫌悪感を催すその外見にクリリンが顔をしかめ、天津飯が油断なく辺りを見渡す。

今回の敵はサイヤ人だと神が言った。

しかしこのG人間がこっちに襲いかかって来ても全く違和感はないし、むしろこいつ等の方が敵に見える。

「て、天さん！」

餃子の悲鳴染みた叫びに、一斉に全員の緊張が高まる。

視線の先——そこで動いている個体がいる！

フラフラと頼り無い足取りで、こちらへと近付いて来ている！

「……カローパーワッツ
リーゼルト」

何を言っているのかは分からない。

しかしきつと彼等の言語なのだろう。

G人間はまるで助けを求めるようにクリリン達へ手を伸ばした。

「ヘクミリメイ
タルバルトル……」

再び何かを言おうとしたのだろう。

もっともその意味をクリリン達が知らぬ以上、仮に言葉を全て発したとしても微塵の意味もなく、結局の所彼の運命は定まっていた。

後ろから飛んできた気弾が醜悪な異星人の頭部を破砕し、血らしき液体を撒き散らしながらG人間は絶命する。

その入れ替わりとばかりに姿を現したのは、戦闘服に身を包んだ大柄な男だ。

見た目は地球人と近く、しかし決定的な差異として猿のような尻尾が生えている。

隣には緑色の小柄な怪物が控え、クリリン達を好戦的に睨んでいた。

「ほう、こいつは驚いた。コックローチ星人以外の宇宙人がこの惑星にいたとはな。大方旅行ってところか？ 運がなかったなあ」

髪型はおかっぱ。

でっぷりとした肥満の身体に、不潔な印象を抱かせる髭面。

いかにも私は悪人ですといった悪党面を歪め、ニヤニヤと笑っている。

「お前等に恨みはねえんだがよ。この惑星の住民は醜いから皆殺しにしろっつうフリーザ様のご命令だ。悪く思うなよ」

「フリーザ……？」

「おいおい、フリーザ様を知らねえのか？ どんな田舎の惑星から来たんだよ」

肥満のサイヤ人は呆れたように溜息をつき、それから目元の機械でクリリン達を見る。

話に聞いていたスカウターというやつか。

確かあれで相手の強さを計るらしい。

「戦闘力は206に250、177と92……ちつ、本当にただの旅行者かよ」

「なに……?!」

肥満男の言葉にヤムチャが苛立ちを見せる。

いや、ヤムチャだけでなくクリリンや天津飯も怒りの度合いこそ違えど、等しくプライドを傷付けられたような表情を浮かべた。

彼等は地球では指折りの、上から数えた方が早い腕利きの戦士達だ。

それを捕まえて、戦力を計って出てきた言葉がある事か『旅行者』。とても許容出来る事ではない。

「言ってくれるじゃないか」

「ただの旅行者かどうか」

「その身で味わってみろ！」

ヤムチャ、クリリン、天津飯の順に吼え、一斉に突撃する。

それと同時に餃子が距離を取り、超能力によるサポートに入った。

ヤムチャとクリリンが疾走し、緑色の化物へと飛びかかる。

それと同じタイミングで天津飯がサイヤ人を相手取り、激しい攻防が始まった。まずは弱そうな緑色から先に倒し、全員でサイヤ人を袋叩きにしようという戦法

だ。

「ハイ！ ハイ！ ハイイーツ！」

ヤムチャが狼の如き俊敏な体捌きを以て緑色——サイバイマンを果敢に攻める。掌は握らず、広げず。あたかも鋭利な爪で裂く獣のように爪を立てた独特の握り。彼の俊敏な動きと相まって、それはまさしく野生の獣そのものといった激しい攻めだ。

だがどうしたことから、見た目的にはまるで大した事がなさそうなサイバイマンに軽くないなされる、弾かれる、逸らされる。

避けられ防がれ、余裕を持って見切られる。

手加減しているわけではない。

油断しているわけでも、相手を舐めているわけでもない。

ただ単純に通じない。至極明快な事として、相手がヤムチャよりも遥かに強いのだ。

「おりゃああああ！」

ヤムチャと並ぶようにクリリンも攻撃に加わる。

二人同時の左右挟み撃ちの挟撃。残像すら残す速度で放たれる拳と蹴りの弾幕。だが弾く、逸らす、避ける。

サイバイマンは二人の全霊の攻撃を、それぞれ片手のみで捌いてしまっている。いや、それどころではない。

その状態からあろう事か反撃にすら転じ、二人の顔に同時に拳を叩き込んだ。

「がっ……！！」

「ぐあ……！！」

重い、まるで数百キロの鉄の塊で殴られたかのような衝撃。

それに二人がたたらを踏み、それでも何とか倒れる事を拒む。

だがその隙にサイバイマンは次の動作へと移り、クリリンの腹へと蹴りをめり込ませた。

「が……」

口から鮮血が溢れる。

折れた。たったの一撃で肋骨が滅茶苦茶に碎け、内臓に突き刺さった。

クリリンは無様に地面を転がり、蹴られた腹を押さえて転げ回る。

ダメージが重い。意識がぼやけて、まるで腹が千切れてしまったようだ。

そこに跳躍したサイバイマンが飛びかかり、クリリンの首の上に着地した。

無論、ただの着地ではない。着地というよりは蹴りと形容すべき重い一撃だ。

クリリンの下の地面に蜘蛛の巣状の輝が走り、不吉な音が響く。

意識が断ち切られる感覚。

脳髓と身体が切り離される感覚。

首をへし折られる感覚……死の感覚。

クリリンは虚ろな眼を見開いたまま一度大きく、陸にあげられた魚のように全身を跳ねさせる。

……そして、それ以降動く事はなかった。

「き……きっさまああああ！」

ヤムチャが激昂し、両手の手首を合わせる。

そして相手に肩を向けて半身になり、合わせた手は後ろへと引く。

亀仙流の奥義である『かめはめ波』。それを放つための特徴的な前動作を行い、付け合わせた手の中に膨大な気を収束させる。

——発射。

青白い氣の塊が解き放たれ、避ける間もなくサイバイマンを飲み込んだ。

瓦礫に突っ込んだ怨敵の生死も確認せず、ヤムチャは続けて攻撃へと入る。

左手で右手の手首を掴み、全ての氣を右手一本へ集約。

掌大の氣の塊を生み出し、更に氣を込める。

するとそれは3m大の氣の塊へと巨大化し、ヤムチャの指先の動きに従うように自在に飛び回った。

「特大の繰氣彈をお見舞いしてやるぜ！　くらえッ！」

繰り出された氣を、咄嗟に起き上がったサイバイマンが避ける。

だがそれを見越したように氣彈も旋回し、サイバイマンの上空を通過した。

続けてヤムチャが指先を動かすと、それに合わせて氣彈が飛び回り、サイバイマンを翻弄する。

避けてもまたすぐに襲ってくる手動の追跡氣彈。これを防ぐには耐えるか、術者であるヤムチャを止めるかの二通りしかない。

「とーっ！」

サイバイマンの動きの隙を見抜き、最良のタイミングで繰弾を叩き込む。防御も間に合わず直撃を浴びたサイバイマンは倒れ、直後に気弾が爆発。

地面にクレーターを作り、地震の如く大地を揺らし、爆煙をあげて敵を焼いた。

「……やったか？」

煙が晴れない中、ヤムチャは警戒だけは忘れずにゆっくりと歩く。

まだ生きているのか？ それとも死んだのか？

やけに乾く喉を唾で湿らせ、一步一步確かめるように前進する。

サイバイマンは……倒れている。動く気配もない。

仕留めたのだろうか。それとも気絶しただけだろうか。

どちらにせよ、念のため止めを刺すべきだろう。

ヤムチャはそう考え、サイバイマンとの距離を詰める。

ダメージは確実に与えたはずだ。仮に生きていても、動きは鈍っているはず。

ならばきつと、勝てない相手ではないはずだ。

その考えは、しかし甘すぎた。

確かに勝てない相手ではないだろう。

しかし負けない相手かどうかを考えるべきだった。

力の落ちた相手でも、まだこちらを殺し得る牙があると警戒すべきだった。

一定の距離に近付いた瞬間サイバイマンが残る全ての力を総動員してヤムチャへと抱きついた。

行動は一つ、抱きつく事だけ。

それだけに全ての力を振り絞り、後の事などまるで考えてすらない。

故に、まだただだけ動けると思わなかったヤムチャは不意を突かれてその抱き付きを受けてしまう。

そして、その瞬間に全てが決まった。

爆炎が上がった。

己の身体そのものを用いた最期の咆哮。刺し違え上等の一撃。

使い捨ての兵士だからその自爆攻撃。

それがヤムチャの油断を狙い撃ち、彼の全身を蹂躪した。

爆煙の晴れた瓦礫の中……そこにサイバイマンはもういない。ただの肉片となつて散らばっている。

そしてその中心にヤムチャはいた。

物言わぬ死体となって白目を剥き、無念の表情で倒れている。

もう動かないし立ち上がらない。

ヤムチャは、この精神の旅を『死』という形で終えたのだ。

・ちなみにギリギリまで、このSSのヤムチャを転生ヤムチャにするかどうか考えていたのはここだけの秘密。

結局、話がややこしくなるという理由でノーマルヤムチャのままにしました。

インフレ「新年明けましておめでとうございます！ 今年からこの作品で働く事になりましたインフレです！ よろしくお願いします！」

リゼット「帰って（切実）」

第十五話 サイヤ人襲来

「気功砲——!!」

天津飯がありったけの力を込めた渾身の気功砲を放つ。

気の消費量が極めて大きく、身体への反動の大きさを命の危険すら伴う禁断の奥義、それが気功砲だ。

仮に生き延びる事が出来たとしても確実に寿命を縮める、本来ならば使ってはならない技であり、しかし、そのデメリットに見合った威力を備えているのも確かだった。

それを相打ち上等の覚悟と気概で、MAXパワーで解き放つ。

上がる爆煙、吹き飛ぶ戦闘服。

大地が抉れ、射線上にある全てが薙ぎ払われる。

震える腕を降ろし、霞む視界の中……天津飯は煙の向こうを凝視した。

「ふうっ……おどかしやがって」

しかし肥満のサイヤ人は生きていた。

服はボロボロになり、決して無傷ではない。

だが五体満足のまま、未だ余裕を持って大地に立っている。

天津飯はそれを見届けると、力無く地面に倒れ込んだ。

「む、無念……」

サイヤ人との力の差は彼が思った以上だった。

しかしこれは収穫だ。次に活かせる。

遠く離れた位置で既に事切れて、きつと先に戻っているだろう餃子を一瞥し、天津飯は3つの目を閉じる。

この敗北は糧とする。必ず今後に活かしてみせる。

そう決意し、そして彼もまた精神の旅をここで終えた。

「死んだか……しかし何だったんだこいつ等。おかしな技ばっか使いやがって」
天津飯達を殺した肥満のサイヤ人——パンブーキンは動かなくなった地球の戦士達を見渡す。

戦闘力が低いかと思えばいきなり上昇したり、太陽の如く眩く輝いたり、4人

に増えたり、腕が増えたり、目から光線を発射したりと、とにかく意味が分からない敵だった。

それに何といっても最期の技だ。

両者の戦闘力の差を思えばダメージなど通るはずもない。

しかし通った。この身体に傷を刻まれた。

何とも不気味で、得体の知れない敵だった。

「おい、パンブーキン！」

上空から己を呼ぶ声がして、パンブーキンは顔をあげる。

そこにいたのは、肩部分のない軽装の戦闘服に、特徴的な髪型をした仲間の一人だ。

彼とは逆方面を攻めていた戦友であり、そして彼の仲間の中では最も高い戦闘力を誇る自慢の友でもあった。

「テメエ、こんな都市の制圧にいつまでかけてやがる。俺達とはとくに住民を皆殺しにしちまったぞ」

「待ってくれ、違うんだよバーダック。ちょっと面白い奴等がいてさ」

「あ？ 面白い奴だ？」

バーダックと呼ばれた悟空似の男は怪訝そうにパンブーキンを見る。

それに対しパンブーキンは天津飯達の死体を指差そうとするが——いない。

先程まで確かにそこにあった死体が、跡形もなく消えている。

まるで最初からそこになかったかのように、忽然と紛失しているのだ。

「あ、あれ？ いない……？」

「……お前何やってんだ？」

「ま、待ってくれ、どうなってやがる?! さっきまで確かにここにいたんだよ、

バーダック！」

バーダックは一応はパンブーキンの言葉を信じたのか、スカウターで周囲を探る。

だが当然のように反応はなく、呆れたように溜息をついた。

「ああわかった、わかった。いたって事にしてやるよ。だからさっさとこの惑星を

制圧して帰るぞ」

「いや本当なんだって！ 3つ目のおかしなハゲがさっきまでいたんだよ！」

「はいはい、3つ目のハゲね……って、そりゃ3つ目星人だろうが。ったく……」

あの連中がこんな惑星にいるわけねえだろ」

バーダックがそう言うと同時に残りの仲間達もパンブーキンのもとへ集結した。いずれも下級戦士で、しかしいくつもの戦いを共にした仲間達だ。

そのうちの一人、紅一点であるショートカットのセリパがパンブーキンの肩に手を置く。

「ほら、いいからさっさと終わらせるよ。バーダックがさっさと帰りたくて、さっさから苛立ってるんだから。」

……今日はギネさんとの結婚記念日だもんねえ」

「うるせえ！ いいからさっさとこんな惑星、制圧するぞ！」

からかうようなセリパの言葉にバーダックは乱暴に怒鳴る。

元々そういう性格なのか、それとも照れ隠しなのかは分からない。

しかし彼を見るサイヤ人達は、いずれもがニヤニヤと面白そうに笑っていた。

★

リゼットから見て、それはほんの数秒の事だった。

目を閉じ、過去の世界へと旅立ったクリリン達が一斉にハッとしたように目を開

ける。

どうやら無事に全員戻ってきたらしく、各々が自分の身体を撫でたり仲間の顔を見たりと、無事を確認している。

その様子から見るに、向こうでは全滅してしまったのだろう。

リゼットは戦士達の前に歩み出ると、まずは彼等を労わる事にした。

「お疲れ様でした、皆様。過去の旅は如何でしたか？」

リゼットが胸元から鈴を出し、涼やかな音を鳴らす。

すると兎人参化がどこからか現れ、トレイに人数分の紅茶を載せてクリリン達の前へと差し出した。

ヤムチャが何やら驚いた顔をしているが、そういえば彼は確か面識があったはずだ。

とりあえず、もう兎人参化は敵ではありません、とだけリゼットは伝えた。

「……完敗でした。あれがサイヤ人……俺達が戦うべき敵……」

天津飯が悔しそうに言い、クリリンとヤムチャも黙って俯く。

余程こっぴどくやられたのか、負け惜しみすら吐き出さない。

餃子も落ち込んでおり、少しやりすぎたかと不安にさせられた。

しかし天津飯はすぐに顔をあげると、覚悟を決めたような顔でリゼットへ頼みこんだ。

「神様、俺は自分の未熟を知りました。俺はもっと強くなりたい……どうか俺を鍛えて下さい！」

「お、俺もだ！ 今度はあんな訳の分らん緑色の化物の自爆なんかにはやられはしないぜ！」

天津飯に共鳴するようにヤムチャもまた力強く吼える。

どうでもいいが、どうやら彼は向こうでもサイバイマンの自爆にやられたらしい。どれだけサイバイマンと相性が悪いのだ、この男。

……いや、ある意味相性ばっちりなのか？

「お、俺も！ このままじゃ俺は悟空の足手纏いだ！」

「天さんがやるなら僕も！」

クリリンと餃子も呼応し、これで4人全員が修行への参加を表明した。

リゼットはそれに満足そうに頷き、指を鳴らす。

するとクリリン達4人の腕と足が急に重くなり、まるで身動きが取れなくなつた。

悟空にも施し、そして現在進行形でリゼット自身も付けている気のギプスだ。

「うおっ!？」

「か、神様、これは?!」

「気の強制制御ギプス……気霊錠と私は呼んでいます。

これは気を最大に上げ、手と足に集中する事で自由に動けるようになります。

これからの1年間、この神殿で修行している間は常にこれを付けていて下さい。

外した時の気の最大値が2倍にも3倍にもなります」

以前悟空にもしたのと、ほぼ同じ説明を口にする。

使い回しとか言っではいけない。リゼットだって結構面倒に思っているのである。

「まずは気の操作と、それを感じる所から始めましょう。とはいえ、何せ時間がありません。悟空君はこの修行に3年間を費やしましたが、皆には半年で会得して貰います」

「孫の1／6の時間で会得しろという事か……いいでしょう、望む所です。そのくらいじゃないと、界王様とやらの所で修行している孫に追いつくなんて無理そうだからな」

リゼットの定めた制限日数に天津飯が挑戦的に笑う。

汗を隠せてはいないが、このくらい鼻柱が強い方が丁度いい。

ギプスを動かすくらいの気の開放は既に全員が出来る。

要はかめはめ波やどどん波などを撃つ時と同じ要領であり、そうでなければギプスなど付けはしない。

最大戦闘力を上げるくらいならば、亀仙人だって出来るのだ。

だが自在なコントロールや気で相手の位置や動きを探るのはまだ無理だ。

だからまずは、それを身に付けさせる。

そうでなければ地力で勝るサイヤ人相手では話にもならない。

「さあ、では早速始めますよ」

パン、と手を叩きリゼットは笑顔で修行の開始を告げる。

しかし、後にクリリンはこの時の事をこう語る。

可憐な笑顔を浮かべる女神の背後に鬼の幻影を見た、と。

それと同時にクリリンはこの1年間の修行が地獄になる事を確信し——實際その通りだった。

「外見はいかにも慈愛の女神って感じだけど、騙されちゃ駄目だ。あの人の本質は戦神だよ……マジで容赦ねえ……」

1年の修行を終えた後にクリリンはこう語り、そして身震いした。

★

1年間。

長いようで短いこの猶予期間の間に、リゼットは出来るだけの事をやった。

ピッコロに（無理矢理）気霊錠を付けてみたり、カリンと遊んでみたり、ポポと兎人参化を修行に参加させたり、カリンをじゃらしてみたり、並行して自分自身の修行も少しハードなものに変えてみたり、カリンをモフってみたり、思い付く事はとりあえず実行に移してみた。

ついでに悟空とブルマ達の念話に割り込みをかけ、生き返る時はちゃんと帰り道にかける時間も計算に入れておくようにも忠告も行った。

これで本来のような大幅な遅刻はしないで済むだろう。

更に魔人ブウの卵の所へと赴き、完成したヘブンズゲートで卵ごと封印しておいた。

何かの間違いで本来より早いタイミングで復活などされては詰みかねないので、とりあえず誰も手出し出来ないようにしておこうというわけだ。

最後に止めとばかりに封印した壺は精神と時の部屋に安置しておいたので、万一復活しても出て来る事はない。

卵と壺、そして精神と時の部屋の三重封印だ。

また、魔族の故郷である魔凶星が地球に接近している事を察知したりゼットはこれを気弾で爆破、破壊した。

この魔凶星は魔族の力を増幅する厄介な特性があり、下手をするとガーリックが復活してしまう恐れがある。

それ以外にも、最も恐れるべきは後に登場するダーブラが魔凶星の影響を受けてしまう場合だ。

ただでさえ強いダーブラがパワーアップなどしては、とても手に負える気がしな

い。

故に先手を打って早々に消してしまおうのが得策と判断したわけだ。

放置しておけば後数年で地球に接触していた可能性もあるので、決して間違えた選択ではないはずだ。

そして1年。遂に運命の日の1週間前となったところでリゼットは修行を終えた。

流石に修行漬けにしても疲れるだけだし、休暇を与えるべきだと考えたのだ。

「皆様。この1年間よくぞ私の修行に耐え抜きました。もう私が貴方達に教える事は何もありません。1週間後、遂にサイヤ人がこの地球へやってきます」

「いよいよか」

「腕が鳴るな」

リゼットの言葉に怯むでもなく、天津飯とヤムチャが好戦的に応える。

やはり彼等も戦士。サイヤ人ほどではないが、己の力を試したい欲求があるのだろう。

「残る1週間は休みとします。各自、しっかりと身体を休めて万全の状態で挑ん

で下さい」

「はい！」

全員が力強く答え、その場は解散となった。

とりあえず戦闘力はかなり上がったはずだし、もしかしたら本来とは違ってクリン以外にも一人くらいは生き残る事が出来るかもしれない。

しかしやはり、ベジータの強さを思えば死んでしまう可能性も0ではない。ならば1週間……せめて楽しんで欲しいと思ったのだ。

……思っていたのだが、4人は地上に戻った後も飽きずに修行をしていた。どうやらリゼットの気遣いは無用のものであったらしい。

ついでに前日ギリギリに帰って来た悟空も、休まず修行を行った。

もしかして彼等は修行ジャンキーなのだろうか？

そして運命の日。

地球は遂に二人の宇宙人の侵入を許してしまった。

強大な気が二つ、地球へ降下した事を一早く感知したりゼットは遠距離の念力で

小型ポッドを弾き飛ばす。

彼等は本来ならば街の中央に落下し、そこで多くの人々を殺傷するがそんなのは許可しない。

突然の衝撃に対し、宇宙船から出る事も出来ない宇宙人二人は何も出来ずにパプリカ荒野へと強引に墜落させられた。

そこでは既に悟飯とピッコロが待ち構えており、要は本来の決戦場所に最短距離で送り届けてやったのだ。

無事、狙い通りの場所へ落とした事を確認してからリゼットはフワリと浮き上がる。

「さあ、行きますよ。付いて来なさい、兎人参化、ポポ」

「いよいよですねえ」

「わかりました、神様」

兎人参化とMr・ポポを連れ、リゼット自らもパプリカ荒野へ飛んだ。

流石にサイヤ人の侵略ともなれば、今まで結構呑気していたリゼットといえど自ら動く。

彼女が着くと、丁度サイヤ人二人もポッドから這い出してきた所らしく、まさにベストのタイミングで二人の前にリゼットが舞い降りる形となった。

「ようこそ、異星の方々。我が星は貴方達の来訪を歓迎しましょう」

「我が星、だと……」

「なるほど。お待ちかねだったわけだ」

ポッドから這い出しながら二人が不敵に笑う。

勿論締まらない姿であるのは言うまでもないが、余裕は崩れていないようだ。

立ち上がると埃を手で払い、偉そうに腕を組んでリゼットを見る。

それに合わせるように兎人参化、Mr. ポポ、ピッコロ、悟飯もリゼットと並び立った。

「念のために聞くが、貴様等何しに地球に来やがった？」

「その声……そうか、ラディッツを殺したのは貴様だな？」

ピッコロの質問にベジータもまた質問で返す。

スカウターは通信機の役割も果たす。

ピッコロの声から、ラディッツ殺しの犯人は彼だと瞬時に理解したのだろう。

「おいベジータ、あいつナメック星人だぜ」

「らしいな、ラディッツが殺されても無理はないわけだ」

ナメック星人——明らかに宇宙人を指すだろう呼び名だ。

ここにきて初めて自らが宇宙人であると知らされたピッコロは流石に意外だったらしく驚きが顔に出ている。

「そうか。聞いた事があるぞ。ナメック星には集めればどんな願いも叶うという不思議な玉があるというが、あれは本当の事だったんだな。ナメック星人は高い戦闘力の他に、不思議な力を使えるという。ドラゴンボールを作ったのも貴様だな？」

「……へっ、ありがとよ、おかげで俺様のルーツの事が何となく解ってきたぜ。だが生憎ドラゴンボールを作ったのは俺じゃない。俺は戦いが専門なんだ」

ピッコロが構える。

それに合わせて悟飯も臨戦態勢に入り、リゼットも自然体のまま顔つきを鋭くした。

そんな彼女を見て何を思ったのか、ナッパが嫌らしい笑みを見せる。

「ほう、チンケな星と思ったが、顔の作りは特上じゃねえか。それともこの女だけ

か……？　どちらにせよ、物好きな連中に売れば下手な惑星より高く売れるぜこいつは。おいベジータ、この女持って帰っていいだろ？」

「ナッパ。貴様のポッドはいつから二人乗りになったんだ？」

「あ、そうか……ちつ、しゃあねえ。現地で遊んで捨てるしかねえか」

二人の会話を聞いてリゼットの表情が微笑みに変わる。

まるでこれから戦うとは思えぬ、柔らかな表情だ。

その微笑のまま、リゼットは無動作の気合砲をナッパの股間に一点集中で炸裂させた。

「~~~~~ッッ！！！？」

ナッパが、まるでこの世の終わりのような顔で悶絶し、股間を押さえて地面に倒れる。

いかに強靱な身体を持つサイヤ人だろうが鍛えられない部位というのは存在するのだ。

睾丸とは言わば、薄皮一枚のみに保護された剥き出しの内臓。

決して鍛える事が出来ない絶対の急所。男である以上どうしようもない弱所なの

だ。

痙攣するナツパと、それを興味深そうに見るベジータ。

そんな二人に対し笑顔を向け、リゼットは冷たく言い放った。

「御免なさい。私、下品な殿方はあまり好きではありませんので。次は潰してしまいますので、気をつけて下さいね」

冷静に見えるベジータだったが、その額には一筋の汗が流れていた。

【各キャラ戦闘力】

※悟空の戦闘力に元々伸びていた分が計算されていなかったので原作から少し上昇

・リゼット

基本戦闘力…120000

重装備解除…150000

気霊錠解除…450000

バーストリミット(最大20倍)…9000万

・孫悟空

基本戦闘力…8500

界王拳2倍…170000

・ピッコロ…90000

・Mr・ポポ…57000

・天津飯…54000

・クリリン…51000

・ヤムチャ…49500

・兎人参化…43000

・餃子…40000

・孫悟飯…981

・孫悟飯(怒り)…28000

・カリン様(不参加)…42000

第十六話 凶悪化

【感想に関して】

一度感想返信を終えたものを『追記』などの形で上げ直す行為はやめて頂くようお願いします。

私は返信する際に自分の返信を『ここまでは返信を終えた』という一種の目安にしているので、返信したはずのものを上げ直されてしまうと、未返信の感想を見落としてかねません。

サイヤ人の出現に気付いたのは、当然ながらリゼット達だけではない。

悟空、天津飯、クリリン、ヤムチャ、餃子もリゼットのように星間距離がろうとすぐに気付くとまでは行かずとも、地球に降下すれば嫌でも気付く。

故に彼等がパブリカ荒野に集結するのは至極当たり前の流れであり、ここに地球の戦士9名と神の1柱、計10名が集まる事となった。

人数差は歴然……しかしベジータに動揺はない。

腕組みを解く事すらせず、隣で相変わらず蹲っているナッパを気にする事もなく、不敵に笑っている。

「来ましたか、皆」

「ああ……こいつらがサイヤ人なんだな？」

リゼットが視線すら向ける事なく、戦士達の到着を歓迎する。

それに対し、悟空もまた視線をサイヤ人から外す事なく会話を交わす。

既に戦いは始まっている。視線を逸らす油断など晒せない、という事だろう。

ナッパが視線どころか隙をこれでもかと晒しているが、そこは攻撃してやらないのが男の情けだ。

女であるリゼットに、この痛みはきつと理解出来ない。

「おやおや、団体さんのお出ましで。

ならこっちも、少し数を揃えてやるとするかな」

ベジータが余裕を崩さず、戦士達を見る。

スカウターに計測された数字で、とりあえず警戒に値すると判断出来るのは悟空

の5000くらいか。

しかし地球の戦士達は戦闘力を自在に変化させる事が分かっている以上、これは全く当てにならない。

ナツパを悶絶させたあの女も今の所は戦闘力僅か1000だが……きっと、そんなものではないだろう。

もしかすると、カカロットよりもあちらの方が危険な手合いかもしれない。そう、ベジータは何となく勘で察していた。

「ナツパ、確かサイバイマンが6粒残っていたな。出してやれ」

「……………ちょ、ちょっと、待ってくれ……………まだ、動けな……………」

「……………もういい、俺がやる」

ベジータは這い蹲るナツパからサイバイマンの入った瓶を奪い取る。だがそこで妙な事に気が付いた。

サイバイマンの元となる種……………その数が明らかに多い。

ナツパからは6粒と聞いていたのだが、明らかに10粒以上ある上に、どういう事か高級品であるテンネンマンやジンコウマンの種まで混ざっていた。

テンネンマンとジンコウマンはサイバイマンの上位改良品種だ。

特にジンコウマンの戦闘力は凄まじく、その戦力は単騎でナツパに匹敵する。

そこそこの環境の惑星を5個は売り飛ばして、ようやくこれ一粒と釣り合う価格、といったところだろうか。

ナツパめ、何時の間にこんなものを買っていたのだろう。

「まあいい。使わせてもらうぞ、ナツパ」

敵の戦力は予想を超えている。

無論自分が負けるなどとベジータは考えていないが、カカロットの戦闘力5000は正直に言って予想していなかった。

白い女も未知数であり、この全員を相手にするのは少し面倒だ。

だから雑兵で数を減らせれば、それはそれで楽になる。

ベジータはそう考え、地球の土に種を植えていく。

サイバイマンの成長は早い。

土に植えてほんの数秒もすれば勝手に成長して生えてくる。

ベジータが植えた人造兵士達は瞬く間に成長し、奇怪な鳴き声をあげながら土か

ら姿を現した。

緑色のサイバイマンが10体。

桃色のテンネンマンが5体。

そして白のジンコウマンが2体。

合計17体……これで地球側を数で上回ってしまった。

その不気味な容貌にクリリンが冷や汗を流す。

「うえっ、何だこいつら、気持ち悪っ！」

「皆、油断しないで。各自、最初から全力で当たりなさい！」

リゼットの号令に従い、後ろから一斉にピッコロ達の『アンテ』の声が聞こえる。それと同時に悟空以外の全員が一気に戦闘力を上げ、ベジータが感心したように声をあげた。

本来ならばここで『ゲーム』と称して一体一体かかってくるはずだが、どうもそうはいかないらしい。

悟空が最初からいるからなのか、それとも別の要因か……。

ベジータと、ようやく立ち直ったナッパを含めた19人が同時に飛びかかる！

その目は一瞬真紅に輝き、全身から黒いオーラを放つ様は前知識があるはずのリゼットをして、違和感を感じるには十分なものだった。

おかしい……何かが違う。

それに、全員の気が明らかに上昇している！

「っ、私が7体を引き受けます！ 皆は残りを！」

この戦力と数は不味い。

せっかく修行で強くした戦士達すらも殺されてしまいかねない。

そう判断したリゼットは素早く人差し指を立て、空へと向けるように突き上げる。すると彼女を中心に大気が爆ぜ、2体のジンコウマンと5体のテンネンマンを空へと跳ね飛ばした。

とりあえず意味のわからないイレギュラーは消してしまおうという算段だ。

「――Kinect」

気の固定化により、自らが発した気を神話に語られるヴァルキリーの姿に変容させる。

SG カミカゼアタックを参考に編み出した自律思考気弾であり、要は形を変えた

だけのSGカミカゼアタックだ。

生み出された白の戦女神達は無駄に剣まで備え、術者の号令を待つ。

「散開！」

7体のヴァルキリーがそれぞれの敵へと飛びかかる。

逃げようがどこまでも追尾し、防御すればその場で爆ぜる。

初見殺しの自律追尾気弾だ。子供の考えた技だと馬鹿にしたものではない。

軽く放ったものだが、それでもあの程度の敵ならばそれぞれ一撃で仕留めるだけのパワーは持たせた。

そしてどうやらテンネンマン達は見事に初見殺しに嵌ったようだ。

全員が防御や迎撃を試み、自律気弾——キネクトに触れてしまっている。

爆破——空が爆炎で揺れた。

「ば、馬鹿な！ テンネンマン達がああも容易く……！」

「どこを見てやがる！」

いとも容易く葬られたテンネンマン達にナツパが驚きを露にする。

だが今は戦闘中。そんな暇などない。

余所見をした彼の頬をピッコロの肘が打ち抜き、歯をへし折る。

更に追撃の蹴り上げ。今度は顎に罅を入れられ、ナッパは空中で1回転して地面に顔から墜落した。

「ぐっ、こ、このナメック星人め……やりやがったな！」

怒りに任せ、黒いオーラを纏いナッパが飛びかかる。

ピッコロもそれと同時に駆け、両者の間で拳と蹴りが飛び交う。

防ぎ、避け、弾き、逸らし、その弾幕の間を縫ってピッコロの拳がナッパを捉える。

鼻血が吹き出し、だがナッパは倒れない。

呆れたタフさで踏み止まり、拳を突き出した。

「遅いぜ！」

ナッパの拳を顔に届く寸前で受け止め、握力に任せて拳を握る。

万力で締められたような痛みにナッパが呻き、その隙を見逃さずピッコロがナッパの顎を膝で蹴り上げる。

更に挟みこむように肘を頭へ叩き込み、さしものナツパもこれには一瞬意識を飛ばされた。

「……くたばれ！」

間髪入れず、全霊の拳を鳩尾へ打ち込み、ナツパの身体を「く」の字に曲げる。最後に彼の腕を掴み、空中へ投擲。

身動きを取れなくし、口から破壊光線を発射した。

「ちっ、畜生！　ちくしょオオオオオーッ……！」

ナツパの全身が破壊光線の奔流に焼き尽くされる。

腕が焼かれ、足が焼かれ、顔が焼かれ、全身が焼かれる。

無駄にタフな彼といえど、この戦力差から放たれた攻撃を耐えるなど出来ない。

哀れなサイヤ人は無様に地面に墜落して動かなくなり、それを見届けたピッコロは口角を釣り上げた。

「ひええっ……」

「さ、流星はピッコロだ……いずれまた敵に戻るのかと思うとゾツとするぜ」

サイヤ人の一人をあつさりと倒してしまった大魔王の戦闘力に、クリリンと天津

飯も畏怖を隠せない。

だがそういう彼等もまた、地球の精鋭。

その足元には既に事切れたサイバイマンが3体転がっており、戦いの結果を明らかにしていた。

「なあに、その時は俺達が止めりゃいい。そうだろ？」

「大丈夫、天さんも強い」

声の聞こえた方向をクリリンと天津飯が振り返る。

そこには、どうやらこちらも片を付けたらしいヤムチャと餃子が余裕の表情で佇んでいた。

遅れて、そこに兎人参化とMr・ポポ、悟飯も集まる。

ポポの足元には首を千切られたサイバイマンの死体が二つ転がり、悟飯もどうか1体は倒したようだ。

そして人参化の手には二つの人参があり、バリバリと喰らっている。

サイバイマンがどうなったのかは……まあ、見ての通りだ。

しかし殺したと思って油断出来ないのがサイバイマンだ。

木っ端微塵にするまで気を抜いていい相手ではない。

悟飯の足元に転がっていたサイバイマンが突如立ち上がり、彼に飛び掛かったのだ。

完全に不意を突いたその攻撃に天津飯達は反応が間に合わず、悟飯は絶望に目を見開く。

「――狼牙風風拳！」

しかしそれを予期していたようにヤムチャが飛び込み、狼の牙を模した拳打がサイバイマンの頭を打ち砕いた。

続けて、まだ原型を残しているサイバイマンの死体に気弾を撃ち込んで爆破。

今度こそ完全にサイバイマンを仕留め、しかしヤムチャは残心を忘れずに小さく息を吐いた。

「へっ、そう来ると思ったぜ。お前等の自爆は予習済みなんだよ」

「あ、ありがとうございます……助かりました」

「なあに。俺も一度はあれに引っかけた身だ。偉そうな事は言えないさ」

悟飯の礼に返事をしながら、ヤムチャは思い出すように笑った。

修行前にリゼットにやらされた精神の旅は決して無駄ではなかった。

あの時の屈辱の体験があったからこそヤムチャはサイバイマンの自爆を予期し、こうして仲間を守る事が出来たのだ。

あの時のサイバイマンとは別個体だが……それでも、確かに雪辱は果たさせてもらった。

「皆、どうやら無事そうですね」

最後に7体を始末したりゼットが着地し、全員の無事を確認した。

多少敵も謎の強化を果たしたようだが、リゼットの影響で更に強くなった戦士達には及ばなかったようだ。

その事に安堵し、しかしすぐにリゼットは表情を引き締める。

まだ一人、肝心な人物がここにいないからだ。

「悟空君はベジータというサイヤ人の相手をしているようですね」

「あいつか……奴だけは桁違いの強さを感じた。」

いくら孫が界王の修行を受けたといっても、一人で勝てる相手ではなからう」
リゼットの発した呟きにピッコロがすぐに反応する。

流石に敵の強さを見抜く目は一流だ。

すでにこの時点でベジータと悟空の力関係をほぼ見切ってしまった。

悟空には界王拳があるので、実際には彼が思うほど差は大きくない。

しかし、それを計算に入れても尚ベジータが上回っている。

ましてや今のベジータは謎のパワーアップをしており、本来よりも上だ。とても勝てる相手ではない。

「ええ、急ぎましょう。いくら悟空君でも長時間は——」

その瞬間。

リゼットは……いや、ここにいる戦士全員が同時にそれを感じた。

ベジータの気が、明らかに異常とも呼べる増幅を始めたのを。

気の開放、なんて温い話ではない。

明らかに2倍、3倍、4倍と膨れ上がっている。

悟空も2倍や3倍くらいにはなっていたが、ベジータのそれは段違いだ。

「そんなっ!! 早過ぎる!」

この異常事態に真っ先に気付いたのはリゼットだ。

というよりも、知識を持つ彼女以外にこの異常事態を正確に把握出来る者はいない。

ベジータは確かに悟空との戦いの中で大猿になる。それは間違いない。

だが早過ぎる！　まだ戦いが開始されてからそんなに時間が経っていない。

本来そこにあるはずの、戦いの過程を飛ばしていきなり大猿になるなど、ベジータらしくない。

「お、おい。何だあの空に浮かんでるの……？　あれ、満月か……？」

「馬鹿な！　月は俺が消したはずだ！」

クリリンが空に浮かぶ光球を指差し、ピッコロがそれを否定する。

無論彼等はパワーボールの存在など、知る由もないだろう。

いや、それを知るリゼットですらこんなに早くパワーボールを出すなど完全に予想外の事だ。

何せ、まだベジータは悟空に追い詰められていない。

実力で上回っているのに、余裕を見せずにいきなり変身するなど、どうかしている。

おかしい……一体、何が……？

その時リゼットは一瞬、確かに見た。

遠視の能力を持つ彼女だからこそ気付けた、その存在。

遙か遠くからこちらを見て、晒っている女がいる。

ラディッツの時にもいた、あの魔族の女がこちらを見て嘲笑っている！

「——っ！」

リゼットはすぐにそちらに視線を移し、掌を向ける。

だが、いない。

既にその姿は影も形も失せている。

まるで瞬間移動でもしたかのように、完全にいなくなっているのだ。

（馬鹿な……！ 一体、あの女性は……！）

知らない、あんな人物など私は知らない。

戦慄するリゼットへ、天津飯が遠慮がちに声をかける。

「神様……早過ぎる、というのは一体どういう事ですか？

貴女は、サイヤ人のこの力を知っていたのですか？」

「……その説明は、向こうへ向かう道中でお話します。とにかく、今はまず急ぎましょう」

リゼットは言うや否や飛翔し、その後に戦士達が続く。

リゼット一人であれば、それこそほんの数秒で悟空の所へと辿り着けるのだが戦士達の速度に合わせる必要があるのが今は苦痛だった。

特に餃子。お願いだからもう少し速く飛んで欲しい。

「……サイヤ人は満月を見る事で巨大な猿へと変化します。

その戦力の増大は、以前の悟空君から推測するに凡そ10倍……そして条件としては、尾がなければ変身は成立しない、という事が分かっています。

もっとも、これはピッコロやクリリン君、ヤムチャも知っている事ですが」

「その通りだ。だから俺はそれを見越して月を破壊した。

にもかかわらず、奴は変身したな。

……リゼット、貴様、奴が満月抜きで変身出来ると知っていたな？」

「はい、知っていました」

ピッコロの疑問に、リゼットはあえて偽りなく答えた。

あの失言をしてしまった以上、隠しても意味などない。

それよりはさっさと認めて、話を進める方が重要と思ったからだ。

「一部のサイヤ人は自ら編み出した気の塊と、惑星の酸素を混ぜ合わせる事で人工の小さな満月を生み出す能力を有しています。

そしてベジータとはサイヤ人の故郷である惑星ベジータの名前そのもの。

即ち彼は王族に連なるサイヤ人であり……”それ”を作る能力を有しているだろう事は、最初から確信していました」

「な、何故それを孫に言わなかった!？」

「言う必要がないと思っていたからです。

ベジータと悟空君の実力差ならば、悟空君には失礼ですが変身する事はないか、あるいは変身するにしても戦いが佳境に入ってからと予測していました。

……私の予定では、ベジータが変身する前に悟空君と合流してからベジータの尻尾を切り、皆で一氣に倒してしまうはずだったのです」

それに、トリゼットは言葉を続ける。

「それに……悟空君は幼い頃、大猿と化して自らが敬愛していた祖父を踏み殺して

います。

……何も知らずに済むなら、それが一番だった……」

「……つまり、この状況は貴様にとっても予想外と？」

ピッコロの言葉が胸に刺さる。

責めているようなその視線が、リゼットの良心を苛んだ。

知らずに済むならそれが一番だった。

辛い過去など知らなくてもいいと思っていた。

だから、本来と違っていてもベジータを早々に倒してしまおうとリゼットは考え

ていたのだ。

そう。変身させてやる気などなかったのだ。

だが、全ての予定は崩れ去った。

何故かベジータは余裕のあるうちから大猿になり、悟空は真実を知ってしまった。

おそらくはあの魔族の女が何かしたのだろうが……何の為に？

そもそも、あれは一体何者なのだ？

「……はい、全ては私の計算違いです。

ベジータがこんなに早く変身するなんて思っていなかった……」
そう、この流れは本来ありえない事だ。

ベジータのプライドの高さを思えば、大猿化はまさに最後の手段。

自分が相手より劣っていると認めているに等しい屈辱の切り札。

それを、相手より上回っている状況で使うなどあり得ない。

妙に禍々しいサイヤ人の気。

明らかに本来より上昇している戦闘力、増えていたサイバイマン。紛れ込んでいたテンネンマンとジンコウマン。

そしてベジータの脈絡のない大猿化に……あの魔族の女。

偶然ではない。恐らくはあの女が本来の流れに手を加えている。

自分と同じような知識持ちの転生者か？

それとも、未来トランクスのような歴史の介入者？

自分が知らない、アニメオリジナルかゲームオリジナルの敵？

……わからない。推理材料が少なすぎる。

「……急ぎましょう。何か嫌な予感がします」

知識があるのに……否、知識があるからこそ、状況が全く分からない。
リゼットは唇を噛み、飛行速度を上げた。

・描写されなかった悟空VSベジータの流れ

1、ベジータが原作より強いので悟空がいきなり界王拳3倍

2、これedyouやく凶化ベジータを上回る

3、何故かベジータがここでいきなりもっと凶悪化し、大猿化↑今ここ

ゼノバースだと追い詰められてもいないのに大猿になるベジータは本当鬼畜や
で。

【各キャラ戦闘力】

・ベジータ

基本戦闘力…18000

凶悪化…23400

P ボール発動後…15000

大猿化…15000

・ナツパ

基本戦闘力…4000

凶悪化…5200

リゼットによる初撃ダメージ…3500

・ジンコウマン×2

基本戦闘力…4000

凶悪化…5200

・テンネンマン×5

基本戦闘力…2400

凶悪化…3120

・サイバイマン×10

基本戦闘力…1200

凶悪化…1560

【K^キi^ネn^クe^トc^トt】

リゼットが編み出した技の一つ。

戦乙女を模した気弾を生成し、敵へけしかける。

放たれた戦乙女は自らの判断で敵を追い、ただの追尾気弾では不可能な動きで敵を追い詰める。

フェイントは勿論、他の戦乙女と協力して逃げ道を塞ぐように追い詰める事も可能。

命中するまでどこまでも追いかけて来る上に、追いつけないと判断した時にはあえて撒かれたふりをして寝込みを襲う。

リゼット版ゴーストカミカゼアタック。

しかし術者の差により、ゴテンクスのそれよりも数段えげつない方法で追いかけて来る。

敵に触れても爆発しない繰気弾タイプもある。

第十七話 大猿ベジータ

リゼット達が到着した時、悟空は既に死に掛けていた。

大猿の両手に掴まれ、握り締められている。

あれではいかに悟空でも一たまりもあるまい。

恐らく、気の減少具合から見て全身の骨が碎けてしまっているだろう。

「ま、まずいぞ！ 悟空の気がほとんど残っていない！ 死ぬ寸前だ！」

「お父さん……！」

クリリンと悟飯が焦燥から速度を上げるが、リゼットはそれを手で制した。

残念ながら戦力差は歴然だ。この二人を突っ込ませても死人が無駄に増えてしま
う。

今この場で大猿に対抗出来るのは自分しかないだろう、とリゼットは分析した。

「私が大猿の相手をします。皆は隙を見て尻尾の切断を」

大猿と化したベジータの戦力は今のリゼットよりも上だ。

しかし、決して絶望的な数値ではない。

恐らく、このくらいならばまだ気霊錠の解除や重装備を脱ぐ必要はないだろう。しかし予想外に予想外を重ねた今回の戦い、油断は出来ない。

故に万全を期してバーストリミットを発動し、リゼットはその戦力を倍まで跳ね上げた。

「――ゴッドハンド
巨神の制裁」

気の固定化により、何の捻りもない拳を空中に作る。

ただしその形状こそ捻りのない拳だが、サイズは規格外。

大猿すらも殴り飛ばせる、100m級の巨人の腕。神の拳だ。

リゼットが拳を握り、何もない空間に対して突きを繰り出す。

無論、これは届かない。距離がありすぎるしサイズが違い過ぎる。

だがそのリゼットの動きに呼応して気の拳も繰り出され、大猿を横合いから思いきり殴り飛ばした。

殴る。

ただそれだけの攻撃で大気が爆ぜ、周囲の岩場が崩壊し、ようやく追いついてきた仲間達すら風圧で吹き飛ばした。

無論、殴られた本人はたまったものではない。

悟空を手放し、ベジータは岩を削りながら遠方へと吹き飛んで行く。

リゼットはそこに、追撃とばかりに拳を突き上げる動作をする。

すると、倒れているベジータの下からまたも巨腕が出現し、倒れている彼の顎を跳ね上げて強引に立ち上がらせた。

続けてリゼットが何かを踏む動作を行う。

次の瞬間、大猿の10倍はあろうかという巨大な足が虚空より降り、大猿をまるで蟲か何かのように踏み潰してしまった。

そしてどうでもいいが、ゴッド“ハンド”と言いながら足で攻撃している。酷い名前詐欺もあったものだ。

「……す、すっげえ……」

「ああ、流石は神様だ」

「……ちっ」

リゼットの猛攻にクリリン、天津飯が偽りのない驚きと賛辞を送る。

一方ピッコロは不機嫌だ。

世界征服の障害が予想以上に強大だった事に気付き、舌打ちを抑えられない。

「きっさまああ！ サイヤ人の王子である、この俺を足蹴にしやがったな！」

大猿が激昂し、その巨体からは想像出来ない俊敏さでリゼットへ飛びかかる。

だがリゼットはその小さく、細い腕を前に突き出し——己の数十倍はあろうかという大猿の拳を片手で受け止めた。

その衝撃でまたも周囲が砕け、リゼットの白金の髪がなびき、スカートが揺れる。だがそれだけだ。肝心のリゼットに拳が届いていない。

少女の頼り無い細腕に、巨大な猿の一撃が止められてしまっている。

「なん、だとお……!!」

「私本体ならば弱いとでも思いましたか？ ……温いですよ」

今の一撃で腕が痺れてしまったのを表に出さず、サイズの差を活かして大猿の懐へ飛び込む。

そして掌底。

大ききの差など知らぬとばかりに大猿の顎を跳ね上げ、無理矢理空中へと上げる。そして再度気の固定化により、巨大な拳を顕現。

大猿すらも掴めるほどの白い気の腕を以て、大猿を握り締めた。

先程悟空がやられていた事の再現だ。

「くっ、くそっ……！」

逃げ出そうと必死にもかくベジータの顔の前まで行き、彼を見下ろす。

その顔には笑みも何もない。ただ、侵略者に対する無情なまでの氷の無表情があるだけだ。

「今です、クリリン君」

「は、はい！」

リゼットの指示に応え、クリリンが気円斬を放つ。

地味にこれが初披露の格上殺しは空気を裂きながらベジータへと向かい、自由に動く事の出来ない彼の尻尾を容易く切断してみた。

するとベジータは呻き声をあげながら身体を縮ませていく。

大猿への変身は尻尾がなければ成立しない。

つまり尻尾を切れば変身もそこで解除されてしまうわけだ。

後は元に戻ったベジータを皆で倒すだけだ。

しかしここでベジータはりゼットの予想外の動きを見せた。

身体が縮む事によって巨腕の拘束から逃れたわずかな一瞬。

時間にして1秒にも満たぬ間。

その空白を狙い、地面に向けて口から光線を放ったのだ。

「――！」

無論、こんな光線はりゼットには痛くも痒くもない。

戦力に差がある上に明後日の方向へ撃たれた攻撃の余波などではダメージも受けない。

だが地面には悟空がいる！ 皆がいる！

咄嗟にリゼットはバーストリミットの倍数を上昇させ、刹那の間に悟空を拾う。

そして戦士達の前に移動してバリアを展開。彼等全員をベジータの攻撃から守った。

吹き荒れる爆煙。

視界を塞ぐ砂塵。

その全てをリゼットが起こした風が吹き飛ばし、視界が晴れる。

そして彼等はベジータの今の行動の真意を悟った。

「い、いない……？」

ベジータがいないぞ!？」

ピッコロの声に全員が動揺する。

ベジータが——逃げた。

爆発で目晦ましを行い、リゼットが他の皆に気を取られた瞬間を狙ってこの場からの離脱を成功させたのだ。

彼のプライドからは考えられぬ戦略だった。

きつと彼自身にとっても屈辱だっただろう。

要するに彼は、リゼットを己よりも上だと認めたのだ。

そして元に戻っては到底勝てないと悟り、大猿であるうちに撤退した。

驚く程の機転、切り替えの早さだ。

これぞ戦闘の天才、ベジータの真骨頂。

彼は戦力で劣りながら、見事にリゼットを出し抜いたのだ。

とはいえ、リゼットならばここからでもベジータに追い付いて彼を仕留める事は

十分出来る。

何なら転移で宇宙船に先回りして破壊してもいい。

しかしリゼットは、あえてベジータを見逃す事にした。

今は敵だが、しかしベジータが今後果たす役割は大きく、無視出来るものではない。

トランクスの誕生を考えれば、猶更ここでベジータを殺すわけにはいかないだろう。

そもそも、リゼットは最初からベジータを『倒す』つもりではあっても『殺す』気などなかった。

倒した後に宇宙船に押し込んで帰してしまうつもりだったのだ。

ならばむしろ好都合。これならば逃がしてしまったという事で皆に説明をする手間が省ける。

とはいえ、とりあえず追いかけるポーズくらいは取っておくべきだろう。

そう考え、リゼットはあえて速度を落としてベジータを追跡した。

★

「畜生……まさか俺がこんなレベルの低い惑星の連中相手に引き返す事になるとはな」

ベジータは歯を食い縛り、宇宙船に向かいながら必死に屈辱を抑えていた。

彼はプライドの高い男だ。

しかし正確に戦力を分析出来ないほどの愚者ではない。

込み上げる怒りを、自制心を総動員して封じ込む。

とにかく、まずは一度引き上げだ。他はともかくあの白い女にだけは勝てないと認めるしかない。

神、とか呼ばれていたか……恐らくはこの惑星の神なのだろうあの女。

正直桁外れだ。まさか大猿になっても勝てない奴がフリーザ以外にいたとは思わなかった。

「くそつたれ……頭に来るぜ……！」

ベジータがよく口にする『俺が宇宙一だ』という台詞は大猿も計算に入れての言葉である。

大猿にさえなれば、醜くはなるがああの新ニューにすら勝る。

唯一勝てないのはフリーザだけだと思っていた。

だがそこに、もう一人勝てないのが出て来てしまった。……とんでもない屈辱だ。「今に思い知らせてやる。宇宙一はこのベジータ様だという事を」

とにかく今は退く。

退いて、それでナメック星に向かうしかない。

ナメック星にはどんな願いも叶う不思議な玉がある、と言われている。

ただの下らない伝説だと思っていたし、だからこそフリーザもベジータも今までそこに興味を示さなかった。

どこの惑星にもある御伽噺、神話の類だと思って無視していたのだ。

しかし地球にはそれが実在し、死んだはずのカカロットも確かに生き返って来た。

そしてそれを作ったのは、恐らくナメック星人だ。

ならばその本場……ナメック星にいけばきっと同じものがあるはずだ。

だからまずは、それを手に入れる。

そして不老不死となり、またこの地球に来て今度こそあの女を殺してみせる。

その為に、今は一度退くしかなかった。

宇宙船は地球に入ると同時によく分からない力によって墜落させられたが、壊れてはいないからまだ飛べるはずだ。

……今にして思えば、あの墜落もこの星の神のせいだと分かる。

つくづく、腹の立つ女だった。

「……べ、ベジー、タ……。た……たすけて、くれ……」

パプリカ荒野へ行くと、そこではまだしぶとく生きていたらしいナッパが這いずり、助けを求めてきた。

その姿にベジータが抱いた思いは同情か、哀憐か……。

否、そんな感情などベジータにはない。

無様なナッパの姿を見て感じるのは不快感。

それでもサイヤ人かという侮蔑の感情のみ。

「じ、自分じゃ動けねえ、んだ……。

た、たの、む……俺を、ポッドに……運んでくれ……」

「……クズが」

「……え？」

「見苦しいと言っているんだ。

本当なら俺がこの手でぶっ殺してやる所だが、そんな暇もない。

勝手にそこで死んでやがれ」

そう吐き捨て、ベジータはナッパに構う事なく宇宙船に乗り込む。

そして手早く行き先のセツトを済ませると、そのまま宇宙へと飛び去って行った。同族への情けなど微塵もない。

その姿にナッパは怒りに震え、地面を叩く。

だが、これは彼自身もまた行ってきた事だ。

ラディッツを弱虫と嘲り、見捨て、死後も侮辱した。

それが今度は自分の番だった。それだけの事でしかない。

それから遅れる事十数秒。リゼットが他の戦士を置いて一足先にパブリカ荒野へと到着する。

ベジータはどうやらもう出発してしまった後らしく、影も形も見当たらない。

宇宙船も一つ減っているのです、もう宇宙に行った後と考えていいだろう。

残っているのは……しぶとくもまだ生きていたナッパと、彼の宇宙船だけだ。

「見捨てられましたか……哀れな」

リゼットはナツパの近くまで歩き、彼に掌を翳す。

躊躇などそこにはない。

彼は敵で、そして残忍なサイヤ人だ。

和解など期待出来る人格ではないし、心底殺しと破壊を楽しむような下劣な男だ。

そこに情けをかける余地などありはしない。

だから彼を消してしまいう事に躊躇などあるはずもなく、リゼットは一切の感情を排し氣を固形化、ギロチンを創造する。

狙うは首。せめて長くは苦しめぬよう一撃を以て葬り去るつもりだ。

しかしそこに、声が割り込んだ。

『ま、待ってくれ、神様！』

「——！」

ギロチンの刃が罪人の首を刎ねる直前。そこで断罪が止まった。

リゼットは腑に落ちないような顔をしながらも、テレパシーで声の主へと返答を送る。

一体どういうつもりで止めたのか、まずはその真意を問わねばこの刃も振り下ろせないからだ。

『……一体どういうつもりですか、悟空君』

『わ、悪い神様。す、すまねえがそいつの事を見逃してやっちゃくれねえか』

『正気ですか？ 彼はこの惑星を滅ぼそうとした者の片割れですよ。』

今見逃しても、後で必ず同じ事を繰り返すでしょう。

まさかとは思いますが、見逃したからといって心を入れ替えるかも、などと甘い事を考えてはいないでしょうね』

リゼットはこの悟空の我儉に覚えがあった。

そうだ、確か漫画にも確かにこんなシーンはあった。

だがその対象はナッパではなくベジータだったはず。

しかし対象どうこうの問題ではなく、孫悟空というのはこういう男なのだろう。戦闘時ならばいざ知らず、それが終わってしまうとどうしても本来の優しい性格が前面に出てしまう。

だからピッコロにも仙豆を与えたしベジータも助けた。

ギニュー特戦隊にも情けを与えたし、あのフリーザすらも一度は見逃そうとした。そして何より困った事は、リゼットはそんな悟空の事が——いや、そんな悟空だからこそ好ましく思っているのだ。

きつとこれはリゼットだけではなく、クリリンやヤムチャ、天津飯達もそうだろう。

馬鹿だしドジだし戦闘狂だしと困った所ばかりの悟空だが、それでも不思議と憎めない。

気付けば皆が惹かれている。

これがナッパ本人の命乞いだったならば、『例えば貴方が昔、捨てられて震えていた仔犬を助けたとしましょう。でも死ぬ』と一切の躊躇なく始末出来ただろうが悟空からの命乞いでは躊躇もしてしまう。

『わ、わかってるさ……でもよ、何かそいつが哀れすぎてさ……』。

頼む、そいつにチャンスをやってくれ……そいつとんでもなく悪い奴だったけどよ、このまま使い捨てられて死ぬんじゃないか……敵ではあってもやりきれねえ』

『……………見逃すのは一度だけです。』

もしも彼がまた悪事を働こうとしたら、今度こそ消します。それで構いませんね？』

『ああ、悪いな神様……』

リゼットは小さく溜息を吐くとギロチンを消し、代わりに気をナツパへと与える。勿論与えるのは最小限。ギリギリ動ける程度のものだが、少なくともこれで死ぬ事はなくなっただろう。

何故止めを刺されないのか不思議そうにしているナツパへ、リゼットは本心を消した笑みを向けての最初にして最終の通告を下す。

「一度だけ貴方に生きるチャンスを与えましょう。その拾った命で平穩に生きるならばそれで善し。」

もしも懲りずに同じ事を繰り返せば、その時こそ本当にその首を落とします」

「た……助けてくれるってのか？ この俺を……。こ、この惑星を侵略しに来た俺を……」

「はい。正しい選択を期待しています」

笑顔を浮かべ、優しい声色で告げる。

勿論こんなものは本心ではない。

笑顔にしている理由は、そうしないと嫌悪が顔に出てしまいそうだから。

声色を無駄に優しくしているのも同様の理由だ。

それに対しナツパが取った行動は、リゼットの予想より遙かに——そして悪い方向へと突っ切っていた。

「し、信じられねえ……親からも『名門の恥晒し』と言われ、ベジータの付き人になってからは王子の金魚の糞と陰口を叩かれ、フリーザやザーボン、ドドリアには腰巾着の猿野郎とかハゲとか呼ばれ、自分だってM字ハゲのくせにちょっと髪があるからってラディッツの野郎にはハゲと陰口を叩かれ、挙句ベジータに捨てられ……そんな俺を助けてくれる奴がいるなんて……」

「え？」

「あんた——あんた、俺の女神様だァァ!!」

——どうしてそうなった？

漢泣きにむせびなくナツパを前に、リゼットは何を間違えたのかも分からず引きつった笑顔を続けるしかなかった。

【ゴッドハンド】

気の武器化バリエーションの一つ。

武器ではなく巨大な拳を創造して敵をブン殴る。

『敵がでないなら、こっちはもつとでかい拳で殴ればいいじゃん』という単純な発想から生まれた。

気弾の一種ではあるが爆発しない。拳の形をした巨大な繰気弾と思っている。そしてハンドといいつつ蹴りも出す。

どうでもいいがこの主人公、やたら繰気弾もどきを多用している気がする。

第十八話 リベリオンドライバー

人と人の出会いは、時に偶然によって成立する。

例えばベタで使い古された、何の捻りもない例えを一つ出すならば曲がり角でぶつかる、などといったものがそれだ。

もしかしたらそのぶつかった二人は男女なのかもしれないし、それが切っ掛けで知り合い、交友を結ぶかもしれない。

そこから発展して交際するかもしれないし、上手くすれば結婚して子供を儲けるのかもしれない。

万分の一、億分の一の可能性に過ぎないだろうが、その子孫のうちの誰かから偉人が出て歴史そのものに名を連ねるのかもしれない。

しかし、もしもほんの少し時間がずれたならば……あるいは他の誰かに呼び止められたなら、その出会いは成立しないし、後の歴史も全く違うものとなるだろう。これは言うまでもなく極端な例であり、全てがそうであると言うわけではない。しかし決して有り得ない事でもないのだ。

歴史の転換は偶然だった。

本来存在しない異分子が、過去に戦士を送り修行をさせた。

その結果サイヤ人の一人パンブーキンが、本来制圧すべき都市をなかなか制圧出来ずに無駄に時間を費やした。

しかしここまで語っておいて、こう言うのは酷だが、これからの話にパンブーキンは全く関係ない。

これからの話に大きく関わるのはパンブーキンの遅れのせいで巻き添えを喰い、本星への帰りが遅れた他のサイヤ人達のうちの一人、最下級戦士のバーダックだ。最下級戦士の出でありながら、その戦闘力はエリート戦士を凌ぐ程であり、勇猛さにおいて並ぶ者なし。

一部のエリートやサイヤ人の王にすらその名を記憶されている、と言えばどれだけ彼が秀でているのか分かるだろう。

その彼が妻の待つ配給所へと急いでいる最中の事。

あまりに急いでいたのが悪かったのだろう。バーダックは道すがらで一人の子供を跳ね飛ばしてしまった。

無論故意ではないし、悪意もない。

しかしぶつかってしまったのは事実であり、非はこちらにある。

サイヤ人にしてはそこその良識を持つバーダックは、倒れてしまった子供を見ると、面倒くさそうに手を差し出した。

「っと、悪かったな。急いでたんだ。立てるか？ 小僧」

言いながら相手の顔を見る。

そしてバーダックはわずかに目を見開いた。

そこに転んでいる子供……その容姿が自分とそっくりだったのだ。

特に、妻からも特徴的と呼ばれる髪型などそのままだ。

もしこの二人を並べれば、きっと親子と勘違いする者も出るだろう。

あえて違いを言えば、バーダックと比べてやや色黒というくらいか。

「なんだ、オッサン。俺の容姿がそんなに気になるか？

別におかしな事じゃねえ……俺達使い捨ての下級戦士はタイプが少ないからな……

…。

そりゃあ、こういう事もあるさ」

不敵に笑いながらバーダックの手を払い除け、少年が立つ。

どうやらバーダックと似た外見に違わず、かなりの跳ねっ返りのようだ。

しかし不快ではない。サイヤ人とはこのくらい威勢がよくてナンボの人種だ。

バーダックもまたニヤリと笑い、少年に悪態をつく。

「確かにその通りだが……こうもソックリだと、流石に気味が悪い。

お前、ターレスだな？ 俺にソックリのガキがいるって、噂だけは聞いてたぜ」

「へっ、そういうアンタはバーダックだな？

下級戦士にしちゃ、やけに腕が立つ奴がいるって評判だ。

……一度、手合わせ願いたいね」

サイヤ人は戦闘種族である。

戦えば戦うほど強くなる特性に、大猿への変身、高い平均戦闘力。

そしてそれらの特性を支える、旺盛すぎる戦闘意欲を共通して備えていた。

戦闘意欲の薄いサイヤ人など、バーダックの妻であるギネくらいのもんだろう。

「威勢のいい小僧だな。

いいぜ……今日はちと用事があるから受けてやれねえが、明日にでも受けてやる。

場所は第5トレーニングルーム……どうだ？」

「面白い。同じ年のガキ共はどれも腑抜けでつまらなかったんだ。

アンタのガキのラディッツってのも含めてな。

親父のアンタが息子とどれだけ違うのか確かめてやるぜ」

——結果は、ターレスの惨敗だった。

無理もない事だ。

いかに強いとはいえ、まだ幼年であるターレスと大人の中でもトップクラスのバーダックとでは始めから結果が見えている。

しかしターレスは一度の勝負ではへこたれなかった。

二度、三度、四度……その日より彼は幾度となくバーダックに勝負をふっかけ、とにかく暇さえあればバーダックに喧嘩を売った。

己よりも遥かな高みにいる男、その出会いに生き甲斐を見出したのかもしれない。いつかバーダックを倒し、跪かせて命乞いをさせてやると鼻息荒く彼は語った。そしてバーダックもまた、そんなターレスの挑戦を面倒臭そうにしながらも、決

して断らなかった。

時には惑星侵略にすら彼を連れ出し、命令違反を犯して戦闘経験を積ませた。

いつしか彼等は常に一緒にいるようになり、その様はまるで本当の親子のようであった。

口は悪く、何かといえど罵声を飛ばし合う間柄ではあったが、そこには気の知れた友人のような気さくさがあった。

「おいターレス……お前、親はどうした？ 一度も見た事がないが」

ある日の配給所で、ギネの運んでくれた肉を頬張りながらバーダックはターレスに親の事を聞いた。

普通ならこういう時はもっと遠まわしに、それとなく聞くものだが、生憎とバーダックにそんな器用さなどない。

そして問われたターレスもまた、気にした様子もなく肉に齧り付いていた。

「ああ、死んだ。侵略先の星で原住民に抵抗されてあっさりとな」

「……辛いかな？」

「いや全然。あの男が死んだのは、あいつが弱かったからだ。」

所詮は下級戦士、無様なもんだ」

ターレスはまた、肉を齧る。

そして咀嚼もそこそこに、テーブルを強く叩いた。

「だが俺は違う！俺は強くなってみせる！」

そしていつか、フリーザに取って代わり、この全宇宙を俺の前に跪かせるのだ！

」

思わずバーダックとギネは周囲を見渡す。

もしここにザーボンやドドリアがいて、今の発言を聞かれていたらその場で処断されている危険発言だ。

しかし幸いにも彼等はいなかったようで、ほっと一息をついた。

「へっ……大した野心だ。俺に一度も勝てねえガキがほざきやがる」

「他人事みたいに言うなよ。」

もしかしたら、アンタ譲りかもしれないんだぜ？」

「……？」

バーダックとターレスに血の繋がりは無い。

したがって、譲るものもない。

ターレスもそれは十分に承知しているはずなのだが、にもかかわらず出てきた言葉にバーダックは目を丸くした。

「知ってるか？ アンタのガキ……ラディッツと俺だが、もしかして取り違えたんじゃないか、って噂があるんだぜ。丁度育児ポッドも隣だったしよ。

俺も眉唾物とは思うんだがな……ほら、誰が見ても俺の方がアンタと似てるだろ。性格も、下級戦士離れた戦闘力も、な……。

無様に死んだあの男も、俺とは似ても似つかない前髪が後退したロング男だった。もしかしたら——もしかするかもしれないぜ……なんて」

「はっ！ ばあか！」

ターレスのその言葉に、バーダックは彼の頭を押さえつける。

そして自らとよく似たその髪の毛をわしゃわしゃと乱暴に撫で回した。

「誰がお前みてえな可愛げのねえガキ欲しがるかよ。

お前みてえのはな……弟子で十分だ！ それもとびつきり可愛げのねえ、出来の悪い弟子だ！

わかったら二度と下らねえ事ほざくな！」

「わったた……痛っ、いてえってば！」

ターレスは不機嫌そうにバーダックの手を払い除ける。

そしてしばらく彼を見た後、いつも通りの笑みを浮かべた。

「そうか、弟子か……俺はアンタの弟子……」

……へへっ……なら、それでいい」

そう言って、ターレスは満足そうに笑った。

★

「よおバーダック、次男が生まれたんだってな？」

「ターレスか」

「聞いたぜ、戦闘力2だったな。」

隣のガキ……ブロリーってのが1万ってのを考えると、ひでえもんだなオイ」

数年経ち、以前よりも逞しくなったターレスがバーダックへと話しかける。

今や二人の容姿はほぼ変わらず、僅かに顔立ちや肌の色が異なるのみだ。

いや、まだ若干バーダックの方が身長が上だろうか。

「全くだ。このバーダックのガキともあろうものが……クズがつ！」

「だが、喧嘩して隣のガキを泣かせたらしいじゃねえか。」

戦闘力は低くても根性は大したもんだ。間違いないカカロットはアンタのガキだぜ。

……強くなるぜえ、そいつはよ。何ならこのターレス様が鍛えてやろうか？」

そう言い、ターレスは育児ポッドの中の赤子を見る。

穏やかに眠るそのあどけない表情はなるほど、母親の面影を思わせる。

しかし特徴的な頭髮は父親そっくりだ。

ターレスはポッドを乱暴に叩き、からかうように話す。

「よおカカロット、てめえよく生まれたなあ。」

誇れよ、お前。お前の親父はこのターレス様も認めている男なんだ。

……早く大きくなれよカカロット……んでよ、大きくなったら俺と一緒に暴れようや。

好きな星をぶっ壊し、美味しい物を喰って、美味しい酒に酔う……こんな楽しい生活はないぜえ」

「おいターレス、てめえ人のガキに何教えようとしてんだ」

バーダックが容赦のない拳骨をターレスへと叩きこむ。

戦闘力も大分近付いた事もあり、バーダックの突っ込みには容赦がない。

無論それは、ターレスならば大事に至らないというある種の信頼が取らせる行動だ。

そしてターレスもまた、言葉にこそしないがそれを理解していた。

それはターレスにとって幸福な日々だった。

超えるべき目標、超えたくない目標。

いつものようにバーダックに突っかかり、負けて、一緒に飯を喰い。

共に肩を並べて戦い、背を守り、守られる。

何かあれば口汚い罵声を飛ばし合い、喧嘩に発展してまた負ける。

負けるのは屈辱であったが、しかしターレスは心のどこかでそんな日々が続く事を望んでいた。

ずっと続くのだと、思いたかった。

しかし永遠などない。

終わりはいつか訪れる。

それは、ターレスが辺境の惑星を攻めている時の事だった。

バーダックが妙に勧めるから、気乗りはしないが向かってみたものの、やはり拍子抜けする程に雑魚しかいなかった惑星を攻め落とした日の事。

その日、ターレスの持つスカウターはやけに調子が悪かった。

いや、というよりは通信システムだけが意図的に弄られていたというべきか。

その事に気付いたのは星を滅ぼした後であり、ターレスは仕方なくありあわせの機材でスカウターを修理し、バーダックへの通信を飛ばした。

「お、ようやく繋がったか。

おいバーダック、こっちはお前に言われた惑星を今、潰した所だ。

しかしわからねえな。こんな星に一体何の価値があるってんだ？」

『……………』

「だが途中で立ち寄った星で面白い物を見付けたんだ。

神精樹っていうらしくてよ。こいつを食べば戦闘力が……って、聞いているのか？

バーダック」

一方的に話していたターレスだが、バーダックの様子がおかしい事に気付き、言葉止める。

通信はちゃんと直ったはずだ。

なのに返事がないとはどういう事だろう。

周波数はちゃんとバーダックに合わせているし、聞こえていないはずはないと思うが。

まさかスカウターそのものを付けていないのだろうか？

そう考えているとスカウターから聞きなれた、しかしバーダックのものではない女性の声が響く。

『その声……ターレスかい？』

「ギネ。何であんたが……？」

『バーダックなら、もういないよ。』

フリーザを止める為に行ってしまったからね』

「フリーザを……？ おい、そりやどういう事だ？」

ターレスの背筋を悪寒が走りぬけた。

今までに感じた事のないような、嫌な予感だ。

まるでこれから、全てを失ってしまうような……そんな取り返しが付かない事が起ころうとしている。

何故だか、それは確信染みた恐怖を伴ってすらいた。

『フリーザが私達を裏切ったんだ……トーマ達も殺されてしまったらしい。』

バーダックがそう食堂で叫んでたって、私もさっき聞かされたんだ。

他の皆は信じてないようだったけどね……』

「！ トーマ達が……!?!」

『バーダックはフリーザを倒す為に一人で飛んで行ってしまったよ。』

……けど、どうやら……駄目だったみたいだ』

スカウターの向こうから聞こえるギネの声には、泣き声のような嗚咽が混ざっていた。

恐らく向こう側で彼女は泣いているのだろう。

それに——何だ？ 何かが迫っているような音が聞こえる。

何かとてつもなく大きな、炎か何かが迫っている音だ！

「おい！ ギネ！ 何だこの音は!!」

一体そっちで何が起こっている！ ギネ!!」

『ターレス……私は、あの人と一緒にこの星と運命を共にするよ。

きつと、一人じゃ寂しいだろうからさ……。

ああ、そうだ……バーダックの提案で地球にカカロットを飛ばし子として送ったんだけどね……あんた、あの子の事を……』

ギネの言葉はそれが最期だった。

まだ言葉の途中だったろうに、直後に聞こえた爆発音に全てが飲み込まれたのだ。鼓膜を破るような音はほんの一瞬のみであり、後は通信切れの雑音が響くばかりだ。

恐らく、向こうのスカウターそのものが破損したのだろう。

「……………おい？」

おい、ギネ？ ……お、おい。冗談が過ぎるぜ？

なあ、これは何かの嘘だろう？ ふ、二人で俺を驚かせようとしてるんだよな

？」

何度も周波数を合わせ、通話を試みる。

何度も何度も。何度も何度も。

だが彼女の声は聞こえない。バーダックの声も聞こえない。

動揺する一方で、ターレスの冷静な戦士の部分は考えていた。

あの不吉な音はきつと、巨大なエネルギー弾か何かが惑星ベジータに迫っていた音だ。

ギネとの最期の通信で記録されている座標も惑星ベジータだから、間違いはない。そして恐らく、その気弾の直撃によって惑星ベジータとギネは消滅してしまった。彼女の最期の言葉から察するに、犯人はフリーザだ。

というより、あいつぐらいしかそんな事を実行に移せない。

そしてバーダックはそれを察し、カカロットを地球とかいう惑星に飛ばし子として逃がし、単身フリーザに挑んだ。

そしてその結果は……。

「……フリーザ……」

「くそっ！　くそっ！」

だが、このまま終わりはしない。

終わってなどなるものか。

まだサイヤ人は滅びていない、まだ自分とカカロットが残っている。

ならば何時の日か……いつの日か、フリーザを玉座から引き摺り降ろしてやる。
全宇宙を支配し、あいつの頭を踏み躪って虫ケラのように岩場に叩きつけ、跪かせて命乞いをさせてやる！　その上で屈辱の中で殺してやる！

「くそおおおおおおおー！ー！ー！」

——この日を境に、ターレスは残忍な悪のサイヤ人へと変貌した。

元々悪に偏っていた男だが、この一件で完全に悪として振り切れてしまったのだ。
いつか必ずフリーザを殺す——その執念だけで彼は強くなり、星々を侵略して己の養分へと変え続けた。

そして十数年後、やがて彼はその惑星に目を付ける事となる。

その惑星の名は地球。

かつて、カカロットが飛ばし子として送られた銀河の辺境であった。

Q、このSSではターレスとラディッツは本当に取り違えてるの？

A、違います。ラディッツは正真正銘バーダックの息子ですのでご安心を。ターレスの発言は、『そうだったらいいな』という彼の願望に過ぎません。

時の界王神「……よし、あの部屋壊そう。やばいわアレ」

トキの部屋「最早ここまでか……死兆星が私の頭上に輝いている……」

※時の部屋が何かの法に接触したようです。

第十九話 地球まるごと超決戦（1）

「あれが地球か」

宇宙船の中、髪をおさげにした赤い肌の巨漢が地球を眺めて感心したように呟く。その隣では青い長髪を首の後ろで束ねた男が腕を組み、素直な感想を口にした。

「美しい星だな。辺境の惑星も捨てたもんじゃない」

「……まさか……地球は確かカカロットが送られた星のはず。

とっくに滅びていてもおかしくないはずだが……」

青髪の男の言葉に被せるように、別の男の声が割り込んだ。

その声は、もし悟空を知る者が聞けば彼と勘違いしてしまうだろう。

暗がりの中から歩み出たその男の容姿は、例えるならば肌の黒い悟空といったところか。

黒い戦闘服を着用し、左目にはスカウター。

戦闘服の上から白いマントを羽織り、宇宙船の窓から地球を眺めた。

「それにしても美しすぎるな。」

カカロットめ……サイヤ人の本分も忘れたか？」

男——ターレスはフリーザの抱える軍団の一つ、『クラッシュ軍団』の首領である。

しかしフリーザ一味に属してこそいるものの、その心に忠誠などはない。

だからといってベジータに忠誠を誓っているかと言えば、これも違う。

ベジータなどとうに眼中にないし、フリーザにしても今はまだ従っている振りをしているだけだ。

いずれは自分がフリーザに代わり全宇宙を支配する……そんな悪しき野心を、彼は心に秘めていた。

そしてその野心の成就の為に、この地球に目を付けたのだ。

「ベジータのお坊ちゃんを退けたようだが、俺はあいつとは違う。

俺は絶えず最前線で戦い、何度も死にかけてきたんだ……バーダックのようにな。

願いが叶うというドラゴンボールも、この星の豊かな土壌も、全て俺が頂く。

そしてカカロット……貴様は息子共々俺の配下に加わるのだ」

ターレスは野心に歪んだ笑みに口の端を釣り上げる。

かつてバーダックの教えを受けた男と、バーダックの息子。

その邂逅は、すぐそこにまで迫ってきていた。

★

ナッパはあれから、リゼットに言われた通りどこかへと飛んで行った。

どうせすぐに人殺しなどに手を染めて、結局自分が処断する事になるのだろうと思っていたリゼットだったが、ナッパは今の所何も悪事を働いていないようだ。

それどころかとつくの昔に消えたと思っていた龍天女教へと入信し、毎日毎日五月蟬いくらいの祈りを捧げている。

正直意外……というか完璧に予想外過ぎた。何がどうしてあんなった。

いくつか理由を挙げるとするならば、まずその一つにサイヤ人の女性の好みが挙げられるだろう。

サイヤ人というのは今更語るまでもなく戦闘種族であり、必然的にその女性も好戦的かつ気の強い女ばかりになる。

ならば子孫を残すという意味でもサイヤ人の男はそういった女を好きになるよう本能で仕込まれており、彼等是一部の例外を除き気の強い女性を好む傾向にあつ

た。

勿論強い女というのも好きだ。何せ戦闘力は遺伝による要素も大きく強い子供を残すならば伴侶も強い方が望ましい。

つまり戦闘力、気の強さ共に強い女というのはサイヤ人の男にとって理想の女性像なのである。

リゼットはその見目はともかく、一見すると穏やかな女性でありサイヤ人の好みには合わない。

実際ナツパも最初は見目の麗しき以外に興味を持ちはしなかった。

だが実際蓋を開けてみればナツパのセクハラ発言に痛烈なカウンターを返すわジンコウマン達を相手に全く怖気付かないわ挙句の果てに大猿になったベジータすらボコるわで散々であった。

こうなれば流石にナツパも気付く。『あ、こいつ滅茶苦茶気が強いわ』と。

そしてそこに、聖母の如き微笑みと見逃し宣言である。

実際は裏で悟空の命乞いがあったり、笑顔は嫌悪感を隠すための仮面だったりしたのだがナツパがそこまで察するはずもない。

ついでに言うならばナツパは散々叩きのめされた後にベジータに見捨てられて屑とまで呼ばれるトリプルコンボを喰らった後であり、心が酷く弱っていた。例えるならば世界的に有名なボクサーが絶対に負けるわけもない地方の高校のボクシング部にドヤ顔で殴りこんだら一方的にボコられてコーチから『え？ お前そんな雑魚だったの？ ……ないわー』と絶縁状を叩き付けられたようなものだ。これは心が折れる。

更に加えるならばナツパは誰かに優しくされた経験が皆無であった。

名門出のエリートと自称はしており、実際に戦闘力4000は名門として恥じるようなものではないが、しかし飛び抜けているわけでもない。

あの王子の側近をするならせめて6000はないと厳しい。

例を挙げるならば、ナツパ同様に名門出のエリートであったパラガスという男は戦闘力9000である。

更に加えて言うならば、下級戦士のバーダックは9000、トーマが5000、パンブーキンが4200、トテッポが4000であり、ますますナツパの肩身は狭かった。

その為周囲からは名前だけの名門などと蔑まれ、更に我儉なくせに戦闘力1800の王子のお守りを毎日続けねばならない。

繰り返すがナツパは決して弱くない。ただ比較対象が強すぎただけだ。

そんなストレスからとうとう彼の頭髮は完全に失われ、彼は見事なハゲとなった。ここで思い出して欲しいのがサイヤ人の頭髮の特徴である。

サイヤ人は生まれた時から無駄に頭髮が変化しない——つまり地球人のように頻繁に抜けもしないが生えもしない。

故に一度ハゲとなったナツパに髪が生える希望はなく、彼は生涯ハゲをここで決定付けられ、彼への陰口が一つ増えてしまった。

サイヤ人が絶滅した後もフリーザやその側近に馬鹿にされる日々……腰巾着と呼ばれ、金魚の糞と呼ばれ、ハゲと言われる。うるせえぞドリア。お前だって髪なんかねえだろ。

黙れザーボン。ちょっと顔がいいからって会う度に醜いと連呼するな。

我儉過ぎる三十路王子のお守り……。

隠す気もなく続く陰口の数々……。

圧倒的な戦闘力格差……。

ベジータとの差が大きすぎる為に言われる『あの二人いらなくね?』のその通りすぎる言葉……。

サイバイマンを買う為に軽くなり続ける財布……侵略の度にベジータの思い付きで無駄に減らされるサイバイマン……。

唯一の格下であるラディッツの死。それによって自動的に成立するヒエラルキー最下位……。

存在しない居場所……労わられない日々……増え続ける仕事……増え続ける心労……。

休日なき日々……たまの休暇でも呼び出される……無駄にプライドだけは高い王子様……ベジータの引き立て役……。

ナッパはもうとくに限界だった。そう、限界だったのだ。髪が全て抜け落ちる程に限界ギリギリパワーだったのだ。

そこにかける優しい言葉。

見目麗しい少女の微笑み。

溢れ出る神々しい後光。

そしてリゼットもあまり自覚していない、何時の頃からか会得してしまっていたカリスマ性。

具体的には天女と呼ばれ始めた頃から芽吹き、信仰を集める事で成長し、そして神となる事で花開いてしまった人が自然と頭垂れて信奉してしまう人ならざる文字通り神がかった存在感。

それが弱りきったナツパにジャストミートした。クリティカルヒットした。オーバーキルして死体蹴りした。

故にこそその結果であり——だがリゼットがそれを知る方法はなかった。

ともかく、これで犠牲なしでサイヤ人との戦いを乗り切る事には成功したわけだ。悟空も重症ではあったが仙豆によりすっかり回復し、今では前よりも調子がいいくらいだ。瀕死パワーアップ美味しいです。

リゼットは天界より下界を見下ろしながら、次の事を考える。

本来の流れならば、この後はナメック星編だ。

死んだ仲間達を蘇らせる為にナメックの星へ行く必要があるわけだが、ここでは

その必要がない。

では、もし自分達が行かなかったらどうなるのだろう。

まずベジータは、永遠の命を得られないだろう。

6つまでは集められるかもしれないが、最後の一つは最長老の所にある。

そしてベジータではネイルに勝てないのだから、その一つを得る事は決して無い。

後はギニュー特戦隊の登場でベジータが殺されて、それで終わりだ。

かといって、フリーザも願いを叶える事は出来ないだろう。

まず最長老の寿命が尽きてしまうだろうし、その前に集めたとしてもナメック語が分からない。

もしかしたらデンデ辺りを脅してポルンガを呼び出す所までは行くかもしれないが、結局願いを言うのはデンデだ。

つまりナメック星人側には必ずチャンスが訪れる上に、デンデがここで何を願ってもフリーザには分からない。

だからここで『フリーザ以外を別の惑星に逃がしてくれ』とでも頼めば、そこで終わる。

フリーザの事だから、もしかしたらナメック星人達を見付けてしまうかもしれないが、どのみちもう最長老は死んでいるだろう。

そうなれば次にフリーザが目をつけるのは……。

「……このままだと、そう遠く無い未来にフリーザが地球に来てしまいますね」

私情を抜きにして冷酷に考えるならば、一番いいのはフリーザがナメック星を滅ぼした後にそのまま地球をスルーする事だが、そう都合よくいくとは思えない。

地球にもドラゴンボールがある事は既に伝わっているだろうから、遅かれ早かれ絶対にフリーザはこちらに目を付けてしまう。

それにナメック星との友好関係が結べないのも後々を思うと辛い。

何より、戦力面はどうだ？

地力だけならば地球でも上げる事は出来る。

リゼットが修行を付ければ、きつと悟空やその仲間達はナメック星に行くのと遜色ない強さまで伸びてくれるだろう。

だが超サイヤ人は？ あれはフリーザとの戦い抜きでなれるものか？

……………。

……いや、待て。冷静に考えるとあれ案外、条件軽いかもしれない。

悟空の名シーンに眼を曇らせがちだが、別に覚醒するのに名シーンである必要などない。

悟飯が妄想で覚醒していたし、恐らく最も厳しいのは感情よりも、覚醒に必要な最低戦闘力だ。

逆にそれさえクリアしてしまえば、後は妄想の怒りでも覚醒出来てしまうだろう。しかし最大の問題はやはり、ナメック星とのパイプが出来ない事。

これはどうにかしないと、後々に本当に詰む。具体的にはブウ編で詰む。

(……ピッコロ達を死なせてしまう方が正解だった？)

違う、そんなはずはない。見殺しにするのが正解なわけではない。

考えろ……私の持つ最大の利点はこの知識。

どうすれば、有利に立ち回れる？　この星を守る事が出来る？)

……まず、重要な点は二つ。

ナメック星のドラゴンボールで万一にもフリーザかベジータが不老不死になってしまう事。

そして、ナメック星人の全滅により今後の運命が悪い方向へと流れる事。

要は、まずこの点に注視してそれを防げばいい。

(ドラゴンボールを使って、ナメック星人全員を地球へと転移させる……。

……いや、無断転移では信用を得られません……まずは最長老に話を通さないと。悟空君を通して、界王様経由でまず私からナメック星の危機を伝えて同意を得る。そうすれば……)

外面は涼しげな顔のまま、頭の中で必死に今度の展望を巡らせる。

まずはナメック星人全員をドラゴンボールで地球へ転移させてしまうというのはどうだ？

当然向こうも戸惑うだろうが、理知的なナメックの人々ならば事情を説明すれば理解してくれるはずだ。

そうすればとりあえずフリーザとベジータはしばらく、ナメック星で混乱してくれるだろうし、上手く潰し合ってくれるかもしれない。

フリーザはその後、当然地球に来るだろうがこちらにも準備をするだけの時間は得られる。

ナメック星のドラゴンボールも使わせてもらえるなら、フリーザ一味の宇宙船を宇宙空間で破壊してしまうという手も可能だ。

そうすれば宇宙空間で生存可能な宇宙人以外は死滅するだろうから、地球に来るフリーザの軍勢も一気に減るし、上手くすればそのままフリーザが宇宙の迷子になってくれるかもしれない。

……いや、駄目だ。この手は使えない。

ドラゴンボールは悟空の蘇生に使ったばかりで、次の使用には1年の期間を待たなければならぬ。

1年など待っていたら、ナメック星人が減びてしまう。

つまり地球に残ったままだうにかする、という選択は取れない。

（やはり、ナメック星に向かうしかないようですね……しかし、どう皆に説明したものか。

理由はないけど、とりあえず行きましようと言った所で誰も来ないでしょうし……。私一人で行っても、多分フリーザには勝てませんし……）

いっそナメック星がベジータやフリーザに狙われているとぶっちゃけてしまおう

か？

そうになると、当然『何故知っている』という話になるが、そこは気の探知でナメック星を狙うフリーザが視えたとしても言えはいいだろう。

実際嘘ではない。リゼットが本気で気の探知と遠視を行えば、遠く離れたフリーザの姿だろうと視る事が出来るし、実際にフリーザはナメック星へ向かう準備もしている。

しばし目を閉じ、思案していたリゼットだが唐突に思考を中断して弾かれたように顔をあげる。

地上で何か、妙な物が蠢いている事に気が付いたのだ。

それに、よく探って見れば気の質もおかしい。

慌てて下界を覗き見れば、不気味に育つ妙な樹の存在が嫌でも目に入った。

今はまだ育っている最中だが、もしこれが育ちきれば地球の養分が全て吸い取られてしまう。

ぼーっとしている場合じゃない。

「これはまさか、神精樹!？」

神精樹——神のみが口にする事を許された禁断の果実だ。

そしてそれは、この地球の神殿にも一つだけ種が保存されている。

しかしリゼットはそれを使った事などないし、地球に向けて使うつもりもない。惑星フリーザとかを見付けたら使つてやろうかという気持ちはあるが、少なくとも己が守護すべき地球に使うなどという本末転倒な使用方法を実行する気は皆無だった。

つまり誰かが宇宙から持ち込んだとしか考えられない。

その時、突如としてリゼットの脳裏に何者かの声が響いた。

『地球の神よ、聞こえるか？ 儂は北銀河一帯を治める界王だ』

「！ か、界王様？」

その存在は知っていたが、声を聞く事はこれが初めてである。

リゼットは余りに唐突な銀河の神からのコンタクトに、流石に声を上ずらせた。

『地球は今、大変な事になっておる。

神精樹の事はお前も知っておろうが、その種が地球に植えられたのだ』

「……やはり、そうでしたか」

『悟空達は既に元凶の元へ向かっておるが、彼等だけでは神精樹をどうにかする事は出来ん。』

神精樹に対処出来るのは地球の神よ、お前だけだ。

悟空達に手を貸してやってくれ』

「畏まりました界王様。地球の危機への協力、ありがとうございます。」

—— 兎人参化、来なさい！ 地上へ向かいます」

「はい、仰せのままに！」

界王に礼を言うと、リゼットは兎人参化を連れて天界から飛び降りた。

そして背中から翼を出し、加速。

降りる最中、爪とぎで爪を研いでいるカリンが見えた。あの猫はいつでもマイペースである。

悟空達ですら肉眼では追えぬ速度となり、一気に神精樹との距離を詰める。

問題の場所では既に悟空、クリリン、天津飯、ヤムチャ、餃子が異星人達と相対しているのが見えた。

ピッコロはまだおらず、悟飯は……まあ、どうせチチに止められたのだろう。

翼を羽ばたかせて減速し、風を巻き起こして悟空達の後ろに着地する。

その突然の登場に悟空、異星人達が共にぎょつとし、リゼットへ視線を集中させた。

「神様！」

「遅れてすみません。話は既に界王様から聞いております。

神精樹は私が何とかしますので、貴方達は敵を掃討して下さい」

悟空に対し、余計な説明を省いた頼みをする。

神精樹の対処は流石に手間であり、邪魔をされては面倒極まる。

敵を全て消してから対処する事も可能だが、その場合は時間がかかるので地球の被害が広がる一方だ。

神精樹は発芽してしまう前に枯らし、潰してしまうのが一番いい。

その為にも、余計な戦闘は全て省きたかった。

「おい聞いたか悟空。何とか出来るってよ。流石はうちの神様だぜ！」

「ああ、これでオラ達はいっつの相手に集中出来る」

敵の数は今の所5人。こちらよりリゼットを除いて6人。

人数は勝っているが、気は悟空は例外とし、やや敵側が勝っている。

数値にして敵は大体8000前後といったところだろう。

他の五人が抑えているうちに悟空が一人ずつ潰して、そして手の空いた仲間と一緒にまた別の誰かを潰して回るとというのが理想的か。

「皆、任せましたよ」

「おっと、行かせるとでも……」

飛翔しようとするリゼットの前に赤い巨漢が飛び出る。

だが彼ではリゼットの妨害など出来るはずもない。

構わず飛んだりゼットに正面から激突し、まるでトラックに衝突した一般人のようにな『撥ねられた』のだ。

かくして神は来て早々に戦場を離脱し、後には地球を守る戦士達と侵略者だけが残された。

「……どうやらあの女、俺達全員でかからないと危ない相手らしいな。

仕方ねえ、まずはこいつ等を倒して全員で向かうぞ」

「果たしてそう上手くいきますかねえ？」

イヤリングやネックレスを付けた青い髪の男が一早くリゼットの妨害には全員が必要だと悟り、戦闘へと思考を切り替える。

それを迎え撃つように兎人参化が立ち塞がり、サングラスを輝かせた。

「つまりこの戦い、勝った方がそのまま神精樹に向かい、今後を左右出来るってわけだ」

「どうやらそうらしいな」

身長の高い、全く同じ容姿の宇宙人が二人並び立つ。

名をレズンとラカセイといい、未知の技術を持っていると言われているビーンズ人だ。

しかし相手が二人ならばこちらも二人。

地球からは天津飯と餃子がこれを迎え撃つ。

「全員ぶっ潰してやるぜ」

「出来るもんならやってみろ」

先程リゼットに撥ね飛ばされた巨漢が立ち上がり、戦士達を見下ろす。

それに対抗するように前に出たのはクリリンだ。

「ローンの恨み、晴らさせてもらうぜ！」

『……ンダ』

最後にヤムチャがよく分からない事を言いながら構え、それに対し全身機械のサイボーグが立ちはだかる。

実にどうでもいい事なのだが、ヤムチャは彼等が神精樹の種を植える時に放った気弾の余波に偶然当たり、ローンで購入した新車を壊されてしまったのだ。

無論そんなのは彼等の知る所ではなく、知ってもどうでもいい事でしかない。

「よし、ならオラは……」

そして一人余る事になった悟空は、まず仲間達の援護をする事を決めた。

この戦いは先に一人崩した方が圧倒的に有利となる。

何せ一人余れば、その一人は別の誰かの援護に向かい2対1の状況に持ちこめてしまうからだ。

だから仲間達の援護という選択は決して間違いではない。

……相手側に、6人目が控えてさえないなければ。

「暇そうだな。俺が相手になってやるぞカカロット」

声が響いた。

悟空の声とよく似た、しかし冷たい声だ。

声の聞こえた方向を振り向き、そこで悟空は一瞬そこに鏡があると勘違いをした。しかしすぐに気付く。違う、鏡ではない。

己とよく似た容姿の、そして遥かに巨大な気を持つ何者かだ！

「お、おめえは……！」

「俺の名はターレス。」

貴様は俺の事を知らないだろうが、俺は貴様をよく知っているぜ。

……なるほど、親父にそっくりだ」

「そ、その顔は……」

「ああ、俺が貴様に似ているってか？ 無理はない。

俺達使い捨ての下級戦士はタイプが少ないからな」

口の端に弧を描き、ターレスは余裕を感じさせる声で語る。

スカウターに表示された悟空の戦闘力を見ても、尚その余裕は微塵も揺るがない。

「しかし、顔は同じでも中身は貴様とはまるで違うぞ」

「何!？」

「かかって来いよカカロット。俺と遊ぼうや。」

バーダックの倅の力、俺に見せてくれ」

指をクイ、と動かしてターレスは悟空を挑発する。

その瞳には剣呑な輝きが宿り、同時にどこか過去を懐かしむような憂いも混ざっていた。

【地球まるごと超決戦】

『ドラゴンボール』シリーズの劇場公開作第6弾。

悟空達がサイヤ人の事を知っており、かつ誰も死んでいないので、犠牲者なしでベジータ&ナッパを撃退した世界線であると考えられる。

『この世で一番強いヤツ』と同じ世界線だろうか。

ボスのターレスはともかく、取り巻きのクラッシャー軍団も異常に強く、全員がナッパを軽く捻れる実力者。

どうでもいいが、この劇場版でピッコロさんが突然戦闘力18000に急上昇している。飲料水と間違えて超神水でも飲んだのだろうか。

【ターレス】

クズロット素材として大人気のお方。

ブロリーMADを見る方ならば『死ねえー！』『サイヤ人はサイヤ人らしい生き方をしろ』『仲良くしようや』『こんな楽しい生活はないぜ』『虫けらのように岩場に叩き付けるのだ！』『全宇宙を跪かせるのだ！』などの台詞を吐くクズロットを一度は目にした事があるのではないだろうか。

映画パンフレットに示された戦闘力は19000だが、当時戦闘力30000だった悟空の界王拳10倍を返り討ちにしているので、どう低く見積もっても戦闘力30万以上はあると思われる。強い。

後に登場するスラッグと違って結構部下の存在を重要視しているのか、至る所で仲間を勧誘しているらしい。

クラッシャー軍団は全員、ターレスが自ら勧誘した者達。

上司としてはかなり優秀な部類かもしれない。

【ダイーズ】

クラッシャー軍団の副リーダーっぽい人。

映画パンフレットによると戦闘力は8400。

元はカボーチャ星プキンパ王朝の王子だったらしい。

パンブーキンとの関係は不明。子孫だろうか。

【カカオ】

クラッシャー軍団の一員。

イコンダ星で起こった星間大戦の際に作られた戦闘サイボーグ。『ンダ』しか言えない。

映画パンフレットによると戦闘力は13000。こいつだけやたら強い。

【アモンド】

クラッシャー軍団の一員。

宇宙警察機構（銀河パトロール？）によって逮捕されナッツ星の刑務所に収監されていた凶悪な犯罪者。

語尾に『でっせい』と付けてキャラ付けをしている。

映画パンフレットに示された戦闘力は9100。

外見がやたらボラと似ており、声まで同じ。

ボラ「ま、まさか貴方は幼き日に家を飛び出していった兄さん……!?!」

【ラカセイ&レズン】

クラッシャー軍団の一員。

双子で戦闘力は7600と8000だが、どちらが8000でどちらが7600なのかは分らない。

どちらも自分の方が強いと思ってそう。

未知の技術を持っているとされるビーンズ人で、ターレスの乗っている巨大宇宙船はこいつらが造った。

つまりは科学者なわけだが、戦闘の際には武器も持たずに素手で自ら前線に突撃する。

自分達が戦死したら誰が宇宙船を整備するのかを全く考えていない、男気に溢れた二人。

第二十話 地球まるごと超決戦(2)

「繰気弾！」

ヤムチャが掌に気を集中し、己の意志で自在に操作出来る気弾を生み出す。

見た目こそ何も変わらないが、修行により確実に威力が増しているそれを敵のサイボーグ戦士——カカオ目掛けて発射する。

右、左、上と目まぐるしく移動し、繰気弾はカカオを翻弄する。

防御するならば背後に回り、避けるならばその移動先へ先回りする。

自動追尾には出来ない細かいコントロール。それが繰気弾には可能だ。

「はっ、とう！」

やがてカカオの隙を見付けたヤムチャは、がら空きになった彼の腹部に繰気弾を叩き込んだ。

防御も許さないクリーンヒットにたまらずカカオが吹き飛び、地面に転がる。すかさず追撃で気弾を叩き込み、爆発させた。

手応えあり！ 勝利の予感にヤムチャは頬を緩め、爆煙を見る。

「ンダ！」

「!？」

だが煙を裂いてカカオが飛翔してきた事でその顔は驚愕へと変わった。

繰弾を命中させ、倒したと思った直後の隙だらけの硬直。そこにカカオが身体ごとぶつかり、ヤムチャを岩場に押し付ける。

サイボーグの身体と岩場との間に挟まれるサンドイッチだ。

ヤムチャはその威力に吐血し、白目を剥いて崩れ落ちた。

「気円斬！」

ヤムチャ達から少し離れた戦場。

そこでクリリンは気を集約し、円盤状に薄めていた。

それを高速回転させる事で敵を切り裂く切断技、気円斬。殺傷力という点において彼の最高の技だ。

発射される気円斬。それに触れれば多少の戦闘力の差があれば容易く切り裂く事が出来るだろう。

それに対し赤い巨漢——アモンドは身体を高速で回転させた。

「勝ちたかったら、こうするんでっせい！」

そして、回転したまま気円斬と恐らくは同系統だろう緋色の薄い気弾を放つ。

その二つは中央で衝突し、相殺。

互いに弾かれ、それぞれの術者の元へと跳ね返って行った。

「んなっ!？」

クリリンは咄嗟に反射されてきた気円斬を避け、アモンドも同じく己の気弾を避ける。

技自体は互角。むしろ術者の気が劣っているのに相殺したという点ではクリリンの気円斬が勝るかもしれない。

だが気円斬が通じないというのはクリリンにとって致命的だった。

何故なら、これが効かないという事はクリリンが彼に勝てる技がないという事になっってしまうのだから。

「そら、次でっせい！」

妙な語尾を付けながらアモンドが突撃する。

クリリンもそれに対し必死に応戦し、激しい攻防が始まった。

だが地の能力ならばアモンドが上だ。

彼の拳がクリリンの頬を打ち、膝が腹を蹴り上げ、クリリンが呻いた所を狙い澄ましてダブルスレッジハンマーを頭部に叩き付ける。

衝撃に意識が飛び、止めとばかりに固い地面に墜落する。

そしてクリリンが立ち上がらないのを確認し、アモンドは勝利を確信した。

天津飯はレズンとラカセイの双子を相手に一人で奮戦していた。

先程までは餃子もいたのだが、既にやられてしまったらしく気が殆ど感じられない。

双子故の一糸乱れぬ連携に晒され、必死に防いでいるのは流石というべきだろう。だが限界はある。拳が、蹴りが、天津飯を確実に捉え始め、攻撃を受けるたびに動きが鈍くなっていくのが自分でも分った。

「く、くそっ！」

せめて1対1ならば……。

そう思うも、それは叶わぬ事だ。

レズンの拳が顎を跳ね上げ、ラカセイの蹴りが鳩尾にめり込む。

「ぐあっ……が！」

視界が薄れ、膝が地面に付く。

何とか倒れまいとする意志とは裏腹に、身体が言う事を聞かない。

薄れゆく意識の中で双子の勝ち誇った笑い声を聞きながら、天津飯は崩れ落ちた。

「ははっ、その程度か兎野郎！」

青髪の優男、ダイーズの猛攻に晒されながら兎人参化は必死に耐えていた。

相手の男のあまりの速さに防御が間に合わない。

手で触れる機会がない。

拳がめり込み、顔を蹴られ、無様に地面を転がされる。

「やれやれ、とんだ雑魚だったな」

ダイーズが勝利を確信した笑みを浮かべながら兎人参化へと近付いた。

その瞬間、人参化は立ち上がって掌底を突き出す。

しかしダイーズは余裕の表情で、いとも呆気なくそれを弾いてしまった。

「へ、そんなのが最後の抵抗かい？」

「……触りましたね」

「あ？」

——次の瞬間、彼は人参へと変わっていた。

触れれば相手を人参へと変える。

その恐るべき特異体質を以て、圧倒的に格上であつたはずの彼を見事打ち倒してみせたのだ。

落ちた人参を素早く踏みつけると、グシャグシャと跡形もなくなるまで碎き散らす。

人参になったままならば、まだ元に戻る事は出来る。

しかしこうして碎いてしまえば、もう手遅れだ。

これでとりあえず、クラッシャー軍団の一人は倒した事になる。

「ふう、何とか倒せましたね。」

さて、他の皆さんは……」

言って、空を見上げる。

するとそこには、丁度戦士達を倒してきたクラッシャー軍団の4人が滞空し、こちらを殺意の眼差しで睨んでいる所であった。

「……………どうやら、全員負けてしまったようですね」

諦めの心境で呟く。

ああ、これは無理だ。

4人とも今の場面を見ていただろうし、実際近付いてこようとしなない。

遠くから気弾の連射で仕留める気満々といった顔だ。

4方向から一斉に発射される気弾の嵐を眺めながら、兎人参化は己の敗北を受け入れた。

撃たれる、撃たれる、撃たれる。

気弾が全身に当たり、地面を砕き、それでも尚足らぬと気弾が浴びせられる。

サン格拉斯が砕け、毛皮が血に染まり、意識が朦朧としていく。

このまま攻撃が続けばものの10秒も待たずに兎人参化は死んでいただろう。

しかし悪運が強いのか、それとも死ねないからこそ運が悪いのか。

結果を言えば、彼は死ぬよりも早く助けられる事となった。

「やめろー！！」

叫び声をあげながら悟飯が空より降下する。

どうやらチチの目を盗んで抜け出してきたらしい彼は、怒りのままにレズンを蹴り飛ばした。

しかし勢いよく飛び込んできたはいいものの、悟飯の戦闘力は戦士達の中で最も低い。

残念ながら餃子にすら劣っているだろう。

その理由は、サイヤ人を待つ1年の間に彼だけがリゼットの気霊錠を付けていなかった事に起因する。

リゼットが戦士達に気霊錠を付けた時、彼だけが気のコントロールどころか戦い方すら知らない子供だった。

だからリゼットは彼に気霊錠を与えず（与えてもただの拘束具にしかないからだ）、それが今になって明確な差として響いて来たのだ。

「このガキ！」

「邪魔だ！」

飛びこんだ事で、とりあえずクラッシャー軍団は兎人参化から悟飯へとターゲットを移した。

だがそれは獲物が変わっただけに過ぎず、肉食獣の群の中にシマウマが自ら飛び込んだに等しい。

クラッシャー軍団の猛攻を受けて悟飯は瞬く間に傷だらけになり、岩に叩き付けられる。

彼の戦闘力では己が何をされているかも知解らず、ただ高速で動く複数の影に滅多撃ちされているとしか認識出来ない。

「止めだ！」

動け無くなった悟飯に、先程蹴られたレズンが飛びかかる。

狙いは首、そこに手刀を突き立てればいかにタフなサイヤ人と言えど生きてはいられないだろう。

しかしまさにその魔手が悟飯に当たる直前に、割り込んで来た緑色の腕がレズンの腕を鷲掴みにする事で悟飯の命を救った。

「……あ……」

呆然と見上げる悟飯の前で、白いマントがはためく。

レズンの腹に拳が突き刺さり、胸倉を掴み上げて強引に引き戻す。
最後に顔の前で気功波を放ち、レズンの首から上を消し飛ばした。

「……大丈夫か、悟飯」

「ピッコロさん！」

悟飯を庇うように立つそれは、敬愛する師匠であるピッコロであった。

彼の登場に、先程まで余裕を見せていたクラッシャー軍団も警戒したように距離を取る。

レズンを一蹴したその实力を見て、只者ではないと理解したのだろう。

素早くスカウターを操作すると、アモンドはピッコロの戦闘力を計った。

「戦闘力9000……なるほど、こいつは手強そうだ」

「だが俺達3人でかかれば、どうとでもなる数値だぜ！」

「ンダ！」

ピッコロの戦闘力は他の戦士を上回る。

だがそれはラカセイからすれば僅差でしかなく、アモンドとカカオに至ってはピッコロに勝ってすらいる。

レズンが一蹴されたのは恐らく、油断を突かれたからだろう。

3人はそう判断し、ピッコロを取り囲んだ。

「へっ……そいつはどうか？」

だが3人を前にしてもピッコロの余裕は崩れない。

それどころか不敵な笑みを浮かべ、そしてその全身が真紅のオーラに包まれた。

戦闘力を瞬間的に跳ね上げる『界王拳』特有の、炎のように燃え上がる気。

それがピッコロのマントをはためかせ、戦闘力を一気に上昇させる。

「な……せ、戦闘力18000でっせい!？」

「ンダ!？」

「そ、そんな馬鹿な!」

アモンド、カカオ、ラカセイが表示された数値に目を見張る。

その隙を逃さず、ピッコロはまるで爆ぜたかのようにその場を飛び出した。

ピッコロの蹴りがアモンドの胸を抉り、胃液が逆流する。

「ずえりゃああああ！」

アモンドがたまらず屈んだ所で頭を掴み、膝を叩き込む。

のけぞれば、今度は追い討ちのストレートで顎を打ち抜き、倒れかければそれよりも早く腹にエルボーをめり込ませる。

「野郎！」

ラカセイがアモンドを救うべく拳を突き出す。

その一撃は見事貫通し、ピッコロのマントを貫いた——マントだけを。

瞬間、マントを外したピッコロがラカセイの頭上に現れ、肘を頭部に打ち込む。この時点でスカウターは瞬間的に戦力値22000を計測していたが、残念ながらラカセイがそれを見る事はもうない。

今の一撃で完全に意識が飛んでしまったからだ。

「かあっ！」

意識を失った相手に対する容赦のない止め。

気功波が防御も出来ないラカセイの身体を粉々に吹き飛ばし、それを見届ける事もなくピッコロはカカオに狙いを変える。

ヤムチャを倒したカカオのジェット噴射を正面から受け止め、足場を削りながらその勢いを殺す。

そしてカカオの速度が鈍った瞬間に目から怪光線！ カカオの顔を焼き、彼を激痛で悶えさせた。

「つりゃあー！」

だがピッコロの攻めに休みはない。

カカオの頭を掴んで引き寄せると膝蹴りを叩き込み、更に回転。

遠心力を上乗せして、カカオの身体をアモンドへと投げ付けた。

当然、サイボーグボディのカカオなどぶつけられればアモンドといえどたまったものではない。

二人は衝突によりダメージを受け、無様に地面を転がる。

「……くたばれ！」

そこに連続エネルギー弾！

両手から次々と繰り出される気弾が弾幕を展開し、カカオとアモンドを飲み込む。避けようにも、重なり合った互いの身体が邪魔で動くに動けない。

防御も回避も満足に出来ないまま、二人はピッコロの気弾を浴び続けるしかなかった。

「魔貫光殺砲！」

だがそれで耐えられるかと言えば、答えは否だ。

ピッコロは更に気を高め、以前よりも格段に発射時間を短縮した必殺の一撃を放つ。

一条の光が奔り、直後にその後を追うようにもう一つの光が螺旋を描きながら追従する。

まるでドリルのように貫通力に特化させた、かつてラディッツ諸共悟空をも殺した奥義。

それが虫の息のアモンドとカカオを仲良く貫き、絶命させた。
それを確認し、ピッコロは赤いオーラを解除する。

「ピ、ピッコロさん……今の技は……？」

「……孫の奴が界王の所で学んだという界王拳だ。

力、スピード、タフさ……これを使えば、全てが倍になる」

ピッコロは悟飯の方を振り向き、ニヤリと笑う。

その笑みはどこか、自嘲をも含んだものだ。

「孫の奴に置いて行かれるのは屈辱だが……奴を真似るのも同じくらいの屈辱だったな」

ピッコロは、前回のサイヤ人との戦いで己の無力さを悟った。

悟らずにはいられなかった。

界王の所で修行してきた悟空は基礎的な強さこそピッコロと変わらぬが、しかし悟空の気を常に追っていたピッコロには分かっていた。彼の気が時折、明らかに倍以上に膨れ上がっていたのを。

つまりこれは倍以上の差を付けられたのと同義であり、もはやライバルなど名乗れるものではない。

だがその悟空ですら大猿と化したベジータには手も足も出ず、そのベジータすら今代の神には太刀打ち出来なかった。

弱い……俺は何と弱いのだ。

これで世界征服などと、いい笑い話だ。

これでは弱者が必死に遠吠えをしているようなものではないか。

何と滑稽で、何と惨め。大魔王などと、一体どの面を下げて名乗ればいい。故に、ピッコロはプライドを一時捨てた。

孫悟空に組手を持ち掛け、連日彼と戦って打ちのめされた。

その中で悟空の気の動きを観察し続け、界王拳を体得するに至ったのだ。

無論屈辱であった事は言うまでもない。

言葉にして教えてくれと言ったわけではないが、それでも悟空に教えを乞うも同然の行いで、考えるだけで自殺したくなるほどに無様だった。

しかし、今のままでは己は惨め過ぎる。

……ならば耐えるしかない。

この屈辱を噛み殺し、まずは力を付ける。

そうしなければ世界など手に入らない。守護者たるあの女にはまるで届かない。強くなりたい。その一心のみで大魔王は必死に足掻く。

いつか掴むべき、世界を手にするその日まで――。

リゼットのせいでピッコロさんが妙に苦労人になっている気がしないでもない。そしてそこまでして戦力を上げても瀕死パワーアップであっさり引き離される。頑張れ、一応この悟空は劇場版本編よりは弱いぞ。

【各キャラ戦闘力】

—地球側—

・孫悟空（ベジータ戦で瀕死パワーアップ）

基本戦闘力…150000

界王拳2倍…300000

界王拳3倍…450000

界王拳10倍（一瞬のみ）…15万

・ピッコロ

基本戦闘力…90000

界王拳…180000

マント抜き…220000

・ナッパ…70000

※瀕死パワーアップ

・以下、前回から変化なし

―クラッシャー軍団―

・ターレス…82万

・アモンド…9100

・ダイーズ…8400

・カカオ…13000

・レズン…8000

・ラカセイ…7600

―（今の所）不参加―

・リゼット

基本戦闘力…12万

最大戦闘力…900万

第二十一話 地球まるごと超決戦 (3)

ピッコロ達クラッシュ軍団と戦っているのと同時刻。

リゼットは全精力を費やして神精樹の処理に当たっていた。

その全身は淡く輝き、キラキラと白い粒子が彼女を照らしながらその身体へと取り込まれて行く。

髪やドレスはまるで緩やかな風でも受けているかのようになびき、その光景だけを見れば酷く幻想的だ。

リゼットが行っているのは、先日完成した元氣玉モドキを用いての神精樹からの気の吸出だ。

この神の樹が地球から吸い出した生命力をリゼットが吸収し、解放する事なく己の内に止めている。

神精樹に寄生された地球は今、生命力を失い荒廃しつつある。

それを正しい姿に戻すには、奪われた生命力を還元しなくてはならない。

だが問題は、神精樹があるうちにそれをやってしまうと、またこの樹に吸い取ら

れるだけの循環になってしまう事だ。これでは意味がない。

だからまずは、一度地球の生命力全てをリゼットの内に溜め込む必要があった。そうして奪われた生命力を全てリゼットが己の内に封じ、神精樹を破壊してから地球に還元する。

そうする事で初めて、この惑星を救う事が出来る。

「…………、う…………、あ…………くあ…………っ」

リゼットがその美貌を歪め、歯を食い縛る。

額からは汗が流れ、顔は熱でも出したかのように上気し、指先は震えている。

この方法の最大の問題は、肝心のリゼット本人への負担にあった。

一度地球の生命力全てを一個人の身体で受け止め、封じ込めるといふ蛮行。

その負担は凄まじく、今現在リゼットの身体の中では凄まじい勢いで地球の気が荒れ狂っていた。

本家の元氣玉と異なり、リゼットの作り出したこの技はエネルギー体として留める事が出来ず、リゼット本人の強化のみにしか使用出来ない欠陥技だ。

他者に気を分け与えるのと同じ要領で気を還元する事は容易いが、『元氣玉』と

いう気の塊として悟空のようにその場に残す事が出来ない。

リゼットのキャパシティをオーバーしない程度であれば、それは強力な自己強化術となる。

未来の話になるが、悟空が己よりも勝る合体13号を屠ったように格上すらも倒せるかもしれない。

しかしキャパシティを超えてしまえば、それはただの自滅だ。

彼女の身体を内側から蹂躪する津波でしかなくなり、身体が砕けてもおかしくはない。

己の限界を超えたエネルギーを得る事で自滅する……物語においてはよく起こる事故であり、リゼットはまさにその事態に陥りつつある。

辛いし、苦しいし、全身が今にもバラバラに千切れそうで気が狂いそうだ。

もう限界だ。今すぐに神精樹を破壊して、この気を地球に解き放ってしまいたい。

しかし未だ神精樹に奪われた生命力の9割程度しか回収しておらず、そんな状態で神精樹を壊しては、残る1割の生命力が地球に戻らぬままだ。

勿論それでも地球は救われるだろうし、明日以降も続いて行くだろう。

だが還元されなかった分の影響が必ずどこかで出る。

森のいくつかは砂漠と化すだろうし、動植物の中に本来よりも遥かに早く死ぬ者が大勢出るだろう。

リゼットはそれを解ってしまっているからこそ、こうして苦悶の中で必死に気を留めるしかないのだ。

だが——だが、それでも限界というものはどうしようもない。

リゼット一人では地球の生命力など到底受け止め切れない。

（も、もう、限界……です……っ！

これ以上は私の方が碎けてしまう……神精樹を碎くしか、ない……！）

既に限界は超えている。

バケツに水を汲み、それでも尚入れたいからとバケツを無理矢理広げてぎゅうぎゅうに押し込んで蓋をした。

今のリゼットはいわばそういう状況にあり、しかし限界を超えれば容器を中から壊してしまう。

既に全身が軋んでいる今、これ以上の吸収にはリゼットの身体が耐えられない。

もう、開放してしまうしか選択がないのだ。

そんな彼女の後ろに巨漢が一人、突如現れた。

「……！」

神精樹の処理に全霊を費やしているリゼットは他に気を回している余裕などない。

だから今、悟空達の戦いがどうなっているかも分からないし、接近にすら気付く余裕がない。

敵か？ それとも無事敵を倒してきた悟空達のうちの誰かか？

出来れば後者であって欲しいと思いながら、リゼットは視線を後ろへ向ける。果たして、そこにいたのはサイヤ人であった。

「よお、随分辛そうじゃねえか」

キラリと輝く頭部。

サイヤ人の髪は生後不気味に変化しないので、二度と髪が生えないその頭部は清々しいまでのスキンヘッド。

太い眉毛に、粗悪さを全面に押し出したような目。

髭の生えたその顔は、まるで『私が悪人です』と大々的に書いているかのようだ。首は太く、その肉体は一目で鍛え抜かれたものだと解る。

地球人に怪しまれない為に現地調達したのだろう、その衣服は上下黒のジャージ。どうせ動き易い服を適当にチョイスしたのだろうが、それは不思議と似合っていた。

毛を刈ったゴリラ——とでも表現するべき、自称エリートのサイヤ人。

ナツパと呼ばれていた男が、リゼットの背後に悠然と立っていた。

未だ幼さを残す身長153の少女の後ろに立つ、2m超えのゴリラハゲ男のその姿、まさに不審者の如き。

即通報されても仕方のない、極めて犯罪臭い絵面がそこに完成していた。

「貴方は……!」

最悪だ、とりゼットは思った。

いつかどこかで逆襲してくるだろうとは思っていたが、ここで出て来るとは何てタイミングだ。

そして過去の己に対し、ありったけの罵声を飛ばす。

ほら見ろ、言わんこっちゃない。絶対後悔する事になるって解っていたのに。完全にこちらに従うような言動はしていたが、あれはやはりブラフだった。嘘だったのだ。

それはそうだ。普通に考えれば分かる。あのナツパがあんな事を言うわけがない。あれ？ 何で私ちょっとほっとしててるんでしよう？

ともかく不味い状況だ。勿論戦えば負けはない。

しかし衝撃で、せっかく集めた気が霧散してしまう可能性は充分過ぎるほどにあつた。

「へっへっへ、今なら俺でも勝てそうだなあ」

「くっ……！」

咄嗟にナツパを排除しようとするも、手が動かない。

溜め込みすぎた気はリゼットの動きすら阻害し、わずかに身じろぐだけで激痛を与えてくる。

そんな彼女の華奢な肩に無骨で巨大な手を乗せ、ナツパは告げた。

「俺に『それ』を預けてくれ女神様、あんたの手助けがしてえ！
タフさにゃあ、ちよいと自信あるんだ。少しくらいは役に立つだろうぜ」

「——え？」

リゼットは一瞬、己の耳を疑った。

ここからどんな汚い暴言を吐いてくるかと身構えていた所に、この言葉だ。
というかぶっちゃけその方がマシだった。

リゼットの間違いでなければ、これはまるで協力すると言っているようにも取れる。

そんな、困惑する彼女にナツパは更に言葉を続けた。

「どうした？ そんな驚いたような顔をしてよ。

もしかして、俺が受けた恩を仇で返すとも思ってたか？」

「……」

「思ってたのか。ま、無理もねえ事だがよ。

確かに俺は悪党だし、多くの惑星やそこに住む住民をぶっ殺して来た。

鬼だの悪魔だのといった言葉は聞き飽きたし、そう言われて当たり前の悪行は積み重ねてきた。

だがな、そんな俺でも通すべき最低限の筋って奴くらいは通すつもりだ」
ナツパはその厳つい髭面をニカリと歪める。

「命の恩は命で返す。

色んなルールや決まり事や、惑星ごとでコロコロ変わる法律なんかは破ってきた俺だがよ……流石にこれは破れねえ。

俺は悪党だが、それやっちまったら悪党以下になっちまう。

何より、今の俺にはアンタへの『信仰』がある！ アンタの為なら惑星フリーザの裏側からだって駆け付けるぜ」

「……手伝って、頂けるのですか？」

「やらいでか。ベジータが捨てた俺の命を拾ったのはアンタだ。

だから俺の命はアンタのものだ。死ねと言われりゃあ死んでやるし、戦えつつうんならフリーザにだって挑んでやらあ」

これはリゼットにとって完全な誤算であった。

勿論嬉しい誤算なのだろうが、喜びよりも困惑の方が大きい。

しかし降って沸いたチャンスである事は変わりなく、これに頼らぬ手はない。

ナツパを怪しまないわけではないが、もうそんな事を考えている余裕すらリゼットにはなく、今だって荒れ狂う気を必死に抑えるので精一杯だ。

「わかりました。貴方の協力に感謝します。」

……覚悟はいいですか？」

「常在戦場。サイヤ人はいつだって戦場に立っている。覚悟を問うのは無粋だぜ」
ナツパがさっさとやれと催促し、リゼットもそれに頷く。

そして彼に向け、膨大な気を送り込んだ。

思わぬ援軍の登場により、もう少しだけ神精樹から生命力を取り戻す事が出来そうだ。

これで地球を元通りにする希望が出てきた。

後は悟空達が侵略者を倒すだけだ。

（私はまだ、ここから動けない。頼みますよ、悟空君……皆）

★

「さあ来い、カカロット！」

ターレスが悟空を挑発し、それに悟空が乗る。

全身から赤いオーラを出し、戦闘力を倍加させてターレスに拳を繰り出すも、難なく掌で受け止められた。

ターレスは受け止めた悟空の拳を強く握り、ニヤリと笑う。

「戦闘力3万か……悪くねえ。」

昔の惑星ベジータなら、最強を名乗れる数字だ」

「っ！」

「だがそれじゃあ、俺には届かない。」

神精樹の実を食べ続けてきた俺と貴様との間には、天と地程の力の差があるのだ」

ターレスは軽く悟空の腹を蹴り上げ、吹き飛ぶよりも早く頭部を強打する。

悟空はそれに防御すら満足に行えず、地面に向けて高速で叩き付けられた。

ターレスはそこに追撃をかける事もなく、悟空が立ち上がるのを待つ。

「どうだカカロット。俺と一緒に来る気はないか？」

「な、何……!？」

「俺と一緒に来りゃあ、お前はもっと強くなれる。」

神精樹の実を食べりゃあ、その戦闘力が更に飛躍的に上がるんだ。

そうすりゃ、あるいは俺すらも超えるかもしれんぞ」

ターレスは悟空に、彼にしては優しい声色で告げる。

一氣に本氣を出さず、こうして加減して戦っているのも彼を引き込みたいからだろう。

しかし悟空は、それに対し当然のように否を示した。

「ふざけるな！　オラ、お前達の仲間になんかならねえぞ！」

「俺達は生き残ったサイヤ人のわずかな仲間……そう邪険にするなよ。仲良くしようや」

悟空は再び飛び出し、ターレスに猛攻を仕掛ける。

だが当たらない。

避けられ、防がれ、まるで子供の相手でもするかのように軽くなされてしまう。

「宇宙を気ままに流離い、好きな星をぶっ壊し、美味しい物を食い、美味しい酒に酔う。

こんな楽しい生活はないぜ？」

「オラ、そんなの楽しいとは思わねえ！」

「ち、どうやら頭を打ったってのは本当らしいな。

とてもサイヤ人とは思えねえぜ」

繰り出される悟空の両拳を容易く掴み、動きを封じた所で蹴りを放つ。

重い衝撃。悟空の呼吸が一瞬止まり、すかさずターレスは彼の、自分とよく似た髪を驚づかみにした。

「このボンコツの頭をもう一度ブツ叩けば元に戻るか？」

サイヤ人はサイヤ人に相応しい生き方をしろ、カカロット」

「……っ、オラは小さい頃に頭を打ってよかったって思ってる……。

じゃねえと、お前みたいな酷い奴になってたかもしれないねえ」

「……………よかっただと？」

悟空の言葉に、ターレスの顔つきが変わる。

それまでは余裕のある笑みだったものが、まるで今にも暴れ出しそうな怒りに満ちた顔となった。

彼は悟空の頭を強く掴み、低い声で語る。

「名前を忘れ、生まれた惑星を忘れ……テメエをこの星に逃がした両親の事すら忘れ、それでよかったと云うか、貴様！」

「に、逃がした……？ 何を言ってる？」

オラはこの地球を侵略する為に送られたってラディッツが言ってたぞ！」

「あんなのはただの方便だ。そうとでも報告しなきゃ、貴様はフリーザの部下に撃墜されていた。」

よく聞け、カカロット……貴様がこの地球に送られた理由は、貴様を生かす為だ！

惑星ベジータの最期を早く予感した貴様の父が、我が子を生かす為に『飛ばし子』として貴様をこの辺境の惑星にまで飛ばしたのだ！」

かつて悟空は実兄のラディッツに『お前は侵略の為に送られた』と教えられた。しかしその事実はこちらで覆る。

悟空が送られた理由は侵略の道具にする為ではなく、守るため。

親に捨てられたのではなく、愛されていたからこそ。

だから、こんな人材と資源に何の価値も見出されていない、大した戦力もない、

それでいて環境だけは宇宙でも随一に整った都合のいい惑星に飛ばされたのだ。

「そして我が子を逃した後に、たった一人で絶望的な戦いに向かい、運命に抗った男がいた！」

それこそが貴様の父であり、俺の師であるバーダックだ！

俺がこの世で唯一人、真に尊敬した戦士の名だ！

貴様にはその男の血が流れている——それを忘れたなどとは言わせんぞ！」

「!!」

瞬間、悟空の脳裏を過ぎったのは見知らぬ——しかしどこか懐かしさを感じる夫婦の顔であった。

一人乗り用のポッドに乘せられる、赤子の自分。

それを外から眺める、自分とよく似た男と、柔和な笑顔の女性。

『カカロット、満月の夜は月を眺めるなよ』

『この事はラディッツにも伝えておく。頑張って生きるんだよ！

後で必ず迎えに行くからね！』

知らない二人だ。

しかし悟空は、それが誰なのかを瞬間的に理解していた。

恐らくはこれこそが、ターレスの語る己の両親。

ラディッツの語った虚言とは異なる、真実の記憶。

過去に記憶を飛ばす悟空を突き飛ばし、ターレスは荒々しく猛る。

「かかって来い、カカロット。」

バーダックに代わり、俺が貴様の腑抜けた頭を叩き直してやる。

サイヤ人の戦いを教育してやるよ」

「……オラは地球で育った、孫悟空だ」

「そうかい。なら俺をぶっ飛ばしてそれを突き通してみせな」

ギラギラと燃え盛るサイヤ人の闘志。

相手が完全な格上だというのに、悟空は不思議とワクワクしている自分に気付く。
あるいはそれは、己を真っ直ぐに見るターレスの背後に、己の父の幻影が重なるからだろうか。

身体に負担のかかる界王拳を10倍にまで無理矢理跳ね上げ、悟空が飛ぶ。

それをあえて正面から受けるターレスと彼の姿は、まるで兄弟が戯れているかの

ようであつた。

「ラディッツ「えっ!?」
カカロットって侵略の為に送り込まれたんじゃないのか!?」

第二十二話 地球まるごと超決戦（4）

・前回多かった質問への返答

Q、地球の気でナツパの頭部も復活したりしないかな？

A、

地球「人間は何かを破壊して生きていると言っていい生物だ。

その中でお前の質問はこの世のどんな事よりも優しい。

だが……生命が終わったものはもう戻らない。

どんなスタンドだろうと戻せない……」

短時間とはいえ、10倍界王拳は今の悟空にとって負担の大きすぎる技だ。

そもそも悟空が引き出せる限界は精々3倍程度であり、10倍などとても耐えられるものではない。

無茶な力の引き上げは筋繊維を痛め、身体を鉛のように重くする。

気もほとんど使い果たしてしまうし、まるで割に合わない。

それでも悟空が10倍の使用に踏み切ったのは、そうしないと勝負にすらならないと感じたからだ。

ターレスが言った通り、二人の間の戦力差は天と地の開きがある。

ならば10倍にでもしなければとても勝てない。

そう感じた悟空の判断は正しく、しかしそれでも尚届かぬ現実があった。

「ほう、戦闘力15万！ こいつは驚いた！」

ターレスは嬉しそうに言いながら、相変わらず余裕の表情で悟空の攻撃を捌く。悟空とて遊んでいるわけではない。

時にフェイントすら織り交ぜながら、己が出来る限界以上の攻撃を繰り返している。

しかし届かない、当たらない。

紅蓮の炎の如き闘気を纏った拳が悉く、虚しく空振る。

「ああああああ！」

悟空が吼え、更に拳の速度を速めた。

互いの腕と足が高速で交わされ、秒間数百もの接触をし、肉と骨がぶつかる音が響く。

姿が消える——直後、空気が爆ぜた。

余りに高速で動いている為か互いの姿は見えず、打撃の音だけが遅れて響き渡る。足場が崩れ、岩が砕け、残影が走り、幾度となく空気が爆ぜる。

常人の目でこの戦いを見たならばきっと、空気が幾度も爆ぜながら、まるで大砲のような音が響き続けている……としか認識出来ないだろう。

「だが温いぜ！」

ターレスの肘打ちが悟空の頬を打ち、吹き飛ばす。

一瞬吹き飛ぶ意識。それでも悟空はかろうじて己を繋ぎとめ、空中で回転する。そして再び決死の界王拳。全身を紅蓮に包み、ジェット噴射のような加速で飛び立つ。

赤い軌跡を残して飛び、空中で方向転換！

まるで直角に曲がるかのようなありえない軌道を描き、ターレスへと迫る。

しかしターレスは消えたも同然の悟空の高速移動を捉え、カウンターの蹴りを延

髓に叩き込んだ。

「がっ……!!」

炎が消え、悟空が地面に崩れ落ちた。

決死の覚悟で行った10倍界王拳すら通じなかった。

その事実と、そして界王拳の反動が悟空から立ち上がる力を奪う。

駄目だ、実力で挑んでも勝てない。

あのターレスという男の強さは、大猿と化したベジータすらも上回っている。

この地球の神であるリゼットですら勝てるかどうか……。

萎えかけそうになる一方で、それでも立とうとするのはサイヤ人の本能ゆえか。

そんな悟空の隣に、クラッシャー軍団を蹴散らしたピッコロが着地した。

「孫、元気玉だ。奴を倒すにはそれしかない。」

貴様が界王の所で学んだと言う元気玉を使うんだ」

「ピ、ピッコロ……駄目だ、奴を前に元気を集める時間がねえ」

「なら、それまでは俺が稼いでやる！」

ピッコロが真紅のオーラに包まれ、ターレスと相対する。

無論、実力差は明白だ。戦闘力にしてピッコロが精々3万にも届かないのに対し、ターレスは80万を超える。

だがそんなのは知った事ではない。

敵う気がないので放置したら地球が滅びました、なんて言い訳にもなりはしない。

やれるかやれないか、ではない。

やるしかないのだ。

「戦闘力18000……悪くはねえが、その程度で俺に敵うと思うのか？」

ピッコロの烈火の攻めをターレスは面倒そうに片手で捌く。

悟空はそれを見ながら、両手を宙へと掲げた。

元気玉が完成するまでの時間は約10秒間。

だが1秒が10秒にも等しい高速体感戦闘の中において、それはあまりに長すぎる時間だ。

1秒の中で攻防を繰り返すなど、それこそ子供の頃のクリリンだって出来た事なのだ。

それをこのレベルで行い10秒稼ぐとなると、それはもう気の遠くなる程の時間だ。

「孫！ ピッコロ！ 目を瞑れ！」

上空から天津飯の声が響く。

クラッシャー軍団との戦いに敗れた彼だが、どうやらまだ戦えるようだ。

仲間の健在を嬉しく思うと同時に彼の狙いを悟った悟空が目を閉じ、ピッコロもそれに続く。

目を閉じていないのは狙いを把握出来ていないターレスだけだ。

「太陽拳！」

視界を焼く眩い閃光が辺りを照らす。

太陽拳の事を何も知らないターレスが光を直視し、目を押さえてよろめいた。眼球というのはいかにサイヤ人でも脆い。

そこに太陽の如き光を浴びせられれば、誰であろうと目を瞬間的に守ろうとしてしまう。

これは生物の本能と呼んでもいい防衛行動であり、即ち防ぐ事は不可能に等しい。

「氣円斬！」

そこに、天津飯と同じく立ち直ったクリリンが斬撃を飛ばす。

戦闘力の開きはあれど、うまく当たればこれでターレスといえど切断は可能だろう。

しかしターレスは目が見えない状態でありながら音で何かが飛んで来ている事を把握し、更に空気の音を聞く事でその細かな形すらも一瞬にして把握してみせた。

「ほう、面白い技を使うな」

そして、飛んできた氣円斬を指先で摘んで投げ捨てた。

これには攻撃した側のクリリンが度肝を抜かれ、動きが止まる。

ターレスはその隙に目を閉じたまま、音が聞こえた大体の位置に当たりを付けて気弾を放つ。

するとクリリンは成す術もなく吹き飛ばされた。

それと入れ替わる様にヤムチャが飛び込み、狼牙風風拳でターレスへ挑む。

しかし視界を塞がれた状態で尚、ヤムチャの拳打は悉く防がれ、逆にターレスの拳がヤムチャを打った。たったそれだけの事でヤムチャは糸が切れたように崩れ落

ちる。

だが彼が稼いだ僅かな時間で気の充填を済ませていたピッコロが指先を向けた。

「魔貫光殺砲！」

ピッコロが魔貫光殺砲を放つ。

瞬間戦闘力上昇にして3倍以上、今の界王拳を使っている状態ならば5万の戦闘力にも匹敵する一点集中の一撃だ。

ターレスはそれに僅かな警戒を抱いたのか、瞳が太陽拳の影響から回復すると同時に掌を翳した。

閃光が爆ぜ、貫通力に特化させた一条の輝きがターレスの手に当たる。

——結果は、無傷。

ターレスは笑みを崩さぬまま、魔貫光殺砲を受け切っていた。

「……少しは効いたぜ」

「な、あ……！」

驚愕するピッコロに、掌を向けた体勢のまま気弾を放つ。

この時、もしも素のピッコロであれば間違いないで死んでいただろう。

しかし界王拳を使っていた事と、魔貫光殺砲によって瞬間的とはいえ戦闘力が跳ね上がっていたのが幸いした。

気弾に全身を焼かれながらも、かろうじてピッコロは命を繋ぎ止めていたのだ。

「ちいーっ！」

最後に天津飯がやぶれかぶれの特攻を行う。

だがそんなものがターレスに通じるはずもない。

まるで虫でも払うかのようなぞんざいな裏拳一発で天津飯の意識はブラックアウトし、壊れた人形のように地面を転がった。

この間、僅か10秒。たったの10秒で地球の戦士達は一人のサイヤ人の前に敗れ去った。

しかしその時間は決して無駄ではない。

彼等が稼いだ時間に、悟空が元氣玉を完成させたのだから。

「……！　ほう、驚いたぜ……。」

まだそんなものを作る力が残っていたとは。

それにその構え……偶然だろうが、ソックリだ」

「……?」

元氣玉を右手に持ち、今にも投げつけようと構える悟空の姿に、ターレスは在りし日のバーダックを見た。

そう、奇遇にも今の悟空の構えは彼のそれと似通っていたのだ。

「確か……こんな感じだったな!」

そう言い、ターレスは悟空と鏡合わせのような構えを取る。

構えた右手に気を集約し、一点の威力を高める。

それは己の気と、周囲から集めた気という違いこそあれど、非常に似た構えの技であったのだ。

「……! す、すげえ気だ……!」

「さあ、最強の秘技同士の激突だ。どっちが勝つかな?」

発射前の二人の気の胎動だけで周囲の瓦礫が浮き上がる。

大地が揺れ、地球全体がその激突に怯える。

悟空の右手には地球からかき集め、神精樹からすらも元気を吸い取った元氣玉。ターレスの右手には己の気のみを最大限にかき集めた、サイヤ人の魂の一撃。

「元氣玉——!!」

「ファイナルスピリッツ^最後^だキャノン!!」

二人の中央で最大の技が衝突し、拮抗し合う。

紫電が弾け、空気が爆ぜる。

その余波だけで悟空は倒れ込み、ターレスもまた風圧を必死に堪えていた。

二つの光球が幾度も押し合い、消し合い、互いを喰らい尽くそうと牙を剥く。数秒にも渡る衝突——やがて勝利したのは元氣玉だった。

「っ、ちいい!」

ターレスは己に迫る氣の塊を、腕をクロスして防御する。

爆炎が彼を覆い、今までよりも一際大きな振動が地球を揺さぶった。

「や、やったか……?」

悟空は地面に倒れたまま、勝利を願う。

もう立ち上がれないし、動けない。

あの元氣玉には残っていたありったけの氣すらも込めたのだ。

それどころか、今はもう倒れている仲間達の氣すら借り受けている。

つまり正真正銘最大最後の一撃であり、あれが効かなければ後がない。そしてターレスは、煙の中から五体無事のままだ姿を現した。

「……ッ!!」

「……く、くく……やるじゃねえかカカロット……嬉しいぜ。

やっぱお前、俺が思った通りに強くなったなあ」

ターレスは生きていた。

全身が傷付き、戦闘服が砕け、血に濡れながらも未だ健在で地面に立っている。

ここに勝敗は決した。

もう動けない悟空と、満身創痍ながらも動けるターレス。

この構図を見て、勝敗が分らぬ者などいない。

悟空は無念に拳を握り、ターレスはそんな彼を嘲るでもなく、心底嬉しそうに笑う。

「カカロット、やっぱお前、俺と一緒に来いや。

確信したぜ……フリーザの野郎をブチ殺すのはお前だ。お前しかいねえ。

お前がサイヤ人の仇を討つんだ、カカロット」

「フリー、ザ？」

「俺達サイヤ人やベジータの裏にいる奴さ。」

そいつこそが数々の惑星を滅ぼすように俺達に命じていた張本人であり、諸悪の根源と言っている。

……ま、俺達サイヤ人が悪くねえなんて言うつもりはねえがよ。だが流石の俺もあいつの悪党ぶりにゃあ負ける。

あいつに比べりゃ俺や、ベジータのお坊っちゃんなんて小悪党みてえなもんさ」フリーザ。

初めて聞くその名前に悟空は震えた。

それは恐怖からの震えかもしれないし、あるいは強敵を求めるサイヤ人の本能が起こした武者奮いかもしれない。

「この地球にとっても他人事じゃない。」

奴は今、ナメック星に向かっている……ベジータもな。

この意味が分かるか？」

「ナメック……？ ま、まさか!？」

「よし、頭の回転は悪くねえな。

そうだカカロット。奴等はナメック星人を皆殺しにしてドラゴンボールを得て、そして永遠の命を手にするつもりだ。

それでどちらかが不老不死になってみる。

ベジータなら、当然この地球を真っ先に砕きに来るだろう。

今度来る時は不老不死だ。お前等に勝ち目はないぜ」

ターレスの言葉に悟空は険しい顔をする。

確かに、それは勝てない。

何をしても死なない大猿ベジータなど、想像するだけで絶望しそうになる。

「そしてフリーザが不死身になりゃあ……世界の終わりだ。

宇宙はこれから未来永劫、あいつの恐怖に支配される事になる。

そして真っ先に壊されるのはこの地球だ。

ドラゴンボールがあるこの星を放置して、それで折角の不老不死を無効化とかさ
れちゃかなわんからな。

俺がフリーザなら、確実にそうする」

「……！」

「分かるかカカロット。もうこの宇宙には猶予がねえんだ。

誰かが今、フリーザを殺さなければならない。

奴が不死身になる前に！」

ターレスは倒れている悟空に手を差し出す。

さあ掴め、という事だろうか。

俺と共に来い。俺と共にフリーザを倒そう。

その誘いを前に、悟空はしかし動けない。

「俺と一緒に来い、カカロット。そうすりゃあ地球の事は諦めてやる。

お前には戦闘力を超えた何かがある。

俺と共に来れば、必ずフリーザを殺せる男になれる！

そして……」

そこまで話し、ターレスはニヤリとその顔を邪悪に歪めた。

「フリーザを殺したら、俺達で宇宙を手に入れようや。

サイヤ人の天下を俺達の手で築き上げるのだ」

「——最後の一言さえなければ、悪くない申し出でしたね」

「っ、!?」

悟空を誘うターレスの後ろに、光球が降りる。

よく見ればそれは、眩い輝きに包まれたこの惑星の神、リゼットの姿であるとかる。

神精樹からの気を取り込みすぎて、今のリゼットは膨大な気を蓄積した状態となっている。

その余剰分が外に溢れ、このような光の玉と化してしまっているのだ。

そして、彼女の登場と同時にターレスの付けていたスカウターが爆散した。

「この惑星の神か！ いい所で邪魔を！」

「貴方の植えた神精樹は既に処理し終わりました。

そして今、神精樹に蓄えられていた気の殆どは私が保持しています。

この意味、貴方ならば分りますね？」

「——っ！」

リゼットの言葉にターレスの顔色が変わる。

神精樹の集めていた生命力を殆どこの神が奪ってしまったという。

もしそれが本当ならば、彼女は言わば神精樹の実を全て食してしまったも同然の
状態にあるという事だ。

ならばその戦闘力は？

ベジータを倒した戦闘はターレスも見ていた。その時点でこの女は戦闘力24万
を叩き出していたはずだ。

そこにこの惑星の気を全部上乘せしたとしたら？

……100万？ 1000万？ 1億？ あるいはそれ以上かもしれない！

とてもターレスの太刀打ち出来る存在ではない。

「貴方の負けです。大人しくこの星を去りなさい」

「……畜生！」

地球の神からの退去宣告。

それに逆らうという選択肢は、ターレスに与えられていなかった。

リゼット（早く立ち去って下さいお願いしますもう限界というかこれ以上気を抑えていられないんです漏れちゃう漏れちゃうからもう抑えてられない気が溢れる高まる早く早く早くあああああ）

※実は戦いどころではない模様

第二十三話 インターミッション

戦いは終結した。

単純な戦闘の勝敗を語るならばターレスの勝利、と呼んで間違いはないだろう。彼は悟空を倒し、ピッコロを倒し、クリリン達をも蹴散らしてみせた。

無論無傷というわけではなく、決して軽くない傷を負いクラッシャー軍団も壊滅したが、それでも最後に立っていたのは彼だ。

しかし勝敗を語るならば彼は負けた。

いかに悟空達を蹴散らそうと、神精樹を枯らされた上に地球の気の大半を取りこんだリゼットを最後に残してしまっただろうしようもない。

それに悟空の元氣玉で受けた傷も深刻だ。

残念ながらここは退くしかない。そうターレスは結論付けるしかなかった。

「カカロットよ」

「……何だよ？」

仙豆によってすっかり回復した悟空に、ターレスが視線を送る。

彼を連れて行くという計画は完全に台無しとなった。

神精樹も作れず、更に部下達までも失うという大損害だ。

しかし収穫はあった。

あのバーダックの息子の成長と、その可能性。

ターレスはその可能性を見ただけでも、この星に來た価値はあったと確信していた。

「俺の言った事を忘れるな。

この星にドラゴンボールがあるという情報をフリーザが得ている以上、お前達はいずれ必ず奴と戦う宿命にある。

……ナメック星で待っているぞ！」

きつとカカロットは来る。

そう確信したような声で先に行く事を告げ、ターレスは宇宙船に乗り込んだ。

ドアが閉まり、宇宙船が浮遊する。

それを見上げる悟空の表情は複雑であり、別れを惜しんでいるようにすら見える。そして、ターレスを乗せた宇宙船は遙か遠くの宇宙へと飛び立って行った。

「……ふう」

宇宙船が地球の外にまで出たのを感じし、リゼットは気が抜けたように息を吐く。しかし、まだ終わってはいない。

これから地球を元に戻さなくてはならないのだから。

彼女はナツパを連れて天高く飛翔すると神殿に着地し、そこで虚空に手を掲げる。

——解放。

己の内に留めていた膨大な地球の気を、万遍なく地球全域へと降り注がせる。

まるで雪でも降っているかのように白い気が地球全土へ祝福のように降り注ぎ、枯れていた大地や萎えていた植物達が生氣を取り戻して行く。

ついでにナツパに貸していた生命力も元氣玉モドキで回収し、地球へと還元した。「これで、地球は元に戻るでしょう。」

「ご苦労様でした、ナツパ」

「おう。すげえもんだな、惑星のエネルギーってのはよ」

生命力を全て地球に還元した事で今回のリゼットの役目も無事終了だ。

今回の戦いはリゼットの予定外の事であったが、終わってみれば収穫の大きな戦いであった。

何といってもターレスが悟空達に齎した情報が大きい。

これでリゼットからも無理なくナメック星への出発を切り出せるというものだ。内心、どうやって悟空達をナメック星に行かせようかと悩んでいた彼女にとって今回の件はまさに渡りにターレス。柵から落ちたナメック星だ。

しかし同時に一つハッキリとした事がある。

ここまで来ればもう、疑いようもない。

この世界には劇場版やアニメオリジナルの者達が普通に生きている。

という事は、今後スラッグやクウラといった者達と出会う確率も高いというわけだ。

スラッグはまあ、いい。まだリゼットなら何とかなる相手だ。

しかしクウラは無理だ。

今より強くないと、とても手に負える気がしない。

（やはり、ナメック星に行き潜在能力を引き出してもらう事は必須事項……。

全体のレベルアップも計らないといけませんね)

原作ならばフリーザ、人造人間、セル、ブウ辺りを警戒すればそれでよかった。だが劇場版込みならば、ここにスラッグ、クウラ、人造人間13号、ブロリー、ボージャック、ジャネンバ、ヒルデガーンを加えなければならない。

全く、頭の痛くなる話だ。

幸いなのは、自主的に地球を狙ってくるのがスラッグくらいだという事か。

(……これ、悟空君達と私だけじゃ厳しくないですか？

いっそパラガス見付けたらコントロール装置奪ってブロリーをこちら側に……いや、悟空君近くにいたらすぐ暴走しますね)

問題は、あまりにも山積みだ。

ともかく、あれこれ考えても仕方ないので今はナメック星行きについて考えるところ。

★

次の日。

カプセルコーポレーション前に集った悟空達はリゼットが心配するまでもなくナメック星行きを本気で検討していた。

リゼットの疑問としては、何か当たり前のように参加しているナッパの存在だろう。

凄く普通に紛れ込んで普通に会議に参加しているが、それでいいのだろうか？
誰か突っ詰めよと思うも、誰一人としてナッパに突っ込みを入れない。
しかも今日の服装はアロハシャツだ。舐めてるのかこのハゲ。

「オラは、ナメック星に行くべきだと思う。」

フリーザって奴の事はよくわかんねえけど、ベジータが不老不死なんかになったらとてもじゃねえけど手に負えねえ」

まず、ナメック星行きを強く推奨したのは悟空だ。

実際にベジータやターレスと戦い、その強さと恐ろしさを実感したからこそその重
い言葉である。

「俺も行くぜ。」

俺は戦いたい……俺の生まれ故郷だという、その星で」

次にピッコロが拳を握り締め、ナメック星行きに賛同した。

この様子だと、悟空達が行かなくても一人で行ってしまうかもしれない。

そう思われるくらいには、彼の決意は強かった。

「あのターレスという奴の口車に乗るのは癪だが、ベジータを不老不死にするわけにはいかん。俺も行くぞ」

「天さんが行くなら僕も」

続いて天津飯と餃子が名乗りをあげる。

餃子は自分の意思というよりは天津飯に追従しただけに見えるかもしれないが、これで賛同は4人だ。

「ちょ、ちょっと怖いけどよ。俺も行くぜ。

役に立てるかわからねえけどな」

「勿論、俺の事も忘れるなよ」

最後にクリリンとヤムチャが賛同し、これで戦士達全員の意思は決まった。

彼等は意見を求めるようにリゼットへ視線を走らせるが、これはリゼットとしても望む展開だ。

反対の言葉などあるはずもない。

しかし、誰も言わない以上ここで一つの問題点を提示しておく必要はあるだろう。

「私からの反対意見はありません。

ただ問題はナメック星との距離です」

「距離？」

リゼットの言葉にクリリンが緊張したような顔で聞き返す。

恐らくその表情は『嫌な予感がする』といった類のものだろう。随分顔に出やすいようだ。

そしてその予感は大当たりであった。

「ナメック星人の気を探ってみたのですが、地球とは少し距離が開きすぎています。

S U 8 3 方位の 9 0 4 5 Y X 座標……これ、今の科学力で到達出来る距離じゃないですよ？」

「げ……え、えーと、そうなの？」

ブルマさん、何とかならないかな？」

リゼットの出した数字にクリリンはよく分からなそうな顔をしてブルマへと話を

振る。

すると、ブルマは既に電卓を取り出して青い顔で計算を行っていた。

「じよ、冗談じゃないわ。」

父さんが作った世界最高のエンジンを載せた宇宙船でも4339年かかるわよ！

「

げえっ!? な、なんとかならねえのか?」

流石に学の浅い悟空もこの数字には驚くしかない。

4339年……そんな時間を待つくらいならば地球でフリーザかベジータが来るのを待ち構えた方がマシだ。

しかし慌てる彼等に、意外な所から助け舟が出た。

「それなら俺の宇宙船を使えばいい。」

それにカカロットが地球に来た時の宇宙船もまだどこかにあるはずだろう」

「ナッパ！」

「……勘違いするな。女神の為に協力してやるだけだ」

失意に沈みかけた皆が一斉にナッパを見る。

彼はつまらなそうに目を逸らしているものの、これで宇宙へ行く光明が見えたわけだ。

勿論それだけでは全員が宇宙へ行く事など出来ない。

サイヤ人の宇宙船は一人乗り用のポッドであり、今のままでは二人しかナメック星へ行けないからだ。

お、お前と一緒にナメック星に行く準備を……。

一人乗り用のポッドでかあ……？

しかしそこは地球一の天才、ブルマ。

サンプルさえあれば、それがたとえ未知の技術で作られた異星人の宇宙船だろうと分析し、同じ性能……いや、それ以上の物を作り出す事が出来る。

「これならいけるわ。早速宇宙船を回収しましょう」

「後は宇宙に行くメンバーだな。ブルマ、その宇宙船は元々一人乗りのようだが、何人乗りくらいにまで改造出来るんだ？」

「うーん、実物を見ないと何とも言えないけど……まあ、私に任せなさい。

ちゃんと全員乗れるようにしておくわよ」

ヤムチャの問いに、ブルマは頼もしく答える。

普通は現物を見たからといって、それを分析出来るとは限らない。

例えば遠く離れた過去の人間に現在の最新鋭機械を見せた所で理解は出来ないだろう。

リゼットの前世で言うならば、室町時代の人間に平成の世の飛行機を見せて「さあ分析して同じ物を造れ」と言っているようなものだ。

これは別に誇張表現でも何でもなく、むしろそれどころかまだ抑えた表現ですらある。

それほどに地球と惑星ベジータの科学力は隔絶し切っているのだ。

4339年かけてようやく辿り着ける文明に対し、僅か7日の航行で到着するサイヤ人。

倍数にして凡そ22万倍もの開き。これを埋めろなど無茶難題もいい所だ。

出来るわけがない、不可能だ。今の科学で模造出来る領分を完全に上回りすぎている。

だがブルマは出来る。彼女は出来る。

何故なら彼女は常識など完全に踏み越えた天才だからだ。

ブルマはよく悟空達を出鱈目呼ばわりする。

滅茶苦茶で常識外れな連中だとヒステリックに喚く。

だがリゼットに言わせれば彼女こそが本物の常識外れであり、出鱈目を具現化した存在であった。

22万倍の差……それがどれだけ途方もない科学力の差なのかは、科学者ならぬリゼットには想像出来ない。

しかしきつと、ライト兄弟の時代に宇宙船を持ちこむ程度の文明差では済まないだろうとは確信していた。

「では、全員乗れると仮定してよさそうですね。

兎人参化、貴方も同行してあげなさい」

「え？ 私ですか？」

リゼットは本来原作にいなかった兎人参化をあえて投入する事にした。

どうせもう原作なんて碎け散っているのだし、むしろイレギュラーが発生しすぎている現状で歴史通りに進むのはかえって危険だ。

土壇場で戦力不足になるのが見えきっている。

ともかく、敵が増えているのだから、こっちも数を増やさないと話にならない。「俺も行っている方がいい。ベジータの野郎は一発ブン殴らねえと気が済まねえ」続けてナッパが名乗りをあげた。

やはりベジータに見殺し（死ななかったが）にされた事は相当腹に据えかねたらしい。

つい先日まで敵で、しかも侵略者だった男だが悟空達は特に反対しなかった。

まあ、この世界でのナッパのイメージは……こう言っては何だかベジータのオマケ程度でしかないだろう。

誰も殺せていないし、ピッコロに一蹴されていい所なしだ。

つまりそれほどのマイナスイメージは抱かれていない。

「あ、あの……神様は来てくれないんすか？

正直、ベジータやあのターレスって奴がいるとなると神様には来て欲しいっていうか……」

クリリンが助けを求めるような目でリゼットを見上げる。

将来的なものはともかくとして、現状の戦力を言うならばリゼットがダントツだ。未だ一度として全力を出していないし、本気を出せばフリーザの第3形態までなら何とかなるという確信もある。

そしてリゼット自身としても、勿論ナメック星には行くつもりだ。

最長老の潜在能力開放は余りにも魅力的で捨て難い。

しかしリゼットは必ずしも宇宙船に乗る必要などない。

その気になれば、それこそ今すぐでもヘブンズゲートによる空間移動で単騎ナメック星突入すら可能なのだ。

つまりリゼットにとって宇宙船搭乗には何のメリットも存在していないのだ。

「私はパスです。それに皆が宇宙船に乗っている間、地球に何も起こらないとも限りませんし」

「そ、そんなあ……」

「まあ、そう心配しなくても皆がナメック星に着いたら私も合流しますよ」

「へ？」

「空間転移というやつです。私なら宇宙船に乗らなくても、一人でナメック星まで

跳ぶ事が出来ます」

リゼットは不安そうにしているクリリンを安心させるような笑顔を浮かべ、己の持つ能力を説明した。

「私の持つ能力の一つで、ヘブンズゲートといいます。

本来は敵を亜空間に放逐してしまう技なのですが、これを応用すれば対象をナメック星に飛ばす事も不可能ではありません」

「ほえー、すごいですね、神様って……」

「……先代はそんな事出来なかったがな」

リゼットが語った宇宙船以外の移動方法にクリリンが感心し、ピッコロが舌打ちしながら補足を入れる。

神が凄いのではない、この女がおかしいのだ。

ともかくこれでナメック星に行く方法は決まった。

戦士達は宇宙船で。リゼットは空間転移で。

それぞれの手段で移動し、ナメック星で落ち合えばいい。

そう決まりかけた所で、先程から無言だった悟飯が遠慮するように言葉を挟んで

きた。

「あ、あの……それ、神様のヘブンズなんとかって力で皆でナメック星に行けるんじゃない……」

「――あ」

この瞬間、宇宙船の価値は消失した。

ヘブンズゲート「あ、俺いるから君等もう来なくていいよ。勿論ギャラもなしね」
ポッド「なん……だと……」

神様の宇宙船「ありえない……こんな……理不尽……っ！」

【以下、リゼットが気付いていない最速攻略法】

・ヘブンズゲートでの星間移動が可能なので実はここで18話でリゼットが不可能と判断した方法が復活しています。具体的には以下の手順。

1、ヘブンズゲートでリゼットがナメック星へ移動。

2、ナメック星人達を説得して地球へ移動させる。

3、ナメック星でベジータ、フリーザ、ターレスに潰し合いをさせる。

4、→の間に地球で悟空達を鍛えまくり、最長老の潜在能力解放もして貰って、何度か瀕死&仙豆パワーアップもさせて悟空を超サイヤ人になれるまで鍛え上げる。

5、ついでにドクターゲロの研究所に先回りして人造人間の誕生も阻止しておく。ゲロは殺す。ついでにゴブリンも殺す。

6、フリーザの移動を感知した所でポルンガ召喚。フリーザの宇宙船をどこかのブラックホールか恒星に転移させて抹消する。

7、→でフリーザは死ぬか、万一生き延びても宇宙の迷子になるはずだが、それでも地球に来たら総がかりで叩き潰す。

多分これにリゼットが気付いて実行してしまった並行世界もあるでしょうが、それだと物語になりません。

なのでこの物語はリゼットがそれに気付かなかった世界と思って下さい。

第二十四話 いざ、ナメック星へ

「え、えーと……ゴホン。」

とりあえずナメック星へは私の力で送るとしまして、問題は今すぐに送るわけにはいかないう事です」

「な、何でもだよ神様！ 早く行こうぜ！」

悟飯の正論すぎる突っ込みにここまでの議論が無駄だった事を悟らされて数秒。何とか気を取り直したりゼットは平静を装い、今すぐの転移を拒否した。

無論それに黙っているわけにもいかず、悟空が反発する。

「一つ、最大の問題が残っています」

「問題だと？」

「はい……結論から言います。」

今の皆の力でナメック星に行っても、死ぬだけです」

リゼットが発した言葉は、要するに『貴方達弱いんです』という事でしかなく、プライドを抉る一言だ。

しかし反論は出来なかった。

ベジータに敗れ、ターレスに敗れ、彼等は充分なまでに己の無力さを思い知らされてる。

ただ、悔しそうに拳を握りこむ事しか出来ない。

「ですから1ヶ月……皆は可能な限りの修行を行い、最低限の戦力を身に付けて貰います。

私の感知が正しければ、少なくともフリーザやターレスは後1ヶ月はナメック星に到着しません」

原作をあまり鵜呑みにしてその通りに行動するのは危険だが、とりあえずフリーザの到着時期はそう原作と変わらない。

遠く離れたフリーザの気、その移動速度から見てもナメック星に到着するには大分猶予がある。

ターレスの方もそれは同じで、とりあえず30日近くの時間がこちらには与えられていた。

移動時間をヘブンズゲートで0に出来る以上、これを活用しない手はない。

「まず悟空君とピッコロ以外は界王星に向かい、そこで修行をして貰います。

少しきついかもしれませんが、何とか1ヶ月で可能な限り強くなって下さい」

そこまで話し、リゼットは意識を研ぎ澄ませて遠く離れた界王星への波長を合わせる。

そして念話を用い、界王へのコンタクトを試みた。

『……と、いう事なのですが、そちらに地球の戦士を送ってもよろしいでしょうか？』

『まあ僕は構わんが、どうする気だ地球の神よ。そいつ等を殺して蛇の道を歩かせる気か？』

『いえ、その必要はありません』

リゼットは虚空に手を掲げ、気を開放する。

すると上空に白い『穴』が開き、遙か遠方へと通ずるゲートが完成した。

ガリックのデッドゾーンをモデルに編み出した『ヘブンズゲート』の初披露だ。

「ひ、ひええ……！」

「これがヘブンズゲート……神様、あれを通れば俺達は界王星へ行けるのですね？

」
空中に突如出現したゲートにクリリンが怯み、天津飯が戦慄しながらも行く気満々といった声で尋ねる。

それに対しリゼットは頷き、悟空とピッコロを除く戦士達へと告げた。

「あれを通れば、後は自動的に界王星に着きますので、そこで界王様の修行を受けて下さい。」

1ヶ月経ったら私が迎えに行きますので、帰りは心配しなくていいですよ」

「ず、ずるいなー、おめえ達！　オラなんて半年もかけて蛇の道を走ったのによ！

帰る時だって必死に走ったのに！

神様、何であの時それやってくれなかったんだよ!!」

「あ、あの時はまだ未完成の技でしたので……それに初対面でいきなりこれをやっても修行をしてもらえとは思えませんし……こ、今回は面識があったから出来たわけでした……」

リゼットはそう説明しながらも、よく考えたら悟空が帰って来る時は迎えに行っ

てあげてもよかったな、などと思っていた。

あの時は既に技も完成していたし、わざわざ帰りまで蛇の道を走らせる必要はなかった。

「さあ皆さん、強さを求めるならどうぞお通り下さい。

ただ、悟空君とピッコロはもう基礎が出来上がっていますので、このまま地球に残って次のステップに進んで頂きます」

パン、と手を叩いて話を強引に進める。

ブルマが「誤魔化したわね……」と言っているが、聞こえないフリをした。神様だって間違いくらいするのである。

「オラ達は界王様の所にいかねえんか？」

「はい。二人はもう界王拳を覚えていますし、次は界王拳に耐える頑丈な身体作りといきましょう。

とりあえず目標は界王拳10倍を使いこなせるようになる事です。

他の皆さんも、出来れば界王拳を習得してきて下さい」

リゼットは説明しながらも、恐らく無理だろうけど、と内心で付け加える。

もしこれが可能ならば、天津飯達は本来の流れでも界王拳をとくに習得していたはずだ。

しかし結局そんな描写はなかったし、界王様も悟空が現れるまで使い手はいなかったと語っていた気がする。

自分だって紛い物とは言え、バーストリミットを開発するのには時間がかかった。とはいえ、それをわざわざ教える必要はない。

それにもしかしたら、ピッコロみたいにイレギュラーな習得をしてくれるかもしれないではないか。

クリリン達がリゼットの言葉を聞き、置いていかれてなるものと早々にゲートへと飛び込んで行く。

ついでに悟飯もチチの制止を振り切って飛び込んだ。

最後に天津飯が飛び込もうとした所でリゼットは彼を呼びとめ、紙を渡す。

「神様、これは？」

「界王様に会ったら、ここに書いてある内容を一字一句違えず読みあげて下さい。これで最初の試験はパス出来ますから」

「は、はあ？」

「多分この中じゃ貴方が一番苦勞しそうですからね……タイムロスはなるべく減らしましょう」

よくわかってなさそうな天津飯の背中を押し、ゲートを潜らせる。

そして悟飯を追ってゲートに飛び込もうとしていたチチを制止し、改めて悟空とピッコロへと向き直った。

「さ、天界へ行きますよ。二人共着いて来て下さい」

悟空とピッコロの二人を連れ、天界へと向かう。

今回の修行で使うのは以前にブルマから購入し、以降使い続けてきた重力室だ。とりあえず二人にはここで、100倍の重力を克服してもらおうというのがリゼットの考えだ。

ついでに二人が強くなってくれば、同時に自らの修行相手にもなれるだろうという期待もあった。

とにかく、この1ヶ月でギニュー特戦隊くらいは蹴散らせるようになってもらう。

そうでなければ打倒フリーザなど夢のまた夢だ。

★

「ゆで卵を！ 茹でた孫！」

一方、界王星では開幕早々天津飯が親父ギャグを飛ばしていた。

彼は本来こんなキャラではない。

キャラではない……のだが、神から渡された用紙にそう書かれていたのだから仕方ない。

きつとこれは合言葉とか、暗号とか、そういう何かだろうと大して疑問も抱かずに親父ギャグを口走る。

誰でも思い付くような、何の捻りもないギャグ。

しかしその効果は絶大だ。

界王は打ちのめされたように地面に倒れ、腹をよじり、爆笑して笑い転げている。

「は、鼻糞の秘密をそつと話すそう！」

続けてヤムチャが何に対抗したのか、親父ギャグを飛ばした。

すると界王は涙すら浮べて、ますます苦しそうに腹を抱えて大笑いした。

「アルミ缶の上にあるミカン！」

「隣の塀に囲いが出来たってね。へーかっこいいー！」

更にクリリンとナッパのハゲコンビが駄洒落を追い討ちで叩き込んだ。

そこに容赦なく餃子と兎人参化が追撃を仕掛けた。

「新しいのがあったらしい！」

「いいヅラ買ったの言い辛かったの?!」

「テメエ……何故俺がヅラを買った事を知っている……」

「!？」

怒涛の4連発ギャグに界王はもうKO寸前だ。

無論、下らない駄洒落である。笑うに値しない。

しかし普段、この刺激のない小さな星で暮らし、僅かな出来事に一喜一憂している界王の笑いの沸点は限りなく低い。

だからこの程度の次元の低いギャグであろうと、彼のツボを突いてしまう。

そして何故かナッパが兎人参化に詰め寄っているが、それはどうでもいい事だろう。

「草刈ったら臭かった！」

そこに、悟飯が止めを刺した。

界王は衝撃を受けたようにえび反りになり、地面に倒れる。

明らかな呼吸困難、笑い過ぎによる酸欠状態に陥っている。

悶える事数秒……やがて彼は痙攣し、口から泡を吹いて動かなくなった。

「見事なギャグじゃったぞ。あやうく本気で死ぬ所だった」

数分後。

何とか立ち直った界王の前でクリリン達は正座していた。

危うく、銀河の神をギャグで殺すという笑い話にもならない大罪を犯してしまう

ところであった。

確かに天津飯にギャグを書いた用紙を渡したのはリゼットだが、その後の悪ノリは彼等自身のものである。

しかし界王は怒るでもなく、むしろ嬉しそうに笑っていた。

「うむ、全員文句なしじゃ。弟子にしてやろう」

危うくギャグで死にかけはしたが、界王を笑わせるという弟子入り条件は見事に全員が達成している。

自分が提示する前に先制でギャグを飛ばすのはどうかと思うが、あれだけ見事に笑わせてもらえたのなら、文句も出ない、と界王は考える。

「ではまず最初は、バブルス君とグレゴリー君を見事捕まえてもらおうか」

かくしてクリリン達は無事に界王への弟子入りを果たし、修行を開始した。

同じ頃には悟空とピッコロもリゼット相手の修行を開始し、その戦力を伸ばしていく事となる。

——そして、1ヶ月後。



地球のカプセルコーポレーションにて、戦士達は1ヶ月ぶりに集結していた。クリリン達は界王の修行を乗り越え、悟空とピッコロは重力修行を克服した。

全員が1ヶ月前よりも実力を遥かに伸ばし、もう恐れるものはないと自信に満ちた顔をしている。

この1ヶ月間の間、何のトラブルも起こらなかったのはリゼットにとって幸運

であった。

フリーザやベジータ、ターレスの気もまだナメック星へ到着していないし、これといった外敵も地球に現れなかった。

てつきり、スラッグあたりが来ると思っていたのだが……。

存在自体はしているのだろう。リゼットは数日前まで、確かに地球に接近しつつあったスラッグらしき気を感じていた。

しかしどういうわけか、その気は突然進路を変更して別の星へ向かってしまったのだ。

その行き先は、ナメック星だ。

……また何か、厄介な事になりそうな気がする。

「さあ、行こうぜ神様」

リゼットの悩みなど知らずに悟空が弾む声を抑えもせずに言う。

この1ヶ月で伸びた己の実力を試せる相手、それでも尚届かぬ相手。

その邂逅を心より望み、楽しみにしているのだ。

「待って。出発前に貴方達の戦闘力を計らせて頂戴。」

サイヤ人達の使っていたスカウターを更に改良した新型よ」

ブルマがそう言い、スカウターを己の目に取り付ける。

何時の間に回収、改良していたのかは知らないが彼女に関してはもう何でもありだと思ってしまう。

戦闘力を計る機械音が響き、ブルマが一人一人の数値を確認していく。

「へえ、皆凄いじゃない！」

クリリン君、16400。ヤムチャ、16200

天津飯さん、17500。餃子君、14000

悟飯君、18000。人参化、15800

ナッパ、24000」

まず界王星から帰還したグループにスカウターをセットし、その戦闘力の飛躍的な伸びを褒める。

未だギニュー特戦隊はおろか、ナッパ以外はドドリアやザーボンにすら及ばない数字だが、これならば潜在能力の解放でどうにかなるだろう。

とりあえず、リゼットの望むギリギリのラインはクリアといったところか。

「ええと、こっちは……げ。

ピ、ピッコロ、75500。

孫君、95000。

……神様……24万」

尚、ブルマが知るはずもない事であるがピッコロは重い服を着ており、実際の戦闘力は94400にも届く。

リゼットはピッコロよりも更に重い服と気霊鎧を付けているので実際の戦闘力は既に90万に達していた。

しかし驚くべきはリゼット以外の戦士達の伸び代だろう。

数値にすれば未だリゼットが圧倒的なものの、1ヶ月前までは戦力差はこの比ではなかった。

そもそもリゼットは実の所2倍程度しか強くなれていないのに対し、ピッコロなどは10倍以上のパワーアップを果たしている。

他の面子にしても3倍程度の強さにはなっているのだから、笑うしかない。

恐るべきは原作メンバーか。

リゼットも一応悟空とピッコロを同時に相手にしてみたり、カリンを重力室に連れ込んでモフってみたり、カリン用の爪とぎを天命石で造ってみたりと色々やっていたのだが、伸び方が違う。

しかしこれでも、今までを思えばリゼットは飛躍している方なのだ。

たった一月で戦闘力が倍に伸びるなどという事は、今までのリゼットにはなかった。

恐らくは前回の戦いで神精樹の気を限界まで取り込んだ事が影響しているに違いない。
あるまい。

あの経験でリゼットは、己の壁を一つ乗り越えたのだ。

それに、あの戦いで得たものは他にもある。

神精樹から吸い取った気は全て地球へ還元した。故にあの一件でリゼットの戦闘力が伸びたりとか、そういう事はない。

しかし何と言うのだろうか……自分の中の器が明らかに前より大きくなったような手応えを感じているのだ。

例えばバーストリミットだ。

今まではギリギリで20倍が限度だったが、あの一件以降は20倍が苦にならなくなった。

今ならば30倍……戦闘力が上がれば40倍だっていけるかもしれない。

神精樹を処理した際、リゼットは疑似的とはいえ一時的に超サイヤ人級の世界へと足を踏み入れていた。

気は地球へと還したが、それでも強くなった経験を身体が覚えているのだ。

だからこそ、バーストリミットによる無理な戦闘力上昇すら、今のリゼットにとっては受け入れられるものとなっていた。

「どうだ神様、これでもまだ不足かい？」

自信に溢れたヤムチャの言葉にリゼットは首を振る。

今の彼等は戦い方次第ではドドリアやザーボンとも戦えるレベルだ。

少なくとも、ギニュー特戦隊到着前ならばそうそう不覚は取らないだろう。

そしてここに最長老の潜在能力解放を上乗せすれば、悟空とピッコロはきっとターレスにだって勝てるようになるはずだ。

フリーザに関しては、こう言うてはあれだが最初から悟空頼みである。

そもそも数値がおかしいのだ、あれ。

数百万単位で拮抗してた所でいきなり億とかふっ飛びすぎていて突っ込む気も起きない。

リゼット自身も最長老の潜在能力解放次第ではあの域に届くかもしれないが、確実性を求めるなら悟空の超化の方がいい。

だから、これに関しては最初からヤムチャ達がこの域に届く事を期待していなかった。

というより、届けというのが無理難題だ。

「いいえ、十分です。

皆、よくここまで強くなりました」

ただ一人、餃子だけが不安な戦闘力だが、まあグルドくらいになれば勝てるだろう。

ともかくこれで全員、とは言わないが大半がリゼットの望む条件をクリアした。そして時期的にもフリーザがそろそろナメック星へ到着する頃であり、時間的猶予もない。

つまり、どのみちこの戦力で突入する他ないのだ。

念のためにホイホイカプセルにした宇宙船もピッコロに持たせているので、万一の時の退路も確保してある。

不在中に地球に何も起こらない保証はないが、その時はカリンかMr・ポポが念話で伝えてくれるだろうし、地球との通信機も一応クリリンが持っているので大丈夫だろう。

「では、全員集まってください。

今からナメック星への道を拓きます」

最初の転移先はもう決まっている。

デンデが暮らしていた村。まずはあそこの付近へと飛んでデンデを救助する。

その後はデンデを連れてヘブンスゲートで最長老の所へ行き、全員の潜在能力を解放してもらおう。

フリーザ一味とはデンデ救出時以外はしばらく関わらない方向でいいとリゼットは考えている。

そうすればしばらくはベジータとでも小競り合っていてくれるだろう。

さあ、ナメック星でのドラゴンボール争奪戦の始まりだ。

リゼット「(悟空君に持たせると失くしそうなので) 宇宙船はピッコロ、通信機はクリリン君が持っていて下さい」

ピッコロ「わかった」

【各キャラ戦闘力】

・リゼット

基本戦闘力…240000

重装備解除…300000

気霊錠解除…900000

バーストリミット(最大30倍)…27000万

・孫悟空

基本戦闘力…95000

界王拳(最大10倍)…95万5000

※無理な瀕死パワーアップをしなかったので原作で1週間鍛えただけの悟空と大差なし

・ピッコロ

基本戦闘力…75500

重装備解除…94400

界王拳（最大5倍）…47万2000

・ナッパ…24000

・孫悟飯…18000

・天津飯…17500

・クリリン…16400

・ヤムチャ…16200

・兎人参化…15800

・餃子…14000

―ナメック星編不参加（万一の際の地球の守りとして待機）―

・Mr・ポポ…16500

・
カ
リ
ン
様
..
1
6
0
0
0
0

第二十五話 集う者達

高い戦闘力と不思議な力を持ちながら、争いを好まない宇宙人、ナメック星人。彼等は平和を愛し、ナメック星をかつてのような美しい星に戻す為にアジッサの木を栽培しながら静かに暮らしている。

しかし今、そんな彼等の平和を脅かす勢力が同時にこの惑星へと襲来しつつあった。

「ここがナメック星ですね、ザーボンさん、ドドリアさん」

「はっ」

ナメック星にまず到着したのは巨大な宇宙船。

その中から出てきたのは一人乗り用の、椅子のような乗り物に乗った有角の宇宙人だ。

両脇には緑色の美丈夫とピンクの醜男を従え、更にその背後には幾人もの兵士が並ぶ。

その中に一人とて弱兵はいない。

誰もが、それぞれの出身惑星で最強と呼ばれるエリート揃いで一番弱い者でも戦闘力1000を上回る。

側近のザーボン、ドドリアともなれば戦闘力は2万を超え、そして中央のフリーザ——宇宙の帝王は53万を記録している。

一度彼に目を付けられたならば滅亡不可避、とまで言われる宇宙の恐怖。

それが部下を引き連れ、己の欲望を果たす為にこの平和な惑星へと降り立った。

「ここがナメック星か……ちつ、フリーザの奴も既に来てやがるな」

フリーザ達と反対——南の方角に、また別の宇宙船が着陸した。

中から出てきたのは奇抜な頭髪をしたヒューマンタイプの男だ。

浅黒い肌に、サイヤ人の象徴である猿のような尻尾。

サイヤ人、と呼ばれる戦闘種族の一人——ターレス。

かの戦闘種族の中でも飛び抜けた戦闘力を誇る男は薄ら笑いを浮かべ、その場から早速移動を開始する。

まず狙うは、ドラゴンボール。

何も全部集める必要などない。

要は一つだけ確保し、フリーザが揃えられないようにすればいい。

その後で、きつと来るだろうカカロットと合流して、今度こそ息子共々手駒へ加える。

そうしてからサイヤ人の力でフリーザを始末するのだ。

「待っているフリーザ。最後に笑うのは俺達サイヤ人だ」

ターレスは敗北などまるで考えない不敵な笑みを浮かべ、己の勝利を早くも宣言した。

「フリーザの野郎め……」

ドラゴンボールは絶対に渡さんぞ」

西の方角にまたも宇宙船が降り立つ。

前述の二つとは異なり、小型の一人乗り用のポッドだ。

中から出てきたのは特徴的な生え際が輝くサイヤ人の王子、ベジータ。

フリーザやターレス同様に戦闘服を纏ってはいるが、サイヤ人の象徴である尻尾はどこにも見えない。

「ちっ、ザーボンやドドリアも連れてきてやがる。

何とか隙を突いてドラゴンボールを奪わねばな……」

ベジータの抱く野望は一つ、宇宙の支配。

そして己こそがナンバー1であり、最強である事を証明する事だ。

その為にもフリーザはいずれ殺さねばならない邪魔な存在であった。

今も戦闘力では勝てる相手ではない。

しかし不老不死にさえなれば勝機はある。必ずチャンスが巡ってくる。

「奴さえ消えれば俺がナンバー1だ。

全宇宙はサイヤ人の王子であるこのベジータ様が支配する！」

いずれ来るだろう未来に思いを馳せ、ベジータは笑う。

覚悟しろフリーザ、貴様の時代が終わる時がやってきたのだ。

そう嘲笑い、そして己の栄光を掴むべく行動を開始した。

「不思議だ……この星は初めて来た気がしない。

儂の中の遠い記憶が呼び覚まされるような気がする」

東の方角にもまた一つ、巨大な宇宙船が着陸していた。

彼等は様々な惑星へ移動しては、その惑星を改造して自分達の宇宙船へと変えてしまふ悪質な侵略者だ。

元々は数日前、地球を改造しようと地球を目指していたはずだがスラッグは突如として移動^{宇宙船}惑星の進路を変更し、この星まで来てしまったのだ。

何故進路を変えてしまったかはスラッグ自身にも実のところよく分かっていない。あの時はただ、それが正しい事のように思えたのだ。

部下が言うにはその時のスラッグは黒いオーラに包まれていたらしいが……まあ、どうでもいい事だろう。

そう思えるほどにはスラッグは今回の進路変更は正解だったと思っていた。

地球ほどの惑星ではないが、この惑星もなかなか環境が整っており、しかもそれが彼——スラッグにとってこの上なく居心地のいいものであったからだ。

「スラッグ様、この惑星を御氣に召しましたか？」

「うむ」

配下の魔族の一人に尋ねられ、スラッグは上機嫌に答える。

ここはいい。ここがいい。

この場所こそが、己が住むに相応しい惑星だと確信出来る。

「早速この惑星の改造に取りかかれ。

儂はここを次の安住の地とする事を決めたぞ」

そこがまさに己の母星である事すら自覚しないままに、超ナメック星人とさえ呼べる天才は侵略を決定する。

かくしてここに4人。

フリーザ。

ベジータ。

ターレス。

そしてスラッグという悪が集結し、それぞれの野望を果たすべくナメック星を舞台に行動を開始した。

それはまさに、平和なこの惑星に降り注いだ悪夢そのものであった。



リゼットの転移によりナメック星へ到着した悟空達は一斉に、この星を取り巻いている異常に気付いていた。

妙だ……やたら強い奴の気がゴロゴロしている。

そのほとんどは強い、とは言っても今の彼等に及ぶものではない。

しかしごく一部、丁度彼等の四方を囲む形で配置されている4人のうちの3人が別格だ。

「と、とんでもねえ気だ……こいつがフリーザってやつか……」

「ターレスの気もありますよお父さん……それにベジータも」

「こ、こっちは俺と同じナメック星人か？　しかし何か邪悪なものを感じるぞ」

悟空、悟飯、ピッコロがそれぞれの方向を向き、気の出所を探る。

そのうちの二つはよく知ったもので、ベジータとターレスのものに違いはないだろう。

一際大きなものはフリーザだろうが、それに匹敵するナメック星人らしき気まで感じられる。

この惑星はどうやら、彼等が思う以上の激戦区と化しているらしい。

この事はリゼットにとっても予想外の事であった。

「……幸い向こうはこちらにまだ気付いていません。

このまま気を消して、行動しますよ」

悟空達はこの惑星に来る前から既に、リゼットの指示によって気を消している。フリーザ達がスカウターを持つ以上、わずかな戦闘力の発露でも場所を気付かれるし、偵察を送られるかもしれない。

それを避けるためにも、まずは戦闘力を消して影のように動くのが好ましかった。不安材料は、悟空だろうか。

この中では最もこういう行動に向いていないように思える。

「……っ。

どうやらフリーザが動いたようです。

皆、その洞窟に急いで隠れて下さい」

フリーザと、その配下の気が一斉に行動したのをリゼットは感じた。

方向からして恐らく、この先にあるナメック星人の気を目指しているのだろう。

しかし問題は、その途上にいる自分達だ。

このまま呆けていては当然フリーザ達に見付かり、交戦に入ってしまう。まだ、ここでフリーザと正面から敵対するわけにはいかない。

故にリゼットは、この場合は隠れるのが最適と判断した。

彼女の指示に応じ、全員が洞窟へと隠れる。

悟空は興味本意で顔を出そうとしたが、ナッパに無理矢理引き摺りこまれた。そして通過する、侵略者の一団。

その中のほとんどは気にするようなものではない。

2年前ならば脅威に感じただろうか、今の彼等にとってはただの雑兵だ。

しかし中央の3人だけは別格。力を上げた今の彼等であっても恐怖を感じる絶大な気の持ち主であった。

特にフリーザに至っては、今の悟空やピッコロでさえも警戒する戦闘力だ。

「な、なんだあれは……ターレスに並びかねないほどの気を感じたぞ」

「あれがフリーザ……なんて奴だ」

ヤムチャと天津飯が声を震わせ、自分達が戦うべき敵の強さに戦慄する。

いや、彼等だけではない。

悟飯やクリリン、餃子、人参化、そして最近気を感じ取れるようになったナツパも等しく震えていた。

悟空とピッコロは界王拳の出力を限界まで上げれば渡り合えない事はないのでそこまで恐れは感じていないが、やはり脅威には思っていた。

この中で唯一、『現時点での』フリーザに何の脅威も感じていないのはリゼットだけだろう。

「あいつら、一体どこへ向かっていたんでしょう？」

「恐らくナメック星人の所でしょう。この先……大体14 kmの位置にナメック星人の気が複数感じられます」

悟飯の疑問に答えながらリゼットは思案する。

フリーザはまだ第一形態……そして自分ならば恐らく簡単に倒す事が出来る。

ならばいっそ、今戦いを仕掛けて変身させずに倒すというのはどうだろう。

仮に変身させてしまったとしても第2、第3形態ならばまだ楽に勝てる。

しかし、だ。

何もフリーザが順番通りにしか変身出来ないという保証はない。

もしかしたら段階を飛ばしていきなり最終形態になる事だって出来るかもしれない。

もしそれが可能だった場合、死ぬのはこちらだ。

加えて、あの魔族の男女の存在もある。

この遠く離れたナメック星まで干渉してくるとは考え難いが、万一は常に想定しなくてはならない。

……やはり万全を期して、まずは潜在能力の引き上げを優先するべきだ。

思案の末、リゼットは確実性の高い慎重策を選び取った。

勝率は高ければ高いほどいい。

「か、神様。俺、様子を見に行きたいんですけど……いいでしょうか？」

「ぼ、僕も」

「俺は止めても行くぞ。俺と同じナメック星人を見ておきたい」

クリリン、悟飯、ピッコロが村へ行く事を提案する。

というかピッコロの中では既に決定事項のようだ。

リゼットはその提案を聞き、小さく頷く。

「そうですね……折角の人数ですし、ここは二つに分けましょうか。

ピッコロ達と一緒にこの先の村を見るチームと、もう一つは他の村に先回りし、ドラゴンボールと村人を保護するチーム、というのはどうでしょう」

「確かに、二手に別れた方が効率はいいですね」

「いざという時の全滅も避けられるしな」

リゼットの出した方針に天津飯とナッパが同意する。

どうでもいいが、このメンバー、ハゲ比率が少し高すぎやしないだろうか。

「私達は10人ですから、5人ずつで分けましょう。」

ただ、私と餃子君はテレパシーの為に別チームに振り分けます」

今、ここにいるメンバーは10人。

悟空、悟飯、ピッコロ、クリリン、天津飯。

ヤムチャ、餃子、人参化、ナッパ、そしてリゼットだ。

このうちピッコロ、悟飯、クリリンは偵察チーム行きが決まっているので、残る二人を決めれば編成完了となる。

「この先にはフリーザもいますし……悟飯君達には万一を考えて私が同行しましょう」

そしてこの先にフリーザがいる以上、交戦しないにしても最悪の事態を考えればリゼットを入れるしかない。

つまり、決めるべき面子は一人だけだ。

「じゃあ俺が付いて行ってやる。何か異論はあるか？」

そして最後の一人にはナッパが名乗りをあげた。

彼はフリーザの事を直接知る唯一の人物であり、その内情にも詳しい。

つまりこの中では最も適した人材であると言える。

無論、これに異論など上がるはずもなかった。

かくして決まったメンバーは以下の通りだ。

偵察班——リゼット、ピッコロ、悟飯、クリリン、ナッパ。

保護班——悟空、天津飯、ヤムチャ、餃子、人参化。

「では、行って来ます。」

悟空君、ドラゴンボールの確保は任せましたよ」

「ああ、神様も気を付けてくれ」

リゼット達五人は悟空達を残してその場を発ち、気を抑えながら移動する。

飛行などしてはスカウターで発見されてしまうので、止むを得ないのだ。

それから進む事数分。飛んで行けばほんの数秒で着いただろうそこに、ようやくリゼット達は到着した。

クリリン達はすぐに近くの丘の上にうつ伏せになると、気を完全に消して様子を窺う姿勢に入った。

一方リゼットはクリリン達から距離を置き、フリーザ達からは見えない位置に立って気を消している。

リゼットには遠視があるので、実のところわざわざ肉眼で確認する必要もなく、ああしてうつ伏せになる理由もなかったのだ。

「あの、神様……そこじゃ何も見えないと思うんですけど……」

「大丈夫です。私はここからでも視えますのでお気になさらず」

リゼットに気を遣うようなクリリンだったが、本人が大丈夫だと言っているのだから仕方なくフリーザ達を観察する作業へ戻る。

丘の下で行われているフリーザ達の所業はまさに外道そのものだった。

ナメック星人を素直にさせる為に村人の一人の首を折り、更に続けてもう一人を気弾で殺す。

村の危機を知り駆け付けたのだろう若者3人はフリーザの部下をほぼ壊滅させる奮闘を見せたものの、桃色の醜男によって皆殺しにされてしまった。

挙句の果てにドラゴンボールを渡せば何もしないと約束しながら、いざ渡されればあっさりと約束を翻し、殺しにかかる。

その鬼畜にも劣る所業に沸点の低い悟飯の怒りが頂点に達したのは無理のない事であり、義憤に駆られた少年はピッコロ達が止めるのも聞かずに飛び出し、ドドリアを蹴り飛ばした。

——やっぱ距離を置くべきじゃなかったかもしれない。

そう呑気な事を考えながら、リゼットも悟飯を回収するべく即座に行動を開始した。

【超サイヤ人だ孫悟空】

『ドラゴンボール』シリーズの劇場公開作第7弾。

悟空達が地球にいて、ピッコロが生存している。

後に『サイヤ人絶滅計画』でターレスと共演するので『この世で一番強いヤツ』、『地球まるごと超決戦』と同じ世界線の可能性が高い。

この映画でナメック星人は口笛が弱点という設定が追加され、それが後にピッコロさんのキャラクター崩壊ソングである『口笛の気持ち』へと繋がった。

ピッコロ「全国1千500万人のピッコロファンのみなさん……たすけて……」

【スラッグ】

悪の心しか持たない超ナメック星人。

地球をクルーザーに改造したいというDB史上最もアホみたいな理由で攻め込んできた。

上司として考えた場合、歴代ボスキャラの中でも比類なき無能オブ無能。

『スラッグ様もう御歳だ』と労わっただけの幹部を処刑し、地球改造に10日あればと答えた技術者も処刑した。

魔族は光に弱いので地球を分厚い雲で覆い、寒冷化させようとした。

しかしピッコロ大魔王は普通に太陽の下で戦っていたし、ダーブラも平然としていたので魔族の特徴というより、単にこいつ等が極端に太陽嫌いだっただけだと思われる。

（太陽の下では長生き出来ないらしい）

戦闘力はカードダスによると老で156万。後は不明。

最大で大体500万くらいというのがよく見る解釈。

【ゼエウン】

スラッグ軍の幹部。

『スラッグ様も、もう御歳だ』と言っただけで殺されてしまったクッソ哀れな人。

主に恵まれなかった。

【ギョーシュ】

スラッグ軍の技術者。

地球を改造するのに10日あればokと答えたぐう有能。

しかしスラッグはせっかちだったので処刑されてしまったクッソ哀れな人。

主に恵まれなかった。

【カクージャ】

スラッグ軍の技術者。

ギョーシユの処刑を目の当たりにして3日でおkと答えて生き延びた。

しかし二人でも10日だったのに一人で3日以内に出来るかは疑問であり、恐らく詰んでいたであろうクッソ哀れな人。

主に恵まれなかった。

【ドロダボ】

スラッグ軍の幹部。

中ボスキラーピッコロさんに挑み、命乞いした挙句にあっさりやられたクッソ哀れな人。

見せ場があっただけマシか。

【メダマッチャ】

スラッグ軍の幹部。

コメダマッチャという自分の影をまわりつかせてエネルギーを吸収するとい

う、薄い本ならば引っ張りダコ間違いなしの有能。

しかし野郎ばかりのドラゴンボールでは宝の持ち腐れだったクッソ哀れな人。

【アンギラ】

スラッグ軍の幹部。

幹部の中では最もイケメンで大物感があつたが、なかなか出番が回って来なかった。

いざ出番が来たと思ったら、よりにもよって相手が主人公の悟空だった為にいい所なくあっさりやられてしまったクッソ哀れな人。

第二十六話 美しき野望

☒ 前話の『超サイヤ人だ孫悟空』の解説の一部に過りがあったので微修正しました。

「お前なんか！ 僕がやっつけてやる!!」

フリーザ一味の悪行に我慢出来無くなった悟飯はドドリアを蹴り飛ばし、声の限りに叫んだ。

大口を叩いたように聞こえるかもしれないが、今の悟飯の戦闘力ならば実現出来なくはないだろう。

実際ドドリアの戦闘力22000に対し悟飯は18000であり、決して戦えない相手ではない。

だがフリーザ相手となれば話は変わる。

たとえば、界王拳を習得して戦闘力を10倍にしようと太刀打ち出来る相手ではな

い。

とはいえ、そんな事を激昂した悟飯が考えるはずもなく、だからこそ他の面子の出番となる。

立ち上がるうとしたドドリアを、今度はピッコロが蹴り飛ばした。

その威力たるや悟飯の比ではない。

ドドリアは一撃で家屋を突き破り、無様に地面を転がって血反吐をぶち撒ける。それを見てフリーザも己が動く必要があると感じたのだろう。

素早く掌を向け、ピッコロに向かって気弾を発射した。

しかしその気弾は間に割り込んだリゼットによって弾かれる。

バーストリミットによる白い輝きを放ちながら舞い降り、宇宙の帝王が放った気弾をいとも呆気なくかき消したのだ。

「皆、退きますよ」

リゼットが指示し、ナメック星人の子供を保護した戦士達が一斉にその場を離脱する。

最後にリゼットが飛翔し、その場にはフリーザ達だけが残される事となった。

無論それを黙って見逃すフリーザではない。

「追うんですよ、ザーボンさん、ドドリアさん！」

「……う、美しい……」

「ザーボンさん！」

「ハッ!？」

ザーボンはヒューマンタイプであり、故にザーボンの美的感覚は地球人のそれと極めて近い。

そして彼女はヒューマンタイプとしては最上とも呼べる美を持っていた。

ザーボンはそれに見惚れ、しばし我を失っていたのだ。

しかしそれは彼にとってこの上ない屈辱だった。

生まれて初めて、自分以外の誰かの美に心を奪われた。

心底美しいと感じ、見惚れたのだ。

ザーボンは美しさと醜さを合わせ持つ戦士だ。

故に醜い者は許せないが、自分よりも美しい者は更に許せない。

「ば、馬鹿な……この私が、己以外に見惚れただと……」

「早く行きなさいザーボンさん！」

「こ、心の底から美しいと感じた……私の姿を鏡で見るよりもずっと……。嘘だ……ありえない。この宇宙に私よりも美しい者が存在するなど……」

「ザ、ザーボンさん！」

「ゆ、許せない……こんな屈辱は今までに受けた事がない……」。

どこの誰かは知らんが、このまま終わらせてなるものか。

宇宙で最も美しいのはこのザーボンだ」

「いい加減にしなさいザーボンさん！」

不意に、殺氣を感じた。

ザーボンがようやく我に返って振り返れば、そこにはまさに怒りに震える宇宙の

帝王の姿があった。

そうして彼は気付く。

どうやら呆氣に取られるあまり、フリーザの言葉すら無視してしまった己の過ちに。

まずい、今すぐ行かなければ殺されてしまう。

「初めてですよ……この私をここまで無視したお馬鹿さんは」

「い、今すぐ行つて参ります！」

ザーボンは慌てて、逃げるようにそこから飛び去った。

もし後1秒でも飛ぶのが遅れていたならば、きっとザーボンは物言わぬ屍と化していた事だろう。

しかし、結論から述べるならば幸運は彼の味方だった。

彼がドドリアに追いついた時、そこにはあの妙な連中や白い女こそいなかったが、代わりにベジータがドドリアと交戦状態に入っていたのだ。

否、交戦はまだしていない。しかしドドリアは明らかに不意打ちを受けた様子であり交戦は避けられぬ状態にあった。

ドドリアは結局リゼット達に追いつく事すら出来ずに引き離された。

そこをベジータに狙われていたのだ。

地球での戦闘を経たベジータの戦闘力は22000。ザーボンやドドリア相手でも不意を打って1対1に持ち込めば勝てる数値だ。

故に彼等が単独行動するのを待っており、ドドリアが動いた時これを好機と思い

行動に移った。

だがそこに今、ザーボンが到着してしまった。

この事はベジータにとっては最悪の不運であり、ザーボンにとっては今後の命運すら左右する幸運であった。

余談だがベジータの戦闘力上昇はサイヤ人の特性である瀕死パワーアップが働いた結果であるが、リゼットの介入のせいでダメージが浅く済んでしまい、彼女の知る同時期のベジータよりも若干戦闘力が下がってしまった。

とはいえ、この場でそれを語っても仕方あるまい。

「ドドリア！」

「来たかザーボン！ 助かったぜ！」

「ちいっ、ザーボンか！」

ザーボンの合流にドドリアがほつとしたような声をあげ、ベジータが忌々しそうに舌打ちをする。

1対1ならば何とかなる。

だが二人がかりならば、ベジータは圧倒的に不利だ。

逃げられないように前後を固めるザーボンとドドリアに、ベジータは何とか突破口を見付けようと話を振る。

「へっ、てめえ等相変わらずフリーザの言いなりか。

情けねえ奴等だぜ……ドラゴンボールさえあれば手前等のような雑魚でも天下が獲れるってのによ」

「俺達が……天下を？」

ベジータの揺さぶりに、単純なドドリアはすぐに動揺を見せた。

ドドリアは元々世俗的な性格で、権力に弱い。

しかしそこにザーボンが口を挟む。

「ドドリア、奴の言葉に耳を貸すな！

さっさと始末するぞ！」

「お、おう！」

「く、くそつたれめ……！」

数分後、ベジータは汚いボロクズとなって地面に転がっていた。

さしものベジータも二人が相手ではどうしようもない。

しかし勝ち誇るドドリアとは対照的に、ザーボンの顔は浮かないものであった。

「ドラゴンボール……か」

先ほどのベジータの言葉が脳内を駆け巡る。

別に天下など望んではない。

最強になりたいわけでもない。

しかし、強く惹かれる。どんな願いも叶うというその奇跡の玉に。

それさえあれば自分は永遠の若さを得る事が出来る。

永遠の美を我が物に出来るのだ。

「永遠の若さ……永遠の美しさ、か」

普段ならばこんな本気で考えたりはしなかっただろう。

ドラゴンボールは主が欲しているものであり、つまりそれを欲する事はあの恐ろしいフリーザへの裏切りとなる。

だがザーボンは今、正常ではなかった。

リゼットという己以上の美を目の前で見せ付けられた事で矜持に輝が入り、自尊

心をこの上なく刺激されてしまった。

美しくなりたい。美しさを永遠のものとしたい。

かねてより抱いていた美への欲望。

それが彼の中で、己でも制御出来ないほどに膨れ上がって行つたのだ。

「……ドドリア」

「あん？ どうしたザーボン」

「——すまないが、ここで死んでくれ」

それは紛れもなく暴走であつた。

一時抱いた美への渴望が取らせた最悪の行動。

しかし不思議とザーボンの心に迷いはなかった。

「な、何を言つてやがるザーボン……てめえまさか裏切る気か!？」

「……いい機会だから言つておこう、ドドリア。

お前の醜い顔を毎日見るのは、私にとってこの上ない苦痛だった。

だがそれも今日で終わる」

言うと同時にザーボンが地を蹴り、未だ困惑から立ち直れていないドドリアへ先

制の突きを見舞う。

固く握った拳がドドリアの顔面を打ち、彼の寸胴の身体が容赦なく弾き飛ばされた。

そこに、仮にも仲間だったはずだというのに一切の躊躇なく気弾を放った。

光が爆ぜ、巨大な爆煙が上がる。

しかしドドリアもこの程度で死ぬほど柔ではない。

煙の中から舞空術で飛び出し、ザーボンの前に着地する。

「ザ、ザーボン……てめえ……っ！」

「ふん、しぶといな。醜い者はその往生際までもが見苦しいか」

ザーボンとドドリアの戦闘力はほぼ互角だ。

それはつまり、どちらが先に決定打を入れたかがそのまま勝敗を左右するほどに重要となってくる。

しかしドドリアは既に、悟飯、ピッコロ、ベジータの三人から不意打ちを受けた状態でザーボンが何もせずとも疲弊し切っていた。

そこに更に攻撃を加えたのだから、今やドドリアは立っている事すらやっとだろ

う。

最早その戦力差は歴然と言っている。

「死ね！ ドドリアー！」

「ふ、ふざけやがって！ ぶち殺してやる！」

ザーボンとドドリアの姿が同時に消えた。

常人の感覚では捉える事も不可能な超高速戦闘へと突入し、音を置き去りにしての戦いを開始したのだ。

二人の影が幾度も宙を交差し、打撃音が後から遅れて響く。

そうして二人は少しずつ場所を移動し、幾度も激しく衝突を繰り返しながら遠ざかって行った。

後に残されたのは、瀕死の重症を負い、捨て置かれたベジータだけだ。

「…………ち、ちくしょう…………。」

お、俺は死なん、ぞ…………」

サイヤ人という種族はとにかく生命力が強い。

心臓が停止したと思っても、後になってから勝手に蘇生する事すらある。

王子であるベジータもその例に漏れず、むしろ彼のしぶときは同じサイヤ人と比べても際立って高い。

既に死んでもおかしくない傷を負ってはいたが、彼はそれでも地面を這いずり、必死に動いていた。

無論、それで状況が改善されるわけではない。

孤立無援の状態でこのナメック星を訪れたベジータには助けてくれる仲間など皆無であり、傷を癒す手段もない。

つまりは、もう詰みなのだ。

それでも彼は地面を這うように移動する。

その先に都合よく誰も使っていないメディカルポッドがあるわけでもないのに、死んでなるものかと這いずる。

「……ち、ちく、しょう……」

だがサイヤ人にも限界はある。

いかに頑強な身体を持つと、瀕死の傷を負ったならば治療を受けねばいずれ死ぬ。

これはサイヤ人であろうと避けられぬ生物の大原則だ。

視界が暗く染まり、指先の感覚が失われていく。

——こんな所で死ぬのか。

最後に彼が感じたのは無念だったか、怒りだったか。

どちらにせよ、それが彼が今生で感じる最後の感情となるだろう。

そしてそれを最期に、ベジータという人間は永遠に失われるのだ。

「おいおい、こいつはベジータ王子じゃねえか。

何だってこんな所で死にかけてやがる」

その落ちて行く運命を、誰かが掴み取りさえしなければ。

「ふん……やっとうたばったか。

流石にしぶとかったな」

ベジータから見て優に10kmは離れているだろう小島の上。

そこでザーボンが息を切らしながら、動かなくなったドドリアを見下ろしていた。

これで少しは動きやすくなるだろう。

フリーザからドラゴンボールを奪い取るという極めて難度の高い目的を達するのに、ドドリアなどいちいち気にしてはいられない。

後でどうせ邪魔になるのだから、今始末してしまうのが最善なのだ。

「永遠の美しさは私のもの。」

この美しい顔と身体を永遠のものとするために……」

ザーボンの心は今、かつてないほどに野心で燃え上がっていた。

考えもしなかったフリーザの恐怖支配からの脱却。

しかしドラゴンボールという存在が彼の秘めたる欲望を増幅した。

永遠の美。永遠の若さ。

それを現実のものとするために、ザーボンはフリーザを裏切り、ドラゴンボールを我が物とする事をここに決意したのだ。

「さて、とりあえずはベジータを倒した事を報告するか。

しばらくは従っているフリをしなくてはな」

ザーボンはニヤリと笑い、かつての同僚には一瞥もくれず飛び立つ。

しばらくの間は今まで通りフリーザに従おう。

だがそれでは己の目的には届かない。

仮に永遠の若さを得ても、フリーザが生きていれば追い詰められて殺されてしまう。

死んでしまつては、それは永遠とは呼べない。

だから——フリーザを殺す。

奴の死なくしてこの野心は叶わない。

フリーザが死に、初めてあの恐怖支配からの脱却が果たせるのだ。

勿論実力で敵う相手ではない。

不老不死になつても、今の戦力差ではただサンドバッグになるだけだ。

（その辺ベジータは何も考えていないようだったが……）

ならば殺せる相手とぶつければいい。

フリーザすらも殺せる誰かと戦わせ、そしてフリーザを亡き者とする。

その為の道筋も、既にザーボンには見えていた。

「フリーザに対抗出来るのは同じ一族だけ。

ならば奴を……フリーザの兄、クウラをこの惑星へ呼び寄せる以外にない！」
美しさを求める野心はもう止まらない。

そしてそれが、このナメック星に更なる混乱を招く事になろうと、ザーボンにとつてはどうでもいい事だった。

全ては、永遠の美しさの為に――。

クウラ「来たか……出演オファー！」ガタッ

ナメック星「来ないで（切実）」

・クウラがナメック星の戦闘にエントリーしました。

【各キャラ戦闘力】※今回は敵のみ

―フリーザ一味―

・フリーザ

第一形態… 53万

最終形態… 1億2000万

・ザーボン…23000030000

・ドドリア…220000

・(故)キューイ…180000

※画面外で汚い花火になりました

―その他勢力―

ターレス…250万

大猿…2500万

(地球で受けた元氣玉による瀕死パワーアップ)

スラッグ…156万

巨大化…450万

(老人のままなので500万より少し低め)

ベジータ…220000

第二十七話 潜在能力開放

ナメック星には夜がない。

それはこの惑星が3つの太陽の周りを回っているからだ。

だから必然的に朝や昼といった概念もなく、休むタイミングなどは個々に任される。

これはこれで惑星の特徴として別にいいのだが、困るのは隠密などにまるで向かない惑星だという事だ。

夜があればフリーザやターレスが寝静まるだろう頃もある程度計れる。

だがずっと昼が続くのでは、いつ彼等が休むかも分からず迂闊に動けない。

それでも何とかリゼット達は岩陰に身を隠し、情報を交換し合っていた。

その傍らには悟空達によって連れて来られたツノノ村の住人20人が縮こまるようにして立っている。

リゼットの記憶が正しければ、確かベジータによって壊滅させられ、そして後になってもドラゴンボールへの願いが『フリーザ一味に殺された者を生き返らせてく

れ』だったが為に蘇生させてもらえなかった可哀想な人達だ。

「それにしても、よく俺達の事を信じてくれましたね？」

クリリンはツーノ村の人々を一瞥し、改めて自分達地球人との差異は大きいと実感していた。

向こうから見れば自分達はピッコロ以外まさに異星人の集団。

そして、その肝心のピッコロすら彼等の説得には同行していなかったのに、こうしてこちらの言う事を信じて付いて来てくれた事に驚きを禁じえないのだ。

「ああ。俺もあまりに彼等が話が分かる人達で驚いたよ。

どうやらナメック星人っていうのはかなり温厚な宇宙人らしい」

「顔はピッコロみてえなのにな」

実際にナメック星人の説得に向かったヤムチャが、外見からは想像も出来ないナメック星人の温厚さと人の良さを語り、悟空がピッコロを見ながら余計な補足を入れる。

しかしそれも無理のない事だろう。

何せ彼等の知るナメック星人といえど初代大魔王とピッコロ、そして先代神様の

3人で、3人中2人が大魔王である。

これではナメック星人Ⅱ怖いという図式が彼等の中に出来上がってしまったも仕方がない。

「あの、地球の方……少しよろしいですか？」

ツノ長老が遠慮するように声を発する。

その隣にはデンデがおり、彼の村……そしてこのナメック星で今何が起きているかは彼等にも伝わっているはずだ。

最初はまだ疑いもあったようだが、デンデとの合流後は完全にこちらを信用してくれているように見える。

「今、このナメック星で起こっている事はデンデから聞きました。

そこで我々はひとまず最長老様の所へ行き、この危機を知らせようと考えております。

どなたか我等と共に来ては下さいませぬか？」

「構いませんが……それは全員でもいいのですか？」

「え、はい。それは勿論ですが、全員で移動するとなると流石に目立つかと……」

ツノ長老からの申し出はリゼットにとって渡りに舟であった。

最長老の所へ行つての潜在能力解放は、フリーザと戦う事を考えるなら外せないイベントだ。

打算にまみれた考えだとは自覚しているが、向こうだってこのままフリーザに蹂躪されるのは望ましくないだろう。

だから最長老は必ず全員分の解放をしてくれるという確信があった。

「その点でしたら問題はありません——ヘブンズゲート」

リゼットが微笑み、空間にゲートを開く。

ガリックJr. は呆気ない男であったが、彼の技は実に役に立ってくれる。

悟空が後に会得する瞬間移動のような緊急回避能力はないものの、利便性ならばこちらが上だろう。

「さあ、行きましょう皆さん」

「神様のその技、本当に便利だよな」

「全くだ。移動が楽でいい」

リゼットが開いたゲートにまず悟空が入り、次に天津飯が入る。

その後、全員が続き、更にツーン村の人々もおっかなびっくりといった様子でゲートを潜った。

最後に術者であるリゼットが通過してゲートを閉じる。

たったこれだけで全員含めての長距離移動の完了だ。

ゲートを通った先は最長老の家の前であり、そこではピッコロそっくりの顔をした男がまるで驚いた様子もなく立っていた。

「ネイル殿！」

「よくぞ来られた、ツーン長老。それに異星の方々よ。

最長老様はおおよその成り行きを知っておいでだ。さあ、中へ……」
言われるままに全員が入る。

しかしツーン村の住人は20人であり、そこにリゼット達とデンデを含めると31人になってしまう。

ネイルと最長老を加えれば33人で、更に家主である最長老はかなりの巨体だ。

つまり——狭い。

まるでおしくら饅頭のようにぎゅうぎゅう詰めとなってしまう。

「……ネイル」

「も、申し訳ありません最長老様！」

とりあえず地球の方々とデンデ、ツノノ長老以外は外でお待ち下さい！」

ツノノ村の住人達を外へ追い出し、とりあえず圧迫から逃れたりゼット達は改めて最長老を見た。

……でかい。

座っているはずなのに、この中で一番の長身であるピッコロよりも大きい。

直立すれば恐らくピッコロの3倍……6m程に達するだろう。

確かに一目で他のナメック星人と違うと分かる貫禄に満ちていた。

「ようこそ。貴方がたは地球人ですね。」

まず、我が子等を助けて頂いた礼を言いたい。ありがとう」

「初めまして、最長老さん。」

私は地球の神を務めているリゼットと申します」

リゼットが最長老に軽く会釈をし、微笑んだ。

とりあえず、まずは敵意がない事をアピールしておく。

最長老はそれに対し、「おお、初めまして」とにこやかに返した。

「あの悪党達のせいでこの星の我が子達も随分数を減らしてしまいました……残念です。」

それに他にも数人、大きなエネルギーを持つ悪党がいるようですね。

ナメック星に住む者の知恵と力の証……希望の玉がまさかこのような事を招き寄せるとは……」

ドラゴンボールは本来、その星に住む民の為を思って造られたものだ。

それは地球もナメック星も共通している。

しかし皮肉にも、そのドラゴンボールこそが星の危機を招き、フリーザやベジータという悪党を呼び寄せてしまった。

残念そうに語る最長老へ、リゼットは回りくどい言葉をあえて選ばずに本題を切り出した。

「単刀直入に言います。貴方の持つドラゴンボールを私達に預けてくれませんか？ 私達は彼等が不老不死になるのを阻止する為にここまで来しました。」

彼等の手に7つの玉が揃うのは必ず阻止するとお約束します」

「確かに、私はもうここを動く事が出来ないし、あのフリーザという者が来ればそこにいるネイルですら守りきれないでしょう……。」

私がつつよりも、貴方達に託した方がよさそうだ。

このドラゴンボールは貴方達に差し上げましょう」

最長老はそう言い、椅子の背もたれに乗せていたドラゴンボールをリゼットへと渡した。

地球のボールが精々野球ボール程度の大きさに対し、こちらはバスケットボール程度の大きさがある。

流石は本場というべきか。サイズからして違う。

「それにしても、貴方達は地球人なのに飛び抜けた力をお持ちなのですね。

何人かは違うようですが……しかも勿体ない事にまだ眠っている力がある。

その力を起こしてさしあげましょう」

最長老の大きな手がリゼットの頭へ乗せられる。

記憶や過去を探られたら少し厄介かな、と考えてリゼットは常に精神に防壁を張っている。

超能力者は相手の心を読む事が出来る。

ならばその逆に、読まれないようにする事もまた可能なのだ。

少なくともリゼット以上の気の持ち主でない限り、彼女の心が無断で読む事は出来ない。

しかし最長老の表情が変わらない事を見るに記憶を探る事自体をしていないようだ。

まあ、よく考えれば彼の性格上相手の許可も得ずに記憶を探るなんて事はまずやりそうもない。

実に紳士的というか、優しい人なのだと改めてリゼットは感じた。

そんな事を考えていたりゼットだが、しかしその余裕は次の瞬間に消し飛んだ。

——力だ。

今までに感じた事もないような圧倒的な力が自分の内から湧きあがってきたのが解る。

一瞬、無意識のうちにバーストリミットを発動してしまったのかと勘違いするほどの絶大な気の上昇。

2倍？ 3倍？

否……恐らくは7倍近い戦闘能力の飛躍！

期待していなかったといえは嘘になる。

むしろドラゴンボールよりも、この潜在能力の解放を当てにしてここに来たと
言っても過言ではない。

だがまさか、ここまでとは……。

(……いける……勝てる……！)

潜在能力の解放により、リゼットは自分でも驚く程の力を得た。

ここに長年の重力修行と気霊錠。そしてバーストリミットを日頃から使い続ける
事で得た『負担への耐性』を合わせれば、きっと短時間ではあるものの40倍の上
昇にだって耐えられる。

即ち、擬似的に超サイヤ人に近い域にまで踏み込める！

バーストリミットは界王拳と同じく身体に負担を強いる技である。

だがその負担への耐性は戦闘力も勿論だが、『慣れ』もまた一つの要素なのだ。

例えば孫悟空は今でも無理をすれば10倍の界王拳に耐えうる。

原作でもやはり、この時期の悟空は「10倍にだって耐えられる」と言っていた。だがその後、瀕死パワーアップを経て圧倒的に力を増したはずの悟空の限界はどういう事か10倍のままであった。

数値にすれば基礎戦闘力9万から300万への飛躍的強化を果たしたにもかかわらず、である。

つまり悟空とリゼットは下地が違う。

確かに才能は悟空が勝るだろう。

種族としての特性など言うまでもなく、地球人であるリゼットとサイヤ人である悟空の差は本来埋め難い。

だがリゼットには積み重ねがある。今日まで生きてきた年月がある。

その差が、そのまま耐えうる倍率の限界へと繋がっていた。

加えて、神精樹の気を取り込んで一時的とはいえ戦闘力にして億クラスの世界を体験していたというのも大きかった。

あの経験によってリゼットの身体は既に、この領域に耐えるだけの下地を完成させていたのである。

簡単に言ってしまうえば高出力のバーストリミットに耐えうるだけの器が既に出来ていたのだ。

勝てる——！

リゼットは既に、このナメック星での戦いの勝利を疑ってはいなかった。スカウターがないのが惜しまれるが、今のフリーザと比較すれば大体の計算は不可能ではない。

今のフリーザと比較し、気霊錠などを解除した全力状態の自分は凡そ11倍から12倍。大体11・7フリーザ（第一形態）、2万6666先代様といったところだ。数値にして620万前後。

そこに30倍バーストリミットを重ねれば……約1億8千万！

無理して40倍まで引き上げれば2億にも手が届く。

勿論40倍はリゼットにとっても負担が大きく、加えて長時間は続かない。

しかしこれならば出力を落とした30倍や20倍程度でも互角以上に戦えるだろう。油断さえしなければ負ける事はまずない。

（勝つだけならば、私だけでも容易……）

しかし私がそれをやってしまうと、悟空君の超サイヤ人化がどうなるか分りませんね）

悟飯が後に妄想で覚醒するのだから、別に必ずしも劇的に盛り上げる必要などない。

あれはあくまで物語で、悟空が主人公だからああいう盛りあがる覚醒をただけであり、そんな事をする必然性などないのだ。

ならばやはり、最善は己がフリーザをさっさと始末してしまう事か。

リゼットはそう考え、しかし結論を急ぎすぎている自分に気付いた。

……いけない。どうも舞い上がってしまったている。

自分は今、自惚れている。

突然手に入れた大きな力に酔い、少し無謀な精神状態になってしまった。

“油断さえしなければ負ける事はまずない”……などと。その思考自体が既に油断そのものではないか。

（いけない……少し落ち着かなくては）

今なら、ピッコロが「俺は究極のパワーを手に入れたのだー！」とか叫んだり、

ベジータが「俺は超ベジータだ！」とか恥ずかしい台詞を臆面もなく吐いてしまったり、潜在能力を引き出された青年悟飯が「勝てんぜ、お前は」とかドヤ顔で言ってしまった気持ちがる。

これは麻薬だ。

急激な力の上昇というのは、こうまで人を酔わせてしまう。

260年生きてきたが、これほどの高揚感はそうはなかった。

少し冷静になってみれば、『勝てる！』なんて負けフラグもいい所だ。

やはり少し、熱を冷ます必要があるだろう。

今の自分は冷静に考えたつもりでも実際は熱に浮かされた判断だった、という事になりかねない。

「ありがとうございます、最長老さん。

おかげで、大分勝率も上がりました。

もしよろしければ、他の方の力も解放して頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ、勿論構いませんよ。」

強い正義は一人でも多い方がいい」

リゼットの後に続き、悟空やピッコロも潜在能力の解放を行う。

これで全員が素の状態の特戦隊を完全に凌駕した。

つまり、ギニューのボディチェンジにさえ気を付ければ負けはない。

ターレスも、悟空とピッコロがこの強さに達した今脅威ではないだろう。

確実に流れはこちらへと傾いている。

リゼットは今、確かな手応えを感じずにはいらなかった。

1 一 俺は今究極のパワーを手に入れたのだ

2 遊 このゴルドンフリーザの前では無意味ですよ

3 二 俺の分の仙豆はいりません。絶対に勝ちますから

4 中 俺はスーパーベジータだ

5 右 油断さえしなければ、まず負ける事はありません

6 三 究極の戦士ならもうここにいろだろう

【New!】

7 左 勝てんぜ、お前は

8 捕 ここにいるのが貴様の最も恐れていたスーパーサイヤ人だ

9 投 消えろ、ぶっとばされんうちにな

※遊の天津飯選手はよく考えたら台詞を吐いた試合は実際圧勝していたので相應しくなくないと思い、フリーザ選手とチェンジしました。

【各キャラ戦闘力】

・リゼット…620万

・バーストリミット(最大30倍)…1億8600万

・孫悟空…68万

・界王拳(最大10倍) 680万

・ピッコロ…66万

・界王拳(最大10倍)…660万

・孫悟飯…25万

・ナツパ…24万

・天津飯…21万

・クリリン…20万

・ヤムチャ…18万

・兔人参化…17万

・餃子…15万

／俺の出番のようだな……／

・クウラ…1億5000万

最終形態…4億7000万

第二十八話 一時退避

ベジータが目を覚ました時、彼はメディカルマシーンの中で治療されていた。そこですぐに起きずに、眠っているふりを続ける咄嗟の判断力は大したものだろう。

薄目を開けて周囲を注意深く観察しながらベジータは考える。

自分はザーボンとドドリアに敗れた。屈辱的だが、まずはその事実を受け止める。そしてここはどこかの宇宙船で、メディカルマシーンの中。

ならばまず考え付くのは、あの後ザーボン達に連れ去られて治療を受けている、というケースだ。

少なくともナメック星にメディカルマシーンはない。

そもそもこれはフリーザ一味が使っている道具だ。ならばこれがあるという事がすでに、この宇宙船がフリーザに属しているという事を意味していた。

しかし助けられた理由がわからない。

堂々と反旗を翻した今、奴等に自分を助ける理由などなく、それに宇宙船内部の

構造も異なる。

同じ技術で造られているのだろう船内は随所に似た所があるが、それでもやはりデザインが違う。

ここは、フリーザが愛用している宇宙船の中ではない。

「よう、いつまで狸寝入りしてるんだ、王子様よ。

わかってるんだぜ？ サイヤ人であるあんたの回復力なら、とうに目覚めてい
るって事くらいな」

（この声……カカロットか!?!）

声を聞き、ベジータの脳裏にはすぐに地球で出会ったあの忌まわしい下級戦士の
顔が浮かんた。

随分挑発的な台詞と口調だが、声は確かに奴のものと一致する。

ならば、今メディカルマシーンの外には奴がいる！

そう考え、ベジータは目を開く。

果たしてそこにいたのは、予想通りの特徴的な頭髪に忘れるはずもない顔立ち。
だが、その肌は褐色であり、更に黒い戦闘服と白いマントを着こなしている。

極めつけはスカウターを付けたその顔だ。

顔立ちこそ瓜二つだが、表情が違う。

反吐が出そうになる、あの甘さを残す表情ではない。冷酷さに彩られた、自分と同じサイヤ人の表情だ。

驚いている間にメディカルマシンの水が抜け、ベジータを外気に晒す。

そうしてまず感じるのは、身体の軽さ。そして漲る力だ。

どうやら死を乗り越えた事でまた一つ強くなったらしい。

しかし……それでも、目の前のカカロット似のこいつには、まるで勝てる気がしない。

「き、貴様、何者だ……？ カカロットではないな」

「俺の名はターレス。あんたと同じサイヤ人さ。」

それとも、こんな下級戦士の事は眼中にないか？」

ターレス——その名前だけはベジータも知っていた。

フリーザに仕えるいくつかの部隊の一つであるクラッシャー軍団。

数こそ少ないが全員が戦闘力7000を超える強豪部隊で、その部隊の隊長が

ターレスという名前だったのを覚えている。

しかしまさかサイヤ人だとは思わなかった。

そもそもベジータは、自分とナツパ、ラディッツ、そしてカカロット以外に生き残りなどいないと思っていたのだ。

いや、厳密に言えば他にも一人だけいない事はない。

あまりにも性格が戦闘に向かない為に王族からも除籍されてしまった愚弟ターブル。

しかし彼はベジータにとっての恥部でしかなく、故に弟の事はサイヤ人とすら見なしてはいなかった。

「何の目的があって俺を助けた？」

「あんた、フリーザから離反したんだってな？」

「それがどうした」

「なあに、それなら俺と目的は同じだ。

どうだ？ 俺と手を組まねえか？」

「……必要とは思えんがな。くそつたれめ」

ベジータは顔をしかめ、露骨に舌打ちをする。

認めたい事ではない。しかし氣を探るに、こいつの戦闘力は恐らくフリーザすら上回っている。

なのに自分の力を欲するなど、あまりに怪しいではないか。

その考えが顔に出ていたのだろう。ターレスはニヤリと笑う。

「あんたが知っているフリーザの強さは、ほんの一部分だけだ」

「何っ?」

「フリーザの戦闘力53万は俺達の間じゃ有名だがよ……その程度なら俺一人でどうにかなる。

スカウターで計りきれねえから憶測になるが、今の俺なら戦闘力にして250万以上は確実だろう。

理性がなくなるが、大猿になりゃあ2500万だ。

だが、それでもまだ奴の全力には多分届かねえ」

「ど、どういう事だ!？」

戦闘力53万。それがフリーザの全力だとベジータは認識していた。

実際これとはんでもない数値だ。

フリーザの次に強いとされるギニュー特戦隊のギニュー隊長ですら、その戦闘力は12万。

ならば53万はまさに破格の数値。宇宙の帝王に恥じぬ強さのはずだ。

だが、それがまだ全力ではない？

最大で2500万にも届くターレスが届かないだと？

それは、ベジータにとって絶望にも等しい宣告であった。

「俺は一度だけ、奴の兄貴を見た事がある」

「あ、兄、だと？」

「ああ。奴が偶然フリーザの宇宙船に立ち寄った時に、俺はその付近の警備に就いていた。」

……正直ゾツとしたぜ。俺も少しは戦闘力を肌で感じる事が出来るが……ありやあ柢違いだ。今の俺が大猿になっても勝負にならねえ。

多分、戦闘力にして軽く1億は超えてるぜ」

「ば、馬鹿な……」

「おっと、絶望するにやまだ早い。肝心なのはここからだ。

これもあんたは知らない事だろうが、フリーザは変身型の宇宙人って噂がある。実際、奴の兄貴とフリーザの姿はまるで異なっていた。

……もしフリーザが、兄貴と同じ姿に変身出来るとしたら、どうする？」

ベジータの背筋を冷たいものが伝った。

今の彼の戦闘力は、死を乗り越えて上昇したものの、数値にすれば3万程度だ。全力どころか、今のフリーザにすら遥か劣る。

これがもし、ターレスの言う通りフリーザに1億を超える形態があるとすれば、つまりフリーザは現状において全力の1〜200程度しか見せていない事になる。

1%どころではない。0.5%だ。

つまりベジータがフリーザに並ぶには、少なくとも今の30000倍以上に強くならなくてはならない。

「だから、俺はとにかく戦力が欲しい。

王子であるアンタなら、いずれは俺を超えるかもしれない。

俺達サイヤ人の手でフリーザを討つんだ」

「……気に食わん。気に食わん、が……確かに今の俺ではフリーザには到底及ばないらしい。」

いいだろう、手を組んでやる。ただし俺の足を引っ張ったらてめえから先に死ぬと思え」

「おお、怖い。だがそれくらい威勢がいい方が頼もしいぜ。」

よろしくな、ベジータ王子様よ」

狙うは、サイヤ人の怨敵フリーザの首。

その為に二人の悪しきサイヤ人が手を組んだ。

無論そこに仲間意識があるわけもなく、ただ便利だから利用しようという打算があるだけだ。

しかしこれは決して彼等二人が特別に冷酷なわけではない。

サイヤ人とは本来こういうものだ。利己的で、自己中心的。

それこそがサイヤ人という人種であり、ある意味において彼等はこの上なく正常であると言えた。

ターレスは口角を吊り上げ、しかしすぐに気を取り直したように宇宙船内に設置

したモニタへと視線を走らせる。

ベジータには言わなかったが、問題はフリーザの強さだけではない。

フリーザとの戦力差を少しでも埋める為の策の一つである神精樹。この惑星に来ると同時に確かに地に植えたはずのそれが、全く発芽しないのだ。

（ちっ……どこの誰かは知らねえが、俺以外にもこの惑星のエネルギーを吸い上げる奴がいやがるな？　すぐにでも叩き潰してやりてえ所だが、あまりフリーザ以外に構ってる余裕はねえ。どうしたもんかな）

スラッグは突然変異で生まれた超ナメック星人である。

その戦闘力は老いて尚156万に届き、他を寄せ付けない。

ナメック星人唯一の戦闘型と言われるネイルの戦闘力が4万2千である事を考えれば、彼がいかに逸脱した存在かが分かるだろう。

加えてカタツツの子のような分離もせず、まさに最強のナメック星人と呼ぶに相応しい強さを誇っていた。

しかしその心は悪そのもの。

かつてナメック星が異常気象に襲われた際、極寒のスラッグ星に飛ばされた彼はそこで完全な魔族と化し、他の星へと攻め込む侵略者と成り果てた。

生まれてからこれまで敵らしい敵と出会った事もなく、同格どころか己に迫る者すらも皆無。

第一形態——とはいえ、宇宙最強とされるあのフリーザですら53万なのだ。これでライバルと出会えるわけもない。

故にこそ彼は何の警戒も、危機感すらも抱いてはいなかった。

「この惑星は儂の遠い記憶を呼び覚ます……そうだ、儂は覚えている。どんな願いも叶う奇跡の球を。」

お前達、あれを……ドラゴンボールを探すのだ。そうすれば儂は、永遠の若さを得る事が出来る」

スラッグが恐れるのは寿命のみ。

いかに強かろうと生き物である以上、いつかは老いて死ぬ。

それが彼には耐えられなかった。

これほどに偉大な己が、寿命などという運命が決めた摂理に従うなど冗談ではな

いと思った。

そしてこの星にはそれを解消する手段がある。

寿命の楔から解き放たれ、永遠を手に入れる方法があるのだ。

ならば、それを追わない手などどこにもない。

「ゆけ、我が僕達よ。ドラゴンボールを儂の前へ持ってくるのだ」

だからスラッグは至極当然の判断として部下達を放った。

いくつかの強い気は感じ取れるが、どれも己を脅かすほどではない。

もしかしたら部下の何人かは犠牲になるかもしれないが、それでも最後には自分が勝つという確信があるし、いざとなれば真の姿である巨身術を使えばいい。

その実力に裏打ちされた傲慢さはなるほど、決して何も考えていないわけではないのだろう。

しかし彼はまだ知らない。この星にいる者の何人かは己の全力をも凌ぐ力を隠している事を。

「スラッグ様……お言葉ですが、この星は太陽が多すぎます。

我等魔族が住むにはいささか不向きかと……」

スラッグの判断におっかなびっくりといった様子で意見を出したのは、彼の部下の一人でもあるゼエウンという男であった。

ヒューマンタイプに近いが、頭から生えた二本の角とオレンジ色の肌はまるで地球人の想像する鬼のようだ。

髪は赤く、腰まで伸びている。

その服装はほぼ半裸であり、身に着けているのは青いパンツとリストバンド、シューズ。それから首からパンツにかけて繋がっている『Y』の字のベルトだけだ。

そんな変質者チックな恰好の鬼は、しかし外見に反してまともな事を言っていた。彼ら魔族……というより、惑星スラッグに住む者達は太陽の光が届かない極寒の環境下に適応し、進化してきた種族だ。

それ故に太陽というものに酷く弱く、陽光を浴びては一時間と生きていられない。つまり、太陽が3つもあるこのナメック星は彼らにとってあまりいい星ではないのだ。

スラッグは元々がナメック星人であるから、それでもこの星に居心地の良さを感じ

じているが部下はそうではない。何故スラッグがこんな星を欲するかまるで理解できないのだ。

しかしスラッグはそれに説明をするでもなく、己に意見した無礼者へ無言で気功波を撃ち込んで黙らせた。

哀れ、ゼエウンは心臓を気で焼かれ、断末魔の声すら上げることが出来ずに動かぬ死体と化してしまった。

「ならば改造すればよい。ギョーシユ、何日必要じゃ？」

「は、はい、10日もあれば……」

一つの惑星を10日で改造できる。

そう言い切る彼は、決して無能ではない。むしろ有能である。

しかしその言葉はスラッグの気に召すものではなく、またしても無言で放たれた気功波がギョーシユを焼き殺してしまった。

「どうじゃカクージャ」

「み、3日でやり遂げてみせます！」

「ならば早々にやれ」

残るもう一人の科学者であるカクージャは咄嗟に、助かりたい一心で出来もしない時間を口にした。

それを聞いたスラッグは彼を処刑せず、何とかカクージャは命を拾う事が出来た。とはいえ、3日はどう考えても無理だ。最初に答えた時間の半分もない。

トボトボと作業に戻るカクージャの背は、気のせいか煤けていた。

★

地球の成層圏付近にある神殿。

如意棒にてカリン塔と接続されている間は実体化するそこは、今は如意棒を取られて再び別次元へと潜っている。

加えてバリアも復活しており、リゼットの許可なくしては先代以外の何者も立ち入れない状況となっていた。

少し厳しいようだが、これは当然の措置だとリゼットは考えている。

何せこの神殿こそは地球防衛の要であり、最後の砦と呼んでいい場所だ。

地球の気の乱れなどもここで管理しており、普通に考えるならば必要な時以外は防衛機構を働かせておくべきなのである。

原作ではそれをせず、常に如意棒を刺しっ放しにして、その上バリアまで解除していたものだからガリック Jr・やら魔人ブウやらがホイホイ侵入してしまったし、GTではピラフ一味という本来なら絶対に入り込めないはずの雑魚にまで侵入されて究極のドラゴンボールを使われるという大問題まで起こしたのだ。

しかし普段は何者も立ち入らせないはずのそこに、今はナメック星人達が集まっていた。

最長老とデンデ、ネイル、それからツノ村長の村人達全員だ。

彼等をこれ以上ナメック星に残しても、いずれベジータかフリーザに殺されるだけだと判断したりゼットは地球の神殿に彼等を避難させるべきだと考えたのだ。

自分達を守っていればフリーザ以外は跳ね返せるが、それは行動の選択が狭まる事を意味する。

悪く言ってしまうえば足手纏いだ。

その点、現状は安全な地球の、その中でも最も安全だろう神殿に連れてくれば彼等が殺される心配はない。

何かの間違いでターレスやらスラッグやらが現れる事を危惧しなくてもなかった

が、何故か彼らは二人共ナメック星に来ているのでその心配も消えた。

回復役のデンデまでこちらに逃がすのは少し迷ったが、足手纏いという点では同じだし、回復なら充分に余っている仙豆がある。

万一ドラゴンボールを揃えた時にどう願いを叶える、という問題もあったがそこはピッコロがいる事で解決した。彼もナメック語くらいは話せるので、やはりわざわざデンデを残す意味はない。

「それでは皆様。少し狭いかもかもしれませんが、戦いが終わるまではここに身を隠して下さい。

ポポ、彼等の事を頼みます」

「任せて下さい、神様」

ポポにナメック星人達の世話を任せ、ついでにヘブンスゲートに手を突っ込んでカリンを引っ張り出した。

何かあるとは思えないが、念のためにカリンもちちらに置いて守りに就かせておくべきだと思ったのだ。

そうして再びリゼットはナメック星へと戻ろうとする。

しかしその背を、最長老が呼び止めた。

「お待ち下さい、地球の神よ。」

これは元々我等ナメックの民に降りかかった災難。

ならばせめて、ここにいるネイルを連れて行って下さい。きっと力になれる」

最長老からのネイル同行の申し出。これは本音を言えば勿論有り難い事だった。

実力はともかくとして、ネイルがいればピッコロとの融合が可能となる。

そうなればピッコロは今よりも強くなり、フリーザにすら匹敵する実力者へとなるだろう。

今でさえ界王拳込みとはいえ、原作における同時期のピッコロを上回っているのだ。

ならばそこにネイルを加えれば、確実にフリーザにすら迫る超戦士となれるはずだ。

しかし……融合とはある意味、死よりも残酷な事だとリゼットは考えている。

この世界にはあの世がある。天国がある。生まれ変わりだってある。

死んでもそこで終わりではなく、死後にく道があるのだ。

だが融合をしてしまったては、それすらない。

基本となる人格に吸収され、その者は失われてしまう。

勿論死んでいないのだからあの世にも行けない。こんな残酷な事があるか。

申し出はありがたい……ありがたい、が、無理して融合させるまでもない。それがリゼットの出した結論であり、彼女の甘さでもあった。

「いえ……彼は貴方達の守りの要のはず。私達の戦いに付き合わせて死なせるわけにはいきません」

ネイルの同行を断り、今度こそリゼットはナメック星へと戻った。

これが正しかったのかは分からない。

もしかしたら、これが原因で何かが狂ってしまうのかもしれない。

だが、それでも不必要にネイルを消すなどという選択を選ぶ気にはなれなかった。

リゼット「え？ 融合させずにそのまま使う選択はないのか、ですって？

……いや、戦闘力42000が今更一人加わっても……その、守りながら戦う余

裕ないですし……。

今からじゃ鍛える時間もないですし……。多分、潜在能力もとつくに解放済みで
しょうし……」

訳…戦闘力420000なんか今更参入しても足手纏いです。

・Mrポポ…16500↓17万

・カリン様…16000↓16万5000

・ベジータ…22000↓29000

閻魔「地球に派遣した人材がえらい事になってるんだが……」

※カリン様とMrポポはあの世から派遣されてきた人材。いわば派遣社員である。

第二十九話 始動

カリン様「最近、挑戦者がすぐに諦めて帰ってしまうのお」

リゼット達が戦闘力を上昇させていたのと同時刻。

フリーザは既にこの惑星にいくつかの不穏分子が紛れ込んでいる事を掴んでいた。

気を肌で感じる事こそ出来ないが、ナメック星人達の村に突然現れた正体不明の一団（悟飯達）に、ベジータ（もっともベジータは既にザーボンが始末したらしい）。そして今現在、この惑星の気温を変化させている誰かがいる。

無論自分が動けば全て片付くという事を疑ってはいないし、脅威にも思っていない。

だが面倒だとは考えていた。

故にフリーザはそれらを片付けるべく、己が最も信頼する配下……即ちギニュー

特戦隊を呼び出す事を決めたのだ。

「大変です、フリーザ様！」

そこに、特戦隊への連絡を命じたザーボンが戻って来た。

ドドリアを失うという僅かな痛みはあったものの、鬱陶しいベジータを見事討伐した彼は、しかし焦燥に満ちた顔でフリーザの前へと走る。

「我が軍に紛れ込んでいた内通者が『フリーザ様に謀反の意志あり』とクウラ様へ連絡を入れていました！」

「何ですって!?! 一体誰です、それは！」

「アプルです！ 既に奴は始末しましたが、連絡はクウラ様へ渡った後でした」
「ちっ、クウラめ……私に代わって不老不死を手に入れる気ですか?! そうはさせませんよ！」

ザーボンさん、特戦隊はまだですか！ クウラと戦うには戦力が必要です！」
「はっ！ 後数時間で到着する模様！」

……無論、言うまでもなくその内通者とはザーボンその人であった。

彼は己の力では逆立ちしてもフリーザに勝てないと判断し、毒を以て制す事を思

い付いたのだ。

最強に対抗出来るのは最強のみ。唯一フリーザが恐れる実兄クウラを呼び、フリーザと潰し合わせる。

これは最悪、企みが露呈すればフリーザ兄弟から袋叩きにされる恐れもあったが、ザーボンはあるてこの手を選んだ。

永遠の美しさを得るには危険な橋も渡る必要がある。その決意が彼にはあった。（ふふふ、悪いなアプール……貴様には私の為の礎となってもらった。

あの世から眺めているがいい。私の掌の上で宇宙最強の二人が踊る様をな）美しき野望は止まらない。

背に核爆弾を背負い、地雷原の上でタップダンスを踊りながら死地へと続く道を全力疾走する。

その先に求める永遠があるのなら、躊躇いなどない。

既にザーボンは死の恐怖すらも超越していた。

「ザーボンさん。私は少しここを離れます。後はお任せしますよ」

「わかりました。しかしどちらへ？」

「何、この惑星にいる目障りな有象無象をそろそろ始末しようと思ひましてね……。本当はギニュー特戦隊にやらせるつもりだったのですが、事情が変わりました。クウラと戦う時になって余計な横槍を入れられては困りますからね。今のうちに皆殺しにしていまいます。

幸い、貴方がベジータから奪ってくれたスカウターがあるおかげで場所も分かっていますしね」

ザーボンの暴走は一つのイレギュラーを招いていた。

それは、本来ならばベジータが自分で踏み潰してしまうはずのスカウターが無傷の状態で回収され、フリーザの手に渡ってしまった事だ。

つまりフリーザはリゼット達の居場所を把握出来るのである。

更にベジータが付けていたスカウターは最新型であり、数十万の戦闘力ですら感知出来る優れ物であった。

それでもリゼット達が全力であればスカウターは許容限界を超えて爆散したのだろうか、普段は気を抑えているのが逆に仇となった。

故に未だスカウターは壊れず、そしてフリーザはリゼット達の居場所を突き止め

てしまおう。

宇宙の帝王が、ザーボンの暴走により本来よりも早く行動を開始した。

その向かう先は——地球人達がいる場所だ。

★

「神様、これからどうします？」

最長老達を地球へと送り、戻ってきたリゼットへと天津飯が問う。

戦力は上がった。今生きているナメック星人達も助けた。

ならば後は戦う以外にないのだろうが、闇雲に突撃をすれば最悪他の陣営からの袋叩きに遭うだろう。

リゼットはそれらを踏まえてまず最初に慎重策を考えるも、恐らくそれではいずれ耐えられなくなった悟空が暴発するだろうと予想した。

「ところで、ドラゴンボールはどうしたんですか？」

「私が創り出した亜空間に保管しています。相手が空間に干渉する能力でも持っていない限り、たとえ私が殺されても奪われる事はありません」

ヘブンズゲートの元となったデッドゾーンは本来、空間移動ではなく『自ら創り

出した空間に敵を閉じ込める』技である。

つまり空間移動だけではなく、空間作成の力でもあったのだ。

技の錬度を上げたりゼットはその力を以て自分だけが出入り出来る空間を創り、そこにドラゴンボールや、ついでに持ち運びが面倒な私物のいくつかを放り投げた。

擬似的な四次元ポケットのようなものだ。

この空間はリゼットが死のうが消える事はなく、彼女が意図的にボールを出さない限り何者も手出しする事が出来ない。

ついでにこの能力の完成を見たリゼットは地球に戻った際に、神殿に保管していた究極のドラゴンボール4つをこの亜空間へと移動させた。

3つは精神と時の部屋。4つはリゼットの亜空間。これでますます揃えるのが困難になったわけだ。

「そりゃ凄い。つまり少なくともこれで、奴等は絶対に願いを叶える事が出来なくなっただけだ」

ヤムチャが楽観的に笑い、目的の一つが遂げられた事を理解する。

リゼットの手にはボールが一つ渡ったこの現時点をもって、ナメック星で行われて

いるドラゴンボール争奪戦の意味は消えた。

何をしようが奪えなくなつたのだから、もうフリーザ達に願いを叶える目は残っていない。

「ここから私達が取れる道は二つあります。

一つは、このまま動かずに彼等をしばらく潰し合わせる慎重策。

もう一つは、こちらから動いて積極的に敵を減らしていく脳筋策……というか策でも何でもありませんね」

今の自分達の戦闘力ならば、どちらでも問題ないとリゼットは考えていた。

他陣営の袋叩きに遭う危険も勿論あるが、それだってターレスとスラッグを悟空とピッコロに任せ、他の雑兵を天津飯達に任せれば充分いける。要はフリーザとさえ直接ぶつければいい。

そのフリーザでさえ、今の自分ならば勝てる相手なのだからもう恐れる必要はない。

だがそれはそれとして、勝率は高ければ高いほどいい。

理想はフリーザ、ターレス、スラッグが潰し合つてフリーザ一人になってくれる

事。

最終的な勝者がフリーザというのは動かないが、ターレス達だって特戦隊くらいは蹴散らせるはずだ。

もったも、そんな消極的かつ漁夫の利狙いな策は悟空が嫌うだろう。

「オラは断然、2番目だな。相手が減るのを待つってのはオラ、あんま好きじゃねえな」

「同感だ。倒せるパワーがあるのに何を躊躇う。こちらから出向いて叩き潰せばいい」

悟空とピッコロの二人が当然のように脳筋策を選ぶ。

相手が勝るならば慎重になるくらいは機転はある二人だが、そうでないならば積極的に戦いたがる困った性質も持っていた。

それに続くように天津飯が拳を握り締める。

「やりましょう、神様。今の俺達は強い。」

十分蹴散らせますよ」

「天さんがやるなら僕もやる」

「俺の狼牙風風拳で全員纏めて片付けてやりますよ」

「俺もやるぜ。今までコキ使われた恨みを晴らしてえ」

天津飯に追従するように餃子が賛成し、ヤムチャとナッパが自信に溢れた声で続く。

やはり彼等は武闘家だ。上昇したばかりの力を試したくて仕方がないのだろう。クリリンと悟飯、人参化はあまり気乗りしないように見えるが、反対意見は出していない。

どうやらこれは突撃決定かな、と少しゲンナリするリゼットだが実際に戦略としては悪くない。

時には勿体ぶって慎重になりすぎるよりも大胆に動いた方がいい事もあるのだ。「わかりました。ではフリーザ以外の陣営を最初に叩き、その後フリーザを……」。

いえ、待って下さい。これは……」

だがやはりリゼットは少し慎重になりすぎていたのだろう。いや、この場合に限ってはこれでよかったのかもしれない。

出遅れた、とも取れるが各陣営からの袋叩きを防ぐ事も出来た、とも言えるのだから。

リゼットはその顔を僅かに険しくし、気の動きから察知した事を悟空達へと告げる。

「どうやら私達は出遅れたようですね……ターレスが移動を開始しました。

それにこの気……ベジータもいますね」

「ほ、本当だ……！ 何でターレスとベジータが？」

「奴等はサイヤ人同士だ。別におかしな事じゃあるまい」

リゼットに数秒遅れて気を感じたクリリンが困惑の声をあげ、ピッコロがつまらなそうに推測を口にする。

実の所リゼットはとくにベジータとターレスの合流には気が付いていたのだが、そこまで気にはしていなかった。

それはピッコロの言う通り、打倒フリーザの目的の為ならば手を組んでいてもさほど不思議には思わなかったからだ。

「それにフリーザも……目的地は、どうやら此処のようですね」

リゼットの理想はターレス、スラッグ、フリーザが勝手に潰し合う展開である。それを考えるとターレスとベジータ、フリーザがこちらへ接近しているこの展開はあまり望ましいものではない。

しかも悪い事というのはどうも重なるらしい。

遙か遠方、宇宙の彼方から巨大な気がこのナメック星へと移動している事をリゼットは感知していた。

しかも更に深く感知——遠視して分かった事実は今のリゼットをして背筋を冷やすものだ。

フリーザの最終形態によく似たシルエットに、紫と白のカラーリング……間違いない、クウラだ。

一体何がどうしてこの事態を招いたのかは分からぬが、クウラがこの惑星に接近して来ている。

しかも……流石にフリーザの兄だ。量産型のポッドとは宇宙船の性能が違うのだから。

移動速度が驚くほどに速い。このままでは僅か1時間もせずに到着してしまう。

（一体どうしてクウラが……？ いえ、むしろクウラが来るからフリーザが自分で動いている？

わからない……けど、何か私の予想していない事態が発生している……）

表面上こそ冷静なままのリゼットだが、その内心は大慌てであった。

一体何故フリーザが自分で動く？ 性格を考えればギニュー特戦隊が来るまで

待つはずでは？

いや、そもそも自分で動くにしたってスカウターがないはずだ。ナメック星人達が全部壊したはずなのに、何故こちらの居場所を把握出来る。

どうせスカウターがないと踏んであえて気配を消す指示を出さなかったのは過ちだった。完全に気を消したまま動くべきだったと反省するも後の祭りだ。

勿論こちらの気を感じてベジータくらいならば来るかもしれないと想定していたが、それは別によかった。

ノコノコと出てきた所を倒せばいいだけの話で、むしろそれを狙ってわざと釣り竿を垂らしていた部分すらある。

だがフリーザが一緒に行動を起こすなんて予想していない。

だがそれでも、まだここまでは何とかなった。最悪、自分が全力で全員を蹴散らせばそれで済んだ。

だがクウラだ。本当に何故こいつがこのタイミングで動く？

意味が分からない。

（何かの作為が働いているとしか思えない……まさかあの魔族達？

それとも別の要因？ どちらにせよ、早急に決断を下さないと）

クウラと特戦隊の到着は気の移動速度から見て恐らく1時間以内。

それまでに何とか他の陣営を無力化する必要がある。

ここに来る順番は距離と速度からして、まずはターレスとベジータが最初だろう。

上手くすれば彼等とは共闘も出来るだろうか？

フリーザは……仕方ない。こうなったら自分が終わらせてしまおう。

最初は余裕こいて第一形態や第二形態で来るはずだから、本気を出す間も与えずに消滅させる。

最早フリーザよりも後で来るクウラをどうするかを考えねばならず、フリーザに手こずっている余裕などない。

何せクウラは最初からフリーザにとっての最終形態になっている。同じ方法では倒せない強敵なのだ。

いや、何も戦う必要はないのではないか？　クウラの宇宙船がここに来るタイミングでヘブンズゲートを発動し、遠くの宇宙へ飛ばしてしまえばどうだ？

クウラの速度や宇宙でも生存可能な事を考えると避けられてしまう可能性も大きいがやってみる価値はある。

「か、神様！　ど、どうします?!　もう来ちゃいますよ！」

「ここで迎え撃ちます。まずは先に来るターレスに対処しましょう。

恐らく打倒フリーザの目的は共通のはず……上手くすればフリーザとの戦いでは共闘出来るかもしれません」

まずはターレスを説得する。失敗すれば自分が早急に倒す。

続いてフリーザも全力を出す間を与えずに消す。

その後にクウラの宇宙船を遠くへと飛ばす。かなりギリギリだが、これしかない。スラッグは最後に倒してしまえばそれでいい。

そう結論付け、リゼットは到着したターレスとベジータを見上げた。

内なるリゼット「何でクウラ来てるんですかヤダー……！」

あの魔族二人組絶対許しません！」

魔族女「濡れ衣よお……」

第三十話 歴史の侵略者達

「よおカカロット。地球で会った時よりもずっと腕を上げたようだな。

そう身構えるなよ。別に戦いに来たわけじゃねえ」

ベジータを連れて悟空達の前に現れたターレスは驚く程に友好的だった。

いや、彼の目的は既に地球で聞いていたのだから別に意外でもないのかもしれない。

彼が地球で語った目的——悟空と手を組んでのフリーザ打倒。

あの時はターレスを危険と判断したりゼットが地球から追い出してしまったが、再び悟空とターレスはこのナメック星で再会を果たした。

ならば当然、あの時の勧誘の答えが聞きたくなるのだろう。

それに対し、悟空はあくまで落ち着いた様子でターレスへと言葉をかける。

「悪いが時間がねえ。用があるんならさっさと済ませてくれ」

「わかってるさ。フリーザの野郎が来てるんだろう？」

そこで相談だが、戦力が欲しくねえか？」

「オラ達に協力するっていうのか？」

「そういう事だ」

ターレスからの共闘の申し出はまさに渡りに舟だ。

地球に来た時もフリーザを敵と見なす言葉を口にしており、打倒フリーザに限れば最初から共闘の目はあった。

しかも今のターレスは地球に来た時よりも更に気が強大だ。

それでも今の悟空やピッコロならば勝てる相手だが、ターレスには尻尾がある。つまり最大で戦闘力10倍の大猿になるという奥の手もあり、それを使われてしまえば悟空達では勝てない。

ターレスの隣にいるベジータは3万程度だが、リゼットの知識が正しければここから2回も瀕死になれば戦闘力がネイルと合体したピッコロ——つまりは100万以上——を上回る。

成長性という点で見れば悪くない戦力だ。

「信じるな孫悟空。俺達を騙す気に決まっている」

「……いや、オラはそう思わねえな。こいつは確かに悪い奴だけど、フリーザを倒

したいって気持ちは本物だと思う」

ピッコロが疑り深く言うが、悟空はこの件に関してだけはターレスを信じてもいいと思っていた。

何か根拠や理屈があつての事ではない。

理由を問われれば『何となく』としか答えようがないだろう。

あえて言うならば、悟空が記憶を忘れてよかったと発言した時のあの激昂ぶりだろうか。

ターレスの事を完全に知っているわけではないが、それでも彼がバーダックという名の悟空の父を尊敬していたという事だけは確かに伝わってきた。

だから悟空は、彼を信じてもいいと考えたのだ。

「信用してもいいんだな？」

「フリーザの野郎を倒すまではな」

悟空の簡素な問いにターレスもまた簡潔に答える。

それだけで二人にとっては充分だった。

悟空が手を差し出し、ターレスが固く握る。

決して信頼で結ばれた間柄とは言いがたく、仲間とは到底呼べない関係だ。

だが少なくともフリーザを倒すという共通の目的を果すまでは敵ではない。

今はそれで上出来だ。

「ところで、何でベジータが？」

「ああ。やつこさん、フリーザに反逆してこの星に来た方がいいが側近の二人に半殺しにされちゃったのさ。

で、それを偶然俺が見付けて拾ったわけだ」

「ターレス！ 余計な事を言うんじゃない！」

フリーザより先にためえからブツ殺されたいか!？」

ベジータは不機嫌を隠さずに怒鳴る。だがターレスは「おお、怖い」などと言いつつも本当に怖がっている素振りなど欠片もなかった。

それも当然の話で二人の戦闘力には大きな開きが存在する。

何も考えずに喧嘩を売っても負けるのはベジータの方なのだ。

気付けば随分ベジータと他の戦闘力に開きが出来てしまっているが、リゼットはこの点についてあまり深刻には考えていなかった。

どうせベジータは少しくらい差があっても勝手に猛トレーニングしてインフレの最前線にまで這い上がってくる男だ。心配する必要はない。

むしろ今のベジータはまだ悪人であり、いつ後ろから撃ってくるか分からないので弱い方が都合がいいとすら思っていた。

……とはいえ、少し気の毒な事をしてしまったとは思う。

ベジータの顔は屈辱に満ちており、彼は今、かつてない惨めさを味わっていた。（く、くそったれ……どうなってやがる？　俺が地球でこいつ等と戦ったのはほんの一月前の事だ。

なのに何故、この短期間でいつもこいつもここまで戦闘力を上げてやがる……全員、以前とはまるで別人だ……ナ、ナッパすらこの俺を遥かに凌駕してやがる……！

お、俺はあの時よりも遥かに力を増したはずだ……なのに何故……）

それは、かつて体験した事のない恥辱だった。

決して馬鹿にされているわけではない。誰かに指摘されたわけでもない。

だが、それでも理解してしまう……今ここにいる中で、自分が一番弱いのだとい

う事を。

エリートであるベジータにとって、他人の上に立っているのは当たり前のことであつた。

故にこの状況は初体験。自分が一番の弱者であるという予想すらなかった事態に困惑する他ない。

「よおベジータ……ちょっと見ねえ間に随分と弱弱しくなっちゃったなあ」

「ナッパ……！」

「嘘みてえな話だ。絶対に敵わないと思つていたお前が今や、ちっぽけに見えるぜ」
そんなベジータへと、ナッパが挑発交じりに声をかけた。

ナッパとベジータの力関係は完全に逆転している。

今や、ベジータがどう逆立ちしてもナッパには敵わない。それだけの差があるのだ。

その事にベジータは怒りの形相を浮かべ、ナッパは嘲笑の表情を浮かべた。
「ナッパ、やめなさい。」

貴方とベジータの間に確執がある事は知っていますが、今はそれよりもフリーザ

の事を考えるべきです」

「う……そ、そうだな。すまねえ女神様」

一触即発の空気だったが、リゼットに窘められてナツパが矛を収めた。

何かまだベジータに言いたい事はあるのだろうか、しかしリゼットに注意されては仕方ない。

それに実際、今はベジータよりもフリーザに集中すべき時だ。

ナツパはそう考えてベジータから意識を外した。

（随分ギスギスした共同戦線になりそうですね）

そんなナツパの様子にリゼットは眉を顰め、それから一つの岩陰を見た。

フリーザだけでも厄介なのに、どうも厄介事というのは続けてやって来るものらしい。

しかし、一度“彼女達”とは話しておくべきだと思っていたのも確かだ。

故にリゼットは、招かれざる客へ向けて声をかけた。

「……そこに隠れている者。何者ですか？」

リゼットの鋭敏な感知能力はフリーザよりも先にここに来ていた何者かを捉えて

いた。

スラッグではない。彼の気は未だ遠くにある。

それにこの特徴的な気は以前にも感じた事があった。

「へえ、勘がいいわね」

リゼットの呼びかけに応じ、岩陰から例の魔族二人が姿を現す。

全身スーツの女に、その後ろに控える寡黙な男だ。

まさか地球から遠く離れたこのナメック星にまで現れるとは、本当に神出鬼没な連中である。

恐らくはリゼット同様に空間転移の能力でも有しているのだろう。

何せヘブンズゲートの元になったデッドゾーンは元々ガーリックJr.の技だ。魔族が使えても不思議はない。

「な、何だ？ フリーザの一味か？」

「いや、この気配……貴様等、魔族か？」

突然の乱入者にクリリンが身構え、同じ魔族であるピッコロが即座にその正体を言い当てる。

魔族の男女はそれに返答を返さず、リゼットだけを鋭く視線で射抜く。

どうやら向こうの目的はリゼットらしい。

「地球の神……少し貴女と話したい事があるんだけど、どうかしら？」

「私が受けるメリットがありませんが」

リゼットはこの後すぐに到着するだろうフリーザを迎え撃たなければならない。後にクウラが控えている以上フリーザに戦力を削られるのは避けるべきだ。

だからリゼットがフリーザを瞬殺し、後に来るクウラに全戦力をぶつける。

しかしここで魔族二人を相手にしては、その予定が瓦解してしまう。

「受けるメリットはなくとも、受けないデメリットなら提示出来るわよ。

そうね……例えばこのまま、フリーザとの戦いに私達が乱入するとか」

「——！」

女の言葉にリゼットは顔を陰しくする。

これは脅しだ。いいから黙って付いて来い、そうしないとフリーザに味方するぞ
と言っているのだ。

これが並大抵の相手であれば「どうぞご自由に」だけでも言って蹴散らすところだ

が、何せこの二人は未知数だ。

最悪、仲間の誰かが殺されてしまう可能性すらある。

つまりリゼットに拒否権など最初からないのだ。

（いっそ、一度皆を連れて地球まで逃げてしましましょうか……。

……いえ、それは恐らく悪手。彼女達は私と同様に空間移動の能力を有している可能性が高い。

私が逃げたところで、最悪、戦場が地球に変わるだけ……）

リゼットの取れる選択肢の一つに『逃げ』がある。

ヘブンズゲートで悟空達を連れて逃げ、フリーザ、クウラ、ターレス、スラッグで潰し合いをさせてしまうというのは一つの手段に数えていいだろう。

この場合の最終的な勝者はクウラになるだろうが、もしかしたら彼の性格上、地球を雑魚と見なして放置してくれる可能性もある。

劇場版で地球まで来てしまったのは悟空がフリーザを倒したからだ。

そうでなければ来ない可能性も低くはない。

しかし……やはり問題となるのは、この魔族二人組だ。

ここまでに判明している時点で、彼女達には『空間移動、あるいは瞬間移動』、『他者の行動を変える』、『パワーアップさせる』という3つの能力を有している事が分かってている。

つまりリゼットが地球に逃げても、クウラやフリーザを連れて追ってきてしまう可能性が高いのだ。

それならばまだ……ナメック星人達には悪いが、住人のいなくなったこの星を戦場にした方がいい。

「……いいでしょう。付いて来なさい。向こうで話を聞きます」

「ふふっ、物分りがいいわね」

リゼットは遠く離れた小島を指定し、魔族の二人もそれに従う。

こうなった以上、フリーザとの戦いにリゼットは参加出来ないだろう。

この二人を速攻で倒してしまえば戻る事も出来るだろうが、それも難しいとリゼットは考えていた。

今の自分が全力で戦って、勝負になるかどうか……それほどのポテンシャルをこの魔族からは感じるのだ。

リゼットは悟空を手招きで呼ぶと、対フリーザの注意点を彼へと伝える。

こうなってしまうたからには、せめて悟空達がさっさとフリーザを倒してしまう事に期待するしかない。

「悟空君、決してフリーザに全力を出させないで下さい。

相手がこちらを舐めている間に速攻で倒すように。いいですね？」

「え？ そんな強え奴なんか……オラそいつの全力と戦ってみてえぞ」

「負けるから止めて下さい」

……伝える相手を間違えたかもしれない。

いや、一応ピッコロやターレスも聞いているはずだし大丈夫だろう。大丈夫と思いたい。

リゼットはその場から飛翔し、後に魔族二人が続く。

予想はしていたが、それなりに飛ばしているのに余裕で付いて来ている。これだけでも油断出来ない相手だ。

「……アンテ『開』」

飛びながら、己の力を抑えている気霊錠を解除した。

この二人の実力は未知数、となれば加減している余裕などない。

悟空達から大分離れた所でリゼットは着地し、魔族二人も彼女から少し離れた位置に降り立った。

「さて……率直に問いましょう。貴方達は何者ですか？」

様々な戦いにちよっかいをかけているようですが、何が目的なのですか？」

「嫌あねえ、ちよっかいだなんて。私達はただ、面白くしようとしてるだけよ？」

けど、私達がせっかく頑張っているのに貴女がいるせいで上手く行かないのよね」
「それをちよっかいと呼ぶのですが」

魔族の女はリゼットを見つめる。

その視線はリゼットを計ろうとしているようにも見えるが、真意は分からない。
だがどうやら彼女の眼鏡にリゼットは適わなかったらしい。

一言、『違うわね』とだけ呟いた。

「おかしいわねえ。タイムパトロールの回し者だと思っただけで、本当に私達の事を知らないみたいだし……考え過ぎだったのかしら？」

「どちらにせよ目障りな奴だ。ここで始末してやる」

彼女達が言っている事はリゼットにはさっぱり分からない。元より理解させる気すら相手にはないのだろう。

だが一つ……どうやらやる気らしい、という事だけは嫌でも分かった。

一気に気を高め、赤いオーラを放出する男に対しリゼットも白翼を展開して応じる。

20倍バーストリミットを発動し、これでリゼットの戦闘力は数値にして1億2375万——フリーザの100%にも勝る数値となった。

今頃悟空達はいきなり意味の分からない大きさになったリゼットの気に驚いているだろうが、それを気にする余裕もない。

「なるほど。この時代では破格の強さだ」

「はァ！」

この気の大きさを見ても余裕を崩さないか……と思いつながらリゼットは男の懐へと飛び込む。

そしてまずは拳に気を集中しての連撃！

しかし当然のように男はガードをし、微塵も揺らがない。

「どうした？ 一人で俺達と向かい合う以上、余程腕に自信があるんだろう。見せてみる、その力を」

「……！」

ただ一度の攻防。それだけでリセットは相手と己の差を痛感していた。

全力を出していない、という点では両者共に同じだが恐らく隠している実力に天地の開きがある。

彼の言う通りに実力の全てを真正面から出しても簡単に叩き潰されるだろう、とリセットは判断した。

だからまずは体勢を崩し、一気に攻撃を仕掛ける。

何とか、相手がこちらを侮っている間に片を付けねばならない。

それが彼女の出した結論だ。

「——ふっ！」

「!?」

堅牢なガードを維持している男の小指を握る。

いかに戦闘力が多かろうと体重まで増加するわけではない。

リゼットは掴んだ小指を支点に合気の要領で魔族の男を投げ、頭を地面へ叩き付ける。

普通ならばこれで小指もへし折れるのだが、流石に頑丈だ。輝すら入っていない男は小指を掴まれたまま空いている方の拳を繰り出す——が、その瞬間にリゼットが小指を捻り男の姿勢を崩す。するとまるで操られるように拳がリゼットを外れ、逆に勢いを逆用した掌底が男の顔を射抜いた。

(……今だ！)

男の体勢が崩れた隙を狙い、リゼットはバーストリミットを瞬間で最大まで開放。気を固形化して創り出した拳を地面から発射し……男の股間へと出力全開で叩き込んだ！

更に気の拳は素早く辜丸を鷲掴みにし、力の限り握りしめて捻る。

「……………ッッ！！？……………ッッ」

「あら、えげつない」

さしもの魔族の男もこれには悶絶し、目を見開く。

金的というのは相手が男である以上、どうしようもなく有効な攻撃だ。

辜丸というのはいわば剥き出しの内臓。鍛えようもない、股間にぶら下がった明確な弱所だ。

しかしやはり戦闘力が高いと皮の防御も厚いのだろう。

リゼットとしては本気で潰すつもりで攻撃したのだが、流血の一滴すらも齎せていない。

「は！」

再び倍率を20倍まで戻し、相手の体勢が戻るのを待たずに足払い。

鞭のように足をしならせて相手の膝裏に足の甲を当てて強制的に座らせた。

要は膝カクンと同じだ。曲がるように出来ているのだから、僅かな力を当てれば曲がる。簡単な道理である。

そのまま蹴りの勢いを殺さずに回転。その際に長い髪が魔族の男の目に当たり、視界を奪う。

眼球もまた剥き出しの弱所の一つだ。

「ッッ！」

「ミラ、前！」

魔族の女が何か言っているがそのアドバイスを活かす間など与えない。

遠心力を上乗せし、バーストリミットを再び最大まで上昇。

気の固形化を右脚に集約させ、蹴りに刃を纏わせる。

——直撃。

魔族の男は額から血を噴出しながら吹き飛び、遠く離れた岩山へと衝突した。

……本当は頭部を切断してしまう気だったのだが、僅かに額が斬れただけとは異常に固い相手である。

「グリストレイント！」

体勢を崩している魔族の男の両手両足を対象に物質創造神術を発動。

無から有を生み出すのは神としての基礎技能であり、これ自体は何も驚くべき事ではない。

ピッコロだって何もない場所に服を創る事が出来るのだ。

それと同じ術でリゼットが創造したのは、重りだ。

『原作』において、このような場面がある。

四肢に4トンの重りを付けて修行をしている悟空のもとへ南の界王がやってき

て、詳細は省くが悟空の重りを10トンにしてしまうというエピソードだ。

それは結局、超サイヤ人になった悟空があっさり動いてしまったことで南の界王が度肝を抜かれるという展開に終わるのだが注目すべきはそこではない。

このエピソードで注目すべき点の一つ。

界王クラスであっても、変身してはいないとはいえ、悟空が動けなくなるほどの重りを創り出せるという事だ。

このエピソードで悟空に与えられた重りは合計40トン。

大界王星の重力が界王星と同じ10倍と想定すれば400トンの負荷を与えられた事になる。

そして今回リゼットが彼に付与した重りは……一つ10000トン！ 合計で4000トンの重量を彼に強要し、その動きを封じ込めた。

「ぐ……お!？」

「ッギャロウズッ!」

続け様に物質創造。

絞首台を具現化し、男の首を縄で縛り上げて念力と合わせて浮かせた。

狙いは無論、言うまでもなく、このまま彼の首をへし折る事である。

戦闘力では今のリゼットでは魔族の男に遠く及ばない。

しかし実力で及ばずとも、界王の重りの事例から分かるように、物質創造の使い方次第では格上だろうと行動不能にする事が出来てしまう。

そして4000トンの重りによって首にかかる負荷は、リゼット自身が使うどんな攻撃よりも彼にダメージを与えるだろう。

ギリギリと男の首が圧迫され、元々青い顔色が更に青くなる。

「ったく、世話が焼けるわね」

しかしリゼットが神術を使うならば、相手も魔術を使う。

女が杖を向けただけでリゼットが創造した拘束具と絞首台は一瞬にして消え——
だがりゼットはそれを予期していたように即座に次撃へと移行した。

「千の剣よ、在れ！」

間髪入れずにリゼットが右手を掲げる。

すると空を埋め尽くす程に白い剣が創造され、一斉にその刃を魔族の男へと向けた。
た。

躊躇などそこにはない。

放たれた刃が次々と男に炸裂し、その姿を覆い隠していく。

だがリゼットはそれでも終わりと見なさないらしく、飛翔して空中で翼を広げた。翼から漏れた気がまるで羽のように舞い散る。

そこから間髪入れずに両手を頭上でクロスさせて気を高め、かめはめ波と同様に両手の手首を合わせた状態で前に突き出した。

それと同時にリゼットの周囲に二つの光球が生まれ、それらは彼女の周囲を旋回しながら光を強めていく。

そして高めた気を全て掌の中に凝縮・チャージし——発射した。

「R^レa^イg^ジi^ンn^グg^ブl^ラa^スs^トt！」

かめはめ波などに代表される単純明快な一方向へ向けての気の放出。そのリゼット版だ。

放たれた白い奔流に合わせて2つの光球が桜色の気功波と化して中央の白い気功波に合流し、魔貫光殺砲のように螺旋を描きながら旋回した。

言うならば『貫通力と突進力を強化したかめはめ波』といったところか。

リゼットの全力で放たれたそれは星の地表すらも削り、岩山を消滅させて男を呑み込む。

そればかりか惑星の成層圏すらも突き抜け、遠く離れた位置にあった小惑星へと直撃、爆碎した。

（……間違いなく今の私の全力の攻撃……これで駄目だったなら……）

今のはリゼットが今行える最大の攻撃だった。

これでどれだけのダメージを受けてくれるか……あるいは受けないかで実力差がある程度痛感^{わか}る。

無論実力差があるならばあるでやりようはある。カウンター狙いもいいし、ひたすらに斬撃を繰り返すというのも有効な手だ。

太陽拳からの気円斬コンボも選択肢に入れていいだろう。

だがやはり、出来れば少しくらいはダメージも入っていて欲しい。

実力差を埋める手段はあれど、やはりそれで勝つのは楽な話ではないのだから。かくして、煙が晴れた時にそこにいたのは――。

「……こんなものか……期待外れだ。面白くもない」

額の斬り傷以外に、これといって全くダメージを受けていない魔族の男の姿であつた。

・ゼノバースにおいてミラさんをどれだけボコボコにしてもこの台詞を言われま
す。

ニコニコ動画とかだと「(震え声)」とかコメントが付きますけど、やはりこの時点のミラさんは勝ち目がない強敵なのです。

どれだけ一方的に殴って、こちらのHPが僅かにすら削れていないパーフェクト勝ちでも勝ち目などないのです。

こんなものか。期待外れだ。面白くもない(内股)

【リストレイント&ギャロウズ】

敵に合計4000トンの重量を与えて行動不能にし、その上で絞首刑にかける結構酷い技。

物質創造術の悪用。やろうと思えば多分界王様でも出来る。

リゼットはカッチン鋼を見たことがないので地球で一番固い物質である天命石（カリン塔を構成している石）で造っているが、このレベルの戦いでは天命石など木材のようなもので、割と簡単に壊れてしまう。

【千の剣よ在れ】

リゼット版王子戦法。Dr・ウィローにも使った『ソード』を正式に技に昇華させたもの。

同時に千本の剣型気弾を創造し、敵に突撃させる。

千の剣と在れと言いながら実は正確な本数はリゼットの手抜きにより、微妙に千本を超えていたり足りなかったりする。

なので正確な技名は『四捨五入すれば大体千本くらいの剣よ在れ』である。

グミ撃ちの際に手を高速で動かすのが面倒くさいというリゼットの怠け心から生ま出された。

剣の形状をしていて斬撃特化しているので殺傷力は高い。

しかし所詮は王子戦法なのでミラには通じなかった。

／＼ーヌ

ー！／

／＼ー！オグハビロ

ー！／

【Raging blast（レイジングブラスト）】

リゼット版かめはめ波。

補助用の光球を先に出してから、手を頭上でクロスしてチャージし、敵へ向けて発射する。それだけの技。

3発の気功波を複合して放つ事で威力と貫通力、突進力がかめはめ波を凌駕する。

その攻撃力のかめはめ波の3倍。燃費の悪さも3倍。シャアは実は1.3倍。光球を出さずに撃つ事も可能だが、その場合はただのモーション違いのかめはめ波でしかない。

名前の元ネタはゲームの『レイジングブラスト』から。

／＼ッデ！ト！ダ

ー！ クロスギヤー

ー！／

／＼ッカルカメ

ンー！／

第三十一話 更なる混沌

「もう終わりだ。安心しろ、お前のエネルギーは俺が使ってやる」

リゼットの渾身の連撃を受けて尚、さしたるダメージも受けていないミラが宣告を下す。

二人の実力差は一目瞭然。リゼットが全力で攻撃を叩きこんでもダメージがない時点でもはや勝敗は決している。

勝ち筋があるとすれば斬撃系の気弾で首なり胴なりを切断してしまう事だが、千の剣を叩きこんでも無傷の時点でありかなり難しいと言わなければならない。

しかしそこに、今まで沈黙を守っていた女魔族が言葉を割り込ませた。

「待って、ミラ」

女の制止に男が素直に止まる。

感じられる気の大きさは男の方が圧倒的に勝るが、どうやら立場は女が上らしい。ならばあちらを仕留めてしまえば…….と思いを巡らせるリゼットへ女が問いを發した。

「ねえ、貴女。もしかして後ろに誰かがいるんじゃない？」

「……後ろ？」

「そう、例えば時間を越える力を持つ奴とか。

誰かが余計な事をしたと考えないと、不自然なのよね。

貴女だけよ？ 存在している時間軸と存在しない時間軸でここまで差が生じて

いるのは」

「一体何の話を……」

相変わらず、この魔族の言いたい事はいまいち分からない。

だが出てきた言葉は見逃せるものではなく、どうも彼女達は本来の時間軸……つまりドラゴンボールの正史を知っているかのような素振りを見せていた。

本当に一体何者なのだろう、とりゼットは考える。

セルやトランクスのように未来から来たのだろうか？ それとも自分と同じ記

憶持ちか？

もしかしたら自分が知らないだけで後年にドラゴンボールの続編なり外伝なりが登場して、そこで登場した新キャラか何かだろうか？

……まさかAFのような二次創作のキャラクターという事は流石にあるまい。

「ふうん。どうやら本当に知らないようね？」

……まあいいわ。ミラ、もう少しだけ放っておきましょう。

もしかしたらこいつを通して、裏にいる連中を引き摺り出せるかもしれないしね」

「こいつを見逃すのか？」

「いいでしょ？ 貴方にとってはどうせ雑魚よ。大したエネルギーにもなりやしないわ。

今はまだ、ね」

女はあくまで余裕の態度のまま、リゼットを放置する事を提案する。

実際にあの男——ミラとリゼットの実力差は明白だ。放置しても問題のない相手と判断されたのだろう。

女は挑発するように笑うと、リゼットへと向き直る。

「そういうわけだから、もう少しだけ生かしておいてあげる。

でも私達の邪魔をしたらすぐに消えてもらうから」

「逃がすとも……」

「あら、いいのかしら？ 私達ばかりに構っていて」

女がからかうように言い、それと同時にリゼットは感じた。

今まで確かに第一形態だったはずのフリーザの気が、突然巨大に……最終形態のそれへと変わったのを。

「なっ……！」

「あら大変、フリーザったらいきなり最終形態になっちゃったわねえ」

「馬鹿な……貴方達、一体何を……!？」

フリーザの性格上、いきなり最終形態になるなど有り得ない。

だがこれと似たような事は以前にもあった。

追い詰められてもいないベジータがいきなり大猿になるという不可解な事態。今回ののはそれと全く同じ展開なのだ。

一体何をしたのかは分からないが、この魔族二人が何かをしたに違いあるまい。

「そして、ほおら。もう一つ……」

次にリゼットが感じたのは、このナメック星に到着してしまった複数の気であった。

ギニュー特戦隊に、クウラ機甲戦隊。そしてクウラ。

それらが、何時の間にかこの星に到着していたのだ。

「ふふ、少しだけ時間を早めてあげたわ。どう？　楽しくなりそうでしょう？

ま、種あかしをしちゃえばちよつと先の到着寸前の未来から『持ってきた』だけ
なんだけどね」

「……！」

「それじゃ、私達は次の時代へ行くわ。また会いましょう……可愛いイレギュラー
さん」

「待っ……！」

リゼットは慌てて止めようとするも、それよりも早く二人の魔族は最初から存在
しなかったかのように消え去った。

すぐに気を探すも、もうどこにも見当たらない。

このナメック星だけではない……リゼットが感知し得る周囲の宙域数光年に渡
り、あの二人はどこにも居ないのだ。

彼女達の言葉を信じるならば、別の時間へと飛んだという事なのだろう。

信じ難い、そして信じたくもない恐ろしい力だ。

「何て事を……」

あの二人のせいで事態は完全にリゼットの手を離れてしまった。

フリーザはいきなり最終形態へと移行し、クウラまで到着してしまうなど最悪の予想を上回っての最悪だ。

一体どうすればいいのか……リゼットは最早、正しい答えを完全に見失っていた。いや、そもそも現状に対して正しい答えなどというものが存在するかどうか……。

「一体どうすれば……」

迷っていても時間は止まってくれない。

刻一刻と変化する混沌の事態の中、リゼットは早急に次の行動を決めなければならなかった。

★

一方その頃、クウラ直属部隊『クウラ機甲戦隊』のリーダーであるサウザーは宇宙船の前で腕組みをし、部下の帰還を待っていた。

彼等がこのナメック星に到着してまず最初に行ったのはフリーザの真意を問うべ

く伝令兵を飛ばす事であり、未だその部下が帰還しないのだ。

サウザーとしては今回のフリーザの反乱はとても信じられるものではない。

確かに彼の主であるクウラと、その弟であるフリーザはお世辞にも仲のいい兄弟とは言えないだろう。

しかし、だからといって表立って反逆する程に険悪なわけでもない。

それに宇宙の支配者であるフロスト一族同士の本気の殺し合いなど、自ら栄光を捨て去るに等しい愚行でありコルド大王もそんなのは許さないだろう。

だから今回の件は何かの間違いであり、フリーザとクウラもきつと、いつも通りに互いに嫌味を叩き合いながらこの件は納まると、そうサウザーは考えていた。

だが伝令に送った部下は帰らず……代わりにやってきたのは、フリーザの側近であるザーボンであった。

「お前はザーボン……？ 伝令に送った兵はどうした？」

「ふ、フリーザ様が始末なされた。私はクウラ様にお知らせしよう……」

これが単なる一般兵士であればサウザーの反応も違っただろう。

だがここにいるのは曲がりなりにもフリーザの側近であるザーボンであり、その

言葉の重みが違う。

彼がクウラにこのような事をわざわざ告げるという事。それは即ちフリーザへの裏切りに他ならない。

つまり彼は今、フリーザに殺されてしまう危険を犯してまでここに来ているわけであり、嘘でこんな事を行うのはあまりにリスクが高すぎる。

否、高いというより得る物がない。リスクしかないのだ。

「だがお前はフリーザ様の側近のはず。何故それを伝えに来た？」

「……それしか生きる道がないからだ。いくらフリーザ様でもクウラ様と本気でやりあえば勝ち目はあるまい……そんな戦いで捨て石にされて死ぬのは御免だ」

苦渋の決断というわけか、とサウザーは考える。

確かにフリーザとクウラが普段の兄弟喧嘩ではなく本気で殺し合えば間違いなくクウラが勝つだろう。

本人同士の戦闘力は勿論の事、側近の戦闘力もクウラが勝るのだ。

機甲戦隊は僅か3人のみのチームだが、3人が共にギニューを上回る戦闘力の持ち主だ。

たかだか4万や5万の戦闘力しかない特戦隊など相手にもなるまい。

唯一対抗し得るのがギニューだが、それとて3人を相手にして勝負になるものか。

だからザーボンの選択は正しい。

確かにクウラとフリーザの軍勢が正面から衝突すれば、その時真っ先に捨て石となるのはザーボンだ。ならばまだクウラに付いた方が生存率が高いと言えるだろう。

この時、サウザーはまだ半信半疑であった。

ザーボンがフリーザを本当に裏切っているのか……その確証が持てなかったのだ。

故にこの後に起こった事はザーボンにとってはまさに不幸中の幸いであった。

「ザーボン……てめえ、よくも……!」

「ド、ドドリア!? お前生きていたのか!」

何と、殺したと思っていたドドリアが生きていたのだ。

しかしザーボンは幸運だった。

もしもこれがフリーザの宇宙船で、フリーザの居る前で起こった出来事だったならばフリーザからの追及を逃れる事は出来ずに裏切り者として消されていた事だろう。

しかしここはクウラの宇宙船前であり、そしてサウザーには今まさに、『クウラの為にフリーザを裏切ってきました』というシナリオで話している。

ならばこのドドリアの登場は、むしろプラスとなる。

「おのれ、フリーザめ！ 裏切り者の私を始末しに来たか！」

「裏切りは、許さねええ……！」

「何だと……？ やはりフリーザ様の謀反は本当だったのか……!?!」

フリーザの側近の片方が片方を裏切り者と呼び、その対象も裏切りを認めている。この事態を前にサウザーは誤解をした。ザーボンには本当にフリーザを裏切ってクウラに付く気なのだと。

そしてその際にドドリアを攻撃し、しかし殺し損ねたドドリアがザーボンを殺す追っ手として差し向けられた、と。そう勘違いしてしまったのだ。

何とも見当外れな事を考えるサウザーの前でザーボンとドドリアの戦いが始ま

り、そこには一切の手加減も演技もなかった。

戦闘力17万のサウザーにしてみれば二人の戦いは低次元なものだが、少なくとも本気で互いを殺そうとしているのはよく解る。

やがて勝負はザーボンの勝利に終わり、ドドリアは海へと沈められた。

「サ、サウザー、時間がない。フリーザはドラゴンボールを集めるべく高い戦闘力が集まっている場所へと向かった。このままでは本当に不老不死となってしまうぞ！」

「わ、わかった！ 俺はすぐにこの事をクウラ様へと伝えてくる！」

今まで現実味のなかったフリーザの反乱。それが現実味を帯びてきた事でサウザーは慌てた。

ザーボンの言葉の裏も読まずに、彼から伝わったフリーザ反逆の件を正しいものと考えてしまったのだ。

それが全てザーボンの意のままだと気付きすらせずに宇宙船の中へと走り、そしてクウラへとそのまま報告してしまう。

そしてサウザーからの報告を受けたクウラもまた、そこに疑いを挟みはしなかつ

た。

「なるほど……フリーザめ、愚かな奴よ。」

この俺に正面から齒向かうほどに救いようがないとはな」

元より彼等兄弟の仲は悪い。相手への信頼など皆無だ。

だから『もしかしたら』『彼がそのような軽はずみな行動に出るはずが』という疑いを持つとうとしない。

『まああの馬鹿ならやるだろう』くらいにしか考えないのだ。

故に、クウラの中において既にフリーザはただの裏切り者であり、そして敵でしかなかった。

「フリーザと、そこにいるわけのわからん連中は俺が纏めて始末する。」

サウザー、お前はギニュー特戦隊を潰して来い。

他はともかく、ボディチェンジ能力を有するギニューだけはフリーザと合流されると面倒だ」

「はっ」

ギニュー特戦隊の討伐を機甲戦隊へと命じ、クウラは空へと飛び立った。

そこに警戒などない。戦えば必ず己が勝つという強者の自負に溢れている。

それに遅れてサウザー達も飛び立ち、後にはザーボン一人だけが残される。

ここまでは順調だ。これでフリーザとクウラはしばらく戻って来ないだろうし、その時はどちらかが死んでいるはずだ。

そして特戦隊は機甲戦隊が片付けてくれる事になった。

それはつまり、今ならばフリーザの宇宙船がガラ空きという事。ドラゴンボールを奪う絶好の好機が到来したという事だ。

「ふふふ……近付いてきた、近付いてきたぞ。私の永遠の美が！」

全てを掌で弄んでいる、とザーボンは思い込んでいる。

否、実際にこのナメック星における混沌とした現状は紛れもなく彼が招いたものであり、彼はそれを上手くコントロールしていると言える。

だがその彼もまた完璧ではない。リゼットという存在がいるせいで既にボールが入手不可能になっているという事を予想出来ていない。

つまり、彼はもう詰んでいるのだ。

何をしてもしもボールが入手出来ない以上永遠の美など得られるはずもなく、そして

フリーザとクウラのどちらが戻ってきても彼の悪行はいずれ明るみとなり消し去られるだろう。

この戦場は混沌。誰にもコントロールなど出来やしないのだ。

【ドラゴンボールゼノバース】

2015年に発売された家庭用アクションゲームソフト。

未来を改変した罪により、未来トランクスがタイムパトロールとして働いているという設定から物語が始まり、そんなトランクスがドラゴンボールに願った『俺と一緒に戦ってくれる強い人を連れてきてくれ』という願いに応える形で神龍に拉致された戦士がプレイヤーとなる。

歴史を改変する者達から悟空達を守るために戦うというのが大まかな流れで、このゲームの時間改変は従来のパラレルワールド量産型とは異なるドラえもん式改変となる。

かなり細かいキャラエディットが可能で、自分の分身が悟空達と共に戦い、助け

るというファン垂涎の展開が大人気となった。

トキトキ都という、あちこちでアバター達がビンゴダンスをしているカオスな空間を拠点として、歴史の敵達と戦う。

【主人公】

ゼノバース1の主人公。

神龍に拉致されてトランクスに協力する羽目になった苦勞人。

決まった容姿や性別はなく、プレイヤーが自由に決める事が出来る。

種族は地球人、サイヤ人、ナメック星人、フリーザ一族、魔人の五種類から選択可能。

プレイヤーの分身という位置付けなので基本的に会話はせず、ジェスチャーだけでリアクションを取る。

ストーリー中のモーションは統一されているので、女の子アバターにしていようが当たり前のようにガニ股になったりするのが悲しい。

『1』では大活躍だったが、主役補正が消えた『2』での扱いは悲慘の一言。

このSSでは当たり前ながら、オリジナル主人公枠はリゼットに取られているの

で、ここに私のアバターを放り込むことは出来ない。

仮にそれをやっても、明後日の方向にかめはめ波を撃ち、栽培マンにすら負けるクソの役にも立たない雑魚が登場するだけである。

なのでこの1主人公の立ち位置には別のキャラを放り込んでいる。

【トワ】

ゼノバースに登場するエロい恰好の魔族のお姉さん。

大人のお姉さんが好きなパラガスも大満足。

ドラゴンボールの様々な歴史にちよっかいをかけてはキリ（エネルギー）を吸収している。

ダーブラの妹だが、全然似ていない。

多分ミラよりは弱いが、それでもダーブラ級の戦闘力はあると見ていい。

【ミラ】

トワの造り出した人造人間。

自分が最強である事に拘っており、1ではやや小物感のする残念なイケメンだった。

実力は大体魔人ブウ（デブ）と同じくらいと思われる。

2 では最終的にブルー以上の強さになる。

【時の界王神】

界王神にあるまじき有能。

可愛らしい外見をしているが、実は7500万年以上生きているロリババア。

第三十二話 とびっきりの最強対最強 (1)

サウザーへと偽りの報告を済ませたザーボンは一度フリーザの宇宙船へと戻っていた。

その目的は勿論、宇宙船に保管してあるドラゴンボールを奪う事である。

しかしここで彼にとっての誤算が起こった。

てっきりフリーザの援護に向かったと思っていたギニュー特戦隊の一人であるグルドがボールの監視として残っていたのだ。

「お前は……グルド！」

「何だ、ザーボンか……雑魚が驚かせるんじゃない」

グルドは宇宙の精鋭を集めたギニュー特戦隊の中で唯一、ザーボンにも劣る戦闘力の持ち主である。

代わりに時間を停止させる能力を有しているからこそ特戦隊に数えられているが、この程度の相手に雑魚と呼ばれる事はザーボンにとって屈辱であった。

その意趣返しに、ほとんど本音に等しい侮辱をグルドへとぶつける。

「喋るな、ナマモノめ。私の鼻が曲がるではないか」

「な、なんだとお！ お、俺が一番気にしている事を……!!」

「……だが、どうやら貴様一匹のようだな」

「な、なんだってんだよ？」

見張りがいたというのはザーボンにとって誤算だったが、しかしそれがグルド一人というのは幸運だった。

もしここに残ったメンバーが他の4人のうちの誰かならば勝ち目など到底なかっただろう。

だがグルドならば話は別だ。

確かに彼の超能力や時間停止は厄介だ。チーム戦ならば半端な戦闘力などより余程戦闘に貢献出来る。

金縛りの術で敵の動きを停めてもいいし、時間停止など使い次第でいくらでも応用出来る。

だが一対一ならば、さほど恐れる相手ではない。

ザーボンは地面を蹴ると、グルドが反応出来ない速度で蹴りを叩き込んだ。

「がっ……!」

「消えろ、ナマモノめ!」

続けて肘打ち! グルドの頭を打ち抜き、地面へと叩き付ける。

更に追撃の気弾! 倒れたグルドの背に容赦なく気を叩き込み、何一つ行動させずに沈黙させた。

所詮グルドの戦闘力は僅か1万前後。ザーボンと戦って勝てる道理などない。

もし彼に勝ち目があるとすれば、それは先手で金縛りの術を使うくらいだろうがザーボンもそれは分かっている。

だから何もさせずに奇襲で倒したのだ。

「ふん……ドドリアといい貴様といい、果てしなく醜くすぎる生き物だな。

私より美しい者は許せんが、醜い者も許せん。自分を見ているようでない……」

ザーボンは美と醜の二面性を持つ。それが彼のコンプレックスであり、故に彼はグルドやドドリアの存在を許せない。

そして、それと同じかそれ以上に自分よりも美しいと認めたりゼットの事もまた許せないのだ。

「さて、これでボールが5つ……残るボールはあの妙な連中の誰かが持っているだろうが私では奪えん。

フリーザが奴等を殺した所を狙って掠め取るしかないな」

ザーボン hands に入れたドラゴンボール5つを持って移動を開始する。

とりあえずまずは、誰にも見付からない場所に隠すのが先決だ。

★

悟空達は今、かつてない危機を迎えていた。

人数は悟空達一行にターレス、ベジータをも加えて11人。

かつては敵として猛威を振るったベジータやターレスまでもが味方に加わっているという、普通ならば負ける気のしない戦力だ。

だがそれもフリーザと出会うまでの話。今のフリーザと比べてしまえば、そんなものは何の慰めにもならない。

見た目はシンプルさを限界まで追求したようなのっぺりとした異星人であり、背も低い。外見“だけ”を言えば今までの敵の中で最も大した事のない相手に見えるだろう。

だが——強い！ それも恐ろしいほどにだ。

「な、何て事だ……神様の言った事は本当だった……」

こいつだけは変身させちゃいけなかった……」

悟空は心のどこかでフリーザを侮っていた。あるいは慢心していたのかもしれない。

最初に現れたフリーザの戦闘力は数値にして53万程度であり、今の悟空ならば界王拳を使うまでもなく勝ててしまう相手でしかなかった。

だから彼が変身した時も全力で止めなかった。

黒いオーラを纏い、いきなり『最終形態を見せてやろう』とか言い出した時もむしろそれを望んでいたようにさえ思う。

サイヤ人の悪癖だ。自分の方が相手より数段上の強さになってしまおうと、そこに楽しみを見出そうとしてしまう。少しくらい苦戦したいと望んでしまうのだ。

だがそれは間違いだった。リゼットが言ったように相手がこちらを侮っている間にあっさりと倒してしまうべきだったのだ。

「あ、あああ……」

「な、何て事だ……あ、あいつ、ここまで凄まじいなんて……」

悟飯が震え、クリリンも掠れた声で呟く。

ヤムチャや天津飯、餃子や兎人参化も同じだ。誰もがフリーザを恐れていた。

ナッパやベジータといった戦闘好きのサイヤ人ですら震え、ピッコロやターレスですら表情を険しくしている。

「さあ、地獄以上の恐怖を見せてあげるよ」

ゆっくりと手を広げて構えるフリーザの前に、まず弾かれるようにして悟空とピッコロが仕掛けた。

出し惜しみなどしない。最初から全開の界王拳10倍だ。

戦闘力にして650万以上にまで跳ね上がった二人は紅蓮のオーラを纏いフリーザへと飛びかかる。

しかしフリーザは反撃もせずに悠々とそれを避け、続く連撃も軽々といなし続ける。

「特大繰気弾！」

「気円烈斬！」

悟空とピッコロが距離を取った瞬間を狙い、ヤムチャとクリリンがそれぞれの最大技を放つ。

気を限界まで集めた特大の練気弾が複雑な軌道を描いてフリーザを狙い、連射された気円斬が直進する。

だがフリーザは軽々と気円斬を回避し、蠅でも払うかのように練気弾を叩き落とした。

「気功砲！」

続けて天津飯が気功砲を放ち、フリーザへと直撃させる。

一歩間違えれば自らの命と引き換えになりかねない大技であり、本人の力量以上の威力を叩き出せる彼の切り札だ。

だがこれも効かない。悠然と無傷のフリーザが煙の中から姿を現す。

「キルドライバー！」

「く、くそつたれー！」

「喰らええええ！」

ターレスが両手の間に生み出した気の輪を放ち、ベジータが気を放出する。

更にナツパが口から破壊光線を放ち、三条の奔流がフリーザへと向かった。

だがフリーザはこれすらも片手で弾き、何事もなかったかのようにそこに佇んでいた。

餃子はずっと超能力を使っているが、まるで通用していない。

「握手をしましょう」

兎人参化がフリーザの前に歩み出て握手を求めた。

勿論応じてもらえるわけがない。

無言で尻尾で殴られ、兎人参化は失神した。

「それで終わりかな？　もしそうなら、そろそろ僕も仕掛けさせてもらうけど」

「ぐっ……！　皆、同時に攻撃するんだ！」

ピッコロが一斉攻撃の号令を出し、全員がそれに頷く。

「かめはめ、波アー！」

「波アー！」

「かめはめ波！」

悟空、クリリン、ヤムチャの3人が同時にかめはめ波を放つ。

「魔閃光ー!」

「魔貫光殺砲!」

悟飯とピッコロの師弟が一切のタイミングの乱れなく技を発射する。

「どどん波アー!」

天津飯と餃子が二条の光線を放ち、それに続いてベジータのギャリック砲、ターレスのキルドライバー、ナッパの破壊光線が並んだ。

計10発の大技。だがフリーザの笑みは崩れずに、怯みすらせず前進。自ら気弾の嵐へと当たって行った。

結果は——無傷。煙の中から再び^{フリーザ}絶望が歩み出る。

「な、なあ……俺思ったんだけどよ、一度逃げて神様と合流しねえか?

さっき感じた神様の気なら、多分フリーザにも勝てると思うんだけどよ……」

クリリンのその提案は弱気なものだが、確かに現状では最も確実な方法であった。

あの妙な魔族二人組に連れて行かれてしまったリゼットだが、その気の強大さは充分に伝わってきた。

フリーザがまだ本気ではない事を計算に入れても、恐らくリゼットが勝るだろ

う。そう思われる程の巨大な気であり、それだけに土壇場で邪魔が入って彼女が離脱してしまったのが心底痛い。

だが逆を言えば、あの魔族はリゼットですら警戒心を抱いて場所を変える程の相手だったとも取れる。

もしかしたら、あれはフリーザ以上の強敵なのかもしれない。

「馬鹿め、よく気を探ってみろ。奴なら既にこちらへと向かって来ている。

……フリーザに似た、やばい気も別方向から来ているがな」

そんなクリリンへ、まだ少しは冷静なピッコロが突っ込みを入れた。

こちらが何もせずとも、既にリゼットは移動を開始している。

だが同じように、余計なものまでここに接近しているようだ。

状況はハッキリ言って全くよくなっていない。それどころか、これから益々悪化するだろう。

それが分かるだけにピッコロの顔は苦渋に歪んでいる。

「さて、今度は僕からいくよ」

「——っ、来るぞ！」

フリーザが指先を向け、閃光を連続で発射する。

それに僅かにでも反応出来たのは悟空、ピッコロ、ターレスだけだ。

悟空はクリリンを、ピッコロは悟飯を、そしてターレスはベジータを。

それぞれ一番近くにいた味方を引っ張り、死の閃光からかうじて身を逃した。

だが残された天津飯、ヤムチャ、餃子、ナッパは避け切れない。

4人は何も出来ずに胸を貫かれ、そして地面に伏した。

死んだのか、それとも生きているのかは分からない。

だが生きているとしても、もう立ち上がる事は出来ないだろう。

「ほお、避けたか。思ったよりやるね」

「……み、見えなかった……ただ、何かがパツと光ったようにしか……」

たった1回の攻撃で人数を半分にされてしまった。

その事にクリリンと悟飯が震え、ベジータが絶望する。

駄目だ、勝てない。次元が違いすぎる。そう悟るに、今の攻撃は充分過ぎた。

だが絶望は続く。フリーザは悟空をこの中で一番の実力者と判断するや、一瞬で

彼の目の前へと跳び、首筋に蹴りを叩き込んだのだ。

不吉な音が響き、悟空を覆っていた炎の如き気が消える。

そして悟空は、まるで糸でも切れたかのように倒れ伏した。

「ごっ、悟空ー!？」

「お父さん！」

「さあ、次は誰にしようか？」

あまりに突然の事にクリリンと悟飯は理解が追いついていない。

ただ突然悟空がやられた、という事しか分からず混乱するばかりだ。

そんな二人へと無情にもフリーザが接近し――。

「させるかアーツ！」

横からターレスが割り込み、フリーザへ猛攻を仕掛けた。

二人の間で激しい攻防が始まり、しかしフリーザの余裕は崩れない。

そればかりかフリーザは実力差を見せつけるように腕組みをして足だけでターレスをあしらひ、蹴り飛ばした。

ターレスは血の放物線を描きながらも空中で回転して着地するが、たったこれだけの攻防で既に息が上がっていた。

「くそったれめ！」

ピッコロも攻撃に加わり、ターレスと二人がかりでフリーザへ突撃した。

だがそれでも当たらない。

フリーザは腕組みすら解かず、嘲笑すら浮かべながら二人の決死の抵抗を楽しんでいた。

ターレスはこのままでは勝てないと判断するや、フリーザを跳び越えて彼の背後へ回り込んだ。

そしてフリーザを羽交い絞めにし、クリリンへ叫ぶ。

「地球人！ あの気の円盤で俺ごとフリーザを斬れ！」

「なっ……い、いくらお前が悪人でもそんな事出来るわけ……」

「馬鹿野郎！ 皆揃って死にてえか!？」

このままでは勝てない。

ならばせめて差し違える……その判断は決して間違いではない。

だがクリリンが迷った一瞬があればフリーザは拘束から逃れる事が可能だ。

フリーザの肘がターレスの腹にめり込み、強引に彼を吹き飛ばしてしまった。

それでもターレスは何とか立ち上がるが、ダメージは浅くない。

「無駄な事を」

フリーザは余裕の笑みを浮かべ、クリリンへと指を向けた。

まずは厄介な技を使う彼から殺そうというつもりだろう。

今度こそ万事休すか——そう思われた瞬間に音を遙か遠くに置き去りにして飛び込んできた巨大な白い拳が、フリーザを殴り飛ばした。

「がっ……!?!」

その拳は以前、ベジータとの戦いでクリリン達も見た事がある。

リゼットが『ゴッドハンド』と呼んでいた気の拳だ。

空を見上げれば案の定、そこにはリゼットが佇んでいる。

「神様！」

「すみません、遅くなりました」

リゼットはクリリン達の隣に着地し、倒れ伏した仲間達を見る。

まだ死んではないようだが、全員瀕死だ。一刻も早く措置を施さないとまずい。

リゼットは空中に手を伸ばし、空間の裂け目から袋を取り出す。

自ら創り出した亜空間に収納しておいた仙豆を入れた袋だ。

中から6つの豆を出すと、それを超能力で操作して仲間達の口へと放り込む。これでとりあえず、命に別状はないだろう。

「た、助かったよ神様……俺、もう駄目かと……」

「……いえ、まだ助かったと考えるのは早計なようですよ、クリリン君」

安堵しかけるクリリンだが、リゼットの言葉で再び気を引き締められる。

そう、安心するにはまだ早い。ここからがこの混迷の戦場の本番なのだ。

リゼットが上へと視線を走らせ、つられてクリリンも見る。

彼女が視線を向けた先にいたのは、岩の上に立つ宇宙人だった。

フリーザとよく似た外見のそれは、信じたくない事にフリーザの気を上回っている。

「見付けたぞ愚弟^{フリーザ}。一族の面汚しめ」

「愚兄^{クウラ}か……こんな星まで来るとは、余程暇なんだな」

クウラとフリーザはどうも、あまり仲はよくないらしい。

互いに憎悪を隠しめせずに睨み合い、今にも飛びかかりそうだ。

いっそ、このまま兄弟喧嘩に突入してくれるのならリゼット達にとっても願ったり叶ったりだ。

どちらが勝つにせよダメージは受けるだろうから、弱った方を叩けばいい。しかし意外というべきか……クウラは冷静に、リゼット達を見下す。

「弁解があるならば、その連中を片付けた後で聞いてやろう。あるならば、だがな」

「いちいち上から目線で鬱陶しいんだよ、お前。

そいつ等を始末したら次はお前だ。覚悟しておけ」

「弟を殺す覚悟か？」

「ほざけ」

どうやら、そう上手く事は運んでくれないらしい。

クウラとフリーザはまず、目障りなりゼット達を先に消す事に決めたようだ。

大方、小物といえど自分達が戦っている隙に逃げられたりしたら面白くないとか、そんな理由だろう。

どちらにせよ、状況は最悪の方向へと傾いていた。

【とびっきりの最強対最強】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作第8弾。

悟空がフリーザを倒したことが明言されているのでナメック星編の後である事は確か。

しかしその割に悟空が何故か超サイヤ人になかなか変身せず、まるで初覚醒であるかのようにすら見える。

その事からよく、『元氣玉でフリーザを倒した世界線』と言われる。

しかし問題なのは、後の『サイヤ人絶滅計画』でスラッグ、ターレスと共演してしまった事。

つまり前2作と独立したパラレルワールドに出来ない。

ついでに言うとかイヤードラゴンがいるので『地球まるごと超決戦』から続く世界線である可能性は極めて高い。

しかしこの世界ではZ戦士は死んでいないので何故ナメック星に行ったのかが

本当に不明。

ピッコロさんがホームシックにでもかかったのだろうか。

以下はこの話に続くまでの勝手な私の予想。

- 1、ラディッツ襲来前にガリックJr・と戦う。
- 2、ベジータとナッパを犠牲者なしで乗り切る
- 3、Dr・ウィロー登場。『この世で一番強いヤツ』発生
- 4、ターレス襲来。『地球まるごと超決戦』発生
- 5、スラッグ襲来。『超サイヤ人だ孫悟空』開始。
- 6、ピッコロさんがホームシックにかかり、誰も死んでいないのに一同ナメツク星へ。

7、宇宙船で悟空が鍛えて原作でのナメツク星到着時くらいの戦闘力になり、油断せずにギニューを抹殺。フリーザは元氣玉で抹殺。

ピッコロさんはネイルと融合せず大幅に弱体化。

8、クウラ襲撃。『とびっきりの最強対最強』発生。

この世界のピッコロさんはネイルと融合していないのでサウザーでも善戦出来

る。

悟空も超サイヤ人化を覚えていない。

悟飯は原作では数回あった瀕死パワーアップ（VSリクーム、VSフリーザ等）がなかったので、サウザーに一蹴される程度の悲しい戦闘力しかない。

9、ピッコロさんが石に躓いてうっかりネイルと融合。原作の戦闘力に追いつく。

【クウラ】

フリーザの兄。普段からフリーザの最終形態に相当する変身で身体を慣らしている。

弟と違っていきなり本気に近い状態で突撃してくる大人げない奴。

しかしこの形態で何故かノーマルの悟空に圧倒されている。

もしかしたらこの映画の悟空は地球にまだ残っていた神精樹の実を食べてしまったのかもしれない。

神精樹の実を全て食べた俺と貴様の間には天と地ほどの差があるのだ！

Vジャンプに記された(多分最終形態の)戦闘力は4億7000万。

フリーザを『まだまだ甘い』と言っており、それを証明するように星を更地にしてしまう。

しかし彼等の仕事は『環境のいい星を売る』事であって滅ぼす事ではない。せっかく環境のいい星があっても、生物が住めない更地にしてから売られては客も困る。

コルドが彼ではなくフリーザを優遇する理由はここにあるのかもしれない。

【サウザー】

南斗六星のうち、帝王の星「将星」を司る一子相伝の拳、南斗鳳凰拳の伝承者。聖帝を名乗り、ラオウ同様に力によって世紀末の支配を企てていた。

先代の南斗鳳凰拳伝承者・オウガイの死により『愛など要らぬ』と考えるようになり、非情の帝王としてケンシロウの前に立ち塞がる。

最近では『南斗DE5 MEN』というアイドルグループを設立し、強いだけでなく歌って踊れる帝王である事を見せてくれた。

好物はカレーライスで、土日はカレーライス以外認めない。

地球に襲撃に来た時も悟飯達がキャンプで作ったカレーを勝手に食べていた。天敵はターバンのガキ。ターバンのナメック星人にも弱い。

【ドール】

クウラ機甲戦隊の一員。

宇宙プロレス連盟の元レスラー。惑星クウラNo.256出身。マグマの中に大陸がある星の出身で、鍛え上げられた非常にタフな身体を持っている。

対戦相手を全て殺してしまう残虐超人だった。

ジャンプ特集記事によると戦闘力は18万50000パワー。

サタデーナイトフィーバーの使い手であり、ポージングの際に彼の見事なフィーバー拌む事が出来る。

【ネイズ】

クウラ機甲戦隊の一員。

惑星クウラNo.6出身で首を引っ込めることが出来る。

どう見ても水タイプなのだが、何故か10万ボルトを発射。

しかしピッコロさんは特性『ちくでん』持ちだった為に全く通用せず、逆に跳ね

返されて自分の技で即死した。

やっぱり水タイプじゃないか。

彼等が戦う際のBGMのタイトルは『未来から来た少年』だが、どの辺が未来でどの辺が少年なのかは分からない。

戦闘力は16万3000。

第三十三話 とびっきりの最強対最強 (2)

今回から『技だけクロス（刃牙）』タグを追加しました。

「まずは掃除だ。さっさと消してやろう、雑魚共」

クウラが手に気を集約させ、リゼット達へと向ける。

そこには遊びも、雑魚を甚振ろうという加虐心もない。

弟とは決定的に異なる氷の如き無慈悲さ。それがクウラにはあった。

やはりこの男を放置していたらあつという間に悟空達が皆殺しにされる。

そう確信したリゼットは、己がまず倒すべき相手をフリーザではなくクウラと決めた。

フリーザは多少なりとも遊ぶ傾向がある。強いからこそ相手を矜り者にし、必死の抵抗を楽しもうとする。だがクウラにそれはないのだ。

少なくともこの場面で真に怖いのはフリーザではなくクウラだ。

リゼットは無動作の気合砲をクウラへと叩き込み、その身体を弾き飛ばした。

「ピッコロ、私はあの男^{クウラ}を相手にします。皆を頼みましたよ」

「ちっ……簡単に言いやがる」

リゼットは翼を出して飛翔し、吹き飛んで行くクウラを追う。

空中でクウラもすぐに体勢を立て直すが、そこを狙い澄まして第二撃。腹に手刀を叩き込み、反撃の拳を紙一重で避けて顔面に掌底。

更に突き出されたままのクウラの腕を左手で掴み、右手で突き上げるように肘関節を叩く。

メキ、という音が聞こえるも流石に一発では碎けない。だがミラほどの異常な強度でもなさそうだ。

掴んだ左腕を捻り、大きく弧を描いて地面へ投げ、超能力と気合砲を追撃で上乗せ。地面へ向けてクウラを『発射』した。

「ぐうっ……こ、こいつ!？」

「Kin^キne^ネct^{クト}!」

墮ちるクウラを追いながら気の固形化により、槍を持った戦乙女を5人創造。

空中で何とか止まったクウラへとけしかけ、四方を囲ませる。

当然クウラはこれに応戦して戦乙女達を殴るが——その瞬間に爆発。触れれば爆発する初見殺しは知識がない限りほぼ確実に引っかかる。

爆発によりよろめいたクウラへと気のリングを発射して拘束し、更にリゼットは攻撃を続ける。

ガラ空きのお腹へと蹴りを叩き込み、超能力＋気合砲の合わせ技でまた吹き飛ばす。海を割り、水平線の彼方へと飛んだクウラを追いゲートを展開。亜空間を通過し、一瞬でクウラよりも先へと移動。剣を生成し、飛んで来たクウラの背へとバツトのように叩き込んだ。

(斬れ——ない!?)

間違いない切断だと思ったのだが、クウラは命中の瞬間に身体を何とか逸らして直撃を避けたらしい。

薙ぎ払った気の刃はクウラの後頭部と背中のお皮を僅かに削り、尾を切断するだけで留まってしまった。

だがりゼットは空振りの勢いをあえて殺さずに回転。遠心力を上乗せし、自分を

追い越して行ってしまったクウラへと剣を投擲した。

ここにきてようやくリングを力ずくで振りほどいたクウラだが、直後に飛んで来た剣に脇腹を貫かれて吐血する。

背中を削られ、尾を切断され、脇腹を串刺しにされる。きっと今までに味わった事のない痛みだろう。

その痛みと混乱から立ち直る間も与えてなるものかとリゼットが手を翳し、亜空間を開く。

そして連続で亜空間へ向けて気功波を発射。それと同時にクウラの横に開いたゲートから気功波が放たれ、クウラを吹き飛ばした。

一発で終わりではない。吹き飛んだ先にもゲートが開いてまたしても気功波でクウラを吹き飛ばす。

その先にも更にゲートが開いて気功波が放たれ、その先にも更に――。

まるでパチンコ玉のようにクウラの身体が次から次へと吹き飛ばされ、体勢を立て直す事を許さない。

やっとクウラが攻撃に慣れたところで、今度は彼を囲むように一斉に複数のゲ―

トが展開され、そこから一斉に気功波が解き放たれた。

避ける事も出来ないクウラは亀のように丸まり、ただ耐えるしかない。

爆炎が彼を包み込み、その体を焼き焦がす。

やがて攻撃が終わったと思えばすぐに次の攻撃が始まり、何時の間にか接近してきたリゼットのしなやかな手がガードの隙間を掻い潜ってクウラの顎へ掌底をブチ当てた。

頭を守れば腹！ 腹を守れば頭！ 反撃すればカウンター！

『武』の錬度の差により、面白いようにクウラの防御を抜いてリゼットの攻撃が入る。

それでもクウラが亀のように丸まって防御に徹すれば、手を鞭のようにしならせたピンタが腕を叩いた。

「~~~~ッッ！！？」

驚くべきは、その激痛^{いた}み！

まるで皮膚を削られたと思うような耐え難い、痛覚神経を直接刺激したような痛みがクウラを襲う。

鞭打ちの拷問というものがあるが、その拷問の痛みは想像を絶するという。

大の大人でも泣き叫び、場合によっては痛みのあまりショック死も引き起こしかねない。

リゼットは極限まで脱力した状態から放つ鞭の如きその掌打を以て鞭の痛みを再現し、クウラへと与えたのだ。

当然彼がそんな痛みを経験した事などあるはずもなく、思わずガードを開いてしまったとて誰が責められるだろう。

だがガードを開けばそれは攻撃のチャンスに他ならず、リゼットは指先に気を集中させるとクウラの臍部へと遠慮なく指を突き刺した。

「——ッ!？」

クウラが怯み、腹を守る。

すると待ってましたとばかりに耳に指を突き刺し、血に塗れた指先を引き抜いた。

「ガァ、アアアアアア!!」

クウラが叫びながら、闇雲に拳を繰り出す。

だがリゼットは冷静にその全てにカウンターを返した。

一打目——真っ直ぐ突き出された右拳を避け、クウラの顔に掌底を放つ。

二打目——やや上の方へ突き出された左拳を、姿勢を低くする事で避けて腹に手刀を見舞う。

三打目——振り降ろすように飛んで来た右拳に合わせて起き上がるように腕を振り上げる。交差しつつ回避し、顎に掌をめり込ませた。

四打目——避けるまでもない。見当違いの方向へ放たれた左拳を無視し、更にクウラの頬を張った。

五打目——体勢を崩しながらの右のフック。少し身体をずらして胸の前を素通りさせて丁度いい位置に来た所で関節に手刀を叩き込み、関節を砕いた。

六打目——体勢を何とか直しながらの大振りなテレフォンパンチ。軽く搔い潜り、胸に零距离で掌底を放つ。胸骨が折れる音がした。

七打目——腕が動かないから今度は蹴り。軽く跳躍して避け、首筋に手刀を叩き込む。

八打目——来ない。首を打たれた事で咳き込んでいるクウラへと遠慮なく攻撃させてもらう。

打つ、打つ、打つ、打つ——！

鞭のように手をしならせて少女の細い腕が次々とクウラの身体を打ちのめす。

頬を張って左へ！ 左へ飛んだ所をすかさず狙い打って今度は右へ！

腹が開けば腹！ 屈めば顎！ 頭！

頭部の守りがガラ空きになった瞬間を狙って気の刃を纏った指を薙ぎ、クウラの右眼球を切り裂く。

様々な武を学んだからこそ、接近戦において発揮されるリゼットのえげつなさ。それを全身で体感しながらクウラは混乱していた。

何だこれは、何が起こっている？ 俺はやられているのか？

いや、やられているどころではない……解体こわされている！

的確に、確実に、そして丁寧に。この女はあろう事かこのクウラを、完膚なきまでに解体こわそうとしている！

何だこの女。外見は弱そうなヒューマンタイプの女だというのに、攻撃が今まで味わった事がないほどに容赦ない。

やばい、この距離は危険だ。離れないと……。

そうしている間にもクウラの変化は続き、口元のマスクを除いて変身は完了した。「よくも……よくもこのクウラ様をここまでコケにしてくれたな、女。貴様ただで死ぬると思うなよ！」

「変身、ですか……こうなる前に勝負を付けてしまいたかったのですが、難しいものですね……」

リゼットは指先で汗を拭い、クウラと己の実力差を冷静に分析する。

身体に負担のかかるバーストリミットの40倍を使うと仮定しても、相手の戦力はその約2倍。いや、ギリギリで2倍はないか？ という程の差だ。

絶望的、とまでは言わない。引っくり返す事はまだ可能なレベルだ。

かつて悟空とピッコロが戦闘力にして3倍の開きがあるラディッツを倒した事を思えばそこまで無理な差でもない。

問題は時間だ。いかにリゼットでも40倍は負担が大きい。

そんなに長時間は続けられないのだ。

勝ち筋があるとすれば大きく分けて三つ。

一つ。斬撃系の気弾を高速回転させて——要するに気円斬を首に命中させる。

それもただの斬撃気弾では駄目だ。先ほどの剣のようにかき消されてしまう。やるなら気をギリギリまで込めた最大出力でないと、あの首は取れない。

二つ。ここぞというタイミングで一瞬のみバーストリミットを80倍まで跳ね上げて一気に消し去る。

だがこれをやると間違いなくリゼットは動けなくなる。

今でさえバーストリミットの錬度と身体の自己治癒力により限界以上の出力を出している状態なのだ。流石にこれ以上の無理をすればいくらリゼットの自己治癒力でもすぐには動けないだけのダメージを負ってしまう。

フリーザがまだいる以上、出来ればこれは避けたい。

三つ。ヘブンズゲートで遙か遠くの宙域へと放逐してしまう。

いかにクウラが宇宙でも生存出来るといえど身体一つで付近に何も無い暗黒の宇宙空間へ放り出されてしまえば上下左右もわからなくなり、まず帰還してくる可能性はないだろう。

いや、いっそ太陽に送ってやるのもありだろうか？

問題は、どうやってアレをゲートへ放り込むかだ。

まあ、どれを選ぶかは戦いながら考えるとしよう。

「さあ——始めようか！」

クウラが再戦を宣言し、口元をマスクが覆い隠した。

それと同時に彼の巨軀が一瞬にしてリゼットの眼前に広がる。

（——速い!？）

クウラが急接近し、拳を繰り出す。

流石に速いが、それでもリゼットならばかろうじて反応出来る速度だ。

リゼットの両腕を合わせたよりも太い腕を避け、相手の速度に合わせた掌底を顔に放つ。

だがクウラに効いた様子はなく、すぐに第二撃が放たれる。

それも避けてカウンターを取るも、すぐに次撃！

避ける、当てる、避ける、当てる、避ける、当てる……。

次々と繰り出されるクウラの攻撃を的確にいなし、リゼットの攻撃だけが一方的に当たる。

これだけならば先ほどまでの焼き直しだが、決定的に違うのはリゼットの表情に

余裕がない事だった。

クウラの攻撃の一撃一撃、その悉くが重く、速い。

カウンターは取れている。恐らくダメージも入っている。

だがどれも先ほどのように体勢を崩すダメージにはならず、平然と撃ち返してくるのだ。

痛みがないわけではないだろうが……失敗した。先ほどに散々叩きのめして痛み慣れさせすぎた。

加えて今のクウラには烈火の如き憤怒がある。多少の痛みなど最早無いに等しいのだろう。

避けて当てて、避けて当てて……その繰り返しを二十は経ただろうか。

リゼットの集中力がまさに途切れるか否かのタイミングで、クウラの尻尾が彼女の足を払った。

「しまっ……!!」

「もらったァ！」

クウラの豪腕が遂にリゼットを捉える。

咄嗟に自ら後ろへ飛んでダメージを最小限に抑えるも、ダメージは大きい。

少女の華奢な身体は弾かれたように吹き飛び、いくつかの岩に激突して砕き、尚も止まらない。

ようやく地面に墜落した時、リセットは満足に動く事も出来なかった。

まるで麻痺したように指先が痺れ、身体がバラバラになったかのような痛みが腹部を中心に全身へ駆け巡る。

「かつ……はア……！ あ、ああ……く、あ……！！」

このままでは不味い！

痛みに支配されながらもかろうじてそれだけを考えたリセットは自らの後ろにゲートを開いて落ちるようにその中へと飛び込んだ。

とりあえず回復するまでのエスケープだ。

10 kmほど離れた位置にあった洞窟へと移動し、気を0に落とす。

尚、この洞窟は以前にフリーザをやり過ごしたあの洞窟だ。どんな場所でも記憶しておくものである。

クウラの気はリセットが先ほどまで倒れていた位置に到着し、ウロウロしている。

遠視で視ると、周囲一体を気弾で消し飛ばしていた。

危ない……あのままあそこにいたら仕留められていた。

（い、いきなりいいのを貰っちゃいましたね……それにしても私、打たれ弱いんでしょうか？

悟空君とか、劇場版で戦闘力が倍どころじゃない相手にボコボコにされても戦闘継続してるのに、まさか一発でこれとは……）

戦闘力倍くらいのパンチならば数発程度は何とかなると踏んでいたが、まさか一発でこれとは思わなかった、とりゼットは自嘲する。

やはり不老になろうとあらゆる環境に対応しようとベースが地球人。打たれ強さが違うという事か。

よく考えたら天津飯も戦闘力が倍とちょっと上程度のナツパの攻撃で腕がもげた、ピッコロもナツパの一撃で気絶したりしていた。

こう考えるとやはりサイヤ人が異常に打たれ強いのだろう。

（とにかく、相手の攻撃には当たらないようにしないと……。

さて、第3ラウンドを始めましょうか）

リゼットは靴を脱ぎ、長手袋も外す。最後にケープを脱ぎ、今まで一度として外した事のない重装備を外した。

このドレスはケープを取ると肩が露出してしまいうデザインなので今まで取らなかったのだが、恥ずかしがってヤダーとか言っている場合でもない。

ゲートを開き、クウラの背後へと転移する。

まだ自分を探しているらしい彼に、なるべくダメージを感じさせない声で己の健在を示した。

「こっちですよ！」

「！」

言うと同時に気弾を放つ。

クウラの背で爆炎が上がり、再びこの惑星における頂上の戦いが始まった。

リゼット「私、紙防御じゃないですかヤダー！」

【悲報】リゼット、260年生きてきて初めて自分が紙防御であることを知る。

リゼットの脆さは、自分の倍くらいの戦闘力の相手に殴られると一発でHPが赤バーになるくらいです。

互角の相手でも10も受ければグロッキーになります。

なので劇場版の悟空みたいに格上にボコボコ殴られると、確実に死にます。

ちなみに『とくぼう』は高いので超能力や魔法などの特殊攻撃には耐性がありますが、DB世界でとくぼうが高くて……。

第三十四話 とびっきりの最強対最強（3）

・『クロスオーバー』タグも追加しました。

「さあ、誰から死にたいんだい？」

フリーザの前に、ターレスとピッコロが構えを取る。

悟飯とクリリンはその二人から離れ、気絶した仲間達を集めていた。

残念ながら居ても足手纏いにしかならず、出来る事といえば倒れた仲間を回収する事だけだ。

瀕死の重症を負った仲間達は仙豆によって一命を取りとめているものの、仙豆に『意識を戻す』効果はない。

つまり傷は癒えたものの、未だ悟空達は氣を失ったままだ。

ならば彼が目覚めるまでの時間をターレスとピッコロで稼がねばならない。

一方でベジータは戦いにも加わらず、傷が完治した悟空達を見て何かを考えてい

るようだ。

「おい、勝ち目はあるのか？」

「そうだな……カカロットが起きてくれりゃあ、パワーが上昇してるはずだ。

俺達サイヤ人は死から立ち直る事で大きく戦闘力を伸ばす事が出来る。

伸び代次第だが、勝ち目が出て来る可能性がなくはない」

「なるほど。で……その時間は稼げるのか？」

「……自信はねえが、何とか稼いでやるさ」

ピッコロとターレスは話しながらフリーザの出方を窺っていた。

どうやら向こうからは仕掛けて来るつもりがないらしい。何とも余裕溢れる事だ。

だがあまり膠着時間が過ぎれば向こうから動く事だろう。

ならばそうなる前に、せっかくの時間を活かすのみ。

ターレスは掌に気を集めてナメック星の酸素と混ぜる。

そうしてパワーボールを作り出し、空へと飛ばした。

「弾けて、混ざれっ！」

自らの気で人工的に創り出す仮初の月。

一部のサイヤ人はこれを用いる事で満月の夜でなくともサイヤ人の本領である大猿化を為す事が出来る。

ターレスは下級戦士だが、幾度も神精樹の実を食べてパワーアップする事でこの技を身に付けていた。

「先に言っておく……あまり俺に近付くなよ。理性が吹っ飛ぶからな」

「貴様、制御出来んのか？」

「生憎と下級戦士なもんでね」

眼からブルーツ波を吸収し、尾が反応する事で変身が始まる。

ターレスの身体は全長にして数十mを越す巨体となり、その眼からは理性が失われた。

エリート戦士ならば変身しても理性を保ったまま戦う事が出来るが、ターレスにそれは出来ない。

一度変身してしまえば尾を切断されるか月が消えるまでの間、本能に任せて暴れるだけだ。

あまり近付くな、というのはハッキリでも何でもない。

今のターレスに不用意に近付けば味方ですら攻撃されかねないのだ。

「グォアアアアアアアアアアッ!!」

「ふん、醜い猿野郎が」

大猿が咆哮し、その叫びだけで周囲に嵐の如き風が吹き荒れる。

だがその威容を見ても尚フリーザは余裕のままだ。

大猿に対する嫌悪感こそ顔に出ているものの、自らが負けるなどとは微塵も考え
ていない。

ターレスの巨拳がフリーザを襲い、彼は悠々と避ける。

空振った拳が地面を貫き、大地を陥没させた。

「オオオオオオオ!!」

力任せに腕を振るう。

それだけの攻撃が平常時の最大技に匹敵し、離れた位置にいるピッコロですら背
筋が凍る。

巨体というのはそれだけで強さだ。巨大というのはそれだけで速さだ。

大猿の拳が大地を砕き、口から放たれた破壊光線が惑星の形状すらも変える。

この変身こそ戦闘民族サイヤ人の切り札であり、彼等を最強の一族たらしめる所以。

地球に來た時のベジータですら大猿と化せばギニューをも上回ってしまう超絶的な強化。

ましてやターレスの戦闘力は250万であり、10倍となった今、そのパワーはまさに天地をも砕くものだ。

だが相手は宇宙の帝王。2500万程度の戦闘力では彼に届かない。

「――ま、こんなものだろうね。それじゃ、そろそろ僕からも攻撃させてもらうよ」フリーザが強者の笑みを浮かべ、ターレスの喉元へと飛んだ。

そして蹴りを一撃。

それだけの事でターレスの巨体が浮かび上がり、続けて放たれた尻尾の一撃で大ききなど無視したかのように跳ね飛ばされた。

「グウ……オオオオアッ！」

ターレスが空中で回転し、着地。

それと同時に跳躍し、落下速度と重量を合わせての振り下ろしの拳を放つ。

だがフリーザはそれをも片手で受け止め、あろう事かそのまま投げ飛ばした。

大地を揺らしてダウンする大猿。余裕を保ったまま歩く小柄な異星人。

その現実味のない光景は、しかし驚くほどフリーザに似合っていた。

彼こそが勝利者。彼こそが征服者。

相手が巨大だろうが何だろうが、常に頭を高きに置くのはフリーザだ。

立ち上がるうとするターレスの前に着地し、腕組みをしたまま蹴り上げ、強引に

立ち上がらせる。

尚も喰らい付こうとするターレスをあしらい、足蹴にする。

大猿化などフリーザには通じない。彼にとって大猿など、ただ耐久力が多少高い

だけの巨大なサンドバッグでしかないのだ。

「う、嘘だろ……全然相手になってない」

「つ、強過ぎる……」

最早戦いに加わる事すら出来ないクリリンと悟飯が震えた声を出す。

最長老にせっかく引き上げてもらった力だが、全く役に立つ気がしない。

大猿と化したターレスは彼等の中では間違いなく最強の戦力だが、それがまるで太刀打ち出来ていないのだ。

唯一フリーザに対抗、あるいは勝利し得るのはリゼットのみだが、その彼女は別の場所で更にぶっ飛んだ敵と戦っている。

残念ながら神頼みは意味を為さないだろう。

「か、神様が戦ってるクウラってやつのが更にバカでかくなりやがるし……わ、悪い夢でも見てるみたいだぜ」

悟空はまだ目覚めない。だがいくら悟空でも目覚めた所でどうにかなると思えなかった。

それほどにあのフリーザは次元が違うのだ。

だがそんなクリリンに、今までずっと考え込んでいたベジータが声をかけた。「おい、ハゲ。カカロットの傷を治したあの妙な豆はまだ残っているのか？」

「は？ 仙豆の事か？」

そりゃあ何かあった時の為に全員1粒ずつは持っているが……それがどうしたんだよ？」

「全員一粒か……よし。おい貴様、俺を半殺しにしろ！」

その仙豆とかいうのを全て俺に使いやがれ！」

その言葉を聞いてクリリンは、こいつはとうとう恐怖で気が狂ったのかと一瞬思う。

だがベジータは別に狂ったわけでもなければ、錯乱したわけでもない。

至って冷静に、この状況を打破する道を探しているのだ。

「ターレスの奴も言っていただろう。俺達サイヤ人は死から立ち直るたびに大きく力を増すと。」

俺が瀕死からの復活を繰り返せば、必ずフリーザに勝てる！」

「……だ、だが、それで勝てなければ仙豆の無駄遣いだ。傷の治療も出来なくなる」

「馬鹿が！ フリーザに勝てなきゃ傷の治療もクソもない！」

いいからさっさとやれ！ 間に合わなくなっても知らんぞーっ！」

クリリンは考える。こいつは今でこそ共闘関係にあるが地球の敵だ。

出来ればパワーアップなどさせたくない。

だが、確かにベジータの言う事も一理ある。

ここでフリーザを倒さねば未来などない。ならば可能性に賭けてベジータに使うのはそう悪い使い道でもないのだ。

問題は……首尾よくフリーザに勝てたとして、それでパワーアップしたこいつが自分達を見逃してくれるかだ。

だが現状が詰んでいる事は間違いないく、破れかぶれで試すしかない。

「わ、わかった……それじゃ、やるぞ」

クリリンはベジータに掌を翳し、彼の腹部を気弾で貫いた。

★

ナメック星の成層圏付近。

そこで二つの大エネルギーが幾度となく衝突を繰り返していた。

一方は紫色のオーラを纏った巨漢の異星人。

一方は純白のオーラを纏った小柄な少女。

傍から見れば力の差は歴然であり、事実男のパワーは少女のそれを遥かに凌駕している。

だが少女は技巧を駆使し、男との戦力差にも怯まず喰らい付いていた。

爆発したかのように空が爆ぜ、常人の肉眼では視認も出来ぬ速度で二つのエネルギーが縦横無尽にナメック星を飛び交う。

「必中の槍よ、在れ！」

気の凝縮により生み出した槍をリゼットが放つ。

自律行動気弾の応用により、この槍は敵に命中するまで追い続ける特性を持つ。要するに追跡気弾の槍版だが、クリリンやピッコロが使う追跡気弾と決定的に異なる点は自ら判断して敵を追い、進路を変更する事だ。

即ち槍版ゴーストカミカゼアタックであり、その追尾性能は他の追隨を許さない。案の定避けたクウラだが、すぐに槍が旋回して彼の背後を取った。

それと同時にリゼットが更に攻撃の手を増やす。

「千の剣よ、在れ！」

後ろからは必中の槍。前方からは千の剣。

挟み撃ちにされたクウラは忌々しそうに舌打ちをし、槍と剣の両方に掌を向けた。

「小賢しい！」

圧倒的な気の奔流を放ち、剣も槍も纏めて消し去る。

否、消し去ったと思った。

だが剣と異なり槍は自律稼動し敵を追い続ける必中の攻撃。

気弾のくせにクウラの気功波を避け、その肩に突撃した。

「ぬうっ……！」

クウラの防御力は半端ではない。

槍が命中しても貫通どころか深く突き刺さる事もなく、僅かに刺し傷を与えて終わりだ。

だが僅かに怯ませたのならそれで充分。今度はリゼット自身が剣を持ちクウラの首元へと切り込む。

白刃一閃——咄嗟に後退したクウラの首の皮一枚だけを裂き、だがリゼットはそれを予想していたかのように更に踏み込む。

「はああああっ！」

二百年の時間を武に費やしたりゼットはまさに武芸百般。

扱えない武器は銃器以外にはなく、彼女の戦いは素手の殴り合いに限定されない。

剣もまた彼女にとっては手段の一つ。取れる選択肢の一つなのだ。

剣閃が煌き、無駄を極限まで削ぎ落とした鍊度で斬撃が放たれる。

使う剣術そのものは特筆すべきものではない。愚直に基本を極めた、正統派な……悪く言ってしまうえば教科書通りの剣技だ。

されど彼女の鍊度と速度で放つそれは最早一つの技であり、同時に放たれる不可避の刃。

基礎を極めたならば、全ての斬撃が奥義となる。

次々と閃く剣閃がクウラの身体や腕と激突し、火花を散らす。

この戦いにおいて武器の使用はリゼットにとって必須であった。

少なくともこうして距離を詰めての攻防をするならば素手では強度が足りない。

何せ相手はクウラ。戦闘力にして倍近い開きがある格上なのだ。

ならば素手同士をぶつけた末路など語るまでもなく、一方的にこちらの拳や足が碎かれるのなど目に見えている。

故にこそ直接はぶつからない。クウラの拳には武器を合わせる。

「ふっ！」

僅かに距離が空いた瞬間に気の固定により今度は鎖鎌を生成。クウラの足首へと

巻き付ける。

刃が足に喰い込み、リゼットは即座に鎖を引っ張った。

クウラを引っ張る？ 否、そんなのは不可能だ。力比べをすれば勝ち目などない。

むしろ逆。鎖を引く事で勢いを付け、リゼット自身が飛び出したのだ。

「馬鹿が！ 自ら向かって来るか！」

向かってくるなら好都合。

クウラがそう判断して拳を突き出す。

だが当たらない。突き出した拳はリゼットに届かず、逆にリゼットが繰り出した——何時の間にか生成していた棍がクウラの喉元へめり込んでいた。

リーチの差など百も承知。誰が自分よりも大きい相手と素直に拳を交差させるものか。

勢いを付けた棍の一撃を喉に受けたクウラが軽く咳き込み、リゼットが棍を構える。

ヒュン、ヒュン、と空を切る音を立てて棍を自在に操り、まるで手足のように、

それでいて蛇のようにしならせて棍をクウラへと連続で叩き込んだ。

その柔軟さ、しなやかさたるやまるで鞭——否！ 何時の間にか棍は鞭へと変化したクウラの体表を叩いていた。

かと思えば今度は九節鞭。硬質さを持った鞭がクウラの眉間に当たり、ヌンチャクとなって顎を跳ね上げる。

そしてトンファーと化し、リゼットの渾身の蹴りがクウラの腹へとめり込んだ。更に続けて放たれた蹴りを咄嗟にブロックするも、防御したはずの腕の皮が何かに引っ張られて防御がこじ開けられた。

それを為したのは——足だ。

靴を脱いで素足になったリゼットが、足の指でクウラの腕を掴んで体勢を崩したのだ。

そこにすかさず刀がねじ込まれ、切っ先がクウラの眼を狙う。

反射的にこれを避けたところで、狙いすましたように足刀。

刃と化した足が唸り、クウラの耳孔を穿った。

「ぐあッ……!!」

打たれながらクウラは思う。これほどやりにくい相手は初めてだ、と。

まさに変幻自在、千変万化。

次から次へと目まぐるしく戦術が切り変わり、武器も変化し続ける。

離れても近付いても相手の実体がまるで読めない。次に何をして来るのかが分からない。

それでいて少しでも好機と見れば一時の迷いもなく真っ直ぐに首を獲りに来る。ほら、また武器が変わった。今度は双剣だ。

華奢な外見からは想像も出来ない果敢さと獰猛さで斬り込み、剣がガードの上から傷を量産する。

双剣を合わせて、今度は大剣。身の丈を遥かに超える馬鹿げたサイズの剣を振り降ろし、頭へと打ち込まれた。

「がっ!？」

堕ちるクウラを追い、リゼットが加速。

超能力の一点放出でクウラに更に衝撃を与え、速度を上昇させる。

ゲートを通して地面に先回りをし、跳躍をして落ちてくるクウラの背中へ掌底を

放った。

脊髓狙いの一撃だが、それでもクウラはまだ戦闘不能にならない。

空中で反転し、反撃の拳を繰り出す。

だがりゼットはこれを紙一重で避けてクウラの顎を打ち、流れるような動きで彼の指を取る。

合気——重量と大きさを無視したように少女がクウラを投げ、指を捻る事で関節を痛めつける。

立ち上がると同時に放たれた蹴りをクウラはかろうじて避けるも、次の瞬間には砂が目に入って彼の視界を奪った。

クウラが立ち上がるまでの僅かな時間に足元の砂を、足の指で掴んでいたのだ。姑息な目潰しではあるが、こんな原始的な攻撃というのが意外と効果的だ。

クウラレベルともなれば眼球に砂が入った程度ではどうという事はないが、何かが目に迫れば反射的に目を閉じてしまう。

その一瞬がりゼットにとっては好機。指先に気を集中させて喉を突いた。

続けて追撃。両手の手首を合わせてかめはめ波を撃つ時のような構えを取る。

そしてクウラの胸に当てて発勁！ 体内に衝撃を送り込み、同時に気をも浸透させる。

いかに外が強固だろうと体内は違う。クウラの体内で気が炸裂し、吐き出した血がマスクの内側から溢れ出た。

だがクウラは吐き出す血も気にせず動き、リゼットの右腕を掴む。

「舐めるなよ、小娘エ！」

「！」

腕を拘束してからの膝蹴り！

それがガード越しにリゼットの腹にめり込み、吐血させた。

続く第二撃。

しかし腕を掴んでいるというのに、まるで操られるように身体が浮いた。

自らを掴んでいるものを逆に、掴まれている部分を支点に投げ飛ばすという不可

思議。

だが最早クウラに動揺はない。この女との戦いでいちいち驚いてはキリがないと学んだ。

宙に浮かされたクウラへ、リゼットは瞬間的にバーストリミットを40倍に跳ね上げてからの気円斬を発射。しかしクウラは角のように鋭角化した頭部の突起を切断されながらも距離を詰めて拳の連打を放った。

その悉くをリゼットが避け、カウンターを決めるもクウラは止まらない。

多少の抵抗などものともしないだけの戦闘力とフィジカルの差があるのだ。

しかしその直後、避けたはずの気円斬がクウラの背中に突き刺さったことで彼の攻勢は止まった。

何の事はない。あえて避けさせた気円斬を遠隔操作でブーメランのように戻してクウラを後ろから強襲させただけだ。

高速回転する気の円盤がクウラの背中を切り裂く。

アーマーのように変化した身体を裂き、血飛沫をあげながら深く深く食い込んでいく。

「ぐ……舐めるなァ！」

「な……！」

しかし今度はリゼットが驚愕させられる番であった。

確かに決まったはずの気円斬が、しかしそれ以上進まない。

クウラは決して、何か特別な事をしたわけではない。

ただ単純に、力んだだけ……あろう事かこの男は、隆起させた筋肉だけで気円斬を食い止めてみせたのだ。

「俺は……愚弟^{フリーザ}とは違う！」

クウラの全身から気が放たれ、リゼットを直撃した。

その一撃でリゼットがよろめいた隙に跳躍し、空へと飛ぶ。

逃走？ 否、これから始まる最大の攻撃の準備だ。

クウラが虚空に手を掲げると炎の如き気弾が生成され、それが一気に膨れ上がる。

「俺が宇宙最強だ！」

恒星の如き熱量とエネルギーを誇るその技の名を『スーパーノヴァ』。

その名の通り超新星にも匹敵する破壊力を秘めたクウラ最大最強の切り札だ。

この女は危険だ。己の最強の誇りをも揺るがしかねない。否、実際揺らいでいる。だからここで殺す。跡形もなく消し飛ばす。

この惑星にいる愚弟諸共、宇宙の塵へと変える！

惑星ごと消し飛ばす破壊の極光。それがナメック星目掛けて無慈悲に解き放たれた。

ナメック星「俺がー！ 俺そのものがー!？」

ドーレ「クウラ様！ 俺等もこの星にいますけど!？」

ネイズ「助けてくれー!」

サウザー「て、帝王に逃走はないのだ!」

追いつめられれば星ごと壊せばいい。それがフリーザ一族クオリティ。

第三十五話 激神フリーザ

感想欄「タイムパトロールさっさと来い」

パトローラー「分かりました、今行きます！」

(……やるしかない！)

ナメック星へと降下する炎の塊を前にリゼットが取った手段は気を最大——否、最大以上に高めての迎撃であった。

ゲートに呑み込み相手に還すという選択もあった。

だがあれだけのサイズの気弾を呑み込むゲートを創るには僅かなりとも時間がかかる。

それは時間にして1秒にも満たない間であるが、その一秒の時間があればあの火球はナメック星に衝突し、そしてこの惑星にいる悟空達を消し去ってしまうだろう。

だが今必要なのは、即座に使える迎撃手段だ。

「バーストリミット……オクトーギンター！」

今の限界倍率である40倍。それを更に倍にして瞬間的に戦闘力を80倍にまで跳ね上げた。

全身にかかる負荷が洒落にならない。

血管が破裂するのが分かる。心臓が五月蝍いくらいに脈打ち、胸が貫かれたように苦しい。

骨が軋む。口から血が零れる。

だがリゼットはその全てを無視した。必要な代償と割り切った。

「あああああああああああー！ーッ!!」

吐血混じりの叫びを上げ、白の極光が溢れる。

光の柱が空を貫き、ナメック星の暗雲を晴らす。

限界を超えて無理矢理絞り出した気。その全てを掌へと凝縮し、流星の如き輝きを生み出す。

「Sparkling Meteor！」

真紅の超新星に対抗するのは純白の彗星。

かつてドクターウイローに放った『スパーキング』を発展強化させた大技だ。

クウラのスーパードヴァにも匹敵する巨大な光球が生成され、二つの大エネルギーの衝突エネルギーが辺り一帯を余波のみで破壊し尽す。

瞬間的とはいえ、リセットが発した気は戦闘力数値にして4億9千5百万。クウラの最大戦闘力である4億7千万を上回り、その気全てを込めた白の輝きもクウラのスーパードヴァを上回る。

ジリジリと白の光弾が真紅の光弾を押し返し、クウラへと近付いていく。

「こっ、こんな……こんな事で、俺が……ッ！」

クウラは必死に己の腕力で光弾を押し返そうとする。

ここで回避という手段を取ればまだ結果も違ったのだろう。

しかしそれは、彼の最強としてのプライドが認めなかった。

むしろ、これだけの大エネルギーを僅かとはいえ腕力で抑えられる時点でおかし
いと言えないし、彼は称賛されるべきだろう。

しかし彼の超パワーをもつてしても、自ら放ったスーパードヴァすら含めた二つ

のエネルギーは押し返せない。

凄まじい勢いで押しやられ、空を越え、大気圏を越え、あっという間に宇宙空間へと追放される。

それでも尚止まらず、背後に見えたのは……ナメック星に三つあるという太陽のうちの一つだ。

クウラは自ら生成したスーパーノヴァとリゼットのスパークキング・メテオ。それと太陽に挟み込まれる形となってしまうのだ。

「こ、んな……事……があ……」

想像を絶する熱さと激痛の中、クウラはそれでももがく。

凡そ生物では耐えきれないだろう焦熱地獄に身を焼かれ、骨の髄まで炙られ、ロボロと身体が炭化しては崩れていく。

それでも尚、彼の心は敗北を認めようとしなかった。

この期に及んで感じるのは、死への恐怖ではなく敵への憎悪。しがみつくのは生ではなく、最強の矜持のみ。

それを支えとして、クウラは炎の中で意識を繋ぎとめる。

その生と死の狭間……刹那の一瞬にクウラは、過去を垣間見た。

かつてフリーザが惑星ベジータを滅ぼしたあの日、フリーザが取り逃がしたポッドをクウラは把握していた。

その行き先も、知っていたはずだった。

『行き先は地球とかいう惑星か。撃ち落とせ』

『放っておけ。自分で蒔いた種だ。自分で刈らせろ。』

フリーザも……まだまだ甘い』

クウラは、フリーザに甘さを思い知らせるためにあえてそのポッドを放置した。
だが……今になって思う。

何故あの種の行き先をもっと調べなかった。地球という惑星の事を調べようとするしなかった。

どうせ大した生物のいない辺境の惑星だと高を括っていた……自分達の脅威になるような存在がいるなどと、予想もしていなかった。

だがあの時少しでも調べていれば……いや、あの時にガキを撃ち落として、地球を念入りに破壊しておけば……！

——甘かったのはフリーザだけではなかった……。

——甘かったのは……！

その思考と悔いを最後に、クウラの肉体は完全に消滅した。

「……はあ……は、あ……っ」

リゼットは力なくよろめきながら思う。

強かった……本当に手強い相手だった。

思えば初めての、格上との真剣勝負。今までの戦いは全てリゼットが相手より圧倒的に勝っており、多少の苦戦はしても本気を出せば勝てる勝ち確の戦いでしかなかった。

だが今回は違う。苦しい戦いだったし、現在進行形で苦しい。

だがいい経験をさせて貰った。気、身体能力、体格、体力、強度。その全てにおいて自分を勝る相手との戦闘経験はこれ以上ない財産になる。次に活かす事が出来る。

（こ、これで、クウラは倒し、た……後は、悟空君達とごうりゅう、して……いっ

しょ、に……フリー……ザ……を……)

強敵はまだ残っている。むしろこのナメック星の戦いにおける本番はあくまでフリーザとの戦いであり、クウラは何故か沸いて出てきたイレギュラーだ。

だから、もう少し頑張らねばならないというのに……。

(あ、れ……？ からだ、うごかな………。

めのまえ、が……まっくら、に………)

限界を超えた反動。

いかに自己治癒能力を持つといえど、限界以上に振り絞った気はそう簡単には回復しない。

むしろ死んでもおかしくない。悟空は限界出力の倍を出して全力でかめはめ波を撃った後に普通に動いていたりするが、あんなのはサイヤ人だから出来る事だ。

加えて言うならば悟空には未だ覚醒していないものの超サイヤ人という変身がある。

あの変身までもを潜在能力に計算するならば、つまり彼には界王拳で絞り出す『出元』があるのだ。

何もない所から気を振り絞っているわけではない。確かに自分の中に存在する可能性から引き出している。

だがリゼットにそれはない。何もない所から無理矢理出してしまったのだ。

その代償がこれだ。限界を超えた身体は指先一つすらも動かず、力なく膝を突く。重く下がった瞼はやがて完全にその瞳を隠し、幼さを残す身体は音もなく地面に倒れ伏した。

「お？ 何だこいつ」

「小娘がこんな所で寝てやがるぜ、ケケケケツ」

どれだけの時間が経過したのだろうか。

未だ地面に倒れ、眠り続けるリゼットのもとへ最悪のタイミングで3人の男が訪れた。

名をアンギラ、ドロダボ、メダマツチャ。

悪のナメック星人であるスラッグの部下にして極悪非道の魔族達だ。

メダマツチャはケラケラと笑いながら倒れているリゼットを蹴るが、まるで反応

がない。

死んではいないが、完全に意識が落ちている。

「おい、どうするよ、これ」

「持ち帰ってみるか？　兵士の玩具くらいにはなるだろう」

「ケケケケッ、それなら俺が遊んでいいか？」

もしも彼女が目覚めたならば、それこそ虫を払うように殺されてしまうだけの実力差が存在する。

だがそんな事を知る由もない魔族達は口々に勝手な事を言い、身動き一つ取らない少女を回収しようと手を伸ばした。

刹那——リゼットを掴もうとしたメダマツチャが二つに『割れ』、更にその全身が細切れとなる。

「え？」

「メ、メダマツチャ!？」

突然の惨劇に仲間の魔族達が慌てふためく中、そこに一人の人間が姿を現す。黒いコートに身を包んだ、銀髪的美青年だ。

彼はその手に剣を携えており、今のメダマツチャの死も彼の神速の剣によって為されたものだと分かる。

「おい、貴様等……その人に汚い手で触れるな」

「何だ、こいつ……!？」

「知るか！ とにかく消すダボ！」

アンギラとドロダボは青年を挟み、同時に飛びかかる。

だが瞬間、青年が“変わった”。

銀色の髪は逆立ち、黄金となる。

その全身からは金のオーラと青白いスパークを噴出し、先ほどのリゼットやクウラですら霞むほどの圧倒的な気を放ち青年は剣を振り抜いた。

一閃。

少なくともアンギラ達はそうとしか見えなかっただろう。

だが実際は刹那の間に百を超える斬撃が放たれており、それすら認識出来なかった彼等は自分達がバラバラに分割されてしまった事にすら気付けない。

気付いた時には既に死んでいる。それだけの力の差がそこにはあるのだ。

雑魚3匹を始末した青年は収刀し、変身を解く。

「ふう……よし、誰にも見られてないな。」

誰かに目撃されてしまったら、時の界王神様にまたどやされてしまうからな」

青年は慎重に周囲の気を探り、誰もいない事を確認する。

それからリゼットを抱えると付近の洞窟にまで走り、コートを脱いで地面に敷く。そして、そこに彼女を横たえ——光に包まれると同時に姿を消した。

★

「グウ……オオ、オ……」

大地を揺らし、大猿が倒れる。

ここまでフリーザを相手に健闘していたターレスだが、遂にフリーザの猛攻の前に屈したのだ。

互いの実力差を思えばここまでよくもったほうだろう。

フリーザはターレスの尻尾を掴むと、力任せに振り回して放り投げた。

更に気弾を発射してパワーボールを破壊し、ターレスを元に戻す。

これで元々少ない勝ち目が更に減少した。

といってもそれは、万分の一の勝ち目が億分の一になった、というどのみちどうしようもない勝ち目であるわけだが。

「ふん、猿など敵じゃないんだけど見た目が醜くて目障りだからね」

人間の姿に戻ったターレスはその言葉に悪態を吐く事も出来ない。

散々に打ちのめされた彼の身体はもう限界であり、余力がないのだ。

そんな彼を一瞥もせずに、フリーザは空を見上げる。

視界に映るのは今までと変わらぬナメック星の空だが、確かに先程、太陽が二つに増えたかのような火球が見えた。

あれは紛れもなくクウラのスーパーノヴァであり、それには流石のフリーザも肝を冷やしたものだ。

しかしそれがナメック星を砕く事はなく、柄にもなく安心してしまった。

（クウラめ……偉そうな事を言っておいて結局あいつもドラゴンボールを狙っているわけか。

そうでなければ攻撃を止めるはずがない。

だがドラゴンボールで不老不死になるのは、このフリーザ様だ）

フリーザは、クウラが敗れたなどと考えていない。

それも仕方のない事だろう。気に入らないがクウラはかなりの実力者だとフリーザでも認める他ない。

それが負けるはずがないし、ならば攻撃を止めた理由はドラゴンボールの破壊を恐れたからに他ならない……と考えてしまう。

しかしいい情報だ、とフリーザは思った。

とりあえず、クウラがすぐに星ごとドラゴンボールを壊してしまう事はないらしい。

「どうやらここまでのようだね。いい運動にはなったかな」

フリーザはパンパン、と手をはたとターレスへ手を翳す。

だが横から飛んで来た気弾に反応し、そちらを手で払い落とした。

視線を向ければ、そこには何故か妙に自信に満ちた顔のベジータが立っている。

先ほどまでガクガク震えていたくせに、一体何故あんなにも得意気なのだろうか。

そう思い、フリーザは少しだけベジータへと興味を抱いた。

「ベジータか。これだけの差を見せてもまだ歯向かってくるとはね。

余程死にたいと見える」

「ふん、そうやって今のうちにヘラヘラ笑っていやがれ。

ここにるのが貴様の最も恐れていた超サイヤ人だ！」

「超サイヤ人？ ふっふっふ、相変わらずジョーダンきついね」

馬鹿にしたように笑うフリーザに、ベジータもまた同種の笑みを返す。

その表情にはサイヤ人の王子としての自信と勝利の確信が溢れ、気の高まりに応じて大気が鳴動した。

瀕死パワーアップを幾度も繰り返した今、ベジータの気はターレスすらも上回り、遠くに避難していたクリリンと悟飯が戦慄するほどだ。

「カカロットの出番はないぜ！」

ベジータが飛翔し、フリーザへと肉薄する。

フリーザは腕を組んだまま姿を消すが、ベジータはすぐにその動きを視界に捉えた。

戦闘力が上がるという事は速度も上がるという事。今ならばフリーザの速度といえど捉えられないほどではない。

「見えているぞ！」

ベジータが猛接近し、手刀を振り下ろす。

だが――不発。

フリーザがまたも姿を消し、ベジータの攻撃が空振ったのだ。

それは先ほどと同じ事であり、唯一違うとすればフリーザの速度だ。

先ほどは確かに見えた筈のフリーザの動きが、今度はまるで見えなかった。

「はっはっは、少し速度を上げただけで付いてこれないようだね。それでも超サイヤ人なのかな？」

これならまだ、そこで転がってる奴の大猿の方がマシだったよ」

「ば、馬鹿な……」

ベジータの現在の戦闘力はスカウターで計ったならば、300万を超えていただろう。

だが、そこが瀕死によるパワーアップの限界であった。

ベジータは知らない事だが、サイヤ人のこの特性はある変身の条件を満たす為の補助輪のようなものだ。

その条件の一つが戦闘力300万であり、瀕死パワーアップとは要するにそこに届く為の機能に過ぎない。

つまり逆に言えば300万を超えてしまった時点でこの機能は意味を失い、ほとんど戦闘力が変わらなくなってしまうのだ。

伝説の中にこんな一節がある。『どんな天才戦士も超えられない壁を越える天才』と。

まさにここが、その境界線。

『どんな天才戦士も超えられない』と述べられている300万の壁なのだ。

たとえ凡才であってもサイヤ人なら誰でもここまでは来れる。何度も死にかけて復活し、それを繰り返し返せばこの領域に至る事は誰であろうと可能なのだ。しかしここからは違う。

ここから先は死にかけて復活するだけでは超えられない。特別の壁は特別にならねば突破出来ない。

界王拳や大猿化など、それを超える手段はいくつか存在するも、ベジータはその二つとも有してはいなかった。

ベジータは強くなるために仙豆を全て消費しての瀕死パワーアップを図ったが、実はそれも300万を超えて以降は全くの無意味であり、ただ無駄に死にかけては仙豆を食っただけでしかない。

「こ、こんなものなのか……？　ここが俺の限界なのか？

う、嘘だ……俺は超サイヤ人になったはずなんだ……。

俺は、俺は……俺は超サイヤ人だーッ!!」

ベジータは現実を直視出来ずに己こそが超サイヤ人だと叫ぶ。

彼の不幸は、戦い漬けの日々ばかりを送っていたことだ。

ベジータは戦いを好み、殺戮と血を好み、残酷で冷酷な、まさにサイヤ人らしいサイヤ人だ。

王子の名に恥じず、誰よりもサイヤ人という存在を体現してきたと言っている。悟空のような甘さはなく、穏やかさとも無縁で、子供の頃からずっと闘争の中で生きてきた。

だが、それでは駄目なのだ。

誰も解き明かせない超サイヤ人のメカニズム……何故サイヤ人は超サイヤ人へ変

身出来るのか。

そこには、サイヤ人の身体の中にある『S細胞』が大きく関わっている。

このS細胞の量が一定値を上回ること、サイヤ人は次のステージへ進む事が出来る。

300万の戦闘力は扉の前に立つ『資格』であり、そしてS細胞は扉を開く為の『鍵』だ。

ベジータは資格を得た。彼は今、伝説へと至る扉の前に立っている。

だが……鍵を持っていないのだ。

S細胞の量が絶対的に、彼には足りていない。

S細胞は、穏やかになる事で増やす事が出来る。

というより、穏やかでなければ増えてくれない。

これが戦闘を好むサイヤ人にとっての最大の落とし穴だ。

血と殺戮を好む戦士になるのに、必要な条件として正反対の穏やかさを求められる。こんな意地の悪い事があるだろうか。

だから誰も覚醒出来なかった。

ベジータを始めとして、サイヤ人は穏やかさなどとは無縁の存在だったからだ。一度穏やかになり、S細胞が増えた後に激しい怒りを引き金として伝説への扉を開く。

そうする事で初めてサイヤ人は黄金の戦士へ至る事が出来るのだ。

無論、これにも例外はある。

極稀に……それこそ1000年に一度という奇跡に近い確率で、生まれながらに大量のS細胞を保有した子供が生まれる事はある。

生まれながらの有資格者。最初から扉を開いている選ばれた者。

それこそが伝説の超サイヤ人だ。しかしベジータはそうではない。

また、親が超サイヤ人へ覚醒済みならば、その素質が子供に遺伝する事もあるだろう。

最初から超サイヤ人に必要な量のS細胞を保有して生まれた子供は、戦闘力が足りずとも、些細な怒りを切っ掛けとして呆気なく超サイヤ人へ変身してしまうかもしれない。

だがベジータはそうではない。

もしもベジータが、ここに至るまでに少しでもそうした心を得ていればまだ話は違っただろう。

敵に情けをかける。親兄弟を大切にする。仲間を大事にする。

そして心を静かに保つ。

それらの事を少しでも考えていれば、ほんの少しでも優しさというものを得ていれば、彼はただだけで大量のS細胞を獲得する事に成功したかもしれない。

己の弱さを自覚し、限界を自覚して、その弱さに憤る事が出来たならば……あるいは本当に限界の壁を超えて超サイヤ人として覚醒出来たのかもしれない。

そうなれば、彼はフリーザを倒す事が出来ただろう。

少なくとも条件の一つは満たしていたのだ。可能性は確かにあったのだ。

「くたばれフリーザー!!」

だが彼は逃避した。こんなものではない、違う、自分の限界はここではないと己から目を背けた。

これでは怒りなど抱けるはずもなく、最後の鍵を外すには至らない。

S細胞が増えるはずもない。

資格は持っているのだ。鍵穴の前に立っているのだ。

だが鍵がどこにあるか気付けない。逃避して探す事すら止めてしまった。

鍵穴を見ずして、そこに鍵があると理解出来るわけもない。

資格はあった——だが、それだけであった。

ベジータの全力を込めた逃避の気弾がナメック星の地表へと迫り、クリリン達が慌てる。

だがフリーザは軽く跳躍し、その気弾をただの蹴りで跳ね返してしまった。

「……あ、あ……」

その瞬間、ベジータの心は折れた。

ベジータは生まれて初めて心の底から震え上がった。真の恐怖と決定的な挫折に……。

恐ろしさと絶望に涙すら流した。これも初めての事だった。

ベジータは既に戦意を失っていた。

確かに資格は持っていた。

だが開ける意志すら失ってしまったてはもう終わりだ。

ベジータは鍵穴の前に立ったまま——限界の扉を開ける事も出来ずに、開ける事そのものを放棄してしまったのだ。

「どうやら戦意を失ってしまったようだね。それじゃちょっと早いけど、止めを刺しちゃおうか」

フリーザがベジータへと止めのデスビームを発射した。

ベジータはそれを避ける気力もなく、このまま命を奪われるのだとその場の誰も思った。

だがベジータの前に割り込んだ男がビームを受け止め、フリーザの前へと立ち塞がる。

「サイヤ人を……舐めるなよ……！」

それは死の淵から復活したナツパだ。

一度死にかけた事により彼の戦闘力は爆発的に上昇し、今のベジータほどまでは行かないが先程までとは比べ物にならないパワーアップを果たしていた。

全身をスパークが覆い、気の圧力によって大気が歪む。

「ベジータァ！ 何をボサっとしてやる！」

俺がブン殴りてえお前はそんな腑抜けじゃねえはずだ！」

心の折れてしまったベジータへ檄を飛ばし、ナッパは単身でフリーザへと立ち向かった。

実力で及ばぬ事は百も承知。

だがそれでも、時間を稼ぐ事は無意味ではない。

時間さえ稼げばリゼットが必ず、フリーザの兄とやらを片付けて戻って来る。

そこまで持ちこたえれば勝利だ。

だから、この身を盾にしても稼ぐ、守る。

その為にナッパは捨て石になる事を決意し、その身を盾としてフリーザの前に晒していた。

「ナッパ……僕の恐怖を忘れてしまったようだね」

「おおよ！ 生憎と出来のいい頭じゃねえんでなあ！

どうでもいい事はすぐに忘れちゃうのさ！

俺は、何が何でもお前から……こいつ等を守ってやるって決めたんだよお！」
やらせない、殺させない。

やっと見付けた居場所なのだ。

ここが俺の居場所だと、そう胸を張って言える場所をようやく見付けたのだ。だからフリーザなどに奪われてたまるか。

その決意のもと、丸太のような腕で突きの連打を放つも、フリーザには掠りもしない。

そればかりかお返しとばかりに放たれた蹴りの一発でナツパの身体がひしゃげ、何かが折れるような不吉な音を響かせて大地に沈んだ。

「何が何でも……だっけ？ 大口の割には全然大したことないね」

ターレスの気概も、ベジータの矜持も、ナツパの決意も。

全てがフリーザにとっては塵芥だ。何ら心には響かない。

ただ万物を絶対の力で蹂躪し、破壊する。

だから彼は、宇宙の帝王なのだ。

謎のイケメン「読者の皆さん、安心して下さい。」

この超最高イケメンのとてつもなく凄まじすぎる真のサイヤ人の戦士であるこの僕がいる限り、薄い本展開になどさせませんから！

頼もしすぎる……頼もしすぎるんですよ、僕は！」

【戦闘力】

・ナッパ…24万↓150万

・ベジータ…290000↓300万

※仙豆複数消費

【S細胞】

近年になって生えてきた新設定。

穏やかでないとS細胞は増えず、超サイヤ人にはなれないらしい。

ベジータが人造人間編で覚醒できたのはやはり、ブルマのおかげで少しだけ穏やかさを得たからだろうか。

【超サイヤ人への資格】

300万ないと超化出来ないのは、このSSの独自設定であって公式設定ではありません。

まあ超化するのに高い戦闘力が必要とは長年考察サイトなどで言われていたことではありますが。

【Sparkling Meteor（スパークキングメテオ）】

リゼットの技。

ウイローに使ったスパークキングの超強化版であり、特大の気弾を投げつける。

スーパードヴァと同系列の大技。

気弾は放出し続ける気功波と異なり、一度完成させてしまえば本人の戦闘力が下がっても威力が下がる事はないので一瞬だけ戦闘力を上げるバーストリミットとの相性はいい。

一瞬だけ倍率を上げてこの技を完成させてすぐに倍率を下げるという使い方をしたが、それでもリゼットはHPが低いのでダウンしてしまった。

Q、ブローリーとかセルとかブラックとか、明らかに300万より上なのに瀕死パワーアップしてるけど？

A、あ、あいつらは特別だし……（目逸らし）

とりあえずこのSSではそういう設定でやっていきます。

第三十六話 最強のナメック星人

死体が散乱していた。

無造作に転がるその遺体は見るものが見れば驚愕に顔を歪めるだろう。

何せそこに倒れているのはどれも、宇宙で名を知られた恐怖の戦士達なのだから。名をギニュー特戦隊といい、帝王フリーザの片腕として恐怖を振りまいてきたエリート中のエリート。

それが4人、無造作に屍を晒しているなど一体誰が信じられる。

それを為した者達の名はクウラ機甲戦隊。ギニュー特戦隊と同じか、それ以上に名を知られる精鋭達であり、人数こそ3人と少ないが全員がギニューを上回る強者の集まりだ。

特戦隊と機甲戦隊。長年に渡り互いをライバル視していた二つの組織だが、実際に激突してみれば勝敗はあまりに呆気なくついた。

そもそも戦闘力にして5万前後の特戦隊では一人すらも倒せるわけがなく、多少厄介なギニューは二人でかかればどうにでもなってしまう。

ボディチェンジ能力とて最初から知られてしまっていては脅威にならず、使う間を与えなければそれでいい話だ。

正史においては、戦闘力18万の悟空に手も足も出ずにボディチェンジを使うことでかろうじて勝利したのだ。

ならば、それと同等の実力者が3人いる上に、ボディチェンジという能力を事前に知っている機甲戦隊に勝てる道理はなく……この結果は最初から分かり切ったものでしかなかった。

特戦隊にも可能性はあった。グルドを連れてきていけば、彼の時間停止と金縛りの術を駆使する事でチェンジに成功したかもしれない。

そうして身体を取り換えつつ戦えば特戦隊にも勝ち目はあっただろう。

特戦隊と機甲戦隊が互角というのはあながち間違いではない。だがそれも、グルドを含む5人が揃っていればこそその話。

グルドを欠いたこの四人では、勝ち目などない。

かくして長年の因縁はあまりにも簡単に終わり、宿敵を屠った機甲戦隊はスカウターに反応している妙な気を調査するべくその場を離れた。

だがその機甲戦隊もまた、遠く離れた場所で屍と変わっていた。

このナメック星で行われている二つの戦闘……フリーザとサイヤ人達。そしてクウラとりゼット。

そのどちらにも参戦せずに佇んでいる戦闘力反応を追い、こんな所まで来てしまったのが不味かった。

そこにいたのはナメック星人であり、機甲戦隊はドラゴンボールについて聞き出すべくそのナメック星人を襲撃した。

だがそのナメック星人は他のナメック星人と決定的に異なる悪のナメック星人、魔族だったのだ。

老体と思って舐めてかかった3人はスラッグによって容易く屠られ、今では物言わぬ死体として地面を転がっている。

「何だったのだ、この雑魚共は」

スラッグはそう呟き、玉座に座ったまま辺りを見回す。

偵察に向かわせた部下3人は未だ戻る気配もなく、いつまで経ってもドラゴンボールが手に入らない。

今襲撃してきた連中もドラゴンボールの事を知っていた事から推測するに、今の惑星ではドラゴンボールの争奪戦が行われているのだろう。

だとすると、今も遠くで戦っている連中の誰かがボールを所持しているという事になり、偵察に出した3人は役立たずにも殺されてしまったと見るのが妥当だ。

他の兵士も全滅してしまった。せっかくこの星を雲で覆ったのに、つい先程に立ち上った光の柱が雲を消し飛ばしてしまったのだ。

元々ナメック星人であるスラッグはともかく、彼の部下達は陽光の下では一時間と生きられない。

降り注ぐ光に怯えて、慌てて引き返してきた部下達を『それでも俺の部下か』と気功波で消し飛ばし、ついでに、あの程度で消し飛ぶ突貫工事しかなかったカークジャは処刑しておいた。

「ふん、俺自身が動かねばなるまいか」

スラッグが重い腰をあげ、ゆっくりと立つ。

彼には己こそが強者であり支配者であるという自負があった。

実際それは間違いではない。彼の強さは破格だ。

宇宙の中でも最強クラスの精鋭のみを集めたギニュー特戦隊。その特戦隊をも凌駕する機甲戦隊。

そしてその機甲戦隊すらも容易に壊滅してみせたのがこのスラッグだ。

だが上には上がいる。頂点に立ったと思っても、実際はそこが入り口に過ぎない事もあるのだ。

スラッグも同じだ。彼は今まで負けた事などない。手こずった事すらもない。だがその彼ですらこの惑星で今起こっている戦いから見ればいい所中の上程度であり、フリーザやクウラには到底及ばない。

死の連鎖は止まらない。己の実力と敵の強さを見誤った者から先に死んでいく。彼が次の犠牲者となるのも、そう遠い未来の事ではないだろう。

★

「……………ん」

洞窟の中で、リゼットは目を覚ました。

頭はボーっとしており、すぐには現状を把握出来ない。

ただ、身体が酷く痛む事だけは分かった。

試しに指先を動かそうとするも、指すら動かない。

（ゲートは……駄目ですね。ゲートを開く力すら残ってませんか）

亜空間を開く事が出来れば、そこに収納してある仙豆を超能力で運んで口に入れる事も出来たのだが、それも出来ないのでは自然回復を待つ他ない。

クウラ戦で仙豆をケチったのは少しミスだったかもしれないが、しかし乱用できない以上使いどころが難しいのも事実だ。

何も勿体ないというだけの理由で使用しなかったわけではない。

仙豆は回復機能ばかりが注目されて忘れられがちだが、一粒食べるだけで10日は食べなくてもよくなるほど腹が膨れてしまう。

大喰らいのサイヤ人ならば一日に何度食べても平気なのかもしれないが、リゼットは無理だ。

一粒食べただけで、しばらくは文字通りお腹一杯になる。

一日に二粒以上は狂気の沙汰と言っている。確かに回復はするだろうが、間違いなく気持ち悪くなって戦いどころではなくなってしまふ。

つまりリゼットは、仙豆を使うタイミングを間違えればしばらく仙豆の恩恵にあ

やかれなくなるのだ。

なので使う時は本当に危なくなった時だけと決めているが、今回はそのタイミングを見誤った。

バーストリミット80倍と同時に食べておけばまだマシだったろうに……思えば、限界をあそこまで超えたのも初めての事だった。

悟空とか10倍が限界の時期に100倍界王拳とかやってるのだから、自分だってちょっと限界を超えても仙豆を食べる程度の余力は残ると思っていたのだ。

しかし結果は、まさかの即気絶である。悟空に比べて驚くほど耐久力がない。この経験は今後に活かせるが、勉強代は安くなかったという事か。

今リゼットに出来る事は寝転がったまま気を感じずる事と、呼吸する事。後は考える事くらいだ。

（それにしても、あの後どうなったんでしょうか……クウラを倒した所までは覚えてるんですが、何で洞窟で寝てるのが全く分かりません。何か下に敷いてくれているみたいですし……。

状況的に見て私があの後気を失ったのは間違いないとして、誰かが運んでくれ

た……？)

今のナメック星にナメック星人はいない。居るのは彼女の仲間達と極悪人だけだ。

ヤムチャかクリリン辺りが戦闘に加われないからとこちらに来て運んでくれた可能性も考えたが、仲間達の気は全てあの場所から動いていなかった。

流石に現状最大の戦力である自分に仙豆も食べさせずに洞窟に放置して帰ったとかはないだろう。

遠視で戦況を視る。

頼みの綱である悟空は未だ気絶中であり、ターレスもダウンしている。

ベジータは戦闘力が数値にして300万前後に上昇しているが、やはり結果は変わらなかったらしくフリーザのサンドバッグにされていた。

フリーザの悪癖が出てしまっているようで、その気になれば一思いに全滅させる事も可能なのをジワジワとなぶり者にしている。

しかし皮肉にもそのおかげで多少の時間が稼げており、ベジータには悪いがもう少しだけ頑張ってもらいたいとリゼットは考えた。

（とりあえず、悟空君に呼びかけてみますか）

身動きが取れず、気も枯渇していようと念話くらいは飛ばせる。

リゼットは未だ気絶している悟空へと念話で呼びかけ、目覚めを促す事にした。とりあえず、まずは悟空が起きてくれないと話にならない。

このままフリーザがベジータを殴る事に飽きてナメック星を消してしまえば、全員纏めて死んでしまうのだ。

リゼットならば運がよければ生き残るかもしれないが、今のダメージが残った状態では星の爆発程度でもやはり死ぬだろう。

この俺が星の爆発くらいで死ぬと思っているのか？ はい、死にます。

だから、ここは主人公に頑張ってもらえないのか。

この状況をどうにか出来るとしたらそれは悟空だけだ。

今だってスラッグが登場してドラゴンボールを寄越せとフリーザに詰め寄っているが一撃で倒されてしまっている。というかこいつ何しに来たんだ。

（あ、巨大化して気が膨れ上が……あ、駄目だ。やっぱり一撃で負けた）

巨大化してもスラッグの戦闘力は精々400万程度である。ただのでかいサンド

バグだ。

残念ながら彼に関しては時期とタイミングが悪かったと言うしかない。

もう少し前に登場していれば恐るべき敵だったのだろうが、このナメック星ではちょっと強い敵でしかないのだ。

（……あ、待って下さい。もしかしたらいけるかも？）

だがリゼットはふと、スラッグの有効活用方法に気が付いた。

そうだ、彼は超ナメック星人だ。

なら、もしかしたらアレが出来るのではないだろうか？

多分ピッコロとの相性もそう悪くないだろうし、現状を打開する一手になるかもしれない。

非道な方法ではあるし、だからこそネイルの同行は断った。

しかしスラッグならば話は別だ。

リゼットは、ネイルという善人を消す事を躊躇って最善手を逃してしまう程度の善性の持ち主である。

しかし同時に、かつてナツパを処刑しようとした事例から分かるように、悪党相

手ならば割り切ってしまう程度には合理的でもあるのだ。

(よし、そうと決まればまずは……)

★

ピッコロは屈辱に拳を握り込んでいた。己のあまりの弱さに怒りすら感じた。リゼットの下で修行を受けて強くなったと思った。

最長老に潜在能力を解放されて更に高みに至ったと思った。

だが現実はどうだ？ フリーザを前に挑む事すら出来ずにいる。

今もベジータをいたぶっているフリーザに何も出来ないでいる。

ベジータが嬲られている……別にそれはいい。奴も地球とナメック星の敵だ。どうなるうが知った事ではない。

だがピッコロが許せないのはベジータを救えない事ではなく、恐怖から動けないでいる事だった。

どの角度から、どのタイミングで仕掛けても返り討ちに遭う自分の姿が想像出来てしまう。

途中でスラッグとかいうナメック星人が割り込んで来たが、あれと同じ末路を辿

るのは火を見るよりも明らかだ。

そんな時、彼の脳裏に声が響いた。

（ピッコロ……聞こえますか？）

（！ 神か！ 貴様今どこにいやがる!?）

（すみません、クウラとの戦いで力を使い過ぎました。しばらくはそちらに向かう事が出来ません）

（何だと！）

こちら側で唯一フリーザに勝利出来る戦力がリゼットだが、彼女はあろう事か動けないと言いつ出した。

ふざけるな、と思う。そんな悠長にしていたら皆殺しにされて最期はこの惑星も破壊されて終わりだ。

だが彼女として何も考えずに念話を送ってきたわけではない。

一応逆転の手段くらいは考えているのだ。

（ですから、貴方が時間を稼いで下さい）

（出来るならそうしている。だが……）

（大丈夫、方法があります。スラッグと“同化”すればあるいは、フリーザに匹敵する戦士になれるかもしれません）

同化。その言葉がピッコロはあまり好きではなかった。

ピッコロは元々は一人だったナメック星人が悪と善に分かれた存在だ。

ピッコロにとっての同化とは先代と一つに戻る事であり、しかしそんなのはピッコロにとっては御免だった。

相手が違うといえど、どうしても嫌悪感を覚えてしまう。

（ふざけるな。俺は俺のままでもいい。人格まで同化するのとは御免だ）

（ベースを貴方にすれば人格は貴方のままです。同化対象は切っ掛けでしかありません）

（……本当だな？ 少しでも気に入らなければすぐに追い出すぞ）

（ええ、それで構いません）

ピッコロは己の弱さが許せなかった。

どうしても今、力が欲しかった。

このままでは自分達全員、それに悟飯も殺されてしまう。

それを止める為に必要だというのなら……あえて吞もう、その条件を。

同化という禁忌を。

（問題は、同化はベースとなる方が相手に手を当てて、取り込まれる側が同意した上で相手に向けて全エネルギーを放出する事なんです……こればかりは相手の協力がないと難しい事です）

（そんな事か。それならば簡単だ）

リゼットはいかに相手の協力を得るか、と考えているようだがやはり変な所で甘い。

どうせスラッグは敵なのだ。そんなのに同意を求める必要などない。

ピッコロは倒れているスラッグの前にしゃがむと、その胸に手を当てた。

「おい貴様。ドラゴンボールを探しているという事は俺達の敵だな？」

ならばこのまま消されても文句は言えまい」

「なっ……!!? ま、待て！」

「待ってやってもいいが、条件がある」

「条件だと？」

「そうだ。俺と同化しろ。」

それでもしフリーザの野郎に勝てたなら、貴様も殺さずに生かしておいてやる」
「し、しかし……」

「安心しろ、俺も貴様のような奴と同化したままにいるのは御免だ。用が済んだら
追い出してやる」

ピッコロが取った方法、それは脅しだった。

協力せねば殺す。協力すれば生かしてやる。

単純な二択だが、それだけに効果的だ。

実際、ピッコロが勝てば同化した彼は生き残るのだから嘘も吐いていない。

何とも口の回る事だ、トリゼットは感心した。

そして追い出してやるという言葉に嘘はない。ピッコロは本心からそう言っているし、かつて先代と大魔王が分離した事を考えれば分離は決して不可能ではないのだろう。

何ならドラゴンボールを使うという選択肢もある。

スラッグは読心の能力を持つがゆえに、それがよく分かった。

「ほ、本当だな？ 見逃してくれるんだな？」

「ああ。嘘は吐かん」

「い、いいだろう……儂のエネルギーを貴様にくれてやる」

スラッグはきつとこう考えているのだろう。

とにかくまずは今を凌ぐ事だ、と。

とりあえずここは協力して生を拾い、その後で態勢を立て直せばいい。

きつとそう考えており、ピッコロはその隙を的確に突いた。

「も、もっていけ！ 儂の全エネルギーを！」

スラッグの全身が光り、胸に置かれたピッコロの手へと吸い込まれていく。

こうしてスラッグとピッコロは『用が済んだら分離する』という約束を前提として融合したが……しかしここで、二人にとっての計算外が生じてしまった。

ピッコロの言葉に嘘はなかつた。彼は間違いない、スラッグを捨てるつもりで融合したし、約束を果たすつもりでいた。

計算外だったのは……融合後の性格の変化だ。

今でこそ多少丸くなっているものの、ピッコロは元々神と別れた悪の化身である。

そしてスラッグは純粋なナメック星人でありながら100%悪の超ナメック星人である。

そんな二人が融合して、果たしてそれで敵との約束を守るような善の戦士になるものだろうか？

……否である。なるわけがない。

融合を終えたピッコロは口の端を釣り上げ、そして嘲笑するように吐き捨てた。

「……………くつくつく……………馬鹿め。」

この俺様が約束などを守っているのか？」

ピッコロの人格ベースはそのままに、スラッグを取り込む事でせっかく善に寄にかけていた彼の心は再び大魔王時代へと逆戻りしてしまった。

鋭い瞳はギラギラと野心に輝き、悟空と戦った時の凶相が蘇る。

哀れ、スラッグという男はこの時を以て永遠に失われた。

もう彼はどこにもいない。この世にもあの世にも存在しない。

ピッコロと一つになり、パワーアップの切っ掛けとなって消滅したのだ。

「くくく……………戻ってきた、戻ってきたぞ！　悪のパワーが俺様に戻ってきた！

勝てる！ 負けるはずがない！ 俺は今、究極のパワーを手に入れたのだ！」
ピッコロは同化により上昇した己の気を確かめる。

凄まじい……信じられないパワーが沸き上がってくるのを感じる。

これが同化というものなのか。これほどに凄まじいものなのか？

——いける！

これならばフリーザとも戦える！

彼はその確信を抱き、フリーザを見る。

悟空が目覚めるのを待つまでもない。あの男は今ここで、自分が討つ。

そして地球で悟空との決着を着け、神を殺し、世界を支配しよう。

素晴らしい悪の世界を父に代わり、自分が作り上げるのだ。

「ピ、ピッコロ、さん？」

しかし、悪へ逆戻りしかけていた彼を悟飯の声が引き留めた。

瞬間、脳裏を過るのは悟飯と共に修行した1年間の出来事であり、自分を慕っ

てくれる悟飯の純粋な眼差しだ。

いかにスラッグと融合し、悪に傾いても……それでも、もうピッコロは完全な悪

にはなれない。

何故なら彼にはもう、大魔王としての使命などより大事な、ピッコロとして守りたいものがあるのだから。

悟飯を視界に入れると同時にピッコロの顔から険が消え、元の落ち着いた表情へと戻っていく。

そんな自分に、ピッコロは思わず自嘲してしまった。

——消えていく。

自分の中の悪が。大魔王が消えていく。

そうして残ったのは、ピッコロ大魔王ではなく、ただのピッコロだった。孫悟飯を守りたいと願うだけの、一人のナメック星人だった。

(……すまん、父よ。

どうやら俺はもう、大魔王には戻れんらしい……)

スラッグという悪の塊を取り込んで尚、ピッコロは悪に戻れなかった。

そんな自分に不甲斐なさを感じつつも、ピッコロは悟飯の頭に手を置く。

「大丈夫だ、悟飯……俺はどこにも行かん」

悪に傾こうが、善に傾こうが、それでもピッコロはピッコロだ。

守りたいものは見失わない……見失えない。

世界征服も悟空への復讐も、今は後回しだ。

今はただ……守るべきものを守るために……。

そう決意し、紅蓮のオーラを纏って突進した。

そしてそれと同時に、ピッコロの気に感化されるように悟空が目を開いた。

遂にここに役者は出揃い、戦いは最終決戦へと移行する。

ピッコロさんのカルマ値が急上昇しましたが、悟飯のおかげで踏み留まりました。なのでちょっと悪っぽくなりましたが、今までとそんなに変わったりはしません。そして今まで目立たなかった鬱憤を晴らすように次回はスラッグ（と同化したピッコロさん）が活躍します。

【戦闘力】

・ピッコロ（融合）

基本戦闘力…66万↓660万
界王拳（最大10倍）…6600万

第三十七話 超サイヤ人だ孫悟空

尾でベジータの首を絞め、背に拳を叩き込む。

互いの戦闘力差を考えれば一撃で死んでもおかしくない攻撃であり、今もベジータが生きているのは単にフリーザが加減しているからに他ならない。

簡単に殺してはつまらない。自分に歯向かった愚かさをもっと思い知らせて恐怖と絶望の中で死なせてやりたい。

フリーザはベジータの背に付いた蟹を掴んで丸ごと喰らい、また攻撃を再開する。既に戦意を失っている相手への過剰な攻撃。だがそこに割り込む者が現れた。

フリーザとて全くの無警戒だったわけではない。もしかしたら誰かが飛び込んでくるかもしれないくらいは思っていた。

だがその乱入者はフリーザの予測すらも上回り、彼の顔へと蹴りをめり込ませたのだ。

「がっ!？」

ベジータを手放し、フリーザが蹴り飛ばされる。

踏ん張りが利かずに射線上にあったいくつもの岩を砕き、貫き、いくつもの島を越えて尚フリーザが飛ぶ。

あまりに突然の攻撃。それも重く、速い。

体勢を立て直す間もなく先に回りこんだその者——ピッコロが吹き飛んでいる最中のフリーザを蹴りあげ、今度は空中へと飛ばした。

まだ終わらない。飛んで行くフリーザを追って飛翔し、追い越してダブルスレッツジハンマー。

フリーザの頭を強打し、今度は地面へと送り返した。

尚も続く追撃。ピッコロが急降下し、フリーザへと拳を振り下ろす。

だがフリーザも咄嗟に起き上がり回避。外された拳が地面を貫き、一つの陸地を真っ二つに砕いた。

「逃がすか！」

跳躍したフリーザへと爆力魔波。

高出力のエネルギー波がフリーザへと迫り、咄嗟に片手で受け止める。

だがフリーザといえど簡単に止まるものではなく、じりじりと押される威力だ。

されどやはり帝王。簡単には獲らせてくれない。

ピッコロ渾身の気功波は片手で防ぎ切られ、ほとんどダメージのないフリーザが怒りに満ちた眼でピッコロを見下ろしていた。

「ナメック星人め……！」

今のは痛かった……痛かったぞーッ!!」

「ほざけえ！」

空中でフリーザとピッコロが衝突。

拳と蹴りが高速で交差し、打撃音が遅れて響く。

姿が消える——瞬間、空間が爆ぜた。

幾度となく爆発したように空が爆ぜ、周囲にある自然物を巻き込み破壊する。

時折姿を現しては攻守交替する二人だが、その速度が速すぎてクリリン達の眼では追いきれない。

「つああああああッ！」

「きえええええッ!!」

腕と腕、脚と脚、膝と膝、肘と肘。

格闘に使える全ての部位を総動員してぶつけ合い、激しく攻防を繰り返す。

その最中にピッコロが眼から怪光線を放つも、フリーザはこれを上半身を大きく反らす事で回避。

さらにそのまま回転し、尻尾でピッコロの顎を打つ。

だがピッコロもすぐに空中で停止し、腕を伸ばして反撃に出た。

「ッシャー！」

フリーザが気円斬と似た攻撃——デスソーサーを放ち、伸びてきたピッコロの腕を切断する。

だがピッコロは怯まない。

片腕のままフリーザに接近し、無い方の腕を突き出した。

その瞬間に腕が再生し、不意を打たれたフリーザの顔を鷲掴みにする。

「かああッ！」

掴んだまま零距离の気弾！

フリーザの顔面に気弾を叩き込み、更に急降下。

力任せに地面へと叩き付ける。

またも陸地が一つ砕け、それでも尚終わらずに二人は海へと飛び込む。

ピッコロの腕を振り解いたフリーザとピッコロは戦いの舞台を海中へと移し、水の抵抗など無いかのように攻防を続ける。

掌を掴み合い、力比べの姿勢へと入ったかと思えば即座にフリーザがピッコロを蹴り上げて再び戦場が空中へと戻った。

「うわたたたたァァ！　　うわりゃァ!!」

「キィエエエエ！」

互いに裂帛の叫びを上げながら尚も零距离での殴り合いを続行する。

衝撃波が海を割り、大地を砕き、嵐を巻き起こし、その余波は遠く離れたクリリン達すらも脅かした。

攻防の隙間。フリーザの僅かな緩みを突き、ピッコロの拳がヒットする。

すると決して大柄とは言えないフリーザの身体が吹き飛び、射線上にいたクリリンと悟飯が慌てて避けた。

その二人の間を超高速でフリーザが通過し、直後にピッコロが通過する。

飛んで行くフリーザを追いかけているが両腕を組み、振り下ろす。

だがフリーザは更に飛ぶ速度を上げて回避し、空中で制止。すぐに追いついてきたピッコロの顔を蹴り飛ばした。

だがピッコロも怯まない。空中で回転すると眼から怪光線を放ち、だがフリーザもそれを避ける。

「す、すげえ……ピッコロの奴すげえぞ！ 同化ってのはここまで凄まじいのか！？」

「や、やっぱり凄いや、ピッコロさんは！」

完全に解説役となってしまったクリリンと悟飯が突然のピッコロのパワーアップに驚き、喜声をあげる。

同化でここまで強くなるのは予想外で、置いていかれてしまったような寂しさもある。

だがこれで勝利の可能性が出てきた。

そしていい事は一つではない。もう一つあるのだ。

「いや、あのままじゃピッコロはやべえな。まだフリーザの方が強え」

「！、ご、悟空！ お前起きたのか！」

「お父さん！」

首の骨をへし折られて以降、仙豆を食べたにもかかわらず眠り続けていた悟空の起床である。

だが無駄に眠っていたわけではない。

サイヤ人は死から立ち直る時にその力を大きく増す事が出来る。

悟空もまた、フリーザに敗れる前に力を増し、全身に気が漲っていた。

「待たせたな、もう大丈夫だ。オラも行つて来る」

悟空が飛翔し、丁度向き合う形で一時的に停戦していたピッコロとフリーザの前に参戦した。

位置はピッコロの隣。二人がかりで挑む、という事だろう。

出来れば1対1で戦いたいという気持ちもあるが、そんな事を言っていられる相手でないというのも一度負けて理解した。

だから今は、過程はどうあれ勝利して皆で帰る事を優先する。

足りない力は後で修行で埋めて、また同じような敵が出た時に今度こそ一人で勝てるようになればいい。

「悟空！　ようやく起きたか！」

「ああ、待たせちゃったな。だがもう大丈夫だ。オラもやらせてもらうぞ」

「へっ、また貴様と共闘か。反吐が出るが……今はそれが最善手らしいな」

ピッコロと悟空が構えを取る。

相手は格上。そしてこの戦いには宇宙の命運がかかっている。

ここでフリーザを倒さなければ、今後も破壊される惑星が量産され、それこそ日々に億単位で人が死んでいくのだ。

そんな事は許せないし、許してはいけない。

だからこそ、今だけは武闘家としての拘りも捨てた。

「それにしてもピッコロ……おめえ、感じが少し変わったな。いや、戻ったっていうのか？」

昔にオラと戦った時のギラギラした感じがするぞ」

「今までがぬるま湯に浸かりすぎていただけだ……覚えておけ、孫悟空。

奴を殺したら、次は貴様の番だという事をな」

「ああ。楽しみにしてるぜ」

軽口を叩き合い、かつて宿命のライバル同士だった二人は共通の敵を見据えて笑みを消した。

「つあああああああッ！」

「うわりゃあああああああ！」

「猿とナメック星人如きが！」

ピッコロと悟空が同時に飛び出す。

かつては宿敵同士であったからこそ、互いの手の内は知り尽くしている。

そしてラディッツとの戦いでは一度組んでの戦闘も経験しており、故にコンビネーションは抜群だ。

足りない実力を補うように悟空とピッコロが入れ替わりで攻め、フリーザもそれを的確にいなしていく。

しかしそれでも戦いの天秤はフリーザに傾いている。今のままではまだ、フリーザから勝利を奪う事は出来ない。

ピッコロを手強しと見たフリーザは、その力を70%近くまで解放しているのだ。フリーザの背後に移動した二人をフリーザの肘打ちが迎撃し、振り向きざまに気

功波を放つ。

咄嗟に避けるもすぐにフリーザが追撃し、ピッコロの前へと飛んだ。

当然これに対しピッコロも反撃。蹴りを繰り出すがフリーザが姿勢を低くして避け、蹴りでピッコロの脚を払った。

そのフリーザへと背後から悟空が猛然と飛びかかるも尻尾の一撃で弾き飛ばされる。

「ちいっ……!」

ピッコロが人差し指と中指を立て、額に当てる。

気を一点に集中して敵を貫く魔貫光殺砲の構えだ。

チャージに時間がかかるという欠陥こそ抱えているが、上手く気を溜めて当てさえすれば格上すらも屠る最大の一撃。ピッコロはそこに勝機を見出した。

顔が見え無くなるほどに気を溜め、フリーザの攻撃を何とか片手のみで防ぐ。

「界王拳、20倍だあーっ!」

悟空が無理矢理最大出力を超えてフリーザへと突進し、不意を打たれたフリーザの頬を殴り飛ばした。

更に吹き飛ぶフリーザを蹴り、ピッコロとの距離を開ける。

「よし、いいぞ孫悟空！ そのまま時間を稼げ！」

「か、め、は、め……！」

ピッコロが気を溜めている間に悟空が更に力を振り絞り、気を掌へ集約させる。

「波アアア!!」

限界以上の出力を振り絞ったかめはめ波がフリーザへと飛び、だがフリーザも身軽に避ける。

しかし悟空が腕を動かすとかめはめ波が曲がり、フリーザを追尾した。

「小賢しい！」

逃げてでも無駄と悟ったらしいフリーザが片手でかめはめ波を押さえ込む。

しかしその威力はいくらフリーザでもそう簡単に防げるものではない。

フリーザの掌を僅かずつ焼きながらかめはめ波が尚も進もうとする。

「かあッ！」

だがやはり最後に勝つのはフリーザだ。

悟空渾身のかめはめ波をも消し飛ばし、そのまま悟空へと突撃する。

頭突きの一撃で悟空を吹き飛ばし、続けて空中で回転。尻尾の一撃で頭を打った。

「猿野郎が……このフリーザ様をあまり舐めるなよ」

「ぐっ、かはっ！」

「止めだ！」

フリーザが悟空に止めを刺そうと掌を翳す。

だがそのタイミングを見計らったかのように飛来したかめはめ波と魔閃光がフリーザに直撃した。

更に練気弾、気功砲、どどん波が後に続き、悉くフリーザへと命中する。

無論ダメージはない。

だが多少なりとも時間稼ぎにはなっており、その間にピッコロはますます気を高めた。

「ゴミ共が！ まだいやがったか！」

いかにフリーザから見て雑魚だろうと、こうも数が多ければ邪魔くらいは出来る。そしてダメージは通らずとも、怒らせる程度の事ならば可能だ。

気絶から覚めたヤムチャ達の攻撃はフリーザに傷の一つも負わせていない。

だが確かに、フリーザの注意を逸らすという大役を果す事に成功していた。

そして一つの事に気を取られると、注意力が散漫になるのがフリーザの悪い癖だ。ヤムチャ達に気を取られたフリーザに、今度は横からターレスが飛び込んで右フックを叩き込んだ。

更に吹き飛んだ先にナッパが回り込み、フリーザを蹴り上げる。

その先にまたしてもターレスが先回りして蹴り落とし、すかさずナッパがフリーザの右腕を掴んだ。

それに合わせるようにターレスがフリーザの左腕を拘束し、サイヤ人二人でフリーザの動きを停止させた。

ちなみにこの総攻撃に人参化は参加していない。

確かに彼も仙豆で復活はしていたのだが、自分では役立てないと判断してターレスとナッパに気を与えて再びダウンしてしまったのだ。

「今だ！」

「殺れえええッ！」

ナッパとターレスが叫ぶ。

無論、この好機を逃すほど彼は甘くない。

「――魔貫光殺砲！」

直進する光閃と、その周囲を旋回する螺旋状の気。

二つの気を以て敵を貫く必殺の一撃が雷すら超える速度で飛び、フリーザへ迫る。決まった……誰もがそう思った。

だがフリーザの力はこんなものではない。

フリーザは驚くべき力でターレスとナッパを吹き飛ばし、反射的に身を振る。

それでも間に合わずに魔貫光殺砲は彼の腹を貫いた。

……だが、急所を外している。

大ダメージには違いないが、仕留め損ねてしまった。

そしてそれこそが最大の隙となり、フリーザの放った反撃のデスビームがピッコロの胸を貫通した。

仕留めたと思った時こそが最大の隙。攻撃の瞬間こそが最も警戒せねばならない時だ。

それを失念してしまったピッコロは口から血を吐き出し、地面へと墜落した。

「ピッコロ！」

「この、屑、共がァ……！ 一人たりとも逃がさんぞ！」

フリーザの生命力は常軌を逸していた。

ありえたかもしれない可能性の話になるが、気さえあれば上半身だけでも生き延びる事が可能なのがフリーザだ。

彼の兄であるクウラに至っては脳だけで宇宙空間に放り出されても生存出来るほど生命力が高い。

その彼がたかが腹を貫かれた程度で死ぬはずがない。痛みはあるだろう。重傷には違いないだろう。

だがそれでも尚。それでも尚だ。

それでも尚、彼を仕留めるには至らない。

「消えろォ！」

フリーザがデスビームを放つ。

狙われたのが悟空ならば、まだ反応も出来ただろう。回避も可能だっただろう。だが狙われたのはクリリンだった。

もしかすると、斬撃系の攻撃を持つという事で警戒されてしまったのかもしれない。

どちらにせよそれは不幸な事であり、遊び抜きで狙われてしまえばもうクリリンに打つ手などない。

クリリンの頭を閃光が貫き、脳を焼く。

ゆっくりと身体が崩れ——だがそこに無慈悲な追撃が入った。

フリーザが超能力でクリリンの身体を浮かし、まるで悟空に見せ付けるかのように空に浮かべる。

「なっ、何を!?!」

「よく見ておけ!　これが俺に齒向かった報いだ!」

もう死んでいる。もう動かない。

だがフリーザはそれでも満足しないらしい。

宙に浮かべたクリリンに更に圧力をかけ——その身体を粉微塵に吹き飛ばした。

瞬間——悟空の頭の中は真っ白になった。

絶望、嘆き、驚愕……様々な感情が頭の中を駆け巡り、しかしそれを上回る激情が理性を塗り替える。

クリリンが殺された。

たったそれだけの事を理解するのに数秒かかり、そして理解した後は悟空自身すら制御出来ない怒りが全身を焼き尽くした。

クリリンは既に一度死んで、ドラゴンボールで生き返っている。

つまり、もう二度と蘇れないのだ。

その事実には、悟空の怒りが臨界点を超えた。

「ゆ、ゆ、許さんぞ……よくも、よくも……」

悟空はかつて、これと同じだけの怒りを抱いた事が一度だけあった。

それはまだ子供だった頃……ピッコロ大魔王の手下であるタンバリンにクリリンを殺されてしまった時だ。

あの時も我を忘れるほどの怒りに身を焦がし、亀仙人の言葉すら無視してタンバリンに向かっていったものだ。

だが今回は、当時と決定的に違う点の一つあった。

それは悟空の戦闘力だ。

悟空はあの時と異なり、“強さ”という名の資格を有していた。

地球での暮らしは彼にサイヤ人らしからぬ穏やかさを与え、それはS細胞という名の鍵を彼に与えた。

そして最後に、激しい怒りが彼の中のS細胞を一気に刺激し、活性化させる。

“戦闘力”

“穏やかさ”

そして“怒り”

今ここに、伝説の扉を開く資格と鍵は揃った。

故にフリーザは目撃する。己が最も恐れていた伝説の戦士の誕生を。

変化は、目に見えて明らかであった。

悟空の髪が逆立ち、全身を黄金の輝きが包む。

瞳は理性を失った白目となり、普段の彼からは想像もつかないような凶悪さが滲み出していた。

——『擬似超サイヤ人』。伝説の扉を開きかけた状態だ。

「——!!」

悟空が人ならざる叫びをあげ、クリリンを失った怒りで、可能性の扉を完全に開く。

疑似という過程を通して、地球育ちのサイヤ人は真の伝説へ至った。

黒だった髪は黄金に。白目には再び瞳が戻り、されど先程とは決定的に異なる緑の瞳に。

顔つきも再び理性を取り戻したが、しかし普段の彼とは明らかに異なる険しい表情でフリーザを見上げていた。

「な、なんだ、あいつの変化は……!?」

サイヤ人は大猿にしか変わらんはず……どういう事だ……」

「カ、カカロットの奴は一体……まさか……。」

そんな、そんな馬鹿な……あ、あいつは下級戦士のはず……まさか……」

悟空の変貌にフリーザが驚き、遠くから観戦していたベジータが戦慄した。

今の悟空から感じられる気は、完全にフリーザを上回ってしまっている。

そんな彼のしている前で悟空はフリーザの前に一瞬で移動し、彼の手を捻り上げ

る。

「いい加減にしろ……このクズ野郎……」

罪もない者を次から次へと殺しやがって……ク、クリリンまで……」

「くっ！」

フリーザは何とか拘束を振りほどき、悟空から距離を取る。

だが掴まれていた腕は痛みを訴え、その圧倒的な力にフリーザは初めて恐怖を感じた。

「な、何故貴様にそんな力が……ま、ま、まさか……貴様……」

恐れていたものが目の前にある。

その事実を受け入れられず、フリーザは震えた。

いや、震えているのは彼だけではない。ベジータは驚愕で、ターレスは歓喜で身を震わせていた。

「遂にやりやがったな、あいつ……間違いねえ」

「へへっ……下級戦士なんてランク分けも当てにならねえなあ」

ターレスとナッパは地面に膝をついたまま、しかし嬉しそうに笑い合う。

同じサイヤ人として悔しくはある。

だがそれ以上に嬉しいのだ。

今自分達は伝説を目撃している。サイヤ人の可能性を見ているのだ。

「カカロットはなれたのだ……超サイヤ人に！」

ターレスの言葉にベジータとフリーザが、まさかという顔で振り向く。
そんな彼らに答えを示すように、黄金の戦士の怒りが天地を震わせた。

「俺は怒ったぞー！ フリーザー！ フリーザー！ フリーザー！……！」

そして悟空の拳が、フリーザの顔を殴り飛ばした。

悟飯「あの……それ、僕の台詞……」

ターレス「早い者勝ちだ」

【戦闘力】

超サイヤ人悟空…1億5000万

ターレス…250万↓300万

ナツパ…150万↓300万

【擬似超サイヤ人】

『超サイヤ人だ孫悟空』で悟空が見せた、超サイヤ人のように超サイヤ人ではない変身。

超サイヤ人のような黄金のオーラを纏い、髪が逆立って白目になる。

この時点ではまだ超サイヤ人がどんなものか判明していなかったのも、全国のチビ子はこの姿こそ超サイヤ人だと信じて学校で『超サイヤ人すげえ』と語り合っていたとかいなかったとか。

そして後に本編で超サイヤ人になった悟空を見て『超サイヤ人だ孫悟空ってタイトルなのに超サイヤ人になってなかったやんけ』と語り合ったとか、なかったとか。

第三十八話 超サイヤ伝説

（クリリン君の気が……消えた）

洞窟の中で寝そべりながら、リゼットは眼を伏せる。

遠視で見ていた戦いは、途中までは運命の路線変更を期待させるものであった。パワーアップしたピッコロと悟空のコンビネーションによりフリーザとも渡り合いい、魔貫光殺砲で大きな傷も負わせた。

それはリゼットをして超サイヤ人抜きでの勝利を予感させるものであった。

だが結果だけを見ればピッコロは倒れ、クリリンが爆殺された。

運命を変えるには後一手が足らなかった……という事だろうか。

とはいえ、そう悪い結果ではない。

少なくともこれで危惧していた超サイヤ人への覚醒は成ったわけだし、クリリンはナメック星のドラゴンボールで復活出来る。

後は悟空がフリーザを倒すだけであり、何も問題は――。

（……ああ、いくつかありましたね）

そういえば肝心のドラゴンボールが揃っていない。

原作だとナメック星の崩壊後に地球に転移してきたが、誰かが所持している状態でも転移するのかは正直不明だ。

宇宙船は一応持たせているが、万全を期すならばリセットが仲間達を地球に帰した方がいいし、フリーザの惑星破壊も出来れば止めるべきだろう。

どうやら、まだやるべき事はあるようだ。

幸いにして少しは回復してきた。まだ身動き一つ取れないが、ゲートくらいは開けるし超能力も使える。

ならば充分。それは全回復と同義だ。

リセットはまず亜空間を開いて中に入っていた仙豆を一つ、超能力で運んで自分の口に入れる。

すると断裂していた筋肉や破裂していた血管などが瞬時に回復し、気も最大まで戻った。

全く、改めてチート染みた豆だと思う。

続いて亜空間からクウラ戦の前に脱ぎ捨てたケープを出して装着。靴と長手袋は

あえて戻さなかった。

クウラがいけないとはいえ、あまり重りを増やすのは得策ではない。

「……よし」

これで完全復活。サイヤ人のように瀕死から立ち直っても何の特典もないが、気分的に少し強くなったような気がする。勿論気のせいだが。

ドラゴンレーダーを出してボールの所在地を確認すると、嬉しい事に五つのボールが全て同じ場所に集まっていた。

まずはこのボールを全て回収してしまうとしよう。

感じる気も大した事はないし……というかこの気、ザーボンだ。

何でザーボンがまだ生きてるんだろう？ とリゼットは首をかしげる。

「まあ、いいですか」

どの道ザーボン程度なら誰も居ないのと同じ事だ。

亜空間を開くとその中に手を入れ、レーダーの位置に記された場所に出口を創る。

そうして手を伸ばすと——あった。確かにドラゴンボールがある。

超能力でボール五つを回収して亜空間の中へと収納し、リゼットは手を引っ込め

た。

恐らくザーボンからしてみれば、いきなり空間から手が生えてボールを奪ったようにしか見えないだろう。

次にリゼットは背中から白翼を展開すると、バーストリミットをとりあえず20倍まで引き上げた。

フリーザがいきなり惑星を破壊する危険がある以上、咄嗟に対応出来るだけの反応速度が必要だ。

それを考えると最低限20倍——戦闘力1億2000万以上は保っておきたかったのだ。

最後に地面に敷かれていた黒コートを回収し、亜空間へと入れる。

正直見覚えのないコートだが、それでも顔も知らぬ恩人の物だ。

再会した時に返せるように持っておきたい。

（さあ、行きますか）

フワリ、と飛翔。

そして次の瞬間には姿が消え、白い光となってナメック星の空を翔けた。

彼女が通過した後に海が二つに割れ、距離にして6万kmは離れていた悟空達の距離が瞬く間に縮まっていく。

時間にして1分もなかっただろう。リゼットは視界に悟空とフリーザの姿を収め、二人の前で停止した。

勿論間に割って入ったわけではない。丁度二人と合わせて三角形になるように、一定の距離を保った位置に止まったのだ。

悟空とフリーザは互いに驚いた様子でリゼットを見たが、悟空は僅かにほっとしたような様子を見せる。

「神様か。その様子だとそっちは終わったみてえだな」

「ええ。悟空君もどうやら“成れた”ようですね」

「……超サイヤ人の事を知っていたのか」

「噂程度には。見るのは初めてですけど」

正直なところリゼットは感動していた。

何せ超サイヤ人である。今でこそ様々なフィクションで似たような模造品が増えたものの、少年漫画における金色変身の元祖である。

一方でリゼットの登場に焦燥したのはフリーザだ。

彼女がクウラとやり合っていた事は知っている。

だがまさか、クウラではなくこいつが戻ってくるとは思わなかった。

ここににいるという事はクウラを始末したという事。即ち、超サイヤ人に匹敵する力を持っているという事だ。

「さて……覚悟はいいですか？ 2対1ですが躊躇はしません」

リゼットの気が上昇し、純白の気に包まれる。

2対1だが可哀想だとか卑怯だとか、そんな気持ちは微塵も沸かない。

リゼットは武を極めた武神としての一面を持つ。だが武道家ではない。武術家なのだ。

正々堂々に拘る気などないし、いい勝負をしたいなどとも思わない。

勝てる時に勝つ。それが彼女の中での最優先だ。

だが、彼女がそうでもう一人はそうではなかった。

「待ってくれ神様。こいつは俺にやらせてくれ」

「……正直、言うと思っていました。ですが悟空君、これはスポーツではありません

ん。

半端に傷付けて、それで生かしてしまつては地球だって危ないんです」

「あいつはクリリンを殺した！ 一番の親友だった……本当にいい奴だったのに……！」

バラバラにしやがつて！ クリリンはもう、二度と生き返れないんだ！

絶対にこいつだけは許せねえ！

俺がクリリンの仇を討つんだ!!」

普段は滅多に見せない悟空の本気の怒りに思わずリゼットは肩を震わせた。

あの悟空がここまで怒りを露にするなど、そうない事だ。

普段は大らかだからこそ、今が本気で怒っているのだと分かる。

しばしの睨み合い——やがて退いたのはやはりというかりゼットだった。

「……余計な情けはかけない事。止めを刺せる時に必ず刺す事……いいですね？」

「ああ。すまねえな、神様」

悟空に任せる事の弊害はいくつもある。

まずナメック星が崩壊するという事。

きつと止めを刺せずに、後でフリーザが地球に来てしまうだろうという事。

そして……悟空が必ず生きて戻るとは限らない事。

何せ原作でもギリギリだったのだ。何か一つボタンをかけ間違えれば死んでしまう可能性は充分にある。

そして悪い事に、ボタンなどいくつもかけ間違えているのが現状なのだ。

むしろボタンを全部引き千切ってチャックに改造してのようなものである。もう何がどうなるか分からない。

「私は一足先に皆を連れて地球に帰還します。

悟空君……必ず、生きて帰って下さい」

「ああ、勿論だ」

それでも、この場は悟空に任せる事に決めた。

正直不安はあるが、それでもリゼットは振り返らなかった。

戦いは遠視で観戦し、いざとなれば自分が割って入る。だがそれまでは、彼にやらせてあげたいとも思ったのだ。

故にリゼットは悟飯達の所へと飛び、全員いるかどうかを確認してからゲートを

開いた。

「え？ か、神様？ 何をするつもりなの？」

「悟空君はフリーザとの一騎討ちを望んでいます。私達は先に地球へと戻りますよ」
悟飯、ピッコロ、天津飯、ヤムチャ、餃子、ナッパ、人參化、ターレス、ついでにベジータ。

クリリンがここにいないのが辛い、とりあえず生存者は全員揃っている。

それにしてもベジータがまだ生きている事に地味にリゼットは驚いていた。

あれだけの戦力差でサンドバッグにされてよく死ななかったものだ。

フリーザが加減して遊んでいた事を踏まえても凄まじい頑丈さである。流石サイヤ人の王子。

もしリゼットが同じ目に遭ったのなら間違いなく死んでいた。

「ま、待って下さい！ 悟空を置き去りにするつもりですか!？」

神様と悟空が二人がかりで挑めばフリーザにだって楽に勝てるでしょう!？」

「それが悟空君の望んだ事なのです。今あそこに割り込めば、それこそ私が悟空君に撃たれてしまいますよ」

ヤムチャの反発にリゼットはあくまで冷静に返す。

勿論、これは嘘……とまでは言わないが、限りなく可能性の低い憶測だ。

いくら怒りに我を忘れていても、悟空が仲間を攻撃するなど有るはずがない。

何せフリーザにすら慈悲をかけるくらいに優しすぎる男なのだ。

それが彼のいい所であり、戦士としての欠点でもあった。

「行きましょう。……大丈夫です、本当に危なくなったら撃たれてでも私が割り込みますから」

「し、信じますよ」

とりあえず、こうとでも言わなければヤムチャ達は納得しないだろう。

リゼットは全員にゲートを通してように指示し、最後に自分が通る。

後は信じるだけだ。孫悟空の勝利を。

「信じますよ、ですか。それは私の言葉なんですけどね。

……本当に、信じていますよ悟空君。貴方の勝利を」

最後にそう呟き、ゲートを閉じた。

★

天界の神殿に無事全員が脱出し、負傷しているピッコロやナッパ、ターレスとベジータはデンデが治療した。

サイヤ人組は大怪我からの復帰だが、戦闘力に変化がない。

やはり瀕死パワーアップにも限界というものがあるのだろう。

道理でフリーザ編が終わった後に誰も瀕死パワーアップをやらなくなったわけだ、トリゼットは一人納得した。

セルは平然ととんでもないパワーアップをしていた気がするが、まあアレはサイヤ人じゃない。

多分サイヤ人のいい所だけを都合よく得ているのだろう。

ナメック星人達も皆それなりに寛げているようで、最長老の近くでは先代様が同胞達と話を交わしていた。

どうやら同胞の気配を感じて天界を訪れていたらしい。

ナメック星人達と話す先代様は、どこか嬉しそうだ。

「神様お帰りなさい。無事でよかった」

「ええ、心配をかけましたね、ポポ。ところで……」

リゼットはポポを労うと、神殿を怪訝な眼で見た。

神殿の一部が、何故か崩壊していた。

壊されているのは、『時の部屋』があるエリアだ。

そこに気弾でも撃ち込んだかのように、無残に壊されてしまっている。

「何か、あったようですね」

「……はい。神様がいない時に、悟空に似た男、来た」

「悟空君に？」

リゼットは思わずターレスを疑うように見てしまった。

それに対し、ターレスは自分ではない事をアピールするように肩をすくめる。

分かっている……彼ではない。ずっとナメック星にいた事はリゼット自身が知っ

ているのだ。

「男、言った。『この部屋はあってはならない』と……」。

そして部屋を壊した。ポポ、止められなかった……ごめんなさい、神様」

「壊されたのは時の部屋だけなのですね？」

「はい」

「ならば構いません。惜しくないわけではありませんが、それよりもポポ達が怪我しなかったことが一番大事です」

「神様……」

感動したように目を潤ませるポポに微笑み、それからリゼットは考える。

部屋を壊した悟空似の男……心当たりがあるとすれば、かつてトワ達に攻撃を仕掛けていたあの仮面の男だろうか。

あれは明らかにトワやミラと敵対していたように思う。

だが……何者なのだ？ ターレスではない。悟空でもない。

他に思い付く悟空そっくりの男といえば彼の父であるバーダックだが……まさか、そんなはずはあるまい。

バーダックは既に故人であるし、万一生き延びていたとしてもわざわざ時の部屋を壊す理由などない。

『エピソード・オブ・バーダック』と同じ出来事がもしこの世界でも起こっていたならば……いや、それでも無理か。その出来事があったとしてもバーダックが飛ばされたのは太古の世界だ。とても現在まで生き延びてはいられない。

サイヤ人は若い時期が長いだけであって、寿命そのものは地球人と大差ないのだ。

「ポポ、時の部屋を直す事は出来ますか？」

「出来ない……時の部屋は元々、ここにあった時空の歪みを利用して創られた。けれど時空の歪み、消えた。もう過去に精神、飛ばせない。

過去の映像を観るくらいなら、残滓を使って何とか出来るかもしれない」

「時空の歪み……ですか」

「宇宙には時々そういうのが出来る。時代の違う人間がそれに巻き込まれて未来や過去に行く事、ある。そういうの沢山あると困る。だから界王様よりもっと偉い、時の神様が消していると、ポポ聞いた事がある」

「なるほど……時の部屋はつまり、その時の神様の目に触れてしまったと」

「界王よりも上にいる時の神様……残念ながらリゼットの知らない神様だ。

「一応地球の神様であるリゼットは前知識として界王神の存在までは知らされている。」

しかし時の神様など聞いた事がないし、原作知識にもいない。

……まさかアラレちゃんに登場した亀仙人みたいな神様じゃなからうな、と思っ

てしまった。

「仕方ありません。Mr・ポポ、出来る範囲でいいので時の部屋の修復をお願いします。
す。」

過去に精神を飛ばせずとも、情報庫として使えるならば意味はあります」

「わかりました、神様」

リゼットの指示に答えてポポが壊れた部屋へ向かい、その助手として数体の戦乙女が同行した。

その背を見送ってからリゼットは最長老の前へと歩いて行く。

時の部屋は壊れてしまったが、それより考えるべきは過去ではなく今だ。

フリーザとの最終決戦は悟空に任せた。

だが、だからといってこちら側で何も出来ないわけではない。

その為にも、まずは最長老の許可を得る必要があった。

「最長老さん、少しよろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。何でしょう？」

「お聞きしたいのですが、ナメック星のドラゴンボールは死者の蘇生に関して何か

制限はあるのでしょうか？ 例えば自然死以外にも蘇生出来ない死に方があるとか、蘇生回数とか」

「なるほど、それを聞いてくるという事は地球のドラゴンボールには蘇生回数の制限があるんですね。

そして貴女達のお仲間のうちの二人が見えない事から、どちらか……あるいは両方共が死んでしまい、更に地球のドラゴンボールでは蘇生出来ないと……ご安心下さい。ナメック星のドラゴンボールなら自然死でなければ何度でも蘇る事が出来ます」

勿論、今の質問内容とそれに対する返答はリセットにとっては既知のものだ。

だがこの質問を入れなければ、何故か地球とナメック星のドラゴンボールの違いを最初から知っていると矛盾が生じてしまう。

故にこそ、遠まわしな質問であった。

「それを聞いて安心しました。……ああ、そうだ、もう一つお願いを。

貴方達のドラゴンボールを使わせて頂きたいのですが、許可を頂けないでしょうか」

「勿論構いません。貴女達はナメックの恩人だ。

しかしナメック星のドラゴンボールはナメック語でしか使えません。デンデをお貸ししますので、彼に願いを代弁してもらおうといいでしょう」

これで最長老の許可は得た。

とはいえ、あまりモタモタしていると彼の寿命が尽きてドラゴンボールが消えてしまうだろう。

リゼットは指を振ると亜空間からナメック星のドラゴンボールを出し、地面に並べる。

それを見て悟飯達も驚いたようにリゼットを見た。

一体何時の間に揃えてたんだこの神様、とでも言いたげだ。

リゼットはデンデを手招きすると、彼に事情を説明する。

「わ、わかりました。すぐに龍を呼びます」

「ええ、お願いします。……それとベジータ、願いに割り込もうとしても無駄ですからね？」

「ちっ」

デンデを守るように立ち、ベジータを軽く威圧した。

彼とて実力差が分からない男ではない。

こうしてリゼットが近くにいる限り、願いの横取りやデンデを脅しての強引な不老不死化などは出来ないだろう。

これでクリリンは蘇生出来る。

後は、悟空の勝利を待つのみだ。

「……ああ、そうだ。申し訳ないのですが質問を追加してもよろしいでしょうか？」

「

どうぞどうぞ。私の寿命が尽きるまででしたら、いくらでも」

「ええ、それでは。……かつてナメック星を異常気象が襲った時、宇宙船に乗ってこの地球の前の神……先代様は地球へとやって来ました。

そしてスラッグという者もまた同じ理由でスラッグ星へと飛び、そこで悪に染まっています。

だからというわけではないのですが、他にも同じ理由で宇宙船に乗って避難したナメック星人はいるのでしょうか？」

リゼットが聞いておきたかったのは、今ここにいる以外にナメック星人がいるかどうかだ。

これは些細な事なようで、世界すら左右し得る重要な質問である。

何せナメック星人はドラゴンボールを創れる。という事はもしも悪のナメック星人が他にいて、ドラゴンボールを創って悪用を繰り返せば邪悪龍が誕生する可能性もあるのだ。

そして、もしそうなれば宇宙の危機だ。地球も無関係ではいられない。

その問いに対し最長老は笑い、安心させるように語る。

「ええ。勿論他にもいました。

しかしご安心下さい。皆、心優しい龍族の者達です。

悪に染まる事はありませんし、もしそうなっても貴女の脅威とはならないでしょう」

「しかし、ドラゴンボールが……」

「その心配も要りません。ドラゴンボールは正しき心を持つ者のみが創り出せる奇跡の玉。悪しき心では生み出せません。

事実、貴女の星にいたという大魔王を名乗っていた者も龍族でありながらドラゴンボールを創る事は出来なかったはずです」

リゼットが懸念した悪しきナメック星人によるドラゴンボールの乱用はない、と最長老が断言した。

ナメック星人の事ならば彼以上に詳しい人物はいない。

その人物からの太鼓判を貰い、リゼットは自分の心配が杞憂であった事を悟り、胸を撫で下ろした。

「しかし……ナメック星は残念な事になってしまいましたな」

先代が沈んだ声で、まだ見ぬ故郷を想って溜息を吐いた。

まだナメック星は残っているが、超サイヤ人と宇宙の帝王の戦場にされてしまったは無事では済まないだろう。

しかし最長老は朗らかに笑い、優しく言う。

「なあに。皆が生きていればどこであってもやり直せます。

貴方の後任のおかげで、私の子も多く救われました。

きつとナメック星も、分かってくれる事でしょう」

最長老は既に、ナメック星の末路を予期しているように見えた。

だがそれでも、皆が生きていればやり直せる。

我が子達はきっと、新天地を見付けてやっていけるだろう……そう信じているのだ。

それを聞いて先代は、静かに笑った。

ナメック星「やめろー！ シニタクナーイ！

シニタクナーイ！

シニタクナーイ！！」

第三十九話 次のステージに備えて

過程が長くなるから、まずは結論を先に語ろう。

悟空はあの後無事にフリーザを倒し、ナメック星を脱出した。

フリーザも思ったよりは頑張っていたのだが、何せ戦闘力に差がある上にフリーザの100%はすぐにパワーダウンを始めてしまう。

彼が惑星を壊そうとしてから実際に壊れるまでが5分なわけだが、100%になった時は残り3分程度にまでなっていた。

そして残り1分程度の所でピークを過ぎてパワーが落ちる。つまりフルパワー持続時間は驚きの2分である。

短い、短すぎる。ウルトラマンだってもう少し頑張るというのに、これはどうした事だ。

リセットの記憶ではフリーザのフルパワーは結構長い時間続くイメージがあったのだが、それは原作に追いつかないように薄く薄く引き伸ばされて、『残り5分』を数話に渡って放映したアニメのせいだ。

実際に経験してみればまさにあつという間であり、遠視で悟空とフリーザの戦いを見守っていたリゼットはフリーザのパワーダウンのあまりの早さに『体力少なくなっ!』と呟いてしまったレベルである。

100%になるまでの時間が無駄に長くて隙だらけ。その上やっと100%になっても持続時間2分でそれを過ぎれば弱体化。

なるほど、フリーザが100%になりたがらないわけだ。これならずと70%くらいで戦っていた方がマシである。

その後悟空はフリーザの宇宙船に乗って脱出しようとしたのだが、ここで一悶着が起きた。

何と悟空が乗る前にフリーザの宇宙船が勝手に飛び立ってしまい、悟空を置いて脱出してくれやがったのだ。

一体何事かとリゼットが遠視してみれば、船内には何故かまだ生きているザーボンが搭乗しており、宇宙船を操作していた。本当に何でこいつまだ生きてるんだろ
うか。

ともかく悟空はフリーザの宇宙船に乗れなくなってしまい、リゼットは念話で悟

空をギニュー特戦隊のポッドへと誘導した。

本当はリゼットならば悟空をへブンズゲートで回収する事も可能だったのだが、あえてそれはしなかった。

というのも、悟空には是非ヤードラット星へ行つて瞬間移動を会得して欲しいからだ。

悟空の瞬間移動は今後、大局をも左右する重要な能力となる。

取り逃しで地球滅亡とか、そんなアホな展開だけは御免だ。

とはいえ、本来の流れと違う点はある。

本来の流れでは悟空は瞬間移動を会得するまでは地球へと戻ってこれないが、この世界にはリゼットがいる。

つまり彼女がヤードラット星と地球を往復する事で悟空は簡単に地球に帰還する事が可能となり、家族と過ごしながら瞬間移動の修行の時だけヤードラット星に行く、という事が可能となったのだ。

ついでにリゼットも修行を見学して、瞬間移動を習得しておいた。

フリーザとの戦いは終わった。

いや、正確に言えば終わりではない。1年と260日経てばサイボーグになって再び元気な姿を見せてくれるだろう。

しかしその点に関しては、ハッキリ言ってリゼットは全く気にしていなかった。どうせトランクスのおまかせ犬になって終わるだろうし、そうでないとしても最早敵ではない。

サイボーグフリーザの戦闘力は1億5千万と聞いた事があるが、何て事はない。要するに変身していないクウラと同じだ。

問題はその3年後。人造人間の登場である。

時間にして約5年後に次の戦いが始まるわけであり、そして場合によってはここで詰む。

少なくとも『絶望の未来』ではそうなってしまっており——そして、この世界線が『絶望の未来』の世界線でないという保証はどこにもないのだ。

だから、“そうだった時”の事を踏まえて対処を考える必要がリゼットにはあった。

まずリゼットが真っ先に思い付いたのは、当然ながらゲロの捕獲ないしは抹殺で

ある。

ここが絶望の未来でなければいいのだ。

17号、18号、そして16号はそこまで悪い連中ではないし、むしろ彼らの出現に呼応して悟空達が強くなるのだから、これを排除してしまうのは危険ですらあった。もしリゼットが人造人間の登場そのものを阻止してしまった場合、悟空達の強さが伸びずにバビディの襲来に対応出来なくなってしまう恐れすらある。

先にゲロを始末してセルも始末して……悟空達が今の強さのまま、バビディとダーブラが来たならば……その未来を想像すると、背筋が冷えた。

薄氷の上で成り立っているような危ういバランスではあるが、強敵の存在は戦士達を高みに押し上げるための試練にもなっている。

実際、目指すべき高みがある時とそうでない時の伸び方の差は明らかだ。

かつて天下一武道会が終わってからラディッツ襲来までの5年間は、悟空を始めとして他の戦士達もほとんど強さが変わらなかった。

しかしいざ強敵の存在を示唆されるや、たったの1年間で数倍もの強さになってしまったのを忘れてはいけない。

それは心の余裕の差が生むのだろうか。それとも戦士としての本能故なのだろうか。

詳しい原理は分からないが、ともかく強敵がいる事によって悟空達は強くなれる。しかしここが『絶望の未来』ならば、そんな悠長な事を言ってもらえない。

だからその時は、ゲロを消そう。

研究所を吹き飛ばし、17号と18号の出現そのものを阻止するしかない。

だがそれは出来れば避けたい事だ。

先が全く分からなくなるし、後に現れる敵を思えば不安しかない。

だからそうならない為にも、まずは悟空を生存させる。

フリーザ親子襲来の日にトランクスが来ればそれでよし。彼から心臓病の特効薬を貰えばいい。

もし来なければ、ドラゴンボールを使ってでも悟空を死なせない。

そしてもう一つするべき事はリゼット自身の更なる強化であった。

ここから先は超サイヤ人のバーゲンセールだ。超サイヤ人と超ナメック星人以外は戦線から置いていかれる。

だがりゼットはそんな位置に甘んじるつもりなどなかった。あくまで喰らい付き、可能ならば引き離すつもりでいた。

これでも地球の神なのだ。異星人ばかりに星の守りを任せて自分は何もしないで見守るなんて、そんな恥ずかしい真似はしたくない。

押し付けられたに等しい地位ではあるが、それでもやるからには徹底する。

この惑星を砕くならば、まず己を超えてみせろと敵に言い放ってやりたい。越えられない壁になってやりたい。

だからリゼットはフリーザとの戦いが終わった次の日から修行に明け暮れた。

まずは今まで通りの修行。服の重量を更に増し、気霊錠を常時付け、バーストリミットを常に発動し、重力室に籠った。

気の固形化で空想の対戦者を創り出し、あえて自らの気を抑えて戦う事で対格上の状況を作り出し、経験を重ねた。

ナメック星でのクウラとの戦闘はまさに僥倖であった。

あれがあったからこそ自らの打たれ弱さに気付けたし、格上の恐ろしさとタフさを思い知った。

リゼットは日々、気の固定により創り出したクウラを相手に限りなく実戦に近い模擬戦を繰り広げ、妥協のない訓練は時に彼女自身に深手をも負わせた。

勿論仮想敵はクウラだけではない。今までに見た戦いの記憶を総動員する事により、出会った全ての戦士を再現して模擬戦に努めた。

まさか悟空も予想すまい……自分が10人に増えて、何の遠慮もなくリゼットを袋叩きに行っているなど。

リゼットの創り出した仮想悟空はその動きをほぼ忠実に再現されているが、甘さだけはあえて再現されなかったのだ。

他にもベジータ、ピッコロ、フリーザ、ターレス、クリリン、天津飯などを再現して、かつ強さだけはあえて己より上と設定して苦行の如き修行に励んだ。

地球人の基礎スペックはサイヤ人やナメック星人に劣る。

その上で彼等に並び、前を往こうと言うのだ。

ならば相応の修行が必要になるのは必然。拷問染みた苦行を己に課した先にこそ彼等の前に立って戦うという未来が開ける。

その為の痛みならば、彼女はあえて受け入れたのだ。

「ふッ！」

リゼットの為だけに新設された修練場の中で白い少女が舞う。

ケーブドレスはそのままに、しかし全身には無数の傷と痣が刻まれていた。

少女を取り囲み拳を振るうのは4人の戦士。いずれも今のリゼットの倍近い気と強度を持たされている。

勿論リゼットがその気になれば容易く消し飛ぶ相手である。自分が創り出した気より自分が弱いなんて事は有り得ない。

だがリゼットはあえて気を抑えている。故に今だけはこの仮想敵の力はリゼット本人を凌駕していた。

『だありゃああ！』

髪を逆立てた、普段とは雰囲気異なる悟空が突進する。

これは超サイヤ人を仮定して創り出された仮想敵であり、他の仮想敵よりもワンランク上の強さを持たされている。

彼が放った蹴りをスレスレで回避して脚を獲り、そのまま関節を極めて投げる、

そして彼自身の攻撃の勢いをも利用して、独力だけではビクともしないだろう脚をへし折った。

いかにサイヤ人だろうが身体の基本的な構造は地球人とそう変わらない。つまり関節技は効く。

だが投げた直後に背中が爆ぜ、顔から地面に倒れ込んだ。

すぐに地に手を突いて倒立し、追いつきの踏み付けをかううじて避ける。

踏み付けを行ってきたのは、頭部がMの字に禿げたサイヤ人——ベジータだ。

彼はリゼットが距離を取ったのを見るや、凄まじい勢いで気弾を連射し始める。

俗に言う王子戦法だ。彼は何かというとすぐに気弾を連射してきて困る。

だが気弾に対抗する技も最近完成した。

ドラゴンボールではある意味お馴染みの防御であるそれは、バリアだ。

超能力によって己の周囲の全てを遠ざける念動力の場を作り、更にその上からベ

ジットやブローでも出来る気のバリアを展開。

この二重の防御壁により、仮想ベジータの気弾をほぼ防ぎ切っていた。

だがそうして防いでいると、今度は3人目の男が気弾の中を突っ切って蹴りを

繰り出してきた。

その姿は現状でリゼットが知る限りの最強の敵、クウラだ。

彼の蹴りがリゼットの真中を捉え、宙へ蹴りあげる。

だがりゼットは極限の脱力を以てあえて威力に逆らわずに衝撃を流し、フワリと浮いた。

打たれ弱いのは理解している。だからこそ、それを補う防御が必要だった。

その発想の元到達した答え——打たれ弱いからこそ、あえての脱力！

インパクトの瞬間に身体から力を完全に抜き、防御は気と超能力のバリアのみに任せる。

どうせ自分自身がいくら力んでも防御力はそう変わらない。

それよりも力を抜く事で、激流を制する静水のように……あるいは宙を舞う羽毛のように衝撃を殺し、ダメージを抑えるという答えに至ったのだ。

だが敵は3人ではない。もう一人いる。

『キネクト！』

4人目の敵——それは他ならぬリゼット自身を模した仮想リゼットであった。

それが複数の気弾を自在に操り、リゼットを包囲した。

あえて己自身を敵にする事で、敵視点でしか見えない動きの粗や隙を見付けることが出来るのだが……流石にリゼットのコピーだ。技がどれもえげつない。

『そこ！』

偽リゼットは、まるでリゼットの動きが読めているかのように気功波を発射した。爆煙が上がり、バリアの上からリゼットにダメージを与える。

小柄な身体が壁に叩き付けられ、少女の顔が苦悶に歪んだ。

続けて両手に剣を装備した偽リゼットが急接近してきた。

一刀目を跳躍して避け、二刀目を空中で回転して避ける。

背後から飛んで来たベジータの拳を避け、腕を獲って投げた。

狙いは同士打ち！ しかし偽リゼットは気弾でベジータを破碎し、何事もなかったかのように攻撃を続行する。

『落ちなさい！』

「っ……」

放たれた気弾を避ける。

しかしその隙を突いてクウラがリゼットの背を蹴り、地面へと押し付けた。

こうなると脱力も何もない。床や壁に押し付けられてしまえば効果を失うのがこの防御法の欠点だ。

何とか脱出しようとするもパワーは向こうが上だ。

二度、三度、四度とクウラの足がリゼットを踏み躪り、ダメージばかりが増していった。

そこに畳みかけるように悟空がかめはめ波の構えを取り、偽リゼットが腕を頭上で交差させる。

残念ながら、完全に詰みだ。

「神様、そこまで！ それ以上は駄目！」

万一の時の為に端で観戦していたポポの叫びが耳に入り、リゼットは言われるまでもなく気の固形化を解除……仮想戦士達を消失させた。

ようやく踏み付けから解放されたリゼットは激しく咳き込み、荒く息を吐く。

仮想クウラは実戦の厳しさや敵の容赦なさを存分に教えてくれる優秀な仮想敵だが、容赦がなさすぎるのが時々辛い。

「神様、やりすぎ。あそこまで自分を痛めつける必要、ない」

「はーっ……はー……。……はあっ、はあ。」

……い、いえ、このくらいはやらないと、置いていかれてしまいますから。

特に、これからの戦いでは……」

「神様は今、この地球で一番強い。超サイヤ人になった孫悟空よりも強い。

なのに置いていかれると思っている。それ変」

「はは、今だけですよ、それは。」

サイヤ人……特に悟空君の成長速度は驚異的です。

頼もしいのは事実ですが、同じくらい負けたくないと思う気持ちもありましてね。

ま……一応武術家の端くれですから、私も」

悟空達には強くなって欲しい。それは決して偽りの気持ちではない。

だが同じくらい、抜かれたくないという思いもあった。

決して悟空達に弱く在って欲しいわけじゃない。しかしそれ以上に強く在りたい

という気持ちもまたあるのだ。

だからリゼットはこうして、日々己自身を限界まで追い込んでいる。

別に限界まで身体を痛めつけた所でサイヤ人のようにパワーアップするわけではないが、それでも得るものはあるはずだ。

だからリゼットは明日も、そしてその次の日も、この無茶な修練を続けるだろう。そして、その無謀な挑戦は確かに彼女の戦闘力を高みへと導いているのだ。そう……彼女自身の想像をも超えるほどに。

※リゼットがフリーザのフルパワーを長いと誤認していた理由

第97話 ナメック星消滅か!? 大地を貫く魔の閃光（ここから残り5分スタート）

第98話 勝つのはオレだ…生き残りをかけた最終攻撃

第99話 神龍よ宇宙を走れ!! 迫るナメック星消滅の時

第100話 ボクは孫悟空の息子だ!! 悟飯、再び決戦場へ

第101話 俺はこの星に残る!! 勝利への最後の闘い

第102話 とことんやろうぜ!! 消えゆく星に残った二人

第103話 哀れフリーザ! 震えだしたら止まらない!!

第104話 悟空の勝利宣言だ!! フリーザが自滅するとき…

第105話 フリーザ敗れる!! すべての怒りをこめた一撃

第106話 ナメック星大爆発!! 宇宙に消えた悟空（やっと爆発）

リゼット「……そういえば5分だったんですねえ」

ナメック星「本当なら5分で爆発するところを5時間近く粘った俺の努力は認められるべき」

第四十話 美しき野望・完

雪がしんしんと、降り続けていた。

見渡す限りどこまでも続く雪景色は、宇宙ではなかなか見ないもので少し新鮮だ。そんな銀世界を眺めながら、一人の男が岩に腰を掛けて黄昏ていた。

「……どうしたもんなあ」

男——ターレスは、何というか燃え尽きていた。

惑星ベジータが消滅したあの日からずっと、フリーザを殺す事だけを考えて生きてきた。

奴を超えるためにだけにクラッシャー軍団を結成し、様々な惑星を襲っては神精樹の養分へ変えながら流離い……そしてつい先日、ついに悲願は達成された。

己の手によるものではないにせよ、バーダックの息子が伝説へと至ってフリーザを倒したのだ。

それはいい事だ。本当に、夢のような事で……だが、夢であってほしくはない。しかし問題は、フリーザが死んだことによってターレスの目的が失われた事にあ

る。

フリーザを殺すただけに生きてきたのだ。それしか考えていなかった。

奴の死後は自分が取って代わって宇宙を支配してやろうなどとも思っていたが……何故だろう。驚くほどにやる気が出ない。

決して出まかせを口にしていたわけではない。本心から宇宙を支配してやろうと思っていたし、常々その野望をクラッシャー軍団の連中に語っていた。

「ああ、なるほどなあ」

そこまで考え、ターレスはやる気が出ない理由に気が付いた。

何の事はない。単純すぎる話だ。

大事な物は失ってから気付くとはいうが、まさにその通りだったという事だろう。

「……………あいつ^軍らが、もういねえからか」

——同じ目的をもって笑い合える馬鹿共が、もういない。

意外とセンチメンタルだった自分に思わず笑い、自分の我儘に付き合わせる形で死なせてしまったクラッシャー軍団の事を想う。

打倒フリーザの為に集めた駒のつもりだった。

ただの手下……それ以上の存在ではないはずだった。

だが何だかんだでウマの合う連中だったのだろう。いなくなってみれば、妙な孤独感を感じてしまう。

目的はもう達し、軍団も失った。

ならばここにいるのは空っぽの、燃え尽きた一人のサイヤ人だ。

やりたい事もなく、やるべく事もなく……ターレスは完全に、進むべき道を見失っていた。

「いっそ……このまま、ここで凍死^しぬか？」

もう悔いはない。ならば一足先に地獄に行ったあいつ等の所に行ってみるのかもしれない。

そこにはきつと、バーダックもいる事だろう。

ギネは……どうだろう。そんなに悪事を働いていないし、もしかしたら天国にいるかもしれない。

など少しばかり弱気になっていたターレスだが、不意に誰かが近づいて来るのが分かった。

「悟空！ やっぱり悟空だわ！」

うわあ、久しぶり……大きくなったわね。

分かる？ 私よ、スノよ！」

「……カカロットの知り合いか」

ターレスに駆け寄ってきたのは、青い防寒着を着た女であった。

年頃は二十代前半といったところだろうか。

赤い髪が印象的な、それなりに顔立ちのいい女だ。

そんな彼女の後ろから巨漢の男が追いつき、慌てたように声をあげた。

「スノ、違う！ その男、ソンゴクウじゃない！ 似ているけど別人！」

「えっ？」

「ほう、よく分かったな。」

そうとも、そのデカブツの言う通りさお嬢さん。

俺の名はターレス。悪いが俺はあいつじゃねえ」

スノ、と呼ばれた女は別人と言われてもすぐには納得出来ないのだろう。

ターレスを足から頭まで改めて見直し、本当に別人なのだろうかという顔をした。

「え……本当に人違いなの？ 髪とか顔とかそっくりなのに。

……あ、でも、悟空に比べると少し目つきが悪いかも……それに肌も焼けてるし」

ターレスと悟空は外見的にはほとんど同じだ。

顔や髪型に始まり、身長や体格まで一致している。

僅かな差異と呼べるのは肌の色くらいなものだ。

つまり悟空が日焼けサロンなどに行ってしまうえば本当に見分けがつかなくなる。それほどに酷似しているのだ。

「ねえ、貴方こんな所で何してるの？ それにそんな変な服を着て……」

「変で悪かったな」

ターレスの服装は、言わずもがな戦闘服である。

つまりは肩アーマーの鎧で、下は生足という割とアレなファッションだ。

フリーザ軍ならばこれが普通なのだが、地球では大の男がアーマーとパンツだけで徘徊するのは普通ではない。

だからだろうか。スノは思いついたように手を叩いた。

「よし、貴方ちよっとうちに寄って行きなさいよ」

「はあ？」

「だってそんな服じゃ寒いでしょ。この雪の中で足を出しているなんて見てるこっちが寒いし、凍傷になっちゃうわ」

「いらん。俺達サイヤ人はこの程度の温度の変化など……」

「いいから！ 野菜か何か知らないけど、さっさと来る！」

「お、おい……」

スノはどうも、人の話をあまり聞かない性格なのだろうか。

ターレスの言葉を遮って、無理矢理に彼を自宅まで引きずってしまった。

幼い頃に行き倒れていた悟空を引きずって自宅まで持ち帰った腕力は伊達ではない。

勿論ターレスならば抵抗しようと思えば出来るが……彼は、なんだかなあ、という顔でされるがままになっていた。

ブルマの一存でカプセルコーポレーションに居候する事になったベジータといい、チチに押される形で結婚した悟空といい、サイヤ人の男は意外と押しの強い女には弱かった。

その後ターレスは、この地球の服を与えられて半ば強制的に着替えさせられた。新しい彼の服装は黒い厚手のコートだ。

そのデザインはかつて悟空がこのジングル村で着たものと同様で、色だけが異なっている。

慣れない地球の服にターレスが顔をしかめていると、彼の前に温かいスープと、カットされたリングが置かれた。

「これ、食べてほしい、俺が育てた果物」

「ハッチャンはね、果樹園をやっているのよ」

「果樹園ねえ……こんな所ですか？」

酔狂な事をするものだ。そう思いながらターレスはリングの切り身を一口へ放り込む。

すると、一瞬動きが止まった。

……美味しいのだ。それも、今まで食べた果物の中でも一番と呼べるほどに。

実は地球は宇宙全体で見てもトップクラスに食べ物が美味い惑星である。

それがどれほどの水準なのかというと、数億年もの時間を生きてあらゆる惑星の美食を食べつくしてきた破壊神が『言葉を失うほど美味しい』と絶賛するドンドン鳥の茹で卵が、地球の鶏の茹で卵と大差ないというレベルである。

「驚いたでしょ？ 雪の中で保存したリングはシャキシャキした独特の食感を楽しめるのよ」

「……ああ、驚いた。こいつは大したものだ」

ターレスが驚いたのは無論、食感などではない。

とはいえそれを教えてやる必要はないし、黙って残りのリングを口に入れた。



宇宙の地上げ屋フリーザ。

その名は銀河の果てまでも届き、宇宙に生きる全ての命にとって畏怖の対象だ。フリーザとその軍団の名を恐れぬ存在など、それこそ全宇宙の神である界王神やその上に位置する破壊神。遠い過去に封印されたヘラー一族や伝説の超サイヤ人、ツフル人や古の魔人、魔界の住民くらいしかない。あれ？ 意外と多いぞ。

ともかく、そんな極一部の吹っ飛んだ者達を例外としてほとんどの命在る者はフ

リーザとその勢力を恐れていた。

ある日突然攻め込んで来て、惑星の住民全てを殺し尽くして母なる星を奪っていく宇宙の帝王。

その勢力はフリーザが致命傷を負って回収され、サイボーグ化手術を受けている最中であっても健在だ。

今日もまたコルド大王の命令を受けて罪なき惑星へと攻め込み、破壊の限りを尽くしていた。

オカカウメ星。

地球人に酷似した外見を持つ、ヒューマンタイプの宇宙人オカカウメ星人が暮らす平和な惑星だ。

だが今、その星は侵略者達により未曾有の危機に陥っていた。

環境がいい、というだけの理由で襲われてはたまったものではない。だがこれがフリーザ軍だ。

宇宙の治安を守る組織としては銀河パトロールがいるが、彼等は頼りにならない。フリーザどころかサイヤ人にすら太刀打ち出来ない彼等は、フリーザ軍の蛮行を

見て見ぬ振りをし、黙認しているのだ。

即ち、フリーザの軍に目を付けられたらそれで終わり。惑星の終焉を意味する。仮に第一波を上手く退けたとしてもフリーザ軍の規模はあまりに大きく、質も量も宇宙最大だ。

今までにフリーザに目を付けられて滅亡を回避した惑星は皆無であり、このオカカウメ星もまた同様の運命を辿ろうとしていた。

「撃て、撃て！ 原住民は皆殺しだ！」

当然惑星の住民も反発はする。

何せ自分達の命運がここで決まるのだ。立ち上がらないわけにはいかない。

星の軍隊を総動員し、戦える者は皆が武器を手にした。

だが悲しいかな、力が足りない。

サイヤ人との戦い以降、数字がインフレしてしまったが本来は宇宙において戦闘力が1000を超えれば一つの惑星における最強の戦士を名乗る事が可能なレベルだ。

だからこそ下級戦士ですら戦闘力が平気で1000を超えるサイヤ人が宇宙一の

強戦士とまで呼ばれていたわけであり、彼等こそが異常だったのだ。

かつての地球を考えればいい。武術の神と呼ばれた世界最強の男——武天老師ですら戦闘力にして僅か120程度だった事実を。

閻魔大王ですら2000であり、一つの銀河を管轄する界王ですら3500だった事を。

……農民の戦闘力が3000を突破しているナメック星人とかいう化け物もいるが、あれは計算に入れてはいけない。

話を戻すが、フリーザ軍の戦士……特にフリーザに直接仕える戦士とはそんな、各惑星における最強の戦士ばかりを集めた精鋭中の精鋭だ。

農民に蹴散らされた事もあるが、あれは相手が悪すぎた。

繰り返しだがナメック星人は基準にしてはいけない。

更に絶望的なのがフリーザ軍内で量産されている人造兵士、サイバイマンシリーズだ。

最も安価なサイバイマンで戦闘力1200を叩き出し、より高価なテンネンマンならば2400。

高級品のジンコウマンに至っては4000という狂った数値を記録する。

今回の侵略に用いられているのはジンコウマンが1体とサイバイマンが10体。平均戦闘力が10にも届かないこの惑星にとってはまさに絶望的な相手だ。

「ぎ、銀河パトロールは何をしてるんだよ!? 銀河王様は俺達を見捨てたのか!?!」
オカカウメ星人のその叫びは尤もだ。こういう理不尽な侵略を止める為にこそ銀河パトロールはある。

だがその彼等ですら黙認するしかない巨悪がフリーザ軍なのだ。どうしようもない。

誰も助けてはくれない。

奇跡は訪れない。

彼等はただ、今日という日に突如訪れた理不尽極まりない終焉を受け入れるしかないのだ。

——だが、奇跡はそこに在った。

純白の翼が舞い、白い極光が天より降り注ぐ。

ただの一つの例外として逃しはしない輝きが惑星侵略に訪れていた全ての兵士、全

てのサイバイマン、ジンコウマンに突き刺さり、その意識と命を一撃の下に断ち切った。

並外れた気の感知能力による、惑星全域に及ぶ全ての敵対者への同時ロックオン。そこから放たれる、万を超える追尾気弾。それが全ての侵略者を平等に裁く。その光景はまさしく天の裁きであり、平和を蹂躪する愚者へ下された審判だ。銀河パトロールは彼等を、弱き民を助けない。

あの世から遣わされた、各惑星に一人は存在しているその惑星の神も民を救えない。

だが救済者はそこにいた。

遙か遠くの異星より訪れた白い女神が無関係のはずの惑星を救い、民を守る。細い手を振るえば倒壊した建造物が元の姿を取り戻し、荒れ果てた地に緑が蘇る。見返りを求めぬ救済。傷付いた人々を安心させるような穏やかな笑顔。

そして何よりも、限らない神聖さを感じさせる純白の輝き。

少女は何も言わず、賛辞も感謝も受け取らず、翼をはためかせて宇宙へと飛び去っていく。

そんな彼女の姿はある日を境に宇宙の至る惑星で目撃される事となり、フリーザ軍を恐れていた数多の惑星、数多の人々の心に希望の象徴として深く刻み込まれる事となってゆく。

故に彼女に救われた人々は口を揃えてこう述べた。

——彼女こそが女神だ、と。

★

先に言おう。

見返りを求めぬ救済というのは原住民達の大いなる勘違いである。

リゼットは見返りをこれでもかと求めているし、割と打算で動いていた。

結論を語ればフリーザ軍を蹴散らしているのはただの修行である。

惑星単位の超能力の使用や気弾の発射、気の感知などを実戦の場で試す為の丁度いい相手としてフリーザ軍を選んだだけの話であり、要するにこれは『あいつら殴っても誰も困らないし、あいつらで技を試そう』という、ほとんど辻斬りに等しい蛮行こそがこの救済の正体であった。

建物の修復は物質創造能力の試し撃ちだ。ピッコロが原作において悟飯の剣と服

を創ったあれを何度も大規模でやればそのうち能力が成長するんじゃないかと期待して行っているのである。

尚、建物の元の形状などは原住民の記憶などを読んで行っているが、あまりに複雑で修復困難なものは時々変な形になってしまう。仕方ないね。

植物の再生は元氣玉モドキの練習だ。

折れた木々などから気を吸い取り、それを惑星へと還元する。

かつてターレスがやって来た時に行ったあれを再現して能力の錬度を上げているに過ぎない。

しかしそんな知りたくない実情はどうあれ、彼女はまさしく宇宙の人々にとって救世主であり、女神であった。

銀河パトロールですら救ってくれない危機に颯爽と現れ、脅威を排除して無駄に神々しくキラキラと輝いて去っていくのだ。

あれよあれよという間に様々な星——特にヒューマンタイプの宇宙人の間で絶大な人気と信仰を獲得するに至り、やっぱりここでも変な宗教が設立された。

そしてやはり彼女のパンツの色が白かピンクかで戦争が起こった。何なんだお前

等。

あれ？ これ神様じゃなくてアイドルじゃね？ とか言っではいけない。

銀河アイドルとか言っているとランカスレイヤーさんが来てしまう。ワザマエ！

フリーザ軍がリゼット一人の修行のせいでガタガタになる頃には宇宙でも知らぬ者のいない有名人になってしまっており、信者の数は文字通り惑星単位——兆を通り越して京にまで至っていた。恐らく界王神すら差し置いて宇宙で最も有名かつ信仰を集めている神様だろう。

というか界王神は顔が笑い話にならないレベルでフリーザそっくりなのでフリーザの兄弟と誤認している惑星もあるらしい。

さて、ここで一つの話しよう。

この世界において、人々の念というものはなかなか侮れない。

例えば超サイヤ人3すらも退けたジャネンバなどは悪の気の集合体であるし、ピッコロ大魔王だって元々は先代から分離した悪の心だ。

サイヤ人への怨念を増幅する事で生み出されたハッチヒャックという敵も存在する。

ならば信仰が力を持っても何ら不思議はなく、宇宙の人々の信仰はリゼットを一つ上のステージへと押し上げる事となった。

リゼット自身が異常に気付いたのは、青い顔をしたポポや人参化が自室へと押し寄せてきた時の事だ。

リゼットを見て心から安堵する彼等に困惑したりゼットは何があつたのかを聞き、そこで初めて己の身に起こっている異常を知った。

——気が感知されなくなっている。

リゼットの気が消えたわけではない。確かに彼女の気は存在しているしリゼット自身は今まで通りに感じている。

だが彼女以外から見てリゼットの気というものがまるで感知出来無くなつてしまつたのだ。

まるで透明……クリアになりすぎた気を誰も感じ取る事が出来ない。

強さを計る事も出来ないし、位置も分からない。

この現象はリゼット自身にとっても予想外であり、原因もさっぱり分からなかつた。

だがその疑問は界王に念話で尋ねる事で氷解を迎えた。

曰く。

『それは神の気じゃな。お主は立場だけではなく、存在そのものが神へと近付いたんじゃ。

儂等よりも遙か上——破壊神ビルス様という方がおられるが、その方の気もクリアであるが故に神以外には感知出来ん。

お主は不完全ではあるが、宇宙中から集まった信仰によって高位の神のステージへと至った。

これで少なくともお主よりも弱い、神ならざる者ではお主の気を感じ取る事は不可能となったわけじゃ。

……お主はこれで神としては儂よりも上になってしまったわけじゃが……立場を忘れるでないぞ。

あくまで立場は儂が上じゃ……いいな？』

『アッハイ』

破壊神ビルスとかいう聞いた事もない名前が出てきたが、とりあえずリゼットは

自分の気がクリアになった事だけを理解した。

ビルスとかいうのは、まあ放っておいていいだろう。

原作どころかその後を描いたGTでも見た記憶がないから、多分設定だけのキャラだ。関わる事はあるまい。

それにドラゴンボール世界の神様は界王神が最高位のはずなので、実力も自動的にその下となる。

全宇宙の神様が超サイヤ人に驚くだけのリアクション要員な世界で今更破壊神と
か言われても、という感じであった。

……実際は全然違うのだが、今のリゼットがそれを知る術はない。

その後もリゼットはとにかくフリーザ軍を相手に迷惑極まりない修行を続けた。
ついでにクウラ軍残党もボコった。

決して自分からフリーザ系列の惑星を侵略するような真似こそしなかったが、他の惑星に向かうフリーザ軍がいれば嬉々として叩き潰した。

1年も経つ頃には宇宙中で猛威を振るっていたフリーザ軍……否、コルド大王の勢力はすっかり衰退してしまい、見る影もなくボロボロにされてしまっていた。

これも全てリゼットのせいである。

しかし彼女が修行と称してコルド大王の勢力をサンドバッグにすればするほどに宇宙の人々は諸手を挙げて大喜びし、益々信仰が集まる。酷い循環だ。

更に追い討ちをかけたのが、かつてフリーザ軍に所属していた元幹部、ザーボンの裏切りである。

彼は何を血迷ったのか『永遠の美』というリゼットのファンクラブを開設し、全宇宙に声をかけて打倒コルド一派の旗を掲げた。

勿論、本心からリゼットのファンなどになったわけではない。

彼女の美を認めない訳にはいかないし、ぶっちゃけ結構惚れているのだが、それでも己よりも美しい者は許せない。だから心までは屈していない。

要するにこれは利用だ。コルド軍を消さぬ限り己に未来はないと考えたザーボンは彼等を追い落とす為の都合のいいシンボルとしてリゼットを持ち上げ、偶像に仕立て上げたのだ。

何よりもかつてフリーザの側近であった彼の口から語られた『ぶっちゃけクウラもリゼット様に倒されました』発言は全宇宙を震撼させ、人々に希望を抱かせた。

あの圧倒的な強さを持つクウラですら彼女に敗れた。消えぬ悪など存在しない。宇宙よ、今こそ女神の名の下に集い、巨悪を討ち滅ぼす時だ。

こうして本人の与り知らぬ所で勝手に宇宙一の女神兼アイドルにされてしまったリゼットは、今日も今日とて宇宙中から勝手に集まってくる信仰によって仙術――否、神通力を益々強めていた。

そしてザーボンは宇宙最大規模の組織である『永遠の美』の総帥として巨万の富と栄誉を手に入れた。

今や彼は銀河パトロールの出資者であり、銀河王ですら頭が上がない。まさしく大出世である。人生何がどうなるか分からないものだ。

ザーボンさん「世界を制するのは美と知略。そして金。

妖星が告げておるわ……神が私を選んだと！」

【戦闘力】

ザーボン…3万↓40万（神精樹の実）

第二形態…60万

まさかのザーボン大勝利ルート。銀河パトロールも金の力で掌握しました。

金の出所は主に、リゼットを偶像に仕立てて開催したイベント等。

ちなみに今のザーボンさんの恰好はファー付きのコートにサングラス、両端には常に美女を侍らせているという酷い状態です。

自室は金ピカの趣味の悪いゴールドな部屋で、ネックレスやアクセサリをジャラジャラさせつつ、群がる女には餌代わりに金貨やダイヤをばら撒きます。今の彼は宇宙一の金持ちです。

どうしてこうなった。

第四十一話 復活の『F』（1回目）

| 人 人 人 人 |

> 復活の F <

| Y Y Y Y Y |

ナメック星での戦いが終わってより130日後。

ナメック星のドラゴンボールが復活し、地球のドラゴンボールでフリーザ一味に殺された者達を蘇生させる事に成功したナメック星人達は新しい惑星を見付けてそこに移住していった。

更にそこから1年と130日……地球には強大な力を持つ二人の侵略者が近付きつつあった。

「あれが地球だよパパ……僕をこんな目に遭わせた超サイヤ人もあそこにいるんだ」
宇宙船の中で声を発するのは、確かに悟空が倒したはずの因縁の敵、フリーザ

だった。

何ともしぶとい事に彼はまだ生きており、身体のをほとんどを機械化する事によって以前よりも力を増して復活したのだ。

もしも技術力が更に進んでいれば、あるいはサイボーグ化の必要すらなく生身のまま再生出来たのかもしれないが、その技術の完成には後10年はかかると言われている。

力を増したフリーザの隣にいるのは、そのフリーザよりも更に強大な気を持つ巨漢であった。

「小さな星だ。一発で消してしまえばよからう」

「それじゃあ気が済まないよ。あいつに思い知らせてやりたいんだ、パワーアップした僕をね」

「超サイヤ人はともかく、白の女神だけは何としても消さねばならん。どんな手段を使ってもだ。」

あいつ一人のせいで我が勢力の権威は地に堕ちた……これを回復するには奴を惨たらしく殺し、宇宙中にその死体を晒して我が一族への恐怖を再び植え付ける以外

にない」

男——コルド大王は一族の異端児である。

元々彼らの一族とは、宇宙空間でも生存出来るほどの強種族には違いないが、1億を超えるような馬鹿げた戦闘力を持つ宇宙人ではない。

尊大でプライドの高い者が多いのは事実だが、どちらかといえば大人しい宇宙人だ。

だがある日、一族の中に異常とも言える力を持つ突然変異が生まれた。それがコルドだ。

彼は生まれ持った絶大な力で瞬く間に宇宙中に名を知らしめる事に成功し、様々な惑星を支配して一大帝国を築き上げた。

だが規模が大きくなれば管理も難しくなる。

彼には既にクウラという息子がいたが、残念ながら息子は天才ではあったもののコルドの強さを受け継いではいなかった。

そこでコルドは己の要素を色濃く継いで生まれたもう一人の子供に、他の星域の管理を任せる事にした。それがフリーザだ。

嬉しい誤算だったのは、フリーザの登場により劣等感を感じたクウラが猛トレニングを始めてフリーザ以上の戦士となった事か。

流石は我が子、やれば出来るではないか。

コルドは感心し、クウラにもフリーザと同じだけの規模の星域を与えて管理を任せた。

こうして優秀な息子を二人得たコルドは効率よく様々な惑星を支配し、更に勢力圏を強めていたのだ。

……唯一の悩みの種は息子同士の仲が悪い事だろうか。

クウラは何の努力もせずに力を持って生まれたフリーザを苦勞を知らない甘ちゃんと呼んで軽んじているし、フリーザは生まれつきの強者ではないクウラを自分や父とは違う劣等種と呼んで見下している。

しかしそのクウラも白の女神によって殺された。

今やコルド大王が築いた帝国はかつての見る影もなく、衰退している。

戦闘力が1000を超える優秀な戦士は悉く遠征先で白の女神に消され、戦力不足に陥った軍は様々な惑星の独立戦争を許す事となった。

更に彼女の登場からしばらくして『永遠の美』とか名乗る組織が出現し、今もその規模を増し続けてあちこちでコルド大王の軍を蹴散らしている。

……あのザーボンとかいう裏切り者もいつか消さねばなるまい。

しかしすぐに実行に移せないのは、ザーボンの組織と正面からぶつかり合えばこちらも無事では済まないからだ。

ザーボンは『宇宙一の傭兵』と名高いレジックを護衛に雇う事で己の安全を図り、更にいくつかの惑星と同盟を結ぶ事で守りを強固にしていた。

結果、いくつもの惑星や星系がコルド大王の傘下から離反して彼の勢力は急速に衰退させられた。

クウラに任せていた星域などはほぼ全滅だ。完全に支配域ではなくなってしまう。

「これから起こる事は全宇宙に発信される。奴等の見ている前で希望の象徴とやらを殺すのだ。」

そうする事で初めて我が一族の権威は復活する」

この日の為に宇宙の様々な惑星で親しまれている宇宙テレビ局を制圧し、番組を

一つジャックした。

目的は勿論、そこに女神の最期を映して人々の希望をへし折る為だ。

ただ殺すのでは生温い。全ての尊厳と誇りを踏み躪り、恥辱と屈辱の中で後悔しながら死んで貰わなければならない。

無様に命乞いをさせ、映像を見ている全ての者に失望の念を抱かせる。その義務があの人にはあるのだ。

「楽しみだ……あの強者を気取った顔が恐怖に歪んで命乞いをする時がな」

コルド大王は己の勝利を疑いもせず、青く小さい惑星を眺めていた。

★

——来たか。

リゼットは神殿の中から、フリーザ親子の来襲を誰よりも早く感知していた。遠視で見る限り、どうやらいきなり地球を消してしまうつもりはないらしい。あくまで地球に降り立って、素手で決着を付ける気のようにだ。

勿論いきなり地球を砲撃されてもリゼットならば対処出来るが、降りてきてくれるならその方がやりやすいのは事実だ。

とはいえあまり戦いが長引くと地球が戦いの余波で滅んでしまいかねないので、早急に片付けねばなるまい。

リゼットはポポと兎人参化を連れて神殿から飛翔し、地上へと向かった。

地上で待つ事数十分。

まず最初にやって来たのはピッコロだった。

彼はリゼットを見るなり、「今までどこにいたんだ？」などと聞いてきたが、ずっと神殿にいたとだけ返答した。

どうやら彼もリゼットの気は感知出来ていないらしい。

やがて悟空を初めとするメンバーが勢ぞろいし、全員が出会いがしらにリゼットの気に関して尋ねてきた。

何でも、もしかしたら死んだんじゃないかと本気で心配されていたらしい。

「大丈夫ですよ。ちょっと修行の影響で他者から気を感じされにくくなっただけです。」

先代様や界王様といった、私と同じ神様なら私の気も感知出来ます」

「神様だけが持つクリアな気かあ、すっげーなあ。そんなもあるんか」

気の感知というのは戦いにおいて大きな要素である。

例えば目だけに頼って戦っていた場合、背後に回られてもすぐには気付けない。だが気の感知があればすぐに場所を特定して反撃に移る事も可能となり、悟空達が多量ならば格上と渡り合えるのもこれがあるからだ。

だがこれから先、リゼットの気を感じて戦うという事は出来無くなるのだ。それは全力を出したまま気配を消して動いているに等しく、それだけで戦いの天秤が大きく揺らぐほどに有利な能力だ。

もっとも、悟空達とリゼットが戦うという事がまず有り得ないわけだが。

「ところでターレス……ですよね？ まだ地球にいたんですか？」

「ああ。結構住み心地がいいんでな」

リゼットが視線を向けた先にいたのは、黒いシャツをラフに着こなした悟空そっくりの男、ターレスであった。

肌の色が黒いので悟空との区別が付かない事はないが、二人が並ぶと一瞬どっちがどっちだか分からなくなる。

「今はどちらに？」

「ジングル村って場所だ。今はそこで果樹園をやってるぜ。

果物を育てるのは嫌いじゃないからな」

「そのお金は一体どこから？」

「金ってーか、元々あったモンを手伝ったっていうか、引き継いだっていうか……まあ元手がないわけじゃねえ。

持っていたスカウターをあのブルマって女に渡したら大金をポンとくれたしな。気前がよくて嬉しくなるね。本当は俺の宇宙船もくれてやりたかったんだが、ナメック星と一緒に宇宙の塵になっちゃったからなあ……。

ま、一度遊びに来いよ。流石に神精樹はないが、大体の果物は揃えてるぜ。

地球には存在しない果物もいくつか取り扱ってるしよ」

こいつ神精樹以外にも果物の種を持ち歩いていたのか。

そんな意外な一面に驚きながらも、リゼットは曖昧に頷いておいた。

「そうそう、ナッパの奴は野菜の栽培をやってるんだぜ。これがなかなか……」

「話はそこまでだ。来たぞ！」

ピッコロが叫び、それと同時にフリーザの宇宙船が彼等の頭上を通過した。

相変わらず無駄に大きい宇宙船だ。

リゼットは顔を上げると宇宙船の着地した方向へと無言で歩を進める。

戦いを避けるという選択はない。奴等はここで倒す。

そのリゼットのすぐ後に続いたのは悟空、ピッコロ、ターレスだ。

戦いが始まればこの4人を中心とした編成で挑む事になるので、この順番は正しい。

リゼット達が宇宙船の前に立ち、フリーザ達が出て来る。

隣にはフリーザ第二形態のような巨漢が立ち、その前を守るようにゾロゾロと兵士達が沸き出てきた。

「これはこれは。お揃いで出迎えご苦労様」

「フリーザ……おめえやっぱ生きてたんか」

「おかげさまでね」

フリーザが一歩前に歩み出し、彼と因縁の深い悟空、ターレス、ベジータ、ピッコロが迎え撃つ体勢を取った。

コルド大王や部下は動く様子を見せない。

超サイヤ人相手では雑魚をいくらぶつけても無駄と悟っているからだろう。

大王自らが動かないのは……目的が他にあるからか。

先ほどから、憎悪を込めた視線をずっとリゼットへと向けている。

「悟空君。フリーザを半端に追い詰めるような事はせずに。一気に倒してしまうように。」

彼がその気になれば地球を消せる事を忘れないで下さい」

「ああ、わかっている」

悟空は上空を示して飛翔し、それに続いてフリーザも飛んだ。

リゼットはその場に留まり、コルド大王と相対する。

コルドは余裕の笑みのまま腕組みを解き、一歩前へと出た。

「おい、こいつの戦闘力は？」

「そ、それが……故障でもしたんでしょうか？ 先ほどから計っているのですが数値が出てきません」

「ふん。新型もアテにならん」

今のリゼットの気は神でなければ計る事が出来ない。

当然機械などで計測出来るわけもなく、実際に戦うまでは誰もリゼットの实力を掴めないのだ。

だがそんなコルド大王達を嘲笑うようにブルマが懐から出したスカウターをセツトしてコルドに合わせ、そして驚いたように言葉を発した。

「ちょ、ちょっと！ 神様、あいつやばいわよ！ 戦闘力2億あるわ!？」

「……計れるんですか？ それ」

「ええ。ターレスから貰ったスカウターを改造して最大で10億まで計測出来るようにしたわ。

やっぱり私って天才よね！」

「否定する言葉が見付かりません」

リゼットはブルマの天才ぶりに心底呆れていた。勿論感心もしているのだが、あまりにブルマがぶっ飛んでいるせいで感心が一周して呆れになってしまったのだ。コルド大王も同じ感想のようで、表情を崩して目が点になっている。

それはそうだ。最新式のスカウターでも数十万を計測すれば壊れてしまうのに、ブルマは10億までOKというふざけた発言をしているのである。

コルド大王はすぐに表情を戻すと、ブルマへと声をかけた。

「おい、地球人の女。どうだ？　儂の部下になってその頭脳を活かしてみる気はないか？」

こんな辺境の惑星でその頭脳を埋もれさせるのは余りにも惜しい……宇宙の損失と呼んでも過言ではない。貴様の頭脳はこんな小さな惑星ではなく宇宙で発揮されるべきだ」

「はん、おっ断りよ！　誰が侵略者なんかについて行くもんですか！」

「貴様が望むままの待遇を与えよう。惑星だろうが富だろうが好きなだけくれてやる。

宇宙の最先端医療技術で永遠の若さも与えよう。

必要ならばこの星に手を出さずに帰ってもよい……その女神だけは殺すがな。フリーザも儂が言い聞かせる。どうだ……考えてはみぬか？」

「しつこいわよ！」

「……そうか」

コルド大王は残念そうに溜息を吐き、それからブルマの付けているスカウターを

物欲しそうに見る。

やはり彼女ほどの天才はそう簡単には諦められないのだろう。

「おいお前達。儂が白の女神を殺している間にあの女を生け捕りにしろ。

傷は決して付けるな。それとあのスカウターは後で儂に渡せ」

「はっ！」

ブルマが首を縦に振ってくれないので結局強硬手段に出るようだ。

こういう所は実にフリーザの父親らしい。

しかし、技術者の大事さとブルマという存在の得がたさを知っている辺りは流石

大王というべきか。

気に入らなければすぐに消してしまうフリーザとは違う。

「待たせたな。そろそろ始めようか」

マントを翻し、コルド大王が構えた。

リゼットもそれに合わせて構えを取る。

とはいえ、それは傍から見れば構えには見えないだろう。

あらゆる格闘技を身に付けたりゼットに決まった型や構えは存在せず、状況と敵

に応じて構えそのものが変幻自在に変わる。

故に彼女が最初に取りべきスタンダードな構えとは、無型。

両手を下げて自然体とし、どの構えにも瞬時に移行出来るように備える。

気弾を二つ生成。繰気弾のように打撃性を与えたそれはリゼットに近付かず離れず、クルクルと彼女の周囲を旋回し続ける。

これは彼女の手が足りない時に敵の攻撃を自動で防ぎ、また敵が隙を見せれば自動で攻撃、迎撃を行うサポート用の気弾だ。

最後にバーストリミットの倍率を上げ、コルド大王にも匹敵する戦闘力まで上昇させた。

もつとも傍から見れば彼女の纏う輝きが一層強まったようにしか見えないだろう。

「ええ、闘争めましようか」

あくまで微笑のままそう告げ——リゼットは一瞬でコルドの懷へと飛び込んだ。

【各キャラ戦闘力】

— 味方陣営 —

・リゼット

基本戦闘力…1400万

バーストリミット（最大40倍）…5億6千万

（重装備や気霊錠はあるものの、面倒なのでここからは省きます）

・孫悟空（免許取得）

基本戦闘力…500万

超サイヤ人…2億5千万

・ピッコロ（免許取得）

基本戦闘力…1500万

界王拳（最大15倍）…2億2500万

・ベジータ…500万

・ターレス…490万

・ナッパ…470万

・孫悟飯…50万

※瀕死強化をあまりしなかったから……

・天津飯…44万

・クリリン…42万

・ヤムチャ…42万

・兎人参化…40万

・餃子…35万

・Mr・ポポ…38万

・バーストポポ…76万

・岩陰に隠れている謎のイケメン…450万

超サイヤ人…2億2500万

―不参加―

・カリン様…37万

・バーストカリン…74万

―フリーザ陣営―

・サイボーグフリーザ.. 1億5千万
・コルド大王.. 2億

第四十二話 ソリッドステート・スカウター

脱力——全身から力を完全に抜き、余計な力みを捨てる。

己自身がまるで空になったかのようにイメージし、力の伝達を妨げる一切を排除。そして、そこから地を踏み抜く事で助走も前動作も省き、瞬間にして最高速度を叩き出した。

残像すらも残さぬそれはまさに瞬間移動にも等しい速度を生み出し、リゼットの身体をコルド大王の懷まで無音で運ぶ。

「!?」

驚くコルド大王がすぐに迎撃しようとしたが、その腕をサポート気弾が弾いた。そうしてガラ空きになった胸元に掌を当てる。

その状態から踵、膝、腰、背中、肩、腕、手首へと続く27箇所の関節を連結加速させ通常の攻撃を遥かに超える加速を生み出した。

通常の、戦闘力にして10程度の格闘家でもこれを完全に使いこなしたならばあるいは音速を超えるやもしれぬ絶技。それをリゼットの身体能力で行えば、その速

度は最早光すら軽く凌駕する。

この加速を乗せての掌底！　コルド大王の胸を衝撃が貫き、内部に気が浸透する。

ピンポイントで狙うのは心臓だ。この戦いを派手にする気などリゼットには毛頭なく、長引かせる気すら皆無。

いざとなれば地球ごと爆破すればいいと考えている相手に時間と暇を与えるのは最大の愚行だ。

だから何もさせない。

（掬えた——心臓）

内部へと気を送り込み、心臓付近に浸透させたソレを爆発させる。

夥しい量の血を吐き出しながらコルド大王が崩れ落ち、何時の間にか立ち位置を変えていたリゼットは返り血の一つも浴びる事なく大王を見下ろしていた。

それは何と早過ぎる決着だろうか。

そして何と呆気なく、何と簡単な終わりだろうか。

生まれてより今日まで強敵と出会った事すら皆無。宇宙の帝王として君臨し続け

てきたコルド大王の、生まれてより初のダウン。

何故銀河の辺境の惑星の神がこんな意味のわからない強さなのだ、と思わずには
いられない。

成人男子の平均戦闘力が5にも満たない弱小種族が地球人だ。

突然変異であろうと100を超えれば上出来……ならばそこに居る神の強さな
ど、300もあればお釣りがくる。

だがこの女神の戦闘力は軽く見積もっても、2億のコルド大王を一撃で下すも
のであり、完全に地球という惑星のレベルと一致していない。

「がっ……はア……！ お、お……！」

「まだ息がありますか。心臓を潰したはずなのですが……生命力も段違いという事
なのでしょね」

リゼットが指を動かす。

するとリゼットの周囲を旋回していた光球が鎖へと変化し、コルド大王の両手両
足を拘束した。

先も述べたが、コルド大王には何もさせない。

たとえ死にかけていようが、彼ならば地面に手を突いた状態から本気の気弾を撃つだけで地球を壊せてしまう。

だから手は上に向け、大の字にするように縛り上げた。

その上で白い剣を創造し、刃をコルドへと向ける。

「ま、待て……っ！ た、たのむ、見逃して、くれ……。」

わ、わしが悪かった……こ、この星には何もしない……頼む……」

コルドは恥も外聞も捨てて己の身の安全だけを懇願した。

彼は生まれた時より強者だった。

苦戦した経験などなく、敵すらいなかった。

故にここまで追い詰められた事などあるわけもなく……逆境を知らぬが故に酷く脆かった。

この戦いが他ならぬ彼自身の指示によって宇宙中に配信されている事も忘れ、宇宙の人々が見守る中で彼は己の命を助けてくれと叫んだ。

何たる皮肉。こうなるべきは女神の方だったはずで、彼女の無様な最期を演出する為に舞台を整えたというのに。

気付けば主演女優は舞台監督となり、己こそが主演となっていた。

タイトルは『処刑』。主人公は己の最期を悟って惨めに命乞いをして尊厳を地に落とし、それでも許されずに殺されてしまうという救いのない三流芝居。

彼はそれを自ら演じる事となってしまうのだ。

そして、監督が変わったからといって脚本は何も変わらない。

変わったのは役者と舞台監督のみ。結末は何も手を加えられず、そのまま執行される。

「でしょうね。死人はこの星に手出しなど出来ません」

「ま、待っ……！」

構わずに超能力で剣を射出。

剣はコルドの上で1回転して勢いを付け、そのまま彼の身体を両断した。
更に鎖が深く絡み付き、コルド大王の遺体を上空へと運ぶ。

——爆破。

コルド大王の遺体を塵へと還し、もう用はないとばかりにケープを翻して背を向けた。

否、背を向けたのではない。唾然としているフリーザ軍の兵士達全員へと向き直ったのだ。

絶対だと思っていた自分達の主の余りに呆気ない末路に呆然としていた兵士達に向け、リゼットは腕を一振りする。

「Mort^死es^よinnu^無merabi^数lia^にabi^在le^れ」

視界を焼く光が一瞬で全兵士の間を駆け抜け、その命を停止させた。

超能力により脳と心臓の両方を強制的に停止させられた兵士達は音もなく崩れ落ち、その死体を大地の上で晒す。

命在る格下では決してリゼットには勝てない。何故ならこれがあるからだ。

実力の差があるならば戦いという行為すらそこには要らず、超能力による金縛りを体内に送り込む事で脳と心臓を止めてしまえば、それで終了だ。

リゼットは常に対格上の戦いを考えて修練を積んでいる。

だが彼女は同時に最悪の格下殺しでもあるのだ。

余りにも一方的な決着にヤムチャ達はゴクリと喉を鳴らし、苦笑いをするしかなかった。

★

「そ、そんな……パパが！」

「ヒュウ、さっすが神様。また強くなったんじゃないか？」

「気が測れんから分かんが、確実に以前よりも腕を上げているだろう」

コルドの瞬殺劇にフリーザが絶句し、悟空とピッコロが関心を向けていた。勿論これに焦ったのはフリーザだ。

父の実力はサイボーグと化した自分よりも上だった。

それがあまで容易く殺られたのだ。

つまり、あの女がいる時点で己の勝ちほぼ消えているという事になる。

もしもフリーザが気を測る力を持っていたならば、そんな事には地球に来る前に気付けたかもしれない。

クウラの最大戦闘力を4億7千万と正確に認識さえ出来ていたならば……それを倒した女がいる時点で勝ち目などないと理解出来たのだろう。

だがフリーザにそんな事が出来るわけもなく、仮に気を測る事が可能な部下がい
たとしても『クウラ様の方が上です』などとほざけばフリーザに殺されるに決まっ

ているので嘘を吐くしかない。

無論直接対決などコルドが認めるはずもなく、フリーザは自分とクウラの戦力差を把握出来ぬまま今日という日を迎えてしまった。

その代償がこの、詰み確定の状況である。

「ハッ、どうしたよフリーザ。こんなはずじゃなかったってか？」

「ぐ……黙れ！ 雑魚風情が！」

「おいおい、雑魚だなんて酷え言い草じゃねえか。」

それじゃあ……こうすりゃあ話を聞いてもらえるのかな？」

ターレスが不敵に笑い、拳に力を込めた。

すると彼の気の変質し、頭髮が逆立つ。

黄金の気が全身を包み、疑似的な超サイヤ人へと変化した。

悟空も一度は見せた、超サイヤ人へ変身する前段階の姿だ。

「なっ……!？」

これにはフリーザだけではなく、悟空やベジータも度肝を抜かれた。まさかの予期せぬターレスの覚醒である。

いや、違う。今まさに覚醒しようとしている。

超サイヤ人の条件は3つ。

一つ、最低限の戦闘力である300万への到達。

二つ、穏やかな心。

そして三つ、激しい怒り。

最初の条件である300万にはナメック星での戦いで到達した。

二つ目の条件は穏やかになる事で増すS細胞……ターレスとは本来無縁だったはずのそれだが、しかし地球での生活とスノとの出会いが彼に穏やかさを与えていた。

そして最後の激しい怒りだが、こんなものはターレスにとって条件でも何でもなかった。

怒りなど常にかけていた。

惑星ベジータを消され、バーダックとギネを殺されたあの日からずっと、己の無力さと、『家族』を奪ったフリーザへの怒りが尽きる事はなかった。

今ここにすべての条件は満たされ、彼は伝説へと至る資格を得た。

ならば怒れ。

この怨敵へ、サイヤ人全ての仇へ。今こそ怒りをぶつけろ。

一度はカカロットへ譲った……己の無力さ故に譲るしかできなかった望みを今こそ果たすために。

今度こそ、この手で決着を着けるために。

「おおおおおおおおおーッ!!」

ターレスが吠え、逆立った髪が黄金に変色した。

彼を中心に突風が吹き荒れ、目の前に出現したそれにフリーザは震えた。

黄金の髪。緑色の瞳。

どれも見間違えるはずがない……その姿は、紛れもなく超サイヤ人と呼ばれるものであった。

「超サイヤ人は一人じゃねえ……ここにもいたというわけだ」

「そ、そんな……まさか、貴様までもが……」

「――俺の勝ちだな」

ターレスが飛び込み、フリーザの頬へと肘をめり込ませる。

更に腹に拳を打ち込み、サイボーグの機械の上から強引に衝撃を与えた。

フリーザも咳き込みながら拳を振るうがターレスの方が速い。

背後に回り込み、フリーザを羽交い絞めにしてから背中に容赦なく蹴りを何度も叩き込み、彼の身体を宙へと上げた。

更にその先に回り込み、ダブルスレッジハンマー。フリーザの頭部へと拳をめり込ませ、地面へ叩き落とす。

「この猿野郎があ！」

フリーザが激昂し、跳躍すると空中へ手を掲げた。

追い詰められた時の手段が被っている辺り、やはりクウラと兄弟なのだろう。

かつて惑星ベジータをも滅ぼした業火の如き巨大な気の塊……スーパージョウを以て惑星諸共ターレスを消す事を選んだのだ。

それに対しターレスが取ったのは迎撃。

右拳にありったけの気を集め、不敵に笑う。

その姿にフリーザは一瞬、かつて己に歯向かってきた彼そっくりのサイヤ人を幻視した。

「『……これで全ての因縁が決着^{おわ}る』」

気を更に高め、ターレスが呟く。

その背後に見えるサイヤ人^{バーダック}の幻影と声が重なり、フリーザは一瞬、過去にタイムスリップでもしたかのような錯覚を受けた。

「バーダックの運命……ギネの運命」

悟空達はあえて手を出さない。

万一の時にいつでも動けるように備え、戦いはターレスに任せていた。

彼だけの、譲れない因縁があると悟ったのだ。

「貴様の運命」

フリーザには益々、今の状況があの日^{その日}の光景と重なって見えた。

たった一つ違うのは相手が超サイヤ人だと言う事。

違う、負けるわけがない。

俺は宇宙最強だ！ その自負を以て火球を更に巨大にする。

「そして、この俺の運命も……！」

——これで最後だあああああッ!!」

ターレスが掌から解き放ったその技の名こそファイナルスピリッツキャノン。

かつてバーダックが使用した彼の最大の技であり、フリーザをいつか倒すならばこの技しかないと決めていたものだ。

激突する青い気弾と赤い火球。その光景はかつての焼き直しであり、だが結果は異なった。

かつては飲み込まれて消えた青い輝きは決して消えず、逆にフリーザの火球を押し返している。

「ば、馬鹿な……！ この俺が……フリーザ様が……下等な、猿野郎などに……！
こ、こんな……こんな……！」

「くたばれフリーザ……ッ!!」

「こ、こん——」

火球がフリーザを呑み込んだ。

それだけに終わらず、火球を貫いてきた魂の砲撃がフリーザへ迫る。

その刹那、フリーザは確かに観た。

——己へ迫る気弾が、あの日確かに殺したはずのサイヤ人^{バーダック}の姿になるのを。

その光景を目に焼き付け、今度こそフリーザは宇宙の塵となった。

★

この日、宇宙は真の意味でコルドやフリーザの恐怖から解放された。

いかに勢力が衰退しようと、やはりコルド大王やフリーザという悪の帝王は人々にとって抗い難い恐怖そのものだったのだ。

しかしそれが地球に訪れた事で地球の神や、そこに住むサイヤ人によって死を迎え、宇宙の様々な星域に映像配信されたのだ。

無論、この機を逃す反乱組織ではない。

いくつもの惑星から義勇軍が発足され、惑星連合となってフリーザ達の残存戦力を徹底的に叩いた。

特に獅子奮迅の活躍を見せたのが高い戦闘力を誇る『永遠の美』の若き総帥ザーボンだ。

彼は白いコートをためかせ、女性達の黄色い歓声を浴びながらいくつもの戦場に姿を現し、フリーザ系列の惑星を執拗なまでに攻撃した。

かつて栄華を誇ったフリーザ傘下の星々も、こうなれば惨めなものだ。

今まで他者を食い物として甘い蜜を吸い続けてきた報いとばかりにあらゆる惑星から非難を受け、ついに重い腰をあげた銀河パトロールからも『第一級犯罪星間』として指定された。

特にフリーザと密接な関係を築き、他の惑星を買い取っていた星には重い罰が下され、銀河パトロールによる『絶滅爆弾』の投入も珍しくはなかったという。

勿論抵抗はあった。

いかに大将を失ったといえど、相手は宇宙最強の軍隊フリーザ軍だ。

様々な惑星のエリートを集めたその軍勢に人々は苦しめられ、多大なる苦戦を強いられた。

だが宇宙の人々は女神の名の下に手を取り合い、宇宙の自由の為に戦った。

更に戦局を動かしたのが、かつてフリーザ一味の勝手な欲望によって絶滅の危機に瀕し、しかし地球からやってきた女神達に救われ、地球のドラゴンボールで蘇生された者達——即ち、化物集団ナメック星人の参戦であった。

実はザーボンとの間にも一悶着あったのだが、ここで幸いだったのはザーボンが殺したナメック星人の数が少なかった事だ。

そのほとんどはドドリアや手下が行っており、ザーボンのやった事など老人二人を殺したくらいである。

勿論大罪には違いない。だがザーボンは『フリーザに命令されて仕方なくやってた。女神と出会って心を入れ替えた。今は償いの為にこうして戦っている』と熱弁。人の好すぎるナメック星人達はこれを信じ、過去を水に流してしまった。お人よしすぎる。

しかし人はよくとも戦闘力はまさに化物。

畑仕事をしているだけの若者が戦闘力3000を超え、戦闘タイプのネイルに至っては42000の頭のおかしい集団は次々とフリーザ軍残党を叩き潰し、瞬く間にその勢力を削った。

だが何よりもやばいのが、こいつの存在である。

「ポルンガ！ フリーザ軍残党の持っている武器を全部消して下さい！」

『オッケー』

「ポルンガ！ フリーザ軍残党の食料を全て消して下さい！」

『オッケー』

「ポルンガ！ フリーザ軍残党の物資も全て消して下さい！」

『オッケー』

もはや何でもありであった。

ほら、お前等はこの龍に用があつて平和なナメック星を侵略して星を爆破までしやがったんだろう？

喜べよ、これがお前等の欲しがつてた龍だぞ。

そう言わんばかりに激怒したナメック星人達は躊躇を捨ててポルンガを投入し、反則としか呼べない所業に出た。

普段温厚で優しい人ほど本気で怒ると怖いのだ。

一つ目の願いで全ての武器を奪われ、二つ目の願いで全ての食料を奪われ、三つ目の願いで物資も全て奪って星を更地にされた。一体ここからどう逆転しろというのだ。

これによりとうとうフリーザ軍残党は何も出来なくなつてしまい、やがて全面降伏を経て組織そのものの完全解体へと移行する事となる。

そして女神への熱狂的な信仰は留まる事なく、今日も増え続けている。

これからもきつと、様々な惑星にて世界を救った神話として語り継がれ、信仰が消える事はないだろう。

尚、それら全てが本人の全く与り知らぬ話であった。

一方ザーボンは崩壊したコルド軍を吸収し、ますますその勢力を拡大。

銀河パトロールの大株主となって実質上頂点に君臨し、更に自費で銀河パトロールの類似組織をいくつも設立することで銀河パトロールの価値を相対的に下げた。言力と影響力を低下させた。

それでいて、銀河パトロールと同等の規模の組織をいくつも下部組織に持つことによって自らは銀河王を上回る発言力と影響力を手にし、実質的に銀河を支配してみせた。

いつしか人は彼を、超銀河王ザーボンと呼んだ。

END (おわり)……

→ 未来トランクスル

リゼット「あっ」

「??？」

タイムパトローラー「……………」

謎のイケメン「あの人、何か今日は凄い上機嫌ですね」

時の神様「ええ。あの歴史を見てからずっとニヤニヤしてるわ」

第四十三話 ボクの父はベジータです……謎の少年の告白

子供「この超サイヤ人になれる謎の少年は何者なんだ！

正体が明かされる次回が楽しみだ！」

次回予告「ボクの父はベジータです……謎の少年の告白。ぜってえ見てくれよな

！」

子供「（。A。）」

子供「（。A。）」

フリーザが完全に消えたのを確信し、リゼットは軽く緊張を解いた。

まさかフリーザを倒すのが悟空ではなくターレスだとは驚きだが、どちらにせよこれでとりあえずの脅威は去ったと見ていいだろう。

とはいえ、これは所詮前哨。これから3年後に起こる戦いのプロローグに過ぎない。

リゼットは悟空の近くまで歩いて行くと、彼にだけ声をかけた。

「悟空君」

「お？ 何だ、神様」

「少しよろしいでしょうか。悟空君にだけお話ししたい事があります」

これからする話は悟空だけに聞かせるべき事だろう。

どうせピッコロ辺りはその優れた聴覚で勝手に聞いてしまうのだろうが、彼ならば問題もない。

案の定、すでに興味津々といった様子でこちらをチラチラと窺っている。

「おう、いいぞ。オラも久しぶりに神様と話してえしな」

「では、あの丘の方まで行きましょう」

リゼットが指定した場所。そこには一般人程度にまで落とされた……それでいてリゼットならば確実に気付くだろう一つの気が存在している。

フリーザ戦で出て来なかったので少し不安だったのだが、どうやらちゃんと『彼』はこの時代に来ていたらしい。

これでとりあえず、この世界線が絶望の未来ではないと判明した。

悟空を連れて丘の上にまで行くと、そこには銀髪の青年が佇んでおり、こちらを見ている。

父親譲りの鋭い眼に、母親譲りの整った顔立ち。そしてカプセルコーポレーションのロゴが入った上着に背中の剣。

間違いない。トランクスだ。

「お待ちしていました、リゼットさん。……いえ、神様」

「……どうやら、私の事を知っているようですね」

リゼットには一つの懸念があった。

それは『果たして未来に自分はいるのか』というものだ。

何せ今ここにいる自分がそもそのイレギュラーだ。前世の記憶なんてものを取り戻さなければきっと、ただの村娘として一生を終えていたはずである。

だが今のトランクスの反応で確信した。未来にも自分は居る……あるいは、居た。

「何だ？ 知り合いか、神様」

「いえ、初対面です。尤もあちらは私達の事を知っているようですが」

不思議そうに尋ねてくる悟空に、リゼットは正直に答えた。

敵意がないので悟空も警戒はしていないようだが、顔には疑問が張り付いている。そしてトランクスもまた、笑みを見せながらも困ったように汗をかいていた。

「お、驚いたな、本当に聞いた通りだ。貴女は俺と初めて会うはずなのに、俺の事を知っている」

「……その情報は、“私”から？」

「そこまで知っているんですね。流石は神様……ならば俺が来た目的も御存知なのでしょう」

トランクスの問いに小さく頷く。

とはいえ、自分からペラペラと説明するつもりはない。

悟空に聞かれた時に誤魔化す自信はあるが、説明が面倒だからだ。

トランクスは悟空に超サイヤ人になるよう頼み、自らも超サイヤ人へと変身する。そして悟空とトランクスの軽い手合わせが終わった後に、トランクスは話を再開させた。

「貴方達には全てをお話しします。けど、これから話す事は全てお二人の胸の中へしまってください」

「安心してくれ。オラ口は固いほうなんだ」

「まあ、無駄にペラペラと情報を漏らす性格ではないと思います」

そしてトランクスの語り始めた内容は、途中まではほぼリゼットの知っている通りのものだった。

彼が20年後の未来からやって来た事。ベジータとブルマの子である事。

そして3年後の5月12日。午前10時頃、南の都の南西9キロ地点の島に人造人間が現れる事。

しかし話は途中からリゼットの予想をも超えた方向へと飛んで行く事となる。

「その二人、20号と19号は神様が倒したのですが問題はそこからです。

その翌日、人造人間18号と17号が起動し、更にその数日後には13号、14号、15号が加わって地球全土を舞台とした戦いが始まったのです」

……ちょっと待て。

リゼットは思わずそう叫びそうになった。

何か原作のイベントに平然と劇場版の敵が紛れ込んでいる上に、未来世界では登場しないはずの19号と20号がしっかり参戦してしまっている。これはどういう事

だろう。

いや、そもそも何故人造人間が出現した？

未来の自分はゲロの研究所を破壊しなかったのか？

「未来の私は、ゲロの研究所を放置していたのですか？」

「い、いえ……襲撃をかけたらしいのですが、ゲロは既に研究所を廃棄して行方を眩ませていたそうです。未来の貴女自身が言うには、貴女の遠視から逃れるためにゲロが場所を変えてしまった可能性が高いと……」

私のせいですか……。

リゼットは変な納得をし、むしろそれを予期しなかった自分の間抜けさに笑いそうになった。

あの天才ドクターゲロならば、自分のようなイレギュラーがいる時点で身を隠してもおかしくない。

恐らく13号達を造り上げたコンピューターも知っている位置になかったのだらう。

「この戦いの中で奴等に対抗すべくピッコロさんと先代神様が同化し、地球からド

ラゴンボールが無くなりました。

これにより一時的に有利になったのですが、13号が破壊された14号と15号を取りこんで合体13号へと変貌し、まずは父……ベジータさんが殺されました」

「……ベジータが真っ先に脱落、ですか」

「はい。貴女はこの戦況を変えるべく新ナメック星の位置を界王様より聞き、新ナメック星へと赴いた……しかしそこで貴女にとっての誤算が起こったのです」

「誤算、ですか？」

「はい……ナメック星が、ビッグ・ゲテスターという機械惑星によって支配されており、ドラゴンボールが入手出来なかったのです」

リゼットはこの時点で頭を抱えなくなった。

いやいやちょっと待って、クウラを倒した場所違うよね？ 地球じゃなくてナメック星の太陽に突撃させたよね？

もしかしたら生きているかもしれない、くらいには思っていたが何故ビッグ・ゲテスターがそこで登場する。

「その核となっている者の名はクウラ。」

貴女が倒したはずの者なのですが……どうも、貴女自身が言うには前提が逆だったそうです」

「逆？」

「はい。貴女はビッグ・ゲテスターの存在をどういうわけか知っていました。

そしてクウラは絶対にそこに辿り着けないと思っていたようなのですが……それが間違っていたのです。

クウラがビッグ・ゲテスターに辿り着いたのではなく……ビッグ・ゲテスターがクウラに引き寄せられた。

クウラの凄まじい怨念に、ビッグ・ゲテスターが引き寄せられた。だからクウラの位置が変わろうと、必ずこの両者は合流してしまう……らしいです」

「……………」

それを聞いてリゼットは己の認識違いを悟った。

クウラは映画で『運よくビッグ・ゲテスターに流れ着いた』と語っていた。

だが広大な宇宙の中で、どれだけ運がよければビッグ・ゲテスターに流れ着けるというのだ。

砂漠の中でコンタクトレンズを探すところの話ではない。まず不可能と断じていい幸運だ。

だがこれが幸運ではなかったとしたら？ 必然だったとすれば、話は全く変わる。

クウラがビッグ・ゲテスターに流れ着いたのではない。クウラにビッグ・ゲテスターが辿り着いたのだ。

前提が全く逆だったのだ。

ならば出会ってしまふ。クウラが太陽系で死のうとナメック星で死のうと、ビッグ・ゲテスターがクウラという頭脳を求めてやって来るのだから、この両者は絶対に合流する。

まるで運命の赤い糸だ。相性がいいにも程がある。

「その後、メタルクウラの軍団が地球に侵攻し戦況はますます激化……追い討ちをかけるようにかつて父さんの父さん……つまり俺の祖父に辛酸を舐めさせられたというサイヤ人のパラガスと、彼の息子である伝説の超サイヤ人ブローリーが襲来し、この戦いでピッコロさんやターレスさんといった地球側の主力はほぼ死んでしま

い、後を追うように天津飯さんやクリリンさん、ヤムチャさん、餃子さん、人參化さん、ナッパさんも死んでしまった。

そうして戦える戦士は貴女と悟飯さん、そして幼い俺だけになってしまったのです」

リゼットはもう、この時点で神殿に帰って布団にくるまって寝てしまいたかった。何だこの劇場版ラッシュ。ブロリーとか本気でどうしろというのだ。

だが更に絶望は続き、トランクスの口も止まらない。

「更にサイヤ人に恨みを持つツフル人の科学者ドクター・ライチャーと彼が造りあげた怨念戦士ハッチヒヤックや、遠い銀河からやって来たヘラー一族も加わり、地球は様々な勢力が戦う戦場へと変わってしまいました」

「……………それは……………うん、なるでしょうね……………戦場に」

「更にこの世とあの世のバランスが崩れて地獄から、かつて倒した死者が次々と復活し、魔導師バビディ率いる一団や、異星より襲来した怪物ヒルデガンまでもが地球に現れ、地球はまさに滅亡の危機を迎えたのです」

「……………」

そりゃ滅亡しかけるでしょうよ、とりゼットは心底思った。

何、このギャグみたいな劇場版ラッシュ。どいつもこいつも自重なしに地球に來ないで下さい。

とうかこれ、もう無理だろう。

ブロリーとボージャック、ヒルデガンとダーブラに合体13号、ハッチヒヤックにメタルクウラ軍団とか手の打ちようがない。しかも多分あの世にはジャネンバまで登場してる。

マジで詰んでる。

むしろこれでよくまだ生きてるな、未来の私。心底リゼットはそう感じた。
とうか封印されているはずのボージャックが何故湧いている。意味が分からない。

「この地球の危機を前に貴女は最後の決戦を挑み、全ての敵対勢力を亜空間に封印して中で同士討ちをさせ、最後に残ったブロリーを一騎討ちで倒して何とか地球は救われました」

リゼットはここで思わず、おおっと声をあげた。

やるじゃん、未来の私！ 超頑張ってる！

ブロリーを一騎打ちで撃破とか一体どうやったのかは分からないが、とりあえず
凄い。

「しかし……この戦いで敵の注意を引き付ける役を買って出た悟飯さんが戦死して
しまいました。

また、最後の戦いで全ての力を振り絞った貴女もまた、深い眠りに就いてしまい、
未だに目を覚ましません」

結局最後はトランクス一人になるのか、とりゼットは少し肩を落とした。

トランクスは深い眠り、と言っているがこの分だと未来の自分も死んでいるだろ
う、というのがリゼットの予想だ。

未来の己が何をしたのかは分かる。何せ自分の事だ、分からぬはずがない。

恐らくだが、未来の自分はバーストリミットを限界よりも遥かに高出力で使用し
て強引にブロリーに勝利したのだ。

だが界王拳もそうだが、余りに限界を超えた出力を出すと身体への負担が大き
くなる。

ましてやブロリーに勝てるレベルの倍率など、反動で死んでしまってもおかしくないわけで……きっと、未来の自分はそれで力を使い果たして死んだのだ。

しかしリゼットにはドラゴンボールで叶えた『不変』の特性があり、たとえバラバラになっても身体“だけ”は完全に元の状態へと回帰する。——そこに魂がなくともだ。

だから外から見ればただ安らかに眠っているようにしか見えず、トランクスも死んだと判断出来ないのだろう。

「こうして地球は救われました、多くの戦士の犠牲の上に……」。

なのに……なのに、地球人自らが、それを壊してしまった。

愚かな科学者が、異星人達に対抗しようとブロリーの遺伝子から最強の戦士を造り出そうとしたのですが、出来上がったのは知性のない、到底制御など出来るはずもない、ただの怪物でした。

俺達がバイオブロリーと呼んでいるその怪物は、周囲の物を取り込んで際限なく巨大化し続ける化け物であり……そして、あまりにも強すぎる……」

「……対抗手段はないのですか？」

「奴は海水を浴びると石化してしまいます。ですから、すぐに海を越えてくる事は出来ません。

そのおかげで人類はかろうじて生き延びています。

しかし……それでも、少しずつ海水すら取り込んで着実に巨大化を続けていて……母さんの見立てでは、後10年もすれば地球全土を飲み込んでしまうだろうと……」

何やってくれてんの、未来の人。そうリゼットは叫びたかった。

何で平和になった後にバイオブローリ作ったの？ 馬鹿なの？

「結局、多くの犠牲の後に残ったのは全てを失った地獄のような地球だった……。俺以外の戦士は皆死んでしまい、新ナメック星もビッグ・ゲテスターによって滅びてしまったから、ナメック星のドラゴンボールも使えない……。

失った物を取り戻す方法が、俺達には残されていなかった」

トランク스가泣きそうな顔をするが、リゼットはもっと泣きたかった。

未来世界が原作なんか比較にならないEXハードモードすぎる。

何だこれ、何でこんな意味の分からない事になっている？

いや、一応劇場版ボスの登場タイミングは合っているので、単に倒せないうちに

次のボスが来てしまって、それを倒せないうちに更にボスが出て来て……と繰り返してしまった結果なのだろうか？

改めて悟空君って凄い、と思った。

なるほど、劇場版のある世界は悟空が彼等を速攻で倒してくれるから平和だったのだ。

で、それが出来なければこうなると……酷い話である。

前言撤回。私もっと頑張って下さいよ。

「ま、待てよ、オラは？ オラはどうなったんだ？

オラもやられちゃったのか？」

「貴方は戦っていない。今からまもなく病氣におかされてしまうんです。そして死んでしまわれる」

やはり悟空は死んだのか、トリゼットは妙な納得をした。

まあ、そうでなければそこまで酷い事にはならないだろう。

しかし問題は何故死んだかだ。ドラゴンボールは使わなかったのか？

そう思っていると、その答えをトランクスが口にした。

「神様はドラゴンボールを使う事を真っ先に思い付いたようなのですが、間が悪すぎた。」

悟空さんが心臓病で倒れる僅か数日前に、ドラゴンボールは他の誰かが使ってしまった後だったのです」

……何て間の悪い。心の底からリゼットはそう思わずにはいられなかった。

他の誰か、という言い方を見るに恐らく仲間の誰かが使用したわけではなく偶然地球人の誰かが集めて願いを叶えてしまったのだろう。

それは決して悪い事ではない。自分だって2回も使っているのだから他者を責めるのはお門違いだ。

だが何故このタイミングなのだ。せめてあと1年後か前に使っていれば、と顔も知らぬ誰かに文句を言いたくなるのは仕方のない事だろう。

「発病から死までの期間もあまりに短すぎた……神様が言うには、超サイヤ人になって修行していたのが不味かったそうです。超サイヤ人になると一気に病気が進行してしまうんだとか。神様は何度も止めたらしいのですが……」

「悟空君！ 死にそうになるまで修行する人がいますか!？」

「いや、オラに言われても……」

何という事だろう、未来の悟空も思った以上にアホだった。

超サイヤ人になれば心臓病が一気に進行する、とはベジータの言葉だったか。

いや、あるいは未来の悟空は先に待ち構える絶望の未来と強敵の出現を何となく予感していたのかもしれない。

悟空に超能力はないはずだが、彼は時々そういう神がかった力を発揮する事がある。

だがその焦りが無茶な修行を課し、結果として早死にして未来を悪化させてしまうとは何たる皮肉か。

「くっそ、死んじまうのか……悔しいな。」

闘いてえよ、そいつらと」

「……た、闘えないのが残念なんですか。恐怖はないのですか？」

「そりゃ怖いけどよ。すっげえ強え奴等なんだろう？ やってみてえよ」

悟空のその返答はネジがいくつか吹っ飛んだ言葉だ。

しかし、だからこそトランクスには彼が頼もしく思えた。

今の話を聞いて尚恐れず、それどころか闘いを望む生粋の戦士。

あの絶望の未来を覆すのなら、まさにそういう存在が必要なのだ。

「やはり貴方は本物のサイヤ人の戦士だ。母さんや悟飯さん、リゼットさんの言った通りの人だった……頼もしいですよ、来てよかった」

言いながら懷に手を入れ、一つの小さな瓶を取り出す。

「俺達は、こんな絶望の世界を変えたかった。」

そんな時に貴女が以前呟いた言葉を思い出したのです。

『悟空君さえ生きていれば、こうはならなかったのに』……と。

俺は、その言葉に賭けてみたくなった。リゼットさんがそうまで信じた孫悟空という男に賭けたくなったのです。

……症状が現れたらこれを飲んで下さい。20年後には心臓病の特効薬があるんです」

それこそ、未来を変える一手だった。

『孫悟空を生存させる』。たったそれだけの、しかし何よりもの改変を齎す最後の希望。

それが確かに、孫悟空の手へと委ねられた。

………

17 とうがあらわれた！

18 とうがあらわれた！

19 とうがあらわれた！

20 とうがあらわれた！

メタルクウラズがあらわれた！

ビッグゲテスターがあらわれた！

13 とうがあらわれた！

14 とうがあらわれた！

15 とうがあらわれた！

ブロリーがあらわれた！

パラガスがあらわれた！

ボージャックがあらわれた！

ザンギヤがあらわれた！

ブージンがあらわれた！

ゴクアがあらわれた！

ビドーがあらわれた！

ライチーがあらわれた！

ハッチヒヤックがあらわれた！

ジャネンバがあらわれた！

ホイがあらわれた！

ヒルデガンがあらわれた！

バビディがあらわれた！

ダーブラがあらわれた！

プイプイがあらわれた！

ヤコンがあらわれた！

バイオブロリーがあらわれた！

未来リゼット「」

※ちなみにこのタイミングでドラゴンボールを使用した馬鹿とはピラフ一味の事。

若返りの願いで赤ん坊になりました。

また、セルは書き忘れたわけではありません。トランクスの中に出ていないのにも理由があります。

【戦闘力に関して】

ここからは公式の数字が無くなる為、唯一判明しているブロリーを例外として後は私の解釈で決定していきます。なので自分の考える数字と違って『このSSではこの数値』で納得して頂きたいと思います。

ちなみにブロリーは下記の数値でいきます。

通常…14億（Vジャンプ）

伝説…1400億

リゼット「もう おうち かえる」

第四十四話 絶望を変える戦い

トランクスは話を終えた後、3年後にまた来ると言い残してこの時代を去った。未来の出来事を聞かされた戦士達は3年後より始まる過酷な戦いを生き延びるべく、それぞれが厳しい修行に励む決意を固め、リゼットもまた今まで以上の修行をする必要があると痛感していた。

正直に言って、リゼットは3年後の闘いを甘く見ていた。

人造人間くらいならば悟空抜きでも何とかなると思っていたのだ。

セルだって完全体になる前に倒してしまえばいいわけで、仮に太陽拳を使われても自分ならば余裕で対処出来る自信があった。

だが違った。3年後より始まる劇場版ラッシュはその程度では到底切り抜ける事が出来ない。

今まで通りの修行では駄目なのだ。

ならばどうする？ どうすれば劇的に力を増す事が出来る？

リゼットは考えた。

まず一つ……超神水の使用。

猛毒ではあるが、それと引き換えに潜在能力を解放させるあの水を使えば力を上げる事が出来るだろう。

問題の毒にしても上手く行けばリゼットには通用しない。

というのも、リゼットは『あらゆる環境で生存出来る』能力があり、毒もその範囲に含まれるからだ。

そもそも毒というのは定義上、正確な呼び方ではない。

例えば玉葱なんかも猫や犬にとっては毒だが、人間にとっては食べ物だ。

逆に人間にとって毒でも他の生物にとっては無害なものもある。

毒というのは要するに『その生物にとっての害』であり、厳密に言えばどんな物だって毒になりうるし、毒を秘めている。

極論を語れば酸素だって毒だ。

他の宇宙人にとっては生存に欠かせない空気中の物質があったとして、それが地球人にとっては毒かもしれない。

いちいちそんな毒で死んだり生きたりしているようでは、とても『あらゆる環境

で生存』など出来ないだろう。

だから環境一つで変わる毒やウイルスなんてものはリゼットに対してはほぼ無効だ。

だから使用そのものに問題はない……はずだ。

問題は使用のタイミングだ。リゼットは最近も最長老に潜在能力を解放してもらったばかりであり、今使っても効果は少ないだろう。

使うならば3年後、ギリギリの時まで待つ必要がある。

次に、常に限界を責め続ける荒行。

気靈錠を強化し、重力室のGを増やし、それでいて限界近くまで気の解放を行いながらの修行を繰り返す。要は今まで行ってきた事の強化だ。

だがそんな事をすれば身体が先に限界を迎えて修行どころではなくなるだろうし、そのたびに仙豆を使っては仙豆の無駄使いだ。

だがその解決方法はもう見付けてある。

リゼットはフリーザの宇宙船にあったメデイカルマシンの分析をブルマに依頼し、完成したら譲って欲しいと交渉したのだ。

勿論ブルマはこれに快く了承を示し、自分の分も欲しがったベジータには普通にオリジナルのメディカルマシーンをプレゼントした。

ここでリゼットがあえて急がずにオリジナルをベジータに譲ったのには勿論理由がある。

ぶっちゃけブルマに解析させて後から完成したブルマ製メディカルマシーンを貰った方が絶対に性能がいいと分かっているからだ。

ついでにデザインも、出来れば神殿に合ったものがないと駄目元で頼んでみたところ、見事にブルマはこれを叶えてくれた。何この超天才。

形としてはでかい水晶、という所だろうか。

中が空洞になっており、入る事で治療液が満たされる仕組みだ。

尚、本来のメディカルマシーンにはある呼吸器は存在しない。どんな環境でも生存できるリゼットには必要のないものだからだ。

こうして完成したりゼット専用のメディカルマシーンだったが、傍から見るとまるでクリスタルに閉じ込められて眠っているようにしか見えない、という事に本人は気付いていない。

本人の神秘的な容姿と相まって絵にはなるのだが、これでは治療中ではなく封印中だ。

しかし効果は絶大で、僅か1時間の休息で体力を全快にしてくれる。

これのおかげでリゼットは今まで以上に無茶が出来るようになり、己の限界を責め続けた。

改良された重力室を使つての300倍重力下での演舞に、仮想敵との組み手。

限界までバーストリミットの倍率を上げて、気が枯渴したらメディカルマシーンで回復を繰り返す。

過酷な戦いの中でも怯まないように痛みへの耐性を得る必要があったから、時には仮想敵に一方的に己を痛めつけさせた。

極限の脱力による防御法も1年経つ頃には完成し、剣の一撃でさえ羽毛と化した彼女に傷一つ付ける事が出来なくなった。

更に1年が経つ頃にはバーストリミットの最大倍率も50倍まで上昇した上で問題なく扱えるようになり、この50倍こそを一つの完成として以降は無理に倍率を増やさずに常時その状態を持続する修行を開始した。

原作でも悟空がやっていた常時超サイヤ人になる事で慣らす修行だ。

バーストリミットは超サイヤ人と異なり界王拳に近い技だが、だからこそ慣れが大事である。

勿論鍛えるのはリゼットだけではない。

こうなったらパワーバランスなど知った事かと戦士達を天界へ集めてベジータも無理矢理拉致し、リゼット指導の下で鍛えさせた。

そして更に1年が経過し、そのタイミングで超神水を使用した。

——結論を言えば死にかけた。

リゼットに毒が効かない……それは確かな事だ。その推測に間違いなど無い。

だが超神水の毒は、そんなものではないのだ。

身体の内にある潜在能力を無理矢理引き出す。それが超神水の効能で、毒のような症状が出るのはただの副作用でしかない。

いわば氣に作用する猛毒だ。どんな環境に適応しようと、こんなものにまで都合よく適応など出来るはずがない。

結局の所リゼットの考えはただの樂觀視でしかなく、彼女はその代償を数日に

渡って支払う事となってしまった。

ついでにリゼットだけを苦しませるわけにはいかないと、何故かポポとナツパも超神水を飲んでしまった。

更に神殿に遊びに来たカリンが出しっぱなしの超神水を飲料水と勘違いして飲み干し、4人で仲良く死にかけた。何やってるんだこいつ等。

しかし成果はあった。

一週間以上に渡る激痛との苦闘の末、リゼットはようやく己の限界の壁を一つ壊す事に成功したのだ。

戦闘力は劇的に跳ね上がり、通常状態でもフリーザと戦えるだけの力を得る事が出来た。

これならばいける……リゼットは少くない手応えを感じ、苦闘の末に得られた報酬を噛み締めた。

また、ナツパだけは基礎戦闘力の上昇がなく、代わりにいつでも大猿のパワーを解放出来るようになっていた。

その後、続いてヤムチャが飲んだ時に事件が起きた。

何とヤムチャの呼吸が止まり、心肺停止してしまったのだ。

これにはリゼットも大慌てで、気を送り込んだり念力で吐かせたり、心臓マッサージをしたりして何とかヤムチャの蘇生に成功したが、結局ヤムチャの強さは変わらず、以降は危険すぎるという理由で超神水を封印した。

★

5月12日。

集合場所である南の島にリゼットが到着した時には、既にベジータとトランクス以外の全員が集まっていた。

ブルマもあり、その腕の中には赤ん坊のトランクスもいる。

分かつてはいたが、本当にベジータとくつついたらしい。

かつて、若き日のヤムチャとブルマが手を繋いでダンスしていた姿を知っているリゼットとしては酷く微妙な気持ちにさせられる光景だ。

それと、人参加は今回は神殿に待機させてある。

もしかしたら神殿が襲撃を受ける可能性もあるので、彼はそちらの担当だ。

「あっ、神様！ 来てくれたんですね！」

「ええ。地球の一大事ですからね。それにしても大きくなりましたね、悟飯君」
嬉しそうに駆け寄ってくる悟飯の頭を撫で、後数年したら身長で抜かれそうだな、などと考える。

今の悟飯はまだ9歳なのでリゼットの方が身長も高いが、14歳で成長を止めてしまったリゼットの身長は153cm程度しかない。

こうして頭を撫でてやれるのも、後少しだろう。

「悟空君、心臓病の薬は？」

「え？ ああ、家に置いてきちゃったよ。結局病気にかからなくてさ」

リゼットは悟空を注意深く見る。

確かに今の所心臓病の症状は出ていない。一見すると健康体だ。

原作ではこの後に症状が出るが、ここは既に色々とズレてしまっている世界でもある。

今後、どのタイミングで発病するかは全くの未知数と言えた。

「なあに。仮にカカロットが心臓病にかかってても、そんなとき俺が敵を片付けるさ」
自信に溢れた声で言うのは、黒いシャツをラフに着こなしたターレスだ。

上からは白いコートを羽織り、すっかり地球に染まっている。

話しながら齧っているのは神精樹の実……ではなく、ただの林檎だ。

「神様、妙だとは思いませんか？ 10時はとくに過ぎているのに敵の気配が全

く感じられません」

「それは当然です。彼等は人造人間……生物が持つ気など持っていない」

「！ そ、そうか！ 機械に気などあるわけがない！」

天津飯の疑問にリゼットが答えると、全員が納得したような顔になり緊張感が高まった。

そう、気が感じられないからまだ現れていないのではないではない。

もう現れているのに気が感じられないのだ。

その事に気付いた全員が顔つきを陰しくし、街を見下ろす。

もうこの瞬間にも、敵はいるかもしれないのだ。

「皆、気を引き締めて下さい。気で探せない以上肉眼で探す他ありません」

「へっ……かつては地球を滅ぼしに来た俺が今度は地球人を守る為に殺人兵器を探す、か。」

皮肉な話もあったもんだぜ」

リゼットの言葉にナツパが笑いながら答える。

だが言葉とは裏腹に目は真剣だ。

彼も随分この地球という星に馴染み、好いてくれているらしい。

そのような事を考えていると、二つの人影が街へ降下するのが一瞬だが確かに見えた。

更にリゼットは他の者には出来ない意思の感知をする事で、その姿をも完全に捉える。

間違いない、あの老人と肥満体の男は20号と19号だ。

「い、今のは……！」

「ええ、現れたようですね」

「どこだ!? どこにいる!」

リゼットに次いで気付いたのはピッコロのようだ。

だが彼も一瞬しか見えなかったらしく、どこに降りたかは捉えていない。

その隣では天津飯が完全に焦り、必死に人造人間を探している。

「戦闘力を感じないんじゃないじゃ仕方ねえ。俺達が降りて直接探すしかねえってわけだ」
「よし、みんな散って探そう。ただし深追いはするな。」

発見したらすぐ皆に知らせるんだ」

比較的冷静なターレスが降りる事を提案し、悟空もそれに賛同を示した。

ともかく、まずは敵を見付ける事だ。

発見が遅れるたびに被害者が増えるこの状況では1分1秒の遅れが死者を一人増やす。

悟空達は街へと降下し、人造人間の姿を目視で探し始めた。

リゼットもまた、出会い次第超能力で動きを封じてそのまま破壊してしまおうと物騒な事を考えながら街を散策する。

場所は分かっている。そこにある悪しき意思も捉えている。

ならば後はそこに行くだけであり、リゼットは迷う事なく人造人間二人を目指して歩いていた。

そして、その彼女の前に早くも敵が姿を現す。

しかし、その姿は彼女が想定していた老人と肥満体の男ではない。

一人は黒い髪をおさげにした、白い肌の大柄な半裸男。

もう一人は黒いサングラスをかけた、紫の肌の小柄な男。

最後の一人は上半身裸の上にサスペンダーと上着という変態的な服装をしており、頭に帽子を被った白髪のオールバックだ。

この中3人の中ではとりあえず、一番人に近い外見だろうか。

「この地球の神だな？」

「そういう貴方達は……人造人間ですね？」

いきなり劇場版3人組のお出ましたが、リゼットにとってこれは都合がよかった。

正直な話、遭遇したのが自分でよかったとすら思う。

ここで出会ったのが悟飯やクリリンなら最悪殺されてしまう展開もあり得た。

「その通り。我々の目的は孫悟空の抹殺だが、最大の障害となり得る貴様を先に始末するようドクター・ゲロ様より命じられた。従ってまずは貴様を殺す」

「いいでしょう。しかしここは場所が悪い……闘う場所を変えますよ」

リゼットはそう言うや否や、念力と気合砲で人造人間3人を吹き飛ばした。

拒否権など与えはしない。

問答無用の先制攻撃で3人を運び、氷山地帯へと場所を移した。

ここならば派手に暴れても被害は出ないだろう、という考えだ。

19号と20号は……残念ながら悟空達に任せるしかないだろう。

悟空の心臓病だけが心配の種だが、とにかくこちらを速攻で終わらせて戻るしかない。

下手に合流させて人造人間5人同時相手の乱戦とか下手すると死人が出てしまう。

フワリ、と氷の上に着地して3人の人造人間と相對する。

「今のが超能力か……情報の通り厄介な力だ」

「情報を得ている割には対策は何もしていないのですね」

「……貴様の情報は集めにくかったのな。ドクター・ゲロ様は超小型のスパイロボットを使って孫悟空達のデータを集めていたが、貴様だけは一定距離まで近づくとスパイロボットに何故か気付いて捕獲してしまう。おかげで貴様のデータはほとんど分からず仕舞いだ」

小型のスパイロボット、と聞いてリゼットは思い当たるものがあつた。

そういえばもう20年近く前の事になるが、当時暮らしていた聖堂付近をウロウロしていた小型の虫型ロボットを捕まえた事がある。

あれはドクター・ゲロのものだったのか、と今になって疑問が氷解した。

「だがいかにこの星の神といえど、俺達3人を同時に相手にして勝ち目はない」

「大した自信ですね」

「ふっ……その余裕もここまでだ！ S・Sデッドリィボンバー！」

13号が手を翳すと人間サイズの赤い気弾が放たれ、リゼットへと直進した。

しかし彼女は一步も動かずにその場に自然体で立ったままだ。

直撃——瞬間、リゼットに当たったと思われたS・Sデッドリィボンバーは彼女を覆うように展開されたバリアに防がれ、霧散していた。

「な……っ!？」

「残念ですが、その程度で私は討ち取れません」

リゼットはそう告げ、お返しとばかりに右手を宙へと掲げる。

そして気の固定化により巨大な拳を創造し、3人の人造人間へと叩き込んだ。

——さあ、絶望の未来を回避する為の戦いを始めよう。

Q、魔凶星編は？

魔族四天王「ガリック様いないし、大人しくしときますわ」

【各キャラ戦闘力】

・リゼット（超神水強化）

基本戦闘力…1億2000万

バーストリミット（最大50倍）…60億

・ピッコロ

基本戦闘力…6700万

界王拳（最大15倍）…10億500万

・ターレス

基本戦闘力…2000万

超サイヤ人…10億

・ベジータ…1900万

超サイヤ人…9億5千万

・孫悟空…2200万↓220万

超サイヤ人…11億↓1億1000万

悟空「何か調子が悪い……」

・ナッパ…1800万

大猿パワー…1億8000万

・孫悟飯…550万

・天津飯…540万

・クリリン…536万

・ヤムチャ…520万

・餃子…480万

・兎人參化…500万

―不参加―

・Mr・ポポ…1200万

バーストポポ3倍…3600万

・カリン様…1200万

バーストカリン3倍…3600万

※敵側は次回公表。

一応言っておくと戦士達の戦闘力はリゼットの修行によって原作以上になっている設定です。

後、このSSではフリーザ>19号説を採用しているのでそこを基準に数値設定をしています。

【極限バトル!!三大超サイヤ人】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作第10弾。

ドクターゲロが死んでいる点や悟飯が超サイヤ人になれない事、悟空達の実力から時期的にはセル編で悟空が復帰した辺りと思われる。

しかし香気にショッピングや「ミスこの世で一番べっぴん世界大会」をしているのでセルと人造人間の脅威は去った後と考えていい。

神コロ様がセルを第一形態のまま倒してしまったか、あるいはそもそもセルが来

なかった世界線と思われる。

17号と18号は元々悪党ではないので和解でもしたのだろう。

16号はよく分からないが、電池切れでも起こしたのかもしれない。

だからマンガンよりアルカリにしろと言ったんだ。

【人造人間13号】

ドクター・ゲロのコンピューターが作りだした3体の人造人間のうちの一体。型番的にかなり古い人造人間だが、やたら強い。

加えてドクターゲロの命令に忠実であり、他の人造人間よりもゲロの考える『成功』に遥かに近い。

ゲロは19号などを造っている暇があるなら、こいつを完成させるべきだったのではないだろうか。

完全な機械タイプだが外見は人間に近く、言葉も流暢に話す。

【超13号】

14号と15号の動力炉とコンピューターチップを吸収して変身した13号。

ちよつと意味が分からないレベルで強い。

加えて悟空本人のみならず、その子孫の存在すら根絶する断固とした意志を持ち、作中で唯一悟空の金の玉を攻撃するという大暴挙に及んだ。さようなら悟天……。时期的にピッコロさんは神コロさんの可能性が高いので、それを一蹴する彼の強さは16号クラスと思われる。

【人造人間14号】

ドクター・ゲロのコンピューターが作りだした3体の人造人間のうちの一体。三体の中で最も大きく、「ソングクウ」としか話せない。

トランクス相手に善戦したが、剣を返してあげたのが仇となり、真っ二つにされた。

超サイヤ人相手にそこそこ善戦出来る強さだったので、19号よりは強いと思われる。

戦闘力億クラスは確実か。

【人造人間15号】

何かウイスキーみたいなものを飲んでいた変な奴。

番外・絶望の未来

リゼットにとって誤算はいくつもあった。

計算と違う結果が幾度となく頻発し、タイミングも間も、何もかもが悪すぎた。まるで運命が孫悟空の死を望んでいるかのように。運命の改変など認めぬと宣告しているように、あらゆる全ての条件が最悪の形で噛み合った。

やはり独善的だろうが何だろうが、ドラゴンボールはこちらで完全に管理、独占しておくべきだった。

そうすれば少なくとも、ピラフ一味が願いを叶えるなどという事はなく最も必要な時に使う事が出来たはずだ。

発病のタイミングも知識と違った。

まるで運命が悟空を必ず殺せる隙を待ち望んでいたかのように、最悪のタイミングで心臓病で倒れた。

リゼットはこの報を受け、ドラゴンボールが使えないと悟るやすぐに新ナメック星へと空間転移で飛んだ。

だが、ここもまた間が悪かった。

一体何故そうなったのか……フリーザ軍残党を倒す為に宇宙中が一致団結して立ち上がり、その中にナメック星人もいて……そしてあろう事か、その闘いでポルンガを使用していたのだ。

因果応報——リゼットの修行から始まった奇妙な因果は巡りに巡って、彼女本人へと跳ね返った。

残る手段は一つ、究極のドラゴンボールのみ。

だがその使用条件はピッコロと先代の融合だった。二人がかつて一人のナメック星人だった時に作られた究極のドラゴンボールは、二人が分離したままでは石ころでしかない。

しかしそれは即ち先代の消滅を意味し、故にリゼットを迷わせた。
そして、その迷いが致命的だった。

リゼットが迷っている間に、孫悟空が死んだ。

その時リゼットは確かに聴いた。

運命という列車が、絶望というレールの上に乗ってしまった音を。

一体何が悪かったのだろうか？

ドラゴンボールを不用意に使用してしまった地球人だろうか？

心臓病の進行が早くなるような無茶な修行をした孫悟空だろうか？

それとも、ポルンガを使ってしまったナメック星人達だろうか？

……否。

最も悪しきは、リゼット自身。少なくとも彼女はそう考えた。

未来を唯一人知っていたのに、唯一人、己だけが未来を変える事が出来たのに。

なのに、心のどこかで甘く見ていた。悔っていた。

きつと何とかなる、大丈夫、為せば為る、どうせ上手く行く。だって孫悟空は主

人公なんだから。

何の根拠もなく甘え、油断し、侮り、軽視し、軽く見積もり……そして取り返しの付かない事態を招いた。

それでもリゼットはまだ、事態を深くは考えていなかった。

本人は十分に以上に深刻に考えている「つもり」だったのだが、やはり甘く考えていた。

そしてその代償は、彼女自身ではなく仲間達が払う事となった。

★

荒廃した大地の上で白い少女は目を閉じて、過去に思いを馳せていた。

あの時は毎日が幸せだった。

修行漬けの日々ではあったが、それでも悟空達とは会おうと思えばいつでも会えたし、数年来の再会であっても昨日別れたばかりのように笑って話せた。

それを失ってしまったのは、ひとえに己の甘さゆえ。

未来を余りに軽く見積もり、本気で足掻かなかった己の失態。

全ては遅きに失した。失ったものはもう取り戻せない。

万能の願望機であるドラゴンボールはなく、死者は戻って来ない。

それでも、せめて『今』を守りたいから……。

この地球という惑星に生きる人々の未来を。孫悟空が守るはずだったものを、せめて少しでも残したいから。

だからリゼットは、この日を以て己の全てを燃やす覚悟を決めた。

「リゼットさん」

後ろから悟飯の声が聞こえた。

神様、と呼ぶ事はもう随分と前に止めさせた、父親そっくりの声。

昔とは比べ物にならぬほどに遅しくなった——遅しくならざるを得なかった、かつての少年。

その顔立ちからは甘さが完全に消え、父と同じ胴着を着込んだ姿は父とそっくりだ。

顔にはいくつもの傷が奔り、今日まで繰り広げてきた激戦を物語っている。

こことは違う、絶望を回避出来た世界ならば……『原作』の世界ならば今頃は、ビーデルと結婚して娘に恵まれていたはずだったろうに……。

そのビーデルも、サタンも、もういない。

「悟飯君……私は来るなど言っただけです。

この先は死地。貴方を巻き込むわけにはいきません」

「一人であいつら全部を倒す気ですか？ そんなの無理ですよ。

俺を使って下さい。罔くらしいならなれますから」

リゼットは振り返り、悟飯の目を見た。

それは覚悟を決めた戦士のものであり、そして死地を見付けた受刑者の目だ。

彼もまた、ずっと苦しんでいた。

己があの時、もっと強かったならば。

悟空の異変にもっと早くに気付けていれば。誰かがドラゴンボールを使う前に病

気の兆候を発見できていれば、もしかしたら今も父は居てくれたかもしれないのに。

父なら……孫悟空なら、きっとこんな未来にはさせなかったはずだ。

あの未だに超える事の出来ない大きな背中なら……憧れたヒーローならば、きっと。

その想いはずっと、20年間消える事なく彼の心を縛りつけている。

「俺も……一緒に逝きますよ。」

父さんや、ピッコロさん達がいる場所へ」

「……ごめんなさい、悟飯君」

「謝らないで下さい。これが俺の望んだ……最期の戦場なんです」

リゼットはそれ以上何も言わなかった。

覚悟を決めた戦士に何を言っても意味などなく、仮に同行を断れば彼は一人でも

突撃しただろう。

だから一度だけ謝った。

そして背中から白の翼を展開し、全身を光で覆う。

「分かりました、悟飯君……………一緒に、死にましよう。

——敵勢力全員を一箇所に集め、亜空間へと転送。その後ナメック星ごとメタルクウラ本体を亜空間へと封印します！

これが最期の逆転のチャンス……………ここを逃せば私達に勝ち目はありません。

死んでも彼等に勝ちます！ いいですね!？」

「はいッ！」

この日は……………否、この日だけが唯一訪れた彼女達の勝機だった。

20年間の中でただ一度だけ迎えた千載一遇にして最大最後の隙だった。

まさに奇跡的な偶然、としか言いようがない。

メタルクウラの群が一時的に地球を離れ、時を全く同じとしてあの世で動きがあったらしく、今まで狂いっぱいだったあの世とこの世のバランスが正常に戻った。

この地球の危機を放置しては宇宙全体の脅威と判断したザーボンが全軍を率いてビッグ・ゲテスターに総力戦を仕掛ける事でクウラは一時的にそちらに全戦力を回さざるを得なくなったのだ。

また、あの世では悟空とベジータが長年の修行の末に鍛えた力でフュージョンをしてジャンパを撃破してくれた。

更にあの世が正常化した影響で怨念が薄れてハッチヒャックが弱体化を起こし、それを好機と見たバビディ一団とブロリーが急襲。更にヒルデガーンまでもがその付近に出現した事で今、各勢力はかつてないほどに接近していた。それもハッチヒャックの弱体化とメタルクウラ不在という特大のオマケ付きでだ。

だから……そう、もうここしかないのだ。

この機を逃せば全員を纏めて倒す機会など二度と訪れず、また睨み合いの形に戻ってしまう。

迂闊に動けばあつという間に他の陣営から叩かれてしまう、それでいて全陣営がリゼットを集中砲火するあの形に再び戻ればもう勝ちはない。

そしてどうでもいいが合体13号はとくにブロリーによって破壊されていた。

リゼットが高速で飛翔し、その後を悟飯が続く。

髪は逆立ち、その全身にはスパークを纏った黄金の気を纏い、その実力は在りし日の父すらも大きく超えている。

超サイヤ人2——超サイヤ人の限界を超えた形態だ。

リゼットの修行によりここまでに至った悟飯だが、逆を言えばここが限界だった。精神と時の部屋さえ健在だったならば、あるいは彼を更なる超戦士へと鍛え上げる事が出来たのかもしれないが、あれはクウラによって壊されてしまった。

迂闊だった、としか言いようがない。

いかに空間を隔てた場所にある神殿だろうと、同じく空間を隔てて瞬間移動してくるメタルクウラ軍団の前では何ら意味はなく、奇襲によって壊滅させられてしまったのだ。

その際にカリン塔までもが失われ、仙豆も手持ちを残して全てが燃えた。

そういう意味でも、もうリゼット達に余力など残ってはいなかった。

「見付けた——仕掛けます！」

バーストリミットを100倍に引き上げ、白い流星となってリゼットが仕掛けた。

まず狙うのは最も厄介なブロリー！

突然の奇襲に迎撃態勢が取れずにいる彼に全力で突撃し、光速の掌底を当てて吹き飛ばす。

それと同時に悟飯が上空から急降下し、ハッチヒャックを蹴り飛ばした。

「や、やれ、ダーブラ！」

バビディにより潜在能力を解放された魔界の王が剣を創造して振りかぶり、リゼットも同じく剣を生成して迎え撃った。

そんな彼女達を踏み潰そうと下半身だけのヒルデガーンが出現するも、悟飯が横から体当たりをする事で地面に崩れ落ちる。

だがボージャックが気弾を放ち、リゼットの背中へと直撃させた。

「あ、ぐっ！」

血が溢れ、ドレスの布地が千切れ飛びながらもリゼットは歯を食い縛って即座に反撃に出た。

振り向きながら光弾を連射し、ボージャックの盾にされたザンギヤを四散させる。だがその隙を突いてダーブラの剣が背中を切り付け、だがこれも即座に反撃。回

転しながら剣を薙ぎ、ダーブラの腕を斬り飛ばした。

だがそこに容赦なくブロリーが割り込み、リゼットの胸元に手を当てて零距离で気弾を叩き込んだ。

「がっ……は、ア……!!」

「ふふ、ははははは！ その程度のパワーでこの俺に勝てると思ってたか!?」
ドレスが更に破け、ほとんど襦袢切れ同然となった。

しかしリゼットはそれにも構わず掌底をブロリーの顎に当て、彼の指を獲ってその巨体を投げ飛ばし、ハッチヒヤックへとぶつける。

更にそこを狙って悟飯がかめはめ波を放ち、二人を気の奔流が飲み込んだ。

ヒルデガーンの踏みつけを避け、ボージャックの攻撃をいなし、ダーブラの攻撃を捌き、その身を激しく傷つけられながらも己が身を標的として彼等を一箇所へと集中させる。

そして全員が完全に同じ地点に重なった時、悟飯が飛び込んでリゼットの手を掴み、力任せに放り投げた。

これにより今度は悟飯が彼等の中央に取り残される形となったが、それは彼も覚

悟の上だ。

「リゼットさん！ 今です！」

「ええ……先に行って待っていて下さい。私もすぐに行きますから」

そのまま——悟飯諸共、ヘブンズゲートに呑み込む！

この機を逃す事など出来ない。悟飯の命を惜しんで手を緩め、それでこの最後の勝機を逃せば後は全員から袋叩きにされて二人が共に死ぬだけだ。

だから悟飯すらも亜空間への封印に巻き込み、今生の別れを告げた。

そして既にナメック星人がいない新ナメック星諸共ビッグ・ゲテスターを同空間へと閉じ込め、メタルクウラ全てを戦場へと強制参加させる。

これで作戦の第一段階が終了。後は狭い亜空間へと集められた全陣営が最後の一つになるまで勝手に潰し合うだけだ。

そして後は最後の一人が弱りきった所を叩き、それで終わる。

封印したまま、などという選択はない。亜空間はある程度以上のパワーがあればその力で強引にこじ開けての脱出も不可能ではないからだ。

ならばきつと、最後の一人はそれをやるだろう。

散々空間からの脱出を試み、出る事が出来ないと知って気を滅茶苦茶に解放して暴れるだろう。

勿論それも計算の上。そうして疲弊させれば更に勝率は増す。

……叶うならば最後に勝ち残って出て来るのが悟飯ならば、と思わずにはいられない。

数十分は経過しただろうか。

唐突にピシリ、と空間に輝が入る。

来る！

リゼットはすぐに身構え、最後の敵を待った。

どうか悟飯であってくれと思いつながら、しかし違う事を心のどこかで確信し、油断なく空間の亀裂を見据える。

まず出てきたのは腕。次に黄金の輝きに包まれた全身。

最後に、背まで伸びた頭髮。

あろうことか超サイヤ人3と化したブロリーが、悟飯の死体を片手に掴んだままその姿を現した。

「な……なっ……!!」

「ハハハハハハ！ 雑魚をいくら集めたとして、この俺を倒す事は出来ぬう！」

予想外に予想外を重ねたこの世界だが、またも予想外が起こった。

亜空間にて多くの敵との戦いを経験したブロリーが爆発的に成長し、超サイヤ人3へと覚醒してしまったのだ。

これで確かに他の勢力は駆逐出来たが、代わりに全てを集めたよりも厄介な敵が誕生してしまった。

勿論ここで退く選択はない。ブロリーをそのままにすれば地球があつという間に消されてしまうだろう。

だがその戦力差は絶望的だ。このままではどうしたって勝てやしない。

「……そうでしょうか？」

だから、このままにいる事を止めた。

どうしたって勝てない。だがそれでも勝たねばならないのだ。

ここで勝たねば地球は本当に終わってしまう。

そしてそれを止める事が出来るのは自分だけであり、もう二度と失敗は許されな

い。

「バーストリミット……」

身体中の気をかき集め、今日までに少しずつ集めてきた地球の気を解放し、命すら燃やしてリゼットは最大最期の勝負に出た。

その倍率は——1000倍。

今の限界倍率である1000倍を完全に無視しての最期の輝きであり、当然こんな事をしてリゼット本人も無事で済むわけがない。

心臓が生物のものとは思えない速度で鼓動を刻み、全身をバラバラになってしまいそうな激痛がかけ巡る。

蠟燭が燃え尽きる最期の眩さ。純白の極光を纏ったリゼットは微笑みすら浮べてブロリーと相対し、そしてここを己の死地と決めた。

これから自分は死ぬだろうという確信がある。しかし不思議と、恐怖はなかった。……やっと皆の所に逝けるという安堵すらあった。

（悟空君、悟飯君、先代様、皆……お父さん、お母さん……今、私もそっちに行きます。）

そしたら……また、笑って迎えてくれますか……？)

もはや白い輝きそのものとなったりゼットがブロリーに拳を打ち込み、その巨体を揺らがせる。

だがブロリーも負けじと豪腕を突き出し、少女の華奢な身体へとめり込ませた。だがリゼットは止まらない。手刀を喉に突き刺し、剣を胸へと突き立て、槍を腹へと突き刺す。

生涯最期の演舞。

それはブロリーと、リゼットの命が尽きる瞬間まで続いた。

★

今まで気絶させられていたトランク스가到着した時、全ては終わっていた。

おかしいとは思った。

その日はやけにリゼットが笑顔を見せてくれて、悟飯も優しく、何か妙だとは思っていたのだ。

確信したのは突然リゼットに頭を撫でられ、意識が暗転する直前(恐らく超能力を行使されたのだろう)。

「トランクス、貴方は生きて下さい」

「君は希望だ。俺達が生きたという証……それがトランクス、君なんだ」
まるで今生の別れ。

駄目だ、いかないでくれ。

世界の命運なんてどうでもいい。俺は貴方達に生きていて欲しいんだ。
そう叫ぼうとするも声は出ず、無力な青年は眠りへと落ちた。

目覚めて気付いたのは、悟飯の気がないという事。

リゼットは元々気が感じられない特異体質だが悟飯は違う。

どうか生きていてくれと願いながら、必死に飛んだ。

そしてそこで見たのは……ブロリーと呼ばれていた巨漢の死体と、その近くに倒れている恩師二人の身体だった。

雨に打たれ、それでもピクリとも動かない二人の亡骸だった。

「嘘だ……悟飯さん……リゼットさん……」

まずリゼットに駆け寄った。

心臓は……動いている！ 大丈夫だ、まだ死んでいない！

トランク스는大きな安堵を覚え、すぐに悟飯の身体へと触れた。

この時、もし彼が冷静ならば気付いただろう。

心臓こそ動いているものの、呼吸をしていないという事実を。

否、あるいは気付いていて尚わからない振りをしたかったのかもしれない。

結局この後、彼は悟飯の死を知る事となり一つ目の絶望を味わった。

だが絶望はまだ終わらない。

悟飯とリゼットの身体を持ち帰った彼はまずリゼットをベッドに寝かせてから悟飯をパオズ山へと丁寧に埋葬した。

彼が尊敬していた父、孫悟空の眠る場所であり、そして彼が幼き日から過ごした場所だ。

……愛する息子の死を知り、狂ったように泣き叫んだチチの、あの絶望の叫び声が耳にこびりついて離れない。

勿論悲しいのはトランクスも同じだ。身を引き裂かれるよりも悲しい。

悲劇の連鎖は止まらない。

夫に続き、最愛の息子すら失ったチチは心を壊してしまった。

まるで生きる事を放棄したように何もしくなくなり、牛魔王に介護されてかろうじて生き永らえてはいるが……その様はまるで生きる屍だ。

悟空の死後は年齢以上に老け込んでいるように見えたが、悟飯が死んだ後はまるで生きる事そのものを身体が放棄しているかのように覇気がなくなった。

髪は真っ白になって抜け落ち、顔には皺が増え、かつての活発さは見る影もない。今のチチは初対面の人間に老婆と言っても疑われないだろう。

この悲劇の中、それでもまだトランクスがギリギリで己を見失わなかったのは、リゼットが生きていると思ったからだ。

だから彼はかろうじて踏み止まっていた。

しかし……。

「どうしてだ！ どうして……どうして、目を覚まさないんだ！」

「……トランクスよ。神様はもう……」

「そんなはずはない！ だって心臓は動いている！ 脈はあるんだ！」

「……本当はお前もわかっておるじゃろう」

亀仙人の言葉を必死に否定するも、本当はトランクスも分かっていた。

大丈夫だと言って抱きしめてくれる『姉』はいない。

二人は、赤ん坊の頃に父を失くしたトランクスにとってのかけがえのない家族だった。

心から尊敬し、心を許せる兄と姉であった。

その二人をトランクスは、永遠に失ったのだ。

「……悟空さえ……悟空さえ生きておったら、のう……」

亀仙人もまた、悔しそうに顔を俯かせて涙を流した。

それでも足りないかのように壁に頭を打ち付け、血が流れるのも構わず何度も頭をぶつける。

「何が……何が亀仙人じゃ！ 武天老師じゃ！

わしは……わしは結局……何も、出来なんだ……何も……」

この世界には絶望しかない。後悔しかない。

こんな結末を迎えてしまった事に、生き延びた者達はただ苦悩するしか出来なかった。

——そして、それから3年。

逞しい青年へと成長したトランクスはとある山の頂上にある聖堂を訪れていた。その最奥には、かつてこの惑星の神として数々の危機を防ぎ、そしてこの地球最大の危機を己の命と引き換えに退けた彼の姉がいる。

最奥に安置されたベッドの上には生前と何ら変わらぬ姿の、白いドレスに身を包んだ少女が眠っており、今もその瞼を開く事はない。

トランクスはそのベッドの脇に立ち、優しい声色で少女へと語りかけた。

「リゼットさん……今日、俺は過去に行って貴女に会って来ました。

本当に、20年前から変わらないんですね。少し驚きましたよ」

眠る少女は何も答えない。

青年もそれを理解していながら、声をかけている。

「そういえば以前、貴女は俺に『生まれる前から知っていた』と冗談めかして言っていましたけど、まさかあれが本当だなんて思いませんでしたよ。

俺が未来から来る事まで予知していたなんて……本当に、今でも貴女の底が見える気がしない」

それは壁に話しかけているのと同じであった。

相手はもうそこにいない。身体だけが元の形を保っているだけで生きていない。もうリゼットは『物』なのだ。その瞼が開かれる事はないし、その口がトランクスの名を呼ぶ事もない。

「そうそう、父さんの顔も少しだけ見たんです。貴女が言った通り誇り高そうな人で……その……貴女が言った通り、少しだけ生え際が……いえ、何でもありません」それからトランクスは返事をしないリゼットへと語った。

母が随分若かった事。

悟空が聞いた通りの人物だった事。

悟飯が幼くてびっくりした事。

悟空とターレスがそっくりすぎて見分けが付かない事。

ピッコロが緑色だった事。

……皆、今と違って活気に溢れていた事。そして街が平和だった事。

やがて一通り話したのか、トランクスは話を終えて名残惜しそうに少女の髪を撫でた。

「……それじゃ……また、来ます。きつとまた、今度はいい知らせを持って……必ず」

背を向けるも、何度も振り返る。

もしかしたら今この時にも起き上がってくれるんじゃないか、という期待を捨て切れない。

そんなはずはないと何度も言い聞かされて、理解もしているのに未練がましく振り返ってしまう。

しかし彼女が起きる事はなく、その度にトランクスは失意に暮れた。

こんな未来は絶対に変える。変えてみせる。

その願いだけが今の彼を支えているものであり、そして全てだった。

科学者「おっ、ブローリーの死体転がってるやん！

これでバイオ戦士を造れば地球にまた異星人が来ても安心や！」

【未来世界裏設定】

・ブローリーの戦闘力

このブローリーは数々の戦いを経てパワーアップしており、素の戦闘力が14億から20億に増加している。

更に伝説の超サイヤ人3に覚醒した事で最終的な戦闘力は驚きの1兆6000億となっていた。

（倍率は通常の倍の800倍に設定）

もうだめだ……おしまいだ……。

・未来リゼットの戦闘力

20年の激闘と無茶な修行を経て素の戦闘力が15億にまで上昇し、更に地球の気を日々少しずつ取り込み続ける事で一時的に己の限界を大きく超えた戦闘をも可能としていた。

最終的には命すら燃やしての1000倍バーストリミットにより1兆5000億にまで到達し、足りない力を経験と技術で補って強引にブローリーを倒し切ったが反動で命を落とした。

本編リゼットがこの領域まで行けるかは不明。

・未来悟飯の戦闘力

リゼットの修行により素の戦闘力が3億、超サイヤ人2となる事で300億となっていた。

絶望未来の敵が従来通りの人造人間だったならば、それこそワンパンで倒してしまえる強さ。

アルティメット化さえ出来れば生存ルートもあったのだが……。

・ザーボンの末路

傭兵レジックと共に新ナメック星に全軍を率いて突撃したが、メタルクウラの瞬間移動奇襲によって致命傷を負わされ、最後は「永遠の美に万歳！」とか叫びながら戦艦ごと特攻して死亡した。

・リゼットの死

結論から言うともう死んでいる。身体はただの抜け殻。

・界王神何してんの？

バビディを倒そうと無謀にも地球にやってきて死にました。

巻き添えでビルス様も死にました。

更に巻き添えでウィスさんも停止しました。

第四十五話 邪悪な予感

リゼットが飛翔し、その後を追うように3人の人造人間が飛ぶ。

己を追う人造人間を横目で見ながらリゼットは己と相手との間にある戦力差を分析していた。

現状だけを言うならば、恐らく自分の方が上だ。

現在リゼットは修行の成果によりほとんどの負担なくバーストリミットの50倍を発動しており、先ほどの攻撃もバリアで100%防ぎ切る事が出来た。

あの13号という男があのの中では最強だろうと考えると、つまりあの3人の攻撃はほぼリゼットに通らない事になる。

しかしあれが様子見の加減した攻撃であった可能性もまた否定し切れない。

何せ相手は人造人間。気が測れないせいで実力の底が読めないのだ。

「ッシャー！」

紫色の小柄な男が掛け声を発し、リゼットへ拳を繰り出した。

だがこれも彼女には届かない。肌に触れる事もなく寸前でバリアに受け止められ

てしまう。

そればかりか、彼はここで初めて不可視の防御壁が回転しているという事に気付いた。

バリアに流され、そして弾かれるように15号の身体が吹き飛ぶ。

続いて14号が攻撃するも、これも通じない。

やはりバリアに遮断されて彼の巨体が弾き跳ばされた。

それを見て13号は確信する。間違いない、あの厄介な神は常にバリアを展開し続ける事で堅牢な防御を維持し続けていると。

「Gladis^劍ib^在i^れ」

リゼットが指を動かす。

すると無数の白い剣が空中に現われ、一斉に13号達へ向けて斉射された。

当然のように三人は散ってこれを避けるが、それを追って数本の剣が軌道を変えた。

軌道を変えなかった剣はそのまま一度通過した後には散開し、逃げ場を塞ぐように包囲網を完成させる。

内と外の両方から殺到する剣の嵐を13号は何とか回避して隙間から抜け出すが、14号は片足を、15号は片腕を切り落とされた。

更に再び接近しようとした14号が空中で礫にされたように停止し、大きく弾かれて氷山へと叩き付けられた。また気合砲と超能力のコンボだ。

13号が気弾を放つも、やはりバリアを貫通する事は出来ずに遮断される。

ならば、と人造人間3人は同時に跳躍してリゼットへと殴りかかった。

だが拳を出す事も出来ず、3人の身体が同時に空中で制止する。

「ぐ……！」

「無駄です。貴方達では私に触れる事さえ出来ません」

そのままノーモーションで超能力を行使し、3体を跳ね飛ばした。

更に気弾を放ち、まずは15号を撃ち抜く。

リゼットの気に貫かれた15号は紫電を迸らせ、ガクガクと震えて膝を突いた。

だがそれで終わりではない。15号を貫いた気弾は飛び去らずに彼の腹の中で居座っていた。

リゼットが指を鳴らす——直後、気弾は全方位に放たれる無数のレーザーと化し

て内側から15号を貫いた。

よほどダメージが深かったのだろう。15号はそのまま木っ端微塵に爆散し、その破片を雪の上に巻き散らした。

「まずは1体」

「おのれ！」

13号が赤い気弾を放ち、14号が両手から次々と気弾を連射する。

だがりゼットは動かない。防御の姿勢すらも取らない。

ただそこに浮遊したまま、一切の動作なく展開されるバリアだけで気弾の全てを無効化してしまう。

やがて二人の攻撃が終わったタイミングで手を突き出し、輝く槍を発射して14号の胸を貫いた。

更に槍は剣へと変わり、リゼットが指を動かすとそれに合わせて縦横無尽に刃を閃かせて14号を切断する。

指を縦に動かせば縦に斬り、指を横に振るえば横に薙ぐ。

そうして14号を細切れの機械片へと変え、白い剣は虚空へと飛び去って行った。

「二体」

「ぬ……ぐ！」

13号が咄嗟に構えを取るも、何の意味もないと言わんばかりにその身体が再度吹き飛ばされた。

無動作から放たれるこの気合砲と念動力の何と凶惡な事か、と13号は齒嚙みする。

何の事前動作もなく発射されるのでは防御も回避も出来るわけではない。

更にリゼットが目を細めると13号の右手から不吉な音が鳴り、機械が歪んでいく。

「ぎい、が、あああああ！」

そのまま右腕の肩から先が関節の駆動限界を超えて回転！

5回6回と捻られ、コードが千切れて破片が舞い、ショートを起こしながら右腕が捻り切られた。

——この女、念動力だけで腕を引き千切りやがった！

13号は己の身に起こった恐るべき出来事に戦慄し、己を見下ろす幼い少女を見

上げる。

これが神か！　これがこの惑星の頂点か！

いくら攻撃を加えても微動だにすらしらない。

そして向こうが動いてすらいらないのに、こちらが一方的に蹴散らされてしまう。

もはや理解するしかない。格が違う、と。

だがそれでも尚、13号は笑った。

彼にはまだ切り札があつたからだ。

「まだだ！　本当の闘いはここからだぞ！　神よ！」

13号が腕を広げると、それに呼応するように14号と15号の残骸が浮かび上がった。

彼は人造人間の中でも特殊なタイプであり、同胞である14号と15号の動力炉とデータチップを取りこむ事で力を増すという特殊機構を秘めていた。

これは本来、バイオタイプの人造人間の為の機構であり、13号はそのプロトタイプとして造られた実験機なのだ。

しかし動力炉とチップは13号に取りこまれる前に、空中から突如降り注いで来

た無数の劍によって地面に縫い付けられてしまった。

「生憎ですが」

そして爆発。

13号と同化するはずのパーツが空中で砕け散り、13号の前で何の価値もない鉄片へと変わる。

それを為したのが誰かなど考えるまでもない。

これらは全てリゼットがやった事だ。

先程14号を仕留めた劍を空へ飛ばし、そこで無数の劍に拡散させて落としたのである。

「私は悟空君やベジータのように相手の変身やパワーアップを待つほど呑気ではありません。

空気を読めていないようで本当に申し訳ないのですが……勝てる時はそのまま勝負主義です」

そう非情の死刑宣告を下して腕を振るう。

すると13号の胴体が捻れ、足が捻れ、腕が捻れ、首が捻れ……身体中のありと

あらゆる関節部が強引に、そして曲げられない方向へと曲がっていく。

おいやめろ、その関節部はそっちに動くように設計されていない。

そう13号が叫ぼうとするも、リゼットは攻撃を止めようとしな。そして――。

――全身が、まるで竜巻にでも巻き込まれたかのように“捻れた”。

「ガ、アアアアアアA A A A a a a a a a a a A A A A!!」

全身のありとあらゆる箇所が捻れ、曲がり、鉄が碎ける音を響かせながらひしゃげていく。

コードが飛び出し、パーツが散乱し、ショットを起こし、断末魔にノイズが混ざり人ならざる声になっても尚破壊は終わらない。

人工皮膚が千切れ、人の形が崩れ、13号だったものがただの残骸の山となった所でようやく破壊が終わり、解放される。

雪の上に積み重なったそれはもう人造人間ではない。

元が何であったかも分からぬ、ただの鉄とコードの山だ。

その哀れな残骸に、リゼットは無言で手を翳す。

そして気弾を発射。僅かに残った残骸すらも完全に消し飛ばした。

続けて14号と15号の残骸も消し飛ばし、彼等の存在を塵一つ残さずに抹消する。「さて、悟空君は……気がパオズ山に移動している、という事はやはり心臓病が発症しましたか。」

とりあえず様子を見に行く事にしましょう」

リゼットは己が完全に消し去った意思を持つ機械……が先ほどまで確かに居た場所を一瞥する。

数秒だけそうして眺めた後、何を言うでもなく目を伏せてその場から飛び立った。後にはもう何も残っていない。

ただ、彼女達が来る前と何ら変わらずに雪と氷だけが在り続けていた。



リゼットが到着した時、既に戦いはほぼ終わっていた。

ベジータは腕が変な方向に曲がって気絶しており、トランクスも倒れている。

天津飯と餃子もダウンで、ナッパは上半身が地面に埋まっている。

かろうじて立っているのはターレス、ピッコロとクリリンだけだ。

クリリンはしっかり未来の嫁さんから頬にキスを貰ったようで、順調にリア充へ

の道を歩んでいるらしい。

つい最近、マロンとかいうのに引っかけた振り返されていたのを知っている身としては是非クリリンにはこのまま幸せになって貰いたいとリゼットは考える。

彼は鼻と髪と身長と運と金と職と家と職歴と学歴こそないが、善良で仲間思いな男だしそろそろ報われてもいい頃だ。

「というか戦ってないクリリン君はともかく、ターレスとピッコロも無事なんですね」

「無事じゃねえよ。他の二人は何かかなりそうなんだが、あのデカブツがやべえ……。こりゃあ今のまま正面から戦り合うのはキツイぜ、神さんよ」

さり気なくやられていなかったターレスとピッコロに驚きつつも、リゼットは倒れている仲間全員に気を分け与え、放置しても死なない程度に回復させる。

「ガキ二人はまだ手に負えるレベルだ。実際最初はベジータと女がやりあって、優勢に進めていた。

黒髪の方もピッコロが圧倒していたんだが……だが、あのデカブツが動いてからは一方的だ。

とんでもねえパワーであつと言う間に全員やられちゃった……」

「トドメを刺さないのは余裕のつもりか……クソツタレめ！」

ターレスとピッコロの言葉を聞く限り、修行の甲斐もあって彼らは17号や18号は圧倒したらしい。

だがそれがいけなかったのだろう。

二人の危機に16号が動いてしまい、蹴散らされてしまったのだ。

だがこれは嬉しい情報でもあった。

止めを刺していないという事は、17号達は決して冷酷な人造人間ではないという事だからだ。

16号も含めて彼らは話せば分かる人物だ……これならば味方に引き込む事も出来る。

「そういえば神様は大丈夫なんですか？ ドクター・ゲロの奴が言うにはかなり強力な人造人間が3人、そっちに向かったらしいですけど」

「心配はいりません。もう片付けました」

「……何とか流石ッスね」

相変わらず気付いたら敵の数を減らしているリゼットにクリリンが呆れつつ、もしかしてこの人がこっちにいれば人造人間に勝てたんじゃないだろうか、とも考えていた。

しかしそれはあの18号が倒されてしまう事を意味しており、喜ばしい事のはずなのに何故か抵抗感がある。

この時点ではまだ、クリリンは己の恋心に気付いていない。

「とりあえず皆を連れて悟空君の家に行きましょう。

居場所がバレている以上、早急に悟空君を移動させる必要があります」

人造人間が未来と異なり善良だというのはリゼットにとって明るいニュースだ。とりあえず倒さなくてはならない敵が三人減ったし、うまくいけばあの三人はここに付いてくれる。

しかし現状では悟空抹殺を目的としており、流石にそれを果させるわけにはいかない。

ならばまず、悟空を安全な所に匿うのが優先だ。

そして今現在、地球上において最も安全な場所といえば一つ——リゼットの住む

天界をおいて他にないだろう。

如意棒を挿さない限り別次元に潜行し続け、更にバリアも常時展開されている神殿こそまさに地球で最も強固な砦だ。

更にここならばリゼットが護ってやる事も出来る。

カメハウス？ 何でそんな予想されやすい場所に行かなければならないのだ。

リゼットはまずゲートに気絶している全員を飲み込み、ついでにクリリン達も放り込む。

気絶している連中はポポがベッドに運んでくれるだろう。

その後、悟空の家まで転移して悟空とヤムチャ、ついでにチチも神殿へと連れて行った。

これで17号達に悟空が殺される事はあるまい。

未来では神殿に籠城していたらメタルクウラに破壊されてしまったらしいが、とりあえず新ナメック星は遠視する限り、まだ平和そのものだ。ビッグ・ゲテスターもまだ近くにはいない。

ひとまず落ち着く事が出来そうだ、と思いながら地上を見る。

とりあえず人造人間の現在地だけは正確に把握しておいた方がいいだろう。

そしてリゼットが見たものは……この世界線には現れないだろう、と予想していた怪物の姿だった。

緑色の体皮、セミのようなシルエット。

それは従来の人造人間とは異なりバイオテクノロジーで産み出された細胞の怪物。

この時代においてはまだ完成しない、遠い未来にようやく稼動するはずの存在。

——セルが、何故か地上にいた。

（人造人間……セル……!?）

どういう事？ 未来の私がみすみすアレの誕生を許したとでも!?)

リゼットには知識がある。場所は分からずとも、セルという怪物を造っている研究施設がある事も知っている。

ならばそれを探して生まれる前に消してしまう事は決して難しい話ではない。

ゲロもあれば完全に放棄していたのだから、施設の場所を変えたりはしないだろう。

だがおかしい……妙だ。有り得ない。

リゼットは混乱する思考を必死に纏めようとするも、何故このような事が起こっているのかの結論を出せずにうろたえていた。

（何故……何故、アレが『完全体』になってこの時代にいるんですか!?!）

そう——セルはあろう事か完全体であった。

第一形態の化物染みた外観ではない。

いっそスマートさすら感じられる人に近い顔立ちをしており、その物腰には落着きがある。

更に意味が分からないのが人を襲う素振りを一切見せず、まるで何かを探しているように辺りを見回している事だろう。

彼はやがて上を……つまりこちらを凝視する。

そして、その口元が弧を描いた。

（——！ 不味い、見られて……！）

瞬間。

セルは“ゲートを開いて転移し”、神殿へと姿を現した。

あまりに突然の事にリゼットは咄嗟に飛び退き、クリリンとターレスが構える。セルからは不思議と禍々しい気は感じなかった。

本来ならば彼から感じられるはずのフリーザ親子やベジータの気がそこにある。代わりに彼から感じるのは『クリアな気』。

他の誰でもない、リゼット自身の気こそが彼から感じられる。

リゼットと異なり、その気はまだ悟空達でも感知出来るだろうが、この気質は間違いないリゼットのそれだ。

（わ、私の気……？　どういうこと？　悟空君やクリリン君の気も感じられますが、私の気が占める割合が高すぎる。

未来の私は一体何をやっただんですか!?)

「そう身構えないでくれ。私は貴方を傷付けに来たわけではない」セルの深くて渋い声が、リゼットを安心させるように優しく響く。

必死に相手の心を読むとするも、まるで読める気がしない。

超能力も——駄目だ、完全に防がれている。

このセルは、ふざけた事に超能力まで完備済みだ。

「——貴女に会いに来たのだ……我が義母よ」

「!?!?!?!?!」

リゼットは混乱の極地に達し、声にならない叫びをあげた。

【各キャラ戦闘力】

※今回は人造人間側

- ・ 13号…2億5000万
- ・ 14号…2億
- ・ 15号…2億
- ・ 超13号…25億
- ・ 19号…9000万
- ・ 20号…1億
- ・ 18号…8億

・ 17号…9億

・ 16号…20億

・ セル…200億

※まだ本気ではない

Q、セルVSリゼットだとどうなるの？

A、セルはリゼットの技と技術を全部持っているので初見殺しが全く通用しない。負ける。

第四十六話 セル・リビルド

「わ、私が……あ、貴方の、ははは義母、ですって？」

「そうだ。とはいえ当然だが私と貴女の間に血の繋がりがあゝるわけではない。

私がただ、勝手に貴女をそう呼んでいるだけだ」

突然神殿に上がりこんできたセルを前にリゼットは身構える。

セルと言えばドラゴンボールにおいてフリーザ、ブウと並ぶ三大悪役の一人だ。実際の所、あの二人と比べればそこまで救いようのない完全な悪党というわけではなく、むしろ楽しいという理由だけで人類を虐殺して回ったデブのブウの方が余程外道だと言えるだろう。

とはいえ、それはあくまで魔人ブウと比較した場合だ。

普通に考えればセルが悪党である事に違いはなく、疑う余地などない。

完全体になるという目的の為に数多くの人間を殺して回った彼を善人と言う事は出来ないだろう。

だがその彼が今、害するつもりはないと友好的な態度を示している。

これは信じていいのか？ 疑うべきか？ それとも信じた振りをして戦いを取りあえず避けるべきか？

だが……まるで勝てる気がしない。

まるで力を込めていないというのに、感じられる気の桁が違う。

まだ全く本気ではないだろうが、それでも数値にして確実に100コルドは超えているだろう。

「貴女ならば私の正体を知っているだろうが、貴女の知識との差異、または他の者達のスムーズな理解の為に説明する時間を頂きたい。よろしいかな？」

「……いいでしょう」

「感謝する」

セルは柔らかに笑い、リゼットを見る。

その視線に敵意は感じない。むしろ慈しみに近い感情すら流れ込んでくる。

だが、だからこそリゼットには分からなかった。混乱を助長した。

一体何をどうすれば、あの三大ボスの一人であるセルがこんなに友好的になるというのだ。

演技？ いや、もしも彼が敵ならばこんな演技をして油断を誘う必要などない。実力差は圧倒的に開いているのだ。

「私の名はセル。これより20年後……そこで寝ているトランクスのいた時代から僅かに位相のズレた平行世界よりタイムマシンでやってきた人造人間だ」

「人造人間だ?!」

セルが開幕に放った爆弾発言に思わずクリリンが構える。

しかしクリリンが構えた所で彼には脅威でも何でもないのだろう。

まるで気にした様子もなく説明を続ける。

「私の『発案者』はドクター・ゲロ。そして設計図を引き継ぎ私を完成させてくれた『製作者』はブルマ。

そういう意味では彼女もまた私の親と呼べる存在だ」

「なっ……!?!」

「かつてドクター・ゲロはあらゆる戦士の細胞を備えた究極の人造人間を考案した。しかし開発にかかる膨大な時間から研究を断念し、私を地下に捨てた。

……先に明言しておくが私はドクター・ゲロを親とも製作者とも思っていない。

確かに私というパーフェクトな存在を考え出した頭脳は評価に値するが、それだけの男だ」

製作者がブルマ、と聞きリゼットの中には二つの感情が芽生えていた。

一つは信じたい気持ち。

ゲロではなくブルマが製作したならば、本当にあの恐ろしい人造人間が味方なのかもしれない。

もう一つは疑惑。

ブルマの専攻は機械工学だ。遺伝子研究ではない。

つまりブルマにセルを完成させるなど、出来るはずがない。

だが、あの大天才ならばあるいは……。その考えがリゼットの頭の中を駆け巡る。「事の始まりは今より20年前……丁度この時代での——しかし決定的に異なる、極めて近く、限りなく遠い世界での事……」

★

暗い……暗い場所だった。

ただ無為に時間だけが流れ、設計者からも見放された研究室。

薄暗い一室に設置された培養液の中。私はそこで生を受けた。

孫悟空を殺すという目的だけを与えられ、しかし肝心の孫悟空は既にこの世になく、私は産まれる前から産まれる理由を失っていた。

それでもコンピュータは私に細胞を送り続け、私はいつか来るかもしれない完成の日だけを唯一の希望にまどろみの中を生き続けた。

そこに、一人の女が現われた。

ドクター・ゲロに捨てられて以来誰も訪れなかった研究室に初めて踏み入ったその来客は美しい少女だった。

そう……貴女だ、リセット義母よ。

彼女の目的は明白だった。

敵で溢れ返っている地球にこれ以上の敵を増やさぬ為の事前対策。

いずれ現われるだろう新たな人造人間の抹殺。つまりは私を殺しに来たわけだ。どうやって彼女が私の存在を知ったのかは今でも分からん。私をしても彼女には未だに謎が多い。

実際彼女がここで私を殺そうとすれば、私はそこで終わっていただろうし実際に

そうした世界もあるはずだ。

だが私がここにいるという事は、つまり彼女は私を殺せなかったという事になる。そう、彼女は私を殺さなかった。否、殺せなかった。

恐らくは私から感じられる孫悟空やクリリンといった仲間の気が彼女から決意を削いでしまったのだろう。

仲間を失って間もない彼女は、その仲間の面影を残す私を消す事が出来なかったのだ。

その後、悩んだ彼女はブルマに相談をした。

殺す事は出来ない。だがそのまま放置する事もまた出来ない。

二人は考えに考えた末、私の製作を引き継ぐ事にした。

ブルマは私自身をどうこうする事は出来なかったが、私の製作を続けていたコンピュータを改造する事は出来た。

そうして彼女はコンピュータが行う私への教育から孫悟空抹殺の使命を外し、更に私からフリーザ親子やベジータ、ターレスなどの悪に属する者の遺伝子を取り除いた。

ふふふ、今でこそ多少マシになっているが当初のベジータは酷かったらしいからな。賢明な判断だろう。

だがその結果私は遺伝子不足に陥り、完成どころか維持すらもままならなくなつた。

それを埋めてくれたのが……貴女だ、義母よ。

貴女は己の血を私に与え、それにより私は貴女の遺伝子をベースとした、よりパーフェクトな存在として再開発された。

完成度を高める為に何処からか引つ張り出てきたドクター・ウィローの研究もまた私にとっては有り難いものであった。

更に嬉しい事に貴女の『不変』の細胞は私に変わる必要のない姿……即ち完全体の姿を与え、17号と18号を吸収せねば完全体になれぬという欠陥を解消してくれた。

私を考案したのはドクター・ゲロであり、プロジェクトを引き継いで私を完成させたのはブルマだ。

だが私にとっては貴女こそが義母だった。

貴女から与えられる貴方の細胞を取りこんで私という存在は造られたのだ。ならばこそ、私という存在にとって貴女こそが親だった。

完成までの十数年は薄暗い研究室から離され、聖堂で過ごした。

そう、貴女がかつて神になる前に過ごしていたあの聖堂だ。

神殿が破壊されてしまった未来の世界において、あの聖堂こそが地球の砦となっていたのだ。

そこで貴女は私に遺伝子を提供し、毎日のように私に話しかけ、私を育んだ。

貴女は私に『地球及び地球人類への無意味な攻撃の禁止』という教育こそコンピュータを通して施したが、一度として私を戦力として使おうとはしなかった。

孫悟空の抹殺の代わりに敵対勢力の抹殺を私の目的として組み込めばいいものをそうせず、私には自由に生きるよう望んだ。

だから私は自分で自分の目的を決めたのだ。

パーフェクトな存在として生まれ出でたならば、必ずやこの強く、しかし弱く儚い義母を護ると。

誰かに目的を与えられたのではない。私は私自身の意思で自らの生きる理由を決

めた。

だがその目的は果せなかった。

私がようやく産まれた時には、既に何もかもが終わった後だった。

必ずや倒すと決めていた敵は誰一人として残っておらず、護ると決めた義母は醒めぬ眠りに就いていた。

私は嘆いた。あまりに遅く生まれた事を心底悔やんだ。

護るべき存在も倒すべき敵もいないのでは、せつかくの生まれ持った力も意味がない。

愚かな人間が生み出したバイオプロリーを消し去っても、私の心の霧が晴れる事はなかった。

そんな時だ。トランクスが乗り込もうとしているタイムマシンを見付けたのは。私はそれこそ、己の目的を遂げる為の唯一無二の手段だと考え、トランクスからタイムマシンを強奪した。

……ああ、安心して欲しい。殺してはいない。

奴の母であるブルマは私にとっても親なのだ。流石に彼女が狂いかねない事はせ

ん。

ただ少し抵抗されたから、多少荒っぽい手で気絶はさせてしまったがな。

「——そして私はこの時代に来た。

あの時代では果せなかった私の目的を果す為に」

セルが語り終え、リゼットは彼をいぶかしげに見る。

確かに彼からはリゼット自身の気を最も多く感じるし、フリーザ親子やベジータの気も感じない。これは紛れもない事実だ。

だがどうにも腑に落ちない。

仮に今言った事が本当だとして、最後だけ少し話が強引ではなかったか？

だって、ここにいる自分は彼が慕うリゼットではない。同一人物ではあるが、やはり別人なのだ。

つまりいくらここにいる自分を護ろうと、それは彼が護りたいと願った存在を護る事にはならない。

要するにそれは護った気になる自己満足であり、そんな事で彼が満足などするの

か？

リゼットはそう思ったのだ。

「つまり、敵対の意志はないと？」

「そうだ。私は貴方達の味方だ」

「それを信じろと？」

「信じずともよい。私が勝手に、私自身の為に貴女と地球を護り、敵を討ち倒そう」
セルはそう言い、不敵に宣言する。

「さしあたってはそうだな……まずは人造人間の17号と18号を始末してご覧に入
れよう。

未来では彼等もまた、散々に破壊行為を繰り返した、私にとっても憎むべき敵だ」

「なっ!? ま、待ちなさいセル！ それは……！」

「それでは、また。次に会う時は彼等の首を献上する事を約束しよう。

………元気な姿がまた見れてよかった。これは、本心からの言葉だ」

ピッ、と人差し指と中指を斜めに立ててクールにポーズを決め、セルはリゼットの制止も聞かずに神殿から飛び降りた。

彼が勝手に敵を減らしてくれるのなら、それは有り難い話だ。

メタルクウラやブローリーを倒してくれるならば、そこに異論など挟むはずもない。だが17号と18号は不味い！ この世界の彼等はそのままで悪党ではない。

セルが知る未来世界のような残虐な人造人間ではないのだ！

（まずい、すぐにセルを止めないと！

ああもう、あの思い込みの強さは一体誰の細胞の影響ですか!?

とにかく17号と18号の現在地は……!）

あのセルはやはり原作のセルとは違うのだろう。

冷静な性格を気取ってはいるが、何かちょっとネジが緩んでいる気がする。

例えるならば知的ぶってドヤ顔で誰も知らない論文を提出しているのだが、よく見ると自分の名前を書き間違えている……そんな感じだ。

リゼットは慌てて17号と18号を探し、すぐに転移する事を考えた。

今彼等はどこかで盗んだトラックで山道を走っている。

とりあえずあのトラック付近を張ってセルの登場に備えれば……。

そう考えていたリゼットだが、それが甘い考えである事を知ったのは次の瞬間に

17号達を乗せたトラックが亜空間に飲み込まれてからだ。

そう、忘れてはならない。あのセルのベースはリゼットなのだ。

ならばやる。亜空間移動くらい。

そして、それを用いての敵の転送などやらない理由がない。

恐らくは戦いで地球に被害を出さないようにどこかへと移動させたのだろうが……

不味い。

これではどこに行ったかが分からない。

(ど、どうすれば……このままではクリリン君が独身に……)

少しズレた事を考えながらリゼットは焦る。

後ろにいるターレスが「人造人間を倒してくれるってんらいいいじゃねえか」と

言っているのも聞こえずに焦る。

とにかくまずは場所を見付ける事。

そうしないと、本当に17号と18号が殺されてしまう。

いくら何でも完全体セルVS人造人間ズじゃ勝負が見えているのだ。

(まさか味方から敵をどう守るかを考える日が来るなんて。

いや、まだセルが味方と決まったわけじゃないですけど)

セルが友好的なのは、とりあえず嬉しい誤算だと言える。

正直何か裏がありそうな気がしてならないが、とりあえずいきなり襲いかかられたら全滅なのでこれは普通に好都合だ。

だがそのセルに17号と18号が殺されてしまうのはいただけない。

だからリゼットはそれを止めるべく、必死にセルの気を探るのだった。

・セルが中立味方として参戦しました。

今後セルは敵対勢力に喧嘩を売って回ります。

尚、原作知識はないので味方に出来るキャラ相手でも攻撃します。

リゼット「ただの厄介な第三勢力じゃないですかヤダー！」

第四十七話 不気味な静けさ

人造人間達は戸惑っていた。

彼等の共通の目的である孫悟空の抹殺を果すべく盗んだ車で山道を走っていたら突然進路の空間に穴が空いて吸い込まれてしまったのだ。驚くなどというのが無理な話である。

しかしそれでも、まだ戸惑いの中に余裕があった。

人造人間達——特に17号は己こそが最強であるという自負があったからだ。

他の人造人間と異なり永久エネルギー炉を搭載した彼と18号のエネルギーは無
限であり、尽きる事がない。

そのパワーの大きさをたや、彼等を人造人間へと変えたドクター・ゲロでさえ手に負えず一度は封印したほどだ。

この時ドクター・ゲロは彼等のパワーを落として無理に人格を調整してしまう事も考えた。

彼等がゲロに逆らい、封印せざるを得なくなったのは人間だった時の記憶と人格

が残ってるからだ。

だからそれを消して、新たな人格をインストールすれば忠実になるとゲロは考えたのだ。

もしも、実際そうしていれば彼らは今頃、ドクター・ゲロの望むような残虐そのものの悪魔へと成り下がっていただろうし、孫悟空がいなければあるいはそうしたのかもしれない。つまりは妥協だ。

最優先の目的を失う事で、まずパワーよりも調整を取り人格を変えてしまう。そんな未来もきつとあったのだろう。

だがドクター・ゲロはそれを行わなかった。憎むべき敵である孫悟空の抹殺を最優先し、17号と18号のパワーを惜しんだのだ。

結果、人間だった頃の善良な人格をそのままに圧倒的なパワーだけを手に入れた。当然そんなものが自分達を勝手に改造したゲロの言う事など聞くわけもなく、それがゲロの死因となったのは情けない話だ。

……もっとも、仮に人格の調整に成功しても今度は凶悪すぎてやはり言う事を聞かなかっただろうが。

だから17号はこの不測の事態さえも楽しむべきゲームの一環としか考えていなかった。

好戦的に、それでいて余裕を崩さぬ表情のまま下車し、後に18号と16号も続く。双子の姉である18号もまた余裕のままだ。負けるなどと考えてはいない。

対照的なのは16号か。いつもは物静かで何を考えているか分からないこの男だが、今は珍しく顔を険しくしていた。

「これはこれは。また凄いのが出て来たな。

こんな奴の話は聞いていないが……18号、こんな奴はゲロの情報にあったか？」
「いや、私も知らないよ。まあ地球には魔族や妖怪とかいうのもいるらしいし、その類なんじゃないのかい？」

車の外にいたのは化物であった。

スマートさは感じられる。顔立ちは秀麗と呼んで過言ではない。

だがそのシルエットはセミなどに近く、どう見ても人間ではない。

彼は腕組みをしたままこちらを見ており、その顔は17号同様に涼しげな余裕に満ちている。

どうやら彼もまた、己の敗北など考えないタイプらしい。

「お前か？ 俺達をこんな所へ連れてきたのは」

17号はそう聞き、改めて周囲を見る。

そこは何もない場所だ。

いや、正確に言えば以前は何かあったのだろう。

だが今は文明の残り香を見せるのみであり、様々な建物が倒壊し荒廃し切っている。

もしも17号達がフリーザの知識を持っていたならばその建物がフリーザの宇宙船などと似た意匠である事に気付けただろう。

「惑星リットという。かつてはフリーザの部下であるリット星人が暮らしていたが、4年ほど前にベジータが壊滅させてしまった無人の惑星だ。

この場所ならばいくら戦っても被害を気にする必要はない」

「なるほど。いいチョイスだ。

俺も無駄に自然や街を壊すのは好みじゃない」

17号は勝利の確信を崩さぬままに構え、セルが腕組みをしたまま攻撃を待つ。

だがそこに、今まで沈黙を守り続けてきた16号が割って入った。

「駄目だ17号。そいつと戦ってはならない」

「16号か……そういえばお前はパワーリーダーを搭載していたな。

ならば分かるだろう。私とお前達との間に存在する絶対的なパワーの差が」

セルの言葉に16号は答えない。しかしその沈黙は肯定と同意義であった。

そう、16号には既にセルの強さが見えている。

その上で出た結論は、『勝ち目がない』というものだ。

これは戦ってはならない怪物だと、出会ったその瞬間から既に確信してしまっていた。

「お前は何者だ？ 孫悟空の仲間なのか？」

「それは少し違う。私は地球の神の味方だ。

その彼女が孫悟空の生存を望んでいる。だから私は孫悟空を狙うお前達を消しに来たのだ」

セルの嘘か本当かも分からない返答に17号が鼻で笑った。

「はっ、地球の神様か。それならゲロの情報にもあったぜ。

神様がこんな化物を飼うとはお笑いだな……まあ与えられた情報を見る限りじゃあ神様ってよりはただの小娘……」

「ッ、いかん17号！ 奴を挑発するな！」

17号が嘲笑混じりに侮蔑の言葉を吐き、その危険性に一早く気付いた16号が制止の声をあげる。だがそれよりも早くセルは17号の前に立ち、彼の腕を掴んでいた。「え？」

突然の事に17号の思考が一瞬停止し、セルを見上げる。

その顔は先ほどまでの余裕に満ちた笑みから一変して真顔そのものだ。

あまりの豹変ぶりに言葉が止まり、代わりにセルの感情を押し殺したような声だけが耳に入る。

「侮辱は許さんぞ」

ボディブロー一撃。

それがセルの初手の攻撃であり、それだけで17号は察した。

こいつ……やばい！ 何てパワーだ!?

たった一撃の攻撃で17号の膝が震え、みっともなく膝を突いてしまう。

立ち上がる事も出来ない。ただ意識を繋ぎ止めるだけで精一杯だ。

「……？ おいおい17号、何を遊んでるのさ？」

「遊んでいるのではない。それだけあの者のパワーが桁外れなのだ」

未だ事態の深刻さを飲み込めていない18号が的外れな事を言うも、16号がすぐに訂正した。

這い蹲る17号にセルが掌を翳し、止めを刺そうとする。

そうはさせまいと16号が慌てて飛び出し、セルの横面に拳を叩き込んだ。

だが……無傷！ 微動だにしない！

「邪魔だ」

「ッ！」

お返しとばかりにセルの気弾が16号の顔半分を吹き飛ばした。

本人からすれば邪魔な虫を払った程度の攻撃だったのだろうが、それすらも16号にとっては致命傷。

幸い完全なロボットタイプである彼はこの程度で死ぬ事はないが、それでもまともな活動はもう不可能だろう。

「そこで寝ているんだな。お前はこの二人と違い、無用な破壊をせずに人類の側に
ついた人造人間だ。大人しくしていれば見逃してやる」

流星にここに来て事態の深刻さを思い知った18号がセルに飛びかかるも、これ
も虫を払うかのような手の動きだけで簡単に弾かれてしまう。

直接触れてすらいらない。ただの風圧だけで18号を払い除けたのだ。

「あっ、ぐ……！」

「慌てるな。お前は後だ」

いとも容易く16号と18号を無力化したセルは再び17号へと手を翳す。

セルにとって彼等は前座ですらない。

本番はこの後にやって来るはずのメタルクウラやブロリーだ。

だがその時になって敵が残っているのは少々面倒な事になる。

だから消す。そう決めて気弾を放ったが、直後二人の間に開いた空間の亀裂がセ
ルの気弾を飲み込んでしまった。

「これは……！」

セルの驚愕に呼応し、空間が開く。

中から光が溢れ、遠く離れたリット星に地球の神が降り立った。

佇まいこそ静かなものだが、その全身は淡く発光しており白い光の粒子が輝いている。

これはバーストリミットの倍率を高めた時に起こる現象で、即ち彼女はいきなり臨戦態勢に入っているという事だ。

更に周囲には光球が二つ、Xの字を描くようにリゼットの周囲を旋回しており咄嗟の迎撃にまで備えている。

一目見て分かる全力モードだ。白翼まで展開しており、どうやらセルをあまり信用はしていないらしい。

少なくとも、いつセルが仕掛けてきてもいいようにしているし、それを隠す気すらないように見える。

つまりはこれがそのまま、今のリゼットのセルに対する信用の低さというわけだ。セルはそれを悟り、小さく肩をすくめた。

「そこまです、セル。彼等から手を退きなさい」

金色の瞳が真っ直ぐにセルを見据える。

セルにとっては、培養液から出た時には既に醒めぬ眠りにつき、決して瞼を開かなかった彼女からこうして見られるというのは実の所そう悪い気分ではない。

彼は困ったように笑いながら、それでもあえて疑問を口にする。

「もうこの場所を突き止めたか。流石と言いたい……何故邪魔をする？」

人造人間達は貴女にとっても敵のはずだ。未来の世界でもゲーム感覚で街を破壊した。

後に現われる者達と比べれば警戒に値する相手ではないが、倒しておいて損はあ
るまい」

「貴方のいた未来世界ではそうだったかもしれませんが、この世界では違います。彼等は無駄な殺戮や破壊を一切行っていない。……まあ窃盗はしてますけど」

「だがこれからもそうである保証は何処にもない」

セルの正論にリゼットは言葉を詰まらせ、チラリと17号達を見る。

セルはそれを見て即座に、彼女が亜空間を開くタイミングを計っている事を看破した。

なるほど、正面からの戦いでは勝ち目がないから会話で気を引いて、一瞬の隙を

突いてヘブンズゲートを開き彼等を逃がそうというわけか。

他の相手ならば通じたのだろうか……しかしここにいるのはセル。リゼットの細胞をベースに造り出された人造人間だ。

ならば彼女の狙いなど分かつて当然であり、防ぐ手立てすらも簡単に用意出来る。

だがセルは、あえてここは乗っておく事にした。

今、彼女と敵対するのは決してセルにとってプラスではないからだ。

「しかしそいつ等の為に貴女と敵対する意志はない。

いいだろう、連れて行くといい。それが貴女の望みというならば、私はそれを最大限に尊重しよう。

もしもそいつ等が貴女の信頼を裏切る行為に出れば、その時こそ私が始末すればいいだけの事だ」

「話が早くて助かります。正直……物分かりが良すぎて逆に怖いくらいですよ」

「これはこれは、私も随分と警戒されたものだ。それもやはり、貴女の持つ『知識』に関係があるのかな？」

「——！ そんな事まで話したのですか、『私』は」

リゼットの表情が分かり易すぎるくらいに驚愕に満ち、ほとんど答えを口にしてしまったのを見てセルは噛み殺すように笑った。

なるほど、本質は未来と同じか。

基本的には穏やかだし落ち着いている。冷静さを保ち、常に様々な物事へと思案を巡らせている。

『自分は色々知っています』という態度を取り、相手に底を見せないように振舞っている。

だがその本質は好奇心旺盛で、そして素直な少女だ。だからこういう所でボロが出る。

例えるならば論文を完璧に書き上げ、さも当然のように提出して周囲を驚かせるも実は論文そのものを間違えている……そんな所か。

「未来の貴女は大分弱っていたからな。精神的に酷く打ちのめされていた。

地球を背負う立場故に誰にも弱い部分を見せる事が出来なかったが、それでも誰かに弱音を吐きたかったのだらうな。それが私のような化物であらうと」

「……………」

「あまり未来の自分を責めんでやってくれ。

そういう部分も含めて、私にとっては愛しい義母だったのだ」

リゼットは内心で未来の自分に対し、このアホンダラ何やってんですか、と思いつく限りの文句を飛ばしていた。

だがそれすらもセルにはお見通しのようだ。

彼は愉快そうにリゼットを窘め、そして17号を蹴り飛ばしてリゼットの前に転がした。

「では私はもう行く。また会おう」

「これから、どうするつもりですか？」

「しばらくは身を潜めるさ。人間達は私を見るだけで怯えてしまうからな。

だが地球や貴女の危機には必ず駆けつけると約束しよう」

セルはそれだけ言うとは空間を開き、どこかへと転移してしまった。

場所は分からない。既に気を消してしまっている。

リゼットはリット星の荒れた大地を一望し、ゲートを開く。

とりあえず人造人間達を回収し、悟空とは違う場所に運ばなければならない。

神殿はアウトだ。あそこに人造人間達を連れて行けば最悪の場合戦いになってしまう。

となると、とりあえず何処かに家を建てて彼等を住まわせてしまえばいいだろうか。

後、16号はカプセルコーポレーションに連れて行って修理しなければまずい状態だ。

顔の半分がない状態でまだ機能停止していないのが凄いが、割とグロいのでさっさと直してしまいたい。

とりあえず早々に動くべきだろう。

そう考え、リゼットは人造人間達を連れて地球へと戻った。

・未来世界の16号

実は未来でリゼットが味方を増やすために起動して味方になっていた。

が、結局大した活躍は出来ずにブローリーに破壊されてしまった。

相手が悪すぎたという他ない。

第四十八話 激突!! 100億パワーの戦士たち(前)

「この辺りでいいでしょう」

木々に囲まれた森の中でリゼットは辺りを見ながら呟いた。

近くには河も流れているし、この森は果物も豊富だ。

リゼットが18号と17号を匿う場所として選んだのは紅海の中央に位置する誰も住んでいない無人島であり、ここならばセルもそう簡単には発見出来ないだろうと踏んだのだ。

以前はガーリックJr.の宮殿があったそこも、今では緑溢れる島へと変わっている。

物質創造の仙術で空気中の元素を固定し、何も無い空間に様々な素材を生み出す。それらを超能力で動かし組み合わせ、時に切断し、二人で暮らすとしては十分に広いログハウスを建設した。

家具なども同じ方法で作成して適当に並べていく。

配置が気に入らなければ、18号と17号が勝手に動かすだろうからこんなのは気

分で並べても問題ない。

人造人間に必要なかは分からないがトイレと風呂も造り、その他最低限の物を揃える。

後は何か欲しがればその都度足していけばいい。

「すごいね。あつという間に家ができた。」

神様ってのは何でも出来るんだねえ」

「そうでもないですよ。こういう特殊な力に関しては私は歴代で最も劣っているかもしれません」

18号の惜しめない称賛を受けながら、リゼットは否定を口にした。

この言葉は決して謙遜などの類ではなく、純然たる事実だとリゼットは考えている。

確かに彼女はほとんど無から物質を創造出来るし、莫大なエネルギーに物を言わせての大質量創造も可能だ。今のリゼットがその気になれば街一つ丸ごと創造だって出来るだろう。

気を分け与える事で植物を急成長させる事も出来るし、遠視や亜空間移動、読心

なども備えている。

ピッコロが消してしまった月だって先代の教えを受けながらではあるが復元した。

特に植物の成長などの命に関する力は宇宙で修行を始めた頃から急激に伸びてしまった。

だがりゼットは先代のようにドラゴンボールを創れるわけではないし、界王のように自身を介して悟空の声を宇宙全てに届けられるわけでもない。

閻魔のように死者に生前の肉体を与える事だって出来ないし、老界王神のように誰かの潜在能力を解放するなどという事も出来ない。

若い方の界王神よりは多芸かもしれないが、そんなのは自慢にもなるまい。

戦闘力では勝っていても神としての能力では明らかに劣っている。そこが人間上がりの神であるリゼットの限界でもあった。

「17号が起きたら伝えて下さい。悟空君を狙うのは諦めて、ここで静かに暮らすようにと」

「ああ、何とか言い聞かせてみるよ。流石にあの化物と闘り合っちゃ勝ち目はなさ

そうだし……どうもアンタにも勝てる気がしない」

「パワーリーダーもないのに分かるんですか？」

「女の勘さ」

意外にも18号はリゼットからの提案をすんなり受け入れた。

悟空を狙うのをやめてしばらく静かにしているのが現状では最善だと判断したのかもしれない。

元々悟空を狙っていたのも、とりあえず目的が欲しいというだけのものであったらしく18号は全く拘っていなかったようだ。

ただ、何の意味もなく改造されたのでは癪だから、せめて改造された目的くらいは果たしておきたい、という心境だったとか。

要するに別に果さなくても問題はないらしい。

それを聞いて安堵し、リゼットはその場から転移した。

★

16号をカプセルコーポレーションへ預けたりリゼットは、神殿へと帰った所でそれに気が付いた。

新ナメック星から感じられる気。その波長がおかしいのだ。

まさかと思い遠視を試みてみれば……いた！

新ナメック星の上に寄生するようにへばりつく巨大な機械惑星、ビッグ・ゲテスターが。

どうやら遂にメタルクウラのお出ましらしい。

最悪なのは、今は悟空が病気でダウンしているという事か。

つまりこの戦い、悟空抜きでやらなければならない。

加えて今地球にはセルがいるから、自分が離れた時の為に戦力をこちらにも残しておく必要があるだろう。

万が一の時、地球に誰もいませんでは話にならないのだ。

「皆、聞いて下さい」

人造人間との戦いのダメージから回復し、意識を取り戻した仲間達へとリゼットは語る。

新たな敵の出現を。

「以前私が戦ったフリーザの兄、クウラの事は覚えているでしょうか？

彼が復活し、新ナメック星に出現しました」

「っ！ あ、現われましたか！ 奴が！」

リゼットの言葉に真っ先に反応したのは意外にもトランクスであった。

そこでリゼットが思い出したのは、彼の未来は原作と違ってメタルクウラと遭遇済みだという事実だ。

それどころか未来が詰んでしまったのはメタルクウラのせいと言っても過言ではない。

彼等が神殿を破壊してしまったから精神と時の部屋は使用不可能となったし、カリン塔を壊されたせいで仙豆も使えなくなった。

トランクスにしてみれば人造人間などよりも余程憎むべき敵なのだろう。

「ええ。このまま放置すればナメック星は彼等に滅ぼされ、ナメック星人は皆殺しにされてしまうでしょう。」

それにいずれは地球へもやって来るはず。ですから、そうなる前にこちらから攻め込んで彼等を駆逐します。これは絶望の未来を避ける為の重要な一戦となるでしょう」

リゼットの言葉にトランクスが頷き、他の戦士達も無言で頷く。

ベジータだけが興味なさそうに腕組みをして壁によりかかり、だがチラチラとこちらを窺っていた。

興味あるなら気取ってないで素直にそう言えばいいのに。

「しかし地球にもいつ敵が現われるかが分かりませんし、セルに警戒しておく必要もあります。」

ですから全員を連れて行く事はしません。

ナメック星へと赴く面子は私が選びますが、よろしいですね？」

「俺をその中に入れるならば何も言わん」

「心配せずともピッコロは入っています」

戦力バランスの分配は重要だ。

現在悟空を抜いた戦力ならばリゼット、ターレス、ベジータ、ピッコロ、トランクスが5強になるが、その全員を連れて行くという愚行は出来ない。

そしてこの戦いにはリゼットとピッコロを入れてしまっているのでこの時点で入れる事が出来るのは後一人くらいだ。

後は残りの面子をどう振り分けるかである。

「後は……悟飯君はこのまま神殿に残って悟空君の看病を。

クリリン君も側で支えてあげて下さい。

ナメック星には人参化、ナッパ、トランクス君……それから天津飯と餃子に来て頂きます」

地球にはターレス、ベジータ、悟飯、ヤムチャ、クリリン、ポポ、カリンを残し。ナメック星にはリゼット、トランクス、ピッコロ、ナッパ、人参化、天津飯、餃子で殴り込みをかける。

これがリゼットの決めた突撃メンバーだった。

メタルクウラは何とかりゼットとトランクス、ピッコロで相手をし、ナッパ達には量産型のロボットの相手に回ってナメック星人達を救出してもらう。

特にムーリ最長老とデンデの救出は最優先だ。

最悪の場合でも、彼等のうちのどちらかさえ生存させればドラゴンボールでのやり直しが利くのだ。

「行きますよ」

「ええ、行きましよう」

「ああ。クウラの野郎、ナメック星に手を出した事を後悔させてやるぜ」

リゼットがゲートを開き、トランクスとピッコロが後に続く。

本来は自らが創り出した亜空間内に敵を封じ込めるだけの技だったデッドゾーンがリゼットの改良により今や便利な空間移動技になっているのを見ればガーリック Jr. は果たして何と思うだろう。

一応本来の使い方も出来なくはないが、創り出した亜空間は術者との間に一定以上の力の差があれば自力で脱出出来てしまうのであまり実用的ではない。

ゲートを出ればそこはもうナメック星であり、多くのナメック星人達がロボット兵士に連行されている姿が見えた。

「ナメック星人達が！」

「どうやら生け捕りにしてエネルギーを奪い取るつもりなのでしょうね」

剣を抜いて斬りかかろうとするトランクスを手で制し、リゼットが超能力で視界内に存在する全てのロボット兵士を対象として超能力を発動した。

瞬間、次々とロボット兵が爆散していきナメック星人達の自由が戻る。

ロボット兵士の装甲は相当に固そうだが、いくら外が硬かろうが超能力には関係ない。

直接内部の回路を滅茶苦茶にして爆発させるまでの事だ。

「トランクス君とピッコロはクウラと戦うときの為に気を温存しておいて下さい。

この程度の敵ならば私だけで片が付きます」

（や、やっぱり凄い……リゼットさんの超能力は。

過去の世界であっても彼女の強さは健在のままか）

構えも動作も取らずに敵を蹴散らすリゼットを見て、トランクスはその頼もしさに顔を綻ばせる。

実際のところ、彼の世界のリゼットはこの時代にはここまでの力を得ていない。

戦闘力数値にしても最大で10億と少しといったところだっただろう。

だがこの世界のリゼットは来るべき戦いに備えて超神水を使用しており、それが大きな差を生み出していた。

とはいえ、彼女の測り難い気質のせいでトランクスはその事に気付けないでいる。リゼットはトランクス達を連れてビッグ・ゲテスターへと向かいながら、視界に

ロボット兵が映り次第それを碎いていく。

傍から見れば少女が歩いているだけでロボット兵が勝手に自爆しているようにしか見えず、ナメック星人達は不思議そうな顔をしていた。

「道すがら簡単に今回の作戦を説明します。

まず私達はビッグ・ゲテスターへと乗り込み、ナッパ達はそこで別行動を取って捕まえられているナメック星人達を救出して下さい」

「おう」

「お任せあれ」

「分かりました」

「はい！」

ビッグ・ゲテスター内部にはもう捕縛されてしまったナメック星人が何人かいるだろう。

これを放置しておくとなメック星人がエネルギー搾取の為に処刑されてしまうので、ナッパと人参化にはこの救出を担当してもらう。

リゼットのその要請に四人は快く返事を返した。

「私とピッコロ、トランクス君は最深部を目指します」

「最深部だと？」

「はい。そこからクウラの気を感じるのです。

恐らく本体はそこにいるでしょう」

メタルクウラの情報は既に悟空とリゼットが皆に話している。

いや、メタルクウラだけではない。絶望の未来を生み出した敵の情報は余す所なく味方全員へと伝達されている。

したがってメタルクウラが量産型である事や、いくら倒してもパワーアップするだけだという事も皆知る事であった。

「だがその途中には必ずメタルクウラの群が妨害に現われるだろう。何か策はあるのか？」

「策、と呼べる程上等なものではありませんが……。

現時点においてでの話ですが、私とメタルクウラとの間にはかなりの戦力差があるはず。

無論これはメタルクウラを撃破し続ける事で埋まってしまう差なのですが、それ

でも暫くは私一人で食い止める事が出来るでしょう」

ピッコロの疑問に対して出した答えは、策などと呼べるものではなく、ど真ん中ストレートを打ち抜くような単純なものであった。

メタルクウラは攻撃を受ける事や撃破される事でそのデータを本体へ転送し、更に強力なメタルクウラになるというふざけた性質がある。

つまり本体を倒さない限りどんな量産型が強くなり続け、しかもそれがどんどん生産されるといふ悪夢のような状況が完成してしまうのだ。

恐らく未来においても地球に來たメタルクウラを、都市や人類を守る為に止むを得ず何度も倒してしまい、それで最終的に手に負えなくなったのではないかとリゼットは考えていた。

だからこそ思う。戦場がこのナメック星であるうちに勝負を付けてしまふべきなのだ。

今ならビッグ・ゲスターが目の前にある。本体を狙えるのだ。

「そんな！ リゼットさんを一人で囲にしろと言うんですか!？」

「そうです。私が何とかメタルクウラを引き付けておきますから、その間に二人は

クウラ本体を叩いて下さい」

慌てたようなトランクスの声にリゼットは決意を固めた表情で答える。

ピッコロとトランクスを囷にリゼット自らが行くという方法もなくはない。

実際その方が勝率は高いのだ。

しかしそれを行うと高確率でトランクスカピッコロのいずれかが死ぬだろう。

それよりはリゼットがメタルクウラ軍団を相手にしてトランクス達に行って貰った方が皆が生きて帰る可能性が高いと踏んだのだ。

「あのお女神様。思ったんだが、そんな面倒な事しねえでもゲートってので本体の前に全員で殴り込みかけてぶっ殺しゃあいいじゃねえか」

「出来るならもうやっています」

ナツパの尤もな言葉に、しかしリゼットは首を振った。

クウラ本体付近への転移は実は先程から試しているのだが、一向に出来る気がしないのだ。

ゲートも、瞬間移動も、どちらも行えない。

恐らくこれはメタルクウラ自身が瞬間移動を使えるが為に、『本体への転移』と

いう発想を得てしまったせいだろう。

思うに彼は最大の急所である本体を守る為に瞬間移動などの空間移動能力を阻害するフィールドか何かを本体付近にも展開している。

それがリゼットの転移をも防いでしまっているのだ。

実の所、これは半分予想出来ていた事だ。

何故なら未来の自分はわざわざビッグ・ゲテスターごと亜空間に放り込んでいるが、これがもうおかしい。

本体の前にゲートで転移してしまえばいいではないか。

そうして本体を倒してしまえば、それでメタルクウラは終わりのはずだ。

だが未来の自分はそれをやらなかった……出来なかったのだ。

原作においてそんな、転移を防ぐフィールドなんて能力は明かされていない。

だが明かされていないイコール、持っていない、ではないのだ。

あるいはリゼットが存在している事で、それに対抗するためにクウラが新能力を獲得したのか……どちらにせよ、転移からの奇襲は行えない。

ならば危険を承知の上で乗り込むしかないのだ。

【激突!! 100億パワーの戦士たち】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作第9弾。

初の劇場版ボス連投を成し遂げた一作。

前の映画で死んだはずのクウラがメタルクウラと化して逆襲してくるというストーリー。

上映時期や悟空達の戦力、悟飯の外見からして人造人間に備えて修行している3年間の間の出来事と考えるのが自然。

……の、はずなのだがデンドエがまさかの原作フライングで地球の神様になっており、全く辻褄が合わなくなってしまうている。

ピッコロさんも強さ的に神様と融合したとは思えず、何故代替わりしているか全くの謎。

神様が夜逃げでもしてしまった世界線なのだろうか。

パンフレットでは一応神様と融合した事になってるが……。
ベジータの映画初出演作。

【量産型メタルクウラ】

まさかの再登場を果たした前作ボス。

太陽に突っ込んで死なず、脳だけになって漂っていたところをビッグゲテスターと融合して復活した。

脳だけでも宇宙空間で生存出来るとか、こいつどうなってるんだ……。

瞬間移動に遠隔爆破、再生に自己強化と恐るべきスペックを誇るが、真に恐ろしいのはその生産数。

何とこのメタルクウラは量産型であり、この超スペックでありながら百体以上生産されていて全国のチビッ子にトラウマを植え付けた。

崖の上から大量のメタルクウラがモリモリ湧いて来るシーンは圧巻。

【メタルクウラ・コア】

量産型ではないクウラ本体。

頭部だけしかなく、ちょっとキモい。

悟空とベジータのエネルギーを吸収しようとしたが、吸収しきれず自滅した。

最後には悟空の気弾で消し飛ばされた

こいつ量産型より弱くないか……？

【デンデ】

上映時期にはまだ原作でも神様になっていなかったくせにサラッと当たり前のように神様になっていて盛大なネタバレをかました、とんでもない奴。

お前出番まだ先のはずやろ……。

第四十九話 激突!! 100億パワーの戦士たち（後）

ビッグ・ゲテスターの中に入ると同時にトランクス達には気を消して行動するように指示をし、リゼットは一人で正面から突入をした。

向かう先はクウラ本体。一切の迷いなく翼を展開して全速力で翔ける。

こうすればクウラから見てリゼットが本体に特攻してきたように見えるだろうし、実際本体の前までこのまま到達出来ればリゼット自身が本体を倒してしまうつもりだ。

だからクウラは自分を守る為にメタルクウラの軍団をこちらに回すしかない。しかしそれこそが狙い。メタルクウラがこちらへ来てくれれば、別ルートで侵入したトランクス達がクウラ本体へと着きやすくなる。

即ち今回のリゼットの役目は囷であり、だが少しでも防衛が緩めば本体まで食い破ってくる攻撃性の囷でもある。故にクウラはこちらに全力で対処するしかない。

「現れましたか」

「来たか、地球の神。待っていたぞ」

まずは一体。全身を銀色に輝かせたメタルクウラがリゼットの前に立ち塞がる。本来はここでクウラの健在に驚くべき場面なのだろうが、生憎彼の復活はもう知っている。

だからリゼットに驚きはない。むしろ驚くと思っていたのだろうクウラへと突撃し、その腹に手を当てて零距离で気弾を発射。圧倒的な気の差を以て粉々に爆破した。

そして振り返る事もなく更に前進し、壁を破壊して本体への最短距離を飛翔する。流石にここに来てようやくクウラも慌てたのだろう。

リゼットの進行を阻むように、数える気も失せるメタルクウラの軍勢が姿を現した。

なるほど、普通に考えてこれは心が折れそうな光景だ。

少なくともメタルクウラ一体に苦戦していた頃の悟空とベジータではどうしようもないだろう。

「強化された俺を一撃とは、貴様も予想以上にパワーアップしているようだ。だが俺はこの通り無数にいる。いかに貴様が強くなろうと勝ち目はないぞ」

メタルクウラズが一斉に口を開き、同じタイミング、同じ声でエコーしながら話した。

正直に言って物凄く鬱陶しい。誰か一人が代表して話すという発想はないのだろうか。

リゼットはそんな考えを顔には出さず、余裕すら感じられる微笑みを浮かべた。「質で勝てなければ数ですか？ 結構単純なんですね」

リゼットは更に翼を輝かせ、光の粒子を舞い散らせる。

勿論演出だ。ここから本気で突破を狙うというフリである。

こうすればクウラも死に物狂いでこちらを止めに来るだろうし、他を気にしている余裕などなくなるだろう。

今回の目的は囷。ならば精々派手に、華やかに煌びやかに暴れに暴れて目を惹き付ける。

ここは舞台であり、己は役者。ならばその役目は派手に振舞って観客を釘付けにする事であり、舞台裏から意識を逸らす事だ。

だからリゼットは普段よりも一層神々しく輝き、メタルクウラの軍団へと突撃を

かけた。

「はっ！」

まずは高速飛翔。

光の軌跡を描きながら物理法則を無視したように直角に方向転換を繰り返してメタルクウラ達を翻弄する。

そして空から気弾をバラ撒いて数体のメタルクウラを爆撃、破壊した。

何体かのメタルクウラが殴りかかるも当たらない。リゼットの速度を前に全てが虚しく空を切った。

「遅いですよ！」

空中で回転。

それと同時に翼が巨大化し、周囲にいたメタルクウラ全てを薙ぎ払った。

更に翼を広げて羽ばたかせる。

すると翼から羽根の形をした気弾が発射、拡散され地上のメタルクウラを狙い撃ちにする。

休まずに今度は残像拳と合わせての高速移動。

更に残像を残した場所に気の固定化で創り出した己の分身——自律思考気弾を残し、あたかも残像が質量を持って襲いかかってくるように見せかける。

実際クウラ達から見れば残像と思っていたものがそのまま消えずに突撃してくるなど予想もしていなかった事だろう。

分身リゼット達は次々と近くのメタルクウラを駆逐し、役目を終えて消滅していった。

「はあああ！」

翼を再び巨大化させ、残ったメタルクウラの軍団に正面から突撃。

翼の形をしているがこれは気の塊だ。光の翼に触れたメタルクウラ達が次々と消し飛ばされて行き、リゼットが尚も直進する。

白い氣に包まれた彼女がそのまま前へと進む事で更に壁を貫き、また少し本体への距離が縮まった。

これでまずは第一波の完全消滅だ。今の戦いだけで100体は葬った事だろう。しかしすぐに第二波、第三波のメタルクウラ軍が出動し、リゼットの行く手を阻むように彼女を取り囲んだ。

更に最悪な事に、その力は先ほどよりも上昇しているはずだ。

「止まれ！ その先へ進むな！」

「そう言われて止まるとでも？」

リゼットは微笑みを崩さぬままに、まるで蚊でも潰すように掌をパン、と叩いて合わせる。

瞬間、巨大な白い気の手が二つ現われてメタルクウラ達を一気に挟み潰した。

更にその二つの手はそのままりゼットが手を薙げば動きに合わせてクウラ達を薙ぎ払い、叩くような動作をすればクウラ達を地面に潰した。

最後にリゼットが祈るように両手をゆっくりと近づける。

すると巨大な二つの手は区画を取り囲むように動き、全てのメタルクウラを巻きこんでその手の中へと納めた。

——合掌。

リゼットが両手を合わせて祈りの姿勢を取り、メタルクウラ達が纏めて握り潰された。

最後に白い両手は大爆発を起こし、再生すら出来ぬほどにメタルクウラを消し飛

ばす。

これにて第二波も終了。リゼットは更に壁を砕いて飛翔し本体のいる区画へと接近する。

いよいよこれでクウラも余裕を失ったはずだ。

実際次から次へとメタルクウラが出現し、遠視してみれば他の区画の兵士ロボットすらもが機能を停止している。

どうやらビッグ・ゲテスターの全機能をメタルクウラの生産と強化に費やしたようだ。

リゼットは狭い通路へ入った所で一度停止し、呼吸を整えた。

（いよいよ全力というわけですか。望む所です。

ここからは総力戦といきましょうか）

出て来る度にアップデートされるメタルクウラに冷や汗を流しながらも、リゼットは唇を弧の形にした。

相手が己を超えるまでそう時間はかからないだろう。

ならば後は耐えて時間を稼ぐのみ。そうすればきつとトランクスとピッコロが本

体を倒してくれるはずだ。

「小娘が！ そう何もかも上手くいくと思うなよ！」

(上手くいってるんですよ……今の所はね)

激昂して相変わらず声を揃えながら突撃してくるメタルクウラを前にリゼットは両手を広げた。

気を高め、全身が白く発光する。

「Raging blast！」

両手を前に突き出し、気の奔流を発射。

回避は出来ない。それを行うにはこの通路は余りに狭すぎるからだ。

白の極光がメタルクウラ軍団を呑み込み、消し飛ばして行く。

それでもまだ向こうの資源は尽きないらしい。

またも新しいメタルクウラが出撃し、気が遠くなりそうになる。

だが向こうが数ならこちらも数だ。

リゼットは光球を2つ生成し、それを己の周囲に浮かばせた。

そしてもう一度、先ほどと同じ構えを取る。

「Raging blast!」

リゼットの両手から気の奔流が再び放たれ、それと同じくして2つの光球からリゼット本人には若干劣る気の奔流が放たれる。

その二発の気功波はリゼットの気功波と合流し、螺旋を描いて直進した。

合計3連射の気功波攻撃。これにメタルクウラ達は為す術なく再び消え去っていった。

「はぁ……はぁ……っ」

早くも息が上がってきたリゼットは流石に少し飛ばしすぎたか、と反省する。

だがこうでもせねばあのメタルクウラ軍団は倒せない。

余裕で倒しているように見せているリゼットだが、実のところそこに余裕などあるはずもなく、全ての攻撃が全身全霊、全力の攻撃なのだ。

既にかかりの数を蹴散らしたはずだが、それでもまだメタルクウラは飽きずにやってくるし、来るたびに確実に威圧感が増している。

リゼットが先ほどから気功波による一斉掃射に戦術を切り替えているのも、取り囲まれたらもう対処出来ないと踏んでいるからだ。

だから密集しやすいようにあえてこの狭い通路に留まってやった。

ここならば増援のメタルクウラ全てを巻きこんで消し飛ばす事が出来るからだ。再び飽きもせずによつてきたメタルクウラ達を前にリゼットは両手の中に光球を生み出し、流星の如き白の光球を前方へと叩き込んだ。

「Sparkling Meteor!」

かつてクウラのスーパードヴァを押し返し、一度はクウラを葬った技。

それが再びクウラの視界を埋め尽くし、蹴散らしていく。

消えていくメタルクウラ達は声を揃えて『忌々しい技を!』と叫んでいた。

だから誰か一人だけに喋らせろよ。

「はあっ、はあっ、はあっ……!」

やはり気の消費が馬鹿にならない。

足が震え、すぐにでも座り込んで休んでしまいたい気持ちになる。

だがすぐにメタルクウラの軍団が一糸乱れぬ動きで現われ、再びリゼットは気を高めた。

「……っ、Raging blast!!」

四度目の気の大放出。

それに合わせて学習したメタルクウラ達は一斉に瞬間移動を行いリゼットの背後へと転移した。

だが彼等を見た。

放たれたリゼットの気功波が亜空間に飲み込まれているのを。

そしてその出口が、彼女の背後——即ち自分達の前に展開されているのを！

「み、見抜かれて、うぎゃあああああああ!!」

そう、読んでいた。

先ほどから不自然にメタルクウラが瞬間移動を行わなかったのはこの為だ。

リゼットに何度か纏めて消し飛ばさせて、それでリゼットがその戦いに慣れた所で背後に一斉移動し、虚を突く。

その戦略を更にリゼットは読みきり、裏の裏を搔いたのだ。

だが強化されたメタルクウラはもう一撃では全滅しない。

リゼットはすぐに振り返り、二発目を彼等へと叩き込む必要があった。

「Raging blast……!!」

手を左右へ広げ、片手でレイジングブラストを発射。

両手でない分威力は落ちるが、二発発射する事で隙を少なくしている。

更にそのままりゼット自身が回転し、前後左右全てを攻撃対象として薙ぎ払い、今度こそメタルクウラを全滅させた。

戦術ではリゼットが勝った。彼等の狙いを完全に読み切り返り討ちとした。

だが彼女とても余裕があるわけではない。

先ほどまでの余裕の表情は完全に崩れ去り、その顔には疲労が色濃く出ている。

「はあっ！ はあっ！ はあっ……！」

はー……っ、はー……っ！」

指先が震えて目が霞む。

足が目に見えてガクガクと震え、汗が止め処なく溢れていた。

先ほどまで展開していた光翼も既になく、明らかに限界が近付いている。

元々リゼットは気の形状変化や亜空間を利用して戦う技巧派であり、気の大放出で戦うタイプではない。

そういうのはどちらかというとベジータが得意とする戦法だ。

彼ならばあるいは——リゼットと同格の強さがあれば、という前提になるが——トランクス達が本体を倒すまでの間ひたすらこの狭い通路でグミ撃ちを続ける事が出来たのかもしれない。

だがリゼットにそれは出来ない。

いかに戦闘力で上回ろうと、根本的に基礎体力がサイヤ人に遥かに劣るのだ。無論今のリゼットと悟空ならばリゼットの方が体力がある。

だがもしも同じ戦闘力になればリゼットの体力など悟空の半分すらもない。それが地球人とサイヤ人の埋め難い差なのだ。

だが敵はそんな事を気にしてはくれないし、むしろその隙を徹底的に突く。再びメタルクウラ達が現れ、だが先ほどのように走る事はしない。

むしろ、まるで追い詰めるようにゆっくりと歩んでいた。

「はあっ！ はあっ！ はあ……っ！」

「ククク……随分数を減らしてくれたが、どうやらここらが限界のようだな？

だがよくやったと褒めておいてやろう。貴様のせいで我がビッグ・ゲテスターの資源も底を突いてしまった」

「そ、それは……いいニュースですね。

つまり……このまま続ければ貴方を倒せるというわけですか」

「その通りだが、もう無理だ。お前にそんな力は残っていない」

リゼットは胸元に手を伸ばし、仙豆を取ろうとする。

だがその手を壁から生えてきた機械の触手が絡め取った。

しまった、と思うも遅い。

更にもう片方の手、両足、胴と触手が絡み付き、完全にリゼットの動きを封じてしまった。

「あ、ぐっ！」

「残念だったな。このビッグ・ゲテスターそのものが俺なのだ。

切り札を最後に残したのは俺の方だ」

恐らく、これはやろうと思えばいつでも出来た攻撃なのだろう。

それでも今までやらなかったのは、リゼットが余裕のあるうちにやっても避けられてしまうと分かっていたからだ。

そして一度やってしまえば次からは警戒される。だからここぞというタイミング

まで待ち続けてきた。

だがそれでも、この戦いに読み勝っているのはリゼットだ。

囃としての役目は十全に果たし、そして彼女が望んだ逆転の時がまさに今訪れたのだから。

「がっ!？」

メタルクウラが叫んだ。

それと同時に遠くで爆発音が響き、ピッコロとトランクスの気が一気に高まる。どうやら無事に本体の前に到達し、本体を攻撃し始めたらしい。

これで勝負あり。本体が破壊されてしまえばメタルクウラ軍団も無力化されてビッグ・ゲテスターと一緒に崩壊する。

リゼットは笑みを取り戻し、メタルクウラへと告げる。

「どうやら、無事にトランクス君とピッコロが到着したようですね」

「き、貴様ア……まさか初めから……!」

「ええ、貴方の考えている通り、私は囃です。」

切り札を最後まで残していたのは私の方だったわけですね」

「お、おのれえ……!!」

メタルクウラは身体の各所から火花を散らしながら苦しげな声をあげる。

本体もピッコロ達に抵抗はしているのだろうが、元々弱りきった悟空の一撃でやられるような奴だ。

本体が量産型より弱いというのは実に斬新であるが、決して褒められる点ではない。

残念ながらピッコロとトランクスのタッグに勝てるわけもなく、まさにその命は風前の灯火というわけだ。

しかしここでメタルクウラは予想外の行動に出た。

もう量産型をここで動かしている場合ではないだろうに。すぐに本体の所へ戻さねばならないだろうに。

何を血迷ったのか、彼は本体の保身を捨ててリゼットへと手を翳したのだ。

「っ!？」

「俺はここで死ぬ！　だが貴様も道連れだ！」

貴様は、貴様だけは俺が殺す！　貴様は俺の獲物だ！」

クウラが血走った目で叫び、全霊の気功波を放った。

リゼットにそれを避ける術などない。全力でバリアを展開するが、それでも今の彼女で防ぎきれものではないだろう。

来るだろう痛みに備えて歯を食い縛り、絶対に死んでなるものかと覚悟を決める。視界を埋め尽くす光——クウラの憎悪。

それが届く直前、間に割り込んだ緑の影に遮断された。

「え？」

「悪くはない戦術だった。だが最後の一手が甘いのが貴女の悪い癖だ」

その男はバリアを展開しているわけでもなく、ただそこに立っているだけだ。だが気功波がリゼットまで届かない。

ただ立っているだけで、メタルクウラの渾身の気功波を背中を防いでしまっている。

リゼットの前で男——セルはリゼットの虚勢とは違う本当の余裕に満ちた笑みを浮かべ、彼女の頬に触れる。

「故にその一手、私が詰めさせてもらおう」

リゼットを捕らえている触手を切り裂き、それからメタルクウラへと振り返る。その際にリゼットの周囲にバリアを残し、彼女に被害が及ばないようにするのも忘れない。

「か……め……」

悟空と全く同じモーションで気を集約し、余りの気の高まりにビッグ・ゲテスターが鳴動する。

セルを中心として気が溢れ、近くにいろりゼットすらその気の凄まじさに戦慄した。

「はあ……めええ……!」

リゼットの現在の最大出力であるバーストリミットの50倍。

それを更に倍にして100倍にしてもまだ届かないだろう領域。そこにセルは棲んでいる。

力の差はメタルクウラも理解しているだろう。

だが彼は身体を崩壊させながらも、血走った目で駆け出した。

「邪魔を……邪魔をするなアアア!」

そいつは、俺の――」

「波アーーーーーッ！！！」

メタルクウラの台詞を遮ってセルのかめはめ波が発射される。

青白いその光の波は既に半壊していたメタルクウラ達を纏めて消滅させ、尚も威力を失う事なく直進した。

壁を貫き、区画を通りすぎ、トランクス達が止めを刺そうとしていた本体すらも消し飛ばし、それでも尚衰えない。尚突き進む。

やがてかめはめ波はナメック星を完全に離脱し、遙かな宇宙の果てまで飛翔した。そのとんでもない威力にリゼットが呆気にとられ、そんな彼女にセルがキザな笑みを浮かべる。

「最後の一手とは、こうやるものだ」

リゼットは何も言えず、ただ目を丸くして彼を見上げる事しか出来なかった。

セル「ドヤァ……」

【戦闘力】

・メタルクウラ…10億

※破壊される都度アップデートされる

・メタルクウラ（本体）…5億

【Raging blast・II（レイジングブラスト2）】

レイジングブラストの発展技。

左右に広げた手からそれぞれ気功波を発射しながら回転し、前後左右を攻撃する

M A P兵器。

非常に燃費が悪い。

名前の元ネタはゲームのレイジングブラスト2。

IIなので2発発射するという何とも安直な技。

第五十話 銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴①

——南の銀河を超サイヤ人が襲った。

それは、遠い宇宙での事。

リゼット達がいる宇宙——通称『北の銀河』から最も離れた南の銀河。

銀河というからには当然いくつもの星があり、太陽系と同規模の星系が密集していたはずの星の海。

それがある時からたった一人の破壊者の手により破壊され始めた。

そこに住む者達も何もしなかったわけではない。

英雄と呼ばれる者もいただろう。それぞれの惑星には神だっていただろう。

だがその悉くを男は殺し尽くし、壊し尽くした。

あらゆる兵器を物ともせず駆逐し、その銀河に存在する全生命を敵に回して尚一方的だった。

最後にはあの世から英雄達を連れて自ら討伐に赴いた宇宙の王……即ち南の界王すらもを返り討ちとし消し去った。

その男こそが伝説。

サイヤ人の間に伝えられる全宇宙最強の戦士の名に偽りはなく、何よりも血と殺戮こそを好む。

彼こそがサイヤ人そのものであった。

未だ男の殺戮の牙は北の銀河へは向いていない。

だが、邂逅の時は確実に迫りつつあった。

★

クウラをセルが消し去った後、崩壊するビッグ・ゲテスターの中でリゼットは宙に浮いていた。

気を探るとトランクスとピッコロ、他のナメック星人達は無事に脱出してくれており、今ここにいるのはリゼットとセルだけだ。

二人共バリアを展開しており、少なくともビッグ・ゲテスターの崩壊くらいでは傷一つ負う事はない。

リゼットの気も仙豆で完全に回復しており、涼しい顔で崩壊していく機械惑星の中を探索している。

「何をしているのだ？　ここはもう崩れるぞ」

「もう少し待って下さい。探さねばならないものがありました……」

クウラは倒した。だがこのまま帰っては不安の種を残す事になる。

ここは北の界王の管轄外であり、このままではクウラの魂はあの世に行かない。ずっとこの宇宙で彷徨い続ける。

流石にクウラといえど魂だけで何か出来るとは思えないが、しかしクウラの怨霊などという何をしでかすか分からない物を放置するほどリゼットは楽観的ではなかった。

警戒しすぎと言われればそれまでだし、怯えすぎと言われれば頷くしかない。

しかし魂だけでも何か引き起こしそうな怖さがクウラにはある。

もしかしたら誰かの身体を乗っ取れるようになるかもしれないし、恨みの力だけで肉体を構築してしまうかもしれない。

何事にも万が一という言葉があるのだ。

万が一だろうとそれはゼロではなく、ゼロでないならば起こり得るという事だ。だからリゼットは何とか彼の魂を見付けたかった。

彼女にそんな能力などないが、魂はあの世で何度も見た事がある。

ならば、何とか目を凝らせればそれっぽいものを視る事は出来ないだろうか、駄目元で探しているのだ。

そしてそれは、彼女自身すらも予想出来ないほど簡単に上手くいった。

崩れていくこの機械惑星の中で尚も怨嗟の声をあげているこの世ならざる存在……クウラの魂を発見出来たのだ。

それどころか彼女の眼はハッキリとそれを視認し、あろうことか思わず伸ばしたその手は魂を掴む事すら出来た。

これはリゼットにとっても全くの予想外であった。

「……魂って掴めるんですね」

「なるほど、そこに“いる”のだな？」

「はい。視えないんですか？」

「ああ、普通は視えんし触れん。実際私は視る事も触れる事も出来ん」

リゼットが掴んでいる魂だが、セルは触れる事が出来ないらしい。

触れようとした指はすり抜け、掠りもしない。

それどころか彼の眼にはリゼットが空気を掴んでいるようにしか視えていないはずだ。

「これは一体……」

「私が思うに神としての力だろう。確かこの時代は貴女の神としての力が最も高まった時期のはず。

貴女は神として高みへと至り、今まで出来なかった事が可能となった、と推測出来る」

「私、神の力が上がるような事何もしてませんよ？ 仙術の修行はしてますけど。

まあ最近、私の氣を与えた植物が妙に元気になったりはしますけど」

「人の念というものは力を持つ。怨念がエネルギーとなりゴースト戦士やハッチヒャックを生み出すのと同じようにな。

恐らく怨念とは逆の念……崇拜や信仰、といった念が貴女に注がれる事で貴女は神として成長を遂げたのだ」

信仰、と聞きリゼットは首をかしげた。

確かに覚えはある。天女と呼ばれていた頃は色々な人間から信仰されてむずがゆ

い思いをしたものだし、その時に設立された宗教は今も一応残っていた。

だがこんなに急激に伸びる理由が分からない。むしろ人前に姿を現さなくなつて随分経つので薄れてもいらいだ。

「ふっ。どうやら本当に気付いていないようだな。

貴女はこの数年で宇宙を飛び回り、フリーザ軍の残党を蹴散らしていただろう。それによって救われた者達が貴女を崇めるようになり、今や宇宙中から貴方への信仰の念が注がれているのだ。エネルギー量だけを言えばハッチヒャックすらも上回っている」

「え？ ああ……そういえばそんな事もしたような……」

「サイヤ人への怨念を凝縮する事でブロリーにも匹敵する怨念戦士ハッチヒャックが誕生した。

ならばあるいは、この信仰を使う事で貴女は更なる領域へと至る事が出来るかもしれない。否……」

セルは何かを確信しているかのようにリゼットを見詰め、肩に手を置く。

「貴女ならば成れる。界王神をも超えた神の頂へ。」

誰にも止める事の出来ない、失った物すらも取り戻せる唯一無二の存在へと、貴女ならば至れるはずだ！」

「……それは、流石に持ち上げすぎですよ。私はそんな器ではありません」

リゼットはセルの手を払い、この話題を切り上げた。

とりあえず今はビッグ・ゲテスターから脱出するのが先決である。

それにナメック星人達とトランクス達の無事も確認したい。

何より、今のセルは少し怖いのだ。

紳士的には違いない。友好的ではある。

だが自分を見るその瞳に、剣呑な何かを感じずにはいられない。

だから今は、彼の眼を見たくはなかった。

「また助けられましたな、地球の神よ。

本当に貴女様には何とお礼を言ってよいか」

ビッグ・ゲテスターから脱出したりリゼット達は無事に合流を果し、救い出したナメック星人達に囲まれていた。

彼等は口々に感謝や賛辞の言葉を並べ、リゼットやトランクスの手を固く握る。ピッコロも同じナメック星人という事で手厚く歓迎され、過去には星を壊す側だったナッパは複雑そうな顔で礼を受け取っている。

セルは何時の間にか姿を消しており、一足早く地球へ戻ったらしい。

同じ緑色同士少しは仲良くすればいいのに。

「気にしないで下さい。困った時はお互い様です」

実際こちらが危なくなった時はナメック星に助けて貰う気満々なので本当にお互い様である。

ともかくこれで絶望の未来を回避するという目的にかなり近付いたと言っているだろう。

まだ敵はいるが、とりあえずこれでナメック星壊滅という最悪の事態を逃れる事が出来た。

それはつまり、もし本当に危なくなってもナメック星人に助けを求めるという最後の希望が残されるわけだ。

未来ではそれすら出来なくなつたが為に取り返しが付かなくなつたとトランクス

も語っている。

「それにこれ、元々は私があの時にちゃんと仕留め切れなかったせいですし」

そう言い、リゼットは自分の右手を視る。

そこには先程捕獲したクウラの魂がおり、今も必死に逃げようと暴れていた。しかしやはりというか、他の者には視えていないらしい。

不思議な力を持つナメック星人ならあるいは、とも思っただが彼等も何の反応も示さない。

「いえ、それは貴女の責ではありませんまい。

此度の事、そして前回の事。我等ナメック一同、心より御礼申し上げますぞ」
そう言い、ナメック星人達は一斉に頭を下げた。

それに対しリゼットは笑顔で応え、トランクスが照れくさそうに頬をかいている。ピッコロは腕組みをしたまま満更でもなさそうに笑い、ナッパは慣れていないのか何を言えばいいか分からず無言で立っていた。

「では私達は地球へと戻ります。またいつかお会いしましょう」

「ええ。お達者で」

地球へのゲートを開き、リゼット達は帰路へと就く。

神の神殿に降りれば悟飯達が駆け寄ってきて無事を喜んでくれた。

そんな中、ナッパが小声でボソリと呟く。

「……いいもんだな。星を救って誰かに感謝されるってのもよ」

どうやら彼も大分変わり始めているらしい。

地球に来た当初はただの下品な悪党としか思っていなかったし、助けた時もう
せそのうち裏切ると踏んでいた。

それがまさかこうまで丸くなるとは、誰がどう変わるか本当に分らないものだ。
だがその全てが失われてしまったのが未来なのだ。

その事を思い出し、そしてリゼットは緩みそうになる気持ちを改めて引き締めた。

これで倒したのは二勢力。絶望の未来を作り出すパーツは二つ取り除いた。

だがまだブローリーとハッチヒャックがいるし、ボージャックも何故か未来で出現
していたので油断は出来ない。

戦いはここからが本番だ。



クウラをあの世に送ってから数日。

悟空の回復を待ちながらリゼット達は修行に勤しみ、次なる敵の出現に備えていた。

とりあえず人造人間達はもう敵ではないので一時神殿に避難していた皆も今はそれぞれの住居へと戻り各自で修行を積んでいる。(住居のないクリリンとピッコロは人造人間の監視という名目でログハウスに向かわせたが、最近では18号とクリリンがよい雰囲気らしい)

リゼットもまた仮想敵にメタルクウラを追加して、より効率のいい対多人数戦術を日々研鑽している。

知識が正しければ順番的に次の敵はブロリーだ。

間違いない最難関である事は疑うまでもない。未来もほとんどの戦士がこいつに殺されてしまったと聞く。

悟空はまだ目覚めていないが、そろそろ精神と時の部屋を提案するべき時だろう。そう考えていた時だ。唐突に界王からの念話がリゼットに届いたのは。

『地球の神よ。聞こえるか?』

「界王様？」

『大変な事になってしまった。今、地球に大きな危機が迫りつつある』

「またですか」

界王の言葉にリゼットは思わず素で返してしまった。

だがそれも仕方のない事だろう。

一体これで何度目なのだ。地球に危機が訪れるのは。

『ま、まあ聞け。かつて東西南北の銀河を渡り歩き、一つずつ破壊しようとしたボージャックという、そりゃあ悪くて強い暴れん坊がおってな。

そいつをわし等東西南北の界王が銀河の辺境の惑星に封印しておったのだが、先日、南の界王の奴が死んでしまいおっての……奴等の封印が解けてしまった』

「……死因は？」

『南の銀河を伝説の超サイヤ人が襲ったのじゃ。まあこれは南の銀河の問題じゃから話を戻すぞ』

界王の言葉を聞いてリゼットは一瞬眩暈をおこした。

まずい、もうブロリーが動き始めている。

しかも何を間違えたのか、本来死なないはずの南の界王がブロリーに殺されてしまい、ボージャックまで出て来てしまった。

もう少し時期を考えて欲しいと切に思う。

……いや、むしろこれが自然な流れなのか？

映画では冒頭でサラッと南の銀河が消し飛ばされていたが、あの当時は南の界王などの設定も登場していなかったし、何より映画はパラレル扱いだった。

だが普通に考えてみれば、銀河ごと滅ぼされては界王だって動かざるを得ないだろうし、あの時に南の界王が死んでいても不思議はないのだ。

『復活したボージャック達は、どうやら北銀河で最も環境の整った惑星……即ち地球を目指しているらしい』

「……また地球ですか」

『だが幸い、地球には奴等に対抗し得る者がお前を含めて揃っておる。』

頼むぞ、奴等を倒して北の銀河を救ってくれ』

地球の危機と聞いた時から予想は出来ていたが、やはり地球に来るらしい。

何でいつもこいつも真っ直ぐ地球を目指すのだろうか。

しかもブロリーが行動を開始したという事はあまり時間を置かずにパラガスがやって来るはずだ。

出来ればその前にはボージャック一味は倒しておきたい、とりゼットは考えた。ブロリーとボージャックの挟み撃ちとか本気でやめて欲しい。

ともかく、まずは皆と連絡を取って迎撃態勢を整えよう。

そう決断し、リゼットは念話を飛ばした。

【銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴】

「ドラゴンボール」シリーズの劇場公開作第12弾。

ドラゴンボールZの劇場版としては珍しく本編と矛盾しない貴重な作品。

本編と矛盾しないというだけで、この映画は褒められていい。矛盾しないって素晴らしい。

それどころか本編の補完になっており、「俺はもう戦わん」と言ったはずのベジータが戦いに復帰するエピソードとして機能している。

むしろこの映画をパラレルにしてしまうと、「何でベジータは何事もなかったかのように復帰してるの？」という話になる。

セル編からブウ編までの空白の7年間の間に起こった出来事。

【ボージャック】

その昔、銀河を荒らし回っていたヘラー一族のリーダー。この映画のラスボス。よくセルとどっちが強いか議論される。

基本的に前作ボスよりも強いキャラが登場する劇場版において前作ボスより弱かったのは初めての事。

一見身勝手だが実はかなり空気の読める男であり、悟飯がキレた際には咄嗟にザンギヤを盾にして始末した。

これによって、敵とはいえ美女であるザンギヤをヒーローの悟飯が殺すというショッキングな映像を見事防いでみせた。

更に後の映画では自分より明らかに弱いフリーザの部下になっており、そのフリーザが悟飯にワンパンでやられたら他の雑魚と一緒に逃げ出した。

尚、映画でのザンギヤへの扱いは流石に酷いと思っていたのか、ゲームで「ザン

ギャ、えいがではスマン!!」と謝っていた。

【ザンギヤ】

ボージャック一派の紅一点。

そのルックスから人気が高く、ゲームの『ドラゴンボールZ 超武闘伝2』にも他のキャラを差し置いて出演した。

映画ではボージャックに盾にされた拳句気弾で殺されるというあんまりな最期を迎えたが、後に謝罪を受けている。

昔はよく18号や西の界王神と並んでドラゴンボール最強の女性キャラ候補として名前が挙がっていた。

【ゴクア】

ドラゴンボールでは珍しく剣を使って戦うキャラクター。

悪堕ちしたクロノとかよく言われる。

唯一悟飯ではなくトランクスにやられてしまったので、弱く見られがちだがボージャック同様に強化変身がある事を考えると実はナンバー2の実力者だった可能性もある。

ドッカンバトルでは『空を裂く剛剣』という格好いい二つ名を貰えた。

【ビドー】

モヒカンの巨漢。あまりイメージに残らない。

ザンギヤはクリリンを倒し、ゴクアはトランクスと戦い、ブージンと悟飯を追いつめた。

そんな中でこいつだけは主要キャラでも何でもないドスコイとかいう力士を殺していたのが存在感の薄い理由かもしれない。

【ブージン】

やたら後ろから糸のような技で動きを封じてくるターバンのチビ。

こいつかザンギヤが動きを封じたところをボージャックがタコ殴りにするのが必勝パターンらしい。

【ドスコイ】

主要キャラでもないのに予選を通過してしまったばかりに、ビドーに殺されてしまった哀れな人。

悟飯達の前では薄れるが、10人以上を同時に投げるといった人間離れた怪力の

持ち主。

油断しきっていたとはいえ、ヤムチャを場外負けにするという偉業を達成した。最初から最後まで「どすこい」としか言わない。

【ギョーサン・マネー】

世界一の金持ちで、天下一大武道大会を開催した。

息子に「この世は金があれば何でも出来るんだよ」と、将来捻じ曲がりそうな教育を施していた。

世界一の金持ちというからにはカプセルコーポレーションよりも金持ちだと思われるが、一体何をして稼いでいるのかは不明。

第五十一話 銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴②

界王から念話を受けた後、リゼットはすぐに地球に接近しているというボージャック一味の氣を探した。

すると確かに、遠い宇宙から遠路遙々こちらへ向かっている馬鹿が数人確認出来る。どうせなら道に迷えばいいのに。

しかもその戦闘力は今のリゼットでも1対1で少し手こずる、というレベルだ。ボージャックに至っては完全にリゼットを上回ってしまっている。

到着まで恐らく二日といったところだろうか。その間に何とかこちらの戦力を上げなければ全滅が確定してしまう。

そして都合のいい事に、その手段は神殿にあった。

「と、いうわけで時間ありません。

これから二人一組で精神と時の部屋に入り、修行して頂きます」

本来ならばセルに対抗すべく入るはずの精神と時の部屋だが、この世界では何故かボージャックに対抗する為の使用となってしまった。

その奇妙な運命の変化におかしさを感じつつ、リゼットは地球の戦士達の強化に踏み出す。

とはいえ何せ時間がない。だから部屋を使う人間もこちらで選び、厳選したメンバーのみで二日後の決戦へと挑んで貰う。

まず一日目はピッコロとターレス。

原作通りベジータとトランクスも考えたのだが、残念ながら今のベジータは相当に自分勝手であり、一日使用というのを無視して勝手に二日目に突入してしまうかもしれない。

というかする。間違いなくやる。

『俺一人で全員ぶつ殺せるようになれば問題ないぜ』とか言いながら時間を超過して他の戦士を鍛える時間を大幅に減らしてくれる。

だからベジータは後回しだ。もうしばらくは一人で崖の上で瞑想でもやっていて貰おう。

二日目にはベジータとトランクスを入れ、この4人とリゼットの5人で彼等を迎え撃つつもりだ。

ナツパも鍛えたかったが、残念ながら今回は後回しにする他ない。

問題はボージャックだが、気を測ってみた所では少なくともセルには劣る。

イメージ的には最終形態セルと同格くらいと思っていたのだが、よく思い出してみれば劇場版の戦いは何かというと部下に背後から襲わせて後ろからの攻撃ばかりを行っていた。

悟飯は部下の糸で拘束してタコ殴りにし、トランクスをやはり拘束して殴り……。要するにあの男、強い事は間違いないのだがリゼットが思っていたほどは強くないのだ。

あるいは、セルが原作よりも強いのか……。

これならば部下を先に壊滅させて五人で挑めば充分に勝機はある。

それがリゼットの考えであった。

★

ボージャック一味は地球を目指して宇宙を飛んでいた。

銀河の中で最も美しい惑星、地球。

それこそ自分が支配してやるに相応しいという勝手な理屈から彼の惑星を目指

し、そしてその距離はまさに目の前まで迫っていた。

だが成層圏を突破してまさに地球に踏み込んだその瞬間、彼等の行く手を塞ぐように空間に亀裂が走る。

「ぬ……?」

空間を跳躍して現われたのは白い少女。

一目で分かる神々しさに溢れ、光の粒子が輝いている。

ボージャックはその姿を見て一瞬で理解する。

なるほど、こいつがこの惑星の神か、と。

だがこの時点において彼は少女をさほど警戒はしていなかった。

封印される以前にも様々な惑星で暴れたし、惑星を管理している神などいくらでも葬ってきた。

だが直後、少女の後に続くように4人の男が現われた事で表情が険しくなる。

「へっ。お揃いで地球にようこそ、ってか。

遠路遙々殺されるためにご苦勞な事だ」

黒いシャツの上から白いコートを羽織ったターレスが余裕に満ちた顔でボージャッ

ク達を煽る。

それに対しモヒカン頭の巨漢が好戦的に笑い、拳を鳴らした。

「ふん、少しは骨がありそうだ」

ピッコロがターバンとマントを外して構えを取る。

その視線の先では青い肌の美女、ザンギヤが誘うように指を動かしていた。

「貴様等などにこの星を好きにはさせない」

トランクスが剣を手に威嚇し、それに合わせるように橙色の髪の方が剣を手にした。

互いに剣を武器にする者同士、既に戦う相手と定めているようで他者の割り込む隙間がない。

「パワーアップしたスーパーベジータ様の超圧倒的なパワーを見せてやるぜ。

あいつは俺がやる。余計な手出しは無用だ」

ベジータが腕組みをしたまま勝手にボージャックを指定し、リゼットは溜息を吐きたくなった。

まあ対ボージャックに関しては誰が挑んでも力不足なので、何とか他の面子が勝

負を早々に片付けて援護に行くしかない。

ベジータには悪いが、本人も乗り気なのだし時間稼ぎをやってもらう事にしよう。そしてベジータが勝手にボージャックを対戦相手に決めた事でリゼットの相手は小柄な男——ブージンに決まった。

しかしボージャックの視線はベジータではなくリゼットへと向いており、それがベジータを苛立たせる。

「貴様がこの惑星の神だな。おい小娘、この地球はいい星だな」

「それはどうも」

「喜べ。たった今から地球はこのボージャック様のものとなる。

従うならばお前だけは生かしてやるぞ」

下卑た視線だ、トリゼットは嫌悪感を感じた。

恐らく彼の言う事は半分は本当だろう。従えば命だけは助けてくれるのかもしれない。

だがそれは彼の奴隷になるという事と同義である。正直に言って冗談ではなかった。

そんなリゼットの心境も知らずにブージンが語る。

「ボージャック様は銀河で敵無し。

最も美しい北の銀河、その中でも最高の地球を支配するに一番相応しいお方。

逆らう奴は……殺す」

何とも勝手な理屈である。筋がまるで通っていない。

第一仮にも地球の神である己を通さずに持ち物宣言とは実に滑稽で笑わせてくれるのではないか。

だからリゼットは言葉の代わりに気合砲を使う事で返事とし、ブージンを吹き飛ばした。

「なっ!?! 貴様!」

「貴方の相手は後でしてあげます」

驚くボージャックを無視し、リゼットはそのまま飛翔。吹き飛んでいくブージンを追いかけた。

劇場版の戦いにおいても悟飯達があそこまで追い詰められたのはボージャックよりもブージンを始めとする取り巻きの能力に因る所が大きいとリゼットは思ってい

る。

確かにボージャック一味は強かったが、それでもボージャックを除けば個々の力では勝っていたのだ。

それはトランク스가ゴクアに勝利した事からも証明されている。

だというのにピッコロ、ベジータ、トランクスときたらご丁寧に一人一人ボージャックに挑みかかって他の雑魚3人をフリーにし、それで負けているのである。あの戦いはボージャックの相手を悟飯が行い、他の3人を個別撃破して最後に4人で袋叩きにすれば悟飯が超サイヤ人2になるまでもなく勝てたはずだ。

だからまずは援護要員であるブージンを全力で潰す。

その為にリゼットは更に加速を行い、ブージンに追いつくと同時に胸に手を当てて零距离で気の剣を射出した。

だがブージンも危うい所で脱していたようで貫いたように見えたのはただの残像だったらしい。

「フツ、ホホホホ！」

ブージンが気味の悪い笑い声をあげながら両手を翳し、周囲の岩や木々を浮かせ

る。

そして超能力でリゼットへ射出するも、それらは全てリゼットに届く事なく静止してしまった。

それどころかブージンが操った倍以上の岩や木々が彼女の背後に浮かび上がり、ブージンへ狙いを定める。

「ちいっ！」

ここでもようやく同じ超能力者だと気付いたのだろう。

ブージンは飛来する岩や木を避けながらリゼットへと手を向ける。

だが遅い。既にリゼットは背後へと回り込み、その背へ手を押し当てている。

今度こそ零距离の剣がブージンを貫き、彼の腹から刀身が生える。

「があっ!？」

「遠路遙々地球までご足労頂いたところを申し訳ないのですが……今こちらは色々立て込んでいますね。貴方達の海賊ごっこに付き合っている暇などありません」

貫いたまま超能力を行使し、ブージンを地面へと叩き付ける。

背中に剣が刺さったまま地面に押し当てられた彼は更に深く串刺しにされる事となり、おびただしい血を吐き出した。

だがりゼットに容赦はない。

彼女が手を振るうと虚空にギロチンの刃が顕現し、更に気の拘束具がブージンを断頭台に縛りつけた。

そして手を振るう。

――斬首。

この地球にお前達の居場所などない。そう告げるような神の裁きが情状酌量も何もなく問答無用の死罪を言い渡す。

首から上を失った胴体が地面に転がり、だがりゼットは手を休めない。

相手は異星人。もしかしたらここからでもまだ再生なり行動なりするかもしれない。

勿論そんな能力はないかもしれないが、描かれていないだけであるかもしれないのだ。

クウラだって脳味噌だけで宇宙空間を遊泳しても生きていたのだから、あり得な

い話ではない。

もし無くともそれはただのオーバーキルでしかなく、結果は変わらない。ただ少し気は無駄に消費してしまうだけだ。

だが万一あったならば討ち漏れとなり、後で何をしでかすか分からない。だから万一の可能性すらも残さない。

「は！」

気弾一発。

既に事切れたブージンへと着弾し、爆炎が上がる。

彼の身体がこれで完全に塵と化した事を確認し、ここでもやくりゼットは己の勝利を確信した。

★

ゴクアとトランクスの振るう剣が中央で衝突し、甲高い金属音を響かせる。

リゼットが使う、実体のない気の剣ではない。

確かに存在する鋼を用いて鍛えられた鉄の凶器が互いを切り裂かんと唸り、幾度と無く火花を散らせた。

互いに距離を取るように、だが決して己の剣の間合いから外さぬように走り、一定の距離を保ったまま同じ方向へと二人して並走する。

ゴクアが先に仕掛け、振るわれた刃をトランク스가巧みにいなした。

そこから滑りこむように間合いを潰し、剣閃を横に薙ぐ。

間一髪——腹を僅かに切られただけで後ろに飛び退いたゴクアが冷や汗を流した。

「いい腕だ……剣で俺と渡り合うとはな」

「お前も悪くはない腕だ。しかし俺に剣を教えてくれた師には劣る」

「言ってくれる!」

ゴクアが吼え、再び剣を振るう。

一合! 二合! 三合!

それに対しトランクスも完璧に剣を合わせ、全ての斬撃を防ぎ切った。

ならばとゴクアが力任せに剣を振り下ろし、冷静にトランクスが避ける。

そして神速で踏み込んでの横薙ぎ! ゴクアも咄嗟にそれを避けるが、そこに隙を生じぬ二段目の攻撃が放たれ、ゴクアの腕を砕いた。

「っ、さ、鞘、だと!？」

二撃目の正体はトランクスの気を流した鞘であった。

気を流しての強化、という本来有り得ない芸当を平然と可能とするだけの業物。それにゴクアは驚愕し、地面を蹴って距離を取った。

まずい、こいつの剣は技量、武器共に己を上回っている。そう理解させられたのだ。

「い、いい剣だ。そいつも欲しくなってきたぜ」

「それは無理な話だな。この剣は俺にとっても大事な形見なんだ。

お前などに渡すわけにはいかん」

トランクスは鞘を捨てて剣を両手で握り、そして正眼に構える。

ただ構えただけではない。

トランクスの手から気が伝い、彼の持つ剣が黄金の光を帯びる。

陽光を反射し、まるで水に濡れているかのように美しく煌く刀身は戦いの最中でありながらゴクアの目を惹き付けて止まない。

「——往くぞ」

トランク스가超化し、それに呼応するようにゴクアも本気を出した。

全身の筋肉が膨張し、服が弾け飛ぶ。

だがそれはパワーに頼った変身だ。スピードを殺してしまっている。

かつてトランクスの師にして姉であつた少女は彼に語つた。力のみに頼つた変身だけはするなと。その愚かさを。

剣に求めるべきはむしろスピード。神速の剣捌きこそが威力を生み出す。

無論普通の剣ならばトランクスの速度に耐え切れるはずなどない。振るう最中に折れてしまう。

だがこの剣だけはそれが可能だった。

地球最高の素材である天命石を材料に神自らが創造した文字通りの神剣。

世界でただ一振り、トランクスの為だけに『彼女』が遺してくれた遺品。

それを手に、黄金の気に包まれたトランク스가地を蹴って加速する。

（正面からの突撃！ 腕一本を捨てれば防げる！）

馬鹿正直に正面から突撃してくるトランクスを見てゴクアは防御可能と判断した。

トランクスの実力と剣の質は十分に評価している。

その上で無傷の勝利は不可能と判断し、腕を捨てての勝利を取りに来たのだ。

彼の予想通りにトランクスの剣はゴクアの腕に当たり——そのまま、滑るように彼の腕を切り裂いた。

「——な」

「終わりだ」

トランクスの剣がいかに天命石製だろうと、本気で防御に回ったゴクアの腕をこ
うも容易くは斬れない。

しかしそれも、気を纏わせる事で可能となる。

極限まで凝縮した気を纏わせた剣はカッチン鋼すら切断してのけるのだ。

これをトランクスの師は『気功剣術』と名付け、トランクスへ伝授した。

今は亡き師から教えられた技。それを用いてトランクスは、宇宙からの侵略者を
両断してみせた。

【気功剣術】

日本ではサービスが行われなかった『ドラゴンボールオンライン』の中に登場する流派。

この世界では未来のリゼットがトランクスのために編み出した。

名前が被ったのはただの偶然であり、リゼットも流石に日本でサービスが行われなかった『ドラゴンボールオンライン』の設定までは把握していない。

【戦闘力】

―味方陣営―

・リゼット…1億2000万

・バーストリミット（最大50倍）…60億

・ピッコロ

基本戦闘力…3億

界王拳（最大20倍）…60億

・ターレス

基本戦闘力…1億

超サイヤ人…50億

超サイヤ人（2段階目）…60億

・ベジータ

基本戦闘力…9800万

超サイヤ人…49億

超ベジータ…58億8千万

・トランクス…9500万

超サイヤ人…47億5千万

超サイヤ人（2段階目）…57億

僕は父さんを超えてしまったんです…76億

―敵陣営―

ボージャック…75億

フルパワー…150億

ゴクア…45億

マッスル化…60億

ビドー…48億

ブージン…43億

ザンギヤ…40億

ついに敵側に戦闘力100億超えが出現。

インフレが加速しっぱなしです。

第五十二話 銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴③

モヒカンの巨漢、ビドーが空を滑り敵へと一直線に向かう。

そして繰り出される剛拳はその見た目通りにボージャック一味でも随一の破壊力を有している。

だが超サイヤ人と化したターレスは難なく拳を受け止め、ニヤリと口の端を歪めた。

「クククッ……そう焦るなよ。もう少し楽しもうや。なあ?」

「ぐっ、あ!」

掴んだ拳を強く握り、凄まじい握力を以て圧迫する。

骨が軋む音が響き、ビドーの顔が歪んだ。

単純にして分かり易い力の差の誇示だ。相手の渾身の一撃を容易く受け止め、握力を見せ付ける。

ビドーは咄嗟に膝蹴りを放つも、ターレスは冷静にこれも膝でブロック。逆に攻撃を加えたビドーの膝にダメージを与えた。

「そら！」

空いている方の拳でビドーの腹を強打する。

巨漢の身体がくの字に曲がり、口から赤混じりの唾液が溢れた。

崩れそうになるビドーのモヒカンヘアを掴み、ターレスは相手の目線を無理矢理に自分へと合わせる。

「運がなかったなあ。お前も大層腕に自信があったんだろうが、よりにもよってこの惑星に目を付けちまうとはよ……」

言いながら今度は腹に膝蹴り。

ビドーが再度激痛に目を見開き、身体を震わせる。

だがそれでも反撃の拳を放ち、僅かにターレスの頬を掠った。

「だがお前等の生き方、俺は嫌いじゃねえ。

宇宙を気ままにさすらって、好きな星をぶっこわし、旨いモノを食い旨い酒に酔う！こんな楽しい生活はないよなあ……同じ穴のムジナだ、俺達は」

頬を傷付けられた事も気にせずにターレスは晒い、肘をビドーの頭に叩き込んだ。ビドーの身体は地面に向けて急降下し、地面を揺らして墜落する。

それでも何とか立ち上がろうとするが、その背中を同じく急降下してきたターレスが踏み躪った。

「ぐあっ……！」

「そこで美味しい話があるんだがよ。

お前等、こっち側に付けや。この惑星は俺も気に入ってるからよ、譲るわけにやいかねえんだ。

跪いて命乞いをすれば許してやるぞ？」

ビドーは何とか立ち上がろうと気を高める。

だがそれを見切ったようにターレスの纏う気が更に力強さを増した。

筋肉が膨れ上がり、身体が一回り大きくなる。

超サイヤ人特有のオーラが炎のように激しく吹き上がり、立とうとしたビドーを再び這いつくばらせた。

この姿は超サイヤ人の壁を一つ超えた姿であり、気の消費量こそ大きいものの絶大なパワーを身に付ける事が可能となる。

ベジータならば『超ベジータ』とでも自称しただろうその形態となれば、気だけ

に限って言えばリゼットにも匹敵している。

そんな相手と戦う事になってしまったビドーは残念ながら相手が悪すぎたと言えない。

「悪い話じゃねえだろ。」

ちよいと、この地球を狙ってる馬鹿共を裏で始末してくれりゃあ、見逃してやるってんだ。

あの神さんは地球の守護神としちゃあ及第点だが、まだまだ甘い。冷徹に振舞ってるつもりで全然なっちゃいねえ。

だからよ……俺やお前みたいなのが必要なのさ。

この地球を狙う屑共を、裏で葬るような奴がな」

ターレスは、歪んだ形ではあるがこの地球という惑星を気に入っていた。

そこに生きるバーダックの忘れ形見である悟空やその家族、仲間達が生きるこの惑星を悪くないと思っていたし、妻のスノや同居人の人造人間8号の事も気に入っている。

だがかつては悪党だったからこそ視えるものがある。リゼットには視えていない

裏も彼だからこそ視える。

リゼットは悟空と比べれば充分に甘さを捨てて事に対処しているとターレスは評価していたが、一方でまだ甘いとも考えていた。

結局のところ本質が善人なのだ、あの女は。

悪を潰すのは悪なのだ。地球という惑星を狙う外道を本当に倒したいのならば、こちらは更なる外道とならねばならない。それを理解出来ていない。

ならば誰かがやらねばなるまい。

他でもない、かつて宇宙を荒らしまわったこの自分こそが。

それがターレスなりの、この地球の守り方であった。

彼はピッコロと違う。

ターレスはどこまで行っても悪党ターレスのままであり、善人になったりしない。

彼はあくまで、地球の味方になった悪なのだ。

「俺に従え。女神さんは何とか誤魔化してやる。それとも……」

語気を僅かに強め、ビドーを踏む足に力を込める。

「このまま死ぬかあ？」

「ぐっ、あああ、ああ！」

メキメキと不吉な音が鳴り、靴の裏で背中をグリグリと踏み躪る。

敵の悲鳴を心地よいものと捉え、必要以上の……それでいて死なないラインギリギリの攻撃を加え続ける。

ターレスの本質は変わらない。『お気に入りに』に地球が加わっただけであり、彼はどこまでいってもサイヤ人なのだ。

「む、無理だ……そんな事をすれば、俺はボージャック様に、殺される……」

「安心しろ。その野郎は俺達がぶっ殺してやる」

「お、お前は知らないんだ……あの方の強さと、恐ろしさを……」

決して忠誠を貫いているわけではない。単に恐れている。

ボージャックに心から屈し、恐怖で縛られている。

その事を察し、ターレスは舌打ちをした。

（なるほど……本当に俺とご同類ってわけかい。

完全に恐怖で縛られてやがる。これじゃあ引きぬけやしねえ。

仕方ねえ。ちょいと惜しいが……）

「――ならば死ねえッ!!」

引き抜き不可能。そう判断すると同時にターレスが下した結論は即殺であった。踏み躪ったままターレスの手から気弾が連射され、哀れなビドールの背中を滅多撃ちにする。

「ぐっ、が、ぎゃあああああああ!」

ビドールの悲鳴が響き渡るがターレスは止めない。慈悲なく躊躇なく、処刑を実行する。

「あ、あああ、あああああああ!!!」

撃つ、撃つ、撃つ、撃つ――!

「ぎゃあああああああーッ!!」

連射、連射、連射、連射、連射!

「……………あ……………あ……………あ……………あ……………」

やがてビドールの悲鳴が終わり、身体から力が失われた。それを確認し、ターレスは死体を力の限り蹴り飛ばす。

反応はない。本当に死んでいるようだ。

物言わぬ死体と化したビドーを見下し、ターレスは吐き捨てるように呟く。

「ふん。所詮はチンピラ……無様なもんだ」

最後に気弾を一発。

爆炎があがり、ビドーの身体は粉々に砕け散った。

上手くこちらに引き込めればいい道具になってくれそうだったのだが、ああまで恐怖で縛られていては処分以外に打つ手がない。

その事を少しばかり残念に思いながらもターレスはベジータの気を辿り、飛翔した。

彼にしては珍しく道具ではなく同胞と認める者達を勝利へと導くために。

★

ザンギヤは森の中を駆け抜けていた。

その表情には焦燥が浮かび、先ほどまでの余裕がない。

後ろへと視線を向ければ、自らを追う二本の腕が見える。

まるで蛇のようにうねり、どこまでも伸びて追跡してくる腕から距離を離す事が出来ない。

だが不意に腕がザンギヤから離れた。

諦めたのか？ 否。

腕の持ち主——ピッコロがザンギヤへと追いつき、腕を元の長さに戻したのだ。

「しつこい奴め！」

ザンギヤが振り向きざまに気弾を放つ。

だがピッコロはまるで障害にならぬとばかりに気弾を腕で弾き、木々の間を跳んでザンギヤとの距離を潰した。

互いに手の届く距離！ ザンギヤはすぐさま応戦し、ピッコロとの格闘戦に入る。

拳と拳、蹴りと蹴りの応酬が目まぐるしく行われ、互いの攻撃が衝突する度に空気が爆ぜる。

一瞬の隙——ザンギヤは攻防の僅かな隙間を縫い、ピッコロの背後へと高速で移動した。

そして手刀を薙ぐも、確かに捉えたはずのピッコロの身体を虚しく突き抜ける。そこで彼女は己の失敗を悟る。違う、これは奴じゃない。残像だ。

誘われた！

「かああ！」

ピッコロの雄叫びが響き、ザンギヤが蹴り飛ばされる。

女の顔を平然と足蹴にするとは何て奴だ、と思うもそれは当然の事だ。

何故ならばピッコロはナメック星人。メンタルや物の考え方こそ地球人と言う所の男性のそれであるが、彼等ナメック星人に性別の概念などない。

したがって相手が女だろうが男だろうが彼には一切無関係であり、敵か味方かのみで判断を下す。

いや……そもそも今回の戦いに加わった面子に相手が女だからと加減する者などいない。

ベジータとターレスは元は残虐非道のサイヤ人であり、今まで多くの惑星を侵略してきた過去を持つ。

その滅ぼしてきた惑星に女がいなかったなどという事があるわけもなく、戦場である以上——否、戦場でなくとも女子供にすら容赦がない。

ピッコロは語るまでもなく、リゼットは自身が女性である為に敵の性別など気に

しない。

唯一そうした部分を気にしそうなのがトランクスだが、彼は彼で地獄と化した未来を知っているので戦場で相手の性別など気にせず、必要とあらば消し飛ばす程度の覚悟は完了している。

これが悟空や悟飯ならば話もまた違ったのだろうが、こういう意味でも相手が悪かったとしか言いようがなかった。

「くそおおッ！」

ザンギヤが怒りに顔を歪ませ、気を高める。

「シュートブラスター！」

そしてバレーボールのアタックのように打ち出されたのは特大の気弾だ。

ピッコロはそれを避ける事はせずに両手で押さえ込む。

角度的に見て、回避すれば最悪地球に衝突すると判断したからだ。

気弾の威力にジリジリとピッコロが押され、ザンギヤが勝ち誇ったように笑みを深める。

だが次の瞬間にピッコロは気弾を上へと飛ばし、ザンギヤの顔から笑みが消えた。

「どうした、今のがとっておきか？」

「あ、ああ……！」

「なら今度はこっちから行くぜ！」

言うや否やピッコロは両手を素早く動かし、連続で気弾を発射し始める。

気弾による弾幕は相手に間合いを詰めさせず、かつ連続で攻撃を加える事が出来る単純かつ強力な戦法だ。

反面、一発一発の威力は単発よりも格段に下がり、通じない敵にいくら発射しても無駄に体力を消耗するだけという欠点もまた持ち合わせていた。

相手と自らの実力差を把握し、その上で効果的に使う。それがこの戦法の正しい運用であり悪戯に気弾を連射すればいいというわけではない。

ピッコロはその事をよく理解していた。だからこの気弾の連射もただ無意味にバラ撒いているのではなく、明確な目的を持って発射している。

必死に避けていたザンギャもその事によりやく気付くが、もう遅い。

既に周囲360度を気弾に囲まれ、逃げ場を封鎖された後だ。

「し、しまっ……！」

「終わりだ……くたばれ！」

ピッコロが掌を握る。

それに応えて全ての気弾が動き、中央へと集約した。

それはつまり中央に閉じ込められたザンギヤに気弾が殺到するという事であり、回避を封じられた彼女は防御する以外に手立てがない。

「ボ、ボージャック様アアア！」

ザンギヤの悲痛な叫びが木霊し、直後に大爆発が森を揺らした。

最期に彼女が縋ったのは主であるボージャックだったが、もしもこの叫びがボージャックに届いたとて彼女の運命は変わらなかっただろう。

煙の中から原型を失った黒い何か——ザンギヤだったものが地面に落ち、崩れる。

魔空包囲弾。気弾の弾幕の中に敵を閉じ込めて一斉に直撃させる事で威力を跳ね上げるピッコロの新技だ。

その威力は語るまでもなく、炭と化したザンギヤの遺体が教えてくれる。

「ふん、呆気ない相手だったな」

ピッコロは吐き捨てるように言い、すぐに敵の死体から興味を外した。

倒した相手などもうどうでもいい。

それよりも気にするべきは今行われている戦いの方だ。

他の3人はともかく、ベジータはかなり手こずっているらしい。

ならば向かうべきはそこだろうと考え、一瞥もくれる事なく空へと飛んで行った。

・現在の地球の主力

リゼット…やたら即死技を使う

ターレス…悪党

ピッコロ…大魔王寄り

トランクス…殺れる時はさっさと殺る

ベジータ…ベジータ

なんやこのPT……。

第五十三話 銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴④

腕組みをしたままベジータとボージャックが向かい合い、気を高める。

ベジータは既に超サイヤ人の壁を超えた姿となっており、身体が一回り大きくなっていた。

対するボージャックは余裕の面持ちで、まるで底を見せていない。

ならばすぐにその余裕面を消してやる。好戦的に考えたベジータは腕組みを解いて気を集中し、ボージャックも合わせて構えを取る。

「っちゃあああ!」

「フン」

互いに気弾を発射し、相殺。

すぐに次弾に入り、それが相殺されれば間髪を容れずに次撃へ。

横へと位置をずらしながら気弾を相殺し続け、互いの視界を煙が埋め尽くす。

だが気を探れば場所は分かる。ベジータは迷いなく突貫し、ボージャックへ渾身のストレートを放った。

だがボージャックは目にも止まらぬ速度で距離を取り、先ほどよりも強力な気弾を発射した。

「ちいっ！」

ベジータが両手を突き出して気弾を受け止めるも、威力の高さに押される。

多少はダメージを抑えるも、気弾を防ぎ切る事は出来ずに爆発に吹き飛ばされてしまった。

地面に尻餅をつき、起き上がろうとした所を狙い撃つように間合いを詰めたボージャックの左拳に殴られる。

更にボージャックが追撃。空中へと上がり、吹き飛んで行くベジータを追う。

ベジータも何とか体勢を直して飛翔。ボージャックの拳に交差させて拳を出すもタイミングのずれから一方的に殴り飛ばされた。

飛んで行くベジータの先に回り込み、今度は蹴り。ベジータの身体を空へ跳ね上げる。

まだ終わらない。飛翔して追いつき、背中を思いきり蹴る。

崖に叩き付けられる事でようやく止まったベジータは脇腹を押さえながらボー

ジャックを忌々しそうに睨んだ。

（く、くそつたれ……！ 俺は精神と時の部屋の修行で腕を上げたはずだ！

今ならカカロットや、この星の神にだって勝てる！ なのに、何故エリート戦士であるはずの俺がこうまで押されているんだ！）

屈辱。そう、屈辱だった。

ベジータは以前のフリーザとの戦いで一度プライドをへし折られ、更に悟空とターレスに先んじて超サイヤ人に変身されるという屈辱を味わっている。

本来ならば誰よりも先に覚醒するべき自分が、あろう事か下級戦士二人の背中を追うというあってはならない事態。

だがベジータは彼等に遅れて覚醒し、サイヤ人の王子としてのプライドを取り戻した……はずだった。

だが人造人間との戦いでは16号に後れを取り、あまつさえ見逃されるという醜態を犯し、自信が再び砕かれた。

それでも彼は折れず、ならば超サイヤ人の限界を超えてやると心に誓い、今の強さを得たはずだ。

なのに……届かない。宇宙で最強のはずの超サイヤ人、その更に先へと至ったはずの自分がまた遅れを取っている！

「俺は……俺はスーパーベジータだーッ!!」

ベジータが声の限りに咆哮し、崖が崩落する。

全身を覆うオーラが更に強まり、額には血管が浮き出た。

ベジータは全身を包む怒りの衝動のままに手を翳し、ボージャックへと狙いを定める。

「くらいやがれえ！」

——気弾乱射！

凄まじい速度で両手を動かし、気弾を次々と発射する。

「だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ!!」

肺活量の限界に迫るように掛け声を発しながら、息切れすら起こさずに気弾を連続し続ける。

気弾が当たっているかどうかすらも確認せず、気の感じられる方向へとひたすらに撃ち続ける。

それこそ弱虫ラディッツだって出来る。

だがそれだけの戦術を、一つの『技』にまで昇華させるのは簡単な事ではない。休みなく、間髪を容れず、間を空けず。ひたすらに発射され続ける気弾の雨。

これはまさに技だ。奥義と呼んで言い過ぎではない絶技なのだ。

だがここまで語った上であえてこう言おう。

——この攻撃は無意味である。

別にベジータが弱いわけではない。むしろ充分に強い。

そしてその強い彼が放つこの気弾の嵐を全て受けるという事は、ベジータからそれだけの回数攻撃されているという事だ。

既にここまで数百発発射されているこの気弾を、もしも他の者が受けたならば無事では済まなかっただろう。

だが相手はボージャック。ベジータよりも格上の相手だ。

そこに連射の為に一発一発の威力が落ちた気弾をいくらか撃ちこんでも彼にしてみれば軽く小突かれている程度にしか感じず、ダメージにもならない攻撃を何百と撃ち込まれた所で効くはずがない。

1でもダメージが通るならば意味がある。

だが0では意味がないのだ。

「はあっ、はあっ、はあっ……ど、どうだ！　ざまあみやがれ！」

ほぼ無呼吸連打に等しい攻撃を行ったが為に激しく息を切らし、ベジータは煙を見る。

だが彼自らが巻き上げてしまった煙のせいで敵のダメージ具合が確認出来ない。しかし見る必要はなかった。煙を裂いてボージャックが飛び出し、その健在ぶりを示したのだから。

驚愕に目を見開くベジータの腹へ蹴りをめり込ませ、その身体を蹴り飛ばす。

「ぐあっ!!」

ベジータが吹き飛び、遂に髪が金から黒へと戻った。

超サイヤ人の壁を一つ超えた形態——彼で言う所の『超ベジータ』は絶大なパワーを得る事が出来るが気の消耗が激しい。

だというのにあんな気の連射を行い、更に追い討ちの攻撃まで受けてしまったのだ。

ならば超サイヤ人が解除されてしまうのはごく自然な事であり、ここに勝負は決した。

しかしボージャックは尚もベジータを追い掛け、崖にめり込んでいた彼の腹に拳をめり込ませた。

「ふおおっ!？」

ベジータの口から唾液と血が撒き散らされ、筋肉の膨張によりボージャックの服が破れる。

今度は肘打ち！ これも執拗に腹を狙い、肘部分も破れた。

とうとうベジータが動かなくなり、ボージャックは一度彼から離れる。

攻撃をやめる？ 否、止めを刺すのだ。

「ウオオオオオオ!!」

ボージャックが叫び、筋肉が更に膨張。上半身の服が完全に千切れ飛んだ。

その気の高まりだけで崖が崩れ、ベジータが埋まる。

その彼へと容赦なく手を翳し、止めの一撃となる気弾を発射した。

だが次の瞬間、気弾は空間の穴に吸い込まれ、代わりにボージャックの周囲を囲

うように空間が開いた。

「！！？」

空間の裂け目から一斉に閃光が放たれる。

その中には今ボージャック自身が発射した気弾すらも含まれており、彼の身体を滅多撃ちにした。

ダメージは浅い。しかし不意を打たれたせいで少しだけ喰らってしまった。ボージャックは口の端を吊り上げ、奇襲者を見る。

「現われたな、地球の神よ」

ベジータを間一髪で救ったのは、ブージンと戦っていたはずの地球の神、リゼットであった。

その周囲には白光球が二つ旋回しており、油断なくボージャックを見据えている。どうやらブージンはダメージも与える事が出来ずに敗れたらしい。

全く使えん奴だ、とボージャックは内心で死んだ部下を蔑んだ。

「取り巻きは始末した……次はこの星の真ん中にお前の墓を建ててやる」
後ろから響いた声の正体はターレスだ。

彼は好戦的に笑いながら腕を組んでおり、ボージャックはまたも己の部下の敗北を知った。

だがそこに追い討ちをかけるように右と左の両サイドを塞ぐようにトランクスとピッコロが駆けつけ、ボージャックは隠す事もなく舌打ちをした。

「全員死んだか……使えん屑共め」

これで4対1。負けるとは微塵も考えていないが、流石に少し面倒だとは思っていた。

とりあえずまずは一人。速攻をかけて潰した方がいいだろう、とボージャックは考える。

そして潰すならばこの地球の戦力の中核でもあろうあの女だ。

ボージャックは獰猛に顔を歪め、リゼットへと突進した。

「ウオオオオオ!!」

掛け声をあげて豪腕を繰り出す。

ラッシュ、ラッシュ、ラッシュ、ラッシュ!

何の躊躇もなく放たれた腕はリゼットの腰ほどの太さもあり、当たれば無事で済

むはずもない。

だが避ける、避ける、避ける！

まるで次の攻撃が読めているかのように最小限の動きで拳を避け、それどころか合間合間に彼女の周囲を飛ぶ光球がボージャックへと衝突を繰り返した。

無論大したダメージではないが、それでも僅かなりとも拳の軌道が逸れる。

気が散るし、特に目の前を通過した時が鬱陶しい。

どうしても視界が塞がれ……そして次に視界が開けた時、そこに女はいなかった。

（消えた？ 何処に……）

思考は一瞬であった。迷いはほんの僅かな間であった。

敵の姿を見失うというよもやの事態にボージャックが困惑したのは時間にして僅かコンマ1秒にも満たぬ間の事であり、凡そ隙と呼べるような間ではない。

だがその間にリゼットは動いていた。

彼女は消えたわけではない。そもそも互いの戦闘力差を考えればボージャックが見失うような速度で動けるはずもなく、リゼットがやったのは単純にボージャックの視界の外に出たというだけの事でしかない。

ボージャックの視界を一瞬光球で塞ぎ、その間に懷へ飛び込みつつ上体を屈める。これにより互いの身長差も相まってボージャックの目からはリゼットが消えたように見えた。

更に高度を落としてボージャックの股の間を潜るようにして背後を取り、振り向きざまにバーストリミットを100倍まで跳ね上げる。

それは本当に一瞬の事で、それでもリゼットの氣と体力を大きく食ってしまう。だがそれに見合うダメージさえ与えることが出来れば消耗に見合うだけの成果はあり、この初撃でどれだけボージャックに痛手を与えて戦力を削げるかが勝敗を左右する。

更にリゼットは今までの反省を活かし、口の中に先に入れていた仙豆を飲み込んでいるので実質ノーリスクだ。

今回は100倍バーストリミットが必要になると踏み、ここに来る間に半分に割った仙豆を口に含んでいたのだ。

ここで何故半分なのかというと、小食のリゼットでは一粒食べてしまっただけでお腹一杯になって動きが微妙に鈍るからである。

そこまでして上昇させた戦力で以て、気の刃を纏った蹴りを叩き込む。

何処に？ 笑止、愚問。

そこに解り易すぎる弱所がぶら下がっているのだ。そしてここはルール無用の実戦の場。

ならば躊躇う理由などあるはずもなく、弱所があるならば進んで狙うし卑怯などという言葉があれば率先してその卑怯を行う。

ならば狙うは一箇所。解り易いまでに男性型の宇宙人で、有り難い事に同族に女性がいる事まで判明している。

ならばナメック星人のような無性という事はまず有り得ず、故にそこは高確率での急所。薄皮一枚でぶら下がっている内臓だ。

——金的。何か潰れる音が二つ響いた。

「~~~~~ツツツツ！！！！？」

全霊で男の急所を蹴り上げられたボージャックは声にならない叫びをあげて絶叫

した。

いかに戦闘力が高かろうと、ここは鍛えようがない。

無論常人に比べればその強度は高く、鋼と言ってもいいだろう。

だがそれでも、筋肉の鎧や骨に守られた他の部位と比べれば致命的なまでに脆弱で、格下の攻撃であろうと通ってしまう。

余程圧倒的な戦闘力差があれば気だけで防げてしまうだろうが、100倍バーストリミットを発動したりゼットとボージャックにそこまでの差はなかった。

可憐な見た目に反したえげつない攻撃にターレスが冷や汗を流して『え？ あ
の神さんあんな攻撃すんの？』といった表情になる。

ピッコロはイマイチ理解出来ていないのかいつも通りの冷静さを保ったままであり、トランクスはターレス同様に汗を流していた。

もつともこちらはターレスとは違い、『予想通り』という意味での冷や汗であるが。

そんな彼等の前で、リゼットが気の剣を生成して振り上げる。

股間の布地が鮮血で染まったボージャックへ行かう無慈悲の迫い討ちだ。同じ男の

立場からすれば思わず『やめたげてよお!』と言いたくなる。おら!　きんのたま　だせ!!

しかしボージャックも股間を押さえて苦悶の脂汗を流しながらではあるが咄嗟に反応し、剣を避ける。

だが尚も間合いを詰めてきたリゼットが今度はノータイムで指突!　何ら躊躇なく眼球へ指を入れようとする。

これもかろうじて避け、ボージャックが怒りの右ストレートを放った。

周囲を旋回していた光球二つに遮られ、更にバリアに阻まれる。

だがそれでも強引に拳を通し、バリアを貫いてリゼットの胸に拳が直撃した。

しかし……手応えがない!

拳を受けたリゼットの身体が殴られた勢いのままに吹き飛び、空中でフワリと回転すると何事もなかったかのように静止した。

リゼットは「ふむ」などと呟きながら拳を受けた己の胸を摩り、納得したように頷く。

「皆さん、気を付けて下さい。思ったよりも腕力があります」

「いや、その前にアンタ何で無事なんだ？」

「攻撃を受ける直前に脱力して威力をほぼ受け流しました。羽毛に拳は当たりませんよ」

「……意味わかんねえ」

ターレスの言葉は尤もだろう。

リゼットの取った防御は通常の防御の概念の真逆を行くものだ。

通常、攻撃を受ける瞬間は力む。筋肉を固くして衝撃に備える。

だがリゼットは逆だ。どうせ力んでも変わらないと開き直って極限まで脱力しているのだ。

気の出力はそのままに、筋肉だけを弛緩させて全身の力を抜き、己自身が羽毛になつたと強く思い込みイメージする。

そうする事により敵の剛拳の威力、そのほとんどを受け流して無傷のままにやり過ごしていた。

その姿を見ながらトランクスは思う。

ああ、過去の世界でも相変わらずだなあ、と。

リゼット「断言します。睾丸とは内臓なのです。

(中略)

仮に——皮膚一枚に包まれた心臓が股間にぶら下がっていたら戦闘時どれほどの弱みとなることか」

ターレス「……………お、おう」

多分、DB系オリ主の中でこいつくらいだろうなあ……………真面目な戦闘の最中に、真面目に相手のゴールデンボール破壊しにいくの……………。

ちなみにリゼットは別にふざけていませんし、受けも狙っていません。

大真面目に、そこが弱点だから破壊しにいらしています。

【戦闘力変化】

ボージャック…150億↓80億

第五十四話 銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴⑤

「同じ男としてちょいと同情はするが……折角の好機だ！」

このまま押し切らせてもらうぜ！」

リゼットと入れ替わるように最初に飛び込んだのはターレスだった。

彼は獲物を狙う獰猛な獣の如く形相を歪め、未だダメージから立ち直れていないボージャックへと仕掛ける。

相手の回復を待つ騎士道精神など最初から持ち合わせていない。そんなものはクソ喰らえだ。

卑怯卑劣、ラフファイト。いいではないか。上等だ。

かつてクラッシャー軍団と名乗っていたのは伊達ではない。

闘いにルールなどない。殺し合いに禁じ手などない。

殺るか殺られるか！ 喰うか喰われるか！ ここはそういう世界だ。

加速を加えたターレスの肘打ちがボージャックの顔面へ突き刺さり、よろめいた所で髪を鷲掴みにして膝を顔へと叩き込む。

二度、三度、四度、五度！

まるで街角の喧嘩のようなラフさで幾度もボージャックの顔を蹴り、返り血を浴びたターレスがサディスティックに晒う。

「調子に、乗るな！」

ボージャックが怒りの声をあげてターレスの顔を鷲づかみにする。

ターレスも抵抗するがパワー勝負では勝ち目がない。

ギリギリと握力任せにターレスの顔を掴んだまま持ち上げる。

ターレスも必死に蹴りをボージャックの胸へと叩きこんでいるが、まるで怯む様子がない。

だがボージャックは背後から迫る殺気に気付いて即座に退避。直後にトランクスの剣が空を斬り裂いた。

「ずあっ！」

「!？」

避けた所を狙い、ピッコロの気功波がボージャックへと炸裂。爆炎を上げた。更に煙の中へと突撃し、視界の利かない中でボージャックへ格闘戦を挑んだ。

突き出した拳を避けられてボージャックの膝が腹へめり込む。

だが歯を喰い縛り反撃。ピッコロの回し蹴りがボージャックを弾き飛ばし、地面へと叩き落とした。

追ってピッコロも降下し、ダブルスレッジハンマーを振り下ろす。

しかしボージャックも見た目に似合わぬ機敏さで避け、ピッコロへと気弾を発射した。

「ぐああああっ！」

咄嗟に両手で受け止めるも、威力を抑え切れない。

気弾に押されて地面を削りながら後ろへと飛ばされ、遂に爆発した気弾に身体を焼かれた。

深いダメージを負い倒れたピッコロを守るようにトランクスが割って入り、剣を振り下ろす。

だが……無傷！　まるで金属同士が衝突したような硬質な音を響かせてボージャックの腕が剣を止めてしまったのだ。

「ぐっ……はあああああ！」

超サイヤ人の超身体能力と師から教わった剣術を駆使し、高速で刃を振るう。

だが鍛え抜いた肉体は鋼にも勝る。トランクスの斬撃は悉くボージャックの肉体に防がれ、表面を僅かに削るだけに留まっている。

だが直後、背中に鋭い衝撃が走ると同時に耐え難い激痛がボージャックを襲った。襲撃者は間髪を容れずにボージャックの背中に掌打を見舞い、鞭の激痛を彼に思いつく知らせる。

鍛えた肉体？　それがどうした。そこに皮膚がある以上痛覚は存在するだろう。ならば皮膚にダメージを刻む鞭の掌打——鞭打の前では余りにも無力だ。

この技の前に防御は意味を成さない。狙いが皮膚である以上、攻撃箇所はブロックした腕や足を含む体表全てであり、身体の全てが急所！

怯んだ瞬間にリゼットは気の剣を手にし、密着状態から片手平突きを発射。ボージャックの心臓へと剣を突き立てるも、筋肉の壁に阻まれて心臓までは刃が達しなかった。

（なんて堅さ……生身の手応えじゃない！）

「きつさまああああ！」

ボージャックの豪腕がリゼットの頬を殴り、少女の身体が二転三転と横に回りながら吹き飛ぶ。

だがまたもフワリ、と着地。

屈辱に顔を歪めるボージャックの前でリゼットは己の頬を擦り、僅かに痛みが残る事に驚きと敵への敬意を感じていた。

脱力による羽毛化は為っている。攻撃は間違いなく受け流している。

だがそれでもごく僅かではあるが彼の豪腕はリゼットへ届いているのだ。

バリアと光球で威力を削がれた上で受け流して尚この威力……直撃を許せばそれだけでKOされてしまいかねない。

よくもまあベジータはあんなにボコスカ殴られて死なないものだ。

もっとも傍から見ればリゼットこそ理不尽な防御力に見えるだろうが。

「貴様、どうなっている？ 確かに直撃^{あて}たはずの拳……まるで手応えがない。

まるで羽根でも殴っているかのような、異様な感触^{ていつたえ}ッッ！」

「まさに仰る通り。貴方は羽根を殴っているのです」

「ほざけえッ！」

からかわれた、と思ったのだろう。

ボージャックが激昂し、リゼットへと飛びかかる。

だが間に割り込んだターレスが彼の両手に己の両手を合わせ、リゼットでは持ち得ぬ膂力を以て突進を受け止めた。

更にそこからリゼットに倣うように脱力！ それによりボージャックが前のめりになり、ターレスは倒れ込むように上体を反らす。

そのまま、勢いに逆らわずにボージャックの腹を蹴り上げた。

互いの両手が離れ、だがターレスは別れを惜しむように飛翔。ボージャックを殴り飛ばして更に追い掛け、彼の肩に乗って背後に回り込み羽交い絞めにした。

「そらあ！」

その体勢のまま背中へサマーソルトキック。

再びボージャックを蹴り上げ、飛んで行く彼の先へと高速で回りこむ。

そしてダブルスレッッジハンマー！ 地面へと叩き落とした。

これぞかつてバーダックが得意とした連続攻撃、『ファイナルリベンジャー』。その見様見真似だ。

だがここで終わりではない。ターレスは地面へと向けて渾身の気弾を発射し追い討ちをかける。

「キルドライバー！」

リング状の気弾がボージャックを撃ち、爆炎をあげた。

しかしまだ終わらない。ボージャックが立ち上がれぬ今が好機だ。

ターレスは気弾をもう一発用意し、それに合わせてトランクスとリゼット、ダメージから立ち直ったピッコロがそれぞれの技の構えへと入った。

「リベリオントリガー！」

「バーニングアタック！」

「激烈光弾！」

「Sparkling！」

四発の高威力の気弾がボージャックを撃ち、連鎖爆発を起こす。

これでもまだ死んでいないようだが、ボージャックから感じられる気が目に見えて減っている。

ボージャックが煙から飛び出して反撃の気弾を発射するが、それは彼等へ届かな

い。

空間の穴に飲み込まれ、ボージャック自身の背後から飛び出すだけだ。

己の放った気弾に背中を強襲されたボージャックは齒を喰い縛り、何とかダウンだけは避ける。

「無駄です。私に遠距離攻撃は通じません」

「離れて戦えば一方的に跳ね返されて、近付けば訳わかんねえ技で滅多打ちってか。おっかねえ女神様もいたもんだぜ。こいつどうすりゃ倒せるんだ？」

「肉体力そのものは低いから、何とか一発でかいのを当てるしかないな。出来ればの話だが」

「あの、何で私を倒す話になってるんですか？ 敵はあっちですよ」

リゼットの戦闘スタイルは極めて性質が悪い。

相手に接近戦を強要するくせにその接近戦こそ彼女の独壇場なのだ。

その容赦のなさにターレスが敵を無視して対リゼットの戦法を真面目に思案し、かつてはリゼットを倒す事を本気で考えていたピッコロが乗っかる。

リゼットとしては味方が自分を倒す方法を真面目に考えるなど、軽く涙目になり

そんな状況だ。

そうこう漫才をしていると痺れを切らしたボージャックが突撃してくるが、振り下ろされた拳を受け流してリゼットの掌打が人中に入る。

更に顎を打ち、喉仏を指突！ よろめいた瞬間に両手の親指を立てて乳様突起（耳の後ろ側にある突起した骨の部分）を突き、平衡感覚を狂わせてから気の刃で両目を切り裂き、気合砲で弾き飛ばした。

「いい攻撃だ！ 続かせてもらうぜ！」

飛んで行くボージャックを追ひ、ターレスが追撃。

リゼットのような洗練された武こそないものの、実戦の中で鍛えてきたラフファイトが彼にはある。

蹴り！ 肘打ち！ 髪を掴んで膝蹴り！

サイヤ人の本能のままに繰り出される連撃がボージャックを滅多撃ちにし、全身至る箇所を強打した。

最後に渾身の力で蹴り飛ばし、後続へと繋げる。

「次だ！ 休ませるな！」

「任せろ！」

ターレスの号令に応えて今度はピッコロが攻める。

両手の拳を常識外れの速度で繰り出し、ひたすらに連打！ 連打！ 連打！

ボージャックの胸板を執拗なまでに叩き、苦し紛れの反撃で繰り出されたボージャックの腕を掴み取る。

「……くたばれ！」

腹に一撃！

そこから力任せに放り投げ、口から破壊光線を発射。爆炎をあげた。

そして次に続くのはトランクスだ。

「トランクス！」

「ハイッ！」

放り投げられたボージャックを襲うのはトランクスの、上段からの剣撃だ。

鋭い刃がボージャックの頭から股までにかけて一直線に赤い線を引き、血の雨を降らす。

だが終わらない。本来ならばフリーザに見舞うはずだった高速の剣閃がボージャッ

クの全身を切り刻み、切断にこそ至らぬものの決して浅くはない裂傷を刻み込む。最後に仕上げとばかりに気功波を放ち、空中へと吹き飛ばした。

それを見てリゼットは即座に己の近くに空間の穴を開き、それと同時にボージャックを囲むように数多のゲートが展開される。

「皆！ここに攻撃を！」

「よし！いくぞ！」

「あいよ」

「これで終わらせる！」

リゼットが手を振り上げ、ピッコロが手を翳す。

ターレスがニヤリと笑い、トランクスが両手を後ろへと引いた。

そして始まるのは気弾の弾幕だ。

「千の剣よ、在れ！」

「死ねええッ!!」

「魔空包围弾!!」

「だだだだだだだっ!!」

連射、連射、連射連射連射！

気弾の連射は戦力差を考えれば普段のボージャックに通じる戦法ではない。

だが今のボージャックならば別だ。彼は今弱りきり、格段に力が落ちている。

そしてダメージが1でも通るならば気弾連射は有効な戦法であり、追い討ちは持って来いだ。

避けようもない弾幕が360度から発射され、ボージャックの全身を雨あられと撃ち抜く。

爆煙が彼の姿を覆い隠し、最後の止めとして全員が大技の構えへと入った。

「Raging blast！」

「フィニッシュバスター！」

「魔貫光殺砲！」

「カラミティブラスター！」

飛翔する四条の閃光。

それがボージャックへ迫りながら重なり合い、一つの気功波と化して加速する。潰れた眼ではそれを視界に入れる事も出来ず、しかし自らの破滅を悟りながら

ボージャックはあらん限りの声で絶叫した。

「ちくしょおおおおおお!!」

——爆破。

空を覆い尽くすほどの大爆発がボージャックを包み、その全身を完全に消し飛ばした。

断末魔は聞こえない。叫びは大爆音に掻き消された。

死体など確認する必要もなく、気は完全に消失している。

「や、やったか？」

「トランクス君、それはやってないフラグです。

……と言いたいところですが気は完全に消えてますね」

トランクスが余計なフラグを立てるも、もうボージャックは塵になってしまっている。

流石に彼も塵になってしまったのは折角のフラグを活かす事など出来ないだろう。つまりはこれで決着。今回地球を襲ったヘラー一族との戦いは勝利という形で完結を迎えたのだ。

ターレスとピッコロが互いの健闘を称えるように笑い合い、トランクスもそれに合わせて破顔する。

紛れもない強敵だった。

だが精神と時の部屋での修行の成果を充分に発揮して見事に退ける事が出来たのだ。

この経験は今後、彼等の自信となり彼等を更に成長させてくれる事だろう。

何より悟空抜きで終わったというのが大きい。

未来は悟空がい不在が為に絶望に染まってしまったが、悟空がいなくてもやれるんだぞと今回の戦いで証明する事が出来たのだ。

「ところで、次は神さんが精神と時の部屋に入るのか？」

「そのつもりです。敵も段々強力になっていきますし、そろそろ私もあの部屋を使う頃でしょう。」

とりあえずカリン辺りに付き添ってもらって、その後は悟空君が起き次第悟空君と悟飯君ですね」

リゼットは今まで精神と時の部屋を使用しなかった。

究極のドラゴンボールを捨てる為に入ったりはしたものの、その時はすぐに出てしまいほとんど使用時間にカウントされていいない。

精神と時の部屋には個人で使える限界時間があり、それを過ぎると二度と入れなくなるし出られなくなる。

リゼットならば空間移動で脱する事は不可能ではないだろう。

精神と時の部屋からの通常空間への脱出は決して簡単ではないし、今はやれと言われても出来ないが時間をかければ出来るようになるという予感はある。

だからその気になれば無制限に使える可能性は低くない。

だがもしかしたら、閉じ込められて亜空間をも閉鎖されてしまう可能性もゼロではなかった。

そしてそうなった場合リゼットは脱出する術を持たない。原作における魔人ブウやゴテンクスのように力だけで空間をこじ開ける事は不可能なのだ。

だから今まで精神と時の部屋の使用を自らに禁じてきた。

決して分の悪い賭けではないと思っている。むしろ8割方勝てる賭けだ。

限界時間を超えた後の脱出は“多分”可能だ。

だが、絶対ではないのだ。

それが今までリゼットを足踏みさせてきたものであり、精神と時の部屋を使わなかった理由である。

とはいえ、次はいよいよブロリーだ。

流石に使わないという選択があるはずもなく、リゼットは精神と時の部屋の解禁を決意した。

どうでもいいが、リゼット達が去った後に、と鳴く緑色のセミのような何かがひっそりと物陰から立ち去ったらしい。

第五十五話 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦①

パラガス「遂に来た……俺達親子の優秀さをこのSSにしらしめてやろうではありませんか!」

ブロリー「イエー!」

リゼットが精神と時の部屋から出ると、何やら妙に場が盛り上がっていた。一体何事かとも思ったが、その疑問はクリリン達に囲まれている孫悟空を見て氷解した。

なるほど、どうやら自分が修行している間によりやく悟空が復帰したらしい。リゼットは悟空の近くまで歩くと、彼の復活を祝うように声をかけた。

「悟空君。心臓病は治ったんですね?」

「ああ、おかげさまでな。状況は大体分かってるつもりだ」

悟空は床に臥せている間にも寝ながらにして全てを視ていたという。

それはリゼットと同じ気の感知を極めた先の領域、遠視だ。

恐らくは一時的なものなのだろうが、その力を得てしまうとは流石といふべきか。

悟空は一度悟飯を見やり、それからリゼットへと尋ねる。

「早速で悪いんだけどよ神様。次はオラと悟飯が精神と時の部屋を使っているか？」

┌

「病み上がりであり無茶は……」

「なあに、休みなら向こうで取るさ。何せ1年もあるんだからな」

悟空と悟飯の修行は勿論リゼットとしては大歓迎だ。

何せこの二人こそ、これからの戦いにおける主戦力となり得る存在である。

特に悟飯が超サイヤ人2へと覚醒してくれば、その戦力は計り知れない。

この時代で残る敵はブロリーとハッチヒヤック。ヒルデガンやジャネンバの出

現まではまだ時間があると考えても、今のままでは厳しい。

だからこそ、この親子のパワーアップは願ったり叶ったりだ。

★

悟空が病氣から復帰してすぐにクリリン達は盛大な宴を開いた。

季節は春まっさかり。桜が満開となる時期だ。

ならば花見以外ないだろう、と皆が集まって桜の下で悟空の復帰を喜び合った。当の本人が息子と一緒に精神と時の部屋にいるのに何をしているのだ、と思われるが、それだけ嬉しかったという事だろう。

クリリンは下手糞な歌を熱唱し、ターレスが「引っ込めヘタクソ！」と野次を飛ばしながらビールの空き缶を投げつける。

トランクスとブルマの母子はそんな光景を少し離れた場所から見て笑い、亀仙人が裸踊りをする。

ヤムチャや天津飯、ナツパなども揃って盛り上がり、本人そっちのけで花見は盛り上がった。

この宴会に参加していないのは悟空家族とリゼット、ピッコロだけだ。

悟空と悟飯は言うまでもなく修行。チチは戦いが終わった時の為に今から塾の予約などを取りつけに出掛け、ピッコロは花見に興味を示さずサボタージュ。

そしてリゼットは何か思い当たる節があるのか、神殿に残って宇宙の監視に集中していた。

ベジータは苛立っていた。

クリリンのヘタクソな歌に苛立っているのではない。いや、それもあるが彼の怒りの原因はここ最近の己の戦績を振り返ってのものだ。

超サイヤ人に覚醒して19号とかいう肥満を倒したのはよかったが、その後がよくない。

超エリートである王子の己が宇宙最強のはずの超サイヤ人になった。ならばそれは疑いの余地なく最強のはずだ。

だが人造人間16号に負け、精神と時の部屋の修行を経た後でもボージャックに負けた。

いや、奴だけではない。気は測れないが恐らく相変わらず地球の神も自分の上にいるだろう。

気に入らない、と心底思う。

己は王子なのだ。あそこで馬鹿騒ぎしている連中とは違う。

ターレスは下級戦士。ナッパもエリートを自称してはいたが、所詮は中級戦士止まり。

だがここの連中はそんな事などまるで気にしない。

下級戦士と超エリートの王子を同じ枠組みに入れ、同列に扱う。

「くそったれめ……!」

ベジータの自尊心は崩れかけていた。

かつてフリーザとの戦いで失ったプライドは超サイヤ人となる事で再構築されたが、それがまた罅割れている。己の強さに自信が持てなくなっている。

外面では解り難いが彼はこれで結構繊細なのだ。

つまりは、今のベジータはかつてない程に余裕がなかった。

この上なく危うい状態であり、とても冷静ではなかったのだ。

そんな彼の心境を察しているのはリゼットだけだ。他の誰も読み取る事など出来ない。

だがまるでそれを察したかのように、この絶好のタイミングで宇宙船が地球へと降り立った。

「あ、あれは……あの宇宙船は!」

真っ先に反応したのはトランクスであった。

その宇宙船の形状に覚えがあったのだ。

そうだ、忘れもしない。あの宇宙船こそ不吉の象徴。

未来において何もかもを破壊し尽した悪魔が乗ってきた宇宙船だ。

彼は確信する。

来たのだ遂に。悪魔が！ 伝説の超サイヤ人が！

即座に剣を抜こうとするが、その彼を止めたのは脳裏に響いたりゼットの声であつた。

『トランクス君、聞こえますか』

「リゼットさん！ はい、今ここにブロリーの宇宙船が来たところです！」

『私の方でも感知しています。しかし中に貴方から聞いたブロリーは居ないようです』

「居ない？ それは一体……」

『ブロリーは私が視たところ、数日前から南の銀河と北の銀河の丁度中間地点に位置する惑星から動いていません。』

どうやらブロリーを操っている者……パラガスでしたっけ？ 彼はその惑星を

戦いの舞台に選んだようです』

ブロリーがまだいない。朗報だ。

ならば今こそパラガスを倒してしまうべきだろう、とトランクスは考えた。

そうすればブロリーはその惑星に置き去りとなり、こちらに来る事もなくなるはずだ。

だがその考えはリゼットによって否定された。

『それは駄目です』

「な、何故!？」

『パラガスをここで消してしまえばブロリーを制御出来る者がいません。

そうなれば制御を失ったブロリーがどう動くか予測出来ないのです。

最悪、周囲の惑星を全て壊してしまうかもしれません』

それに、ブロリーは悟空に執着している、という事をリゼットは知っていた。

更にこれまで遠視して分かった事なのだが、ブロリーはどういう理屈かは知らないがサイヤ人のくせに宇宙空間でも当たり前のように活動している。

つまり制御を失ったブロリーは最悪、悟空を求めて地球まで来てしまう可能性が

あるのだ。

否定出来る事ではない。実際映画二作目であの男は場所も知らないはずの地球まで単身乗り込んで来ているのだ。

『それよりもここはパラガスを泳がせましょう』

「泳がせる、ですか？」

『はい。彼はどうやらベジータを騙して新惑星ベジータなる惑星に連れ出す気のようです。』

しばらくは彼の思う通りに行動させて、気が緩んだ隙を突いて制御コントロール装置を奪おうと考えています』

「制御コントロール装置を!?　そ、そうか!　そうすれば……」

『はい。上手くいけばあの恐ろしいブロリーを戦わずして無力化出来るかもしれません』

ブロリーははっきり言って強い。強過ぎる程にだ。

これと正面から戦うのは全く得策とは言い難く、全滅の危険が大きすぎる。

また、場所の移動はもしもブロリーと戦う事になった場合を考えれば決してこち

らにとって悪いものではない。

少なくともブローリーが地球で暴れるよりは余程マシなはずだ。

だから、とりあえずはパラガスの誘いに乗ってやろうとリゼットは提案したのだ。

「父さんにこの事は……」

『教えないほうがいいでしょう。彼に教えてしまうとパラガスごと制御装置を壊してしまう可能性があります』

「た、確かに……」

トランクスがリゼットと念話をしている間に、宇宙船から大勢の宇宙人が現れ、ベジータの前へと跪いた。

その中心に立つのはマントを付けた隻眼髭面の親父だ。

どうでもいいがクリリンはいつまで歌っているのだろうか。

「探しましたぞベジータ王子」

彼はベジータの前へ出ると恭しく頭を下げ、それを見たベジータが満更でもなさそうに笑う。

彼を王子として扱う者は久しくいなかった。それだけでもこの男の印象はそう悪

いものではないのだろう。

「サイヤ人だな？」

「パラガスでございます。新惑星ベジータの王になって頂きたく、お迎えに参りました」

「何ィ？ 新惑星ベジータ？」

「もう一度、最強の戦闘民族サイヤ人の優秀さを全宇宙に知らしめてやろうではありませんか！」

そう言い、パラガスは大仰な動作で立ち上がり、両手を広げた。

「貴方の手で最強の宇宙帝国を築き上げるのです！」

パラガスがそう言うと、配下の者達が一斉に手を上げて歓声をあげた。

しかしベジータはこれを下らないと考えたのだろう。

小さく舌打ちをすると何も言わずに背を向けて歩き出す。

だがパラガスはそれにも慌てずに、ベジータが確実に引かかる餌を目の前へぶら下げた。

「伝説の超サイヤ人を倒せるのはベジータ王、貴方しかいません！」

伝説の超サイヤ人。

その言葉を聞くやベジータの足が止まった。

かかった！ パラガスはそう確信し、笑みを深くする。

「伝説の、超サイヤ人……」

その存在はリゼットから聞かされていた。

何でも未来の世界でターレスやピッコロを始めとし、ほとんどの戦士を殺してしまった最強の敵だという。

最後にはリゼットと相打ちになったらしく、つまりこいつに勝てれば自分はその神よりも上になるという事だ。

未来の世界で自分はいつと戦わなかったと聞く。

だがもしも戦っていたならば必ず倒していたはずだ、という思いがベジータの中にはあった。

「南の銀河一帯をその脅威のパワーで暴れ回っております。

このままでは折角築き上げた新惑星ベジータも、伝説の超サイヤ人に……」

「父さん！ 駄目です、そんな話に乗っては！」

歩みを止めてしまったベジータの前にトランクスが立ち、彼を止めようとする。だがベジータはそんなトランクスをスルーし、パラガスへと向き直った。

「パラガス、案内しろ」

「父さん！」

ベジータを止めようと走るトランクスだが、その前にパラガスが割り込む。

そして彼は笑みを深くし、トランクスをも新惑星とやらの誘った。

「貴方もどうぞ。ベジータ王の血を引くトランクス王子」

「っ！」

名前を呼ばれた事でトランクスの顔つきが陰しくなる。

未来から来た自分がベジータの息子だと知っている、という事は相当入念な事前調査を行っているという事だ。

やはりこの男は油断ならない。改めてトランクスはそう考えた。

警戒するトランクスを余所にベジータは足早にパラガスの宇宙船に乗り込み、酔っ払った亀仙人と、彼を止めようとするクリリン、ウーロン、ヤムチャも一緒に宇宙船へと入ってしまった。

亀仙人が宇宙船のハッチ前で粘っていたせいで、閉まるハッチに全員揃って巻き込まれてしまったのだ。

「新惑星ベジータの王だなんて、馬鹿じゃないの?」

ブルマが赤ん坊のトランクスを抱いたまま馬鹿にするように呟き、その横を大人のトランクスが走り抜ける。

そして舞空術で閉まる寸前の宇宙船へと飛び込んだ。

「母さん、僕が必ず父さんを連れ戻します!」

かくしてベジータ、トランクス、亀仙人、クリリン、ヤムチャ、ウーロンが新惑星ベジータへと向けて飛び立ち、残されたターレス達は揃って溜息を吐いた。

あんなのはよく考えなくても罨であって誘いだ。よくもまあそこまでノコノコと付いて行けるものだな、と呆れているのだ。

ベジータも普段ならばこんな見え透いた誘いになど乗らないはずだが、今は間が悪かった。

「で、どうする? 俺達も新惑星ベジータとやらに行くのか?」

「冗談だろ? 今更惑星ベジータになんぞ用はねえよ。ましてやどこの星かも分

からねえ新惑星なんてなあ」

ナツパの問いにターレスが肩を竦めて答え、興味が全く無い事を示す。

実際ターレスは故郷だの新惑星だのに微塵の興味も抱いていない。

元より彼の気質は自由な旅人だ。

今更失った故郷などに用はないし、バーダックもギネもない名前だけの新惑星など心底どうでもよかった。

「で、そっちのハゲコンビは？」

「誰がハゲコンビだ。俺も今更惑星ベジータの復興なんぞに用はねえよ」

「とりあえず一度、神様の所へ戻ろう。彼女なら色々知っているだろうしな」

ターレスの問いにナツパも興味がないと返す。

そんな彼等の会話を遮るように天津飯が一度神殿へ戻る事を提案し、サイヤ人二人も頷く事で同意した。

【戦闘力】※変更のあったキャラと新規キャラのみ

・リゼット…3億5千万

・バーストリミット50倍…175億

・カリン様…8000万

・バーストカリン10倍…8億

・ブロリー…14億

・伝説の超サイヤ人…1400億

・パラガスでございます…9000

【燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作第11弾。

悟飯が超サイヤ人になっており、悟空が生存しているのでセルゲーム前の出来事とよく言われる。

しかしそれにしては地球に危機感が無さすぎる上に、セルゲーム前の悟空と悟飯は常に超サイヤ人にして慣らしているはずなので矛盾が生じてしまう。

かといってセルが現れなかった世界線と考えると、今度は悟飯を超サイヤ人にす

るまで鍛えるかという疑問が生じる。

なので個人的には悟空が瞬間移動かめはめ波でセルの上半身を消し飛ばした際に、セルの核まで消し飛んでしまい、うっかり倒してしまった世界線であると考えたい。

あるいは、セルが自爆しようとした時に悟空が界王星にセルを置いて帰ってきてしまったのかもしれない。

すまねえ界王様、これしか思い浮かばなかったんだ。

(でもよく考えたらブロリー映画で界王様が生きていたので、それはないか)

【ブロリー】

ドラゴンボールZの劇場版オリジナルキャラで最も有名な男。賢さ26。

言動の一つ一つに至るまでネタとして昇華され、最早煎じすぎて味がしない。

1000年に一人現れるという伝説の超サイヤ人その人であり、性格も伝承の『血と殺戮を好む』超サイヤ人そのものの。

驚くほど執念深く、赤ん坊の頃に悟空に泣かされた恨みを30歳を過ぎても引きずっている。

しかしMADでは大体悟空達と仲がいい。

何か面白い事でも書こうと思ったが、様々な作者によって骨の髄までネタにされ続けていた為、特に書くことが思い付かなかった。

Vジャンプによると戦闘力は14億らしいので、このSSではその数値を基本の数値として採用し、そこから変身で100倍にした1400億を彼の戦闘力とする。最近、『超』の方でも登場して正史キャラに昇格したが、明らかに別人。

【パラガス】

ブロリーと並ぶ最も有名な劇場版オリジナルキャラ。

自分達を追放したベジータ親子への復讐だけを夢見て新惑星ベジータに宮殿を建てたり宇宙のならず者を集めたりした行動力のある男。

雑魚のように思われがちだが戦闘力は9000であり、時期が悪かっただけでサイヤ人としては間違いなく上位の実力者。

新劇場版では半分以下の4200に弱体化した。

今日もどこかで一人乗り用のポッドに乗ってはブロリーに潰されている。大人のお姉さんが大好き。

【岩盤】

ベジータがブロリーにラリアットをされた時に、どこからともなく現れてはベジータを受け止める名脇役。

彼に刻まれる円形のクレーターによってブロリーのパワーを分かり易く視聴者へと伝えてくれる。

また、ブロリーのパワーを受けても貫通されないカチカッチン鋼を上回る耐久性を有しており、彼なくしてブロリーとベジータの漫才は成り立たない。

【科学者】

パラガスに仕えるタコのような科学者。

ブロリーを制御して自在にコントロールするという、どう考えてもやばすぎる道具を、さも当然のような顔をして造り上げた。

つまりこのタコはその気になればフリーザ一族だろうがボージャックだろうが制御出来るという事である。

隠れた実力者だったが、グモリー彗星の衝突によって死亡した（と思われる）。コンピューターが弾き出したデータによりますと、パラガスは狂っております

じゃ。

【グモリー彗星】

新惑星ベジータに接近しつつある彗星。ブロリーMADの落ち担当。
落ちに困ったらこいつが新惑星ベジータに突撃して有耶無耶にしてくれる。
その万能性は、かの紅魔館にすら匹敵するかもしれない。

【モア】

地球に移住して一生懸命頑張ろうとしていたが、パラガスに殺されてしまった人。
登場シーンもセリフも少ないのだが、何故か変な人気がある。

必殺技は『モアブラスト』

地球に移住しましても一生懸命に……うつ、う、うわあああ!?

【アングル】

シャモを鞭で打っていた奴。

同じような外見のキャラは沢山いるが、固有名があるのはアングルだけ。

貴様、反抗する気か!?

【申し上げます】

パラガスの部下。申し上げます！ 伝説の超サイヤ人が現れました！ の人。

名前はないが、変な人気がある。

よく勘違いされるが、こいつはアングルではない。

しかし似たようなもので、やっぱりアングルでいいかもしれない。

【惑星シャモから連れてこられた奴隷達】

新惑星ベジータに宮殿などを造るために連れてこられたシャモ星人達。

よくブロリーに星をデデーンされたり、流れ弾で大量に死んだりしている。

【シャモ】

唯一固有名詞のあるシャモ星人。

星の名前を冠している事から考えると、実は彼はシャモ星の王子だったのかもしれない。

知るかそんな事！ 食べ物もろくにくれねえんだぜ！ サイヤ人なんて宇宙の

悪魔さ！

【爺ちゃん】

過酷な労働に耐え切れずに倒れてしまったシャモ星人の老人。

わしは悪くぬえ！ シャモのせいだ！

【惑星シャモ】

いつかは帰れるとシャモ星人達が眺めていた惑星。

ブロリーによって見せつけるようにデデーンされてしまった。

音MADでは頻繁に破壊されては復活している。

いつかは帰れるといいなあ……。

第五十六話 燃えつきろ!! 熱戦・烈戦・超激戦②

『ベジータ王バンザァァイ!』

「銀河の至る所から集めたならず者達が、貴方の従僕としてお待ちしております」
ベジータが新惑星ベジータに造られた宮殿へ行くと、そこで待っていたかのように多種多様な宇宙人達が彼を出迎えた。

感じられる気はどれも大した事はないが数だけが多い。

もう少しマシな奴を集める事は出来なかったのか、と不満を感じつつもベジータは宮殿の中へ入って行く。

自分が暮らす城、になるはずだが急ごしらえ感が滲み出ている。

もっとマトモな城は造れないのか、とベジータは早くも不満で一杯だった。

中に入ると、眠たそうな目をした黒髪の男の存在に気付く。

外の連中よりは大分気が大きく（といってもパラガス以下だが）、何よりも気の性質に覚えがあった。

「息子です。何なりとお使い下さい」

「ブロリーです」

パラガスが紹介すると、青年は礼儀正しく自己紹介をする。

実はリゼットはちゃんと伝説の超サイヤ人の名前をベジータや皆へ伝えていたのだが、その時のベジータはターレスに先んじられた屈辱でそれどころではなく、話もほとんど聞いてはいなかった。

当然、そんな状態で、しかも3年前に一度聞いた名前など覚えているわけがない。

「お前もサイヤ人のようだな？」

「はい……」

ベジータはサイヤ人の生き残りを当初は5人と考えていた。

即ち自分とナッパ、ラディッツとカカロット、そしてその息子である悟飯だ。だが実際には思ったより多くが生きていたらしい。

ターレス、パラガス、ブロリー、トランクスを計算に入れば9人……いや、そういえば辺境の惑星に送られた戦闘向きではない愚弟がいたか。ならば10人いることになる。

未来から来たほうのトランクスもサイヤ人ではあるが、あれは未来人だ。数に入れなくてもいいだろう。

そのような事を考えていると、慌てたようにパラガスの部下が走りこんできた。

「申し上げます！ トトカマ星に超サイヤ人が現れました！」

「何ィ!？」

部下の報告にベジータが驚き、お出ましか、と好戦的に笑う。

「早速伝説の超サイヤ人を征伐しに出掛ける！ 後に続けブロリー！」

せっかく来たばかりの宮殿から後戻りし、ベジータが宇宙船の場所まで戻ろうとする。

後にはブロリーが無言で続くが、そんな彼等へトランクスの制止の声がかかった。

「父さん！ 闇雲に出掛けるのは危険です！」

もっと情報を集めてからでも……」

「臆病者は付いて来なくともよい！ ブロリー、早くしろ！」

「父さん……！」

今のベジータには余裕がない。プライドに輝が入っている状態なのだ。

だからこそ未来において誰も……それこそリゼットすらも勝てなかった伝説の超サイヤ人を自分一人で倒すという事に躍起になっていた。

そんな姿を見てパラガスは髭を吊り上げて笑い、己の計画が順調に進んでいる事を確信した。



「うわへへへ、な、何事ですじゃ！　ここはどこですじゃ！」

同時刻、地球ではリゼットが亜空間移動により拉致してきたタコのような宇宙人の科学者が混乱していた。

最初はパラガスの持つ制御装置を奪う予定だったのだが、よく考えたら造ったのはこの科学者だ。

ならばこいつを誘拐してブルマ達に協力させればより高性能な制御装置を造る事も不可能ではない。

リゼットはそう考え、そして実行に移したのだ。

未だ混乱するタコに対し、リゼットはこのままでは彼の助かる目はないと説得する。

新惑星ベジータはグモリー彗星が近付いて衝突する間近であり、更にパラガスは脱出の手立てとして一人乗り用のポッドしか用意していない。

つまり彼にとって部下とは全て捨て駒であり、その中には科学者すらも含まれているのだ。

その事を説明するとタコは顔を真っ青にし、そしてリゼットへ協力する事を誓った。

「うわへへへ、全面協力しますですじゃ。技術も提供しますですじゃ。

気をお静め下され、儂は全くの無害ですじゃ」

「……………」

何という変わり身の早さだろうか。

心を読んでもこちらへの反逆の意思などはまるで見えず、恐怖で縛られた者の忠誠の圧倒的脆さを目の当たりする事となった。

その上で地球の事情やカプセルコーポレーションならば好きにだけ研究が出来るという飴をチラつかせる。

するとタコは完全にこちらに乗り換えたようで、奇怪な笑いをあげながら

ゼットに対し完全に従順となってしまった。

「という事でブルマ。後はお願ひします」

「宇宙の技術ねえ……まあ、やろうと思えば出来なくはないだろうけど。

まあいいわ。地球の一大事ですものね。

そのタコ、ちゃんと協力しなさいよ！」

「僕は完全にこちらに寝返りましたですじゃ」

リゼットからタコを放り投げられたブルマは呆れた顔をしつつも、やはり研究者としての好奇心は疼くのだろう。

タコを引き摺って自家用機に乗り、カプセルコーポレーションへと飛ぶ。

一応何かあったら心の中で叫べばすぐに駆け付けると言っておいたのでタコも何もしないだろう。

何より今のカプセルコーポレーションには最強の警備ロボットである人造人間16号がいる。

下手な事をすればヘルズフラッシュで消し炭になるだけだ。

どうでもいい話だがリゼットには16号を戦力として起用する気などない。

確かに高性能には違い不大的が完全なロボットである彼は改造する以外に強さを増す方法がなく、今後のインフレに置いて行かれるのが目に見えている。というかも知置いていかれている。

無理に戦場に引っ張り出しても無駄に破壊されるだけであり、それならばずっとカプセルコーポレーションにいて貰った方が有意義だと考えたのだ。

「さて、これで上手く行けばブローリーの制御装置が完成するでしょう。」

間に合わなければパラガスから奪うまでですが」

「こりゃあ、今回は本当に戦わずに終わりそうだな」

舞台裏でブローリー制御の為に行動しているリゼットを見て、ターレスが面白くなさそうに呟く。

しかし未来の話を聞けばこれが最善の手だという事くらいは理解出来るので何かを言う事はない。

念のためと呼び出されたピッコロも腕を組んで神殿の端から地上を眺めている。ナッパも暇そうにしており、天津飯もやる事がないと知って精神と時の部屋の前で瞑想に入っていた。

悟空達が出たら次は彼が精神と時の部屋を使いたいらしい。

別にそんな所にスタンバってなくても誰も割り込んだりしないのに。

それに悟空達が入ったのは半日前だ。まだ出て来るには時間がある。

そう考えるも、まるでその予想を裏切るかのように精神と時の部屋のドアが開いた。

「え？」

「馬鹿な、早過ぎるぞ！」

「それに何だ、この気は！」

リゼット、ターレス、ナツパが驚きを露にドアを見る。

そこには胴着をボロボロにした悟空と悟飯が立っており、二人とも髪が金色に染まっている。

間違いなく超サイヤ人だ。だが雰囲気がまるで違う。

見た目は確かに変身済みなのだが……そう、普通なのだ。まるでそれが変身前であるかのように自然体で超サイヤ人に変身している。

変身時特有の興奮状態も見られず、目も穏やかなものだ。

リゼットはそれを見て、改めて悟空の天才性を思い知った。

こんな短時間でもう、超サイヤ人を完全に自分のものとしたか、と。

「よう紳様！ すまねえが新しい服を貰えねえか。ボロボロになっちまってよ」

「あ、はい。いつもの胴着でいいですよね？」

リゼットが指を向け、悟空の胴着を新品に変える。

それと同じように悟飯はピッコロに新しい服をねだり、彼と同じ服を貰っていた。

これで名高い孫悟飯全盛期の完成というわけだ。

……9歳で全盛期ってどうなのだろう。

「おいカカロット。その状態、お前、超サイヤ人を自然な物として慣らしやがったな？」

「ああ。こうすりゃ変身時に無駄な負担をかけなくても済むからな」
「考えたな」

ターレスの質問に悟空は落ち着いた態度で答える。

なるほど、静かなものだ。

今までの超サイヤ人とはまるで違う。変身しているのに気を発散していない。

「で、勿論実力の方は身に付いたんだろうな？」

「ああ、少なくとも神様以外にゃ負けねえと思う」

「！　へえ、言うじゃねえか。俺よりも上だって？」

「そうだな。随分上だと思う」

悟空の自信に満ちた返答にターレスは面白そうに笑う。

彼は間の抜けた男ではあるが、こんな場面で無駄な事を言うタイプではない。

その彼がこう言う以上、それは本当に自分を超えたという事なのだろう。

「神様の気は前よりは感じられるようになったが、まだ霧がかかったみてえにハッキリしねえ。

これって大分近付いちゃあいるが、まだ超えてねえって事だよな？」

「……ええ。一応そうなります」

リゼットは汗を流しながら悟空の問いに肯定を返した。

そう、悟空はまだかろうじてリゼットを超えていない。

だがその差は既に僅かなものでしかなく、今ならばリゼットの気を感じての瞬間移動も出来るだろう。

だがそれ以上に驚かされるのは悟飯だ。

彼から感じられる潜在パワーは悟空すら凌駕しており、改めて才能の差に氣落ちしそうになった。

だが頼もしい限りだ。これならば万一ブロリーとの戦いに突入しても期待が出来る。

「神様、次は俺が入ります。いいですね？」

「ええ、構いません」

「俺も同室させてくれ。カカロットに差を付けられたままじゃ納得いかねえ」

次に精神と時の部屋に入るのは天津飯とナツパのハゲコンビらしい。

彼等は並んで部屋へと入り、そしてドアを閉めた。

あのやる気ならば丸一日か、あるいはそれ以上の時間を修行に使うだろう。天津飯の腕が斬られない事を祈るばかりだ。

リゼットは彼等を見届けた後、遠視で新惑星ベジータを見る。

ベジータは現在トトカマ星という場所に向かっており、少なくとも夜まで帰還しないだろう。

パラガスはタコの不在にようやく気付いたようで探し回っている。

トランクスはクリリン、ヤムチャと一緒にシャモ星人と友好を深めていた。

「なあ神様」

「ん？ どうしました、悟空君」

遠視を中断し、悟空へと向き直る。

こうして見ると本当に大きく、そして強くなったなと実感させられた。

以前は低かった身長も今ではリゼットが見上げる程になり、感じられる気も力強く、それでいて自然体だ。

流石主人公と頼もしく思うべきか、短い時間でここまで来た才能に嫉妬するべきか。難しい場面だ。

「伝説の超サイヤ人ってよ、やっぱ強えのかな？」

「ええ、恐らくはかなり。私達全員がかりでも勝てるかどうか分からない相手です」

「っひゃー！ そりゃすげえ！ オラ戦ってみてえぞ！」

「気持ちは解らなくはないですが、今回は諦めて下さい。

無事に勝てる保証もない相手なんですから」

「でもよお、オラここまで戦ってねえし……」

「駄目です」

折角強くなった悟空ではあるが、リセットの計画が上手く行けば出番は来ないままに終わるだろう。

というより今回に限って言えば彼の出番はない方がいい。

下手にブロリーと遭遇させてしまうと、それだけでブロリーが暴走する危険があるのだ。

全く、赤ん坊の頃に泣かされたというだけでブロリーは悟空に執着しすぎだ。

同じ理由で顔が似ているターレスも今回はアウトだ。

悟空はここまで、心臓病のせいでメタルクウラやヘラー一族との戦いを寝過ごしてしまっている。それだけに戦いたい気持ちが強いのだろうが、今回は我慢してもらいたい。

「ともかく、今はブルマの制御装置の完成を待ちましょう」

「悠長だな。そんなもん待たずとも今すぐパラガスって野郎の制御装置を奪えばいいじゃねえか」

「いえ、それはどうやら良くない手のようです」

「あん？」

「先ほど科学者の心を読んだのですが……どうやらパラガスの持つ制御装置は『パラガスの気』に反応するように出来ているようでして。

つまり奪っても私達では使えません」

当初リゼットはパラガスから奪うつもりだったが、やはり石橋を叩いて正解だった。

パラガスの持つ制御装置はパラガス本人にしか使えない。

つまり焦ってあれを奪ったりすれば、逆にブローリーの解放を早めるだけに終わっていただろう。

出来る手をすぐに打つというのは決して悪くない。

だが時にはこうして情報を吟味して、石橋を叩いて渡るのも必要な事なのだ。

リゼット（……まだ不安です。もうちょっと確認しましょう）

【戦闘力】

石橋HP.. 8455\22000

- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。
- ・リゼットは石橋を叩いた。石橋に10のダメージ。

・孫悟空.. 3億2千万

超サイヤ人.. 160億

・孫悟飯.. 3億

超サイヤ人.. 150億

第五十七話 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦③

「いいぞお。その調子だ、どおんどん近付け。グモリー彗星よ」

夜。

皆が寝静まった頃。パラガスは一人で星の動きを観察していた。

科学者に造らせたリーダーは着々とこの星に彗星が接近している事を知らせており、パラガスは己の目的達成がいよいよ近付いている事を実感した。

「ふーっふっふ、ああーはははは、あーっはーはーはーはー、アーハハハハア！
フアアーハハハハア！」

復讐を遂げるまでにかかった年月を想い、パラガスは狂気に歪んだ高笑いをあげる。

その笑いは徐々に大きくなり、最後の方は悲願達成が近付いた喜びから殆ど泣き笑いにも等しい状態となっていた。

その姿に、たまたまその場に居合わせてしまった部下の一人であるモアが不安に満ちた声を漏らす。

「ま、まさか……」

まさかパラガス様は自分達まで一緒に消す気なのでは？

そんな不安を見抜いたようにパラガスがゆっくりとモアの近くへと歩き、声を発する。

「モア、心配する事はない。

貴様はその恐怖を味わわずに済むのだから」

それを聞いてモアは安堵した。

よかった、ちゃんとパラガス様は自分達の事を考えていてくれた。

グモリー彗星で葬られるのはあくまで王様気取りの間抜けなベジータと、その哀れな息子や同行人だけだ。

「はい、地球に移住しましても一生懸命に……」

しかし彼は、次の瞬間パラガスが手を翳した事で己の勘違いを悟る事になった。

「勘違かあんいするな」

「うっうっ、うわああああああ!!??」

宮殿にモアの断末魔の叫びが響き渡り、気弾の輝きが一瞬夜を照らす。

しかし、一つの命が消えた事に気付く者は誰もいなかった……。

★

ベジータは苛立っていた。

昨日訪れたトトカマという星では結局伝説の超サイヤ人は影も形もなく、無駄足に終わったからだ。

パラガスは一生懸命配下に搜索させているというが、それも全く役に立たない。最早パラガスはアテにならないと考えたベジータは情報を待たずして自ら宇宙を巡り、探す事を決めた。

これに慌てたのは勿論パラガスだ。

彼の計画ではグモリー彗星の衝突までベジータをここに足止めして彗星の衝突で彼を殺すつもりなのだ。

なのに今星を発たれてはその計画も台無しになってしまう。

「ベジータ王、明日まで！ 明日までお待ち下さい！」

明日になれば必ずや伝説の超サイヤ人の居場所が分かるはずですよ！」

「いえ、その必要はありません」

パラガスの声を遮り、少女の声が響き渡る。

ベジータとパラガスが視線を向ければ、そこには一体何処から出てきたのか、白い少女が凜と立っていた。

服装は普段と同じケープドレスだが、万一の事態に備えて服の重さは軽くしており、ただ頑丈なだけのドレスだ。

隣にはトランクスとピッコロが立っており、敵意に満ちた眼でパラガスを見ている。

「地球の神……！」

「パラガス、ベジータに教えてあげたらどうですか？　ブロリーがその伝説の超サイヤ人である」と

リゼットの口から出た聞き捨てならない台詞にベジータがパラガスとブロリーを見る。

「そ、そのような事があるはずがございません！　私より力の劣るブロリーが超サイヤ人などと……。ベジータ王、さあ、宮殿へ戻り下され」

「全て嘘です！　パラガスの言っている事は何もかも出鱈目だ！」

あそこにあるのは廃墟なんです!」

パラガスの苦し紛れの言い訳をトランクスが塞ぐ。

いくらベジータでも信用出来る相手がどちらかなどは理解している。

パラガスへの疑惑の視線が益々強まり、射殺さんばかりに睨む。

「騙したな、パラガス」

「……やっと能天気なお前でも呑み込めたようだな。

全てお前の息子と神の言う通りだ。こおんな最低の星には何の未練もない」

いよいよ騙しきれなくなったと理解したのだろう。

パラガスは今までの従順な態度を捨てて本性を露にし、ベジータを嘲りながら背を向けた。

「彗星が衝突する事が分かったからこそこの星を利用したのだ。

俺の狙いは北の銀河の地球なのだからな! ふぁーはっはははははは!」

振り返りながら何故か人差し指を立ててベジータを指差し、独特の高笑いをする。

更に彼は両手を広げ、演説しながら歩き始めた。

「宇宙の中で一番環境が整った美しい地球に移住し、そこを本拠地として帝国を建

設するのが俺の本来の計画なのだよ。

その為には地球を決戦の舞台にするわけにはいかんからなあ。

無傷で手に入れる為に、こおんな宮殿まで造らせてこの星まで呼び寄せたのだ。

ベジータ星の王などと、その気になっていたお前の姿はお笑いだったぜ」

ブロリーの隣まで行き、大仰に手を広げる。

一度開き直ってしまえば後は何とも清々しいものだ。

自分が既に『詰んで』いる事も知らずに彼は言葉を続ける。

「ここでお前達を殺せば俺達の敵は一人もおらん！ 北の銀河は勿論、東も、西

の銀河もわけなく支配出来、俺とブロリーの帝国は永遠ええ、いえんに不滅になるというわけ

だあ！

さあ、やれブロリー！」

パラガスがブロリーに命令を下し、リゼット達を殺させようとする。

だがブロリーは動かず、リゼットの超能力でパラガスの手に着された制御装置が破壊された。

「なっ、何て事を！ これがなくてはブロリーは……！」

ブローリーを操る為に制御装置は必須だ。

それがなくてはブローリーは衝動のままに暴れ回り、宇宙そのものを破壊し尽してしまう。

そうならば支配どころではない。

あまりに軽拳な女神の攻撃を非難したパラガスだが、次の瞬間にはその顔が青褪めていた。

何故なら――女神の手に、自分の物と全く同じ制御装置が付いているのだから！

「なっ……！」

「心配はいりません。もっと高性能なのを持っていますので。

……ブローリー！ パラガスの動きを封じて下さい！」

「はい」

リゼットの持つ制御装置が光り、ブローリーの額の装置と反応し合う。

するとブローリーはリゼットの意のままに行動し、パラガスを羽交い絞めにした。

まさかの事態にパラガスの余裕が完全に崩れ、冷や汗が滝のように流れる。

「これは一体……ブローリー、一体、どうしたというんだ……」

「この装置を設計した科学者をこちらに引き込み、ブルマに新しく造って頂きました。」

貴方の負けです、パラガス」

それは、戦いという行為を踏み飛ばしての決着だった。

戦闘そのものを成立させずに勝つ。それは間違いなく最良であり最善だ。

未来であれだけの猛威を振るったブロリーの余りに呆気ない無力化にトランクスが破顔し、リゼットを見る。

やはり彼女は凄い。あの悪魔をこうまで簡単に無力化するなんて。

これで未来は変わった。少なくともこの時間軸は救われたんだ！

そう歓喜するトランクスだったが、全く面白くないのはベジータだ。

「ちっ……下らん真似をしやがって！

こんな方法に頼らずとも、俺なら伝説の超サイヤ人をぶっ殺せる！」

そう言うや、ベジータの目が一瞬赤く光り、黒いオーラに包まれた。

この現象には覚えがある。過去何度か煮え湯を飲まされた、あの謎の凶悪化だ。そしてそのオーラに包まれたベジータは思いもよらぬ行動に出た。

それこそリゼットすら予期しなかった余りにも突飛で、そして馬鹿馬鹿しい行動だ。

それが余りにも考えなしな行動すぎてリゼットすら反応出来ず、そしてそれが最大の失敗であり致命傷となった。

——ベジータはブロリーの額に向けて気弾を発射し、制御リングを破壊してしまっただ。

「——!!!? ベ、ベジータ! 一体何を!?!」

リゼットが狼狽した声でベジータの愚行を非難する。

いや、違う。非難すべきはベジータではなくあの魔族達だ。

気を辿れば、遠くに一瞬だけ魔族の姿が確認出来たが、彼女は悪戯が成功したように微笑むと姿を消してしまった。

焦燥するリゼットの前でベジータは腕を組んだまま、まるで悪びれずに答える。彼はきつと、自分が操られた事にすら気付いていない。

「下らん物を破壊したまでだ。そんな玩具に頼らずとも、伝説の超サイヤ人など俺一人で始末出来る!」

「ば、馬鹿！　それが出来ないからこうして……」

「黙れ臆病者が！　このような勝ち方は俺達サイヤ人の勝ち方ではない！」

リゼットの用意した策は味方によって完全に撃ち碎かれてしまった。

だがこれはベジータの精神状態を把握していたにもかかわらず軽視していた彼女の失態だ。

超サイヤ人になったばかりでの18号戦の敗北。壁を越えたばかりの戦いでこのボージャックへの完敗。

その二つの要因がベジータのただでさえ少ない余裕を完全に失わせていた。

だからベジータはこんなにも簡単に操られてしまったのだ。

……いや、操られていなくてもあるいは、今のベジータならば本当にこのくらいはやっていたかもしれない。そのくらい彼は追いつめられていた。

リゼットはもっとベジータを気にかけておくべきであった。

プライドに亀裂が走っていたベジータならばこのくらいしても不思議はないのだから、先に気絶させるなり問答無用で地球に帰すなりしておけばよかったのだ。

だが結局のところそれは後の祭りでしかなく、全ては遅きに失している。

制御リングを砕かれたブロリーの形相が変わり、トランクス達が揃って顔を青褪めさせた。

「ベジータ……貴様、責任取れよ……!」

ピッコロが齒を食い縛り、怒りの声をあげる。

事態はここに最悪の展開を迎え、ブロリーを抑える術は失われた。

よりにもよってブロリーの額に付けているリングを砕かれたのではどうしようもない。子機があっても親器がなくてはどうしようもないのだ。

「ご、悟空君、聞こえますか! 作戦は失敗です!

至急、皆を連れて新惑星ベジータに来て下さい!」

リゼットは慌てながら地球に念話を飛ばし、悟空をこの場所へと呼び寄せる。

すると次の瞬間には出待ちしていた悟空がターレスと悟飯、更に精神と時の部屋での修行を終えたナッパを連れて瞬間移動で現われた。

ブロリーから感じられる気の強大さに悟空が面白そうに笑いながらも冷や汗を流す。

「カカロットオ……!」

悟空の姿を認めたブロリーが全ての敵を無視して悟空へと向かって歩む。

視界にいるはずなのに無視されたベジータは怒りを露にし、ブロリーへと飛び蹴りを放った。

回避も防御もせぬブロリーの首筋にベジータの全力の蹴りがこれ以上ないほどに直撃し——だが、まるで微動だにしない！

「っ!? くっ………! はああああ!」

今度は気弾！

あらん限りの力を込めて気弾を投げ、ブロリーに直撃させる。

爆煙が上がり、パラガスが「ドォォラ!」と叫びながら余波だけで転がった。

だが肝心のブロリーは何事もなかったかのように煙の中から姿を現わし、攻撃を行ったベジータへ振り返りすらしない。

ベジータなどまるで相手にもしていない。視界に入っているが存在を認識していない。

攻撃されたという事実すら気付いていない。

人間が歩いていて、針も持たぬ虫に体当たりをされたとて気付く事はない。

それと同じだ。ブロリーにとってベジータとは、攻撃されたという認識すら抱けぬほどに力の差が開きすぎている相手なのだ。

その事を悟ってしまったのだろう。ベジータの全身から力が抜け、戦意が失われる。

「カカロットオオオオオ!!」

ブロリーが叫び、黄金の輝きが彼を満たす。

狂気を野生を殺意を敵意を暴威を破壊を暴力を力を怒りを憎悪を。

彼が内に秘めるその計り知れない野獣性を抑える鎖はもう存在しない。

在るがままに、殺戮と血を好む伝説に相応しい狂戦士へと変化する。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

瞬間、ブロリーが“変わった”。

筋肉が膨れ上がり、明らかに身体のサイズが変わり、その瞳は理性なき白眼へ。

黒髪は黄金に逆立ち、全身にエネルギーの余波たるスパークを纏い、立っている場所にクレーターを穿ち、伝説が降臨する。

「く、くくく……はははははッ!!」

先程までの静けさが嘘のように溢れる破壊の意志。

壊す事に意味などない。

ただそう生まれたのだから、そう壊す。

壊す存在として生を受けたのだから人も木々も大地も空も、惑星も銀河すらもを破壊し尽す。

いわば『暴力』という概念の擬人化。壊す事しか知らぬ怪物。

それがブロリーという男の本質であった。

「ハァー、ハァー……伝説の……超サイヤ人……！」

ベジータは既に黒髪に戻ってしまっていた。

本能的に感じ取ってしまったブロリーとの差に、最早戦う意志すら沸かず、身体はその意志を反映して超サイヤ人化を解いてしまったのだ。

そんなベジータを眼中にも入れずブロリーは悟空を指差す。

「カカロット、まずお前から血祭りにあげてやる」

そう言うやブロリーは巨体に似合わぬ速度で突進した。

しかし悟空も精神と時の部屋の修行で力を大きく増している。

ブロリーの初撃を何とか回避し、戦場を空へと移す。

それを追ってブロリーが飛び、悟空を援護する為にターレス、ピッコロ、ナツパ、トランクス、悟飯、リゼットも空へと飛翔した。

唯一人残されたベジータは膝を突き、全身をガクガクと震わせている。

「で、伝説の……超サイヤ人……！」

こ、殺される……奴は伝説の超サイヤ人なんだあ……！」

最早先ほどまでの自分一人で倒すと息巻いていたベジータはそこにいない。

たった二回の攻撃ではあったが、それだけでブロリーの強さを理解してしまった。勝てるはずもない実力の差を思い知ってしまった。

ベジータは疑いの余地なく、戦闘の天才である。

だからこそ分かってしまうのだ。自分と相手の間にある、どうしようもない差が。頭の中が真っ白になり、もう何も考える事が出来ない。

それほどにブロリーという存在は大きすぎた。

「純粋なサイヤ人の中でもベジータ、お前だけが本能的にブロリーの強大さと極悪さをキャッチ出来たようだな。

だがもう遅い。ブロリーが俺のコントロールから外れ、伝説のサイヤ人になってしまった以上、ブロリーと二人で全宇宙を支配しようとした俺の計画も何もかもお終いだ。

地球は勿論、宇宙を全て破壊しなければブロリーは治まらない……」
パラガスもまた諦めたように呟き、ブロリーの戦いを見守る。

ブロリーに勝てる存在などいるはずもなく、止める手段も失われた。
ならばもう終わりだ。宇宙はブロリーに破壊されるしかない。

その言葉を聞きながら、ベジータはただ震え続けていた。

【戦闘力】

ナッパ…9400万

大猿パワー…9億4000万

黄金の髭…47億

精神的に不安定なベジータの目の前でこんな『勝ち目がないので封じます』みた

いな策を実行すれば、そりゃこうなるよねというお話。

リゼットは石橋を叩く前に、向こう岸をファイナルフラッシュで消そうとしている王子をどうにかすべきだったのだ……。

くもしもブロリーがニコニコ仕様だったら

ブロリー「カッ!」

リゼット「……は？」

ブロリー「prprしたいなあ……」

親父い「銀河の中で最も美しい地球の女神をわけなく調教しに来たサイヤ人のパラガスでございます。腐☆腐。

女神よりも弱いベジータに用はありませんよ」

ブロリー「気が高まるう、溢れるう」

リゼット「や、やだこの人達……気持ち悪いっ……!!」

ブロリー「(・ω・F)」ションボリー超化解除

親父い「DOOR!」

このブロリーは仲間になる(確信)

第五十八話 燃えつきろ!! 熱戦・烈戦・超激戦④

シャモ星「俺は帰ったら結婚するんだ、こんな所にいられるか、俺は帰るぞ！ステーキだって一口しか食べてないし、パインサラダを食べる約束もしている。だから別に……アレを倒してしまっても構わんのだろう？

もう何も怖くない！

ところで北斗七星の側にある小さな星が綺麗だなあ」

「やめろ！ 勝てるわけがない！ あいつは伝説のスーパーサイヤ人なんだぞ！」
叫ぶベジータの視界には今、絶望的な戦いに挑む戦士達の姿が映っていた。
悟空や悟飯が必死に戦ってはいるものの、ブロリーとの差は余りに歴然だ。

リゼットの技術も今回ばかりは相手が悪く、先ほどから上手くブロリーの攻撃を
いなしつつカウンターを決めているがまるで効果がない。

それも当然だ。何せ相手は伝説の超サイヤ人。勝つ勝たない以前に、そもそも勝

負が成立する次元にないのだ。

絶望するベジータへとパラガスが近付き、低く笑う。

「よく見ろ。地獄に行ってもこんな面白い殺戮ショーは見られんぞ。

ウアハハハハハハ！」

彼はブロリーの勝利を微塵も疑っていない。

それはそうだ。

負ける要素がどこにもないのだから、疑う方が無理な話なのだ。

——生身の……否、生物の手応えじゃない！

ブロリーへ幾度となく攻撃を打ち込みながら、リゼットは心の底からブロリーという男の人間離れならぬ生物離れを実感していた。

確かに生き物の肌を叩いているはずなのに、この硬質な感触は何だ。

まるで鉄。今より260年以上も昔、ただの村娘だった頃の力で鋼鉄を叩いているような、攻撃する事自体を諦めなくなるような絶望的な堅さ。

効いていない、という事が分かってしまう。

リゼットの脳裏では今、どれだけ厚いかも分からない鉄の壁を必死にペチペチと叩いている、そんな無駄な努力をしている自分の姿が描かれていた。

そんなイメージを描いてしまうほどに、このブロリーという男が堅すぎるのだ。

「ハハハハハハハ!!」

「……っ」

振り回されるブロリーの豪腕を余裕を持って避ける。

攻撃そのものは大振り。速度こそ並外れているが、どれもモーションが無駄に大きいテレフォンパンチだ。

いかに速度があろうと視線や前動作、筋肉の動きで容易く見切る事が出来る。

充分な余力を持ってカウンターに転じる事も容易い。

拳を掻い潜り顎に掌底を当て、ストレートパンチを避けて人中を打つ。

人体急所は狙えるだけ狙った。鞭打も使った。金的すらも狙った。

だが——効かない！ ダメージなどまるで通らず、ブロリーは即座に攻撃に転じてくる。

いかに強大な気で攻撃を弾こうとも、それでも皮膚という人体最大の器官を狙っ

た鞭打が効かない道理はない。

効くはずだ。皮膚があり、痛覚がある生物ならばどれだけ強かろうと鞭打は絶対に通じる。

なのに効いていないのだ。まるで痛覚そのものが存在しないかのように、ブロリーは微動だにしない。

眼球を潰そうと指突すれば指の方がダメージを受け、耳に指を入れて気弾で直接脳の破壊を試みても鼓膜すら突破出来ない。

「フン！」

ブロリーの放った気弾を避ける。

目標を外した気弾はそのままシャモ星人達の作業場に吸い込まれるように落ちていき、大勢のシャモ星人達の断末魔が響き渡った。

これ以上やらせるものかとリゼットが掌打を叩き込むが、まるでブロリーには通らない。

コルド大王やクウラにもやった、気を浸透させて内部からダメージを与える掌打のはずなのだが、厚すぎる筋肉と気の壁に阻まれて気が送り込めないのだ。

「その程度のパワーで俺を倒せると思っていたのか？」

力任せの蹴りを空中で更に跳躍して避け、ブロリーの頭に手を乗せて前方倒立回転。

彼の背後へと陣取り、振り向きざまに裏拳を放ち彼の背を叩く。

ブロリーも同じく裏拳を放ちながら振り返るが、リゼットは身を屈めてそれを避け、ブロリーの攻撃モーションが終わるよりも早く飛び上がるように掌打を見舞った。

避ける、当てる。避ける、当てる。

零距离で幾度となく繰り返される攻防は一見すると互角に見えるだろう。

だが互角ではない。リゼットは一撃も当たっていないが、逆を言えば一撃でも貰えばそこで勝負が終わる。

一方ブロリーは既に千は打たれているが、まるで効いていない。ダメージが通っていない。

攻撃の当たらぬリゼットと攻撃の効かぬブロリー。傍から見れば互角でも実際の勝敗は火を見るよりも明らかだった。

一方悟空達はこの攻防を少し離れた位置で見守り、攻撃の隙を窺っている。

気弾などで援護をすればそれはリゼットの邪魔になってしまいうし、かといって近付いてもリゼットのようにブロリーの攻撃をいなす事は彼等には出来ない。

しかしそんな悟空達に業を煮やしたのだろう。ブロリーはリゼットを無視して悟空へと狙いを変えた。

「お前たちが戦う意思を見せなければ、俺はこの星を破壊し尽くすだけだあ！」
リゼットの気円斬が喉に当たる——が、知らぬ。

効かぬ攻撃など無いに等しい。

肌の一枚すらも斬れていないブロリーは悟空目掛けて加速し、一瞬で間合いを潰す。

そして零距离の気弾で悟空を吹き飛ばし、墜落していく彼を追って降下した。
リゼットとターレス、ピッコロは気弾を発射するもブロリーはこれを見無視。

背中に気弾の直撃を浴びながらも気にした様子すらなく悟空を追跡した。

「冗談じゃねえぞあの野郎……俺達の攻撃が効いてねえのか!？」

「今までに感じた事のないような凄まじい気だ。すげえ化物を相手にする羽目に

なっちまったな」

「とにかく追いましょう」

ターレス、ピッコロ、リゼットは敵の強大さに戦慄しながらも後を追う。

その後にトランクス、悟飯、ナッパも続いた。

ふと、リゼットはナッパのヒゲが金色に染まっている事に気が付いた。

頭髮がないので分かりにくかったが、どうやら彼も無事に超サイヤ人になる事に成功したらしい。

普段ならば嬉しい新戦力のはずだが……今だけは、それでもまるで勝てる気がしない。

ナッパが弱いのではない。超サイヤ人が一人増えても誤差に過ぎないほどに、ブロリーが強すぎるのだ。

追いついた先では、この惑星の宮殿を造る為だけに惑星シャモから連れてこられたシャモ星人達が恐怖の視線でブロリーを見上げており、ブロリーもまた彼等に覚えがあったらしく口角を吊り上げていた。

「惑星シャモから連れてこられた奴隷共か。」

いつかは自分達の惑星に帰りたいと、星を眺めていたな……」

洗脳されている間の記憶も残っているらしい。

ブロリーは彼等へと背を向け、右手に気弾を創り出す。

「いつかは帰れるといいなあ」

そう言い、振り向きながら気弾を放った。

シャモ星人を皆殺しにするつもりだろうか？

否、放たれた気弾はシャモ星人達に当たる直前で軌道を変更し、空へと飛んで行った。

無論ただ空へ逸らしたのではない。その飛ぶ先には一つの惑星が浮かんでいる。

「あ、シャモ星……」

シャモ星人の子供が呟いたように、その先にあったのはシャモ星であった。

ブロリーの気弾が直撃してしまったシャモ星は一瞬輝き……そして爆音を響かせて消滅した。

「あ、あ……あああああああ!?!」

シャモ星人達が絶望の声をあげ、消えてしまった己の母星……があった空を眺め

る。

今までずっとあの星を見てきた。

きつといつかは帰れるのだと思う事だけが希望だった。

例えこんな星に連れてこられても、自分達の星が変わらぬ姿で空にある事だけが救いだった。

それが今、悪魔の気紛れによって影も残さず消されてしまったのだ。

泣き崩れるシャモ星人達を見て、ブロリーは心底可笑しそうに高笑いをあげる。

「あ、悪魔だ……」

その余りの非道ぶりに悟飯が震え、彼に最も相応しい呼び名を無意識に呟く。

「あんな奴を生かしておいたら宇宙は破壊し尽くされてしまう！」

破壊し尽くされてしまった未来を思い出しながら、トランクスが怒りの声をあげる。

未来ではかろうじてリゼットが刺し違える事で宇宙は救われた。

だがこの世界ではそうなるという保証はないし、そんな事をさせるつもりもない。必ず、皆で生きてこの絶望を乗り越えると誓ったのだ。

「絶対に勝たなきゃなんねえ!」

最後に悟空が叫び、3人が共に黄金のオーラを纏って飛び上がった。

悟空が正面から蹴りを放ち、トランクスと悟飯が両側面から殴りかかる。

だがブロリーはどれも気にせず突進し、体当たりで3人の身体を撥ね飛ばした。尚も追撃しようとするが、そこにリゼットが割り込みをかけてブロリーの腕を獲り、重力と重量を無視したように放り投げる。

だがブロリーは空中で1回転し、悟空へと残虐な笑みを向けた。

「カカロット、息子がカワイイかあ?」

その台詞だけで悟空は悪魔の次の狙いが息子であると悟った。

悟飯は精神と時の部屋の修行で確かに強くなった。

だがやはり彼は子供だ。パワーはあっても技術がまるでない。

悟飯がブロリーの猛攻に曝されたら最後、リゼットのように凌ぎ続けるなんて芸当を出来るわけもなく縊り殺されてしまうだろう。

故に悟空は悟飯を突き飛ばして逃げるように叫び、時間を稼ぐべくブロリーへと挑みかかった。

「だありゃあああ！」

「フッ、ハハハハハ！」

悟空の決死の突撃を嘲笑い、豪腕の一振りで悟空を吹き飛ばす。

入れ替わるようにターレスとトランクスが飛びかかるが、これもまるで意に介さない。

二人の頭を驚づかみにし、地面へと叩き付けた。

それだけで大地が陥没し、二人の身体が地面へと埋もれてしまう。

続けてナツパが殴りかかるが、殴られている事にすら気付かずにブロリーが腕を薙ぐ。

たったそれだけの事でナツパの巨体が空を舞い、岩へと顔から突っ込んでしまった。

「ジュウエェン!!」

ピッコロが裂帛の叫びをあげながら上空から強襲し、拳を肩へ打ち込む。だが通じない。

ブロリーの頭突きに呆気なく弾かれ、回し蹴りで地面を無様に転がる。

それを追ってブロリーが突進し、慌てて止めに入ったトランクスとターレスは何の障害にもならずラリアットで吹き飛んだ。

そしてブロリーは倒れているピッコロの腹を蹴り上げ、宙へ浮かばせた。

「ぐほああっ!!」

唾液を巻き散らしながら悲鳴をあげるピッコロへ、更に追い討ち。

気弾を放ち、またもピッコロの腹へ当てて彼を遙か彼方へと吹き飛ばした。

「ぐはっ!」

ピッコロは丁度ベジータがいる付近へと墜落し、爆発が響く。

ブロリーはそれを見届ける事もなく悟飯を追い、逃げている最中の彼へと追いつく。

そして驚いている悟飯の頭を鷲づかみにし、壁へめり込ませた。

「うあああああ!」

「フハハハハ!!」

悟飯の頭で廃墟のビルを削り、腕力に物を言わせて悟飯を投げ飛ばす。

たったそれだけの攻撃で意識を断ち切られてしまった悟飯は金髪から黒髪へと戻

り、壁へと衝突する。

さらに威力に耐え切れずに壁が崩れ、地面へと落下した悟飯はたまたま壁から突き出ていた鉄骨に引っかかる事で吊り下げられるような形になってしまった。

その余りに無防備な少年へとブロリーが手を翳すが、やっと追いついてきたリゼットがその手を掴み、またも投げ飛ばす。

すると丁度地面へとブロリーの手が当たり、誤爆。ブロリーは自らの気弾を自分で浴びる事となり、ここでもうやく戦闘が始まってから初のダメージが入った。

「ヌウッ……無駄な事を！」

ブロリーがすぐに立ち上がり、リゼットの胴ほどもある豪腕を連続で繰り出す。だがどれも力任せの攻撃だ。リゼットならば冷静に対処すれば避けられぬ攻撃ではない。

とはいえ避けれるだけであり、リゼットの攻撃は相変わらずブロリーに通らない。つまりは先ほどの焼き直しであり、状況は全く改善していなかった。

それどころか戦闘が長引くほどにリゼットの疲労だけが溜まっていき、不利に追い込まれていく。

(相変わらず何て堅さ……! けど、こうして時間を稼げば悟空君達が回復する時間も稼げるはず!)

直撃は避ける。

防御もせず、専念するのは回避のみ。

ブロリーという激流を静水となって受け流す事だけに全身全霊を注ぎこむ。

終わりなくいつまでも続く攻防。

ブロリーにとってこれは不可解な現象であり、そして酷く苛つく戦いであった。

強さそのものは他の屑共と何も変わらない。非力な相手だ。

だが当たらない。まるで空でも相手にしているかのように悉く攻撃が空振り相手の攻撃ばかりが一方的に当たる。

痛みなど全くないが、それでも腹は立った。

負ける要素などなく、必ず勝てる相手にいつまでも手間取るという不可思議。それがブロリーの怒りを煽った。

そして怒れば怒るほどに益々攻撃は大振りになり、尚も当たらなくなる。

「んんん…んんんんん…!」

怒りの唸り声を発し、痼癰を起こしたように暴れる。

だがやはり当たらない。拳も蹴りも気弾もその全てを避けられる。流される。

いよいよブローリーのストレスが最高潮に達しようとしたとき、ふと彼は視界の端に悟飯の姿を見付けた。

それは止めを刺し損ねたカカロットの息子であり、そして彼女の仲間だ。

その姿を認めた瞬間、ブローリーの足りない頭に悪魔の策略が思い浮かんだ。

彼はそれを実行するべく、早速リゼットに背を向ける。

そして驚く彼女を無視して、悟飯へと気弾を発射した。

「っ!？」

リゼットは驚愕に目を見開き、咄嗟に悟飯の前まで飛んだ。

今の気絶している悟飯がこれの直撃を浴びるのは不味い！

バリアを前面に最大出力で展開し、ブローリーの気弾を防ぐ。

凄まじい威力だ。だがそこまで力を込めていなかったのか防ぎ切れない程ではない。
い。

……そう、この気弾は防がれてもいい。元よりこれで倒す気などないのだから。

リゼットが気弾を必死に防いでいる隙を突き、ブロリーは彼女の横へと飛翔した。

「!! しま——」

「ファハハハハハハ!!」

ブロリーの豪腕が風を切り、リゼットの腹へめり込んだ。

凄まじい衝撃と激痛が腹を中心として全身に掛け巡り、内臓が全て潰れてしまったかのような錯覚を覚える。

リゼットは端正な顔を歪ませて吐血し、壁に叩きつけられた。

かろうじて脱力は間に合った。威力のほとんどは流している。

だが……動けない。膝が震え、全身から力が抜けていく。

「あ……う、あ……」

まるで糸が切れたように膝を突き、一步一步近付いてくる悪魔を見る。

目が霞み、意識が遠のく。

人間のものとはとても思えない、人造人間のような足音を響かせながらブロリーが近付いてくるが立つ事も逃げる事も、戦う事も出来ない。

そのリゼットの危機に悟空が駆け付けるが、それが果して何の意味を為すのだろ

う。

否、何も出来ない。

リゼットよりはかなり——それこそ戦闘力を思えばおかしいくらいに打たれ強い彼だがブロリーが連続で発射する気弾を前にガードしながら近付くだけで精一杯だ。

「こらあ！ 少しは手加減しろお！」

「手加減って何だあ……？」

余りの力の差に悟空らしからぬ弱音が零れるが、残念ながらブロリーは手加減という言葉など知らない。

そもそも誰からも教わっていないし、覚える気もない。

だから気弾を撃ち続け、それでも近づいて来る悟空へ一際強力な一撃を用意した。
「とっておきだあ……！」

「へへっ……おめえちよっとしつけえぞお……」

ここまで力の差があると笑うしかないのだろう。悟空は薄ら笑いを浮かべながらブロリーの気弾を浴び、空高く吹き飛んで行った。

あれで死なないとは彼も大概化物染みている。少しはその打たれ強さを分けて欲しい、とりゼットは心から思った。

自分など既に、こうして意識を繋ぎ止める事すら限界を迎えそうだというのに。

「させるかあああ！」

今度はナツパがりゼットを救うべく突撃するが、力の差は悲しいほどに絶望的だ。背後からブローリーに飛びついて裸締に持ち込むが、ブローリーは速度すら落とさずに前進を続けた。

しかし、『背中になんか不愉快なものがくっ付いている』くらいには感じたのだらう。

彼はおもむろにナツパの顔を掴むと、乱雑に彼を地面に沈めた。

それでもナツパは立ち上がり、あらん限りの力を込めてブローリーへ挑む。

「があああああーっ!!」

刹那。ナツパの背後に大猿の幻影が現れてブローリーの胸板を叩いた。

その一撃はブローリーに痛手を与えるほどではなかったが、しかし悟空達の攻撃と異なり、一瞬のみとはいえ彼の身体を揺らした。

僅かではある。万分の一にも等しい弱いものである事は間違いない。

だが確かに……そう、確かにナツパの拳はブロリーにダメージを刻んでいた。

超サイヤ人のパワーと大猿のパワー。ナツパはそれを一瞬とはいえ同時に発動したのだ。

そして、悟空は吹き飛びながらもその光景を見ていた。

ナツパが見せた姿に一つの可能性を感じ——しかし、答えを得る前に気弾の爆発に吞まれ、意識を失った。

「クズがあ……！」

僅かとはいえ、ダメージを与えられて気に障ったのだろう。

ブロリーは今まで以上の威力でナツパを殴り、更に頭を掴んで放り投げ、気弾を叩き込んで吹き飛ばした。

そうして邪魔者を排除してからリゼットへ掌を翳す。

（……………あ……………もうこれ、だめです……………いしきが……………）

今度こそ殺される。

リゼットはそう覚悟し、静かに目を閉じた。

どうやら、この根性なしの身体もここが限界らしい。

意識が急速に遠のき、とうとうリゼットは地面へと倒れてしまった。

だから彼女は知らない。

自分が止めを刺される、まさにその間際に一人の男が間に割り込んでいた事を。

「また一匹、虫ケラが死にに來たか……」

「ふふ。では君が、私のウォーミングアップを手伝ってくれるのかな？」

——本来の歴史では決してあり得なかった激戦が、ここに始まろうとしていた。

リゼットのHPが50%を切ったので緑色のセミがエントリー！

【戦闘力】

ナツパ…9400万

大猿パワー…9億4000万

黄金の髭…47億

黄金ヒゲ猿…470億

(一瞬のみ)

第五十九話 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦⑤

「もう駄目だ、おしまいだあ……殺される、みんな殺される……。」

逃げるんだあ……勝てるわけがない……」

悟空達の必死の戦い、そして敗北を見届けたベジータは地面に手を突いて絶望の声を漏らし続けていた。

闘志など湧きあがるはずもなく、それどころか自分よりも強いと認めざるを得ない今の悟空やリゼットすらが容易く倒された事実が一層彼の戦意を奪い取る。

だがそんな彼の髪をピッコロが驚掴みにし、強引に起き上がらせた。

「何を寝言を言っている！ 不貞腐れてる暇があったら戦え！」

「だ……駄目だあ……貴様には分からないのか。」

やはりあいつは伝説の超サイヤ人……俺達が勝てる相手ではなかった……」

「チッ、何がサイヤ人の王子だ！」

ピッコロはベジータへ軽くない失望を感じていた。

身勝手で気に食わない奴ではあったが、それでも戦闘におけるその天才性は認め

ていたのだ。

だというのに今のこいつは何だ？

少し敵が強ければそれで諦めるのか。戦いすらしなのか。

戦闘を好む全宇宙最強の一族は一体どこに消えたのだ。

結局のところ、ベジータが望んでいたのは『闘い』ではなかったのだろうか。

求めていたのは『気持ちのいい勝利』だったのか？

勝敗の分らない闘争に身を委ねる気など最初からなく、恐怖が鎌首をもたげればそこで戦闘を放棄してしまう……その程度のプライドでしかなかったのか、と失望した。

だからピッコロはわざと聞こえるように舌打ちをし、ベジータの髪を掴んだまま空を飛んだ。

本人の意思など関係ない。折角納まりかけていたものを無理矢理ここまで引っ掻き回したのはこの男だ。

ならば戦いぐらいはして貰わなければこちらの気が済まないのだ。

「はっ、放せえ……！」

口では抵抗するものの、身体は相変わらず動かない。

とことん恐怖で力が抜け切っている王子を運び、ピッコロは再び戦場へと向かって行った。

★

ブロリーに敗れたりゼットへと止めの気弾が迫る。

今のリゼットにはもう、それを防ぐ力すら残っていない。

だが、このまま彼女の命を奪うかと思われた気弾は横から割り込んで来た別の気弾によって弾き飛ばされて、遠くで爆発してしまった。

一体どこの誰が邪魔をしたのか……忌々しく思いながらブロリーが気弾の飛んできた方向へと目を向け、視線を少しずつつ上へ移動させながら邪魔者を探す。

それがいたのは廃墟の中でも一際高い塔の上、針のように尖った最頂部の上だ。そこで緑色の異形が腕を組んで佇んでいた。

リゼットが止めを刺される直前に割り込んだのはセルであった。

彼は腕を組んだまま地面に着地し、余裕の笑みを浮かべたままリゼットを護るように立ち塞がる。

その姿を前にブローリーもまた余裕を崩さない。彼からしてみれば雑魚がいくら増えようが同じ事でしかなく、一番面倒臭かった女が倒れた今、気にする程ではないのだ。

「また一匹虫ケラが死ににきたか」

「なるほど……これはまた、話に聞く以上の化物のようだ」

「俺が化け物？ 違う、俺は悪魔だ」

「ふふ。では君が私のウォーミングアップを手伝ってくれるのかな？」

セルが腕組みを解き、ブローリーが笑みを崩さぬままそれを見る。

それは余裕であり、油断だった。

一瞬にして姿を消したセルがその油断を突いてブローリーの前へと現われ、肘打ちを顔面へと叩き込む。

「はああああッ!!」

蹴る、蹴る、殴る、蹴る、突く！

目にも止まらぬ速度でセルの連撃がブローリーへ入り、その身体を後方へと押しやった。

ダメージは浅く、だがゼロではない。

それは幾万分の一のダメージに過ぎぬものでしかないが、それでも確実にダメージが通っているのだ。

ブロリーはその事に気付き、初めて『敵』が現れた事を理解した。

「フッフフ、そうこなくちゃ面白くない！」

ブロリーが表情を好戦的に歪め、お返しとばかりに殴りかかった。

だがセルは、まるで先ほどまでのリゼットのようにブロリーの豪腕を流して避ける。

そればかりか絶妙のタイミングでカウンターを入れ、そこから更に流れるように拳を連撃で叩き込んできた。

「ヌウ!？」

「確かにパワーは大したものだ。だがテクニックが伴っておらん」

セルの蹴りがブロリーの顎を跳ね上げ、今度は足を振り下ろしての踵落とし！

ブロリーの頭部へ踵をめり込ませ、着地と同時に右脚を軸に回転。

加速を乗せた左の回し蹴りを横面へ放ち、ブロリーのラリアットを残像で避けた。

今度は背後！ 後ろから気弾を放ち、背中で連鎖爆発させる。

ブロリーが振り向いた時にはもうおらず、またも背後へ回りこんでいる。

「剣よ在れ！」

セルの掛け声と同時に空に顕現するのは百を超える気の刃だ。

リゼットが得意とする気の固定化を用いて生み出した剣の雨を降らし、ブロリーを埋め尽くす。

「かめはめ波!!」

そこに追撃。

両手に集約した気の奔流でブロリーを呑み込む。

現時点においては悟空のそれすらも上回る超出力の一撃だ。

その威力は星の表面をも削り、地形すらも変化させる。

だがかめはめ波が終わると同時にブロリーが煙の中から姿を現し、セルの頭を掴んだ。

「ぬおっ！」

「何なんだあ？ 今のはあ？」

避けようのない姿勢に持ち込んでからのアッパーカット!

セルは回避不能と判断するや頭の核を素早く下半身へと移動させ、直後に頭部が破碎された。

飛び散る破片。紫色の血液。

だが吹き飛んで行った頭なしのセルは空中で一回転して着地すると、何事もなかったかのように頭を再生させた。

「ふふふ、残念だったな。生憎私にはピッコロの細胞も入っていないな……この程度では死なんのだよ」

「屑が……」

「とはいえ、流星の強さというべきか。このままでは私が不利だな」

セルは両手をクロスし、気を高める。

全身を青白いスパークが包み、惑星全体がセルのパワーに呼応して震える。

——解放。

今までよりも更に強烈な輝きがセルを包み、スパークが迸る。

サイヤ人と言うならば超サイヤ人2、とでも言うべき壁を完全に越えた先の位

階。

今、セルは強さのギアをそこまで上げたのだ。

この状態のセルにあえて名を付けるならば、パーフェクト・セルとでも呼ぶべきだろうか。

「さあ始めようか！ 素晴らしい戦いを！」

「ウオオオオオオオ！」

セルとブロリーが同時に飛び出す。

パワーと気の強大さは依然ブロリーが勝る。

だがセルには速度と、リゼットの細胞から得た技術がある。

それはまさしく暴力と武の闘い。力と技の闘い。

一つ上の位階の戦いが、倒れているリゼットの前で展開され、両者の拳と蹴りが残像を残して幾度も交わされる。

打撃音が後から響き、そして両者の姿が消えた。

「ウオオオオオオオ!!」

ブロリーの雄叫びが響き、空が揺れる。

「ぶるうわああああ!!」

セルの咆哮が木霊し、空が爆ぜる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

二人が叫び、姿を現すや空の上で雷すら発生させながらの攻防を繰り広げた。

戦いの余波だけで建物が崩れ、ブロリーの空振りだけで大地が割れ、セルの空振りで雲が吹き飛ぶ。

セルの攻撃は技と手数。熟練の技能と常軌を逸した速度で攻撃に攻撃を重ね、ブロリーの耐久の上から強引に削り続ける。

ブロリーの攻撃は純粹な暴力。技など知らぬし要らぬ。どれだけの過程を経ても一撃が当たればそこで勝負を引っくり返す。

たとえ再生をしてもダメージを消せるわけではなく、セルの再生力の上から強引に命を削る。

「はあああッ!」

セルが更に加速し、緑の閃光と化してブロリーを滅多打ちにした。

上下左右前後! あらゆる箇所からセルが飛来し、攻撃を加えて離れていく。

ブロリーが反撃した時にはもうセルはおらず、また閃光が奔ってブロリーを打つ。更にセルは一度空中で止まると、己の身を4つに分裂させた。

天津飯の技である『四身の拳』だ。

その技は本来、己を4つに分ける代わりに戦闘力も4分割されてしまうという重大な欠陥を持つ。

だがセルはその欠陥のみを解消し、術者本人よりも完璧に技を使いこなしていた。つまりデメリット無し。力を落とす事なく万全の力を持ったセルが4人現れたのだ。

四条に増えた閃光が縦横無尽に翔け巡り、ブロリーを四方八方から攻撃する。

これぞまさに数多の細胞を結集したセルだからこそその戦いだ。

孫悟空のパワーとスタミナ、俊敏性。孫悟飯のセンス。ピッコロの再生力。天津飯の技。

そしてリゼットの武と超能力。

その全てを高次元で兼ね備え、欠点は解消済み。あらゆる点において穴はなく、まさに完璧と呼べる戦闘バランスを誇っていた。

「太陽拳！」

セルのうちの一体が眩い光を放ち、ブロリーの視界を塞ぐ。

その隙を狙い三体のセルが同時に指先を立てて気を集中させた。

「魔貫光殺砲！」

螺旋を描きながら直進する魔の輝きが三つ、全く狙いを違わずにブロリーの胸へと着弾した。

だが貫けない。余りに強固過ぎる筋肉の壁が閃光を阻み、心臓へとダメージを伝えない。

セルは小さく舌打ちをすると再び閃光と化し、ブロリーを強襲した。

四体のセルの連携はまさに完璧だった。

全てが自分だからその阿吽の呼吸。息のあったコンビネーション。

ブロリーが攻撃すれば、攻撃対象から外れているセルが妨害して攻撃を逸らし、攻撃対象のセルは平然とカウンターを決める。

ブロリーが何もしなければ4体で怒涛の連撃を叩き込み、更にブロリーを追い詰める。

その見事な戦いぶりにベジータを運んできたピッコロは呆然とし、ベジータの髪を掴んだまま戦いに魅入っていた。

だがブローリーを恐れるベジータは恐れているからこそ、一つの事実気付く。

「だ、駄目だ……やはり勝てない……逃げるんだ……」

「どこへ逃げても同じだ。奴を倒さん限りこの宇宙に未来はない！」

「分からないのか？ や、奴の気は落ちていない……それどころか上がり続けている……」

やはり伝説の超サイヤ人……勝てっこない」

「そこまで性根が腐っていたとはな！ 消え失せろ！ 二度とその面見せるな！」
ベジータはもう駄目だ。

ピッコロはそう悟り、ベジータから手を離して捨てた。

そして悟空達を救うべく、仙豆を握り締め飛翔する。

勝てる勝てないではない。例え勝てないと分かっているも挑まねばならない時があるのだ。

そのピッコロの背を見ながらベジータは考える。

（何故なんだ……何故あいつらは奴に立ち向かうんだ……。

勝てるわけのないになぜ戦うんだ……何故……）

ベジータの消えかけていたプライドの炎。

それが今、ゆっくりと点火されようとしていた。

「ぐ、う……いつつ……っ。

お、おい、神さんよ、生きてるか？」

セルがブロリーと戦っている時、リゼットの元にはようやく歩ける程度まで回復したターレスが現われていた。

彼もまたサイヤ人。打たれ強さは並ではない。

だが決して打たれ強いわけではないリゼットは返事をする事も出来ず、その瞼は固く閉じている。

ターレスは彼女を抱えると、その腕に指を当てて脈を測った。

「気は感じられる……傷も大分治っている……しばらくすりゃあ復帰できそうだな」
空ではまだセルとブロリーの戦いが続いているが、ターレスは既に勝敗が見えて

しまっていた。

このまま続けばやはり勝つのはブローリだ。

セルは確かに再生能力は凄まじいが、別に失った気や体力を急速に回復出来るわけではない。

『不変』の細胞のおかげで自然回復力は桁外れなはずだが、それでも体力や気の消耗は存在する。

一方のブローリは……まるで減っていない。

それどころか戦闘が続けば続くほどに気が溢れている。

「このままじゃあ折角出てきた希望の芽が全部パァだ。

かといって俺じゃああいつに勝てそうもない。

……頼むぜ神さんよ。あんただけが頼りだ」

未来においてリゼットはあの化物と刺し違えたという話を聞いた。

それはつまり、リゼットには僅かながら勝利の可能性があるという事だ。

恐らくはダメージが通るまでに互いの戦力差が接近すれば、手段はあるはず。

ターレスはその可能性に賭ける事にした。

故に、今まで持っていた最後の『それ』をここで使う決意を固める。

「なあ新惑星とやらよ。お前だって嫌だろう？」

あんな髭の親父に利用されて星のエネルギーを吸い上げられて、それで戦場にされた挙句最期はグモリー彗星の衝突でお終いつてなあ。

その前に一花咲かせてみろや」

ターレスはそう言い、指で種を弾いて地面へと植えた。

名を神精樹の実。本来は「神様だけが食べる事が出来る実」だ。

ターレスは過去にそれを使う事で力を高めてきたが、今回使うのは彼自身ではない。

神精樹の實の本来の使用用途に使う気なのだ。

こんな痩せた星のエネルギーなどたかが知れているかもしれないが、それでも生物が住める惑星というだけでも充分な宝だ。

そして自分が使うよりはまだリゼットに使った方が可能性がある。

ターレスが撒いた最後の種。

それはリゼットの近くに植えられる事で彼女の気に触れ、そして爆発的な成長を

始めていた。

ピッコロ（……………）。

気のせいかな？ 手を離れた一瞬、ベジータの顔が大きくなったような気が……………）

【戦闘力】

・ パーフェクトセル×4

最大パワー…400億

ブロリー…14億↓14億5千万

伝説の超サイヤ人…1450億

「気が溢れる……………高まる……………」

第六十話 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦⑥

ターレスが植えた神精樹の種は、植えたターレス自身が驚くほどの速度で急成長していた。

植えて僅か数時間で成長し切るという馬鹿げた速度を誇るのが神精樹だが、今回はその比ではない。

まだ植えてより数十秒しか経っていないというのに、惑星全体を覆う程に神精樹が巨大化し、木々が空を覆い隠してしまっている。

かつてターレスは、この惑星などより遥かに生命力に溢れた惑星である地球に神精樹を植えたが、その時だってこんな巨大な樹にはならなかった。

まさにこれは星の命そのものだ。

この惑星がまるで自らの意思で樹に己の力を明け渡しているかのように生命力に満ちた樹が育っている。

その光景を見てターレスは、口角を吊り上げた。

「へっ、現金なもんだなオイ……俺が使ってた時は、こんなに元気よくは育たな

かったぜ」

ターレスは樹の頂点を目指し、飛んだ。

彼の経験則ではこの先にこそ神精樹の実が成っている。

果たして予想通りそこには実が存在し、だが予想に反してその数は一つだけであつた。

たった一つだけの神精樹の実が、神々しいまでに輝いていたのだ。

「どういう事だこりゃ……まさか星の力が複数の実に分割されず、たった一つの実に集約されたとしても言うのか!？」

神精樹の実は通常、毒々しい赤紫色をしている。

それはまるで無理矢理吸い上げられた星の血のようであり、決して好ましい色ではない。

だが今ここにある実は黄金。無理矢理吸い上げられたわけではなく、星自らが献上したかのような眩い色だ。

リゼットの氣に感応した結果なのか、それともこれが本当の神精樹の実なのか……。その充分に熟した実をもぎ取り、ターレスは汗を流す。

「そうかい。お前もこのままじゃあ終われねえってわけか」

……いける！

ターレスは奇妙な確信を抱き、樹から飛び降りた。

神精樹の実により上昇する戦闘力は高々数十万程度であり、敵の力を思えばまさに駄目元の賭けでしかなかった。

しかしこの実は違う。それ以上の力を感じさせられる。

まさに星の力の全てがここに凝縮されているのだ。

その証拠にこの星の大地が罅割れ、地震が起こっている。

幾度も星を破壊してきたターレスだからこそ分かる。……これは星が自壊する前兆だと。

どうやらこの惑星は本当に命の全てを振り絞ってこの実に託してくれたらしい。ターレスは倒れているリゼットの所まで行くと、その身体を抱き上げる。

そして神精樹の実を食べ易いサイズに気の刃で切り、その小さな口へと無理矢理詰め込んだ。

何とも、浪漫もへったくれもない食べさせ方である。

目を閉じているリゼットも気のせいか苦しそうな顔になり、汗を流している。だがターレスは気にせず二つ、三つとグイグイ押し込んでいく。

やがて4つめに入ったところで遂に、リゼットの掌打がターレスの顔を張り飛ばした。



セルとブロリーの戦いは佳境に入っていた。

当初こそ勢いよく攻め続けていたセルであったが、彼の体力は無限ではない。

四人に分裂しての猛攻にも終わりが見え始め、ブロリーの攻撃が命中するようになっていた。

そして今もまた腹に彼の豪腕が突き刺さり、勢いよく飛ばされていく。

だがセルは吹き飛びながらも空中で回転し、強引に地面に足を付けて着地した。

「ま、まだだ！　まだ終わら……」

虚勢を張ろうとするも、ブロリーはそれすら許さない。

彼の放った気弾がセルの上半身を消し飛ばし、気を大幅に削り取る。

だがセルは尚も諦めずに再生し、全身にスパークと黄金のオーラを纏った。

「まだ、終わらなあいいッ!」

跳躍して距離を取り、着地と同時に両手に気を集約。

残る全ての力を込めてのかめはめ波の構えへと入った。

既に自壊が始まっている新惑星ベジータが鳴動し、暗く染まった空が雷光を降り注がせる。

セルの脳裏に浮かぶのは荒廃した未来の世界。

戦う事すら出来ず、自ら定めた役目も果たせずに終わってしまった世界。

そして、培養液の中にいる自分へと向けられる白い少女の弱弱しい笑顔……。

「未来は——」

——私は、何を間違えたのでしょうか……。

それは、人々の希望の象徴として戦う女神が見せる、誰にも見せる事の出来ない素顔であった。

英雄亡き世界。孫悟空がいなくなってしまった世界でいつも彼女は後悔してい

た。

あの時ああしていれば……どんな手を使ってでも孫悟空さえ生かしておけばきつところはならなかったのに。

仲間達はきつと、今も自分の近くにいて笑っていてくれたのに。そう、嘆いていた。

そんな彼女にセルはテレパシーで語りかけた。それは貴女のせいではないと。不幸に不幸が重なっただけで貴女は最善を尽くしていたと、慰めや誤魔化しではなく本心からそう思っていたし、話を聞いてもやはり彼女は最善の手をいつでも打とうと尽力していたと確信している。

先代とピッコロの融合を即座に提案したのは誰だ？　彼女だ。

神殿や聖堂を拠点として人類を匿う事を決めたのは？　彼女だ。

クウラのせいで失敗に終わったがナメック星のドラゴンボールを使うことだって彼女が真っ先に思い付いた。新ナメック星の座標だって彼女が割り出した。

精神と時の部屋をも使い、仲間達の実力を伸ばしもした。

人造人間に速攻を仕掛けて破壊したのだってリゼットだし、ドクターライチーが

呼び出したゴースト戦士を駆逐したのも彼女だった。

打てる手は全て打っていたのだ。それでも今があり、ならばそれは彼女のせいなどでは断じてない。間違えてなどいない。

だがりゼットは尚も首を振り、そして消え入りそうな声で言った。

——私は、きつとこの未来を変える事が出来た。出来た……はずなのに……。

悲しむな。

悲しむな、義母よ。

私がここにいる。

貴女の仲間達は貴女を置いて行ってしまったが、私は貴女を置いていかない。これから私が側で貴女を支える。全ての敵を完璧な存在である私が蹴散らす。

それは誓いだった。

孫悟空を殺すという使命の代わりに自分で自分に与えた使命。

生まれる理由。生きる意義。

この完璧な力をどう使うか。何の為に戦い何を守るのか。

しかし彼女は逝ってしまった。

永遠の眠りに就き、もう二度と目を覚まさない。

もう笑わない。動かない。約束を果たすための戦いすら出来ずに、セルの使命は終わりを告げた。

残ったのは、『完璧』という余りにも空しい称号を自称する、何の役割もない強だけの人造人間が一体のみ。

その力も——もう、何の価値もない。守ると決めた者はもういないのだから。

「未来は——私が変わえる!!」

セルの全身から放たれるオーラが力強さを増し、スパークが迸る。

それだけに留まらず、黄金のオーラの上から白い炎が噴き出した。

セルは見た目では分からないが、超サイヤ人化を発動している。

サイヤ人ではないがサイヤ人の細胞を持つ彼は、悟空達同様に超サイヤ人への変身が可能なのだ。

だがその上から更に、リゼットの技であるバーストリミットを重ね掛けした。

「私に残された全エネルギーを放出し！ 太陽系をも葬る一撃で貴様を消し飛ばしてくれる！」

雷が鳴り響く。

大地が砕け、空が荒れる。

惑星の終焉を思わせる光景。だがそれを前にブロリーは尚も笑う。

手の中に気弾を生成し、大気が緑色に染まった。

「かめはめ波アアア!!」

「イレイザーキャノン！」

セルの放ったかめはめ波とブロリーの放ったイレイザーキャノンが中央で衝突。爆風で辺り一面全てを吹き飛ばしながら押し合う。

だがやはりパワーはブロリーが上だ。セルのかめはめ波は除々に押されていく。このまま勝負ありか？ そう思われた刹那にブロリーを囲むように悟空と悟飯、ピッコロ、トランクスの四人が降り立った。

仙豆により復帰した彼等はここを唯一の勝機と見なし、セルへ全力で加勢する。

「孫悟空に、孫悟飯！ それにピッコロとトランクスか！」

「誰かは知らねえが手を貸すぞ！」

悟空はセルとの面識はない。

寝ている間に遠視した光景でそういう奴がいるとは知っていたが会うのはこれが初めてだ。

だが今はとりあえず味方という事は理解出来る。

そして、セルが踏ん張ってくれている今しか勝機がない事も把握出来た。

ならば話は後だ。ここで倒さなければもう、この悪魔を倒す機会は訪れない。

「波アーリーッ!!」

悟空のかめはめ波がブロリーを側面から襲った。

青い光の奔流に吞まれながら、しかしブロリーは揺らがない。

だがそこに、今度は悟飯が全力でかめはめ波を放つ！

「波アアアア!!」

両側からの親子かめはめ波だ。

そしてかめはめ波同士が衝突し合うその中央地点における威力は相互作用により通常よりも遥かに高い破壊力を有している。

それでも尚微動だにしないブロリーへ、今度はトランクスとピッコロが追撃をかけた。

「フィニッシュバスター！」

「魔貫光殺砲！」

計四発の気功波！

その猛攻を前に、だが尚もブロリーは崩れない。

イレイザーキャノンの威力を益々強め、セルのかめはめ波を押し返しにかかる。恐るべき化物だ、と悟空は心底思った。

これだけの攻撃に晒されながらまだ平然としているなど、とても信じられない。

「ご、悟飯！ 怒りを爆発させろ！ お前の力はこんなもんじゃねえ！」

「で、でもお父さん！ 僕はもう全力で……」

「いいや、まだお前は全ての力を出しきっちゃいねえ！ 力を爆発させるんだ！」

悟飯はまだ潜在能力を発揮していない。

発揮したとてブロリーに届くものではないが、それでもこの戦いを傾ける一因にはなれるはずだ。

だがそれを発揮出来ぬままに勝負の天秤はブロリーへと傾き、少しずつセルが押されていく。

もしこのままセルが敗れてしまえばもう終わりだ。誰もブロリーには対抗出来ない。

セルが健在の今しか勝機はないのだ。

その決戦を遠くで見ながら、ベジータは拳を握り締めていた。

「下級戦士が戦っているのに……くっ、くぐぐ……！」

ベジータが力み、彼の気によって周囲の瓦礫が浮かぶ。

相手は勝ち目のない伝説の超サイヤ人だ。

だがそんな相手に下級戦士やナメック星人すらが挑んでいる。

なのに自分が何もしないなど、それは彼の自尊心が許さぬ事だった。

一度は砕けたプライドが再構築され、心に炎が灯る。

「サイヤ人のオオオ！ 王子はアアア！ この、俺だアアア！！

っちゃあああああ！！」

ベジータが超サイヤ人と化し、空高く飛翔した。

「今だああ！」

ここが勝機！

そう踏んだ悟空は残された気の全てを全放出し、トランクスとピッコロも後に続いた。

更に悟飯が目をカッと見開き、全身からスパークが迸り髪が逆立つ。

それに合わせるようにセルが最後の力を振り絞ってイレイザーキャノンを押し返した。

ベジータも気弾の連射を止め、必殺のビッグバン・アタックを叩き込む。

セルと悟空、悟飯のかめはめ波、トランクスのフィニッシュバスター、ピッコロの魔貫光殺砲、そしてベジータのビッグバン・アタック。

六条の輝きがブロリーを飲み込み、激突し合う。

その中央地点における威力はもはや計り知れない。

「……………!!」

ブロリーの顔が驚愕に歪み、紛れもない苦痛に染まる。

そして——爆発。

ぶつかり合った気功波が中央で天にも届く光の柱となり、その中にいたブロリーを蹂躪した。

これは効いている。効かないはずがない。

やがて爆発が終わり、悟空達は一斉に座りこんだ。

「や、やった……」

信じ難い化物だった。本当にそれしか言えない。

たった一人を倒すのにこちらは全員満身創痍。疲労も溜まりきっている。

ベジータだけはまだ元気だが、それだけだ。

だが、それでも勝つ事が出来た。

皆の力を合わせ、今度こそ絶望の未来を回避出来たのだ。

「悟飯、最後のパワーは凄かったぞ」

「お、お父さん、僕……」

「言ったろ？ お前が怒ればすげえパワーが出せるって」

決め手となったのはやはり最後の悟飯の覚醒だろう。

あれがなくてはブロリーを仕留め切る事は出来なかったはずだ。

言い過ぎではない。ブロリーはそれだけの強敵だったのだ。

唯一つ誤算があるとすれば、それは……。

——それは、まだブロリーという化物を低く見積もっていた事だけだろう。

「お前だけは簡単には死なさんぞ！」

「ふおおあ!？」

煙を裂いて絶望が姿を現す。

彼は怒りの形相でベジータへと一直線に飛翔し、逃げる暇も与えずに丸太のような腕をベジータの顔へと衝突させた。

そのままリアットで前へと飛び、偶然いい位置にあった岩盤へと衝突、めり込ませた。

そのあまりの光景に悟空達は声も発せない。誰もが目を見開き、身体を震わせて見ているだけだ。

「もう終わりか？」

ブロリーはそんな悟空達に見向きもせず、ベジータを岩盤へと押し付ける。

一押しごとに頭蓋が軋み、意識が途切れる。

彼の圧倒的暴力に晒されたベジータに成す術などない。

金髪は黒髪へと戻り、力が抜けた身体は岩盤を滑り落ちていくだけだ。

そんなベジータを見届け、ブロリーは笑う。

「終わったな。所詮クズはクズなのだ……」

倒れたベジータから完全に興味を失い、ブロリーは悟空へと視線を移す。

そしてその顔を壮絶な笑みで歪め、巨体を揺らしながら突進した。

悟空を庇うようにトランクスが前に出て気弾を放つが全く意味がない。

ブロリーは邪魔な石でも除けるかのように腕を振り上げる。

「ドアアッ！」

アップパーカットで跳ね上げられ、この一撃だけでトランクスの意識も断ち切られた。

そこに超サイヤ人2へ覚醒した悟飯が殴りかかる。

流石に今の彼は別格だ。ブロリーとも少しくらいは殴り合いが成立する。

だがすぐに力の差が現れ、殴り飛ばされて壁にめり込んでしまった。

更に髪が黒髪に戻り、気を失ってしまう。

「ごはーんッ！」

ピッコロが慌てたように悟飯を助けに飛ぶ。

だがこれも遅い。ブロリーが振り向きざまにラリアットを叩き込み、ピッコロも何も出来ずに吹き飛ばされてしまった。

「おのれええええ！」

セルが横から突撃するも、彼の体力も既に限界だ。

放つ拳打には先程までの力がなく、ブロリーに全く効いていない。

それを見てブロリーは薄ら笑いを浮かべ、セルを軽々と殴り飛ばした。

地面を二転三転と転がり、かろうじて立ち上がったセルは怒りの形相を浮かべる。

そして全身に力を入れ、筋肉を誇大化させた。

それは、パワーだけを増す愚かな変身であった。

こんなにも膨れ上がった筋肉ではスピードが殺されてしまい、満足に力を活かす事すら出来ない。

無論セルはその程度も分からぬ馬鹿ではない。

だが……今の彼は逆上していた。

冷静さを失い、そんな事すら分からなくなってしまったのだ。

「ハァー！ ハァー！ 貴様なんかに……貴様なんかにこの私が負けるはずがな
いんだあああ！」

巨漢と化したセルがブロリーへ殴りかかる。

だが遅い。悲しいほどにスローだ。

ブロリーは軽々とセルの攻撃を避け、お返しにボディブローを一撃叩き込んだ。
それだけでセルは膝をつき、口から胃液を逆流させる。

……そしてそのまま、地面に倒れて動かなくなった。

あまりにもあまりな逆転劇。何も出来ずに倒れる仲間達。

そんな絶望的な状況を作り出した悪魔は悟空を指差し、告げる。

「カカロットオオ……今樂にしてやる」

宣言と共に放たれた右ストレート。

悟空はそれを避ける事すら出来ず、派手に地面を転がった。

【戦闘力】

・孫悟飯…3億

超サイヤ人…150億

超サイヤ人2…300億

・パーフェクトセル…400億

バーストリミット…800億

ブロリー…14億5000万↓15億

伝説の超サイヤ人…1500億

ダメージによる戦力低下…950億

トランクス「セルの奴……あんなパワーだけに頼った変身をするなんて……」

→

こいつの細胞の影響

第六十一話 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦～BROLY～

この時代には、悟空がいる

もっしやもっしやと咀嚼し、ゆっくりと飲み込む。

味は悪くない。やや酸味が強いが充分に食べれる味だ。

しかし今までに食べた覚えのない果物であり、リゼットは地面に倒れているターレスを見る。

正直なところ状況はまだ把握出来ていない。

目が覚めたら何故かターレスに果物を押し込まれていた。意味がわからない。

とりあえず喉に詰まりそうだったので反射的に食べてしまったが、とりあえず毒などの類ではないようだ。

「で、ターレス。これは一体何の真似ですか？」

「へへ、そう怒るなよ。別に毒じゃねえさ」

「それは解りますが、もっと食べさせ方というものがですね……というか何故戦闘中に人の口に果物を放り込んでるんですか、貴方は」

「何だ？　口移しでもして欲しかったのか？」

「……どうやらクリリン君と同じヘアスタイルにされたいようですね」

「やめろ!？」

リゼットは指先に気の刃を生み出してターレスを脅した。

まあ実際のところ口で言っているだけで本当にやる気など全くないが、相手からは解るまい。

ターレスはガシガシと頭を掻きながら、リゼットに食べさせた物の正体と言う。

「神精樹の実だよ」

「え？」

「だから神精樹の実を食わせた。ついでに仙豆もな。

あんたがその実を好まないのは知ってるが、どうせグモリー彗星の衝突で消えちまう星だ。

ならせめて、その力だけでも使った方がまだこの星も浮かばれるだろう」

「……だからって」

「そう言うな。せっかくこの星が力を振り絞ってくれたんだぜ。

俺も初めて見たよ。神精樹が僅か数分で育ち、たった一つの実に全ての力を凝縮させるなんて光景はよ」

ターレスはリゼットの肩に手を置き、視線を合わせて語る。

「この星も叫んでるのさ。このままじゃ終われねえってな」

「……………」

「見せてやれよ。パラガスの奴が最低の星と呼んだものの底力を、アンタがよ」
ターレスに言われ、リゼットは目を瞑る。

リゼットは正直に言って神精樹という物が大嫌いだった。反吐が出るとすら思う。

神しか口に出来ないというが、神なら星を食べてもいいのか？

そこに多くの命が住み、必死に生きているのに神というだけで喰い物にして許される？

その傲慢さが大嫌いだった。

星は神の物などではない。そこに住む生き物達のものだ。

だからこそ、それを自らが口にしてしまった現状は決して気分のいいものではない。

どうしても勝ちたいというターレスの気持ちは解る。勝たなければ未来はないのだから手段も選んでられない。それも解る。

彼を責める事など出来ない。彼はただ、今出来る最善を尽くしただけだ。

ならばどうすればいい？ どうすれば自分が喰らってしまったこの星に報いる事が出来る？

「……そう、ですね。せめてこの星に代わり、私が戦いましょう」

パラガスはこの星を最低の惑星と呼んだ。

だが違う。そうではないのだ。

何故ならこの星は生物が生活出来る環境がちゃんとある。

空気があって、確かに文明が存在していた名残がある。

ならばそれだけで宝だ。宇宙の奇跡なのだ。

生き物を育む事が出来るこの星が最低だなんて事は断じてない。

破壊するだけのブロリーには決して解らない。命を産み、育む力の偉大さなど。ならば……この星に代わりそれを教えてやろう、とりゼットは思った。

そうする事できつと、命の全てを神精樹の実に委ねてくれたというこの星に報いる事が出来るから。

そうする事でしか報いる事が出来ないから。

「行きましょうターレス。絶望の未来をここで食い止めます」

「ああ！ そうこなくっちゃあな！」

リゼットの身体から光が溢れ、翼を羽ばたかせて飛翔する。

この戦い、何としても勝つ。

その決意を胸に、二人は絶望を超えるべく飛んだ。

★

「遂に来た。この星も後数時間の命だ」

新惑星ベジータがまさに終焉を迎えようとしていたその時、パラガスは一人高台の上で迫り来るグモリー彗星を見ていた。

当初の予定では今頃ブロリーと共に脱出しているはずだったが、もうそれは叶わ

ない。

コントロールから離れたブローリーはただの破壊者であり、パラガスの思想とは相容れないのだ。

支配するべき惑星すら壊してしまうのではどうしようもない。

つまりは足手纏い。生きてても邪魔になるだけの存在だ。

グモリー彗星だけではない。この星は神精樹に力の全てを託したことで急速に『死』へと向かっていた。

惑星は凍え、まるで氷河期でも訪れたかのように世界が氷で覆われ始めている。「コントロールの利かなくなったお前は、もはや俺の足手まといになるだけだ。

可哀想だがブローリー、お前もこの星と共に死ぬのだ」

パラガスは万一の時でも自分だけは逃げられるように、あらかじめ用意していた小型ポッドへ乗り込む。

それは一人乗り用のものであり、誰かと逃げる事を想定したものではない。

もしも不測の事態が起きて宇宙船が壊れるなりしても自分だけが逃げ切れるようにと配置しておいたものだ。

実際、大きい方の宇宙船は地球人達が乗って逃げてしまったので、この対策はまさに正解だったのだろう。

だが正解が必ずしも命を救うとは限らない。

宇宙船に乗りこんだパラガスが見たのは、こちらに向かって歩いてくる息子姿の姿だった。

「どこへ行くんだあ？」

「お、お前と一緒に……避難する準備だあ！」

「一人乗り用のポッドでかあ？」

慌てて吐いた言い訳は余りに苦しく、どう見ても一人乗り用のポッドに乗り込みながら『一緒に避難する準備』などと言って誰が信じるものか。

いくらブロリーの賢さが足りずとも、流石にこれでは騙せない。

ブロリーはポッドを掴んで持ち上げると、その人外の膂力任せにポッドを潰していく。

中にいるのは仮にも彼の実父だがブロリーは気にする素振りも見せない。

それも仕方のない事だろう。この信頼関係の無さこそが今までパラガスが築いて

きたものなのだから。

「どおお、おおお……!? 自分の、子供に殺されるとは……。」

これもサイヤ人のさだめか……」

その言葉を最期にパラガスは圧死した。

ブロリーが吼え、圧壊したポッドをグモリー彗星へと投げ捨てる。消えていく父の棺桶を見ながらブロリーは蔑むように吐き捨てた。

「この俺が星の爆発くらいで死ぬと思っていたのか？」

これでこの星で動く者は自分以外にいない。

そう確信したブロリーだが、直後に誰かの気配を感じて振り返る。

そこには先ほど確かに倒したはずの白い少女が佇んでおり、隣にはカカロットそっくりの紛らわしいのも立っていた。

「仮にも自分の父だったものをああも躊躇なく殺しますか」

「子が親を殺す、それがサイヤ人だ」

ブロリーの非道をリゼットが咎め、ターレスはごく自然なものとして受け入れる。捉え方は全く異なる二人だが、しかしここに立つ目的は共通していた。

即ち、ブロリーの撃破。

彼をこのままにはしておけない。

そしてその想いは二人だけではない。

孫悟空もまた、譲れぬ想いを抱いて満身創痍ながらこの最後の戦場へと馳せ参じる。

何というか、本当にどこまでも打たれ強い男であった。

「奴だけは、このまま生かしちゃおけねえ」

悟空がオーラを纏い、ブロリーへと歩みを進める。

神精樹の実によって力を増したりゼットがバーストリミットを1000倍まで解放し、ターレスが構えを取る。

「フッ、大人しくしていれば痛い目に遭わず済んだものを！」

ブロリーが地面を砕いて突進。

それと同時にリゼットが飛び出し、彼の豪腕を掴んで引き寄せた。

体勢を崩されたブロリーは無防備な姿を晒し、そこに星の力でブーストのかかったリゼットが猛攻を仕掛ける。

指突！ 掌打！ 手刀！ 拳打！ 裏拳！

聖門！ 天倒！ 烏兔！ 霞！ 上晴！ 人中！

「……っ!!」

「はあっ！」

顔面の急所を狙い打ちにされた事で怯んだブロリーの指を掴む。

そして合気。指という身体の末端を支点として彼の身体を投げ飛ばした。

すぐにブロリーも反撃に転じるが拳を掻い潜ってリゼットの指突が喉にめり込む。

「おいカカロット。俺達のどっちが行っても勝負にやならねえ。

俺に残されたパワーをお前にくれてやる」

「ああ。パワーをくれ。奴を倒せるパワーを！」

ターレスが自分に残された最後の気を悟空へと委ねる。

それと同じくして悟飯、ピッコロ、トランクス、ナッパが悟空へと気を送り込み、悟空が力強さを増した。

最後に意地を張っていたベジータも流石に今回ばかりは責任を少しは感じている

のか、渋々悟空へと氣を受け渡す。

すると五人のサイヤ人から流れてきた氣が悟空の周囲で円を描くように取り巻き、悟空の中へと取り込まれた。

そして悟空は、まるで界王拳でも発動しているかのような赤いオーラを発し始める。

今まで見た事のない……そしてリゼットも知らない超サイヤ人だ。それどころか今の悟空は僅かではあるがリゼットと同じ神の氣を発している。

もしも——もしもこの時、五人のサイヤ人が全員善の心を持っていたならば。悟空の近くで手を繋ぎ、よりダイレクトに氣を送り込んだならば。ナメック星人であるピッコロの氣が紛れていなければ。

あるいは悟空は、『神の領域』へと踏み込めていたのかもしれない。

セルの氣も流れてきているが、こちらはどうかやらリゼットへ譲渡しているようだ。

「カカロット……それは……」

「分かんねえ。だが、これならいけそうだ！」

皆からパワーを受け取り、手応えを感じて悟空が走った。

そしてブロリーと掌を握り合って力比べの体勢へと入る。

「雑魚のパワーをいくら吸収したとて、この俺を超える事は出来ぬう！」

「そうかな？ やってみなきゃわかんねえ！」

悟空がその状態から膝蹴りを放つ。

すると顎を蹴られたブロリーがよろめき、歯を食い縛った。

効いている——先ほどまでのまるで鉄を叩いているような感触ではない。

戦闘力が近付いた事で、ようやくブロリーへ攻撃が届くようになったのだ。

「だありゃああ！」

悟空の蹴りが炸裂し、ブロリーの巨体を吹き飛ばす。

神精樹に力を吸われた事で急速に凍え、氷河期のような有様となってしまった新

惑星ベジータの地表をブロリーが飛び、その後を悟空とリゼットが追った。

「行きますよ、悟空君！」

「ああ！」

多くを語る必要はない。目的は一つ、あの悪魔を倒す事のみ。

二人は同時に気を爆発させて加速し、ブロリーへと肉薄した。

ブロリーは咄嗟に、そして恐らくは生涯初だろう防御の姿勢を取った。

無意識下の行動だったのだろう。意識して行ったものではあるまい。

だがその行動こそ、ブロリーが二人を『強敵』と認めている何よりの証であった。

「だありやりやりやりや！」

「はああッ！」

悟空の拳が、蹴りが。リゼットの掌打が、脚が。

ガードの上から強引にブロリーを追いつめ、傷付けていく。

ブロリーもやられてばかりではない。ガードしたまま気を解放して、その圧力で

二人を弾き飛ばした。

だが悟空とリゼットは空中で回転して着地し、同時に地面を蹴って加速。ブロ

リーへ拳と掌打を叩き込む。

大地を碎きながらブロリーが後ろへ飛ばされ、その後を二人が追う。

悟空とリゼットの同時攻撃が幾度も入るが、ブロリーもダメージを負いながら反

撃していた。

二対一でも尚互角。尚退かぬ。

その圧倒的な怪物性と臂力で悟空の頭を掴んで投げ、続けてリゼットを拳の風圧だけで飛ばす。

だが悟空が素早く地面に着地し、飛ばされて来たりゼットの腕を掴んで回転。遠心力を乗せてブロリーへ投げ返した。

投げられたリゼットも悟空の意図を読んで、加速を上乗せした蹴りをブロリーの顔へめり込ませる。

続けて悟空が距離を詰めてブロリーの足元を蹴り払い、体勢を崩したブロリーの頬をリゼットが抓るように掴んで地面へ叩き付けた。

「っおおォー！」

それでも歯を食いしばってブロリーが立ち上がり、拳を繰り出す。

その一撃を悟空がクロスした腕で受け止め、その隙を狙うようにリゼットが横からブロリーを蹴り飛ばした。

間髪を入れずに悟空が気弾の嵐を打ち込み、リゼットの飛ばした気円斬がブロリーの左胸を裂いて血飛沫を上げた。

更にもう一撃——近付いてきた悟空の拳が胸を抉り、ブロリーの左胸に十字の傷

が刻み込まれた。

続けてリゼットが光の剣を手接近して斬撃の嵐を放ち、ブロリーの全身に斬痕を刻む。

だがこれでもまだ浅い。彼の命にまでは届かない。

ブロリーは全身を血で染めながらも『最強』の誇りで二人を睨む。

「オオオオオオオオオッ!!」

吠える。

戦えば戦うほどに強くなり、成長するのがサイヤ人だ。

そして伝説の超サイヤ人であるブロリーはその特性を誰よりも強く持っている。彼の中にある無限と呼んでも過言ではない可能性が、このまま終わる事をよしとするはずがない。

前髪が逆立ち、全身からスパークが迸る。

この期に及んで、まさかの覚醒であった。

まさに伝説の怪物——その果てのない強さに、悟空とリゼットの背筋が凍える。

「おめえ……まだ上があんのか!？」

「グギィィ……カカロットオオ!!」

悟空達にとって幸運だったのは、ブロリーに尻尾がなかった事だろう。

もしも尻尾が残っていたれば、この可能性の怪物は大猿のパワーすらも取り込んで『神の領域』すらも超えてしまっていたかもしれない。

だが、どのみちブロリーが怪物である事には変わりはない。

土壇場でパワーアップを遂げたブロリーが悟空へと突撃して彼の頭を掴み、氷壁へと叩きつけた。

「ぐああああっ!」

「悟空君!」

悟空を氷壁にぶつけながら走る。

それはまるで、悟空で氷壁を削るような荒々しい攻撃だ。

それが終わってもまだブロリーの攻撃は続く。

今度は悟空の足を素早く掴んで地面へ叩きつけ、次は半円を描くように反対側へとまた叩きつけた。

それを数度繰り返し返してから悟空を捨て、リゼットへ振り向き……口から巨大な気

功波を発射した。

「くっ……！」

それを舞うように避け、飛翔。

ブロリーの背後へと着地し、まだ気功波を吐き続けている彼の背中へ気の刃を次々と叩き込んだ。

しかしブロリーの筋肉の壁を突破する事は出来ず、突進してきたブロリーに顔を掴まれて地面に叩き込まれた。

しかし次の瞬間、ブロリーの手の中のリゼットが爆発して視界を隠す。

ブロリーが掴んだのは気で生み出した自律行動気弾——つまりは偽物だ。

本物は残像拳の応用で既に上へ退避しており、指を頭上へ掲げて巨大気弾を生成していた。

「はあッ！」

白い流星が急降下し、その途中で弾けて百を超える閃光と化した。

その光景はまるでレーザーの雨だ。

貫通に特化させた幾百ものレーザーがブロリーを襲うが、ブロリーはその全てを

バリアで遮断している。

そのまま浮上して、己を中心として気弾を四方八方へとばら撒き始めた。

高まり、溢れた気を余す事なく発散して新惑星ベジータ全土を爆撃機のように攻撃する。

氷で覆われていた惑星が瞬く間に焦土と化し、そればかりかマグマに覆われた惑星へと変貌してしまった。

もはや新惑星ベジータはグモリー彗星の衝突を待つ必要もなく、いずれ自壊してしまうだろう。

「ヌオオ！」

ブロリーがリゼットへ急接近し、胸筋で気を爆発させた。

その予想外の攻撃にリゼットが吹き飛ばされ、追撃しようとした所で横から悟空がブロリーを蹴る。

怯む事なく悟空を殴り飛ばせば、次はリゼットがブロリーへ気の刃を打ち込み、それを弾いたら次はまた悟空が殴りかかってくる。

弾かれても弾かれても、それでも二人は諦める事なくブロリーへ挑み続ける。

左右から悟空とリゼットが猛攻を仕掛け、ブロリーも負けじと応戦して打撃音が幾度となく響き、衝撃波が拡散する。

「ヌウウ……死にぞこない共があー!」

ブロリーの額に青筋が浮かび、鬱陶しい二人を纏めて消そうと今まで以上の気を両手に込めて解放した。

緑色の激流が迫る中、悟空は咄嗟に跳んで回避し、リゼットは逆に前進しながら紙一重で気功波を避けた。

そのまま掌に気を集めてブロリーの気功波に触れ——気功波の側面を滑った。そうして攻撃中の無防備なブロリーの目の前まで移動してから速度を落とさずに前方へ跳び、ブロリーとすれ違い様に彼の耳孔に気の形状変化で創り出した細い糸を入れた。

超能力による操作で内耳を絡め取り、そのまま速度と勢いを落とさずに跳ぶ。すると、糸でがんじがらめにされた内耳はズタズタに破壊され、耳から血が溢れた。

ブロリーがすぐに反撃の気弾を撃つが当たらない。

平衡感覚を失った身体で繰り出す気弾は正常に敵を狙う事も出来ずに明後日の方
向へと飛んでしまう。

その隙を逃さずリゼットが手を翳してブロリーを気合砲で弾き、その先にいた悟
空が彼を渾身の力で殴り飛ばした。

ブロリーは空中で回転して着地するが、ダメージの深さから膝を突いてしまう。
「な、なんて奴等だあ……！」

足をガクガクと揺らしながらブロリーは初めて敵を恐れた。目の前に迫っている
『敗北』をかつてないほどに近くに感じていた。

だがそれでも敗北は受け入れない。

最強でなくてはならないのだ。

誰がそう決めたわけではない。ただ、最強の存在として生を受けたのだから、敗
北だけは許容してはならない。

それがブロリーの誇りであり、だからこそカカロットが許せなかった。

生涯最初で最後の、あの『敗北』を払拭しなければいつまで経っても前へ進めな
い。

悟空にとっては覚えてすらいらない赤子の時の出来事なのだろう。

だがブロリーは覚えている。忘れられない。だから悟空に執着し続ける。

「カカロットオ……カカロットオオオオ!!」

彼もまた覚悟を決め、最後の決戦に臨むべく全身の気を振り絞った。

内耳を破壊されて満足に立てぬはずの身体でありながら、しかし構わずに飛翔して突撃を敢行する。

それに対し応戦するのは悟空だ。

彼もまたブロリーに劣らぬ気を纏って突進し、正面から迎え撃つ。

その後ろではリゼットの放出する気が光の柱となり、空へ飛びあがった彼女が翼を広げた。

白い翼が舞い散り、頭上で組み合わせた両手に光が集約する。

「ウオオオオオオオオオッ!!」

「許さねえええええッ!!」

ブロリーと悟空の拳が交差する。

瞬間、ブロリーの脳裏を過ぎったのは忌まわしき赤子の頃の記憶。

生涯全てが勝利で彩られるはずだった彼に与えられた人生最初の屈辱と敗北。

最強のはずの己に刻まれた、消えない傷跡。

その日の記憶が今再び牙を剥き、赤ん坊の頃の決着が今果される。

ブロリーの気が更に強まり、眉毛が薄くなる。

頭髮が少しずつ伸び、更なる覚醒の兆しを見せ――。

「オラの全てをこの拳に賭ける――貫け――ッ!!」

それより先に悟空が叫び、己の中に眠る力を解放した。

この時、ナッパから与えられた気が悟空に一つの変化を齎していた。

かつて超神水を飲む事によってナッパは大猿のパワーを自在に引き出せるようになったが、大猿と超サイヤ人の併用は一瞬しか彼には出来なかった。そこが彼の戦闘センスの限界だったのだ。

だがそのパワーに意味はあった。悟空へと気を渡す事により、ナッパのバトンが悟空へと受け渡されたのだ。

瞬間、ブロリーは確かに見た。

悟空の背後で吠える、黄金の大猿の幻影を。

その幻影は形を変え、黄金の龍と化してブロリーへと迫る。

果たしてそれは夢か幻か……しかしサイヤパワーを最大にまで高めた拳は夢ではなく、ブロリーの腹を貫いた。

「カカロツ……トオ……!!」

己のまさかの敗北にブロリーが叫ぶ。

だがそれでも、彼ならばまだ生き残る目はあった。

致命傷を受けた身体でも尚、この常識外れの化物ならば生き延びて力を増し、再び地球に来たかもしれない。そんな未来もきつとあったのだろう。

だがそんな事は彼女が許さない。

地球の神たる少女が、復活など認めはしない。

「Raging blast!!」

白の極光が空から一直線に降り注ぎ、ブロリーへ直撃する。

ここで終わらせる。復活などさせない。

そう告げるかのような神の裁きがブロリーを焼き尽くし、雷光を迸らせる。

「波アアアアア!!」

畳みかけるように悟空もかめはめ波を発射。

二発の気の激流が手を焼き、足を消し、身体の細胞一つすら残す事なく消し去っていく。

そして最後に大爆発。ドーム状の爆発が広がり、最後の止めを刺した。

「ばあああああああああああ!!」

最強のサイヤ人の断末魔が響き渡る。

未来の世界はこの男によって破壊し尽された。

彼こそが悪夢の象徴だった。

だが今ここに未来は変わり、絶望は消えていく。

未来とこの時代は違う。

この世界は決して絶望などに負けたりはしない。

何故なら——そう、何故なら。この世界には孫悟空がいるのだから。

「オラ達のパワーが勝ったああああ!」

その勝利の雄叫びは、確かに仲間達全員の耳へと響き渡った。

『どんなにとんでもない事が起きても必ず何とかしてくれそうな……そんな不思議な気持ちにさせてくれる人なの』

・未来ブルマ

『地球には悟空がいる』

・ドラゴンボール超ブロリー ポスター

『よい子のみんな、よく見ておけ。宇宙の中で最もイイゾォ！ なバーダックの倅のカカロットでございます』

・パラガス

・ブロリーの尻尾

設定画によるとあってもなくてもいいですと書いてあり、旧ブロリーはどこにも尻尾が見えないので、このSSでは無いという方向で書いてます。

バイオには生きていますが、ブロリーはまあ、パラガスが抜いたとかで。

【戦鬪力】

・リゼット…3億5000万↓5億5000万

バーストリミット…275億

バーストリミット(100倍)…550億

セルからの気の譲渡…950億

※神精樹の実により器が拡大。バーストリミットの100倍にも30秒くらいなら耐えられるようになった。

※気の譲渡による強化は一時的なもので、次回からは計算に含まれない。

・孫悟空…3億2000万

超サイヤ人…160億

不完全ゴッド…1000億

龍拳…2440億

※ナツパからの気の譲渡を切っ掛けに悟空が龍拳を習得しました。

効果…攻撃の瞬間のみ戦闘力10倍

(不完全ゴッドは悟空自身の力ではないので倍加の計算に含まれない。160億×

10+仲間の気(840億)

※不完全ゴッドは一時的なもので、次回からは計算に含まれない。

・ブロリー…15億

伝説の超サイヤ人…1500億

伝説の超サイヤ人2…3000億

ダメージによる戦力低下…1800億

Q、何か最後ブロリー、3になりかけてなかった？

A、なりかけてましたが、悟空の龍拳のダメージで変身失敗しました。

第六十二話 サイヤ人絶滅計画①

リゼット「まだ休暇下りないんですかヤダー！」

ブロリーを倒したりリゼット達は無事に地球へと帰還し、それぞれの生活へと戻って行った。

まだ最後の敵は残っているが最大の敵であったブロリーはもういない。

完全に消し飛ばしたので、後になって登場する事もないだろう。

ベジータ達は次の戦いに備えて精神と時の部屋に入ったが、残念ながら以前ほどの大幅なパワーアップは見込めなかった。

悟空曰く『これ以上は辛いだけで修行じゃない』らしい。

リゼットもまた、後の事を考えて精神と時の部屋の使用日数は温存しておく事にした。

残りは半年分。きっと必要になる時がいつか来るだろう。

それに今回の戦いで不本意ではあったが戦闘力が増えたので、これ以上の無理な強化が必要なかったというのも大きかった。

今ならば短時間ではあるがバーストリミットの100倍だっていけるし、実際ブルリーとの戦いではそれをやった。

とはいえやはり負担は大きい。普段はあくまで50倍までに留めておいて、100倍はいざという時の切り札にしておいた方がよさそうだ。

天界の端から地上を一望し、リゼットは後ろに立つ男へと声をかける。

「今回は貴方に助けられましたね」

「何、気にするな。貴女の危機には必ず駆け付けると以前も言っただろう」

後ろに立つセルは腕組みをしたまま紳士的な（と自分で思っていそうな）笑みを浮かべる。

実際、顔立ちはイケメンの類なので様にはなっていた。

メタルクウラの時といい今回といい、彼には助けられている。

最初は警戒していたが命懸けで助けてくれた辺り、味方というのは本当なのかもしれない。

相変わらず心は読めないが、だからといっていつまでも信じないのはただ臆病なだけだ。

「それで、残るはあの暗黒惑星だけだが……どうするつもりだ？」

セルが上を向き、空の果て……その先の遙か彼方にある暗黒惑星を見る。

暗黒惑星……それだけなら別にどうという事はない。本来地球とは全く関わりのない遠い星だ。

だが現在、そこから射出された機械が地球にて猛威を振るっており、非常に迷惑しているのである。

名を『デストロンガス発生装置』といい、生物の細胞を破壊してしまうガスを地球中に散布する性質の悪いマシンだ。

リゼットならばこんなものを見逃すはずもないのだが、タイミングが悪すぎた。どうも、ブローリーを倒しに新惑星ベジータに行っている間に仕掛けていたらしい。それが今になって起動を始めたのだ。

そしてそんな物を地球に撃ち出した者の名はドクター・ライチー。

かつてサイヤ人に滅ばされたツフル人の科学者であり、サイヤ人を根絶やしする

為に地球に攻撃を仕掛けようとしている。

サイヤ人への復讐。別にそれはいい。

こう言うっては何だがサイヤ人は実際恨まれて当たり前の事をしてきたし、地球だって一度は侵略の対象になった。

壊した星は数知れず、殺した命の数を言えば億ではとても利かない。

こちらの世界では未然に防いだが、ナッパなど『挨拶』と称して街を消し飛ばす行為にも及んでいる。

だがそこに地球や、いくらサイヤ人とはいえ全く無関係の悟空や悟飯、トランクスを巻き込むのは完全に間違いだ。

やりたければベジータとターレス、ナッパだけを相手に戦っているという感じである。

それでも地球にあんなものを仕掛けようとするという事は、結局ライチャーも彼が憎むサイヤ人と本質的には何も変わらない。

己の目的の為ならば他の無関係な惑星を踏み躪ってもよしと考える。そういう輩だ。

ならば、こちらもまた遠慮はしない。

「決まっています」

リゼットは一言呟き、己の隣に亜空間を開いて気弾を連射した。

その向かう先は宇宙を飛んでいる最中のライチーの部下達が乗る宇宙船だ。

名前はボンターンやらジークやら色々いるようだが、別にどうでもいい。

それを地球に来るよりも早く先制攻撃で破壊し、宇宙の塵へと変えた。

更に連射。

今度は暗黒惑星へと繋げ、ライチーの拠点である宮殿の真上から白い流星を降り注がせる。

そうして宮殿を完全に破壊し尽し、攻撃を終えた。

まだライチーとハッチヒャックは残っているだろうが、余計な雑魚は纏めて殲滅出来たはずだ。

「地球を巻き込もうとしたという事は私への宣戦布告も同然。こちらから打って出ます。」

ポポ、貴方は悟空君達に連絡を。地球のデストロンガス発生装置を破壊するよう

伝えて下さい」

「わかりました、神様」

地球のデストロンガス発生装置は捨て置けないが、これは悟空達に任せておけば必ず破壊してくれるだろう。

それよりも黒幕を叩かなければこの事件は終わらない。

一人で出陣しようとするリゼットだったが、その後ろにセルが付き添う。

「付き合おう。戦力は多い方がいいだろう」

「……助かります」

リゼットはゲートを展開し、中に飛び込む。

セルもその後につき、ライチーのいる暗黒惑星へと転移した。

宮殿はもうそこにはない。あるのは残骸だけだ。

だがライチー自身は健在だ。彼は怒りを込めた形相で宙に浮き、リゼットと対峙する。

「おのれ地球の神……何故儂の復讐を邪魔する」

「いや何故って、それは邪魔しますよ。地球巻き込んだんですから」

「サイヤ人への復讐こそ我が悲願だった……その為ならば地球がどうなろうと知った事か。

だが貴様のせいで我が計画も台無しだ！」

言っている事が支離滅裂である。

ライチーが胡坐をかいたまま浮遊し、リゼットへと突撃した。

だが所詮は戦闘を行った事もない科学者だ。戦い方というものをまるで分かっていない。

それを言うならばそもそも戦えるはずすらないのだが、ここにいるライチーはいわば怨念の塊だ。

怨念増加装置『ハッチヒャック』。その力がかつてサイヤ人に殺されたツフル人達の怨念を原動力とし、更に増幅された怨念は実体すらも伴ってゴースト戦士となる。

このライチーもまた、そうして創り出されたゴースト戦士の一体に過ぎない。

しかしいくら怨念で戦闘力が高まろうと、やはり科学者だ。戦闘の経験などあるはずもなく、リゼットは軽やかな動作で突撃を避ける。

そして反撃に転じるも、ライチーの周囲を覆うように展開されたバリアがリゼットを阻んだ。

だがそれはリゼットも同じ事。彼女の周囲を白い光の球が覆い、バリア同士の衝突となる。

そうなれば後は単純に出力が大きい方が勝るだけであり、ライチーはバリアごと弾かれて地面へと墜落した。

「愚か者め。怨念で彼女に勝てるものか。

義母よ。神の気で以て奴等を消し飛ばしてしまうといい！」
リゼット

「……え？ 何ですかそれ。私そんな力ないですよ？」

「いいや、ある。何故なら貴女には宇宙から集めた信仰がある。

貴女自身の意思はともかくとして、貴女は正義の女神として信仰されている。

そのライチーが怨念で力を得たのと同様に貴女は信仰で力を得ているはずだ。

ならば信仰を受けた貴女の気には悪を払う力がある！ 未来の貴女はその力で

ゴースト戦士を壊滅させたのだ！」

正義の女神とか、何その恥ずかしい呼称。

そんな事を考えながらリゼットはライチーを注視する。

そうすると……なるほど、確かに見える。彼を支えている怨念の塊が。

そこに向けて気弾を放つ。

すると、気弾はライチーが咄嗟に張ったバリアすら突き抜けて彼の胸へと吸い込まれた。

変化は……ない。

ダメーじすらも与えておらず、ライチーは馬鹿にしたように薄ら笑いを浮かべる。だがその直後、彼の全身を突き破るように白い光が溢れ出した。

「なっ、なんだ、これはああ!？」

「あの世には『スピリッツ・ロンダリング装置』という悪の気を浄化する装置があるらしい。

神として高みへと至りつつある彼女の気はそれと同様の事を起こせるのだ」

撃った本人のはずなのに完全に会話に置いて行かれてしまったリゼットはまるで他人事のようにへー、だのえー、だの呟く。

悪の気を浄化出来るなんて芸当を身に付けた覚えもなければ修行した記憶すらな

いのだが、何時の間にか可能になっていたらしい。

人の念って凄い、と思いながらセルの話に耳を傾ける。

「そして先日、神精樹の実を食す事で彼女は限りなく神として完成に近付いた！最早薄汚い怨念などが勝てる存在ではない！」

「き、きえ、る……わたしの、サイヤ人への、怨念、が……。

い、いやだ……サイヤ人への憎しみを……失うなど、いや、だ……！」

怨念と憎悪だけでここまで存在し続けてきたライチーから怨念と憎悪を奪い取り浄化する。

これほどに彼を打ちのめす倒し方が他にあるだろうか。

ライチーは絶望に顔を歪めながら怨嗟の声を吐くが、その怨嗟の元となる憎悪が消えていってしまう。

恨む事すら出来ない。憎む事すら出来ない。

ただ無理矢理に与えられた安らかな眠りに就く事しか認められない。

「あ、ああ……あ……」

死して尚長年に渡りサイヤ人への恨みを蓄積させてきた科学者の最期は、余りに

呆気ないものであった。

地球に手を出そうとした彼は恨み募るサイヤ人と戦う事すら出来ずに、全く無関係の地球の女神によって滅せられてしまったのだ。

原動力であった怨念を浄化されてしまった今、彼をこの世に縛り付ける物は何も無い。

怨念の天才科学者はあまりにも容易く、この世から消滅した。

リゼットは自分の掌を見詰め、不思議そうに瞬きをする。

不思議な気分だ。

最初はただ立場を譲り受けただけの張りぼての神様だったはずなのに、どんどん能力がそれに準じてしまっている。

まるで運命か何かが自分をそう導いているような……。

いや、そんなはずはあるまい。本来神になるべきはデンデだ。ならば運命などというものが導くのは彼でなくてはならない。

「どうした？」

「……いえ、何でもありません。ハッチヒャックを破壊しましょう」

怨念増幅装置ハッチヒャック。これを破壊しない限りまた怨念が集まってしま
う。

そうなれば今度はライチー以上にサイヤ人に恨みを持つ何者かが復活してしまう
可能性もあるのだ。

リゼットは手を翳し、怨念増幅装置へと気弾を放つ。

だが横から割り込んで来た気弾がリゼットの気弾を逸らしてしまった。

セルか？ いや、彼ではない。

今の気弾を撃ってきたのは彼とは逆方向にいる、そして物影に隠れている何者か
だ。

だがその正体を探っている暇はない。

ハッチヒャックに黒い気が集まり、一気に変化しようとしているのだから。

「この現象は……」

この急速な気の高まりには覚えがある。

ブロリーとの戦いでもちょっかいをかけてくれた『奴等』の仕業に違いあるまい。
という事は、物影に隠れているのもあの二人と見て間違いないだろう。

どこかで仕掛けてくるとは思っていたが、遂に現われたようだ。

「ふふふ、久しぶりね。随分力を上げたじゃない？」

前とは比べ物にならないエネルギーを感じるわ」

「トワ……それにミラ」

リゼットの後ろに現われたのはいつぞやの魔族二人組、トワとミラであった。

更に正面のハッチヒャックもとうとう実体化し、赤い鎧を纏った戦士のような姿へと変貌する。

前にはハッチヒャック。後ろにはトワとミラ。

一転してリゼットとセルは追い込まれてしまい、互いの背を護るように構える。

「何をしに来たのですか？」

「決まってるじゃない。そろそろ邪魔な貴女を消そうと思ってね。」

今なら充分なエネルギーも得られそうだし、もう生かしておく理由はないわ」

以前トワは、大したエネルギーにもならないと言ってリゼットを見逃した。

それがここで現われたという事は、もう収穫時と判断されたのだろう。

ミラが空を蹴って加速し、ハッチヒャックが走り出す。

前後両方からの挟み撃ちだ。

リゼットは咄嗟にミラを迎え撃ち、セルがハッチヒャックを相手取る。

繰り出されるミラの拳は以前よりも遥かに速く鋭い。やはり以前は加減されていたようだ。

だが前と違うのはこちらと同じ。

リゼットはミラの拳を的確に流し、互角の攻防を繰り広げる。

しかしハッチヒャックがセルを殴り飛ばし、背後から強襲してきた事で均衡が崩れた。

いかにリゼットでも二人の格上を同時に相手にして捌き続けるのは困難だ。

何とか避け、逸らし、流し続けるも完全に防戦一方になってしまう。

「くっ……はァ！」

左右に手を広げて気合砲！

ミラとハッチヒャックを吹き飛ばし、まずはミラへと狙いを集中させた。

まずは正面からの掌打！ ミラは咄嗟に顔を防御するがその瞬間に軌道を変えて腹を打つ。

更に腹の肉を指で挟んで強引に投げる。

投げる先はハッチヒャックだ。ミラを武器として投げつける事でハッチヒャックを阻害し、そこに気弾を放つ。

「小賢しい真似を！」

煙を裂いてハッチヒャックとミラが飛び出し、だが上から降下してきたセルがミラを蹴り落とした。

リゼットもまたハッチヒャックの腕を獲り、関節の逆方向へと投げる。

だがどうやら関節技に意味はないらしい。ハッチヒャックは痛みなど感じていないかのように空中で回転して静止し、腕をクロスして気を高める。

15秒かけて怨念をチャージして発射するリベンジャーカノンだ。

だが1秒が体感時間で数十秒にも匹敵するこの世界の戦いにおいて15秒はあまりに長い。

リゼットにとってそれは攻撃し放題の欠陥技でしかなかった。

そしてハッチヒャックは攻撃する瞬間以外は防御が尋常ではなく、ともにダメージを通す唯一の機会でもある。

故に彼を撃破する方法はこのリベンジャーカノンにカウンターを合わせる事であり、それはリゼットの得意分野だ。普段ならば容易に合わせる事が出来る。

だがそれも、ミラがいるせいで容易ではなくなってしまった。

再び飛びかかってくるミラを相手取りながら、リゼットは自分達が確実に追い詰められている事を痛感していた。

【サイヤ人絶滅計画】

FC用ゲームソフト。劇場版ではない。

OVAのサイヤ人絶滅計画、プレイディアの真サイヤ人絶滅計画、レイジングブラスト2収録のサイヤ人絶滅計画とバリエーションがあるが、全体的なストーリーはほぼ同じ。

このSSではOVA版に合わせる事にする。

悟空が生存しつつ悟飯が超サイヤ人になっており、トランクスが現代に残留している上にブローリー戦後である事が仄めかされている。

更にクウラ、スラッグ、ターレスを悟空が倒した世界線である事が明かされており、矛盾に満ちた世界線。

クウラ戦までは32話後書きの流れで強引に全劇場版を網羅しつつ、メタルクウラの世界を通らずにセルを悟空がうっかり倒してしまい、その後にブロリーを倒した世界だろうか。

もしかしたら、セルに仙豆をあげずに全員でタコ殴りにして倒したのかもしれない。

劇場版世界線の悟空は原作悟空のように一対一に拘らない傾向にある。

トランクスは未来に帰る為のタイムマシンのエネルギーを充電している最中だったのだろう。

【ハッチヒャック】

Dr・ライチーが発明した怨念増幅装置。ライチーを倒すと人型になって襲い掛かってくる。

サイヤ人に恨みを持つ怨念をゴースト戦士として蘇生召喚する能力を有し、ある意味ブロリーよりも厄介。

初期のOVAでは寡黙で機械的だったが、リメイク版では流暢に話すようになって不気味さが薄れてしまった。

初期OVAでは何を間違えたのかナメック星人であるピッコロさんを執拗に攻撃し、リメイク版では「サイヤ人は皆殺しだ!」と叫びながら、やはりナメック星人のピッコロさんを執拗に攻撃した。

悟空に「パワーはブローリー以上かもしれない」と言われたが、悟空でもそこそこ戦えたのでパワー以外はそうでもないらしい。

とはいえファイナルフラッシュを受けても無傷なので、完全体セルよりは強いと思われる。

必殺技のリベンジャーカノンは強いが、撃つのに15秒間かかるのでその隙を突かれて負けている。

もうそれ撃つのやめて普通に攻撃だけしてろ。

プレイディア版では巨大化したり分身したりしていたが、何故かOVAではやらない。

【ドクターライチー】

サイヤ人絶滅計画の黒幕。

地球にデストロンガス発生装置を送り込み、ゴースト戦士を生み出した張本人。昔にサイヤ人によって殺されたツフル人の科学者であり、自らもゴースト戦士である。

嫌いなものはサイヤ人とダークドレアム。

【戦闘力】

・リゼット…5億5000万

・バーストリミット50倍…275億

・パーフェクトセル…400億

・ドクターライチー…100億

・ハッチヒヤック…300億

凶悪化…500億

※パワーはブローリー級

ミラ…???.???.???

第六十三話 サイヤ人絶滅計画②

準最強タグ「待たせたな」

捌く、捌く、捌く。

ミラの猛攻を必死にいなしながら勝機を探るが、まるで光明が見えてこない。ハッチヒヤックは何とかセルが抑えてくれているが、このミラだけでも充分過ぎるほどに難敵だ。

まずそもその地力で圧倒的に劣っており、あのブロリーとの戦いを彷彿とさせる程に身体能力と気に差がありすぎる。

その上ミラはブロリーと違い戦闘技術も決して低くない。

なかなかカウンターを合わせる事も出来ず、戦闘技術を総動員しても防戦が手一杯だ。

それでも両者の戦力差を思えば防御出来ているだけで拍手喝采ものなのだが、や

はり勝敗の天秤は完全に偏ってしまっていた。

ミラのアッパークットがリゼットを跳ね上げ、その瞬間に脱力！　ぐるんと一回転して衝撃を逃し、更に回転の勢いを殺さずに股間を蹴り上げる。

「ッ!!　貴様、また……!」

ミラが脂汗を流しながらも即座に反撃し、リゼットの華奢な身体を殴り飛ばした。これも脱力で何とか流してフワリと着地。

だが逃しきれなかった威力がダメージとなり、リゼットの口の端からは血が流れていた。

指先で血を拭い、あくまで表面上は静かに佇む。

（急所への攻撃もあまり効果なし、ですか……これは参りましたね）

リゼットはげんなりしながらも、ここから繰り出せる攻撃を模索する。

まずレイジングブラストやスパーキング・メテオによる気の大出力攻撃は真っ先に除外。

今やっても無駄に疲れるだけだ。

気弾連射は論外中の論外。超能力も効果なし。

接近しての急所狙いすらあまり効かないときた。

加えて、この場にはハッチヒャックもいる。

セルも頑張ってくれているが、やはり厳しいのだろう。

時折ハッチヒャックの攻撃がこちらにも飛んできて、非常に苦しい戦いとなってしまっている。

「ミラ、いつまで遊んでるの？ さっさと片付けるわよ」

トワが杖を構えてリゼットの後ろに浮かぶ。

ただでさえ勝ち目が薄いというのに、ここにきてトワの参戦だ。

彼女の力は未知数だが、まさか弱いという事はないだろう。

これでますます勝ち目は減り、戦局は逆転不可能な所まで追い詰められてしまった。

「そら！」

トワが気弾を放ち、リゼットがバリアで防ぐ。

だがすぐにミラが距離を詰めて蹴りを放ち、リゼットが避けた所でまたトワが気弾を放つ。

遠近の息のあったコンビネーションだ。リゼットに反撃の暇を与えない。

リゼットは二人の攻撃を避けるだけで精一杯となり、劣勢へと追い込まれていく。防御の緩んだ隙を突いてミラの拳が当たり、リゼットが殴り飛ばされる。

だが壁に激突する寸前にセルが受け止める事でダメージを抑えた。

「大丈夫か？」

「いえ、あまり大丈夫とは言えませんが。そちらは？」

「同じようなものだ。あのハッチヒヤックとやらは一人では手に余る」

どうやらセルの方も優勢とはいえないらしい。

だがそれも仕方の無い事だろう。ハッチヒヤックはパワーだけならばブロリーにも匹敵するのだ。

せめてどちらか片方だけでも倒せればまだ希望も見えてくるのだが、問題はのどちらもリゼットとセルの二人がかりでも勝てるかどうかという難敵だということだ。

ましてやそんな相手が3人同時となれば、もうこれはどう勝つかよりもどう逃げるかを考えた方がいい次元である。

だがセルはまだ勝算があるのか、リゼットへと念話で話しかける。

『聞け、義母^{リゼット}よ。この状況を逆転する手段が一つだけある。』

宇宙中から貴女へと集う信仰の念を使うのだ』

『……それで勝てるとはとても思えません』

『勝てる。サイヤ人に対するツフル人の怨念だけでもあれだけのパワーが引き出せるのだ。』

宇宙から貴女へと向かっている信仰はあんなものとは比較にもならん。

その力をハッチヒャックのように我が物と出来るならば必ずや勝てる』

セルの言葉はリゼットには信じられないものであった。

このドラゴンボールの世界の強さとは基本的には気の力強さである。

超能力だの魔法だのといった特殊な力は存在しているしリゼットも使っているが

結局は腕っ節の強さが物を言うのだ。

そこに信仰だの怨念だのを持ち込まれてもイマイチぴんと来ない。

信仰を集めて強くなるなんて聞いた事がない。

『信仰はあくまで切っ掛けに過ぎん。その力を踏み台として貴女は真なる神の領域

へと至る事が出来る』

『生憎ですが、信仰の使い方なんて私は解りませんよ』

『貴女には元氣玉を元に編み出した、他者の氣を集めて力へと変える技があるはず。

あの要領で宇宙へと語りかけるのだ』

セルが言っているのはリゼットが使える元氣玉モドキの事だろう。

普段も食事が必要なくなる程度に太陽などから氣を分けて貰ってはいるが、リゼットが本格的にこれを使用したのはターレスが撒いた神精樹を処理する時の一度だけだ。

思えば我ながらおかしな話ではないか。

いかにモドキとはいえ、この技を使えば確かに力を増す事は出来るはずなのに、何故かそれを使おうと思つた事がなかった。

クウラと戦つた時も、ボージャックの時も、ブロリーの時ですらも。

どれも苦しい戦いだつたし、格上との戦いだつた。

だがこの元氣玉モドキを使えば逆転とは言わないまでも、戦況を変える一手にはなつたはずだ。

何故、使おうと思わなかった？

そう考え……リゼットの心を僅かな恐怖が過ぎった。

（怖い……？　そうか、私は怖かったんだ……。

あの技を本気で使った時に陥るトランス状態……それがまるで、自分ではなくなるようで……）

元氣玉モドキを使わなかった理由。それはリゼットの中にある恐怖心が原因だった。

あの技を本気で使う時、リゼットは妙なトランス状態へと陥る事があった。

柄にもなく地球やそこに生きる全てを愛おしく思い、守りたいという気持ちが増大した。

ターレスとの戦いではそこまでは至らなかったが、いつも自分を保てるとは限らない。

それがリゼットは嫌だった。だから使わなかったのだ。

ましてや宇宙からの気の集約などと……。

『……あの技は……欠陥品です。とても使える物ではありません』

『違うな。貴女が意図せずして編み出してしまった、オリジナルの元氣玉をも超える究極の技法だ。』

偶然と呼ぶにはあまりにも出来すぎている。貴女は偶然その技を編み出したと思っっているようだがそれは違う。得るべくして得たのだ。宇宙が貴女を選んだのだ。

私ですらあの技だけは真似出来ん。私は選ばれた者ではないからだ』

『それをここで使えと？』

『それしか逆転の手はない』

セルから伝わる念話に、気のせいか熱が籠る。

この熱には覚えがあった。メタルクウラとの戦いが終わった後にセルが垣間見せたあの狂気にも似た熱い視線。己へかける何かの期待。

この男はまだ自分に何かを隠している。

「何をコソコソと話しているの？」

ああ、ひょっとして孫悟空達が地球のデストロンガス発生装置を破壊して『ジャーン！ 待ってました！』と物語のヒーローのように駆け付けてくれる事を

期待してるのかしら？ ふふふ、それなら無駄な事よ」

「何ですって？」

「これをご覧」

どうやらリゼットとセルの密談を誤解したらしいトワが一方的に嘲笑し、空中に映像を映し出す。

あの技いいな、今度真似しよう、などと思いながらリゼットはそれを見上げる。そこに映っていたのはゴースト戦士達に苦戦する悟空達の姿であり、あろうことかゴースト戦士の面子がリゼットの知識と異なっていた。

本来はフリーザ、クウラ、ターレス、スラッグで面子が構成されるはずなのに、何故かそこにはターレスとスラッグではなくボージャックを始めとするヘラー一族とパラガスがいたのだ。

「こ、これは……」

「ちょっと面白そうな奴等がいたからねえ。怨念を導いてあげたのよ。

そしたらほら、この通り。孫悟空達はとても貴女を助けになんて来れる状況じゃない。

むしろこのままだと全滅するんじゃないかしら？」

リゼットは唇を噛み、苦悶の表情を浮かべる。

不味い。最悪一步手前の事態だ。

本当ならば自分がライチーやその近辺の戦力を全て削り取って、地球のガス発生装置を破壊した悟空達と共にハッチヒャックを始末するつもりだったのだが完全に裏目に回ってしまった。

これではただの戦力分断。各個撃破の機会を敵に与えたただけだ。

ナメック星の時といい、この魔族二人組はどこまでもこちらの策を潰してくれる。特にヘラー一族は不味い。フリーザなどはまだ、今の悟空達ならば簡単に蹴散らせるが、ボージャックは今の悟空でようやく倒せるという実力者だ。

加えて厄介なのは、彼等はチームプレイでこそ力を発揮するという事である。それでも超サイヤ人2の悟飯まで加えた今の皆ならば勝てない相手ではない。実際、映像の中では悟飯が劇場版さながらの無双ぶりでヘラー一族を次々と葬っている。

しかし、ゴースト戦士は復活するのだ。

映像の中では復活したボージャックがベジータを殴り飛ばし、他のヘラー一族が総掛かりで悟飯に襲い掛かって体力を削っている。

このままでは、悟空達が全滅してしまう可能性は低くない。

……唯一の救いは、ブロリーがいない事くらいだろうか。

流石のハッチヒヤックも自分より強い相手はゴースト戦士に出来なかったと見える。

『^{リゼット}義母よ、私の言っている事の意味が解っただろう。今、地球を救えるのは貴女だけだ。』

仮に私の言う事が間違いだとしても、単純なパワーアップにはなるはずだ。使って損はあるまい』

『……まあ、確かにそうですね』

セルの言う事はとても信じられない。

だが本来の使い方をするならば、確かにあの技は最善手の一つだ。

単純にリゼットを強くしてくれるし、そうなれば逆転の目も出て来る。

セルが何を考えているかは知らないが、ここでミラ達に殺されてしまったはその

企みを看破する事すら出来ない。

それに何より、このまま悟空達を死なせるわけにはいかないのだ。

ならば決断する他ない。自分しかこの窮地を脱する術を持たないのだから。

ここで魔族二人とハッチヒャックを退けて地球へ行き、悟空達をも助ける。そんな夢のような逆転劇を起こすには、些細な事を恐れている場合ではない。

だからリゼットはまず、全力でこの窮地を突破する方を選択した。

選択、してしまった。

「……――Xenoverse」

技名を静かに宣言し、目を閉じる。

両手を祈りの形にし、己の内へと意識を埋没させた。

一体何をする気かは分からぬミラとハッチヒャックが突撃するが、それを四体に増えたセルが阻んでリゼットを護った。

そうしているうちにもリゼットの意識は更に深層へと沈み、完全なトランス状態へと移行する。

地球、太陽系、銀河系、そして宇宙……。

今や遙か先、幾百光年先まで感知可能となつてしまつたりゼットの超規格外感知能力を全開放し、知覚出来る限りの全宇宙へと意識を飛ばす。

否、亜空間を用いる事で距離の制約すらも超えるリゼットの感知域に限界などない。

彼女は未だ名すらも知らぬこの第7宇宙全域へと意識を拡散し、そこに生きる全ての命を同時に感じ取つた。

人間の感応限界などとうに超過し、ありとあらゆる命の光を受け止め、己へと注がれる信仰を力へと変える。

(……だ、駄目！ これ以上は、もう！ 私が私でなくなる！

注ぎ込まれる信仰の念が、予想よりも桁違いに多すぎる！ 信仰に、私自身が塗り変えられる……。

わ、技を、中断……)

これ以上はもう無理だ。信仰が強すぎてもう毒にしかならない。

そう判断し、リゼットは技を中断する事を決意した。

まだ充分とはいえないが戦力は確かに高まっている。

だから、もうここで止めた方がいい。自分がこの技に薄々感じていた恐怖はやはり正しかった。

もうこれは元氣玉モドキではない。元氣玉を真似るつもりで、全く異なる技を編み出してしまっていた。

こんなものはもう制御出来ないし、手に負えない。

セルは究極技法と呼んだがとんでもない。制御出来ない技などただの欠陥品だ。だがそこに、今まで聞いた事のない冷たいセルの声が鼓膜に響いた。

「止めてはならん」

完全に無防備となっていたリゼットの額に不意打ちで何かが嵌められる。

それが何かはリゼット自身からは見えない。

だがセルの手にある『コントロール装置』には覚えがあった。

あれは……あれは、ブロリーを無力化する為にブルマに造らせた装置!?

「なっ……それは!？」

「破壊されたはず、か？ ふふ、甘いな。未来の貴女が同じ策を考えなかったとも思ったかな？」

結局未来ではブローリーがこんなものでは制御出来なくなってしまい、お蔵入りした策だが今の貴女ならばまだ制御出来るぞ。

そして私には貴女の細胞がある。貴女の氣にしか反応せぬこの装置も私ならば使いこなせる！」

「セル！ あ、貴方は一体何を……」

ここにきて突然被っていた猫を捨てたセルに動揺し、すぐに額の装置を外そうと手をかける。

だがもう遅い。リゼットは『一手』どころか『二手』も『三手』も遅れたのだ。セルは壮絶な笑みを浮かべ、そして命令を下す。

「さあ、技を続行しろ！ 信仰を集めた先の未知の領域へと至るのだ！」

「——っ！ ……は、い……」

セルの『命令』を受け、リゼットの眼から光が消える。

そして再び発動するのは、彼女自身が欠陥品と断言した技だ。その力を用い、宇宙中から氣と信仰の念を己へと注いでいく。

かつてサイヤ人に伝説在り。

一人の正しきサイヤ人を五人の正義のサイヤ人が囲み、力を与える事でサイヤの神を誕生させた。

正しき祈りと力は時に人を神の領域へとシフトさせる。それほど力がある。

——愛おしく思う。

この宇宙に生きる、今を必死に生きる命達を護りたいと願う。

創造の前に破壊在り。

破壊の後に創造在り。

破壊と創造は表裏一体。

ならばこの世界を護る為にまずは壊そう。

悪しき全てを殲滅し、その後種を撒こう。

破壊を司る神は未だ深き眠りに就き、創造を司る神はその力を失って久しい。

ならば破壊も創造もこの手の中に。

今ここに信仰に満ち、彼女の魂は完全に一つ上の領域へとシフトした。

その気は完全に透明となり、最早同じ領域の神以外感知は出来ない。

祈りが終わったりゼットは最早先ほどまでの彼女ではなかった。

見た目が大きく変わったわけではない。

まるで元氣玉を思わせる白い輝きに包まれているが、外見はいつも通りの彼女だ。あえて違いを上げれば白い翼が消えて輝く光輪になっている事くらいだろう。

だが——存在感が違う。

まるで一つの宇宙そのものが人の形を模してそこに立っているような、そんな有り得ないほどの馬鹿げた存在感が彼女にはあるのだ。

「ふっ……何かと思えばまた下らぬ変身か。」

キリもまるで感じれない……そんなこけおどしで俺に勝てると思ったか？」

ミラが冷や汗をかきながらもハッターだと切り捨て、蔑むように笑う。

そして一足先に今のリゼットの危険さに気付いたトワの制止も聞かずに愚直に飛び出し、拳を放った！

『……』

「っ！」

ミラの拳を受けてもまるで動じず、リゼットが静かに目を開く。

その銀色の瞳に映るミラは、まるで虫か何かのように映っていた。

文字通りの羽虫でも見るかのような神の視線。それを侮辱と取ったミラが激昂し、更に怒涛の連撃を放つ。

だが通じない。直撃しているはずなのに全く意味がない。

その滑稽な姿を見て、セルが心底馬鹿にしたように笑った。

「愚かな奴だ。貴様如きが勝てる相手ではないと解らんのか。

まあ役には立ったよ。私の予定通りに彼女を追い詰めてくれた……故に感謝だけはするぞ、時間を越えた道化よ」

セルの言葉を肯定するようにリゼットが無造作に手を振るう。

まるで虫か何かを払うかのような一撃。

だがそれだけでミラの右半身は『無くなった』。

あまりの出来事に悲鳴すらも上げる事が出来ないミラとはうってかわり、トワが狂ったように叫ぶ。

「ミラ!? 嫌っ、ミラ! 私のみらああ!!」

『……………』

泣き叫ぶトワへ、リゼットが無情にも手を向ける。

悪へ向ける情けなどない。

命を脅かす者への躊躇などない。

その瞳はトワとミラを映してはいるが、見てはいない。

今のリゼットにこの二人は排除すべき塵芥でしかなく、それ以外の何者でもなかった。

だが、その彼女に背後から怨念の塊であるハッチヒヤックが強襲をかける。

無論敵ではない。

後ろを向いたまま、まるで身体が勝手に避けているかのようにハッチヒヤックの拳を回避して掌を向ける。

『浄化』
はかい

一言、呟く。

たったそれだけの事でハッチヒヤックは悲鳴をあげて余りにも呆気なく消滅し、残骸すらも残さない。

だが彼が稼いだほんの1秒にも満たぬ間にトワは時間跳躍を果し、この時代から逃げ出した。

『……………』

消えてしまったトワ達を見送り、リゼットは首をかしげる。

この宇宙のどこからも居なくなってしまうとは不思議な技だ、とても思っているのかもしれない。

だが、まあいいと思ったのだろう。

消すべき悪はまだ他に存在している。まずはそれを消してしまうのが今の彼女にとってでは先決だったのだ。

向かうべきは——地球。

己が護るべき愛する惑星だが、そこにずっと前から害虫が住み付いている。

『サイヤ人』という宇宙の悪が我が物顔で暮らし、過去の罪を棚に上げてのうのと生きている。

……消さねばなるまい。

愛する宇宙を護る為に、悪は全て排除する。

その為にリゼットは白い光の軌跡を残しながら飛翔し、宇宙を飛んだ。

「……………素晴らしい!!

まさに予想通り……いや、それ以上！　これぞ私が求めたパーフェクトを超える究極なる存在だ！」

そしてそんな彼女を見て、セルは一人狂喜した。

やっとだ。やっと……己の計画に王手がかかった！

綺麗なセルなんていませんよ……メルヘンやファンタジーやあないんですから……。

というわけで、長く続いたボスラッシュ編のラスボスが出現しました。

最後の敵は暴走リゼットです。これを倒せば少なくとも7年後までは本当にボスキャラは出ません。

ちなみにゴーストブローリーに関しては、流石にハッチヒャックよりも強すぎたせいで召喚出来なかったようです。

なので代わりにゴーストパラガスが来てくれました。

【Xenoverse】

リゼットが編み出した元氣玉モドキ……と本人が思っていた技。

その実態は『サイヤ人以外でも出来る超サイヤ人ゴッド作成』。

氣を集めて強化するのは、その前段階のオマケのような能力に過ぎず、偶然元氣玉に効果が似ていただけ。

サイヤ人ではないので、作成に必要な人数は5人では足りず、相当数の信仰がなければ成立しない欠陥技。

つまり元氣玉には掠ってすらいない、完全な別物。

本人はドヤ顔で完璧な論文を書いたつもりで、実は全く別の論文を書き上げていた。

技を作る才能があるんだか無いんだか。

【戦鬪力】

・神域リゼット…計測不能

『氣が表面化しない』神の領域へと完全に踏み込んだリゼットの姿。

ボスラッシュを解決する方法……それは私自身がラスボスになる事です。

戦闘力はもはや計測不能であり、少なくとも魔人ブウくらいならば一撃で消滅させてしまえるだけの戦闘力は持っている。

ぶっちゃけるとビルスと戦いが成立するレベル。

漫画版悟空と同じく、神の気を集約させての『破壊』も使う。

現状、このリゼットを力で沈静化させる事が出来るのは第7宇宙ではビルスとウイスしかない。

助けてビルス様！

ビルス「ZZZZ……」

……駄目みたいですわね。

第六十四話 サイヤ人絶滅計画③（復活の『F』（2回目））

「人人人人」

> 復活の F <

| Y Y Y Y Y |

地球に残り、デストロンガス発生装置の処理に当たっていた悟空達はリゼットの当初の予想と異なり熾烈な苦戦を強いられていた。

いや、苦戦どころの話ではない。デストロンガス発生装置を守るゴースト戦士のパワーに押され、もはや敗北間近という有様だ。

その原因はゴースト戦士の面子の変化にあった。

「フッフ……あの時の屈辱をこんなにも早く晴らす機会に恵まれるとはな」

緑色の肌の巨漢——ボージャックが勝ち誇ったように笑う。

本来ならばゴースト戦士はフリーザ、クウラ、ターレス、スラッグという面子で

構成されるはずだった。

少なくともそれがリゼットの知る知識の内容だ。

だがこの世界においてそれは成立しない。何故ならターレスは生きて味方に加わり、スラッグはピッコロと同化しているのだから現われるはずがないのだ。

その代わりとばかりに出てきたのがボージャックを始めとするヘラー一族とパラガスであり、パラガスはどうでもいいが、ヘラー一族が戦士達を追い詰めた。

本来ならばボージャックはまだこの時期に現われる敵ではない。

しかしこの世界は違う。ブローリーが銀河で暴れまわった事が原因でボージャックは本来よりも早く出現し、そしてつい先日死んでいる。

故に、彼らがゴースト戦士として現れるのは必然の事であった。

「パラガス……貴様にはどうやらサイヤ人の誇りがないらしいな」

「何とでも言え。俺達親子がどれだけ貴様の父であるベジータ王を憎んでいたかお前には分かるまい。

お前達親子に復讐する事だけを思って生きてきたのだ。

さあゴースト戦士達よ、今のお前達のパワーでサイヤ人をこの世から消し去って

しまええ！」

サイヤ人であってもサイヤ人への憎悪を滾らせている者がいる。

それがパラガスであり、彼はサイヤ人でありながらサイヤ人をこの世から消し去ってしまう事を望んでいた。

パラガスの号令に渋々といった様子でザンギヤやブージンが応じ、二人がかりでベジータを追いつめる。

一人が足を止め、もう一人が超能力の糸で拘束する。

このコンビネーションは今のベジータでもそう簡単に打ち破れるものではなく、ブージンによって拘束された彼をザンギヤがサンドバッグのように右に左にと殴る。

「サイヤ人の面汚しめ！」

「どおおら!？」

ターレスの蹴りでパラガスが大腿を広げて回転しながら吹き飛び、ビルに衝突して消え去った。

だが次の瞬間には黒い煙となり、元通りの姿に戻ってしまう。

これが厄介だ。ゴースト戦士はデストロンガスの供給を止めぬ限り何度でも復活する。

ただでさえ強敵であるボージャック一味が不死身となれば、その厄介さは計り知れない。

ならばデストロンガス発生装置を壊せば話は早いのだが、これが驚くほど頑丈でベジータの気弾でも傷一つ付かない。

最早この戦況は絶望的と呼んでも過言ではなかった。

「やべえなこりゃあ……さっさと装置ぶっ壊して神さんの援護に行く予定だったが、それどころじゃねえ。」

このままじゃ俺達の方が死にまうぜ」

「へへっ……オラ、こいつらが来た時は寝てたから戦えるのは嬉しいんだけどよ、流石に何度倒しても元通りになっちまうのは参ったな」

背中合わせになり、互いの背を守りながらターレスと悟空が愚痴を零す。

そして何の合図もなく並んで突撃。

二人でボージャックとゴクアへと飛びかかり、互いの隙を埋める見事な連携で

ボージャックとゴクアを叩きのめした。

だが無意味だ。倒されたそばから敵は蘇り、全く終わりが見えない。

敗色濃厚、という他ないだろう。

悟空やターレスだけでなく、トランクスやナッパも既に大きいダメージを受けてしまっている。

彼等の中で最強のはずの悟飯も疲労を隠せず、ベジータはダメージが深くて立ち上がれない。

あるいはこれならば、まだハッチヒャックとの戦いの方が楽だったかもしれない。「ホーッホッホ！ サイヤ人の猿は皆殺しだ！」

フリーザがトランクスと攻防を繰り返しながら笑う。

本来の実力ならば相手になるはずもないのだが、ゴースト戦士になった事で戦力が増加しているのか今のトランクス相手でもそこそこの戦いが出来ていた。

しかし強化された者がいる一方で、復活さえしなかった者もいる。

それはクウラだ。彼も本来ならばこの中に参加しているはずなのだが、どこにも姿が見えない。

それもそのはずで、クウラは別にサイヤ人など憎んではない。

彼が憎悪を向けているのは地球の神だ。

故に彼は、この場に復活する事は出来なかった。

「くそっ！ こいつら次から次へと湧いてきやがるぜ！」

ピッコロもまた、ビドーを相手に劣勢に追い込まれていた。

ビドーなどに今更後れを取るほど弱くはない。

だが向こうは疲れないのに対し、こちらは疲労が溜まる一方だ。

しかも敵はピッコロが知るような相手ばかりではない。

遙か昔にサイヤ人に滅亡させられたカナッサ星人が……地球に来る途中でベジータとナッパが滅ぼしたアーリア星人が、その他多くの、サイヤ人によって殺され、サイヤ人を恨む者達がゴースト戦士として蘇っていたのだ。

デストロンガスは既に地球に充満し、人々は絶望の声をあげながら倒れていく。

植物は枯れ、都市機能は完全に麻痺し、もはや地球滅亡は秒読みだ。

誰もが悲観に暮れた目で黒く染まった空を見上げ、諦めが心を支配した。

故にその奇跡は鮮烈に人の心を魅了する。

まず空を貫いて地上に降り注いだのは白い流星群。

それが地球の至る箇所に仕掛けられたデストロンガス発生装置を守護者ごと破壊し、悟空達を追い詰めていたゴースト戦士を一撃で消し去った。

フリーザやパラガスは勿論としてボージャックですら例外ではない。

いかに強かろうと怨念で構成された紛い物の身体では今の彼女には太刀打ち出来ない。

強さ云々ではなく、戦いそのものが成立しないのだ。

ゴースト戦士達はこの世への未練を口々に叫びながら消失し、余りに突然の事に悟空達は呆然とし空を見上げる。

否、彼等だけではない。地球中の人々が空を仰ぎ見て、そして目にした。

暗雲を晴らして空より舞い降りる白の神の姿を。

『……………』

リゼットが手を薙ぐ。

すると元氣玉の輝きにも似た光が地上を満たした。

枯れた植物を蘇らせ、倒れた者を救い、絶望を希望へと塗り変える。

これだけならばまさに救済だっただろう。

人々の思い描いた神の救いそのものだった。

地球の人間達は彼女を敬い、拝み、頭を垂れる。

だがリゼットは手を掲げ、あろう事か第二波を——守るべき地球の人間へと向け
て発射した。

「なっ……!？」

悟飯が絶句し、信じられないという顔で空のリゼットを凝視する。

放たれた閃光は地上のあらゆる悪人——殺人者や強盗犯、盗人を貫いた。

殺したのではない。彼等の中の悪の気を完全浄化し、本人の意思を無視して無理矢理善人へと変えたのだ。

立ち上がった元悪党達はまるで人が変わったように己の行いを悔い改め、そして
気味が悪いくらいに目をキラキラと輝かせて平和を謳い始めた。

異なる世界の異なる未来の話となるが、魔界の王ダーブラが天国へ送られる事によつて過剰な更生をし、まるで人が変わったようになってしまったという出来事があつた。

今の現象はまさにそれと同じ。

悪の気を僅かすらも残さず根絶してしまう事で、完全に人を変えてしまった。

だがそれはもう、前のその人物ではない。とても同一人物と言えるものではなく、実質上殺してしまったも同然の行いだ。

それは余りにも彼女らしからぬ行いだった。

普段のリゼットならば決して行わない、押し付けの奇跡であった。

我慢ならなくなった悟飯は全力で空を飛び、リゼットの前へと躍り出る。

「止めて下さい神様！ どうしちゃったんですか!？」

こんな……地球の人達を攻撃するなんて!」

『……………』

……サイヤ人……悪しき存在……』

「——え?」

リゼットは感情をまるで感じさせない瞳で悟飯を見やり、感情の抜け落ちたような声で呟く。

そして彼に手を翳すと気合砲を放ち、悟飯を吹き飛ばした。

そのままいけば地球の成層圏を突き抜けて宇宙まで飛んでいったらう衝撃。だが悟空が割り込んで悟飯を受け止める事で、かろうじて大事にはならず済んだ。

しかしその威力はどうだ。

超サイヤ人2だったはずの悟飯が一撃で気絶し、黒髪に戻ってしまっている。

「お、おい！ 神様、何すんだよ！」

悟飯を殺す気か!？」

『……………』

「問答無用か!？」

リゼットが再び気合砲を放ち、悟空が咄嗟に避ける。

もはや確認するまでもなく解る。今のリゼットは明らかにおかしい。正気ではない。

彼女の異常を察したピッコロやトランクスも駆け付けるが、やはりリゼットの彼等を見る眼は虫か何かを見るような無感動なものだ。

断じて、仲間や守るべき対象へ向ける視線ではない。

「おい、孫！ 神の奴は一体どうしたんだ!？」

「わ、わからねえ！ だが普通じゃねえ事は確かだ！

しかも……普段とは比べ物になんねえほど強くなっている!」

『……ピッコロ大魔王……排除すべき……悪……』

リゼットがピッコロを悪と断定し、光の剣を放つ。

間一髪で避けるも、込められた気が普段の比ではない。

悟空達ではもうリゼットの気を感じする事は出来ないが、今の彼女がかつてない程に強い事は本能で分かる。

戸惑っている悟空達を余所にベジータだけは動揺せずに晒い、気を高めた。

「へっ！ 何のつもりかは知らんがやるなら相手になってやる！ ぶっ殺してやるぜ！」

「待って下さい、父さん！」

「消えろ！ ファイナルフラッシュ!!」

ベジータが遠慮なく全力の気功波を放ち、リゼットを攻撃した。

来るならばそれは敵だ。遠慮する理由がない。

その判断は極めて正しいものであり、正当防衛という点から見ても彼を非難するのは筋違いだ。

しかし戦力差の把握という意味では完全な誤りであり、バリアを纏ったまま煙の中から出てきたリゼットはベジータに無動作から発動する気合砲を発射して簡単に彼を吹き飛ばした。

空から地面へと叩き落とされたベジータはたったの一撃で意識を失い、黒髪へと戻る。

「ば、馬鹿な。悟飯に続いてベジータまでもが一撃で……」

「つ、強過ぎる……一体リゼットさんに何が……」

ピッコロが余りのレベルの違いに愕然とし、トランクスは強さの正体すらも掴めずに震える。

無論それを今のリゼットに聞いても答えは返って来ないだろう。

ならばその矛先が向くのは当然リゼットの後ろに佇む人造人間セルであった。

「セル、答えろ！ リゼットさんに一体何をしたんだ!？」

「ふふふ、私如きが何をするなどと、そんなおこがましい事を。」

究極の存在を前に完璧など何の意味も持たん。私はただ彼女の背中を押したただけだ」

「貴様……！」

「そう怒るな。これから始まる事は貴様にとっても悪い事ではない」

怒るトランクスを前に、セルはあくまで冷静なまま答える。

その彼の前ではリゼットを中心に黒い気が集い、彼女を取り巻いていた。

この氣に悟空は見覚えがあった。

かつてフリーザと戦った時、突然フリーザが最終形態になった時に見せたあの黒い氣だ。

リゼットが正氣だったならば、すぐにミラやトワが行っているのと同じ凶悪化による洗脳だと分かっただろう。

「セル！ 貴様、リゼットさんをどうするつもりだ！」

「真なる歴史の改変を始めるのだ」

「歴史の改変だ?!」

「そうだ。時の巻物を改変し、我等の時間を修正する。」

あの最悪の未来を……あの悲劇の全てを無かった事へと変える。

『彼女』が苦しまず……嘆かず、戦わず……そんな世界を、私が築いてみせる。私
が変えてみせる。

その為には彼女の絶対なる力が必要なのだ。

そう……時の界王神の介入すらも跳ね除けるほどの、全てを超えた神の力が！
トランクスにはセルの言っている事が全く理解出来なかった。

時の巻物だの、時の界王神だの、全く聞き覚えのないものだ。

だが時間の改変など出来るはずがない。たとえ過去を変えてもそれは新しい未来
が出来ただけで、既に存在する未来は何一つ変わらないのだ。

「セル、俺達の未来は何も変わらない！ 過去を変えても新しい平行世界が誕生
するだけなんだ！」

「だろうな。タイムマシンによる過去への介入ではそうなるだろう。ブルマは天才
だがやはり人間だ。

その限界を超える事だけは出来なかった。

だがなトランクス……未来を本当の意味で変える方法は存在する。

そしてそれこそが、時の巻物の改変なのだ。

『奴』は私にそう教えてくれた」

セルは壮絶に笑い、そしてリゼットを見る。

条件は全てここに整った。

神をも超える神域の大神。凶悪化とコントロール装置による二重の洗脳。

そして『奴』の時間を越える力。

これを揃えて過去を改変する事で、未来も変わる。

トランクスが過去に現われない時間軸は全てが絶望の未来へと到達する。

だがその起点へと彼女を連れて行けば時間軸は本当の意味で変わる。絶望の未来が救われる。

そうすれば、真の意味であらゆる未来が救済されるのだ。

当然邪魔は入るだろう。

時間を司る時の界王神。彼女の配下であるタイムパトローラーが必ずどこかで顔を出すだろうし、時の界王神自らが出現するかもしれない。

だがもう恐れる必要はない。たとえば時の界王神が来ようとも、もう今のリゼット

は止められない。

『……………』

だがセルは見誤った。

否、セルだけではない。彼の『協力者』もまた見誤ったのだ。今のリゼットの力を。

リゼットは無表情でセルを一瞥し、そして軽く気を解放する。

それだけで彼女を取り巻いていた黒い気は霧散し、額の制御リングが崩壊した。後に残るのは相も変わらず輝き続ける女神だけだ。

「なっ……………!?!」

『……………悪しき、気……………』

リゼットが手を翳し、セルへと向ける。

セルは咄嗟に避けようとするが間に合うはずもない。

放たれた極光がセルの半身を消し飛ばし、無慈悲に彼の計画ごと打ち砕く。

半分になってしまったセルは驚愕に顔を染め上げながら怨嗟の叫び声をあげた。

「馬鹿な……………話が違う……………!?!」

私を……私を謀ったのか!? 『ドミグラ』 アァアア!!」

何者かの名を叫びながら、セルは吹き飛んで行く。

彼女を制御する事など誰にも出来ない。

彼女を止める事も誰にも出来ない。

新たな神は今ここに目覚め、活動を開始した。

故に——押し付けの『希望』はもう止まらない。

ドミグラ「いや、その……私にとっても予想外だったというか……なんかごめん」

↑自分ならビルスも操れると本気で思っていた人

※別に騙してたわけではない模様。

クウラ「あの女に復讐する機会が……何? いない?

……なら俺の出る幕ではないな」

・クウラさん、やる気が出ずにまさかの帰宅。

【ドミグラ】

ドラゴンボールゼノバースのラスボス。

魔神を自称しており、超サイヤ人3の悟空を圧倒するほどに強い。

トワミラと同じく時間を股にかけて暗躍する男だが、トワの仲間ではない。

7500万年前にクロノアによって時の狭間に封印された。

ちなみにドミグラが時の界王神になってしまった歴史では意外にも真面目に職務に取り組んでおり、野心はさておき時の界王神になりたい熱意は本物だったらしい。

【戦闘力】

※精神と時の部屋2回目使用により、一部上昇。

・孫悟空…3億2000万

超サイヤ人…160億

・孫悟飯…3億

超サイヤ人…150億

超サイヤ人2…300億

・ピッコロ

基本戦闘力…3億↓4億5000万

界王拳（最大20倍）…90億

・タールス

基本戦闘力…1億↓1億7000万

超サイヤ人…85億

・ベジータ

基本戦闘力…9800万↓1億6000万

超サイヤ人…80億

・トランクス…9500万↓1億5000万

超サイヤ人…75億

・ナツパ

基本戦闘力…9400万↓1億3000万

黄金のヒゲ…65億

・天津飯…540万↓3600万↓7200万

第六十五話 サイヤ人絶滅計画④～予期せぬ救世主～

準最強タグ「さあて、仕事を始めよう。腕が鳴るな」

※準最強タグさん、絶賛活躍中

第7宇宙のどこかに存在するトキトキ都。

ここは時を司る界王神クロノアが治める、現世とは完全に隔絶した場所だ。

その中心部でありクロノアが暮らす刻蔵庫は今、緊張した雰囲気で包まれていた。

「まずいわね……まさかこんな事になるなんて」

最初に声を発したのは幼い少女だ。

肌は薄い桜色。髪は濃いピンクのショートカット。

尖った耳を持つ事と肌の色以外は比較的地球人に近い外観をしており、十分に可

愛らしい容姿であると言えるだろう。

少なくとも、フリーザフェイス十モヒカンというどこぞの同族よりは地球人に親

しまれやすい外見をしている。

だが見た目で判断する事なかれ。彼女こそがこのトキトキ都の頂点に位置する時の界王神クロノアその人なのだ。

その肩にはフクロウに似た白い鳥である『トキトキ』が留まり、心配そうに彼女を見ている。

「トー！ トー！」

「うん、わかってるわよトキトキ。このリゼットって子、まさかこんな領域にまで踏み込むなんてね。」

何でこんなのが辺境の惑星で神やってるのよ。他に回しなさいよ、他に。人材の無駄遣いすぎるわよこれ」

クロノアの前には現在起こっている出来事が——時間を司る場所でのこのような言い方は妙だが——リアルタイムで映し出されており、映像の中では悟空達がリゼットに手も足も出ずに蹴散らされている。

今はまだかろうじてリゼットの理性が働いているのか殺されずに済んではいるが、もし彼女がこのまま信仰に完全に吞まれて神として覚醒し切ってしまうとその

最悪の末路が訪れるのは想像に難くない。

「トワ達の仕業でしようか」

悩むクロノアに声をかけたのは銀髪の青年だ。

背中には剣を背負っており、歴戦の戦士の風格を漂わせている。

その隣には緑色の戦闘服を着た特徴的な頭髪のサイヤ人が立っており、腕を組んで事の成り行きを見守っている。

「自分で改変してやられたっての？ それは考えられないわね。

それにこれを引き起こしたのはセルでしょう？

多分誰か……トワ達と同じように時間に干渉出来る何者かがセルに入れ知恵したのよ」

これまで彼等『タイムパトロール』はずっとトワやミラが引き起こす時間の改変を監視してきた。

幸いにして、その時間軸に生きる人間達……とりわけゼットが自力で勝手に解決してトワやミラの計画を阻んでくれていたので出撃する事は滅多になく、悟空達の前に現われる事もなかった。

だが今回はそのリゼットが暴走してしまっている。

しかも、予想を遥かに超えたパワーアップをして。

その力はタイムパトロールの二人はおろか、時の界王神すらも遥かに上回っているだろう。

「ど、どうすればいいんですか？」

「……何とかして、あの宇宙中から念を集めている技を解除させるしかないわね。多分、強い衝撃を与えれば目が覚めて技を自分で中断してくれると思うんだけど」「なるほど、流星は時の界王神様。……それで、どうやって今のリゼットさんに衝撃を？」

「……………わからないわ」

強い衝撃を与えて一瞬でもリゼットを正気に戻せれば、後は勝手に本人が技を止めてくれる。

そこまでは分かったが、そもそもそれが出来れば苦労はしない。

今やりゼットはファイナルフラッシュすら容易く弾くバリアを常時展開している上に本人の防御力もミラの全力ラッシュを受けて微動だにしないレベルなのだ。

加えて身体が勝手に判断して避ける、とある技を発動していてそもそも攻撃すら当たらない。

クロノアの頼り無い返答に銀髪の青年が肩を落とすも、隣にいた男は「分かり易い」と呟いた。

「要するにブツ叩けばいいんだろう？ 簡単な事だ」

「そ、そんな簡単に……」

「いくと思ってるさ。今の所悪い未来は『視え』ねえしな」

黒髪の男の発言は、彼の持つ能力を知らなければ意味が分からないだろう。

しかしクロノアは理解しているらしく、「ふむ」と呟いた。

「どちらにせよ、今回は貴方達の出番が来ると思うわ。いつでも出れるように準備だけはしておいてね」

★

どうすればいいのだろう。

トランクスは構えを取ってはいたが、戦う気がまるで起きずに困惑していた。

何せ相手が相手だ。稽古などで戦うならばともかく、本気で戦うなど考えた事も

ない。

それに今のリゼットが相手では戦いそのものが成立するかも怪しく、実力の面でも精神的な面でも戦う気がまるで起きずにいた。

「おいお前等、ちょっと聞け」

ターレスが同じく構えながら、リゼットから視線を外さずに話す。

その声にもまた、いつもの余裕が感じられない。

悟空やピッコロも同様で、この戦いが絶望的な差の上に成り立っている敗北必至の戦闘である事を全員が理解していた。

「あの神さんだが、一体何があったのかは知らんがとても俺達がマトモにやって勝てる相手じゃねえ。」

だが、それにしちゃ攻めが鈍いと思わねえか？」

「確かなな。今のあいっなら俺達全員を一瞬で殺す事も出来るだろう。……実際それを可能とする技もあいっにはある」

ターレスの言葉に冷静にピッコロが相槌を打ち、相手が本気なら自分達は既に死んでいる事を素直に認めた。

その上で考えられる推測を冷静に紡ぎ出す。

「恐らくまだ、完全に目覚め切っていないのだろう。」

もしかしたら今なら、強いショックか何かを与えれば元に戻るかもしれない」

「そんな……昔の家電製品じゃないんですから」

「だがそれに賭けるしか俺達が生き残る道はないぞ」

考えて出てきた結論は『叩けば治る』であった。

何とも酷い脳筋な結論であり、これが正しいという保証もない。

しかし今はそれ以外に推測を立てる事も出来ず、このまま何もしなければ悪として消されてしまうだけだ。

「要するに全力で戦えばいいっちゅうこったな！」

「ま、そういう事だ」

シンプルな結論に悟空がやる気を漲らせ、ターレスが気を高める。

勝とうと思う必要はない。

ただ一発……一撃だけでも直撃させればいい。

その衝撃でリゼットの目を覚ます事が出来れば、そこで終わるかもしれないのだ。

悟空達四人は唯一の可能性に全てのチップを支払い、後の事など考えずに突撃を敢行した。

「うわああありゃああッ!!」

「トゥアアアアアッ!!」

まずは真正面からの攻撃。

悟空とピッコロが全力を込めて殴りかかる。

だが拳はリゼットまで届く事なく、彼女の周囲に展開されているバリアに阻まれて先へと進めない。

だがこんなのは予想通りだ。二人は一撃で諦める事なく何度も猛攻を仕掛けた。攻撃の悉くが阻まれ、攻撃している拳や足が逆に傷付くがおかまいなしだ。

「はあああッ!」

「そらああ!」

「おらあッ!」

両側面からトランク스와ターレスが突撃し、猛攻を仕掛ける。

背後からはナツパがりゼットを羽交い絞めにしようと接近した。

だがこれも届かない。全てがバリアに阻まれてしまっている。

リゼットは無表情でその無駄な努力を見詰めていたが、やがてピッコロに照準を合わせて右手の指先を向けた。

「ッ、今だ！」

ピッコロが叫ぶと同時にリゼットの指先から放たれた閃光が彼の胸を貫通した。だが悟空達4人はピッコロの事を心配すらもしない。

むしろ逆。ピッコロへ攻撃した瞬間こそを好機とし、リゼットへ一斉に攻撃を仕掛けたのだ。

悟空、ターレス、トランクス、ナッパの4人は全力で乱打を放つ――が、一体どういうわけなのか、まるで当たらない。

確かにリゼットは元々回避能力に優れている。長年の経験で培ってきた技術は驚異的で、あのブローリーの猛攻すらしばらくは無傷で凌いでいたほどだ。

しかしそれでも、ここまで馬鹿げてはいなかった。

まるで身体が勝手に判断して避けているかのように、悟空達の攻撃が掠りすらしないのだ。

しばらく悟空達の攻撃を避けていたりゼットだが、まずトランクスを視界に入れて超能力で彼を吹き飛ばした。

更に空いている左手でターレスの攻撃を掴み、即座に投げて悟空へとぶつける事で悟空の攻撃をも止めた。

最後にナッパの頭を掴んで高速で揺さぶり、失神した彼を投げ捨てる。

見事にいなされてしまった3人は、しかし確信を抱いた表情で空中に踏み止まった。

「やはりな。攻撃時にはバリアも解除されている」

「ああ。あの固えバリアを破る事は出来そうもねえが、神様が攻撃に移る一瞬だけはオラ達の攻撃を当てるチャンスもあるってわけだ」

ターレスと悟空は冷静に話し合いながら、落ちて行ったピッコロを見る。

彼は撃墜されてしまったが、気は健在だ。

どうやら落ちた後に仙豆を食べて復活し、今は悟飯とベジータを復活させるべく彼等の元へ移動しているようだ。

ナッパもそのうち復活する事だろう。

リゼットは自分の防御が攻略されかけている事に気付いているのかいないのか、不思議そうに首をかしげ、そして思い付いたように掌を合わせた。

すると彼女の周囲に無数の光球が生まれ、それぞれが人の姿を形作る。

「――HEROES・GOD MISHION」

怨念を集める事でゴースト戦士が誕生する。

それと同様にリゼットは人々の意思を集める事で死した勇者を一時的にこの世へ召喚したのだ。

だが光の意志によって集った彼等はゴースト戦士などでは断じてなく、言うならばそれは英霊。

かつて地球の礎を築いた歴代の地球の神々がそこにいた。

命と引き換えにピッコロ大魔王を封印した老武術家がいた。

古の魔人と戦い命を散らした3人の界王神がいた。

己の身を犠牲として魔神の半身を封印していた勇者の弟がいた。

惑星を守り、育んで来た星々の神がいた。

サイヤ人やフリーザ一派に立ち向かい、無念にも死に追いやられた宇宙の戦士達

がいた。

悪しきサイヤ人に立ち向かうために立ち上がった正しきサイヤ人達がいた。彼等の希望たる正しきサイヤ人の神がいた。

そして数え切れない程の、かつて正義の為に戦い散っていた宇宙の強者達がそこにいた。

「……そりゃねえだろ、神様」

空を埋め尽くす光の戦士達を前に悟空が頬を引き吊らせる。

相手の手数を殺すのに自らも手数を増やすのは常套手段ではあるが、それにしてもこれは酷い。

しかもリゼットの気で構成されているからか、彼等の戦闘力もまたリゼットに合わせて高まっており、一人一人が悟空達を遥かに凌駕する勇者の集団だ。

そんな連中が一斉に悟空達へと飛びかかり、ただでさえ完全に傾いていた戦況が尚も傾いた。

例えるならば、もう傾きようなないシーソーが地面に埋まって直立してしまう勢いだ。

いや、もしかすると地面を抉って1回転くらいしたのかもしれない。

酷い例えではあるが、それほどに戦力差は絶対的であった。

悟空達も必死に抵抗するが、数と質を揃えられてはどうしようもない。

瞬く間に光の軍勢に吞まれ、蹂躪されていく。

一瞬で悟空達はボロボロにされ、胴着は破れ、戦闘服は破壊され、血の放物線を描きながら人形のように飛んで行った。

先ほどまでデストロンガス発生装置があつた電波塔にかろうじて不時着するもりゼットの攻撃は止まらない。

手を振る事で英霊達が帰還し、変わりに無数の光球がリゼットの背後に並んだ。そしてその全てが一斉に発光し、彼女の大技の一つでもあるレイジングブラスト発射の構えへと入る。

もし放たれれば、一発でも悟空達を消し飛ばして余りある気功波の、千発を超える一斉掃射だ。

地球への被害に関しては恐らく、地面に落ちる前に亜空間で回収する気なのだろう。まるで躊躇する様子を見せない。

「Ultimate blast」

かくして放たれる、千を超えるレイジングブラスト。

一発一発、その全てが普段のリゼットとは比較にならない超威力であり、まさしくそれは絶対の死を齎す光の豪雨であった。

もはや悟空はその光景を前に笑う事しか出来ない。こうまで差がありすぎると悔しさも沸かなかった。

神に齒向かう者に与えられる当然の結末、避ける事など出来ない破滅の末路。

それを思い知らせるように光の雨は悟空達を一瞬で呑み込み、地上へと降下していく。

だがそれらが地上を撃つ事はない。悟空が予想した通りに亜空間が開き、全ての光を飲み込んでその攻撃は全てデッドゾーンの中でまだかろうじて生きていたガーリック Jr. へと直撃、爆砕した。

『……………』

敵対者を全て葬ったりゼットは無感動に視線を動かし、そこに誰もいない事を確認する。

そしてふと、妙な感触を覚えて自らの頬に触れた。

指先に付着していたのは水滴だ。

そこでようやく彼女は自らが止め処なく涙を流していた事に気づき、不思議そうに首をかしげた。

「つたく、泣くくらいならやるなつての、あんな攻撃」

横から聞き覚えのある、だが粗暴な声が聞こえてリゼットは視線を動かした。そこにいたのは男だ。

悟空と良く似た特徴的な頭髮に、頭に巻いた赤いバンダナ。

サイヤ人やフリーザ軍が好んで着る戦闘服の色は緑と黒。

顔には仮面を付けているが、避け切れなかったのか亀裂が走り、砕けかけていた。壊れた仮面から覗く左頬には十字の傷が刻まれ、その両脇には気絶した悟空とターレスを抱えている。

『……？』

「俺が誰かってか？ そうだな……タイムパトローラーってやつらしいぜ。

お前もよく知ってる野郎にドラゴンボールつてので呼び出されてな。時間を乱す

連中を取り締まる仕事をしてるんだ。

ま、俺もフリーザの野郎にやられてから過去に飛んだり色々あったから、こっちにとっても呼ばれたのは好都合だったんだがな。

なあ？ ……トランクス」

『……………！』

男の声にリゼットが僅かに驚いたように反応し、後ろを見る。

そこにいたのは果たして、男の呼んだ通りトランクスという名の青年だった。

だがその服装は緑色のセーターであり、加えて髪型が今のトランクスとは異なる。

トランクスは精神と時の部屋で修行して以降は長髪を首の後ろで束ねているが、

彼はまるで最初の頃のトランクスのような短髪だ。

それに気のせいか、少しだけ成長しているようにも見えた。

「無駄話をしている暇はないですよ——バーダックさん」

トランクスもまた戦士を抱えており、彼が持っているのはナッパと自分自身だ。

彼等は近くの建物の屋上に悟空達を放り投げると、同時に超サイヤ人へと変身する。

バーダックと呼ばれた男の仮面が完全に碎け、その素顔を覗かせる。

果たしてそこにあったのは、悟空と瓜二つの……しかし彼よりも好戦的に歪む顔であった。

「悪いが、あんなのでも俺のガキと弟子なんだ。

そう簡単にやあ殺らせねえよ」

彼は獣のような野生的な笑みを浮べ、拳を強く握った。

ゼノックス「強い人を！ 俺と共に戦ってくれる強い人を連れて来て下さい！」
神龍「おk」

バーダック「……ここはどこだ？ 俺は確か昔の惑星プラントにいたはずだが」

ゼノックス「ご、悟空さん!？」

こんな事があったとか無かったとか。

というわけで、ゼノバース主人公の位置にいるタイムパトローラーは予想されていた通りバーダックです。

ちなみにトランク스가緑のセーターなんてダサイ恰好をしているのは、コート
リゼットに貸したままだからです。

それとベジータは描写されてないだけでちゃんとピッコロさんが拾って助けてま
すのでご安心を。

【戦闘力】

・バーダック

基本戦闘力…4億6千万

超サイヤ人…230億

超サイヤ人2…460億

・トランクス（ゼノバース）

基本戦闘力…4億5千万

超サイヤ人…225億

超サイヤ人2…450億

【アルティメット・ブラスト】

神域化したリゼットが放つレイジングブラストの上位技。

光球をアホほど浮べてアホほどレイジングブラストを発射し、光の豪雨で何もかもを消し飛ばす。

その一発一発が、普段のリゼットのレイジングブラストを遥かに上回る威力を有している。

いうならば、かめはめ波などの気功波を全く同じタイミングで一斉にグミ撃ちしているようなもの。混ぜるな危険。

ヘブンズゲートと併用してのレイジングブラスト・ワームスマッシュとかも出来る。

技名の由来はゲームのアルティメットブラストから。

気の消費量がおかしいので、無限に等しい気を得ている神域時しか使えない。

つまり味方に戻ったら使えなくなる。

【ヒーローズ・ゴッドミッション】

神域化したリゼットが人々の念や気を集めてリゼット版ゴースト戦士を大量召喚する技。

戦士の強さは個人差があるが、リゼットにより全員が疑似的な神域へと押し上げ

られている。

つまり全員が疑似超サイヤ人ゴッド状態。何それずるい。

技名の由来はドラゴンボールヒーローズ・ゴッドミッションから。

もしかすると平行世界の『アバター』さん達の何人かはここに紛れ込んでハッスルしているかもしれない。

気の消費量がおかしいので、無限に等しい氣を得ている神域時しか使えない。つまりこれも味方に戻ったら使えなくなる。

何で敵の時だけこんな意味わからん強さなんだ、こいつ……。

第六十六話 サイヤ人絶滅計画⑤

エイジ737。かつて惑星ベジータを消し去ろうとしたフリーザにたった一人で戦いを挑んだ戦士がいた。

男の名はバーダック。孫悟空^{カカロット}の父であり、そしてターレスの師でもあった男だ。下級戦士ではあったが幾度も死線を潜りぬけた事により、その戦闘力は当時のサイヤ人としては間違いなく最強の一人に数える事が出来るだろう。

だが当時のサイヤ人最強程度でフリーザに及ぶはずもない。彼はフリーザの放った巨大な火球に吞まれ、息子の名を叫びながらその命を散らした。

——はずだった。

だが運命は惑星ベジータを見放しても、彼を見放す事はしなかった。

スーパードラゴンに吞まれる直前に開いた時空の裂け目。ワームホール。

そこに間一髪で吞み込まれた彼は一命を取りとめ、過去へと飛ばされてしまったのだ。

恐らくはミラやトワが何度も時間改変を試みているが故に時空に歪みが生じてい

たのだろう。

ここで彼が生き残るのは決して正史ではないはずだ。

だが彼は生き延びた。

過去の世界へと漂流してしまった彼は後の惑星ベジータである惑星プラントに住む住民から手厚い看護を受けて傷を癒し、そこで起こったフリーザの先祖であるチルドとの戦いを経て超サイヤ人へと覚醒。見事チルドを撃退してみせた。

しかしそこでめでたしめでたし、とならないのが彼だ。

チルドを倒したバーダックはある日、突然に再び時間を越える事になる。そして着いた先は時間から切り離された特異点……トキトキ都であった。

「強い人を！俺と一緒に戦ってくれる強い人を連れて来て下さい！」

トランクスが願ったのは、強い戦士であった。

今リゼット達が戦っている時代よりも更に未来。

彼はタイムマシンで過去を改変した罪を問われ、贖罪として時の界王神の下で働く事を義務付けられてしまった。

だがこの宇宙全体の命運をも分ける孫悟空達の戦いはいわば歴史の中心であり、トランクスはそこに深く関わってしまったている。

したがって彼自身が戦いの場に赴く機会は殆どなく、故に彼は望んだ。

自らに代わり時間を守ってくれる強い戦士を。

悟空やベジータ、リゼットや悟飯を守ってくれる心強い仲間を。

そしてその願いを神龍が叶え、現われたのが時間の迷子であるバーダックであり、彼もまた不可抗力とはいえ過去を変えてしまった罪によりタイムパトローラーとしての仕事を与えられる事になったのだ。



バーダックが裂帛の叫びをあげて突貫する。

手には気を変質させた炎を纏い、女性相手だろうと一切遠慮のない全力の右拳を放った。

いや、遠慮がないというのは間違いだ。正確には遠慮出来る相手ではない、というのが正しい。

バーダックの渾身の『ヒートフラックス』はりゼットのバリアに阻まれて届か

ず、いくら力を込めてもビクともしない。

だがその時バーダックは『視た』。この直後にバリアを解除して己の心臓を閃光で貫く地球の神の姿を。

「ちいっ！」

リゼットがバリアを解除するよりも早くバーダックが避ける。

直後にリゼットが指から閃光を放つも、既にバーダックは回避動作に入った後だ。いかに速い攻撃だろうが攻撃前に避けられてしまえば当たるはずもない。

互いの実力差を考えるならば避けるなど出来るはずもない。回避動作が間に合うわけがない。

その不可思議にリゼットは首をかしげる。

『……………？』

だから今度は連射した。

放たれた閃光は空中で拡散し、十の閃光となる。

更に十の閃光が枝分かれして百に。百は千に、千は万に、億に。

一発一発全てが防御など容易く貫通してバーダックを蒸発させ得る破滅の鉄槌。

光が雪崩となって押し寄せ、だがバーダックは滝のような汗を流しながらも縦横無尽に飛び回って見事に全弾回避してみせた。

放たれてから動いたのでは絶対に間に合わない光速を超えた気の一閃。

それを必死の表情で全て、撃たれるよりも早く動く事で回避し切る。

「冗談じゃねえ！ 攻撃全部が当たれば即死っておかしいだろ、この女！

さっきから何度俺に『死の未来』を視せるつもりだ！

俺じゃなきゃあ今なので225回目の死亡だぜ！」

バーダックの脳裏には先ほどから、決して気分のいいものではない己の死に様が視えていた。

頭を打ち砕かれて死ぬ未来。心臓を貫かれて死ぬ未来。顔を貫かれて死ぬ未来。

何度も何度も、リゼットが攻撃動作に入るたびに死の未来が頭を過ぎる。

しかも一つの攻撃で何度も何度も、だ。

攻撃を受けて生きている未来が一つも出てこない。

かつてバーダックは侵略したカナッサ星の人間により、未来を予知出来るようになる幻の拳を受けた過去がある。

これは決して避け得ぬ運命を見せる事でバーダックを苦しめる為のものであり、事実バーダックはその通りに運命を視た事で苦しみ抜いた。

だが運命から外れた今、カナッサ星人により無理矢理与えられた未来予知の力は今や完全にバーダックのものだ。

ほんの短い間ならば、という前提条件は付くが自らの意思で未来を視る事も今の彼ならば出来る。

本来これは絶対の優位と絶対の回避を彼に約束してくれるものだが………それを使い続けても尚、回避に徹するのが精一杯！

攻撃に転じる事が出来ない。転じた先の未来が全て『死』で閉じてしまっている。迂闊に視界に映り続ければ超能力で心臓か脳を止められて殺される。

迂闊に攻めればカウンターで殺される。僅かでも動きを止めれば気弾で殺される。

亜空間が幾度となく開き、全包围から即死必至の気弾が何度も発射される。

冗談じゃない、なんだこのふざけた女は。

これと比べればまだ、彼等の大敵であるトワやミラの方が可愛くなってしまう。

だがやはり完全に暴走し切っているわけではないらしい。

バーダックと異なりトランクスは先ほどから何度もしゼットの視界に入っているが超能力で即死させられる気配もない。

攻撃もどこか適当で、少なくともバーダックに向けているような完全に殺す気全開の攻撃ではない。

トランクスが二人いる事に困惑しているようだが、とりあえずあれならばギリギリ殺されずに済むかもしれない。

「どうするよトランクス。こいつは俺達の手にも負える相手じゃねえぞ」

「とにかく時間を稼ぐんです！ 何とか悟空さん達全員が回復するまで稼げれば……」

「この女を相手にか？ そりゃあ無理ってもんだ」

バーダックはトランクスの案を一蹴する。

残念ながら時間稼ぎは不可能だ。むしろそんな事をすれば更にこの女は手数を増やして攻撃してくるだろうし、未来を予知して逃げるにも限度がある。

いくら未来を視ようと、回避出来ないほどの広範囲攻撃などを行われたらどうし

ようもないのだ。

ならば道は一つ。それらの攻撃をされる前に正気に戻すしかない。

「聞け。あいつは攻撃の瞬間だけバリアを解除する。」

俺が囷になるからお前が攻撃を撃ち込むんだ」

「し、しかし……」

「なあに、ヘマはしねえさ。俺を誰だと思ってやがる」

バーダックは自信に溢れた笑みを浮かべ、気弾を放つ。

当然それはリゼットには当たらない。全てが遮断されるだけだ。

だが今度はそれに合わせてバーダックが突撃。

上手くりゼットの視界に入らないようにしながらバリアへ猛攻を仕掛けた。

『……………』

リゼットがバリアを解除し、バーダックの腕を獲る。

だがこの展開は折り込み済みだ。

バーダックは予定通りに進んだ事に口の端を歪め、掴まれている腕でリゼットに殴りかかる。

だがその瞬間に腕を捻られて上下反転し、更に関節を外された。

しかしそれも折り込み済みだ。

関節の一つや二つなどくれてやる。

バーダックは腕を極められたまま強引にリゼットの後ろへと跳び——その際、掴まれたままの腕が不吉な音を立ててへし折れた——残った片手でリゼットを後ろから抱き抱えるように拘束した。

腕を掴まれたまま関節の駆動を無視して動き回ったせいで骨が皮膚を突き破ってしまっているが、その代償を払った価値はあった。

腕一本でこいつの動きを少しでも止める事が出来るなら容易いものだ。

「今だ、俺ごと撃てえ！」

「し、しかし！」

「さっさとしろお！ 傷は仙豆で治る！ やれええ！」

こうしてリゼットを拘束していられる時間など、本当に極僅かだ。

ものの数秒もあれば簡単に振り解かれてしまう事は自分で分かっている。

トランクスはすぐにその事に気付き、気功波を発射する。

だがりゼットには相変わらず動揺も驚愕もない。

自らを後ろから抱えているバーダックの片腕を獲ると、彼の必死の抵抗など存在しないかのように身体ごと投げ飛ばしてトランクスの気功波へとぶつけた。

まさかのフレンドリーファイアだ。

トランクスの気功波がバーダックを撃ち、リゼットには全く届いていない。

更に、これを好機と見たリゼットはバーダックを仕留める為に大技の構えへと入る。

背中の光輪が一際強く輝き、まるで重力から解放されたかのように垂直に浮遊。手の中に小さな白い輝きを生み出し、空から降り注ぐ光がスポットライトのように彼女と地球を照らし出す。

『……サイヤ人……抹消……』

手の中に生み出されたのは神の気を集めて創り出した『破壊』のエネルギーだ。その余りの力にリゼット自身が重力場と化し、周囲一帯が無重力となって瓦礫が浮き上がる。

光は小さいが、しかし直撃すれば銀河すら消し飛ばして余りある神の一撃だ。

そこにコントロールを加え、悪しき者のみを破壊するよう調整する。

繊細極まりないコントロールによって実現する、本家の破壊神ですら不可能な『対象指定広範囲破壊』……その攻撃範囲は北の銀河全域だ。逃げ場など何処にもない。

「俺に攻撃が当たらねえから大技で仕留めに来たな？ ……狙い通りだぜ。

そんなデケェのを準備してたら、避けられねえだろ？」

『……？』

しかしそんな絶望的な光景を前にしながら、バーダックは勝利を確信したように笑った。

その視線の先にあるのは先ほど悟空達を放り投げた建物の屋上であり——そこでは、今まさに攻撃の構えに入った悟空の姿があった。

そう、全ては計算通り。

このタイミングで悟空が復活するのも、リゼットが大技の構えに入るのも全て『視た』通りの事。

あれだけの攻撃を撃とうとしているならばバリアはなく、更にあの妙な自動回避

も活動しない。

故にここが、唯一にして最大の勝機だ。

「波アーッ!!」

ピッコロに与えられた仙豆によって復活した悟空の渾身のかめはめ波がリゼットを強襲し、彼女を呑み込んだ。

ダメージは……ない。

残念ながら今の悟空とリゼットの差では直撃してもダメージが通らないのだ。

服の裾すらも破れておらず、埃の一つも被っていないその姿は、たった今かめはめ波の直撃を浴びたとはとても思えないだろう。

この衝撃は、いつぞやのブロリー以来か。

リゼットは悟空へと視線を移し……しかし、そこで動きが止まった。

「……………」。

……悟空、君……?」

悟空の全身全霊の一撃はリゼットを倒すには至らなかった。

それどころかダメージにすら至っていない。

だが確かにその魂の一撃は彼女に響き、強い衝撃となって駆け抜けたのだ。

リゼットの目に光が戻り、手の中の光と背中の中の光輪が消滅する。

今まで彼女を神域へと引き上げていた技法『ゼノバース』を彼女自らが解除したのだ。

「へっ。世話かけやがって」

「でもよかった……リゼットさん」

「さて、これで俺達の役目は終わりだ。トキトキ都に帰るぞ」

リゼットが元に戻った事を確認し、バードダックと緑セーターのトランクスが姿を消した。

瞬間移動や亜空間移動ではない。この世界そのものから姿を消してしまう、トワやミラが使うのと同じタイプの転移だ。

リゼットは彼等を呆然と見送った後、下の建造物……その屋上を見る。

そこには確かに仙豆で復活したトランクスがおり、こちらを見上げていた。

あそこにいるのもトランクス。今助けてくれたのもトランクス。二人はトラキユア。

……意味がわからない、何故二人いる。

「神様！　よかった、目え覚めたんか？」

「え、ええ……どうやらご迷惑をおかけしたようで……」。

その、状況はまだよく分からないのですが……今、トランクス君が二人いませんでした？」

「ああ、オラもそう見えた。別の未来のトランクスなんかな？」

それに、トリゼットは思う。

あのトランクスは気のせいかな、少しだけ成長していたように思う。

もしかして更に未来のトランクスなのだろうか。

だがそれ以上に意味がわからないのが、トランクスと一緒にいた男だ。

……あれ、バーダックだった気がする。

悟空やターレスと似た顔立ちに緑混じりの戦闘服、そして赤いバンダナに頬の十字傷。

どう見てもバーダックです。本当にありがとうございました。

ずっと昔に死んだはずのバーダックが何で超サイヤ人になってトランクスと一緒に

に出て来るんだろうか。さっぱり状況が掴めない。

「……皆……その、今回は本当に申し訳ありませんでした」

目を伏せてリゼットが悟空達に頭を下げる。

今回の件は完全に自分の安易な決断が原因だ、とりゼットは考えている。

セルなどの甘言に乗せられ、危険だと薄々分かっていた欠陥技を使用し、その結果暴走を引き起こした。

一方のトランクス達は、今回の事はセルが起こした事だと分かっているのでリゼットを責める気にはならない。

だからといって『気にしない』などと言えば逆に彼女は気を遣わせてしまったと思い、更に気に病むだろう。

結果として何を言えいいかも分からず、ピッコロはとりあえずベジータに仙豆を与えなくてよかったと内心考えた。

もしここにベジータがいたら、今頃罵倒三昧だっただろう。

とりあえずこのゴタゴタが片付くまではベジータはこのまま気絶していてもらおう。

「いや、神様ホント凄かったなあ！　オラ全然勝てなかったぞお！」

そうして重苦しい沈黙が流れかけたところで、普段よりも幾分かテンションの高い悟空の声が場の空気を破壊した。

責められると思っていたし、それが当然だと思っていたリゼットは呆気に取られたように瞬きをする。

「なあ皆！　そうは思わねえか？」

悟空は一度リゼットに背を向けて仲間達を見回し、片目を閉じる。

それを見てピッコロはすぐに悟った。

なるほど、悟空にしてはなかなか気を利かせている。

思わず口の端が緩み、この場はあえて彼に乗って道化を演じる事を決めた。

「確かにな。今まで感じた事もない凄いパワーだった」

「ま、実際助かったと言やあ助かったしな。あのままだったら俺達全員がゴースト戦士に殺されていた」

「僕もそう思います」

「そ、そうですよ！」

「結果的には誰も死ななかった。それでいいじゃねえか」

ピッコロ、ターレス、トランクス、悟飯、ナッパが悟空の盛り上げた空気続いた。

それからナッパは、下でまだ気絶しているベジータを回収しに降りていく。

とりあえず余計な事を言う前にベジータだけ帰しておこうとでも思ったのだらう。

「……あの、怒らないのですか？ 私は皆を……」

「何の事だあ？ オラ難しい事はわかんねえぞお！」

悟空は馬鹿っぽく振舞うが、決して馬鹿ではない。

子供の頃の彼ならば本当に今ののような反応をしたかもしれないが、今の彼は人並みに空気くらいは読める。

つまり、わざとそう振舞ってリゼットが気にしないようにしているのだ。

その事に気付き、リゼットも微笑む。

「悟空君……ありがとう」

「そんな事より神様、オラ腹減っちゃった。何か食わせてくんねえかな？」

「ええ、いいですよ。今日は好きなだけ食べて行って下さい」

せつかく悟空が道化になってくれたのだ。

ならばここは、その好意に素直に甘える事にしよう。

リゼットは地面に倒れているセルを見付けると気のリングで拘束し、念力で引っ張り上げる。

とりあえず今回の一件で彼の本性は暴露した。

醜態を晒させてくれたお礼として、知っている情報を何から何まで搾り取ってやるくらいのお返しは必要だろう。

先代様「ハァー、ハァー……た、助けに来たぞ、リゼット！　今こそ老体に鞭打つ時！」

ポポ「神様、もう大丈夫！」

カリン「後は儂らに任せよ！」

人參化「あの時の恩を返しましょう！」

ピッコロ「……来るのが遅すぎる。もう終わったぞ」

先代ズ「えっ」

※リゼットの異常に気付き、全力疾走して来た援軍の図。尚、遅かった模様。

本当は先代様が登場してピッコロさんと融合してリゼットを止める展開も考えていたのですが、ドラゴンボール維持の為に、それをやったらリゼットに後悔が残って重くなるのでやめました。

ついでにバーダックの印象も薄れてしまいますし。

【サイヤ人……抹消】

スパロボの強ユニットによくある垂直移動。フワー→

撃とうとしていたのはラスボス仕様のスパーク・メテオ。

【カリン様戦法】

感想欄で言われていた『カリン様投げりやいいんじゃない？』は実はマジで有効。オートモードのリゼットは地球の善人には攻撃しないので、カリン様ならばノースクでリゼットを叩き放題。

猫パンチ連打で元に戻せた。

ちなみに同様の理由でポポもポポパンチ連打で正気に戻せる。

先代様も先代パンチ連打でOK。

ただし人参化だけは前科があるので善人化ビームの餌食となる。

第六十七話 青い風のHOPE

トランクスに伝えられた敵のうち、人造人間、メタルクウラ、ブロリー、ハッチ
ヒヤックとの戦いは終わった。

ボージャックもついでに倒してしまったので、これですばらく地球の脅威となる
敵は出ないだろう。

まだバビディ一党やヒルデガンなどは七年後に出て来るはずなのでとりあえず
は落ち着いたと見ていい。

ブロリーも完全に消し去ってしまったので再登場やバイオブロリーの登場もない
だろう。

つまり魔人ブウさえ復活させなければ後はヒルデガンくらいしか主要な敵はい
ないわけだ。

……いや、未来である世とこの世のバランスが崩れたという事はジャネンバもい
るはずだ。

とりあえずこれは後である世に一度立ち寄って、そこの職員の怠慢を閻魔に報告

しておくべきかもしれない。

上手くすれば事前に防げるはずだ。

「と、いうわけで今後地球に訪れるだろう敵は7年後の魔導師バビディの一派と魔神ヒルデガンだけとなります。皆、本当にお疲れさまでした」

ガツガツと食事を平らげて行く悟空達にリゼットが労いの言葉をかける。

まだ完全に地球の危機が去ったわけではないが、それでも一つの嵐は乗り越えた。それを祝して彼等に神殿の食事を振舞っているのだが、この分だと全てが彼等の胃の中に消えてしまう気がする。

まあ、この神殿の中には植物や野菜を育てる場所もあるしリゼットの気を注ぎ込めば果物などはすぐに実るので食料に困る事はない。

そもそもリゼット自身も元氣玉モドキで太陽や地球から少しずつ生命エネルギーを分けてもらって生活しているので食事の必要すらないのだ。

欠陥技という事が判明した元氣玉モドキ——ゼノバースだが、全開出力で使いさえしなければ全く問題は起こらない。

逆に言えばフルパワーで発動してしまえばまた神域化しての暴走モードに突入

してしまう可能性もあり、今後は全力使用だけは封印するべきだろうというのがリゼットの決定であった。

「いえ、リゼットさん。まだ肝心な奴が残っています」

サイヤ人にしては小食なトランクスがジロリと床を見る。

そこには気のリングで拘束されたセルが目を開けて座っており、ヤムチャやナッパに取り囲まれていた。

「さあ話してもらうぞ、セル。お前が言っていた真の歴史の改変とは何なのかを。そしてお前が叫んだ『ドミグラ』とは一体誰の事なのか、洗いざらい全てな」

「……よかろう。どのみち私の計画は失敗に終わった。

今となっては全て吐いてしまっても何も変わらん。

といっても、語る事はそう多くないのだがな」

セルは諦めたように笑い、目を開く。

その瞳にはもう何も映っていない。

希望も、野心も、未来さえも。

全てを懸けた計画が頓挫し、そもそも最初から成功しようがない稚拙極まりない

ものだったと思ひ知らされた。

結局のところ己は失敗以外有り得ない計画の為に動いていただけであり、ただの道化でしかない。

それを理解した今、セルは何もする氣力がないのだ。

「以前も語ったが、私の本来の目的である孫悟空抹殺は未来の貴女が取り除いた。故に私は私自身で目的を作り、貴女を護り貴女の敵を討つ事を己に課した。だが、それを果す事は出来ず、果す機会すらも得られなかった」

「……ええ、それは知っています。しかし問題はそこからです。

ずっと疑問だったのですが、今ここにいる私を護ったところでそれは未来の私を救う事には繋がらない。

貴方が守りたい『リゼット』は今ここにいる私ではありません。だというのに過去に来て、一体何の意味があるのか……私はずっとそれが腑に落ちませんでした」

「貴方が護りたかったのは私ではない。そうですね？」

「……その通りだ、過去の義母よ。私は貴方を護りにこの時代まで来たのではない」

セルの返答に対し、リゼットは特にこれといった失望などを感じる事はなかった。

正直な話、薄々予感はしていたからだ。

最初に聞いた時からずっと違和感があった。

たとえ同一人物だろうと、未来が分岐してしまうこの世界において未来の自分と今ここにいる自分は決して同じではない。

ならば、いくらこの時代で敵を倒してもセルの目的は絶対に果せないのだ。

そうである以上、必ず他の目的がある。自分を護るというのはそれを隠すためのフェイクでしかない。

薄々、それは分かっちゃまっていた。

「男が、私の前に現れたのだ」

「男？」

「そうだ。三叉に分かれて逆立った赤い髪に、青い法衣。血の気のない肌、髑髏のような杖。

奴は自らを時を統べる魔神、ドミグラと名乗った」

「……魔神、ドミグラ」

知らない名前だ、とりゼットは困惑した。

全くもって全然聞き覚えがない。

全劇場版、ゲーム、GTまでも含めて知っているはずだが一切全く記憶に引かない。

もしかして海外で描かれていたという同人誌のキャラだろうか？

「奴は私に語った。『終わりと始まりの書』を改変すれば真なる歴史の改変も可能だ。」

パラレルワールドなどでなく、本当の意味で私やトランクスのいた未来が変化すると、な」

「終わりと始まりの……書……」

「だがそれには大きな障害が立ち塞がるとも奴は言った。

時の界王神に目を付けられ、タイムパトローラーを送り込まれるとな」

タイムパトローラーとか、どこのドラえ○んだと思わず突っ込みそうになった。

何だかどんどん自分の知るこの世界の根本的な部分が崩れていく気がするが、とりあえず続きを聞く事にした。

「それに対抗する為の絶対的な力として、貴女を神域へと導く事が奴と私の計画だった。」

そうして無敵となった貴女を連れて私の世界の過去へ戻り、改変を引き起こす。そうする事で未来の世界を完全に救済する……それが私の願いだったのだ」

「……………」

「だが、それは阻まれてしまった。私にはもう何も残っていない。

……殺すがいい。君達にはその権利がある」

全てを語ったセルは項垂れて目を閉じる。

もう話す事は全て話した。煮るなり焼くなり好きにしろという事だろう。

だがりゼットは彼を殺す気がなかった。というよりも殺す気が起きなかった。

確かに彼に利用されてしまったし、彼のせいで悟空達に攻撃してしまった。

だが動機を聞けば、やはりその根元には未来の自分がいて、彼は彼なりの方法で救おうとしてくれていたのだ。

「望み通りぶっ殺してやるぜ！」と叫ぶベジータを手で制し、リゼットはセルの前へと一歩踏み出す。

「セル。過去は変えられなくとも、未来を変える方法があります」

「どこかで聞いたような言葉だ。過去を振り返らずに未来を生きろとも言うつもりか。」

……無理だな。私は今のままでは前へと進めん」

「別にそんな精神論を語るつもりはありません。物理的に絶望の未来を救う術があると言っているのです」

「何？」

セルの目に僅かに光が戻る。

どうやら興味を示してくれたようだ。

これから話す事は実の所、可能であれば最後まで伏せておきたかった情報ではある。

無闇にそれを頼るのは危険だと分かっているからだ。

だがここまで頑張り、禁忌にまで手を伸ばしてしまった彼を見ると、少しくらいは助け舟を出してやりたくなってしまおう。

「大昔、それこそ何百年も前の事になりますが、ナメック星を異常気象が襲った事

は貴方も御存知かと思ひます」

「……ああ、知っている。それが原因で先代が地球に來た事もな」

「以前、ナメック星の最長老さんから聞いたのですが、その時に宇宙船に乗って逃れた者は先代様だけではありません。

スラッグという者や、他にも何人かの龍族が宇宙へと散ったといひます」

「!?」

リゼットが語った内容に、セルの表情が目に見えて変わった。

ナメック星人がまだ未来の世界でも生きている可能性。それを知ったが故に希望を見出してしまったのだ。

「どこにいるかはあえて聞いていませんし、必ずそれらの者がドラゴンボールを生み出せるという保証もありません。ですが探す価値くらいはあるのではないでしようか？」

「……私を殺さないのか？」

「今回の件は私の未熟が招いた事。貴方を恨む気持ちがないと言へば嘘になります。それが筋違いである事は分かっているつもりです」

セルは唇を真一文字に引き締め、目を伏せる。

それから数十秒は無言を貫いただろうか。

やがて考えが纏まった彼は小さな声で、拘束の解除を願ひ出た。

リゼットもまた今の彼からはもう何の敵意を感じる事も出来ず、その願いをあえて受ける。

「感謝する」

自由を得たセルはゆっくりと立ち上がり、そしてすぐに地面に膝を突いた。座ったのではない。

リゼットの前に片膝をつき、頭を下げたのだ。

何のつもりか意図が読めないリゼットは瞬きをし、セルの言葉を待った。

「これは誓いだ。」

この時代にいる間、私は今度こそ貴女の味方であり続けよう。

もう二度と、決して裏切りはせぬ」

「この時代に残るつもりですか？」

「貴女に償う機会が欲しい……と言えば聞こえはいいだろうが、あえて本心で語ろ

う。

荒廃し切った未来世界は情報が手に入り難い。ましてや宇宙の事となればな。

だから私は考えた。すぐに戻るよりも、まずはこの世界で情報を集めて位置を特定してから未来へ戻るべきだな」

ニヤリ、とセルが笑いリゼットを見上げる。

実に彼らしく、そしてふてぶてしい笑みであった。

要するにこの男、味方であり続けるとは言っているがその一方でこの時代を利用させてもらうと断言しているのだ。

これにはリゼットも呆れ、思わず肩をすくめてしまう。

このあつかましさは絶対、悟空の細胞だ。

しかし、今までよりもずっと「らしい」とは思った。

イマイチ理由もわからず味方になっているよりも、こうして打算的に動いている方が何だかセルらしいし、彼の細胞の大半を占めるという自分らしさを感じるのだ。

「いいでしょう。この時代に残る事を認めます」

だから、リゼットは彼がこの時代に残る事を認めた。

向こうが打算ならばこちらも打算だ。

次に訪れるだろう7年後の敵達。

その戦いで存分に力を発揮してもらう。

否とは言わせない。味方になると言った以上、これは強制だ。

利用し、利用される。

何だか、今までの全面的に無条件で助けられるよりも妙にしっくりくる関係だった。

★

残る者もいれば去る者もまたいる。

セルとは逆に、トランク스는この時代を去る事を後日、悟空達へと伝えた。

彼にはまだ護るべき物がある。

未来で待つ母や復興中の街。そこで暮らす人々。

それらはこれから、トランクスが護っていかなければならないものだ。

そして、それらを全て滅ぼしてしまいかねない、今も巨大化を続けているだろうバイオブロー……これは何としても倒さなくてはならない。

既に護るべきものがないセルとは違う。だから彼はここで、別れの道を選択したのだ。

そして出発の日。

カプセルコーポレーションの前に皆が集まり、トランクス出発を見送りに来ていた。

「トランクスさん、7年後にはまた来てくれるんですね？」

悟飯が縋るようにトランクスへと尋ねる。

彼は元々絶望の未来を避けるべくやってきた存在だ。

ならばまだ敵が残っている以上、来てくれるのではないかと期待しているのだ。しかしトランクスはその問いに首を振って否定を返した。

「いえ、そのつもりはありません。もうこの世界は俺がいなくても大丈夫だと信じているんです。

それに、7年後じゃ流石に小さい方の俺も成長しているでしょうしね。

トランクスが二人いてはややこしいでしょう」

「で、でも……」

「ただ、多分これでお別れじゃないと思います」

トランクスは朗らかに笑い、仲間達を見る。

「あの時、リゼットさんを救いに現れた俺は間違いなく俺自身だった、と確信しているんです。

別の未来の俺とかじゃなくて、同じ時間軸の俺自身なんだと……そう思っています。

だから、多分俺はまた皆の前には現われると思います。今度は、もっと強くなって」
緑のセーターのトランクスは、きっと自分だった。

そう断言するトランクスの顔に悲壮さはない。

きっとまた出会えると確信しているから、別れの言葉もまだ必要ない。

そう力強く語るトランクスへ、ターレスが声をかける。

「トランクス。一瞬しか見えなかったが、あの時現われたお前と一緒にいた奴は俺の師でありカカロットの父であるバーダック……だったように思える。

希望的観測に過ぎんかもしれんし、俺の見間違いだった可能性もゼロではない。だが、もしお前が奴と会ったら伝えてくれ。馬鹿弟子がテメエをブン殴りたがっ

てるってな」

「はははっ。必ずお伝えします」

トランクスは可笑しように笑い、それから仲間達一人一人と固い握手を交わす。悟飯と名残惜しように手を握り、ピッコロと固く握手を交わし、悟空、ターレス、天津飯、ヤムチャ、ナッパ……餃子、クリリン、リゼットと続く。

人参化だけは能力の都合上、握手をしてもらえずに寂しそうだった。

そして最後にベジータと少しだけ長く手を握り合い、言葉を発さずに笑い合った。

「皆さん、俺は信じています。皆は絶対に運命などに負けはしないと」

「ああ。オラ達はまだ大丈夫だ。何が来ても絶対に負けねえ。

だからトランクス、お前も未来で頑張れよ！ バイオブロリーなんかぶっとばしちまえ！」

「はい！ リゼットさんが話してくれたナメック星人の生き残りの可能性を聞いて、俺も希望が持てました。

必ず、未来の世界をこの時代と同じ平和な世界へと戻してみせます」

もうトランクスに憂いはない。絶望から目を逸らして過去ばかりを見るのはもう

終わりだ。

この時代にもまだ問題は残っているが、きっと悟空達ならば乗り越えられると信じている。

だから今度は自分の番だ。

未来の世界を、必ず元に戻してみせると固く誓う。

「そっちの世界の私にもよろしくな。ナメック星人が生き残っている可能性さえ教えれば過去に戻ろうとも思わんはずだ。上手く煽って扱き使ってやれ。

それと、バイオブロリーは恐ろしいパワーの持ち主だが、大量の海水を浴びせてしまえば今のお前のパワーならば十分に倒せるだろう」

「ああ。セル、お前もあまりリゼットさん達に迷惑をかけるなよ」

「精々努力しよう」

トランクスとセル。二人の未来人は互いに皮肉と笑みを飛ばし合い、挨拶を済ました。

最初に来た時よりも幾分逞しくなった青年はタイムマシンへと乗り込み、手を振りながら名残惜しそうにマシンを起動させる。

そして最後にもう一度、この時代で知り合った、本来は決して交わるはずのなかった仲間達を見る。

この出会いを決して忘れはしない。

彼等と共に戦った日々を絶対に忘れない。

青年は振り切るように発進ボタンを押し、そしてこの時代から飛び立った。

彼が消えた空を仲間達はしばらく見上げ、やがて一人ずつその場を立ち去って行く。

そして1時間後……最後にベジータとブルマがその場を去り、未来から来た青年との別れは終わりを告げた。

「ちょっとアンタ！ アンタでしょ、過去に戻って歴史を変えた馬鹿は！」

「え？ あ、あの……貴女は？」

「私は時の界王神！ この宇宙の時間を管理してる神様よ！」

アンタ、ちょっとトキトキ都まで来なさい！」

「ええええええ!?」

しかしベジータ達も流石に予想していなかった。

トランクス of 新たな戦いはまさにすぐ後、未来のバイオブロリーを倒した瞬間から始まるという事を。

——再会の時は、案外そう遠くないのかもしれない。

というわけで、貴重な善人の未来トランクスが離脱して代わりにセルが乙戦士入りしました。

これからは未来トランクス of 分までセルが頑張ってくれる事でしよう。

乙戦士がますます悪人だらけに……。

バイオブロリー「戦闘シーンすらなく出番オワリーですかあ？」

ブロリー「所詮ドロリーはドロリーなのだ」

・バイオブロリーの強さ

戦闘力的には今の悟空以上だが、海水を浴びると超絶弱体化。

それでも過去に来た頃のトランクスでは手に負えない怪物だったが、今ならば海水コンボで撃破可能。

ちなみに現代の方では地球に来ていないのでバイオブロリーそのものが誕生しない。

第六十八話 新たな騒動の予感

トランク스가未来へ帰ってから悟空やりゼットはそれぞれの過ごし方で7年間を過ごした。

予想した通り、その期間は敵も現われる事なく平和な時期が続いたが全てがリゼットの知る通りになったわけではない。

例えば悟空が生きている事で孫家の家計が遂に限界を迎えたりしたが、仕方なく出場した天下一大武道大会で悟空が優勝して賞金の1億ゼニーをゲットしたなどという話を後になって聞かされた時は結構驚いたものだ。

本来ならばボージャック一味の出現で有耶無耶になってしまはずのこの大会だが、肝心のボージャック一味がいらないせいで無事進行してしまい、悟空が決勝で悟飯との親子対決を制して優勝してしまったという。

尚、この際優勝特典として格闘技世界チャンピオンであるMr・サタンへの挑戦権も与えられたが、肝心のMr・サタンが突然の腹痛を訴えたため挑戦は出来なかったとか。

他にはクリリンがどうしてもというので仕方なく神龍の使用を認めて18号と17号の体内から爆弾を取り除いたり、それが切っ掛けで18号とクリリンが結婚し、一緒に暮らしたりと……まあ、この辺は知識と同じ流れか。

ちよつと哀想なのは18号が嫁いってしまったせいで無人島の家に一人ぼっちになつてしまった17号だろう。彼もそのうちいいパートナーを見付けると信じたい。それからナツパに遅めの春が訪れた。

相手は何と人魚の女性で、網にかかつていたのを助けたのが交際の切っ掛けらしい。

どう考えても子供を残せそうにないが、本人が幸せならば何も言うまい。

それと、リゼットの暴走によつて悪の心を消されていた人々は、地獄行きが確定しているような極悪人やピラフなどの一部の例外を除いて神龍に元に戻して貰つた。

その後ドラゴンボールはしっかりと精神と時の部屋に100日放置してマイナスエネルギーを浄化しておいたので邪悪龍出現の心配はないはずだ。

それ以外は大体普段と変わらない。

悟空とベジータ、ターレス、ナッパのサイヤ人組は大体修行修行、修行だ。

ピッコロも相変わらず一人で修行しているらしく、主力組はいい具合に互いを刺激し合って順調に気が上昇しているようだ。

天津飯は何故か皆の前から姿を消し、餃子と二人で各地を放浪しながら修行の旅を続けている。

ヤムチャは完全に修行などを捨てて野球選手などをしつつ一般人の生活に染まっ
てしまっていた。

今の彼は歴史上最強の投手でありホームランバッターで、野球界のロンリーウル
フの異名で高い人気を獲得していた。

ジャンルは違えど Mr・サタンにも匹敵するスーパースターだ。

インターネットでは全盛期のヤムチャ伝説などというものも作られ、彼のサイン
を求めるファンが数日間並んで長蛇の列を作るのも珍しくない。だが未だに独身で
あった。

クリリンも武道を引退して髪の毛を生やし、静かな暮らしを満喫している。

どうやらこの二人の地球人は地球の守りを完全にサイヤ人やナメック星人、神に

任せるべきだと考えたようだ。

やはりインフレの壁は高く険しく、そして慈悲がない。

悟飯は完全に勉強に専念し、通信教育だけで有名高への進学が決定。

何か時々『グレートサイヤマン』とか名乗って火災現場から逃げ遅れた人の救出や事故現場での人命救助などで活躍しているらしいが、戦闘力は完全に子供の時以下に落ちてしまっている。

しかしその活動が幸いして同級生のビーデルといい感じになり、最近交際を開始したらしい。

先述の天下一大武道大会でファイナリストとしてその強さを示したのが原因で、原作と異なり最初から凄腕の武道家として名前と顔が割れていた事でビーデルの興味を初っ端から引いてしまったのも要因の一つではあるだろう。

ビーデルから見れば悟飯は、もしかしたら自分の父と戦っていたかもしれない存在なのだ。

そんな彼とは違い、新しく生まれた弟の悟天は子供でありながら何の切っ掛けもなく超サイヤ人へと覚醒し、親友の少年トランクスと毎日のように戦いごっこをし

ている。

これ、そのうち悟飯を抜くんじやないだろうか？

そして勿論リゼットも休んでいたわけではない。

セルという絶好の修行相手を得た彼女は日々セルと組み手を行い、その戦力を確実に伸ばしていた。

バーストリミットの100倍も安定して10分くらいは持続出来るようになり、ただ戦闘力ではトップクラスを維持している。

更に空間移動で界王様の所へと出向き、修行相手としてグルドを呼んで貰った。勿論今更グルドなど相手にもならないが、用事があるのは彼の持つ特殊能力だ。今の自分ならば、と思いグルドの記憶を読んで時間停止能力のやり方を盗み……もとい、学んだのだ。

これはやはり生まれ持った特異性などが大きく関係するようだが、今のリゼットは既に人間ではなく種族として神に近い存在まで昇り詰めている。

あるいは一度神域へ入ってしまったのが原因なのかもしれない。

結果だけを言えば、7年間の修行の末に無事に時間停止能力を会得する事に成

功した。

……1秒だけだが。

グルドは呼吸を止めている限り停止出来るのに自分は1秒。いかに戦闘能力があっても、こういう特殊能力はうまくいかないものだ、と痛感させられてしまった。他にも魔術師や占い師などの不思議な力を持つ者達を修行相手に出して貰う事で、様々な術の会得に成功した。

この世界は格闘能力と気こそが強さにおける最重要な要素である事はもう疑う余地もないが、これで意外と魔法とかも豊富に揃っているのだ。

特に嬉しかったのは魔人ブウなども使う回復系の魔術を会得出来た事か。

とりあえずこの修行のついでに閻魔に声をかけ、スピリッツロンドリング装置の監視は決して怠らないようにアドバイスだけはしておいた。

未来ではこの装置の暴走である世とこの世のバランスが崩れた事を教えた結果、サボり気味の鬼はクビにされて新しく真面目な鬼が就任したというので少しは危険が下がったと思いたい。

というか元々その仕事に就いていた鬼が明らかに人選ミスすぎる。ひたすらヘッ

ドホンで音楽を聞きながら「イエイ、イエイ」と踊っているだけの馬鹿鬼であり、何でこんなのを重要な装置の監視役にしてしまったのか、本当に疑問でしかない。また、今後の地球防衛の戦力増強案として暗黒惑星のドクター・ライチーの居城跡から戦闘ロボット『ゴッドガードン』の残骸を回収し、ブリーフ博士に量産して貰った。

もうこの人が次期神様でいいんじゃないだろうか。

結果、戦闘力にして7年前の悟空やベジータともそこそこ戦えるだけの量産型ゴッドガードンが十数体生産され、神殿の警備ロボットとして今日も元気に壁の華となっている。

用意したはいいが、よく考えたら次はブウ編だ。正直出番は来ないかもしれない。ともかく、平和な時間というのは過ぎるのも早いものだ。

あんなに小さかった悟飯も今ではすっかりリゼットの身長を追い越してしまい、少し寂しい思いをさせられた。

だが平和というものはいつまでも続くものではない。特にこの世界では。

地球を巻き込む新たな戦いの時。それはもうすぐ近くまで迫っているのだ。

★

神殿の奥にある、最近新設されたばかりの修練所。

そこはリゼットの能力を使う事で空間そのものを広げ、見た目以上のスペースを確保する事に成功した絶好の修行場だ。

その中心部にてリゼットが一人立ち、何かを待つように目を閉じている。

「……！」

僅かに漏れた攻撃の意志。気配。

それをコンマ1秒にも遥か満たない時間で察し、右から飛来した拳を受け止める。

攻撃を放ったのはセルだ。彼の拳を獲ったまま軽く投げ、地面へと叩き付ける。だがそれと同時に左、更に前後から合計3人のセルが踊り出た。

リゼットは一步後退し、背後だけを取られないようにして同時に3人のセルを相手取る。

3人が共に同一人物であるが故のコンビネーションは厄介だ。一切の無駄なく互いが互いの無駄を埋め合わせるように動く。

だがりゼットは表情一つ変える事なく的確にセルの猛攻をいなし、捌き、そして流す。

しかしセルはもう一人いる。最初に現われたセルがリゼットの背後を取り、猛然と攻撃を仕掛けた。

だがりゼットはそれよりも早くその場で両手を広げて回転。腕から漏れた光の粒子が輝き、彼女の周囲を囲うように輪を創り——そして、一気に広がりセル達を吹き飛ばした。

だがセル達もすぐに体勢を立て直し、4人が同時に異なる構えへと入る。

それを見てリゼットはすぐに気を全開にし、バリアを最大出力まで上昇させた。

「かめはめ波！」

「気功砲！」

「魔貫光殺砲！」

「レイジングブラスト！」

それぞれ悟空、天津飯、ピッコロ、そしてリゼットが用いる決め技だ。

まさに複数人の細胞を持つセルならではの攻撃だろう。

だがその全てはリゼットへ届かず、彼女が全力で展開したバリアを前に霧散させられた。

それだけに留まらずリゼットは自分を抱きしめるように両手をクロスし、輝きが消える。

嵐の前の静けさ……今度はセルが攻撃に備える番だ。

「Hyper Dimension！」

そしてリゼットが両手を広げると同時に暴風が吹き荒れる。

白の神を中心として光の大爆発が起こり、前後左右上下全てを対象として全包围攻撃が放たれた。

ピッコロがかつて天下一武闘会で用いたのと同じ爆発波タイプの攻撃だ。

全包围へ放つが故に威力はどうしても分散してしまうが、その代わり逃げ場がどこにも存在せずに絶対当たるという利点がこの技にはある。

激流が修練場全体に吹き荒れ、視界を光が埋め尽くす。

そしてそれが終わった時、セルの分身は消え去り、本体もまた焼け爛れた姿へと変わっていた。

だがセルはすぐに全身を再生し、余裕の笑みを浮べてリゼットを挑発する。

そしてリゼットもそれに応え、再び無形の構えを取った。

互いに余力は充分。ならばもう少し修練を続ける事が出来るだろう。

そうして再び二人が仕掛けようとしたところで修練場の扉が音を立てて開かれ、二人の動きが同時に停止した。

「Mr・ポポ？ どうしたのです。突然入ってくるなんて」

「ごめんなさい神様。でも大変、お客様、来てる」

「お客様、ですか？」

Mr・ポポの言葉に最初、悟空達の誰かかとも思ったがすぐにリゼットはその思考を破棄した。

ポポは基本的には神である自分を優先してくれるし、来客が悟空達ならば恐らく修行が終わるまで『神様の邪魔、駄目』とか言いながら悟空達を待たせるだろう。そもそも悟空達を相手に『お客様』などという言葉は使わない。普通に悟空達が来たと告げるだろう。

だが今回彼はその来客を明確にお客様として扱っているし、自分の修行を中断さ

せてまで伝えに來た。

つまりは、それほどの相手だという事になる。

リゼットはすぐに表情を引き締め、腕を振るう事で服や身体についた汚れや埃を落とす。

相手が誰かは知らないが、失礼はないようにするべきだろう。

「すみません、セル。修行は中断です」

「ああ。だが私も同行させてもらうぞ。今までに感じた事のない妙な気を感じるの
でな」

先代、でもない。少なくとも覚えのない気だ。

閻魔や界王なども違う。占いババでもない。

さて、一体どこの誰が出てきたのか……リゼットは思案を巡らせながら神殿の外へと出る。

そして、そこで待っている二人組を見て得心した。

なるほど、Mr・ポポが慌てて呼びにくるわけだ。

リゼットは驚きを顔に出さずに、あくまで普段の自然体のまま来客者へと声をか

けた。

「お待たせしてしまい申し訳ありません。

何分、来客など滅多にないものでして」

これは半分本当であり、半分詭弁だ。

実のところ悟空や悟飯、先代などは聖堂経由で結構ここを訪れる。

しかし彼等は地球の一員であり、リゼットにとっては身内だ。

したがって彼等は客にカウントしていいなし、実際ポポも客として扱わない。

そういう意味ではほとんどの客の来ない場所というのは決して間違いではなかった。

「いえ、構いませんよ。突然の来訪でしたからね」

ニコリと怪しい笑顔を浮かべるフリーザフェイスのモヒカン男……言わずもがな、界王神である。

実力はさておき、リゼットにとっては上^間司^魔の上^界司^王のそのまた上^大司^界の更に上^大司^界である。

宇宙を一つのチェーン店とするならば地球はさしずめ辺鄙な田舎に建てられた小

さな店であり、リゼットはその店長に過ぎない。

一方相手は本社の社長様だ。普通はまず、こんな所を訪れたりしない。

それにしても天下一武道会に遊びに行かずにいきなりこちらに出向いて来るとは少々驚かされた。

「申し遅れました。私はこの地球の神を務めている者です。

本日はどのようなご用件で来られたのでしょうか？」

「それを語るにはまず、私は何者かを説明しなくてはなりません。

私はこの宇宙を司る者、界王神です。どうぞよろしくお願いします」

互いに自己紹介をしながら、リゼットは界王神の心を覗き見た。

多少の超能力防壁はあるようだが、割と隙間だらけだ。

恐らく今まで、界王神たる彼に対し読心を試みる不敬者自体がいなかったのだらう。

だが敵がいなければ技は磨かれない。いかに磨いたつもりでも畳の上の水練でしかなく、リゼットにすれば易々と突破出来てしまう防壁だ。

そもそも超能力自体、あまりに戦闘力差がありすぎると通用しないのがこの世界

の常識であり、ましてや同じ超能力者——しかも鍊度が遥かに高いリゼット相手では界王神の超能力はもはや無いに等しかった。

まず彼の心を読んで感じたのは……困惑。

たかが地球の神の心を読めない事を酷く不思議に思っているのが感じられる。

どうやら不敬はお互い様のようだ。向こうも向こうでリゼットに対し読心を仕掛けていたらしい。

いきなり『宇宙を司る者』などという、全くの事実ではあるが相手を萎縮させかねない強い響きを選んだのも、自分を大きく見せる事で会話の主導権を握ろうとしての事らしい。

これに動じずに返す事で揺さぶる事は容易い……が、ここはとりあえずあえて乗る事で少しいい気にさせてあげるのがいいだろう。

「まあ！ 界王神様であらせられましたか！

これは、とんだ失礼を」

「ふふふ、いいんですよ。最初に名乗らなかった私に非があります。

どうぞ、楽になさって下さいな」

少しわざとらしかった気もするが、どうやら彼は素直に受け止めてくれたようだ。若い……と素直にリゼットは感じた。

恐らく実年齢はリゼットなどより遥かに上なのだろうが、何というか心根が純朴な少年か青年のように未成熟で素直すぎる。

それは美点なのだろうが、駆け引きという点においては明らかに不利だ。

恐らくはこれも、界王神たる彼を相手に駆け引きを挑む相手自体がいなかったが故の未成熟さだろう。

「それで、全宇宙の神である貴方様が何故このような銀河の辺境に？」

「その前に一つ。貴女は以前、大きな肉の玉を回収して封印した事がありますね」予想通り、今回の来訪目的は魔人ブウについての事らしい。

魔人ブウを封印した玉は既に先手を打ってリゼットが封じてしまっている。

それ故にバビディ達が地球に来てもこれを解き放つ事はまず不可能だ。

この事は誰にも話していないのだが、流星に宇宙の神か。どこからか情報を仕入れたらしい。

恐らくはあの世とこの世を頻繁に往き来し、占いによって探し物を見付ける力を

持つ占いババ辺りが情報源だろう。

「ええ。何かよからぬ気配を感じましたので、封印して手元で保管しています」

「それは素晴らしい英断でした。貴女は宇宙を救ったと言っても過言ではない」

界王神が手放しにリゼットを褒めるが、これは紛れもない本心からの賛辞だという事が分かった。

彼の心から感じるのは、隠しようもない魔人ブウへの多大な恐怖だ。

かつて南、北、西の界王神達を殺し、更に敬愛する大界王神までも吸収した魔人への消えぬ恐怖、トラウマ。

そしてそんなものを封印された不安定な状態のまま地球に放置し、それ以上の事が何も出来ぬ不安。

そんな彼にとっていきなりポツと出て来て魔人ブウの封印の玉を更に上から封印してしまったりゼットは余りに嬉しい誤算だったに違いあるまい。

「それは魔人ブウと呼ばれる恐ろしい魔人を封印した玉です」

そう前置きをし、彼は魔人ブウについて語り始めた。

リゼットにとっては既に周知の内容でしかないが、復習を兼ねてとりあえず聞い

ておくのも悪くないだろう。

後ろを振り返る事なく遠視すれば、セルが面白そうに口の端を歪めているのが分かる。

どうやら彼も界王神の心を読んでいるようだ。

さて、いきなり界王神がこちらに来てしまったこの変化。

これが吉と出るか凶と出るか……出来ればそろそろ吉に出て欲しいと思いつつ、リゼットはあくまで従順な地球の神としての姿勢を崩さずに最高神の話に耳を傾けていた。

【ハイパー・デイメンション】

リゼットの新技。

自分を中心に全方位に攻撃を加える広範囲殲滅技。

攻撃範囲を広げているので威力そのものは大した事がない。

雑魚が多い時は便利。

【戦闘力】

・孫悟空…6億5千万

超サイヤ人…325億

超サイヤ人2…650億

超サイヤ人3…2600億

・リゼット…12億

バーストリミット(50倍)…600億

バーストリミット(100倍)…1200億

「つ、遂に抜かれた……」

・セル…500億

パーフェクトセル…1000億

・ベジータ…5億

超サイヤ人…250億

超サイヤ人2…500億

・ターレス…4億9千万

超サイヤ人…245億

超サイヤ人2…490億

・ピッコロ…11億

界王拳(20倍)…220億

界王拳(30倍)…330億

※30倍は反動が大きいので短時間のみ

・孫悟飯…2億5千万

超サイヤ人…125億

超サイヤ人2…250億

・ナッパ…3億

超サイヤ髭…150億

・量産型ゴッドガードン…50億(×15体)

※『サイヤ人絶滅計画』に登場するツフル製戦闘ロボット。セル編の1超サイヤ人の悟空達と渡り合えるほど強い。

この世界ではリゼットが初手MAP兵器発射を行った為に戦う事なくスクラップ

と化したが、7年後に備えてリゼットが回収しブリーフ博士に改修してもらった。

・界王神…10億

・トランクス(少年)…610万

超サイヤ人…3億5百万

・孫悟天…600万

超サイヤ人…3億

・キビト…8000万

・カリン様…3億

バーストカリン20倍…60億

・Mr・ポポ…2億8千万

バーストポポ20倍…56億

カリン様「よくぞこられました、界王神様」

「……」

界王神「!?!」

ポポ「歓迎します」

ゴゴゴゴゴゴ……

界王神「!!?」

ゴッドガードン「ヨウコソ」×15

ズズズズズズ……

界王神「!! ！！?」

・地球……それは第七宇宙随一の魔境である……。

Q、何でターレス、ベジータに抜かれてるの？

A、果樹園の仕事をしたり、子育てをしたりしてるから。

四六時中修行をしている悟空やベジータに差を付けられるのは当然です。

Q、人参加どこ行った

A、年を取らないリゼットやカリン様、ポポと違って彼はただの獣人型の地球人なので年齢的に戦士はもう無理。

なのでどこからか連れてきた嫁さん兎やウサギ団と一緒に神殿の清掃やメンテナ

ンスといった裏方に専念しました。

とか彼に限らず、地球人勢はそろそろ年齢的に戦士を続けるのは厳しい。

ヤムチャとか、もう41歳ですよ。

亀仙人、鶴仙人、占いババ、桃白白の100歳超え勢は……何なんでしょうね。

やっぱり食中毒で死んだという不死鳥が関係しているのでしょうか。

第六十九話 暗躍する者達

界王神から語られた魔人ブウの情報は大体リセットの知る通りであった。

地球人類がやっと二足歩行で歩き始めた頃……大雑把に考えて大体500万年前くらいだろうか。

魔導師ビビディにより創り出された邪悪な魔人であり、当時は5人いた界王神のうちの4人までもを殺してしまった存在が魔人ブウだ。

そしてビビディの息子であるバビディがその魔人ブウ復活を目論み、この地球へ来ようとしているという。

その事を突き止めた界王神は先手を打ち、こうして地球へと自ら出向いたのだ。

「地球の神よ。貴女が確保している魔人ブウを私達に預けて頂けませんか。

私ならばこの神殿よりも遥かに安全に封印を守り続ける事が出来ます」

界王神の言葉に嘘はない。

この神殿は確かに普段は別次元に潜行しているが、それでもやはり完璧ではない。そしてバビディの魔術ならば神殿を覆うバリアすらも何ら問題なくすり抜けてし

まうだろう。

勿論バビディ達が攻め入って来た所で負ける気は全くしないが、何せ相手は魔術師バビディ。

もしかしたら思いもよらぬ術で、亜空間に閉じ込めた封印の壺を盗まれてしまうかもしれない。

勿論そんな事は出来ないかもしれないが、万一は常に想定しておく必要がある。だが界王神界ならばさしものバビディも攻め込む事はまず出来ないだろうし、このままリゼットが抱えておくよりは遥かによくなるはずだ。

問題は……界王神とキビトの戦闘力の低さだ。

リゼットとセルのコンビならば例えバビディが部下を総動員して乗り込んで来ても返り討ちにする事が出来る。

だが界王神達にそれは出来ない。

場所という面においては間違いないが界王神界の方がいい。

だがそこにいる人材をも計算に含めると、あるいはこのまま地球に残した方がいいかもしれないのだ。

とはいえ、相手は最高神たる界王神だ。

流石に『貴方が弱いので渡せません』などと言えるはずもない。

結局のところ彼が出て来てしまった時点でリゼットの拒否権などあるはずもなく、辺境の惑星の神である彼女は頷く事しか出来なかったのだ。

「……解りました。魔人の封印を界王神様へ委ねます」

リゼットが手を振るう。

すると空間に亀裂が走り、その中から一つの壺が現れた。

これこそ魔人ブウを玉ごと魔封波で閉じ込めた封印の壺である。

その光景を見て界王神はあからさまに驚いた顔をしているが、もしかして空間操作系の能力は珍しいのだろうか？

「どうぞ。これが魔人を玉ごと封印した壺です」

「こ、この中に魔人ブウが……」

せっかくミステリアスな空気を出していたのに、早くも素が出かけている。

最高神として頑張って威厳を出そうと振舞ってはいるのだが、どうも演技そのものがあまり得意ではないらしい。

やはり根が素直すぎますね、と思いつながらリゼットは彼に壺を手渡した。

「ありがとうございます。この封印は必ず、私達を守り通してみせます。

バビディ達も地球に魔人ブウの封印がないと知れば、いずれ引き上げていくでしょう」

（……まあ引き上げるでしょうね。八つ当たりで暴れた後に）

この最高神様、やはり少し見通しが甘いのもかもしれない。

魔人ブウを回収した後にバビディ達は当然それを探すだろうが、その時に地球に全く被害を及ぼさないというのはありえない。

まず間違はなく地球中を探し回るだろうし、テレパシーなどで全人類に脅しをかけるだろう。

まあ、バビディに関してはこちらで対処してしまえばいい。

とりあえず宇宙船が地球に転移してきたのを確認したら、神殿からスパークキングメテオを叩き落として宇宙船ごと塵にしてしまえばいいだろう。

奇襲上等。外道を相手に手段など選びはしない。

「それでは、私はこれで。

貴女とはこれからも有意義な関係を築いていきたいですね」

「光栄です」

界王神は挨拶を済ませると、キビトの瞬間移動で姿を消した。

戦闘力は低いが実に有能な側近である。

二人の姿が消えてから、セルは確認するようにリゼットへと問う。

「しかしよかったのか？ あゝ二人、まるで大した事がなかったぞ。

バビディとやらがどれほどの者かは知らんが、貴女が封印を守っていた方が安全面では遥かに上だろう」

「そうでもないですよ。置き場所として考えるならば界王神界以上の場所など、そうはありません」

界王神界は聖域だ。普通ならばそうそう入り込む事など出来はしない。

いかにバビディでもここに魔人ブウの封印を置かれてしまつてはお手上げのはずだ。

当然彼はそれを知らないわけだから、あるいはこの神殿に来るかもしれないが、それはそれで好都合だ。

もし攻め込んできたならば、その時がバビディ達の最期だ。返り討ちにして地獄に叩きこんでやればいい。

★

「お馬鹿さん」

界王神界。そこは全宇宙の神たる界王神とその付き人、あるいは対極に位置する破壊神とその従者しか立ち入る事を許されない聖域中の聖域だ。

だが今、そこに在り得ざる女の声が響いていた。

この聖域に女は一人も存在しない。かつては西の界王神がここに暮らしていたが、それはもう500万年も昔の話だ。

「どうやって奪ってやろうかと考えていたけど、まさか自分から手放してくれるなんてね」

女——トワは魔人ブウを封印した壺を手の上で弄びながらクスクスと笑う。

その足元には界王神とキビトが倒れ伏しており、ミラが腕組みをしてつまらなそうに彼等を見下ろしていた。

以前リゼットにやられた傷は完全に治っており、その顔は不機嫌に歪んでいた。

「弱過ぎる……これが宇宙の神と呼ばれる者の力なのか？」

その感情は一言で言えば不満。

仮にも全宇宙の神を名乗るからには自分を満足させ得るだけの實力はあると期待していたが、これではまさに期待外れだ。

あの忌々しい女と同じ神の名を冠しながら、この差はどうした事だ。そんな苛立つミラへ、トワがしなだれかかる。

「ふふっ、違うわミラ。貴方が強過ぎるのよ。界王神も決して弱くはないわ」

「だが地球の神が見せた、あの時の力とは比べ物にならない」

ミラの脳裏に浮かぶのは、あの屈辱の敗戦だ。

光輪を背負った白く輝く女神に、まるでゴミでも処理するかのように一蹴された事は忘れようにも忘れられない。

まるで相手にならなかった。戦いすら成立しなかった。

放つ攻撃は全て通用せず、軽く腕で触れられただけで半身が消し飛ぶという圧倒的過ぎる力の差。

あれこそが力だ。あれこそが強さだ。

『最強』を求めるミラが羨望して止まない到達点なのだ。

「駄目よミラ。あの女にはもう直接関わらないって決めたでしょ。

下手にちょっかいを出して、また“あの状態”になったら手に負えないわ。

私達の敵はあくまでタイムパトローラー……戦わなくてもいい相手にわざわざ挑む必要はないのよ」

「俺は最強の存在だ。その俺がたった一人の女を恐れて逃げ回るといふのか」

「逃げるんじゃないわ。戦略よ」

トワとミラの視線が交差し、やがてミラが目を伏せた。

彼はトワには基本的に従順だ。これからもトワを裏切る事は決してないだろう。

だが最近、彼がどうも言う事を聞かなくなってきた。

いや、普段は従順なのだ。今まで通りに従ってくれる。

だがある一点……白の女神が関わる件だけは、トワの意志と反する行動に出る事がある。

先日、まだ村娘だった頃の女神を殺そうと過去に戻ったのだが、ミラはあまり積極的ではなかったし、タイムパトローラーが出てきただけですぐに撤退を選んで

しまった。

間違いない。ミラはあの女を求めている。あいつを超えたいと渴望し、己自身の手による決着を望んでいる。

避けて目的を果すのではなく、戦士として正面から挑んで殺したいと思っているのだ。

だが、それはトワから見れば極めて危険な道に思えた。

現状、リゼットはトワにとって余りに厄介過ぎる相手だった。

魔人ブウを復活させて混乱を引き起こしたいのに、あの女が二重封印して手元に保管していたせいでまるで行動に出る事が出来なかった。

下手に攻め入って、また『アレ』になられたら手に負えないし、そうでなくてもこの時代のリゼットとセルのタッグは普通に手強い相手だ。

あのままでは、いずれバビディ達すらも発見次第蹴散らしてしまい地球には何一つ問題が発生しなかっただろう。

そんな彼女にとって今回はまさに柵から牡丹餅。

厄介な女が魔人ブウを手放し、手に負える相手へ渡してくれた。

まさに千載一遇であり、この機を逃すまいと早速仕掛けたのだ。

「まあ、いい。それでこいつ等は殺すのか？」

「そうね。こんなものでもキリの足しにはなるでしょう」

ミラの問いに対し、トワがどうしてもよさそうに答える。

魔人ブウを回収した以上、後はこれをそれとなくバビディへ回すだけだ。

ついである人物をバビディの洗脳から解き放ってやるのも忘れてはならない。既にトワの思考はそうした先の事へとシフトしており、界王神への興味は消え失せていた。

ミラもまた倒した相手の事などどうでもいいのか、無表情で手を翳す。

しかし気弾を放とうとした直前、何者かがミラの後頭部を蹴り飛ばす事で界王神を救出した。

「ぬっ!？」

「へっ、生憎とそう簡単にゃあいかなえんだよ。俺達がいる限りな」

倒れかけたミラは地面に手を突いて腕力だけで跳躍し、空中で回転して着地する。

彼の前に立つのは赤いバンダナを揺らめかせる悟空似のサイヤ人だ。

トワ達の宿敵であり、そしてトワ達同様に時間を越えて現われるタイムパトローラー。その一人であるバーダックだ。

彼は地を強く蹴ってミラへと接近し、ミラもすぐに構えを取って迎え討つ。

「そらあああああ！」

「ぜああああああつ！」

バーダックとミラが互いの掌を握り合い、まずは正面からの力比べの体勢へと入った。

だがバーダックはすぐに力を抜き、掴んだミラの掌にぶら下がるようにして足を上へと突き出し、ミラの顎を蹴り飛ばした。

空中へ吹き飛ぶミラを追い、バーダックも飛翔。

消えたかと錯覚するほどの速度を以て飛んで行くミラの先へと回り込み、もう一度蹴り飛ばす。

更にまた高速移動。再び飛んで行く先へと先回りし、ミラを蹴り落とした。流星と化して地面へ激突し、地割れすら起こしてミラが地面へと埋没する。

「はあッ！」

片手を向けて気功波——彼の技の一つであるリベリオントリガーを放つ。

地面に着弾すると同時にドーム状の爆発が広がり、界王神界を揺らした。

だが煙の中からミラが飛び出し、今度は彼の拳がバーダックの鳩尾へとめり込む。

よめいた所で右フック。バーダックを殴り飛ばし、更に追いかけて追撃の拳打。

バーダックがいくつもの岩山を貫通しながら吹き飛び、だが空中で回転すると豪快に着地を決めた。

すぐに彼を追ってきたミラが瞬間移動と見紛う速度で現われて拳を放つが、バーダックはこれを見切ってしゃがんで避け、地面に手を突いての水面蹴りでミラの足を払う。

体勢が崩れた所を狙ってすかさずアッパーを放つが、ミラは転びながらも空中で回転してアッパーを回避。

今度はミラが地面に手を付いた逆立ちの姿勢となり、バーダックへ蹴りを叩き込む。

しかし間一髪。バーダックはこれをガードし、僅かに地面を削りながら後ろへ弾かれるだけで済んだ。

「やるじゃねえか」

バーダックが獐猛に笑い、髪が逆立ち金色へと変色する。

それに合わせてミラの全身を禍々しいオーラが包み、両者の戦闘のギアが一気に上昇した。

様子見はここまで。これより先は遊び無しの戦いだ。

バーダックとミラが同時に踏み込み、それだけで大地が砕け散る。

そして、同時に放った二人の拳が互いの頬へと直撃した。

「だありゃあああ！」

「かあああああっ！」

殴る、殴る、殴る。

生物離れした速度で互いの拳打が交差し、コンマ1秒にも満たぬ時間に回避と防御を強いられる。

しばしの攻防の後に二人の渾身の拳同士が衝突し、火花を散らす。

そしてバックステップ。一度距離を取り、バーダックがクラウチングスタートの姿勢へと入った。

「そらっ！」

前傾姿勢からの猛ダッシュ。

その速度に目を見開くミラの顔面に肘打ちを放ち、吹き飛ばす。

吹き飛んで行く先へ瞬時に移動し、今度は蹴りあげて自らも飛翔。

空中で体勢を立て直したミラが迎撃の拳を放つもそれを身軽に避け、ミラの肩の上に逆立ちのように乗る。

そのまま1回転して背後を取り、羽交い絞めにして避けようもない蹴りを脊髄へと叩きこんだ。

更に飛んで行くミラの先へまたも移動。両手を組み合わせてハンマーのように振り下ろす。

頭部を強打されたミラは地面へと墜落し、轟音を立てて地面へとめり込んでしまった。

「……やってくれるな」

だがダメージは浅い。

ミラはすぐに地面から起き上がり、僅かな怒りを込めた瞳でバーダックを睨む。

なるほど、やはり生半可な攻撃は通じぬようだ。

ならば生半可ではない攻撃を行えばいい道理。

バーダックが更にギアを上げて前髪が逆立ち、雷光の如きスパークが迸る。

右手には全力を注ぎこんだ渾身の気弾を生み出し、発射の構えへと入る。

対し、ミラも更に力を高めて両手を広げた。

互いに最も頼りとする最大技にて勝負を決するつもりのようなのだ。

「待ってミラ。ここは退くわよ」

だがそこに、トワが制止の声をかける。

既に勝負に入るつもりだったミラはそれに不満そうな表情を浮かべ、無言でトワを見た。

別に睨んでいるわけではない。純粹に疑問を感じているだけだ。

「見て。いつの間にか界王神達がいなくなってるわ。」

どうやら時間稼ぎをされてしまったようね。

これ以上ここで、あんな奴と遊んでいても何のメリットもないわ。

それにまだ私達にはやるべき事があるでしょう？」

「……………わかった」

隠しきれない不満は出ているが、やはりミラは基本的にはトワに従う。

トワはその事に「いい子ね」と満足気に笑い、杖を振った。

するとミラとトワの姿が、まるで最初からいなかったかのように消え去ってしまい、後にはバーダックだけが残される。

「ちっ、逃げやがったか」

バーダックは吐き捨てるように言い、右手の気弾を消し去る。

今回の任務は界王神が逃げるまでの時間稼ぎだったが、可能ならば奴等はここで倒してしまいたかった。

しかし奴等にあの時間移動がある以上、あの時のリゼットとかいう女のように一方的に屠る程の力の差がなければ逃亡を阻止するのは困難だろう。

そして残念ながらバーダックにその力はない。

『バーダックさん、戻ってきて下さい。奴等が次にどこへ行くのかをこれから調査します』

「はいはい、わーったよ」

通信で聞こえるトランクスの声におざなりに返事をし、バーダックもまたそこから消えた。

そして界王神界からは誰もいなくなり、後には戦闘の跡だけが虚しく残っていた。

【ポタラとキビト神に関して】

まず先に言うと、このSSでのポタラ効果はよく言われている「戦闘力×戦闘力」にしません。

それをやるとキビト神の元になる界王神とキビトがどう計算してもフリーザ以下の雑魚になってしまうのです。

界王神の戦闘力10億を維持したままだとキビトの戦闘力は精々200が限界です。これは酷い。

よくポタラは「公式設定で互いの戦闘力の掛け算」と言われていますが、実際にその掛け算説の元になっている超エキサイティングストーリーガイドに書かれている説明は「合体によるパワーアップは二人の戦闘力の合計ではなく掛け算になるほ

どの凄まじさ！」であり、それだけ凄いんだという比喻表現だと思われます。

つまり仮に「二人の戦闘力を足してから掛け算で増やす」でも上記の説明と矛盾しないわけです。

ゲームでも基本的に同格扱いですので、このSSではフュージョンとポタラにそこまで差は付きません。

老界王神の「効果はフュージョン以上」発言は……まあ、合体時間も全然違いましたし、何か勘違いしていたのでしょうか。歳ですし。

あるいは「フュージョン以上」は合体時間を含めての評価だったのかもしれない。

第七十話 動き始めた魔導師

エイジ774、5月7日。

この日は地上で第25回の天下一武道会が開かれる日であり、本来ならば魔人ブウが復活する日でもあった。

この世に生まれてより274年。遂にここまで来たかと思うとリゼットは何だか感慨深いものを感じていた。

勿論まだ終わりではないのだが、それでもどんどん時が流れていると実感せずにはいられない。

今日の武道会には久しぶりに悟空達も揃って参加するらしく、リゼットも誘われたが断っておいた。

リゼットは天女時代から合わせて結構人前に顔を出しているので、観衆の見ている中で戦ったりするのはまずいのだ。

だが選手としては参加しなくとも、観客としてならば参加は出来る。

外出用の白いケープコートを羽織り、準備を整える。

奇人だらけだった一昔前はともかく、最近は妙に地上の発展が早い。

昔と違い、今のご時勢では流石にドレスで一般人の中に加わるのは目立ち過ぎるのだ。

どうでもいいが、ドレスの重さは普通に戻している。全力を出すたびに肩を露出するのはやはり恥ずかしいのだ。

なのでもう、このドレスは頑丈なだけだ。今後そのままだろう。

代わりに新しく創造したこのケープコートが重量10tである。やはり常に修行をしていないと気が済まないらしい。

「セルは参加するんですか？」

「無論そのつもりだ。一度、孫悟空達とは全力で戦ってみたかったしな」

この世界でのセルはセルゲームなどを起こしていないので人に知られていない。したがって人前で戦う事も、その奇妙な外見以外は何ら問題がなかった。

その外見もリゼットの神術で軽い認識障害を施しており、一般人には普通の人間に見えるようになっていた。

最初の頃は岩を持ち歩いていただけの自分が、よくもここまで不思議な術を会得

してきたものだとながら少し可笑しくなってしまう。

外出の準備は整った。

原作通りならば今日はバビディ達が行動を起こすはずだが、肝心の魔人ブウの封印は界王神界にある。

加えて7年前にリゼットが行った地上の悪人一斉粛清により、今の地球には邪念を持つ者がほとんどいない。

原作において極悪さを発揮したスポポビッチやMr・サタンと犬を撃った下衆までもが善人へと変わってしまったている。

これはあくまで7年前の時点で存在していた悪人全てが対象なので、それ以降に生まれた人間が育てばまた元の状態へと戻ってしまうだろうが、それはまだ数年先の話だ。

少なくとも新世代が育つまでの数年間は地球に悪人らしい悪人などおらず、つまりそれはバビディが洗脳出来る相手がない事を意味していた。

(……念のため、バビディがいるかもう一度探ってみますか)

バビディは魔術により前触れなく侵入する事が出来る。

したがってスラッグの時のように地球への侵入そのものを防ぐ事は出来ず、リゼットはいつ彼等が来るか分からない以上、毎日のように地上の遠視を行うという手段を選ぶしかなかった。

一日に3回は必ず行っている地上索敵だが、今日は原作で彼等が動いた日だ。もう居てもおかしくない。

そう考えてリゼットは地上へと意識を飛ばして怪しい気配を探り……そこで、彼等を見付けた。

（居た！）

念には念を入れてみるものだ。

都から離れた荒野にバビディの宇宙船があり、更にバビディとダブラがいるのを確認出来た。

だがそれよりもリゼットの気を引いたのはそこから離れた位置を飛んでいる複数の気だ。

視点を移動させてみれば、そこにいたのはキビットだった。

ボロボロになった界王神を抱えて必死に飛んでおり、その後をプイプイの親戚の

ような外見の雑魚っぽい連中が追いかけている。

一体これはどういう状況なのだろうか？

いや、考えるのは後だ。とりあえず今は彼等を救出するべきだろう。

「セル、すみませんが天下一武道会は後回しです。やるべき事が出来てしまいました」

「何かあったのか？」

「はい。状況はよくわかりませんが界王神様達がバビディの手の者に追われているようです」

リゼットはそれだけ言うと、すぐに界王神達の元へと転移を行った。



「へへへへっ！ 逃がさないぜ！」

「大人しく観念しな！」

キビトは瀕死の界王神を抱えて必死に逃げていた。

何故こんな事になってしまったのか……全ては界王神界に突然現われたあの二人の魔族が原因だ。

あまりに強大な力を持つミラという男に界王神とキビトは叩きのめされ、何とか逃げ出したものの逃げた先の地球でバビディに見付かってしまい、こうして部下をけしかけられている。

少しの時間さえあればキビトは界王神を回復する事が可能だ。

界王神が万全ならば、この程度の連中となら充分に渡り合う事が出来る。

だが、その暇すらもない。今動きを止めれば奴等からの一斉攻撃を受けて界王神が殺されてしまうのだ。

自分はどうなってもいい。だが宇宙の正しき神である界王神だけは何があっても死なせてはならない。

あまりに絶望的な状況に思わず祈りたくなる。

だが腕の中で眠っている界王神こそが宇宙の神。神々の頂点だ。故に祈る相手などいない。

しかし祈りが届いてしまったのか、キビト達を守るようにこの地球の神が転移し、追っ手達の前に立ち塞がった。

「な、なんだ？ 女？」

「退きなさい。この星での狼藉は私が認めません」

見た目こそ幼さを残す少女だが、不思議とその声には力があつた。

思わず跪きそうになる神聖さと存在感が同居し、齒向かう事そのものが間違いだと錯覚しそうになる。

決して強烈に輝いているわけではない。淡く発光しているが、それだけだ。

だがまるで後光でも差しているかのように平伏しそうになる。己が罪深い存在だと懺悔したくなってくる。

何だこいつは。ここにいてだけで呑み込まれそうだ。

異星の侵略者達はそんな感情を振り払うかのように叫ぶ。

「わ、笑わせるな！ 女二人に何が出来る！」

俺様こそはあのフリーザにも匹敵すると言わしめた宇宙戦士が一人、ピーリカ様だぞ！」

「同じくピリララ！」

「同じくポポリナ！」

「ペーペルト様とは俺の事よ！」

名乗りをあげる戦士達を見ながら、リゼットはプイプイのパチモノのような4人に何とも言えない気持ちを抱いていた。

何だろう、この、何？

記憶の中に存在するファミコンのドラゴンボールゲームにはギニュー特戦隊の色違いのような雑魚敵がいたりするのだが、例えるならばそんな感じだ。

強襲サイヤ人や激神フリーザ、烈戦人造人間などから続くあのシリーズがもし魔人ブウ編まで続いていたのなら、あるいはこんなプイプイの偽者のような雑魚敵が出ていたのかもしれない。

要するに、リゼットにとって彼等はその程度の感想しか抱けない——雑魚でしかなかった。

「なかなかのエネルギーを持っているようだな。喜べ、貴様のそのエネルギーも魔人ブウ復活の為に使……」

「そうですか」

相手の言葉が終わる前に、リゼットが最近の修行で新たに覚えた力である『魔法』を行使する。

すると上空から4つの雷光が降り注ぎ、色違いプイプイ4人を纏めて焼き焦がした。

気弾に威力は劣るが速射性は悪くないし、威力も術者本人の力でちゃんと変動するようだ。

何より気の消費が全くない。別の何かを使っている感じはするのだが、例えるならHPとMPの違いだろうか。

とりあえず雑魚の処理になら充分使える技だろう。

「つ、強い……！ 何故地球の神がこれほどまでに」

「ええと……キビットさん、でしたね。とりあえず私の神殿へと行きましょう。

詳しい話はそこで伺います」

「う、うむ」

キビットを連れて神殿へと戻り、事のあらましを聞いた結果リゼットは思わず溜息を吐いていた。

界王神達が悪いわけではない。ミラとトワの出現を予測しなかった自分の落ち度

だ。

まさか魔族が界王神界にまで出しやばってくるとは。

……というかミラ、生きていたのか。

あの時の記憶はあやふやだが、それでもミラの身体の半分を消し飛ばした事はころうじて覚えていいるし、どう考えても致命傷だと考えていた。

だが生きていたという事は、何かしらの再生能力持ちだったのだろうか。

あの二人が何を考えて魔人ブウを持って行ったのかは知らないが、とりあえずロクな目的でないのは確かだろう。

というか先ほど台詞の途中で倒してしまっただが、あのプイプイブラザーズ、変な事を言っていなかっただろうか？

確か魔人ブウ復活の為のエネルギーがどうたらと……。

（あ。これ駄目なパターンです。間違はなく玉をバビディに譲渡してますね）
トワとミラの狙いは分からない。

だがどうやら、結局魔人ブウはバビディに渡ってしまったらしい。

んー、と唸りながらリゼットは思案を巡らせる。

バビディ達だけならば自分とセルだけで突撃して余裕勝ち出来るのだが、ミラとトワがいるとなると正直厳しい。

今の自分ならばミラ相手でも充分に勝機があると思うのだが、必ず勝てる相手とも限らないのだ。

しかし、だからといって悟空達に声をかけて、それでベジータに同行されては原作通りになってしまい非常に面倒臭い事になってしまう。

いや、ベジータだけではない。ターレスとピッコロもアウトだろう。

原作の神コロならともかく、このピッコロは先代やネイルと融合せずにスラッグと融合してしまっている。

これではどう考えてもバビディの術に嵌ってしまう。

もういっその事、ここから亜空間攻撃でレイジングブラストぶっばして宇宙船爆破してしまおうか、とまで考える。

それだとまず確実に魔人ブウが衝撃で復活してしまうだろうが、エネルギーの足りていない魔人ブウなぞ大した脅威とは思えない。

誰かが吸収されてしまう可能性も考えられるが、そうなる前にこちらから打って

出て細胞一つ残さずに消してしまえばいい。

原作通りならサタンと仲良くなつて味方になってくれたが……それは条件が難しすぎる。

まず魔人ブウを復活させて和解して仲良くなつてから悪と善に分離させ、悪の方だけ消し飛ばす……いや、無理だからこんなの。

仮にバビディなどを全て倒した後でブウを復活させたでしょう。

その上で人を殺すのは悪い事だからやめてくれと言つたでしょう。

まずそれで素直に聞いてくれるかは分からない。むしろ聞かない可能性の方が遙かに高いだろう。

それで何とか和解したとして、その後どうやって悪と善に分離させる？

まさか子犬をブウに懐かせた上で、誰かを雇つてブウの目の前で子犬を射殺させるのか？

……とんでもない話である。少なくともリゼットはそんな事をやりたくない。それで上手く行つて分離させたとして、その後に悪ブウをどうする。

上手く倒せればいいが、吸収を繰り返して強くなる恐れだつてあるのだ。

一步間違えればブウを味方にしたいが為に地球が滅亡する恐れすらある。

仲間が全員吸収されて死んでしまう可能性だってある。

魔人ブウとはそれほどに恐ろしい相手だ。欲をかいて挑むような相手ではない。確かに魔人ブウの味方化は魅力的だが……リゼットは地球の神である。

守るべき地球そのものをチップにしてまで引き込みたいとは思わない。思っていない。

魔人ブウは原作では仲間になるから仲間になりたい……これはリゼットの個人的な欲でしかないのだ。

己の欲に地球と、仲間達を賭けるなどどうして出来よう。

「……よし」

即断即決。リゼットはこの場からの遠距離攻撃にて宇宙船ごとバビディ達を消し飛ばしてしまう事を決定した。

善は急げと早速ゲートを開き、手を翳す。

手加減はしない。初手にて最大火力を叩き込む。

気を高めに高め、白い輝きが全身を覆う。

その気の発露にキビトが驚愕に顔を強張らせ、治療の済んだ界王神が慌てたように声を荒げた。

「お、お待ちなさい！ 何をするつもりですか!？」

「勿論、バビディの宇宙船に攻撃を仕掛けるつもりです」

「な、なりません！ そんな事をすれば衝撃で魔人ブウが復活してしまう可能性があります！」

「復活と同時に処分します。問題はありません」

「なりません！ 貴女は魔人ブウの恐ろしさをまるで分かっていない！」

リゼットは界王神の慌てようを見ながら、少し慎重すぎやしないだろうかと心配になってきた。

確かに魔人ブウは恐ろしいだろうが、それは万全の状態で復活してしまった場合だ。

勿論復活しないなら、それが一番なのは認めるが慎重になりすぎてMAXパワーで復活されるくらいならエネルギーが全く溜まっていない時に復活させてしまう方がいい。

何よりトワとミラが何をするか分からない以上下手に後手に回るのは不味いだ。

あの二人なら何かしらの手段を見付けて魔人ブウを復活させかねない。

とはいえ、それを界王神に説明しても魔人ブウに怯え切っている彼は納得しないだろう。

本当に面倒な事になってしまったものだ。

なまじ、リゼットが神で界王神がその上に立つ最高神であるせいで無視する事も出来やしない。

「では、どうするのですか？」

「地球には貴女を含め、優れたパワーの持ち主が数多くいるはずです。

彼等の協力を得て、バビディの宇宙船に乗り込みバビディを倒すのです」

リゼットはもう頭を抱えたかった。

乗りこむのです、と勇ましく言っているがその場合戦うのは主に自分達だ。

界王神の戦闘力では……失礼を承知で言うところ全くアテに出来無い。

スカウターがないので正確な数値は分からないが、気の大きさを言えば人造人間

との戦いが始まったばかりの頃のターレスと同じくらいだ。

別に弱くはないのだが、相手側にダーブラがいる事を考えると少々厳しい。

「……乗り込むよりもここで先制攻撃してしまった方が戦術的に有効だと進言しますが」

「なりません！ これは界王神としての命令です。

魔人ブウの復活だけは阻止しなくてはなりません」

「……」

これは下手しなくても魔人ブウ復活ルート入るかもしれない。

そう思いながらリゼットは、悟空と悟飯のみを対象としてテレパシーを送信した。

【リゼットの容姿】

・特に書く事がなかったので今回はたまに聞かれるリゼットの容姿について書いておきます。

まずリゼットの顔ですが、一貫してDB初期（1巻～16巻）くらいまでの女キャ

ラみたいな顔です。

一人だけ初期みたいな絵柄のままなので悟空達と並ぶと結構浮きます。

目の形は青ランチさんや結婚前チチみたいな感じで。

服装の全体的なイメージとしては、東方の神綺の服を真っ白にしたような感じで
しょうか。

第七十一話 戦士集結

リゼット「ベジータ、ピッコロ、ターレスは操られるので絶対に来ないで下さい。いいですね？ フリじゃないですよ、本当にこの３人は来ないで下さいね！」
ベジータ「ダニィ!? この俺が操られるわけがないだろう！」

本当にそんなものが効くのが確かめてやるぜ！ 今からそっちに行くぞ！」

リゼット「」

ピッコロ「へっ、操られると言われて『はいそうですか』と従う俺様だと思ったか？」

ターレス「むしろ逆だな。何が何でも戦いたくなかったぜ」

リゼット「」

リゼットが呼びかけを行ってから数分後、もう少しゴネるかと思った悟空達は主力メンバー勢揃いで天界へと瞬間移動で現われた。

リゼットとしては、折角の天下一武道会が台無しになる事を惜しむかと思ったのだが全くそんな素振りはない。

邪心の持ち主は操られる可能性があるのだから来ないようなと言ったのに、むしろそれが逆効果になって『俺が操られるわけないだろう』とベジータ、ターレス、ピッコロまで来てしまったのは誤算だった。

意外だったのはベジータがそれほど残念がっている様子がない事だ。

よく考えればこれは当たり前の事で、この世界と原作は状況からして既に違う。本来この時期では悟空は死んでおり、一日だけの復活だった為にベジータは再戦の機会を下らない事で奪われた事を怒り、苛々していた。

だがこの世界では悟空は存命なのだ。しかも悟空とベジータはこの7年の間に何度も手合わせを行っている。

つまりベジータは原作ほど、悟空との戦いに執着していない。

結果として天下一武道会に残ったのはクリリン、ヤムチャ、18号、悟天、トランクスの5人だけであり後は全員ここに集結してしまっていた。

「皆、すみません。せっかくの武道会なのに呼んでしまって」

「なあに、いいさ。神様がオラ達を呼ぶって事は相当なんだろう？」

第二に、悟空達の信頼度の違いがここに挙げられる。

本来の流れでは悟空達を誘うのは界王神になるわけだが、当然ながら悟空達からの信頼などそこにはない。

彼等からしてみればポツと出の偉いらしい人に誘われたというだけであり、しかも界王神は敵を探る為に悟飯を生贄にするような真似をしていたので心象もあまりよくなかったのだろう。

そして何より彼の気の少なさが問題だった。

悟空達にしてみれば原作の一連の流れは『何か弱い奴が騒いでるけど本当にやばい事態なのかいまいち分からない』というものでしかない。

実際魔人ブウが登場するまでベジータも悟空も、悟飯でさえも樂觀視してしまっていた。

界王神にとっては脅威でも自分達なら問題ない、と考えてしまったのだ。

『界王神を一度でもすごいと思ったか？』とはベジータの台詞だったか。

だが呼び出したのがリゼットならば彼等の警戒度も変わる。

リゼットは最初期からずっと変わらず彼等の中でも最強クラスに位置している仲間であり、更に一時期は師事していた相手でもある。その実力は全員が認める所だ。

気の強大さでも超サイヤ人勢に匹敵し、戦闘技術と経験は疑いようもなくトップ。加えてそこに超能力や神仙術、更に最近会得した魔法まで兼ね備えているのだ。しかも彼女は、いつでも動かせる味方としてセルやMr・ポポ、兎人参化やゴッドガードンが神殿にいる。

つまり彼女ならば大抵の事は自力でどうにか出来てしまい、気付いたら勝手に解決していたという事も少なくない。

その彼女が悟空や悟飯の力を必要としたのだから、それは必然的にかなり厄介な事態が起きている、あるいは起きようとしていると悟空達も考えるわけだ。

「ええ。ですが説明の前にまず皆に紹介したい方がいます。

こちら、全宇宙の神である界王神様です」

リゼットが紹介すると界王神はニコリと笑い、悟空達と向き合った。

とりあえずファーストコンタクトなので威厳を出そうとしているのだろう。

しかし悟空達は気が読めるので、実のところあまり意味がないわけだが。

「宇宙の神様？　へえ、すごいんだなあ。

もしかして、神様よりもすごいのか？」

「フフフ。いえいえ、それほどでもありませんよ」

いきなり悟空がハードルを爆上げしてしまったが、どうやら界王神本人は今のハードルが成層圏を突き抜けてしまった事に気付いていないようだ。

キビトは既に先ほどの戦闘でリゼット＞界王神の力関係に気付いてしまっている
ので顔を青くしているが、界王神はまだそれに気付かない。

「もしかして、本気を出した時の神様よりも上なんでしょうか？」

「フフフ……さあ、どうでしょう」

今度は悟飯がハードルを天高く放り投げた。

彼の言う『本気』とは恐らく、ゼノバース発動時の事だろう。

既にハードルは太陽系を脱し、銀河の海を泳いでいるが界王神はまだ気付いていない。

「やっぱ超能力とかも使えるのか？」

「ええ。まあ、ほんの些細なものですけどね」

「そんな事言って、本当は色々出来るんだろ？」

「フフ、想像にお任せしますよ」

ターレスの言う超能力とは念動力や金縛り、読心や物質創造は当たり前として亜空間移動や亜空間創造。時間停止に気の形状変化、魔法なども含んでいる。

遂にハードルは銀河を越え、星の海へと旅立った。もう二度と帰って来る事はないだろう。

全ての事情を知っているセルはりゼットの後ろで愉快そうに笑っており、りゼットはりゼットで何だか申し訳ない気持ちで一杯になっていた。

何と言うか、とりあえず御免なさいと謝りたい。

悟空達に事情を説明し、りゼット達はバビディの宇宙船へと向かう事を決めた。界王神は場所が分からないので部下を見付けて泳がせましょうなどと言っていたが、そこはりゼットが既に場所を掴んでいるので必要ない。

向かうメンバーはりゼット、セル、悟空、悟飯、ベジータ、ターレス、ピッコロ、

ナツパ、界王神、キビトの10人だ。

リゼットとしては界王神とキビトは足手纏いなので神殿に残しなかったのだが、流石に最高神にそんな事は言えない。

ベジータへのバビディの洗脳魔術に関しては……まあ、こちらも魔法でどうにか對抗するしかないだろう。

うまくすれば相殺出来るはずだ。

「さあ、行きましょう」

リゼットがゲートを開き、全員がその中へと入る。

もはや亜空間移動も慣れたものだ。

界王神とキビトだけが啞然としているが、害はないと判断したのか恐る恐るといった様子でゲートを通る。

そうすればもうバビディの宇宙船が見える位置にまで到着し、リゼット達はこれからどうするかを話し合う事にした。

といっても取れる手段は二つに一つだ。

「さて、皆の意見を聞きましょう。」

私達が取れる方法は二つ。先制攻撃にて宇宙船を破壊して中にいる敵を一網打尽にするか。内部に乗り込んで戦うかです。

前者は手早く終わりますが、魔人ブウ復活の危険があり、後者は敵の陣地に入り込むわけですから何が起こるか解りません」

「そりゃあ、選ぶまでもねえ。宇宙船の破壊だろ。」

何でわざわざ敵の有利なフィールドに入る必要がある。戦いってのは敵の嫌がる事をするのが定石だぜ」

リゼットの問いに対し、まずターレスが宇宙船の破壊に同意を示した。

彼の言っている事は至極真つ当だ。反論の余地はない。

「俺もそれでいい。何なら俺が挨拶してやろうか？」

「構わん。さっさとやってしまえ」

ナツパとベジータも宇宙船破壊に賛同した。

魔人ブウの復活？　なるほど、確かに脅威だ。リゼットが味方を集めるくらいなのだから強いのだろうと分かる。

だが、ならばこそ不完全な状態で留めるべきだ。

完全復活など、決してさせるべきではない。

悟空と悟飯も領き、ピッコロも反論しない。

セルもまたそれが最善だ、と頷いている。

ここに地球勢の意見は一致し、しかし界王神だけが反論を口にした。

「だ、駄目です！ どちらもなりません！」

「……しかしですね界王神様。現状、そのどちらかを選ばなくてはならないわけ
して……。」

何らかの魔術防御を施しているのか、内部への転移攻撃も出来ませんし」

バビディの宇宙船内部へのゲートを使った遠隔攻撃は残念ながら出来ない。

既に試しているのだが、あの宇宙船の中は空間が滅茶苦茶になっており上手く繋
げられないのだ。

悟空も瞬間移動は出来ないらしく、肩をすくめている。

まあ、瞬間移動が可能ならばそれこそ原作で直接バビディを叩きに行っただろう
し、これは予想出来る事であった。

「おいおい界王神さんよ。攻撃も駄目、突入も駄目って、そりゃあ無理だぜ。どう

しろってんだ」

「チャンスを待つのです。必ずチャンスは訪れます」

「チャンス？ 随分暇な事言ってるなあ。あんたの言うチャンスってのはまさか、バビディがノコノコと宇宙船の外に一人で出るのを待つつもりか？」

「一人で、とは言いません。側近はいるでしょう。」

しかし私達でかかれれば倒せるだけの側近と共に外に出る時が必ずあります。その時を待つのです」

ターレスは界王神の度を越した慎重さに顔をしかめる。

そしてリゼットへと顔を向けて視線で問いかけた。『こいつ本当に強いのか？』と。

リゼットはあえてその問いには答ええない。『さあ何の事でしょう？』としらばつくて視線を逸らすだけだ。

だがその態度こそが答え。この瞬間、ターレスを初めとする全員が界王神の実力に疑問を抱いた。

「ふっ、人が悪いぞリゼットよ。本当はとっくに対策を考えているんだろう？」

「あ、バレました？」

もうそろそろ遊びはいいだろう、とセルが告げてリゼットへのネタ晴らしを求める。

するとリゼットもまた微笑み、軽く返答を返した。

破壊も駄目、突入も駄目。なるほど、ならば要はこの二つと違う道を選べばいいわけだ。

宇宙船内部への転移は確かに出来ない。

ならば話は簡単——宇宙船そのものを転移させてしまえばいい。

「では作戦を説明します。これより私の能力を使い、宇宙船をどこか遠くの恒星の地表へ転移させ、焼き尽くします。

いかに魔人ブウでもエネルギーが足りていない状態で、封印されたまま恒星に放り込まれては消滅するしかないでしょうし仮に復活出来ても復活と同時に消滅します」

「そ、そのような事が可能なのですか!？」

「ええ。他には私の創った封印空間に閉じ込めるといった方法や精神と時の部屋に

閉じ込めてから宇宙船を破壊するといった手段もありますが、これが最善と考えました」

哑然とする界王神に軽い補足を入れ、それから更にリゼットは説明を続けた。

「しかし、恐らく今回の事態を招いた魔族……ミラとトワだけは脱出してこちらへ仕掛けてくるはずです」

「時間を越えて現われるっていう奴等だな。神様とセルでも苦戦したっていう」

「ええ、そうです悟空君。本当はこの二人も一緒に焼き尽くす事が出来れば一番いいのですが、まず間違いなく脱出されるでしょう。ですので、この二人を迎え撃つのが皆の役割です」

リゼットはもうこれ以上、あの二人との戦いを続ける気はなかった。

今日、ここで。

これ以上奴等が舞台を引っ掻き回す前に決着を付けてみせる。

その為に悟空達をここへ呼んだのだ。

「あまり好ましい戦い方ではありませんが、遠慮はしません。

逃げる間を与えずに一気に倒し切ります」

「ああ、わかった。一気に決めっぞ」

間を与えればすぐに逃げる。ならば間を与えなければいい。

子供でも分かる簡単な理屈だ。

バビディ達と魔人ブウは恒星の熱にてこの世から消し去る。

ミラとトワは総力で叩き潰す。

そうすればこの戦いはここで終わりだ。

否、終わらせてみせる。

その決意をした直後。

リゼット達が仕掛けるよりも早く、突然宇宙船が木っ端微塵に爆散した。

「……え？」

リゼットが呆け、皆を見る。

だが勿論、この場の誰も攻撃などしていない。全員が違う、と首を横に振った。

一体何が起ったのかが分からない。まだ誰も何もしていないのに勝手に宇宙船

が吹っ飛んだ。

いや、問題はそこではない。

注目するべきは気……先ほどまで確かに感じられた宇宙船内の気が一斉に消失し、バビディの気までもが消え去った。

代わりに現われたのは巨大にして捉えどころのない不可思議な魔人の気だ。

界王神はワナワナと震えており、「そんな馬鹿な」と呟いている。

それを見てリゼットは察した。

理由はさっぱり分からない。何が起こったのかも分からない。

だが魔人ブウが復活してしまった、という事実だけはかろうじて理解する事が出来た。

それも……気の大きさから考えて、恐らくは完全な状態で。

【戦闘力】

・魔人ブウ…1000億

・魔界の王ダーブラ…250億

・ヤコン（死亡）…40億（800キリ）

・プイプイ（死亡）…1億

※キリに関して

キリはVジャンプでは超サイヤ人悟空Ⅱ 1億5千万という前提の上で3千で割って1キリⅡ5万としています。

しかし、それではあまりにも少なすぎるのでこのSSでは桁を二つ足して1キリⅡ500万とします。フリーザ戦から成長してないとか有り得ないです。

記事を書いた人が前提にしている悟空…フリーザ編で初めて変身した時の悟空
実際に3000キリと判定された悟空…上記の悟空がヤードラット星で修行して地球に帰還した後に三年後に現れる人造人間に備えて修行をし、その後精神と時の部屋で一年修行し、更にあの世で七年間修業した後のブウ編悟空

なので1キリⅡ500万とし、原作の超サイヤ人悟空は3000キリⅡ150億とします。

超サイヤ人3だと1200億です。

まずはこれを基準にし、ここから原作の描写や発言を参考にしてブウなどの戦闘力を出しています。

ちなみにこのSSの悟空は超サイヤ人で6500キリです。

ライバルに恵まれた結果、何か強くなってしまいました。

魔人ブウはその原作悟空の超3以下なので適当に1000億としました。

(再生能力があるので互角だと悟空に勝ち目は無いが、原作で実は倒せた発言があるので確実に超3悟空未満。

本音を言うところの不死身性を突破するには倍くらいの差はないときついと思うので600億くらいにしてしまいたかったが、それだと流石にブウが弱すぎるので1000億で妥協)

ダーブラは3000キリを叩き出した悟空の強さを見ても勝てる気で出撃したので150億以上は確定。

しかし悟空から「今となっては大した相手じゃない」と言われたので超2悟空(300億)未満確定。

後に「思ったより強い」と評価に上方修正が入るのでオマケして250億にしました。

このSSだと今の超サイヤ人2悟飯と互角くらいです。

プイプイはよく分からないので適当に1億にしました。

Q、ラディッツをキリで測るとどうなるの？

A、戦闘力たったの0・00003キリか……。。

第七十二話 因縁の対決

刻は少し遡り、宇宙船が爆発する数分前。

バビディは混乱の極みにあった。

かつて父が創り上げたという最強の魔人、ブウを復活させるべく地球へ来たまではよかったが肝心の封印の玉がどこにも見当たらない。

そればかりか地球人はどうもこいつも悪の気が全くないせいで洗脳も出来ず、やつあたりで地球の都市を適当に消してしまうように部下の一人であるダーブラへと命じた。

ここまではいつも通りの事だ。

上手く行かない事などこれまでも山ほどあったし、その度にこの下劣な魔導師は部下を使う事で理不尽な怒りを無関係な者にぶつけて晴らしてきた。

だから今回もそうするつもりだったし、そうなると思っていたのだ。

ダーブラの、怒りを込めた声を聞くまでは。

「……黙れ、蛆虫」

洗脳により己に忠誠を誓わせた者の口からはまず出ないだろう罵倒。

それにバビディは驚き、ダーブラを見た。

「ダーブラ！ お前、誰に口をきいてると……がっ!？」

言葉の最中に蹴られ、歯がへし折れた。

鼻がへし折れて醜い顔がより一層醜くなり、短い手足をバタつかせて滑稽に転がる。

バビディの戦闘力は無いに等しい。殴り合いならばプイプイにすら劣る。

だからこそ彼は今まで自分で戦う事などしなかったし、いつだって他人の力を利用してきた。

心の隙に付け込んで操る事で、本来ならば圧倒的に格上であるはずのダーブラすら従えて王様気分を味わっていた。

だが、こうしてダーブラから直接的な暴力を振るわれてしまえば抵抗する術などありはしない。

バビディは恐怖を込めた視線でダーブラを見上げ、そして気付いた。

洗脳した証である額の『M』の字が消失している事を。

ダーブラの全身から沸きあがる、黒い気の発散を。

「そ、そんな、どうしてだい？ どうして僕の魔術が……」

「今までよくも、この魔界の王を扱き使ってくれたな。」

この……寄生するだけしか能のない、糞虫があッ！」

ダーブラが憎悪のままに足を振り下ろし、バビディの腕をへし折った。

否、へし折ったなどという生易しいものではない。

あまりに早く振り下ろされた足はバビディの枯れ木のような腕を切断し、耳ざわりな絶叫をあげさせた。

だがダーブラの怒りは仕方のないものだ。

元々彼は暗黒魔界全てを支配する魔の王であり、魔界の頂点に立つ者だ。

一方バビディは暗黒魔界に暮らす魔導師という種族であり、それは結局のところ魔界に暮らす妖怪のようなものでしかない。

つまり本来ならば主従は逆であり、バビディはダーブラに従わねばならぬ立場なのだ。

それを履き違えて魔術で不意をついて洗脳し、あまつさえ道具同然に使う。正気

に戻ったダーブラのプライドがどれだけ傷付いたかは察するに余りある。

そのダーブラの後ろでバビディを、文字通りゴミを見る視線で見下すのはミラとトワの二人だ。

トワはダーブラの隣に寄り添い、腕を絡める。

「ねえお兄様。早く消しちゃいましょうよ、こんな臭くて醜いゴミ。

生きているだけで眼の毒だし、空気が汚れるわ」

「ああ、そうだな。トワ」

バビディはこの瞬間理解した。

こいつだ。この女が自分の魔術を破り、ダーブラを正気に戻したのだ。

小さな皺だらけの魔導師は自分のやってきた事を棚に上げ、激しい憤りを覚える。

許せない、横暴だ、よくも。

そんな場違いな感情を燃やし、トワへ向けて怒声を発した。

「お、おまえだな！ お前、よくも僕のダーブラを！ よくもよくも！ 絶対に

許——」

「あゝ？」

言葉は最後まで続かなかった。

ダーブラが振り下ろした剣がバビディの残った腕を切断し、またも耳ざわりな絶叫へと変わったからだ。

痛みについてのうち回るバビディを心からの侮蔑の視線で見下し、魔界の王はこんなゴミに今まで扱き使われていたのかと自分で自分が情けなくなつた。

「もう貴様は何も話すな。何をしてても害悪だ」

ダーブラがこの上ない嫌悪を示し、何の遠慮もなくバビディへと手を翳す。

そして気功波を放ち、薄汚い魔導師をこの世から消失させた。

これでバビディは死んだわけだが、そのままではまだ終わらない。

魔界の王を侮蔑し続けてきた怒りは殺した程度では到底収まるわけもなく、トワは残酷な嘲笑を浮かべた。

「さあお兄様。次はあいつの魂を探しましょう」

「ああ。あの屑には『二度目の死』をくれてやる」

トワの差し出した手を取り、ダーブラがそこから消えた。

死んであの世に残るなど絶対に許しはしない。暗黒魔界の王への侮辱はそれほど

に重く身の程を弁えぬ行為だ。

この世界では死ねば魂はあの世へ行き、そこで地獄か天国かに振り分けられて転生の時を待つ。

だがもしも死んだ状態でまた死ねば、もう二度と復活する事はない。永遠の『無』と化するのだ。

また、魔族によって命を奪われた者はあの世にも行かずに彷徨う事になるが、その程度で済ませる気はダーブラにもトワにもなかった。

これより僅か数秒後、彷徨っていたバビディの魂の前にダーブラとトワが出現してその魂を消し去ってしまうわけだが、残念ながら彼に同情する者は一人として存在しなかった。

「さて……始めるか」

そして主のいなくなった宇宙船内に残ったミラは、プイプイやヤコンといった戦士達を屠るべく行動を開始する。

全ては魔人ブウへエネルギーを注ぎ込み、復活させる為。

悪人の気では魔人ブウは蘇らない。だが本来ならば死なないはずの者を殺す事に

より歴史改変のエネルギーが発生する。

そしてミラとトワはそのエネルギーをキリとして集めることが出来るのだ。

この船の戦士達は一人残らず、その生贄として選ばれた……ただそれだけの事であった。



「これは一体……」

何の前触れもなく吹き飛んでしまった宇宙船を呆然と眺め、リゼットが呟く。

予定外も予定外。こんな展開は流石に予測の外だ。

だが一体何が原因なのかはすぐに察する事が出来た。

爆煙の中から、ピンク色の魔人を従えて出てきた男の姿を見てしまったからだ。

魔人の姿を見て界王神が元々青い顔を更に青褪めさせ、ガタガタと震え出す。

「ま……ま、ま、魔人、ブウ……!!」

「魔人ブウ？ あ、あいつがですか？」

みるからに怯えている界王神に、悟飯が不可解なものを見るように顔を歪めた。確かに凄い気は感じる。只者でないのも分かる。

だが、見た目はとても強そうに見えないし、気だつてまだどうにでもなりそうな相手とは思えない。

だが界王神は汗を滝のように流しながら、頷いて肯定した。

「そ、そうです。わ、忘れやしませんよ、あ、あの恐ろしい顔は……」

リゼットは思わず『あれ、大界王神様の顔ですよ？』と茶々を入れそうになったが、かろうじてその言葉を喉の奥に仕舞い込んだ。

代わりに、この事態を引き起こしただろう敵へと声を発する。

「ミラ！」

「久しいな地球の神よ。会いたかったぞ」

そこにいたのは、以前からずっと続く因縁の敵であるミラであった。

更にその隣にトワとダーブラが現われ、リゼットを挑発的に見上げている。

彼等との戦いは覚悟していたが、完全に先手を取られてしまった。

恐らく魔人ブウの復活にはプイプイやヤコンといった連中を纏めて使ったのだらう。

魔人ブウの復活には悪人の気は使えないはずだが、その辺りはトワの魔術でどう

にかしたに違いあるまい。もう彼女が何をしても驚かない。

ダーブラだけを残しているのは戦力として役立つからだろうか？

それにしてもダーブラは操られている様子もなく、洗脳時特有の禍々しいオーラもない。

そればかりか、トワがやけに親しく寄り沿っているような気さえする。

「に、逃げましょう、皆……も、もう駄目です」

声を震わせながら敵前逃亡を提案する界王神に悟空達全員がいぶかしむように彼を見た。

今ここで逃亡などしたら、それこそ地球は魔人ブウに滅茶苦茶にされてしまう。これが全宇宙の神が取る決断なのか、と信じられない気持ちにさせられたのだ。しかしそれを口に出来なかったのは、彼の怯えようが尋常ではなかったからだ。まるでブロリーを前にしたときのベジータのように……いや、それ以上に怯え切っている。

「ご、悟空さん、悟飯さん！ 逃げましょうよ！

ここにいたら全員殺されてしまう！ 逃げますよ！

早く!!!!!!」

「悪いが界王神様、そりゃ出来ねえよ。

ここでオラ達が逃げたら誰が地球を守るんだ」

逃走を強く推す界王神に、まず悟空が反対した。

その隣にターレスが立ち、ニヤリと笑う。

更にベジータとピッコロもそれぞれ戦闘態勢へと入り、前へと歩み出た。

「だ、そうだが? どうするんだ、神さんよ?」

「聞くまでもない事でしよう」

「だろうな」

ターレスの問いにリゼットがコートを脱ぎ捨てて、いつものドレス姿になって答える。

それに対しターレスもまた予想していたように拳を握った。

今のは質問ですらない。分かり切った事を確認しただけのものだ。

「り、リゼットさん、貴女からも皆に言って下さい!」

ここは逃げるべきです! 逃げて、生き延びなければならぬのです!

貴女が言えば、もしかしたら……」

「……皆に告げます」

界王神の催促に応えるかのようにリゼットが言葉を発した。

その事に界王神の顔が喜色に歪み、だが次の瞬間硬直した。

「これより、魔族及び魔人ブウとの戦闘に入ります！」

今感じられる気は小さなものですが油断はしないで下さい。彼の全力はこんなものではありません。

また、界王神様の記憶を覗いて分かりましたが相手はセル以上の高い再生能力を有しています。完全に消滅させるまで絶対に気を抜かないように」

「リゼットさん！！？」

「流石はうちの神様だ。そうこなくっちゃ！」

リゼットが発したまさかの界王神無視の突撃指示に界王神が目を見開いた。

一方悟空はそれでこそだ、と嬉しそうに言い、他の戦士達も同じように構える。ベジータも腕組みをしたまま口の端を歪めた。

地球の脅威を前にしての撤退などない。この星の住人としても、そして戦士とし

てもだ。

「何だ、あの連中は？」

「この地球の戦士達ですわ、お兄様。」

特にあの白い女と、変な髪型の胴着の男には気を付けて下さい」

ダーブラの問いにトワが答えるが、その際に出た言葉がリゼットを驚かせた。
お兄様？　今、あの女はダーブラを兄と呼んだのか？

いや、決しておかしな話ではない。あの女だって魔族なのだ。

しかしまさか、ダーブラの妹とは……。

「私達との決着を付けるつもりで戦力を集めて来たのね。」

けどそれはこちらと同じ事。纏めて始末してキリを回収してやるわ」

トワが杖を振るう。

すると、その瞬間に信じ難い出来事が起こった。

魔人ブウから禍々しいオーラが溢れ、あろう事か3体に分裂したのだ。

しかも気の減少が全くない。戦闘力をそのままに数だけを増やしている。

別の時間軸から連れてきた……わけではない。

魔人ブウは元々肉片の一つも残っていればそこから完全に再生してしまう魔人だ。

ならば、再生の応用で自分を増やす事すら不可能ではないのだろう。

事実……リゼット達を知るはずもない事なのだがトキトキ都では別の時間軸の魔人ブウが己の身体を千切って生み出した彼の子孫が存在している。

そう、魔人ブウはその気になれば増える事すら可能なのだ。

普段それをやらないのは、やってしまえば魔人ブウといえど弱体化してしまうからだろう。

例えば本来の歴史では魔人ブウが善と悪に分かれる事で弱体化が発生している。だが今回はその弱体化がない。

何故ならミラとトワがこれまでの時間改変で得たエネルギーを彼に与え、失われるはずの力を充填しているからだ。

あまりに絶望的な光景を前に界王神は膝をつき、「もうだめだ」と呟いていた。

「地球の神は俺がやる。誰も手を出すな」

「ミラ、分かっているとは思うけど」

「ああ。あの妙な力を出す前に片を付ける」

まずはミラが真っ先に飛翔し、狙いをリゼットへ定めた。

リゼットもそれを受けて立ち、二人の姿が消えて空気が爆ぜた。

それと同時に3人に分裂した魔人ブウが飛び、最初の一体を悟空が、二体目をセルが、三体目をベジータ、ターレス、ナッパが相手取る。

ダーブラにはピッコロが向かい、トワには悟飯が挑んだ。

そして界王神とキビトはあまりの展開の速さについていけず、その場でうろたえている。

いや、付いていけないのは展開の速さだけではない。戦いの速度そのものだ。

全員があまりの速度で動くものだから眼で追う事も出来ず、援護すらも行えない。

「な、なんと！ 下界の者達がこれほどの力を!？」

下界の人間達の力に界王神が驚かされているのを放置し、リゼットとミラが成層圏付近を戦場に衝突した。

これまで二度に渡り戦ってきたが、そのどちらも不完全燃焼だ。

一度目はリゼットがまだミラと戦えるレベルではなく、二度目はリゼットの暴走

で戦いそのものが流れた。

そして迎えた三度目の正直。両者のレベルはこれまでになく接近し、余計な邪魔もない。

ここで決着を付ける——その決意を共有し、二人は最初から出し惜しみなしの全力で敵へと挑んでいる。

「はあああ！」

ミラが連続で気弾を放ち、気の弾幕を展開する。

しかしその全てがリゼットのバリアに阻まれて届かない。

だがそれでいい。元よりこの弾幕はただの目晦ましだ。

ミラが高速で翔け、リゼットの背後から蹴りを放った。

「っ！」

だがリゼットの周囲を飛翔している光の球がそれを許さない。

自動で防御、迎撃を行う光球がミラの蹴りを受け止め、彼を弾き飛ばす。

それと同時にリゼットが掌を翳して気合砲。追い討ちをかけた。

吹き飛んで行くミラを追い加速。

ガードの上から連撃を叩き込む。

「ぐ……っ！」

攻撃するのはリゼットだけではない。

彼女の周囲を旋回している光球も彼女の周囲を旋回^{まわ}りながら気弾を連射してミラにガードを強要して動きを固めつつ、その上からダメージを与えて体力を削っていた。

攻撃をガードされる、というのは基本的には好ましい事ではない。

しかしあえての逆発想。わざとガードさせて、その姿勢のまま固める。

光球の気弾が止まない限りミラはガードを解けず、その上で防御の上から削られる。その何と悪辣な事か。

だが無論、リゼットはこれで終わりではない。

上半身に光球の攻撃を集中させる事で下への注意を逸らし、隙を晒した足を蹴りで払った。

「しま……っ」

体勢を崩したミラの指を掴んで上へ放り投げ、残像拳で上下左右前後から同時に

襲い掛かった。

ただの残像ではない。メタルクウラとの戦いでもやった、気の分身をそこに置いての質量のある残像だ。

リゼットの分身達が同時に全方位からミラを攻撃して通過し、更にまた戻ってき
ては攻撃を加えて飛び去る。

それを三度ほど繰り返してからミラを蹴り落とし、飛びながら無数の光剣を創造
する。

「千の剣よ、在れ！」

一斉に射出される剣の弾幕。

その悉くを避け、叩き落とし、防ぎ、ミラが果敢に距離を詰める。

再び零距离での攻防。両者の手が常識を超えた速度で動き、一呼吸の間に何千何
万手と駆け引きを行う。

拳打、掌打、指突、手刀、裏拳。

時に真っ直ぐに、時にフェイントを折り交ぜ、敵の先を読み、その先を読み、先
の先を呼んで攻撃と防御を繰り返す。

一手でも誤ればそこを始点に怒濤の連撃を受けて一気に劣勢に追い込まれる羽目となる。

それを理解しているが故に気は抜けず、しかし必要以上のプレッシャーで自滅するというミスは犯さない。

体感時間を極限まで圧縮し、かろうじて互いの残像のみを追える超高速の世界に突入するもその表情は涼しいものだ。

ミラは地力で上回り、だがりゼットは光球と合わせての手数でそれを凌駕する。だがやはりまだミラは真っ直ぐすぎる部分がある。

不用意に発した攻撃の予兆。青さ故に露見した攻撃の信号——に見せかけたフェイント。

そのフェイントの中に隠された本命の一撃。恐らくはリゼットの裏の裏の更に裏を掻いたはずの攻撃の——更にその裏！ それをリゼットが見抜き、ミラの手首を捉えた。

「！」

腕を引いて体勢を崩し、胸に掌打！ 更に気を内部に浸透させて炸裂させる。

一撃で肋骨を砕いた確かな手応えを得て、だが一切の気の緩みはない。始点は得た。戦いのイニシアチブと流れはこちらが握っている。

それをいつまで握っていられるかが勝敗の分かれ目だ。

主導権がこちらにあるうちに、叩き込めるだけ叩き込む！

「はあっ！」

拳打！ 掌打！ 指突！

ミラの身体に点在する人体急所を次々と打ち抜き、怒濤の連撃を雨あられと浴びせた。

打つ、打つ、打つ——！

腹を打って空高く跳ね上げて飛ばし、先へ回りこんで蹴り落とす。

落とした先へ転移して掌打で弾き、飛ばした先へまたも回りこんで一瞬の間に千の連撃を放つ。

「インフラ・ユニット・ワールドInfinité World！」

時間を越え、この世のありとあらゆる存在を一秒間だけ停止させた。

硬直したミラへ次々と短刀型の気弾を放ち、魔空包围弾のように完全に閉じ込め

てから解除。

時間が動き出すと同時にミラを幾万もの気弾が同時に襲った。

地球上空で広がる巨大な爆発。その威力に地上の界王神達は顔を真っ青にし、魂が抜けたように呆けている。

だがそれを直接浴びてしまったミラは全身を血で染めながら猛然と飛翔し、リゼットへと向かう。

リゼットも接近させまいと亜空間を多重展開し、次々と空間の裂け目からの遠隔気功波を放った。

だがミラは見る事もなくそれらを避けて距離を詰める。

前から、横から、後ろから、斜めから、下から、死角から。

時間差で追い詰めるように撃たれる鮮やかな閃光。だがそのどれも掠りすらしない。

「っ！」

「遅いぞ！」

加速に加速を乗せたミラの拳がリゼットを殴打した。

咄嗟に張ったバリアが軋み、罅割れて貫通する。

だが直接当ててもまだリゼットには脱力による防御がある。

手応えはまるでなく、羽毛と化した少女の身体が成層圏を抜けて宇宙空間まで吹き飛んだ。

その先へとミラが先回りして蹴りを放つも、またも手応えなし。

脱力で完全に衝撃を受け流したりゼットが回転し、反撃の蹴りを放つ。

延髄！ 確かな手応えと共にミラの首筋に白い足が直撃してミラの瞳がぐるんと上を向いた。

だが——踏み止まる。

気絶しそうな衝撃を浴びながらもミラが執念でリゼットの足を掴み、渾身の右ストレートを彼女の腹へとめり込ませた。

「……っ！ う、あ……あ！」

「この体勢ではお得意の脱力も出来まい」

今度はリゼットが痛みに耐える番だ。

整った顔を苦痛に歪め、吐き出した血で己の顔を汚す。

そこに容赦なく第二撃！

一瞬の判断を問われる刹那、リゼットは迷わず自分の前に亜空間を展開してミラの拳を吸い込んだ。

消えた拳はミラ本人の後ろから現われて彼の後頭部を強打し、意識を一瞬飛ばす。

「……が！」

「好機！」

ミラがよろめいたのを見逃さずにリゼットが自身の身体を高速回転させる。

脚は掴まれたままだが、今のでほんの少しだけ隙間が出来た。

その隙間を回転によって強引にこじ空け、多少皮膚が削れるのも気にせずに振りほどく。

更に回転の勢いを殺さずに二度目の延髄蹴り！

ミラの首へダメージを重ね、今度は蹴った反動で彼から離れる。

「はあ……はあ……」

「ぜえっ……ぜえ……」

互いに息が切れてきた。ダメージも決して浅くない。

しかしまだ戦う事は可能だ。相手を倒すには充分すぎる。

リゼットが白い気を纏い、ミラが真紅のオーラを放つ。

そして再び、二人が正面から衝突した。

その光景を地上から見上げながら、トワが嬉しそうに眩く。

「フフ、楽しそうねミラ……未来では強い奴、皆倒しちゃったものね。

存分に見せてやるといいわ。次期魔界王たる貴方の力を。

大丈夫、負けるわけなんてない。だって貴方は私の最高傑作なもの」

ミラは今、この瞬間。これまでにない充実感を味わっているのだらうと確信出来る。

戦士としての本懐。求め続けた宿敵をこの時代で遂に彼は得たのだ。

ならば後は勝つだけ。この壁を乗り越えた時、彼は更に高みへと至る事が出来る。

その予感に心躍らせながらトワは、ほんの僅かに胸を過ぎった不安感を無理矢理押し込めて見えない振りをした。

……本当は、リゼットと関わるのは反対だった。

いつまたアレになれるか分からないし、戦うにはリスクが大きすぎる。

だがミラが決着を求めたのだ。

今までは彼に我慢させていたものの、このままでは暴発する可能性もあった。だから、危なくなったらすぐに逃げる事を条件として一度だけ戦う事を許したのだ。

これで勝てればそれでよし。

もし撤退せざるを得なくなっても、とりあえず我儘は聞いてやったのだから以降はマシになるだろう、と……そう考えて。

(……大丈夫よね、ミラ)

だがどうしても、不安が消えなかった。

界王神「もう駄目です……おしまいです……。

勝てるわけがない……あいつは伝説の魔人なんだあ……。

殺される……み、みんな、殺される……。

逃げるんだあ……。

わ、分からないのですか……やはり伝説の魔人……私達が勝てる相手ではなかった……。

何故です……何故貴方達は戦うんです……勝てるはずなどないというのに、何故……」

ベジータ「……………」

【インフィニットワールド】

・時の止まった世界で見える……。

そう……我が『インフィニットワールド』が初めて時を止める経験をしたのは半年前の事です。

能力のパワーとスピードを試そうと人参化に散弾銃を撃たせ、弾丸をつまみ取ろうとした一瞬……何もかもが静止したように見える事に始まった……。

最初は幻覚だと思った……。

訓練されたマホメド・アライJr.は相手のパンチが超スローモーションで見え……事故に遭った瞬間の範馬刃牙は体内や脳でアドレナリンやらエンドルフィンやら何

やらが分泌されて一秒が何秒にも何分にも感じられるというあれだと思いました。
だが……我が能力『インフィニットワールド』はその静止している空間を弾丸を
回り込んで体全体で動く事が出来た。

そして弾丸を無視してカリンをモフった……。

幻覚ではなかったのです……。

【戦闘力】

・ミラ…1300億

・ダーブラ…250億↓320億

（洗脳解除＋トワからのキリ供給）

・トワ…300億

（ただし魔術があるので実際の強さは数値以上）

第七十三話 ミラの本気!最強はオレだ:!!

地球のとある村にある、とある民家。

そこでは結婚してから24年以上経つ夫婦が仲睦まじく暮らしていた。

その日も彼等はいつも通りにささやかな昼食を取っている最中であり、実に平和な時間が流れていた。

ふと、何気なく外を眺めた妻が空を飛ぶ白と赤の光に気付き、声を弾ませる。

「ねえ、見て千兵衛さん。昼間なのに流れ星よ」

「へえ、そりゃ珍しい」

昼間に流れ星というのはそうそう見ない。

実際には珍しいのではなく見えただけなのだが、こうもハッキリ見える流れ星というのはそうそうない。

夫婦は興味深そうに空を飛ぶ流星を眺めたが、やがて二つの流星は一際強く輝くと空で大爆発を起こした。

「……千兵衛さん、流れ星が爆発したわ」

「ほ、本当に珍しいな」

普段滅多に見ない光景に夫婦は多少の驚きを示し、しかしすぐに昼食へと意識を戻した。

きつと明日か明後日になれば今見た不可思議な出来事も忘れているだろう。今日も地球は平和そのものであった。

互いの気功波が衝突し、爆炎が宇宙に拡散する。

だがそれを放った二人はもうその場所にいない。

白と赤の流星となって星の海を翔け、幾度も衝突を繰り返す。

併走しながら気弾で牽制し合い、隙を探り合っていた。

「疾っ！」

気弾の合間、僅かな安全地帯を見付けてリゼットが迷わずに飛び込んだ。

慣性の法則を無視したかのように何度も直角に曲がり、ミラへ続く最短ルートを通る。

そして気弾を放つモーションに入っていたミラへ両手で掌打。衝撃と気を彼の体

内へと浸透させて内部から炸裂させる。

ミラが夥しい吐血をし、しかし怯む事なく殴り返してくる。

その腕を素早く獲り、首へ指突。

ミラが怯んで頭が下がった所に肘打ちをぶつけ、地球の成層圏へと戻した。

すると当然のように重力が彼を絡め取り、落ちる速度が加速する。

落ちながらミラが体勢を立て直すが、そう簡単にはいかない。

ミラの背後にゲートが開き、ミラは血相を変えてこれを回避した。

リゼットによる転移は一番受けてはならない攻撃だ。彼女は敵を亜空間に絡め

取ったが最後、太陽などに転移させて焼死させようとする。

だが無理な回避は隙を生み、リゼットに次の攻撃のチャンスを与えた。

雷光が轟き、幾筋もの神鳴が一斉にミラを集中放火する。

気弾や気功波には威力が劣る『魔法』だ。

だが威力は劣るものの、高出力の電撃は身体を一瞬麻痺させてしまう。

その麻痺は更に次の攻撃への間を与えてしまい、リゼットがミラの前へと瞬間移

動した。

ゲートを使つての空間転移ではない。より速度のある、神の権限を用いた地球限定の瞬間移動だ。

時間にして僅かコンマ一秒にも満たぬ硬直、麻痺。だがそれだけの間があれば最大の一撃を撃ちこむには充分過ぎる。

「S p a r k i n g ・ M e t e o r !」

無防備な所を狙い撃つての最大出力気弾！

しかもほんの一瞬、0・1秒にも満たぬ間限定でバーストリミットを200倍まで引き上げての超出力攻撃だ。

射出し続ける気功波と異なり、気弾は一度撃てばそこで完成する。発射後に術者がへばろうが威力そのものに変動はない。

例えば悟空が元氣玉を放った後にへ口へ口になったとしても一度撃たれた元氣玉の威力は不変だ。

勿論万全ならば、更にその元氣玉を強く相手に押し付ける事が出来るが、やはり元氣玉の威力は変わらない。

それと同じ事であり、リゼットはその気弾の特性を利用した。

つまり発射の一瞬のみならば限界を超えても身体への反動は気功波ほどにない。結果放たれ、ミラへ叩き込まれたのはリゼットの限界を大きく超えた白い彗星だ。だが耐える事が出来る。この程度ならば!

そう確信したミラだったが、次の瞬間にそれは間違いだと悟る。

必殺の攻撃は一つではない。

リゼットの周囲に浮かぶ光球が輝きを発し、リゼット本人もまた気を大きく高める。

そして放たれるのは彼女のもう一つの必殺技だ。

「Raging blast!」

リゼットの両手から白い気の奔流が放たれ、遅れて2つの光球からも同様の気功波が発射される。

放たれた2つの気の奔流は中央の輝きと合流し、螺旋を描きながら混じり合う。やがて完全に一つとなった巨大な極光がリゼットの前に展開された亜空間へと飛び込み——ミラを背後から急襲! 彗星と極光とで挟み撃ちにした。

「うっ! うおおおおおっ!?! おおおおお おおあああああッ!?!」

「はあああああーッ!!」

リゼットが持つ二つの大技の合体だ。

しかも前後から挟み撃ちにする事により、その中心点の破壊力は単純に混ぜるよりも遥かに威力を増している。

いかにミラでも防ぎきれるものではないし、これでは回避も出来ない。

気の大爆発が起きる事で地球の空を白く染め上げ、甚大なダメージを負ったミラは地面へと墜落していく。

それを見たトワが顔色を変え、悟飯との戦闘を中断して彼の元へと転移した。無論リゼットもすぐに後を追ひ、3人は荒野へと場所を変える。

「ミラ！」

トワが駆けつけた時、ミラの姿は酷いものであった。

身体の至る箇所が焼け爛れ、気もほとんど残っていない。

誰が見てもわかる瀕死であり、戦闘不能だ。

だがミラは目を見開くとゆっくりと起き上がり、空中のリゼットを睨む。

「ぐっ、う……ぐぬうう……ま、まだまだ……」

「ミラ! もう無理よ、退きましよう!」

「ふざけるな……お、俺が、負けるとでも……」

「ミラ!」

息も絶え絶えでありながらミラが最後の力を振り絞って飛翔し、リゼットと相対する。

既に勝負は付いている。

だがそれでも悔れないのは彼の執念か。

「お、俺は最強だ……最強でなくてはならない……」。

貴様などに……貴様、などにいいー!」

ミラが叫び、赤い閃光となって突撃した。

リゼットもそれに合わせて白い流星となり、二人が最後の衝突を果す。

威力は互角。二人は交差してすれ違う形となり、リゼットが先に振り返って構えを取った。

だがミラが無理な体勢で手を突き出したのを見て発射を中断し、放たれてきた気功波を紙一重で避ける。

そして発射直後の硬直状態に陥ったミラへ向けて今度こそ最大の、そして最後の気功波を解き放った。

「う、うおおおおおおおおお!!」

本日二度目のレイジングブラストがミラを呑み込み、その身体を撃ち砕いていく。比喩ではない。

とつくに限界を迎えていた彼の身体はもうリゼットの攻撃に耐え切れなかったのだ。

身体は粉微塵に砕け散り、気功波に吞まれて消失していく。

やがて白い輝きが終わった時、もうそこにミラの身体は一欠けらとて残ってはいなかった。

「あ、あああ……っ!」

トワが絶望の声を漏らし、信じられないといった顔でリゼットを見る。

だがすぐに正気を取り戻し、転移で逃げようとした。

しかし……僅かとは言え呆然自失となった事が彼女の命運を分けた。

もしもミラがやられた直後に転移出来たならば、彼女は見事逃げ遂げる事が出来

ただろう。

しかしトワはそれを出来なかった。一瞬とはいえ我を失ってしまった。故にもう間に合わない。

転移しようとしたその瞬間、彼女の視界を転移してきたリゼットの掌が塞ぐ。

言うまでもなく、気功波の構えだ。

「し、しま——」

最大出力のレイジングブラスト!

それが完全に不意を打つ形でトワを飲み込んだ。

撤退など認めない許さない。これ以上地球をかき乱すのなど許可しない。

故にここで消えてなくなれ。

その必殺の意志を込めた気功波がミラ同様にトワも塵へと変え、この世から完全に消滅させた。

「千の剣よ、在れ!」

消滅させてもまだ緩めない。

以前ミラは、身体の半分を消しても復活してきた。

ならば、あり得るかもしれない。ここからの復活も。

魔人ブウのように、煙だけになっても尚復活するかもしれない。

だから万に一つの可能も残さない。

肉片はもう見当たらないが、見えないだけであるかもしれない。見落としているかもしれない。

だから、その可能性すらも排除する。そうして初めて勝利と言える。

虚空に展開した千の刃が次々と地面に突き刺さり――爆発。

辺り一面を気で薙ぎ払い、ミラとトワが復活する可能性を完全に排除した。

「……………」

完全に更地となった地面を眺め、リゼットは警戒を緩めずに氣を探る。

氣を完全に消そうと、それでも生きている以上僅かな氣配は残る。

悟空達では感知出来ない微細な氣配……スカウターで測れば0に等しいだろう
小さな虫の氣配すら本氣になったリゼットならば感知可能だ。

本当の意味で氣をゼロに落とす事は出来ない。何故なら生きているのだから。

悟空達が普段やっている『氣をゼロに落とす』というのは、感知出来ないほどに

まで気を小さくしているだけだ。

限りなくゼロに等しい領域……数字にすれば0・000……の後に何度か0が続くような小さな領域にまで気を落としているだけだ。

だがそれでも真の意味で0にはならない。本当に気をゼロに出来るのは人造人間か死人だけだ。

その並外れた感知能力を全開にしてこの付近にある虫の一匹一匹、微生物に至るまであらゆる命の気配を探り……そして、リゼットはようやく己の勝利を実感した。

「……お、終わっ、た……」

リゼットが地面に着地し、膝を突く。

手強い相手だったが、何とか勝つ事が出来た。

しかしこのままでは疲労で倒れてしまう。

リゼットは懷から仙豆を一つ出すと口に入れて噛み砕き、氣と体調を万全まで戻した。

まだ戦いは終わっていない。何故か増えてしまった魔人ブウが残っているのだ。トワとミラを倒した以上そのうち戻るだろうが、今すぐに戻る保証はない。

ならばすぐに仲間達の元へ戻り、手助けしなくては。

精神的な疲労までは仙豆も治してくれないが、それはこの戦いが終わってからゆっくり休む事で養えばいい。

自らに鞭を入れ、リゼットは悟空達の氣を追ってその場から転移した。

★

魔人ブウと戦いながら悟空は、その予想以上の強さに驚いていた。

今の自分達は宇宙全体で見ても相当に強くなっているという自負がある。

本来ならばとんでもない存在であるはずの界王神すらも凄いとは思えない。

当初は宇宙の神という事で本氣を出したらリゼットよりも上なのかと期待したが、この戦いが始まる前の狼狽ぶりを見てそれは間違いだと確信してしまった。

界王神の実力は恐らく、7年前の精神と時の部屋に入る前の自分と同じかそれよりは多少マシという程度だ。

だがこの魔人ブウは違う。リゼットが警戒して自分達を呼んだのは決して間違いではなかった。

今の自分達と比べても尚、強いと思えるだけの強さをこの魔人は秘めている。

加えて不死身で、しかもそれが三体。厄介などというレベルではない。

「だりゃあ!」

殴る、殴る。

ブウの攻撃を掻い潜り悟空の拳が何度もヒットするがまるで堪えた様子がない。既に悟空は超サイヤ人の限界を超えた7年前の悟飯と同じ領域——超サイヤ人2とでも言うべき姿になっている。

だがそれでも魔人ブウに勝てる気がしない。それほどにこの魔人は強い!

「なるほど……神様がオラ達の力を必要とするわけだ。お前本当に強えな」

「へっへーん、えへん!」

悟空の手放しの称賛に魔人ブウが嬉しそうに顔を綻ばせる。

その姿はまるで邪気を感じさせない子供じみたものだが、恐ろしいのは子供染みた無邪気さで悪事を働けるという事か。

これは本腰を入れないと危ないな。悟空はそう考え、まだベジータにも見せていない本気をここで見せる事を決意した。

「うおおおおああああああッ!!」

悟空の咆哮が辺り一帯に轟く。

余りの気の強大さに地球全土が揺れ、天候すらもが変化した。

髪は膝余りまで伸び、眉毛が消えて顔つきが厳つくなる。

全身を包む黄金の気が一層眩くなり、スパークが力強く迸る。

その変化に場の戦いが一旦止まり、全員が驚愕に満ちた顔で悟空を見る。

ベジータなどはあからさまに激怒したような顔になり、射殺さんばかりの顔で悟空を睨んでいた。

「オラをこの姿にさせたのは、神様に続いてお前で二人目だ」

悟空がこの新形態を獲得したのはほんの1年ほど前の事。

悟空はこの7年で何度か神殿に赴いてリゼットに組手を頼んでいたが、その最中不意に自分が今まで超えられなかった壁を超えたのが分かったのだ。

切っ掛けが何だったのかは分からない。

怒りではなかったと思うし、何か特別な事をしたわけでもない。

恐らくは偶然、何らかの形でパズルのピースが噛み合ってしまったのだろう。

ともかく、悟空は超サイヤ人を超えた超サイヤ人……それを更に超えた位階へと

到達してみせた。

結局その時の組手は悟空が超サイヤ人3になった途端にリゼットが逃げ回る戦法に切り替えたせいですぐに変身が解けてしまったが、これで悟空は気の出力に限るならばリゼットを超えたのだ。

「へーん、怖い顔になったって、ちっとも怖くないぞ!」

「どうかな? 勝負は……ここからだ!」

超サイヤ人3と化した悟空が地を蹴り、魔人ブウへと急接近した。

ここまでの戦いで不死身に近い再生力を持つのはよくわかった。

セルのように核とかそういう弱点も見当たらない以上、恐らくバラバラにしても復活するだろう。

ならば取るべき手はただ一つ。

二度と再生すら出来ないように、完全に消し去る!

「っらあ!」

悟空の拳が魔人ブウの頬を力強く殴り、殴った箇所から雷光が迸る。

更にアッパークット! 雷撃を伴って放たれた一撃が魔人ブウを跳ねあげ、そ

の後に悟空が続いて追い討ちをかける。

「だありやりやりやりやりやああああ！」

殴る、殴る、殴る！

魔人ブウの身体に悟空の拳がめり込み、周囲に雷光が撒き散らされる。

一撃ごとに空間が歪み、魔人ブウが反撃も出来ずに身体を浮かす。

直後、悟空が瞬間移動して上に回り込み一撃！ 落雷の如き拳を以て魔人ブウを地上へと叩き落とした。

「はあああああッ！」

今度は両手に気弾を生成。

その気弾を抱えたまま急降下し、倒れている魔人ブウへと炸裂させた。

雷を伴った気の爆発が魔人ブウを飲み込み、だが悟空はまだ止まらない。再び瞬間移動して蹴りを放ち、着地するまでの間に更に三発。

着地と同時に蹴り上げ、それを追って悟空も跳躍した。

そして繰り出すのは、あのブローリーとの戦いで編み出した彼のオリジナルとも呼べる一撃。

全ての気を拳一点へ集約させ、気を巨大な龍へと変質させて繰り出す最大最強の切り札。

「龍拳!!」

黄金に輝く神龍が発生し、魔人ブウを巨大な口で飲み込んだ。

更に追い討ちとばかりに龍が荒れ狂い、天高く昇っていく。

まるで宇宙へと行き、そのままの世へ直通で連れて行くのかと錯覚してしまう天への飛翔。

やがて龍は去り、後には吹き飛んだ雲から差し込む陽光と、その輝きに照らされる悟空だけが残された。

拳を天に突き上げたままの悟空は勝利の笑みを浮かべ、確かな手応えを拳に刻む。残る魔人ブウは、後2体。

トキトキ都

時の界王神「よし！ トワとミラの居場所が分かったわ！

バーダック、今日こそあいつらとの決着を着けるわよ！」
バーダック「いよいよか」

時の界王神「魔人ブウが現れた歴史のようね。一体どんな歴史改変が……」

リゼット『スパーキングメテオ！ レイジングブラスト！ レイジングブラス
ト！ レイジングブラスト！』

ミラ『ぎゃー！』

トワ『きゃー！』

リゼット『勝った！ ドラゴンボールゼノバース、完！』

時の界王神「……………し、死んでる…………」

第七十四話 握手

止まる事なく、それでいて驚く程素早く打撃音が空中に響き渡っていた。

魔人ブウはサンドバッグのように殴られ、セルが休む事なく猛攻を続けている。無論魔人ブウとて無抵抗ではない。

確かに彼は不死身に近いその特性上、あえて敵の攻撃を受けて遊ぶ事はあるし不死身故の防御の甘さはある。

だがセルの攻撃は別にわざと受けているわけでもなければ、痛くないわけでもない。

単純に反撃も防御も、そして回避も出来ぬほどセルの攻撃が巧いのだ。

意識の間隙——ふとした拍子にどうしても生まれる無意識の死角。

上に集中すれば下が疎かになり、下からの攻撃を警戒すれば上への警戒が緩む。そうした隙を巧みにセルが突き、ブウに何もさせずに攻撃を繰り返しているのだ。攻守交替などはさせない。このまま押し切って倒す。

その意気がセルの激しい攻撃からは感じられた。

「おまえ、キライだー！」

ブウが怒りに任せて闇雲にストレートを放つ。

だがセルは紙一重で、しかし余裕の笑みを浮かべたまま悠々とかわし、ブウの触角を掴んだ。

そうして動けなくしたところで打撃の連打。

ブウの身体は伸縮性に富む。殴れば飛び、そして触覚を掴んでいるが故にブウはゴムのように戻ってくる。

戻ってきたブウを殴り、また戻ってきた所を殴る。

「す、凄い……孫悟空さんといい、あのセルさんといい……」

ま、魔人ブウと互角以上に戦える者がこの世に存在したなんて」

界王神の驚きはもっともなものだろう。

かつては全宇宙を震撼させ、5人いた宇宙の神のうち4人までもを殺害せしめた魔人を圧倒する戦士がいる。

しかもそれはあろうことか、当時はまだ二足歩行がやっとだった地球人の科学力が生み出した人造人間なのだ。

だがこのまま続けば勝つのはやはり魔人ブウだろう。

何せ彼にはダメージがない。死なない限り再生を続け、どんな傷も再生すれば完治する。

しかもこれで、スタミナ切れすらもないのだ。

再生能力やスタミナという点を取ればセルとて地球随一の戦士だ。

ピッコロの細胞を有する彼はピッコロ以上に再生能力を使いこなしているし、体力も人造人間であるからか、他の戦士よりも高い。

最大戦力こそ超サイヤ人3の悟空やバーストリミット100倍のリゼットに負けているが、その二人は決して持久戦に向いているとは言えず、短期間しか全力を維持する事が出来ない。

だがセルは違う。彼はずっとこの戦闘力を維持したまま戦闘を続行可能であり、継続戦闘能力という点を取ればセルが最も安定して強いのだ。

しかしセルとて体力が無限にあるわけではない。彼のエネルギーは仙豆で回復出来る事からも分かるように永久式ではなく、どうしても限界が存在する。

殴られ続けた魔人ブウが地面を削りながら吹き飛び、しかし起き上がった時には

何事もなかったかのように全ての傷が完治していた。

「なるほど。確かにリゼットが言った通り素晴らしい再生能力だ。

私が造られた時にお前の細胞があれば、と惜しまずにはいられん」
セルは魔人ブウの細胞を有していない。

それは未来の世界において、魔人ブウの封印を最期までリゼットが守り続けていたからだ。

だから未来の世界では今も魔人ブウは球のまま封じられており、それを解放するバビディはもうこの世のどこにもいない。

つまりあちらの世界では魔人ブウはこれから先ずっと、永遠に封印されたままなのだ。

「チョココになっちゃえ！」

魔人ブウの触覚から放たれた光線をセルが避け、たまたま岩にへばりついていたりトカゲに命中した。

すると哀れなトカゲはチョコレートと化してしまい、それを見たセルが流石に驚きの表情を見せる。

「ほう、光線が当たった相手を菓子類へと変える能力か。

脅威だな……当たれば実力差関係なく無力化出来るわけだ」

「へっへーん！ うまく避けたみたいだけど、次は当てちゃうもんねー！」

「ふふふ、奇遇だな……実は私も同じような事をしようとしていたのだ」

セルは右手をゆつくりと開き、気を凝縮させていく。

「面白い手品を見せてもらったお礼だ。今度は私が手品をお見せしよう。

普段は私の主義に反するのであまり使わんのだが、今回は特別サービスだ」

魔人ブウの能力はいずれも脅威の一言だ。

単純な戦闘力もそうだし、魔法や超能力を使いこなす上に不死身に近い再生能力を有し、更に相手を菓子類に変える一撃必殺まで備えている。

しかしそれでもセルは勝利を確信していた。

勝利出来る能力を己が持っている事を疑ってはいなかった。

セルはその勝利の確信と予感を抱いたまま全力飛翔し、ブウとの距離を潰す。

「?!」

「握手をしようか、魔人ブウ」

セルが手を差し出し、ブウの手を無理矢理に握る。

とても攻撃とは呼べない行為。ただのシェークハンド。

だがそれが彼の最大の切り札であった。

それを普段使わない理由はただ一つ、『強すぎてつまらないから』。

あまりに強力すぎて格闘が成立しないが為に普段は意図的に封印している、そんな反則技だ。

その反則技の効果は一つ——手で触れた相手を人参へと変える事。

そう、セルは兎人参化の細胞を有している。

この世界は本来の世界線と異なり……今でこそ戦力外になってしまっているが、戦場に出て来る事もなくなってしまったが、兎人参化が戦士として加わっているのだ。

そして悟空がレッドリボン軍を潰すよりもずっと前に改心した彼は悪人ではなく、リゼットやブルマも意図的に彼の細胞を取り除いたりはしなかった。

即ちセルが彼の細胞を得るのは当然の流れであり、その力を有しているのもまた不思議な事ではない。

それを今まで使わなかったのは、単に彼が楽しめないから。

『使えなかった』のではない。『使わなかった』。

殴り合いすら成立させないこの能力はあまりに強すぎて、孫悟空から得た彼の中のサイヤ人の性格が使用を拒むのだ。

唯一例外だったのはブローリーとの一戦だけだ。

あの時だけは本当に、戦闘力差がありすぎてこの能力すら無効化されていた。

その封印を今だけはあえて解いた。この地球の未来の為に。

何より、魔人ブウは未来では終ぞ復活しなかったセルにとっての不確定要素だ。

せっかく絶望の未来を回避したこの世界がまた、あのような世界になってしまう

事だけはプライドを捨てても避けねばならない。

だから使った。この文字通りの禁じ手を。

「！！？」

魔人ブウの顔が驚愕に染まり、次の瞬間彼は無力な人參と化した。

彼も想像しなかっただろう。

今まで数多の命をお菓子に変えてきた自分が食べ物にされてしまう日が来るなど

とは。

セルは魔人ブウ——否、ただの人参となったそれを宙に放り、掌に気を集めた。
「ずあっ！」

魔人ブウといえど、人参にされた上で完全消滅させられてしまえば復活など出来るわけがない。

もはや魔人ですらなくなった人参が気功波に耐え切れるはずもなく、この攻撃を以て完全なる消滅を遂げた。

残る魔人ブウは、後一人。

★

白いマントをはためかせて二人の男が空中で交差した。

一人は魔界の王。一人は大魔王の生まれ変わり。

共に魔王の名を冠する戦士は一步も譲らずに激しい格闘戦を繰り広げる。

ピッコロの拳がダーブラを打ち据え、ダーブラの突きがピッコロを捉える。

真正面から魔王同士が意地をかけてひたすらにぶつかり合い、強さを比べ合う。

拳と拳。肘と肘。膝と膝。肩と肩。

攻撃に使用出来る部位全てをぶつけ合い、その度に二人を中心として衝撃波が発生した。

風圧だけで周囲の岩場が崩壊し、大地が揺れて渡り鳥が一斉に羽ばたいて逃げる。だが二人は止まらない。掌を握り合い唸り声を発しながら、力比べの姿勢へと突入した。

「ぐ、ぬぬぬぬ……!」

「ぐうおおおお……!」

腕や額に血管が浮き出るほどに力み、牙を噛み締めて睨み合う。

ピッコロが押す。ダーブラも押す。

万力など比較対象にもならない超握力を以て相手の掌を圧迫し、高めた気の余波だけで空間が歪んだ。

やがて二人はゆっくりと降下し、存分に踏ん張る事が出来る地面へと降り立った。蜘蛛の巣状の亀裂が二人の足場に走り、一瞬にして陥没して砕け散る。

あまりの踏み込みの強さに地面の方が耐え切れない。

まるで上から見えないハンマーで叩いているかのようにピッコロとダーブラが立

つ地面が抉れ、二人の位置が下がっていく。

気が嵐となって吹き荒れ、界王神やキビトはもう満足に立っている事も出来ずに近くの岩にしがみついていた。

「ぐおおおおおおおッ！」

「かあああああああッ！」

獣染みた咆哮をあげ、二人の腕が一回り太くなった。

マントは重力を無視して、まるで下から風が吹いているかのようににはためき、掌を握り合っている二人はこの状態から放てる次の手を模索する。

一手早くそれを見付けたのはピッコロだ。

彼はダーブラの掌を掴んだまま眼から光線を発射する。

だが攻撃の瞬間こそが最大の無防備。ダーブラは予想していたように上半身を逸らして光線を避け、更に逸らした勢いをそのままにピッコロの顎を蹴り上げた。

掌が解け、ピッコロが吹き飛んでいくのを即座にダーブラが追う。

そして渾身の突きを繰り出す事でいとも容易く拳がマントを貫通した——マントだけを。

「！」

「こっちだ！」

マントを脱ぎ捨てたピッコロがダーブラの頭上に現われ、肘打ちでダーブラの頭を強打した。

ダーブラは地面に四つんばいになって不時着する事で、何とか衝突して倒れる事を避けるが不安定で無防備な姿勢には変わりない。

無論そこを見逃すピッコロではなく、ターバンを捨てながら急降下して手刀を大きく振りかぶった。

ダーブラは何とか防御だけでも行おうと腕を上上げるが、その瞬間にピッコロが消えてダーブラの側面から飛び出してきた。

上空からの攻撃は残像を用いたフェイント。防御を行わせて更に無防備にし、側面から急襲したのだ。

もはや防御すらも間に合わない。ダーブラは咄嗟に顔だけをピッコロへと向けて唾を吐き出した。

普通に考えればただの悪あがきだ。無視して突撃すればいい。

だがピッコロは顔に飛んで来た唾を反射的に腕で受けてしまい、それが彼を救った。

「何！ こ、これは……！」

唾を受けた腕が石化していき、ピッコロが驚愕に動きを止めた。

ダーブラは勝利を確信したように笑い、危機を脱した事で余裕を取り戻した。一瞬にしての優劣逆転。だがピッコロの取った行動もまた早く、最善のものであった。

彼は己の腕をもう駄目だと判断すると、素早く手刀で切り落としたのだ。

「ほう、腕を捨てたか。賢明な判断だな。だが、その腕ではもう私には勝てまい」「どうかな？」

両者の戦闘力はほぼ互角。否、僅かにダーブラが勝っている。

その状況で腕を失うというのは勝敗が決まったにも等しい。

だがピッコロの顔に絶望感はなく、不敵な笑みを浮かべると腕の切断面へと意識を集中させた。

「かあっ！」

そして生えてくる、新たな腕。

ナメック星人……特に戦闘タイプは強い再生能力を生まれながらに備えている。あのセルの再生能力とて、元々はピッコロの細胞によるものだ。

唾によつて腕を失ったのは確かに予想外だったが、痛手ではない。むしろ幸運だ。あれを顔や頭に浴びていたら、そこで終わっていた。いかにピッコロでも頭が傷付いては再生出来ないし、首を落としては再生しても気の消耗が激しすぎてその後に満足に戦えない。

そんな厄介な技を腕を一度捨てるだけで見る事が出来た。これを幸運と言わずして何と言おうか。

これで、次からは唾に警戒して戦う事が出来る。この瞬間に初見殺しが初見殺しではなくなったのだ。

「驚くべき技だが、咄嗟に使ってしまったのは失敗だったな。

分かってさえしまえばどうという事はない……次に迂闊に使えばその時が貴様の最後と思え」

「小賢しい真似を」

ダーブラが不機嫌に顔を歪め、ゆっくりと空へ上昇していく。

そして気を高めてピッコロへと掌を向け、同時にピッコロも両手を腰に落として構えを取った。

「かああっ！」

「うわたたたたァ！」

両者同時に気弾の連射！

ダーブラの手から赤い気弾が息もつかせずに連射され、ピッコロの両手から次々と迎撃の気弾が放たれる。

二人の放った気弾は中央で衝突し、空中に爆煙を作り出す。

だが連射速度は互角でも、精度に差が生じた。

ダーブラの気弾が真っ直ぐにピッコロのみを狙うのに対し、ピッコロの気弾のいくつかはダーブラの気弾と相殺せず、ダーブラ本人に当たりもせず、明後日の方向へと飛んでしまっていた。

「フハハハハ、馬鹿め！ どこを狙っているのだ！」

「ぐっ、ぐううう！」

やがてダーブラの気弾が少しずつではあるがピッコロに命中するようになり、一方ピッコロの気弾は一発も命中しない。

全て迎撃で消えるか、関係ない方向へと飛んでしまっているのだ。

ダーブラは近付いてきた勝利の予感に思わず口元を綻ばせ、傷だらけとなったピッコロを見下ろした。

しかし妙だ。ピッコロはもうとつくに勝負を諦めてもいいだけの傷を負っているのに、何故余裕の顔をしている？

ダメージが演技だなどとは思わない。間違いなく喰らっている。

あのダメージでは逆転も難しいだろうに一体……。

「へっ……馬鹿は貴様だ」

「！」

ピッコロが掌を開き、それと同時にダーブラの周囲を飛んでいた——先ほどピッコロが発射し、明後日の方向へと飛んでいた気弾が一斉に動き始めた。

それと同時にダーブラはようやく気が付いた。

先ほどまでの気弾は外れていたのではない。外していたのだと。

そして、飛び去る事なくゆっくりと、自分に気付かれぬようにこの包囲網を完成させていたのだ。

「し、しまっ……」

「くたばれ！ 魔空包囲弾！」

ダーブラを囲んでいた気弾が一斉に殺到し、ダーブラへと炸裂した。一発ずつ気弾を浴びるのはまるでわけが違う。気弾の一斉集中放火だ。ダーブラの絶叫が空に響き、爆炎が空を覆う。

そして煙が晴れた時、そこには満身創痍となったダーブラが屈辱の形相で浮かんでいた。

ダメージがあるのはピッコロも同じだが、明らかにダーブラの方が深手だ。ピッコロは止めを刺すべく飛翔し、猛然とダーブラへ猛攻を仕掛けた。負けじとダーブラも迎え撃ち、幾度も互いの拳や脚が交差し、衝突する。

だがやはりダメージの差が顕著に出る。最初は互角だった戦いも少しずつピッコロへ傾き、一方的に彼の攻撃がダーブラへと入り始めた。

「うわたたたァ！ うわたァァ！」

「ぐおおっ、おおお！」

ガードの上から強引にピッコロの連打が入り、衝撃がダーブラの身体を貫く。クロスした腕へ、ガラ開きの腹へ、脇腹へ、痛みでガードが緩んだ顔へ。

次々とピッコロの拳が炸裂し、ダーブラを滅多打ちにする。

殴られながらダーブラは、何とか逆転しようと口内に唾を溜めた。この状況から逆転するにはこれしかない。

だがそれを読んでいたかのようにピッコロのアップーがダーブラの顎をかち上げ、無理矢理閉じられた牙が折れて宙を舞う。

ダーブラの唾は確かに強力だ。

だが既に一度見せられたその技の予兆を見抜けないピッコロではない。

「うわたァ！」

最後に渾身の右ストレート！

ガードごとダーブラを殴り飛ばし、空へと打ち上げる。

だがまだ終わりではない。即座に指先を額へと当てて最大の必殺技の構えへと入った。

「魔貫光殺砲！」

一点の貫通力に特化させた最大殺傷力を誇る一撃。

それがダーブラへと直進し、腕の防御すらも突き破ってダーブラの心臓を貫通した。

大量の血を吐き出しながら、ダーブラは我が身に降りかかった出来事を信じられずに眩く。

「ば、馬鹿な……魔界の王たる、この私が……こ、こんな星、でえ……」

「生憎だったな。この星にこそ宇宙で一番強い奴等が集まっているのだ」
宇宙に存在する二つの世界。表の宇宙と裏の暗黒魔界。

かつてその暗黒魔界全土を力で支配した魔界の王は今、表の宇宙の辺境の惑星にてその命を終えようとしていた。

口から夥しい血を吐きながらダーブラが最後に気にしたのは自分の事ではなかった。

「が、ごは……っ！ ト、トワ……こいつらの力是我等の想像以上、だ……」

お、お前は……撤退、を……早く、逃げ……。

……。

「……………トワ？ ……ト、トワ？ 馬鹿な、感じられない……………トワのキリが……や、やられてしまったのか……………トワ……………」

既に致命傷を負った身体で、ダーブラが地面を這いずって動く。

その速度はあまりに遅く、そこらの一般人でも歩いて追いつけてしまうだろう。妹の名を呼びながら力なく這いずるその顔は目尻が下がり、彼らしくない弱気に彩られている。

その哀れな姿を見て、悟空ならばあえて追撃を行う事はしなかっただろう。

リゼットでも良心の呵責を覚え、止めを躊躇ったかもしれない。

だがピッコロに油断はない。容赦もない。

「トワ……………ト、ワ……………どこだ……………どこに、いる……………トワ……………」

「くたばれ！」

手を翳し、既に死を待つだけのダーブラへ気功波を放つ事で完全に塵へと変えた。

セルゲームで私と握手！

っ

！（甲高くない声）

第七十五話 浄化（はかい）

「っちゃあああ！」

ベジータが地を蹴り、魔人ブウへ拳の乱打を叩き込む。

その全てを魔人ブウは無防備に受け、吹き飛んでいった。

飛んだ先にはターレスが回り込み、蹴り上げる。

空に飛んだ魔人ブウを待ち受けるのはナッパだ。彼は拳を固く握ると、魔人ブウの脳天を殴って地面へ送り返した。

サイヤ人3人と魔人ブウの戦いは終始サイヤ人組が圧倒していた。

ベジータ達の戦闘力は魔人ブウの半分程度で、戦力を語るならば負けている。

しかし魔人ブウはその不死身さに反して……いや、むしろ不死身だからだろうか。

その肉体は酷く脆く、柔らかかった。

殴れば簡単に弾むし簡単にへこむ。

気円斬の一発も撃てば容易く両断可能で、気弾を撃てば穴が空く。

無論それでダメージになるかと言えは否だ。全くダメージを負っていない。

しかしそれでも、殴れば魔人ブウの体勢を崩す事は出来た。

加えて彼はその不死身さ故に防御や回避というものを行ったことがほとんどないのだろう。

ベジータ達の攻撃は面白いように当たり、魔人ブウが攻撃に転ずる間を与えない。いくらダメージがなくても、よろめけば次の攻撃に出るまでの時間が遅れるし、転べばもっと遅れる。

結果として、疲労やダメージはさておき表面的にはサイヤ人組が魔人ブウを圧倒し続けていた。

「邪魔だ貴様等！ 俺一人でやる！」

「おう、そうすりゃあいいさ。俺も勝手にこいつと戦うからよ」

ベジータの怒声にターレスが嘲るように返す。

彼らは共闘しているのではない。

個々がスタンドプレーに走り、同じ標的を殴っているだけだ。

サイヤ人というのは元来他人と協力するのが苦手である。

フリーザの配下だった時はチームを組んで戦っていたりもしたのでチームプレ

イが出来ないわけではないのだが、それでも可能ならば自分一人の力で敵を倒したい。

故に彼らの攻撃は協調性も何もない、バラバラなものであった。

だがそれでもターレスとナツパはベジータと違い、フリーザの配下時代にサイヤ人同士でチームを組んで惑星を侵略した経験を持つ。

故にベジータの邪魔をしない程度に合わせるのは決して難しい事ではなかった。これは、常に上にいたベジータでは決して持ちえぬ経験だ。

「お前達……弱虫のくせにナマイキだ！ チョコになっちゃえ！」

魔人ブウが苛立ったように触覚から光線を発射した。

その向かう先はナツパだ。

彼は不敵に笑うと、その場に仁王立ちする。

「ふっ、下らん技だ」

「ナツパ避けろー！ー！」

おやつ光線を正面から受けようとしたナツパにベジータとターレスの怒声が飛んだ。

それに怯み、思わずナツパは光線を避けてしまう。

すると標的を外した光線はその先にいたキビトに命中し、彼をチョコレートに変えてしまった。

「キビトー!？」

「ちっ、このバカめ。どういう技かも見切れんのか」

「す、すまねえベジータ……助かったぜ」

叫ぶ界王神を無視してベジータが不機嫌に言う。

そんな彼を見てターレスはニヤニヤと笑っていた。

「ククク、お優しいこって」

「黙れ、貴様から先に殺されたいか！ 命が惜しかったら笑うな！」

「おお、怖い。仲良くやろうや」

決して仲良しというわけではない。

むしろギスギスしているし、敵意すら向けている。

だがそれでもサイヤ人同士、何だかんだで気が合う部分があるのだろう。

噛み合わないパズルのようにちぐはぐな、共闘とも言えぬ共闘。

しかしそれは確実に魔人ブウを追いつめていた。



リゼットが戻った時、既に戦いは終局へと近付いていた。

分裂した魔人ブウのうちの一体は悟空が超サイヤ人3のパワーで消し去り、もう一体はセルが消滅させていた。

更に魔界の王ダーブラはピッコロが見事に倒し、残る最後の魔人ブウをベジータとターレス、ナッパのサイヤ人組が圧倒している。

トワに逃げられてしまった悟飯はリゼットと合流後、ベジータ達の援護に向かった。なので今は4対1だ。

流石に超サイヤ人3のような高出力ではないので決め手に欠けているようだが、それでも魔人ブウを足止め出来るだけで上出来過ぎる。

リゼットが戦いの場へと戻り、更に悟空、セル、ピッコロまでもが加わって最後の魔人ブウを完全包囲した。

「どうやら、勝負あったようですね」

リゼットが注意深く周囲を観察し、後ろから悟空を吸収しようとしていたブウの

肉片を消し飛ばしながら勝利を宣言する。

悟空はどうやら気付いていなかったらしく、「何だ今の!？」と驚いていた。

ブウも流星にこの状況での逆転は難しいと理解しているのか、その顔には余裕がない。

ふざける事も出来ず、最後の切り札だった吸収さえも見抜かれてしまい、ワナワナと震えている。

「い、イヤだ！ 復活したばかりなのに、消えるのはイヤだ！」

「……………」

ここにきて消滅という末路が目の前に迫っていると理解出来たのだろう。

魔人ブウの声には明確な恐怖が籠っており、リゼットに憐憫の気持ちを抱かせた。

この魔人ブウは決して悪党ではない。ただ無邪気なだけだ。

子供は遊び半分で虫を踏み潰し、時には手足を千切って残酷な遊びを行う。

それが悪い事だと認識していないからだ。

この魔人ブウも同じだ。人を殺すのが楽しい事だとビビディに教えられたから行っているに過ぎない。

しかしそれは大界王神を吸収したからこそ得た心であり、吸収前に彼が宇宙を荒らしていた事は変わらない。

その大罪を無視して見逃すというのは流石に余りにも都合がよすぎるし、何より彼と和解したとしていつ悪の魔人ブウと分離してしまうか分からないのだ。

結局のところ、彼は悪の心と分離しない限り地球にとって特大の爆弾でしかない。哀れだとは思う。同情もする。だが魔人ブウが魔人ブウである限り、見逃すという選択肢は絶対がない。

——本当にそれでいいのか？

今からやろうとしている事は、ただの無垢な子供を袋叩きにして殺してしまうような、そんな行いではないのか？

そんな迷いを、リゼットは強引に心の内側に閉じ込めた。
やらねばならないのだ。

魔人ブウを引き込むにはリスクが大きすぎて、全てが上手く行く保証など何処にもなくて、一歩間違えれば折角絶望の未来を避けたこの世界が滅んでしまうから。だからここで倒す……魔人ブウを殺す。

それが自分の果たすべき責務だから。

「許して下さい、とは言いません。」

せめて来世がよきものになるよう、閻魔様には私から取り計らっておきます」

リゼットが手を翳すと気のリングが射出され、魔人ブウの腕を、足を、胴を、首を……身体に至る所を拘束し、脱出不能の状態を作り上げた。

指を動かす事で魔人ブウが空中に吊り上げられ、無防備を晒す。

その魔人ブウを標的として両腕を頭上で交差し、手の中で気を最大まで集約——リゼットの背中から光の翼が展開され、気が一気に高まった。

「これで終わらせます。皆、私に合わせて下さい」

知るの自分だけでいい。

悟空達はこんな事を知る必要はない。

もしかしたら仲間に来たかもしれない。和解出来たかもしれない……本当はそんなに悪い奴じゃなかったかもしれない……。

そんな事は自分だけが知っていればいい。自分だけが背負っていればいい。

その決意のもとリゼットは気を高め、それに合わせて皆が気を集約させる。

そう、これでいい……これで……。

(……………神様?)

そんな彼女の横顔を悟空は見ていた。

悟空だけが気付いていた。

リゼットのその顔が苦悶に歪んでいる事に。

隠そうとして、それでも隠し切れない何かを彼女は抱えている。

それを誰にも伝えないまま、この戦いを終わらせようとしている。

セルも何か勘付いているのだろうが、彼は魔人ブウの排除を優先している為に今

は目の前の事に集中していた。

リゼットが何に悩んでいるのか……それを何となく察し、悟空は目を閉じた。

「……………やめだ」

悟空はそう呟くと技を中断した。

そればかりか超化すら解除し、静かな瞳で咎めるようにリゼットを見た。

その行動に全員が驚く。

「……………悟空君?」

「神様……何を隠してるんだ？」

「それは……」

孫悟空は、少し抜けている部分もあるが馬鹿ではない。

リゼットが何かを隠している事、それに苦悩している事くらいは薄々感じ取れる。

悟空はそんな彼女の悩みを見抜き、穏やかに笑う。

「分かるぜ。本当はあいつの事、殺したくねえんだろ？」

リゼットは思わず息を呑む。

図星であった。表情には出来るだけ出さないようにしていたのに、まさか見抜かれるとは……。

やはりこの男だけは侮れない。

リゼットは静かに微笑み、彼の指摘を認めた。

「その通りです。」

彼は……魔人ブウはただ無邪気なだけ。私達はそんな存在を今からよってたかって殺そうとしている。

あまり……好ましい事ではありませんね」

「リゼットさん、何を言うのです！ あれは全宇宙を滅ぼそうとした恐ろしい魔人！ 悪なのです！」

おやりなさい！！！！！！ さあ！ さあ！！」

「しかし、それでもやらなければいけない事というのがあります。

境遇がどうあれ、あの魔人がかつて数多の命を殺めたのは紛れもない事実……そして善悪の区別すら付かないブウは、この地球すら躊躇なく地獄へ変えるでしょう。悟空君……やりたくないとか、そういう問題ではないのです。やらなければいけないんですよ」

「そうでしょうとも！ そうでしょうともっ！」

やりたくない。だからといってこの地球を、そこに生きる者達をチップになど出さない。

やるしかないのだ。ここまで来た以上、もう他の選択など取れない。

そう言うリゼットへ、界王神はテンション爆上げで賛同した。

「うるせえ、ひっこんでろ！」

「ぶ！」

そしてターレスに蹴られて崖の下に落ちた。

界王神とは一体……。

苦悩を微笑の仮面で隠すりゼットへ、悟空はニィ、と口の端を釣り上げた。

「本当にそうか？」

「……」

「あるんだろ、本当は？ どうにか出来る方法がよ」

悟空はりゼットの心を読めない。

だがそれでも、察せるものがある。

普段の抜けた態度に騙されそうになるが、こういう場面における彼の頭の回転は驚くほどに速いのだ。

だから分かる。りゼットは本当に万策尽きて魔人ブウを殺そうとしているのではない。

本当は一枚だけカードがあるのに、それを使いたくないから魔人ブウを殺して妥協しようとしている事に。

「あるにはあります……」。

あの時の……7年前に私が暴走を引き起こしたあの技を使えば、魔人ブウの中の悪の気だけを消し去れるかもしれません。しかし……」

「なんだ、やっぱりあるんじゃないか。そんなカンタンな方法が」

リゼットが恐れているのは、また暴走してしまう事だ。

暴走して、今度こそ自分の手で悟空達を殺してしまう事を何より恐怖している。だがそんな彼女の恐怖を、悟空は笑い飛ばしてしまった。

「自分の力なんだ。使えねえわけがねえ。」

大丈夫だ神様。ぜってえに出来る」

「しかし……」

「オラもよ、実はちょっと勿体ねえと思ってたんだ。」

あいつはそんな悪い奴じゃねえ。

だからよ……頼むよ神様。あいつを助けてやってくれねえか」

「……………」

……ずるい。

リゼットは悟空を、そう思った。

頼むと、彼はそう言った。きっと分かっているであえてそう言ったのだろう。

これで魔人ブウを救いたいというのがリゼットの個人的な欲ではなくなってしまう。

悟空からの頼みになってしまった。

だからリゼットは彼を責めるように睨む。

「悟空君、分かっていると言ってますよね？」

「さあ、どうかな」

そう言って悟空はまるで悪人のような薄ら笑いを浮かべた。

分かっている、把握している。

その上でリゼットが断れないような言い方を選んだのだ。

見えない重荷を背負ってまで戦って欲しいなどと思わない。

そんなものは降ろすべきだと思う。

だから悟空は、彼女の荷物の半分を勝手に奪って勝手に背負ったのだ。

無邪気で純粋だった少年は、いつの間にか少しだけズルい大人になっていた。

そして、そんな彼だからこそリゼットの重荷に気付けたし、それを背負えるのだ。

「神様……もし失敗しても、オラが何とかする。」

だからやってみちゃくれねえか？　このまま死ぬんじゃあ、あいつもやりきれねえだろ」

何とかする……孫悟空の口から出るその言葉の何と頼もしい事か。

何が起ころうとも、彼がいれば何とかなると思われるから彼はずるいのだ。

そして本当に何とかしてしまおうから、孫悟空は皆の中心で在り続ける。

いつの間にかリゼットすら、その輪に取り込んでいた悟空は根拠のない自信に満ちた笑みを見せた。

そんな彼に根負けしたようにリゼットは溜息を吐き、上空のブウを見上げる。

「信じていいんですね？」

「ああ、任せろ」

ハッキリと言い切る悟空の言葉にリゼットは目を閉じる。

かつて地球にやってきた小さな運命の子は、最初に出会った時は好奇心旺盛な子供だった。

それがいつの間にかこんなにも大きく、頼もしく成長していた事に嬉しさと寂し

さを感じてしまう。

彼が後ろに控えていてくれるならば……恐れずに踏み出せる。

諦めていた新たな運命への道を歩んでいける。

だから——リゼットは、恐れて目を背け、自ら封じていた禁忌の力を使う事を決断した。

そうだ、恐れているだけでは前に進めない。

失敗を恐れる事は確かに大事な事だ。

だがそれで足踏みしては超えられる壁だって超える事が出来ない。

大丈夫……信じよう。

失敗なんかない。してもきつと何とかなる。

何故なら、自分の後ろには孫悟空がいるのだから。

「……Xenoverse……発動」

宣言。それと同時にリゼットの身体を純白の極光が包んだ。

彼女の気が完全にクリアとなり、感知出来なくなる。

光の翼は消え、代わりに輝く光輪が出現して神としての位階を一気に引き上げた。

白金の髪がなびき、その顔からは感情の色が失われる。

この宇宙では破壊神と、その従者しか到達してはいないはずの神域。

その領域へと踏み込んだリゼットに、界王神は驚きすぎて顎が外れた。

(……魔人ブウ……消滅させるべき……悪)

悪は殺す、悪は滅する。

この身は人々の平和を守る神であり、信仰の化身。

故に世界を脅かす悪を許しはしない。

その存在を許容しない。

リゼットの掌に銀河すら抹消して有り余るほどのエネルギーが一瞬にして集約され、それが魔人ブウへと向けられた。

神の気を集約することによって完成するその技は、あらゆる存在を例外なく『破壊』する。

それはリゼット自身も知らないことだが、破壊神と呼ばれるこの宇宙の頂点に位置する神が使う力と限りなく酷似していた。

だが、その前に悟空が躊躇なく立ち塞がる。

「神様、そうじゃねえ……力に使われるな」

「……」

「自分の力なんかに負けるんじゃない。大丈夫だ……落ち着いて制御しろ」

今、リゼットがこの気功波を放てば悟空といえど一瞬で蒸発させられるだろう。

そして悟空はサイヤ人であり、今の彼女にとっては滅すべき悪である。

だから立ち塞がるのは自殺行為でしかない。

だがそれでも悟空は立った。

そんな彼にリゼットは破壊のエネルギーを放とうとし——寸前で、踏み止まった。

「ぐ……悟空君、どいて、下さい……」

「……………ふう、ひやっとしたぜ……正気に戻ったんだな？」

「え、ええ……しかし長続きはしません。一撃で終わらせます」

かろうじて理性で自分を制御し、リゼットの瞳に正気に戻る。

しかしこれは一時的なものだ。完全にこの力を使いこなしたわけではない。

これを使いこなすにはまだ、リゼット自身の力が足りていないのだ。

だから長時間は続けられない。

ギリギリで踏み止まっている今、この瞬間に決めなくては。

「いきます……」

再び手の中に光が集まる。

だがそれは先程までの敵を滅ぼす為のものではない。

滅ぼすのは、悪しき心のみ。

悪を憎んで人を憎まず……魔人ブウを消さず、彼の中の悪い心だけを『破壊』す

る！

「浄化！」
はかい

技名とも呼べぬその名を宣言し、ブウへと解き放った。

放たれた一条の光はブウへと突き刺さり、彼の胸の中で輝きだす。

それはやがて光の渦となり、ブウの全身を飲み込んだ。

「おあああああああ！」

ブウが悲鳴をあげ、その身体から黒い霧が出ては粒子となって破壊されていく。その攻撃は十数秒に渡って続き、ブウから感じられる気がどんどん減っていく。どれだけ彼の中で悪の心が占めていた割合が高いか分かるというものだ。

だが以前のように完全な別人にまではしない。

かつて暴走した時、リゼットは地球の悪人全てを攻撃してしまった。

そして彼らの中の悪の心を消去し、別人にしまった。

その過ちをもう繰り返さない。ブウをブウのまま、彼の中の悪のブウだけを破壊してみせる。

やがて光が終わり、リゼットの光輪も消失して膝をついた。

ブウは地面へと落下して動かなくなったが、気を感じられるので生きているだろう。

チヨコにされていたキビトも無事に元に戻り、周囲を見渡している。

「……終わったのか？」

「ええ。何とか、彼の中の悪い心だけを消しました。

これでもう……魔人ブウは私達の敵ではありません」

リゼットはブウを亜空間へと収納し、大きく息を吐いた。

やはりあの力はまだ、今の自分には早すぎる。

後数秒も続けていたら理性が飛んでいただろう。

そんな彼女に悟空が手を差し伸べ、リゼットは無言でその手を取る。

そして悟空を支えに、何とか立ち上がった。

「界王神様」

「はいっ！　なんででしょう！」

「魔人ブウは私が責任をもって管理し、教育します。

もし問題を起こせばその時こそ私が彼を倒しますので……ここは観察処分という事で、見逃してはいただけないでしょうか？」

「はいわかりましたっ！」

「……あの、界王神様？」

何だか界王神の様子がおかしい。

顔を青くして……いや、それは元々だが、とにかく何か妙に腰が低い。

まるで入隊したばかりの兵士のようにリゼットに服従の姿勢を取ってしまっている。

すっかりしろ、全宇宙の神。

まあ、今は混乱しているのかもしれない。そのうち元に戻るだろう。

「界王神様は置いておくとして……ともかく、これで当面の危機は去りました。神殿に戻り、祝杯をあげましょう」

「おっ、飯も喰えるんか？」

「ええ、沢山用意してありますので遠慮なく食べていって下さい。

界王神様達も、よろしければどうぞ」

ともかく、これで地球は救われたのだ。

決して思った通りの決着ではなかったが、しかし戦いの前に感じていた苦悩はもうない。

背負うと決めていた十字架もなく、足取りは軽やかだ。

全ては悟空の……そして皆のおかげである。

リゼットはそんな愛おしい仲間達と共に神殿へと帰って行った。

その後、悟空達は天下一武道会へ戻り、試合を観戦した。

悟空達が一斉にリタイアした武道会でベスト4に残ったのはMr・サタンと18号、

クリリンとヤムチャの4人だ。

まず最初にクリリンとヤムチャが戦い、その常人離れした攻防に全観客が釘付け

となった。

その試合は張り切りすぎた二人が同時に場外に落ちて引き分けに終わってしまい、続く18号とMr・サタンの試合が実質上の決勝戦となってしまった。

結果、優勝はMr・サタンで準優勝は18号という結果に終わったが、決勝戦で18号がMr・サタンに何か囁いていたのをピッコロとセルは聞き逃さなかった。

サタンはチャンピオンの栄光を守る代わりに20000万ゼニーの借金を背負ってしまったのだ。

そしてベスト4に終わったものの、念願の1回戦突破を成し遂げた上で激戦を繰り広げたヤムチャはますますスターとして名を轟かせた。

相変わらず独身だが、勝ち組街道を驀進中のロンリーウルフである。

【悲報】王子やらかさない【何があった】

感想でやらかしを期待(?)されていたベジータですが、今回はやらかしませんでした。

ブウ編ベジータはサイヤ人編と違って結構頼れる王子なのです。

代わりに今回はナッパがやらかしかけ、キビトが流れ弾の犠牲になりました。

【戦闘力】

魔人ブウ（善）…400億

・半分以上に弱体化。

原作で悪のブウが抜けたら半分以上になったので4割まで下げた結果悲しい数値に……。

それでもピッコロさんを上回る強さなので活躍出来ないレベルではない。

・現在の神殿メンバー

セル

兎人参化+兎団

Mr・ポポ

ゴッドガードン

魔人ブウ【NEW!】

リゼット（どうしよう……なんだかどんどん変な集団になってる……）

第七十六話 復活のフュージョン!!悟空とベジータ①

・前回のあらすじ

ウーブ「僕がー！ 僕が存在そのものがー！」

魔人ブウの脅威が去り、数週間が過ぎた。

リゼットはあれから魔人ブウを教育し、殺しは悪い事だと徹底的に教え込んだ。魔人ブウは少し我儘だが、意外と素直な性格をしていてリゼットの言う事をよく聞きよく学ぶ。

また、それと並行して新しい遊びもいくつか教えておいた。

彼が人を殺していたのは、それが楽しい事だとビビディに教えられたからだ。

それは子供が蟻を潰して遊ぶのと同じで、しっかりと教えて学ばせれば止める事が出来るものである。

最近彼はテレビゲームに嵌っており、画面の中でプレイヤーキャラが操縦するト

ラックが次々と通行人をひき殺していた。

……あれ？　悪の心取り除いたよね？

ともかくこれで、魔人ブウを恐れる必要はなくなった。

原作と違って地球が滅ぶ事もなく、地球人が大量に死ぬ事もなく終わったのだから快挙と言っているのではないだろうか。

それどころか理想以上の結末を迎え、魔人ブウを味方に加える事まで出来たのだから言う事なしだ。

それも全て悟空達の……特に悟空のおかげである。

まだジャネンバの出現やヒルデガンは残っているが前者はスピリッツロンダリング装置の監視員を変えてもらったし、後者は魔導師ホイに騙されずに彼を消してしまえば戦うのはヒルデガンの下半身だけで済む。

今までは万全を期したはずでもそれを掻き回すミラとトワがいたが、その二人も倒したのだからイレギュラーを意図的に起こす者はもういない。

だからうまくすればこの二つの事件は起こらずに済む。

……そう思っていたのだが、どうやらかなり甘い考えだったらしい。とりゼット

は思い知らされた。

「リゼットさん、大変です！ あの世が結界で閉じ込められてしまい、あの世とこの世のバランスが崩れてしまいました。このままでは死んだはずの者が生き返るなどの大混乱が起こってしまいます！」

数週間ぶりにアポ無しで神殿に出現した界王神の第一声がこれである。

どうやらこの世界はとことん全イベントを網羅したいようだ。

というか何故この最高神様はこっちにそれを言いに来たのだろう。

あの世の事は出来ればあの世だけで解決してくれると苦労がなくて凄く嬉しいのだが。

大界王の所にいるあの世の精鋭達はどうした、精鋭達は。

色々いたはずだろう。あの……パイクーハンとかいうパーフェクトセルを一撃で倒せるくせにそれより弱い同時期の悟空に負けたピッコロのコンパチキャラみたいな奴とか、オリブーとかいう強いのか弱いのかよく分からない奴とか。

あ、駄目だ。よく考えたらあの世の戦士にロクなのいない。

そんな事を考えながらリゼットは額を指で押さえた。

「……ちよつと待って下さい。今、地球全体にバリアを張ってあの世と遮断しますから」

「そ、そのような事が出来るのですか!? 凄い!」

「まあ、空間移動の応用で何とか……要は空間を繋げるのと逆で空間を閉じればいけるはずです。」

今までやったことがないので正直少し不安ですが」

リゼットは空間移動が出来る。それはつまり異なる空間と接続を行えるという事だ。

接続が出来るならば遮断だって出来るだろう。そんな適当極まりない考えでリゼットは一度として行った事のない空間遮断をぶっつけ本番で試みた。

無理とか不可能とかは実際にやってみてから言えればいい。とりあえずは実行あるのみだ。

大丈夫、今の自分は信仰パワーで色々と思議な事が出来るし大体の事は実際にやってみれば結構出来たりする。

要は空間接続と封印の合わせ技だ。地球をあらゆる空間から遮断し、封印状態にしてしまえばいい。

地球全体をヘブンズゲートの封印空間に閉じ込めるイメージだ。

とはいえ、とりあえずその旨を悟空達にだけは伝えておくべきだろう。

既に地球に侵入している死人もいるかもしれないので、その対処と合わせて悟空達に何とかしてもらおう。

試しに気配を感知してみると……やはり何人か侵入した後だ。

毎度お馴染み復活のフリーザにボージャック一味、Dr・ウィローやその配下、レッズドリボン軍の悪人達やクラッシュ軍団やギニュー特戦隊もいる。

だが中でも一番危険なのはブロリーだ。よりにもよって、ドラゴンボール探しの旅行に出ていたらしい悟天とトランクス、ビーデルの所に出現していた。

というかこれ、『危険なふたり！ 超戦士はねむれない』じゃないか。

本当に、色々頑張って手を打ってるのにイベントが回収されるのはどうにかならないだろうか。

まあ、ブロリーは今の悟空ならば充分に戦える相手というのが救いだ。

『悟空君。悟空君、聞こえますか？』

『お？ 神様か。どうしたんだ？』

『大変な事が起こってしまいました。簡潔に言いますと、あの世に異常が起こってあの世とこの世が繋がり、地獄の悪人達が蘇ってしまうという状況に地球は置かれています。』

私はこれから原因を調査しにあの世まで行って来ますが、その間の地球を悟空君達に守って頂きたいのです』

『地獄の悪人達が？ そりゃてえへんだ！ ブロリーとかも戻ってきちゃうって事か!？』

『はい。私はこれ以上の死者の流入を防ぐ為に今から地球全体を封印します。』

しかし既にフリーザやブロリーといった厄介な者達が入り込んでいるので悟空君は何とか、皆と協力して対処に当たっていただけじゃないでしょうか？』

『わかった！ こりゃ飯喰ってる場合じゃねえ！』

どうやら悟空は食事中だったようだ。悪い事をしてしまった。

悟空にそれぞれの悪人の居場所を伝え、ついでに悟空だけだと忘れそうで怖いの

で同様の念話を地球の戦士全員へと伝達する。

これで後は、それぞれ手分けして対処出来る相手と戦ってくれるだろう。

誰が誰に当たるように、という細かい指示まではしない。そこは彼等に任せてしまおう。

そうしてもいいと思えるくらいには彼等を信頼しているのだ。

念話を終えたりゼットは気の固定化で光の戦乙女を100体ほど生み出し、悟空達の援護に出撃させた。とりあえず居ないよりはマシだろう。

「ポポと人参化、それからブウは襲撃に備えて神殿の守りを。

カリン塔にはゴッドガードンを2機防衛に向かわせて下さい。

それから残りのゴッドガードン13機は全て地上の鎮圧の為に撃出させるように。

セルはここから各地の戦況を観察し、援護が必要な箇所に亜空間を用いた遠距離攻撃を」

「はい、神様」

「いいだろう。パーフェクトに戦場を支配してみせようではないか」

「任せましたよ。では……ヘブンズゲート！」

亜空間への入り口を閉じる要領であらゆる異空間からの接続を遮断し、普段は亜空間への入り口としていた空間の亀裂を地球全土を覆うように球状に展開する。

これにより太陽の光までも遮断して地球全土が真夜中のように暗くなってしまうので地球人達には少しばかり怖い思いをさせてしまう事になるが、あの世から悪人が流入して地球を滅茶苦茶にされるよりはマシだとしばし我慢して欲しい。

更にバリアを展開して地球を覆い、ここに二重の封印が完成した。

これで空間移動でも、物理的にも地球へ侵入する事は出来ない。

とりあえず気を全開で込めたので、リゼットがいなくても数時間は維持出来るだろう。

キビトに体力を全回復してもらい、それからキビトの瞬間移動であの世へと移動した。

——と、思ったらリゼット自身が展開した空間の壁に衝突し、神殿に墜落してしまった。どうやらキビトの瞬間移動すらも通れないらしい。

「リ、リゼットさん。済みませんが結果を一部解除して下さい。

これでは私達まで通れません」

リゼットの下敷きになってしまった界王神が苦しげに眩き、リゼットも慌てて彼の上から退く。

「そ、そのようですね」

封印の強度と完成度を自分で実演するとは思わなかった。

しかしキビトの瞬間移動でも通れないというのは嬉しい誤算である。

リゼットは自分達だけが通れる程度に結界に穴を空け、改めてキビトの瞬間移動であの世へと移動した。

この穴は後でセルに埋めてくれるよう伝えたので問題はない。



あの世に転移したりリゼットが見たのは、何とも不思議で幻想的な光景であった。色鮮やかな大小様々な水晶が空間に浮かび、中央の閻魔宮は黄色い水晶に丸ごと閉じ込められている。

確かにこれでは閻魔宮が正常に働かないのも当然だ。

駄目元で亜空間移動を試みるも、やはり中に侵入する事は出来ない。

周囲を見渡せばパイカーハンやオリブーと思われる男達があちこちの水晶にもた

れかかるように倒れており、ジャンンバにやられたのだと推測出来た。

まあ、悟空がいなければこんなものだろう。

「閻魔様。聞こえますか？ 私です、リゼットです」

「おお、地球の神か！ よく来てくれた！」

リゼットが呼びかけると水晶に閻魔の顔が映り、嬉しそうに破顔する。

「今、この閻魔宮が封印されてしまっているせいで儂が与えられた生と死を司る力が正常に發揮出来ん！ このままでは死者が蘇るなどの異常事態が起こり、この世とあの世のバランスが滅茶苦茶になってしまう！」

「あ、それもう起こってます」

「た、頼む地球の神よ！ 助けてくれい！」

閻魔に助けを乞われるまでもなく助けるつもりだ。

流星にずっと地球を封印しっぱなしというわけにもいかないし、第一この状態が続けば地球はよくても宇宙が滅茶苦茶になってしまう。

だがその前に、リゼットはどうしても聞いておきたい事があった。

「その前に閻魔様。確かスピリッツロンダリング装置の監視員は変えるように進言

したはずですが、それでも事件が起こってしまったのですか？ 装置が暴走すると不味い事になるとあれ程申しましたのに」

「……そ、それは、その……す、すまなかった！ 儂がお前の言う事を信じ切れなかったばかりに！」

「もしかして、監視員を変えなかったんですか？」

「い、いや！ 変えたぞ！ 一度は変えたんだ！」

だが、その、なあ……あの赤鬼の奴、クビにされてから毎日のように泣きながら儂に縋ってきおって、あまりに鬱陶しいから最後のチャンスのつもりで、そのう……」

「……復職させてしまった、と」

「……うむ。さ、最初のうちは真面目にやっていたんだが……気付いたら元に戻っていて、タンクの交換もサボっておってな……」

「……………」

リゼットは溜息をつきたいのを必死に堪えた。

きつとこれが漫画なら、彼女の頭には特大の怒りマークが浮かんでいたに違いあ

るまい。

リゼットは呆れたような視線で閻魔を一瞥し、わざとらしく背を向けた。

「さて、地球に帰って結界を強化しましょうか。

何とか太陽や月も一緒に封印に巻き込めないか方法を模索する必要があります
し」

「ま、待て、待て待て待て！ 儂が悪かった！ だから見捨てんでくれい！

あの世の精鋭や界王神様でもどうにもならん以上、お前と地球の抱える戦力だけが頼りなんじゃ！

お前に見捨てられてしまっではあの世がそのまま滅茶苦茶になってしまう！」
勿論見捨ててるつもりなどない。閻魔はともかく、このままでは他の善良な死者が
可哀想だ。

だがここで気安く助けてしまっでは閻魔も「困ったら地球の神に丸投げでいい
や」などと思うかもしれない。

だから表面上は『私は怒っています』と演じる必要があるのだ。

というか怒っているのは演技でも何でもなし。正直なところ閻魔の事は一度本気

で鞭打^{ビンタ}してやろうかと真剣に考えている。

「貸し一つですからね」

「う、うむ、わかった」

閻魔に貸しを一つ作り、それから閻魔宮の上へと浮上する。

そこには全長10mはありそうな黄色い肥満の魔人がおり、子供のように「ジャンバ、ジャンバ」と無邪気にはしゃいでいた。

リゼットは「ふむ」と呟くと、とりあえず知識にある弱点を試してみる事にした。

「この間抜け面」

「ジャンネツ!?!」

微笑んだままのいきなりの罵倒だ。

これには界王神やキビトもぎょつとし、だがそれ以上に衝撃を受けたのはジャンバであった。

彼は目に見えてダメージを負い、身体の表面がガラスのように砕け散る。

だがリゼットは容赦しない。笑みを浮かべたまま更に彼の弱点を抉る。

「汚物」

「ジャネンバ!？」

「燃えないゴミ」

「ジャツ!？」

「デザインに失敗したマスコット」

「ンバ!？」

「贅肉の塊」

「ジャネンバ!？」

「洗ってない犬の臭いがあります」

「ジャネンバァァァ!?!？」

とりあえず軽く悪口を言ってみたがなかなか効果はあるらしい。

とはいえ、やはり表面を軽く傷付けるだけだ。

このまま悪口を言い続けていればジャネンバの動きを封じる事は出来るだろうが倒すには至らない。

それにいずれは悪口のネタも尽きるだろうし、耐性も付くだろう。

さてどうしたものか、と悩んでいると界王神がおずおずと声をかけてきた。

「あ、あの、リゼットさん。彼には悪口が効くと分かっていたのですか？」

「ええ。以前ここに立ち寄った際に、この魔人の元になった監視員の鬼の心を読んでいたのです。

その際に彼が悪口に弱い豆腐メンタルである事は把握していました。

しかし残念ながら、効果があるだけで決め手には至らないようですね」
やはり結局のところ、ジャネンバをどうにかして倒すしか方法はない。

だが問題となるのは、彼が変身するという事だ。

先に言ってしまうとこの状態のジャネンバならばリゼットでも勝てる。

だが超サイヤ人3すらも上回る第二形態が曲者だ。

悪口と組み合わせれば結構善戦は出来ると思うのだが、本来の世界ではゴジータでなければ倒せないほどの強敵だ。

正直なところ、今の自分が下手にちょっかいをかけて第二形態にしてしまうと、その後がどうしようもなくなる。

「勝てますか？」

「今の彼になれば、何とか」

「え？　今の彼とは一体どういうことですか？」

「恐らくですが、まだ本気を出せる姿にはなっていないと考えられます。

確かに強い事は強いのですが、装置に溜まっていた邪気を全て吸収したにしては余りに弱過ぎるんです」

スピリッツロンダリング装置に最近入った悪人を振り返ると、これがなかなか酷い面子揃いだ。

プイプイやヤコンなどのバビディ配下を始めとし、魔界の王ダーブラも天国での人の変わりようから見るとこの装置にかけられている。

他には、トワも放置すると何を仕出かすか分からないので到着早々装置に放り込んで浄化してしまったと閻魔が教えてくれた。

ブロリーやボージャック、フリーザ、ミラはまだ順番待ちでこの装置に入っていないようだが、それでも十分に過ぎる。

これらの悪の気を集めてしまえば、とでもリゼット一人の手に負える程度で収まるはずがない。

そう説明すると、界王神はそこまで考えていなかったのか顔を蒼白にし、「確か

に」と呟いていた。

「で、では勝つのは難しいと?」

「正直なところ、かなり……。」

しかし、戦わないわけにはいきませんので何とかしてみますが」

「お、お待ち下さい!」

勝つのはかなり難しい。

だが、だからといって逃げるわけにもいかない。

リゼットが背水の心構えで挑もうとするが、そこに界王神が慌てて待ったをかけた。

「貴方はこの状況を打開し得る数少ない存在です。ここで無謀な戦いをさせるわけにはいきません!」

「いや、しかしですね……。」

「私に考えがあります。うまくすれば貴女のその力を遥かに高める事が出来るかも知れません」

界王神はどうやら、ここからリゼットの力を高める方法を知っているらしい。

強くなれる、というのならそれはリゼットにとっても有り難い話だ。

だがサイヤ人でもない自分がそう簡単に力を上げる事が出来るとは思えない。

リゼットは怪訝な視線で界王神を見るが、彼の顔は自信に溢れていた。

「か、界王神様！ まさか！」

「そのまさかです、キビト。リゼットさんを界王神界へお連れしましょう」

「そ、そんな！ あそこは界王神か、その付き人しか立ち入る事が許されぬ聖域ですぞ！」

「彼女は辺境の惑星の、とはいえ神です。それに魔人ブウを倒して他の界王神の仇も討ってくれた。

資格は充分にあると私は考えます」

リゼット本人を放置して界王神とキビトが言い争うが、キビトが界王神に強く出るはずもなく話はあっさりと纏まった。

そしてその会話を聞き、リゼットも界王神の狙いを理解する。

間違いない……Zソードの所へ連れて行く気だ。

あれは本来ならば魔人ブウに対抗するべく悟飯に抜かせるはずだが、その魔人ブ

ウはもういない。

結果、Zソードを抜く役目がこっちに回ってきたらしい。

よく考えれば、確かに界王神は本来の流れでも悟飯に『貴方達が人間でありながらこうまで私の力を大きく超えている事が分かっていたならあの方法もあったのに』と言っていた。

つまり敵が強いならば、Zソードを使わせるといふ選択肢を取れるわけだ。

そしてリゼットとしてもこれはまさに願ったり叶ったりの流れだ。

彼女にはバーストリミットという界王拳モドキがあるが、あれは負担が大きいので最大出力は長続きしない。

だが老界王神の潜在能力解放ならばその心配もないのだ。

問題があるとすれば、恐らく悟飯ほどの大幅なパワーアップは見込めないという点か。

「リゼットさん、界王神界へお越し下さい。そこに伝わる伝説の剣を使えばきっと、貴女は更に強くなれます」

「……………」

界王神の誘いと共に差し出されたキビトの手を見る。

確実な勝利を求めるならば迷う事はない。この手を取って力を得ればいい。

潜在能力解放にかかる時間は精神と時の部屋に老界王神を連れて行って彼をバリ
アで保護すればかなり短縮できるだろう。

時間にして、25時間……精神と時の部屋ならばほんの5分で終わる。

界王神界でZソードを折って、老界王神を説得して地球に連れて行く時間を含
めても10分以内には終わるだろう。

……長い、と思った。

25時間を耐えるくらいはリゼットならば苦ではない。精神修行としてもっと長
い時間座禅を組んだ事もあるのだ。

だが10分あればジャンバはどれだけ被害を広げる？　どれだけ死ぬ？

あの世の戦士も当然止めに入るだろうが、ジャンバを止める事は出来ないだろ
う。

きっと何人かが死ぬ……パイカーハンやオリブーも、その例外ではないだろう。
仮にパイカーハンの強さを7年前の悟飯に少し劣る程度と仮定しても、ジャネ

ンバ相手に10分戦うのは不可能だ。

そして既に死んでいるあの世の戦士はもう一度死ねば無に帰り、消滅してしまう。

「……リゼットさん？」

「すみません、界王神様。ここを離れる事は私には出来ません」

やるしかない。

それがリゼットの出した結論だった。

ここで止めねば駄目なのだ。ここで自分が倒さねば、誰かが消滅してしまう。

だから、やる。勝てる勝てないではなく、誰かが消える事を承知の上でここで退

く事は自分で自分が許せないから。

その決意の元、気を高めようとして――。

「――愚かな判断だ。貴様もまだまだ……甘い」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえ、動きを止めた。

振り返った先にいたのは、紫色の身体を鎧のように硬質化した白い体表で覆った

異星人であった。

瞳は真紅に染まり、その巨体はブロリーを彷彿とさせる。

かつて二度戦った、リゼットにとっても忘れられない強敵……。

フリーザの兄であるクウラがそこにいた。

「……クウラ。地球で気が感じられなかったからまさかとは思いましたが、あの世に残っていたのですね」

「貴様ならばこちらに来ると踏んでな。思った通りだった」

クウラが腕組みをしたまま得意そうに言い、リゼットの顔が陰しく歪む。
今のリゼットならば、クウラ一人が増えたくらいでは何の問題もない。

ただしそれは、以前のクウラならば……の話だ。

再会したクウラから感じられる気は以前よりも力強さを増している。

彼も彼なりに、地獄で何か掴んだという事なのだろう。

まさかの敵増援に構えるリゼットへ、クウラは思いがけぬ言葉を発した。

「さっさと行け。いつまでも留まられては邪魔だ」

「……はい？」

「その醜い風船野郎の相手は俺がしてやる、と言ってるんだ」

クウラはリゼットの前を過ぎ、ジャンペンバと相対した。

彼の意図が読めずに困惑するリゼットへ、クウラは不機嫌に話す。

「どうした？ さっさと行け」

「……どういうつもりですか？ 貴方が私に協力するような真似をするなんて」

「……協力だと？ ……クッククック、おめでたいな。だから貴様は……甘いと言
うんだ！」

嘲るようにクウラが言うと、その瞳が赤く輝く。

そして次の瞬間、彼はリゼット目掛けて拳を繰り出していた。

咄嗟にリゼットはこれを回避して彼から距離を開ける。

「いいか、よく聞け！ 俺は貴様だけは絶対に許さん！

俺のプライドを粉々に打ち碎いた貴様だけは……！」

く、屈辱だった……このクウラ様が二度も、二度も同じ相手に負けたんだぞ……。

ゆ、許さん……絶対に許せるものか……貴様だけは……！！

貴様は俺に……俺に殺されるべきなんだアッ！

俺に勝利しておいて、こんな風船野郎に殺されるなど俺が認めん！」

クウラの混じり気なしの憎悪と叫びを聞き、リゼットは不覚にも苦笑してしまっ

た。

なるほど、甘いと言われるわけだ。

一瞬、心のどこかで期待してしまったのだ。これはもしや、ベジータなどと同じツンデレからの後で味方になるパターンでは……などと。

とんでもない話だ。クウラが自分に抱く感情はそんな生温いものでは断じてない。

彼がリゼットに向けるのはどこまでも純化された憎悪のみ。そこに仲間意識などというものは欠片も存在していない。

その余りの憎悪の濃さに、基本的に悪意というものを向けられることのない界王神は震え上がってしまった。

「分かったらさっさと消えろ……俺が貴様を殺したくなる前にな」
恐らくクウラは本当は今すぐにでもリゼットに攻撃したいのだろう。

だがそれにはジャネンバが邪魔で、リゼットも自分よりジャネンバの相手を優先してしまう事が分かっている。

だから耐えているのだ。

心の中で荒れ狂うドス黒い炎を必死に抑え、血管が浮き出るほどに腕に力を込めて拳を震わせながら、それでもギリギリの一線で踏み留まっている。

復讐の時は今ではない……まだ、その時ではないのだ。

「……大丈夫なのですか？ 貴方の戦闘力ではアレの相手は……」

「フン、貴様に心配されるとは俺も落ちぶれたものだ。ならば見よ」

クウラはリゼットの不安を一笑に付し、力を込める。

すると彼の全身から黄金のオーラが立ち昇り、今のリゼットにも脅威を感じさせるほどの力強さを発揮した。

その気の圧力たるや、あの魔人ブウにも見劣りしていない。

「クウラ、それは……」

「まだ上があるという事だ……進化を続けているのは貴様等だけではない。

……だが今の俺ではまだ、新たな進化には届かん。貴様にも勝てんだろう。

だから今はまだ、時ではない。

だが覚えておけ。俺がいつの日か、更に上の変身を手にした時が貴様の最後だという事を。

俺は必ず……どんな手を使つてでも蘇り、そしてこの手で貴様を殺す。

絶対に……絶対に——だ」

クウラの言葉にリゼットは知らず流れていた冷や汗を指で拭った。

今の彼の言葉には重みがある。やると言ったら本当にやる凄みがある。

文字通り、死んでもリゼットを殺す……その激しい憎悪だけが今の彼を高めへ押し上げていた。

前のハッチヒヤックの一件でクウラが蘇らなかったのも、これのせいだろう。

サイヤ人など彼にとってはどうでもいい存在なのだ。

何故なら彼の中の負の感情は全て、リゼット一人だけに注がれているのだから。

「……行きましょう、界王神様」

「え？ は、はい。しかし大丈夫なのですか……アレを放っておいて」

「大丈夫です。むしろここに残つていては後数分もしないうちにクウラの理性が焼き切れてこっちに襲い掛かってきます」

これを嬉しい誤算とは言いたくないが、しかし好都合であるのは確かだ。

今のクウラならばジャンバ相手でも十分に時間を稼げるだろう。

これで新たな力を得るための時間は獲得できた。

リゼットは今度こそキビトの手を取り、界王神界へ転移した。

やけに早く瞬間移動したが、キビトもこんな場所に長居したくなかったのだろう。そうしてリゼットがいなくなり、クウラは再びジャネンバへと向き直る。

「さて……俺もこの力を完全なものにする為には戦いを積みねばならん。

貴様にはその相手となってもらうぞ」

クウラは口の端を釣り上げ、好戦的にジャネンバを見る。

力を伸ばすのに必要なのは、やはり戦いだ。

それもこれほどの強敵となれば言う事なし。

必ずや自分を高みに引き上げる為の足掛かりとなってくれる事だろう。

「さあ——始めようか」

そう宣言し、クウラの口元をマスクが覆った。

・復活の『C』…940億

・ジャネンバ（第一形態）…1000億

クウラ「勘違いするな。俺は貴様を助けに来たわけではない」

リゼット（あつ！ これってベジータのツンデレ仲間入りパターン!?

クウラ仲間になるんですかヤッター!）

クウラ「俺は貴様を殺す！ 絶対に……絶対に、絶対にだああああ!」（集中

線）

リゼット（これ完全に私への好感度がマイナスでカンストしてるじゃないですか
ヤダー!）

【危険なふたり！超戦士はねむれない】

ドラゴンボールシリーズ劇場公開作第13弾。

以前の劇場版のボスであったブロリーがまさかの再登場を果たした衝撃の一作。
前の戦いでは生きていたはずの悟空が何故か死んでいる。

心臓病が再発症でもしたのだろうか。

この映画では悟飯は「修行を続けていた」と言っており、正史の悟飯よりもかなり強いと思われる。

ブロリーが伝説ではない普通の超サイヤ人の姿を披露しており、その時の姿が白眼マッコからは想像出来ないほどにスマートでハンサムなので『これが噂のイケメンブロリー』と呼ばれる。

しかしイケメンな割に、トランクスに小便をかけられるなど扱いは悪い。
天下一武道会の前の物語と思われる。

【復活のフュージョン!!悟空とベジータ】

ドラゴンボールシリーズ劇場公開作第15弾。

悟空とベジータが死亡しており、悟空の台詞からブウと戦った後であると分かる。
ゴテンクスがスーパーゴーストカミカゼアタックを習得しているので悪ブウによる地球人皆殺し後である事は間違いない。

ゴテンクスか悟飯のどちらかが悪ブウを倒し、神龍で地球人を全員蘇らせた世界と思われる。

ベジータが生き返っていないのはフリーザ編で一度地球のドラゴンボールで蘇っているからと考えれば矛盾はしない。

【ジャネンバ】

「スピリッツロンダリング装置」から溢れ出た邪気が、近くで踊っていた赤鬼の肉体を依り代にして誕生した怪物。

最初はデブブウのようなゆるキャラだが、変身するとスタイリッシュになる。

亜空間を通しての遠距離打撃や気功波の反転、分身などの多彩な能力を操り、第二形態では身体を分解しての奇襲や落ちている棍棒を剣に変えるなど歴代のボスの中でもトップクラスに技が豊富。

超サイヤ人3の悟空に勝利したことから、ヒルデガーンと並んで劇場版Zの最強ボス候補と言われる。

相手の技を見切るのが得意。

第七十七話 復活のフュージョン!!悟空とベジータ②

最近リゼットの絵を描いてくださる方が何人かいるので、指針としてフリーの立ち絵制作サイトで作ったリゼットの画像でも上げようと思ったものの、『匿名設定の場合は挿絵を利用すると匿名性が失われます』という注意事項を見て断念しました。

到着した界王神界は緑豊かな美しい惑星であった。

空は澄み渡るように青く、空にはいくつもの星が浮いているのが見える。

それと同時にリゼットが理解したのは、何故地球が『最も美しい惑星』と呼ばれるかだ。

何の事はない。この世界こそが美の基準だったのだ。

神々が住まう界王神界が美の基準にあり、地球はその環境に極めて似通っている。だからどの宇宙人からも美しい惑星と認識されていたのだ。

そのような感想を抱きながら界王神の後に続き、やがて3人は地面に刺さった一本の剣の前に到達した。

「これは？」

既に知ってはいるが、一応ポーズとしてリゼットは尋ねておく事にした。

何故知っているかを聞かれると面倒なのだ。

「Zソードといいます。我が界王神界に代々伝わる最強の剣であり、この剣を抜けた者はこの世で最強の力を手にすると言われています。

歴代の界王神達もこの伝説に挑んできましたが、私を含めてこの剣を抜けた者は一人もいません。

しかしリゼットさん。貴女ならばあるいは……」

「いいんですか？ 私みたいな辺境の星の神が抜いちゃって」

「構いませんよ。平和の為に使われるならば剣も喜ぶでしょう」

界王神の許可は得た。

ならばもう遠慮は必要ないだろう、とリゼットは剣の前に立つ。

まずは試しにそのまま掴んでみるが、ビクともしない。両手で掴んでも同じだ。

この分だと思いきり引っ張っても結果は同じだろう。

ならばとバーストリミットをいきなり100倍に解放し、さらに全力で念力をも上乗せして引っ張った。

見た目こそ涼しい顔で軽く剣を引っ張っているようにしか見えないだろうが、実際は全力も全力である。

あまりに強く引っ張ったせいで地面が浮かんのように揺れ、どれほどの力で剣が刺さっているかを実証する事になってしまった。

だが構うものか、トリゼットは更に力を込める。

すると遂にZソードが地面から離れ、完全に彼女の手へと収まってしまった。

「お、お見事です！ 素晴らしいですよりゼットさん！」

「ま、まさか本当に下界の神がZソードを抜いてしまうとは……」

Zソードを引き抜く事には成功した。

しかしこの剣の真の価値は、剣自体にはない。

そもそも引き抜いて実際に感じた事だが、このZソードは剣単品で見れば大した業物ではなかった。

いや、業物には違いなのだ。確かにそれなりにいい金属は使っていると思う。切れ味もそこそこあるのだろう。

重さもある以上、振り下ろして使えばかなりの攻撃力も期待出来る。

だが宇宙最強の力を齎すほどかというところ、残念ながら前知識なしでも違うと断言出来るしまう。

そもそも満足に振り回せないほどに重いのでは武器として欠陥品もいいところだ。

残念ながらこれでは、まだリゼット自身がカッチン鋼の剣を物質創造した方が強い剣となるだろう。

もっともリゼット自身がカッチン鋼を見た事がないので創造出来ないのだが。そこまで考えて、ふとりゼットは界王神へと声をかけた。

「界王神様、少し試し斬りをしてもらいたいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。どうせなら硬いもので試してみましよう」

リゼットが試し斬りを提案すると、界王神は嬉々としてその言葉に同意した。そして物質創造能力でカッチン鋼を創り出し、宙に浮かべる。

まずは狙い通り。これでカッチン鋼を見る事が出来たのであれを少し詳しく調べれば次からはリゼットもあれを創造する事が可能となるはずだ。

「いけますよ!」

界王神が投げてきたカッチン鋼を前に、リゼットはあえて力任せにZソードを叩き付けた。

リゼットの技能を活用すれば刀身に気を纏わせてカッチン鋼すらも切断するのは決して不可能ではない。

だがこのZソードの真価は折れた後にこそある。

つまりZソードが無傷で残っているのは困るのだ。

故にリゼットはわざと荒く、剣に負担がかかるようにカッチン鋼へと叩き付けた。すると当然のように刀身が折れ、飛んで来たカッチン鋼を余裕をもって避ける。これでよし。後は老界王神が勝手に出て来て声をかけてくれるはずだ。

「ぜ、Zソードがァァ!?!」

「界王神界に伝わる伝説の剣がァァ!?!」

界王神とキビトは作画崩壊したかのように顔を崩して驚愕しているが、どうやら

心底この剣が凄いと信じていたらしい。

目玉が飛び出しそうなほどに目を剥く様は、カリスマブレイクというレベルではない。

とりあえずフォローを入れておくべきだろう、とりゼットは二人へ声をかけた。「ええと。どうやらこのZソードという剣、伝説ほど凄いいものではなかったようですね」

「そ、そそ、そ、そんな馬鹿な。わ、我が界王神界に伝わる最強の剣のはずが……」
「しかしですね。こう言ってはあれですが、正直武器としては微妙ですよこれ。持つてみて下さい」

リゼットはそう言い、界王神へと剣を渡す。

界王神は何の疑いもなく剣を手にしたが、直後そのあまりの重さに驚き、剣を落としてしまった。

慌てて引き上げるも、かなり辛そうだ。

とりあえずキビトのように持ち上げる事すら出来ないという事はないらしい。

「な、なんですか、これは！ 折れているはずなのに、も、物凄く重いですよ」

「でしょう? これではとても使い物になりませんよ。

切れ味がいいならまだ救いはあったのですが、肝心の切れ味もイマイチですし……まあ重いので鈍器としてはそれなりに優秀だったかもしれませんが」

「そ、そんなはずが……伝説は所詮伝説だったという事、でしょうか」

界王神がガックリと項垂れ、肩を落とす。

代々伝わってきた最強剣がまさかのハッターとくれば落胆も隠せないのだろう。しかしそこに「違うぞ」としわがれた声が聞こえ、界王神とキビトは驚いて後ろを振り返る。

それも無理のない事だろう。自分達以外誰もいないはずの聖域に、自分達以外の声が聞こえたのだから。

分かり易く例えるならば、鍵をかけた自宅にいる時にいきなり聞き覚えのない声が聞こえたようなものだ。

そして振り返った先にいたのは見覚えのない……しかし紛れもなく界王神と分かる老人であった。

「へっへっへっへ」

「あ、あの、貴方は？」

「儂か？ 聞いて驚くんじゃ。」

儂はよく。なんとなーんと、お前のよく。

15代前のよく界王神なんだなく、これが」

「えええ!? じゅ、15代前のご先祖様!?」

今ここにいる界王神は既に500万年以上生きている。

その彼ですらまだ界王神としては若造であり未熟者なのだ。

界王神とはそれほどに長寿であり、一つの代変わりの間にいくつの知的生命体が生まれ、そして文明を築いて崩壊するかが分からない。

少なくとも地球人類の歴史は、今ここにいる界王神がビビディを討った頃辺りにようやく二足歩行が出来るようになったと言われている。

そして恐らく、彼が老人になり代変わりをする頃には今と比べ物にならないほど発展しているか、あるいは滅びているかのどちらかだろう。

そんな界王神の15代前とくれば、それはもう数億年単位も昔の人物という事になってしまう。

驚くなというのが無理な話だろう。

「そうなんだな。」

昔よ、やったら強くて悪い奴がおってよ。

そいつによ、あの剣に封じ込められてしまったんだな、これが。

わしの恐ろしさにびびってよ、そうしたんだな。」

「恐ろしさ、ですか。それは一体どんな力なのです？」

失礼ですが、あまり直接の戦闘力は感じられないのですが」

「ふふん。知りたい？」

「ええ、知りたいです」

とりあえず、何も聞いていないのに勝手に語るという事は、本人が語りたがっているという事だ。

要するに自慢したいのだろう。

ならばここで乗っておく事で話を引き出すのが得策だろう。

原作ではここで悟空が悪癖を発揮して事をややこしくしてしまったが、リゼットはそんなミスを犯す気はない。

「わしはよー、なんとよー。

どんな達人でも、隠された力をドーンと、ドーンと引き出してしまうんだなーこれが。

へへへ、聞いた事ある？　こんな能力」

「確かナメック星の先代最長老さんが潜在能力を引き出す力を持っていましたね。それと魔導師バビディも限界以上に力を引き出す魔術があったと聞いています。それらとは違うのですか？」

「な、何？　そんな奴等がいるのか。

だ、だが絶対に儂の方が凄い。絶対じゃ」

ここで少しだけ対抗心を煽っておくのも忘れてはならない。

しかしあくまで少しだけだ。あまりやりすぎると今度はヘソを曲げてしまう恐れがある。

界王神相手にこのような誘導は少し無礼かとも思うが、こうして自分からやってくれるように仕向けないとこのエロ爺さんは最悪『胸や尻を触らせてくれないとやってあげない』とか言い出しかねないのだ。

「よし、儂の方が凄いつて事を見せてやる。

あの剣を抜いたのはお前さんだな？　そこに立つんじゃ」

「はい、分かりました」

どうやら無事やる気になってくれたらしい。

まあ悟空のように気弾を当てていないというのも大きいのだろう。

もしかするとわざわざ煽るまでも無く、出してもらったお返しでやってくれたかもしれない。

「あの剣を抜いて振り回せる者ならよ。儂にかかれば絶対に宇宙一になれる」

リゼットは目を閉じて、ここにいない悟飯に少しだけ申し訳なく思っていた。

本当ならばこの潜在能力解放は悟飯が行ってもらえるはずだったものだ。

結局のところ潜在能力を解放してもらっても悟飯が活躍する事はほとんどなかった上にGTでは変身すら出来なくなつて超サイヤ人ベジータ以下になつてしまつていたが、それでも彼のパワーアップの機会を奪つてしまった事は変わりない。

その分は自分が地球の危機を防ぐ事でどうか許して欲しい、とリゼットは内心で詫びた。

「しかしよ。あの剣を抜いてよ、儂を出してくれるのはよ。

界王神の誰かだと思っていたのによ。

まさか下界の神に助けられるとはよー。世も末じゃのお」

「も、申し訳、ございません」

老界王神は界王神に皮肉を飛ばし、界王神が縮こまってしまふ。

フォローすると彼は決して弱くはない。

彼の実力はかつて苦しめられたメタルクウラ一体分に相当する。

ただ、戦いのレベルが進みすぎて相対的に弱く見えてしまうだけなのだ。

「よーし、そこに立ってあんまり動いちゃいかんぞ」

「はい」

「じゃあ始めるぞ。

……フンフンフーン！ フフフのフーン！」

一体どんな凄い事をするのかと思えば、突然のこの奇声をあげてのダンスである。

普通ならば一体何をふざけているのかと思うだろう。

しかし顔を見れば老界王神は至って真面目そのものだ。

「あ、あの、ご先祖様。それは一体どれほど続くのです?」

「儀式に5時間! パワーアップに20時間じゃ!」

それは酷い拷問だ、とりゼットは苦笑してしまった。

とはいえ自分ならば余裕で耐える事が出来る時間でもある。

それでも昔はカリンの元で精神修行をやっていた時期もあるのだ。

そのカリンとは今や立場が逆転し、神様と呼ばれるようになってしまったがあの時の経験は今でもリゼットの中で生きている。

たかが一日+1時間など何の問題にもならない……ただしそれは、普段の話だ。今はあの世とこの世が繋がり、あちこちが混乱している。

この事態をなるべく早く収めなければ被害が広がる一方だろう。

だから自分が25時間待つのはいいが、実際に25時間経過するのは駄目だ。故にリゼットは、儀式の前に一つの提案をした。

「すみませんが、場所を変えてもらっていいですか?」

「……え?」



「……驚いた。お前さん、とんでもない力を眠らせているな？」

儀式が終わり力の解放に取り掛かって10時間後。

リゼットと老界王神がいる場所は界王神界ではなく、地球の精神と時の部屋の中であつた。

ここならば25時間過ごしても外では僅かな時間しか経たない。

勿論老界王神にこの環境は酷なので、リゼットのバリアが彼を保護している。そして儀式が半分ほど終わったところで、老界王神は汗を流しながら上記の問いを発したのだ。

一体何を聞いているのか、は考えるまでもない。

彼の潜在能力を限界以上に引き出すというのはハツタリでも何でもなく、本当にリゼットの持っている力の全てを引き出してしまえるようだ。

つまりは、視てしまったのだろう。リゼットが自らの意思で封印しているあの禁忌の領域すらも。

「はい。以前に二回だけ使った事がありますが、一度目は制御出来ずに暴走してしまいました。

それ以降、私は自らの意思でこの力の使用を自身に禁じています」

「ふむ。お前さん、それがどれほどの力か分かっておるのか？」

それはよ、『神の領域』じゃぞ」

「神の領域、ですか？ ああ、私これでも地球の神なのですが」

「そうじゃない。今までお前さんが見てきたような神の力とは次元が異なるんじゃない。本当の神の力ってのはよ、戦闘力が表面化しない限りなくクリアな気の事を言う。お前さんは既にその域に片足を入れた状態にあるようじゃが、力を解放すれば完全とその上の位階へと移行出来ちまうだろう」

老界王神もまさか予想していなかったのだろう。

破壊神以外の……それもこんな辺境の神がその領域へ入りかけているなどという事は。

そして悩んでいるのだ。その力を引き出してもいいものかどうかを。

「悪いが、その力は解放せずに眠らせたままにしておくぞ。」

神の領域抜きの純粋なお前さんの潜在能力のみを解放するに留めておく」

老界王神も普通ならばこんなケチな事はしない。全て解放する。

だがりゼットが持つ神の領域はそれほどのものであり、制御出来ない力の解放など危険なだけだ。

それでも老界王神の力で引き出されたならば以前よりずっと制御し易くはなるだろうが危険には変わりない。

だからまだ早い。老界王神はそう考えたのだ。

そして更に10時間が経過し、遂にリゼットのパワーアップは終了した。

己の力を探ってみれば、確かに意図的にかけられたリミッターがあるのが理解出来る。

とりあえず神の領域を除いた全ての潜在能力を解放した結果、見た目は全く変化せずに、かつ負担すらもなくリゼットは己の力が一気に跳ね上がった事を実感した。

「……は！」

まずは軽く気を放つ。

するとそれだけの事で空間に穴が穿たれ、神殿の景色が映し出された。

本来の歴史ならば超サイヤ人3のゴテンクスでようやく可能となった、膨大な

氣に物を言わせての精神と時の部屋からの脱出。それが可能になったのだ。
そして思う——これならば、ジャネンバにも勝てる、と。

【戦闘力】

・リゼット

基本戦闘力…12億

アルティメット化…6000億

【倍率】

500倍。

悟飯ならばもっと行くだろうがリゼットならばこんなもの。

それでも十分破格の強化。

【バーストリミットとの併用】

一応可能だが、氣の制御がとても難しい。

超サイヤ人十界王拳と同じで制御をミスると自滅して死ぬ。

悟空が超サイヤ人習得後は界王拳を使わなくなったのと同じく、リゼットも今後は慣れるまでバーストリミットをあまり使わないと思われる。

【ゼノバースとの併用】

不可能。

両方とも変身技なので同時発動は出来ない。

言ってしまうえば『神の気まで含めた全潜在能力解放』がゼノバース。

第七十八話 復活のフュージョン!!悟空とベジータ③～復活の『F

』（3回目）

「人人人人」

> 復活のF <

「YYYYYY」

リゼットが潜在能力解放の為に老界王神のダンスを見せ続けられていた頃。

かつて倒した敵が地球に蘇るという事態をリゼットから知らされた地球の戦士達は各地に散り、被害を未然に防ぐべく激闘を開始していた。

凝りずに3度目の復活を果たしたフリーザが率いる地獄の戦士達の中を突っ切り、ピッコロがマントを翻して飛翔する。

雑魚の群になど用はない。狙うは彼等を統括しているフリーザただ一人だ。

「くたばれ！」

ピッコロの拳がフリーザの腹にめり込み、貫通して背中から突き出る。

かつての強敵も今のピッコロから見ればどうという事はない。

血を吐き出しながらフリーザが爆散し、それを見た雑魚が我先にと逃げようとする。

だがそこを狙ったように光の戦乙女達が追撃し、一人一人丁寧に叩き落としていた。

リゼットの気により生み出された彼女達は、一体どういう原理なのか自我を有し、会話すらも可能としている。

そしてある程度の戦闘力すらも与えられ、100体全てが人造人間17号程度ならば倒せるだけの能力を持っていた。

逃げる敵など無論相手になるわけもなく、折角復活してきたドクターウィローやバイオ戦士、ギニュー特戦隊などが次々と討ち取られていく様は時代の流れを感じてどこか虚しさすら感じられた。

「かったるいぜ。こうしちまえば簡単でいい」

その隣でナッパが指を上に向け、周囲を丸ごと消し飛ばす大爆発を発生させた。

これが空中だから地上の町に被害がないものの、少し思考の足りない男だ。

彼の『ジャイアントストーム』により逃げていた悪人達が残らず消し炭となり、出番を横取りされてしまった乙女達が揃って頬を膨らませる。

「はははははっ！　そうむくれるな、ちょっとした挨拶じゃねえか！」

「馬鹿が。この付近に人間の乗った報道ヘリや避難中の自家用機があったら今ので死者が出ていたぞ。貴様の下らん挨拶のせいだな」

「あ……す、すまねえピッコロ」

「フン。幸い今は誰もいなかったようだがな。次からはもう少し物を考えて動け」

「へえ、お前がコルド大王か。生身にしちゃやるじゃないか」

「地球人風情が……！」

無人島の上で激しく攻防を繰り返しているのは人造人間17号とコルド大王だ。

18号は19号と戦い、クウラ機甲戦隊を18号の夫であるクリリンが蹴散らしている。

復活早々、生前の反省からかいきなり合体した超13号とは17号の救援に駆けつ

けたカプセルコーポレーションの誇るスーパー警備ロボット16号が戦い、掌を握り合って力比べを行っていた。

久しぶりの人造人間トリオの結成だ。

13号は完全なロボットタイプである為、魂などないはずなのだがあるいは邪悪な怨念でも宿っていたのかもしれない。

だが既に戦いの勝敗は決まっていた。連携のまるで取れていない超13号、コルド、19号と違い17号達は一糸乱れぬ完全な連携を見せている。

双子だからこそのコンビネーション、そしてクリリンと18号の夫婦故の息の合った戦い。

更に16号もまた17号達の親友だ。背を預けるのに何ら問題はない。

「お、おのれ、出来損ない共が！ またしても生みの親である僕に逆らうか！」「はっ、ほざけよ爺。もう一度俺の手で地獄に送り返してやるぜ！」

復活したドクター・ゲロは歯軋りをし、17号が挑発するように返す。

生みの親気取りとは勘違いも甚だしい。平和に暮らしていた所を勝手に誘拐して勝手に改造した、ただの老害だろうが。

そんな憎悪を滲ませながら17号と18号がゲロを睨み、狙いを彼へと変えた。

17号が19号を蹴り、18号がコルドを投げる。

クリリンが機甲戦隊全員をかめはめ波で巻き込み、16号が合体13号を20号へ向けて投げ飛ばした。

そして腕を外し、照準をゲロへと定める。

「やれ、16号！」

「ま、待っ」

「ヘルズフラッシュ!!」

制止の声も聞かずに16号の最大兵器が発射された。

腕から放たれた大火力が19号、コルド、合体13号、20号を纏めて飲み込み焼却してしまう。

その一撃で再び地獄の住人は地獄へと帰る事となり、17号は「二度と復活するなよ」と忌々しそうに吐き捨てた。

「また復活か！ 凝りねえな、玉無しさんよ！」

「ほざけえ！」

海の上でぶつかり合うのはボージャックとターレスの二人だ。

今回復活した中でも間違いなくトップ3の中に入るだろうボージャックだが、最早今のターレスの敵ではない。

軽々と攻撃をいなされ、面白いようにターレスの攻撃が命中する。

膝蹴りで腹を抉られ、アッパーで空へ飛ばされる。と思えば先回りしたターレスに蹴り落とされ、海へと沈められた。

すぐに海から飛び出してターレスの頬へ拳を叩き込むも、ターレスは口の端から僅かな血を流しただけで不敵に笑っていた。

「ば、馬鹿な……」

「クッククク……その程度のパワーじゃ今の俺の相手にはなれないぜ」

ターレスが早くも勝利宣言をし、全身をスパークが覆う。

超サイヤ人のままでも勝てるが、あえての超サイヤ人2へのギアチェンジだ。

力の差を前に戦意を喪失してしまったボージャックが震え、だがターレスは容赦しない。

目にも止まらぬ速度で膝蹴りを叩き込み、肘打ちで頭を強打してボージャックを海へ落とした。

更に気によって一時的に海の水を吹き飛ばし、自らも海底へと降りてボージャックの背を踏み付けた。

「死ねえーっ!!」

その体勢から回避不能の気弾連射!

無慈悲の攻撃にボージャックの身体が焼け、絶叫が木霊する。

そして10秒後。攻撃が終わったターレスの足元にボージャックはおらず、代わりに元が何であったのかすらも不明な肉片だけが残されていた。

海の水が戻り、ターレスは再び空へと浮上する。

「お見事でした、ターレス様」

「! お、お前達は」

空に戻ったターレスを待っていたのは、かつての彼の配下であるクラッシュ軍団——アモンド、ダイーズ、カカオ、レズン、ラカセイの5人であった。

彼等は空中で跪くという器用な芸当を行い、ターレスへ頭を垂れる。

「我等クラッシャー軍団、再びターレス様にお仕えすべく地獄より復活して参りました。さあ、ご命令を」

「へっ、いいのか？ この件が片付けばお前等はまた地獄に逆戻りなんだぜ？」

「構いません。我等の主はターレス様だけです。」

俺達は貴方にのみ従いましょう。例え地獄に落ちようとも」

「……最高だぜ、テメエ等」

ターレスがニヤリと笑い、クラッシャー軍団の5人も同種の笑みを浮べた。

正義か悪か、ではない。

誰に仕え、誰と戦うか。それが彼等にとって何より大事なものだ。

実力差は開きすぎてしまったが、それでもターレスの胸には久しぶりに再会した戦友がいるというだけで高揚が生まれ、力が高まっていくような錯覚さえ覚える。

「よし！ ついてこいテメエ等！ 一日だけのクラッシャー軍団再結成だ！

地獄の連中にお前達の恐ろしさを見せ付けてやれ！」

「はっ！」

ターレスが意気揚々と飛び、クラッシャー軍団が後に続く。

かつては地球の脅威であった彼等も、今この時だけは頼もしい地球の守護者であつた。

「ブロリーー！ー！」

「カカロットオオオ！」

水晶に囲まれた湖の上では超サイヤ人3の孫悟空と伝説の超サイヤ人ブロリーが二度目の衝突を果たしていた。

悟空の拳がブロリーの頬を殴り、ブロリーの豪腕が悟空を殴る。

悟空は技と経験で。ブロリーはそれらを無視したパワーで、互いの強みを活かして互角に渡り合う。

気の強大さは今でも尚、ブロリーが勝っている。

あれから7年間も経ったというのに、まだ悟空はブロリーに届いていない。

それが悟空にとっては悔しい事であり、同時に嬉しい事であつた。

今が不味い事態だという事は分かっている。

それでも、サイヤ人は強敵に会うのが嬉しいのだ。

その人智を超えた戦いを悟飯、悟天、トランクス、ビーデルの4人は呆然と眺めている。

「お、お父さん！ もう限界です、僕も……」

「悟飯！ 手を出すな！」

我慢出来ずに父の援護に向かうとした悟飯を悟空の怒声が止め、その隙を突いてブロリーの拳が悟空の横面を殴った。

だが悟空は殴られた勢いをそのままに身体を横回転させ、遠心力を加えてブロリーの顔を蹴り飛ばす。

蹴られた箇所には雷光が発生し、更に悟空のストレートが追撃で彼の顔に入った。「お前は悟天達を連れて逃げろ！ そいつ等を守るのが今のおめえの戦いだ！」更に突き出した拳にブロリーの突きが交差し、両者の頬に拳がめり込む。だが怯むのは一瞬だ。

二人は互いに相手の掌を掴み、密着状態から膝蹴りを何度も繰り出す。膝と膝がぶつかる度に衝撃波と雷光が迸り、湖の水が吹き飛んだ。

「……っ、……行こう、悟天、トランクス。ビーデルさん」

「で、でも兄ちゃん！」

「大丈夫だ悟天。僕達の父さんは負けない……絶対だ」

ブロリーの相手は父に任せた。

ならば自分は自分に出来る事をするだけだ。

この混乱しきった地球で、ビーデルの側を離れるわけにはいかない。

悟天とトランクスも年齢を考えれば超天才と言っているが、それでも子供だ。地獄から復活してきた強敵と出会ってしまえば身を守る事は出来ないだろう。

ならばこの三人を守るのが今の自分の戦いであり、役割だ。

そう決めた悟飯はビーデルの手を握り、自分の側から離れないように告げる。

ビーデルはその台詞と普段は滅多に見ない悟飯の戦士としての横顔に頬を赤らめているが悟飯にそれを気付く余裕はなかった。

何故なら、彼の前には地獄から戻ってきたドクター・ライチャーとその他大量の有象無象達が湧き出て彼等を包囲していたからだ。

「サイヤ人よ……今度こそ皆殺しにしてやろう」

「お前が誰だかは知らないが、地球を巻き込むというなら許してはおけない」

ドクター・ライチーがバリアを纏ったまま突進し、悟飯はビーデルを抱えて飛ぶ。そして無防備な怨念の科学者の背へ、気功波を叩きこんだ。

「地球に移住しましても一生懸命に……」

「ビッグバンアタック！」

「うっ、う、うわあああああああ!!」

全く見覚えのない敵を気弾で消し飛ばし、ベジータはつまらなそうに残りの敵を見る。

ヘラー一族にフリーザ軍、スラッグ配下の魔族にガーリック親子。そしてレッドリボン軍にパラガス、宇宙のならず者達。

ついでに、過去の地球の圧政者と思われる軍人達とピッコロ大魔王の生み出したタンバリンにシンバル、ピアノとドラム。

どうやら完全に外れを引いてしまったらしい。ものの見事に雑魚しかない。

ベジータは舌打ちをし、苛立ち紛れに両手を広げる。

こんな雑魚共など相手するだけで面倒だ。さっさと始末してもっと強力な敵を探

すべきだろう。

「消えろ雑魚共！ ファイナルフラッシュ！」

地獄から蘇ろうが雑魚は雑魚だ。今のベジータと戦えるわけもない。

折角舞い戻ってきた懐かしの面々は抵抗すら出来ずにベジータの放った気功波に飲み込まれて呆気なく消滅を迎えた。

それを見届け、ベジータは一際巨大な氣の方向へと視線を向ける。

「この氣は……カカロットとブロリーか。」

丁度いい。あの時の屈辱を返してやるぜ」

「ぶるわあああ！」

「滅せよ！」

神殿上空で二人の人外が目まぐるしく攻防を繰り返す。

それは神殿を守りながら各地の援護をしていたセルと、神殿を強襲した怨念装置ハッチヒャックの二人だ。

かつてはリゼットに消し飛ばされてしまったハッチヒャックだが、その強さは今

のセルとも戦いが成立するレベルだ。

思いがけぬ素晴らしい敵の出現にセルは自然と頬が緩み、ハッチヒャックの猛攻を楽しそうに受け流していた。

「サイヤ人は皆殺しだ！」

「ふん、私の中のサイヤ人の細胞に反応しているようだな」

ハッチヒャックの猛攻を全て避け、左右に身体を振りながら軽快に拳を見切る。隙を突いて蹴りを放ち、飛んでいくハッチヒャックへ追いついて拳と蹴りの連打

！

ガードの上から体力を削り、背後に回って背中へ気弾を直撃させた。

「ぬうう……！」

ハッチヒャックが腕をクロスさせ、気を急激に高める。

彼の最大技であるリベンジャーカノンの構えだ。

絶大な威力こそ有しているが発射までに15秒の時間を要し、タイミングさえ分かれば避け易いという致命的な弱点を抱えた技でもある。

だがセルはあえてその弱点を突かなかった。

むしろ与えられた15秒の時間を己の気を高める事に使い、正面からの迎撃を選択したのだ。

両手を組み合わせて気を圧縮し、充分な気の練りを経て太陽系ごと消し飛ばす程の一撃へと昇華させる。

更に本来は欠陥変身であるはずの筋肉の誇大化を行い、この瞬間のみと限定してパワーのみを急増させた。

「リベンジャーカノン！」

「MAXパワーかめはめ波！」

二つの超エネルギーが成層圏で衝突し、空間すらも歪めながら押し合いを続ける。だがセルは不敵に笑うと、敵であるハッチヒャックへと称賛と賛辞の言葉を贈った。

「ふふふ。正直、ここまで楽しめるとは思わなかったぞ。

実に素晴らしい戦いだっただけ……礼を言おう」

セルのかめはめ波が勢いを増し、リベンジャーカノンを押し返す。

ハッチヒャックも何とか堪えようとするが悲しいかな、機械の限界だ。

今ある戦力以上のものは發揮出来ない。

「さらばだ！　微塵に碎けろおお！」

「ば、馬鹿なあああ!!」

青白い光の奔流がりベンジャーカノンごとハッチヒャックを飲み込み、宇宙へと飛んだ。

そしてそれが終わった時には、封印によって暗くなった空があるのみであり、セルは満足そうな顔で神殿へと戻って行った。

「お前等、食べちゃお」

「ひいいい！」

「た、助け……」

「ケーキになっちゃえ！」

神殿には何人か魔族が乗り込んできていた。

何らかの方法で神殿のバリアを突破してきたのだろう彼等は、しかしその先にこそ地獄が待ち構えている事を知らなかった。

ほとんどの者は魔人ブウのおやつ光線の餌食となり、逃げようとする者はゴッド

ガードンやポポ、人参化によって次々と始末されている。

この神殿に乗り込んだ時点で彼らに許された道はたったの二つ。

魔人ブウに食べられて死ぬか、他の誰かに殺されて死ぬかだ。

司令塔であるこの場所を叩けば何とかなるとでも思ったのだろうか？

とんでもない話だ。宇宙随一の魔境である地球において、その司令塔である神殿が安全であるはずがない。

ここもまた魔境……地獄から蘇った悪党共に逃げ場など存在しないのだ。

・書く事がないので、知らない人の為にアニオリのキャラ紹介でもしておきます。

【パイクーハン】

アニメオリジナルキャラクター。

あの世一武道会編で初登場し、セルをたったの2発でKOして視聴者の度肝を抜いた。

普段は重装備を付けており、悟空には「ピッコロみてえな奴」と言われた

しかし重装備ありの状態でセルを瞬殺した割に、それより弱いはずの当時の悟空相手に重装備を脱いだり、その挙句に負けたりと強さの振れ幅が大きすぎる男。

ヤムチャに負けたオリブーと互角だった時もあり、今日の運勢のように強さがコロコロと変わる。

必殺技のサンダーフラッシュは隙のない技と言われているが、撃つ前にダンスのような無駄な動き（直立↓しゃがんで右膝の前に左腕を置く↓立ち上がり、今度は左膝の前に右腕を置く↓そこから右手で地面を薙ぐようにしつつゆっくり立ち、腕を後ろに回したアバンスフラッシュのような構えを取る）を入れてつつポーズを取り、溜めの後に腕をクロスし、両手を突き出して両拳をぶつけてサンダーフラッシュと叫びながら炎を出すという矛盾塊のような技。

【オリブー】

あの世一武道会でパイカーハン相手に善戦をした男。

セルを瞬殺したパイカーハン相手に善戦をした事からセル以上と言われるが、一方でヤムチャに圧倒されたりと強さにムラがありすぎる。

もしかしたら、ヤムチャと戦っていたのはオリブーの双子の弟のオリブーだった

の
か
も
し
れ
な
い。
。

第七十九話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ④

「すっ、すごい！ 素晴らしいパワーですよりゼットさん！

これならばあの化物にも絶対に勝てます！」

場所は変わって界王神界。

精神と時の部屋から再びこの場所を訪れたリゼットのパワーアップに界王神は感激を露わにしていた。

15代前の界王神によって潜在能力を限界以上に引き出されて大きく力を増した今、リゼットの力は超サイヤ人3の孫悟空すらも上回っている。

リゼットは確かめるように自らの掌を見詰め、先ほど界王神が投げたカッチン鋼の前へと行く。

そして掌底を一撃。すると衝撃がカッチン鋼を貫通し、リゼットが触れたのと逆側からカッチン鋼が爆ぜた。

その光景に界王神とキビトが顎を外したかのように顔を驚愕に歪め、老界王神もまた目を丸くしている。

だが一番驚いているのは他でもないリゼット本人だ。

自分で自分の強さが信じられない。今までにもパワーアップは何度かあったが、今回はそんなものとは比べ物にならなかった。

しかも、これで全くの消耗なしというのが素晴らしい。

今までリゼットは、バーストリミットを使う事で無理矢理に超サイヤ人達の領域へと入っていた。

だがこの潜在能力解放はバーストリミットのような負担が一切ない。あくまで自然体のままに、この超パワーを発揮する事が出来るのだ。

……とはいえ、油断と慢心は禁物だ。

強さに酔いかけていた心を平常に戻し、己を律する。

「へっへっへ、ど、どうじゃ、凄いじゃろ？」

これでもよく、儂の力より凄い奴等がいると思うか？」

「……いいえ。確かに界王神様の仰る通りです。

これは、最長老様やバビディの術とはまるで次元が違います」

「そうじゃろそうじゃろ。わかつとるじゃないか」

これならば勝てる。

相手が誰だろうと負けるはずがない。

私は今、究極のパワーを……いや、これは負けフラグか。

ともかく、そう自惚れてしまいそうになるほど、効果は劇的であった。

そして同時に心底、原作の悟飯を勿体無く思ってしまう。

これほどの力を、彼はGTの時代になる頃には失ってしまったのか、と。

「んでよく。お礼はちょっと乳や尻を触らせてくれればよく」

「それでは行って参ります」

老界王神が何か言っていたが、それをあえて聞こえなかった事にしてリゼットは転移した。

パワーアップの為とはいえ、随分ジャンバを放置してしまった。

地球は封印しているからほとんど被害は抑えられているだろうが、それでも宇宙の星々のいくつかはこの事件で被害を被っているだろう。

ならばこそ、これ以上事態を伸ばすわけにはいかない。

ここで早急に、片を付ける。

その決意を新たにし、リゼットは再び閻魔宮へと帰還した。

まず最初に視界に映ったのは全身輝だらけになったジャネンバであり、どうやらクウラはかなり奮戦してくれたらしい。

だがそのクウラの姿はなく、ジャネンバはまるで玩具で遊ぶようにパイクーハンをあちこちにぶつけて遊んでいた。

どうやら本当に危ない所だったようだ。もう少しリゼットの到着が遅れていたならばパイクーハンは一掃されていただろう。

リゼットは速度を上げ、まずはパイクーハンを救出すべく亜光速でジャネンバの右腕の横を通過し、光の翼で腕を切断した。

それから旋回。

念力でパイクーハンをゆっくりと付近の水晶に降ろしながら、自らは亜光速でジャネンバへと突撃した。

バリアを纏っての光の突撃——要はただの体当たりだ。

だがそれだけの攻撃も今の彼女が使うならば強力無比。ジャネンバは相手の攻撃を先読みする力を持つ。

リゼットのように空間と空間を繋げて防御や攻撃に活かせる。

だがそのどちらにも使う暇すらなく、身体をひしゃげさせながら吹き飛んだ。

「ジャンンバァァ!!」

いくつもの水晶に衝突し、砕き、巻き込みながらジャンンバは悲鳴をあげて飛んで行く。

いかに先を読もうが対応出来ない速度では何の意味もない。

やがて失速し、墜落したジャンンバが落ちた先は地獄だ。

そこもまた空間が歪み、地獄とは思えぬファンシーな光景となってしまうている。

だがそれを為したジャンンバも今は狩られる側だ。

ひしゃげた身体を戻す事も出来ずに地面に激突し、そのまま彼は腕をパタリと落とした。

しかしここからがジャンンバの本領発揮だ。

リゼットによってひしゃげた部分を中心にジャンンバの肉が収束し、あれほどの巨体が人間サイズにまで圧縮されていく。

身体の色は黄色から赤へ。

その顔つきは先ほどまでのゆるキャラのような顔ではなく、鋭利で凶悪な悪魔のような顔へ。

灰色と赤の二色で構成された身体は今までの愚鈍そうな外見とはうって変わり、一つの機能美すらも感じさせた。

更に気も凶悪に、より巨大なものとなり以前までのリゼットであれば恐ろしいと感じただろう。

否、恐ろしいどころではない。ほとんど勝ち目がないほど、絶大な気だ。

これでは超サイヤ人3の悟空ですら敗れるのも頷く他ない。

だがそれを前にして尚リゼットの表情は涼しいものであった。

同時にその光景を界王神界から水晶で眺めていた老界王神が小さく、しかし力強く断言する。

——「リゼットの勝ちじゃ」と。

「ウガアアア！」

ジャンンバが獣染みた雄叫びを発してリゼットへと突撃した。

だが遅い。圧倒的に速いはずのその動きすら今の彼女にとっては愚鈍に過ぎる。

軽く腕を振るうだけで風が起こり、次の瞬間ジャンバの身体を幾重もの衝撃が貫いた。

視認すら許さない速度で以て、一瞬の間にジャンバの身体を滅多打ちにしたのだ。

「ウ、ウ、ウガァァ！」

ジャンバの身体がパズルのピースのように分解した。

リゼットはその技を興味深そうに見るも、佇まいに変化はない。

身体を再構築しながらジャンバがリゼットの背後を取り、奇襲を仕掛ける。

だが彼の拳がリゼットの背に触れるか触れないかという所でリゼットが廻った。肌に拳が触れたのを感じてから時間にして刹那。コンマ一秒よりも短い間に攻撃を感知し、後の先を取ったのだ。

そしてジャンバの拳を右手で掴みながら、左手で指突！

ジャンバの喉を貫き、更に指を曲げて引き抜く事で喉仏を切断した。

だがやはり悪の気の集合体。人間ならば終わりの攻撃も終わりではなく、引き裂いた喉からも血は流れない。

「……ウウウウアアアア!!」

そして、喉が飾りである事を証明するかのようにジャネンバが三度咆哮した。この分だと心臓や脳に当たる部位を破壊しても変わらないだろう。

ならばやはりジャネンバを倒す方法の一つ。

圧倒的な気の力を以て完全に消し去ってしまうのみ。

ジャネンバが地面に落ちていた棍棒を拾って剣へと変え、リゼットへと切りかかる。

超サイヤ人3の肉体すら切り裂き、空間すらも寸断する魔の刃。

だがその剣先がリゼットへ当たる直前にリゼットもまた腕を薙いでいた。

気によって生み出した白刃が煌き、ジャネンバの剣が腕ごと地面へと落下する。

何の技術もなく、ただ振り回すだけの剣などリゼットには届かない。

いや、それどころかむしろ逆。素手よりやりやすい。

何故なら剣を手にした敵は、剣しか使わないから。

攻撃が限定される分、素手よりも遥かに読み易い。

無論それを逆手に取った戦法は有効だ。

リゼットは手本を見せるように剣を振りかぶり、ジャンバの注意が剣に向いた瞬間に彼の足を切断した。

それを為したのは、無駄に長い髪の毛だ。

気を通し、念力で操った髪を刃に変えて足元がお留守になっていた彼の足を切断してみせたのだ。

地面に崩れ落ちたジャンバは歯を食い縛り、憎悪の視線でリゼットを睨んだ。

「アアアアアア!!」

牙を剥き出しにして、足を再構築しながら捨て身の突撃。

だがリゼットは尚も揺らない。

静かに、だがまるで過程でも飛ばしたかのように一瞬で両手の掌を胸の前で構えた。

掌と掌の間には純白の光球が一つだけ生成され、辺りを淡く照らす。

「――Sparking」

炸裂の名を与えた彼女の持つ技の一つ。

彼女の切り札の一つにこの上位技に当たるスパーク・メテオがあるが今回使

うのはそれではない。

ただの圧縮した気弾であり、それだけで充分だ。

解き放った気弾が回避すらも許さずにジャネンバの胸へと命中し、光が彼の胸の内へと吸い込まれる。

すると胸の部分にぽっかりと孔が開き、更にそこから光が溢れて孔を内部から広げて行く。

——そして炸裂。

光が爆ぜ、内側からジャネンバの身体を吹き飛ばした。

彼の肉片がボトボトと地面に落下し、それらはやがて跡形もなく消滅してしまう。悪の気の塊であるジャネンバにとって、怨念などの悪の気を浄化してしまうリゼットの気は致死毒にも等しい。

かつてドクター・ライチーがその憎悪ごと浄化されてしまったように……否、それ以上に。

神の気によりジャネンバを形作っていた悪の気は残滓すらも残さず浄化され、消滅してしまったのだ。

更にリゼットは目を閉じ、自身を抱きしめるように腕を回す。

そして僅かの間の後に両手を広げ、あの世全域、全方位へと向けて気を放出した。するとどうだろう。彼女の気が触れた箇所から順に、変化していたあの世の景色が正常化していき元の景観を取り戻していく。

水晶も触れたそばから消失し、更に傷付き倒れた戦士達は傷が癒えて何事かと辺りを見回している。

あの世の至る箇所へと散った悪の気が全て浄化され、清浄な気で包まれる様はまさに神話の１ページ。

その光景を目の当たりにしたパイクーハンは思わず「奇跡だ」と呟き、水晶で眺めていた界王神は「これが……神の力！」と感動していた。

尚、そのすぐ後に「お前が界王神じゃろ」と老界王神に叩かれたようだ。

「ふう……」

あの世の浄化を終え、改めてリゼットは自分の手を見る。

自分のものとは思えない凄まじい力だ。

少し力を出ただけで、あのジャンバすらあっさり倒せてしまった。

今回の戦いでリゼットが発揮した力は全力の半分にも満たないものであり、リゼットにはまだ疲れすらないのだ。

そもそも切り札をこの戦いで一つとして切っていない。行った攻撃も全て小手調べのような攻撃ばかりだ。

勿論相性がよかったというのはある。

悪の気の集合体であるジャネンバに対し、それを浄化してしまうリゼットは戦う前から相性で優劣が付いていた。

だがそれがなかったとしても、恐らく50%未満の力で容易く勝ててしまっただろう。

これが老界王神の潜在能力完全解放。超サイヤ人にも匹敵する究極のパワーアップ。

後の出来事になるが、GTで悟空が『俺も驚いてるんだ。自分のあまりの強さによ』と言っていた気持ちが理解出来る。

後は、既に復活してしまった悪党達だが……大丈夫。地球には悟空がいる。きつとあちらも、勝利しているはずだ。そうリゼットは信じていた。

「そうだ、それでいい……それでこそ殺し甲斐がある」

リゼットの戦いを、上から観戦していた男がいた。

それは全身が激しく傷付いたクウラだ。

彼とジャンンバの戦いはどちらが勝ったわけでも負けたわけでもなく、リゼットが開いたゲートを見たクウラが潮時と判断して退いたことで終わりを迎えていた。少し撤退が早かった気もするが、そうでもしなければ自分は今頃憎しみを抑えきれずにリゼットに向かっていただろうという確信がある。

「そうでなくては、この俺の気が収まらん」

自分に二度も勝ったのだから強くあるべきだ。

そんな勝手な想いをクウラはリゼットに抱いていた。

弱者である事は許さない。誰かに負ける事も許さない。

高みで在れ。誰よりも強く在れ。

その上で、更に強くなった自分があの女を殺す。

そうする事で初めて彼は『最強』に戻れるのだ。

「精々束の間の平和と勝利を享受しているがいい。いつか俺が、再び貴様の前に現れるその時まで……」

その言葉を最後に、クウラは魂となって地獄へと引き戻された。

復讐の時は、今ではない。

だが……いずれは。

【戦闘力】

・ジャネンバ…1000億

第二形態…2400億

・その後のサイケ鬼

サイケ鬼「もつとだ……もつと俺を罵ってくれオニ……」。

もつとゴミを見るような目で！ もつと激しく罵倒してくれオニ！」

閻魔「……………」

第八十話 復活のフュージョン!! 悟空とベジータ⑤

それはリゼットがジャンバを倒す前の事。

地球では一人の戦士が新たな転機を迎えようとしていた。

地獄から蘇ってきた悪党達をあらかた片付け、残る敵はブロリーだけとなった事に気付いたピッコロは、しかしすぐに悟空の所へは向かわなかった。

悔しいが、今の自分が行ってもブロリーの前では大して役に立てるとは思わなかったからだ。

ならば悟空に任せておけばいいのかと言えば、それも違う。

あの怪物は悟空と戦っている今も気が増大し続けており、このままでは近いうちに新たな領域へ……悟空と同じ超サイヤ人3の世界へ辿り着いてしまうだろう。

そうなれば地球は終わりだ。誰もあの悪魔を止められない。

だからパワーが必要だとピッコロは考えた。

超サイヤ人3の悟空のような……いや、それすらも上回る究極のパワーが。

故に彼は、精神と時の部屋を訪れていた。

彼にとって幸運だったのは、リゼットとは入れ違いになっていた事か。

今からピッコロがやろうとしている事を、もしもリゼットが知ったらあまりいい顔はしなかっただろう。

精神と時の部屋へ踏み込んだピッコロはそのまま、無造作に置かれていた一つの小瓶を手にとって蓋を開けた。

これはかつてリゼットが封印した、とある戦士が封じ込められた小瓶だ。

そして中に入っていたのは——ピッコロの父である、先代のピッコロ大魔王であつた。

「貴様がピッコロ大魔王か」

「お前は……そうか。お前が我が子か」

対峙する二人のピッコロ大魔王。

実力差は語るまでもないほどに圧倒的で、しかし威厳では決して見劣りしていない。

曲がりなりにも、かつて地球を恐怖で染め上げた大魔王という事か。

大魔王は険しい顔で我が子を見詰め、やがて言葉を発した。

「我が子よ。あれから世界はどうなった？

魔族が支配する世界を迎え、私を解放しに来た……ようには見えんが」

「フン。当然の話ではあるが、貴様の時間はあの時に止まったままのようだな。未だに世界征服などという小さな事に囚われているか」

「……何？」

悲願であった世界征服を小さいと言い切られ、大魔王が困惑の表情を浮かべる。そんな彼の前でピッコロは気を軽く解放し、スケールの違いを見せつけた。

その差は最早蟻と恐竜……どころの話ではない。

蟻と星ほどにまで力の差が広がってしまったている。

大魔王は全力で爆力魔波を撃ったとして、精々都市を一つ消すのが精々だろう。だが今のピッコロはその気になれば太陽系そのものすら消してしまえるのだ。

「戦いは変わった。今や地球は貴様が魔王を名乗っていた時と違い、宇宙で一番強い奴等が集まる場所となっている。

そして俺も、世界征服などというちっぽけな目的を果たすよりも、この星で一番強い奴になりたい……と思うようになった」

「それが私を解放した理由か。私と融合をして更なるパワーを得ると……そういうわけか」

「融合ではない。貴様は俺がスーパー・パワーを得るための切っ掛けに過ぎん」
「何とふてぶてしい。だがそれでこそ……とも言える」

大魔王は笑い、ピッコロを見た。

そして思う。自分が今まで生きてきた世界の何と小さかった事かと。

しかし息子はそんな世界でこれだけの強さを得て、更に上に行こうとしている。それが少しだけ嬉しくもあった。

「よからう……どのみち私の夢はお前に託したのだ。

今の私は力を失った抜け殻に過ぎん。抵抗など最初から出来ぬ」

「物分かりがいいな」

「だが気を付けろよ？ 温い精神ならば私が内部から乗っ取ってしまうぞ」

「ほざけ。やれるならやってみろ」

二人の大魔王は互いを試すように笑う。

それは利害の一致であった。

ピッコロは強大なパワーを得る切っ掛けとして大魔王を必要とし、大魔王は自分では出来ない夢を果たすための存在としてピッコロとの同化に頷く。

融合した後の息子が自分の影響を受けて世界を支配すればそれでよし。

違う道に進んでも、ピッコロ大魔王の偉大なる名と強さを知らしめることが出来る。

何より息子は、もう一人の自分と呼んでもいい存在……あの世を介さずに生み出した自分自身の生まれ変わりなのだ。

ならば彼の選択は自分の選択も同然である。

今ここにいる自分など、大魔王の残滓ではない。

故に大魔王は笑って同化を受け入れた。

「私と同化し、真のピッコロ大魔王となったお前がどのような生きるか……お前の中から見させて貰うぞ」

閃光が精神と時の部屋を照らす。

そしてそれが終わった時、そこにはピッコロ一人だけが立っていた。

★

地球での悟空とブロリーの戦いは新たな展開を迎えていた。

先程まではかろうじて互角だった戦いの天秤がブロリーに傾き始めたのだ。

戦えば戦うほどに力を増す。それがブロリーだ。

その彼の無限の可能性が、超サイヤ人3の悟空ですら手に負えなくなり始めた。

「オオオオッ!」

ブロリーが悟空を蹴り飛ばし、山に衝突した彼に追いついて拳を叩き込む。

かろうじてこれを防御するも山の反対側を突き破って悟空が吹き飛び、その後を追ってブロリーが飛び出した。

悟空もすぐに体勢を立て直して両手に気を集め、ブロリーへ狙いを定める。

「波アー!」

かめはめ波の青白い輝きが一直線にブロリーへ突き進み、彼の身体を飲み込んだ。惑星すら容易く破壊してのける一撃。

しかしそれを浴びたブロリーは煙の中で吠え、更に強い閃光で己の身を包む。

あの時は間一髪で届かなかった領域がある。

だが届かなかっただけで、近付いた経験は彼の中で生きていた。

故に彼はあの時届かなかった世界へと手をかけ、更なる伝説へと至る。

「オオオオオオオオッ！」

ブロリーの目や口から光が噴き出し、まるで内側から爆発するように気が弾けた。世界の色が一瞬変わったと思えば、色が変わった世界がまるで彼に収束するように気が集まり、それを何度か繰り返す。

その果てに煙の中から現れたのは——先程までのブロリーではなかった。

隆起した眼窩上。腰まで伸びた、緑がかった金髪。

更に膨張し強固さを増した筋肉に、正気を感じさせない白眼。そして己の強さへの絶対の自信を漲らせる凶相。

——超サイヤ人3。

とうとうブロリーが、悟空と同じ領域にまで足を踏み入れてしまった。

「フフフ……なんなんだあ？　今のはあ？」

悟空のかめはめ波すら、もうダメージにはならない。

スパークを迸らせながらブロリーが飛び、悟空へ襲い掛かる。

悟空も何とかこれを迎え撃とうとするが、力の差が開きすぎてしまった。

ガードの上から剛腕が叩き込まれ、いくつもの岩山を貫きながら悟空が吹き飛ぶ。ブロリーはすぐにその真上に追いつき、足から急降下して悟空を踏みつけた。

「ぐあああっ!」

悟空の叫びが木霊し、更に畳みかけるようにブロリーが浮上……再度悟空を踏みつけた。

三度……四度……踏む毎に地面が陥没して悟空の叫びが響き、勝利を確信したブロリーが手の中に気弾を生み出す。

それを見ながら悟空は右拳にありったけの力を込めて立ち上がった。

——龍拳。かつて一度はブロリーに勝利した悟空の切り札だ。

彼を倒すには、もうこの技を当てる以外に方法がない。

インパクトの瞬間に大猿のパワーを解放して叩き込むこの技ならば、今のブロリー相手でも通じるはずだ。

「この一撃に懸けるしかねえ……!」

「スローインググブラスター!」

悟空が右拳を掲げ、黄金の龍が立ち昇った。

それを迎撃するようにブロリーが気弾を発射し、黄金の龍にぶつかりと同時に気弾が巨大化していく。

均衡の最中、ブロリーが畳みかけるように気弾を連射して前の気弾にぶつける
と、悟空とぶつかっている気弾がますます巨大化して悟空を襲った。

だがそれでも悟空は最後の気力を振り絞って気を爆発させ、気弾を貫く。

「龍拳……爆発！」

「ぬおおっ!？」

咄嗟にガードしたブロリーの腕の上から龍拳が叩き込まれた。

荒れ狂う龍がブロリーを圧倒し、その巨体を後ろへ後ろへと運んでいく。

地面を削りながらブロリーが押し込まれ、元々立っていた場所から100mも運ばれる。

ブロリーの足が地面に二本の線を刻み——そして、その先で龍は止まっていた。

「……ふ、フフフ……フハハハハ！」

カカロットォ……それで全力かあ？」

「く……くそつたれめ……」

多少のダメージは与えた。傷は刻んだ。

だがそれだけだ。

悟空渾身の龍拳はブロリーのガードを貫けず、その威力を完全に殺されてしまっていた。

スローイングブラスターを突破するのに力を使い過ぎたのだ。

だから、龍拳にはもうブロリーを倒すだけの力が残されていなかった。

ブロリーは悟空の頭を掴むと、彼の顎にアッパーを叩き込む。

既に龍拳で気を使い果たしていた悟空はその一撃で壊れた人形のように宙を舞い、地面へと落下した。

「よく頑張ったがとうとう終わりの時が来たようだな。

カカロット……今度こそ死ぬがいい!」

ブロリーの手から気弾が放たれた。

だがそれが悟空に着弾する寸前に横から飛んできた気弾が悟空の近くで爆発して彼を吹き飛ばす。

結果としてそれが悟空を救う形になり、ブロリーの気弾は空振りに終わってしまった。

あと一步で止めを刺せたものを……そう思いながらブロリーが邪魔者へ視線を向ける。

するとそこにいたのは、腕を組んで立つベジータであった。

「べ、ベジータ……すまねえ。助かったぞ」

「勘違いするなカカロット。俺は貴様を助けたわけじゃない。

貴様を殺すのはサイヤ人の王子であるこのベジータだ」

悟空からの礼を不愛想に切り捨て、ベジータが超サイヤ人2へと変身した。

そしてブロリーへと飛び掛かり、アッパーを放つ。

それをブロリーは軽々と避けるが、ベジータはすぐさま空中で回転して勢いを付けた蹴りをブロリーの肩へ叩き込んだ。

「はあ！」

更に地面に着地すると同時に踏み碎き、速度を乗せた拳を顎へめり込ませた。

……が、ノーダメージ。

ブロリーの巨体を揺らす事すら出来ず、ブロリーの笑みすら崩れていない。

それを見てベジータの心に僅かな弱気が宿り、距離を取っての戦いへと無意識に移行してしまう。

まるで逃げるように後ろへ跳びながら気弾を牽制として放つもまるで効かずにブロリーは前進し、やがてベジータの抵抗にも飽きたのか彼の首にラリアットを叩き込んで、その先にあった岩盤へとめり込ませた。

「ぐっ……お、俺を……あの時と同じと思うな！」

だがベジータにも意地がある。

ブロリーの腕と岩盤の僅かな隙間から強引に首を外し、息も絶え絶えに着地する。それから果敢に挑み、ブロリーの厚い胸板へと拳の連打を放った。

「だあああ！　だだだだだッ！」

しかしこれもまるで効いていない。

ブロリーはベジータの身体を軽々と掴むと持ち上げ、ベジータの背中を己の膝へと強烈に打ち付けた。

それからベジータを投げ飛ばし、悟空の隣へと叩きつける。

何とか立ち上がろうとするベジータだが、身体が言う事を聞かない。

「……………くっそおお……お、俺はまだ奴に……勝てないというのか……」

「ベジータ……こ、こうなったらフュージョンしかねえ……」

ベジータは屈辱に戦慄き、悔しさの余りその目には涙すら滲んでいた。

そんな彼へと悟空が声をかける。

ベジータがここに来てくれたのは、悟空にとって幸いだった。

ベジータとならば、あの方法が使えるかもしれない。

いや、あれ以外にもう勝機はないだろう。

そう考えたのだ。

「フ、フュージョン？　なんだ、それは……」

「へへ、前に組手をした時に、もしもの時の切り札として神様が教えてくれた合体さ。二人が一人に合体して、すげえ戦士になれるんだ。

一度ポポと人参化でやってみてくれたんだけどよ、合体したらとんでもねえ強さになったんだぜ」

「ふ、ふざけるな……貴様と合体など、死んでもごめんだ」

ベジータにはプライドがある。

いつかは悟空を超えたいという目標もある。

その目標である悟空と融合するなど、彼のプライドが許す事ではない。

だが今は意地を張っている場合ではないのだ。

ブロリーは二人を追いつめるように歩き、もうすぐそこまで来ている。

「フッフ……二人仲良く死ぬがいい」

そしていよいよ止めを刺そうと拳を振り上げた。

だがそこに近づく気配を感じ、ブロリーが顔をあげる。

今のブロリーは並大抵の相手は敵にならない。

その彼が僅かながら脅威と認識し、悟空への止めすら後回しにして反応したのだ。

悟空とベジータも突然現れた巨大な気に驚き、顔をあげる。

果たしてそこにいたのは、以前とは比べものにならないほどの気を纏ったピッコロであった。

「ピ、ピッコロ……なのか？」

「な、なんだ？ 何をした？ 何故突然それほどの力を……」

マントをなびかせ、ブロリーを見下ろすピッコロからは超サイヤ人3となった悟空にも匹敵する力強さが溢れている。

確かにピッコロは今でも地球トップクラスの戦士であるが、それでも昨日まではここまで凄まじくなかったはずだ。

あまりの気の違いに別人とすら思わされてしまう。それだけの膨大な気を今のピッコロは備えていた。

彼はマントとターバンを外すとブロリーの前に着地し、そして倒れている二人を見る。

「孫、ここは俺が引き受ける。」

お前はさっさとフュージョンとやらを完成させてしまえ」

そう言い、二人に仙豆を投げ渡すとブロリーへ向き直り、一気に気を解放した。その圧力に一瞬ブロリーが警戒を見せるが、すぐに余裕の笑みへと戻る。

「フン……何匹来ようが同じ事だ。纏めて血祭りにあげてやる」

「ほう？　だったら俺達に参加しても構わねえよな？」

ブロリーの言葉に答えたのはピッコロではなかった。

今の台詞を口にしたのは、空で腕を組んでいるターレスだ。

その背後にはクラッシャー軍団を従え、ふてぶてしく笑っている。

更にブロリーの背後にセルが着地し、右には魔人ブウ、左にはナッパが降り立った。

宇宙にも轟く地球の戦士達の集結……だが、それを前にしてもブロリーに動揺はない。

虫けらが1匹から数匹に増えた。ただそれだけの事でしかないのだから。

「雑魚共が……死にに來たか」

「化け物め。そう上手くいくと思うなよ」

そしてピッコロとブロリーが正面から激突し、衝撃波が拡散した。

それと同時にターレス達も攻撃に加わり、悟空はベジータを連れて瞬間移動をした。

離れた場所でフュージョンをするのだろう。

ならばここでの戦いは、彼等が合体を終えるまでの時間稼ぎだ。

「てやあああッ！」

ピッコロがブロリーへ怒涛の攻めを放ち、彼の身体を僅かずつではあるが後退させる。

一発一発、その全てが全力だ。体力の配分など一切考えていない無謀な攻撃は、しかしそれだけピッコロとブロリーの差が大きい事を意味していた。

ピッコロは大魔王との融合によって確かに強くなった。

だが大魔王は元々ピッコロに自分の全てを託しており、残っていたのは搾りカスのようなものである。

例えばカタツツの子が分離した際には凄まじいパワーダウンをしたが、同じく二人になったはずのピッコロ^{マジニア}は弱体化どころか、むしろ以前より強くなっていたほどだ。

それが一つになったところで、望んだほどのパワーは得られない。

事実、今回の融合でピッコロに齎されたパワーアップは比率にすれば以前にスラッグと融合した時以下だろう。

それでも破格のパワーアップには違いないし、文句を言うのは贅沢というものだ。だがその贅沢も言いたくなるというものである。

この怪物の前では、これでもまだ足りないのだから……。

（早くしろよ、孫……ベジータ！今の俺でも長くは持たせられん！）
それでもピッコロは、一縷の勝利に懸けて決死の攻撃を続けた。

【戦闘力】

ピッコロ…11億↓70億（同化パワーアップ）

界王拳30倍…2100億

界王拳60倍…4200億

（かなり無理してこの倍率。長続きはしない）

復活ブロー…15億↓16億（悟空戦で上昇）

伝説の超サイヤ人2…3000億↓3200億

伝説の超サイヤ人3…1兆2000億↓1兆2800億

【大魔王との融合】

元々大魔王はピッコロさんに自分の全てを与えていたので、残っていた大魔王は

ただの絞りカスでしかない。

例えるならばミイラになったジョセフから無理矢理血を一滴だけ吸い上げたようなもの。

馴染む……実に馴染むが……『足りん』ッ！

それでも大幅なパワーアップにはなかったが、ネイルやスラッグと融合した時ほどの超強化は得られなかった。

（あくまでこのSSでの設定です）

【Mr・人参化】

Mr・ポポと兎人参化が合体事故を起こして生まれた戦士。

外見は兎耳が生えてサングラスをかけた白いMr・ポポ。怖い。

カリン様は手が短すぎてフュージョン出来ない。

（ポーズの際にどう考えても手が頭より上に行かない）

第八十一話 最強のフュージョン

一時的に戦場から回避した悟空とベジータは仙豆で体力を回復し、言い争っていた。

いや、言い争うというよりはベジータが一方的に怒鳴っているというのが正しいだろうか。

ベジータはたった今、フュージョンの方法とポーズを見せられた所なのだが……それがあまりにも格好悪かったのだ。

フュージョンのポーズはもはやギャグでやっているとしか思えないダサさであり、悟空が自分をからかっているのではないかとすら思ってしまう。

勿論そんなはずはなく、悟空の表情は真剣そのものだ。

「冗談じゃない！ そんなみつともない真似が出来るか！」

「そんな事言ったってよ……こういう技なんだから仕方ねえだろ」

「それに俺はまだ合体する事にも納得していない！ 誰が貴様なんかと……」

「ベジータ」

激昂するベジータとは対極に、悟空の声は落ち着き払ったものであった。

決して咎めるような声色ではない。

だが普段は滅多に聞く事のない彼の静かな声色にベジータの怒りが僅かに削がれた。

「分かってんだろ？ オラ達のどっちが戦ってもブロリーにゃ勝てねえ。

他の誰が行っても同じだ。ここであいつを止めなきゃ、地球は終わりだぞ」

「ぐ……それがどうした！ 貴様と合体するくらいなら俺は一人で戦って死を選ぶ！」

「そりゃあ一人でやれるんなら、それが一番いいさ。オラだって本音を言えばそうしてえ。

一人で好きなだけ戦って一人だけで死ぬるんなら、それも悪くねえ」

それは少しどころか大分一般人からズレた考え方だ。

サイヤ人は闘争を好む。

ならばその闘争の中で死ぬならば、それはそれで別にいいのだ。

戦士としての本懐とすら言えるだろう。

ただしそれは、死ぬのが自分だけならば……の話だ。

「けどよ、ここでオラ達が負けちまったら地球人みんなが殺されちまう。

ブルマも……トランクスもだ。おめえはそれでいいのか？」

「……ぐ」

ベジータの顔が苦悶に歪み、ブルマとトランクス……家族の笑顔が彼の脳裏を過ぎった。

気に入らなかった。

自分ともあろう者が家族を持ち、悪くない気持ちになっている。

居心地のいい地球が好きになっている。

穏やかに変わっていく自分が……そしてそれを見透かしたような悟空が、心底気に入らなかった。

「……くそつたれが！ やるんなら、さっさとやるぞ！

カカロット、早くそっちに立ちやがれ！」

「……」

ベジータが意を決し、フュージョンのポーズを取る覚悟を決めた。

だが悟空は意外にもそれに喜ぶでもなく、無言で彼を見ている。

そして驚くべき事を言い出した。

「いや、焦りすぎると失敗すんぞ。ベジータ……おめえちょっとポーズ取って見せてくれねえか？」

「何イ!? お、俺に……あのみつともないポーズを貴様の前でやれというのか!」
「ああ。おめえちゃんとポーズ覚えてんのかと思ってな。」

おめえ恥ずかしがってんだろ? けどそれじゃあ、ポーズを失敗するかもしれない
ねえ」

「貴様、ふざけてるのか!? 今は急がなくてはならないんだろが!」

「ああ、急がなきゃなんねえ。ピッコロ達もそう長い時間は戦えねえだろ。」

だからだ、ベジータ。この合体は絶対に失敗出来ねえ。フュージョンは一度合体
すると元に戻るまで30分かかったちまうんだ」

悟空は決してふざけていない。悠長に構えていない。

だが切迫した時ほど一周回って冷静になれるだけだ。

急ぐのは大事だ。ピッコロもそう長続きはしない。

しかしだからといって焦って合体して、それで失敗すれば最悪だ。30分もブローリーは待ってくれない。

だから何が何でもこの合体は一度で成功させなければならないのだ。

失敗は許されない。

だが焦った今のベジータではポーズを失敗する可能性が高い。先程の自分の説明だっちゃんと言っていていなかっただろう。

なのでまずはポーズをやらせてみる。そしてミスがあれば指摘し、その上でフュージョン本番に入るのだ。

「ほれ、やってみろベジータ。時間はねえぞ」

「く……く、く……くそつたれえええええ!!」

ベジータの叫びが木霊し……その後ベジータは、悟空の懸念通りにポーズを間違えていたので三か所ほど指摘された。

★

ピッコロの攻勢は長くは続かなかった。

今のピッコロは融合によって得た超パワーの上から界王拳60倍を用いて無理矢

理ブローに食らいついている。

だが界王拳とは元々身体への負担が大きい技だ。

いかにピッコロでも60倍は無理という他ない。今の彼がギリギリ安定して出せる出力など30倍がいい所なのだ。

そういう点で言えばリゼットの使うバーストリミットも同じなのだが、この二つには大きな差が存在している。

それはバーストリミットがリゼットの為だけにリゼット自身が編み出した専用の技であるのに対し、界王拳は界王が編み出した……元々は彼の為の技だということだ。

つまりは技と術者の親和性が違う。

バーストリミットとリゼットの相性は極めて高い。

当たり前だ。リゼット自身が自分の為に編み出した技なのだから相性がよくないはずがない。

逆に言えばリゼット以外がバーストリミットを使っても100倍などという倍率を叩き出す事は不可能だろう。

実際、カリンやMr・ポポもリゼットからこの技を伝授されているが20倍が限度であるし、今後倍率上がる可能性は低い。

そう考えればピッコロはむしろ界王拳を使いこなしていると言える。

超サイヤ人に追いつくために血の滲むような努力を重ね、身体を負担に慣らし、必死に修行を続けた。

だがそれでも30倍が限界だ。これ以上は身体がついてこない。

戦闘力をどれだけ上げても戦闘力を倍加させるというのは無茶な事であり、その倍率を増やすのは簡単な事ではない。

それを無理矢理引き上げて60倍で使っているのだから、当然負担は計り知れない。

命を削っていると言っても過言ではないだろう。

動くたびに筋繊維が断裂し、内臓を負傷し、血を吐きながらピッコロは戦っていた。

隙を見てはターレスやセルが前に出てピッコロが回復する時間を稼ぎ、その間にピッコロが仙豆を飲み込んで無理矢理戦闘を続行する。

まさに狂気の沙汰だ。常人ならば身体が壊れる痛みで動くどころではない。

こうまでしなければブロリーには追いつけない。戦いにすらならない。

それほどにブロリーは強すぎる。

だがここまで尚……ここまでやって尚だ。

——ピッコロの戦闘力は、ブロリーの三分の一程度でしかない。

ブロリーから見たピッコロは決して強敵ではない。

ただ少し手強いというだけの虫けらだ。

他よりはまだ面倒だから、潰す事を優先した……本当に、その程度の認識でしかないのだ。

そしてピッコロが命を振り絞って稼いだ時間も、まだ一分にすら達していない。

何という理不尽だろうか。何という怪物だろうか。

だがそれがブロリーなのだ。千年に一度だけ現れる伝説の超サイヤ人とは、こういう存在なのだ。

あのフリーザが恐れ、宇宙最強最悪として語り継がれてきた怪物の中の怪物。

規格外を超えた規格外。それが、この男だ。

「邪魔だ！」

「ぐおっ!？」

ブロリーの剛腕に吹き飛ばされ、ターレスが地面を転がった。

ピッコロが仙豆を食べる僅かな時間……それを稼ぐたびに仲間の内の誰かが倒れていた。

ナツパは既に（分かりにくい）超化が解けて気絶しており、クラッシャー軍団もカカオとアモンドはターレスの前に庇う様に飛び出すが、悲しいかな。力の差が

ありすぎる。

この二人では時間稼ぎすら出来ないだろう。

「馬鹿野郎、下がれ！ お前達の敵う相手だと思おうか！」

「……ンダ！」

カカオは一度ターレスに振り向いて親指を立て、アモンドも笑う。

「ターレス様……俺達がお供出来るのはここまででっせい。

一足先に、地獄に戻ってお待ちしております！」

「ンダ！」

実力が足りない。勝てない。だからどうした。

自分たちは恐れ知らずの宇宙の壊し屋クラッシャー軍団。

敵が前にいるならば、向かうだけだ。

アモンドとカカオがブロリーに突撃し、虫でも払うかのような一撃でアモンドが消し飛んだ。

続いてカカオがブロリーに組み付き——自爆。

爆炎が上がるが、当然のようにブロリーは無傷で煙の中から現れた。

「うおおおお！」

「お前、みんなをイジめるな！」

セルと魔人ブウが同時に突撃し、ブロリーへと猛攻を仕掛ける。

だがブロリーは棒立ちのまま攻撃を受けながら二人へと拳を叩き込んだ。

それだけでセルとブウが地面を転がり、ダメージを受けない魔人ブウだけが立ち上がる。

「その程度のパワーで俺に勝てる気なのか？」

包囲網が崩れた事で、ブロリーが遂に攻撃に転じた。

セルとブウを無視して突っ切った彼はピッコロの顔を掴んで、握力任せに圧を加える。

普段のピッコロならばこれで頭が潰れていただろうが、界王拳で力を高めている今ならば耐えられないほどではない。

だが少しでも緩めればそれが彼の死ぬ時だ。

長時間持続出来ない界王拳60倍を続けねば死ぬ。続けても反動に耐えきれなくなれば死ぬ。

ブロリーは仙豆の効能もピッコロが無理をしている事も分からないだろうが、しかし本能で有効な手段を理解していた。

「おのれ！」

セルと魔人ブウがピッコロを解放するべくブロリーへ攻撃を加える。

背後から蹴りを。横から拳打を。

だがブロリーはまるで見向きもせず力を含めてピッコロの頭を圧迫し、何とか逃れようと放たれる蹴りにビクともしない。

むしろその抵抗を楽しんでいる。

そしていよいよピッコロの命が尽きる——その瞬間、横から飛んできた何者かの蹴りがブロリーを吹き飛ばした。

現れたのは……この場の誰も知らない戦士だった。

逆立った金髪と生え際はベジータを思わせるが、顔立ちは悟空に近い。

服装はメタモル星人という異星人が着る独特の衣装で、ブロリーすら上回る気を放出していた。

見た事のない戦士だ。だがピッコロ達は一目で理解した。

あれこそ悟空とベジータが融合した、ブロリーを倒す地球最強の戦士の姿なのだと。

「なんなんだあ……貴様はあ……」

カカロット……ベジータ……？」

カカロットのようにあり、ベジータのようでもある。

その不可思議な戦士にブロリーが顔をしかめると、戦士は静かに己が何者かを口にした。

「俺は悟空でもベジータでもない。俺は貴様を倒す者だ！」

宣言と同時に戦士——悟空とベジータが融合してさしずめゴジータといったところだろうか。

ゴジータが黄金の光を纏ってブロリーへと挑んだ。

それに対しブロリーもすぐに応戦するが、ゴジータの拳によって空へと飛ばされてしまう。

「ぐあ!？」

それはブロリーにとって初めての経験であった。

今までの戦いのような格下の攻撃ではない。

以前の戦いの時のように格下が一瞬だけ自分を上回ったのとも違う。

生まれて初めて出会った明確な『格上』。一撃で分かる拳の重み。

今ブロリーは初めて、自分よりも強い男を前にしていた。

「ヌウウ……!」

ブロリーの顔が憤怒に染まり、ゴジータへと殴りかかった。

だがゴジータはそれを軽々と流してブロリーの胸板に拳を放り込み、更に蹴りを

二発、三発と入れる。

そのまま流れるように回転。まるで舞うように連撃へ移行して渾身の蹴りでブローを弾き飛ばした。

飛んでいくブローリーへ一瞬で追いついて尚も拳と蹴りを放ち、ブローリーの反撃を的確に防いで流す。

「ウオオオオ！」

ブローリーが攻撃されながらも構わず拳を振り下ろす。

だがゴジータの姿が煙のように消え、次の瞬間にはブローリーの背後に立っていた。

——直後。ブローリーの胸と腹がまるで殴られたかのようにへこみ、更に拳打の跡が何度も刻み込まれる。

あまりに速すぎて攻撃された事にすら気付かなかったのだ。

よろめきながらブローリーが気弾を放つが、ゴジータはもうそこにはいない。

跳躍したゴジータはブローリーの側頭部に膝蹴りを叩き込み、彼がよろめいた所でもう一度膝を叩き込む。

そのまま反動で後方宙返りを決め、普通ならばそのまま離れていくはずのところ

を舞空術との合わせ技でブロリーとの距離を詰めた。

そして空中でもう一度後方へと回転してサマーソルトキックを決め、ブロリーの顎を蹴り上げた。

そのアクロバティックな動きにブロリーはすっかり翻弄され、反撃の糸口すら掴めない。

そんな彼へと背を向けて着地し、片腕を上へ掲げた。

掌の中には虹色に輝く気弾が生み出され、そこから感じられる力にブロリーが後ずさる。

しかし敵に恐怖するなど、最強の存在である彼には許されない。

誰が許さないという話ではなく、彼自身が自分を許せないのだ。

「ウオオオオオオオッ！」

獣のように吠え、ゴジータへと突撃する。

それに合わせてゴジータが手の中の輝きを放ち、ブロリーの身体を爆発が包み込んだ。

だがそれでもまだ倒れない。まだ止まらない。

ブロリーは震える足に鞭打ち、ゴジータへと向かっていく。

それを見てゴジータも生半可な攻撃では仕留めきれないと踏み、ブロリーを仕留めべく走る。

「でやあああー！」

「オオオッ！」

ゴジータの拳がブロリーを殴り、ゴジータの足がブロリーを蹴る。

だがブロリーは確かなダメージを負いながらも反撃に転じ、ゴジータをガードの上から弾き飛ばした。

ゴジータは決して加減していない。先程までと同じだけの力で攻撃している。

だがブロリーが反撃に転じるまでの時間が明らかに短くなっていた。

もう、慣れ始めている。

ブロリーはゴジータの攻撃に、その速度に、威力に……この短時間で順応し始めているのだ。

そればかりか、ゴジータの強さに引き上げられるようにブロリーの気がますます上昇し続けていた。

ゴジータへと大股で走り、素早く横へ回り込んで来たゴジータの動きに反応して気弾を生成する。

だがそれをぶつける直前にゴジータが跳び、空中で側方回転をして反対側に着地しつつブロリーを蹴り飛ばした。

更に気弾連射。ベジータの得意技でもあるそれを放ち、ブロリーを打ちのめす。

「ぐおあああああっ！ お、おとおとおお!!」

雨あられと撃たれる気弾にブロリーが苦悶の叫びをあげ、大きくのけぞった。

だがこのまま終わらないからこそその伝説だ。

ブロリーはのけぞった姿勢で口を大きく開くと、ゴジータ目掛けて口から気功波を発射した。

それを前にゴジータはまるで怯まずに走り、跳躍して気功波を避けるとブロリーの後ろに着地して気弾を放つ。

背中を焼かれながらもブロリーは気力で膝を突く事を堪え、消えぬ闘志と執念に燃える白眼でゴジータを睨んだ。

「グウウ……カカロットオオオオオオ！」

ブロリーが気を撒き散らしながら突撃し、それにゴジータも正面から応じる。

瞬間——世界が割れた。

余りに常軌を逸脱した二人の気が空間すら破壊し、戦いの舞台が異空間へと移行した。

上も下も前も後ろもない。

現世から隔絶した、世界の裏側とも言える空間の中でゴジータとブロリーが飛び、二つの流星が何度も激突しては離れる。

「ウオオオオオ！」

「はあああッ！」

ブロリーが拳を放つ。ゴジータも負けじとブロリーを殴る。

ゴジータの拳打で殴り飛ばされたブロリーがすぐに復帰して殴り返し、ガードごと吹き飛んだゴジータが即座に体勢を立て直してブロリーを蹴る。

何度も何度も、殴っては殴られ、蹴っては蹴られ、二つの流星はまるで絡み合う様に飛び回り、打撃音が響き渡る。

「オオオオオ——ッ!!」

ブロリーの拳がゴジータを殴り飛ばし、ゴジータが吹き飛んでいく。

その後をブロリーが追いながら気弾の嵐を撃つが、ゴジータは振り返る事なく速度を上げた。

鳥が翼を畳むように腕を身体に密着させ、戦闘機のように横に回転しながら気弾の僅かな隙間を的確に通っていく。

高度を上げたゴジータを追尾して気弾が曲がり、まるで空に落ちる光の雨のような光景を作り出す。

だがその雨の僅かな隙間をゴジータが潜り抜け、ブロリーへと肉薄した。

「だああっ！」

「ガアア！」

ブロリーとゴジータの拳打が鈍くぶつかり合う。

二人は飛行速度を落とす事なく、高速で飛びながらも攻防を止めない。

殴り殴られ、蹴って蹴られ。

二人の間で何度も暴力の交換が行われ、打撃音が数十数百と響き渡る。

進化を続けるブロリーの怪物性は既に、ゴジータにすら追いつきつつあった。

しかしゴジータもまだ限界ではない。ブロリーが無限に成長するというならば、こちらだって更に上を見せるだけだ。

「はああああーッ!!」

ゴジータの全身をスパークが覆い、超サイヤ人2へと変化した。

これによって再びゴジータの強さがブロリーを上回り、加えて戦闘の経験も技術もブロリーが劣る。

力任せの拳を跳躍して避け、空中で後方宙返りしつつブロリーの顎を蹴り上げた。更に膝蹴り。ブロリーの顔に膝をめり込ませ、放たれた拳を避けて懷に潜り、拳打を腹に突き刺す。

今はまだゴジータが遙かに勝る。

だが時間をかければどうなるか分からないのがブロリーだ。

このまま戦いを続ければあるいは、この可能性の塊はゴジータすらも超えてしまうかもしれない。

普通ならばあり得ない事ではある。だがそのあり得ないを実現させてしまうのがブロリーだ。

故に時間は与えない。強くなるための間を与えずに、一気呵成に止めを刺す。その為に、苦悶に崩れたブロリーの前でゴジータは両腕を突き出して気を高めた。全身を覆う気が更に力強さを増し、可能性の怪物を完全に葬るべく超サイヤ人3へと移行する。

「これで終わりだ……ブロリー！」

——ビッグバン・かめはめ波。

ベジータの技であるビッグバンアタックと悟空の技であるかめはめ波を融合させたゴジータの切り札だ。

その一撃がブロリーに炸裂し、空間が再び砕けて元の世界へと戻った。

「ううおおあああああー！ッ!!」

ブロリーが絶叫し、咄嗟に張ったバリアごと吹き飛ばされて上空へと運ばれる。気功波は空を越え、成層圏を越え、リゼットの張った封印すらも貫いて宇宙をも越えて……やがてブロリーを母なる太陽へと押し込んだ。

偶然ではない。全て計算した上での攻撃である。

いかに最強のサイヤ人であるブロリーといえど生物だ。

熱さを感じる事もあれば寒さを感じる事もある。

気による攻撃や拳打には耐えられるかもしれない。

だが生物である以上、太陽の中心温度である1500万度に耐えられるようには出来ていない。

「ガァ、アァアァアァ！」

ブロリーが焼けていく。消えていく。

彼は間違いなく最強の才能の持ち主だった。千年に一人の逸材だった。

だがどんな最強の存在であっても、無敵ではない。

進むべき道を間違えれば、その先にあるのは破滅だけだ。

彼はどこで道を間違えたのだろうか。

もしも彼が悟空に拘らなければ……己の中の凶暴性を少しでもコントロールしようとしていたならば。

——あるいは、彼にも違った未来があつたのかもしれない。

「カ、カ、ロットオオオオオ！！！」

ビッグバンかめはめ波と太陽の熱で焼かれ、ブロリーが断末魔の叫びをあげる。

そして、やがて彼の身体は細胞一つ残さずに完全にこの世から消え去った。

ブロリーが消えていった空を見上げ、ゴジータは静かに笑う。

どんな脅威が来ても、何度復活しても……相手がどれだけ強くても。

それでもこの星を好きにはさせない。

何故ならここには守りたいものがあって、切磋琢磨出来る仲間がいるのだから。無事に平和を取り戻した地球に吹いた優しい風は、まるで戦士達へ送られた地球からの感謝の言葉のようであった。

地球「あざっす、あざっす！ マジあざっす！ ゴジータさんお疲れ様っす！
あ、もっと風吹かせましょうか!? 寒いっスか!? そうっスか！」

太陽「毎回俺に変なの押し付けるのやめーや」

【戦鬭力】

復活ブロリー…16億↓19億（ゴジータ戦で上昇）

伝説の超サイヤ人3…1兆2800億↓1兆5200億

ゴジータ…300億

超ゴジータ…1兆5000億

超ゴジータ2…3兆

超ゴジータ3…12兆

【フュージョン倍率】

このSSでは弱い方の戦闘力×60倍とします。

ゴテンクスが初めて合体した際に慢心して魔人ブウに挑んだのでノーマルのままでも単体の超サイヤ人よりは上としつつ、派手なインフレ防止の為にあまり倍率を上げたくないので60倍にしました。

Q、それだとゴテンクス弱くね？

A、原作では悟天とトランクスは精神と時の部屋で修行を積んでいますが、このSSではその修行イベントがない分弱いです。

多分原作ゴテンクスの半分くらいの強さしかないんじゃないかな……。

第八十二話 幻魔人降臨

ジャネンバを下し、あの世を正常化したりゼットは日々を過ごしながら地上を監視し続けていた。

この時期の最後にして最強の敵であるヒルデガンは魔導師ホイの登場からタピオンの復活を経由して登場する。

つまり逆に言えば早急に魔導師ホイさえ消してしまえば戦うのは下半身だけで済むわけだ。

実際未来ではドラゴンボールがない為にタピオンの封印を解く事も出来ずにヒルデガンの下半身のみが現われたという。

そしてホイの行動は予測可能だ。

彼はヒルデガンを完全に復活させたい。つまりその為には勇者タピオンを復活させなければならず、その方法として神龍を求めるのは簡単に予測出来る事だ。

ならば後は神龍と関係のある悟空達の誰かに接触を図ってくるだろう。

リゼットはそこを狙ってホイを消してしまえばいい。

そして彼女の予想通りホイは姿を現した。

何やら死んでやるだの何だの喚きながら地球の高層建築物の一つであるランドセルタワーにしがみつき、グレートサイヤマンの到着を待っているようだ。

だがわざわざ彼に合わせてやる必要などどこにもない。

リゼットはまず彼の心を読み、原作通りの悪党である事を確認してからホイに念力をかけて地面へと急降下させて墜落死させた。

傍から見れば馬鹿な爺さんが勝手にタワーに登って勝手に落ちて勝手に死んだようにしか見えないだろう。これならば悪戯に人々の不安を煽る事もない。

まあ、R-18Gなジャムと化してしまったホイを間近で見ってしまった人には少し気の毒な事をしたかもしれないが……。

「これで後はヒルデガーンの下半身を倒すだけですな」

「味方ながら時々貴女が恐ろしくなるよ、私は」

セルの呆れたような言葉を聞き流しながら亜空間に手を入れ、ホイが隠し持っていたオルゴールを回収した。

とりあえず下半身を倒してしまうまでオルゴールはどこか別の次元に隔離して下

半身と共鳴しないようにするつもりだ。

神龍を使つての復活は阻止したが、もしかしたら下半身との共鳴だけでオルゴールが壊れてタピオンとヒルデガーンの上半身が出て来てしまふ可能性もなくはない。

劇場版ではブルマの造ったオルゴールが何の効果も發揮せずにヒルデガーンが蘇ってしまったが、あれも共鳴のせいだろう。恐らくブルマの造ったオルゴールに問題はない。

ならば下半身をどうにかするまでは隔離しておかなければ復活の恐れがあるのだ。

「……！」

だがオルゴールを手にしたリゼットの顔が驚愕に染まった。

まだ何もしていないのに、既にオルゴールが動いていたのだ。

取っ手の部分がゆっくりと回転しながらもの悲しいメロディを奏でている。

それと同時に強い気が溢れ、風が巻き起こった。

「封印が解けようとしている？ これは、一体……？」

タピオンの封印は力づくで解けるものではない。

魔術的な要素が絡む特殊なもので、この地球でこれを神龍なしで解ける人物などそれこそリゼットくらいのもだろう。

無論リゼットは何もしておらず、共鳴で封印が解けようとしているわけでもない。つまりは第三者。何者かがオルゴールに干渉している！

「……そこです！」

リゼットが何もない空間に気弾を放つ。

だがその気弾は確かに何かに命中して爆ぜ、そこに隠れていた者を露にした。煙の中から出てきたのは赤い髪、杖を持った男だ。

その姿を見てセルは「ドミグラ！」と叫ぶ。

「流石は地球の神。よくぞ見破った」

「何者です？」

「私は魔神ドミグラ。いずれはこの宇宙全てを支配する神になるべき存在だ」
ドミグラと名乗った男がふてぶてしく名乗り、大層な事を口にする。

一体何が目的かは知らないが、オルゴールに干渉しているのはこの男で間違いな

いだろう。

ならば取るべき行動は一つ。リゼットは掌を翳し、ドミグラへと超能力をかけて動きを封じた。

だがそれを阻むかのように横から気功波が放たれ、咄嗟に避ける。

「ポポ!？」

「……」

攻撃してきたのは、何とポポであった。

だがそれが操られてのものである事をすぐにリゼットは見抜く。

どうやらこのドミグラという男、トワ以上に他者を操る術に長けているらしい。更にポポだけではなく兎人参化や魔人ブウまでもがリゼットの前に立ち塞がり、黒い気を発した。

「ふふふ、私の魔術は如何かな？」

仲間を相手にどこまでやれるか、じつくりと拝見させて貰おう」

「……確かに厄介ですね。ですが私を見縊りすぎです」

以前までのリゼットであつたならば、この状況はかなり不味いものだったのだろ

う。

魔人ブウは決して加減出来る相手ではなく、更におやつ光線という一撃死技まで持っている。

だが今のリゼットならば加減しながら戦う事は充分に可能だ。

彼女は一瞬で潜在能力を解放し、一番手強い魔人ブウとの距離を詰めると彼の胸に掌打を放つと一撃で洗脳魔術を解除した。

「なるほど、なかなかの腕前だ。

だがもう封印は解けてしまった。私の歴史改変を止められるかな？」

ポポと人参化はセルが無力化し、何の障害もないかのようにドミグラの前に飛びこむと零距离で気功波を発射した。

たったの一撃でドミグラが消滅するも、手応えはない。

どうやら実体ではなく魔力で創った仮初の身体だったようだ。

なるほど、魔法とはこういう事も可能なのかと少し感心するが、今はそれぞれろではないとすぐに気を取り直す。

「ブウ、人参化、ポポ。無事ですか？」

「うーん……俺、今何やってた？」

ブウは無事正気に戻ったようで頭を抑えている。

人参化とポポは気絶しているが、そのうち目が覚めるだろう。

それより問題は封印が解けてしまったオルゴールだ。

オルゴールからは青年が姿を現し、だが様子が明らかにおかしい。

登場早々苦しんでおり、必死に何かを抑えようとしている。

どうやらドミグラは封印を解除するだけでなく、タピオンにも何かしたようだ。

いや……タピオンというよりは彼の内に眠るヒルデガーンに、か。

「セル、構えて下さい。出てきますよ」

「面白い……ドミグラへの怒りはこいつで発散するでしょう」

自律気弾を一つ生成して気絶しているポポと人参化を寢所まで運ばせる。

ヒルデガーンが復活してしまうが、考えによっては好都合だ。

この神殿は次元を隔てた空間にある。つまりここで戦えば地球には一切の被害がない。

悟空達と共闘出来ないのは少し辛いが、幸いセルやブウ、ゴッドガードンはいる。

何とかここで倒してしまえば問題は起きないはずだ。

だがヒルデガンと戦うには神殿は少し小さすぎる。

ならば、トリゼットは神殿から離れた位置に物質創造の神術で特大のバトルフィールドを造り出した。

大きさは半径にして1キロ。素材はカッチン鋼の豪華仕様だ。

下界で戦う？ 冗談だろう、こんな巨大サイズの敵と地上で戦えば何人死ぬか分かったものではない。

「ゴアアアアアア！」

ヒルデガンがタピオンから飛び出し、上手い具合に特設リングの上に着地してリゼットとセルを見下ろした。

その外見はまさに怪物以外に形容の言葉がない。

頭部は人の髑髏に近い形状だが、頭に血管が浮いているので骨なのかどうかイマイチ分からない。

確か元はコナツツ星の悪の気を吸い取る魔神像だったか。

そこにどこからか流れてきた魔導師の一派が邪悪なエネルギーを注ぐ事で幻魔人

とした存在こそがヒルデガンであり、要するにジャンペンバと同様に悪の気の集合体というわけだ。

ホイは抹殺したが、恐らく魔導師一派は彼だけではあるまい。

この戦いが終わったら、ホイと似たような気を探索して宇宙から魔導師一派を一扫してしまわないとまた同じ事が起こるかもしれない。

だが今はまずヒルデガンをどう倒すかだ。

その姿は既に下半身と上半身が合体済みであり、ドミグラがご丁寧に下半身をここに引っ張ってきていたのだろうと推測出来た。

リゼットはまず小手調べとして気弾を発射する。

放たれた気弾は飛びながら10個に分裂、更に形状を変えて斬撃に特化した円盤へと変化してヒルデガンへと襲いかかった。

だがヒルデガンは文字通り煙のように消え去り、リゼットを背後から急襲した。

「……っ」

バリアの上から巨腕を叩き付けられ、リゼットの高度が下がる。

だがまだ戦闘力の差は顕著だ。ヒルデガンの攻撃はリゼットのバリアを貫けず

にダメージも一切通らない。

リゼットはすぐに身体の向きを変えて再び気弾を放ち、今度はそれが槍へと変化した。

「必中の槍よ、在れ」

命中するまで自らの意思と判断で敵を追い続ける自律行動する必中の槍。

それが直進し、案の定またもヒルデガンが消える。

その消える瞬間から次に現われるまでの時間を計測し、更に気配の移動を探る事に意識を集中させた。

ヒルデガンに第二形態があると分かっているのはこちらの強みだ。

何せこうして、弱いうちに特殊能力をじっくりと分析、観察する事が出来る。

『次』があると分かっているから、それに備えて準備が出来る。

消えてから次に現われるまでの間は大体0・001秒といったところか。

攻撃後の隙を突くならば充分な時間だ。

劇場版ではゆっくり消えているように見えるが、あんなのは悟空達の視点に合わせ、セテスローにしているに過ぎない。

實際は一般人ではとても視認出来ない速度で戦い、更にその悟空達ですら捉え切れない速度で消えて、そして現われている。

だがこの0・001秒の間は潜在能力^{アルティメット化}を解放した今のリゼットならば充分に捉えきれる速度だ。

（右！）

姿を現したヒルデガーンの爪を、あえて避けずにバリアで受ける。

消えてから現れるまでの時間、現れてから更に攻撃に移るまでの時間。

それを冷静に観察し観測する。

軌道を変えた槍が再びヒルデガーンを襲い、怪物の姿が消えた。

だがりゼットは邪念の移動を追い、次にヒルデガーンが現われるだろう場所に当たりを付けて掌を翳した。

消えている時のヒルデガーンに気はない。何故なら彼は幻魔人。

実体化していない時は幻であり、幻に気などあるわけがない。

実体化するまでの間、ヒルデガーンは本当にこの世に存在していないのだ。

だがそれでもリゼットには視える。分かる。

ヒルデガンという存在の根幹ともなっている邪念は、神として高位のステージに移行しつつある今の彼女ならば捉えられる。

「そこ！」

発射した気弾がいいタイミングでヒルデガンの胸に直撃し、その巨体が倒れ込んだ。

更に必中の槍がしっこく旋回し、ヒルデガンへと直進する。

刺さる瞬間に槍は巨大化し、ヒルデガンすらも貫通する神の槍と化してその腹部を完全に貫き、役目を終えて消滅した。

随分と呆気ないが、まあ第一形態ならばこんなものだ。

いわばこんなのは本番前の準備運動でしかなく、まだ戦いは始まってすらいない。リゼットは右拳を握り、後ろへと引く。

そして距離を無視して拳を放ち、それと同時にヒルデガンにも匹敵する巨大な気の拳を創造して、倒れている怪物を思いきり殴打した。

ベキベキと何かを砕く音が響き、ヒルデガンの全身が罅割れる。

更に二発、三発、四発！

攻撃を重ねるごとにヒルデガーンが無惨な姿へと変わり、亀裂が増えていく。

「仕留めたのか？」

「いえ、まだです」

クン、と指先を動かしてヒルデガーンへ念力をかける。

すると彼の巨体は見えない力に引っ張られて無理矢理起こされ、リゼットの前へと吊り下げられた。

そこにリゼットが無慈悲に光弾を連続で叩き込み、身動きの取れないヒルデガーンをサンドバッグにしてボロボロにしていく。

騒音に目を覚ましたタピオンは果たして、この光景に何を感じただろう。

何故か封印が解けて、それで目を覚ましてみれば女の子がヒルデガーンをボコボコにしているという意味不明の状況だ。正直混乱するしかない。

そんなタピオンの混乱を余所にリゼットはヒルデガーンを再び特設リングへと落とし、念力をかけて彼の身体を全包围から圧迫した。

このまま第二形態になる間も与えずに圧壊させてしまおうとでもいうのか。ヒルデガーンの身体がひしゃげ、罅割れ、歪み。まるで見えない何かに押し潰されるよ

うに崩れていく。

だがそう上手くいくほどヒルデガーンは容易くない。

罅割れた身体の内側には全く傷付いていない真新しい金色の身体が視え隠れし、それは外皮が碎けるごとに全容を現していく。

やがてヒルデガーンはリゼットの念力を跳ね除けて飛翔し、完全に古い外殻を捨て去った。

その姿は金色に輝き、どこかセミにも似たシルエットをしている。

「ゴアアアアアア！」

「っ！」

予想以上に速いヒルデガーン完全体の初撃にリゼットが驚き、バリアの上から直撃を浴びた。

ダメージは薄い。だが薄いだけで確かに通っている。

空中で姿勢を直して飛翔し、ヒルデガーンと相對する。

こうして向き合う事で分かる事。それはヒルデガーンの馬鹿げたまでの気の強大さだ。

正直驚いた。今の自分と違って戦えるほどのものであり、とても悟空の超サイヤ人3で太刀打ち出来る気ではない。

何故原作で悟空はこれに勝てたのか……改めて彼という男の凄まじさを思い知る事になってしまった。

何はともあれ、今の自分ならば勝てない敵ではない。老界王神との出会いはまさに値千金どころではない価値があった。

彼との出会いがなければ、今頃はこの怪物をどうすればいいか本気で悩んでいただろうし場合によっては詰んでいたかもしれない。

姿を消す能力は厄介だが、札の多さではこちらが勝る。

ここまで観戦に徹していたセルとブウへと目配せをし、ここからが本番である事を告げる。

「行きますよセル、ブウ。このまま、幻魔人を葬ります」

リゼットの言葉に応えてセルとブウが飛び、リゼットも後に続く。

彼等に合わせるようにヒルデガンも翼を広げて飛翔し、異星の幻魔人と地球の神との戦いは更に激化を極めた。

【戦闘力】

・勇者タピオン…20億

・ヒルデガン

第一形態…2000億

第二形態…5000億

【龍拳爆発!! 悟空がやらねば誰がやる】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作第16弾。

ドラゴンボールZとしては『神と神』が公開されるまでは最終作という位置付けだった。

珍しく本編と矛盾しない物語であり、ブウを倒した後の出来事と考えられる。

また、基本的に負けてばかりの超サイヤ人3が敵を倒すので超サイヤ人3ファインには嬉しい作品。

この作品で悟空が披露した龍拳は後にGTでも彼の切り札となっており、GTトラ

ンクスも（多分）タピオンの剣を使っているのでこの劇場版からGTに繋がっている可能性が高い。

【ヒルデガン】

この映画のボス。

千年前にコナツツ星の悪の気を吸い取った魔人像の霊体が、魔導師たちに邪悪なエネルギーを注ぎ込まれて変身した幻魔人。

攻撃の時のみ実体化し、それ以外のタイミングで攻撃してもすり抜けるというチートキャラ。

究極悟飯や超3ゴテンクスを一撃KO出来るくせに超3悟空に負けたせいで当時のチビツ子達の間で「悟空は究極悟飯より強いのか？」という議論が巻き起こった……かもしれない。

個人的には単純なパワーではヒルデガンで、技や戦いの巧さでジャネンバが勝るというイメージ。

例えるならヒルデガンがラオウでジャネンバがトキ。

ザッパ・シン・シギッパ・シン・シバ—シギッパ—ジジヨ

—じゃあウツギ「カクゴ」

【タピオン】

宇宙一格好いいモヒカン。

自らの身にヒルデガーンを封じた勇者であり、モヒカンが気にならないくらいにイケメン。

一部では『モヒカンになったクロノ』と呼ばれている。

ラヴォスのビームを避け切れずに髪が燃えてしまったのだろうか。

作中でヒルデガーンの炎をバリアで軽々と防いでいるので超2ベジータより強い疑惑があるが、バリアで判断したらバビディが超2ベジータより強い事になってしまうのでこのSSではベジータ以下に設定。

彼の剣はトランクスに引き継がれるが、未来トランクスの剣が彼の剣なのかは不明。というか多分違う。

しかしゼノバースでは未来トランクス（ゼノ）がタピオンの剣を持っている。

もし未来トランクスの剣がタピオンの剣だった場合、どう考えても未来の戦力ではヒルデガーンを倒せないでタピオンが封印した隙にトランクスがタピオンごと

ぶった斬ったと考えられる。

悟空が『すげえ気だ』と評するほどの達人。

悟空は界王神を一度も凄い奴と思わなかったらしいので、界王神よりは強いと思われる。

【ホイ】

ヒルデガーンを幻魔人にした邪悪な魔導士の一人。

どう見ても地球人ではないが、作中では誰にも突っ込まれなかった。

魔術で自分の姿が地球人に見えるようにでも擬態していたのだろうか。

……まあ獣人とかいる世界だしピンク肌くらい珍しくないのかもしれない。

最後にはヒルデガーンに踏み潰されて死亡した。

第八十三話 相性

幻魔人ヒルデガン。その名の通り幻のように姿を晦ませる魔神だ。

だがそんなヒルデガンにも弱点はあり、いかに彼でも攻撃の瞬間だけは実体化せざるを得ない。

これは当然の事で、幻のまま攻撃をしてもそもそも敵に命中しないからだ。

また、この無敵の回避能力を持つが故か防御力そのものは然程高くないのも救いであつた。

攻撃力、速度、特殊能力。そのいずれも恐ろしい。それこそ潜在能力を解放した悟飯や超サイヤ人3になつたゴテンクスすらも凌駕するだろう。

だが防御の脆さと攻撃の一瞬の隙さえ突けば力で劣る超サイヤ人3 悟空でも勝つ事が出来る。

これこそが本来の流れにおいて悟飯やゴテンクスすら敗れたヒルデガンを悟空が倒せた理由である。

つまりは単純なパワーではなく戦闘経験と技術。これがあつたから悟空は勝て

た。

そしていかにパワーがあろうと、肝心の武術の下地がほとんどない故にゴテンクスと悟飯は負けたのだ。

同じ強者への道程であっても、その過程が違えば鍊度も違う。

悟空は幾度の戦いと敗北、何人もの師との出会いや修行を経て今の領域にいる。だが悟飯は修行もしたにはしたが悟空ほどの濃密な時間を過ごしたわけではなく、何より7年間の修行をサボったブランクが大きすぎた。

ゴテンクスは言わずもがな。完全に才能頼りであり、フュージョンも結局のところは合体により強さ『だけ』を無理矢理増やしたに過ぎない。

ならばその鍊度に差が生じてしまうのも仕方ない事だろう。

究極悟飯とゴテンクスは強い。だがそれは戦闘力任せのゴリ押しの強さであり、だから彼等は格下には勝てても格上には勝てない。

孫悟空の強さは地道な下地に支えられた武道家の強さだ。だからこそ彼は格上にだって勝つ事が出来る。

そしてリゼットも後者に属する。絶大な力と確かな経験、鍊度を合わせ持つ彼女

ならばヒルデガン相手でも尚優位を保つ事が可能だ。

ならば決して勝てない戦いではない。否、負けるのは恥と心するべきだ。

故に決意する。地上には行かせない、孫悟空の手を煩わせるまでもない。

この幻魔人はここで、人知れずに葬ってみせると。

「K i n e c t !」

リゼットの手から発射された気弾が数十に拡散して人の形となり、武装した戦乙女達へと変わる。

彼女達に与えた命令は単純明快。休まずに攻め続ける事のみ。

セルとブウもその攻撃に参加し、ヒルデガンを回避に集中させた。

まずは単純に攻撃回数と手数を増す事でヒルデガンが攻撃に専念出来る時間とタイミングを減らし、ひたすら煙化しての防御を強制する。

幻魔人が実体化するのは攻撃の一瞬のみ。それ以外のタイミングで攻撃を仕掛け、
ても全て煙に巻かれるだけだ。

リゼットは静かに空中に佇んだまま、精神を集中してヒルデガンが攻撃する瞬間を待つ。

何度も出現しては、すぐにセルや戦乙女が飛びかかって来るせいで煙化せざるを得ないヒルデガンだが、安全地帯がないわけではない。

さあ、よく見ろ。不用意に戦乙女を前に出しているせいで肝心の本体の近くに何の守りもないぞ。

この位置ならば戦乙女に攻撃されるよりも早く本体を殴って、そして煙化できるぞ。

さあ、来い。余裕こいて高みの見物をしているこの本体を攻撃しに来い。

そう考えながらリゼットは、自分へと攻撃が飛んでくる一瞬を待ち続ける。

(……—今!)

リゼットが目を開き、俊敏に身を翻した。

直後に彼女がいた場所を拳が通過し、攻撃直後の無防備な姿勢となったヒルデガンと目が合う。

無論ここで手を休める理由などない。すぐに手を翳して気功波を発射する。だが惜しい。当たったと思った瞬間に煙化されてしまった。

どうやら少しタイミングが遅かったようだ。

ここですぐに次撃が来ると警戒したのだが、何故か来ない。

絶好の狙い目だろうに……もしかして今のカウンターで警戒させてしまったのだろうか？

しばらく待っているとヒルデガンはリゼットから離れた位置に出現し、口を開く。

やはりカウンターを警戒し、距離を取ったらしい。

だが火を吐いてくれるならばかえって好都合。その瞬間を狙い撃つ！

吐き出された火炎に合わせて空間を跳躍して突撃し、バリアを纏って一瞬でヒルデガンの前へと飛び出した。

攻撃の瞬間こそが最大の好機。敵の火炎発射のタイミングに合わせて距離を詰めて不可避のカウンターを放った。

「波！」

「ゴォォワアア！」

リゼットの気功波がヒルデガンの顔を焼き、盛大に尻餅を突かせた。

手応えあり。倒すには至らないものの、確かなダメージを刻み込む事は出来た。

そして既にリゼットはヒルデガーンの攻撃のタイミングをほぼ見切っており、後数回もこなせば完璧なカウンターを合わせる事が可能という確信を抱いていた。

再びヒルデガーンが煙化するが、もうリゼットの虚を突く事は出来ない。

背後からの攻撃には気功波を返され、上から殴りかかれば更にその上に一瞬で移動したりリゼットに蹴り落とされる。

尻尾で捕まえようとすれば逆に掴まれて投げ飛ばされた。

ヒルデガーンは確かに厄介な敵であり、紛れもなく強い。そこに疑いを挟む余地はなく、巨大さ故の攻撃力は何より恐ろしいものだ。

だが巨大であるが故にでかいであり、攻撃はどう細かく行おうとサイズ差の問題でリゼットから見れば大振りになってしまう。

だが大振りな攻撃などリゼットにとってはカウンターのチャンス以外の何者でもなく、完全に顕著なまでに相性差が出てしまっていた。

セルが背後から奇襲を仕掛け、ヒルデガーンが煙へと変わる。

そして姿を現してセルへ殴りかかった瞬間を狙い、リゼットが横からバリアを纏ったの突撃を敢行した。

ヒルデガーンの巨体が地面に倒れ、再び煙化してリゼットの上を取り火炎を吐き出す。

だがまたしても空間跳躍で目の前へ転移したりリゼットに気功波で撃墜されてしまった。

一度見切られた飛び道具はもうリゼットには通用しない。

「ヒルデガンか……ふん、恐ろしい敵だったが、相手と時期が悪すぎたな。

正直同情するぞ」

既に勝敗は決した。

セルが腕を組んで気の早い勝利宣告をし、リゼットが「変なフラグを立てないで下さいよ」とぼやく。

とはいえ、その言葉の意味などヒルデガンは解してすらいないだろう。

羽根を広げてリゼットへと飛びかかり、巨腕を力の限りに叩き込んだ。

その、直撃するまでの僅か一瞬。刹那にも満たない絶好のカウンターチャンス。リゼットはこの瞬間に超能力を発動して刹那の時間を一秒にまで引き延ばした。

「^時Inf^よini^止te^まWo^れrd!

この世の時間を僅か1秒だけ停止させるリゼットの奥義の一つ。

それを使った今、ヒルデガンはもう煙化出来ない。

実体化した攻撃体勢のまま止まってしまい、その間リゼットが攻撃し放題となる。無論この機会を逃すわけもない。

彼女は手を虚空へ掲げると白い気弾を生み出し、ヒルデガンへ叩き込んだ。

「Spark^{スパーキング}ing・Neo^{ネオ}！」

放たれた気弾はヒルデガンの胸の中へと吸い込まれ、姿を消した。

不発？ 否。

リゼットはもう勝敗は決したとばかりに背を向け、そして指を鳴らす。

「そして時は動き出す」

時間が動き出すと同時にヒルデガンが苦しみ出し、その胸から白い浄化の輝きが溢れ出す。

煙化をする余裕もないし意味もない。もう技は決まってしまった後だ。

太古より集め続けてきたコナツツ星の悪の気。それがリゼットの神の気によって浄化され、消滅していく。

相性がよすぎた——この戦いはまさにその一言に終始するだろう。

悪の気の集合体であるヒルデガンにとって集約させたりゼットの気は致死毒だ。炸裂してしまえば消滅を逃れる方法などない。

ポツカリと胸に穴が開き、そこから侵食するように光が満ちていく。

首が、胴が、腕が。

次々と光に吞まれて浄化、消滅し、最後の残った頭が無念の咆哮をあげながら消滅したところで完全にヒルデガンはこの世からいなくなってしまった。

リゼットは風になびく髪を指先で払い、神殿の上で呆けているタピオンを見る。

……とりあえず、何があったのかを彼に説明しなくてはならないようだ。

流石に彼はそれを知る権利があるし、このまま放置は可哀想すぎる。

★

「な、なるほど……つまりそのドミグラという男が封印を解いてしまい、ヒルデガーンを貴女達が倒してくれたと、そういう事ですね」

一通りの説明を受けたタピオンはどこか戸惑ったように、だが安心したように言う。

彼にしてみれば1000年ぶりに叩き起こされたと思えばいきなりヒルデガンが外に出ていて、しかも見知らぬ星の見知らぬ神が勝手に倒していたという状況だ。混乱しても仕方がないだろう。

しかしそれでも何とか現状を把握し、ヒルデガンが倒された事を喜んでいるのも確かなようだ。

彼にしてみれば降って沸いた牡丹餅所の騒ぎではないが、1000年間己を束縛し続けてきたものが突然消えたのだ。

混乱していいやら、喜んでいいやら、色々複雑なはずだ。

だがそれより、目下問題となるのはタピオンの今後だ。

本来の流れならばブルマにタイムマシンを造ってもらって過去へ飛ぶわけだが、リゼットはあれはむしろタピオンには酷な事だと考えている。

仮に彼が過去でヒルデガンになる前の石像を破壊、もしくは魔導師一派を殲滅して危機を未然に防いだと仮定しよう。

その場合、過去の世界にタピオンが二人いる事になってしまい彼の居場所はない。かといってヒルデガン封印後に戻っては本末転倒だ。戻る意味そのものがない。

い。

つまりどちらにせよ、彼は弟と暮らす事が出来ない事に変わりはなく、全く救いがないのだ。

それよりは、この時代で彼の弟であるミノシアと再会させてやった方がまだ救いになるだろう。

そして幸いにして、この星にはそれを可能とする奇跡の球があった。

あまり乱用したくはないのだが……しかしタピオンにも救いがあったといいだろう。

それにヒルデガンという怪物を封じ続けていた彼は考えによっては宇宙の英雄だ。

リゼットが強くなった今だからこそ何とかなったものの、あれがもし数年前に現れていたら宇宙全体が破壊し尽されていてもおかしくなかったのだ。

「あ、あの、地球の神様。俺は、これからどうすれば……」

「そうですね……では、しばらくはこの神殿で暮らしてみませんか？」

とりあえず、まずはタピオンの暮らす場所を提供する必要があるだろう。

ここにきて放り出すのは流石に寢覚めが悪いし、リゼットはそこまで人でなしでもない。

「よ、よろしいのですか？」

「ええ。貴方の封印が解けてしまったのはドミグラを止める事が出来なかった私も問題があります。遠慮はいりませんよ」

「あ、ありがとうございます！」

これでとりあえずタピオンの仮の住居は決まった。

そのうち出て行くとしても、その準備をするだけの時間は得られただろう。

地球に永住したいと言い出したなら、その時に改めて彼の家を建ててやればいい。リゼットはゴッドガードンのうちの一体を呼び、タピオンの案内を任せる。

「確かまだ部屋は空いていたはずですね？ タピオンを適当な空いている部屋へ案内してあげて下さい」

「ハイ、ワカリマシタ」

ガシヨン、ガシヨンとゴッドガードンが歩き、タピオンもその後が続く。

それを見届けてからリゼットはドラゴンボールを使い、一人の少年を蘇生させた。

ドラゴンボールは絶望の未来の反省から常に使える状態で待機させておきたいので、即回収して精神と時の部屋へ入れるのも忘れない。

そして蘇生されたミノシア少年は地球から遠く離れた星で復活したので、ヘブンズゲートで迎えに行つて回収しておく。

そして、千年生き別れていた兄弟は地球の神殿で涙の再会を果たす事となった。

【スパークキング・ネオ】

リゼットの技の一つ。スパークキングより大きい直径2mほどの巨大気弾を発射するスパークキングの改良技。

スパークキング・メテオよりは弱い。

スパークキングⅡイオ

スパークキング・ネオⅡイオラ

スパークキング・メテオⅡイオナズン みたいなもの。

運がよかったな。今日はMPが足りないみたいだ。

【ドラゴンボールで生き返れる期間】

W i k i p e d i aで『複数の死者を生き返らせる場合は死後1年以内でなければ復活できないが』とあるので、このSSではそれを採用。

一人ずつなら1年以上経っていても有効とする。

なので自分の考えがあっても「このSSではそういう設定」で納得して頂けると助かります。

【神殿の住民】

Mr・ポポ

セル

魔人ブウ

ゴッドガードン×15

兎人参化&兎団

タピオン【NEW!】

ミノシア【NEW!】

ちなみにミノシアはどんなキャラかよく分からないので、生き返ったはいいものの兎団みたいな背景になると思われます。

第八十四話 一時の平和

今回は束の間の平和という事で短編集のようなになります。

【安易な解決法】

セルは一日に数時間ほど、神殿からいなくなる時がある。

彼の目的はどこかに逃げ延びているナメック星人の探索であり、未来に戻った時の為にその居場所を見付け出す為にこの時代に留まっている。

なので神殿にいない時は瞬間移動でどこかの惑星に移動して情報収集をしているのだろう。

そして今日もまた、調査を切り上げて神殿へと帰ってきた。

「お帰りなさい、セル。何か収穫はありましたか？」

修行の休憩時間に魔人ブウと対戦プロレスゲームで遊んでいたリゼットがセルに気付き、声をかける。

画面の中ではリゼットが操作するキャラクターがブウのキャラクターにベアークローを突き刺している。

コーホー。

「いや、ないな。だが範囲は確実に狭めている」

「……セル。もうドラゴンボールを使っではどうです？」

セルの目的はドラゴンボールを使えば、簡単に達成出来る事だ。

当初はまだセルへの警戒と、また騙されるかもしれないという考えもあったのでセルにドラゴンボールを使わせなかったが、7年も経てば少しくらいは信じてもいいという気になる。

しかしセルはその提案を一笑した。

「それではつまらんではないか。こういうのは地道に探すから面白いのだ。

安易な解決法に頼っただけでは達成感がない。未知を探すのはなかなか楽しい事だぞ」

「そういう所は、一体誰の細胞の影響なんでしょうね」

「さてな……案外、貴女かもしれんぞ」

「……」

セルに言われ、リゼットは思わなくなるほど、と思っってしまった。

そういえば最初は、未知を楽しみたいという気持ちから全てが始まったのだったか。

それがいつの間にか未知に怯えるようになり、失敗を恐れるあまりに効率優先の手段ばかりを取るようになってしまった。

しかし、失われたと思っていた自分の本質的な部分はしっかりとセルに継がれていたようだ。

「では、今後も？」

「ああ、自力で見付けてやるさ。まあ焦らずゆっくりやればそのうち見付かるだろう」

とりあえず、セルはもうしばらくこの時代に留まるらしい。

【次世代の子供達】

悟天とトランクスはよく一緒に遊ぶ親友同士である。

この二人は大体セットとして扱われるが、時々、二人組が三人組になる時がある。今日もまた、悟天とトランクストランクスの所へとその少女が訪れていた。

赤いロングヘアにぱっちりとした瞳。父に似て若干褐色の肌。

容姿は母の若い頃に似ていて、年齢は今年で10歳になる。

トランクスよりも2つ年上の彼女は、ターレスとスノとの間に生まれた一人娘だ。

つまりはサイヤ人と地球人の混血である。

服の下に隠れているが、ターレスとスノの教育方針なのか悟天達と違って尻尾もすっかり残っていた。

田舎の雪国ならではの寛大さというべきか。都会と違って尻尾の一つくらい生えていても誰も気にしないのだ。

都会ではめっきり見なくなってしまった獣人や竜人なども田舎に行けばまだ見る事が出来るので、それも尻尾が気にされない理由の一つかもしれない。

「あら、ユキちゃん。いらっしやい」

「お久しぶりです、おば様」

普段は雪国で過ごしているのだからたまにしか会わないが、それでもターレスが来た時などは一緒に彼女もついて来る。

サイヤ人との混血らしからぬ丁寧な挨拶にブルマも顔を綻ばせ、自分の子にも見習わせたいと思っていた。

未来から来たトランクスは礼儀正しい好青年だったが、現代のトランクスはやんちゃな悪ガキだ。

生活環境の違いや父親が存命という事も関係しているのだろうし、未来の惨状を知っている身としてはのびのびと育ててほしいという親心もあるが……それはそれとして、やはり将来の為に礼儀は身に着けてほしい。

なのでブルマは、ユキという礼儀正しい少女と接する事でトランクスもその影響を受ける事を期待していた。

そのまま少女はトランクス達と一緒に遊びに行き、その後ろ姿を見送ってからブルマはターレスへと声をかけた。

「本当にいい子よね、ユキちゃん。父親とは大違い」

「ひっでえなあ」

ブルマにからかわれたターレスは苦笑いして肩をすくめた。

ちなみに彼がここにいるのは彼の育てた果物をカプセルコーポレーションに売る為だ。

ブリーフ博士は家の中に様々な動物や恐竜を飼っており、その餌としてターレスの育てた果物が人気なのである。

「だが、あんまり油断しない方がいいぜ」

「え？」

「確かにあいつは他所ではいい子ちゃんだ。お前の前は勿論、スノの前でもそれで通している。」

だが忘れるな、あいつは俺の娘だ」

ターレスがそう言っている頃、少し離れた場所まで飛んだ悟天は不思議そうにユキへと話しかけていた。

「ねえユキちゃん」

「何かしら？」

「何でもみんなの前では話し方とか変えてるの？」

「ホホホ、何の事でしょう。私はいつでもおしとやかで礼儀正しい女の子なのです」
悟天の問いにユキは心外だとばかりに微笑む。

しかしそこに、トランクスが「よく言うよ」と口を挟んだ。

「こいつ神様みたいになりたいんだよ。無理無理、なれるわけないって。

こいつのパパの口癖を借りるなら天と地ほどの差が……」

そこまで言ったところでユキの雰囲気が一変した。

口の端が吊り上がり、目つきが鋭くなる。

その背後に一瞬、悪党時代のターレスの幻影が見えたのは気のせいではあるまい。

一瞬で被っていた猫を脱ぎ捨てたユキはトランクスの顔を掴んで、万力のような力で締め付けた。

「お喋りは早死にするぜトランクス……この星のど真ん中にお前の墓を立ててやろうか？」

「うげっ、もう本性出しやがった！ だから無理だって言ってるんだよ！」

トランクスはスーパースァイヤ人になって無理矢理ユキの魔の手から逃れて文句を言い、悟天も同じく変身をする。

それに合わせて何とユキまで超サイヤ人へと変化した。

しかもその気は、ターレスに鍛えられたのかトランクスや悟天を上回っている。

「いくぞ悟天！ 今日こそぎゃふんと言わせるぞ！」

「うん、トランクス君！」

「お前達の力で私に敵うと思うか!? 私とお前達の間には天と地ほどの差が存在しているのだ！」

「嘘つけ！ 僅差じゃないか！」

トランクスが叫び、悪ガキ三人が空中で激突した。

ちなみにユキが必死に隠している本性だが、気を感じ出来る戦士達には薄々勘付かれてしまっている事に本人はまだ気づいていない。

【ストレス解消】

リゼットは基本的に神殿から出る事はない。

神としての職務もあるし、何より出る必要があまりないからだ。

最近宇宙に出てホイのような邪悪な魔導師を減らしているが、基本的には神殿暮

らした。

しかしそんな彼女が二週に一度は赴く場所がある。

それは都にあるドッグカフェである。

リゼットは大の猫好きだが、実は犬も好きだったりする。

更に言うと兎も好きだし（ただし人参化は例外）、大型だが虎や狼も問題ない。

モフモフしてれば何でもいいのだろうか、こいつ。

勿論下界に行く以上は変装は必須だ。なのでドレスの上からコートを羽織り、頭には帽子をかぶっている。

そうして一般人に紛れて思う存分に犬を構い倒した彼女は、ストレスを発散してまた明日から頑張れるのだ。

神様がこんな事してていいのかと思われるが、そこは大丈夫。バレなければ問題はない。

しかしホクホク顔で店を出て行く彼女は、『天女様のお墨付き！』という垂れ幕がある事に気付いていなかった。

【ユキ】

ターレスの娘。あまり出番のないオリキャラ。

清楚系の上品なレディを目指しているが、本性はターレスに近い。

クラッシャー軍団の魂を受け継ぐ者。

基礎戦闘力は800万で超サイヤ人にも覚醒済みである。

本性を出すと、ランダムでクラッシャー軍団のうちの誰か一人がスタンドのように一瞬背後に出現する。

必殺技は父譲りのキルドライバー。発射時の掛け声は勿論「死ねー！ー！」

他にもアモンドの『プラネットボム』やダイーズの『メテオボム』も使いこなす。混血児の中では最もサイヤ人としての残忍性と好戦的な性格を色濃く受け継いでいる。

本人はか弱い女の子を演じているので戦闘には参加しないし、出番もない。

第八十五話 神と神①

ヒルデガンとの戦いから4年の月日が経過した。

平和な時間が経つのは本当に早いものだ。

この4年の間はこれといった事は起こっていない。精々ベジータの弟が来訪したくらいか。

神殿の中央で風を浴び、髪をなびかせながらリゼットは軽くない達成感に身を委ねていた。

この世界に生まれてより270年間。ここまで続いてきた戦いが彼女の脳裏を駆け巡る。

サイヤ人にフリーザ、セルに魔人ブウ。劇場版の敵達。ついでの2年前に来て悟天とトランクスに撃退されたというアボとカド。

その全てを乗り越えて、今ここに誰一人欠ける事なく今日という日を迎えている。敵のうちの何人かは悟空達に丸投げしてしまった事もあるが、地球の神としては恥ずかしくない程度にはこの星を守れたはずだ。

この先にGTと同じ出来事があるかもしれないが、それはまだ6年以上先のはずだ。

ならば今から手を打てば事前に防ぐ事も不可能ではない。

しかし安心ばかりしてられない理由もまた一つだけ存在していた。

——魔神ドミグラ。

リゼットがいくら知識を掘り返してみても、原作にもアニメにも劇場版にも登場していない未知の敵。

幻影のドミグラはまるで大した事のない敵ではあったが、それも今のリゼットだからこそだ。

例えばベジータなどが戦えば充分に苦戦するだけの強さはあり、たかが幻影にあればだけの強さを持たせる事が出来る程に本体が強いという事を意味している。

つまり、まだ終わっていない。満足するには早いのだ。

とはいえ、今くらいは平和を謳歌しても罰は当たらないだろう。そもそも神様は自分だが。

「さて、それでは行きましょうか。」

ポポ、戻るまでの留守をお願いしますね」

「はい、神様」

あれから4年経ち、平和になった今もリゼットは修行を休む事なく続けている。ブリーフ博士の造ってくれた新型重力室（最大3000G）での修行とセルやブウとの組み手、それから瞑想での精神鍛錬をローテーションで行い、週に1日は思い切り休むというサイクルだ。

悟空達も日々修行を重ねており、ますます強さを増している。

特に仕事をしていない……ではなく、最も修行時間の長いベジータの戦闘力向上は凄まじく、今や基礎能力だけならば悟空に並ぶ勢いだ。

悟空、ナッパ、ターレスはそれぞれ仕事をしているのでベジータほど伸びていない。

特に悟空は家計も苦しく、チチに働けとせつつかれているので猶更だ。

流石に不憫だったので、今まで地球を守ってくれたお礼として物質創造術で金塊を創って渡したのだが（こういうのは本当はあまりよくないのだ。やりすぎると金の相場が崩れてしまう）、それでも悟空はやはり働けと文句を言われていた。

チチ曰く、『悟空さは金があると仕事しないから使い切った事にしただ』らしい。どうやら金の有無というより、一家の大黒柱としてちゃんと働く姿を子供達に見せてやって欲しいようだ。

しかし悟空はそれでも合間合間に暇を見付けては界王星に出向いて修行をしていた。

チチが実は金塊を使わず保管している事にも薄々気付いているのだろう。

だが今日はその修行はない。何故なら今日はブルマの38歳の誕生日であり、リゼットとタピオン兄弟、セルやブウに人参化も誘われているからだ。

悟空も少し界王星で修行をしたら、切り上げてこちらに来るだろう。

結局あの後タピオンは地球に残り、今では修行の合間に神としての業務を教え込んでいる。

これはいずれリゼットが地球の神を辞めた時の為の後継者となるべく今から色々教えているのだ。

タピオンはあの一件、特にミノシアとの再会の機会を与えられた事でリゼットに深く感謝し、恩を返したいと申し出てきた。

無論リゼットとしてはそこまで気にしなくてもいいと思っている。

そもそも封印を守れずに眠りから起こしてしまった責は自分にもあるのだ。

その事を説明してもタピオンは、リゼットへの感謝の気持ちは変わらないと爽やかな笑顔で言っていた。

「俺の人生は、本来ならヒルデガーンを封印した時点で終わっていたはずでした。俺達兄弟は宇宙の為に永遠に、あの世にも行けずに封印され続ける覚悟だったのです。」

しかし貴女のおかげで俺は新たな生を得て、二度と会えないと思っていたミノシアとも再会出来た。

……俺達は、本当に救われた……。

貴女は俺の恩人だ。貴女がしてくれた事は、貴女が思う以上に大きい。だから俺は、この第二の人生を貴女への恩返しに使いたいのです」

日差しを浴びながら一切の曇りのない色男全開の笑顔でこの台詞である。

流石宇宙一格好いいモヒカンと言われる男だ。心構えが違う。

でもちょっと彼、義理固すぎやしませんかね。

だが恩返しをしたいと言われてもリゼットは実際のところ、タピオンの手を借りるほどに困っている事がない。

ドミグラの件には現在進行形で困っているが、残念ながらこの件に関してはタピオンの出来る事は皆無だ。戦いのレベルに差がありすぎる。

しかしリゼットには及ばずとも、その戦闘力は少なくとも界王神よりは上だ。

更にヒルデガン完全体の火炎放射すらも防ぐバリアも身に付けており、剣術の腕も一流。

何より聞いたところコナッツ星人は寿命が地球人よりも長いらしく、リゼットは彼を己の後継にする事を思いついた。

地球が安定するまで……とりあえず後100年くらいは神の座にいられた方がいいかな、とは考えているがリゼットはそのうち地球を完全に出て外なる宇宙へ旅立つつもりだ。

だが、その時になって後継がないのでは話にならない。

デンデを連れてくる事を考えなくてもなかったが、今までの経験上、ある程度の強さがないと不安になってしまう。

その点タピオンならば素質は申し分なく、かなりの実力向上が見込めるだろう。性格も誠実で優しく、ビジュアル的にも界王神に似てるので神様にしてもあまり違和感がない。

彼ならば地球を任せてもいいだろう。

そう判断したりゼットは、今から彼を後継として育てる事を決意したのだ。

今では次代の神候補として悟空達とも顔見知りであり、特にトランクスは彼を兄のように慕っていた。

ところでどうでもいいが、ブルマは今年で45歳である。

38歳誕生日とは随分サバを読んだものだ。

★

「さあ、楽しい楽しいビンゴ大会の始まりー始まりー！」

!?

「地球は楽しいーと、こ、ろだよー！　ごーはーんもーおーいしーい！

楽しいビンゴー！　ビンゴォー!!」

皆から少し遅れて誕生日パーティー会場に到着したりゼット達はいきなり混乱の

極みに立たされていた。

一体何がどうしてこのような事態を招いたのか……到着早々に彼女達が見せられたのは、ヘタクソな歌とダンスを披露して盛大なキャラ崩壊を起こしているベジータの勇姿であった。

いや、ここ最近のベジータが昔からは想像出来ないくらいに丸くなっていたのは知っている。

彼の弟であるターブルが来た時などはその妻のオプーナみたいな宇宙人にペコペコと頭を下げて弟が世話になっている礼を述べていたし、オプーナを買う権利を貰っていた。今となってはベジータは少し口が悪いだけで普通にいい人だ。

しかし、だからといってだ。いくら妻の誕生日だからといってここまでしゃぐ男でもなかったと記憶している。

一体彼の身に何があったというのか……もしかして酔ったのか？

「セ、セル。私は幻でも見ているのでしょうか？ ああのベジータがダンスを披露しているように見えるのですが」

「い、いや……私も同じものを見ている。恐らくあれは幻などではなくブルマが造

り上げたベジータそっくりのアンドロイドか何かだろう」

『どっちも違うぞ』

呆氣に取られて現実逃避をしていたリゼットに、遠く離れた界王の念話が届いた。緊急事態でもない限り界王が話しかけてくる事は基本的にはない。

その彼がこうしてコンタクトを取ってくるという事は、つまりは緊急事態なのだろう。

ベジータのダンスのせいでいきなり呆氣に取られてしまったが、よく見れば参加者の中に二人、見知らぬ人物が紛れ込んでいる。

一人はコーニッシュレックスという種類の猫によく似た獣人。あまり可愛くない。

もう一人は独特の髪型をした青い肌の優男だ。

どちらも只者ではない……非常にクリアで感じ取り難い気ではあったが、リゼットはかろうじて二人のかつてない強さを感じ取っていた。

仮に今の自分や悟空達が束になってかかっても、どちらか片方に容易くあしらわれてしまう程に強さの桁が……否、次元が違う。

恐らくは11年前に暴走した時の自分と同等か、あるいはそれ以上。

そんなのが二人、パーティーにさらっと交じっている。

リゼットはすぐにベジータの心を読み取り、そして地球がかつてない危機に晒されている事を瞬時に悟った。同時に、彼がプライドを捨てて機嫌取りに走るほどの事態であり、もしも戦いになればあの二人には勝ち目がほとんどないという事も。

しかも驚くべき事に孫悟空は既にあの猫人間にやられてしまった後らしい。

あの無駄に打たれ強い孫悟空をたった二発でKOとは……とんでもない強者がいたものだ。

『……事態は把握しました。正直驚いています……これほどの力を持つ神がいたとは……』

『う、うむ、何とかというか流石じゃな。話が早くて助かるぞ。』

とにかくそういうわけじゃ。絶対にビルス様の機嫌を損ねるでないぞ』

『ええ……何とか、上機嫌のまま去ってもらいます』

こんな事態は知識に全くない。

原作とGTの合間にこんな出来事があったという設定も見た事がない。

だが事実、今こうして破壊神という恐ろしい存在が地球へ来てしまっている。

……ドラゴンボールの世界で破壊神と呼ばれたり自称したりした者は何人か心当たりがある。

例えばセルはアニメで完全体になった時のタイトルが『戦闘力無限大!! セルという名の破壊神誕生』だったし、GTでは破壊神ルードという敵もいたはずだ。

同じくGTの敵である超一星龍も破壊神を自称していた。

だがそれらとは全く別の、本物の破壊神がこれほどの存在だったとは……。

リゼットは軽く息を吐き、心を落ち着かせる。

大丈夫、精神鍛錬は毎日のようにやっている。動揺せずに普段通りに振舞うのは得意だ。

無駄にへりくだってヘコヘコするのは避け、さりげなく相手を立てつつ接待すればいい。

普段通りの微笑みを浮かべ、リゼットはビルス達の前へと歩み出した。

「あ、神様。来てたの？」

事態をイマイチ把握していないブルマがリゼットへと手を振り、全員の視線が集

中した。

ビルスとその付き人もリゼットへと顔を向け、付き人は「ほう」と呟いた。

「ん？ この地球の神かい？」

「はい。貴方は破壊神様ですね。

此度は遠路遙々、よくぞ我が星へお越し下さいました」

「へえ、僕を知っているのかい。感心だね」

リゼットの口から破壊神、という単語が出た事でその場の全員が反応を示した。どうやら彼が破壊神という事を知らずに接していたらしい。

特にヤムチャなど、「やっちゃった」という顔をしている。

どうやら彼は持ち前のフレンドリーさを無意味に発揮してかなり気安く接していたようだ。

「ああそうだ。君、超サイヤ人ゴッドって知らないかい？」

「……いえ、聞き覚えのない名です。サイヤ人の神ですか？」

「いや、うーん、どうだろう。名前の響きからいってそれっぽくはあるんだけど、僕も詳しくは分からないんだ。ただ、予知夢を見てね……超サイヤ人ゴッドってい

うのが僕を楽しませてくれるはずなんだよ」

「まあビルス様の予知夢は結構外れますけどね。アイドルが近所に引っ越してくるとか」

ビルスの付き人がさりげなくビルスの予知夢を馬鹿にするが、ビルスもそれに本気で怒る様子はない。

それにしても宇宙単位のアイドルとは一体どんなのだろうか。

リゼットの脳裏には「みんな、抱きしめて！ 銀河の果てまで！」などと言って
いる超時空シンデレラが登場していたが、次の瞬間には何故か白いニンジャロボッ
トが出現してブンシン・ヘルタツマキでスリケンを投げてしめやかにアイドルが爆
散してしまった。ワザマエ！

「わかりました。調べてきましょう」

「お？ 調べる事なんか出来るの？」

「ええ。過去に精神を飛ばす部屋がありますので、そこでサイヤ人の歴史をあたっ
てみます。」

それまではこのパーティをお楽しみ下さい」

そう言い、リゼットは物質創造の神術でクレープを作り出してビルスとウイスに渡した。

皆の記憶を見る限り、ビルスとウイスは地球の食べ物結構気に入って喜んでいたので、ちょっとしたご機嫌取りだ。

ビルスは早速クレープにかぶりつき、「美味いぞー！」などと叫んでいる。とりあえずは成功のようだ。

時の部屋は以前に時の神の手に者に破壊されてしまったが、あれからポポが修理してくれたので過去の閲覧だけは可能になっている。

神殿に戻るついでに余計な事をしそうなヤムチャと魔人ブウの襟首を掴み、そのまま転移した。

可哀想だが、ビルスがいなくなるまではパーティー会場から強制退場だ。ヤムチャとブウは置いてくる。とてもこの戦いには付いて行けそうもない。

（超サイヤ人ゴッド、ですか……多分、超サイヤ人4の事ではないですよね。

何か、全く知らない設定が出て来てしまいましたか……まあ、頑張って探すようにしましょうか）

会場はベジータやセルがしばらくは持たせてくれるだろうが、限度もあるだろう。リゼットはビルスの機嫌が悪くならないうちに調べてしまおうべく、時の部屋へと直行した。

【時の部屋】

バーダックに壊されましたが、ポポが修理して過去の閲覧だけは出来るようになってる。

【神と神】

ドラゴンボールシリーズの劇場公開作品第18弾。

完結から18年以上経ってから公開されたまさかの新作映画。

他のパラレルワールド扱いの映画と違い、完全に正史という扱い。

ただし『超』とは展開が若干違う。

ベジータがビンゴダンスを踊った事で有名な一作。

【破壊神ビルス】

今作のボスキャラ。

神というものが軽視されがちなドラゴンボールの世界において突如出現した悟空達を遥かに上回る神。

意外とチョロく、美味しい食べ物を与えておけば色々我儘を聞いてくれる。毎回食べ物を餌に、ブルマにいいように使われている節がある。

【ウイス】

ビルの付き人の天使。未だに底を見せていない。

ナヲナヨした口調で話すキャラだが、ビルの師匠であり第七宇宙最強。ビルと同様、食べ物で釣れる。

【戦闘力】

・リゼット…20億

アルティメット化…1兆

・孫悟空…9億

超サイヤ人…450億

超サイヤ人2…900億

超サイヤ人3…3600億

・ピッコロ…100億

界王拳(30倍)…3000億

・セル…900億

パーフェクトセル…1800億

・ベジータ…8億

超サイヤ人…400億

超サイヤ人2…800億

・ターレス…7億5千万

超サイヤ人…375億

超サイヤ人2…750億

・魔人ブウ…600億

・ナツパ…5億

超サイヤ人…250億

スパーク付きのヒゲ…500億

・孫悟飯…2億

超サイヤ人…100億

(学者に専念して弱体化&超2への変身はやり方を忘れた)

・タピオン…50億

・トランクス

基礎戦闘力…800万

超サイヤ人…4億

・孫悟天

基礎戦闘力…780万

超サイヤ人…3億9千万

・カリン様…7億

バーストカリン20倍…140億

・Mr.ポポ…6億

バーストポポ20倍…120億

・兎人参化…2億

バーストラビット10倍…20億

・破壊神ビルス…???

・ウイス…???

・ランカスレイヤー…ニンジャ

Q、ピラフ一味は何でドラゴンボール集めてないの？

A、11年前に暴走リゼットの気弾を浴びてピラフの悪の心が消滅して別人化したから。

(ピラフは問題ばかり起こすので後のドラゴンボールでも戻して貰えなかった)

Q、コナッツ星人って寿命長いの？

A、このSSの設定です。見た目的に界王神に似てるので長く生きそうな気がしました。

まあオルゴールの中に1000年もいたんだし、老化を止める術があるという

事で。

第八十六話 神と神②

インフレ特急「そろそろ徐行運転止めて走るかな……」

リゼット「!？」

「おつかしいなあ……この星に超サイヤ人ゴッドがいるような気がしていたんだけど」

「ビルス様の予知夢が外れる。いつもの事です」

「何だと？ おいウイス、そりゃどういう意味だ」

破壊神ビルスはそれなりに上機嫌であった。

ウイスと軽口を叩き合っているが、彼の前には地球の食べ物が並んでおり、そのどれもが彼には新鮮で美味だったのだ。

リゼット達は知らない事だが、実は地球の食べ物は宇宙全体で見てもトップクラスに食い込んでいる。

それこそ美味しい食べ物を求めて宇宙中のあらゆる星で美味とされる物を食べてきたビルスが喜んで食べるくらいには、だ。

別の世界での話になるが、悟空もあの世よりもこの世の方が食べ物が美味いと言っていたが、あれは要するにあの世は宇宙人の比率が高いせいで食べ物も基本的に宇宙の食べ物になっていたからだ。

無論界王などが食べる物である以上、不味い料理が出されるはずもないのだがそれと比較しても地球の食事の方が悟空にとっては美味であつたわけである。

「ところでビルス様、あのプリンという食べ物はどうお食べになられましたか？」
「何!? プリンとな!?!」

ウイスの問いに対し、ビルスは飛びあがって店へ直行した。

破壊神のセンスはよく分からないが、どうもプリンというネーミングは彼の中の食欲を大いに刺激したらしい。かなり美味そうな食べ物に聞こえたようだ。

ビルスは上機嫌でプリンを大量に受け取り、両手に抱えてテーブルへと戻る。
どうやら全部食べるつもりのようなのだ。

「いいねえ、美味しそうだ。見なよウイス。少し揺らすだけでプルプルと揺れる」

「ええ。わたくしも一つ頂きますよ」

「うん、では早速いただきます――……」

ビルスが笑顔でプリンの蓋を開封し、スプーンで掬う。

そしてまさに口へ運ぼうとしたその瞬間に悲劇は起こった。

離れた場所で遊んでいたトランクスの蹴ったボールが何故か空中で軌道を変え、そしてビルスの手元のプリンを跳ね飛ばしたのだ。

そればかりかボールはまるで意志を持っているかのようにテーブルを蹂躪し、そこにあったプリンを全て地面へ叩き落とし、一つ残らず入れ物のガラス瓶は碎け散った。勿論中身は全滅だ。

唯一無事なのは咄嗟にボールを避けたウイスのプリンだけであり、しかし彼は主に譲る事なく美味しそうにプリンを食べてしまった。

ついでにボールはビルスの顔面に直撃した。

「ご、ごめんなさいい！」

「でもトランクス君、今の凄かったね！ どうやったの？」

ボールがグニャーって曲がったよ！ グニャーって！」

「へへへっ、ま、まあな！」

「……………」

子供とは無邪気なものだ。

そして今、自分達が地雷を完全に踏み抜いてしまった事に気付いていない。

ビルの頬がピクピクと震え、地面のプリンを見る。

あれだけ食べるのを楽しみにしていたプリンは無惨にも全て入れ物が碎け、中身が地面に零れてしまっている。

他にはもうない。プリンは今の一撃で全滅してしまった。

「ばっ、馬鹿野郎ー!! あ、あの、ビル様……………」

「……………うん……………ま、まあ……………子供のやる事だしね……………」

僕は寛大な神様だ……………怒ってないよ……………ただ、ちょっとイライラしてきちゃった……………」

ベジータが必死に弁明をしようとするも、言葉が浮かばない。

ビルスは俯き、プルプルと肩を震わせている。

もう本気でキレる5秒前だ。

それでもかろうじて耐えようとしているのは、子供のやった事だからだろう。

ベジータは必死の形相で周囲を見渡し、そしてプーアルがまだ未開封のプリンを持っているのを発見した。

よかった……まだ首の皮は繋がっている！

「プリンを……寄越せええええ！」

「あっ!？」

プーアルから問答無用でプリンを奪い取り、ビルスの元へと走った。

彼の堪忍袋の緒が切れる前に、このプリンを献上するのだ。

そうすればまだ、地球は助かる。

しかし焦りすぎていたせいでだろうか。地面に落ちていたプリンの容器のうちの一つを踏んで、ベジータは転んでしまった。

そして手にしていたプリンをビルスの顔にぶつけて割り、彼の顔をプリンまみれにした。

「……あの、ビルス様……これは、その……」

「……………」

ビルスは震えるのを止めて顔を上げる。

そこにあったのは、先ほどまでの上機嫌さが全て吹き飛んだ破壊神の怒りの形相であった。

「完全に……キレたぞー！ーッ!!」

ビルスの身体から紫色に輝く禍々しいオーラが解き放たれる。

しかし圧倒的な力強さを感じさせながら、その強さは未知数。

気を全く計る事が出来ず、強い事は分かってもどれだけ強いのかを読みきれない。未だかつてない事態に場の全員が戸惑い、しかし今が非常に不味い事態だという事だけは瞬時に理解した。

「い、いかん！ 止めるぞ！」

天津飯がすぐに戦闘態勢へと入り、人參化、クリリン、16号、18号と共に突撃を仕掛けた。

だが5人がかりの猛攻も何処吹く風。ビルスは悠々と全てを受け流し、5人を指一本の突きだけで一瞬にして失神させてしまった。

5人と入れ替わるように今度はナッパ、悟飯、タピオンが突撃する。

しかしこれも通じない。ビルスはナツパをデコピンで弾き、悟飯を掴んでタピオンへと投げつけて3人を瞬時に撃破してしまおう。

「っちい！ 悟天とトランクスは下がっている！」

「破壊神か何か知らんが、あまりいい気になるなよ！」

今度は地球でも有数の実力者であるピッコロとターレスが同時攻撃を仕掛けた。二人が正面から全力で猛ラッシュをかけるも、ビルスの余裕はまるで揺らがない。片手一本で二人の攻撃の全てをいなし、至極つまらなそうに腕を振るった。

それだけで二人共が吹き飛び、ピッコロは会場のテーブルをいくつも巻き込んで倒れ、ターレスは海へと墜落する。

それでも尚立ち上がってピッコロがマントを脱ぎ捨て、海から飛び出したターレスが雷光を纏った超サイヤ人2へと変身。先程以上の力と速度で左右から同時に攻めるが全く意味がない。

ビルスがターレスとピッコロの額に指を当て、それだけで二人は白目を剥いて崩れ落ちてしまった。

「あの二人が一瞬だと……くそっ！」

セルが気を全開にして飛翔する。

4人に分裂して四方から仕掛け、あるいは手で触れて人参化の能力を使い、フェイントを織り交ぜながら休まず攻め続ける。

だが当たらない、掠りもしない。

鬱陶しそうに、まるで虫でも払うかのような動作だけでセルは弾かれ、何とか倒れる前に地面に手についてダウンを免れる。

「ちいっ、たかがプリンで暴れるとは……大人げない神もいたものだ」

「君達地球人には食べ慣れた物かもしれないけどね。僕には味の想像もつかない未知の食べ物だったんだ。

プリン！ 何とも美味そうなネーミングじゃないか」

「知るか！」

セルはバーストリミットを発動し、両手を腰に溜めて気を凝縮する。

残念ながら加減が出来る相手ではない。

それこそ殺す気でやらなければ勝負にすらならないだろう。

故に遠慮はなく、この太陽系ごと消し飛ばす覚悟で全力の一撃を解き放った。

「かめはめ波！」

セルの掌から放たれた青白い光の奔流がビルスへと直進する。

直撃すれば惑星など容易く破壊する極大の一撃。

だがビルスは指一本で、まるで小さなピンポン玉か何かを弾くかのようにセルの全霊の一撃を弾き、宇宙へと飛ばしてしまった。

そればかりか一瞬にしてセルの前へと跳び、軽くはなっただけの左ジャブでセルの意識を混濁させる。

「がはっ……！」

続けてボディブロー。セルの身体が「く」の字に曲がり、顔が下がった所に右フック。

セルの身体が簡単に吹き飛ばされて木に激突し、巨木を根元からへし折ってようやく墜落した。

無論、セルに意識はない。今の数回の攻撃だけで完全にノックダウンしてしまっている。

「こ、こうなりや自棄だー！」

最後に残ったベジータが突貫するが結果はもう見えている。

突撃してきたベジータをビルスが軽く睨んだだけでベジータの動きが止まり、足がガクガクと震えた。

本能に植え付けられた生物としての絶対的な差。このままではどう足掻いても超えられない壁。

なまじセンスがあるからこそ、自分とビルスの差を肌で感じてしまい、恐怖で身体が縛られてしまったのだ。

そんなベジータをビルスが軽く小突き、それだけでベジータは地面に座り込んでしまった。

「何がしたかったんだい？ 肝心な所でへたれるからサイヤ人は嫌いなんだよ」

「ぐっ……こ、ここまでか。破壊神に破壊されるんなら、光栄かもな……」

「いい覚悟だ。お望み通り破壊してあげよう」

勝負は決した。否、戦う前から決まっていた。

これは無理だ、勝てない。ベジータをしてそう諦めるしかない程の絶対的な差が両者の間には横たわっている。

諦めたベジータの前にビルスが掌を翳し、彼を破壊すべく気を凝縮させた。

だがそこにブルマがツカツカと歩み出て、何をするかと思えばビルスに怒りの張り手を叩き込んだ。

これにはベジータも度肝を抜かれ、目を剥いている。

「ちよっとアンタ！ いい加減にしなさいよ！」

アンタのせいで私の38歳の誕生日パーティーが台無しじゃない！」

「……………」

ビルスは張られた頬に触れ、それから無言でブルマを張り倒した。

一撃で碎けず、それどころか気絶で済んでいる辺り実は相当加減しているのだろう。

だが目の前で妻を殴られたベジータの心境は穏やかではない。

少なくとも、『殺さないなんて何ていい神様だ』などと思うはずもない。

額に血管が浮き出し、その形相は諦めから憤怒へと変化していった。

「貴様、よくも……よくも、俺のブルマを——！」

ベジータが怒りに咆哮し、全身を青白いスパークが包んだ。

見た目こそ超サイヤ人2と何ら変わりはないが、その気は桁違いだ。

恐らくは超サイヤ人3の悟空と比較しても尚勝っているだろう。

その変貌にビルスが僅かな驚きを見せた隙を突き、ベジータの拳が彼の胸へ炸裂した。

「どりやりやりやああ！」

砂塵を巻き上げながらベジータがビルスへ乱打を放つ。

それを余裕をもってビルスが捌き、デコピンを放った。

その一撃で吹き飛ば———と思われたベジータだが、しかしその場で回転する事で衝撃を殺し、更に回転を乗せてビルスの首筋へと蹴りを叩き込んだ。

「何が破壊神だ！ ふざけるのも大概にしがれ！」

スパークを迸らせ、ベジータが怒濤の攻めを見せる。

そのうちの何発かはビルスに命中し、彼を空中へと吹き飛ばした。

その後を追ってベジータも飛び、更に連撃を叩き込む。

「いいぞ！ いけー、パパ！」

「やっちゃえー！」

「こりゃ凄い……ベジータの奴、悟空を超えたかもしれん！」

その光景にトランクスと悟天がはしゃぎ、亀仙人すらも悟空を超えた事を認めるしかなかった。

だが——それでも尚、力の差は絶望的だ。

しばらく黙って攻撃されていたビルスではあったが、やがて飽きたようにベジータの拳を払った。

「もういいや。それも超サイヤ人ゴッドじゃないみたいだね」

「……っ！ く、くそおお！」

尚も食って掛かろうとするベジータだが、ビルスにはまるで届かない。

彼が攻撃モーションに入る事すら許さずにビルスの指がベジータの額を打ち、彼の意識を奪い取ってしまった。

そのままベジータが地面に墜落し、この場にいる戦士はほぼ全滅を迎えた。

信じられない、と亀仙人は冷や汗を流す。

今ビルスに倒された戦士達は、そのほとんどがかつて宇宙一とまで言われたフリーザを超えていた。

それどころか宇宙の神である界王神すら歯牙にもかけぬ者達であり、間違はなくこの宇宙で最強の戦闘集団だったはずなのだ。

それが、まるで傷を負わせる事すら出来ずに壊滅などと……これは何の冗談だ。

「こ、これは一体何事ですか！」

戦いの気を感じたのだろう。

慌てたようにリゼットがその場に出現し、倒れている戦士達を見た。

それを見て彼女は瞬時に悟る。何が原因かは知らないが、どうやらビルスの機嫌を損ねる何かがあったらしいと。

そしてビルスを止めるべく皆が立ち向かい……こうして倒されている。

やはり思った通り、桁が違い過ぎる。

今の潜在能力を解放した自分だって、ここの全員を無傷で、こんな短時間で倒すなんて芸当は出来ない。

リゼットは汗を指で拭い、上空のビルスへと視線を向ける。

「ああ、地球の神か。遅かったね。

悪いけどこの地球を破壊して帰る事にしたよ」

「……何ですって？」

「ウイス、お前のいう通りだ。やはり超サイヤ人ゴッドなんていうのは僕の夢でしかなかったらしい」

恐らくハツタリなどの類ではないだろう。

この破壊神を名乗る猫人間はやると言ったら本当にやるタイプだ。

しかしだからといって、このまま「はいどうぞ」と壊させるわけにはいかない。相手の方が神格が上だろうが、もう知った事か。

この星を砕くというならば、それはもうただの敵。リゼットにとっては上司でも何でもない。

故にリゼットは今この瞬間を以て、ビルスへ立ち向かう事を決意した。

「……ならば私は地球の神として、今ここでビルス様——貴方を討ちましょう」
「へえ？ 少しは楽しませてくれるんだろうね？」

「貴方が負け戦を楽しむるのでしたら」

「へえ、言うじゃないか」

まずは潜在能力を全開放する。

だがこれではまだ足りない。まるで及ばない。

ならば今必要なのはあの力だ。

11年前には制御出来ずに守るべき地球そのものを攻撃してしまった、一度は封印すると決めた奥義。

そしてこんな事がなければ、これから封印し続けたらうはずの禁忌。

しかし今はそれが必要だ。危険を承知で使うしかない事態に追い込まれている。

あの時から修行に取り入れてきた精神鍛錬も全てはこの為。万一この力が必要になった時、今度こそは吞まれないようにする為。

「――Xenoverse」

己に向けられる全ての信仰を取り込み、神域へと昇華する。

リゼットの位階がビルスと同じ領域へとシフトし、ここでビルスの顔が驚愕に歪んだ。

翼が消えて光輪が背中に出現し、彼女の内歪んだ正義が暴れ狂う。

悪は滅せよ、悪は消し去れ、悪は裁け。

以前、リゼットはこの宇宙規模の正義の意志に吞まれて自我を失った。

相手の事情も何も考慮しない、極端なまでの正義の化身へと成り果てて墮ちた。だが今度は違う、もう二度と同じ醜態は犯さぬと自らに誓った。

だから必死に制御し、その矛先を自分の意志で曲げる。

討つべきはサイヤ人ではない。地球でもない。

よく見ろ、今戦うべき相手は目の前にいるあれだ。地球を破壊すると公言している傲慢な神だ。

相手の神格が勝ろうが知った事ではない。私は私の意思で、出過ぎた神を裁く。「何と……これは。以前に感じた気は、やはり気のせいではありませんでしたか」白く輝くりゼットを見て、ウイスはすぐに理解した。

今の彼女は自分達と同じ領域にいる。神の域に立っている。

正直信じ難い出来事であった。

こんな銀河の辺境の惑星の神が宇宙最大の力を持つ破壊神の域に踏み込んでいたなど信じられない。

歴代の界王神達だって、大半はこの域に踏み込んでいない。

「行きます……お覚悟を」

もう客人とは思わない。

今ここにいるのは、ヒルデガンやジャネンバと同列の倒すべき敵だ。

リゼットは『敵』を真っ直ぐに見据え、そしてビルスの予測を超えた速度で接近。全力の掌打を何の躊躇も加減もなく、第7宇宙全ての神の頂点に立つ男の顔へと叩き込んだ。

【戦闘力】

リゼット…20億

ゼノバース…4兆

(現時点ではバーストリミットとの併用不可能。身勝手も発動していない)

・ベジータ…8億

超サイヤ人…400億

超サイヤ人2…800億

俺のブルマ…4800億

・ビルス（お遊びモード）…10兆

【このSSでのゴッド、ブルー、俺のブルマ、その他諸々の倍率】

※あくまでこのSSでの数値です。

ブルー…20000倍

ゴッド…10000倍

俺のブルマ…6000倍

初覚醒ゴッド…????? 倍

暴走ゼノバース…????? 倍

ゼノバース…20000倍

アルティメット化（悟飯）…10000～20000倍

・初覚醒時のゴッドと、後に自力で変身出来るようになったゴッドは別物として扱います。

例えるなら仲間のサイヤパワーを受け取った超フルパワー超サイヤ人4と自力のみで変身する超サイヤ人4みたいな感じでしょうか。

あるいは「パワーをくれー！」状態の超悟空と普段の超悟空みたいなものか

もしれません。

納得できない方は、初覚醒時だけヤモシ・ソウルが憑依合体してオーバーソウルしてると思ってください。

リゼットのゼノバースも制御可能な程度の出力に抑えているので暴走時と比べる
とかなり弱体化していますし、身勝手も発動していません。

第八十七話 神と神③

神域同士の戦いが始まった。

リゼットの攻撃でビルスが吹き飛び、その後をリゼットが追う。

無論すぐにビルスも体勢を立て直して迎撃に移るが、その瞬間にリゼットの背の光輪が輝いてバーニアの如く光を発し、リゼットを加速させた。

速度が光に届くと同時に時が停まり、結果成立する——回避不能のカウンター！必ず命中するクロスカウンターがビルスの頬を打ち、一撃で彼の身体を成層圏まで吹き飛ばした。

だがまだ終わらない。亜空間を通過したりリゼットが先回りをし、飛んで来たビルスを背後から強打する。

一瞬にして成層圏まで運ばれたビルスだが、今度は一瞬にして地に落とされる。そのあまりの威力と衝撃に巨大なクレーターが形成され、瓦礫が宙に舞う。

だが、それほどの力で地面に落とされたビルスには目立ったダメージもない。

彼は岩をどけて立ち上がると、自らの身体に付いた埃を払い落とす。

「やるじゃないか。素直に驚いたよ。

超サイヤ人ゴッドには会えなかったけど、来た甲斐はあった。

君となら少しは楽しめるかもしれない」

ビルスが跳躍し、リゼットの前で回転。

遠心力を乗せた尾の一撃でリゼットを強打する。

一撃でバリアが歪み、今度はリゼットが弾き飛ばされた。

以前使っていた『身体が勝手に避ける』技は発動していない。発動の仕方も分からない。

神の力を制御可能になったとはいえ、それでもあの時のレベルには届いていないのだ。

「くっ！」

吹き飛びながら何とかリゼットは体勢を直し、ビルスへと身体を向ける。

そして光輪が再び輝く事で推進力とし、無理矢理その場で停止して再飛翔した。

ビルスが薄ら笑いを浮かべて拳を放つが、今度は当たらない。

瞬間移動で姿を消し、ビルスの背後を取ったのだ。

だがそれをも見切ったビルスが裏拳を放つが、その前に空間の穴が開いてビルスの拳を飲み込む。

そのまま空振りした拳はあろう事かビルス自身の前に開いた穴から出現し、ビルスは自分で自分を殴るというある意味新鮮な体験をする羽目となってしまった。それに合わせるようにリゼットがビルスの尾を右手で掴み、左手に気を纏う。

クウラ機甲戦隊のサウザーが得意とするような気の刃だ。

それを以て、手刀でビルスの尾を切断するべく振り下ろす！
だが——斬れない！ 全力の一撃でも僅かに、ほんの1cmにも満たない肉を切っただけだ。

これではちよつと切れ味のいいカッターか何かで指を軽く切ってしまった程度の傷でしかない。

「今のはちよつと痛かったよ」

ビルスの尾が蛇のようにうねり、リゼットの手を振り払う。

更に一発、二発！ 尾が鞭のようになってリゼットを殴り、振り向きつつビルスの右拳がリゼットのこめかみを殴った。

だがそれと同時に脱力にて衝撃を逃したりリゼットが回転し、回し蹴りを延髄へ叩き込む。

しかし怯むのは一瞬。ビルスは不敵に笑うとリゼットへ返しの蹴りを放ち、リゼットも正面から迎え撃って掌打を放つ。

放つ攻撃は全て光速以上。下手をすればその衝突だけで宇宙すらも砕きかねない神域の攻防。

もはや宇宙のいかなる高性能なカメラを以てスロー再生したとしても肉眼では到底捉え切れないだろう、そんな馬鹿げた速度の攻防が繰り広げられる。

互角……ではない。

リゼットが全力以上の力を発揮しているのに対し、ビルスはまだ遊ぶ余裕がある。均衡は除々に崩れ、リゼットの肌に傷と痣が刻まれていく。

「大したもんだよ！ 君は技術を使う事で持てる力以上の力を発揮している。

けど僕はね、その逆なんだ。まだ全然力を使ってないんだよ」

「……っ」

「惜しかったね。せめてその力を完全に物に出来ていたなら、少しは勝ち目があつ

たのかもしれない」

早くも勝利宣言だ。だがそれを吐くだけの実力を彼は有している。

リゼットがダメージを気にせずに猛攻を仕掛け、ビルスが面白そうに受けて立つ。純白と紫の閃光が空を翔け巡り、幾度も衝突を繰り返しながら大気圏を抜けて宇宙へと飛び出す。

衝突の余波だけでいくつもの岩石や小惑星を砕き散らし、あるいはそのまま貫通し、遂には太陽系どころか銀河すらも飛び出して二人は衝突と飛翔を続けて幾光年も離れた何もない宙域へと到着した。

「はああ！」

リゼットが一際強く気を解放し、完全な純白の極光と化する。

それにあえて合わせるようにビルスもまた紫の極光へと変わり、二人が加速に加速を乗せて光さえ置き去りにした速度で正面衝突をした。

その衝撃と余波だけで周囲数光年に渡り全ての岩石が消滅し、巨大な爆発が宇宙で巻き起こった。

一応リゼットも計算してこの場所まで誘導して全力攻撃を仕掛けたのだが、この

圈内に生命がなくてよかったと心から思う。

そして肝心のダメージだが、ようやく少しは与える事が出来た。

ビルの額から一筋の血が流れている。

だが問題はこちらの方だ。リゼットの身体は既に血塗れであり、白かったドレスも鮮血に染まってしまっている。

「こ、の！」

歯を食い縛り、修行で会得した治療魔術で自分自身を治癒して全回復する。

だが傷は癒えても気は戻らない。

本来は気も含めて完全に回復させる技なのだが、回復させた量に応じて自らの気を消耗してしまう。

したがって自分で自分の気を全開に戻しての永久機関は不可能だ。

しかし傷さえ戻れば問題はない。今のリゼットは常時元氣玉を吸収し続けているに等しく、彼女への信仰の念が途絶えない限り気は絶えず供給され続ける。

無限、とまではいかない。だが限りなく無限に等しい気を以てリゼットは次なる攻撃へと移行した。

彼女の周囲に光球が発生し、その数を倍に倍にと増やす。

二つが四つに。四つが八つに。

50が100となり、1000が2000へと変わる。

瞬く間に宇宙の暗闇を隠す程の光球が生成され、それが一斉に発光を始めた。

そして放たれるのは極光の豪雨。

「Ultimate blast!」

一発一発が恒星など容易く打ち砕く光の砲撃。

それが数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどの数の弾幕として発射された。

宇宙を純白に染め上げて光の豪雨がビルスへと襲いかかり、彼の身体を呑み込んだ。
だ。

逃げ場なしのこの豪雨に晒されてはさしもの破壊神といえど回避は出来ない。

だが回避する必要もまた、なし。

ビルスは光の中を突っ切り、まるでダメージなどないとばかりにリゼットの前へと飛び出す。

そして肘打ちを彼女の柔な腹へめり込ませ、頭が下がった所へ追い討ちの拳を叩

き込んだ。

しかしリゼットはその威力を受け流して回転し、ビルスの脳天へ胴回し回転蹴りを決める。

よめいたビルスへすかさず手を翳し、しかしビルスが驚くべき速度で復帰して同じく手を翳す。

——衝突。

二人の気弾が零距离で爆ぜ、超新星の如き爆発が周囲を焼き尽くした。

しかし二人は尚も耐え凌ぎ、爆光が消えるよりも早く次の手を打つ。

「Sparkling・Meteor!」

「これはどうだい？」

リゼットが手を掲げて白い彗星の如き気弾を生み出す。

否、もはや比喻ではなくそのサイズはまさしく彗星そのもの。地球にも匹敵する極大の気弾だ。

そしてこれを爆破した時の破壊力は、恒星が消える瞬間の超新星にも匹敵するだろう。

対し、ビルスは両手を合わせて紅蓮の気弾を生成。

まさしく太陽の如く燃え盛る巨大な破壊気弾と為し、リゼットの気弾へと衝突させた。

結果は互角。白と紅蓮の気弾が爆ぜ、その余波で銀河一つ分の宙域から全てが消し飛んだ。

この戦いを観戦していた老界王神は「いくら星のない宙域だからってやりすぎじゃ!」と叫んでいるがリゼットには届かない。

否、わかっていた所で加減出来る相手ではない。そんな事をすれば死ぬはこちらなのだ。

至近距離での宇宙規模の爆発を何とか凌いだリゼットだが、既にその身は満身創痍だ。

ドレスは至る所が破れ、全身が血で濡れている。

対し、ビルスは未だ余裕。腕を後ろに組んでリゼットが復帰するまで待つという実力と貫禄の差を見せ付けていた。

リゼットがすぐに身体の傷を最低限癒し、構えを取る。

それを確認し、ビルスもまた戦闘態勢へと戻った。

二人は更に白熱し、次なる攻撃へと移ろうとする。

だがそこにウイスが突如出現する事で、急遽として停止させられる事となってしまう。

「ビルス様」

「何だウイス、僕は今楽しんでるんだ。邪魔しないでくれ」

「しかしですね。あの北の界王の所にいたソン・ゴクウというサイヤ人が地球に来ておりまして。

ビルス様に面会を求めているのです」

「ああ、あいつか……別にいいよ、そんなの。だってあいつ超サイヤ人ゴッドじゃないし。

結局超サイヤ人ゴッドなんていないんだ」

「え？ それ多分作れますよ」

ビルスとウイスがマイペースに会話を進めるが、そこにリゼットもマイペースに割り込んだ。

どうやらビルスはもう超サイヤ人ゴッドを幻か何かだと切り捨ててリゼットとの戦いに集中しているようだが、リゼットの口から出た言葉に間抜け面をする。

どうやら今聞いた言葉が信じられないようだ。

「……どうということ？」

「どういう事も何も、調べてくると言ったではありませんか。

超サイヤ人ゴッドは確かに存在していたサイヤ人の神のようです」

そう、リゼットは時の部屋を用いて過去に精神を飛ばす事で今までそれを調べていたのだ。

そして、その彼女が戻ってきたという事は調べ物が終わったという事である。

呆然とするビルスを前にリゼットは自分が知り得た情報を開示した。

「超サイヤ人ゴッドというのは元々、悪のサイヤ人に対抗する為に善良なサイヤ人達が生み出したサイヤ人の神のようですね。結局その戦いは悪のサイヤ人が勝ってしまったわけですが。

私達のよく知る惑星ベジータで繁殖したサイヤ人が悪党だらけなのも、その悪のサイヤ人の子孫だからです。

もしかしたら、善良なサイヤ人の子孫が繁栄したIFの世界もどこかにあるのかもしれないません」

「ふうん。で、その作り方っていうのは？」

「5人のサイヤ人で手を繋ぎ、一人のサイヤ人へ善の気を送り込めばいいんです。そうすれば一時的にはありますが、神の域へと到達したサイヤ人の神を生み出す事が可能です」

お手を繋いで仲良くすれば神になるとは、何ともいい加減で安直だとリゼット自身も思っている。

だが実際に過去で見た光景でそうやっていたのだから仕方ない。

それにこれと似た出来事をリゼットは一度見た事がある。

あのブロリーとの戦いの際……悟空は皆のパワーを受け取る事で本来絶対に勝てないはずのブロリーを一時的とはいえ上回ってみせた。

今にして思えば、あれは超サイヤ人ゴッドの条件に極めて近い状態だったのだ。手を繋いでいない事と、あの時に気を送り込んだ面子の中にナメック星人が混ざっていた事で神化はしなかったが、もしあの時の面子がベジータ、悟飯、トラン

クス、ターレス、ナッパだったら成立していたのかもしれない。

他には『GT』の話になるが、悟空が超フルパワー超サイヤ人4になる時も同じような事をしていた気がする。

「ふうん……なら、一度地球へ戻ろうか。

おい君、星間の瞬間移動が使えるようだね。

僕とウイスを連れて地球へ戻ってくれないかい？」

「……地球を壊さないでしたら」

「ああ。超サイヤ人ゴッドと戦うまでは壊さないよ」

リゼットは一瞬、このままビルスを置いていくか、あるいは騙して恒星にでも放り込んでしまう事を考えた。

しかし置いていってもすぐに地球へ来るだろうし、太陽などの熱エネルギーでも彼を殺せるかどうかは分からない。というか多分効かない。

それより怖いのは、それで倒しきれずビルスを逆上させてしまった時だ。

その場合、地球どころか北の銀河ごと消されてしまう可能性が極めて大きくあまりにもリスクが大きすぎる。

それよりは悟空を超サイヤ人ゴッドにして二人で戦った方が勝算が高いだろう。リゼットはそう判断したのだ。

そうと決まれば善は急げ。リゼットは血濡れのドレスを素早く綺麗なものに代えたと、二人を一度地球へ戻す事を決めた。

地球へ戻ると、そこには悟空がいて「よう、神様」などと気楽に声をかけてきた。他の皆も無事、意識を取り戻しているらしく死者は一人もないようだ。

リゼットはピッコロから仙豆を受け取って口に放り込み、咀嚼して飲み込んでから悟空達にこれからやるべき事を伝えた。

超サイヤ人ゴッドに必要なのは5人の正しい心を持ったサイヤ人だ。

まず悟空をゴッドにするとして、彼を神域へと押し上げる5人を選抜しなくてはならない。

「まず悟飯君、悟天君、トランクス君は確定でいいでしょう。

地球人とのハーフである為、元々悪の気はほとんどありません。

残る二人は……」

リゼットはここで言葉を止め、チラリと残りのサイヤ人を見る。

残りはベジータ、ナッパ、ターレスの元地球侵略組だ。

この中から選ぶなら……まずはベジータだろう。先ほどのビンゴダンスを見るに、彼はもう昔のプライドだけのベジータではない。

守るべきものの為ならばプライドすらも捨てる事が出来る正しい心の持ち主だ。後は……。

「ベジータと……ナッパで」

ターレスはまず無理だというのがリゼットの考えであった。

彼は確かに地球の味方なのだが、サイヤ人特有の凶暴性や残忍性をそのままに残してしまっている。これでは超サイヤ人ゴッドは誕生しない。

一方ナッパは完全に地球に溶け込んでおり、今や気のいい農家の親父だ。今の彼ならば充分、条件は満たしているはずだ。

まあ駄目だったなら、その時はベジータの弟を連れてくればいい。

★

結果から言えば悟空のゴッド化は普通に成功してしまった。

どうやら本当にナツパでよかったらしい。

悟空は界王拳にも似た赤いオーラに包まれ、不思議そうに自分の手を見詰めている。

彼の全身を包み、揺らめくオーラは色こそ違えどリゼットと同種のものだ。

筋肉は凝縮されて細身になり、若干若返ってしまっている。

恐らくは身体が最も充実していた時期……即ち肉体的最盛期であった青年期にまで戻っているのだろう。

超サイヤ人という割には髪は逆立っておらず、極めて自然体に近い。

色々な意味で超サイヤ人4とは対極を行く変身と言っているだろう。

「よし、行きますよ悟空君。二人ならばあるいはビルス様にも勝てるかもしれない」

「いや、神様……まずはオラ一人でやらせてくれねえかな？

ビルス様だって、超サイヤ人ゴッドと戦いに来たんだろ？」

悟空はまずは一人で挑む事を希望のようだ。

本当ならばここで反対するべきなのだろうが、しかしビルスの実力の底が見えな

いのもまた事実。

ここは一度悟空に戦ってもらって自分は観戦に徹し、ビルスの動きを研究するのはそう悪い戦略ではない。

それに交替しながら戦えば悟空がやられてもすぐに仲間の元へ戻して回復させ、その間に自分が戦うという戦術も取れる。

そう考え、リゼットは悟空の言葉に今回は賛同してみる事にした。

【戦闘力】

- ・孫悟空…9億↓18億（ゴッドの力で一時的に基礎能力アップ）
- 超サイヤ人ゴッド（初覚醒）…54兆
- ・破壊神ビルス（ちよつと本気モード）…60兆

第八十八話 神と神④

悟空VSビルスが味気なかったので少し加筆しました。

神の域に達した悟空が飛翔し、ビルスへ殴りかかった。

ビルスはそれを様子見も兼ねて掌で受け止めるが、受けた手ごと身体が後方へ弾き飛ばされる。

直立の姿勢こそ崩さないままだが、元居た場所から5mほど離されてしまい、地面には二本の線が刻まれていた。

痺れる手と、今までにない感触にビルスの頬が吊り上がる。

いい手応えだ……これならば自分も『遊び』ではなく『戦い』が出来る。そうビルスは思った。

先程までやり合っていたリゼットも神の領域に届いていたし、驚かされた……が、それでもビルスから見ればまだ遊び相手だ。敵ではない。

勿論リゼットが弱いわけではない。破壊神ビルスの遊び相手になれるというだけで間違いなく破格の強さだ。

他の宇宙ならば破壊神候補にだってなれただろうし、この第七宇宙でもビルスの次に強い神と断言していい。

しかし今の悟空はその上に行く。

仲間達より集められたパワーを結集し、神の領域へ至った悟空の強さは普段とは比べ物にもならない。

「いいね。これ待っていたんだよ」

ビルスが笑い、全身から紫色の気が溢れだした。

悟空の強さを認めて遊びを止め、戦闘へとギアを移行したのだ。

神のクリアな気を感じ出来るのはこの場ではリゼットと悟空くらいなものだが、感じる事は出来ずともその存在感は全員が感じる事が出来る。

リゼットとの戦いですらビルスにすれば力を抑えた上での遊びに過ぎなかった……その事を痛感し、リゼットの顔が悔しそうに歪んだ。

「いくぞ、ビルス様！」

悟空が次なる攻撃へ移り、ビルスも迎え撃った。

二人が衝突した余波で突風が吹き荒れ、テーブルや椅子が宙を舞う。

そのまま二人は空へと飛翔し、正面からの乱打戦を開始した。

打撃音が空中に響き、町の人々は何事かと空を見る。

そして音の出所がカプセルコーポレーションと分かると、『またカプセルコーポレーションか』と思って日常生活へ戻った。

「だあああ！」

悟空の蹴りがビルスを吹き飛ばし、ビルスが市街地へ落ちていく。

だが地面に衝突する寸前で浮遊し、人々の頭上ストレスを遊泳するように飛び去った。

その後を追って悟空が迫り、飛びながら格闘戦を続ける。

橋の下を潜り、高速道路の上を飛び、ビルとビルの間を縫うようにして飛び、二人の戦いはますます激化していく。

打撃戦をしながら飛び、前方に高層ビルが迫って来る。

この二人ならば建物に衝突したところで何ら問題はない。そのままブチ抜いて続

行するのは難しくもない。

しかし建物にぶつかる寸前で悟空とビルスは二手に分かれて建物を避け、その向こう側で何事もなかったかのように戦闘を再開した。

一見すると善戦出来ているように見えるが……まだ、ビルスには届かない。

破壊神の拳が悟空を打ち、都の外にまで彼を吹き飛ばした。

その先へ一瞬で回り込んだビルスが悟空を蹴り落とし、地面へ落下する。

衝突——するも、尚も威力は衰えずに悟空は地面深くへ埋まってしまい、そのまま

ま大地を貫通して地下の空洞へ放り出されてしまった。

そこは地底湖になっており、ビルスもすぐに水を吹き飛ばしながら追って来る。

悟空も即座に体勢を立て直して迎え撃ち、再び互角の攻防戦が始まった。

超高速の格闘戦の中でビルスの拳打が悟空を打つ。しかし悟空は体勢を崩しつつも、すぐに反撃に転じてビルスを蹴り上げた。

そのままのけぞったビルスへ右拳を突き出すも腕を掴まれ、しかし即座に掴まれた腕を引く事でビルスを引き寄せ、左の肘を彼の腹へめり込ませる。

更に肘の角度を変えて今度は裏拳で顎を打ち、思わずビルスが手を離れた瞬間に

勢いをつけて回し蹴りを放った。

しかしビルスも冷静にこれをブロックし、素早く足を掴んでジャイアントスイングで悟空を投げ飛ばす。

そのままビルスは吹き飛んでいく悟空の先へ回り込んで拳を突き出す。

だが悟空は足からかめはめ波を撃つ要領で跳び、ビルスの拳を背中スレスレで通過させつつ後方宙返りを決めてビルスの背後を取った。

そしてビルスが振り向くと同時に更に横に回り込み、渾身の拳でビルスの横面を強打した。

だが体勢を崩しながらもビルスの尻尾が唸り、悟空の顔にクリーンヒットする。やはり格闘戦の中で四肢以外に使える部位がある者は一手多い分、強い。

二人は空中で静止し、互いの出方を伺うように一定の距離を保って睨み合った。「やるじゃないか。どうだ？ ゴッドになった感想は」

「……驚くしかねえな。こんな世界があったなんてよ。オラ一人じゃ来れなかった世界だ」

ビルスの賞賛に対し、悟空はどこか浮かない声で答えた。

それは己の不甲斐なさを責めるような、そんな声だ。

ビルスは彼の中に燦るそれを感じ取り、一度距離を開けて話す。

「不満そうだな。仲間と共にゴッドになった事が気に入らないか？」

「嬉しいさ。嬉しいけど、皆の力借りなかったらこうしてビルス様と戦えなかったのが悔しいんだ」

悟空はこれまで、仲間達と共に競い合い、高め合って強くなってきた。

だから仲間と共に強くなった事を恥じているわけではない。

しかし一方で彼はサイヤ人であり、戦士でもあった。

だから嬉しく思う反面、悔しさも感じてしまう。

今、ビルスと戦えているのは自分の力ではない。皆から分けてもらった力があるから戦えている。

皆の力で超サイヤ人ゴッドになった事だけを指しているのではない。もしも仮に、悟空一人の力でゴッドになったとしたら……きっと、これほど強くはなれなかっただろう。

それが分かるから、自分の弱さが悔しいのだ。

「そのプライドは弱点になるぞ。下らないプライドだ」

「かもな……」

ビルスの指摘に、悟空は素直に己の未熟さと精神的な脆さがある事を認めた。理性では分かっているのだ。これは自分の下らない拘りで、悪い癖だと。

そう、サイヤ人の悪癖だ……強い奴と戦いたい。自分一人の力で勝ちたい。

そう思う欲求が常に悟空の心の中には存在している。

かつてナメック星での戦いではその悪癖でフリーザの変身を見送り、全滅の危機を迎えた事もあった。

それでもこの悪癖は完治しないのだから、つくづく根が深いと自分でも思っている。

「けどよ、そのプライドがなければオラはここまで来れなかったんだぜ。

誰にも負けたくねえ……強くなりてえ。

ずっとそう思って、修行してきた。

それにベジータはオラなんかよりずっとプライドを持っている」

仲間を軽んじるわけではない。

子供の頃にクリリンと競い合うようにして修行してきた事も、過去の強敵達に負けまいと鍛えてきた事も悟空の誇りだ。

しかしやはり、戦士の本能が彼にはあるのだろう。

仲間達と競い合って高め合ったわけではなく、自分一人だけが高みに押し上げて貰った。

そこに、抜け駆けをしてしまったような後ろめたさと不満感があるのかもしれない。

しかし、それでもここで負ければ地球は破壊されてしまう。

だからベジータもプライドを捨ててまで道化に甘んじた。

ならば自分だけがプライドを優先するわけにもいくまい。

「その彼はプライドを捨てて皆を守っていたね」

「ああ、凄いだろう？ オラちょっと尊敬しちゃった」

地球や家族を守る為に滑稽に振舞う。

昔のベジータからは想像も出来なかった姿だ。

しかし悟空は、その無様とも言える姿を尊敬した。

あれほどプライドの高かったベジータがああまでした事を、素直に凄い事だと思っただ。

「だからお前もプライドを捨ててゴッドになったという事か」

「そういう事だ」

ビルの問いに悟空は静かな笑みを浮かべる。

それは自嘲的なものであり、しかし誇らしさのようなものが僅かに滲んでいた。ベジータがああまでして地球を守ろうとしてくれたのが悟空には嬉しかった。

正直なところ、以前まで悟空にとってベジータという男はよく分からない相手だったのだ。

同じサイヤ人で、その戦闘センスには一目置いていたし強さを求める心には共感も覚えていた。

だがベジータはフリーザと同じで悪人だ。今までにどれだけの命を奪い、どれだけの星を壊したか分からない。

かつて悟空は兄であるラディッツに対し、サイヤ人の所業を『そんな奴等は最低だ』と言い切った事があるし、当時は自分がサイヤ人である事そのものが本当に嫌

だった。

だから頑なにサイヤ人である事を否定し、自分は地球人の孫悟空だと拘ったりもしたものだ。

思えば、あの頃は自分も随分と若かったと思う。

あれから数十年が経ち、歳を重ね、サイヤ人への理解も増した今となっては自分の中で折り合いも付けられるし、サイヤ人のカカロットである事も受け入れているが……やはりベジータの残酷さと非道さ、自分本位さは悟空には理解出来るものではなかった。

距離は間違いなく縮まっているし、今のベジータが家族を愛していることも理解出来る。

だがその一方で、どうしても分かり合えない部分があるとも思っていた……どこか、見えない壁があるように感じていた。

そんな男が今まで何よりも優先していた『自分』を捨て、他人を……家族やこの地球を本気で守ろうとしてくれた。

その姿に、悟空は初めてベジータという男への敬意を抱けた。

本人が聞いたら怒るかもしれないが……初めて、ベジータが誇らしく思えた。彼の仲間である事が嬉しくなった。

そして同時に負けたくないと思ったのだ。戦士としても……人としても。

ベジータと同じく妻を持つ夫として。子を持つ親として。そして地球で育った一人の人間として……。

ああまでして地球を守ろうとしたベジータの気持ちがよく分かる。

だからこそ悟空も、彼の頑張りを無駄にしたいくないと思えた。

そんな悟空の前に、ビルスは彼を認めるように静かに笑みを浮かべた。

「……なるほどね。」

改めて名前を聞いておこうか。

界王星でも一度聞いたけど、今度はちゃんと覚えておくよ。

……破壊しても、忘れないようにね」

人の感情やしがらみは、神であるビルスにはよく分からないものだ。

彼には家族はいないし、守るべき存在もない。

しかし分からないなりに、悟空が確かな芯を持つ戦士である事は理解した。

故に今、ここにいるのはどうでもいいサイヤ人でもなく、ゴッドになった誰かでもなく。

今この瞬間、ビルスの中で悟空は完全に一人の敵として認められた。

「ひでえな。忘れてたのかよ」

「長く生きてると、一人の人間の名前なんてどうでもよくなっちゃってね。

けど君の名前なら、覚えておいてあげてもよさそうだ」

悟空が呆れたように言うが、ビルスに悪びれる様子はなかった。

彼の言う通り人間など、ビルスの長い生から見れば砂粒の一粒でしかない。

至極どうでもいいもので、個体名などいちいち記憶するのも面倒だ。

事実ビルスは、つい先日破壊した星の王の名前すら記憶してはいなかった。

しかしそれでも、認めた相手の名前くらいは覚える。悟空にはその価値があるとビルスは考えた。

「孫悟空……そしてカカロット。今度は忘れねえでくれよ」

「ああ、覚えておくよ……君を破壊した後もね」

悟空とビルスが同時に構え、不敵に笑う。

それから数秒の静寂が地底湖を包み、風すらもが二人の戦いに見とれた様にピタリと止まった。

悟空もビルスも、まるで時間でも停まったかのように微動だにせず、相手を見続ける。

だが均衡は、不意に破られる事となった。

「――！」

「……！」

二人が同時に消え、水柱が立ち上がった。

それから続けてあちこちで水柱が立ち、目にも止まらぬ激闘が再開される。

悟空とビルスの姿はなく、水だけが不規則に荒れ、吹き飛び、波打つ。

遅れて衝突音があちこちで響き、地底湖全体を揺らした。

ゴッドの力が悟空に馴染むにつれて悟空の動きはより鋭く、より速くなっていくがビルスとの差はまるで縮まらない。

悟空が力を増すごとにビルスもそれに合わせて力を上げているからだ。

やがてビルスは悟空を更にやる気にさせるべく、気弾を連射し始めた。

「っ、飛び道具かよ!？」

気弾攻撃を解禁したビルスに、悟空が非難するような声をあげた。

別に遠距離攻撃そのものを咎めているわけではない。

悟空達の戦いでは気弾や気功波など使って当たり前だし、むしろ使えない方が悪いという次元にある。

だが今回は場所が悪い。

ここは地底湖で、こんな場所でビルスほどの実力者が気弾の乱射などすれば当然地盤崩壊を起こすだろうし、その上には人がいるかもしれない。町があるかもしれない。

そうでなくても、こんな密閉空間で気弾を撃てばそれは絶対に地球に当たる。

普段悟空達は気弾や気功波をなるべく地上に向けて撃たないように気を付けるか、どうしても地上にぶつかる場合には規模を絞っている。

だがこんな密閉空間で気弾など撃てば、どこを狙っても必ず地球に当たってしまうのだ。

ビルスも一応破壊の規模は抑えているようだが、それでも地球の大地が破壊され

ている事には変わりはないだろう。

「おい！ あんまり星を壊すなよな！」

「は！ スポーツをやってるんじゃないんだよ！」

こんな所で気弾の連射などやるなという悟空の言葉は、当然のように聞き入れられない。

むしろますます連射速度を上げ、嬉々として気弾を撃つ。

悟空は避けるわけにもいかず、気を纏った腕や足で気弾を何とか消していくものの、やはり相手は破壊神だ。どうしても対処し切れずに何発かは壁や天井にぶつかってしまった。

しかも戦いの中でゴッドの炎が消えて通常状態に戻り、一気に劣勢へと追い込まれてしまう。

すると当然のように地底湖が崩壊を始め、瓦礫が次々と落ちてきた。

それでもビルスは攻撃を止めずに、むしろ面白そうに気弾をばら撒き続ける。

次々と落ちて来る瓦礫に生き埋めにされながら悟空は歯を食いしばり、星を壊し続けるビルスを見る。

「――破壊を楽しんでんじゃねえぞおおおッ!!」

悟空の叫びと共に黄金の輝きが溢れ、瓦礫を吹き飛ばした。

そのまま一気に突き進み、まるで泳ぐように岩の中を掘り進みながら一気に加速する。

しかし悟空はすぐにビルスを攻撃せずに、大地を貫いて空へと飛んで行った。
ここで戦っては地球へのダメージがある。だから続きは空でやろう、というわけだ。

すぐにその意図を察したビルスが悟空の後を追って飛び、黄金と紫の光が空を翔ける。

その二人の姿は仲間達にも見えたが、しかしピッコロが何かに気付いたように声をあげる。

「あいつ……ゴッドじゃない！　ただの超サイヤ人に戻ってしまっている！」

ピッコロの言葉にリゼットを除く仲間達全員が驚いた。

悟空がビルスと戦えるのはゴッドの力があればこそだ。

普通の超サイヤ人では戦いにすらならない事は既に実証されてしまっている。

だから皆は不安になったのだが、それを否定したのはリゼットだった。

「……いえ、確かに普通の超サイヤ人ですがこれは……」。

……信じられない事ですが、ゴッドの炎は消えていません。悟空君の中で燃え続けています」

リゼットにとっても、それは信じられないものであった。

彼女が過去の映像から見た超サイヤ人ゴッドとは、時間制限付きの最強変身であつた。

その弱点故に結局、ゴッドとなつたサイヤ人は変身時間が切れて最終的には悪のサイヤ人に敗れてしまつている。

だが悟空は違う。ゴッドの力を失つたのではなく、ゴッドの力を取り込んでしまつている。

それがどれだけ困難な事なのかは、他でもない神の力を使うリゼット自身が誰よりも痛感している。

リゼットの言葉を証明するように、悟空とビルスの戦いは続いていた。

悟空の拳をビルスがガードし、反撃に転じる。

だがそれを見切った悟空が瞬間移動で死角へ回り込み、ビルスの顔を強打した。そのままビルスを空へ運ぶように連打を叩き込み、雲の中へと入っていく。

吹き飛んだビルスを追って飛び、踏みつけるように蹴り飛ばす。

更に休まずにその後を追うも、体勢を崩しながらビルスが悟空を殴り飛ばした。そのまま追い打ちをかけるべくビルスが悟空に迫るが、今度は悟空が不安定な姿勢からの反撃でビルスを弾き飛ばす。

そのまま今度は手四つ。悟空とビルスが正面から押し合い、しかし力比べは不利と判断した悟空がすぐに膝蹴りを放つことでビルスを更に上へと飛ばし、すぐに飛んで追いかけた。

「……み、見えるか、クリリン」

「い、いえ……」

余りにレベルの違う戦いに亀仙人が、自分よりも動体視力に優れている弟子へと問うも、クリリンにも悟空とビルスの動きは見えていない。

無理もない事だ。今の悟空は神の領域に入っている。

ならば目で追う事すら困難であり、この中での動きを完全に視認出来ているの

はりゼットくらいしかない。

そのリゼットですら、見るのではなく実際に戦うとなればどこまであの速度についていけるか……。

悟空とビルスの戦いは成層圏へと戦場を移し、悟空の拳打が次々とビルスに炸裂している。

だがダメージは浅い。そう考えた悟空は一気に決めるべく大技の準備へと入った。

「か、め……」

幼い頃から使い続けてきた亀仙流の技の構えに入り、更に瞬間移動。

ビルスの横に、背後に、斜め上に。

次々と現れては消え、彼を攪乱する。

「は、め……」

十分な溜めを経て、悟空はビルスの下へと現れた。

その手の中には青白く輝く気が込められており、最大まで威力が高められている。ビルスは咄嗟に防御しようとするも、悟空の方が速かった。

ここからではもう、回避も防御も間に合わない。

「波アアアッ!!」

——気の激流がビルスを飲み込んだ。

かめはめ波の煙が晴れた時、そこにはほとんど無傷のビルスが佇んでいた。タイミングは完璧だった。回避も防御もさせなかった。

なのに健在どころか無傷に近いとはどういう事か……。

少し考え、やがて答えに行き着いた悟空は思わず引き攣った笑みを浮かべてしまふ。

何の事はない……ただ単純に耐えたのだ。

そもそもビルスは最初から全く本気ではなかった。

悟空との戦いですら半分以下の力しか使っておらず、故に最後のかめはめ波を耐える一瞬のみ力を上げて耐えた。ただそれだけの事でしかない。

加えて、その最後に見せた力すら6割近くといったところだ。本気には程遠い。

一方悟空は今のでほとんど力を使い果たし、息が上がってしまっている。

だがビルスはそんな悟空を見て、満足気に笑みを浮かべた。

「君、気付いているかい？ とっくに自分がゴッドじゃなくなっているってこと」
「……ああ。戦ってる最中はそれどころじゃねえから気付けなかったが……やっぱ解けちまってたのか。」

だが妙な感じだ……ゴッドじゃねえってのに、オラの中にゴッドが残ってるような、そんな感じがすんだ」

「ふむ。どうやらお前はゴッドとなって戦ってるうちにその世界を体に吸収してしまったようだ。」

だから超サイヤ人に戻ってしまっても、大してパワーダウンしなかった。

大したもんだよ、稀に見る天才と言っている」

ビルスの声には、嘘偽りのない称賛があった。

孫悟空ならばゴッドは一度限りの変身ではない。

仲間の力を借りた今回ほどのパワーはもう引き出せないだろうし、いずれは完全にパワーが切れて普段通りの強さに戻ってしまうだろう。

今、超サイヤ人のままゴッドの強さを維持出来ているのは一時的なものでしかない。

だがこの男ならば……いつか本当に自力で、この領域に再び駆けあがって来るかもしれない。

今度は時間制限付きの変身などではなく、確かな自分の力で……楽しませてくれるかもしれない。

(……ここで壊すのは惜しいね)

ビルスは目を閉じ、さてどうしたものかと思案する。

だがその彼に異変が起きた。

突然その身体が黒いオーラに包まれ、目が赤く輝く。

その目には今までであった理知的な部分が見えず、剣呑な光を宿していた。

「……ビルス様？」

突然変わったビルスの雰囲気悟空が緊張した声をあげる。

だがビルスは悟空の声など聞こえていないように、気を集めてリゼットとの戦いでも出した紅蓮の破壊玉を生成した。

「地球を……破壊する」

「なっ……!? お、おい！」

ここまでの会話の流れを突然ぶった切つての行動に、さしもの悟空も焦りを見せる。

そして、それと同時に悟空の前にリゼットが転移してきた。

☆

地上で悟空とビルスの戦いを遠視していたリゼットは悟空の疲労を感知し、彼の回復と選手交代の為に転移をしていた。

しかし彼女が来てみれば場はおかしな事になっており、ビルスが地球を破壊しようとしている。

「か、神様！」

「悟空君、これは……いえ、話は後にしましょうか」

リゼットはビルスに対抗すべく白い彗星をその場で生み出した。

再び対峙する紅蓮と純白の気弾。

だが、もしもこんな場所でこの二つの気弾が衝突などすれば余波だけで北の銀河

が消滅してしまうだろう。

何とか爆発させずに押し返すしかないが……果たしてそう上手くいくものだろうか。

「ふっふっふ……さしもの破壊神も戦いの中で隙が生まれたようだな」

対峙する二人を嘲るように声が響いた。

リゼットが視線だけをそちらへ向ければ、そこには4年前に姿を見せた魔神ドミグラが佇んでおり、勝ち誇った顔でこちらを見ている。

なるほど、この身の程知らずの自称魔神は今度は破壊神を標的としたらしい。

リゼットはあえて何も言わずに、更に気弾へと力を込める。

「今やビルスは私の操り人形。

破壊神が全宇宙を破壊し尽した後に、魔神ドミグラが支配する新たな世界が始まるのだ」

「……阿呆ですか、貴方は」

リゼットはビルスと対峙したまま溜息を吐いた。

いや、うん。百歩譲って宇宙征服の野望はありとしよう。ボージャックやパラガ

スだって抱いていた夢だ。

だが何もない宇宙を支配して一体この男はどうする気なのだろう。

あのパラガスだって、それを恐れてブローリーを制御していたというのに。

しかし彼はそんな蔑みの視線に気付かず、昂揚したように語る。

「さあ、破壊神の一撃を止められるかな？」

ビルスが破壊玉を持ち上げ、リゼットも同時に彗星を輝かせる。

そして二人は視線で語った。

——もうこのピエロを、これ以上躍らせなくてもいいだろう。

そして二人同時に、気弾をドミグラへと投げ捨てた。

「な、何!？」

ドミグラは声を荒げて、慌てたように避ける。

そんな彼の姿を軽蔑の眼差しで見やり、ビルスは神としての威厳を以て告げた。

「お前の気配には最初から気付いていたよ。

魔術にかかったフリをして姿を現すのを待っていたんだ」

「気付いていたのなら、何も本気で地球を壊そうとしなくともよかったのでは？」

貴方がプリンを食べられなかったのだって、どう考えても彼の仕業でしょう」

「それはそれ。これはこれだ」

ビルスが格好いい事を言っているが、プリン一つの為にマジギレして地球を壊そうとしたのは純然たる事実である。あれは演技でも何でもない。

その事をリゼットが冷たい視線を向けながら指摘するも、ビルスに悪びれる様子はない。

彼は後ろに手を組み、宇宙を遊泳しながらドミグラへと近付いていく。

その姿はまさに無防備そのものだが、ドミグラは手を出せなかった。

手を出したら自分が消える。そう悟ってしまえるだけの格の違いを肌で感じてしまったからだ。

「決めたよ。地球の代わりにお前を破壊してあげよう」

ビルスがドミグラを指差し、その爪先から閃光が放たれた。

ドミグラは咄嗟にそれを避けるも、僅かに掠っただけで右肩から先が消し飛んでしまっている。

勝負など成立しない。するはずがない。

今より行われるのは破壊神による一方的な破壊。ただそれだけだ。

リゼットとビルスが同時に掌を翳し、不可避の速度で気功波を放つ。

たったそれだけでドミグラはいとも呆気なく碎け、消えて行く。

だが消えながらも彼は、口元を笑みに歪めてみせた。

「く、くくく……まあいい。これもまた歴史にない戦いの一つ。

時の狭間が開くまで、後僅か……」

ドミグラが消滅し、だがすぐにリゼットはそれが幻影だったと気付いた。

前回と同じだ。またあの男は自らが直接出向くのではなく幻影で戦っていた。

いや、あるいは出て来れないのか？

最後の言葉の意味がわからずにビルスが目元を擦り、リゼットを見る。

「なんだい？ あいつの最後の言葉は」

「さあ……私もあの男の事は分かっているのです。

ただ、時間を越えて悪さをしているという事だけは確かなのですが」

「時間、か……そりゃ確かクロノアの領分だったな。

おいウイス、時の巢へ行くぞ。あいつに聞くのが一番早いだろ」

時の巢、クロノア。どちらもリゼットの知らない名だ。

だがどうやら、それがあのドミグラと関わっているという事だけは分かった。

何時の間にか悟空を地上に戻したらしいウイスがリゼットへ視線を向け、そして言う。

「貴女も来ますか？ あのだミグラという者について知りたいのでしょう？」

「ええ。同行を許されるのでしたら、是非」

時の巢。

どうやらそこが、答えへの手掛かりに繋がる場所のようだ。

リゼットはウイスの肩に手を置き、彼等と共に時空を転移した。

景色が変わり、目の前に広がったのは緑溢れる小さな庭のような場所だ。

ガラスに囲まれた空間は足元に草が生い茂り、清んだ水の流れる池も設置されている。

ガラスの外にはいくつもの惑星が浮かび、空間の隅には白い建物が建っていた。まるで茶碗を引っくり返して上から樹を生やし、周囲を塀で囲ったような建物だ。しかし、どこことなく神聖な雰囲気を感じ取る事も出来る。

「ここが時の巢、ですか？」

「そうだよ。久しぶりだなあ、ここに来るのも」

リゼットがビルスと話していると、建物の中からドタドタと足音が聞こえてきた。ビルス達の到着を察知したのだろう。

慌しく飛び出してきたのは女一人に男二人の三人だ。

そしてそのうちの二人の顔をリゼットはよく知っている。

一人は黒髪の悟空似の男。もう一人は銀髪の……11年前には一緒に戦っていた青年。

そして最後の一人は桃色の肌をした見覚えのない幼い少女。

少女はともかく男二人は初対面ではない。特に銀髪の青年は。

リゼットは流石に驚き、思わず彼の名を呼んでしまった。

「トランクス！ 何故貴方がここに？」

「リ、リゼットさん!? それはこちらの台詞ですよ！」

どうして貴女がこの時の巢にいるんですか!？」

そう。その青年はトランクスであった。

それもリゼットと同じ時間を生きているあの少年のトランクスではない。

11年前に一緒に戦っていた、未来からやって来た方の青年トランクスだ。

もしかしたら自分が知るのとはまた別の未来のトランクスなのかもしれない、と一瞬考えたが向こうのトランクスもちゃんとこちらを認識している。

つまり彼はやはり、自分達と一緒に戦ったあのトランクスなのだ。

そしてもう一人。緑色の戦闘服を着た男はどう見ても悟空の父バーダックだ。

11年前に自分が暴走した時にも現れた彼と同一人物と見て間違いないだろう。

「彼等は時の界王神が雇ったタイムパトロール隊員のようですね」

タイムパトロール……その単語を聞き、リゼットは「まるでドラえもんですね」と内心で思った。

時の界王神というのは、あの少女だろうか？

「あらあらまあまあ、これはビルス様！ お久しぶりです」

「うん、久しぶりだね時の界王神。ちょっと君に聞きたい事があってさ」

どうやらあの少女はビルスと顔見知りのようだ。

リゼットが小声でウイスに説明を求めると、ウイスは気前よく少女の正体を教え

てくれる。

彼女こそは東西南北のどこにも属さない時間を司る時の界王神にして、ウイスやビルスとも旧知の間柄になるほどの永き時間を生きている神だという。

外見からは想像出来ないが、今の界王神よりも遥かに年上の7500万歳以上なのだから。

「ドミグラとかいう奴が僕にちょっかい出してきてね。

どこにいるか教えてもらおうと思ってさ」

「奴は時の狭間に閉じ込められています。しかし……そこから出て来るのは時間の問題でしょう」

ビルスの問いに時の界王神が答える。

するとウイスが事情を理解し、ふむと呟いた。

「なるほど。狭間に出口を作る為に歴史を変えて時空を歪ませていたわけですか」
これまでに二度……いや、セルを惑わせた件を入れれば三度か。

地球にちょっかいをかけてきたドミグラだが、別にリゼットに用があったわけではなく、歴史にない戦いを起こしたかっただけらしい。

つまり勝ち負けはどうでもよく、今の所順調に彼の思惑通りに進んでいるという事になる。

「ああそう。じゃあ復活して出てきた所を破壊するでしょう」

ビルスの口から死刑宣告が放たれる。

今、この瞬間を以てドミグラは詰んでしまった。もう彼の望みはどれだけ足掻いても叶わないだろう。

仮に万事が上手く運んだとしてもビルスが出て来てしまうのだから、もうどうしようもない。

やはり身の丈以上のものに手を出す者は、最後には自滅するという事なのだろう。しかしそれは、一つの問題をも孕んでいる。

「止めて下さいい!? この世界でビルス様に暴れられたら時間が！ 時間の流れそのものがー!?!」

「だろうね。だって僕破壊神だから」

ビルスはどうやらドミグラを消してしまう気満々のようだ。

それは別にいい。ドミグラの自業自得だし、ビルスが倒してくれるというのなら

リゼットの的には有り難い話だ。

しかし問題となるのは場所だ。

この時の巢で暴れるのは、どうも時の界王神の反応を見るにかなり不味いらしい。言葉から察するに、ここで暴れると時間の流れそのものを破壊してしまうのだらう。

「待って下さいビルス様。それは私も困ります」

「知った事じゃないね」

「……止めて下さればこれ、あげますけど？」

そう言い、リゼットは物質創造で皿とプリンを創ってビルスの前に翳した。

物質創造ならばビルスやウイスも出来るだろうが、材料や造り方を知らないのでは創造出来ない。

つまりまだ、彼等は自力でこれを得る手段はないわけだ。

しかもビルスにとつては食べ損ねた御馳走である。彼の視線はプリンに釘付けとなり、舌まで出していた。

実にわかりやすい破壊神様だ。

「プリン！」

「さて、どうします？ 時間の流れを破壊するという事は、このプリンが作られる歴史も消えるわけでして、つまり要らないって事になりますけど」

「ぐぬぬ……よし、わかった。君だけは破壊しないでおいであげよう」

そういう問題じゃない。

いや、ビルスとウイスならばあるいは本当にリゼットと時間の流れを切り離して保護する事も出来るのかもしれないが、どのみちそれはリゼットの考えとは異なる。しかしそんな事を考えている間にビルスはリゼットの手からプリンを掠め取ってしまい、満足そうに平らげている。

餌で釣る作戦はよかったが、ビルスの手の届く範囲に置いたのは失敗だった。

本気で奪いに来たビルスを出し抜けるはずがない。

「ビルス様、ドミグラの事はどうか俺達に任せては頂けませんか？ お願いします」

トランク스가頭を下げ、ビルスへと懇願する。

こういう礼儀正しいところは流石未来トランクスというべきか。

現代のトランクスは無駄に生意気に育ってしまったので、是非彼を見習わせたい。ビルスは皿を舐めながら、面倒そうに答える。

「嫌だね。あいつは僕を利用しようとしたんだ。許せないよ。」

第一君達だけでドミグラに勝てるの？」

「ええ、勝てますけど」

「……まあ、君がいれば勝てるか」

どうでもいいがリゼットは今もまだゼノバースを発動しっぱなしの光輪モードを継続している。

せっかく制御に成功したのだから、このまま変身を持続出来るまで継続して身体に慣らしてしまおうという魂胆だ。

そうすればもしかしたら、かつて暴走した時のような力を発揮出来るかもしれない。

今のゼノバースは、制御する事に力の大半を使ってしまったのであの時ほどの力を発揮出来ないのだ。

だがそれでも、今の彼女はビルスすら認める神の領域であり、その彼女が「勝て

る」と言ってるのだから、それはビルスとしても納得する他ない。

「でもそっちの二人はどうなの？」

「必ず勝ってみせます。俺達に父さんや母さんを……悟空さん達を。

皆を守るチャンスを下さい！」

「うーん……」

ビルスは考えるように目元を擦り、それからリゼットを見る。

「……じゃあちよつとテストしてみよう。リゼットを相手にどこまでやれるか見せてもらおうか」

「え？ 私ですか？」

どうやら、リゼット本人の意思を無視して勝手に審査員にされてしまったらしい。まあビルス本人がやるよりは加減も出来るのでかえって好都合でもあるだろう。リゼットは小さく溜息を吐き、ビルスの勝手な提案を呑む事にした。

ドミグラ（幻影）..1000億

リゼット（……モヒカンじゃないんだ）

時の界王神「？」

第八十九話 トランクスとバーダックの挑戦

「あれからどれだけ腕をあげたのか、見せてもらいますよ」

そう言って静かに佇むリゼットを前にトランクスとバーダックは構えを取った。腕試しの場所は人のいない惑星で行われる事となり、二人はリゼットと正面から相対している。

トランクスはあれからかなり腕を上げたと自負していたが、どうやらリゼットはそれ以上に実力を伸ばしていたらしい。

今の彼女は光輪を背負っておらず、トランクスも見知った光翼を展開した姿だ。つまり神域を解除した状態であり、それでも尚二人より実力で勝る。

崖の上にはビルスとウイスが立っており、トランクス達の実力を見極めるべく目を光らせていた。

「はい、お願いします！」

「女相手に二人がかりか……俺も落ちぶれたもんだぜ」

「バーダックさん。リゼットさんを甘く見ては……」

「わーってるよ。だからこうして二人がかりに賛同してやってるんじゃないか」

2対1という構図がバーダックには不満なのだろう。気持ちには分からないでもない。

何せリゼットは実年齢はともかく外見年齢は14歳前後の少女であり、とても戦いなど出来るようには見えないのだ。

こう言ってはあれだが、戦闘意欲を刺激される相手ではないし至極やりにくい。悪党ならばその辺りも気にしないのだろうか、トランクスやバーダックにとって外見は愛らしい少女を殴るとするのはこの上なくやりにくい事だ。

だがこのテストに落ちればビルスとウイスが時間の流れを破壊してでもドミグラと戦おうとしてしまう。

絶対に無様は晒せない。

「最初から全力でいきます！」

だからトランクスは甘さと情を押し込め、今出せる限りの全てを出した。

超サイヤ人を飛び越して超サイヤ人2へ。さらに2すらも越えて3へと。

頭髮は膝まで届くほどに伸び、全身を雷光が包む。

その変化にリゼットも僅かに驚きを見せ、しかしその顔はすぐに笑みへと変わった。

「余裕じゃねえか。後悔すんぜ！」

バーダックもトランクスに合わせて気を解放する。

だがこちらは外見に変化がない。

超化を会得していないのだろうか？ 否、そうではない。

もう彼は超サイヤ人になる必要がないのだ。

恐らくは別の時間軸の老界王神と出会い、そして潜在能力を引き出されたのだから。

リゼット同様の変化を会得しており、凄まじいまでの気で溢れている。

「それでは——始め！」

ウイスが開始を宣言し、それと同時にトランクスとバーダックが翔けた。

そして全力で攻撃を繰り返す！

相手が女だという事は今だけは忘れなくてはならない。元より加減が出来る相手ではない。

だから全力を尽くす事が礼儀だと考え、トランクスは凄まじい速度で猛攻を仕掛けた。

そして思い知る。やはり彼女は強い、と。

バーダックとの二人がかりだというのにリゼットは涼しげな顔で悉くを避け、どうしても避け切れない攻撃を軽々と受け流す。

そうしながらリゼットが右手の指先をクイ、と動かした。

瞬間、彼女を中心として上方へと巻き上がる衝撃波が発生する。

もろに直撃を浴びてしまった二人は上空へと放り出され、更に追撃の気合砲で吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ！」

「ちいっ！」

今の攻撃で距離が開いてしまった。

その事の危険性を一早く察知したのはトランクスだ。

不味い、この距離は彼女の間合いだ！

リゼットは自身の前に空間の穴を開くと、そこに次々と気功波を放つ。

それと同時にトランクスとバーダックを囲うように空間の穴が開き、一斉に光を放った。

そして襲い掛かる、全包围からの気功波連射。

二人は必死に避けるが、上下左右前後から襲いかかる閃光を全て避けきれものではない。

どうしても被弾してしまい、ダメージが蓄積されていく。

特にトランクスは深刻だ。バーダックはまだ上手く直撃を避けているが、彼は何発か直撃を浴びてしまっている。

いかに連射の為に威力を落とした気功波といえど、それでもダメージは小さくない。

だがトランクスは歯を食い縛り、今気功波を撃ち終えたばかりの穴へ接近。そこに反撃の気功波を発射した。

するとリゼットの目の前からトランクスの気功波が逆流し、彼女を呑み込む。ダメージは……浅い！ 彼女自身が攻撃中だったためにバリアは展開していなかったようだが、それでもここまで戦力に差があっては軽傷にしかないという

事か。

だが攻撃は途切れた。この好機を逃すまいとバーダックが突撃し、瞬間移動染みた速度を以て距離を詰める。

「だああああああっ！」

「……っ」

嵐のようなバーダックの連撃をリゼットも的確に捌く。

避け、流し、逸らし、そして隙を見て反撃。

だがバーダックも予知していたように――否、実際に未来を予知してリゼットの反撃を見事に避けてみせた。

未来予知染みた読みと経験がリゼットにはある。だが対するは本当の未来予知。決して条件では負けておらず、互角の攻防が続く。

だが攻防が互角ならば地力が物を言う。

普段は地力の差を技術で覆すのがリゼットだが、今回は立場が逆だ。

バーダックの異能を強引に地力で捻じ伏せ、予知しようが回避出来ない速度で放たれた掌打がバーダックの胸を抉った。

リゼットの掌打は拳打と異なり、ダメージを内へと浸透させる。

決して表面上を激しく傷付けるわけではない。だがバーダックの体内に与える傷は深刻だ。

体内で炸裂した衝撃は彼の肋骨を砕き、臓腑を傷付ける。

たまらずに吐血したバーダックの顎を叩いて無理矢理身体を上げ、その場で横に半回転。

遠心力を上乗せしての渾身の一撃を彼の腹へと叩き込んだ。

「がはあああっ！」

いかに急所を外した攻撃とはいえ、大ダメージには変わらない。

地面を削りながら倒れ込み、その上へリゼットが飛んだ。

指先に気を集めて構え、振り切る。

すると横に薙ぐように気の衝撃波が発生し、倒れているバーダックへ無慈悲に襲いかかった。

しかしバーダックを庇うようにトランクスが飛び出してガード。彼とバーダックのいる場所だけを残し、地面が大きく削られてしまった。

「今度は俺が相手です！」

トランクスが飛び出し、リゼットへと猛攻を仕掛ける。

だが結局のところそれは先ほどのバーダックの二の舞だ。

いや、未来予知がない分バーダックよりも更に条件が悪い。

だがそれでいい。少しでも凌げればバーダックが回復するまでの時間を稼げる。バーダックは震える手で懐を探り、トキトキ都で販売されている『ゲンキ・カプセルⅠ』を口に放り込んで噛み砕いた。

すると身体の傷がたちまちのうちに癒え、ダメージが嘘のように立ち上がる。

「よくもやってくれやがったな！」

その復活劇に少しばかり驚いているリゼットへバーダックが飛翔し、トランクスと挟み撃ちにするように打撃戦を挑む。

しかしリゼットは己の両側に空間の穴を開き、同士討ちを誘った。

これにバーダックはすぐに気付いて手を止めるが、トランクスは止まらない。

結果としてトランクスの拳がバーダックの顔面へめり込む事になり、彼をよろめかせてしまった。

無論その隙を逃すりゼットではなく、両手を広げて気合砲を発射。

トランクスとバーダックを吹き飛ばした。

「ちいっ……まだまだあ！」

バーダックが空中で何とか停止し、再度突撃をかけた。

近接戦闘の技術では劣る。それは分かっている。

だが距離を取ってしまえばそれこそりゼットのやりたい放題だ。

ならば不利を承知の上で挑むしかない。

だが既にりゼットは十分な距離を取っており、次の技を完成させてしまっている。

彼女の背後には数えるのも馬鹿らしいほどの光の剣が滞空し、その刃先を一斉に

トランクスとバーダックへ向けた。

「千の剣よ、在れ！」

刃の豪雨が降り注ぎ、二人は一時避難を余儀なくされる。

一発一発が強烈な切れ味を誇る光の刃の乱れ撃ち。一発でも当たれば致命傷。

そんな攻撃を前に突撃するような無謀は流石に犯せない。

実際は刃の部分が丸くなっている有情仕様なのだが、それを一目で見抜けという

のは酷だろう。

しかし逃げてばかりでもない。バーダックが未来予知で安全地帯を割り出し、トランクスへ指示を飛ばした。

「そこだ！ 突っ切るぞ！」

「はい！」

刃の雨を掻い潜っての急接近。

そして距離を潰してから、零距离気功波。

相手の攻撃の瞬間こそが最大の好機であり、それを突く事こそがこの技——チェンジ・ザ・フューチャーである。

二人同時のカウンター気功波を浴びてしまったリゼットは地面に墜落し、しかしすぐに立ち上がる。

「……やりますね」

埃を払い落としながら不敵に笑い、上を見上げた。

トランクスが腕を高速で動かし、バーダックが掌を翳す。

そして放たれるのはバーニングアタックトリペリオントリガーの同時攻撃だ。

しかしリゼットは瞬間移動で二人の目の前へと飛び出し、両手から気功波を発射して二人を撃墜した。

チェンジ・ザ・フューチャーのお返しである。

更に急降下。何とか空中で体勢を立て直した二人の中央を通過し、光の翼で二人を同時に巻き込む。

ジャネンバの時のように切り裂きこそしないが、それでもダメージは小さくない。今度こそトランクスとバーダックは地面へ追突し、リゼットが空高く飛翔した。翼を広げて気を高め、腕を頭上で組み合わせて高めた気を一点集約。掌を砲門とし、地面の二人へと照準を定める。

その構えに見覚えのあるトランクスが咄嗟に全力での迎撃を選択し、バーダックもまた己の最大技での迎撃を選んだ。

「Raging blast!」

放たれた白い光の柱が二人へと突き進む。

それに対しトランクスは両手を上へと翳し、解放した気がドーム状に広がる。そして放たれるのは彼の持つ最大の一撃だ。

「サイクロンブラスト！」

トランクスと並び、バーダックが右手にありったけの気を集めた。

反撃の狼煙はいつだってこの技から始まった。

例え及ばずとも、この一撃には仲間達と自分の魂を込めているのだ。

だから今回もまた、勝てる勝てないなど関係なく、この技を決め技として放つだけだ。

「これで最後だあああ！」

トランクスとバーダックの渾身の一撃がリゼットの決め技と正面衝突する。

いかに二人がかりでも火力ではリゼットが上だ。

徐々に均衡が崩れて純白の輝きが二人の気功波を押し潰して行く。

その光景を見ていたビルスは頬を掻きながら「まあこんなものか」と呟き、ウィスは面白そうにリゼットを観察していた。

「ま、まだだ！俺達は、負けられないんだああ！」

「くそったれがああああ！」

トランクスとバーダックが咆哮し、最後の力を振り絞った。

サイヤ人だからこそ可能な、限界を超えて尚力を無理矢理引き出すという荒業。本来彼等の中に眠っているサイヤ人の更なる可能性を一時的に引き出すかのよう
な気のブースト。

それがリゼットのレイジングブラストを押し返し、一気に押し切った。

「……な!？」

リゼットは咄嗟にバリアを最大出力で展開し、直後に彼女を気の嵐が飲み込んだ。
宇宙まで飛んで行くほどの気の奔流。激流。

それが終わった時、リゼットはかろうじてバリアで守られてはいたものの、ドレ
スのあちこちが破れ、決して小さくないダメージを負っていた。

フラフラと地面まで降下し、ペタンと座りこんでしまう。

そしてどこからか取り出した白旗を出すとヒラヒラと振ってみせた。

「おや、どうやら勝負ありのようですね」

「……うーん？ まだリゼットの奴、余裕がありそうだけど……」

「しかし本人が負けを認めております。ビルス様、もう彼等に任せてしまってもよ
しいのでは?」

「……まあ、釈然としないけど……別にいいか」

ドレスを既に修復して己の傷を回復させているリゼットを見ながら、とりあえずビルスもトランクス達の実力を認める事にした。

ウイスはそれを見て満足気に微笑み、リゼットの後ろへと転移する。

そして小声で彼女へと告げた。

「よかったですね。ビルス様は気付いておられませんよ」

「っ!? な、なんの事でしよう」

「気の剣の刃先を潰していた事と、光の翼で本当は切断出来たのにしなかった事。それから本来の貴女ならばやっていたはずの急所狙いの攻撃を全く行わなかった事と、倒せるチャンスが何度もあったのにあえて追撃しなかった事。

それと最後の技、あれも本当は補助用の光球を数個浮べて複数の気功波を発射する技ですよね？

他にもまだえげつない札をいくつか隠し持っていそうですね」

「……………」

——全部見抜かれてる……。

その事を痛感しながらリゼットはようやく一つの事実が付いた。

もしかしくなくても、このウイスという付き人……ビルスより油断出来ない相手かもしれない、と。

【ゲンキ・カプセル】

ドラゴンボールゼノバースでタイムパトローラー（主人公）が買える回復アイテム。

トキトキ都で売っている。

回復アイテムはズルいつて？ そんな事言ったらゼノバースはクリア出来ません。（上手い人は除く）

【戦闘力】

・バーダック…8億

アルティメット化…4000億

・トランクス（ゼノ）…7億5000万

超サイヤ人3…3000億

Q、何でバーダックが究極化会得してるんだよ

A、ゼノバース（正確には2）の主人公は老界王神に潜在能力を引き出してもらってアルティメット化を習得する事が可能です。バーダックはその立ち位置なので習得しています。

バーダックは変に超化せず見た目が変化しない方が『らしい』と思ったので覚えさせました。

第九十話 復活の『F』（4回目）

| 人 人 人 人 人 |

> 復活の F <

| Y Y Y Y Y |

「それで、どうでしたか？ テストの結果は」

戦いが終わったトランクス達は再び時の巢へと戻り、合否をビルスへと尋ねていった。

ある程度の実力を示す事は出来たが、それでもビルスから見れば子供の遊びのようなレベルではあったはずだ。

それだけに彼の返答に緊張してしまうのも無理のない事だろう。

ビルスは眠そうに目を擦ると、面倒そうに言う。

「悪いけど、今日は久しぶりに運動をしたから眠くなってきたよ。」

だから僕はもう寝るけど、寝てる間に誰かがドミグラを倒してしまっても、それは仕方のない事だよね」

「ビルス様は一度寝てしまうと数年は目を覚ましません。

したがってビルス様のお力を借りる事は出来ませんので、そのおつもりで」

それは遠まわしで分かり難い合格宣言だった。

自分はもう寝るから、寝てる間にドミグラでも何でも倒してしまえと、そうビルスは告げているのだ。

その事に気付いたトランクスは破顔して頭を下げ、感謝を述べた。

「あ、ありがとうございます！」

ビルスは猫のように目を細めてトランクス達を一瞥し、それから目元を擦って背を向けた。

見た目といい気紛れさといい素直じゃない所といい、無意味に猫っぽい神様もいたものだ。

ウイスの背に手を当て、リゼットの手を引く。

それと同時に3人はその場から消え、ドミグラの事をこの場の戦士達へと託し

た。



ビルスとの戦いから数週間が経過した。

リゼットはドミグラがいつ動くかに気を払いながら、普段は瞑想をして過ごしていた。

普段行っているハードなトレーニングは一時中断だ。それよりも今は神の世界に何とか身体を慣らしたいと思っていた。

自らを神の領域へ押し上げる技法——『ゼノバース』。
これはまだ完成していない。

現時点では制御する事に力の大半を持っていかれてしまい、ただの強い変身にしかなっていないのだ。

だが本当はこんなものではないはずだ。臃げに覚えている、かつて暴走してしまった時の力は、もっと凄まじかった。

これを完全なものとすればドミグラとて恐れるに値する敵ではなくなるだろう。そうして神の力を吸収すべく己の世界に埋没して、飲まず喰わずでひたすら瞑想

を続ける事数週間。

少しは慣れたが、まだまだ目的には程遠い。

そして、どうやら今回は間に合わなかったらしい。

神殿にいくつもの見知った気が接近しているのを感じし、リゼットは瞑想を終えた。

やって来たのはベジータ、ターレス、ピッコロ、悟飯、セルの5人。地球でも最強クラスに入る戦士達だ。

だが様子がおかしい。

全員が禍々しい気を発し、黒いオーラを纏っている。

どうやらドミグラは地球の主力勢を纏めて凶悪化し、リゼットへぶつけてきたようだ。

そればかりかフリーザまで紛れ込んでおり、恐らくこれは別の時間軸のドラゴンボールを使ったのだろうと考えられる。

しかし今のリゼットならばフリーザ以外を殺さずに無力化する事も不可能ではない。

すぐに終わらせようと一步踏み出し——予想外の速度で突撃してきた悟飯に不意を打たれた。

「っ！」

悟飯の初撃を避け、続く連撃をも的確にいなす。

だがそのどれもが速く、鋭い。

どうやら凶悪化によって潜在能力が引き出されているらしく、強さが全盛期であつた10歳の頃と同等に……否、それ以上に跳ね上がっている。

無論、今のリゼットならば不覚を取る相手ではない。1対1ならば。

だが悟飯の隙を埋めるようにターレスとベジータが突撃し、リゼットを挟みこむように猛攻を仕掛けた。

「っ、厄介ですね」

こちらも凶悪化により限界を超えて力を引き出されたのか、ターレスは超サイヤ人3、ベジータはビルスと戦った時のよく分^俺からない超サイ^のヤ人^マとなつている。

二人を気合砲で弾き飛ばし、時間差で攻めてきたピッコロの右ストレートを避けて、無防備な顔へと掌を当てた。

ただ当てただけではない。特殊な力の操作により、掌の中に真空に近い状態を作り出した上で当てたのだ。

更にリゼットはそこから応用して、酸素濃度の極端に低い状態を作り出していた。人は数秒、あるいは数分間息をしなくても生きていける。

だが酸素濃度が極端に低い空気を吸引すると一瞬で失神してしまうのだ。

いわば神の設計ミス……ナメック星人にこれが適用されるかは五分五分だったが、彼等も空気を吸って生きている生物であり、地球で問題なく暮らしている以上は地球人と大差ない。

地球上で最も強力な毒とは何か？

答えは酸素……分かった時にはもう遅い。

ピッコロは白目を向いて倒れ、地面に落ちる前に念力で支えて寝かせた。

まずは厄介なピッコロを先に潰す事に成功し、すぐに次の敵へと意識を移す。

フリーザは……まあ、こう言う可哀想だが完全に戦力外だ。今更フリーザが出て来ても話にならない。

視線すら向けずに念力で爆散させ、気功波で消滅させた。

続けてターレスを倒そうとするも、そこに新しい気が接近している事に気付き一度距離を開けた。

「パンパカパーン！ 正義の死神ゴテンクス様参上！」

「……いや、何でフュージョンを習得してるんですか」

何故か誰も教えていないはずのフュージョンを会得したゴテンクスが、何故か神殿へと乗りこんできた。

どうやらドミグラが教えるか何かしたのでろう。

あらゆる時間軸を覗ける彼ならば、悟天とトランクスがフュージョンを会得した世界線を知っていても不思議ではない。

とはいえ……やはり今のリゼットの敵ではない。

リゼットは瞬間移動でゴテンクスの真上へと転移すると、掌打の一撃で地面へと叩き落とした。

更に追い討ちで魔法を発動し、落雷でゴテンクスを麻痺させる。

「っちゃあああああ！」

ベジータが叫びながら向かってくるが、リゼットの前に悟空が瞬間移動で現われ

てベジータの攻撃を防いだ。

どうやら彼は操られていないらしく、正気のままだ。

悟空はベジータを蹴り上げ、リゼットへ告げる。

「神様、ベジータはオラに任せてくれ！」

悟空はそれだけ言うとお空へと飛翔し、ベジータと攻防を開始した。

戦闘力はほぼ互角。

しかし不完全とはいえ神の気を会得した今の悟空ならば負ける戦いではない。

目に見えて悟空がベジータを圧倒しているのが見える。

「よう、援護は必要なかったか？」

「バーダック。貴方も来たんですか」

「ああ。ドミグラの野郎が本格的に仕掛けてきたみてえだな」

更にリゼットの援護に、タイムパトローラーのバーダックが時空を越えて出現した。

彼は不敵に笑うとターレスを視界に収め、ターレスもまたバーダックへと狙いを定めた。

そして二人はまるで最初から戦う相手を決めていたようにダッシュし、正面から愚直に衝突する。

見た目が酷似している二人だけあって、ああして戦闘に入ってしまうと全く見分けが付かないのが困りものだ。

「この馬鹿は俺に任せろ！　ちよいとヤキ入れてやるぜ！」

「バーダックウウウ！」

「はっ！　みっともねえ事になってるじゃねえかターレス！　俺がブン殴って正気に戻してやらあ！」

バーダックも流石の強さで完全にターレスを圧倒していた。

頼もしい助っ人二人の登場によりリゼットが戦うべき相手はセルと悟飯の二人だけとなり、同時に飛翔してきた二人の拳を難なく受け流した。

そして相手の攻撃こそが最大の好機。

リゼットは掌を開かず閉じず、まるで菩薩の手のような緩い握りとする。

人間が生まれた時に最初に形作る手の形。このいい具合に脱力した手の形こそが打撃の理想だ。

余計な動きは必要ない。肩から肘、肘から手首、手首から指。

攻撃に使用^っかう関節を連結加速し、通常以上の攻撃速度を以て悟飯の額を叩いた。

「――」

悟飯が白目を剥き、その場に膝を突いた。

パワーがいくら上がろうと、やはり修行不足。体術と身体能力は別物だ。

反射神経はいい。動体視力も素晴らしいものがある。

だが身体に馴染んだ動きというものがない。危機的状况において咄嗟に、考えるよりも早く動く為には弛まぬ修練が必須だ。身体に動きを覚えさせる事で初めて自然に、頭で考える前に動いてくれる。

いかに無理矢理潜在能力を引き出そうと、九年間もブランクがあつてはそれを活かす出来ない。

孫悟飯は戦いの天才である。

だが本人が望んだ才能ではなく、むしろ戦いを嫌っている。

ならばもう、戦いからは遠ざけてやるべきだろう。

妻がいて、子供も出来たのだ。ならば家庭を守る事こそが彼の戦いで、こんな事

は自分達だけがやっていればいい。

だからリゼットは、気絶した悟飯をそつと横たえた。

「ぶるわあああああ！」

今度はセルが凄まじい速度で攻撃を繰り出す。

だがこれもリゼットは冷静に流し、的確にカウンターを放った。

一手先、二手先、三手先——先の先を読み、更にその先を読む。セルにはその技術がある。

だがそれは未来のリゼットから得た細胞による技術でしかなく、今のリゼットの技術ではない。

前までならばそれでもよかっただろう。リゼットよりも未来のリゼットの方が経験で勝っていたのだから、必然的にセルの方がリゼットよりも技巧の面で上となる。だが今や戦いは未来世界にもなかった世界へと突入しており、完全に未知の領域にある。

こうなっては未来リゼットの技術はもう時代遅れでしかなく、今ここにいるリゼットの方が勝ってしまった。

リゼットの掌打をセルが両手で円を描くようにして受け流す。

あらゆる受け技の要素を入れた基礎にして奥義たる廻し受けならば多少の格上の攻撃すら捌き切る事が可能だ。

そして反撃の掌打！ しかしリゼットはそれを読んでいたように当たらないギリギリの間合いまで逃れており、セルのカウンターに更にカウンターを合わせた。一閃！ 顎に白い拳打が炸裂し、セルの核を揺らす。

膝から崩れ落ち、そこに駄目押しの手刀。延髄を叩いてセルを地面へ沈めた。

悟空とバーダックを見ればあちらも決着が付いたようで、二人共リゼットの前へと戻ってくる。

バーダックは何故か、妙に嬉しそうだ。

「へっ。ターレスの野郎、随分強くなりやがって……」

どうやらターレスとバーダックは顔見知りらしい。

一体どういう接点があるのかは不明だが、そのうち尋ねてみる事にしよう、とりゼットは思った。

だが今はそんな場合ではない。

「バーダック。これは……」

「ああ、ドミグラの野郎がいよいよ動きやがった。

俺は今から時の巢に戻ってあの野郎と決着を付けてくる」

「一人で大丈夫ですか？」

「さあな。だが何とかするしかねえ。

そんじゃ、行って来るぜ」

バーダックは拳を握り、その場から消え去った。

ここより先は時間軸を越えた先で行われる戦いであり、リゼットが行ける場所ではない。

つまりはバーダックとトランクスに任せる他なく、彼等の勝利を信じる事しか出来ない。

「おいリゼット。何かこいつら暴れたから、やっつけちゃったぞ」

神殿の奥からそう言いながら出てきたのは魔人ブウだ。

その手には気絶した Mr・ポポや人参化、タピオンを引きずっている。

見かけないと思ったら魔人ブウが取り押さえていてくれたらしい。

流石に魔法にも長けた魔人というべきか。今回はしつかり洗脳に抵抗してくれたらしい。

「よくやってくれました、ブウ。えらいですよ」

「えっへん。もっと褒めろ」

ブウの頭を撫でてやると、彼は目に見えて上機嫌になる。

それにしてもすべすべしていながらモチモチで、なかなか触り心地がいい。

リゼットは基本的にモフモフの方が好きだが、これはこれでありかもしれない、などと思いつめていた。

そうして魔人ブウを褒めながら彼のお腹をタップタップしていると、悟空が不思議そうに声をかけてきた。

「なあ神様。今の奴は誰だったんだ？」

オラやターレスによく似てたけどよ……」

「……貴方のお父さんですよ、彼は」

「いいっ!? お、オラの父ちゃん!? 何でオラの父ちゃんが生きてるんだよ！」

惑星ベジータの爆発で死んだってターレスが言ってたぞ！」

「それは私にも分かりませんし、もしかしたら彼は別の時間軸のバーダックの可能性もあります。」

けど、それでも紛れもなく彼は孫悟空の父です」

突然の事に混乱しているらしい悟空にリゼットはバーダックの事や、これまでに起きていた時の異変の事を話して聞かせた。

トワとミラという二人の魔族。彼等が行ってきた時の改変。

そして魔神ドミグラにタイムパトローラーとなったトランクス。時の界王神と時の巢。

それらを聞き終え、悟空は「なるほど」と呟く。

「悪い。正直なところ、色々複雑すぎてイマイチわかんねえ」

「……まあ、そうでしょうね」

「けど、とにかくドミグラって奴が悪い事だけは分かったぞ。」

『時の巢』 ちゅうんはどうやって行けばいいんだ？」

「いえ、それが……時間軸を越えた先にあるものなので、私の力でもそこまでは行けないんですよ」

「いいっ!?　じゃ、じゃあどうすんだよ!　オラ達何も出来ねえんか!?

倒すべき敵は分かっている。場所も判明している。

だがそこへ行く方法だけがない。

その事にリゼットと悟空は途方に暮れ、空を見上げた。

このままでは本当に今回は出番なしで終わってしまう。

全時間の命運をかけた戦いなのだから参加してドミグラを倒したい気持ちはあるのだが、行けないものは行けないのだ。

「こ、困りましたね」

リゼットは頬をかき、どうしたものかと頭を悩ませた。

いかに彼女の転移でも時間までは越える事が出来ない。

つまり、現状において彼女達が最終決戦の場へ赴く事は不可能という事になってしまう。

「お困りのようですね?」

しかしそこに、待ってましたとばかりにウイスが現われる事で問題は解決した。どうやら、何だかんだで状況をずっと見守っていたらしい。

何とも人の悪い事だ。

【戦闘力】

・リゼット…20億

アルティメット化…1兆

ゼノバース…4兆

・孫悟空…9億

超サイヤ人…450億

超サイヤ人2…900億

超サイヤ人3…3600億

疑似ゴッド…5400億

※神の力を上乗せした超サイヤ人。ビルス戦で見せたあれ。

初回に比べると大幅に弱体化している。

まだウイスの修行を受けていないのでゴッドにはなれない。

・ベジータ…8億

俺のブルマ…4800億

・バーダック…8億

アルティメット化…4000億

・セル…900億

パーフェクトセル…1800億

バーストリミット…3600億

・ピッコロ…100億

界王拳（最大30倍）…3000億

・ターレス

基本戦闘力…7億5千万

超サイヤ人3…3000億

・孫悟飯…4億

超サイヤ人2…400億

・ゴテンクス…4億6800万

超サイヤ人…234億

※精神と時の部屋で修行していないので超3なし&原作より大幅弱体化

・フリーザ…1億2千万

第九十一話 時の魔神

Q、ドミグラさん、何で前回ナツパだけハブったの？

A、ドミグラ「え？　だってナツパとかどの世界線でも大体雑魚やん。
というかあの世界、ナツパ生きてたの？」

「では、ご健闘に期待します」

ウイスに連れてこられた場所は、以前の平和な時の巣とは全く異なる空間であつた。

空間は薄暗く染まり、恐らくはトキトキ都の中心だろう砂時計が崩れている。

その周囲には壊れた時の歯車が無惨な残骸を晒しており、ドミグラの攻撃の凄まじさを物語っていた。

だがどうやら、間一髪で間に合いはしたらしい。

空中にはドミグラが見下すように浮かんでおり、その両脇をトランクスとバー

ダックが固めている。

どうやら二人のタイムパトローラーは洗脳されてしまったようで、今や時の界王神は孤立無援の状態だ。

神の世界を経験した者か、あるいは神そのものでなければあの洗脳に抗うのは難しいのだろう。

魔法に長けた魔人ブウも一度目は洗脳されてしまっていた。

ウイスは二人を送り届けると、そのまま姿を晦ませてしまう。

どうやら前言通り、協力する気はほとんどないらしい。

「時の界王神様！」

「悟空君！ それにリゼットちゃんも!? どうしてここに！」

時の界王神が驚いて二人を見るが、実はリゼットも驚いていた。

正直、この年齢になってちゃん付けで呼ばれる事になろうとは。

流石は7500万歳以上か。彼女から見ればリゼットなど、まだまだヒョッコなのだろう。

「ウイスさんに連れて来て頂きました。

「どうやら、かなり危ない場面だったようですね」

「え、ええ。トランクスとバーダックが奴の術にかかっちゃって。」

それに時を生み出す鳥……トキトキっていうんだけど、その子もドミグラに飲み込まれちゃってね。

正直、来てくれて助かったわ」

どうやら本当に危ない場面だったらしい。

突撃してくるトランクスとバーダックを悟空が迎え撃ち、その隙にリゼットがドミグラへと向かった。

とりあえず悟空ならばあの二人相手でも不覚を取る事はないだろう。

ならば自分はその間にドミグラを倒してしまえばいい。

そう判断したリゼットは潜在能力を解放してドミグラへ向けて気弾を放ち、彼を吹き飛ばした。

しかし流石にドミグラも弱くない。すぐに着地して体勢を立て直し、余裕の表情でリゼットを見る。

「来たか、地球の神よ。遅かったじゃないか。」

トキトキは我が手に落ちた。これから私は時空を支配する新たな神となるのだ」
「そうですか。ならば貴方を倒してしまえば解決というわけですね」

「無駄な事を。それよりも私の部下になる気はないか？
過去も未来も思うがまま。永遠の時間を生きられるぞ」

「生憎ですが間に合ってます」

ドミグラが魔術で杖を操る。

通常の棒術とはまるで違う、杖が自分で勝手に動いているかのような遠隔操作だ。
しかし武器を手放すのはリゼットに言わせれば決して賢い選択ではない。

向かってくる杖の先端を獲り、体重をかけてテコの原理でドミグラの顎へ棒を命中させた。

よろめいた所にすかさず突き。喉を杖の先端で強打してからハイキック。光速の蹴りがドミグラの頬を蹴り碎き、更に杖を地面に突いて跳躍。

空中で回転し、遠心力を乗せて杖でドミグラの顔面を殴打した。

「ぐぬっ！」

余裕を崩して立ち上がったドミグラへ向けて杖を投げ返した。

咄嗟にドミグラが受け止めた瞬間を狙って屈み、視界から外れて下から攻める。跳ね上がるように全身のバネを使ってドミグラの顎を打ち上げ、更に無防備な首を掴む。

そのまま思い切り投げ飛ばし、砕けた歯車の尖った部分へ痛烈に叩き付けた。

「小癪な……時を統べる新たな神に逆らうとは」

ドミグラが黒い気弾を発射するがりゼットはそれを紙一重で避けながらドミグラへと接近した。

彼は強い事は強いのだが、体術はあまり優れているとはいえない。

攻撃動作はいちいち隙が大きいし、どちらかといえば魔術頼りのタイプだ。

まあ、7500万年も時の狭間に閉じ込められていたような男だ。なまっても仕方のない話だろう。

いくら寿命が長かろうが7500万年もブランクがあればロクな体術を使えるはずがない。

どう見ても自主的に修行などするタイプでもないし、残念ながら接近戦においてドミグラはりゼットの敵ではなかった。

掌打で胸と腹を打ち、股間を蹴り上げて悶絶させる。

遠心力を乗せて鞭打！ 痛みに怯んだ所へ更に連撃を叩き込み、右足を軸に回転。

リゼットの長い髪がドミグラの目に当たって視界を奪い、怯んだ所へ思いきり回り蹴りを放って転倒させた。

「神に逆らう者がどうなるか知っているか？」

起き上がり、浮遊しながら何やら話しているようだがリゼットはそれを無視し、腕を引く。

そして放つのは、神の裁きの代名詞とも言える落雷の魔法だ。

「天罰を受けるのだ！」

叫んだ直後に落雷に打たれたドミグラは落下し、地面に墜落した。

更に追い討ちの気弾連射。王子戦法とか負けフラグとか言っではいけない。

爆光が連鎖的に輝き、それが終わった時、ドミグラは全身をボロボロにして倒れ伏していた。

だが流石に魔神。見た目ほどのダメージは受けていない。

杖を支えに立ち上がりながら、忌々しそうに呟く。

「……ふん、いい気になるなよ。」

見せてやろう、魔神の真の力を！」

ドミグラは黒い気弾を連射し、一気に距離を取る。

どうやら近接戦闘は不利と見て遠距離からの魔術連射に戦術を切り替えたらしい。

しかし遠距離戦はリゼットも得意とする分野だ。

拳を握って大きく引き、前へ突き出す。

すると巨大な気の拳が顕現してドミグラの魔術を碎きながら直進。ドミグラを殴り飛ばした。

続けて空間の穴を開き、気功波を連射。

するとドミグラを囲うように穴が開き、次々と閃光が発射されて彼を打ちのめした。

「くそっ、忌々しい奴め！ 何故貴様には神である私の術が効かん!？」

「まあ、私も一応神ですし」

「笑わせるな、私以外の神などこの世にはいらん。その澄ました顔を絶望に染めてやる！」

放たれる魔術の数々を見ながらリゼットは目を細め、その場から消えた。そして一瞬にしてドミグラの前へ出現し、零距离気功波！

閃光がドミグラを呑みこみ、齒車へと追突させた。

正直、心底惜しい男だと思う。

実力はある、魔術も使える。間違いなく彼は強い。

単純な戦闘力だけを言えば決してリゼットにそこまで劣ってなどいない。

だが経験がない。強敵との戦闘経験が圧倒的に欠如している。

これでは格下に勝つ事は出来ても、魔術が通じない格上相手は無理だ。

「おおおっ！」

ドミグラがその場から消え、リゼットの背後から連撃を仕掛けた。

杖と蹴りを素早く繰り出すも、リゼットには当たらない。

その悉くを避けられ、軽く見切られてしまっている。

更に転移、上から仕掛ける。

今度は右から、左から。

だが通じない。どの角度から仕掛けても、まるで柳でも相手にしているかのように流されてしまう。

それどころか、攻撃の隙を見付けたりゼットがドミグラの右手の指を掴むとそのままへし折ってしまった。

「ぬっ!？」

「少し、痛いですよ」

へし折った指を放さずに、指を支点としてドミグラを投げて歯車へとぶつけた。更にもう一度投げ、更に投げる。

その度にリゼットに掴まれた指はあらぬ方向へと曲がり、関節が滅茶苦茶に破壊されていく。

「離せ！」

ドミグラが無事な左手で攻撃を仕掛ける。

だがリゼットはあっさりと右手を解放すると、今度は左手の指を掴んでしまった。そして再びあらぬ方向へと曲げて、何度もドミグラを投げて周囲の何かへぶつけ

る。

ドミグラにダメージを与えつつ指などの末端部位を破壊するという悪辣な攻撃だ。

ようやく指を放したかと思えば間髪を容れずにドミグラの額へ指を当て、破壊力を集約させた一点貫通性の気功波を発射した。このまま頭を破壊して終わらせてしまおうという魂胆だろう。

しかしドミグラは咄嗟の判断で上体を大きく逸らして閃光を避け、だがその不安定な姿勢を狙ってリゼットが彼の足元を蹴り払った。

当然のようにドミグラが背中から地面に倒れ込み、リゼットがそこに気弾を放つ。致命傷には程遠い。だがすぐに煙の中から飛び出して距離を取ったドミグラは確かなダメージを負っており、完全に戦いのペースはリゼットの手の中であつた。

「何なのだ……何なのだ、お前は！」

ドミグラは憤怒の表情でリゼットを睨む。

そして杖を両手で握ると、更に気を高めた。

どうやら、まだ本気ではなかったらしい。本当に勿体無い実力の持ち主である。

「もう遊ぶのはやめだ……数千万年に渡って蓄えたパワーの全てを解放し、お前を完全に消し去ってやる！　そしてお前を殺した後は、お前の過ごしてきた全ての時間を消し去ってこの世からもあの世からも抹消してやるぞ！」

ドミグラの全身を黒い気が包み込み、その姿を変えて行く。

身体の色はまるで服と一体化したかのような青へ。

腕や足は太くなり、赤い髪は鬘へと変化した。

その顔はまるで竜のような異形へと変わり、例えるならば二星龍とヤコンを合わせたかのような顔立ちだ。

膨れ上がった全長はリゼットの3倍以上もあり、比べてみればそのサイズ差は大人と子供どころの騒ぎではない。

「なるほど……確かに凄まじい気ですね」

リゼットは風圧で顔にかかってしまった自身の髪を指で払い、あくまで冷静にドミグラを見る。

なるほど、確かにパワーは凄まじい。直撃すれば無事では済まないだろうと一目でわかる。

ドミグラの豪腕がリゼットを狙い、しかしリゼットは軽やかな動きで第一撃目を避けた。

そうして隙だらけになった所で気弾を連射してドミグラに当てるが、まるで怯みもしない。

再び振るわれた拳を避け、その拳圧で髪をなびかせながらリゼットは少し厄介だな、と考えていた。

動きは単調。技術も稚拙で巨大化した分速度も低下、と一見すると逆に有利にすらなっている。

だが単純に強くて固い。

攻撃は一発一発が肝を冷やすレベルの威力で、気弾を打ちこんでも怯みすらない堅牢さもある。

この防御を抜くには大技の乱れ撃ちくらいしかないが、リゼットはあまり体力は高くないのだ。

ドミグラが手を広げ、黒い煙のような気功波が次々とリゼットへ発射された。

そう、これが厄介。筋肉を巨大化しての気の増幅は原作でセルがトランクスに指

摘したように速度が落ちて逆に弱体化する諸刃の剣だ。

だがいくら筋肉が膨れ上がろうと気弾や気功波の速度が落ちるわけではない。

そしてそうした攻撃の威力や速度は完全に気の大小によって決定するものであり、固定砲台となるなら筋肉が巨大化するデメリットはさしたるデメリットではなくなるのだ。

つまり、あの巨大化変身は見た目に反してむしろ遠距離戦向きなのである。

そういう意味では、この上なくドミグラ向きの変身と言えなくもない。

どうせ近接戦闘の技術などないのだから、ならば下手に身軽になるよりも被弾上等で防御を上げてしまふべきだ。

先ほどまでは余裕だったリゼットの額を汗が伝い、次々と打ち出される魔術や気弾を何とか回避し続ける。

無論、避けてばかりではない。

隙を見て円盤状の斬撃に特化した気弾を発射した。

だが通らない。あまりに強固なドミグラの体皮を裂く事も出来ず、表面に僅かな跡を付けただけだ。

(固い……！)

あれだけの防御力があれば、接近していくら攻撃を加えても通じないだろう。

防御力に物を言わせてのゴリ押しは、実はリゼットが一番苦手なタイプだ。

何せ駆け引きも何もあったものではない。

カウンターなど取りたければいくらでも取れと言わんばかりにひたすら攻めて来る相手というのは本当にやり難い。

もともとブローリーと違ってスピードがないのは救いか。

あの時と比べればまだ何とかなる状況だ。

(怯まないにしても、効いてないわけではないはず……こちらも覚悟を決めて大技で勝負をかけましょうか)

リゼットは意を決し、己の内に眠る神の力を解放した。

全身を白い輝きが包み、背中に光輪が出現する。

未だ未完成だが、それでも神の領域だ。その戦闘力はこれまでの比ではない。

リゼットは掌を翳し、自身の身体ほどの大きさはありそうな気の塊を生み出す。

「S p a r k i n g ・ N e o !」

光球が直進してドミグラの胸に炸裂し、爆煙で包みこんだ。

そこに間髪を容れずに次なる攻撃を放つ！

「Raging blast！」

純白の奔流がドミグラを呑み込む。

だがその光の中を構わず突っ切ってきたドミグラが爪を振るう。

しかしもうそこにリゼットはいない。

ドミグラの背後へ回りこんだリゼットが次なる技の構えへと入っている。

「千の剣よ、在れ！」

一瞬にして顕現した空間を埋め尽くすほどの剣の嵐。

その全てがドミグラへ殺到し、剣山のように彼の姿を覆い隠して大爆発を起こした。

【戦闘力】

魔神ドミグラ…2000億

第二形態…4000億

←トキトキ吸収

魔神ドミグラ…6000億

第二形態…1兆2000億

←数千万年に渡って溜めたパワー解放

第二形態…4兆2000億

・ちなみに数千万年パワーはドミグラにとっても一度しか使えない最後の切り札として扱います。今回使ってしまったので仮にリゼットに勝てても同じだけの強さを発揮するにはまた数千万年必要です。

Q、数千万年かけてこれってコスパ悪すぎじゃね？

A、封印されたままここまで集めたんだから、むしろ凄いやぞ。

第九十二話 神になれたはずの男

ドミグラが黒い気弾を乱射し、その弾幕を掻い潜りながらリゼットが白い気弾を放つ。

リゼットが速度と技術で勝り、ドミグラはパワーと耐久に秀でている。

戦いの天秤は極めて危ういバランスで均衡を保っており、どちらに傾いてもおかしくない状況だ。

だがその天秤を傾ける事の出来る存在——孫悟空が場に参上した事で勝敗は決した。

洗脳されていたトランク스와バードックを無事解放した悟空が加わった事で一気に天秤が傾いたのだ。

「神様、遅くなってすまねえ！」

「いえ、いいタイミングです。一気に押し切りますよ」

「おう！」

悟空が超サイヤ人3へと変身し、両手に気を凝縮させる。

その体勢から放たれるのは彼が少年の頃から使い続けてきた、今や彼の代名詞ともなっている技だ。

戦いの次元が神の域へ入ろうとも、この技の使い勝手は変わらない。

「かめはめ波！」

青白い光の洪水がドミグラを呑み込み、彼の肌を焼く。

いかに防御に優れていようと、ノーダメージではない。

それでも構わず攻撃しようとしたドミグラだが、かめはめ波が終わると同時に今度には純白の極光が彼の視界を覆い尽くした。

「Raging blast！」

攻撃が終わったと思いきや無意識に緩めてしまった僅かな気の緩み。

そこを的確に突いての追撃は思いの外堪える。

だがまだだ。まだ耐え切れる。

そう思うドミグラだが、彼は次の瞬間見た。

既に次撃を行うべく気を溜めている孫悟空の姿を！

「波アアアア!!」

白の輝きが終わると同時に再び青白い気功波がドミグラを急襲した。

必死に防御を固めて耐え凌ぐも、やはりドミグラに休息の時は訪れない。

かめはめ波が終わるか終わらないかのタイミングで再び純白の極光が押し寄せ、ドミグラを打ちのめした。

このままでは不味い！

そう判断したドミグラはダメージを気にせず強引に白の輝きの中を突っ切り、リゼットへと飛びかかった。

しかし——鈍い！

ドミグラの堅牢さは確かに長所ではあるが、動作の遅さは反撃に転じるのに向いていない。

難いだ爪は虚しく宙を裂き、僅かにリゼットのドレスの端を捉えたただけだ。

そればかりか、気の形状変化にて創造された光の鎖が彼の四肢に巻き付き、その動きを制限してしまう。

「Sparkling・Neo！」

ドミグラの身体すらも飲み込むほどの巨大气弾が炸裂し、それが終わると同時に

龍と化した悟空が突撃してドミグラを貫いた。

龍拳——悟空が持つ、彼唯一のオリジナル技だ。

気を龍の形へと変じて突撃するこの技を以てすればドミグラといえどひとたまりもない。

腹に大穴を開けられた彼は激しく吐血し、それでも尚負けを認めずに叫ぶ。

「くそおおおお!!」

彼の最後の抵抗は、駆け引きも何もあったものではない全霊での突進であった。持てる気の全てを振り絞って流星と化し、悟空とリゼットへ最後の勝負を挑んだのだ。

これに対し悟空は超化を解除して通常状態へと戻り、虚空へと両手を掲げた。

「全ての時間軸の皆！ オラに元気をわけてくれ！」

本来ならば完成に膨大な時間がかかるはずの元気玉が一瞬で完成する。

何故ならここは時の狭間。元より時間の流れなど存在しない時間軸を超えた空間だ。

そしてこの元気玉こそは皆の怒り。

ドミグラによって狂わされてきたあらゆる歴史から下される裁きの一撃だ。

「これで終わりです……ドミグラ！」

リゼットの光輪が輝き、重力が役目を放棄したように彼女の身体が垂直に浮き上がった。

両手をゆっくりと、何かを持つように構える。

すると手の中に白い輝きが溢れ、それはやがて触れた物全てを塵へと還す光球へと変化した。

神の気を凝縮する事によってのみ成立する、破壊神の模倣。

本家には遠く及ばないまでも、それでも銀河系一つくらいならば無に還して余りあるだろう。

「元氣玉 ああ！」

「浄化！」
はかい

あらゆる時間軸から集めた元氣玉と、触れた物を塵へ還す破壊の一撃が放たれた。

二つの巨大な光の塊が同時にドミグラへと激突し、彼の突撃を止める。

二つの力は負けるものと互いに押し合うが、それも長くは続かない。

ドミグラは最後の意地で少しは持ち堪えたようだが、やはり耐え切れるものではなかったのだ。

彼は次第に押され、そして最後には光の激流の中へと飲まれて行く。

「な、なんて、奴等だ……」

私は、神になった……神になった……はず……なのに……」

身体は灰となり、その野望ごと消滅していく。

これでは仮に魔人ブウ並の再生能力があったとしても絶命は免れなかっただろう。

やがて光が終わった時、そこにドミグラだった男はもういなかった。

存在の痕跡すら残さず消滅してしまったのだ。

そして時を超越したこの空間で死んだ彼は、どの時代においてもその死すら認識されない。

彼は今後、永遠に生死不明のままなのだ。

ここに魔神ドミグラとの戦いは終わった。

哀れな敵だった……リゼットはドミグラという男を心底残念に思う。

彼に勝ち目などというものは最初からなかった。

身の丈を計り違えてビルスに手を出した瞬間、既に彼は詰んでいたのだ。

仮にここで自分達に勝利しても後に待つのは破壊神による粛清であり、どのみち彼に未来はなかった。

そうとも気付かずに踊り続ける様は……滑稽を通り越して、ただ哀れでしかない。
(やり方を間違えねば本当に神にもなれたでしょうに……つくづく、惜しい男でしたね)

素質は十分にあった。才能もあった。

界王神を遥かに上回る戦闘能力にバビディを凌駕する魔術の腕。トワ以上に時間を操り、トキトキを吸収して数千万年溜めたエネルギーを使ったとはいえ、神の領域にも手が届いた。

彼は間違いなく傑物だった。ただ、やり方を致命的に間違えてしまったただけだ。
ドミグラから解放されたフクロウのような鳥——トキトキがリゼットの肩へ止まる。

そして二人と一羽はその場から瞬間移動をした。

後には壊れた齒車だけが残り、それもやがて修復されてドミグラがいた痕跡は一つもなくなるだろう。

その事を少しだけ、リゼットは残念に思った。

「よくやってくれたわ二人共。これで時の改変はもう大丈夫よ」

時の界王神と合流した二人は、彼女から労いの言葉をかけられていた。

トキトキ都は随分酷く破壊されてしまったが、それもしばらくすれば復興出来るらしい。

それよりも彼女はドミグラとの数千万年に渡る因縁に決着が付いた事がよほど嬉しいのだろう。

ニコニコと笑顔で二人へ惜しみない称賛を送っている。

「ちっ、最後の最後でとんだ役回りだ。足引っ張っちまって悪かったな」

「なあに、そう気にする事はねえさ。……ええと、父ちゃん？」

「……」

悟空が戸惑いながらもバーダックを父と呼ぶが、彼は答えない。

ただ無言で腕を組み、背を向けてしまった。

「あり？　何かオラやっちまったんか？」

「違いますよ悟空さん。あれは照れてるんです」

「トランクス！　余計な事言うんじゃないねえ！」

バーダックの行動の意味をトランクスが語るが、どうやら凶星だったようだ。背を向けたまま素直ではない男の怒声が響き、トランクスは苦笑した。

「悟空さん、リゼットさん。本当にありがとうございました。後は、俺達だけで大丈夫です」

「へへ。昔はトランクスに助けられちゃったし、これでようやくおあいこだな」
「ええ、そうですね」

悟空とトランクスは笑いながら語り合い、手を固く握る。

本来は異なる時間軸に生きる者がこうして再会出来るというのは酷く貴重な事だ。

二人はしばらく視線を交わし、やがて手を離れた。

次にトランクスはリゼットとも固い握手を交わし、名残惜しそうに離す。

「二人共……また会えて嬉しかったです」

「ああ、オラもだ」

「ベジータは、ここに来れなかった事を悔しがるでしょうね。」

……あ、そうだ。これ、もしかして貴方のですか？」

リゼットはふと、思い出したように亜空間からコートを取り出した。

それは以前、クウラとの戦いで力尽きた彼女の下に敷かれていた物だ。

彼女の仲間にこんなコートを着ていた者はいないし、ナメック星人の衣服とも明らかに違う。

一体誰が自分を助けてくれたのかとずっと疑問だったのだが、もしかしたらそれはトランクスだったのではないか……そう思ったのだ。

「あ、確かにそれは俺のです。捨てずに持っていてくれたんですね」

「やはり貴方でしたか。どうやら私は、知らない所で随分と助けられていたようですね」

トランクスにコートを返しながら、思う。

きっと自分達が気付いていないだけで、彼等はずっとリゼット達を守ってくれて

いたのだろう。

次にまた会える機会があるかは分からない。

だが生きる時間軸は違えど絆は繋がっている。

その事を確信した今、別離は恐れるべきものではない。

悟空達は笑顔のまま別れの挨拶を告げ、まさに帰るその直前になってバーダックが「カカロット!」と声をあげた。

相変わらず背を向けたままだが、彼はたった一言だけを息子へと贈る。

「……………達者でな」

「……………ああ、父ちゃんもな」

バーダックも最後まで素直になれない男だ。

そんな姿を少しでもベジータみたいだな、などと思いながら悟空とリゼットは時間の巢を立ち去った。

彼が消えた後をトランクスはいつまでも見詰め、クロノアは手を振る。

そしてバーダックは一度だけ振り返り、そして未練を断ち切るように一足先に建物の中へと入って行った。

★

ドミグラを倒し、半年が経過した。

その日、神殿の中に造りあげた修練所の中でリゼットは目を瞑り、ひたすらに意識を研ぎ澄ませていた。

ゼノバースはもう、安定して制御できるようになった。

ならば目指すのはその先で、理性を保ったままゼノバースの真の力を引き出すのが到達点だ。

かつて暴走してしまった時の力を完全に使いこなせるようになれば、ビルスとも互角に渡り合えるはずだ。

しかし今のリゼットではまだ、出力を限界まで落とした神域でなければ使いこなせない。

本気で使えばあっという間に自分を見失ってしまうだろう。

故に、まずはひたすらに精神鍛錬である。膨大な信仰の念に押し流されぬ精神を身に付けなくてはならないのだ。

そうして瞑想を続けていたりゼットだが、ふと部屋の中にセルが入ってきている

事に気が付いた。

「セルですか……どうしたのです？」

「修行中すまないな。宇宙からお客さんだ」

「……また破壊神様ですか？ それとも、界王神様？」

「いいや、ごく普通の……というとおかしな言い方だな。とにかく、神ではない宇宙人のようだ」

神でも魔神でも魔人でも宇宙の帝王でもない来客とは逆に珍しい事もあったものだ。

リゼットは瞑想を中断し、神殿の外へと出る。

そこには何もないが、神殿の外でウロウロしている宇宙船の姿が確かに見て取れた。

恐らく神殿が次元潜行してしまっている為、こちらに来たくても来れず困っているのだろう。

リゼットは軽く宇宙船の中を遠視で探り、害意を持っていない事を確認してから神殿の姿を表へと出してバリアを解除した。

すると宇宙船はこちらへと移動し、神殿の端へ着陸する。

そして中から出てきたのは獣型の宇宙人だ。

……もっとも、地球にも獣タイプの地球人がいるため、正直区別がつかない。

動物でいうとライオンが一番近いだろうか。

強面ではあるが頭身が妙に低く、あまり強い気も感じない。

隣には更に背の低い眼鏡をかけた老人がおり、奥には筋肉質で一回り巨大な獣人もいる。

一番奥の獣人はそこそこの手練のようだ。戦闘力にして……大体1000前後はあるだろう。

さて、一体何の用でここまでやってきたのか。

「お初にお目にかかります、地球の神よ。」

我々はスナク星の使者。そしてこちらの方はスナク星の大使閣下。

貴女様が破壊神ビルス様を撃退したと聞き、ご挨拶に伺ったのです」

「はあ……」

「その証拠にスナク星人最高の敬意を払うご挨拶を……」

そう言う二人の獣人はその場で妙なダンスを踊りその場の全員を呆れさせた。
まあ、宇宙人なのだから当然文化だって違う。

一体どういう経緯であれが最高の敬意を払う挨拶になったのかは分からないが、まあ嘘を吐いている気配はない。

リゼットは若干引きつった微笑で挨拶に対し礼の言葉を述べておいた。

「ユ、ユニークな挨拶を有難うございます。

しかし、破壊神様を撃退したというのは語弊がありますよ」

「な、何ですと？ それは一体……」

「確かに私はビルス様と戦いましたが、倒したわけではありません。

正確には戦っている最中に第三者の割り込みを受けてビルス様と共闘し、そのまま有耶無耶に流れてしまったのです。

それに、ビルス様と戦ったのは私だけでもありませんね」

宇宙から見て、ビルスが来訪して一度は激怒したにもかかわらず破壊されなかったというのは史上例を見ない快挙だ。

そしてリゼット本人はイマイチ分かっていないが彼女の知名度は宇宙規模であ

り、様々な星に彼女を崇拜する信仰宗教やファンクラブなどが存在している。

故に彼等がビルスの撃退とリゼットを結び付けてしまうのは至極当然の流れであり、ここへ来てしまったのだ。

余談だが、それでも地球に宇宙人が押し寄せないのは超銀河王ザーボンがしっかりと管理し、無断で地球に立ち入る事を禁じているからだ。

彼等も地球へ向かう許可を得るのには随分苦労したのだが、それはどうでもいい話だろう。

「いえ、それでもあの破壊神がやって来たのに地球がこうして無事でいるというのは素晴らしい事です。宇宙でも大評判ですよ。

ですから貴女にこの勇者のメダルをお贈りしたい」

——いや、正直要らないんですけど。

リゼットはそう口に出そうになるのをぐっと堪えた。

この勇者のメダルとやらの宇宙でどれだけの価値があるかは知らないが、少なくともリゼットにとって価値のあるものでないのは確かだ。

どこの星の誰が造ったかも分からない勇者のメダルとやらをいきなり『贈りた

い』などと言われても扱いに困る。

まあ、幸い勇者ならばこの神殿にいるし彼のアクセサリーとしてなら丁度いいだろうか？

それとも、真に勇者と呼ぶに相応しい男……つまりは悟空に渡すべきか？

……いや、駄目だ。彼も多分こんなのは欲しがらない。

「待たれよ！ 貴女が真の勇者であれば我に力を示すのは簡単な事！

どうかこのガルビと手合わせを願いたい！」

「……こちらの方は？」

「し、失礼しました。この者は我がスナク星の勇者、ガルビといいます。

神よ、どうか彼の我尽に应えてやっては頂けぬでしょうか？」

リゼットはガルビという男を一瞥して、小さく溜息を吐いた。

どう考えても他の星の神に対する態度ではないのだが、まあ地球という田舎惑星の神なんて他の星から見れば大して偉くもないのだろう。

「構いませんよ。どこからでもどうぞ？」

リゼットは腕を後ろで組み、ガルビの攻撃を待つ。

それを舐めている、と取ったのだろう。

ガルビが獣そのものの雄叫びをあげて拳を繰り出すがリゼットは目を閉じたままそれを回避してしまった。

続く連撃も完全に避け切り、ガルビが満足するまで待つ。

別に弱くはないのだが、残念ながら地球に來た時期が悪すぎた。

ようやく実力の差を悟ったガルビへ、軽く手を振るう事で風圧を与えて跳ね飛ばした。

亀仙流『さわやかな風をプレゼント』だ。

かくしてスナク星の面々はリゼットの実力に疑問を抱く事なく、その実力に感服して頭を垂れた。

どうやら、本当に何の悪巧みもしていないただの宇宙人だったようだ。

少しばかり拍子抜けですね、と思い、そこでリゼットはトラブルや宇宙規模の魔人などに慣れすぎている自分に気付き、少し憂鬱な気持ちとなった。

・ドミグラ戦において超化からの気功波連射は基本。

というかアーマーが硬すぎて接近戦なんかやってられない十遅くていい的なのでどうしても気功波乱舞になってしまう。

というかゼノバースは後半の敵がいつもこいつもアーマーばかりで気付いたら王子戦法ばかりに……。

やっぱりベジータは間違ってたんや！

【戦闘力】

ガルビ…1000くらい

※サタンに初撃を避けられているので正直大した事なさそうだが、気を計る力はあるらしいのでとりあえず1000くらいとしておく。

この後、ブログにリゼットと戦った事を書いたが『メダル渡しに行って喧嘩売るとかアホなの？』と全方位からバッシングを受けて大炎上した。

【浄化^{はかい}】

リゼット版破壊玉。外見はトッポが放つ破壊玉を白くしたようなもの。

破壊の力など既に経験済み……どうってことありませんよ！

オーッホッホ、このゴールデンフリーザの前では無意味ですよ！

……んっ？……無意味だと言っているでしょう！

こんなもの……無意味……！

こんなもの……こ、こんな………うわああああああ！！

第九十三話 それぞれの進化

スナク星からの使者がやってきてから半年。地球は実に平和なものであった。悟飯の娘が生まれたり、チチが立て籠もったり、ブルマが何故か若返っていたりと色々ありはしたが、これといって話題にするような事はない。

あえて挙げるならば悟空とベジータがウイスの所へ修行に行ってしまった事くらいか。

相変わらず修行好きの格闘馬鹿な二人である。

とはいえ、リゼットにとってこれは少しばかり焦りを感じる出来事でもあった。前世の記憶で漫画として世界を眺めていた経験があるから、何となく分かるのだ。

『あ、これ悟空とベジータ以外の全員が置いていかれる展開だ』と。

ウイスの元での修行でどれだけ強くなるかは分からないが、戻ってきた時にはきっと大幅なパワーアップをしているに違いあるまい。

その場合、下手をすると次の戦いの頃には自分達は戦力外になってしまっている、という事もあり得るのだ。

そこでリゼットは急遽精神と時の部屋を魔法や神術で改装し、ポポや先代のアドバイスを聞きながらセルと二人がかりで魔改造してしまった。

とりあえず、まず一人が使える時間は最大で2年間という制約をとっばらい、ついでに同時に入れる人数も6人までに拡張。

何という事でしょう。匠の手により精神と時の部屋はその気になればいつまでも籠り続ける事が可能な超引き籠り部屋と化してしまったのです。

「出来ました。これで寿命無限な私達はその気になればいつまでも修行し続ける事が出来ます」

「ふふ。これで孫悟空達に逆に差を付けてやれるわけだ。私は百年単位の修行でも一向に構わんぞ」

「……ポポ、もう何も言わない」

リゼットとセルも大概修行馬鹿である。

ドヤ顔で新しくなった精神と時の部屋を見詰める二人に、
Mr・ポポは呆れるしかない。

向こうが宇宙最強の師匠なら、こっちは宇宙最長の修行で勝負だ。

悟空達には才能という武器があるが、こちらには時間という武器がある。

決してインフレに取り残されたりするものか。それどころか逆に差を付けてやる。

そんな気持ちでリゼットとセルの二人は精神と時の部屋へ早速突撃した。

そして部屋に入って数日後には置いていかれてなるものとターレスとピッコロも入室し、強さを求める者達がそれぞれの方法で己の限界を超え、神の域へ至る道を探し始めた。



精神と時の部屋での修行が始まってより数年が経過した。

部屋の中で彼等は互いに向き合い、そして気を高めている。

これから行うのは模擬戦だ。

この部屋に籠ってから彼等はそれぞれの方法でパワーアップを遂げており、今日
は互いにその成果を確かめ合う日なのだ。

「いくぜ！」

まず最初に仕掛けたのはターレスであった。

彼は全身の気を解放すると超サイヤ人へと変身し、その状態のまま手の中にパワーボールを生成する。

本来はエリート戦士しか作れぬはずのそれだが、この戦闘レベルになってはもうエリートも下級戦士もない。

そして無論ただのパワーボールであるわけもなく、この部屋の修行で彼が編み出した特別製のパワーボールだ。

その効果は、通常のブルーツ波と比べ数倍ものブルーツ波を発するというもの。そして、ここにきて未だに尻尾を残している彼とナツパだけがこのパワーボールを活かす事が出来るのだ。

そして、ターレスだけが更に先の領域へ至る資格を手に使っていた。

「弾けて、混ざれ！」

精神と時の部屋の上空に人工の月が輝く。

その輝きを瞳から吸収し、ターレスの変身が始まる。

新たな力を求めて、彼がまず考えたのは悟空達とは異なる進化であった。

ターレスはどうしても悟空のような善のサイヤ人にはなれない。

多くの星を襲ってきた過去をまるでなかったかのように扱い、今更善人面するな
どという真似は出来ない。

第一自分が善人などになっては、それこそ殺された者達が浮かばれないだろう。
『過去は極悪人だったけど今は善人だから過去の悪行には触れないでね』などと……
何ともまあ、都合のいいお話ではないか。

だからターレスは考える。俺は悪党でいいと。

過去の悪行も殺してきた連中も、滅ぼしてきた惑星も、その全てを覚えている。
忘れたりなどしない。忌まわしき過去になどしない。

己は昔も今も変わらない。クラッシャー軍団の仲間達と宇宙を気ままに流離い、
好きな物を食い、美味しい酒に酔い好きな星をぶっ壊してたあの頃と変わらない。

だから——悪党には、悪党に相応しい変身がある。

かつて善のサイヤ人達が超サイヤ人ゴッドを作り出して戦ったという悪の超サイ
ヤ人。

彼が目指したのはそれだ。ゴッドとは異なる超サイヤ人3から続く正当進化。

神の域だの神の気だのを無視した、どこまでも純粋な暴力と戦闘力を求めた力の

進化！

血と殺戮を好む、悪のサイヤ人としての性質を全面に解放した正統なる暗黒面の進化だ。

ターレスはそれを目指し、ブリーフ博士に頼み込んでブルーツ波を増幅する装置を造ってもらい、己の身にブルーツ波を浴び続けたのだ。

そうする事でサイヤ人の強さの根幹であるサイヤパワーの上昇を計った。

無論無理はあった、血反吐も吐いた。

だが、それでも彼はブルーツ波を無理矢理吸収し、進化の果ての更なる進化を手にしたのだ。

「オオオオオオオオ!!」

ターレスの身体が巨大化し、黄金の大猿へと変化する。

超サイヤ人のパワーを持ったまま戦闘力を更に10倍へ上げ、だがまだ終わらない。

猿と化しても尚理性を保ち、巨体に秘めたパワーを凝縮させる。

するとどうだろう。

ターレスの身体がみるみるうちに縮んでいき、やがて元のサイズまで戻ってしまったではないか。

しかしその姿は先程までと大きく異なる。

超サイヤ人とは思えない黒髪は背まで伸び、顔立ちはサイヤ人の凶暴性を隠す事なくギラついている。

全身は赤い体毛に覆われ、圧倒的な力強さに漲っていた。
瞳の色は黄金に変わり、目の周りが赤く縁どられている。

超サイヤ人4——初めてこの変身を成功させた時に思わずゼットが呟いたその名をターレスはそのまま採用した。

もしかしたら、あったかもしれない平行未来で悟空やベジータも変身したかもしれない、ゴッドとはまるで異なる進化の姿だ。

「ふっ……凄まじい気だ。」

ならば私も全力を超えた全力でお相手させてもらおう」

セルが不敵に笑い、拳に力を込める。

サイヤ人の細胞を引く彼は見た目からは分からないが、超サイヤ人への変身を可

能としている。

超サイヤ人とは実はサイヤ人のみに許された変身ではない。

変身可能か否かはS細胞によって決定されるものであり、実はS細胞さえ保有していればサイヤ人でなくとも超サイヤ人への変身は可能なのだ。

もしかしたら、宇宙のどこかにはサイヤ人でもないくせに超サイヤ人に変身出来る者がいるかもしれない。

そんな豆知識はさておき、セルもまたサイヤ人ではないが超サイヤ人へ変身出来る。

彼は最初から超サイヤ人の壁を超えた超サイヤ人……超サイヤ人2とも言うべき位階に変身出来ていた。

そこまで行けるならば……不可能ではない。

超サイヤ人を超えた超サイヤ人を、更に超える事すら。

「ぶるあああああああッ！」

セルが叫び、全身を今まで以上の輝きとスパークが覆った。

見た目的にはほとんど変化していないが、変身の位階を超サイヤ人3のレベル

にまで引き上げたのだ。

「究極のパワーを見せてやる！」

続いてピッコロが力を解放した。

彼が行ったのは、リゼットと同じ潜在能力の解放だ。

老界王神の潜在能力解放は種族に囚われず、誰でも平等にパワーを上げる事が出来る。

界王拳の限界を悟っていたピッコロはこれに目を付け、老界王神によってパワーを引き出して貰っていた。

勿論対価を要求されたのと言うまでもない。

封印から助けた初回と違い、今回は老界王神に儀式をやってやる義理がないのだ。なのでピッコロはリゼットに知恵を求め、そして彼女のアドバイスに従って老界王神とピチピチギヤルを会わせてやった。

ピチピチギヤルからパフパフをしてもらえた老界王神は満足してピッコロのパワーを引き出してくれたが……実は、そのギヤルの正体はウーロンである。

もっとも、ピッコロは既に合体によって潜在能力を解放しているに等しかったの

でリゼットほどは伸びなかった。

普段界王拳で無理矢理引き出しているよりはマシ程度の力を安定して負担なく発揮出来るようになった程度だが、それでも得たものは大きい。

潜在能力『以上』を引き出せる老界王神だからこそ可能だったパワーアップだろう。

「では、始めましょうか」

リゼットの修行は基礎能力の上昇と神の気の身体への適合に終始した。

基礎能力を上げれば潜在能力解放時の戦闘力も上がり、ゼノバース発動時は更に上がる。

そして安定して使えるようになれば、次のステージへの扉も開かれる。

未だ全開出力は出来ないものの、その安定性は以前よりも更に高まっていた。

既に神域へと至っているだけあってリゼットはセルやターレスよりも頭一つ抜けており、成長も早い。

悟空達と出会うまでは1000年単位の時間をかけて戦闘力数万で足踏みしていたのが嘘のようだ。

インフレとは実に恐ろしいものである。一度加速が始まればもう止まらない。否、止まろうとも思わない。

いわばこれは強さのチキンレース。引いた者から先に脱落し、戦士からモブへと降格してしまうのだ。

「うおおおおおお！」

「ぶるわああああ！」

「かああああああ！」

今までとは比較にもならない化物染みた力を漲らせ、ターレスとセル、ピッコロが突撃した。

そこには遠慮も加減も一切ない。この域に来て尚、白の女神が自分達の上を往くと知っているからだ。

リゼットはスウ、と目を細めて三人の攻撃を軽く流す。

だが三人は止まらない。

セルは技巧を凝らし、ターレスは野生の獣さながらの怒涛の勢いで攻撃を繰り返す。

その間にピッコロが距離を開けて気弾を放つも、軽々と弾き返された。

その圧倒的なまでの衝突エネルギーは次元すら歪ませ、空間に亀裂を入れる。

部屋の外の実世界では幾度も空間に穴が開き、ポポが「神様達凄い」と冷や汗を流していた。

そしてその気の余波は遠く離れたビルス星にすら届き、修行（という名の家事お手伝い）をしていた悟空とベジータをも震撼させる。

「な、なんだ、この気は……!?!」

「神様に……これはターレスか？ すげえでけえ気だぞ！

それにセルとピッコロもすげえ！」

ベジータは心底驚いたように、悟空は本当に嬉しそうに。

二人がそれぞれの反応で地球の仲間達の成長を知り、拳を震えさせる。そして思う。負けてられない、と。

「よし、いくぞベジータ！ さっさと家事を終わらせて修行だ！

あいつらに負けてらんねえ！」

「俺に指図するな！」

悟空とベジータはやる気を漲らせて家事を素早くこなしていく。

それを見てウイスは思った。これはなかなかいい関係だ、と。

ライバルがいれば伸びは早いのだ。

インフレ特急「止まるんじゃねえぞ」

【戦闘力】

リゼット…30億

アルティメット化…1兆5000億

ゼノバース…6兆

悟空…10億

超サイヤ人…500億

超サイヤ人2…1000億

超サイヤ人3…4000億

超サイヤ人ゴッド…1兆

超サイヤ人ブルー…2兆

セル…1200億

超サイヤ人2…2400億

超サイヤ人3…9600億

バーストリミット…1兆9200億

ベジータ…9億5000万

超サイヤ人…475億

俺のブルマ…5700億

超サイヤ人ゴッド…9500億

超サイヤ人ブルー…1兆9000億

ターレス…9億

超サイヤ人…450億

超サイヤ人2…900億

超サイヤ人3…3600億

黄金大猿…9000億

超サイヤ人4..1兆8000億

ピッコロ..110億

アルティメット化..1兆1000億

※元々融合で解放されていたので上昇率が低い。

遂に主力勢がブロリーを超え始めました。

この6人は無事にインフレ特急に乗り込みましたので、今後活躍する事でしょう。

力の大会には後4人必要なので、乗り遅れたメンバーも一応まだ席は空いてます。

Q、ナッパどこいった

A、年齢的に精神と時の部屋に入るとマジで老けかねないので辞退しました。
・地球襲来時（エイジ762）で年齢は50以上。現在はエイジ779でナッパは既に70を超えている可能性が高い。（しかも以前に精神と時の部屋に2年入った）
サイヤ人は80歳までは若者なので、つまりナッパに残された戦士としての時間はもう10年もない。

残念ながら彼も人参化同様に年齢の問題でリタイアの時期です。

【このSSでの超サイヤ人4の倍率】

黄金大猿 $\parallel$ 1000倍

超サイヤ人4 $\parallel$ 2000倍

超フルパワー超サイヤ人4 $\parallel$ 数千 $\sim$ 数万倍（サイヤパワー供給者の数と質によって上下）

・ブルーと4を同格として扱いたいので同じ倍率にしました。

扱いたいには界王拳ブルー $\parallel$ キュアベジータ $\parallel$ 超フルパワー4 $>$ ブルー $\parallel$ 超4 $>$ 黄金大猿 $\parallel$ ゴッド $>$ という感じです。

無理矢理理由をつけるなら、黄金大猿は超サイヤ人3になれないベジータでも変身出来たので、超2 $\times$ 10倍（大猿）の1000倍。

超4は大猿ベビーに勝利したものの、かなり善戦されたのでそこまで差はないとして2000倍という所でしようか。

勿論インフレを抑えるためのこじつけですが。

【宇宙のどこかにはサイヤ人でもないくせに超サイヤ人に変身出来る者がいるかも

しれない】

もしかして…ネコマジン

第九十四話 復活の「F」①

| 人 人 人 人 |

> 復活の F <

| Y Y Y Y Y |

・ちなみにどうでもいい事です、今までは復活の『F』でしたが今回は本命という事で復活の「F」になっています。

その日、リゼット達はいつものように修行に明け暮れていた。

強さを求める道に果てはない。命を失うその時まで最強への道は続く。

もしもこのまま何もなければ、彼女達は更に修行に時間を費やしていた事だろう。しかし何もなければの仮定を語るといふ事はつまり、何かがあったといふ事だ。外界との唯一の出入り口である扉が開き、Mr・ポポが中へとやってくる。

その事に驚き……とまではいかないまでも意表を突かれたリゼット達は修行を中

断し、彼へと視線を向けた。

「ポポ、どうしたのですか？」

「神様、ブルマから連絡きた。フリーザ復活して1000人の部下と一緒に地球に向かつてる」

「フリーザ……？」

「ブルマ、言ってた。フリーザの部下、新ナメック星でドラゴンボールを集めてフリーザ復活させた」

「……ナメック星人達は無事なのですか？」

「大丈夫。今のフリーザ軍、昔よりずっとずっと弱い。きっとナメック星人に勝てないから隠れながらボール集めた」

ナメック星人の無事を真っ先に案じたりゼットだが、彼等が無事と知ってほっと一息をついた。

彼等に被害が及ばなかったのは幸いだ。修行してて友好星の危機にも気がまかせんでしたでは話にならない。

見ればピッコロも安堵したように表情を緩めており、やはりナメック星を気にか

けているのだと分かる。

大魔王と融合してもこういう所は変わらないらしい。

それにしてもどうやって願いを叶えたのだろうか。

確かあの星のボールはナメック語でなければ願いを叶える事は出来なかったはずだが……もしかすると、凄く頭のいい誰かがいてナメック語を習得していたのかも
しれない。

「何かと思えばまたフリーザか。これで何回目だ？」

ピッコロはまるで大した事ではないように言うが、実際大した事ではない。

そもそもフリーザの復活など、もはや彼等にとっては飽き果てたイベントだ。

サイボーグとして蘇り、ゴースト戦士として蘇り、あの世の異常で蘇り、ドミグ
ラの目的に利用されて蘇り……ここまで既に4回も復活し、その度に他の敵の
オマケのように蹴散らされているのがフリーザである。

そんなのが今になってまた、しかも今度は単品で復活したからどうだというのだ。
脅威と判断して欲しければせめてジャネンバとポタラで合体して出直して来い。
「そんな事でいちいち呼びに来るな。今更フリーザ如きカスが俺達の相手になるか。

今や俺達と奴のパワーには天と地ほどの差があるのだ」

「ウォーミングアップの相手にもならん。私が出るまでもない」

ターレス、セルも腕組みをしながらのこの台詞である。

うーん、この悪役軍団つぷり……と思いつながらリゼットは苦笑いをしてしまった。

しかし自分達にとっては雑魚でも、地球の一般人にとっては充分脅威だ。

もしかしたら街の一つくらいは消されてしまうかもしれない。

ならば、この星を守る神としては出向かないわけにもいかないだろう。

それに、そろそろ一度外に出て休憩したいと考えていたところだ。

「まあ、いい息抜きにはなるでしょう。」

ずっとこの部屋にいても精神的に辛いですしね」

「確かに。それにお前達はともかく俺は寿命もある。

いくらサイヤ人でも、そう長居は出来ん」

リゼットはとりあえず外へ出る事を提案し、ターレスもそれに賛同した。

セルとピッコロも頷き、全員が外へ出る。

そして同時に気付いたのは、フリーザから感じられるかつてない強大な気の波動

だ。

セルは「ほう」と面白そうに呟き、他の二人も感心したような顔になっている。無論、リゼットも同様だ。

正直驚かされた。今のフリーザから感じられる気は……かつて戦ったヘラー一族に匹敵している。

そしてこれはまだ、第一形態の気だ。つまりフリーザはここから更に強くなるのである。

「驚いたぜ。こいつはどんな手品だ？」

「ふん、何の事はない。奴も我々と同じようにトレーニングをし、その潜在能力を開花させたのだろう。」

元々、何の努力もせずにあれだけの強さだった男だ。潜在能力を全て解放すれば、これだけの強さになってもおかしくはない」

セルは話しながら、しかし楽しそうに笑う。

やばい時ほど昂揚してしまうのはサイヤ人の血か。

思わぬ強敵の登場に期待が今から高鳴って仕様がな。

「こいつは思いがけず素晴らしい戦いが出来そうだ。

お前達、フリーザの相手は私がするぞ」

「構わねえが、そんだけ大口叩いて負けたら無様だぜ？」

「その時は俺様があの宇宙のゴミを始末してやる。安心して負けてこい」

フリーザの気を感じても3人に恐怖はなく、それどころかやる気を増しただけであった。

精神と時の部屋でそれぞれの進化を果たした今、彼等に怖い物はない。

むしろ思いがけずに登場した強敵に喜んでいるほどである。

「しかし、何故今まで誰も気付かなかったんだ？

俺達が精神と時の部屋に入ったのはほんの数日前だ。

潜在能力を開花させるにしても、いくら何でも数日でここまで伸びるはずがない。

俺達が部屋に入る前から既に復活していたと見るのが自然だ」

しかし喜んでばかりではないのがピッコロだ。

彼は冷静に分析をし、ここまでに誰もフリーザの復活に気付かなかった違和感を指摘した。

特にリゼットの感知能力ならば、たとえ宇宙の端にしようとフリーザの気をキャッチ出来ただろう。

リゼットも精神と時の部屋に入ってまだ10日も経っていない。

つまり部屋に入る前からフリーザは既に蘇生していて、力を磨いていたはずだ。ならば気付けない方がおかしい。

だがそこに言葉を挟んだのはターレスだ。

「多分だが、技術が進歩しているんだろう。戦闘力が外に漏れないような施設を造り、その中で修行をしたと考えればおかしくはない」

「なるほど。思えば科学力の方面では考えていなかったな。

これからはその部分にも注目すべきかもしれない」

ターレスの推測にセルが頷く。

しかしここでいくら語っても所詮は憶測であり、意味はない。

「無駄話はそれくらいにして、早く行きますよ。

フリーザ軍は……まあ、ゴッドガードンで蹴散らしてしまいましょか」

リゼットが指を鳴らすとガシヨンガシヨンとゴッドガードンが一斉集結した。

その数、実に15体。そして戦闘力にして50億に相当するそれは、紛れもなく宇宙最強の量産軍団だ。

かつてよりも弱体化すらしているフリーザ軍だが、遠慮はしない。

侵略者には死、あるのみだ。

ゴッドガードン軍団とセル、ピッコロ、ターレスを連れて瞬間移動をし、地上へと移動した。



リゼット達が戦いの場に到着するのと、フリーザ軍の攻撃が始まるのは同時であつた。

どうやら何とか戦いには間に合つたらしい。

既には悟飯、ナッパ、天津飯、ヤムチャ、クリリン、悟天、トランクス、亀仙人、餃子といった地球の戦士達が集まっている。

フリーザの宇宙船からはワラワラと1000人の兵士が出ているが、どれも錬度が低い。

恐らく戦闘力にして精々数百程度だろう。

それに対抗するのは次元を裂いて出撃したゴッドガード軍団だ。

もはやオーバークイル以外の何者でもない戦力差でもって、次々とフリーザ軍の宇宙人を蹂躪惨殺していく。

勿論彼等に手加減などない。地球に敵対するものを一切の慈悲なく始末するだけの冷徹な処刑マシンにそんなものを期待する方が間違えている。

戦意を失って逃げようとする兵士すらも捕獲して握り潰し、命乞いをする敵を無感情に千切る。

場は一瞬にして戦場から処刑場へと早変わりしていた。

「神様！」

「どうやら間に合ったようですね」

トン、と悟飯達の前に着地して宇宙船を見る。

すると上部ハッチが開いてフリーザと部下数人が姿を現し、リゼットとフリーザの視線が交差した。

なるほど、確かに強くなっている。正直信じられないレベルアップだ。

とはいえ、第一形態のままならば今のリゼットの敵ではない。

恨むならば最初から変身せずに出て来た己の甘さを恨むといい。

この先にまだまだ変身が控えていると分かっている、今倒してしまわない理由など何処にもない。

なるほど、クウラに甘いと言われるわけだ。少なくとも、切り札を残しつつ最初から最終一手前まで変身しているクウラとは雲泥の差である。

変身の暇すら与えずに先制攻撃を仕掛けようとしたリゼットだが、その手をセルがやんわりと掴んだ。

「おっと、あれは私の獲物だ。楽しみを奪わんでくれよ。

変身もさせずに葬るなど、勿体無いではないか」

「……危ないと思ったら割って入りますよ」

「ふっ、その必要がある程の強敵である事を期待しよう」

セルが好戦的な笑みを浮べて飛翔し、フリーザの前に着地した。

フリーザとセル。本来ならば共に地獄に落ちて仲良くすらなっていた二人がこうして敵として向かい合う。

運命とは何ともおかしなものだ。

一人で来たセルにフリーザは怪訝な顔をし、観察するようにセルを見た。

「何ですか？ 貴方は」

「お初にお目にかかる。私の名はセル……この地球で生み出された人造人間だ」

「ほう。地球に貴方のような者を造り出す科学力があるとは思いませんでした」

腕組みをして余裕を見せるセルの前に、赤い体と猛牛のような角を持つ宇宙人が歩み出る。

セルは少しばかり彼へと視線を動かし、すぐに興味を失ったように彼の存在そのものを無視した。

戦闘力は恐らく数値にして2万から3万程度。話にもならない雑魚だ。

「て、てめえ！」

赤い戦士——シサミはその態度に激昂してセルへと殴りかかった。

だが怒ろうが雑魚は雑魚。ウォーミングアップの相手にもなりはしない。

セルは腕を組んだままの念力でシサミを吹き飛ばし、空中で全身の骨を砕いて惨死させた。

「くっくっく、やるじゃないか」

今度はスキンヘッドの宇宙人が割り込み、拳を鳴らした。

名をタゴマといい、ザーボンやドドリアに匹敵するほどの優秀な戦士として今のフリーザ軍では重宝されている。

そしてこの数ヶ月、フリーザとの特訓により彼の力は飛躍的な上昇を見せ、今やその戦闘力は界王神すらも遥かに凌駕していた。

「フリーザ様、こいつを倒したら俺を指揮官にしてくれますよねェ！」

「……出来るならね」

「ハッハァ！」

タゴマはフリーザの口約をもらい、意気揚々と突撃を仕掛けた。

フリーザの隣では参謀であるソルベが「ギニュー特戦隊にも匹敵している！」などとは場違いな事を言っているがセルもフリーザも聞いてすらない。

タゴマの拳が腕を組んだままのセルへ直撃し、更にたたみかけるようにラッシュを続ける。

セルはそれを避けも、防御すらもしない。

完全に無抵抗で受けており、だが微動だにしていなかった。

「この数ヶ月の地獄のトレーニングで俺は理解した！ 人を支配するのは力と氷の冷酷さ、そして圧倒的な恐怖だと！ そして俺は変わったのだ、フリーザ様の部下に相応しい最高の戦士へと！ ギニュー特戦隊？ ああ、いましたねそんな人達！ まあ俺にしてみりゃあ、もう過去の世代って感じですけどね！ どうだ！ 反撃もできまい！ そらそらどうした、少しは抵抗してみろ！ まあ反撃してもお前達のお上品な攻撃なんか鋼鉄の身体を手に入れた俺様には通用しな——」

「うるさい」

ペシッ。

効果音にするならばこんな所だろう。

鬱陶しそうに払ったセルの手刀一発でタゴマは吹き飛び、遙か遠方の崖に衝突して首の骨を碎かれ、そして二度と動かなくなつた。

更にセルは指から閃光を放ち、ソルベの脳天を撃ち抜く。

今戦いたいのはフリーザだ。他の雑魚などどうでもいい。存在しているだけで目障りだ。

「さあ、邪魔者もういない。存分にやり合おうではないか」

「なるほど、これは驚きました。素晴らしい戦闘力ですよ。

どうです？ 地球などは捨てて私の部下になりませんか？」

「興味がないな。今、私が知りたいのは貴様の真の実力だけだ」

「そうですか。残念ですね」

セルが構え、フリーザも戦闘態勢へと入る。

どうやらまずは第一形態で来るつもりのようなのだ。

セルはやれやれ、と内心でガッカリする。

気を測れないのだから仕方ないのだろうが、それでも安く見られたものだ。

もしここに自分がいなければ今頃はリゼットによって第一形態のまま、本気を出す間も与えて貰えずに消されていた事だろう。

「きえええええ！」

地を蹴って疾走したフリーザの初撃をかわし、飛び込んできた彼の首筋に手刀を当てる。

するとフリーザはセルの前に無様に叩き付けられ、地を舐める事となった。

その光景にクリリン達地球の戦士は歓声をあげ、ターレスとピッコロは「遊びや

がって」と苛立ちを見せる。

今の一撃、セルが本気だったならばフリーザの首と胴は離れていたはずだ。

どうやらセルはフリーザを本気にさせて戦うつもりらしい。

「あまり私を見縊らぬ事だ。最初からフルパワーで来る事をお勧めするぞ」

「ぐっ、は……こ、こんな、事が――」

フリーザは地面を叩いて跳躍し、空中で回転。

セルと距離を開けて着地し、荒く咳き込んでいた。

絶好の追撃機会だが、セルはあえて何もしない。リゼットならば遠慮なく止めに移行する場面だが、こういう時は孫悟空の悪癖が出てしまうのだろう。

「せっかく楽しそうな戦いに珍しくワクワクしているのだ。興醒めするような事はよしてくれ。」

さあ、フルパワーで来い。そうすればきっと、素晴らしい戦いとなるだろう」

「……ふ、ふふふ。随分とお優しい事で。それとも私を舐めているのですか？」

「どちらかといえば後者かな。変身もせぬ貴様では楽しめんからな」

セルのあまりに隠す気のない言葉にフリーザが口の端を歪めた。

そして額に青筋を浮かばせ、歯を食い縛る。

「いいだろう！ 本気で殺してやるぞ！ 後悔するなよ！」

フリーザが眩く発光し、第二と第三形態を飛ばしていきなり最終形態へと進化した。

あまりに凄まじい気に地球が鳴動し、リゼットの表情が険しくなる。

神の気ではないため誰でも感知出来るが、この気の大きさは……今のピッコロとすら並び得る。

どうやら自分達はフリーザを相当過小評価していたらしい、とリゼットは彼への評価を大幅に上方修正させた。

なるほど、宇宙最強を名乗っていただけはある。

才能の面でいえば兄のクウラすら遥かに超えているだろう。

「……素晴らしい。これでようやく私も本気を出せるというものだ」

セルは笑みを深くし、握った拳を腰へ落とす。

すると彼の気が一気に膨れ上がり、全身を雷光が包みこんだ。

かくして両者が同時に本気となり、空気が張り詰める。

最終形態となったフリーザが勝利を確信したように笑い、全力を出したセルが笑みを崩さずに構える。

——そして、衝突！

「きえええええええっ！」

「ぶるああああああっ！」

殴り、蹴り、払い、弾き、防ぎ、避け——超高速の打撃戦が開始された。

大気を振動させながら両者の腕と脚が高速で動き、けたたましい打撃音を響かせて超絶者同士の攻防が大気を震わせる。

攻撃、回避、防御、相殺。

セルの拳がフリーザの頬を殴り、フリーザの拳がセルの顔を打ち抜く。

両者の姿が同時に消え、離れた場所に出現して攻防を繰り返したと思ったらまた姿を消して別の場所で戦いを続ける。

大気が破裂したかのように振動し、空が連続して爆ぜた。

大砲でも発射したかのような音が幾度も木霊し、余波だけで地球全土が地震の如く振動する。

リゼット、ピッコロ、ターレスの3人を除けば、この戦いをかろうじて目で追えているのはナツパくらいだろう。

いや、ブルマの近くににいるフリーザと配色の似ている変な宇宙人もどうやら見えているらしい。

それにしてもあの宇宙人は一体何なのだろうか？ リゼットはつい怪訝な視線を向けてしまい、彼もそんなリゼットの視線に気付いたのだろう。

彼は何かに驚いたように反応し、そして小走りでリゼットの元へと駆けて来る。一体何だろうか？

そう思う彼女へ、宇宙人は何故か色紙とペンを差し出した。

「リゼットさんですよね？ もしかしたら、サイン下さい！」

「……はい？」

……いや、今そこじゃないんですけど。

などと言えず、つい勢いに負けてリゼットは色紙を受け取ってしまった。

※一応先に言っておきますが、フリーザの戦闘力は1垓にしません。

というかそれは、声優さんの「ナイスガイで、一垓ってところでしょか」というナイスガイとかけたただのジョークです。

それとナメック語はソルベが頑張って習得しました。

【戦闘力】

・復活の『F』…53億

第二形態…106億

第三形態…212億

最終形態(50%)…6000億

最終形態(80%)…9600億

最終形態(MAX)…1兆2000億

ゴールデンフリーザ…2兆4000億

・タゴマ…40億

・シサミ…3万

【変身倍率】

第二形態…2倍

第三形態…4倍

最終形態(50%)…約113倍

最終形態(100%)…約226倍

ゴルドン…約452倍

【53億で超化した悟飯を瀕死に出来るのか】

・多分あの時の悟飯は弱体化しすぎて超サイヤ人になっても50億程度だったんですよ……きっと……。

超サイヤ人になれるかどうかすら怪しいレベルまで落ちてましたし。

【ピッコロさんVSタゴマ】

マントとターバンが重すぎたのかもしれませんが。

ピッコロさんもまた修行の為に自らを追い込み、従来以上の負荷を己に課していたと考えられます。

タゴマ戦では自分が重装備をしている事をうっかり忘れてしまい、弱体化したまま戦ってしまったのでしょう、多分。

きつとあの時のマントとターバンは100トンくらいの凄まじい重さだったので
す。

【悟空がノーマルのままフリーザをボコった事に関して】

とりあえず悟空とベジータはノーマルのままでも神の気を出して戦闘力を上げる
事が出来るという事にでもしておきます。

見た目が変わらない疑似ゴッドという感じで。

この状態から超化する事でゴッドやブルーになれるのかもしれない。

【今じゃそこまでなくなっていくんだよ】

フリーザの「超サイヤ人にならないんですか？」という問いに対しての悟空の
返答。

これを証明するようにノーマルのままフリーザを圧倒してみせた。

この時の悟空はノーマルのままでも神の世界を吸収して従来の超サイヤ人以上と
いう設定があった……はずなのだが、後に第6宇宙との戦いでフリーザよりも弱
いフロスト相手に超化するわ、ベジータがノーマルのままではキャベと互角だっ
た
りで、無かった事になった設定。

他のSSや考察でも『ノーマルのままでも神の力を発揮できる』という事にして何とか説明している、考察泣かせの矛盾。

第九十五話 復活の「F」②

初期の地球「戦闘力18000とかやべえ！ 震えが止まらねえ！」ゴゴゴ

ゴ……

悟空「地球全体が震えてるみてえだ！」

←

中期地球「戦闘力1億以下？ ははっ、ワロス」

←

後期地球「超サイヤ人3やっべえ！」ガタガタガタ

←

ビルス編地球「超サイヤ人3も、もう普通やな……」

←

最近の地球「戦闘力兆以下とかいつも通りやん」

爆ぜる、爆ぜる、爆ぜる。

空が幾度も震え、衝突の余波が吹き荒れる。

現時点でフリーザはMAXパワーの80%まで発揮しており、純粋な戦闘能力ではセルと並んでいた。

フリーザが100%MAXの力を発揮するには力を溜める時間が必要であり、更に仮にMAXの姿に変身出来たとしても長続きしない。

故に80%だ。これならば長時間の溜めはならず、MAXのように大きく消耗する事もない。

以前はMAXパワー……筋肉を増量させた例の姿にならずに瞬時に発揮出来るパワーは精々70%が限界だったが、トレーニングを積んだ事でその欠点も多少改善されたようだ。

最もバランスの取れたこの状態をキープする事でフリーザはセルと互角に渡り合っていた。

しかしやはり彼の戦いは力任せ一辺倒だ。

彼には強敵との戦闘経験がほとんどない……というより、そもそも『戦い』の経

験がないに等しい。

やってきた事は悟空やターレスとの戦いを除いて全てが一方的な『蹂躪』であり均衡した実力の強者との戦いをほとんど経験していないのだ。

二度目の復活からは逆に蹂躪される側に回ってしまい、これも戦いとは言い難い。故にこうまで、実力では引けを取っていないはずのセルに対応されてしまう。動きを読まれてしまう。

結果として二人の戦いが互角だったのは最初だけであり、次第にその均衡も崩れて行く。

更に追い打ちとばかりに四身の拳にてその数を増やしたセルが猛攻をかけ、フリーザを圧倒し始めた。

彼の四身の拳はまさに反則的と呼んでいい。

何せ戦闘力を一切落とさずにデメリットなしで数を増やすなど、あまりに馬鹿げている。

多少の実力差など、容易に覆してしまえる数の暴力。

それを前にしてはさしものフリーザも分が悪く、いつしか防戦一方となっていた。

セルがフリーザの腹を蹴り上げ、二人目のセルがダブルスレッジハンマーで叩き落とす。

すぐに立ち上がったフリーザの気弾を三人目のセルがバリアで遮断し、四人目のセルが反撃で気功波を放った。

気功波はフリーザの足元に着弾し、彼を弾き飛ばす。

たまらずダウンしたフリーザへ4人のセルが陣形を組んで飛びかかり、体勢を立て直す間も与えず前後左右から同時に攻撃を仕掛けた。

いかに惑星を破壊する強生物フリーザだろうと腕と脚は二本ずつしかないし、目は前にしか付いていない。

そして彼は気で敵の動きを探知する能力もなく、どうしても手数に限界が出てしまう。

そこに一切の時間差なく、同一人物だからこそ可能な完璧なコンビネーションで同時に攻撃を加えられれば回避出来るはずもない。

さながらリンチのように4人のセルがフリーザを四方から滅多打ちに打ちのめし、血反吐を吐かせる。

「くそおー！」

フリーザの拳がセルに直撃し、その身体を殴り飛ばした。

だがそれと同時に一人のセルを囷とした残り3人の拳がそれぞれフリーザの顔、腹、延髄に入る。

これにはフリーザもたまらず、脱力したように地面に崩れ落ちた。

地面に手を突き、彼が見たのはセルの爪先だ。

顔を上げれば自身を見下すセルと目が合い、直後に顎を蹴り飛ばされる。

フリーザは空中で回転し、かろうじて着地したが既に息が荒い。

そこにたたみかけるようにセルが飛び込み、腰を落としての拳の連打を叩き込んだ。
だ。

ただの連打ではない。飛翔の推進力を落とさずに、前へ前へとフリーザを押しやりながらの連打だ。

普通ならばありえない『前進しながらの腰を落とした拳打の連撃』。しかしそれも舞空術との併用で可能となる。

砂塵を巻き上げながらセルの拳が面白いほどにフリーザへ入り、腹や顔を次々と

殴る。

フリーザも負けじとセルを蹴り飛ばすが、それと入れ替わるように今度は二人のセルが突撃してまた拳の連打を開始した。

二人のセルの拳がクロスを描き、フリーザの顔へとめり込む。

「……完璧なコンビネーションです」

このセルの連携攻撃には観戦しているリゼットも舌を巻くしかない。

セルの連携は、マウス口のように完璧だ。

リップ唇——口に入れたものを閉じ込めて逃がさない。

トゥース歯——閉じ込めた物を噛み砕く。

タンクそして舌——噛み砕かれた物を、喉の奥へと押し込める。

普段何気なく行っているこれらの動作は、非の打ちどころのない三位一体の連携のお手本である。

一人のセルが逃げ場を奪い、一人のセルが打ちのめし、一人のセルが追い打ちをかける。

そして本体は余裕の表情で、打ちのめされるフリーザを見物していた。

「ぐはっ……!」

たまらずダウンしたフリーザは地面を血で汚し、明らかに疲労の色を濃く顔に出していた、

しかしそれでも尚、その顔は勝利への確信に満ちている。

「ゼエー、ゼエー……なるほど……想像以上に出来ですね。

これは私も本気を出さないとまずいようで……」

「ほう、まだ上があるのか。ならば遠慮せずに思い切りやるといい」

「ご親切に……はー、はー……どうも」

フリーザが両手をダラン、と下げてそこから少しだけ広げる。

左足を前に出し、彼が好んで取る姿勢を形作った。

セルは本当にパワーアップまで待つつもりのように、腕を組んでフリーザの動向を見守っている。

悟空の細胞はかなり強力なのだが、彼の悪癖まで継いってしまったのは困った所だ。リゼットはそんなセルの様子に溜息を吐き、観戦を続ける。

その近くではリゼットのサインを貰った宇宙人——ジャコが嬉しそうにはしゃい

でいる。

何でもリゼットのサインや生写真は宇宙ではかなり価値があるのだとか。

……今、初めて聞いた情報である。

そして彼は更にセルの写真をも撮影していた。

「随分と、写真に撮るのが好きなんですね」

「ああいえ、これは決してミーハーな気持ちでやっているわけではありませんよ。私には銀河パトロールの隊員として彼等の行動を記録し、報告する義務があるのです」

「報告したらどうなるのですか？」

「そうですね。他の惑星ならば警戒レベルMAXの超危険区域と指定され、ミサイルを撃ち込み消滅させる事になっていたでしょう」

「他の惑星ならば？」

「はい。しかしこの地球という星は第一級保護指定……おっと。

申し訳ない、今のは忘れて頂きたい。ともかくこの星にミサイルは撃たれませんので、そこだけのご安心を」

ジャコは何か口を滑らせてしまったのか、咄嗟に台詞を中断した。

しかし氣になったリゼットは彼の心を既に読んでおり、それによって何故か地球が銀河法によって第一級保護指定惑星とされている事を把握した。

何でも超銀河王なる男がそう決めたらしいが……残念ながらジャコは肝心の超銀河王の名前と容姿を知らないらしいのでその正体は謎に包まれている。

不思議に思いながらも地球に害がないならばいいか、とりゼットは戦いへと視線を戻す。

ここでは丁度フリーザが変身を終えた所らしく、全身が金メッキで塗装したような安っぽい黄金で包まれていた。

どうやら超サイヤ人はフリーザの中でかなり大きなウェイトを占めているらしい。

ああして変身にまで影響が現われるとは、意識していると言っているようなものだ。

彼の変身を見届けたセルは嬉しそうに笑い、分身を消して足を広げた。
いよいよ本腰を入れて本体が戦うようだ。

「ではこちらも全力で行かせてもらおう……はああッ！」

セルの全身を黄金のオーラが包み、更にその上から白い光が迸る。

バーストリミット——リゼットが編み出したリゼット版の界王拳だ。

超サイヤ人と倍加技の同時発動は身体への負担が凄まじく、一つ制御を誤れば身体を壊してしまう。

ましてやパワー消費の激しい超サイヤ人3との併用など自殺行為でしかないだろう。悟空にだって出来ない。

だがセルならば出来る。

高い再生力を持ち、悟空並のタフさを持ち、リゼット並の気の制御技術を持つ彼ならばこの無理を通す事が可能だ。

「いくぞ！」

「すぐに終わらせてさしあげましょう！」

全力を出したセルとフリーザが翔け、先ほどとは桁違いの速度で攻防を開始した。

もはや悟飯ですらその動きを目で追う事は出来ず、セルとフリーザの戦いは完全に神の領域へと突入している。

緑と黄金の影が超高速で飛び交い、時折衝突してはまた翔け巡る。

傍から見ればまだ戦闘は始まったばかり。そうとしか映らぬ戦いも、当人同士にしてみれば既に幾万もの攻防を繰り返した長期戦だ。

影同士が交差する一瞬——常人にとっては一瞬なれどフリーザとセルにとっては体感時間を圧縮した長期の戦闘時間だ。

二人は交差するその僅かの間に幾百幾千もの攻手、妙手、好手、巧手を繰り出し相手の悪手を読んで打撃の隙間を縫って攻撃を当て、あるいは当てられてまた離れる。

時間にして百分の一秒？ 万分の一秒？

どちらにせよ、通常ならば有り得ない短い間に、数十数百数千手にも値する攻防を二人は行っていた。

もしもこの攻防を常人でも見れる程度にまでスロー再生して流すならば、あるいはそれは30分のアニメーションが丸々一本作れてしまうだけの密度になるのかもしれない。

されど実際は全力を出しての攻防が開始^{はじ}まってより1分も経っていない。

レベルが高すぎるが故に常人の目には逆に陳腐に映るという逆転現象が起こり、最早二つの影が飛び続けているようにしか見えない。いつ戦っているのかが分からない。

「なんて奴等だ……お、俺の目には残像しか捉えられん……」

「す、凄いなお前……俺はもう残像すら見えん」

そのハイレベルぶりに天津飯が戦慄し、ヤムチャが冷や汗を流した。

他の戦士達も同じようなものだ。

誰もがセルとフリーザの動きを掴めていない。

この中で問題なくあの戦いを視認出来ているのは最早、気の感知を極めたりゼツトただ一人だけだろう。

ピッコロやターレスすらも通常の状態では時折見失ってしまうようで、面白くなさそうに視線を動かしている。

戦闘力は黄金となったフリーザが勝る。

攻撃を当てる回数こそセルが優勢なれど、一度の攻撃で与えるダメージが違う。だがセルには再生がある。頭さえ無事ならばどんな致命傷からも立ち直る事が出

来る。

故に二人の戦いは均衡し、フリーザは攻め切る事が出来ていない。

その戦いを見てリゼットは小さく呟いた。

「セルの勝ちです」

「何？ 気の大きさではフリーザが圧倒的に勝っているのか？」

リゼットの言葉にピッコロが意表を突かれたように驚く。

そんな彼にリゼットは迷いなく答えた。

「それでもないですよ。気が付きませんか？」

もう、フリーザの気がセル以下にまで落ちているのを」

リゼットに指摘され、ピッコロとターレスはハッとしたような顔になる。

確かに先ほどまではセルよりも強大だったフリーザの気が今やセル以下にまで落ち込んでいる。

これは一体どうした事だと困惑する二人とは対照的に、リゼットはどこか呆れたような顔だった。

「結局、過去の敗戦から何も学んでいなかったのでしょうね。」

弱点が以前から何も変わっていません。これではただスケールを上げただけの焼き直し……失敗の繰り返しでしかない。

彼の兄がこの姿を見ればきっと、『まだまだ甘い』と吐き捨てたでしょう」

以前フリーザは100%MAXの力を存分に扱う事が出来ずにスタミナ切れによって敗北を喫した。

そして今もまたその弱点は何一つ変わっていない。

彼は己の最大の欠点を何も解消しないままに地球へと来てしまったのだ。

そしてその代償は高くついた。

今や勝負は完全に逆転し、セルが一方的にフリーザを圧倒している。

気の消費が激しいという弱点を抱えているのはセルも同じ事だが、それでもフリーザよりは長続きする。

セルが消耗するまでフリーザが耐え抜けばまだ勝機もあろうが……流石にセルもそこまでは遊ばないだろう。

「ずあああ！」

セルの蹴りがフリーザを弾き、回りこんでまた蹴り飛ばす。

すっかり息の切れてしまったフリーザが空中で停止し、だが直後真上に現われたセルの肘打ちで地面へと落とされた。

体力の消耗とダメージによりとうとう黄金化までもが解け、フリーザは屈辱の四つんばいとなってセルを見上げる。

「ふっ、勝負あったな。礼を言うぞフリーザ。

貴様のおかげで今の私の強さをこの上なく実感する事が出来た」

「ぐっ……ぬ！」

「では、さらばだ。地獄で会ったらまた闘ろう」

フリーザがイタチの最後っ屁で地球を破壊しようとするが、その気功波すら意味を成さない。

気功波を撃とうとした腕にセルの尾が突き刺さり、生体エキスを吸い取る。これによりフリーザの腕は水分を失ったミイラのような状態になってしまい、最後の抵抗すら封じ込まれてしまった。

もしもここにいるのが孫悟空かベジータならば今の手にかかった事だろう。

だがセルにベジータの細胞はなく、悟空の細胞はあれど同時にリゼットの細胞も

また受け継いでいる。

故に不覚は取らない。勝てる勝負に負けるような失態はない。

……もっとも、セルが止める必要もなくこの周囲の地面には薄く引き伸ばされたバリアガリゼットによって展開されていたのでどのみちフリーザの最後っ屁は絶対に成功しなかったのだが。

腕を失ったフリーザを蹴り上げ、セルが気を高めて構えた。

「かめはめ波アアア……！」

そして放出。

青白い気の奔流がフリーザを呑み込み、彼を構成する全てを抹消していく。

皮、肉、臓腑、骨。あらゆる細胞を余さず気で消し去り、フリーザは絶叫をあげながら光の中へと消え去った。

それを見届けてからセルは腕を組み、完全にフリーザの気がなくなった事を確認する。

「ふふ……後5分くらいは遊んでもよかったかな？」

そして勝利を確信した後のこの台詞である。

リゼットは小さく肩を落とし、悟空譲りのこの悪癖だけはどうかならないものと呆れてしまった。

（それにしても……）

リゼットは神経を尖らせて遠くの宙域の気を探る。

どれだけ探知しても、フリーザに似た気は感じられない。

しかしそれは少しおかしいのだ。

何故ならナメック星のドラゴンボールは三つの願いを叶える事が可能で、フリーザを蘇生させた者達が何も叶えていないとは考えにくい。

だからコルド大王や……クウラが蘇生している可能性が高いと睨んでいるのだが、何も感じないのだ。

（復活していない……ならば一番いいのですが……）

どうにも、嫌な予感が拭えなかった。

★

——惑星
M2。

そこは、全宇宙の征服を企てるマシンミュータントという機械生命体が暮らす惑

星だ。

その戦闘能力は高く、ザーボン率いる大銀河パトロールすら迂闊には手を出せない。

特にこのM2 最高の実力者とされるリルド将軍に至っては、あの魔人ブウと同等の強さを誇っていた。

だがその惑星は今、荒れ果てていた。

精鋭であったはずのマシンミュータント達は一体の例外もなく全てが残骸と化し、星の至る所では激しい戦闘の跡が見れる。

……いや、戦闘の跡というのは正しくない。これは蹂躪の跡だ。

壊れたマシンミュータントの中にはリルド将軍……だったと思われる残骸も転がっており、侵略者の凄まじさを物語っていた。

「あ……ガ……サイヤ人……復讐……すルまでハ……」

バチバチと、壊れた腕や腹部をショートさせながら話すのはこの惑星の科学者であるドクター・ミューという男だ。

その横では赤ん坊のような小さな機械生命体が、これまた残骸となって転がって

いる。

彼の名はベビー……かつてサイヤ人に滅ぼされたツフル人が、残された科学力を結集させ、ツフル王の遺伝子を組み込み誕生した寄生生物だ。

他者の身体を乗っ取る事で理論上はどんな強敵相手でも勝てるはずの生物だが……それも成長し切っていない赤ん坊ベビーのままでは力を発揮し切れない。

寄生する暇すらない圧倒的強者を前にしては、ただ滅ぼされるしかない。

しかも今、この惑星を襲っている男には一切の容赦がなく、甘さもなかった。空から、太陽が降って来た。

いや、太陽ではない。太陽と間違えてしまうほどに巨大で熱い、紅蓮の気弾だ。それがツフル人の復讐心ごと、惑星M2を塵へと還していく。

ツフル人の悲願など知らぬ、復讐心も知らぬ。野心も知らぬ。眼中にすらない。ただ目の前にいて、腕試しの相手として丁度よかったから滅ぼした。ただそれだけの事だ。

「……………ちくしよおおお……………」

最後にベビーの口から洩れたのは、泣き声のような掠れた声であった。

サイヤ人への復讐を果たす事も出来ず……出会う事すら出来ず。

ベビーという、本来ならば強大な敵になれたはずの男は、更に強大な黄金の悪魔によって滅ぼされた。

M2が爆散し、宇宙から一つの星が消える。

その光景を眺めながら悪魔は、己の腕に取り付けた腕輪を見た。

科学の発展とはいいいものだ。

これだけ力を振るっても、外に戦闘力が漏れる事がない。

彼が復活して何にも優先して行ったのは、戦闘力を隠す事であった。

そうでもしなければ、あの女の感知に引っかかってしまうかもしれない。

その為にまず彼は、気操作を覚えた。

次にこの機械惑星M2に侵入してそこらのマシンミュータントを材料に、かつてビッグ・ゲテスターと融合していた時の知識を用いてこの腕輪を完成させた。

科学の発達したこの惑星には素晴らしい材料が多かったので、予想以上の代物が出来たのは嬉しい誤算だろう。

これで、時が来るまではあの女に気付かれずに力を磨き続ける事が出来る。

「……フン。フリーザめ、敗れたか」

最近身に着けた気を感じする能力で、地球に行つたはずの弟の気が消えるのを感じた。

恐らく敗れて消されたのだろう。

弱点を消さぬまま、復讐心に駆られて突撃するからこうなるのだ。

共に蘇生させられたコルド大王も、支配権を取り戻そうと早期に動いたせいで銀河パトロールのレジックという男に捕まってしまった。

だが彼は弟や父と違う、決して焦らない。

煮えたぎる憎悪を原動力に、されどそれに踊らされる事なく。

ただ、確実な復讐を果たすために力を磨き続ける。

宇宙の支配……権力、見得、栄光……そして未来。

その全てが今やどうでもいいものだ。

たった一つだけいい。

あの女を……リゼットを蹂躪し尽し、そして殺す。

それさえ果たせれば、他はもう何も要らない。

「フリーザも……まだまだ、甘い」

男——クウラは、力だけを求め続ける。

たった一つの、執着にも似た憎悪。ただそのみを糧として。

宇宙の暗闇の中で、真紅の瞳だけが不気味に輝きを放っていた。

ベビーは犠牲になったのだ……超ルート進行によるGTルート消滅……その犠牲にな……。

〳後日談〵

悟空「へえー、またフリーザが復活してやられたんか。これで何度目だ？」

ベジータ「どうでもいいな」

リゼット（……哀れフリーザ。今回は強かったのに）

〳後日談2〵

ジャコ「えっ……サインと写真没収？ そりゃまあ写真は元々提供するつもり

でしたが……えっ？ セルとフリーザはどうでもいいから、女神の映っている写

真だけ没収？」

銀河王「うむ。超銀河王様のお達しだ」

ジャコ「何故に!？」

【戦闘力】

ゴールデンクウラ…4兆7000億

※現時点の数値。クウラさんはインフレ特急に駆け込み乗車すべく必死に走っております。

ちなみにこんな強そうな演出してアレですけど、クウラの出番は監獄惑星編までありません。

で、このSSは力の大会編終了で一度完結という形にするので、つまり彼の出演は（ヒーローズのアニメが終わるまで）もうないです。

クウラ「何だとォ!? どんな終わり方をするか分からんシナリオへの出演の為に俺を出さん気か!？」

『続きはゲームで自分の目で確かめてくれ!』なんて終わり方をしたらどうする気だ!？」

※その時はモロ編にでも出すか、オリジナルシナリオで『復活の「C」』やります。

第九十六話 破壊神選抜格闘試合

「第6第7宇宙破壊神選抜格闘試合？」

リゼットが首をかしげ、復唱する。

その前でベジータと悟空が頷いた。

リゼットの後ろではセルとピッコロ、ターレスも話を聞いており面白そうに口の端を歪めている。

フリーザを再び地獄に落としてより数日が経過した。

あの戦いで一番得をしたのはブルマであり、フリーザの宇宙船を無傷で得たことにより以前よりも進歩した宇宙の技術をカプセルコーポレーションが独占してしまったのだ。

特に大きかったのが新型治療ポッドの存在で、これは欠損した部位ですら再生可能なほどの凄まじい治療効果を見込める。

それにより地球の医療は一気に発展し、人類は遂にあらゆる怪我を克服する事に成功したのだ。

勿論その恩恵は当然、フリーザを倒したセル——つまりは彼が滞在する神殿にも及び、地球製新型治療ポッドの第一号機が神殿へと配備され、旧型はカプセルコーポレーションへと返却された。

これにより今までよりも一層荒い修行を行う事も可能となったわけだが、元々ピッコロとセル、リゼットの3人は自力で欠損部位を治す事が出来るのであまり変化はしなかった。

そうして更に数日が経過したある日、ウイスの元で修行をしているはずの悟空とベジータが神殿へと現れたのであった。

そして現れるなり、彼らが告げた内容こそが『第6第7宇宙破壊神選抜格闘試合』だ。

何でも、第6宇宙の破壊神であるシャンパ（ビルスの双子で太ったビルスのような外見らしい）が地球の食^{カッブラーメン}べ物を大層気に入り、地球を欲したそうだ。

だが第6宇宙の地球は過去に人類が馬鹿な争いをしたせいで滅亡してしまっており、地球人が残っていない。

だが地球を諦めきれないシャンパはビルスに格闘試合を申し込み、勝ったら互い

の宇宙の地球を取り換える事になってしまったのだ。

つまり、仮にも地球の神であるリゼットに何の許可もなく勝手に景品にされてしまったわけである。

「こちらに何の得もないですね」

「勝ったら超ドラゴンボールっていうすんげえドラゴンボールで願いを叶える事が出来るらしいぜ」

「でも願いを叶えるのはビルス様でしょう。やはり私達には損しかありませんが」
「そう堅え事言うなよ。折角、他の宇宙の強え奴と闘れるんだぜ。ワクワクしねえか？」

あまり乗り気ではないリゼットに、何とか納得させようと悟空が説得する。

どうせやる以上、ベストメンバーで挑みたい。

そしてその一人に、本人の同意もなくリゼットは強制的に組み込まれているのだ。これはビルスの決定であり、それを無視してしまえば悟空とベジータが怒られてしまう。

本来、神は参加不可能なのだが神は神でも、リゼットは辺境の小さな惑星の神だ。

それを参加させたいと言ったビルスの事をシャンパは鼻で晒い、『そんなのでいいなら許可してやるよ』と言ってしまったらしい。

恐らくこれで一勝は頂きだ、とても思ったのだろう。

「それにしても驚いたぞ、皆。オラとベジータはウイスさんの所で修行してよ、自分で言うのもなんだけど凄え強くなったと思ってる。けどお前達から感じる気も以前とは比べもんにならねえ」

「ふん、貴様だけが強くなっていくのは俺のプライドが許さんからな。そうそう引き離せると思うなよ」

悟空の言葉にピッコロが答え、セルとターレスも同意したように笑う。

第7宇宙のメンバー5人は今更探す必要もない。

ここにいる6人……、即ち悟空、ベジータ、リゼット、セル、ターレス、ピッコロこそが疑いの余地もなく彼らの知る限りの第7宇宙最強の6人だ。

つまり第7宇宙のメンバー選定は、この6人のうちの誰を外すかだけを決めればいい簡単な作業なのだ。

「悪いけどオラとベジータ、それに神様は固定だ。出ねえとビルス様に怒られちま

う。

それにモナカとかいう宇宙で一番強い奴も出るらしいから、空き枠は一つだけだな」

「なるほど、つまり私かターレス、ピッコロの中から一人だけを選べばいいのだな」
悟空の言葉にセルが頷き、それからピッコロとターレスを見る。

そこに口を挟んだのはベジータだ。

「悟飯は？ はつきり言って潜在能力ならあいつが一番だろう。ゴッドにすれば俺や貴様を超える可能性もあるぞ」

「いや、悟飯はいい。今のあいつには地球よりも守るべきもんがある。

やっと夢だった偉い学者への道を歩いてんだ。オラが邪魔するわけにやいかねえよ」

「……ふん」

悟飯を推薦したベジータだが、それを切り捨てたのは意外にも悟空であった。

悟飯は幼少より偉い学者になる事を夢見ていたが、サイヤ人の襲来やナメック星への冒険、人造人間との闘いなどでなかなか夢に邁進する事が出来ずにいた。

悟空もその事に責任を感じていたのだろう。

昔の彼ならば何も思わなかったのかもしれないが、悟空だってもういい年齢としだ。彼は彼なりに老成せいちようしているのである。

その言葉に誰も反論せず、ターレスがパン、と手を叩いた。

ここで「サイヤ人はサイヤ人に相応しい生き方をしろ！」などと言わない辺り、彼もまた変わっているのかもしれない。

「なら決まりだ。セル、お前はこの前俺達をさしおいて楽しい思いをしただろう？
なら今回は俺かピッコロの番だ」

「ぬ……それを引き合いに出されると弱いな。だがドーピングは禁止なんだろう？
ならばターレス、お前こそ出場は出来んはずだが。過去に何度も神精樹を口にしているだろう」

「神精樹は薬物ドーピングじゃねえ、果物だ。引っかかりやしねえよ。

第一それを言ったら、人造人間のお前なんか武器そのものじゃねえか」

リゼットの持つ前世の知識の中においてターレスは度々『ドーピングサイヤ人』と比喻されてきたが、それは決して正しい表現ではない。

何故ならドーピングとは運動能力の向上を目的とした薬物の調合、接種を意味するが神精樹はれっきとした果物なのだ。

例えばブルーベリーは目の疲労回復効果がある事で知られ、アスリートなどが食べる事は決して珍しい事ではないし、勿論これはドーピングとは見なされない。

神精樹はこれと同じようなものなのだ。

要するに『そういう効果の果物』でしかなく、当然ドーピングには引っかからない。

ターレスがそう言うのと、セルは黙り込んでしまった。

「地球の神にドーピング疑惑、人造人間か……ルール違反スレスレの面子候補だな」

「なあに、それでも違反じゃねえさ」

ベジータが険しい顔で言うが、ターレスは気にした様子もない。

後はターレスかピッコロのどちらが出るかだ。

戦力重視でターレスか、それともバランス重視でピッコロか。

単純な戦力ならばターレスが勝るが、サイヤ人3人は流石にバランスが悪い。

だがピッコロは戦闘力でターレスに一步劣る。

6人はしばらく話し合ったが、今回はターレスを選ぶことにした。

やはりここは戦闘力重視だ。

悟空もそれに納得したようで、「決まりだな」と呟く。

次の試合に出る面子は悟空、ベジータ、リゼット、ターレス、そしてビルスが連れてくる宇宙最強の5人だ。

「それで、どうします？　今の精神と時の部屋ならば試合までの3日間で3年分の修行をこなせますが」

「いや、悪いけどオラは遠慮しておくよ。もうオラ達の強さはとつくに限界まで行っちゃってる。

多分これ以上修行しても伸び代はほとんどねえだろう……そんなんで無理に修行したってそんなのは辛いだけで修行じゃねえ。

試合までの3日間はうんと休んで備えるさ。神様もそのつもりだろ？」

「ええ。私はもう十分に鍛えましたしね。部屋を使いたい方がいれば譲りますよ」悟空とリゼットは精神と時の部屋の使用を辞退し、他のメンバーへと譲る。

だがベジータとターレスもあまり乗り気ではない。

「俺もいい。しばらくは身体を休めるさ」

「俺もパスだ。まだジジイにやりたくねえ。多分俺があそこに入ることはもうねえだろう」

「ならば私が使わせてもらおう。手慰みにタピオンとポポ、ついでにカリンでも鍛えておいてやる」

結局試合に出場する5人は誰も精神と時の部屋を使わず、皮肉にも試合に出ないセルだけが部屋へと入ってしまった。

災難なのは巻き込まれてしまったタピオン達か。

未来の地球の為に今から彼らを鍛えるのは悪くないが、どちらかというとセル自身がスパーリングの相手として鍛えようとしているようにしか見えない。

ともかく、試合まで3日間。彼らは思い思いの方法でそれまでを過ごす事となった。



試合当日。

悟空達は『キューブ』という宇宙間移動用の乗り物に乗り、第7宇宙と第6宇

宙の中間に位置するという名もなき星へと向かっていた。

キューブの中には試合に出場する5人とビルス、ウイスの他に観戦に来たブルマ達もいる。

更にジャコと、彼が連れてきた銀河で二番目に偉いという銀河王までいるが、誰も銀河王には驚かなかった。

まあ、今更銀河で二番目に偉いとか言われてもインパクト不足である。

ブルマの助手であるタコの科学者に「タコですじゃ。うわへへ」と笑われて終わりであった。

ちなみに一番偉いのは超銀河王というらしいが、この場には来ていない。

まあ、宇宙で一番偉い破壊神様とはいえ、バーベキューの肉を美味しそうに食べているので、あまり威厳がないのが問題ではあるが。

というか脂っこいものは苦手とか言っていた気がするのだが、その辺はどうなったのだろうか。

聞けばピザやカップラーメンを好んで食べているらしいし、実はそんなに拘りはないのかもしれない。

「脂っこいけど、このバーベキューっていうのも実に美味しいね。

ただの焼いた肉だと思ったけど、タレが絶品だ。

後はこれで甘いデザートがあれば最高なんだけどなあ」

そう言いながらビルスがチラチラとリゼットを見る。

リゼットは肩をすくめると、仕方ないので亜空間を開いて今朝に人参化に買わせておいたデザートを取り寄せた。ビルスの動きなど予測済みである。

皿に乗せたモンブランをビルスに渡すと、彼は嬉しそうにモンブランを食う。

とりあえず東西南北の都の中で最も美味いと評判のケーキ店のモンブランなので外れはまず有り得ないだろう。

ウイスが物欲しそうにこちらを見ているのをしばらく無視してみたが、するとずっとこちらを凝視してきたので、仕方なくもう一つ出してウイスにもあげた。

「おいリゼット、もう一つだ！」

「もうないです」

「何!? 今ウイスに渡してたろ！」

「ですから、あれで最後です」

リゼットが無情に答えるとビルスは射殺さんばかりの視線でウイスを睨み、そちらへとダッシュした。

しかしウイスも奪われてなるものと逃げ出し、キューブの中で宇宙最強の破壊神とその従者が走り回る。

威厳とは一体何だったのか……。

リゼットはそんな姿に呆れ、それから端の方にいる見覚えのない小柄な宇宙人を見る。

肌に密着するタイプのボディースーツを着込み、無駄にでかい乳首を突起させた変な宇宙人だ。

彼がビルスの言う所の『第7宇宙最強』なわけだが、何か妙だ。

近くにいても気を全く感じず、かといって神の気というわけでもない。気を抑えてゼロにしているのかとも思ったがそれも違う。

(……まさか)

リゼットは嫌な予感がして彼の心の中を覗いた。そして確信する。

間違いない、彼は素人だ。格闘の経験など全くない！

ただ悟空を奮起させるべく用意された偽りの強者であり、つまり完全な戦力外。つまりリゼット達はいきなり実質4人に減らされてしまったのだ。

「ちょっと、ビルス様」

「ん？ 何だ？ もしかしてモンブランのお代わりがあったか？」

「ないです。そんな事よりも、こういうおつもりですか。あんな素人を連れてくるなんて」

「……な、なんの事だか……」

「誤魔化さないで下さい」

じっとビルスの目を見る。

ビルスが目を背けたので手の上に皿ごとチョコレートケーキを出して無理やりこちらを向かせ、その上で彼にはまだ渡さない。

素直に答えないと渡さないというポーズだ。

それに対しビルスはしばらく悩んだが、やがて食欲に負けて舌打ちをした。

「ちっ……悟空達には言うなよ」

「ホホホ、悟空さん達を奮起させる為にただの素人さんを連れてきてしまったんで

すよね」

「ウイス！」

ウイスがあっさりとバラした事実にはリゼットは額を押さえ、ピッコロとセルがピクリと反応した。

どうやら彼らにも聞こえたようだ。

そしてリゼットが隙を見せた瞬間にビルスが猫のような俊敏な動作でチョコレートケーキを掠め取ってしまい、美味しそうに齧り付いている。

本当、どうしてくれるのか、この馬鹿猫様……。

（3日間の間にあった出来事）

ジャコ「ズノー様は何でも知っておられる。

しかし話を聞きたければズノー様の頬にキスをしなければならぬのだ」

ブルマ「ええ……超ドラゴンボールの情報を知る為とはいえそれは……」

リゼット「何で私までここに……」↑ブルマに移動手段として連れて来られた

ズノー（よっしゃああ！ 白の女神キタコレ！）ドキドキドキ……

リゼット「では失礼して……」

ズノー（よしこい、こい、こいこいこい……こいやああああ！）

・リゼットは亜空間から魔人ブウを召喚した！

リゼット「ブウ。ちよつと悪いんですけど、その顔の大きい人のほつぺたにキスしてもらっていいですか？ 後でケーキあげますから」

ブウ「いいぞ」

ズノー「」

ブウ「……」バババババ↑イケメンフェイスにチェンジ中

ブウ「さあ、チューしてやる！」

ズノー「」

ズノー「ああああんまりだああああ!!」

【戦鬪力】

※タピオンとポポ、カリン様だけ上昇。セルは3人を鍛えただけなので変化な

し。

・タピオン…50億↓75億

・Mr・ポポ…6億↓9億

バーストポポ20倍…180億

・カリン様…7億↓10億5000万

バーストカリン20倍…210億

第九十七話 破壊神選抜格闘試合②

試合会場である『名前のない星』に着いた悟空達を待っていたのは第6宇宙代表の面々であった。

熊のような大柄な戦士に、見るからにロボットとしか思えない宇宙人。

腕を組んだ寡黙な戦士はどこかセルに似た雰囲気を持ち、ベジータよりも小柄な少年は自らをサイヤ人であると名乗った。

だが何よりも悟空達を驚かせたのはフリーザに瓜二つの戦士の存在だろう。

どうやら向こうの宇宙にもフリーザと同じ宇宙人は存在していたらしい。

だがフリーザと違い、何処か爽やかさを感じさせる笑顔を浮かべている。

ここまで来れば気のコントロールなど基礎技能。恐らく気を探ったところで強さの全貌は見えないだろうが仮にも向こうの宇宙の代表だ。弱いはずはあるまい。

対しこちらはモナカという戦力外を抱えたハンデマッチ。出来れば先鋒戦には勝利して何とか条件を対等へと戻したい。

知力テストには当然のように全員が受かり、悟空達はどういう順番で出るかを相

談する事となった。

「最強のモナカは当然最後だ。後はお前らで決めろ」

主将はビルスの一存によりモナカとなり、悟空達はジャンケンで順番を決定。

その結果、先鋒ターレス、次鋒悟空、中堅ベジータ、副将リゼット、主将モナカという順番となり、これにビルスも満足そうに頷いた。

彼としてもこの順番は中々悪くないと思ったらしい。

仮に何かあっても、この布陣ならば副将のリゼットで必ず終わるという確信があるのだろう。

かくして互いの準備は整い、ターレスと敵側の先鋒——ボタモという熊の宇宙人がリングインする。

「あいつ、ビルスの所にいたサイヤ人じゃないのか？」

「顔は似ていますが別人ですね」

「ま、どちらにせよサイヤ人には違いはないか。5人中3人がサイヤ人とは、第7宇宙は随分層が浅いんだな。人手不足かあ？」

シャンパが嘲るように言うと、ビルスが不敵に笑って返す。

笑いたければ精々今のうちに笑っておくといい。

試合が始まればサイヤ人の出鱈目さにそんな事は言っていられなくなるのだから。

そんな自信に満ちた態度にシャンパが不機嫌になり、ボタモへと声援を飛ばす。

「やっちゃまえボタモ！ 我が第6宇宙の強さをビルスに思い知らせろ！」

「叩き潰せターレス！ シャンパに吠え面をかかせろ！」

互いの観客席からシャンパとビルスの声が飛び、選手二人は口の端を歪めた。

言われずともそのつもりだ。

「それでは第6宇宙第7宇宙、破壊神選抜試合の第一試合！」

第6宇宙のボタモ選手VS第7宇宙のターレス選手！ 開始イイイ！」

試合開始が審判より宣言され、ビルスとシャンパが同時に指から気を放つ。

二条の輝きは中央のゴングへと当たり、宇宙へと音色を響かせた。

それと同時にターレスとボタモがリングを蹴って正面で衝突した。

ボタモの愚鈍そうな図体からは想像出来ない身軽さには意表を突かれたが、正面からの力比べはターレスが上だ。

ポタモの身体をゴムボールのように弾き飛ばし、更にポタモが落ちるよりも早く追いついて追撃。

腹に蹴りを見舞い、固く握った拳で脳天を強打してリングへと沈める。

「温いぜ！ その程度で俺に勝てると思うか！」

今の衝突で力の差を見切ったらしいターレスが確かな手応えに早くも勝利を確信する。

だがその確信は覆され、煙の中からは全く無傷のポタモが姿を現した。

その事に一瞬驚くも、すぐにターレスは余裕の笑みを取り戻す。

「へっ、そうこなきやあな」

ターレスが流星の如き速度でポタモとの距離を詰め、一方的に打ちのめす。

正拳、裏拳、肘打ち、膝蹴り、水面蹴り、前蹴りに踵落とし。

反撃を許さずに次々と攻撃を命中させるも、まるでポタモに応えた様子を感じない。

単純に固いのか、それとも魔人ブウのようにダメージを受けないのか。

まあ、どちらでもいい。とにかく分かったのは、単純に正面から攻めていてはラ

チが明かないという事実だけだ。

普通ならば分かってもしようもない事なのだろう。

『攻撃が効かないから気を付けろ』なんて言われてもどうすればいいのか分からない。

だがこれは試合。死合いではない。

ラフファイト上等の自分がルールに救われるとは笑い話だが、これはルール有りのゲームなのだ、とターレスは内心ほくそ笑む。

ならばここは、そのお上品なルールに則ってやろう。

そう決めたターレスはボタモの顔を掴むと跳躍し、空中で解放して思い切り殴り付けた。

ボタモはダメージこそ受けていないがリング外に叩き落されてしまい、あっさりと第一試合の勝敗が着いてしまう。

「勝者、第7宇宙のターレス選手！」

「くくくつ、いくらダメージを受けないと言っても、こうも鈍間じゃなあ。宝の持ち腐れだぜ」

まずは幸先よく一勝を飾り、ビルスがガッツポーズを決める。

それとは対照的にシャンパは反則だのやり直しだの喚いているが、誰もそんなのは聞き入れない。

第6宇宙二人目の選手がリングへと上がり、ターレスと相対する。

二人目として出てきたのは早くもフリーザ似の宇宙人だ。

気の大きさを言えば通常状態のターレスと似たようなものだが、ここから変身するとなれば油断は出来ない。

彼はターレスへ歩み寄ると、にこやかに手を差し出す。

「素晴らしい試合でした。貴方のような戦士と戦える事を誇りに思います」

「……」

「こうして敵と味方に分かれてしまいました、これは試合。

戦いが終われば互いに笑いあって手を取り合えると信じています」

「生憎だが、これは勝負だ。勝った方が笑って負けた方が泣くんだよ」

ターレスは差し出された手を強く跳ね除け、上から見下ろすように言う。

「アンタだってその口だろう？ 下らない演技はやめて互いに本性曝け出してや

り合おうや。なあ？」

「……それは心外です。私は心底から……」

「そうかい。その演技がどこまで続くか楽しみだ」

フリーザ似の宇宙人——フロストが残念そうに後ろへと下がり、ターレスは油断なく構える。

そのあんまりな態度に両宇宙の観客席からブーイングが飛び、あつという間にターレスはこの試合の悪役となってしまうた。

とはいえ、悪党なのはいつもの事だ。

ターレスは特に気にした様子もなく、悟空と似た顔を悪辣な笑みに歪めた。

「第二試合！ ターレス選手 VS フロスト選手！ 始めえ！」

開始の宣言と共にターレスが飛び出し、フロストが迎え撃つ。

まず初撃はダッシュしての肘！

それを同じく肘で相殺し、続く膝蹴りを膝蹴りで受け止める。

フロストの拳がターレスの頬にヒットし、だがそれと同時にヘッド・スリッパ。ダメージを受け流しながら回転し、遠心力を乗せたラリアットを放った。

だがフロストはすぐにしゃがみ込んで水面蹴り！　ターレスの足を払って体勢を崩す。

そのまま地面にダウンすると思われたターレスだが、すぐに片手を地面に置いて力を込める。

すると片腕の腕力だけで逆立ちをし、更に力を込めて腕の力で跳躍。空中で回転して気弾を地面へと放つ。

フロストは腕を薙ぐ事で気弾を弾き、ターレスを追って跳躍した。

「はあっ！」

「ちいいっ！」

両者の腕と足が高速で動き、空中で互角の攻防を繰り広げる。

数秒ほど接戦を繰り広げた二人だが、攻撃の合間を縫ってターレスの拳がフロストへと命中した。

吹き飛んでいくフロストを追ってターレスが飛翔し、追いついて右ストレートを放つ。

だがフロストの姿が消えてターレスの背後へと回り、肘打ち！

しかし今度はターレスの姿が消えてフロストの背後に出現し、カウンターにカウンターを合わせての蹴りを放った。

しかし蹴りはフロストの尻尾に防がれ、更に尾がターレスの足へと絡みつく事で動きを封じる。

「もらいましたよ！」

フロストがそのまま急降下し、リングへと思い切りターレスを叩き付けた。

リングが碎け、ターレスが陥没する。

そうして離れようとしたフロストだが、しかしここで尻尾を離せない事に気付く。見ればターレスが尻尾を掴んでおり、不敵に笑っていた。

「そらああ！」

尻尾を両手で掴んで回転！

ジャイアント・スウィングのように振り回してフロストを投げ、追って跳躍する。

渾身の右拳。しかしフロストが消えて背後へと現れ、ターレスもその動きを読んで攻撃を後ろへの肘打ちへ変更する。

フロストの拳がターレスへ炸裂し、ターレスの肘がフロストへめり込む。

互いに攻撃の威力に吹き飛ばされ、反対側のリングの端へと墜落する。

だが即座に立ち上がり、猛然とダッシュ。

正面から両者の拳が互いの顔にクリーンヒットし、威力に押されて二人の身体がリングを削りながら後ろへと下がった。

しかし共に踏み止まり、すぐに顔を上げる。

フロストは早くも息が上がっているのに対し、ターレスは余裕の表情のままだ。

「通常状態はターレスが優勢、ですか」

「勝負ありだな。ターレスは最大で3まで変身出来る。

通常で負けていないならば最大パワーでもターレスが上だ」

「いいえ、まだ分かりませんよ。フリーザやクウラのように一段階上の変身があるかもしれません」

闘いを観戦しながらリゼットとベジータが勝敗を予想し合う。

フロストが第四形態までしか移行出来ないならばターレスが上だ。

だがクウラのような第五形態や復活したフリーザのような新たな進化を獲得している可能性はゼロではない。

そうして見ていると、まずターレスが先にギアを上げた。

全身が黄金のオーラに覆われ、前髪が逆立ち、スパークが発生する。

「いきなり2か！」

「正しい判断です。敵が勿体ぶつてくれているのですから、そのまま出し惜しみしているうちに倒してしまえばいい」

ターレスの出し惜しみなしの変身に悟空が驚くが、リゼットに言わせてもらえばこれが最良だ。

3や4への変身は少しばかり時間がかかる事を思えば、瞬時に変身可能な形態の中では間違いなく2が最強だ。

フロストの変身がフリーザ同様に時間がかかると読んでのターレスの奇襲は最善の判断であった。

変身とはただ強ければいいわけではない。

戦隊もののヒーロー番組のように敵が変身中にずっと待っていてくれるわけではないのだ。

仮にリゼットの目の前でフリーザが100%への変身を行おうものなら、その変

身中の無防備を狙ってリゼットは攻撃を仕掛けてフリーザを殺してしまうだろう。時にはパワーよりもスピードを優先した方がいい事もある。

「な、なんだ！ サイヤ人って変身するのか!？」

「い、いえ、そんな話は聞いた事が……」

向こうの席ではシャンパとキャベが焦っており、どうやら彼らはサイヤ人の変身を知らなかったらしい。

つまりキャベは少なくとも現時点では変身を習得していない事になる。

これは、こちらにとって嬉しい情報だ。

驚きのあまりシャンパは足の指をテーブルにぶつけてしまったようで、痛がっていた。

そんな彼等を他所にターレスは猛然とダッシュし、フロストの防御すら待たずに拳をめり込ませる。

さらに肘！ 膝！ よろめいた所で頭を強打し、ダウンさせた。

だがフロストがすぐに起き上がり拳をターレスの足へと当てると一瞬ターレスの動きが鈍った。

いや、そればかりか姿勢を崩してその場に膝を突いてしまう。

その間に何とかフロストが脱出し、それをみすみす見送ってしまったターレスは心底面白そうに笑う。

「……なあるほど。くくく、いいねえ。やはり同じ穴の貉ってわけだ。

おかげでやり易くなったぜ」

何が起こったのかを悟空達はまだ理解出来ない。

だがりゼットは目を細め、フロストの手を凝視している。

どうやら今の攻撃、右拳に仕込んだ毒針でターレスの意識を混濁させたいらしい。だがあれでターレスに勝てなかったのは相手にとって痛手だった、とりゼットは考える。

少なくともこの先、ターレスに一切の容赦はない。

フロストは自ら、ターレスが最も得意とするラフファイトに踏み込んでしまったのだ。

「おい審判、そいつの腕を調べろ！ 面白いモンが出てくるぜ」

「え？ し、しかし……」

「出なきや俺の負けでいい。さっさとやれ。」

それとも、この名前のない星のど真ん中にお前の墓を建ててやろうか？」

「やっ、やります！ やりますよ！」

ターレスの進言に従い審判がフロストの腕を調べる。

その光景を見ながらリゼットは、これも最善の判断だと内心でターレスを褒めた。これで勝ちが決まったようなものだ。

しばらく審判が調べていると、明らかに後から付けたような針が発見されてフロストの反則が露見した。

これには同じチームのキャベもショックを受けているようで、信じられないという顔をしている。

だがシャンパの付き人であるヴァドスがぬけぬけと語る内容によると、どうやらフロストとは元々こういう人物らしい。

善人の仮面は本性を隠すためのものでしかなく、実際はフリーザと何ら変わらぬ下劣外道。

自らが率いる宇宙海賊に星を襲わせてそれを自分で撃退し、荒れた星を安価で叩

き買いて、復興支援で名声を得てから売り飛ばす。そんな、ある意味ではフリーザよりも性質の悪い男であった。

当然これに審判は反則負けを下すが、そこに待ったをかける声が割り込んだ。

「待ちな！ 反則負けはなしでいい！」

「え？ し、しかし……」

異議を唱えたのは意外にも、フロストの反則を指摘したターレス自身だ。

彼は愉快そうに笑うと、シャンパへと顔を向けてとんでもない事を言い放つ。

「おいデブ、提案がある。そっちにとっても悪くない話だ」

「で、デブだとお!？」

「この試合に限り、反則は一切なしってのはどうだ？

武器有り、殺し有りの何でも有りだ。その方がフロストも本気で戦えるだろう？

┌

ターレスのその提案に、リゼットは前言を撤回した。

最善じゃない。こんなの全然最善じゃない。

何でこう、せっかく勝てるところで余計な事をしてしまうのだ、サイヤ人という

連中は。

【戦闘力】

—第7宇宙—

先鋒・ターレス…9億

超サイヤ人…450億

超サイヤ人2…900億

超サイヤ人3…3600億

黄金大猿…9000億

超サイヤ人4…1兆8000億

次鋒・孫悟空…10億

超サイヤ人…500億

超サイヤ人2…1000億

超サイヤ人3…4000億

超サイヤ人ゴッド…1兆

超サイヤ人ブルー…2兆

※原作では3日精神と時の部屋に入ったのに対し、このSSでは入っていないので以前まであった『原作悟空より強い』設定はここで消滅。同時期の原作悟空とほぼ同じ強さとする。

中堅・ベジータ…9億5000万

超サイヤ人…475億

超サイヤ人2…950億

俺のブルマ…5700億

超サイヤ人ゴッド…9500億

超サイヤ人ブルー…1兆9000億

副将・リゼット…30億

アルティメット化…1兆5000億

ゼノバース…6兆

大将・モナカ…10未満

（正直よく分からない。初期悟空より弱いと思うが、悟空のパンチを受けても泣くだけで済んでいるので実は案外、地球人と比べたら強い可能性もある。

悟空が加減してくれていたのは間違いないだろうが……）

——第6宇宙——

ボタモ…3億

（ノーマル悟空を相手に手も足も出ないので特異体質を除けばこんなもの。

格闘戦では←のフロスト第一形態にも劣るようなので戦闘力は低い。

それでも宇宙の帝王だったフリーザの数値を考えれば、第6宇宙代表として恥
じない数値）

・フロスト…4億

第三形態…16億

最終形態…452億

MAX…904億

（ボタモよりはノーマル悟空に善戦出来るが、やはり劣る。

ただしその時の悟空は本人曰く『気合が入ってない』なので、つまり舐めプ状態。第三形態でようやくノーマル悟空を上回る程度で、超化されれば最終形態でも歯が立たない。

力の大会でフリーザ同様にムキムキMAXがある事が判明したので、普段の最終形態は50%と思われる。

これが私の全力（50%）デェェェス！

・キャベ・・・9億5000万

（ノーマルのベジータと互角）

・マゲッタ・・・800億

（超サイヤ人ベジータすら圧倒する凄い奴。防御力はゴッドやブルーククラスかもしれない。）

最終的には毎回悪口によって負けており、実は実力で負けた事はない。

メンタルさえ鍛えれば……）

ヒット……？？？

（漫画版とアニメ版で大きく強さが異なる男。

漫画版だとゴッド未満なので兆クラスにも行かないが……)

シャンパ「……あっちの宇宙どうなってんだよ……おかしいだろ、これ……」

第九十八話 破壊神選抜格闘試合③

・ベジータとキャベの強さに関して。

誤差のようなもので千以下の数値は弾いてますが、実は完全に互角というわけではなくラディッツ5人分くらいベジータが勝ってます。

ターレスの提案により、この試合限定で全ての反則が取り払われた。

それはつまり武器も殺しも有りという事だ。

無論これにフロストが異議を唱えるはずもなく、変更を了承。

かくしてここにルール無用のデスマッチが両者合意の元で成立してしまった。

「ホホホホ……卑怯な手こそ私にとって最大の武器。

ただそれってこうも言えるんじゃないでしょうかね。

私は今まで最大の武器を隠しながら戦い続けてきたと」

本性を隠す必要もなくなったフロストが悪びれもせずと言う。

何ともふてぶてしい態度だが、ターレスの表情に変化はない。

卑怯卑劣大いに結構。元より無法の闘いなど慣れたものだ。

ベジータなどは完全に地球に染まり、ルール有りの甘っちょろい試合に納得してしまっているがターレスは違う。

彼は過去から現在まで常にこちら側の住人だ。

「ルールがなくなったからにはこの毒針、貴方との試合でも遠慮なく、躊躇なく、えげつなく使わせて頂きますよ」

「ま、またやるつもりですか！ あなたは神聖なルールを何だと思っているんです!？」

こ、今度こそ失格にしますよ！」

「と、外野が言っていますけどどうします？」

「勝手に言わせておけよ。外野なんざどうだっていい」

「ホホホホ、貴方、気に入りましたよ。私と同じ無法の匂いがあります」

「ああ……同類さ俺達は。仲良く闘^やろうや」

審判の言葉など耳に入れる必要もない。

フロストもターレスも残忍な素顔を隠す事なく殺意を漲らせている。

「でも、殺すのは反則というルールまで取ってしまつてよろしいのですか？」

「ククク、構やしねえよ。どうせそんなルールがあろうが『不慮の事故』で相手を死なせちまうのがテメエのやり口だろう？　なら最初から反則なんぞ無しの方が分かりやすくいいぜ」

「なるほど、よくわかつてらっしゃる」

片や第6宇宙における宇宙の地上げ屋。

片や第7宇宙の元クラッシャー軍団首領。

二人の無法者がデスマッチに合意し、審判は地団駄を踏む。

破壊神二人も止める素振りを見せないし、早くも彼は審判としての存在意義を喪失しかけていた。

「ああもう、どうなつても知りませんよ！　試合、再開！」

審判の声が響き、フロストの全身が発光して一気に最終形態へと移行した。そうして急上昇した身体能力をもって加速し、ターレスへと駆ける。

「ルール破りと殺し！　私の領域へようこそ！」

それではじつくりと御覧に入れましょう！　血まみれのショータイムの始ま——」
台詞の途中に、フロストの捕捉出来ない速度でターレスが飛び込み、フロストの腹を膝で蹴り上げた。

よろめいた所で頭を掴み、目を合わせて囁くように彼の台詞を引き継ぐ。

「血まみれのショータイムの始まりだ！」

顔を掴んだままフロストの顔面へ膝蹴り！

二度、三度と繰り返し返してフロストの歯を全て砕き、鼻をへし折る。

更にフロストの右腕を狙い、肘打ちと膝蹴りで挟み潰す！

早々にフロスト最大の武器を無力化し、だがターレスは止まらない。

顔を痛烈に殴り、吹き飛んだ先へ回り込んで蹴り上げ、ダブルスレッジハンマーで叩き落とす。

リングに衝突する寸前に地面へ先回りし、膝蹴りでフロストの腹を蹴って浮かせ、改めて頭を強打してリングへと沈めた。

「そらそらァ！　さっきまでの威勢はどうしたァ!？」

倒れているフロストの頭をサッカーボールのように蹴り、即座に追いかけて肘打

ち。

フロストには最早抵抗する力もないのか、されるがままに吹き飛んでリング端へと飛んで行った。

このまま放置すればフロストは場外へ落ちてしまうだろう。

勝負あり……誰もがそう思った。だが次の瞬間にフロストの首をターレスが掴んで場外アウトから助け出す。

まだ終わりではない。返り血に濡れたターレスの凄惨な笑みがそう語っていた。「危ねえ危ねえ……危うく場外だなんてつまらねえ終わり方させちまうところだった。

もっと楽しまねえと……なあ!？」

フロストの足ごとリングを踏み碎き、埋没させる事でフロストに直立する事を強要する。

同時にターレスが踏んでいる事でフロストが吹き飛ぶ事を防止し、そこから容赦のない拳のラッシュを叩き込んだ、

右へ左へとフロストの頭が血飛沫をあげながら揺れるが、ターレスに踏まれてい

るせいでその場に固定されてしまっている。

倒れそうになっても、そこを狙ってターレスの拳がめり込み、無理矢理に立ち上がらせる。

それはもはや試合ではなく、ただの処刑でしかなかった。

「ふはははは……ハァーッハハハハハ！」

ターレスが返り血を浴びながら高笑いし、尚もフロストを痛めつける。

それは傍から見れば血に飢えた狂戦士にしか見えないだろう。

実際、七割ほどは本当に血に飢えている。演技でも何でもなくこの闘争を楽しみ、敵を叩きのめす事に快感を感じている、酔いしれている。

どれだけ普段大人しくしてしようと、本質的な部分では闘争と破壊を楽しむ『悪』……それがサイヤ人だ。

少なくとも第7宇宙ではそれがサイヤ人の常識である。

普段は周囲に合わせ、あえて輪を乱す事もあるまいと自重しているターレスであるが、それでも彼の中の残虐性や闘争心が消えたわけではない。

本当はいつだって、こうして存分に爆発させる事の出来る機会を待ちわびていた

のだ。

だからこそ、そんな彼にとっていくらぶちのめしても問題ないフロストという相手は、この上なくありがたい餌であった。

しかし決して凶暴なだけではないのがターレスという男だ。

七割の部分は本能に忠実な狂戦士と化している。

しかし残る三割の部分で彼は冷静に計算を働かせていた。

ターレスはフロストを決して過小評価していない。むしろ敵の中で一番厄介になり得ると考えている。

この手の無法者は試合が終わったからはいさようなら、とはいかないのだ。

もしかしたら闇討ちを仕掛けて来るかもしれない。恨みを抱いて虎視眈々と第7宇宙の戦士達をつけ狙うかもしれない。

勿論そんな事はやらないかもしれないが、やるかもしれない。

手段を択ばない奴というのは何をしてもおかしくないのだ。

「ま、参……」

「ふははははははははは！ 声が小せェんだよォ！」

参った、と言いかけたフロストの口に膝蹴りを叩き込んで、大声で彼の台詞を遮る。

降参などさせない。逃げ場など用意しない。

フロストには、自分達へ恨みを抱くだけの余地すら与えない。

今ここで、逆らう気力すら起きないほどに……後になって復讐など考えないように。

徹底的に、執拗に、心をへし折る。二度と関わりたくないと思うほどに！

この第7宇宙にはターレスという、フロストすら上回る無法者がいると骨の髄にまで教えてやる。

やがて何も言えなくなったフロストを掴んで、乱暴にリングへと叩き落した。それからダウンした背中を踏み躪り、容赦なく背中に手を翳す。

「お前とぶつかったのが俺でよかったぜ。

ま、お前にとっちゃ災難だろうがな……あばよ！」

気が掌に集約され、だがフロストは逃げる事も出来ない。

次に自分に襲い掛かる惨劇を予想し、恐怖するだけだ。

「死ねえーッ!!」

遠慮なく、躊躇なく、えげつなく。

気弾を乱射し、フロストの背中へ炸裂させた。

フロストが悲鳴をあげようが手を緩めはしない。断末魔すらターレスを止めるには至らない。

そのあまりに容赦のない残虐ファイトにキャベが引き攣った顔をし、「同じサイヤ人でもこうまで違うのか」と戦慄していた。

ようやく攻撃が終わった時、もうフロストは指一本動いてはいなかった。

そのフロストの首を掴み、止めの蹴りを首筋へ叩き込む。

するとフロストは壊れた人形のようにリング外へ墜落し、勝敗が決した。

「しょ、勝者、ターレス選手！」

勝者宣言にターレスが腕を組んでさも当然であるかのように笑い、シャンパが顔を険しくする。

これで第7宇宙は二連勝だ。

そろそろ勢いを止めなければ不味いと思ったのだろう。

何やらヴァドスと話し、会場に手を加えさせている。

一方第7宇宙側のビルスは上機嫌だ。

「なかなかやるじゃないか、あのターレスっていう悟空の2Pカラー。

敵の反則を受け入れた上で叩きのめすとは痛快だ」

「っひゃー、相変わらず容赦ねえよなターレスの奴。あそこまでやらなくてもよかっただろ」

「彼にラフファイトを挑んだ時点でフロストという選手の負けは見えていましたね」

悟空が呆れたように言い、リゼットも肩をすくめる。

そうしている間にシャンパは勝手にリングの上にバリアを追加してしまい、今まではなかった『バリアに触れたら場外』のルールを何の相談もなく加えてしまった。勿論こんなのはマナー違反もいいところである。ビルスは憤慨し、シャンパに文句を付けようと飛翔するが、そこにリゼットが声をかけた。

「ビルス様」

「何だ？ 僕は今からあいつに苦情を言ってくるんだ。用件は後にしろ」

「いえ、彼の要求ですが、あえて受けてしましましょう」

「何!？」

どういふつもりだ、とビルスが怒りを込めた視線でリゼットを見るが彼女ももうビルスとの付き合いには慣れたものだ。

落ち着いた様子で淡々と己の意見を語る。

「こうして無理にルールを変えてきた以上、こちらが何を言っても突っぱねるだけでしょう。」

ならばいっそ、ここは受け入れる事でこちらから交換条件を出してしまえばいいのです。

『受け入れてあげるから、こっちの条件も呑め』と

「……なるほど、そりゃ面白い。で、何を提示するんだ？」

「勿論、向こうがルールを変更したのですからこちらも同じものを。」

『好きなタイミシングでルールを追加する権利』を主張し、その上でこれを呑めないならば相手の条件も呑めないと要求してきて下さい」

リゼットの提案にビルスはふむ、と呟く。

ここで下手にシャンパに文句を言ってもゴネ得でゴネられるだけだ。

ゴネ得……ゴネ得……っ！

それよりはこちらが寛大さを示し、その上で条件を突き付ける事であたかもそれが対等の条件であり、権利であると思わせてしまう。

つまりは心理的に、これを飲めなければルールの追加も出来ないと錯覚させるのである。

あのシャンパという破壊神は見たところ、相当頭の回転も鈍そうなのでまずかかるだろうとリゼットは思っていた。

「だが、あいつの追加ルールでこっちが不利になるのをみすみす受け入れるのにな……」

「問題ありません」

リゼットはビルスを手招きし、耳元で告げる。

「いいですか？ この追加ルールは『バリアに触れれば場外負け』であって『指定した空域外に出たら場外負け』でないのがポイントです」

「どうのことだ？」

「試合が始まると同時に壊してしまえばいいんですよ、バリアを。」

幸いそれほどの強度でもないようですし」

「ほう！ その手があったか！」

「はい。つまりこの追加ルールは何一つとしてこちらの不利には働きません。

それどころか無駄に相手の次の手を予測し易くさせ、弱点を暴露し、更にこちらが付け入る隙にすらなりません。

……せっかくシャンパ様が焦って隙を晒してくれたのです。ならばこの機を逃す手はありません」

「くくく、なるほど。よしわかった、お前の言う通りにしてやる」

リゼットの説明にビルスが笑い、意気揚々とシャンパの所へと飛んで行った。

そしてしばしの口論が始まるが、その結果は既に見えている。

リゼットはしばしそれを眺めていたが、ふと小さな気がコソコソと移動している事を感じた。

彼女の桁外れた感知能力は戦闘力を0に落としても尚、相手の動きを察知する。それは生き物である以上、どうしても生命エネルギーは0に出来ないからであり、スカウターや悟空達では拾えない些細な気すらも彼女ならば感じ取れる。

そうして感じたのは、死んだと思われていたフロストがしぶとく動いて試合会場から離れている様であった。

あれだけやられてまだ動けるとは驚くべきしぶとさである。

何をしたいのかは知らないが、どうせロクな事ではないだろう。

もっとも、こちらへの悪意は一切感じないので完全に心は折れているようだ。

リゼットはその場から転移し、フロストの氣を追った。

だが結論から言えばそれは無駄な事であり、リゼットが到着した時には既にフロストは何故かその場にいたヒットに倒され、連れ戻される所であった。

リゼットとヒットがすれ違い、互いの視線が一瞬交差するも会話はない。

ヒットの背を見送り……だがそこでリゼットはもう一つの氣配を感じ取った。

妙な氣配だ。小さいのか大きいのかも判別がつかず、ビルスなどの氣とも明らかに異なる。

振り返ればそこにいたのは、異星人の小さな子供であった。

楕円型の顔は三色に分かれ、中央は水色。両側は濃い青色だ。

丁度色の境目となる部分にはつぶらな瞳があり、こちらを興味深そうに見上げて

いる。

身長は1mより少し大きい程度。幼児と呼んでいいサイズで、紫色の法被のような服を羽織っている。

中に着ているのは黒い服で、『王』、『V』、『^』、『王』という字を上から一列に並べたようなデザインをしている。

少なくともリゼット達と一緒に来た第7宇宙側には居ない人物であり、リゼットは恐らく第6宇宙側の応援だろうと目星を付けた。

「こんな所でどうしたんですか？」

リゼットは異星人の子供の前に屈み、目線を合わせて尋ねた。

もしかしたら親からはぐれたのだろうか？

第7宇宙側にはこんな子供を襲う輩などいないが、あのフロストのような何をしでかすか分からない者がいる以上、子供の一人歩きは余りいい事ではない。

なので迷子ならば保護者の所まで連れて行った方がいいと判断して声をかけたのだが、異星人の子供は不思議そうにリゼットを見上げるばかりだ。

「ええとね。ちょっと退屈だったから散歩してたのね」

「散歩ですか。誰か一緒ではないのですか？」

「つまらないのが二人いるのね。いつも僕の後ろに付いてきてるけど、たまには一人で歩きたいのね」

つまらないのが二人……リゼットはこれを、多分父親と母親の事だろうと考えた。いや、もしかしたら知り合いや友人だろうか。

どちらにせよ、一緒にいる相手をつまらないの呼ばわりは頂けない。

子供にありがちな身勝手な物言いではあるが、こういうのはちゃんと幼い時に教えてあげないと駄目になってしまう。

「駄目ですよ、つまらないのなんて言っっては。いつも一緒にいてくれるという事は、貴方の事を大事に思っただけで心配してくれているという事だと私は思います」

「そうなの？ ……わかった。つまらないのって言わない」

「ええ、いい子ですね」

リゼットは微笑み、子供の頭を撫でた。

異星人の子供はその行為に元々丸い目を丸くしたが、少なくとも嫌がってはいない。

むしろ口元が緩み、喜んでいるようにさえ見えた。

「初めて褒められたのね」

「初めて……？」

「おべっかは飽きたけど、こうして褒められて撫でられるのは初めてなのね」

異星人の子供の言葉から、もしかしくても相当いい所の子供なのだろうとリゼットは考えた。

なるほど、もしかしたら彼の言う『つまらないの』とは護衛やお付きなのかもしれない。

ならばつまり、この子供は今まで誰にも本心から褒められたこともなければ甘えた経験もないという事になる。

少年（？）はリゼットの手を掴み、期待するように見る。

「他には何かない？」

「他ですか？ うーん……では、不愉快でないならば抱っことか？」

「それいいね、やってみて。僕それ、やってもらった事ない」

あれ？ 何だかもしかしてこの子、凄く不憫な子？

あるいはそういう文化のない宇宙人なのだろうか。

リゼットはそう思い、少年の言う通りに彼を抱き上げた。

すると彼は嬉しそうに歓声をあげ、リゼットにしがみついた。

「こういうの、誰も僕にやれないの。凄い新鮮なの」

それはきつと、彼がいい所の子供で皆が委縮してしまっているからだろう。

そうリゼットは考え、ならば今だけは自分に甘えさせてあげてもいいだろうと考えた。

抱き上げながら少年（？）の頭を優しく撫で、あやす。

しばらくそうしていると、やがてドタドタと足音が響いて同じような顔をした見分けのつかない長身の男が二人駆け込んで来た。

二人の男はリゼットと、彼女が抱き上げている子供を見て、「アイエエエ!?」と目が飛び出さんばかりに驚愕をする。

どうやらこの二人が保護者のようだ。

「ぜ、全王様アァア!?!」

「そ、その女、何をしとるか！ 無礼だぞ！」

「……うるさい。消しちゃうよ?」

同じ顔の二人が何やら喚くも、それを少年の静かな声が黙らせた。

何はともあれ保護者登場となれば、この時間も終わりだ。

リゼットは彼等の所へ歩み、少年を渡そうとするが何故か受け取ってくれない。仕方がないので地面にそつと降ろすと、子供は名残惜しそうにリゼットを見た。

「ねえ君、名前教えて?」

「私ですか? リゼット、と言います」

「僕は全王。また会おうね」

「ゼンオー君、ですね。ええ、また会いましょう」

リゼットがゼンオー君の名を呼んだ所で二人の男が「アバーッ!」と何故か卒倒しそうになったが、当の本人はまんざらでもなさそうだ。

何度も口の中で『ゼンオー君……』と反芻し、やがて「いいね」と言って顔をあげた。

「絶対また会おうね。約束だよ」

そう言い、ゼンオー君と二人の男はそこから姿を消した。

どうやら瞬間移動系の能力を持っていたようだ。

なるほど、確かにあんな力があれば子供でも一人歩きしてしまえる。

リゼットは呑気に髪をかきあげ、どの宇宙でも子供は似たようなものなんですね、と微笑む。

そして、彼女もまた試合会場へと戻った。

リゼットが戻った時、丁度話は終わっていた。

ビルス申し出に渋々シャンパが同意を示し、これにて両陣営共に一度だけルールの変更という札を手にする事に成功したのだ。

とはいえ勿論、根源から揺るがしてしまうような追加はなしだ。

例えば『第7宇宙の選手だから無条件に負け』とか『サイヤ人禁止』とか、そういうルールを加える事は出来ない。

出来るのは精々、シャンパがやったような一度きりのバリアの追加やちょっとした変則試合程度のものだ。

シャンパは気付いていない。目先の優位の為にどれだけ自分が不利な取引をして

しまったのかを。

隣のヴァドスという女性は気付いているのかリゼットを面白そうに見ているがシャンパに伝える気はなさそうだ。何ともいい性格をした従者である。

かくして次の試合はリングの周囲にバリアが張られ、ターレスの行動が大幅に制限される事となった。

「それでは第三試合！ ターレス選手VSマゲッタ選手開始！」

リングの上で相對するターレスとマゲッタを見ながらリゼットは考える。

感じられる気の総量を言えば今のところはターレスが圧倒的に上だ。

彼は前の試合から引き続き超サイヤ人2を維持しており、その気は平常時の100倍に達している。

対するマゲッタは平常時のターレスよりはマシ程度であり、気だけで勝敗を考えればターレスの負ける要素はない。

だが実際に戦闘が始まればマゲッタの気が急上昇し、超サイヤ人にも迫るパワー上昇を果たした。

「ポーッ！」

マゲツタが頭から煙を発しながら愚鈍な動作で拳を振りかぶり、ターレスが余裕をもって避ける。

見た目通りにパワーは凄まじい。だが速度が伴っていないのでは宝の持ち腐れだ。

しかし頑丈さだけは大了なものだ。

ターレスが反撃してもまるで動じず、怯みすらしない。

近接戦はやや不利。そう判断したターレスが上空へ上がる。

だがマゲツタはそれを見ているだけで追跡の気配を見せない。

なるほど、シャンパがバリアを加えたがるわけだ。マゲツタは空中戦が苦手らしい。

いくら強くて固かろうと飛ぶことが出来ないのではただの的でしかない。だからこそそのバリアの追加なのだろうが……シャンパは判断を誤った。

『ターレス。気の解放でバリアを壊してしまいなさい。

そうすればこの不利な状況はなくなります』

「はっ、そういう事か。随分と穴だらけのルール追加だったな。

……っはああああああ!!」

リゼットからの念話にターレスがほくそ笑み、一気に気を高めた。

全身を覆う輝きが更に強くなり、頭髮が一気に伸びる。

超サイヤ人3へと変身して、その変身時の気の発散でバリアを破ってしまう気のようなのだ。

その目論見通りにシャンパが張ったバリアが脆く崩れ去り、ターレスは通常の超サイヤ人へと戻る。

バリアがなくなつたから本気の必要がなくなつた？

否。本気はこれから出すのだ。

彼は勝利を確信したような笑みを浮かべ、手の中にパワーボールを生成した。

それを見てリゼットも理解する。

ターレスはここで決めてしまう気だ、と。

「くくく、おい、でかいの。これが何だか分かるかい？」

「ポー？」

「お月様さ」

ターレスは丁寧の説明するとパワーボールを宇宙へと発し、腕を掲げた。

「弾けて、混ざれ！」

名前のない星の上空で人工の月が輝き、それを見たターレスに変化が生じる。

月が真円を描くとき。それこそサイヤ人が本領を発揮する時だ。

だがこの場において尾を残したサイヤ人はターレス以外におらず、故に月の恩恵も彼のみが受けることが出来る。

「パワーボール!? ターレスの奴何をする気だ！」

今更大猿になってどうするというのだ！」

パワーボールの事をよく知るベジータが驚愕する前でターレスが大猿へと変わった。

だがその大猿は通常のそれと異なり、黄金に輝いている。

即ち、超サイヤ人の力をもった大猿の誕生だ。

「お、おい！ サイヤ人って何回変身するんだよ!?!」

「ぼ、僕だってわかりませんよ！」

第6宇宙側ではシャンパとキャベが慌てふためいており、ターレスの変身に度

肝を抜かれている。

だが彼の変身はここからが本番だ。

巨大化した身体は一度限界まで達した後に収縮を開始し、大猿のパワーを残したまま人間の大きさへと戻る。

腰まで伸びた頭髮はサイヤ人本来の黒に染まり、全身は紅蓮の如き赤い体毛に覆われる。

顔つきはより凶悪なものへと変わり、理性の減少と引き換えにサイヤ人が元々備えている凶暴性が増す。

その未知の変身に悟空とベジータが目を見開いて驚きを露わにし、ビルスも「ほう」と呟いていた。

「す、すげえ気だ！　ありゃあ一体何だ！」

「な、なんだ、あの変身は!?　ターレスの奴は一体何をしたんだ！」

従来の超サイヤ人ともゴッドとも異なる、大猿と超サイヤ人の合体とも言えるべき新形態。

神の域とはまるで異なる、純粹なパワーの具現に観戦していた全員がざわめき、

改めてサイヤ人の可能性を思い知らされた。

「超サイヤ人4……私はターレスのあの新たな変身をそう呼んでいます」

「超サイヤ人……4？」

「はい。悟空君の超サイヤ人ゴッドとは善の進化。しかし本来の超サイヤ人は伝説にもある通り、残忍性と攻撃性を増していく悪しき進化です。それは超サイヤ人になった時に悪の心が備わってしまう事から貴方たちも存じているでしょう」

リゼットの言葉に悟空とベジータは反論しない。実際それが事実なのだから反論は出来ない。

通常時ならば何ら問題なく使用出来る元氣玉も超サイヤ人になれば制御が困難になり、3まで位階を上げてしまえばほとんど使えなくなる。

また、伝説に謳われる1000年に一人現れる超サイヤ人——『本来の超サイヤ人』ブロリーを見てもそれは否定のしようがない。

かつてパラガスは彼を指して『ブロリーこそサイヤ人そのものだった』と語った。そう、サイヤ人の本質とは血と暴力を好む悪であり、超サイヤ人はその性質を増してしまふ。

少なくともこれまでの超サイヤ人から続く変身の系譜はそうであった。

今にして思えば、ブロリーに尾がなかったのは本当に幸運以外の何物でもなかった。

恐らくはブロリーが何かの間違いで大猿と化す事を恐れたパラガスが切斷したのだろうが、そのおかげで悟空達はあの悪魔に勝利する事が出来た。

もしも彼に尾が残っていたならば……それを思うたびに、神の域に達した今でさえ背筋が冷える。

「悟空君が変身するゴッドとは、その今までの系譜……即ち通常の超サイヤ人から超サイヤ人3へと続いてきた進化とは対極の方向に位置します。つまり従来の進化を捨てて逆方向へと走り、全く異なる形態を獲得したのが今の貴方です」

「つまり、ターレスが今変身した姿こそが3の次の進化ってわけか？」

「はい。少なくともナンバリングをするならば、あれこそ4と呼ぶに相応しい姿でしょう。」

まあ私としては悪の気を増してしまうあの変身よりもゴッドの方が好ましいのですが、これまでの変身を正当とするならば、あれが正当な超サイヤ人3の進化形

である事は疑う余地ありません」

リゼットが語るように超サイヤ人ゴッドと超サイヤ人4は全く別種の進化だ。

そしてゴッドは従来の超サイヤ人とは全く異なる変身であり、今までのようにナバリングをする事が出来ない。

故にリゼットは語る。あれこそが超サイヤ人、超サイヤ人2、そして超サイヤ人3から続く新たなステージであると。

「超サイヤ人……4……！」

すげえ……すげえぞターレス！」

そんなターレスの姿を——もしかしたら有り得たかもしれないIFで、自らも変身したかもしれない姿を見ながら、悟空は興奮に打ち震えた。

・リゼットが発動してはいけない相手にナデポを発動しました。

ついでに抱っこまでしました。

ゼンオー君(笑)の正体に気付いていないからとはいえ、何やってるんだこい

つ……。

パラガス「ブロリーこそサイヤ人そのものだった……」
キャベ「第7宇宙のサイヤ人って一体……」

第九十九話 破壊神選拔格闘試合④

超サイヤ人4への変身を遂げたターレスを前にマゲッタが後ずさりをする。

彼も何となく理解出来たのだろう。目の前に立つ男には逆立ちしても勝てないという事を。

それほどの絶対的な力の差を。

それでも退くことは出来ない。覚悟を決めたマゲッタは前へと踏み出し、全霊の一撃をターレスへと叩き込んだ。

のけぞるターレスの顔。回避すらしなかった事に驚く悟空とベジータ。

そして呆れるリゼットの前でターレスは不敵な笑みを崩すこともなくマゲッタを見る。

「くくっ、効かねえなあ」

「!?」

「くすぐってえんだよ……お前のパンチは」

ターレスは力の差を思い知らせるようにわざと攻撃を受け、そしてノーダメージ

をアピールする。

マゲッタはそれでも尚、健気に攻撃を続行するが最早力関係は大人と赤子だ。いくら殴ってもターレスは微動だにせず、痛みすら感じていない。

マゲッタのパンチはただくすぐったいだけで、ターレスを笑わせるだけだ。

「そら！ 今度はこっちの番だ！」

ターレスはリングが碎けるほどに強く踏み込み、マゲッタの懐へと飛び込む。

そして一撃！

繰り出した拳の威力でマゲッタを殴り飛ばし、千トンはあるはずの身体をリング外へと弾き飛ばした。

マゲッタもまさかパンチの一発で自分が押し出されるなど予想すらしていなかっただろう。

呆然とした様子でリング外に倒れており、身に起きた出来事を理解出来ていない。

「マゲッタ選手リングアウト！ よって勝者はターレス選手！」

審判の声に第7宇宙側の応援席から歓声が上がった。

これで第7宇宙の三連勝だ。

ビルスは愉快そうに笑い、シャンパは悔しそうに床で駄々っ子のように転げまわっている。

リゼットは相手側に残っている選手を見て、うまくいけばこのままターレス一人で四連勝も狙えると考えていた。

出てくる順番にもよるが、あのキャベというサイヤ人は恐らく大した事はないだろう。

超サイヤ人や大猿を見て心底驚いていたようだし、こちらから下手に覚醒を促したりしなければ余裕で押し切れる相手だ。

『ターレス。次の相手は恐らくキャベという少年です。』

今のままならば貴方の相手ではありませんが、覚醒してしまえばどう転ぶかわかりません。

余計な事はせずに一気に倒して下さい』

『はいよ。神さんも慎重だね』

『慎重にもなりますよ。何せ景品が地球なんですから』

こう言うてはあれだがキャベはこちらがよほどの馬鹿をしない限りまず負ける相

手ではない。

問題は相手側の切り札と思われるヒットという男だ。

先ほどからずっと腕を組んで座っているが、彼だけは別格の貫禄を漂わせている。リゼットとしては出来ればあのヒットには万全を期して自分を含むこちらの戦力4人をベストの状態でぶつきたいと考えていた。

ヒットも目を開いてリゼットへ視線を向け、一瞬のみ二人の視線が交差する。互いに最も警戒すべき相手を、戦う前から察しているようだ。

リングの上に4番手のキャベが上がり、ベジータと似た構えを取る。

だが勝機がないに等しい事は彼が一番痛感しているのだろう。その構えはどこか腰が引けたものだ。

その余りに覇氣のない姿にベジータが苛立ちを見せる。

同じサイヤ人として何か思う所があるのかもしれない。

「ターレス選手VSキャベ選手、始め！」

試合開始のゴングが鳴り、それと同時にキャベが走り出した。

ターレスは一切の構えを取らずにキャベの出方を見ている。

そんな彼の胸板にキャベの拳が叩き込まれた。

「やああ！　でやっ！」

拳打から繋いで蹴りへ移行。

しかしターレスは僅かも仰け反らず、可笑しそうに笑っている。

「ぐっ……だだだだだだだ！」

ターレスの腹や胸へとキャベが拳のラッシュを叩き込んだ。

だがやはり通じていない。

それどころか、ターレスを殴っているキャベの拳の方が赤く腫れている始末だ。

余りの差にキャベの顔が弱気に染まり、それでも諦めずに距離を開けて気弾を連射した。

「だだだだだだ！　だああああーッ！」

次々と気弾が炸裂して煙を巻き上げる。

だが実力差は絶望的だ。

キャベの攻撃が終わった時、そこにいたのは開始位置から一步も動いていないターレスの姿であった。

その光景にシャンパは頭を抱え、「駄目だ、勝負になってねえ……」と項垂れる。
「ま、こんなもんだろうな。じゃあ、終わりにするか」

ターレスが唐突に、キャベとの間合いを潰した。

変身や覚醒など待つ必要もない。

相手が弱いというなら、弱いまま叩き潰すだけの事だ。

反応すら出来ずにいるキャベにターレスの膝蹴りが炸裂し、いとも容易く膝を突かせてしまった。

キャベは数秒呻いた後に何とか顔をあげ、零距离で気功波を放つ。

ベジータのギャリック砲とよく似た攻撃だが、しかしターレスには通じない。

煙が晴れた時、そこには片手を前に突き出したターレスがいて更に絶望を深めただけだ。

「少しは効いたぜ……と言ってやりたい所だが悪いな小僧。全く効かねえよ」

「あ……ああ……！」

力の差に絶望した彼の髪を掴んで持ち上げ、ターレスが残忍に笑う。

「諦めろ。お坊ちゃんじゃ俺には勝てねえ」

「ぐ……う、うう……こ、降参、します……」

ターレスとキャベの戦力比は数値にして実に数千倍にも及ぶ。

基本の状態ならばキャベにもまだ勝ち目はあったが、何せ今のターレスは超サイヤ人4。平常時とは比較にもならぬ強化を果たしておりキャベに勝ち目などない。故に彼の降参は至極当然のものだったのだが、そのあまりに早い諦めにベジータとシャンパが同時に舌打ちをした。

「実力差があるとはいえ、不甲斐ないガキだ……あれでもサイヤ人か！

くそっ、あのだらしない根性、俺が後で鍛え直してやる！」

サイヤ人の王子としてキャベに何か思う所があるのだろう。

あるいは、サイヤ人は強くなければならないと思っているのかもしれない。

それでもわざわざ彼自ら鍛え直すほどとは思えないが……。

そこまで考えて、リゼットはある点に気が付いた。

（そうか……あの子、ベジータの弟に何となく似てるんだ）

キャベはサイヤ人らしからぬ礼儀正しさと細さが、どこかベジータの弟であるターブルに似ているのだ。

第6宇宙ではあれがサイヤ人として普通なのかもしれないが、ベジータは弟と似ているキャベを放っておけないのだろう。

あるいはそれは、昔は弟を放置していた事を悔いての事なのかもしれないが……きつと、ベジータにその自覚はないだろう。

「キャベ選手、降参を宣言！ よってこの試合はターレス選手の勝利です！」

「はっはー！ いいぞターレス、これで4連勝だ！」

いっそのままターレス一人で第6宇宙の連中を全滅させてしまうのも面白いかもな！」

審判の勝利宣言にビルスは最早有頂天だ。

ターレス一人で4連勝を飾り、更にこちらにはまだ神の域に踏み込んでいるベジータ、悟空、そしてリゼットが控えている。

しかし盛り上がるビルスとは違い、リゼットはここからが本番だと考えていた。こう言っではあれだが前の4人など前座もいいところだ。

互いの戦力差を考えれば第7宇宙側の実力者——即ちリゼット、悟空、ベジータ、セル、ピッコロ、ターレスのいずれが出ても4人抜き出来てしまうだけの差

があった。

しかしヒットだけは違う。彼はこちら側の住人だ。

間違はなくその強さは神の域に踏み込んでおり、リゼットでも確実に勝てるとは言い切れない。

（頼みますよターレス。なるべく彼にダメージを残して下さい）

リングの上上がったヒットを見ながらリゼットは精神を研ぎ澄ませる。

ここから先は余所見、瞬き厳禁だ。ヒットの動きを観察しなければならぬ。

うまく悟空かベジータまでで止まってくれればいいのだが最悪の場合自分まで出番が回ってくる。

そうなった時の事を今から考えなければ不味いのだ。

何故なら……恐らく彼は、その最悪を実行するだけの実力を秘めているのだから。

「ターレス選手VSヒット選手、始め！」

審判が開始を宣言し、まず最初に仕掛けたのはターレスであった。

先制の右ストレートを放つも首を動かすだけで避けられ、続く連撃もヒットに掠りすらしない。

ならば、と素早く身を屈めて足へ蹴りを放つ。

だがヒットはそれを予期していたように軽く跳躍し、ポケットに入っていた手を抜く。

目にも止まらぬ拳打がターレスの頬を打ち、のけぞらせる。

だがターレスはすぐに体勢を戻し、ヒットとの距離を取った。

（速え……だが見えない程じゃない）

「……タフだな。急所を打ったはずだが」

ダメージは受けたが浅い。

超サイヤ人4は大猿の膨大な質量をこのサイズにまで圧縮しているせいか戦闘力以上にタフだ。

少なくとも単純なパワーや耐久力を言うならばブルーを遥かに超えているだろう。

多少の攻撃なら浴びてやると決意したターレスが正面から突撃し、ヒットが不動の姿勢で迎え撃つ。

ターレスが攻撃を放つよりも早くヒットがポケットから手を抜き、居合の如き拳

を顔へ叩き込んだ。

だが攻撃を受けるのは覚悟の上。

ターレスはのけぞりすらせずに蹴りを放つ。

相打ち等で放った完璧なタイミングでのカウンター。

誰もが当たると確信し、だが次の瞬間硬直した。

当たるはずだった攻撃が外れ、ヒットの第二撃がターレスの顎を揺らしたのだ。

しかも第一撃と違い、こちらはいつ攻撃されたのかが分からない。

気付いたら殴られていた。

「ば、馬鹿な!？」

ターレスが吹き飛びながら呻き、空中で回転して着地する。

何が起こったのかを把握出来ず、その顔は混乱に満ちている。

そしてそれは彼だけではなく、悟空もベジータも、ビルスですらも何が起こった

のかが分からない。

一方リゼットは険しい顔をしており、ウイスは眉をひそめている。

どうやらこの二人には何が起こったのかが分かるようだ。

「っちい！」

ターレスが黄金の気を纏い再び突撃する。

正面からの拳打！——と見せ掛けて背後へ回り肘打ち！

だが次の瞬間にはまたもターレスが殴られており、何とか踏み止まって蹴りを放つも見えないカウンターを浴びてしまう。

たまらず距離を取っての気弾連射へと切り替え、爆煙がリングを覆った。

だがまたも次の瞬間にはターレスの後頭部をヒットの手刀が打ち、即座に回し蹴りで反撃に移るも擦りすらない。

「ちいいい！ つざかしいんだよォ！」

ダメージは軽微。超サイヤ人4のタフさは多少急所攻撃された程度で動じるものではない。

かつて、ブロリーを相手にリゼットが決定打を与えられなかったように、余りに相手がタフ過ぎてはいかに技が優れていても通じぬ場合もある。

いや、むしろそうした原始的かつ単純な強さこそ技にとっての天敵なのかもしれない。

柔は剛を制する。だが行き過ぎた剛は柔を捻じ伏せるのだ。

だがターレスは追い詰められていた。

攻撃のほとんど効かぬ者と攻撃の当たらぬ者……一見すると互角のようだが、実際の勝敗は火を見るより明らかだ。

いかに超サイヤ人4のターレスといえど、ヒットの攻撃は決してノーダメージではない。

ならば数を重ねればいずれ敗れるのはターレスの方だ。

（分からねえ……攻撃の正体が全く！）

数度この身で浴びているのに分からない！ その事実を彼を精神的にも打ちのめし、圧倒的な差を痛感させる。

確かにヒットは速い、それは確かだ。

だが、だからといって攻撃を浴びる瞬間が見えないとはどういう事だ。

まるで攻撃するという『過程』を飛ばして殴ったという『結果』だけが出ているような……。

『攻撃する瞬間』そのものが存在していないとしか思えない。

そう考えていたターレスだが、次の瞬間目の前で起こった現実に見開いた。

……口の端から流れ落ちた血が、床に落ちた真紅の斑点が……突然増えたのだ。

「――！」

考えるよりも早く身をかわし、ヒットヘカウンターの蹴りを放つ。

不安定な体勢から放たれた攻撃故に直撃には程遠いが、試合始まってより初めてターレスの攻撃が命中した。

打点を外しつつもヒットの脇腹をターレスが蹴り、そのまま第6宇宙一の殺し屋の身体を吹き飛ばした。

ヒットは自らの肋骨が罅割れる音を聞きながらも空中で回転し、構えを取り直す。直撃を外して尚この威力か……そう思い、ヒットは戦慄した。

超サイヤ人ゴッドやブルーとは異なる、神の気に頼らない単純な暴力方面への特化。だからこそその攻撃力は一撃でもまともに当たれば、そこで戦いを終わらせてしまう。

「なるほど。そういう事かい」

ターレスは疑問が氷解した事に少なくとも満足を感じ、自分の指を噛んだ。

指先から血が滴り床へと赤い血液が落ちていく。

そしてターレスはヒットに警戒しながらも、その落ちていく自分の血液へ注意を払っていた。

床に1滴落ち、2滴落ち、3滴落ち……そこで斑点の数が4を飛ばして突然5に増えた。

「——ここだ！」

ヒットとの距離が開いているにも関わらずターレスが肘打ちを放つ。

するとどういう事か先程まで遠くにいたはずのヒットがターレスの前に出現して肘打の脅威に晒された。

——当たれば顔面を碎かれる！

咄嗟にヒットが身体を逸らして回避するも、体勢が崩れてしまった。

無論この好機を逃すターレスではない。

彼は素早く次の攻撃へと繋ぎ、拳打と蹴りを次々にヒットへ放っていく。

しかしヒットもさしたるもので、すぐに体勢を立て直すと再び見えない拳でターレスを迎撃した。

ヒットはターレスの攻撃を逸らし、いなし、回避しながら迎え撃つ。

対し、ターレスは防御も回避も捨てて攻撃のみに全力を注ぎこむ。

それは技術と暴力の戦いであり、リゼットも知らずのうちにヒットに感情移入しながら戦いを見守っていた。

勝負の天秤は完全に互角。ヒットが技で勝利するか、それともターレスが捻じ伏せるか。

どちらが勝ってもおかしくない一戦……だが、その天秤を揺らがせたのは時間であつた。

——ターレスの変身が、突然解けたのだ。

「っ！ しまった……もうサイヤパワーが尽きたか……！」

ターレスは頭上に輝く偽りの満月を睨み、口惜しそうに叫ぶ。

超サイヤ人4への変身は大猿と同様にブルーツ波を吸収する事で成し遂げられる。

だがパワーボールで生み出した月は所詮偽り……通常の大猿ならばともかく、超サイヤ人4を維持するにはパワーが足りていないのだ。

大猿化に必要なブルーツ波は1700万ゼノというのは今更語るまでもない常識だが、超サイヤ人4への変身の際は実際はそれ以上のブルーツ波を吸収している。リゼットしか知らない並行世界の話になるが、ベジータなどはブルーツ波を過剰摂取する事でようやく変身を成立させているのだ。

だがこの偽りの月で補給出来るブルーツ波は1700万ゼノしかない。

かろうじて変身は出来るが、これでは超サイヤ人4の超パワーを長続きさせるなど不可能だ。

これを好機と見たヒットは気弾を放ち、偽りの満月を破壊した。

これで再度の変身を阻止し、一転攻勢へと移る。

「ちいい！」

ターレスも咄嗟に超サイヤ人2となって応戦するが、超サイヤ人4でパワーを使いすぎた。

これでは3にすら変身出来そうにない。

それでも単純な戦闘力ならば何とか戦えない事もないが……これではターレスはヒットには勝てない。

ヒットの時飛ばしや技を、圧倒的なパワーで捻じ伏せてようやく五分だったのだ。ならば戦闘力で負けてしまえば、技の差はそのまま実力差となってターレスを打ちのめす。

先程までと違い、ヒットの攻撃一発一発が重い。鋭い。

意識が容易く途切れそうになり、目の前が血で染まっていく。

……勝敗は既に決まった。

途切れそうになる意識を無理矢理繋ぎ止め、ここらが限界だたとターレスは悟る。ならば自分に残された役割は一つ。相手にダメージを残し、次へと繋ぐことだけだ。

「潮時か……だが、ただでは終わらん！」

この俺の全てのエネルギーを貴様にくれてやる！」

両手を頭上で組み合わせ、魔閃光にも似た構えを取る。

ヒットも当然これを防ごうと瞬時に移動するが、またもターレスはそれを見切ったように距離を開けた。

次の瞬間にはヒットが拳を放っているがターレスはもういない。

「喰らえ！ カラミティブラスター！」

攻撃の一瞬のみ気を無理矢理に急上昇させ、全身全霊の気功波を発射する。

紫色の気の奔流がヒットを飲み込み、だが惜しくも不発に終わる。

ヒットはまたも瞬時に移動をする事でターレスの切り札を避けてみせたのだ。

だが、切り札は一枚ではない。

ターレスはそれすらも読んでいたようにヒットを後ろから羽交い絞めにし、壮絶に晒う。

「捕まえたぜ。こうなりやあ時間を止めようが飛ばそうが関係ねえよな？」

「っ！ 貴様、読んで……!?!」

「ああ、幸運にもな。リングに落ちた俺自身の血の跡が時間の不自然な流れ方を教えてくれたぜ！」

ヒットの能力の正体は時間の操作だ。

分かりやすく言ってしまうと0・1秒ほど時間を停めているようなものだ。

しかしその正体は時間を停めているのではなく、時間を飛ばしている。

アニメーションは動いている絵に見えて、実際は一枚一枚の静止画が連続する事

で成立している。分かりやすく言えばパラパラ漫画の原理だ。

その中から一枚を抜き取ってしまえば、その抜き取られたシーンを視聴者は認識できない。

ヒットの能力はそれだ。時間を0・1秒だけ飛ばす事により、その飛ばされてしまった時間を彼以外の誰も認識出来なくするのだ。

そして彼は、その飛ばした空白の時間の中で動くことが出来る。

時を飛ばしているという言葉でピンと来ないならば、時を切り取っていると解釈してもいい。

時計の針が秒を刻むシーンから一枚だけ切り取れば、先程まで10秒を指していた針が突然12秒を指す。

石が落ちるシーンから一枚切り取れば、石がワープして地面へ落ちる。

そして殴るシーンから一枚切り取れば……攻撃モーションがなく、次の瞬間には殴っている。

ややこしいが、ほとんど時間停止と同じと言っていいだろう。

「だが飛ばせる時間はそう多くはないようだな！ この状態からならば、どうし

ようもあるまい！」

ターレスはそう語り、全身の気を全解放する。

紫電が迸り、名前のない惑星が鳴動する。

これから彼が何をしようとしているかは明白だ。

自爆——！　ターレスは全ての気を一瞬にして全解放する事でヒットにダメージを残すつもりなのだ。

自分では勝てない事はよく分かった。時間を飛ばすカラクリは何とか見抜いたが、それで倒せると思うほど樂觀視はしていない。何よりダメージを受け過ぎた。残念ながらこれでは己の勝利などまず有り得ないだろう。

ならばせめて、後発の勝率を少しでも上げるべくここで己の敗北を相手にプレゼントしてやろうではないか。

「先に脱落する俺からのせめてもの贈り物だ！

……うおおおおおおおおおおお!!」

ターレスが咆哮をあげ、星全体が紫の爆光で埋め尽くされる。

ウイスとヴァドスが展開したバリアにより観客席には一切の被害がないがリング

にいるヒットはたまったものではないだろう。

ターレスの自爆は数十秒に渡り続き、リングを完全に消し飛ばして紫の光の柱を登らせる。

そしてそれが終わったとき、地面の上に変身が解除されたターレスが墜落し、その後から全身の所々に傷を負ったヒットが不時着をした。

両者共に命に別状はない。だがターレスは満足そうな顔で意識を失っており、どちらが勝者なのかは明白だ。

「しょ、勝者、ヒット選手！」

ここにきて遂に第7宇宙の連勝が止まり、第6宇宙は記念すべき初勝利を飾った。

だがそれを見守る破壊神二人の表情は変わらず、ビルスは余裕を、そしてシャンパは屈辱を顔に浮かべていた。

ビルス「……勝ったな（確信）」

シャンパ「きつと向こうは先鋒がいきなり最強の出し惜しみなしたんだ……
そうに違いない（白目）」

ヴァドス（単純なパワーという意味では）その通りですわ、シャンパ様」
シャンパ「だ、だよな！」

ヴァドス（残る三人は全員、神の気を体得しているようですけどね）

【戦闘力】

ヒット…1兆

※時飛ばしや殺しの技は戦闘力に反映されないので、実際は数値の数倍は強い。
このヒットはアニメ版の強さなので能力抜きでも普通にブルー悟空と殴り合える。

そのうち界王拳ブルーと普通に殴り合いそうで怖い。

成長力が凄まじく、力の大会時にはゴールデンフリーザを超えている可能性あり。

漫画版ヒット…50000億

本気…1兆

※アニメ版に比べて弱すぎると評判の漫画版ヒット。何故かアッパーをよく食らう。

ゴッドの悟空に力の差がありすぎて時飛ばしが効かないのでかなり弱い。

本気を出せばゴッドは止められるがブルーは止まるんじゃないぞ……。

ベジータに勝てたのも、ベジータが連続でブルーに変身して1/10の力も発揮出来ていなかったから。

【自爆】

GTで悟空が超17号にやった技。

己の気を爆発させて相手に大ダメージを与えるが、自分は戦闘不能になる。

自爆とは言うが、ベジータのファイナルエクスプロージョンと違って術者が死ぬ事はない。

【時飛ばしに関して】

よく『ザ・ワールド』なのか『スタープラチナ・ザ・ワールド』なのか、『キング・クリムゾン』なのかで議論的になるヒットの時飛ばしですが、このSSでは『キング・クリムゾン』として扱います。

その理由はアニメでヴァドスが「ヒットの能力は正確には『止める』のではなく文字通り『飛ばしている』」と断言したからです。

というか時間停止だった場合、ヒットなら0・1秒で相手を殴り放題な上に悟空の先読みでは対応できない気がするので、こちらの説を採用しました。

いくら先を読もうと停まっている間にボコボコ殴られたらどうしようもないと思うんですよね。

ちなみにリゼットの時間停止はスタプラ方式なので普通に停まっている間に相手をボコボコ殴ります。

身勝手の極意だろうが停めて殴ります。

やっぱり時間停止ってずるい。

第百話 破壊神選抜格闘試合⑤

「悟空君。彼能力は時間の操作です。

私の見たところ、コンマ1秒ほどの短い時間ではありますが時間が飛ばして攻撃を行っています。

だから彼が攻撃する『過程』が存在しないのです。

分かりにくければ、時間を停めていると思ってください」

「なるほど。そいつは厄介だな」

ターレスを治療しながらリゼットが語るのは、今の闘いで分かったヒットの能力だ。

それを聞いて悟空は思った以上の厄介さに顔をしかめるが順番を変える気はなさそうだ。

恐らく何か彼なりの勝算があるのだろう。

「能力は厄介ですが、それを抜きにした純粋な気の大きさでは神の氣を得た貴方が勝ります。

相打ちでも攻撃さえ当ててしまえば勝機はあるでしょう」

「わかった……参考になったぞ、神様」

「気を付けて下さい」

リゼットのアドバースを受け取り、悟空がリングへと降りる。

ターレスは敗れたが、彼が刻んだダメージは決して浅くない。

ならば回復の間を与えずに畳みかけるのが勝利への近道だ。

悟空とヒットはリング中央で視線を交差させ、静かに気を高め合った。

その最中、悟空が静かに口の端を釣り上げる。

「……何が可笑しい？」

「いや、可笑しいんじゃない。嬉しいんだ。

オラ達はとくに宇宙でもほとんど誰も勝てねえくらいに強くなったと思ってたんだ。

けど、宇宙は広いな……おめえみてえな奴がまだいたなんてよ。それが嬉しくって、つい……な」

悟空は地球育ちである為、サイヤ人としては穏やかな部類だ。

しかしその一方で、強敵の存在に喜ぶサイヤ人としての本能はベジータを上回る。だからつい、無意識下で笑ってしまったのだ。

このヒットという新たな強敵の存在に、胸がワクワクして仕方ない。いくつになっても治らない、悪い癖だ。

それを思い、嬉しさ半分、自嘲半分で笑ってしまった。

悟空とヒットは、互いに短い会話の中で相手が油断ならない相手であると悟っていた。

その落ちていた雰囲気……あるいは隙の無い佇まいが。否応にも相手の強さを伝えてくる。

互いが強者であるからこそ、それが分かるのだ。

「いい試合になりそうだな」

「フ……変わった奴だ」

これ以上の余計な会話は必要ない。

後は拳で語り合うだけ。

言葉など介さずとも、分かり合えるものがある。

悟空が構えながら好戦的に笑みを見せ、ヒットもそれに感化されたように薄く笑った。

「孫悟空選手 VS ヒット選手、開始！」

開始のゴングと同時に悟空が超サイヤ人2へと変身してヒットへと突撃する。それに合わせてまずはヒットの見えないカウンターが炸裂し、だが悟空は僅かにのけぞっただけだ。

ヒットの攻撃はスピードを優先している為、基本的には軽い。

だがその軽さを補う為に急所を狙っており、総合的に考えれば敵に与えるダメージはかなり大きなものとなる。

だが悟空は何度もリゼットと模擬戦を行い、急所への攻撃を受けてきた。

その慣れが咄嗟の反応へと繋がり、ほとんど身体が勝手に動くに等しい反射で急所への直撃だけを避けているのだ。

勿論、流石のリゼットも悟空の股座を蹴り上げるような真似はしないし、目潰しなども行わない。

それでも人体……特に顔というのは急所の宝庫であり、そうした部分をリゼット

は容赦なく攻撃してくる。

だからこそ、悟空もそうした攻撃への慣れが出来ているのだ。

再び攻撃を仕掛け、フェイントを織り交ぜて攻めるも再びヒットが時間を飛ばした。

だが悟空の天才的格闘センスはターレスの闘いを見ていた事と自分で受けた事によりヒットの攻撃のタイミングを読んでしまう。

「ふっ！」

コンマ1秒先に放たれるはずのヒットの攻撃。それを完全に予測し、悟空の拳がクロスカウンターでヒットの顎を揺らした。

まさかの反撃にヒットがよろめき、その隙を逃すまいと悟空が拳の連打を叩き込む。

胸筋へ幾度となく悟空の拳がめり込み、更に蹴りを放つ。

だがヒットが再び時間を飛ばして攻撃を避け、悟空の頬へ拳を当てる。だが、悟空は勢いを殺すどころか殴られた衝撃に任せて回転し、更に廻りながら赤く輝く超サイヤ人——ゴッドへと変身。

そして回し蹴りへと移行し、ヒットの首を渾身の力で蹴りぬいた。

だがヒットもこれを腕でブロックし、時を飛ばして悟空の背後へ回り込む。

それを予測していた悟空の裏拳がヒットへ放たれるも、ヒットはそれを屈んで避け、水面蹴りを放った。

しかしこれも予測済み。悟空は軽く跳躍して振り返りつつ右回し蹴りへ移行。

顔を狙うと見せかけて途中で軌道を変えて腹へ。しかしこれを読み切ったヒットが蹴りを防ぐ。

そのまま時を飛ばして潜り込み、ボディブロー！

だがこれをも読んでいた悟空が左足で防ぎ、更に右足と左足でヒットを挟み込んで逆立ちしつつ彼を足で投げ飛ばした。

ここまで、ほんの一秒にも満たぬ間の出来事である。

「やるな……！」

投げ飛ばされたヒットが後方宙返りをしながら着地し、それと同時に時飛ばしで距離を詰める。

悟空も気を抜かずにヒットを迎え撃ち、二人の間で目にも止まらぬ拳の応酬が始

まった。

観客席にいる亀仙人達には、両者の拳が消えているようにしか見えないだろう。だが二人はこの瞬き一瞬ほどの間に千を超える攻防を繰り広げていた。

それもただ、単純に殴り合っているわけではない。

互いにフェイントをかけあい、拳の軌道を幾度となく変え、相手の次の次の、そのまた次の一手を予測しながら戦っているのだ。

（こいつ……ただ荒々しいだけじゃない。

積み上げてきた経験と、潜って来た多くの修羅場……数多の戦いを潜り抜ける事で完成された武道家の重みがこいつにはある。

面白い……見た目通りの若さではないという事か！）

悟空は一見すると荒々しいがその実、決してパワー頼りの戦いばかりではない。多くの師と出合い学んできた事がある。

亀仙人から学んだように心をリラックスさせ。

カリンから教わった通りに無駄なく動き。

ポポから教わったように心は空のように澄み、動きは雷のように速く。

それらをリゼットから教えられた効率のいい身体と気の動かし方と融合させ、悟空自身の才覚と組み合わせの一つの武として昇華させている。

年齢を重ねる事で肉体全盛期は過ぎ去った。だが積み上げた時間は彼に老練の技と円熟な心を齎している。

ならば心・技・体の全てが高次元で揃った今こそが孫悟空の最盛期だ。

その悟空のセンスは既にヒットの時飛ばしを完全に予測し切り、戦いの天秤は完全に悟空へと傾いていた。

時を飛ばして放たれたヒットの拳を受け止め、逆に悟空の拳がヒットの顔を打ち抜く。

鼻から血を流しながらヒットが吹き飛び、しかしすぐにリングへと着地した。

「……ふ、ふふふ……正直言って驚いたぞ……」

お前のような男がいたとは……敵ながら感動させられた……」

「ああ、オラもだ」

「お前ならば……死なんかもしれんな」

ヒットはゆっくりと立ち上がり、静かに構えた。

彼の本業は殺し屋である。

故に、殺し禁止のこの大会では使えないような、殺しの技もいくつか持っている。それらは決して使うまいと封じていたが……だが、思う。

この男ならば……孫悟空ならば、これさえも受け切ってくれるのではないかと、そんな不思議な、信頼にも似た気持ちにさせられる。

それはヒットにとって、初めての事であった。

「しっ！」

ヒットが離れた場所から拳を放つ。

一体何だ……などと思う前に悟空は気弾を放ちながら横へ跳んだ。

あのヒットが無意味な事をするはずがない。その行動には必ず意味がある。だから棒立ちして何かが起こるまで待つなんて真似はしない。

その悟空の読みは的中しており、放った気弾が何かに散らされた。

（気は感じねえ……だが、感じねえだけでそこにあるって事か……）

見えなくした気を遠くから飛ばしたってとこか……？ やっぱあいつ、ただもんじゃないねえ）

初見でヒットの見えない拳の正体をほぼ見抜き、瞬間移動でヒットの背後へ回り込んだ。

初見殺しには初見殺し。ここまで温存していた瞬間移動でヒットの虚を突き、回避する間も与えずに拳を叩き込んだ。

だが——当たらない。

そこにヒットがいるはずなのに、まるで煙でも殴っているように拳が突き抜けたのだ。

それと同時にヒットが見当違いの方向へ拳を放ち、悟空は本能的な寒気を感じて咄嗟に身体をずらした。

直後に脇腹に深く何かが突き刺さり、悟空を吹き飛ばす。

「がっ！」

痛みを堪えながらも空中で回転してリングに手を付け、二度、三度と後方倒立回転を決めてすぐに体勢を立て直す。

改めてヒットを見るも、やはり彼は動いていない。あそこにいる。

「勘がいいな……今の攻撃で死なないどころか、倒せなかったのはお前が初めてだ」

「なるほど……それがおめえの本当の実力ってわけか」

「そういう事だ」

殺しはこの大会では禁止である。

故にこの技で悟空を殺してしまえば負けるのはヒットの方だ。

だが彼は、この程度では悟空は死なないと確信したのだ。

むしろこうしなければ、勝てないレベルの相手だ。

僅かな手合わせではあったが、ヒットは悟空の拳から鋭さと力強さ……そして極まった武道家の重厚さを感じ取った。

一体どれだけの戦いを経験すればこれほどの高みへ至るのか……敵の完成度に感動したのは、生まれて初めてだ。

「じゃあ……オラも本気でいくか！」

無論、ヒットが殺しの技を解禁した事を悟空は咎めなどしない。

むしろますます嬉しそうに戦意を高め、それに呼応するように彼の気が高まった。

髪は逆立ち、赤から青へ。

通常の超サイヤ人と似て非なる、青色の超戦士へと進化を果たす。

「サイヤ人ってマジで何回変身すんだよオオオオ!! インチキもいい加減にしroy
よオオオ!」

シャンパはもう半泣きだ。

サイヤ人おかしい、マジおかしい。

しかし驚いていたのはシャンパだけではなく、味方であるリゼットやターレスも同様であった。

「青い……超サイヤ人? ゴッドと気の性質が似ているようですが……」

悟空が見せたその変身にリゼットを始めとした面々が驚きを見せた。

この悟空の変身は原作知識を持つリゼットですら知り得ぬ新たな変化だ。

その反応にウイスが気をよくし、微笑みながら解説をする。

「ああ、そういえばリゼットさん達はまだ知りませんでしたね。

あれこそ悟空さんやベジータさんが得た新たな超サイヤ人の姿……超サイヤ人
ゴッドの力を持ったサイヤ人の超サイヤ人……さしずめ超サイヤ人ゴッド超サイヤ
人……いえ、長いので超サイヤ人ブルーとでも名付けましょうか」

「超サイヤ人……ブルー……」

「ええ。先程貴方が語った通り従来の超サイヤ人とは方向性が異なる新たなるサイヤ人の可能性です」

まさかゴッドの更に上があるとはリゼットも予想していなかった事だ。

超サイヤ人ゴッドは己の気を神の気へと変質させるといふ最強の変身であったが、変身時間の短さと再変身には仲間の協力が必須という条件があった。

それらを踏まえて考えるならば超サイヤ人4の方が安定して強いとリゼットは考えていたし太古に善と悪のサイヤ人の闘いで悪のサイヤ人が勝ってしまったのもこの継戦能力の差によるものだと思っていた。

だがその認識は今覆された。

認めるしかない……超サイヤ人4にすら匹敵する更なる超サイヤ人があった事を。

その最新にして最強の変身を遂げた悟空は今まで以上の速度でヒットへと突撃した。

そして拳を放つも、やはりヒットには当たらない。

だがここまでは織り込み済み。悟空は目を閉じて神経を研ぎ澄ます。

風の音……僅かな気の動き……空気の乱れ。

その全てを肌で感じ、ヒットの敵意を感覚で追う。

やがてヒットの見えざる拳が胸に触れ――。

「そこだあ！」

叫び、回転。見えざる拳の打点を外しつつ、その先へと気弾を放った。

その先には何もない。

だが何かに当たったように爆発し、その中からヒットが弾き出された。

「な、なんだ!? 何であんな場所から!？」

「ヒットさんは、飛ばした時を蓄積させる事で別空間を創り、その中に潜む事が出来るのです。」

しかしあの孫悟空というサイヤ人は、それすらも見破ってしまったようですね。いかに異次元に隠れようと、攻撃の一瞬だけは本人が出ざるを得ない……一瞬にも満たない僅かな間の事です、その弱点を突かれました」

「嘘だろ!? 異次元に潜っての奇襲も通用しないってのかよ!？」

あっちの宇宙のサイヤ人は化け物しかないのか!？」

ヴァドスの語るヒットの能力は驚異的の一言だ。

宇宙最強の殺し屋の名に一切の偽りなし。裏社会の生ける伝説と呼ばれるだけはある。

だが真に驚くべきは、それを僅かな戦いで見破ってしまった悟空の方か。すぐに距離を潰した悟空が拳を放ち、ヒットも咄嗟に迎え撃つ。

二人の腕が衝突し、衝撃波が拡散した。

「ぐ……本当に、お前はとんでもない男だ。これほどの相手が宇宙にいたとは……」

「まだ終わりじゃねえんだろ？ 見せてみるよ、おめえの全てを」

「そうだな。お前にならば……俺の全てをぶつけてやろう！」

悟空とヒットが互いの実力を認めて笑い合い、正面からの殴り合いへと突入した。時に愚直に、時にフェイントを混ぜ——能力を行使し、それを読み切り、二人は顔に好戦的な笑みを張り付けたまま渡り合う。

その戦いの中で悟空は地力と読みの鋭さで順調にヒットを圧倒するが、しかし途中でヒットの攻撃が彼に直撃した。

読み違った？ 否、悟空の読みは完璧だった。

変化したのはヒットの時飛ばしの時間だ。

「っ！ 不味い……あのヒットという選手、成長しています！ それも凄い速度で！」

「何い!？」

リゼットの慌てたような声にビルスも声を上ずらせた。

ターレスの4連勝で余裕と思われた闘いだ、ここにきてまさかの暗雲だ。

悟空という強敵を得た事で……そして彼に感化された事で。

ヒットが武道家として、急成長しつつあるのだ。

ただでさえ強いのに時飛ばしが成長してしまつては手に負えなくなる。

今ならばまだリゼットの時間停止の方が勝っているが、このまま悟空との闘いで成長を続ければどうなるか分からない。

「ヒットさんが飛ばせる時間は今の所0・2秒ほど……今ならばまだ、リゼットさんの時間停止が勝りますが、この先どうなるかは未知数ですねえ。楽しみです」

「や、やばい！ おい悟空、棄権しろ！ 手に負えるうちにリゼットと代われ！」
呑気に言うウイスとは対照的にビルスが焦りを見せた。

悟空の後にベジータとリゼットが控えていれば絶対に勝てると思っていたのだが、それは間違いだと言ったのだ。

もし悟空やベジータとの戦いでヒットがダメージを受けるところか成長してしまえば、リゼットすら突破されかねない。そう危機感を抱いた。

しかしここで終わらないのが孫悟空だ。彼は起き上がると、再び構えを取る。

「へへっ……待ってくれよビルス様。オラだってこのまま終わりじゃねえさ」

「何!？」

「出し惜しみしてたわけじゃねんだけどよ。」

本当は完璧になってからビルス様との闘いで使うつもりだったんだ。

けど、このまま全部出せずにやられたんじゃないかと相手に申し訳が立たねえ」

悟空が覚悟を決めたような表情となり、気を解放した。

それは己の奥底から無理矢理に気を絞り出すような無茶な気の行使であり、リゼットにも覚えがあるものだ。

間違いない……悟空は今界王拳を使用している！ 超サイヤ人の状態のままで、だ。

「ヒット、おめえだって本気を見せてくれたんだ。

なら、今度はオラが見せる番だよな……。

いくぜ……界王拳！」

一気に気を跳ね上げた悟空が飛び込み、ヒットが迎え撃つ。

先程までの焼き直しではない。再び攻守が逆転し、完全に悟空が優勢だ。

悟空の拳が、蹴りが、次々とヒットを打ちのめし傷を刻んでいく。

あるいはヒットがベストの状態だったのならばまた結果も異なったかもしれない。

だが彼は試合が始まる前からすでにターレスに受けたダメージがあった。

それがそのまま試合の行く末をも決定してしまい、いのように悟空に叩きのめされる。

「だありやりやりやあああ!!」

拳打の連発。ヒットの時飛ばしや異次元への移動すら完璧に予測し、何十何百とおこなわれる読み合いに勝利して彼を圧倒した。

青と赤の炎を纏った悟空の拳がヒットの顔や腹をサンドバッグのように殴り、彼

の身体を浮かす。

落ちてくるヒットに合わせて跳躍。追撃を仕掛けた。

しかしヒットの成長も尋常ではない。

時飛ばしを用いてのカウンターが悟空を迎撃し、かろうじて着地した悟空が無茶な気の行使と相まってよろめいた。

「かはっ……!」

悟空が倒れそうになり、身体から力が抜けていく。

やはり超サイヤ人ブルーと界王拳の同時行使には無理があった。

倒れそうになる悟空だが、しかし瞬間彼の耳に届いたのは仲間達の自分と呼ぶ声だ。

「悟空さー!」

まず最初にチチの声が耳へと入る。

「悟空ーっ!!」

続いてクリリンの、ベジータの、天津飯の、ピッコロの、ヤムチャの、悟天の、トランクスの……そしてターレスやビルス、リゼットの声が聞こえる。

それを聞いた瞬間悟空は踏み止まり、完全に界王拳と超サイヤ人との同化を物とした。

「っはああああ！」

界王拳を10倍まで引き上げ、地を蹴って突撃。

渾身の右拳をヒットへ叩き込み、更に休まず連撃！

拳打！ 肘打ち！ 膝蹴り！ 前蹴り！ 回し蹴り！ 裏拳！

「だああありゃああああッ!!」

勢いが衰えるどころか更に加速し、一瞬でヒットの身体を上空へと運ぶ。

殴る、殴る、殴る！

一瞬にしてヒットの体力を削り切る程の猛烈なラッシュを叩き込み、それでも尚悟空は止まらない。

顔、頭、首、肩、胸、腹、膝、肘、脇腹、足！

ヒットの身体に至る箇所を強打し、最後に腕をクロスして気を集約——爆発させた。

「っはああああああ!!」

超サイヤ人ブルーの青い炎と界王拳の赤い炎が同時に広がり、名前のない星から光の柱が立ち上る。

目も開けていられないほどの極光。

その余りの輝きに皆は目を開けていられず、そして第6宇宙の界王神が手に持っていたスマホのような何かを落として壊してしまった。

「ああっ、神チューブに上げる動画が！」

……よ、よかった、データは無事だ……でも、カメラが壊れてしまった……」

どうやら第6宇宙の界王神はこの試合を録画していたらしい。

後で神チューブなる物に上げようとしていたようだが、まあご愁傷様と言うしかないだろう。

その間も光は続き、やがてそれが収まった時、リングの上の勝敗は決まっていた。ヒットは白目を剥いて倒れ、悟空は立っている。

審判はヒットの意識の喪失を確認し、そして手を掲げて勝者を宣言した。

「勝者、孫悟空選手！」

審判の宣言にビルスが立ち上がり、観客席からも歓声が上がった。

結局結果だけを見れば第6宇宙は先鋒のターレスしか倒せず、第7宇宙の圧勝という形に終わっている。

その事にビルスは勝ち誇り、そしてシャンパは悔しそうに地面を叩いた。

これにて第7宇宙、第6宇宙対抗試合は決着を迎え超ドラゴンボールはビルスのものとなった。

無論これに納得いかないのがシャンパだ。

しかしいくら納得いかなろうとルールはルール。従う他ない。

そうなると今度は怒りの捌け口を探すもので、彼が目を付けたのは自分の宇宙の戦士達だ。

負けたのは自分のせいではない。自分がビルスに負けたわけではない。

代表選手がだらしがないのが全て悪い。

彼の思考はその結論へと達し、殺意を込めた目でヒット達を射抜いた。

「お前達……無事に帰れると思うなよ。全員破壊してやる！」

「シャンパ様！ お止め下さい！」

気絶したヒットへ手を翳すシャンパをキャベが止めようとする。

だがシャンパは止まるどころか、今度はキャベへ狙いを定めた。

「黙れ、お前もだ！ どいつもこいつも俺の顔に泥を塗りやがって！

全員まとめて破壊してやる！」

「やべえ！」

「孫悟空」

シャンパの本気を悟った悟空が止めに入ろうとするが、そこにビルスが待ったをかけた。

彼は何ら慌てる事なく、まるでこの事態を予想していたように、どうでもよさそうに言う。

「出過ぎた真似をするんじゃない」

「だ、だがビルス様……」

「お前達はよくやった。だが試合はもうおしまいだ」

ビルスは語る。もうルール有りの試合は終わりだと。

その言葉を引き継ぎ、今度はシャンパが吠えた。

「そう、ここからは元通り俺達が全てを仕切る。」

分かるか？ 俺達がルールなんだよ」

「もつとも破壊神と戦ってそのルールを変えるっていうなら話は別だが」

シャンパとビルスが自分達こそがルールであり、絶対であると語る。

もつともそのニュアンスは異なり、シャンパのそれは『出来るわけがない』と確信したものだ。ビルスのそれは何かを期待しているような口ぶりだ。

そもそも期待していないならば、破壊神と戦ってルールを変えるなどという発想そのものを出さない。

リゼットはそれを察し、仕方ないですねと笑った。

「ビルス様、ルール変更の権利がこちらにはありましたね」

「ああ、あったね。試合が終わっちゃったから結局使い道なかったけど」

「ならそれ、私が貰いますよ」

リゼットが踏み出し、リングの上へと着地した。

もう試合は終わっているにも関わらずのリングインだ。

審判が不思議そうに彼女を見る中で、リゼットはシャンパへと提案をもちかけた。「シャンパ様。こちらには先程貴方自身から頂いた一度限りのルール変更の権利が

あります」

「……ああ、確かにあるな。だがそれは試合のルールに関する事だ。

試合が終わった今、俺の行動を制限する事など出来ん」

「ええ、ですから……まだ試合を続けましょう」

リゼットは微笑み、そして挑戦的にシャンパを見据える。

「審判！ ルールの変更を要請します！

変更内容は——6番目の選手としての破壊神自らの参戦！

そしてこの闘いに私が勝利したならば、選手への破壊を止めて頂きます！」

「なっ!? お、お前、俺と戦うつもりなのか!?!」

「ええ、そう申しています」

リゼットの気が爆発的に膨れ上がり、白い粒子が舞い散る。

冗談やハツタリではない。彼女は本当にここでシャンパに戦いを挑むつもりだ。

「さあ、どうしますシャンパ様？ まさか……第7宇宙の辺境の惑星の神如きを

相手に逃げはしませんよね？」

「……後悔するぞ」

不敵に笑うリゼットの前へシャンパが降り立ち、試合への参戦の意を示す。かくしてここに異例の対破壊神が実現し、リゼットとシャンパが正面から相対した。

両者の気の差は圧倒的だ。

シャンパを巨木とするならばリゼットは若木にも等しい。

同じ神の領域であっても、まだそこには埋めがたい差が存在している。

しかしリゼットはあくまで笑みを崩さず、一度だけ悟空を見た。

（感謝しますよ悟空君……貴方のおかげで、万に一つの勝機が見えました。

神の気の上からの界王拳の上乗せ……無茶ではありますが、気のコントロールさえ完全なものとするならば不可能ではない。それを貴方は証明してくれた）

やはり孫悟空は天才だ。リゼットは改めてその事実をこの上なく実感していた。ずっと不可能だと思っていた。身体の方がもたないと諦めていた。

だがその理論だけの不可能を悟空は可能だと立証してくれたのだ。

本当に……気付けばいつだって、彼は前を歩いている。

単純な強さではリゼットの方が上のはずだが、それでも悟空は皆の先頭を歩いて

いて、そして道を示してくれる。

ならばやってみせよう。

悟空とターレスがここまで力を魅せてくれたこの試合、自分達が勝ったばかりに相手が破壊されるなどという後味の悪いものになっていいはずがない。

まず、神の気を解放。

リゼットの背中に光輪が出現し、そして制御する事に力の大半が奪われる。

ここまでは従来通り。そして重要なのはここからだ。

かつてリゼットが使っていた戦闘力を倍加させる技……バーストリミットを使う。

それは無謀な行いだ。

悟空のブルーと違い、リゼットのゼノバースは無理矢理出力を抑えてこれなのだ。それを倍加などしてしまつては、到底制御出来なくなつてしまう。暴走するに決まっている。

だが、その方向性が逆ならばどうか。

「バーストリミット……マイナス」

戦闘力を倍加させる——のではない。

あえて戦闘力を半減させる。

その倍率は四分の一倍。

自らに弱体化をかけ、その上でゼノバースの制御を放棄。

今まで抑えていた圧倒的な神の力が荒れ狂い、しかしそれと同時にリゼットは自らに枷を嵌めた。

戦闘力を倍加させる技の方向性を反転させ、己の力を半減する。そうする事で制御出来ないはずのゼノバースを本気で使う事が出来るのだ。

どこからともなく現れた光の鎖が拘束具のようにリゼットの手首と足首に巻き付き、かつて気霊錠で自らの力を制限していた時と同じように彼女を弱体化させる。

「行きます。お覚悟を」

それでも尚眩い神の力が、純白の極光として溢れた。

（。D。 ㊦ゴクウー！

（D。（。D。（。D。（。D。）

（D。（。D。（。D。（。D。）ゴクウー！

【バーストリミット・マイナス】

バーストリミットと気霊錠を融合させた技。

本来は自らの戦闘力を倍加させる技を反転させる事で自らを弱体化させる、何のメリットもない技。

しかしこの技を使う事でゼノバースの制御を放棄しても理性を留める事が出来るようになった。

現在は1〜4倍が暴走しないギリギリラインだが、リゼットが慣れるたびに手足の鎖が一つずつ外れ、その度に真の全力に近付いていく。

ちなみに敵にも使えるが、実力差がありすぎる場合は鎖を引き千切られるだけ。

【戦闘力】

・リゼット…30億

ゼノバース（真）…120兆

バーストリミット・マイナス（1／4倍）…30兆

・孫悟空…10億

超サイヤ人ブルー…2兆

界王拳10倍ブルー…20兆

・破壊神シャンパ…110兆

ちよつと前…本編リゼットがこの領域（1兆5000億）まで行けるかは不明。

今…30兆

オラがいた方が地球はやべえらしい by 悟空

【神チューバー第6宇宙界王神】

誰が試合を録画してUPしたのかは語られていないので、勝手に第6宇宙の界王神と捏造。

彼が持っていたスマホも原作では登場していない。

ムシギ——！ からの一撃技で彼のスマホが壊れてしまったので、この先は

動画にされない。安心！

第一百話 破壊神への挑戦

白い光と化したリゼットは驚くシャンパへと文字通り光の速度で接近し、彼の脛を思い切り蹴り抜いた。

いかに破壊神でも痛覚は存在し、その急所は人とそう大差ない。

少なくともシャンパは試合中に足をテーブルに打ち付けて痛がっている姿を見せており、つまりいかに破壊神でも予期していない衝撃には痛みも感じるし怯みもするという事だ。

シャンパが悲鳴を上げる間もなく今度は足の小指！

痛覚神経が集中している小指は身体の末端という事もあり通常よりも痛みを感じやすい。

更に普段使わない部位だけに脳は小指の存在を普段は認識していないのだ。

『固有感覚』——人は普段、この機能によって自らの身体の位置やどう動いているかを認識する。

だが身体の末端にあり、かつほとんど使わない足の小指はこの固有感覚による認

識から外れやすい。

故に人は自らの小指の位置を正しく認識出来ず、小指だけをどこかにぶつけて痛めるといふ事態が頻発してしまうのだ。

つまり完全な意識の外、不意の痛み。だから小指への衝撃というのは予想外に響く。

だがこんなのはほんの序の口。シャンパが怯んでいる隙にすぐにリゼットは次の攻撃へと移行した。

シャンパの鼻を小突き、怯んで口を開けた所で素早く顎を掴んで口の中に指を入れる。

そして自立行動気弾発射！　小さな、指先程度のサイズの気弾をシャンパの口へと入れて何度も何度も舌の付け根を刺激させた。

舌の付け根というのは刺激する事で嘔吐反射が起きる。

シャンパにそれが適応されるかは不明であったが、どうやらやはり猫よりも人に近い身体構造のようだ。

こみあげる吐き気にシャンパが元々青い顔色を真っ青にして震え、口元を押さえ

る。

そこに容赦なく貫手で肝臓打ち！

踏み込みだけでリングが砕け、次いで光速の打撃がシャンパの肝臓を打った。

そうしている間にも自立気弾はシャンパの舌の付け根を刺激し続け、嘔吐感で彼を苦しめる。

ダメージと嘔吐感にシャンパが思わず膝を突いてしまうが、それがリゼットの次撃を許してしまった。

「ふっ！」

リゼットは爪先でシャンパの喉を突いて無理矢理起き上がらせ、シャンパの胸に手を当てて零距离の掌底を叩き込む。

更に念力と気合砲を合わせ、シャンパを一気にリング外へと押し出した。

これはまだルール有りの試合。ならば破壊神だろうが何だろうがリングの外へ墜落させてしまえばリゼットの勝ちとなる。

しかしシャンパも流石にこれで終わりとはならず、空中で静止してリングアウトを免れた。

それからシャンパは咄嗟に顔をあげるが、次の瞬間彼の視界に飛び込んできたのは一発の気弾であつた。

それがシャンパの目の前で炸裂し、太陽拳を上回る眩さで彼の視界を塞ぐ。

思わずシャンパは目を閉じてしまい、その硬直を利用して追いついたりゼットがまたも意識の外からの攻撃を放ち、シャンパの顎を掌打で打ち上げた。

それと同時にシャンパが飛んでいく先へと一瞬で回り込み、飛んできたシャンパの腹へと右手で掌打！ 間髪を容れずに左手を右手の上に乗せて掌打！ 二重の衝撃を浸透させ、シャンパをリングへと落とす。

まだ終わらない。落ちていくシャンパを追って自らも急降下し、背中の光輪から爆光を発して更に速度を上げた。

シャンパはそれに対し落ちながらも拳を繰り出して反撃を試みるが、確かに放つたはずの拳が亜空間へと吞まれて自らの背中へと直撃する。

それと同時に加速し切ったリゼットの光速すらも超えた手刀が腹へ炸裂し、シャンパは自らの攻撃との板挟みとなつてしまった。

地面へ墜落し、何とか起き上がったシャンパへとリゼットが猛然と迫る。

だが次の瞬間にはリゼットの姿が消え、シャンパを素通りしたかのようにその先へと現れた。

直後、シャンパの身体を見えない打撃が幾度も打ちのめし、彼をダウンさせる。「凄いね。打撃が速すぎてダメージが後から発生してるよ」

「ホホホ、あれは回避出来ませんね。」

シャンパ様が攻撃を受けたと認識した頃にはもう攻撃が完了している。素晴らしい事です」

ビルスが椅子にもたれながら面白そうに観戦し、ウイスもリゼットの技巧を手放しに誉める。

そうしている間にもリングの上では幾度となくリゼットが消え、シャンパが光速を超えた打撃に叩きのめされていた。

無論シャンパならば対応出来ない攻撃ではない。気の総量ではリゼットなど上回っているのだ。

だが彼の喉にはリゼットが残した鬱陶しい気弾が残っている。即ち彼は今、絶え間ない嘔吐感と戦いながら試合をしているのだ。

これでは実力の3割すらも発揮出来ない。

ベジータは舌打ちをし、過去の闘いを思い出すように話す。

「あの女の性質が悪い所はこれだ。相手の方が強いと分かった途端、その実力そのものを発揮させないような戦い方をしやがる」

「しかし正しい戦法だ。相手が強いなら実力を出させなきゃいい。

強い相手に実力を出し切らせたら負けるに決まってるからね。小賢しいが大したもんだよ」

ベジータとは違いビルスはリゼットの戦い方に肯定的なようだ。

しかしシャンパもまたビルスと同格の破壊神。いかに実力を制限されてもそう簡単に敗れはしない。

嘔吐感を堪えながら起き上がり、リゼットへと突撃を敢行した。

そして攻撃を繰り返す刹那——リゼットはシャンパの前へ両手を出し、強く掌を叩いた。

所謂『猫だまし』というやつだ。

だがたかが猫だましといえど侮る事は出来ない。意識が最大に高まった一瞬を

狙って放たれたそれは意識の波長を乱し、崩し、場合によっては意識そのものを断ち切る武器にだって変化する。

そしてこれは相手が集中していればいるほどに効果を増し、まさに今のはこの上ない絶好のタイミングで放たれたカウンターであると言えるだろう。

シャンパの動きが一般人の肉眼でも捉えられるほどに硬直し、その瞬間リゼットが勝負へと出た。

「Infinite World！」

時間停止！

この世の時間を一秒間だけ止め、リゼットは跳躍して両手を広げる。

シャンパが放心しているという絶好の機会。それを時間停止によって一秒間にまで伸ばし、ここで最大の勝負を仕掛けたのだ。

ここで決めなければ勝ち目はない。破壊神が態勢を完全に立て直してしまえばリゼットの負けが確定する。

故に静止時間一秒、この間に全ての片を付ける！

両手を頭上でクロスさせ、前方へ向けて掌を向ける。

それと同時に手の中に白い輝きが生まれ、膨大な神力が集約されていく。

「はああああ……！」

キュイイイン——と。

まるでモーターが高速駆動しているような音を立ててリゼットの背にある光輪が、スパークを撒き散らしながら回転を開始した。

同時に彼女の手の中の輝きが強まり、その威力を桁違いに跳ね上げていく。

気功波や気弾というのは、基本的には本人の力量に左右される。自らの力を超えた気功波は通常、創り出す事は出来ない。

しかし例外というのは何にでもあるもので、例えば元氣玉などはその最たるものだろう。

そしてリゼットの技であるゼノバースも、元々は元氣玉を目指して編み出された技法だ。

ますます回転速度を上げる光輪が信仰と共に運ばれる気をリゼットへ供給し、集められた気はリゼットの身体を通して手の中の輝きへと集約されていく。

光輪は次第に速度を加速させ、最後には狂ったような速度で超速回転を始めた。

それに比例して手の中の輝きは破壊神すら壊せる領域へと達し、今ここに最強の一撃が完成する。

そして放たれるのは、純白の極光。

「Ultimate blast！」

シャンパが放心している絶好の好機を伸ばした制止時間一秒。

その停止が途切れる前に巨大な気功波が彼へ炸裂し、そして時間が動き出した。

「ッ、不味い！」

「っ！」

時間が動き出すと同時にウイスとヴァドスの姉弟が最大出力のバリアを展開する。

一つの宇宙すらも崩壊させかねない膨大極まるエネルギー、それがリゼットの攻撃にはある。

いかにシャンパでも放心中に放たれたこの攻撃は効く。効かないわけではない。

彼は正気に戻る間すらも与えられずに極光の中へと吞まれ、吹き飛んでいった。

リング？ 当然そんなものはとくに飛び出してリングアウトしている。

光が止んだ時、そこには地面に倒れているシャンパと彼の前でバリアを展開しているヴァドスの姿があった。

それを見て攻撃の余波でひっくり返っていた審判が起き上がり、そして手を掲げて勝敗を告げる。

「シャ、シャンパ様場外！ 場外です！

よってこの試合、リゼット選手の勝利！」

審判の声を聞き、リゼットが地面に降りて膝を突く。

息は荒く、汗が止めどなく流れている。

やはり神域中のバーストリミットは方向性を反転させようが危険だ。身体への負担が半端ではない。

後、ほんの数秒でも闘いが長引いていればもたなかった。

そう、これは余裕の勝利などではない。

リゼットにとっては、ギリギリの危うい勝利だ。

「ひええ、すっげえな神様。シャンパ様に一方的に勝っちゃったよ」

「それはそうでしょう。一方的に勝たなければ負けていたのはリゼットさんです」

悟空は素直にリゼットの實力に感心するが、ウイスは両者の實力を正しく見切っていた。

一方的に勝ったのは事実だ。しかしそれは決して楽勝という事ではない。

それ以外にリゼットの勝ち筋などなかったのだ。

「ああしてシャンパ様の油断を突き、ペースを手放さずに終始圧倒して、立ち直る前に決めてしまいうしかなかった。そうする事でしかシャンパ様には勝てないと彼女は分かっていたのです」

「ま、そういう事だ。僕ならああはならなかったけどね」

「それはビルス様が彼女の實力を知っているからです。初見なら案外、同じ事になったのではないですか？」

「馬鹿を言うなウイス。僕が負けるわけないだろう」

余裕を見せるビルスだが、しかしその額に一筋の汗が流れている事を悟空は見逃さなかった。

ビルスならば勝てるという発言は恐らく事実だ。彼ならばあんな不意打ちは受けないし、地力の差でリゼットを押し切ってしまうだろう。

だがそれはウイスが言うようにリゼットの脅威をビルスが知り、認めているからに他ならない。

もしも初見ならば……ビルスもそれを考え、万一の事態を思い浮かべているのだろう。

もしかしたら、あそこで倒れているのはシャンパではなく自分だったかもしれない、と。

「ほら、御覧なさい。リゼットさんは自力では動けません。シャンパ様はもう立ち直っております」

「……これが破壊神と俺達の差、か」

試合はリゼットが勝った。

しかしシャンパはもう復活しており、リングの外で「もう一度だ！」だの「やり直しだ！」だの駄々っ子のように喚きながら転げまわっている。

一方リゼットは自力では立つ事も出来ずに、観客席から飛んできたブウに姫抱きにされていた。

その光景を見てベジータは舌打ちを隠せない。

「しかし勝ちも勝ちだ。破壊神でもない相手に負けるシャンパなんてきつとこの先
拝めないぞ。向こう10万年はこのネタでからかえそうだ。うへへへへ」

「ビルス様もお人が悪いですねえ」

ビルスはニヤニヤと笑いながら嬉しそうに、スキップでもしそうなテンションで
シャンパの前へと飛んで行った。

そして彼と何かを話した後、シャンパをからかうように彼の前で軽快なステップ
を踏む。

「なあなあ、今どんな気持ち？ 破壊神以外の相手に負けて今どんな気持ち？」

「~~~~~っ!!」

これは酷い。ビルス絶好調である。

一方シャンパは涙目になって唸っており、やがて決壊を迎えて手足をジタバタと
振り回した。

「ちくしょーちくしょーちくしょーちくしょーちくしょーちくしょー!」

「はっはっはっはっは! やーいやーい、ざまあみろ!」

子供のように喚くシャンパと子供のように最高にハイ! なビルス。

その二人を見てベジータが呆れたように「子供か」と呟く。

こうして今度こそ第7第6宇宙対抗試合は完全な決着を迎え、更にシャンパは参加選手の破壊すら禁じられてしまった。

その後、一悶着はあったものの疲労により眠ってしまったりゼットは残念ながら見ていない。

何でも、全ての宇宙で一番偉い神様が降臨したり、悟空がその戦いぶりを気に入られて握手されたり、何故かシャンパが不興を買ったりと色々あったようだが、まあ割とどうでもいい事だろう。

その後、今度は十二の宇宙で試合をやろうという話になりその場は解散となった。また、せっかくの超ドラゴンボールの願いをビルスは第6宇宙の地球の再生に使ってしまったが……もしかしたら、何だかんだでこの兄弟は仲がいいのかもしれない。

背中が輪っかがギョルギョル回ってチャージしてからのもう何かが凄いい好き

なんですよ。

FF10のバハムートのメガフレアとか。

これ分かる人……いますかね？

それと、言わなくてもやる人はいないと思いますが、感想欄でNDKのAAを張ったりはしないで下さいね。

【遠距離太陽拳】

気弾と見せかけて敵の目の前で太陽拳が発動する。

通常の太陽拳と違ってコンボの中にいきなり組み込んでくるので対策し難い。

【二重掌打】

ほとんど時間差なく掌打を叩き込む。

一撃目の衝撃が浸透し切らないうちに二発目の衝撃が追いつき、対象に大ダメージを与える。

【アルティメットブラスト・QTE】

アルティメットブラストの別バージョン。

通常と違って援護用の光球は浮かべず、全てを一発の気功波に賭ける完全威力重

視の技。

時間停止中に外からの気をかき集めて自らの力を遥かに超えた一撃を完成させる事でノーモーションで発射される。

停まった時を認識出来る者以外は、この技が撃たれた事にすら気付けない。

正式名称は『アルティメットブラスト・クイックタイムイベント』だが長ったらしいのでリゼットは発射の際は『アルティメットブラスト』とだけ言う。

【QTE】

クイックタイムイベントの略。

ゲーム『アルティメットブラスト』をジャンケンゲーにしてしまった恐るべきシステム。別名アルティメットジャンケン。

名前に時間停止と合いそうだったので技名に採用した。

【光輪】

リゼットの背中に付いている変な輪っか。

実はこれ自体が気の塊であり、弱い相手はこれに触れるだけで消し飛ぶ。

外から無限に供給される気を受け止める受け皿のような役割を果たしており、実

は信仰と気は直接リゼットに注がれているわけではない。

まずこの光輪に充填され、リゼットが必要とした時にリゼットに供給されている。また、リゼットが受け止めきれない気は光輪が勝手に外に出しており、放熱板のような役割も果たしているなど無駄に多機能。

この形態になった時に自分に最も必要なものを理解したりリゼットが無意識化で造り出したサポート用自律気弾であり、これも技の一種である。

リゼットが技に入る際に光輪が輝くのは、リゼットに気を与えているからであって決してただの演出というわけではない。

その他、気を後ろに発射しての加速やその場で留まっただけの急停止、方向転換などにも対応。

チャージ済みの気では出力不足の時は今回のように高速駆動して外から気をかき集める事も可能。

自律気弾の一種なので自らの意思で判断する事もあり、リゼットが倒れそうな時などは自動でバランスを取ってダウン回避もしてくれる。

ちなみに着脱可能。

第百二話 コメソンとおしゃぶりベジータ

第7宇宙VS第6宇宙の破壊神選抜対抗試合は第7宇宙の圧勝で幕を閉じた。

その後の祝勝会ではモナカが配達員として宇宙の人気スイーツを運んできたり、そのモナカにトランクスがぶつかって泣かせてしまい、弱い事が全員にバレてしまふなどの騒動もあったがそれは些細な事だろう。

どうもビルスは悟空のモチベーションを維持する為にモナカを強い事にしておきたいらしく、モナカの着ぐるみを着て悟空と戦うなどの実に涙ぐましい努力を見せしてくれた。

その後は地球の料理に舌鼓を打っており、その姿を見ながらリゼットは小声で悟空へと話しかける。

「悟空君。本当は気付いているんでしょ？」

「まあな」

「何!? カカロット、貴様気付いていたのか!？」

悟空は学がないが、決してそれは馬鹿という事ではない。

むしろ頭の回転は速い部類であり、その彼があんな茶番にいつまでも騙されていくというのはこれまでの彼を振り返ればまず有り得ない事だと分かる。

リゼットがそれを聞いてみれば案の定、彼はモナカの正体にはとうに気付いていたらしい。

「そりゃあ流石に気付くさ。モナカの気は全然弱っちいけど神の気ってわけでもねえし、本当に弱えただけだ。

着ぐるみとオラが戦ってる時だって、ずっとモナカの気は地上に残ってたしな。意図的に気を弱くしてるってわけでもねえみたいだし、普段の身のこなしを見てもてんで素人だ。いくらオラでもここまで来れば分かるさ。

あれ……着ぐるみの中身、ビルス様だったんだろ？」

「そ、そこまで……では何故、騙された振りをしていたんだ？」

「そりゃお前、決まってるんだろ。折角のビルス様と戦える機会なんだぜ？」

やらねえわけにゃいかねえだろ」

そう言い、明るく笑う悟空の横顔を見てリゼットは呆れたように肩をすくめる。やはりというか、予想通りの返答だ。

そう、悟空は氣付いていた。氣付いていながらあえて馬鹿を演じてビルスの嘘に乗ったのだ。

その方が余計なトラブルを招かず、かつビルスと戦えると踏んだからだ。

「そ、そうか……だが貴様、モチベーションは大丈夫なのか？」

「そんな事か。別にモナカが弱くたって今までと何も変わらねえよ。強くなりてえ氣持ちはずっと同じだ。」

昔からずっと、超えてやりてえ目標が変わらずオラの前を歩いているからな」

悟空は穏やかに言いながら、しかし炎のような闘志を宿した瞳をリゼットへと向けた。

リゼットはそれに微笑み、一步前へと歩く。

「なら私は、頑張って悟空君の前を歩き続けなければなりませんね。」

貴方のモチベーションを保つ為にも」

「そろそろ抜かせてくれてもいいんじゃないか？ 30年近く経つんだぜ」

「そう簡単には抜かせませんよ」

実の所、悟空は既に一度リゼットを追い抜いている。

例えば魔人ブウとの戦いの時は超サイヤ人3となった悟空の方がリゼットよりも勝っていた。

しかしそれも、すぐにリゼットが潜在能力解放という新形態を獲得した事で逆転され、そのまま抜く事が出来ずに今日という日を迎えている。

故に悟空の中ではリゼットは未だ抜く事が出来ない師であり、目標のままだ。

そしてその差は……恐らく広がり続けている。

サイヤ人はその成長性において右に出る者がいないが、やはり肉体の老化は存在するのだ。

地球人に比べれば若い時期はずっと長いが、それでも永遠ではない。

悟空の年齢は既に40を超え、最盛期を過ぎてしまっている。

ならば成長速度が遅くなってしまうのは必然であり、しかしリゼットにそれはない。彼女は死ぬまで成長期のままだ。

サイヤ人と地球人ベースの神という基本スペックの差はあれど、徐々に衰えていく悟空と成長速度が増し続けるリゼット。この差は決して小さくない。

だが、だからこそ追いかける甲斐があると悟空は思っていた。

その後、パーティーは何の問題もなく終わり、ビルスは上機嫌のまま帰っていった。

その際に地球の食べ物を大量に持ち帰っていたが……彼がシャンパのような体型になるのは、そう遠くない未来なのかもしれない。



パーティーから数日後。

リゼットは神殿の自室で目を閉じて瞑想に没頭していた。

つい先日、シャンパとの戦いの際の無理な気の行使が原因で一時的に気が全く制御出来なくなってしまった事を反省してここ数日は緩やかな修行に切り替えているのだ。

前回の失敗はバーストリミットとゼノバースを併用した事による無茶にある。ゼノバースは悟空達で言うところの超サイヤ人ブルーに相当する。

そこに界王拳と同質の技であるバーストリミットを合わせた結果、リゼットは『遅発性乱気症』という気が制御出来なくなる症状に陥ってしまったのだ。

しかしここで懲りないのがリゼットという女である。

彼女は今後この技を使わないという方向に思考を傾けず、いかに使いこなすかを考えた。

また、ゼノバースとバーストリミットの併用は負担が大きいが潜在能力解放ならばどうだろう？

これは超サイヤ人への変身に近いが、超サイヤ人とは違う。

極めて自然体のまま強さを増す技であり、超サイヤ人のように変身し続ける事で体力を消費するという事もない。

だからリゼットは考えたのだ。これを常に持続して身体に取り込む事が出来れば……つまりは素の強さにしてしまえたならば、バーストリミットとの併用ではなくなる。

何とも無茶な理屈ではあるが、試してみなければ始まらない。

仮に駄目だったとしても潜在能力解放状態に慣れる事は出来るのだから、決して無駄にはならないはずだ。

そうして潜在能力解放を持続したまま瞑想していたリゼットだが、遠い何処かで巨大な気が衝突しているのを感じて目を開いた。

この気は……自分もよく知る者達の気だ。

悟空とベジータが何故か超サイヤ人ブルーに変身して地球ではない何処かの惑星で戦っている。

再び目を閉じて意識を遠くへ飛ばし、遠視する。

そして見た光景は本気で戦う悟空と、何故か紫色になったベジータ。

その戦いを離れて見ているのはおしゃぶりをくわえたベジータだ。

……………意味が分からない。

何故ベジータが二人いる？　そして何故片方からは殆ど気が感じられず、おしゃぶりをくわえているのだ。

色合的に多分おしゃぶりの方が本物なのだろうが、突っ込み所満載すぎて理解が追いつかない。

更に離れた位置ではトランクスと悟天が紫色の液体のような何かに追われており、大分危ない状況のようだ。

「……放置するわけにもいきません、か」

毎度毎度よくトラブルに襲われるものだ。

そう思いながらリゼットはヘブンスゲートを発動し、一瞬にして地球から姿を消して数万光年は離れているだろう惑星ポトフへと転移した。

トランクス達と液体の間を阻むように立ち、念動力で液体の動きを止める。

そうしてから突然の登場に驚いているトランクス達へと振り返った。

「危ない所でしたね、二人共」

「あ……か……」

「ん？」

「神様キターーーー！」

トランクスの歓声に、今度はリゼットが驚かされた。

追い詰められていたのは分かるが、そこまで派手に喜ぶような事なのだろうか？

恐らくトランクスと悟天ならば空を飛べば自力で逃げ切れただろうし、ぶっちゃけ間に合わず犠牲になるのは何故か一緒にいるジャコくらいだったはずだ。

そんな事を考えるリゼットの手をトランクスが強く握り、懇願するように見上げる。

「神様、お願いだよ！ パパを助けて！」

「ええと……どういふ状況なんですか、これ？　何かベジータが二人に増えているようなのですが」

「違うよ、紫色の方は偽物！　パパの力を吸い取って、それで早くやつけないとパパが死んじゃうんだ！」

トランクスの説明は稚拙なものであったが、リゼットは既に得ている情報と合わせて答えを自分で導き出す。

つまりはあれだ。この紫のスライムは相手の力を吸い取って化ける力があり、更に吸い取られた相手はしばらくすれば消えてしまうと。察するにそんな所だろう。その場の全員の心を読み、早急に答え合わせを済ませたりリゼットは一人頷く。

この惑星ポトフにはコメソンという代物が封印されていて、それが他の惑星に『超人水』として伝わっていたのが今回の騒動の原因らしい。

ソテー人のグリール率いる宇宙犯罪者達がそれを求めてこの星に押し入り、更に宅配の為に訪れたモナカと、彼の宇宙船に勝手に乗り込んだトランクスと悟天を巻き込んでの戦いになってしまったらしい。

それだけでは終わらず、トランクス達を助けに来たベジータが迂闊過ぎる事にコ

メソンに不覚を取り、力を奪われてしまったのだという。

そこに更に悟空がやってきて、今は悟空と複製ベジータが戦っているが決着は着かず。

トランクス達はベジータを助けるべくコメソンの本体を探し……しかし倒す方法が見付からず、逃げていたようだ。

（ああ、またベジータが事態を悪化させたんですか）

ベジータはもう昔のような問題児でも慢心王子でもない。

だが事態を悪化させてしまうのは最早彼の運命のようなものなのだろう。

本来ならばそこまで脅威ではなかったはずのコメソンが、彼を取り込んだせいで今や神クラスの強敵だ。

とはいえ、本体がここにいてリゼットが捕まえている以上事件は解決したも同然だ。

「神様、あれ早くやっつけてよ！ 早く！」

「言われずとも」

事態の把握は終わった。ならば後は終わらせるだけだ。

リゼットは念力を強め、コメソンの中にあつた核を圧壊させた。

それと同時にコメソンが溶け、更に悟空と戦つていた複製ベジータもドロドロに溶け始める。

そこに容赦なく亜空間転移気功波！

ゲートを通過させた白い気の奔流が横から複製ベジータを奇襲し、問答無用に消滅させた。

その余りに突然の出来事に悟空とベジータが呆氣に取られるが、すぐに犯人を把握したのだろう。

というより、こんな事が出来る人物など彼等の知る限り一人しかない。

「神様！ 来てたんか！」

「今来たところです」

悟空の後ろに音もなく転移してきたリゼットに悟空が驚き、ベジータが苛立ったように顔を歪める。

複製とはいえ自分は自分。それが奇襲でいきなり消されたとあつては、まるで自分が一蹴されたようで気に食わないのだろう。

「おい神！ 貴様不意打ちとは卑怯だぞ！」

正々堂々勝負しやがれ！」

「……貴方は誰の味方なんですか……」

憤るベジータに呆れながらもリゼットは物質創造神術で壺を創り、魔封波の要領で残ったコメソンを閉じ込めた。

核は砕いたがこれは危険な代物だ。使い方次第では神の域に至った悟空やベジータ、自分やビルスすらも打倒しかねない。

故に嚴重に封印を施し、亜空間の奥底へと閉じ込めてしまった。

この星に残すという選択肢はない。この星には封印を守る戦力が余りに乏しく、また同じように超人水を狙う輩が来たら防ぎようがないからだ。

「そこのご老人。すみませんがコメソンは私の方で預からせて頂きます。

少なくとも、その方がこの星に置いておくより安全な事は保証します」

「も、勿論です。貴女ならば信頼出来る。白の女神よ、貴女にコメソンを託しますぞ」

リゼット自身は認識していないが、宇宙におけるリゼットの知名度は高い。

実はさっきからずっと我慢し続けていたのだ。

第百三話 黒い孫悟空

——エイジ796。

荒廃した町の上空。

そこで三つの影が激しい戦闘を繰り広げていた。

戦況は2対1。しかし戦闘は1が2を圧倒するというものであった。

銀髪^{トランクス}の青年と悟空^バそっくりの顔立ち^ダの男が果敢に攻撃を繰り返す。

それを受けて立つのもまた、悟空と瓜二つの顔立ち^クの男であった。

トランクスは超サイヤ人3へ変身し、バーダックも外見こそ変わらぬが潜在能力を極限まで解放した絶大な戦闘力を身に付けた状態へと変わる。

だがそれでも圧倒されているのは、相手側がそれを上回る変身をしているからだろう。

超サイヤ人口ゼ——神の気を纏ったサイヤ人の肉体に悪しき神が憑依する事で為し得る新たな変身。

それを前にトランクスとバーダックは苦戦を強いられていた。

「時空犯罪者ブラック！ 今日こそ貴様を倒す！」

「フン、ほごくな。クロノアの狗風情が」

トランクスが雷光を纏った拳を繰り出し、ブラックと呼ばれた男が軽々と受け止める。

その姿は超サイヤ人の悟空に酷似しているが、色合いが違う。

通常のコインでもなければゴッドの赤でもなく、ブルーの青でもない。

ロゼの名が示す通りの薄い薔薇色であり、纏うオーラは悟空とは似ても似つかぬドス黒いものだ。

彼の正体はザマスという界王神見習いが超ドラゴンボールを用いて孫悟空の身体を奪い取ったものである。

勿論リゼット達のいる時間軸ではなく、全く別の……リゼットが存在しない時間軸での事だ。

そして本来は界王神しか持たぬ筈の時の指輪を持ち、時を越えて罪を重ねている。その罪たるや、まさに宇宙始まって以来類を見ないレベルのものだ。

彼はあろう事か、この時空のあらゆる宇宙——この第7宇宙だけではなく、第

1 から第12までの全ての宇宙の界王神を殺し、間接的に破壊神すらをも殺めていくというのだ。

これを未曾有の危機と判断した時の界王神クロノアは早急にタイムパトローラーであるトランクスとバーダックを派遣し、事に当たらせた。

そしてこれはトランクスにとっては決して無関係の時空での話ではない。

何故ならブラックが目をつけたのは……他でもない、トランクスが生きる時間軸だったからだ。

「悟飯さんとリゼットさんが命を捨ててまで守った平和なんだ……！」

それをお前などに壊されてなるものかァ！」

トランクスの拳がブラックの頬を打ち、怒涛の連撃を叩き込む。

一撃ごとに大気が揺れ、地球全体が地震のように震えた。

しかし打たれながらもブラックは晒い、甘んじてトランクスの攻撃を受ける。

ビルの残骸に叩き付けられ、止めとばかりに飛び込んできたトランクスの腕を

軽々と掴み取った。

「それを言う資格が人間にあるのか？」
貴様

知っているぞトランクス……かつてこの世界は、神が命を捨ててまで守った平和を愚かな人間が台無しにした事を」

「それは……！」

「人は滅ぶべきなのだ。神の慈悲は既に尽きた。裁きを受け入れよ、人間」

「そうかい」

「っ！」

余裕の笑みを見せるブラックを、上空からバーダックの拳が急襲した。

一瞬で地面に叩き込まれ、その上にバーダックが立つ。

そして拳を握り、ブラックの顔面に機関銃の如き速度で拳を放った。

一撃打つごとに大地が砕け、地球の形状が変わる。

だがブラックも無抵抗ではない。殴られながらも蹴りを繰り出し、バーダックを跳ね飛ばした。

蹴り上げられたバーダックは空中で回転して着地し、すぐに駆け出す。

それに合わせてトランクスも突貫し、二人で同時に猛攻を仕掛けた。

しかしブラックはこれすらも余裕を残して捌き、いなす。

「私を時空犯罪者などと、よくぞ呼べたものだ。

ならば貴様の行った事は何だ？ タイムマシンなどという驕りこそが最も大きな罪ではないか。

私とドミグラと、そして貴様。そこに一体どんな違いがある？」

「黙れ！」

「私の掲げる理想の世界！ 人間ゼロ計画！ その邪魔はさせんぞ！

貴様にも、破壊神にも、そしてクロノアにも！」

ブラックの蹴りがトランクスを弾き、拳がバーダックを吹き飛ばした。

二人はすぐに体勢を立て直すも、既にブラックの姿はない。

見失った一瞬——その僅かな間にブラックは二人の背後へと回り、後頭部へ拳を叩き込んだ。

前に倒れ込みながら即座に地面に手をつき、アクロバティックな動きで倒立回転しながらバーダックとトランクスは距離を取る。

「テメエの気取った理想なんぞ知った事かよ。

俺が気に入らねえのはたった一つだ……その身体を、誰の許しを得て使ってやが

る！

そりゃあ、俺のクソガキの身体だッ！」

バーダックが猛り、クラウチングスタートからのダッシュを行った。

迎撃にブラックが拳を出す、まるで瞬間移動のようにバーダックが消え、背後へと現れて首へと腕を回す。

そのままスリーパーホールドへと移行し、ブラックの首を思い切り圧迫した。

バーダックの腕が一回り太くなり、血管が浮き出る。

ブラックも負けじとバーダックの腕を掴み、徐々に緩み始めた。

だがその隙を逃さずにトランクスが接近し、動けないブラックの腹へ拳の連打を叩き込む。

「だだだだだだだっ！」

「ぐ、お!? がはっ、ぐ、ごぼっ!？」

「だだだだだだだだだだだだだだだだああああっ！」

「っ! か……げはっ! ごっ!」

流石に無抵抗の状態でのこの連撃は効く。

しかも防ごうにも、トランクスを気にしては今度はバーダックのホールドが強まるのだ。

このまま押し切れるか?!

そう僅かに思った意識の緩みを誰が責められよう。

いや、仮に緩まなかったとして、果たしてそれを回避する事が出来たかどうか……。突如上空から飛来した気の刃がトランクスの背中を貫き、口から鮮血が溢れた。その一瞬でブラックはトランクスを蹴り飛ばし、更にバーダックの腕を掴んで背負い投げする。

バーダックは倒れ込みながらも地面を転がり、素早くトランクスを回収して距離を開けた。

(ちっ……死んじゃあいねえが今の一撃で気絶したか……!)

トランクスの安否を確認しながら、油断なく上空を睥む。

そこから降りてきたのはモヒカン頭の緑色の男だ。

本来ならば宇宙の秩序を保つはずの存在……界王神ザマス。

それこそが彼等の敵であり、そして今トランクスを攻撃した男であった。

「お出ましかい、不死身野郎」

「言葉に気を付けろ、下等で野蛮なサイヤ人よ」

「生憎とお上品な生まれじゃなくてね」

バーダックは相手と自分達の戦力差を冷静に分析し、そして勝ち目がない事を悟った。

今出て来たザマスという男は、ハッキリ言って強さそのものは大した相手ではない。

強い弱いと言えば間違いなく強いのだが、それでもブラックと比べれば霞んでしまう程度の男だ。

だがこの男の厄介な所は『殺せない』事にある。

心臓を貫こうが、首を切断しようが、すぐに再生してしまう不死身の身体を持っているのだ。

ブラックに比べれば幾分劣るとはいえ、それでも手強い事に違いはない相手がいくら攻撃しても死なないのでは勝敗が見えている。

未来予知で脳裏に浮かぶ映像も最悪だ。自分とトランクスの死に様だけが視えて

しよう。

このまま戦闘を続行した末の未来は既に確定した。これ以上はただの死に戦だ。追い打ちの気弾を避けながらバーダックは舌打ちをし、時空間移動で素早くその時代からの離脱を図った。

★

——エイジ779。

「では、いくぞ」

「いつでもどうぞ」

神殿の訓練場。

そこでリゼットとセルが対峙し、気を高めていた。

リゼットから仕掛ける事はしない。まだセルの準備が整っていないからだ。

セルはまず四身の拳で二人に分身し、一定の距離を保った。

それから二人のセルが両手を外側へと向け、チヨコチヨコと格好悪い移動を始める。

今、彼が試そうとしているのはフュージョンだ。

二人に分身した自らとフュージョンする事が出来れば、従来を遥かに上回る超パワーを得る事が可能となる。

「フュー……ジョン！」

「ぶるあ！」

セルが輝きに包まれ、一人の超戦士へと変わった。

互いに自分であるが故に意識のズレもなく、セルはセルのままかつてない超パワーを得る事に成功していた。

今の彼から感じられる気はリゼットすら遥かに凌駕している。

そして、一瞬で融合は解けた。

「……………」

「どうやら無理のようですね」

リゼットが予想していたように眩き、セルが目に見えて落ち込んだ。

まあこれは予想出来た事だ。

そもそもフュージョンは別人同士が融合する為の技であり、同一人物同士の融合など想定されていない。

いや、あるいは同一人物であっても未来のセルと過去のセルなどであれば、可能なのかもしれない。

だが四身の拳で増やした同一個体では無理のようだ。

残念ながらこの強化は出来ない、という結論が出てしまった。

「やはり地道に修行あるのみか」

セルはそう呟き、リゼットを見る。

彼女との差は……広がる一方だ。

人々から集う念を力へと変える彼女は注がれる念が多ければ多い程強くなる。

そして一体どういうわけなのか、あの対抗試合が終わって以降、更にそれが強まっているのだ。

リゼット本人にも原因はさっぱり分かっていなかったが、ウイスに相談してみた事で答えは返ってきた。

何でもあの試合を見ていた第6宇宙の界王神が他の神々に口頭でリゼットの戦いを伝えたいらしい。

星の神であっても破壊神に勝つ事が出来る。

リゼットはあの場でそれを証明してしまい、結果、神々の中にはリゼットのファンになる者が出現して信仰の念を送ってしまったという。

つまりは神から直接注がれる神の念だ。その効果は人間の信仰数億人分に匹敵する。

更に性質の悪い事に一度注いでしまった念は半永久的に彼女を強くしたままにしておしてしまう。

別に信仰が弱まれば彼女が弱まるとか、そういう事はない。

一度注いでしまえば、そのままなのだ。

例えるならば、一つのバケツがあるとしてそこに水を注ぐとしよう。

途中で注がれる水の量が減ったとしても、既に入れてしまった水の量が減る事はない。

実際、同じ理屈で強さを得たハッチヒャックなどはサイヤ人に憎悪を抱く者達が死んであの世に行き、生まれ変わりまでしているのにあの強さであった。

即ちリゼットの最大戦闘力は既にあの対抗試合の時よりも更に上昇しており……これからも飛躍し続けるという事だ。

もしかすると、本当にそのうち素の実力で破壊神を追い越してしまうかもしれない。
い。

……しかし、勿論置いて行かれてばかりではない。

リゼットはまだ気付いていないようだが、あのフリーザとの戦いはセルに新たな道を拓いてくれた。

戦いの最後にセルはフリーザの腕から生体エキスを吸い取った……つまりフリーザの細胞を得る事に成功したのだ。

ならば出来るかもしれない。今はまだ不可能だが、いつかはフリーザのあの変身と同じ事が……。

「……っ！ この気は……」

セルが思案に耽っていると、リゼットが何かを感知したように顔をあげた。
遅れてセルも気を感じ取り、軽い驚きを感じる。

感じられる気はトランクスのものだ。それも自分達が知る小さい方のトランクスではなく、未来の方の青年トランクスの気が感じられる。

近くにあるのはバーダックの気だろうか。

どうやら悟空達の近くに現れたらしいが、酷く弱っていた。

「何かあったようですね。行きますよセル」

「ああ」

リゼットとセルは瞬間移動を行い、カプセルコーポレーション前へと転移した。すると悟空達もこちらへと顔を向け、ブルマが真っ先に駆け寄って来る。

子供の方のトランクスは自分をそのまま成長させたような青年の登場に思考が追いつかないらしく、あわあわしている。

何故かビルスとウイスまでおり、魚肉ソーセージを貪っていた。

「神様！ 丁度呼びに行こうと思ったのよ！」

トランクスがいきなりボロボロになって出て来て！ 早く治してあげて！」

「わかっています」

リゼットはカプセルコーポレーションの庭に作られた小さな小屋へと近付き、その中で寝かされているトランクスへと掌を翳した。

リゼットの治癒術はデンドやキビトのそれに比べれば幾分か性能負けするものの、死んでさえいなければ大体の傷は癒す事が出来る。

つまりリゼットさえいれば余程の怪我でない限り仙豆要らずというわけだ。

もっとも肝心のリゼット自身の気を回復させる時には流石に自分で自分の気を回復させる事は出来ないので仙豆が完全に不要となったわけでもない。

リゼットの治療を受けて目を覚ましたトランクスは咄嗟に跳び起きて剣に手をかけるが、自分を見るブルマ達の姿を前に硬直してしまった。

「こ、ここは……ブラックはどこに？」

「落ち着けトランクス。ここはあの時代じゃねえ」

「バーダックさん！ 何故時の巣ではなくこの時代に!？」

「ああ、いや……逃げる時にしくじっちゃってな。ブラックの野郎の気弾が時空転移装置に掠ったらしく、この時間軸に不時着しちゃった……」

そう言いながらバーダックは自分の腕を見せる。

そこには機械で出来た腕輪のようなものがあり、恐らくはこれで時間を移動しているのだろう。

その二人の会話を他の者は理解出来ないだろうが、リゼットとセル、悟空の三人だけは理解する事が出来た。

何故ならこの三人はかつて時の改変を目論んだドミグラと対峙した経験を持ち、その記憶も失っていない。

詳しい状況は分からないが、どうもトランクスは『ブラック』なる人物と交戦するも気絶して撤退し、そして時の巢へ戻るはずが事故でこの時間軸へ来てしまった……という所だろう。

厄介事の気配がする。むしろ厄介事の気配しかない。

本当に悟空が地球に来てからというもののトランブルに不足しないな、と思いつながらリゼットはとりあえずトランクスに説明を求める事にした。

リゼット「ゴクウブラック……」

セル「ゴクウブラックか」

ビルス「名前からして黒い悟空という事だろう」

悟空「黒いオラかあ」

ベジータ「ゴクウブラック……」

ターレス「おい、何で俺を見るんだ。俺じゃねえよ」

【時空転移装置】

捏造。そんなものは本編にはない。

ゼノバースではタイムパトローラーは当たり前のように過去や未来に飛んでいるが、具体的にどうやって移動しているのかは不明。

トワのように魔術ではない事だけは確か。

時の界王神が移動させていると解釈してもいいが、彼女がいない時でも移動しているのも多分違う。

なので時を移動する便利な道具を持っているという事にした。

【未来トランクスの世界のセル】

ナメック星人を探して宇宙を旅している。

【戦闘力】

・バーダック

基本戦闘力…9億

アルティメット化…4500億

・トランクス（未来）

基本戦闘力…9億8000万

超サイヤ人3…3920億

・ゴクウブラック

通常戦闘力…10億

超サイヤ人口ゼ…2兆

※アニメだと何故かノーマルのまま超2悟空と互角だったが、それだと意味が分からなくなるのでこの辺は漫画版に合わせてノーマルで超2と戦うのは無理としておく。

ターレスではない。

・ザマス

戦闘力…500億

※悟空ならともかく、普通の超サイヤ人2である未来トランクスにすら不死身でなければ負けていたのでこの程度と判断。ぶっちゃけ不死身でさえなければ大した相手ではない。

漫画版でも悟空に「お前は大した事ねえ」と言われていた。アニメ版でブルーと戦えていたのはいつもの演出として割り切る。

もしかしたら神なので神の氣に耐性があるのかもしれない。

第四百四話 襲来、ゴクウブラック

「……と、いうわけです」

一体何故トランクスがこの時代に来てしまったのか。

その説明を聞き終えた悟空達の反応は様々であった。

よく理解出来ずに頭を捻る悟天と少年トランクスのお子様組。

タイムパトローラーというものの存在に驚くブルマやベジータ。

気を感じして駆け付けて来たピッコロやターレス、クリリンも交え、自分達の知

らないところでトランクスが戦っていた事にそれぞれが複雑な思いを感じていた。

悟空、リゼット、セルの三人は既に状況を把握しているが改めて聞くとなかなか

凄い仕事をしていると思わされる。

「それにしても……アンタがタイムパトローラーねえ」

「悪いかよ」

「いいや、意外だったただけだ」

ターレスがバーダックをからかうように言い、バーダックは少しばかりムスツと

して答える。

しかしそんな軽口を叩きながらも、二人はどこか嬉しそうだ。

「そういやトランクスから聞いたぜ。テメェ、俺をぶっ飛ばしてえんだって？」

「おお、そういやそんな事を言ったな。今からでもやるか？」

「面白い。どれだけ成長したか試してやるよ」

話している内容は剣呑で、纏う雰囲気もピリピリしている。

その空気に悟天と少年トランクスが怯えたようにそれぞれの親の後ろへ隠れてしまった。

しかしこんな会話内容だが、決してバーダックとターレスの仲が悪いわけではない。

彼等にとってはこれが普通なのだ。

そんな二人の間へとリゼットが割り込み、二人を押しつけた。

「はい、そこまでです。話がややこしくなるので少し静かにして下さい」

それにしてもややこしい。悟空、バーダック、ターレスが並ぶと顔が同じせいで誰が誰だか見分けがつかない。

しかも声まで同じなのだから性質が悪すぎる。

極め付けは敵まで悟空フェイスらしいという事だ。

乱戦になると最悪、間違えて味方に攻撃を当ててしまいそうだとリゼットは不安を感じた。

「だがいいのか？ タイムパトロールとやらの事を俺達に話して」

ピッコロの疑問は至極当然のものだろう。

タイムパトローラーは歴史の修正が仕事であり、歴史への過干渉は禁じられている。

ならばこうして自分達の存在を話すのはどう考えてもアウトなはずだ。

その問いにトランクスは予想していたように答えた。

「ええ、普通はそうです。

しかし幸か不幸か、この時間軸は既にトワとミラの介入で改変されてしまった後の時間軸なんです。

つまり本来あるべき世界線からは外れています。

貴方達は当事者なんです。だから普通の歴史よりは俺も介入し易い」

トランクスはそう言い、リゼットを見た。

それを見て彼女も察する。ああ、やはり起点は自分かと。

「なるほど。本来との違いは私の存在の有無ですね？」

「はい。本来の……トワやミラが介入しない歴史にリゼットさんは存在していません。」

いえ、正確に言うとは存在はしていたのですが普通の村娘として一生を終えています」

起点は……恐らくはあの始まりの瞬間。

リゼットが自分を自分として認識した、あの前世の記憶を取り戻した時だろう。

あの時リゼットの前にミラが現れ、そしてそれをトランクスが撃退した。

それを切っ掛けとしてリゼットは本来あるはずのない記憶を呼び起こしてしまい、そして本来の道筋を外れて地球の神にまで登り詰めたのだ。

そして、それを修正する事は出来ない。

何故ならトワとミラが過去に來た理由は、未来でリゼットに叩きのめされて、その存在を恐れたからだ。

つまり、ループしてしまっているのである。

リゼットがいたからトワとミラは過去に来た。

だがトワとミラが過去に来たから、リゼットは神になってしまった。

卵が先か、鶏が先か——リゼットという存在自体が、時の矛盾の上に成り立っている。

これを下手に修正してしまえば、何が起こるか分からない。

最悪、歴史そのものが消えてしまう可能性だってあるのだ。

「神様が神様じゃねえのか。じゃあ誰が地球の神様やってんだ？ やっぱ先代様か？」

「いえ、先代様は本来の歴史ではピッコロさんと融合しています。

新たな地球の神になったのは……ナメック星人のデンデさんです」

悟空にとって地球の神といえばリゼットを指す。

いや、悟空のみならずこの場の全員にそれは共通していた。

地球の中でも最大戦力を誇り、押し寄せる外敵を次々と駆逐するリゼット以上の神がまず思い付かない。

次から次へと強敵が現れるこの地球という惑星において、リゼットという守護神はまさに適任と呼んでいい。

その彼女を外して地球が無事に済む未来がどうにも思い描けないのだ。

……事実、本来の歴史では地球は一度消滅してしまっているので彼等の懸念は実に正しかった。

「いいっ？ デンデって……あのデンデか？ あいつが神様!？」

デンデはナメック星に行ったメンバーの殆どが知っている名だ。

悟空は驚きを露にするが、本来の歴史でデンデを地球に連れて来たのは他でもない彼である。

しかし悟空達はデンデが神という事にあまりしっくり感じないらしい。

少なくとも、この戦闘だらけの地球で神をやるには余りに実力不足に思えたのだ。

「悟空君。デンデ君は私などよりも余程、神に向いていますよ。」

私は確かに強さという点で見れば歴代でもトップであると自負していますが、所詮は戦いに特化した神です。ドラゴンボールを創れるわけでもなく、性能を向上させる事も出来ません」

そこにリゼットがフォローを入れるが、トランクスとバーダックが同時にぎょつとした顔になった。

恐らくはドラゴンボールに関する話を出した事……特に『性能を向上』の部分に反応したのだろう。

トランクスは恐る恐るといった様子でリゼットへと質問する。

「お、驚いた……リゼットさん。もしかして貴女は本来の歴史をご存知なのですか？」

「ええ、少しだけですがね。……不気味ですか？」

「い、いえ……貴女は本当に底が知れない。頼もしいですよ、全く」

リゼットの未来知識に関しては彼女自身しかその出所を把握していない。

時の界王神などもリゼットが未来を読んでいる事を薄々感じ取ってはいるが、その彼女すら『恐らくミラやトワの記憶を読んだのだろう』くらいにしか思っていないのだ。

リゼット自身もこの知識の出所を語る気などなく、主に自分の『私は色々知っているぞ』という演技に用いていた。

「ザマスねえ……おいウイス、知ってるか？」

「確か第10宇宙の界王神見習いですね。天才的な格闘の実力を持つらしいですよ」
「ふうん。じゃあそいつ破壊しておこうか」

トランクスから未来の惨状を聞いたビルスはザマスの情報をウイスから聞き出し、早々に破壊してしまう事を決意した。

別に他がどうなろうと知った事ではないのだが界王神を殺されるのだけは困る。
あんな弱虫で物知らずでオマケに未熟な東の界王神の事など好きでも何でもない。

だが界王神と破壊神は運命共同。界王神が死ぬと破壊神も死んでしまう。

だから破壊神は界王神にだけは手を出さないのだ。

唯一、対となる存在がいない界王神として時の界王神クロノアがいるが、実は彼女も知られていないだけで時の破壊神というのが何処かにいるのかもしれない。

「なあトランクス、オラといっちゃ戦ってみねえか？」

そのブラックっちゅう奴の基準も知りてえしな」

「俺が悟空さんですか？」

「ああ。駄目か？」

「いえ、いいですよ。俺も今の貴方の实力を知りたい」

ここですぐに『とりあえず戦おう』となるのは、やはりサイヤ人だからだろう。トランクスもそれに同意し、二人は庭へと出る。

ブルマはそれを見てすぐにバリアを展開し、周囲に被害が出ないように気を利かせた。

今の二人が戦えば、その余波だけで近くの町が崩壊しかねない。

それを考えれば素晴らしいアシストであるのだが……恐るべきはそんな二人の力を受け止める事が出来るバリアを開発したブルマの頭脳だろう。

「では行きますよ、悟空さん！」

トランクスが気合を入れ、超サイヤ人2へと変身した。

身体をスパークが覆い、髪が逆立つ。

その気の総量は今の悟空にも匹敵するほどだ。

悟空もそれに応じて超サイヤ人2となり、二人の放つ気の波動がバリアを軋ませる。

「いきなり超サイヤ人2か。すげえぞトランクス、あの時の悟飯以上の気だ」

「いえ、これでもブラックと戦うにはまだ不足しています」

トランクスと悟空が正面から衝突し、しばしの均衡の後にトランクスが強引に悟空を弾き飛ばす。

それからトランクスが距離を詰めて目にも止まらぬ連撃を放つが、悟空はこれを冷静に防いでいた。

跳躍しながらの右足の蹴りを避け、続く左足の蹴りが悟空に迫る。

胴体を狙うと見せかけて軌道を変え、頭へと蹴りが迫るも、悟空はこれを的確にブロック。

防がれた反動で宙に浮いたトランクスが回転して今度は着地前に踵落とし。

しかし悟空は既に狙いを見切っていたのか、トランクスの足を掴んで放り投げた。

「ぐっ！」

投げられたトランクスが地面に手を突き、そのまま腕の力だけで回転。

回りながら空へ飛び、上下逆さまのまま気弾を連射した。

悟空は静かな笑みを浮かべたまま最低限の動きで気弾を避け、トランクスの背後

へ高速移動する。

そのまま回し蹴りを放ち、トランクスに防御させてからガラ空きの頭部を肘で殴り飛ばした。

基礎戦闘力はほぼ互角だ。決してトランクスは悟空に劣っていない。

むしろトランクスには若さという武器があり、フィジカル面では僅かではあるが悟空に勝っていた。

しかし年齢を重ねるのは悪い事ばかりではない。積み重ねた経験と時間は悟空に技術と老猾さを与えてくれた。

一見するとただの力押しにも見える悟空の戦いだが、それは違う。

確かな読みと技に裏打ちされたそれはトランクスの打点を的確にずらし、実力以上の強さを悟空に与えてくれる。

ただの気弾にしてもあえて避けさせる事で次の行動を予測し、トランクスが逃げてきた所を狙い澄まして蹴りを叩き込んでいた。

トランクスもわざと隙を作って誘いを入れたりはしているのだが、悟空はそれすらも見切って別の個所を攻撃する。

力と速度、若さを武器にトランクスが果敢に攻め、悟空が技術と経験を盾に完璧に受け流す。

結果として戦闘力が互角であるにもかかわらず、戦いは終始悟空が圧倒していた。しかしトランクスも数多の戦いを潜り抜けてきた歴戦の戦士だ。

悟空にあしらわれながらも食らいつき、少しずつ彼の動きに追いついている。

両者の拳が交差し、互いの強さを認めて二人の顔に笑みが浮かんだ。

「す、すげえ、未来の俺……」

「まだだぜ、坊主。あいつの本気はここからだ」

少年トランクスが自分とは比較にもならぬ強さに驚くが、そこにバーダックが補足を入れた。

そう、トランクスはまだ本気を出していない。

本気はこれから出すのだ。

「じゃあこれはどうだ？」

悟空が不敵に笑い、超サイヤ人3へと変身した。

しかしそれを見てトランクスは何一つとして驚く事はない。

当たり前だ、何故なら彼はタイムパトローラー。

超サイヤ人3へと変身した悟空の姿など今までに何度も見ている。

悟空の変身に応じるようにトランクスもまた同様の変身を遂げ、全身を雷光が覆った。

「おっでれえた。お前も出来るんか」

「俺もあの時のままではありませんよ、悟空さん」

超サイヤ人3へと変化して悟空が上回ったのも束の間、トランクスが変身した事で再び戦闘力差は互角に戻った。

ならばここから始まるのは先程の焼き直しであり、二人の姿が同時に消えて高速の拳撃戦へと移行する。

その動きは最早悟天や少年トランクスでは目で追う事すら出来ず、大気が幾度となく爆ぜるのを呆然と見ているだけだ。

トランクスは悟空の頬を抉り、だが悟空がそれに合わせて回転。

ダメージを受け流しつゝ遠心力を乗せて回り蹴りを放った。

それをブロックしようと肘を上げるも、インパクトの瞬間に悟空が消えて背後へ

と回り込む。

慌てて振り返るも一手遅い。悟空の蹴りが今度こそトランクスを捉え、地面へと叩き込んだ。

だが落下の瞬間に気を爆発させて急停止をかけ、そこから更に急浮上して悟空へと拳を放つ。

腕を十字にしてブロックするも、トランクスの攻撃は重く、悟空のガードが弾かれてしまった。

そこに間髪を容れず零距离バーニングアタック！

悟空の目と鼻の先で圧縮した気弾を放ち——悟空が神掛かった速度でかめはめ波を発射して相殺した。

爆発がバリア内で荒れ狂い、遂に内側からの衝撃に耐えきれずバリアが崩壊してしまう。

だがそこから出て来た二人は無傷だ。

二人は同時に着地すると互いを認めて微笑み、変身を解除した。

「本当におでれえたぞ！ 凄え強くなったなトランクス！」

「悟空さんこそ流石です。一瞬でも気を抜けばこちらがやられてしまいそうだ」
悟空にはまだゴッドや、その上のブルーという変身が残っている。

しかしそれを抜きにして考えればトランクスの実力はまさに見事というべきだろう。

その戦闘力は、かつてリゼットが倒したジャネンバと戦ったとしても問題なく勝ててしまうレベルだ。

その逞しい成長にベジータがどこか嬉しそうに笑い、かつての戦友が今も弛まぬ成長を続けている事にピッコロとターレスも満更ではなさそうな顔だ。

「どうやらブラックっちゅう奴は油断出来ねえ相手のようだな」

「はい。ザマスは大した事がないのですがブラックの強さは驚異的です。

俺とバーダックさんの二人掛かりでも勝てません」

「……そりゃあ相当だな」

敵の厄介さを再認識し、悟空の目が険しくなった。

どうやら既に悟空の中ではブラックという相手と戦う事は決定事項らしい。

かつての戦友が苦しんでいるのに、それを無視出来る悟空ではない。

それにこれは全ての時間軸に関わる問題だ。

異なる時間軸だからどうこうではなく、ブラックとザマスは全ての時間の為に倒さねばならぬ相手なのだ。

「よっし、オラも未来に行くぞ。一緒にブラックっちゅう奴をぶっ倒そうぜ」

「俺も行くぞ。カカロットを倒すのは俺の役目だ」

悟空とベジータが真っ先に未来行きを宣言し、更にターレスとセル、ピッコロも何も言わないが乗り気である事をリゼットは感じ取った。

これは今回は自分の出番などないだろう。

ブラックという男の強さは超サイヤ人口ゼという変身形態を含んで考えれば恐らく悟空と同等かそれ以上。

しかし、そこにベジータを加えた二人が相手となればまず勝ち目はないだろう。そのような事を考えていると、突如として空が割れ、禍々しい気がこの世界に現れた。

「この気は……」

リゼットが上空へと視線を走らせ、全員もそれに続く。

そこにいたのは――悟空だった。

着ている服装こそ異なるが、確かにリゼット達が知る悟空の顔であり、だが悟空とは異なる悪辣さが滲み出ている。

どちらかといえば悟空というよりバーダックに近い目つきだ。

「見付けたぞ、トランクス」

彼――ゴクウブラックはそう言い、口の端を歪めた。

セル「ほう」

ピッコロ「あれがそうか」

リゼット「来ましたか」

ターレス「へえ」

悟空「オラそっくりだなー」

ベジータ「フン」

ブラック（……………）。

何だこの時空!?

どいつもこいつも戦闘力おかしくないか!?)

第百五話 不死身の末路

※今回リゼットはぶんすこモードに入ります。

「皆で囲んで倒しましょう」

ブラックを見て、リゼットが発した第一声がこれであつた。これにはブラックもぎよつとしている。

倒すべき敵が折角向こうから来てくれたのだから、この機を逃す手はない。

先手必勝、見敵必殺、サーチアンドデストロイ。

敵がどんな札を隠しているか分からないのだから、ならばその札を切る暇も与えずに叩きのめす。それが最善手で最速の手だ。

戦いはスポーツではない、戦争である。

そこに卑怯卑劣などなく、使えるものは全て使えばいい。

武器、暗器は勿論として爆薬だろうがアラミド繊維のワイヤーだろうが銃だろう

がミサイルだろうが、あるなら使う。それがリゼットの考えだ。

そして勿論数の暴力も例外ではなく、これで倒せるなら何を躊躇う必要があるのだろうか。

孫子曰く、『戦争は戦う前に勝敗が決まっている』。

戦いとは何も向かい合ってヨードンから始まるわけではない。それは試合だ。スポーツ
本当の戦いとは、始まる前にいかに勝てる状況を作れるかであり、そこから始まっている。

勝てる状況を作れなかったのならば、それは作れない方が悪いのだ。

つまりは、一人でノコノコと出てきてしまったブラックの方に問題がある。

よく戦隊ヒーローやウル○ラマンがたった一人の怪人や怪獣を一方的に取り囲んで容赦なく数に物を言わせてボコボコにし、『敵は一人なのにこっちは大勢でリンチしてズルい』と言われるが、リゼットはそうは思わない。

むしろ子供向けのヒーローなのに戦いの本質をよく分かっていると評価していた。

つまり囲んでリンチするのは正義のヒーローも行う立派な戦術である。

いいではないか、ウルトラリンチ。それで平和を守れて一人でも多くの日常を守れるならば率先して行うべきだ。

「いや、神様……そりゃあいくらなんでも……」

「そんなものはサイヤ人の戦いではない！」

しかしリゼットがいかに効率優先な思考でも、他はそうではない。

あのブローリーのように相手の方が強いならばチームプレイも止む無しと受け入れるだけの機転はあるが、彼ら……特に悟空は基本的には武術家ではなく武道家である。

相手の方が弱い、互角程度ならば皆で一斉にかかりたいとはあまり思わない。弱い者苛めをしたいわけではないのだ。

悟空が難色を示し、ベジータはハッキリとリゼットのやり方に不満を見せた。そもそも一人を相手に大勢でかかるのは、相手よりこちらが劣っていると認めているようなものである。

本当に相手の方が強いならばともかく、ブラックからは特にそういう印象も受けない。

結局、あれこれ話し合った末に未来から襲来したブラックとの戦闘を引き受けたのは悟空だった。ブラックはほっとしている。

リゼットの袋叩き戦法は残念ながら没だ。

しかしリゼットはあえて悟空の行動に異を挟まずに状況の推移を見守る事とした。

悟空の気持ちの問題もあるが、実際問題ブラックとやらの実力が未知数である以上、どんな切り札を隠し持っているか分からない。

ならばまずは悟空と戦わせて手札を晒させるのは悪くない選択肢に思えたのだ。それに大勢でかかれば瞬間移動で逃げられてしまう可能性もある。

悟空はまずブルーを温存しての超サイヤ人2で挑み、対するブラックも同じく超サイヤ人2へと変身。互角の格闘戦を繰り広げている。

経験と技術の差で若干悟空が有利だが、ブラックも負けてはいない。

それを見てリゼットは素直にブラックの実力を評価した。

今の悟空と互角とは、どうやら見た目だけではないらしい。

悟空はまだ本気を出していないが、基礎戦闘力はほぼ互角と見て間違いないだろう。

ベジータは本気を出さない悟空にイラついているが、実の所超サイヤ人2は様子見としては決して悪い選択ではない。

3は消耗が激しく、ブルーは神の気を消費し過ぎると弱体化を起こす。

3はもう、そういう変身として割り切るしかないが、ブルーは……恐らくあれは、まだ未完成の変身だ。だから現状ではゴッドとほとんど強さに差がない。

つまり今のブルーはゴッドより少しだけ強くて、消耗だけは桁外れという割に合わない変身なのだ。

つまり2こそが最もバランスに優れた変身であり、相手の出方を窺うのに最適であると言える。

とはいえ、それは悟空一人だけの時の話。

まだこちらにはベジータ、ターレス、ピッコロ、セル、そして自分が控えている。ならばいっそ悟空には全力で相手を追い詰めて貰いたいくらいだ。

リゼットはそう考え、悟空へと念話を発する事にした。

『悟空君。聞こえますか？』

『神様？ ああ、聞こえてる』

『とうに気付いているでしょうが、ブラックはまだ全然本気ではありません。

このまま小手調べを続けていても埒があかない……向こうがその気にならないらば、まずはこちらからギアを上げて相手の本気を誘うのも手です。

ブルーに変身して一気にブラックの全力を引き出して下さい』

『本気か……ブラックのロゼっちゅう変身を引っ張り出そうって事か』

『そうです』

今なら……戦いの場が現代である今ならば確実にブラックに勝てる。

こちらには現状考えられる最強メンバーがおり、やる気こそ感じられないが破壊神とその従者までもがいるのだ。まず負けはないと考えていい。

しかし気がかりなのは先程から時空の穴が閉じようとしている事であり、恐らくブラックはすぐにこの時代から居なくなってしまうだろう。

これは曲がりなりにも空間操作の力を持つリゼットだからこそ気付いた事であり、彼女以外には恐らくビルスとウイスしか気づいていない。

そうなる止めを刺す前に逃げられてしまう可能性が高く、ここでの決着は恐らく望めない。

ならばせめて、この時代にいる間に敵の手札を晒させてしまふべきだ。

今ならば向こうの全力がこちらの想定を上回っていたとしてもどうにか出来る。

『わかった！ オラもそろそろ身体あつまってきた頃だ！』

悟空はリゼットの判断に従い、超サイヤ人3とゴッドを飛ばしてブルーへと変身した。

幼年期からここまで、リゼットの判断が外れていた事は余りない。

たまにうっかりする事もあるが、それでも判断自体はいつも正解だった。

細かい作戦やら全体を見ての行動などを決めるのはリゼットだったし、悟空も自分はその向いていないという自覚がある。

少なくとも、彼女の判断ならば大丈夫だと思うだけの信頼がそこにあり、仮にそれで状況が悪化しても、取った行動は最善であったと思う事が出来る。

その悟空らしからぬ行動に全員の視線がリゼットへと向かった。

どうやら彼等も今のギアチェンジがリゼットの指示である事を察したようだ。

最初は全力を出さない悟空のやり方は周知の事実であり、それを咎めて軌道修正出来るのなドリゼットくらいしかない。そう全員が分かっているのだ。

「神の気を纏ったサイヤ人の超サイヤ人か！」

「そういう事だ。いくぞブラック！」

悟空の变身により一気に形勢は傾く。

先程まで互角だったのが嘘のように戦いは一方的なものへと変わり、悟空の打撃が次々とブラックに炸裂した。

蹴り飛ばして岩山へとぶつけ、更に追い打ちで拳のラッシュを仕掛ける。

拳と岩とでブラックを挟んだのも束の間、衝撃に耐えきれなくなった岩山が崩れてブラックが吹き飛んだ。

悟空は額に指を当てて即座にブラックの後ろへと回り、蹴り上げてまた消える。今度は上空からのダブルスレッジハンマー！ ブラックを地上へと叩き落とし、気弾の連射で追い打ちをかけた。

（さあ、本気を出さなければ勝負になりませんよ。

それとも、このまま本領も発揮せずに死にますか？）

リゼットはブラックの次の行動を見守りつつ、一挙一動も見逃すまいと神経を集中させる。

悟空達は実力は申し分ないのだが、基本的には皆が脳筋だ。

そうである以上、リゼットだけは常に冷静に全体を見渡して次の手を考える必要がある。

時空の裂け目は更に小さくなり、ブラックのタイムリミットが迫っている。

だがりゼットの思惑は成功した。

ブルーに追い詰められたブラックはこのままでは勝てないと理解したのだろう。

赤黒いオーラが地面を砕いて立ち昇り、ブラックの髪が逆立つ。

纏うそれは紛れもない神の気で、だが何処か歪で禍々しい。

透き通るようなりゼットの純白の神気や悟空達の青い気とは対極に位置しており、どちらかといえば破壊神のそれに近い。

「あ、あいつ変身したぞ！」

「あれは……超サイヤ人なのか？」

クリリンとピッコロがその変身に瞠目し、しかし疑問を感じる。

その理由は一つ、色だ。

超サイヤ人にはいくつものバリエーションがあるが色は基本的に黄金で、その例外としてゴッドの赤やブルーの青。そして超サイヤ人4の大猿との融合がある。

だがブラックのそれは今までのどれとも異なる、薔薇色の気だ。

その神気の総量は……ほぼブルーと互角。だが単純な戦闘力で僅かにブラックが悟空を上回っている。

悟空やベジータならば1対1ではかなり厳しい相手だが、自分ならば押し切れる相手だとリゼットは考えた。

……だが妙だ。先程までブラックは悟空と完全に互角だと思っていたのだが……読み違えてしまったか？

「どうだ、この色……美しいだろう？」

お前達のセンスに合わせて名付けるならばロゼ。超サイヤ人口ゼといったところか。

喜べ孫悟空。お前は俺の手によって美しさの頂点へと至ったのだ」

「……何かおめえ、気持ち悪いな」

「所詮は人間。俺の奏でる言葉の気高さを理解出来るはずもない。

俺の存在……その全てがひたすらに……孤高」

ロゼへと変身したブラックは何やら己に酔っているようで、妙に気持ち悪い。

悟空の見た目でナルシストとはまた随分新しいキャラだ。

だがその実力は本物だ。超サイヤ人ブルーの悟空と互角に戦い、渡り合っている。単純な実力でブラックが上回り、それを悟空が技巧で補う事で互角の戦いが成立しているのだ。

（間違いない……あのブラックという男、戦いながら強さを増している……。

極限以上に鍛えた悟空君と違い、まだ伸び代が残されているという事ですか）

悟空との戦いを見ながら、リゼットはブラックの事を成長する敵であると見抜いていた。

やはり自分の読み違いなどではない。ブラックは最初は間違いない悟空と互角だった。

だが驚異的な事にブラックは戦っている間も実力を増しているのだ。

これはそろそろ自分が出るべきか。そう冷静に考えてリゼットはいつでも飛び出

せるように準備した。

だがその必要はどうやらないらしい。

時空の穴がいよいよ完全に閉じ、ブラックを強制的に吸い込んで未来へと戻してしまっただからだ。

「ふむ……実力は今の悟空君よりもやや上ですか。しかし倒せない相手でもなさそうですね……今の所は」

ブラックを見送り、リゼットはブラックの脅威度をヒットと同程度と位置付けた。

もう一人、ザマスという相手もいるらしいがこちらは実力は大した事がないと言われているので気にしなくてもいいだろう。

不死身だというが、それとてリゼットにとってはさほど脅威ではない。

まあ、悟空やベジータでは不死身の相手を倒す手段がないから自分も同行せざるを得ないだろう。

★

まず未来世界へはトランクスの持っている時間移動装置を用いて悟空、ベジータ、トランクスの3人が向かう事となった。

バーダックの時間移動装置は壊れてしまっているの、何とかブルマが修理するようだ。

この女、メカ関係ならば最早何でもありである。

トランクスと一緒にリゼット達全員で乗り込むという手もあったのだが、一度に移動する人数が多すぎると時の穴——ワームホールを通り切れず誤作動を起こす危険性もあるとの事で3人だけでの出撃となったわけだ。

リゼット達の出撃はそれから30分後。ブルマが驚きの速度で修理を終えた後の事となった。

第二陣のメンバーはバーダックとリゼット、それからターレスだ。

リゼットとしては正直、顔の問題でターレスには余り来てほしくなかったというのが本音だ。

ブラックと悟空、ターレスとバーダックで同じ顔が四人集まって一体どうしようというのか。

あと一人同じ顔がいれば悟空特戦隊が結成出来てしまう。

しかしこれだとブラックポジションがターレスとブラックで被ってしまうのでブ

ラックはピンクでいいだろう。

ゴクウピンク（ゴクウブラック）だ。実にややこしい。

未来世界を訪れたリゼット達が見たのは荒廃した世界であった。

その光景を見た瞬間、リゼットの中からザマスという神への敬意が完全に消滅した。

一応は自分よりも上の神という事でほんの僅かな敬意もあったのだが、もうそれはない。

こんな光景を平然と作り出すような奴など神でも何でもない、神を名乗っているだけの害悪でしかないからだ。

悟空達の気を感じして少し飛ぶと、どうやら相当危ない所だったらしく悟空は地面に膝を突いていた。

ベジータは完全にダウンしており、胸に剣で貫かれたような傷跡が残っている。記憶を読んでみたところ、『前菜』扱いされた挙句あっさりやられたらしい。ブルーになってもお約束からは逃れられないのだろうか。

ブラックは確かに強敵には違いないが、それでも二人でかかれば勝てない相手で

はない。

だがベジータが先行して一人ずつ挑んだ結果がこれである。二人の悪い癖だ。

「まずは私がザマスを始めします。バーダックとターレスはブラックをお願いします」

「おい、お前がそっちに行くのかよ。あいつとターレスじゃあ顔が同じでどっち攻撃していいか分からねえじゃねえか」

「そうだぜ。間違えてバーダックに攻撃しちゃまいそうだ」

「お二人共、鏡という物をご存知ですか？」

ブラックは悟空フェイス二人に押しつけ、リゼットは一瞬にしてザマスの頭上へと転移した。同じ顔同士、仲良く戦って下さい。

潜在能力を解放し、反応すら出来ない鈍間のモヒカンを掴んで急降下。ブラックと分断する。

慌てて追おうとしたブラックの前にはバーダックとターレスが立ち塞がり、これでまずは分断完了。

リゼットは速度を落とさずに地面スレスレまで飛び、それからザマスを地面に思

い切り投げた。

頭皮ごと千切れたモヒカンが彼女の手の中へと残ったが、無論そんな物に用などないので即座に気で消して、地面に倒れているザマスへと肉薄する。

「ぐっ……無礼な。たかが星の神風情が」

何やら言っているが無視して頬肉に指を突き刺した。

彼の言葉など何の価値もないし聞く必要もない。話し合いなど通用しない相手もいるのだ。

頬に指を刺したまま投げ、顔の肉を剥ぎ取る。

ザマスという男は不死身だとトランクスから聞いた。ならばよし。今後の参考にその不死身度を試させてもらおうとしよう。

まるでお面のように綺麗に剥がれた顔の皮を魔法で焼いて、リゼットが飛ぶ。顔のなくなってしまうたザマスも何とか反応しようとするが戦闘力の差がありすぎた。

隙だらけの眼球へ指突！ 目玉を抉り出し、続いて喉を刺して喉仏を引き千切る。

それから胸！ これも貫手で貫通し、抜く際についでに肋骨を抉り取った。

股関節！ 足を支える骨を破壊し、今度は耳に指を突き入れて指先からデスビームのように細めたレーザー状の気を連射。脳を貫通し破壊する。

抜き取る際についでに耳を千切り、ポタラを没収。もしかしたらブラックと融合されるかもしれないので、その可能性を排除する。

股間を蹴り上げて急所を潰し、奇声を上げながらザマスが殴りかかって来ればその腕を掴んで手際よく関節を外す。

更に指を獲って投げ、超能力をかけてザマスを大回転。指を根元から引き千切つて時の指輪も没収した。

ポタラと時の指輪は界王神の持ち物だ。もう彼には要らないだろう。

「少し痛いですよ」

手の中に自律気弾を生み出し、ザマスの口に当てた。

それと同時に自律気弾がザマスの体内に侵入し、主要臓器を手あたり次第に破壊し始める。

小型の戦乙女達が心臓を槍で刺し、大腸を千切り、肺を蹴って圧迫し、肝臓や腎

臓を再生するそばから切り裂く。

頭部へ侵入した戦乙女が脳に電気を流して身体を麻痺させ、神経や血管が次から次へと切断されていく。

時折ザマスの身体のあちこちから槍が飛び出しては引っ込み、戦乙女が破壊の限りを尽くしていた。

「ミギヤアアアアアアアアッ!!」

ザマスの悲痛な叫びが木霊するが、死ぬ気配がまるでない。

だがこれでほぼ無力化は成った。

後は何とか止めを刺すだけだ。

「HEROES・GOD MISSION」

リゼットが気を集約し、指先に一枚の光のカードが現れた。

無造作に投げたそれは光の戦士となり、繰り出す弾の打撃性とSGカミカゼアタックの自立性を併せ持ち、まるで生きてそこに人がいるかのように戦う事が可能となる。

現れた戦士は孫悟飯。悟空と同じ胴着を着こなし、現代と比べて逞しく成長している。

この時代で既に死んでしまった孫悟飯の魂をここに召喚し、リゼットの力で神の位階へと高めて実体化させたのだ。

この時代を荒らしたザマスを自分だけが裁くのは彼等に悪い。

今最もザマスに腹を立てているのはきつと、命を捨ててこの時代を守ったこの青年だ。

現れた悟飯はリゼットに微笑んで一礼し、怒りの表情でザマスを睨む。

——連打。

豪雨の如き速度で怒りの拳打が殺到し、ザマスを打ちのめす。

身体中のありとあらゆる骨を砕き、壊し、潰し、片手かめはめ波で焼き焦がした。そうしてザマスを叩きのめしてから戦士は消え、リゼットは無表情でザマスの残骸を見下ろす。

頭皮を千切り、顔の皮を剥ぎ、脳を破壊して耳を千切り、指も千切った。

内部では今も小型の戦乙女達が暴れ続けている。

その上で全身の骨を砕き、焼き焦がしたわけだが……その生命力は気持ち悪いくらいに衰えていない。

「なるほど、確かに不死身ですね。しかし対処法はいくらか思い付きます。まずは一つずつ試すとしましょうか」

リゼットは冷たく言い、一つの小瓶を出すとザマスへ中身をぶち撒けた。

それは小瓶の中には到底入り切るはずもない量であり、それだけで何らかの封印術で閉じ込められていた物だと分かる。

その紫色のスライムを即座に再封印して蓋を閉め、ザマスを見る。

変化は顕著であった。ザマスから感じられる気が限りなくゼロへと近付き、存在感すら希薄になったのだ。

「な、何だこれは……何を、した……？」

「コメソンといいます。相手の力を吸い取って成り代わり、成り代わられた者はこの世から消滅してしまうのですが……流石は超ドラゴンボールによる不死身。そんな姿になっても完全消滅とはいきませんか」

ザマスはこの時点で、ほぼ無力化されていた。

戦闘力は数値にして僅か1未満。地球人の一般人にすら及ばない。

神としての特殊な力や超能力も失われ、もはや自力では何も出来ないだろう。

だが超ドラゴンボールの効力はコメソンを上回るらしい。

力は失ったが消えない。やはり彼を殺す事は不可能だ。

リゼットはふむ、と呟くと特に驚く様子もなく次の手へ移る事にした。

「千の剣よ、在れ」

ザマスへと切っ先を向ける光の剣を創造。

それを一斉に放ち、ザマスの全身を貫く。

顔を、胸を、首を、腕を、足を、胴を、股を、臀部を、肩を。

刺しては剣が消え、また次の剣が突き刺さる。

それを執拗に繰り返し、ザマスは瞬く間にハリネズミのような有様と化してしまっただ。

「ウワァァァァァーッ!!」

ザマスの悲鳴が木霊するが、リゼットはただその不死身ぶりに呆れ果てていた。コメソンで限りなく存在を希薄にして致命傷を間髪を容れずに与え続けても駄目か。

ならば次だ。

リゼットは指を鳴らし、ザマスに突き刺さった光剣と内部に侵入させた戦乙女を同時に爆発させた。

コメソンで存在を薄くした上で細胞一つも残さずに抹消する。

魔人ブウでもここまでやればまず死ぬだろう。

ザマスが消えた空間をしばらく凝視し、やがてリゼットは哀れみを込めて彼を見た。

「これも駄目ですか」

消したはずのザマスが、光の粒子が結合するにしたがって復元されていく。

これはどうしようもない。本当に不死身だ。

地球のドラゴンボールで叶えた不死身とは次元が違う。

こうまで殺せないとは恐れ入った。

恐らく『破壊』でも彼を消す事は不可能だろう。

よく分かった……彼は救えない。

「……ザマス、最後に聞きます。

その不死身を解除する術はないのですか？」

「は、ははは！ 残念だったな、そんなものはない！ この時代の超ドラゴンボールは私が破壊した！ 私の不死身は、永遠のものだ！」

「……そうですか。貴方は自分が何を叶えてしまったのかも分かっていないのですね……」

心底哀れむようにリゼットが言う。

リゼットは彼を本気で殺す気で攻撃した。だがそれは最後の慈悲だったのだ。何故ならどんな死に方をするにせよ、死ねないよりは遥かにマシだからだ。

ザマスの年齢は何歳ほどだろうか。千だろうか？ それとも万だろうか？

どちらにせよ自分などとは比較にもならない永い時間を生きている事だけは確かだろう。

だがそれだけだ。この先に彼を待ち受けている永遠から見ればどんな数字でも無に等しくなる。

今からリゼットは彼を封印する。それはこの上なく残酷で救いのない手段だ。何故ならザマスは死なない。終わりが来ない。

宇宙の年齢である138億年が経とうが、それを無量大数で乗じようが、それを

更に不可説不可説転でかけようが、それでも終わらないのだ。

だからせめて終わりを与えてあげたかった。

だがそれすら出来ないならば……こちらも、覚悟を決めるしかない。

故にリゼットはザマスを殺^救す事を諦めた。

「終わりにしましょう。」

もっとも、私にとっては終わりでも貴方にとってはこれが始まりになるのです。うけど」

殺せない以上、打つ手は一つ。永遠に封じ込めるのみ。

リゼットが手を掲げると空中に丸い扉のようなものが出現した。

それはゆっくりと音を立てて開き、同時にザマスの身体が宙へ浮き上がる。

「ヘブンスゲート」

自力では動く事すら出来ないザマスに術をかけ、ゲートの中へと誘う。

その行き先はカッチン鋼で造り上げた封印の小瓶の中だ。

気の渦によってザマスが振り回され、洗濯機の中の洗濯物のようにもみくちゃにされる。

その最中、リゼットはこれから彼に待ち受けているだろう運命について話す。

「これから貴方を小瓶の中へ封印します。」

その中は精神と時の部屋……と言っても分からないでしょうから別の空間とでも思ってください。

その部屋と同じように、小さなものではありませんが世界が広がっています。

……人のいない世界がお望みなのでしょうか？

ならばもう誰も邪魔をしません。貴方しかない世界で一人、理想通りの世界をお楽しみ下さい」

「や、やめろ！ 私を誰だと思っている！ 私は神だぞ……この世全ての正義と理想を体現する真なる神こそが……」

「続きは向こうでどうぞ」

何かまだ喚いていたが、そのまま呆気なくザマスはゲートの中へと封じ込められた。

それからリゼットは別のゲートを開き、小瓶を取り出す。

これこそがたった今ザマスを吸い込んだゲートの行き先で、この中にザマスがい

る。

リゼットはそれを創造神術でカッチン鋼で覆って開封不能にしてみました。ここまでやってしまえば、リゼット本人でも彼を解放するのは難しい。

そして胸元へと入れ、ターレス達の戦いへと意識を移した。

とりあえずこの小瓶は、現代に戻ってから精神と時の部屋に封じればいいだろう。

悟空「悟空レッド！ 孫悟空！」

ターレス「悟空ブラック！ ターレス！」

バーダック「悟空グリーン！ バーダック！」（戦闘服の色的に）

悟天「悟空ブルー！ 孫悟天！」（超での彼の服の色は青）

ブラック（ロゼ）「悟空ピンク！ ゴクウブラック！」

ピッコロ「……ピンクなのかブラックなのかハッキリしろよ」

【RTA失敗】

リゼットはウルトラリンチを提案し、最速クリアを目指したが悟空達に受け入れ

てもらえなかった。そんな日もある。

悟空達も多対一そのものに反対なわけではなく、危なくなれば『拘っている場合じゃない』と共闘するが基本的には一対一の方が好み。

リゼットはいきなり多対一に持ち込もうとするのが問題。

【ぶんすこリゼット】

未来の惨状を見ておこ状態となったりゼット。

戦闘力は上がらないが残虐ファイトに磨きがかかる。

ウォー○マンスマイルのようなもの。

【へブンズゲート】

今まで空間移動用に用いてきた技の本来の使い方。

元々この技はデッドゾーンからの派生であり、その本来の効果は『封印空間を創造して閉じ込める』というもの。

リゼットは東京ドーム10個分ほどの面積の封印空間を小瓶（カッチン鋼製）の中に創り、その中にザマスを閉じ込めた。

その上から更に隙間なくカッチン鋼で覆ってしまったのでもう開封不可能。

第百六話 超サイヤ人4VS超サイヤ人口ゼ

「一方その頃」

ビルス「破壊☆」

現代ザマス「ウワアアアアッ!!」

リゼットがザマスを処分していた頃。

ターレスとバーダック、ブラックの同じ顔三人は空中で激しい攻防を繰り広げていた。

ターレスは超サイヤ人4へと既に変身しており、バーダックは潜在能力を解放している。

だがそれでも二人は攻め切れずにいた。

実力的にはそこまで大差はなかった。多少劣ってはいたが十分に勝てるレベルだった。

だがこのゴクウブラックという男、ダメージを受ければ受けるほどに強くなっているのだ。

それはまるで、サイヤ人が死から立ち直るたびに強くなるのと同じように。

サイヤ人のそれには限界があるはずだが、しかし時に例外というものが現れる。最たるものは、やはり伝説の超サイヤ人ブロリーだろう。

流石にブロリーほどの急上昇ではないが、強くなり続けるブラックはブロリーを彷彿とさせて嫌な気分させられる。

「はあッ！」

ターレスとブラックの拳が衝突し、超サイヤ人4と超サイヤ人口ゼが激しい攻防戦を交わす。

神の気を纏ったロゼと、それに頼らない暴力方面に特化した4の強さは総合的にはほぼ互角だ。

しかし互角ならば、基礎戦闘力の差が物を言う。

今はまだ戦えるが、ブラックがこのまま強くなり続ければどうなるかは火を見るより明らかだ。

故にターレスは、この膠着を崩す手を早急に打つ必要があった。

「おいバーダック、少し手を貸せ」

「あ？」

「このままじゃジリ貧だ。少しばかり勝率を増やしてえ」

「……何か考えがあるようだな。いいぜ、付き合ってやる」

小声で打ち合わせをし、ターレスが気弾を放った。

その気弾にバーダックが気弾をぶつけ、空中で爆破させる。

ダメージを与えるのが目的ではない。ほんの僅か数秒、敵の目を晦ませる為のものだ。

その隙に二人は地上へと降下し、悟空、トランクス、それから倒れているベジータを回収して岩陰へと飛び込んだ。

「それで、どうするんだ？」

「なあに、そう難しい話じゃねえ。お前等のサイヤパワーをありったけ俺に注ぎ込んでくれ」

ターレスの考え。それは超サイヤ人4の限界を超えろというものであった。

超サイヤ人4は確かに純粋な戦闘力という面で見れば最強の変身だ。

だがまだ、限界ではない。

自分で何となく分かるのだ……まだ上がある、と。

ならばこそ、ここから更にサイヤパワーを伸ばす。

「気を注ぎ込む？　まさかゴッドにでもなるつもりか？」

「へっ、よしてくれ。善のサイヤ人なんぞ、なりたくもねえよ。

あくまでパワーを高めるだけだ」

ベジータの疑問を一笑に付す。

サイヤ人の強さとは、あくまで暴力。純粋なパワーとスピードにこそあるというのがターレスの考えであった。

神の気だのクリアな気だの、そういうのはリセットにでもやらせておけばいい。心を静かに保ちながら戦うなど、どう考えても自分達の分野ではなくあの女の分野だ。

自分達の強みとは……サイヤ人の強さとは闘争心！　飽くなき戦いへの渴望！
静かな心で戦うなど最初からガラではない。

野生——それこそが戦闘種族サイヤ人が身を委ねるべきものだ。

「確かにバラバラにやり合うよりは集めた方がよさそうだが……耐えられるのか？」

「

「さあな。だがこの際だ、自分の限界に挑んでみるさ」

一歩間違えれば取り込んだ気が身体の許容量を超えて自滅してしまう。

バーダック達はその事を心配したが、しかし今は時間がない。

今すぐにでも上空で自分達を探しているブラックがこちらへ来てもおかしくないのだ。

悟空達は頷き、一斉に手を繋いで掌をターレスへと向けた。

全員のサイヤパワーがターレスへと注ぎ込まれ、筋肉が膨れ上がる。

手を繋いでサイヤ人のパワーを注ぎ込むというゴッドと同じ過程。だがそこにゴッドのようなクリアな気などではなく、純粹に暴力的に、サイヤ人本来のパワーの
みが上昇していく。

凶悪さを前面に出した超サイヤ人4の顔が更に好戦的に歪み、犬歯を剥き出しにする。

やがて目も開けていられないほどに光が溢れ——そして、その中からターレスが歩みだした。

「ありがとよ、お前等。おかげで、届いたぜ……更に上によ。

超フルパワーサイヤ人4の完成だ」

外見は今までと変わらない。

だが放出される気は炎のように激しく、黄金の粒子が舞い散っていた。

超サイヤ人4の限界を超え、最早超サイヤ人5と呼んでもおかしくない更なる進化。

それを終えたターレスの前にブラックが着地し、しかし不気味なものを感じているのか迂闊に攻める事は出来ないでいる。

そんな彼に、ターレスは凶暴に笑いかけた。

「どうした、ブラックさんよ……怖いのか？ たかが人間が」

「……ほざけ！」

ブラックが挑発に乗り、ターレスへ渾身の拳を叩き込んだ。

それにターレスは一切反応せず、防御も回避もしない。

ブラックの拳がジャストミートし……だが、ターレスは動いていなかった。後ずさりすらせず、愉快そうに口の端を釣り上げている。

その光景に驚愕したブラックが後ずさり、ターレスが笑い声をあげる。

「ククク……」

「何が可笑しい……人間！」

「いや……可笑しいんじゃない。俺も驚いているのさ。」

……自分の、あまりの強さによ」

ここに力関係は逆転した。

ブラックがいくらパワーアップしたとしても追いつけないだけの絶対的な差が今の二人の間にはある。

故にターレスは勝利を確信した声で宣言した。

「——俺の勝ちだな」

言うなり、一瞬で距離を潰して右フック！

ブラックを殴り飛ばして即座にダッシュし、追いついて蹴り上げた。

今度は上空へ先回りして蹴り落とし、自身も急降下。

落ちる直前のブラックを蹴りあげ、振り下ろしの右腕で地面に落とす。

立ち上がるうとした所で頭を踏みつけ、掌を向けた。

「死ねえ！」

気弾発射！

避ける事も不可能な体勢へ容赦なく追撃をし、だがブラックは直撃を浴びながらも気を全開にする事で強引にターレスの足を振り払って顔をあげた。

そこからターレスの顔へ蹴りを直撃させるが、ターレスは僅かにのけぞっただけで大きなダメージを受けてはいなかった。

元々、超サイヤ人4は単純な耐久力という面ではブルーやロゼを凌駕している変身だ。

それが更にパワーアップした今、ブラックの攻撃すらターレスには通らない。

「そらあ！」

ターレスの蹴りがブラックの顔を捉え、ブラックは鼻血を吹き出しながら倒れ込んだ。

神の気というのは通常の気よりも強く、それ自体が強力な武具のようなものだ。

だがいかに強い武具があろうと、それより強い攻撃を受けてしまえば倒れるのは考えるまでもない。

ブルーと4の差というのは、気を高めるか肉体を高めるかの違いである。

超サイヤ人ブルーは気操作を極めた形態であり、実の所肉体的には通常の超サイヤ人と大差がない。

だから油断して気を抑えてしまえば格下の攻撃だって通るし、不覚も取る。

気の出力を抑えて戦うならば、その戦闘力は超サイヤ人2よりはマシという程度でしかない。

完全に気を抜いてしまえばそこらのレーザー銃にすら撃ち抜かれる可能性があるほどだ。

一方で4は肉体を純粋に極め、強固な筋肉を手に入れている。

ブルーのように精密な制御など出来ないし、界王拳との併用など不可能だ。

だがその肉体は強靱無敵。たとえ寝ていたとしてもそこらの雑魚の攻撃などビクともしない。

仮に寝ている超サイヤ人4のターレスにフリーザ軍最新のレーザー銃を四方八

方から乱射したとしても起こす事すら出来ないだろう。

気の操作を極めて戦士として高みに到達したのが超サイヤ人ブルーであるならば、生物として高みに至ったのが超サイヤ人4である。

そして今、その極まった生物が神の氣を得たブラックへと牙を剥いていた。

皮肉なものだ。人間ゼロ計画を掲げた果てに立ち塞がったのは、人間性からは程遠い超サイヤ人4という獣のような戦士だったのだから。

どこまでも暴力的なターレスの攻撃がブラックを襲い、氣の上から次々とダメージを刻む。

全身を血で濡らしながら、しかしブラックの戦意も衰えない。すぐに立ち上がり、正面からターレスを殴り返した。

しかしターレスにはやはり通じておらず、逆にブラックが拳を痛めている。

それでも両者共に一步も退かず、高速で拳打と蹴りを交わし合う。

拳と拳が衝突し、僅かに距離が開いた瞬間にブラックが消えてターレスの後ろへ回り込んだ。

だがブラックの蹴りに合わせて今度はターレスが消え、ブラックを背後から強襲

する。

それをもブラックが避け、だが続く攻撃をターレスが避ける。

背後を高速で取り合い、同時に速度のギアを上げた二人が消えた。

衝撃波を伴い、空が爆ぜる。

まるで空で地震が起きたように大気が揺れ、それが幾度となく続く。

超高速で移動しながらの格闘戦は目で追うのも困難だ。

時折二人の姿が現れては消え、激しい戦いを繰り返す。

それを見上げながらトランクスはターレスの強さを素直に尊敬し、そして同時に

不甲斐なさを感じていた。

この時間軸は自分が過ごしていた時間軸で、なのに自分は一体何をしているんだ。

ただ戦いを見ているだけで、何も出来ていない。

ベジータが敗れた時だって、殆ど役に立ててはいなかった。

力不足——その言葉がトランクスに重くのしかかる。

「俺は……何て弱いんだ」

「そう自分を責めるものではないですよ」

トランクスの言葉に、後ろからよく知る声で返事が返ってきた。

全員が振り返った先にいたのは傷一つ負っていないリゼットだ。

彼女はザマスを相手にしていたはずだが、その彼女がここに居るという事は向この戦いは終わったという事だろう。

ザマスは不死身だが、流石に今回は相性が悪すぎた。

戦闘力で大きく差が開き、更に神の気を纏っているリゼットに勝てるわけがなく、不死身というアドバンテージすらも空間操作や封印術を得意とする彼女の前面の意味がない。

これではただの案山子。少し頑丈なだけのサンドバッグだ。

この結果は悟空も予想出来ていたのか、特に驚きを見せる事はなかった。

「リゼットさん。ザマスは？」

「力を奪った上で封じました。二度と彼が戻って来る事はないでしょうし……天文学的な確率で戻ってこれたとしても、もう何も出来ません。力を奪った今、その力は地球人の子供以下です」

不死身というのは絶対に死ねないという事。死にたくても死ねないという事だ。

だからリゼットもかつてドラゴンボールに願う際、不死だけは願わなかった。死というのは誰もが恐れるものだが、同時に最後の救いでもあるのだ。

それを自ら手放した者の末路はいつだって悲惨だ。死ねないが故の永劫の苦しみが待っている。

ザマスも不死身でさえなければ今頃は楽になれただろう。だが不死身だったからこそ、リゼットも封印という手段を取るしかなかった。

そして彼は今後、独りだけの世界で誰に観測される事もなく永遠を過ごすのだ。

「そ、そうですか……やはり貴女は凄いな。俺なんかとは全然違う」

「……トランクス。守る力が欲しいですか？」

「え？」

「別に何か試しているわけでも引っ掛けているわけでもありませんよ。正直に自分の気持ちを答えて下さい。私はその力になれるかもしれません」

リゼットは微笑み、トランクスの力への渴望を問うた。

彼が私欲や闘争心で力を求めているわけではない事くらいリゼットだって分かっている。

きつと彼なら間違えないだろうという信頼もある。

これが子供の方のトランクスだと、すぐに調子に乗るので少し悩むのだがこっちのトランクスなら問題ない。

だからこそ、彼自身の口から聞きたいのだ。その渴望を。

トランクスは少しばかり考え、やがて真っすぐな瞳でリゼットを見た。

「はい、欲しいです。俺は……この時代で必死に生きる人々やマイを守る力が欲しい」

……マイって誰？ リゼットはそう思い、ついトランクスの記憶を覗いてしまった。

そこに映ったのはピラフ一味のあの女だ。ただし若い。

あれ？ ここ未来世界ですよね？ 17年後ですよね？

何でこっちの時代より若くなってるんですか？

そう疑問に思うも残念ながらその答えはトランクスの記憶にはない。

……実はこの時間軸ではピラフ一味は丁度悟空が心臓病になったタイミングでドラゴンボールを使用し、若返っていたのだ。

だがリゼット達の時間軸ではそれを行わず、そしてリゼットが暴走した際に世界中の悪人を強制浄化した事でピラフも浄化され、以降ドラゴンボールを集める事はしていない。

故にリゼットは何故マイが若返っているかを知る事が出来ず、今後知る事はないだろう。

唯一分かったのは、トランクスとマイが固い絆で結ばれているという事のみだ。なのでリゼットはこの世界のマイを、自分の知るマイの娘か孫だと結論付けた。そうして気を取り直し、トランクスを真っすぐに見る。

「よろしい。ならば数週間ほど修行といきましょうか」

「え？」

「安心して下さい。現世での時間経過はほんの僅かですから」

リゼットは語りながら亜空間を開いた。

デッドゾーンを改良して作った技、ヘブンズゲート。

その封印空間にトランクスを飲み込ませ、続いて自分も飛び込む。

そこにあったのは、精神と時の部屋だ。

この時代の神殿は破壊されたが、神殿にあったのはあくまで精神と時の部屋に続く扉だ。

それを壊せば出入りは出来なくなるが、精神と時の部屋を構成している空間そのものが消えたわけではない。

ならば空間を越える術さえあれば、この時代でもまだ精神と時の部屋は利用出来るのだ。

「あ、あの、リゼットさん。これは？」

「貴方には今からここで私の修行を受けて頂きます。

此度の件、私達が片付けてしまってもいいのですが、今後新たな敵が現れないとは限りません。

そうになった時の為に貴方には悟空君達と同じだけの力を身に付けて頂きます。

さしあたっては……そうですね。とりあえずゴッドになって貰いましょうか」

リゼットはそう爆弾発言を落とし……そして、あの世からの召喚でこの時間軸の悟空、悟飯、ナッパ、それから比較的善良な心を持つサイヤ人を二人呼び出した。

【比較的善良な二人のサイヤ人】

作中では書いてないが、ギネとターブル。

【4とブルーの違い】

※あくまでこのSSでの解釈です。

・ブルー

ブルーは例えるならば超強力なバフ。

神の気がそのバフの役目を果たしている反面、肉体的な強度や性能そのものは超サイヤ人と大して変化しておらず、あくまで『神の気というバフを纏った超サイヤ人』。

なので神の気を抑えてしまえば格下相手にも圧倒されたり、ケールにボコられたりもする。

かといってずっと放出していればどんどん神の気残量が減って漫画版ベジータVSヒットのように弱体化する。

なので同じ超サイヤ人ブルーでも強さのムラが激しく、強さが一定ではない。

・超サイヤ人4

こちらはバフではなく、単純に素のステータスを爆上げした感じ。

ブルーみたいな複雑さはなく、単純に強い、硬い、速い、HP高い、以上。という分かりやすい強さ。

ブルーと比べると格段に安定している反面、性格が荒くなる上に興奮状態になってしまうので細かい制御が出来ない。界王拳なんてもっての他。

……え？ 悟空さは出来たぞ？ ……………ほ、本編ではやってないから……（震え声）

また変身しているだけでもサイヤパワーを消費し続ける上に、このサイヤパワーは仙豆や回復魔法でも回復出来ない。

・完成ブルー

漫画版限定変身。

神の気を完全に体内に閉じ込める事で上記のブルーの欠点を克服した。

戦闘力も格段に上昇している。

弱点を消す事でバランスがよくなった。

・超フルパワーサイヤ人4

GTにおける悟空の最終形態。

超サイヤ人4に更に悟飯、悟天、トランクスが限界までサイヤパワーを注ぐことで完成した。

上記の欠点が何一つ解消されていないが、そんなの知った事かと長所を更に伸ばしたスーパー脳筋モード。

弱点が判明する前に相手を倒せばいい。

ちなみに仲間の協力が必要なので初回ゴッドと同じく一時的なパワーアップ。

【戦闘力】

ターレス…9億

超サイヤ人4…1兆8000億

超フルパワーサイヤ人4…36兆

※超フルパワー計算式

サイヤパワーを注ぎ込んだサイヤ人の数によって変化。

人数×5倍とする。

今回は悟空、ベジータ、バーダック、トランクスの四人だったので20倍。

GTの悟空の場合は悟飯、悟天、トランクスの三人なので15倍。
ただしサイヤ人の質によっても変わり、例えばここに超サイヤ人になれないパン
やブラを加えても20倍にはならない。

第百七話 目覚めた人格

ターレスとブラックの戦いは完全にターレスへと勝利の天秤が傾いていた。いかにブラックに神の気があるかと戦闘力に差が付き過ぎたのだ。

ブラックは戦うほどに強さを増していくが、それもブローリーほどの急激なパワーアップではない。

だからこのままターレスが押し切って勝つと……その場の誰もがそう考えた。しかし忘れてはならない。今ブラックが使っているのは孫悟空の身体なのだ。

「まだだ！ 俺を舐めるな、人間！」

怒りの為か口調まで変わり、ブラックが今まで以上の気を發揮した。

ただ気の出力を上げただけではない。

薔薇色の気の上から紅蓮の炎を噴き出し、10倍以上に力を高めているのだ。

「界王拳だと……!? 馬鹿な、それはカカロットの技のはず……」

いくら身体を乗っ取ったといっても、技まで真似出来るもんじゃねえはずだ」

「愚かなり。俺は界王神だぞ……たかが界王如きの技が、人間に使えて、俺に使え

ないはずがない！」

身体を取り換えただけでは技までは模倣出来ない。それがターレスの考えであった。

しかし悟空の身体を乗っ取ったザマスは、戦闘という面においては紛れもない天才である。

彼の界王神離れた才能は悟空のかめはめ波や瞬間移動を模倣し、マスターしていた。

ならば界王拳だけ真似出来ないなどという道理があるはずもない。

力の差を強引に埋めたブラックがターレスへ挑み、ターレスが迎え撃つ。

戦力は再び接近し、二人は空中で一進一退の攻防を繰り返した。

拳打と拳打が衝突し、蹴りが交差する。

絶え間なく打撃音が響き、何度も二人の姿が消えては縦横無尽に空を駆け回った。

その戦いの最中、ターレスは考える。

（このまま続けても共倒れだ……それでもカカロット達が控えている以上、最終的にはこっちが勝つだろうが……毎回そんな役回りってのもなあ）

戦略的に考えるならば、ここでターレスとブラックで共倒れになるのはそう悪い事ではない。

こちらにはまだ悟空がいて、バーダックがいて、リゼットも控えている。

悟空達はサイヤパワーを自分に供給してしまったから本気はしばらく出せないだろうが、リゼットはほぼ体力満タンの状態だ。ザマス相手に苦戦するはずがないし、今頃はもう始末していると確信出来る。

ならばブラックを疲れさせるだけ疲れさせて後続に繋げるのも一つの手だろう。しかしターレスもサイヤ人だ。可能ならば自分一人の力で勝ちたいという欲がある。

勝ち目がなくなったならば仕事に徹する程度の冷静さはあるが、勝ち目があるうちから後続の為の踏み台になるのは何か違う。

(よし……10倍で一気に決めるか)

超サイヤ人4には切り札がある。

それは、気をブーストさせて気功波の威力を一瞬のみ10倍まで跳ね上げるといふとっておきの一撃だ。

リゼットしか知らないIFの世界においては『10倍かめはめ波』と呼ばれていたものと同種の力である。

勿論10倍と言っても単純に戦闘力が10倍になるわけではない。

例えばリゼットのレイジングブラストは三つの気功波を融合させる事で完成する技であり、通常の気功波の3倍の威力を誇っている。

だがリゼット自身の戦闘力が3倍になっているわけではなく、あくまで気功波3発分という意味ではない。

例えばキュイが10人いるとしよう。それが同時に気功波を発射すれば通常の気功波の10倍と言っていいだろう。

ではそれを戦闘力12万のギニューにぶつけたら、キュイはギニューに勝てるだろうか？

勿論、否である。ダメージにすらならない。

ベジータがいくら格上の敵に気弾を連射しても効かないのと同じだ。

戦闘力180000のキュイが10人で気功波を発射したとしても、戦闘力が単純に18万相当になったりはしない。

同じように戦闘力5の銃を持った農民が千人集まって銃を発射しても戦闘力5 000相当になってラディッツを射殺……なんて事にはならないだろう。

ターレスの10倍気功波も同じ事で、カラミティブラスターを十倍にして発射してもそれはあくまで『カラミティブラスター10発分』の技でしかなく、『戦闘力10倍のカラミティブラスター』にはならない。

しかしそれでも、普通に撃つより遥かに威力が勝るのは間違いない。そしてそれを当てる事が出来たならば、今のブラックといえど致命傷は免れないだろう。

問題は撃つタイミング。一度外してしまえば次からは警戒されてしまうだろう。必ず当てる為には、相応の状況を作り出さねばならない。

ターレスは少しばかり思案し、やがて一つの答えへと至ったのか小さく笑った。「どうやら勝負あったな！ 所詮は人間、神には及ばんのだ！」

「ちいっ！」

ブラックの蹴りがガードの上からターレスを跳ね上げ、追い打ちの蹴り落しで地面へ落とされる。

そこに気弾連射。必死に避けるが何発かは喰らい、前に回り込んで来たブラックに殴り飛ばされた。

瓦礫を削りながら吹き飛ぶも、地面を殴ってその反動で跳躍。

反撃の気功波を発射した。

だがブラックは瞬間移動の如き速度で消え、ターレスを背後から強襲する。

肘打ちで地面に倒され、起き上がった所を狙いすまして拳打で瓦礫に叩き付けられた。

「かめはめ波！」

倒れたターレスに黒いかめはめ波が命中する。

爆炎があがり、ターレスの気が目に見えて弱くなった。

煙が晴れた時、そこにあったのはボロボロに傷付いたターレスの姿だ。

超サイヤ人4こそ解けていないが、明らかにダメージを負っている。

そして気絶しているのだろうか、ピクリとも動かない。

ブラックはそれを見て勝利を確信し、止めを刺すべくゆっくりと歩を進めた。

「ふふ、俺の勝ちだな。喜べ、お前との戦いもまた俺を強く成長させてくれた」

ブラックはターレスの首を掴み、吊り上げる。

後は止めを刺すだけ……。

その一瞬にターレスの指先が動き——横から飛んできた気功波がブラックを呑み込んだ。

「な、なんだ!？」

ブラックが煙を吹き飛ばし、攻撃の出所を睨む。

そこにいたのは、青い気を纏ったトランクスであつた。

元々髪が青みがかった色である為分かりにくいだが、それは紛れもなく超サイヤ人ブルーと呼ばれる形態だ。

その変化に悟空とベジータも驚き、隣にいるリゼットを見る。

聞かずとも分かる。彼女が何かしたのだ、と。

「俺が相手だ……ブラック!」

「トランクス……!」

トランクスが背中から剣を抜き、ブラックが手に気の刃を創って迎え撃った。それを見ながらリゼットはターレスを治療しようと近付くが、掌を翳そうとした

瞬間にターレスは何事もなかったかのように起き上がってしまった。

髪を乱暴に掻きながら、恨めしくリゼットを見上げるその姿にダメージは感じられない。

「あら、起きてたんですか？」

「ああ。奴を誘う為にわざとやられた振りをしてたんだよ。

絶好のチャンスだったんだがなあ……」

どうやらターレスの邪魔をしてしまったらしい。

その事にリゼットは少し悪い事をしてしまった、と思ったが同時にこれでよかったとも思っていた。

ブラックはこの時代に現れた敵だ。

ならばやはり、最後の締めはトランク스가やるべきだ。

自分達が全て片付けてしまっただけ彼の成長に繋がらない。

「それにしても……超サイヤ人ブルーか。いつのまに変身出来るようになった？」

「いつの間にはありませんよ。三週間の修行を経てようやく、です」

「なるほど、やっぱアンタが鍛えてやったのか」

「ええ。今後の事も考えればトランクスには強くなって貰わないと困りますから」
リゼットはそう語り、また上空へと視線を戻した。

そこでは立派に成長を遂げたトランクスがブラックと一進一退の攻防を繰り広げている。

戦闘力ではブラックがまだ勝るが、ターレスと戦っていた時ほどではない。

やはり界王拳と超サイヤ人の併用には無理があるのだ。

その無茶な行使の副作用で、ブラックの気は小さくなり始めていた。

一方トランクスは戦闘力では及ばずとも、気を流した剣を巧みに操りブラックを追いつめている。

この剣もまた、今までの物ではない。

従来のトランクスは剣を、リゼットがカッチン鋼で新たに強化し直した逸品だ。
ブラックはリゼットを視界に入れ、ここでようやくもう一人の自分……ザマスの敗北を知ったのだろう。

その顔は驚きと失望に染まった。

「ザマスめ、敗れたか……役立たずめ。」

まあいい。人間0計画など、俺一人いれば事足りる」

もう一人の自分に対する暴言。それにリゼットは顔をしかめた。

仲間を役立たずと言った事に不快感を感じたわけではない。彼等の仲がよかろうと悪かろうと関係ないし、第一同一人物だ。

そう、同一人物……のはずだ。

トランクスはそう言っていたし、タイムパトローラーである彼がそう言うならば間違いはないのだろう。

ゴクウブラックの正体は、超ドラゴンボールで悟空の身体を奪った別の時間軸のザマス。これは確定情報だ。

だが何かが引つかかるのだ。どうしようもない違和感を感じてならない。

例えばそれは口調。ゴクウブラックは普段は自らを私と呼ぶが、感情が昂ると俺と呼ぶ。

だがこれはどちらの口調なのだ？

ザマスではない。ザマスの口調とは明らかに一致しない。

どちらかといえば悟空に近いだろう。彼は普段はともかく、超サイヤ人になった

ばかりの頃は自分を俺と呼び、口調が荒々しくなる事もあった。

だがあれは超サイヤ人になる事で凶暴性を増し、サイヤ人としての本質が前面に出てしまっていたからだ。少なくとも今は、そうなる事はない。

ゴクウブラックの口調はまるで、凶暴性を増した孫悟空のものだ。

(ザマスとは異なる口調……人間0計画……超ドラゴンボールへの願い……)

ザマスが超ドラゴンボールへと願ったのは何だったか。

確か、『孫悟空と自分の身体を入れ替える』……だったはず。

孫悟空とザマスの身体を……。

……。

孫悟空だけをザマスの身体へ？

「随分な言いぐさだな。もう一人の自分がやられたってのに役立たず呼ばわりか」
「フン。確かにザマスは俺だ。だが俺はザマスではない……サイヤ人の肉体という
神の恵みの究極を得た今の俺は、それ以上の存在なのだ。」

最早、奴如きでは俺と同一存在とは言えん」

呆れたように言うターレスへとゴクウブラックは無情な返答を返す。

だがリゼットにとって、その返答は納得出来るものであった。

いや、むしろ益々己の予測が正しいという確信を深めてしまう。

目の前にいるこのゴクウブラックはザマスだった。今もそれは変わらない。

彼は間違いなく、悟空の身体を乗っ取ったザマスだ。

だがザマスの他にもう一人、ゴクウブラックの中には人格が存在している。

いや、というよりも融合しているというべきか？

「それは、そうでしょうね」

「何？」

「何故なら貴方はもう、ザマスであってザマスではない。

その身体に元々あった人格と知らないうちに融合してしまった、全く別の存在だからです」

リゼットは考えた。

孫悟空とは、彼が地球に来てから付けられた地球人としての名前だ。

つまり、地球に来るまでの彼は孫悟空ではなかったという事になる。

もしも、超ドラゴンボールがそれを孫悟空と認識しなかったら？

人格が変わった後の孫悟空だけをザマスの身体へ移していたとしたら？

——本来の孫悟空カカロットの人格が身体に残っていたとしたら？

この世界では起こらなかった、原作原作の世界にてクリリンは語った。

悟空は大猿になった時に凶暴化しているのではなく、大猿になっている時だけ本来の自分に戻っているのではないかと。

そう、孫悟空の中には普段は眠っている本来の彼カカロットがいる。

それは大猿になった時のみに発現する不安定なものだが、確かに彼の中にカカロットはいるのだ。

それが、残ってしまっていたとすれば？

「……どういう事だ？」

「貴方は超ドラゴンボールの力で悟空君をその身体から追い出し、奪い取った。しかし、カカロット」を追い出したわけではありません。

貴方は知らないでしょうが、孫悟空とは地球に来てから与えられた地球人としての名前……彼には、孫悟空ではなかった時期が存在しています。

そして本来の悟空君……いえ、カカロットは人間を滅ぼす使命を帯びた、凶暴な

サイヤ人だった……今の貴方のように」

「……っ！」

「貴方自身、思い当たる節はありませんか？

ザマスとも悟空君とも異なるその口調は、一体何に引っ張られたものですか？

人間0計画にしても、何故自らの手で完遂する事に拘ったのですか？ それこ

そ、この時代の超ドラゴンボールを破壊なんてせずに、全宇宙からの人間の抹消を願えば、それで終わっていたはず」

「そ、それは……」

「それは、その身体に残るカカロットの意思が、”人間を皆殺しにする” 使命を帯びていたから。」

だから貴方は知らずそれに引きずられ、自らの手で使命を全うする事に拘った。無意識のうちに」

リゼットはゴクウブラックを指差し、そして言う。

ようやく分かった、彼の本当の正体を。

「貴方はもうザマスではない。悟空君でもない。」

ザマスの魂とカカロットの残滓が混ざり合った歪な存在。

もしかしたら、あったかもしれない孫悟空ゴクウブラックの暗黒面——それが貴方の正体です」
お前はザマスではない。ザマスではなくなってしまった。

その答えを突き付けられたゴクウブラックは顔を強張らせて硬直した。

それはそうだ。今の今まで自分だと思っていたものが、実はとうに失われて変質していたなどと言われればアイデンティティを失ってしまう。

ゴクウブラックは顔を俯かせて震える。

それは自分を見失った恐怖だろうか？ 恐れだろうか？

否、そのどちらでもない。

それは……歓喜であった。

「ふ……ふはは……ふはははははははははは！」

そうか！ そうだったのか！ そういう事だったのか！

なるほど、道理で道理で！ 俺は俺を美しいと感じていたわけだ！

そうだよなあ、ザマスなら孫悟空の……人間の身体を美しいなどと思うわけがない！」

ゴクウブラックは自分を見失ったのではない。

たった今、自分を見付けたのだ。

そして、その歓喜に打ち震えている。

「強くなる事に喜びを感じた」

右の拳を握り、それに応じるように気が高まる。

「戦いを楽しいものだと感じた」

左の拳を握り、身体をロゼのオーラが包み込む。

「痛みすらが心地よかった。お前達との戦いに高揚した」
ワクワク

身体から再び、消えかけていた紅蓮のオーラが噴き出した。

その勢いは今まで以上であり、そして尽きる気配を見せない。

彼はここにきて、悟空の力を完全に物にしてしまったのかもしれない。

悟空の身体には彼のような本物の戦闘狂でなければ使いこなせないサイヤ人の細

胞がある。

だがゴクウブラックはそれを使いこなせた。何故か？

それこそが彼がザマスであってザマスではない事なのよりの証明。

彼の中には本物の戦闘狂が残っている。だから彼は悟空の力を完全に物に出来るのだ。

「俺はザマスの魂と孫悟空の身体と、そしてカカロットの人格を持つ者……。

そう、俺は……ゴクウブラックだ。

感謝するぞ、リゼットよ。お前のおかげで俺は俺を見付ける事が出来た」

ゴクウブラックは好戦的に笑い、そして自分が神であるという驕りを捨てた。もうそんな肩書はいらない。宇宙などどうでもいい。

ただ強く、何よりも強く。

強い敵と戦い、闘争を心ゆくまで楽しみたい。

ただそれだけの、純化させた一人のサイヤ人の姿だけがそこにはあった。

【戦闘力】

未来トランクス…9億8000万

超サイヤ人ブルー…1兆9600億

【ブラックの口調】

ブラックは漫画版でもアニメ版でも時折一人称が『俺』になりますが、これは悟空、ザマスどちらの口調とも一致していません。

じゃあこれ誰の口調だよ、と思ったところで『カカロットじゃね?』と思い付き、こんな展開になりました。

また、ベジータが『本当の戦闘馬鹿しか使えないサイヤ人の細胞がある』と言っていたのにブラックはあっさり使いこなしてしまい、視聴者を「?」とさせたのもこれ进行思いついた理由です。

なのでこのSSではゴクウブラックⅡザマスの魂を得たカカロットです。

まあ、個人的にブラックの正体がザマスなんて小物であって欲しくなかったという願望があったのも否定は出来ません。

【10倍かめはめ波】

戦闘力が10倍になるわけではない。

あくまで威力が10倍になるだけ。

FFで言えばレベル10の黒魔導士がファイガを撃ったとして『ファイガ10発分の

ダメージを与える』効果はあっても、『撃つ瞬間だけレベルと魔力が10倍になる』わけではない。

つまり十分ぶっ壊れ技。

というかFFは最終的に連発系の方が強いので、単発技しかないキマリは通さない。

第百八話 光のWILLPOWER

「前回のあらすじ」

リゼット「ザマスを封印して合体阻止。トランクスも鍛えて勝てそうですが、もう一押し欲しいですね」

・オリチャール発動！

リゼット「そうだ、このタイミングでブラックに揺さぶりをかければ精神的に動揺して弱体化するはず。これで確実に勝てますやったー！」

←

ブラック「俺はカカロットだ！」

リゼット「何で逆にパワーアップするんですかヤダー！」

リゼット、渾身のガバプレイ。

トランクスとブラックの戦いはブラックが終始圧倒していた。

いかに超サイヤ人ブルーになると、ブラックはそれに相当するロゼに変身した上で界王拳まで発動しているのだ。単純な戦闘力ならばどうしてもブラックに軍配が上がってしまう。

しかしトランクスは圧倒されながらも必死にくらいいついていた。

彼には背負う者がある、守りたい人がいる、守るべき世界がある。

力では負けている。だがトランクスにはタイムパトローラーとして戦い続けた事で得た経験があった。

ブラックが手に纏わせた気の刃と、トランクスの剣が幾度となく衝突する。

剣の腕ではトランクスが上だ。超速で振るわれる斬撃の嵐を前にさしものブラックも後退を余儀なくされ、しかし下がりながらも気功波を発射する事でトランクスを撃ち落とした。

「いいぞトランクス！ 戦いはこうしてある程度レベルが近くなければ面白くない！

さあもっとだ！ もっと貴様の力を見せてみる！ 俺を楽しませてくれ！」
「ふざけるな！ 楽しみだと……!!? そんな事の為に貴様は！」

「それがサイヤ人だ！」

煙を裂いてトランクスが突撃し、超速で拳を交わし合う。

しかし破壊力と速度ではブラックが勝る。唯一勝る経験すらも、この戦いの中で着実に埋められている。

成長しているのだ。この僅かな時間でブラックは強くなり続けている。

このままではトランクスの勝ち目はない。

戦いを見上げて険しい顔をするリゼットへ、ターレスが話しかける。

「誤算だったな、神さんよ」

「……」

「あんたはあいつがザマスではないと教える事で、戦う理由を奪う気だった。違うか？」

「……戦う理由を奪うまではいかずとも、戦意を多少萎えさせるくらいは出来るとは思っていました。まさか余計に高揚するとは、確かに計算外です」

「あんたはサイヤ人をまだ理解出来ていなかったようだな。」

戦う理由などなくとも、ただ楽しむ為だけに戦う。それがサイヤ人だ」

リゼットは小さく溜息を吐き、己の過ちを認める事にした。

そう、誤算だった。まさか戦う理由と己の存在を失って失意に暮れるどころか高揚するとは。

このまま戦闘が終わるなどという甘い考えはしなかったが、それでもブラックの戦意を僅かなりとも減らせると考えていたのは事実だ。

全く酷い戦闘狂だと思う。自分ならば絶対に真似出来ない。理由もなく目的もなく、ただ戦いたいのが故に戦うなど。

戦いが手段ではなく目的……サイヤ人とリゼットとでは、闘争における純度が違う。

しかしこれは誤差だ。充分に修正出来る。

リゼットは掌の中に神気を凝縮させ、ブラックを見上げた。

「本当ならトランク스에 決着を付けさせてあげたかったです……止むを得ません。」

あの程度ならばまだ、私が出れば問題なく対処出来ます」

ゴクウブラックは確かに強くなった。だがかつて破壊神にすら勝利したりリゼット

ならば消してしまえるレベルだ。

本当はトランクスに勝たせてあげたかった。この時代はトランクスのもので、部外者に過ぎない自分が決めるよりもその方がいいと思った。

だがそれはもう叶うまい。ならばせめて、この事態を招いた責をこの手で取るとしよう。

リゼットの背に光輪が出現し、手足に鎖が絡みつく。

ゼノバースの上からのバーストリミット・マイナス。今のリゼットが出せる最強の力だ。

光輪が輝き、手の中に神気が凝縮されていく。

——浄化。はかい

極限まで圧縮した神の気を叩き付ける事で万物を分解するリゼットの切り札の一つだ。

しかしその彼女の腕を悟空が掴んだ。

「待ってくれ神様。もう少しあいつにやらせてやってくれねえか？」

「悟空君……トランクスを見殺しにしろと？」

「そうは言ってねえさ。ただもう少しだけ……ギリギリまでやらせてやりてえんだ」
リゼットの視線と悟空の真剣な視線が交差する。

悟空の言いたい事は分かる。リゼット自身もそうであれば一番いいと思っていた事だ。

この世界の事は、この世界に住むトランクスが解決するべきだ。

だがもう、それは実現出来ないところまで来てしまった。今は戦えていてもやがてブラックがトランクスに勝つ時が来てしまう。

そうなる前に、この手で決めてしまふべきだ。それが最も確実な手段である。

しかし悟空はリゼットの手を離す気配はなく、折れてくれそうにない。

「……本当に危ないと思ったら飛び込みます。悟空君も準備だけはしておいて下さい」

「ああ、サンキュー神様」

トランクスとブラックの戦いは尚も激しさを増し、両者共に血に濡れながら攻防を続ける。

マイは手を組んでトランクスの勝利を願い、この時代に生き残った僅かな人々も

また必死に祈っていた。

祈った所で何も変わらない。彼等は力なき人間でしかないのだから。

そして祈るべき神が敵であり、そうである以上祈りになど意味はない。

……否、そうではない。彼等もまたトランクスと共に戦っているのだ。

人々から白い気が溢れ、トランクスへと吸い込まれていく。それはまるで元氣玉のように。

勿論トランクスは元氣玉など使えず、こんな事が起こるわけもない。

だがトランクス自身が使えずとも、人々が願っている。トランクスの勝利を。

その願いが奇跡を生み、そして気となってトランクスへと注ぎ込まれているのだ。

「これは……」

「まるで元氣玉みてえだ……」

リゼットと悟空も異常に気付き、周囲を見る。

そして頷き合い、二人もまたトランクスへと手を掲げた。

二人だけではない、ベジータやターレスも同じように手を上げ、トランクスへと気を送っている。

トランクスに力を貸しているのはこの時間軸だけではない。

今までタイムパトローラーとして救ってきた全ての時間が彼の味方だ。

リゼット達の本来の時代では残されたセルやピッコロ、悟飯達が。

こことは異なる並行時間軸では、少年の姿になってしまった孫悟空や、その孫のパンが。

時の巢では時の界王神が。

そしてこの時間軸の宇宙のどこかで、生き残りのナメック星人を乗せた宇宙船の中でセルが。

あの世では悟空やベジータ、他の戦士達……そして悟飯と、この時間軸のリゼットが……。

皆がトランクスに気を送り、その勝利を願っている。

絶望に抗い、未来へ進もうとする人々の希望の願い。それは光の意志^{will power}力とでも言うべき力だ。

皆の願いを一身に集めたトランクスは、その力を余す事なく剣へと伝わらせていく。

「これで終わりだブラック！俺は……俺達は、一人じゃない！」

「よからう！ならば俺も、この身体に残る全ての力を貴様にぶつけてやる！」

皆の力を剣に集約させたトランクスが飛び、それを迎え撃つようにブラックが界王拳の倍率を無理矢理に20倍まで跳ね上げた。

悟空の限界倍率は10倍だ。20倍など身体が耐えられない。

骨が砕け、筋肉が断裂し、口や鼻、目からは血が溢れ、自壊しながらも壮絶な笑みを浮かべたままブラックが飛ぶ。

「これで！最後だああああああ！」

ブラックが吐血混じりに叫び、気を凝縮させた鎌を振り下ろす。

それと同時にトランクスが白く輝く剣を振り上げ――。

ブラックの身体が、腹から肩にかけて両断された。

「……く、ククク……ああ、いい痛みだ……。」

これが戦い……これが充実……もつと貴様等と戦いたかったが、潮時ってやつか」

ブラックは満足し切った笑みを浮かべたまま地面に墜落し、血の海に沈んだ。

両断され、上半身のみとなった彼に待つのは死のみだ。

だがブラックはまだ死ねないのか、呻きながらリゼットを見る。

「おい、その女」

「何でしょうか」

「俺を、魂ごと……破壊しろ。お前なら……出来るだろう……」

それはリゼットにしても驚きに値する言葉であった。

このままならばブラックは死ぬ。死んであの世へ行き、そして地獄へ落ちる。

だが彼はそれをよしとせず、この場での消滅を望んでいるのだ。

「俺は……このまま死ねば、その魂はあの世へといく……あの世へ行って、ザマスへ戻り、俺は失われる……」

「……ええ、そうなるはずです」

「そうなる、前に……俺は俺として……ゴクウブラックとして消えたい……」。

僅かな間ではあったが……自分を認識してからのこの数分間は、かつてない充足感があった……高揚があった……俺は、今の俺のままでいたい……」

ゴクウブラックはザマスの魂と悟空の肉体、カカロットの人格が混ざり合った歪な存在だ。

ザマスの魂という動力を得て、悟空を排除し、その上で初めて今まで日の目を見なかった『カカロット』が表に出る事が出来た。悟空が頭を打つ前の本来の人格が目覚める事が出来たのだ。

しかしザマスの魂が出て行けばそれは失われる。

彼はそうなる前に、ブラックのまま消えたいと願ったのだ。

「……いいでしょう。どのみち、ザマスの魂を残す事は私にとっても不安な事でした。

望み通りに、ここでゴクウブラックのまま消去させて頂きます」

「ありがとうよ」

ブラックは血に濡れた身体を片腕の力だけで無理矢理に起こし、血を吐く。

だがそれでも倒れず、手を悟空とトランクスへと差し出した。

それを見ながらリゼットは神の気を右手に集約させ、ブラックへと向ける。

「――浄化^{はかい}」

リゼットが手を向けると同時にブラックの身体が光の粒子へと変わり始める。

肉体諸共、魂すらも消去する神の業。それは本来破壊神しか出来ぬ技だが、リ

ゼットは既にその域へと片足を入れていた。

その中にもあってもブラックの笑みは変わらず、満足し切っている。

「さらばだ、トランクス……そして、孫悟空……」

咄嗟に悟空が思わず手を伸ばす。

だが二人の手が触れる事はなく、ブラックは——いや、『カカロット』は完全に光の粒子となって破壊された。

これでようやく終わったのだ。

ザマスは力を失って永遠に封じられ、ブラックは完全消滅を迎えた。

決して死ねない永遠の封印と、二度と蘇れない永遠の無。果たしてどちらがより救いのない結末なのかは人によって意見が分かれるだろう。

「やりましたね、トランクス」

「はい！ これもリゼットさんや皆のおかげです！」

荒廃し切ってしまったこの世界をここから立て直すのは難しいだろう。

改めてドラゴンボールの有難みというのを感じずにはいられない。

それさえあれば、死者達ですら元に戻せたのだ。

しかしこの世界では地球のドラゴンボールも、ナメック星のドラゴンボールも残っていない。そして超ドラゴンボールですらザマスが砕いてしまった。

唯一の希望は以前に最長老が語った、どこかにナメック星人がいるかもしれない、という不確かな情報だけだ。

それを探してこの時間のセルは今も宇宙を旅しているのだろう。今となっては彼が無事にナメック星人達を保護してくれている事を願うばかりだ。

「でもよお、酷え事になっちまったな。これからどうするんだ？」

「それなんですが、時の界王神様が特別にドラゴンボールを集めて、ザマス達に殺された者達の蘇生を許可してくれるそうです」

「え？ 出来るんですか、そんな事」

「はい。時の巢は全ての時間軸から切り離された空間……ドラゴンボールが無事な世界から持ってくる事が出来ますし、実は俺もその方法でバーダックさんと呼んでタイムパトロールに誘ったんですよ」

「どうやら一番の懸念事項はあっさり解決しそうだ。」

時間を管理する時の界王神がそんな事をしているのかと思わないでもないが、流石に宇宙崩壊レベルの出来事は不味いと彼女も判断したのだろう。

時を変えたトランクスへの罰を働くだけで済ませている事からも分かるように、時の界王神はかなり慈悲深いのだ。

見た目はあんなんだが、案外リゼットの知る神の中では彼女が一番神様と呼ぶに相応しい人格者なのかもしれない。

「まあ、老界王神様は反対しているそうですが……」

「え？ お爺さんの方もいるんですか？」

「ええ。今は俺達に協力してくれています」

何やら随分時間関係がごっちゃになっているようだ。

恐らく時の巢にいる老界王神もまた別の時間軸から来た存在なのだろう。

とはいえ、この世界に平和が戻るならばそれが一番だ。

しかし全て任せっぱなしというのも後味がよくない。

だからリゼットは最後の仕上げとして、自身の気をこの荒廃した地球へと分け与えた。

すると至る所から花が芽吹き、木々が生える。

生き残った人々を祝福するように花が咲き乱れ、暗雲を完全に消し飛ばして陽光が差し込んだ。

更に物質創造神術。崩れた建物を可能な限り修復し、ブラックが荒らしまわったのがまるで夢か何かのように地球の景観を再生する。

「私に出来るのはここまでです。後は任せましたよ、トランクス」

「リゼットさん……はい！ 有難うございます！」

死者の蘇生はリゼットには出来ない。

いかに信仰の念を得て存在そのものが神へと昇華しようと、やはりベースは地球人。ナメック星人ではないのだ。

だから出来るのはここまで。後はこの時代に生きる者達の仕事だ。

リゼット達はトランクスに別れを告げ、元の時代へ戻して貰う事にした。

今の彼なら、きっとこの先どんな敵が現れても大丈夫だという確信を抱いて……。

「そうだ、悟空さん。それに父さん……帰る前に、一度だけでいいから会って欲しい人達がいるんです」

だが、そんな彼等をトランクスが呼び止めた。

……どうやら最後にもう一仕事だけ残っているようだ。

ブラック「俺を魂ごと破壊しろ」

内なるザマス『!?』

ブラック「ザマスに戻るくらいならこのままブラックとして消えるわ」

リゼット「分かりました。それじゃ遠慮なく」

内なるザマス『おい、何を言っている！ やめろ、やめるんだ！』

リゼット「浄化^{はかい}☆」

内なるザマス『ウワアアアアアアアアアアア!!』

第百九話　そして未来は続いていく

「そうだ、悟空さん。それに父さん……帰る前に、一度だけでいいから会って欲しい人達がいるんです」

それは、ブラックを倒して過去へと帰ろうとした時の事。

トランクスは遠慮がちに……しかし強く願うような口調でそう切り出した。

本当ならば悟空達はこのまま過去に帰すべきだ。異なる時間軸の人間が長居するのは決していい事ではない。

だがそれを分かっている、どうしても一度会って欲しい人達がいた。

彼女達の心を少しでも救うためにも、どうしても、元気な姿を見せてあげて欲しかった。

「……そうか、この世界の」

「はい。この世界のチチさんと、母さんに、どうか……」

悟空が察したように言い、トランクスもまたそれを肯定した。

そう、どうしても会って欲しい人というのは、この世界のチチとブルマだ。

ブルマは人造人間との戦いで夫を……チチは息子をそれぞれ失ってしまっている。

特にチチの心の傷は深い。

ブルマはまだ息子であるトランクスがいたから自分を保つ事が出来た。

だがチチは悟空に続いて悟飯まで失ってしまったのだ。

その心の傷は、悟空が思う以上に深い。

「分かった。ベジータもいいか？」

「……ああ」

この時間の人間ではない自分達が会った所で救いになるかは分からない。

だが一度会っておくべきなのだろう。

妻を置いて行ってしまったこの時代の自分達に代わり、少しでもブルマやチチの心を救えるならばきつと意味はあるはずだ。

悟空は、そう考えた。

「チチの気は……あっちか。そんじゃちょっと、行ってくる」

自分が知るそれよりも随分と弱弱しい気を何とか見付け、悟空は空を飛んだ。

瞬間移動しなかったのは、いきなり前に出る事を悟空自身が躊躇ったからだ。

そもそもこの世界の自分は既に死人だ。そんな自分がいきなり目の前に現れたらチチは驚いてひっくり返ってしまうだろう。

もしかしたら成仏してけろ！　なんて叫びながら殴りかかってくるかもしれない。

「未来のチチかあ、きつとおばさんになってるんだろうなあ」

おばさんになったチチを想像して少しだけ笑い、悟空はパオズ山に降り立った。家は昔のままで、何も変わっていない。

……いや、よく見ると少し汚れているか？

「さあて、どうすっかな……チチの事だから、オラを見たら驚いて叫ぶだろうし。んゝ……とりあえずあれこれ考えても仕方ねえか。

ま、オラらしくいつも通りにいけばいいだろ」

悟空は、このドアの向こうにいつも通りのチチがいる事を疑ってはいなかった。多少は老けているだろうが、あの気丈なチチの事だ。元気でやっているに違いあるまい。

問題はこういうリアクションをされるかだ。

驚いて叫ばれるか、それでも成仏してくれと喚かれるか……もしかしたらドラゴンボールで生き返ったと思われる普通に「今頃戻って来たんだべか」と言われるかもしれない。

まあ、どのパターンでも問題はあるまい。

ドアを開き、まずは開口一番、極めていつも通りの明るい声で気楽に挨拶をした。
「オッス！ チチ、いる……………か？」

——悟空は、部屋に入ると同時に固まった。

そして後悔した。軽く考えていた自分自身の考えを心底悔いた。

可能ならば今すぐにでもウイスに時を戻して貰って、もう一度入るところからやり直したいほどに。

「……………悟空……………さ？」

そこにいた女性を、悟空は一瞬チチだと認識出来なかった。

顔には深く皺が刻まれ、生気というものがない。

頭髮は残らず白髪になっており、所々が抜け落ちていた。

老けているだろうとは思っていたが、何だこれは。これではまるで老婆ではないか。

悟空達の時代から見て二十年後なのだから老けているのは当たり前だし、予想はしていた。

白髪くらいは増えているだろうとも思っていた。

だがチチの年齢はこの時代でもまだ59歳のはずだ。80や90ではない。

彼女の後ろでは介護をしていたのだろう、牛魔王が驚きに満ちた顔で悟空を見ている。

「ご、悟空！ おめえ、どうして……」

牛魔王の方はまだ予想通りの外見だ。

自分の知る彼が順当に20年過ぎればそうなるだろうという老け方である。

しかしチチは、親であるはずの牛魔王よりも老けて見えた。

そんな彼女は車椅子からフラフラと立ち上がり、頼りない足で悟空へと向かう。その途中で崩れかけた彼女を、悟空は咄嗟に駆け寄って支えた。

「ああ……悟空さ、やっと、迎えに来てくれたんだな……。

会いたかった……会いたかっただよ……。

夢みてえだ……いつか悟空さが、いつもと変わらねえ様子でそのドアから帰ってきてくれるのを夢見てた……」

満面の笑みを浮かべて涙を流すチチを支えながら、悟空は何も言えなかった。

トランク스가会って欲しいと言った理由がよく分かった。

自分の見積もりが甘すぎた……。

チチは気丈だからきつと、元気でやっているだろうと……そんな甘い考えが一瞬で消し飛んでしまった。

涙声で話すチチの声は掠れ、耳を澄ませなければ聞き逃してしまいそうだ。

その姿は、元気なチチの姿しか知らない悟空にとってはあまりに衝撃的過ぎた。

「悟空、生き返ったんだべか!？」

「い、いや……すまねえ、牛魔王のおっちゃん。オラはこの時代のオラじゃねえんだ。」

トランク스가過去に行っちゃって話は知ってるか？」

「あ、ああ……そうか。おめえは過去の世界の……」

「ああ……トランクスの奴に、一度チチに会ってやって欲しいって言われてよ……」
悟空にしがみついて嗚咽をもらすチチの力は驚くほどに弱い。

少し動けば簡単に振りほどけてしまうだろう。

いつも修行より仕事しろと叫ぶチチの姿からは想像もつかない儚さだ。

最近のチチは孫が出来た事でますますパワフルになり、悟空もその勢いにタジタジであった。

それが、こうも変わるとは……。

「……………」

悟空は息を吐き、それからチチを自分からゆっくりと剥がして顔を見た。

自分はこの時代の孫悟空ではない。

だがきつと彼が言いたかった言葉がある。

そして彼に代わって言うべき言葉がある。

チチが自分の死を振り切って前に進むためにも、今はそれを言うべきだ……そう思った。

「オラはこの時代のオラじゃねえけど、きつと生きていたらこう言ったはずだ。

………ただいま、チチ。今帰ったぞ………随分長い事待たせちまって悪かったな」

「う………ああ………うあああ………っ！ ああああああ………………っ！」

その言葉で堰を切ったようにチチが泣き崩れた。

そんな彼女を悟空は力強く………しかし壊してしまわないように抱きしめる。

悟飯が死んだ時からチチの時間は止まっていた。

現実を認識出来ず、認識しようとも思えず。

生きたまま死んで、身体だけが老いて、いつか死んであの世に行く事だけを心待ちにしていた。

悟空と悟飯の元に行く日だけを待ちわびていた。

だが過去の世界から来た悟空の言葉で、ようやく彼女の時間が動き始めたのだ。

「そうかあ………そっちでは悟飯ちゃんは偉い学者さんになれたんだな」

それから一時間後。

ようやく落ち着いたチチは、車椅子に座って朗らかに話していた。

老いた身体は戻らないが、それでも先程までの生気のない彼女ではない。

弱弱しくはあったが、それでも悟空の知るチチの顔だった。

「ああ。最近は何かよく分からねえ論文を発表しててよ。

やっぱ頭の出来がオラとは違うんだろうな。難しい言葉ばかりで何言ってるか全然分からなかったぞ」

「あははっ……そりゃあ悟空さじゃ無理だべ」

「これでも悟飯が子供の頃は勉強を見るくらいは出来ただけどなあ」

今、悟空はチチにせがまれて自分達の時代の事を話していた。

誰一人欠ける事なくあの絶望的な戦いを乗り切った世界の、平和に生きている悟飯やチチ、そしてこの世界では生まれる事も出来なかった悟天やパンの話だ。

その話にチチは一喜一憂し、嬉しそうに笑っている。

自分達の世界はこんな結末を迎えてしまったが、それでも幸せな世界もある。

それを思うだけで、幸せな空想に浸る事が出来た。

「あ、そうだ……これ。こっちの悟飯なんだけだよ……」

悟空はふと思ひ出したように胴着の中から一枚の写真を出した。

それはパンが生まれた時に撮った集合写真だ。

今日に限ってそんなものを持ち歩いてた理由はただの横着だ。

写真を撮った後に胴着に仕舞い、そのまますっかり忘れて入れっぱなしにしていた。

しかし怪我の功名というべきか。おかげでチチにそれを見せる事が出来た。

「同じ悟飯ちゃんでも、こっちとは随分違うんだな……。」

うん、スーツがよく似合ってるだ。こっちの女の子は悟飯ちゃんの奥さんだべか？」

「ああ、ビーデルっちゅうんだ。んで、抱えてる赤ん坊が悟飯の子だ。パンっていうんだぞ」

「そっか……パンちゃんか……」

眩しいものを見るようにチチが微笑む。

自分達では辿り着けなかった幸せな未来。その光景はチチにとって何よりも尊いものに見えるのだろう。

悟空は少し考え、それから口を開く。

「チチ……気休めは言えねえけどよ。」

けどこの時代のセルが生き残りのナメック星人を探してるはずだ。

もしドラゴンボールがあれば、死にしまった皆も生き返れるかもしれないねえ。

オラは心臓病で死にしまったらしいから、ドラゴンボールでも戻ってくる事は出来ねえだろうけど……悟飯が帰ってくる可能性はゼロじゃねえ。

いや、仮にこっちのセルが駄目だったらオラがオラの時代で超ドラゴンボールを集めて皆を生き返らせてやる。

だから、その時はお前が悟飯を出迎えてやってくれ。こっちのオラにはもう、出来ねえ事だ」

「悟空さ……ああ、そうだな。悟飯が帰ってきた時に、オラがあんなんじゃない心配させちまうもんな」

チチは強気に微笑み、そして写真を悟空へと返した。

幸せな空想はもう終わりだ。そろそろ現実へと戻らなくては。

「写真はもういいのか？」

「ああ、それは悟空さが持つておくべきもんだ。オラ達は、オラ達でその写真にも

負けねえ未来を作らねえとな」

「ああ、そうだな……それでこそ、オラが好きなチチだ」

悟空は普段、あまり好きだの愛しているだのは言わない。

言いにくいというのものもあるが、別に言わなくても伝わるだろうと思っている節があるからだ。

それでも今、あえてそれを口にしたのはこの世界の自分がきつと言いたかった言葉だろう、と思ったからである。

「それじゃあ……オラはそろそろ行くぞ。チチも元気だな」

「ああ。そっちのオラにもよろしくな」

チチの言葉に悟空は無言で親指を立て、それから外へ出て空へと飛んで行った。その背中を見送り、チチは涙を浮かべて可笑しそうに笑う。

「全く……未来でも過去でも、いっつも慌たましい人だべ。

けどおかげで元気が出ただよ。いつまでも落ち込んでる自分が馬鹿みてえだ」まるで台風のようなだった、とチチは思う。

だが孫悟空はいつもそうだ。

一つの場所に落ち着かず、あっちこっちをいつも飛んでいる。

パオズ山に、西の都に、神殿に。海に、陸に、空に。

時には地球すら飛び出して他の星や、界王星へ。

こっちの悩みなど知らぬと奔放に飛び回り、なのに憎めない。

やがてそんな彼に感化されて、悩むのも馬鹿らしくなって皆が笑っている。

そして今も、やはり台風のようにやってきてチチの悩みを吹き飛ばして飛んで行ってしまった。

きっとこの時間の悟空もあの世で飛び回っているのだろう。

そう考えたら、自分だけ落ち込んでいるのが何だか馬鹿みたいではないか。

「……ありがとうな、悟空さ」

だから一度だけ礼を言い、そしてチチはウジウジ落ち込んでいる自分と、訣別を果たした。

★

「……こ、この時代の、ブルマだな」

「え、ええ……過去のベジータ……よね？」

悟空がチチと会っている頃。

ブルマが拠点としてゐる地下室でブルマとベジータが出会っていた。

ベジータの後ろにはトランクスが控え、邪魔にならないように口を閉じている。この時代のブルマはベジータが知るよりも若干老けており、髪を後ろで縛っているが恐らく激動の中で美容に気を遣う余裕もなかったのだろう。

美容液を自分で開発して年齢不相応の若々しさを保っているこちらのブルマとは少し違った。

「そ、そのだな……何というか……この時代の俺じゃない俺が言う事ではないかもしれないが……」

ベジータは言葉を詰まらせながら言うべき台詞を探す。

その姿にブルマもまた驚いていた。

何せ、自分の知るベジータとイメージが一致しない。

ベジータならばこんな時、「貴様がこの時代のブルマか。フン」くらいで済ましてしまいそうな、そんなぶっきらぼうなイメージしかないのだ。

こんな必死に言葉を探している時点で何かおかしい。

やがてベジータは意を決し、真剣な表情になった。

「ブルマ……俺がいない中、よくトランクスを一人前の男に育ててくれた。

お前が育てたトランクスと、お前の作ったタイムマシンによって俺達の時代は救われた。

……よく頑張った。感謝しているぞ」

「……………」

真顔でブルマの功績を誇るベジータを、ブルマはポカンとした顔で見上げていた。

え、誰こいつ？

これ本当にベジータ？ ウーロンかプーアルが化けた偽物じゃない？

そう思い、気付けばブルマはベジータの頬を引っ張っていた。

「な、何をする!？」

「あ、いや、本当にベジータかなあって……あんだ、実はウーロンだったりしない？」

「するかあ！」

ベジータはブルマに怒鳴りながらも、激しく振りほどこうとはしない。

力の差もあって、派手な事をすればブルマを怪我させてしまう事が分かっているからだ。

そんな氣遣いもまた、ベジータらしくはなかった。

「ちっ……やはりどの時代でもブルマはブルマだな」

「あんたは随分変わったのねえ……驚くほど丸くなっちゃって……」

「フン！ 地球の環境がそうさせたんだ」

ベジータの変貌ぶりに驚くブルマの前でベジータは恥ずかしそうに腕を組んでそっぽを向いた。

変われば変わるものだ、とブルマは改めてベジータを見る。

あの傲慢そのものだった王子様がまさかこうなるとは。

そんなベジータと一緒に暮らしているという向こうの自分が少し羨ましく思えた。

「ブルマ。この時代の俺が死んだ時期から考えて、俺はそういう事を言う性格ではなかっただろう。」

だからハッキリと言った事はないだろうが、俺は決して流されて適当にお前を選

んだわけじゃない。

俺は……俺は、そのだな……つまり、あれだ……お前のおかげで救われたというか……最初の時点でもそれなりに気に入ってたというか……。

つまり……俺は、お前の事をだな……あ、あ、愛……ぐ……愛、し……」

ベジータは顔を赤くし、この世界の自分が最後まで言わなかっただろう本音をおうとする。

だが実の所、ベジータ自身もブルマにハッキリとそう言ったことは実はない。言わなくても伝わっているだろうが、こちらのブルマは違う。

この世界の自分が死んだ時期はまだ地球に馴染んでいない頃であり、あの頃の自分は自分勝手だったとベジータも自覚している事だ。

だから絶対に伝わってないだろう気持ちを伝えようとしているのだが、思えばブルマにも言っていない言葉を同一人物とはいえ未来のブルマに言うのは浮気に当たらないだろうか？

というかそんなのを抜きにしてもキャラではない。死ぬほど恥ずかしい。

そんな葛藤が言葉を遮り、とうとうベジータは顔を真っ赤にしてブウのように耳

から煙を出した。

「くそつたれええー！ーッ！ 愛しているぞブルマァァー！ーッ！」

叫び、そして逃げるように階段を駆け上って行った。

というか逃げた。超サイヤ人に変身までして逃げた。

その余りの光景にさしものブルマも啞然とし、目を丸くしている。

「……あっちのベジータって随分ユニークなのねえ」

「む、昔は結構自分勝手というか、もっと乱暴な人だったんですけど……随分変わったみたいで……」

「そっかあ……ベジータにも、あんなれる未来があったって事か」

ブルマはクス、と笑う。

それから階段を見上げて、小声で話した。

「……ばーか。そんなの最初から知ってたわよ」

★

こうして未来での戦いは幕を閉じた。

悟空達はタイムマシンに乗って元の時代へ帰り、トランクスは丘の上で自らが守

り抜いた星を見ながら微笑んでいた。

その隣にはマイがおり、トランクスに身を寄せている。

少し離れた木の裏ではバーダックが腕組みし、邪魔にならないように無言を貫いていた。

「守りきれたんだね……この世界を」

「ああ。これも悟空さんやりゼットさん、それに父さんや皆のおかげだ。

それに……ずっと俺を支えてくれたマイも……」

「トランクス……」

二人は見つめ合い、そしてどちらが先という事もなく口づけを交わした。

意図せずしてその光景を見てしまったバーダックは居心地の悪さを感じて「やるねえ」などと小声で茶化す。おい空気読めよ。

更に言うと、この光景は時の巢で時の界王神も見ているので後でからかわれるのは確定事項であった。

「これで終わったのかな……？」

「そうなければいいけど、きっとこれから色々な事があるだろう。」

けど安心してくれ、マイ。何があろうと俺は絶対に負けない」

「ああ、信じるよ……あんたはこの世界の、希望だからね」

これで戦いが終わるならばそれが一番だ。

だがそうならないという予感がトランクスにはあった。

タイムパトロールとして様々な時代を見てきた彼は、この後に起こるかもしれない戦いの知識も持っている。

破壊神ビルスにゴールデンフリーザ。第6宇宙。そして力の大会……。

もしかしたらベビーや超17号との戦いだってあるかもしれない。

この時代でそれらの戦いが起こる可能性は100%ではなく、しかし0%でもない。

だが何があっても勝ってみせる。絶対に負けたりはしない。

たとえ一人でも、この世界を……母を、マイを、守り切る。その決意がトランクスにはあった。

「——決意を固めているところを悪いが、一人ではないぞ」

そんなトランクスに、空気を讀まずに誰かが声をかけた。

無駄に洩いその声は、この時代に残った数少ないトランクスの仲間だ。

宇宙に旅立っていたが、どうやら戻っていたらしい。

そう思いながら振り返り……トランクスは、硬直した。

「大きくなったなあ……トランクス。それに強くなった」

そこにいたのは、昔に死んでしまったはずの師であった。

黒い髪と赤い胴着。頬の傷。

父親に似せて作ったという胴着には『飯』の文字が刻まれ、その顔には笑みが浮かんでいる。

「悟飯……さん……」

「一人でよく頑張ったな、トランクス。あの世でずっと見ていたぞ……立派だったな」

悟飯の言葉に目頭が熱くなる。

思わずセルを見ればしてやったりという顔で笑っていた。

そう、彼はやり遂げたのだ。

ザマスの手にかかる前にナメック星人を見付け出し、そしてドラゴンボールの力でピッコロを復活させた。

それに連動して究極のドラゴンボールが蘇り、究極のドラゴンボールをその辺の星で使用する事で超ドラゴンボールを復活……その力で、ザマスに殺された宇宙中の神々を蘇生させたのだ。

時の巢で時の界王神がドラゴンボールを使ってくれたが、それで蘇生出来たのは地球の人々だけだ。いくらドラゴンボールでも宇宙中を救う事など出来はしない。だが超ドラゴンボールならばそれが叶う。

神の言語がなければ超ドラゴンボールは使えないが、彼は宇宙を旅していた時にズノーと出会い、それも習得していたのだ。

そしてセルは更に復活したナメック星のドラゴンボールを使った。

そして蘇ったのは、まず三人。

勿論この三人で終わりではなく、今後もヤムチャや天津飯、ターレスなどを蘇生させていく予定だが、まずはトランクスを労う意味でもとある三人を優先して蘇生

させたのだ。

そのうちの一人はトランクス之父であるベジータ。

もう一人は孫悟飯。

そして最後の一人は……。

「本当に……よく頑張りました、トランクス。私達は貴方を誇りに思います」

「あ……ああ……！」

白銀の髪が風になびき、金色の瞳が慈しむようにトランクスを見る。

あの戦い以降、目を覚ます事のなかった彼女が再び瞼を開いている。

微笑み、立っている。

それがトランクスにはこの上なく嬉しかった。

「……リゼット姉さん……！」

青い風の希望の戦いによって邪神は消え、神なき世界は再び星の神を呼び戻した。

その全てはトランクスが勝ち取ったものだ。

今までずっと気を張っていた彼の瞳から涙が零れ、子供の時のような笑顔が浮かぶ。

そんな英雄へと、リゼットは優しく言う。

「……おいで」

「……………っ！」

英雄はこの瞬間、ただの子供へと戻った。

ずっと張りつめていた緊張の糸が切れ、師と姉に縋りついて泣き……だがその姿を笑う者は一人もいなかった。

彼が今までどれだけ戦い、どれだけ傷付いてきたかを知っているからだ。

——辛い未来を生きてきたトランクス……。

そしてブルマ達にやっと真の平和が訪れた。

そしてその平和は今後も大切にされていくだろう。

トランクスがいる限り……………。

（現代）

悟空「なあ、チチ」

チチ「なんだべ、悟空さ。今日の飯ならもうちょっと待ってくれた」

悟空「オウ、チチの事好きだぞ。勿論クリリンや悟飯が好きだとか、そういうのと違う意味でな」

チチ「」

悟飯「ああっ!? 母さんが倒れた!?」

悟天「お母さん!?」

悟空「チチー!?」

・というわけで、未来編はこれで終わりです。

悟空は蘇生しないままですが、主人公補正はトランクスに引っ越しているので後もトランクスが何とかするでしょう。

ビルスは最初からトランクスがブルーなので少し戦って後は機嫌よく帰るでしょうし、力の大会は時期的に起きるタイミングを完全に外していますが、万一起こっても全宇宙を救った功績で免除されます。

(他の宇宙は……まあジレンが宇宙の復活を望めばワンチャン……)

他にも色々あると思いますが、まあトランクスがいれば大丈夫だと思います。

第百十話　ゼンオー君の正体

投稿予約時間ミスりました。まあこういう日もあります。

未来世界での戦いから二週間が経過した。

あれからは実に平和なもので、特にこれといった出来事は起きていない。

あえて語るならば科学者達が集うパーティーに則巻千兵衛が来たり、アラレちゃんが出来てベジータをボコボコにしたり、ビルスが地面に落ちた物を食べてお腹を壊したりした程度だ。

悟空とベジータはいずれ来るだろう全十二宇宙對抗試合に向けて毎日ウイスの所で修行しており、リゼットとセルもまた神殿で修行に励んでいた。

ターレスとピッコロもそれぞれ、自分なりのやり方で腕を磨いている。

目指すは全宇宙對抗試合での優勝だ。

もし他の宇宙が優勝してしまえば、地球がどうなるか分からない。

そしてどんな未知の強豪がいるかも分からない以上、腕を磨くのは必須事項だ。第6宇宙との戦いは殆ど余裕での勝利だったが、他の宇宙相手にそう上手いくかどうかは分からない。

もしかしたら最悪、相手側の選手全員がヒット以上という事もあり得るのだ。

だから彼女達は修行に励む。

別に修行が大好きとかそういうわけではなく、地球の未来の為に己を鍛えているのだ。

だから決して趣味に時間を割いているわけではない。多分、きつと。

そんなある日の事。

神殿に突然、何の脈絡もなくウイスが訪れた。

普段であれば訪れる前に事前に知らせてくれるはずなのだが、今回はそれもなしでいきなりの来訪である。

これには、丁度おやつタイムでロールケーキを頬張っていたリゼットも目を丸くした。

彼女の前に置かれたテレビの中では野球の試合が行われており、バッターのヤム

チャが史上最多ホームラン記録を達成しようとしている。

多くのファンがその瞬間を今か今かと見守っており、ヤムチャコールが休む事なく響いていた。

「ウイス様……？ 珍しいですね、アポなしで来るなんて」

「申し訳ありません。何分急な事でして。」

全王様がリゼットさんと悟空さんへの面会を求めておいでです」

「全王様？」

ロールケーキを飲み込み、お茶で喉を潤す。

そうしてから、何やら物欲しそうにこちらを見ていたウイスの前に念力で一つ皿ごと転移させた。

全王様……聞かぬ名だ。少なくともリゼットの知るドラゴンボール無印からドラゴンボールGTまでには登場しない名であるし、各種ゲームや劇場版などでもやはりその名は見えていない。

とはいえ、この世界はとくにそれらから外れた特殊な世界線である事は理解しているし、今回もそうした相手なのだろうと当たりを付ける事は出来た。

……そういえばつい最近、ゼンオー君という子供と会ったが彼は今どうしているだろう？

「モグモグ……十二の宇宙、全ての頂点に立たれるお方です」

「宇宙の頂点ですか。破壊神よりも上なのですか？」

「はい。ビルス様やシャンパ様も恐れています……モグモグ、これ、美味しいですねえ」

破壊神が恐れるとは、これはまた凄まじいのが登場したものだ。

かつてリゼットは、宇宙は一つであると考えていた。

神の最高位は大界王神だと思っていたし、それがいない今、東の界王神や老界王神こそが最高神であると思っていた。

だが実際にはそれと同格の神々が十二の宇宙にいて、更にその同格の破壊神、更にその上の全王なる者がいるらしい。

……かつて、閻魔大王は悟空に『界王様は宇宙の頂点に立たれるお方』と言っていたが、あれは一体何だったのだろう。

「……お尋ねしたいのですが、実は東西南北の全王様がいたり、その上に大全王様

がいたり、更にその上に全王神様や大全王神様とかいないですよね？」

「いないですね。少なくとも私の知る限りではそのような神々は存在しません」

どうやら今回は本当に神格インフレも打ち止めのようだ。

それにしてもここまで来ると、地球の神ってもう殆ど一般人と同じようなものなんじゃないかなと思えてしまう。

地球の神などの星々の神の上に閻魔がいて、閻魔の上に界王がいて、東西南北の界王の上には大界王。その上に界王神で更に東西南北の界王神の上に大界王神。これだけでもインフレしすぎなのに更に破壊神に、その上に全王だ。もう意味が分からない。

流石に時の破壊神とか時の全王はいないだろうな、と少し不安になってしまう。

「そのようなお方が私に何の御用なのでしょう？」

「私にも分かりません。ビルス様も不思議がっておられます。

しかし全王様の命令は宇宙の命令……無視するわけには参りません。

あの方のご機嫌を損ねれば宇宙ごと消されてしまいます」

……とんでもなく厄介な相手だというのはよく分かった。

よりもよって宇宙破壊と来たか。

そういうのはスーパードロボットの戦いでやって下さいと思わないでもない。

「分かりました。向かいましょう」

「助かります」

丁度野球の試合も終わった所だ。

画面の中ではヤムチャが勝手にホームランを決めており、チームメイトや観客の祝福を受けながらグラウンドを走っている。

リゼットはテレビの電源を切ってウイスの手を取り、以前行った事のあるビルス星まで空間移動をした。

一瞬にして景色が変わり、切り株に腰をかけて落ち着かない様子の子のビルスが顔をあげる。

隣には界王神もおり、彼もまたソワソワしていて落ち着かない様子だ。いや、彼はいつもこんなんか。

「来たか！」

ビルスは切り株から飛び降りると、リゼットを拉致するように連れ出した。

そして悟空達から離れた場所で彼女に話しかける

「おいリゼット。いいか？ 絶対に全王様の機嫌を損ねるんじゃないぞ。

もしそうなれば悟空もお前も僕も、この第7宇宙も全てが終わりだ。

……悟空の奴は何をするか分からんが、お前と一緒に誘われたのは不幸中の幸いだった。

いいか、悟空の奴をよく見張っている。後、界王神にも万一の事がないようにしろ。

宇宙の命運はお前が握っていると思え！」

「は、はあ……」

ビルスの不安はある意味もつともだ。

悟空は目上の相手に敬意を持たないわけではないのだが、そうした事を少年時代にあまり学んでいないせいで、とにかく自然体で相手に接する。へり下るという事がない。

流石に彼も初対面でいきなり「オッス！」などと言って無礼に接する事はしないし、その程度の自重は出来るのだが……相手から接して来たならば話は別だ。

悟空も最低限の礼儀くらいは保とうとするが、基本的にそういうのに向いていない。言ってしまうと接待が下手なのだ。

それはそれで彼の魅力なのだが、相手によっては失礼と取るだろう。

なので、全王様とやらがそういうのを気にする方だった場合非常に不味い事になる。

……まあ悟空を呼んでいる時点で気にしないような気もするが。

「ところで、意外ですね、界王神様の事を心配するなんて」

「ホホホ、界王神と破壊神はセットなのです。」

「界王神が死ねば破壊神も一緒に死んでしまうのですよ」

リゼットの疑問にウイスが横から口を挟んだ。

その呆気なく暴露された弱点にビルスが顔色を変え、ウイスを咎める。

それは余りにも意外な急所であり、だからこそリゼットはちょっと待てと思った。

「……あの、それならどうして魔人ブウを放置してたんですか？」

元々は五人いた界王神様のうちの四人が亡くなっているんですが……」

「ぐっ」

「ホホホ、ビルス様は一度寝るとなかなか起きませんからね。

界王神達が助けを求めて来た時も、眠いからと不機嫌に追い返してしまったのです」

「ウイス！」

どうやらこの猫神様、自分の命のストックが減っている事にも気付かずグッスリお休みしていたらしい。

大方、界王神達が助けを求めて来た時も死ぬような事だとは思っていなかったのだろう。

しかし気付けば残ったのは一番弱かった東の界王神一人。これには彼も相当慌てたはずだ。

魔人ブウはまさしく、あと一步で宇宙を崩壊させる所まで来ていたわけだ。

「とにかく、絶対に全王様の機嫌を損ねるなよ。いいな？」

「わ、わかりました」

ビルスの剣幕に押されながら頷く。

何とも嫌な宇宙の危機もあったものだ。

宇宙の命運を賭けて戦うわけではなく、宇宙の命運を賭けてご機嫌取りをする羽目になるとは。

あの唯我独尊のビルスがここまで恐れる以上、その能力は本物なのだろう。

少なくとも、全霊を振り絞つての不意打ちでようやくシャンパに勝てた自分などでは逆立ちしても手に負える相手ではあるまい。

「では行きますよ。カイカイ！」

界王神の星間瞬間移動で移動すると、次に視界に移ったのは奇妙な宮殿の前であつた。

その宮殿だが、実に分かり易いデザインをしている。

『全』という文字をそのまま建物にしたような形状をしており、驚く程に捻りがない。

宮殿の前にはウイスと似た服装の小柄な男がおり、悟空達へと一礼する。

「ようこそおいで下さいました」

——強い。

リゼットは一目見ただけでその男の、底すら見えない実力の片鱗を感じ取った。

感知出来ているのは僅かに強さの片鱗のみ。しかしそれすらが、全力時の自分を凌駕してしまっている。

破壊神との差すらまだ大きいというのに、その先にこれほどの強者がいたとは。全く、本当には上がいるものだ。

彼は悟空とリゼットを見上げると、温和に微笑む。

「貴方達が孫悟空さんとリゼットさんですね」

「ああ、そうだ」

「初めまして。リゼットと申します」

悟空もどうやら彼の強さを肌で感じているのだろう。

平静を装ってはいるが、闘争心が沸き上がっているのをすぐ隣のリゼットには誤魔化せていない。

しかし彼にも分別くらいはある。昔の、誰彼構わず「おっす」と軽い挨拶をしたりにしていた頃の悟空ではない。

だから表面上はそういう態度を見せないくらいには腹芸もこなせるようになってくる。

もったも、それすらこの小柄な男には見透かされているだろうが。

「急いでいた為、この者達が正装ではない事をどうぞお許しください」

「気になさるぬように。貴方にとってはその服が正装なのではありませんか？」

「まあな」

小柄な男の問いに悟空が軽く笑って返した。

中々話の分かる男だ。これだけでも大分好印象である。

ビルスは正装しろと言っていたが、そもそも地球人の正装など向こうにしてみれば文化が違うのだから私服とどう違うのか分からないだろう。

それならば普段通りの恰好で赴いた方が余程いい。

正装というのはあくまで、相手がそれを正装であると認識出来てこそ意味があるのだ。

例えばベジータが好んで着用する戦闘服も、サイヤ人にとっては正装だが地球人にしてみれば変なコスプレにしか見えない。それと同じ事だ。

「なあウイスさん。あの人、大分強えだろ？」

「分かりますか？」

「何となくな」

前を歩く男の背を見ながら、悟空が抑えた声で尋ねる。

気は測れない。だが今の自分が測る事すら出来ないというのが既に実力差の証明でもあった。

ウイスはそんな悟空に少しばかり感心し、笑みを浮かべる。

「大神官様は全宇宙でも五本の指に入るほどの戦闘力を持つと言われています。私ですら足元にも及びません」

「そりやすげえ」

ウイスの話を聞いて悟空が楽しそうに口角を釣り上げる。

サイヤ人としての習性故だろうか。強い相手と聞くと心が高揚してしまうのだらう。

とはいえ、今はまだ戦いすら成立しない相手だという事もまた理解出来ない彼ではない。

特にそれ以上騒ぐ事もなく、悟空はただ大神官の背を凝視し続けた。

（全宇宙で五本の指、ですか……）

一方リゼットは今のウイスの言葉から、自分達がいかに狭い世界にいたかを痛感していた。

まず今の言い方からして、五本の指に恐らくウイス自身は入っていない。

これは各宇宙に破壊神がいて、それぞれにウイス級の付き人がいると考えれば何ら不思議はなく、単純に考えてもビルスと同格が11人。ウイスと同格もまた11人いると考える事が出来る。

つまり……まだ四人いるのだ。ウイスよりも上の強者が。

全く世界は広いものだ。しかし、まだ目指すべき高みがあるというのは喜ぶべき事でもある。

リゼットはそんな事を考える自分に苦笑し、悟空の事を言えないな、と思った。

やがて全王の部屋へと辿り着き、大神官が跪く。

その前には椅子に座る全王がおり、ここでようやくリゼットは自分が先日何をやらかしてしまったのかを理解した。

「やあ、よく来たね。悟空、リゼット」

そこにいたのは顔が水色と青に分かれた小柄な人物。

そう、以前にリゼットが名前のない星で出会ったゼンオー君……否、全王であった。

素直にやってしまった、と思う。

頭撫でたり、抱っこしたり、どう考えてもこれは無礼だ。付き人があの時死ぬほど驚いていたのも当然の所業である。

いや、だってあんな所に全宇宙の頂点がいるとか普通思わないし。外見だけを言えば界王神よりも更に威厳ないし。まさかこれが全宇宙の頂点などと、初見で気付けというのは無理だ。

呼び出された理由は……もしかして先日の無礼を咎める為だろうか？

いや、それは恐らくない。彼も決してまんざらではなかったはずだ。

だが宇宙の頂点としての体裁もある。付き人に言われて気が変わった可能性もゼロではない。

ともかく相手の出方をまずは窺うしかない。とりあえず『消えろ』とか言われぬ事を願うばかりだ。

界王神「この者達が正装ではない事をどうぞお許してください」

リゼット「……………」

リゼット（あれ？ 私まで正装じゃない扱い受けてる!?!）

第百十一話 経験者は語る

——どうしてこうなった。

全王の宮殿の一室でリゼットは座りながら憂鬱気に眉をひそめていた。

彼女が今現在悩んでいるのは、その腕の中にいる存在についてだ。

全十二宇宙の頂点、全王。彼は今、あろう事かりゼットの膝の上に乗って楽しそうにはしゃいでいた。

向かい側には悟空がおり、リゼットが即席で創ったジェンガで遊んでいる。

悟空とリゼットが呼ばれた理由は意外も意外で、友達になって欲しいというものであった。

何でも、今まで彼と握手したり抱きしめてくれたりする相手がいなかったという。悟空はこれに快く承諾し、リゼットもまた退路はないと悟ってこれを受け入れた。恐ろしきは悟空の凶太さか。

彼は破壊神すらも恐れる全王に、いかに本人から呼び方の変更を求められたとはいえ、『全ちゃん』なる渾名を与え、すっかり打ち解けてしまったのだ。

一つ言っておくと悟空とていきなりそんな名前を呼んだわけではない。

全王から呼び方の変更を求められ、彼なりに考えたのだ。

だが思えば悟空は自分で何かに名付けた事がほとんどない。技だつて大抵誰から教わったもので、唯一オリジナルと呼べるのは龍拳くらいだ。

そんな中、悟空は不意に昔も似たような事があったのを思い出してしまった。

——……はっちゃんの時みてえだな。じゃあ今回は全ちゃんか？

思わずそう言ってしまったのが悟空の失敗であつた。

その眩きを聞いた全王が「それいいね！」と氣に入ってしまった事で、めでたく『全ちゃん』になつてしまったのだ。

リゼットも一度全王様と呼び名を直そうとしたのだが、前の方がいいと本人に言われたので以前の通り全王君と呼ぶことにしている。

これ、大丈夫なんだろうか？ 無礼打ちとかそのうちされそうで少し怖い。

ちなみに同行してきた界王神は宮殿に到着してからずっと土下座している。何と
いうか、神の世界もやっぱり縦社会なんだなあと妙に悲しい気持ちにさせられる光景だ。

「僕ね、ずっと友達が欲しかったのね。」

今日は初めて友達が出来たのね。それも二人も」

「そっかあ、オラ達が全ちゃんの初めての友達かあ……そりゃあ不思議だなあ。全ちゃん、こんなに話が分かる奴なのに」

悟空は慎重にジェンガのブロックを抜きながら、うーむと考える。

そしてそーっとブロックを抜き、一番上へと積んだ。

「オラが思うに多分、みんな全ちゃんの良さを分からねえんじゃねえか？」

「そうなの？」

「ああ。全ちゃんはその気になりやあ何でも消せちゃうんだろう？」

皆、それが自分に向けられるのが怖えんだよ、きつと。

んで、その能力ばっか怖がって全ちゃんの事を見ねえんだ」

悟空の意外な正論に全王が表情を変えず、しかし少しばかり落ち込んだのをリ

ゼットは感じた。

リゼットはそんな彼を慰めるように頭を撫でる。

これに側近の二人はハラハラしっぱなしだ。先程からずっと滝のような汗を流し

続けていた。

足元に溜まっている汗だけで14kgの砂糖水ならぬ塩水が出来そうだ。後で刃牙に飲ませよう。いや、この世界に刃牙いけないけど。

界王神はこの世の終わりのような顔をし、頼むからこれ以上悟空が変な事を言わないようにと祈っている。

「だからよ、まずは相手を怖がらせないよう頑張ろうぜ。

すぐに消すんじゃないくてよ。まずは相手の言葉を聞いてやるんだ。

悪い奴は確かに沢山いるし、全員と仲良くしろなんてオラだって言わねえ。

けど、仲良くなれるはずの奴まで消しちゃったら勿体ねえだろ？」

「うん、勿体ないね。悟空もそういう事あった？」

「ああ、あったさ。オラの仲間なんかほとんどそんな奴ばっかだぞ。

そうだなあ……例えば『亀』って書いた石を相手より先に探すっちゃう修行があつてよ、それでオラは相手に騙されちゃったんだ。『その石は本物か？ 貸してみろよ』って言われてな。

結局オラはその日は修行に負けた罰で飯を食わせてもらえなかったなあ」

「酷いね、それ」

「だろ？　けど、そいつは今じゃオラの一番の友達だ。

もしオラに全ちゃんと同じ力があって消しちまったら、今頃そいつはオラと友達じゃなかった。

他にも金を奪いに来た奴もいたし、ライバル流派の武道家もいた。

世界征服を企んでた奴もいれば、地球を破壊しに来た奴だっていた。

けど、そいつ等は今じゃ頼もしい仲間だ。

消しちまったら、今のあいつ等はいなかっただろうな」

それは、多くの敵と戦いながらその敵すらも仲間にしてきた悟空だからこそ言える事で、彼しか言えない事だ。

孫悟空だからこそ教えられる事がある。

彼の言葉だからこそ重みがある。

全王も悟空を見上げながら、彼の言葉を噛みしめるように聞いていた。

「……じゃあ、もしかしたら僕が消した奴の中にも、友達になれた人はいた？」

「いたかもしれないな。けど、消しちまったら、もうそれも分からねえ。

分かるか、全ちゃん……そいつがいい奴だったのか悪い奴だったのかも二度とわからねえ。消すっていうのはそういう事だとオラは思う」

悟空は言い聞かせるように全王の目を見て、真剣な声で話す。

宇宙を消すという行為……その事を悟空は決してよく思っていない。

かつて、星を次から次へと壊していたフリーザに怒りを燃やした彼だ。全王の行いを良しと思うはずがない。

もしもこれがフリーザのような輩であれば、彼は今頃戦いを仕掛けていただろう。しかし全王は邪気のない子供だ。だから悟空も怒るのではなく、諭すように話した。

悪いのは全王だけではない……何でも消してしまえる力と、そして彼を正さなかった周囲の連中こそが最も悪い。

「だからまずは、相手を知る事から始めりゃいいんだ。

そうすりゃあ、すぐに友達なんか沢山できっさ。全ちゃんは良い奴なんだから」
「本当？」

「ああ、本当だ。なあ神様？」

そこで私に振りますか。

そう思いながらもリゼットは微笑み、全王を少しだけ強く抱きしめた。

こう言うてはあれだが、サイズのぬいぐるみみたいで抱き心地がいい。

「そうですね。立場や力の差というのはそれだけで互いを阻む壁になってしまいう事があります。

ましてや宇宙の頂点ともなれば、そこにいる界王神様のように平伏してしまう方も多いでしょう。

それはある意味仕方のない事かもしれませんが、だからこそ全王君はそれを相手に感じさせないようにするのがいいと思います」

「うーん、難しいなあ」

「大丈夫、ゆっくりやりましょう。悟空君も私もお手伝いしますから。

もう全王君は独りじゃないですよ」

独りじゃない——その言葉に全王の目が揺れたのを、大神官だけが捉えた。

全王は常に孤独だった。否、周りが孤独にしていた。

全てを消せる能力。全王という絶対の権威。

それを誰もが恐れ、消される事に怯えた。不興を買うのが怖くて進言すらしなかった。

結果として出来たのは、全王の言葉に怯えて服従するばかりの神々のみ。

だが悟空とリゼットはそこに小石を落とし、全王の心に僅かな波紋を呼んだ。

面白い人達ですね……そう思い。大神官は不気味に晒う。

もっとも、その目だけは笑っていないが……。

「ありがとう、凄くうれしい」

全王は宙に浮かび、リゼットの胸に飛びつく。

リゼットはこれを優しく受け止めて抱き上げると、全王は今度は悟空の手を握った。

どうやら握手が気に入ったらしく、悟空もそれに応じて全王を上へ下へと遊泳させるように握手をした。

この光景に界王神の胃はストレスでマッハだ。緊張しすぎてそろそろしめやかに失禁しそうである。

「なあ神様。全王様のいい友達になれそうな奴いねえかな？

あんま全王様を怖がらねえような奴がいいな」

「んー……」

リゼットは頬に指を当てて考える。

全王の友達、となるとやはり精神年齢的に近い悟天やトランクスだろうか。

しかし出来ればもつとこう、全王を全く恐れず、それについて彼に全力でぶつかるような相手の方がいい。

該当する人物は……。

……いた。一人だけ、確実に全王だろうと恐れずに全力で遊ぶ娘が。

「一人、心当たりがあります。あの子なら確実に全王君とも仲良くなれるでしょう。

……多分、立場とかそういうのを理解しないでしようし」

「本当？ 友達増える？」

「ええ。その子を消したりしないと約束して頂ければ」

「うん、約束するよ。地球もその子も消さない」

「全王様に約束とは無礼な！」

「うるさい。消すよ？」

「――」

リゼットの出した条件に側近の二人が怒りを見せたが、それはすぐに全王によって鎮圧された。

もしかすると全王は、自分に従ってばかりで何かというと自分から他者を遠ざけるこの側近の事をあまり快く思っていないのかもしれない。

リゼットはそんな彼の頭を、痛くないように軽く叩いた。

まさかの暴挙に側近は叫んだ。アバー！

「駄目ですよ、消すなんて言ったら。」

そんな事をしていては誰も全王君に近付いてくれなくなります」

「駄目だった？ リゼット怒ってる？」

「はい、少し怒ってます。そのお二人はいつも全王君を守ってくれているのですでしょう？

ならそんな事を言わずに、日ごろの感謝を伝えるべきです。そうする事で少しずつ人の輪は広がっていきます」

リゼットの言葉に全王は少し考え、そして側近へと顔を向けた。

それから、一度として側近にかけた事のない言葉を口にする。

「いつもありがとうね。それと消すなんて言ってごめんね」

まさかの労いに側近は叫んだ。アバー！

そしてリゼットは微笑み、全王の頭を撫でる。

「はい、よく出来ました。偉いですよ」

「もう怒ってない？」

「ええ、怒ってませんよ」

リゼットが怒ってないと言うと、再び全王は嬉しそうに飛びついた。

こうして接していると宇宙の頂点などとはとても信じられない。

一方界王神は「消すよ？」の部分でガタガタと震えだした。

もしかしたら自分に言われたのでは？　と思っているのかもしれない。

それにしても彼はいつまで土下座をしているのだろう。

とか思っていたら何故か床に寝そべりはじめた。

土下寝ッッ！　敗北のベストオブベストッッ！……！！

「ねえ、あれ何してるの？」

「さあ？ 放っておいていいんじゃないか？」

「そうだね」

その後も悟空と全王はジェンガで遊び、何度かやって悟空が負け越した所でその日はお開きとなった。

全王は残念そうにしていたが、まあ神と人では生活が違う。

また必ず、今度は新しい友達を連れてくると約束し、二人は地球へと帰って行った。

ちなみに界王神は自分では立つ事も出来ない程憔悴しきっており、悟空に荷物のように担がれている。

第7宇宙の最高神とは一体何だったのか。

★

「帰ったぞ、ビルス様」

「も、戻って来たか！ どうだった？」

「別にそんな特別な用じゃなかったさ。

友達になってくれて言われたから友達になってきただけだ」

「友達!? 全王様とお前達が!？」

「ああ。こう言っちゃなんだが……思ってたよりずっと子供っぽいな。」

宇宙を消せるっていうからどんな奴かと思ってたんだが、悪い奴っていうよりは悪い事といい事の区別もついてねえ感じだった。

敵だった時の魔人ブウと似てつかもな……ビルス様達がびんのも少し分かる気がする」

ビルスの問いに、悟空は淡々と答えた。

友達になったとあっさり言ったが、悟空は決して全王を軽く見ているわけではない。

全王は言ってしまうと、癩癩持ちの子供に『いつでも宇宙を消せる権利』を持たせてしまったような存在だ。

全王にとって宇宙を消すと言うのは気に入らないゲームのセーブデータを捨てるに等しい行為であり、そこに罪悪感などは生じない。

例えば町を発展させるゲームがあったとして、思い通りにいかなかったセーブデータを子供が消したとしても、その子供は別に悪くはないだろう。

全王にとって宇宙とはそういうものなのだ。現実感が悟空達とは致命的にズレている。

宇宙が多すぎるから整理するために消す。

この宇宙は出来が悪いから消す。

この宇宙にはむかつく奴が沸いたから消す。

それは子供がゲームのデータを消すのと同じように。全王にとっては悪い事ではない。

「まあ、地球は消さねえって約束してくれたし、根っこはそんな悪くねえと思う。それより分からねえのは大神官様の方だな……オラには全王様より、あっちの方が不気味に見えるぞ」

悟空は全王を全ちゃんと呼ぶ許可を得たが、だからといってどこかれ構わずにその名前を呼ぶような事はしない。

全王が他の神々にとってどういう存在で、その呼び方を迂闊にあちこちで言えばどういう感情を抱かれるかくらいは予想出来る。

父への不評に複雑そうな顔をしながら、ウイスは話題を切り替えた。

「それでリゼットさん。一体どなたなのですか？ 全王様のお友達というのは」
ウイスの口から発された問いにビルスがリゼットを見た。

あそこまで言ってしまった以上、今更適当な事を言いましたは通じない。
最悪、不興を買って宇宙が消されてしまう。

そんな約束をしていたのかと、ビルスは無言でリゼットを非難していた。

「この前、ビルス様がお腹を壊してしまった時の事を覚えていますか？」

「ああ、あれかあ」

ビルスが思い出したように頬を掻いた。

それはつい先日のものであった。

Mr・サタン主催で科学者が集まり、一番の発明品を決める世界発明アワードというパーティーが西の都で開催されたのだが、そのパーティーで受賞に選ばれたのは大凡の予想を覆して則巻千兵衛という名の田舎村のドクタースランプであった。

そう、則巻千兵衛である。アラレちゃんのキャラクターで実は最初期は主人公だったはずが気付いたらアラレちゃんに主役の座を奪われていたあの変な物ばかり造るが天才である事は間違いないあの男である。

彼の造った発明の『ホンモノマシーン MK-II』は実際凄まじいものであり、強い願いを受信してそれを空气中から作り出してしまうという神の領域に手が届くレベルの代物であった。

リゼットも同じ事が出来るが、発明でこれをやられてしまうと神様の立場というものがない。

さて、勿論そのまま何事も終わるはずがなく、式の途中に何故かドクターマシリトが乱入した事から事件が発生した。

彼は確かにアラレちゃんの終盤でオボッチャマン君に吹き飛ばされて死んだはずなのだが、式に呼ばれなかった悔しさで地獄から脱走してきたらしい。

いくらギャグ漫画のキャラクターだからといえど、とんでもない話である。

そんな簡単に脱走出来るなら今頃地球にはブロリーやクウラやその他諸々の悪党が大集結してしまっている。

そんな出鱈目をやらかした彼はアラレちゃんに『遊びたくてしょうがなくなる』葉、アソビタイムZを与えて式に乱入し、アラレちゃん&ガッチャンズを大暴れさせた。

どうでもいいが、リゼットが下界を覗き見たところ、何故かは知らないがペンギン村の住人は誰一人として年を取っていないかった。本気でどうなっているのだろう、あの村。時間まで無視してあそこだけサザエさんワールドになってしまっているし、悟空などが気を高めて地球全体が揺れている時も、あそこだけは平和なままだ。全ての干渉をシャットアウトしてしまっている。多分魔人ブウが地球を消し飛ばしてもあの村だけは無事なのだろう。

太陽は喋るし月も喋るし、地球は地球儀だし、ちょっと本当に意味が分からない。そんな理不尽の化身たるアラレちゃんが暴ればそれはもう手が付けられるはずもなく、自信満々で挑んだベジータは手も足も出ずにボコボコにされ、超サイヤ人ブルーとなった悟空すらも割と本気で負けそうであった。ギャグ補正悔りがたし。そこでブルマは毎度恒例の、最早ただの便利キャラになりつつあるビルス召喚を行おうべく『ホンモノマシーンMK・II』に世界中の人々の『世界一美味しい物』の念を集結させて変な球を生み出し、その匂いは宇宙を越えてビルスの星にまで届いて昼寝中であつたビルスを起床させて地球へと見事呼び出す事に成功した。元気玉ならぬ元氣食といったところだろうか。

その味はビルスをこの上なく満足させてついでにマシリトも破壊してくれたが、しかしその直後にビルスは腹を下して大急ぎで帰ってしまったのだ。

ビルスがお腹を壊した理由はよくわかっていない。人々の考える様々な美味しい物を無理矢理凝縮させた事で化学反応が起きたのかもしれないし、破壊神の胃でも耐えられない美味さだったのかもしれない。

もしかしたらその玉を造る前に同じマシーンでウンチを造っていたせいかもしれない。

どちらにせよ、破壊神でも腹を下す事が分かった貴重な1シーンであった。

余談だがこの事件にリゼットは一切関与しておらず、終始天界から眺めていただけだ。

ギャグ漫画のキャラクターがいくら暴れたって深刻な事態に発展するはずがないと最初から分かっていたし、ある意味安心して観戦に徹する事が出来た。

尚、アラレちゃんが割った地球はリゼットが修復したので別に何もしなかったわけではない。

「アレは美味しかったなあ……お腹を壊すのは勘弁だけど、もう一度食べてみたい

よ。

だがそれがどうしたんだ？」

「ああ、そうか！ 分かったぞ神様！ アラレちゃんを全王様の友達にする気だな!？」

ビルスはアラレちゃんに興味を全く抱かなかったので覚えてすらいらないようだが、流石に悟空は理解が早い。

そう、リゼットの言う全王の友達になれそうな娘とはアラレとガッツちゃんズの事である。

彼女達ならば全王相手だろうが遠慮など一切しないだろうし、全力で遊ぶ事だろう。

むしろ全王相手に物怖じせずに本気で遊べるのなど彼女達くらいしかない。

「そりゃいい考えだ。オウちよつとペンギン村に行って呼んでくるぞ」

悟空は名案だとばかりに賛同し、その場から消えた。

それにしても不思議なのは、あの村だけ明らかに世界観そのものが異なる点か。見ている物の主観云々の話ではなく、本当に世界が違う。

太陽は話すし月も話す。昼夜は一瞬で入れ替わる。地球には『地球』と書いてあり、それにアラレちゃんがいくらペンギン村で地球割りをしてもこちらの地球にダメージはない。逆も然りだ。

……もしかするとペンギン村とは、本当に別の世界線の地球に存在している村であり、あの村だけが何らかの理由でこちらの地球に繋がってしまっているのかもしれない。

いわばペンギン村とは二つの異なる世界線を繋ぐ、入り口の役割を果たしているのではないか？

そこまで考えてリゼットは思考を打ち切った。

馬鹿馬鹿しい。ギャグ漫画相手に何を本気で考察しているのだ、自分は。

ところでふと思ったのだが、あの村の何処かを今日もウロウロしているであろう絶対神の分身ことガスマスクロボを連れて全王と面会させたらどうなってしまうのだろうか？

少し興味が沸いたが、それをやると宇宙が終わる気がしたのでこの思考もすぐに打ち切った。

「キーン！」

「キーン！」

「クピポパー！」

後日。

地球のペンギン村にて仲良く走り回る全王とアラレ、そしてガッチャンズの姿があった。

全王は相変わらず子供染みているが、しかしアホしか住んでいないペンギン村の住民は誰一人として全王を恐れず、普通の子供として接してくれる。

勿論リゼットも定期的に全王の元を訪れては彼に色々教えたり、遊んであげたりしている。

全王に必要なのは何でも言う事を聞き、彼を崇める者達ではない。

それが続けていては彼はいつまで経っても神の視点でしか物を見れないし、星や命の尊さに気付けない。

そういう意味では、アホしかいないペンギン村はまさに適任である。

全王は、変わりつつある。

その事を側近二人は強く感じていた。

もしかしたら全王が不用意に宇宙を消したりしない。そんな未来が来るのかもしれない。

そしてその光景を、大神官だけが面白くなさそうに空から見下ろしていた。

第百十二話 親善野球試合

その日、リゼットは目を閉じて『ある物』の創造に挑んでいた。

別に大それた物を創ろうとしているわけではない。

単なる物質創造の練習であり、そのテストとして先日に見たとある食べ物を再現しようとしているだけだ。

それは『ホンモノマシーンMKⅡ』が生み出した、人々の美味への想像を結集して生み出されたあの変な球である。

別に『ホンモノマシーンMKⅡ』に対抗意識を燃やしたわけではない、断じてない。

人々の念を結集して物質創造とか考えた事もなかったわーと敗北感を感じたわけではなく、これは単なる練習なのである。

そしてリゼットが思うに、あれは実際に味を混ぜているわけではない。

味というのは混ぜればいいわけではなく、そんな事をすればむしろんでもないゲテモノが完成してしまうのは想像に難くない。

いかに美味かろうと組み合わせが大事なのだ。ラーメンは美味い。ケーキは美味い。だからといってラーメンにケーキを入れるアホはいない。

上等な料理に蜂蜜をブチ撒けるが如き愚行ッ!!

つまりアレは単純な味の合成ではなく、恐らくは人々の『美味』という概念そのものの結集。

思うに、あの球には数百、あるいは数千の美味の概念が密集され、食べた者が最も美味いと思う味に自動的に変化するのだ。

だが同時に思う事は、まだまだあれは未完成だったという事。

あの時テレビを見ていたほんの僅かな人々の味の概念しか集めておらず、更に集めたのは人間の念のみ。

そう、この地球という星の全てを結集したわけではない。

ならばもし、全てを結集した『完全版』を創ったならば、それは果たしてどれ程の物となるだろう。

一度考えるとどうしても頭を過ぎってしまう。試してみたい衝動に駆られる。故にリゼットは試してみる事とした。

方法は簡単。弱い念話で地球に生きる全ての生命体の無意識へと働きかけ、それぞれが思う一番おいしい食べ物を連想させてその思念を集めるだけ。

別に洗脳したわけではない。ただちょっと、何故か唐突に美味しい物を世界中の生物が一斉に想像したただけだ。

後、本物マシーンMKⅡで創り出した物に紛れ込んでいたウン○要素は当たり前だが排除した。

ビルスがお腹を壊したのはやはり、あれが原因だったらしい。

ウン○チの概念が混ざってしまったせいで食べる〓ンチ〓お腹を壊すという大惨事に繋がってしまったのだ。

デメリットを排除し、更に全ての生物の念を結集。この地球の旨味を凝縮させて究極の食材を誕生させる！

一体何やってるんだろう、この神様、とか思っではいけない。彼女も結構暇なのである。

まるでリゼットの掌に集うように地球中から念が集い、光が満ちる。

それは彼女の手の上で一つの球体となり、以前の不完全品とは異なり青く輝き出

した。

それはまるで——地球。掌サイズにまで凝縮した地球そのもののようなそれは、存在しているだけで見る物の食欲を刺激せずにはいられない。

この日、地球上の全生物は理由も分からずに一斉に口内に唾が満ちて空腹感を感じたという。

「うわあ、何か凄いの出来ちゃいました……」

「貴女は何をしているのだ」

気を抜けば自分自身ですら涎を垂らしそうになるが、はしたないので意地で耐える。

セルも口を横一文字に結び、タピオンは慌てて袖で口を拭っていた。効果は抜群だ。

ポポや人参化、兎団は隠しもせずにダラダラと涎を垂らして水溜まりを作っている。

無理もない。いわばこれは美味さという概念そのもの。

口にすれば必ずや至上の幸福を得られる事間違いないの、神の逸品なのだ。

しかしこんなものを食べてしまうと、しばらく他の物が食べられなくなってしま
いそうだ。

★ 食べてみたい気持ちを理性で抑え、リゼットはこれを封印する事にした。

「野球……ですか？」

「そうだ。第7宇宙と第6宇宙の親善試合だ。

しかし親善試合といえどシャンパに負けるわけにはいかん。

揃えられる限りの最強のメンバーで完膚なきまでに叩きのめすぞ」

そしてまた何日か経過したある日の昼。

リゼットとセルが修行の合間の休憩として超速で『たたいて・かぶって・ジャン
ケンポン』に興じている時に唐突に神殿を訪れたビルスから聞かされた内容にリ
ゼットは首をかしげた。

野球は勿論知っている。

1チーム9人で行う球技で、攻守に分かれて得点を競い合う極めてポピュラー
なスポーツだ。

昔はよく、ドラゴンボールZの枠を潰して放送された事で当時の子供達の恨みを買った罪深き存在でもある。

詳しいルールを語ると意外と長くなるのであえて割愛するし、そもそもリゼットはそこまで詳しいわけでもないが、とりあえず基本的なルールくらいは把握している。

しかしまさかそれを、宇宙の頂点に立つ破壊神同士で行うとはとんでもない話だ。破壊神同士で行う草野球……何だか不吉な予感しかない。

「そうですね……こちらから最強のメンバーを決めるとすれば悟空君、ベジータ、ピッコロ、セル、ターレス、悟飯君、タピオン、ナッパ……ああ、それからヤムチャは確かプロ野球選手でしたね。

後は4人に分身出来る天津飯や、超能力を使う餃子君も候補に入れていいでしょう。

ブウは……ルールを理解できない気がしますね」

リゼットが指折り数えながら、思い付いた面子の名前を適当に挙げていく。

普段は戦力外のヤムチャも、今回ならばむしろ主戦力に抜擢してよさそうだ。

さりげなくリゼット自身を外しているが、生憎リゼットに野郎達に紛れてスポーツに興じる趣味などない。

こういうのは観戦するのが一番楽しいのだ。

その面子の充実ぶりにビルスがうむと頷く。

「ふむ、悪くないな。流石は我が第7宇宙だ、抱える人材で大きく向こうを引き離している」

「全員地球の抱えている戦力ですけどね」

「……やっぱりこの星おかしいんじゃないか？ 一つの惑星に戦力を偏らせすぎだろ」

満足そうなビルスであったが、ウイスの言葉で現実を直視してしまったのか、渋い顔となった。

そう、第7宇宙の抱える面子と言えは聞こえはいいが、これは全て地球の戦力である。

勿論地球も第7宇宙の一員なのでビルスの持つ戦力である事に変わりはないのだが、それにしても一つの惑星に集まりすぎではないだろうか。

リゼットが就任する以前の地球は、いくら何でもここまでの修羅の星ではなかったというのに、どうしてこうなったのか。

ビルスとウイスがジト目でリゼットを見るが、彼女は視線を逸らすことで二人の無言の圧力を受け流した。

違うもん、私何も悪く無いもん。私がいなくても地球は勝手に修羅の国になっていたんですよ。

あ、でも何人かは私のせいでした。

「しかし、ただ野球をして終わりでは味気ないですね。

何かこう、景品みたいなものを用意しませんか？」

「景品かあ……そうだな、その方が悟空達もやる気を出してくれるかもしれん。

何かいいものはないか？」

ウイスとビルスが何か話し合い、そして期待するようにリゼットを見た。

あ、これ私が景品を出す流れですか、そうですか。自分達では用意しないんですね。

リゼットは少しばかり思案し、やがて一つ思い当たったのかポン、と手を打った。

そして亜空間に手を入れ、そこから丁寧に包装された青い球体を取り出す。

先日、つい創り出してしまった究極食材（笑）である。

名前は……面倒だ。どこかのインフレグルメ漫画に肖ってGODでいいだろう。神様が創った食材なのだし別に大げさな名ではない。

何だか食べるだけで捕獲レベルが上がリそうな名前だが、勿論そんな事はない。ビルスはそれを見てゴクリと喉を鳴らし、みっともなく涎を溢れさせた。

「お、おい、リゼット……それは何だ？」

何だか凄く美味しそうな匂いがするぞ。

この前食べた奴と同じような……それでいて、あれよりも更にそる匂いだ」
「アレをヒントに私が創った物です。地球の生物達の思念を集めてみたら出来ちゃいました」

「よし、それを今すぐ僕に寄越すんだ」

「いや、景品食べてどうするんですか……」

「景品は別の物でいい。それは僕にくれ」

「駄目です」

ビルスが今にも飛びかかりそうなので、リゼットはすぐに亜空間へとGODを戻した。

とりあえずこの反応の良さならば景品として不足はないだろう。

ビルスとウイスは揃って、GODが消えた空間を凝視しているが、いかに彼等でも空間の座標を割り出せなければ奪う事など出来まい。

「おいウイス、この試合必ず勝つぞ。必ずだ……どんな手段を使っても！」

「最悪、時を戻してしましましょう」

「止めて下さい」

相変わらず食欲に忠実な主従である。

どうでもいいが、この景品は悟空達にやる気を出させる為の物である事を彼等は覚えているのだろうか？

つい数十秒前にビルス自身が口にした事なのだが、少なくとも彼自身はもう覚えていないのだろう。

「よし、行くぞ。何が何でも勝つ」

ビルスも十分にやる気を出したようで、ウイスを伴って地上へと飛び降りていっ

た。



悟空達へ念話で事情を伝え、全員が広場に集まった時には既にシャンパとヴァドス、そして第6宇宙のメンバーは到着していた。

しかしその人数が明らかにおかしい。

キャベとボタモ、マゲッタの三人しかないのだ。

シャンパ自身が参加するとしても僅かに四人。野球に必要な人数の半分も満たしてはいない。

まさか人数を揃える事が出来なかったのだろうか？

いや、そんな馬鹿な。仮にも第6宇宙の頂点であるシャンパならば人数を揃える事くらいわけもないだろう。宇宙は広いのだ。

確かにあの対抗試合からメンバーを出すとすればこの三人になるのは分かる。

ヒットは殺し屋だし、無報酬で言う事を聞く性格ではないだろう。

フロストは論外。となれば確かにこの人選は妥当だ。

だがそれ以外に誰もいないというのはどういう事だろう。あの三人には劣るかも

しれないが数合わせにどこかの星の強者を連れてくる事くらい出来たはずだ。

「……フォーフィッテッドゲームでこちらの勝ち、でしょうか？」

「ま、待て待て！ ただの草野球だぞ！ そんなルールは無しだ、無し！」

野球はプレイするのに人数にして9人必要とする。

そしてその数を試合前に揃えられなかった場合はフォーフィッテッドゲーム——
即ち没収試合となり、相手チームに勝ちが与えられるのだ。

しかしそのルールを提案したりゼットに、慌ててシャンパが待ったをかけた。

これは親善試合であり、公式なスポーツの試合ではない。

多少の不備くらいは大目に見ろ、という事らしい。

「ふふん、どうやらそちらの宇宙は随分人材不足のようだな？」

数すらも揃えて来ないとは情けない奴め」

「まあまあビルス様。ここは一つ、こちらから選手を貸してあげるとしましょう」
どうやらビルスとウイスもそれでいいらしい。

この二人がそう言うならばリゼットとしては特に何も言う事はない。

リゼットはその場から転移し、十数秒後に数合わせの天津飯と人参化、
Mr・ポポ

と餃子、それから魔人ブウを連れて来た。

これでとりあえず数は揃った。両チームのメンバーは以下の通りとなる。

第7宇宙チーム

孫悟空。

ベジータ。

ターレス。

セル。

ピッコロ。

孫悟飯。

タピオン。

ヤムチャ。

ナッパ。

第6宇宙チーム

シャンパ。

キャベ。

マゲツタ。

ボタモ。

人参化。

天津飯。

餃子。

Mr・ポポ。

魔人ブウ。

「……何だ、この、一軍から落ちた奴等を適当に集めたような微妙な面子は」

「文句を言うな。貸してやるだけ有難く思え」

シャンパは何やら不服そうだが、そもそも自分で野球を提案しておいて選手の数すら揃えていない方が悪い。

彼もそのくらいは自覚しているのか、不満を顔に出しつつもビルスに何も言い返せないでいた。

しかしそれを流石に哀れに思ったウイスが助け舟を出した。

「まあまあ、いいではありませんか。これは親善試合です。」

両チームの戦力が均等になるように分けましょう」

「ちっ」

ビルスが舌打ちをするが、特に反論はしない。

これは別に真剣勝負でもなく、あくまで交流を深める為のものだ。

ならば勝敗に拘る必要などなく、メンバーを貸すのもまた交流の一環と考える事が出来る。

もつとも、それはそれとしてビルスにはどうしても勝ちたい理由があるのだが。かくしてチーム編成が為され、メンバーは以下の通りとなった。

第7宇宙チーム

孫悟空。

天津飯。

餃子。

セル。

ピッコロ。

孫悟飯。

タピオン。

ヤムチャ。

ナツパ。

第6宇宙チーム

シャンパ。

キャベ。

マゲツタ。

ボタモ。

ベジータ。

ターレス。

人参化。

Mr・ポポ。

魔人ブウ。

悟空と互角の戦力を有するベジータが第6宇宙へと移動し、ついでに同じ顔が二人いて紛らわしいのでターレスも移籍となった。

代わりに天津飯と餃子の鶴仙コンビが第7宇宙へと移動し、これで戦力はとりあえず均等となった事だろう。

もっともこれは野球なので身体能力の高さがそのまま勝敗へ直結するわけではない。

勿論スポーツである以上、身体能力の高さは決して無視出来ない要素には違いがないが、それだけが全てを決めるわけではないのだ。

ヤムチャは一人ほくそ笑み、今回は自分が主役であると確信する。

悟空達は強いが、野球に関しては素人だ。対し、己はプロだ。つい最近も連続ホームラン記録を更新したばかりである。

この戦い……もらった。

ヤムチャは己の活躍を疑いはしなかった。

——その後、ヤムチャは確かに活躍した。

練気弾と狼牙風風拳を組み合わせた曲がる魔球で第6宇宙のバッターを悉く三振に打ち取り、危険人物であるベジータとターレスに回す事なくチェンジを迎えたのは無視できない功績だろう。

しかしバッターボックスに立った彼を待っていたのは悲劇であった。

「消えろ、かっとなされんうちにな！」

投手であるベジータにそう啖呵を切ったまではよかったが、野球のルールを知らないベジータはあろう事か初手でデッドボールを叩き込み、ヤムチャを打ちのめした。

どんなに速いボールでも打ち返せる自信があった。

だが自分に飛んでくるボールなど対処出来るわけではない。

一塁にこそ進んだものの、哀れヤムチャのホームランの夢はここに潰えた。

余談だが、デッドボールのダメージからしばらく立ち直れずにいたヤムチャへベジータがかけた言葉がこれである。

「おい、汚いから片付けておけよ、そのボロクズを」

やはり同じ女をかつては愛し、付き合つてまでいたのに散々浮気したヤムチャに對しベジータも何か思う所があるのかもしれない。

少なくとも彼は恋愛という面で言えば、愚直なまでにブルマ一筋だ。

ついでに言うとその件に関してはリゼットは全面的にベジータの味方である。

この上物件で浮気する方が悪い。

あ、ヤムチャが盗塁しようとしてブウが発射した気弾に撃たれた。

やはりブウに野球は難しすぎたようだ。

「あ、そうだ。ねえ神様知ってる？ 最近ランチさんから手紙が来てね。

無事天津飯との間に子供が出来たんですって」

「えっ？ あの二人結婚してたんですか？」

「天津飯があんな性格だから式は挙げてないみたいだけどね。ランチさんが押しかけて同居してるうちにいつの間にか、らしいわよ」

「へえ」

野球を見ながらブルマから聞かされる話にリゼットは少しばかりの驚きを感じていた。

まさか天津飯がいつの間にかランチとくっついて子供まで出来ていたとは思わなかった。

確か原作ではランチが天津飯を追いかけたものの、結局くっつく事はなかったはずだが随分違うものだ。

こちらの世界では無事、既成事実を作る事に成功していたらしい。

天津飯のあの真面目な性格を考えれば、子供が出来てしまえばランチを無碍に扱う事はあるまい。

それにしても、確かランチと天津飯が初めて出会ってから26年だったか。彼女も随分一途なものである。

そして今後、肩身が狭くなるだろう餃子に少しでも同情した。

あ、ヤムチャがシャンパ様にボールぶつけられた。

「これで私達の中で結婚してないのは餃子とヤムチャ、それと神様だけになったわね」

「私はいいんですよ、もう今年で279歳になりますしね。誰がこんなお婆ちゃんを欲しがるんですか」

「永遠に若いくせによく言うわ……」

リゼットは見た目こそ若いままだが、その実年齢はお婆さんである。BB Aである。

ニコニコ動画とかがこの世界にあれば画面に出る時に『BB Aアーン！』とか

コメが付いてもおかしくないくらいには長生きしている。

時の界王神にはリゼットちゃん呼ばわりされているが、あれは仕方ない。何せ向こうは7500万歳の化石なのだから、そりゃ彼女から見れば自分など赤子みたいなものだろう。

あ、ヤムチャがターレスに蹴られた。

「おいヤムチャ。おめえもう休んだ方が……」

「だ、大丈夫だ……問題ない……」

一方グラウンドでは、ヤムチャが普段は見せないガッツを見せていた。

悟空の心配を笑い飛ばし、フラフラと立ち上がっている。

彼はああ見えて意外とタフな男なのかもしれない。

あるいは野球界のスターとしての意地だろうか。

「ところで餃子君は全く成長していないようなのですが、彼に結婚という概念はあるのでしょうか？」

「さ、さあ……」

餃子は地球人の中でもかなり特殊なタイプである。

というか本当に地球人なのかも疑わしい。

何せ昔から全く成長しないし、今でも子供のままだ。

彼が結婚をして家庭を築く姿というのは想像し難いものだ。

あ、地面から突然生えてきたサイバイマンがヤムチャに抱き着いて自爆した。

この世界ではせっかく回避していたのに、時間差でノルマ達成とは恐れ入った。
というか誰だ。あんな所にサイバイマン植えた馬鹿は。

「あつ、悪い。サイバイマンの種落としてた」

お前かナツパ。

何をしているのだろう、この馬鹿は。

そして何だかんだで試合は進み、何だかんだでビルスとシャンパが乱闘を開始していた。

破壊神同士の戦いは宇宙を崩壊させる。

そうなのでもウイスとヴァドスが直してくれるだろうが、だからといって死ぬのは嫌だ。

リゼットは二人の近くまで浮遊し、GODを見せびらかした。

「はいストップです。それ以上喧嘩をしたらこれ、あげませんよ？」

「ぬっ」

効果は抜群だ。

ビルスはピタリと喧嘩を止め、シャンパも食い入るようにリゼットの持つGODを見た。

本当に食欲に忠実な破壊神達である。

いや、よく見ればヴァドスの視線もこちらに釘付けだ。

もしかして天使も全員こうなのだろうか？

「お、おい、第7宇宙の地球神……それは何だ？ 何か滅茶苦茶美味そうな匂いがするぞ」

「ビルス様と同じ反応ありがとうございます。これは今回の試合の勝者に与えられる景品みたいなものですね」

「な、何だと！ よ、よし、何が何でも勝つぞ！」

シャンパが大人しくなり、試合へと意識を戻した。

しかしもう遅い。乱闘に入ってしまった時点でこのゲームは終了だ。

つまり現時点での点差がそのまま勝敗となり、両チーム0点で引き分けとなる。

「いいえ、この試合は没収試合となります。」

第7宇宙のサヨナラ勝ちですね」

「え？」

「えっ」

ウイスの台詞にシャンパトリゼットが同時に不思議そうな顔をした。

そして下へと視線を戻し……彼女達は見た。

天を指さすような姿勢で倒れ、しかしベースに触れているヤムチャの雄姿を。

倒れたままヤムチャは眩く。

「へ、へへ……プロ選手は伊達じゃない……ぜ」

プロの意地を見せ、見事ヤムチャは勝利をもぎ取って見せた。

流石に現役プロ野球選手は格が違った。

その雄姿にビルスが破顔する。何だ、この男もやる時は結構やるではないか。

そして18号は「あいつも武道家じゃないね」と呆れていた。

「よくやったヤムチャ！」

「そ、そんな！」

ビルスが歓声をあげ、シャンパが項垂れる。

ご馳走を目の前に出された直後のこれだ。彼は泣いていい。

ビルスは素早くリゼットの手からGODを奪い取り、勝ち誇った。

「ちよっと、ビルス様！」

「何だ？ 試合に勝ったんだからこれはもう僕のものだ。そうだろう？」

「あの、それは元々悟空君達の士気を高めるための……」

「あーあーきこえないー」

ビルスはリゼットに背を向け、口を開く。

しかしその動きが止まり、チラリとシャンパを見るとそこには涎を垂らして涙目になりながら己を見るシャンパの姿があった。

「……………」

ビルスの頬を一滴の汗が伝う。

それから数秒の硬直——ビルスはやがて、手刀でGODの1、3程を切ってシャンパへと投げ渡した。

「ビ、ビルス！ お前……」

「まあ……親善試合だからな」

ビルス是不機嫌そうにシャンパから顔を背け、更に少しかけウイスにも切り渡してから今度こそ口にGODを頬張る。

やはりこの二人は、何だかんだで仲がいいのかもしれない。

★

——地獄。

そこは宇宙の様々な場所で死んだ悪人達が、その死んだ場所に依じて送られる裁きの空間だ。

その中の一つに『地球の地獄』というものがあり、その中には針山地獄や血の池地獄、火炎地獄、飢餓地獄、そしてリゼットが神に就任してから追加された『パレード地獄』などもある。

その地獄の中、一人の男が当てもなく地獄の上を眺めていた。

銀色の短髪に赤い身体……ミラという名の、暗黒魔界の戦士は転生の時を待ちながら、責め苦を受けていない時間の全てをこうして費やしている。

まるでそうしていれば、ここにはいない誰かの姿を見る事が出来るとでも言うように。

その彼の周囲に倒れているのは、同じく地獄に落とされた悪人共だ。

ギニュー、ボージャック、プイプイ、ヤコン……いずれも宇宙に名を馳せた強豪達であるが、それと戦っただろうミラには傷の一つすらもない。

「違う……こんなものではなかった」

ミラは最強の戦士だ。そうあるべしと望まれてトワに造られた。

故に彼は生まれたその瞬間よりの強者であり、元いた時代において敗北というものを経験した事がない。

己は強い、誰よりも強い。それが彼の存在意義であり、全てだった。それ以外に価値などなかった。

だがその存在価値は今や跡形もない。

白い女神——リゼットに完膚無きまでに敗れ、そして奴は今も尚高みへと上っている。

自分など所詮はその道端に落ちている『かつて倒した敵のうちの一人』でしかない

く、彼女の栄光の道を彩る添え物でしかない。

そして、『かつて倒した敵のうちの一人』ですら最強ではない。

ミラがいる地獄よりも更に下層の地獄ではブローリーやフリーザが身動きも取れない状態で今も拘束されており、つまりミラは彼等よりも脅威ではないと閻魔から判断されているのだ。

自分が今まで見ていた世界はあまりにも小さく、満足していた最強はあまりに弱いものであった。井の中の蛙、どころではない。

井の中すらも知らぬ飼育箱の中の蛙だ。

「奴は強かった……こんなものでなかった。

あの得体の知れない強さ……限界を攻め、超え続ける力。

そうだ、あいつは戦闘力以上の強さを常に発揮してきた……。

何故だ……俺やこいつ等のような者と、あいつや孫悟空達の間で一体何が違う」
答える者のない問い。しかしミラは薄々その答えを自らで導き出していた。

魂が違う。意思の力が違うのだ。

ただ最初から持っていただけの虚しい『最強』に縋りつく己と、守るべき者の為

に戦う彼女。同じなわけがない。

背負っているものの重みが違うのだ。戦いへ向ける気概が違うのだ。

負けて死んだ今だからこそ気付けた。初めて知る事が出来た。

「俺は……このまま転生とやらを受けるのか？」

もうあいつと、戦う事すらなく……」

戦いたい。

もう一度あいつと戦いたい。

それだけが今のミラの望みであった。

時空を巡りキリを集めるのも、最強の名も、全てはどうでもいい。

やっと分かったのだ。得難い好敵手を得るという事こそが、戦士として何にも代

えがたい幸福であったのだと。

生まれて初めて自分の意思で、自分の目標を見付けたのだ。

だが生者であるリゼットと死者であるミラを隔てる壁はあまりに高く、超える事

が出来ない。

「機会が欲しいかね？」

そんな彼に、誰かが声をかけた。

ミラは身体を動かさずに首だけを動かしてその声の主を見る。

それは老いぼれた地球人だ。

老いぼれて、しかし暗い執念を瞳に宿した悪しき天才であった。

「暗黒魔界の人造人間ミラ……僕はお前が望むならば、お前にこの地獄を抜けるだけの力を与える事が出来るだろう」

そう言い、老人——ドクター・ゲロは笑った。

ビルス「——」

ウイス「？」

リゼット「？」

ビルス「——美味い……」

リゼット（泣いた!?!）

悟空（泣いた!?!）

ビルス「決めたぞウイス……これを僕のフルコースのメインに入れる」
ウイス「作品が違います」

第百十三話 宿敵、再び

その日、あの世は混乱に包まれていた。

魂を管理し、転生を司る鬼達が慌てふためき、閻魔大王は戦慄しきった顔でその有り得ざる出来事を眺めていた。

それはまさに有り得ない事であった。あってはならない事であった。

転生を待つはずの二つの魂が混じり合い、一つの存在となって閻魔の許可もなく自らの意思で再転生を果たそうとするなど。

結論から先に言えば、厳重保管していたトワの魂が突然何かに吸い寄せられ、地獄にいたミラと融合してしまった。

無論、言うまでもなく本来はこんな事は出来ない。出来るはずがない。

あの世が正常に機能しているならば、何をどうしようも起こらない。

それはつまり、逆を返せばあの世が正常ではないという事である。

「成功したぞ……さあ行け、ヘルファイター・ミラよ！」

地獄でパワーアップしたお前の力で地球を支配するのだ！」

「……」

その原因は、地獄に落とされたまま放置されていたドクター・ゲロにあった。

彼は地獄に落ちて来たミラを改造してパワーアップさせ、かつてジャンンバがやったようにあの世とこの世のバランスを崩そうと目論んだのだ。

果たしてそれは成功し、ミラは新生ミラとしてここに蘇った。

本来ならばそれは17号で行うはずの事であった。

17号は、単なるセルの強化パーツではない。

むしろセルすら上回る究極の人造人間のベースだったのだ。

有機体で構成された17号の一号機と機械で構成された17号の二号機を融合させる事で生まれる究極戦士——超17号。

それを生み出すための片割れこそが17号であった。

膨大なパワープールを持つ有機体の一号機に、強化パーツである二号機を融合させる事で理論上は超サイヤ人ブルーにすら匹敵するパワーを得る事が可能となる。

逆に言えば、プールそのものは17号に最初から備わっているのだから弛まぬ修練を続ければ17号単体でもそれに近い場所まで至れるかもしれない。

かつてリゼットが破壊した13号、14号、15号はそのプロトタイプだ。

いや、正確にはプロトタイプのそのまたプロトタイプか。

あの三体は機械製の人造人間同士を融合するテストケースとして開発されたものである。

更に、続けてゲロは13号の開発で得たデータを基に、有機体同士の融合をも試した。

この過程で生み出されたものがセルであり、セルですら超17号という究極を生み出すための前座に過ぎなかったという事になる。

だがセルが完成を待たずに研究所ごと破棄されていたことから分かるように、この融合は困難を極めた。

完全な機械タイプを合体させるのと、有機体を融合させるのはまるでわけが違う。いかにゲロが天才でも、そう簡単に出来るものではない。

結局ドクターゲロは構想段階から抜け出す事も出来ずに、17号の手によってこの世を去る事となってしまったのだ。

しかしその研究は無駄ではなかった。

超17号は完成せぬ夢と消えたが、代わりにゲロは地獄で魔界製の人造人間と出会う事が出来た。

希代の超頭脳を誇るゲロはミラの構造を完璧に把握し、そして超17号を造るつもりで完成させていた理論をミラとトワで実行したのだ。

そして完成したのが、この新生ミラである。

更にトワの魂をも吸収した今の彼の姿は以前とはまるで異なり、身体は白い体毛に包まれてまるで超サイヤ人4のようだ。

顔立ちも以前の険が取れて落ち着いており、悟り切ったその顔立ちはどこか神聖さすら感じさせる。

髪は伸びて胸元には『∞』のマークが刻まれ、下半身はトワのような赤いズボンと腰マントを付けている。

リゼットの知る原作知識——『GT』でもそうだが、一体何故閻魔大王は地獄に落ちた罪人に自由に発明を出来る環境を与えてしまったのだろうか。これは間違はなく彼の怠慢が招いた出来事だ。

少なくともGT知識もあるリゼットは地球の地獄に関して『地獄で物を造るとか

意味不明な事が絶対に出来ないようにして下さいね』と閻魔に再三進言している。にも関わらずこの出来事なので、そろそろリゼットは本気で閻魔に怒るかもしれない。

ミラは静かに目を閉じ、そして呟くように言う。

「支配など、どうでもいい」

「何？」

「暗黒魔界の復活も、最早俺には関係ない。俺の目的は一つだけだ」

ミラはここからは見えないはずの地上を見上げるように顔をあげ、宿敵と見定めた相手を想う。

憎しみはない。怒りもない。

むしろ感謝しているし、今となっては心から尊敬している。

あいつがいたから自分は弱いという事実を認識出来た。最強という名の下らぬブライドを壊してくれた。

自分になくて、奴にあるもの。今ならばそれが分かる。

「あいつと戦いたい……あいつに勝ちたい……誰にもこの邪魔はさせない」

「き、貴様？」

「ドクター・ゲロ、お前には感謝している。お前は俺に機会をくれた。

だが邪魔をするならば、お前だろうと殺すぞ」

「う、裏切る気か!？」

「裏切る……？　俺が従っていたのは元々トワ一人だ。

そのトワも今は、俺と共に在る。お前に俺を従える事など出来ん」

ミラはドクター・ゲロへ視線を移す事すらしない。

彼の瞳に映るのはたった一人だ。たった一人の、白い女神だけだ。

奴と戦いたい。奴を超えたい。

そこには善も悪もない、どこまでも純粋な戦士としての闘志だけがあった。

「往くぞ……トワ」

ミラは小さく呟き、そして飛翔した。

地獄を突き抜け、蛇の道を貫き、界王星を過ぎ去って高く高く飛んでいく。

あの世とこの世は決して別の世界に存在しているわけではない。

瞬間移動で到達出来る、地続きの世界だ。

次元の一つや二つくらいは隔てているだろうが……遠く離れた幾億光年もの先へと到達出来る速度と、精神と時の部屋を突き破るパワーがあるならば——ただの飛翔でこの世へ舞い戻る事すら可能なのである。

事実、破壊神ビルスと付き人であるウイスは瞬間移動など用いずにただの移動で界王星へと現れている。

そして彼は、地球へと突入した。

★

リゼットはその日、地上を眺めていた。

ウイスから前もって聞かされていた孫悟空と殺し屋ヒットの戦いを見ていたのだ。

今回の戦いは、結論から言えばヒットと本気で戦いたいのが為に悟空が自分で自分の暗殺依頼を出した自作自演であり、リゼットが助けに入る必要はない。

以前の戦いは悟空の勝利に終わったが、あれはターレスが消耗させたからだ。だから悟空は一度、万全のヒットと戦ってみたかったのだろう。

それにしても流石は第6宇宙一の殺し屋か。気の扱いが抜群に上手い。

時飛ばしやそれに伴うチート能力はともかくとして、気を見えなくしての打撃や自分の気を残しての分身攪乱などは十分に参考になる。

単純ではあるが今まで誰もやらなかった使い方だ。確かに気を感じ出来る者が相手ならばこの攪乱は高い効果を発揮する。

見えない気の拳打に関しては、気の感知に優れたりリセットならば初見でも回避出来るだろうが、そうでなければ難しいだろう。

それに遠距離から打撃が撃てるというのは十分に役立つ。

だが悟空も流石というべきか。元々以前の試合でヒットの手を見ていた事もあり、変幻自在な彼の技に見事に対応してみせている。

結局戦いは引き分けに近い形で終わり、悟空も暗殺されずに済んだようだ。

悟空とヒットは改めて互いを認め合い、悟空がまた一段と強くなったことにビルスとウイスが喜び、そしてベジータはビルスに土下座をしていた。プライドとは一体……。

しかし、そんな観戦は唐突に中断される事となる。

何かが——遠く離れた宇宙から、何者かが凄まじい速度でこの地球に接近してい

る！

それを感じし、素早く迎撃へと意識を切り替えたからだ。

地球全体にバリアを展開し、侵入者の突入の余波が及ばぬようにして自らは構えを取った。

何者かは分からぬが、どうやら相手はこの神殿へ向かっているようだ。

つまり狙いは自分だろう。

一体何者なのだろう？ これだけの速度で移動出来る者など、破壊神とその従者、あるいは自分や悟空、ベジータくらいしかない。

他の宇宙の破壊神だろうか？ それともまだ姿を現していない、だがどこかの星に存在しているはずのベビーだろうか？

あるいは……かつて地獄で、必ず蘇ると宣言したあの男が遂に来たのか？

「――来る」

地球の結界を易々と貫き、神殿のバリアすらも越えてそれはリゼットの前へと着地した。

その白い男に見覚えはなく、だが確かに見覚えのある男の面影を残している。

だがそれがかえってリゼットを困惑させた。

何故なら、それは確かに自分が殺したはずの男なのだから。

「貴方は……ミラ……？」

「久しいな、リゼット。会いたかったぞ」

以前とは違う、穏やかな声でミラが再会を喜ぶ言葉を述べた。

その声にはもう、前まではあった傲慢さはない。上から見下ろすような威圧的なものでもない。

だが、リゼットは不思議と今のミラにこそ気圧される何かを感じていた。

前まではなかった凄みを彼に見出さずにはいられなかった。

「貴方は私が倒したはずですが……」

「そうだ。そして地獄から蘇ってきた。ドクター・ゲロの助力を得てな」

リゼットは話を聞きながら、内心で閻魔へ罵倒を送っていた。

あれだけ地獄で発明とか出来ないように注意してくれと言っておいたのに、またしても自分の言葉をそこまで深刻には考えていなかったのだろう。

閻魔はリゼットにとって上司ではあるが、しかし今回はきつくお灸を据えた方が

いいのかもしれない。

それにしてもゼロの助力を得て地獄から抜け出すとは……少し、GTでの超17号のイベントと似ている気がする。

となると、やはり彼にも“あの能力”が備わっていると考えた方がいいかもしれない。

「その姿は……トワですか？」

「そうだ、トワの魂は俺と同化している。俺は創造主をも取り込み、更なる高みへと至ったのだ」

「なるほど。目的は私への復讐ですか」

「違う。お前を恨む気持ちなど俺にはない」

ミラは真っすぐにリゼットを見据えた。

その瞳にはかつての濁りはない。

純粹で、いっそ透き通っているという表現すら似合う程に清んだ瞳だ。

視界に映る敵へ抱く感情はただ一つ……敬意のみ。

「かつて恨まなかったといえど嘘になるだろう。だが今は心からお前を尊敬してい

る。

最早最強とは名乗るまい。そんな称号は欲しいとも思わぬ。

……お前に勝ちたい。今、俺の心にあるのはそれだけだ」

「……」

リゼットは己を見るミラの赤い瞳を見た。

綺麗な目だ、と素直に思う。

もうそこには一切の濁りはなく、戦士として純化されている。

どこまでも真つすぐに、一途に目的だけを見る力強い……悟空と同じ目だ。

「気を付けろ、リゼット。奴はもう前までの奴ではない。

戦士として一皮剥けている……ああいう相手は手強いぞ」

「そのようですね。セル、下がっていて下さい」

セルと二人掛かりで戦うという選択肢はもう無かった。

以前までのミラが相手であれば、あるいはリゼットはそれを行っただろう。

勝てる時に勝つ、それがリゼットの戦い方だ。卑怯と呼ばれる戦い方であろうと奇襲や不意打ちくらいならば平然と行うし、それはむしろ不意打ちなどを受ける程

に油断している方が悪いとすら思う。

多人数で挑むのだって一つの戦略だ。第一それを卑怯というならば正義の味方なんて大体が卑怯者になってしまいうだろう。

流石に人質などの一線を越えた外道に手を出す事はしないが、基本的にリゼットは手段など選びはしない。

ましてや相手が手段を選ばぬ悪党ならば尚の事。

手段を選ばぬ悪党を相手にフェアプレイ精神などを持っていては、それはもう好きだけ動いてくれと言っているに等しい。

だからリゼットに、わざわざ相手に合わせて1対1で戦う信念などない。

しかし今のミラはリゼットとの決着のみを望む一人の純粋な戦士だ。そこには善も悪もない。

これを相手に多人数で叩きのめすような無粋な真似は流石に出来そうもなかった。

「ヘブンズゲート」

空間干渉の力を発動し、空中に白く輝く円形の門が顕現した。

ルーン文字に彩られたそれはゆっくりと開き、強烈な引力をもってミラを飲み込もうとする。

本来これは敵を亜空間に放逐してしまう為の技であり、敵だけを封ずるための奥義だ。

しかし、今回は使用目的が異なる。

「私達が戦えば地球に被害が出ます。中でやりましょう」

「いいだろう。お前が全力を出せる場がそこだというのならば、俺は黙って従うだけだ」

リゼット自身が入る前に、ミラが何の躊躇もなく飛び込んだ。

それは信頼なのか、それとも単に何も考えていないだけなのか。

どちらにせよ、かえってやりにくい相手になって帰って来たものだ、とりゼットは苦笑する。

ミラの後を追って亜空間へと飛び、二人は何もない空間の中で対峙した。

「……XENOVERSE」

己の中に眠る神の気を解放する。

リゼットの全身が淡く発光し、背中に光の環が出現した。

様子見はなし、侮りもしない。

生憎とリゼットは悟空のように相手の全力を引き出して、それに合わせて徐々にギアを上げていく趣味など持ち合わせていないのだ。

バーストリミットとの併用はリスクもあるのでまだ出さないが、この時点で既にミラの気を大きく上回っている。

「それが今のお前の全力か……あの時の力を使いこなせるようになったのだな。

出し惜しみをしないその精神、嬉しいぞ」

ミラが深く笑い、その場から消えた。

リゼットは微動だにせず、しかしその眼は雷よりも速く駆けるミラの動きを明確に捉えていた。

静かに、しかし素早く手首のスナップを利かせて裏拳を放つ。

するとすぐ近くまで迫っていたミラの頬を打ち、しかし彼は怯む事なく再び高速移動へと移行した。

正面から愚直に突進……と見せかけて地を蹴り、横へと回り込んで更に一度

地を蹴って右側面から左拳を繰り出してきた。

——フェイント。リゼットはこの拳打に一切の反応を示さずに続く本命の右拳に合わせて右手だけを動かしてミラの手首を掴んだ。

「——！」

ミラの息を呑む気配が伝わる。

どれだけ強かろうと、どれだけ速く動けようと、関節の曲がる方向が変わるわけではない。

必然、逆方向へと回せば破壊出来る道理。

しかしリゼットが投げると同時にミラが回転し、手首の破壊を免れた。

更に廻りながら延髄蹴りを放ち、リゼットはこれに迷いなく手を放して一歩分下がることで蹴りを回避した。

ミラの足が目の前を通過し……軌道を変えてリゼットの顔を狙う。

廻りつつも地に手を突き、その反動で蹴りの軌道を変えて跳んだのだ。

しかしリゼットはこれも、僅かな動揺すら見せずに足首を掴んで蹴りを止めた。そして素早く手を翳し、気功波。ミラの顔を狙い撃った。

だがミラは足を掴まれたまま器用に上半身を逸らして気功波を避け、掴まれていない足でリゼットの顎を狙う。

これに対しリゼットは足首を振じって無理矢理ミラの身体の向きを変える事で蹴りの軌道を変更。自らは1mmも動かずして攻撃を回避した。

しかしその瞬間ミラはリゼットが回した方向へと自らも高速回転し、足の皮膚をリゼットの掌に残して無理矢理に離脱した。

リゼットの手から脱する為ならば皮膚くらいは安いという英断だ。

「ふっ！」

自由を取り戻したミラは再び素早く駆ける。

前、正面、左右、背後、上、あらゆる場所に残像を残してリゼットを攪乱し、周囲を駆け回った。

しかしリゼットはあくまで無形の構えのまま、静かに待つ。その姿に惑わされている気配はなく、どこまでも自然体だ。

——背後！

ミラが仕掛けると同時にリゼットが全ての残像を無視して振り返り、繰り出され

た拳を掴んで投げる。

放り出される身体……ミラは即座に気弾を適当な方向へと発射して、その反動で移動。

直後、白い気弾がミラのいた場所を通過し——軌道を変えてミラへと向かった。追尾気弾だ。

だが地面に着地したミラはこれを手刀で弾き、再びリゼットへと突撃する。

勢いを殺さずに放たれた拳。だが当てようという意思が感じられない……フェイントだ。

リゼットはこれに目もくれずに横から放たれたミラの蹴りを軽やかに受け止めた。

それと同時に正面の残像が消え、またもミラの身体が投げられて宙を舞う。

叩き付けられると同時に身体全体のバネを活かして立ち上がり、またもミラが果敢に攻める。

攻める、防がれる、投げられる——攻める、防がれる、そしてまた投げられる。どれだけ手を変え、残像拳を用いて、どの方向から攻撃しようと必ずカウンター

を取られる。

向けた力がそのまま自分自身へと跳ね返ってくる。

ここまでくれば、最早あらゆる物理攻撃が通用しないのではないかと錯覚してしまふ程のリゼットの絶技、膨大な経験の為せる神技にミラの唇が歓喜に歪んだ。

そうだ、これでいい。これくらい高い壁でなければ挑み甲斐がない。

やはり俺の宿敵はとても強かったと嬉しくなる。誇りたくすらなる。

俺は、奴との戦いの場に戻って来たのだと実感出来る。

「はああああああっ！」

両手に気を溜めて、機関銃のように気弾を乱射した。

遠方からの気弾連射は単純にして有効な戦術だ。負けフラグなどでは断じてない。

しかしこれもしゼットには効かない。空間に開いた亀裂が全ての気弾を飲み込み、ミラ自身へと向けて跳ね返すからだ。

そう、リゼットに単純な気弾や気功波の類は一切通用しない。

打撃は技で返され、気弾は特異能力で返される。何をしても向けた力がそのまま

自分に戻って来る。

いっそ理不尽なまでの防御性能だが、ミラはこれに憤りなど感じはしない。

越えるべき目標が高い。それは喜ぶべき事だからだ。

反射された気弾を掻い潜りながらミラが軽快なフットワークを踏み、リゼットへと挑みかかる。

今、己は挑む側にいる。それがミラには嬉しかった。

奴等にあって自分にはないもの……それはどんな強敵にも挑んでいく飽くなき闘志。

最初から強大な力を持って生まれた自分にはない、魂の叫びだ。

だが今は違う。今こそ自分は最強の驕りとトワの支配から脱却し、真の自由を得て己の意思で挑んでいるのだ。

フェイントを混ぜぬ愚直な拳の連打を放つ。フェイントや攪乱は通じぬというなら、彼女が捌き切れない速度で攻撃するまでの話だ。

リゼットはミラの拳を最小限の力で逸らし、弾き、一瞬にして放たれた数百数千の打撃を悉くいなす。

そればかりか、彼女の掌打がミラの攻撃を掻い潜って彼の顎を打ち据えた。頭が揺らされ、足元がふらつく。

そこに間髪を容れずに零距离気功波。白い奔流がミラを無慈悲に飲み込んだ。

「……まだだ！」

だがミラはあろう事か両腕を広げ、歓迎するように気功波を受け止める。

するとどうだろう、気功波がミラの身体に吸い込まれるようにして消えていくではないか。

その光景を見てリゼットは、己の予感が正しかった事を悟った。

やはりだ。間違いない。

今のミラは超17号と同じ能力を持たされている。

つまり……気の吸収能力だ。今のミラに正面から気弾や気功波を撃っても彼をパワーアップさせるだけに終わる。

これは少々厄介かもしれない、と思いながらもリゼットは攻略法を考え始めた。

【戦闘力】

・リゼット…31億

ゼノバース…6兆2000億

※修行で少し戦闘力が伸びた

・最終ミラ…3兆

ドラゴンボールゼノバース2のラスボス。

前作での小物感溢れるキャラから一転し、戦士として一皮剥けた。

最強である事に執着するのを止め、己の高みを目指すその姿は多くのプレイヤーに「誰だお前」と言わせた……かもしれない。

トキトキの卵と創造主のトワを吸収する事で超サイヤ人ブルーの悟空すら圧倒する力を得た。

このSSではトキトキの卵を得ていないので、ゲームよりも弱い。

その代わりにゲロ脅威の科学力で気功波吸収の特殊能力を得ている。

第百十四話 戦士として

「喰らえ！」

ミラが全身から気を放出する。

すると彼の周囲を黒い竜巻の如き気が荒れ狂い、紫電を伴ったそれはリゼットを追尾し、彼女の全身を縛り上げようと唸りを上げた。

「……っ」

回避は困難。そう判断するやりゼットはバリアを展開して黒い竜巻を遮断する。そこにミラが飛び込み、下から掬い上げるように拳を突き上げた。

直撃——したと思った瞬間にリゼットが消えてミラの背後を取る。

だがそれとほぼ同時にミラが消えてリゼットの背後へと回った。

リゼットはそれを感じして振り返らずに裏拳を放ち、ミラも咄嗟の反応で防ぐ。今度は二人が同時に消え、打撃によって発生した衝撃波が亜空間内に拡散した。衝撃と打撃音が幾度も響き、空間全体が揺れる。

目まぐるしく身体的位置を入れ替えて攻守逆転しながら二人は激しい打撃戦を繰

り広げ、僅かな距離で攻撃を交わし合う。

「千の剣よ、在れ！」

千本といいつつ、実は本数は適当な気の刃がミラへと殺到した。

これも気弾連射には違いないが、ベジータなどが好む通常の気弾連射と違うのは一瞬で無数の気弾を生成して本人がすぐにフリーになる所だ。

また、気弾の形が剣を模しているので殺傷力も通常のそれよりも高い。

しかしいかに形が違かろうと気は気。今のミラならば吸収してしまう事が出来る。

両手を広げて気の刃を取り込むが、ここでミラは違和感に気付いた。

おかしい。込められている気の量があまりにも少なすぎる。

剣に込められている気の量が、戦闘力にして10程度しかない。

子供の頃の悟空のかめはめ波程度の威力しか持たされていないのだ。

（不味いっ！）

違和感と同時に怖気が走り、咄嗟に剣を避けた。

その判断はまさに正解で、ミラの脇腹を一本の剣が掠った。

気で創った剣ではない。物質創造の術で創ったカッチン鋼の剣だ。

ミラが気を吸収できると見抜いたりゼットは、あえて吸収させるように気の刃を多重展開した上で、その中に少数の実体剣を紛れ込ませたのだ。

もしミラが気付かずに吸収を続けていたならば。今頃は実体剣によって串刺しにされていた事だろう。

（これでは気の吸収は出来ない……！）

異なる歴史では17号に搭載されるはずだった気弾の吸収能力は一つの弱点を抱えている。

それは、気を吸収する時は必ず一定の姿勢を取る必要があり、かつその間は無防備になってしまうのだ。

リゼットがそこに気付いた以上、もう迂闊に気の吸収を使う事は出来ない。彼女の前でそんな無防備を晒せば、逆にそこを起点に攻め込まれるだけだ。

そうである以上、吸収出来るはずの気弾であっても、あえて喰らうしかないだろう。

（今のはわざと見せたのだな……俺に、この能力を使わせない為に）

ミラは既にリゼットの狙いに気付いていた。

彼女はあえて今のような攻撃を行う事でこちらの吸収能力を封じたのだ。

そして分かっていても、ミラはそれに乗るしかない。

迂闊に吸収能力を使えば、本当にその隙を突かれるだけだからだ。

「ならば、攻撃あるのみ！」

再び黒い竜巻が荒れ狂う。

しかしリゼットは今度は防御も回避もしなかった。

その技は既に一度見た技だ。二度は通じない。

自らを追尾する気の嵐をリゼットはまるで気にせず突っ切る。

命中した瞬間に竜巻と同量同質の気を全身に纏い、同速で回転させる事で完全に、一切の無駄なく相殺してみせたのだ。

そして技の終わる一瞬の硬直を狙ってミラへ掌打を打ち込んだ。

吹き飛んでいくミラへ掌を向けて、巨大な気弾を発射して追撃。

ミラは咄嗟にそれを避けようとするも、直後に気弾が弾けて無数の閃光へと変わってミラへと襲い掛かる。

慣性の法則など知らぬとばかりにミラが縦横無尽に空を翔けて閃光を避け、外れた閃光が全て上空へと飛び去って行く。

だがそこで閃光は再び一つに戻り、空から落ちる気功波となってミラへ牙を剥いた。

「ぬっ！」

回避は間に合わない。

ならば吸収か、それとも防御か……。

一瞬の決断を迫られる中、ミラは咄嗟に腕をクロスして気孔波を受け止めた。

吸収は駄目だ。リゼットならば確実にその一瞬の隙を突いて来る。

だが、追い打ちをかけるようにリゼットがミラの下へ陣取った。

ミラが気功波に苦戦している間に反対側からも発射して挟み撃ちにする気のようにだ。

そしてそれは、形こそ違えど以前にミラを葬った戦い方でもある。

「はっ！」

上と下から同時に気功波がミラに炸裂し、完全に捉える。

決して浅くはないダメージ……しかしミラは苦痛に晒されながらも、すぐに次の手へと出た

この挟撃も吸収能力を使わせて無防備を晒させる為のものだろうが、そうはいかない。

どうせ避けられぬならば、せめて相手にもダメージを与える喰らい方をすればいい。

そう決断した彼はリゼットの気功波の中へ自ら飛び込み、全身を焼かれながらも気の奔流を逆走してリゼットの前へと躍り出た。

少しばかりの驚愕を見せるリゼットへ豪腕を叩き付け、しかし手応えがない。

柔らかな手がミラの拳を包んだと思った次の瞬間、またしても投げ飛ばされていたのだ。

そこに畳み掛けるようにリゼットが腕を振り上げ、地面から巨大な気の拳が生えてミラを殴り上げた。

「はあっ！」

リゼットが気合いの声をあげ、今度は腕を振り下ろす。

するとそれに呼応して空から巨大な鉄拳が降り注いだ。

地面に巨神の拳が突き刺さり、だがミラはかろうじて持ちこたえていた。

己に振り下ろされた巨拳を受け止め、地面に足を付いて踏ん張っている。

しかしその隙にリゼット本体がミラの懐へと飛び込み——時間が停まった。

これを認識出来たのはミラもまた時間操作の力を持つトワを取り込んでいたからであり、しかし認識出来ても動けるわけではない。

彼に理解出来るのはただ、『時間が停まった一秒の間に数万の打撃を叩き込まれた』という事実だけだ。

「ぐおっ……が、は……ま、まだだ！ まだ俺は戦えるぞ！」

夥しい吐血をしながらもミラの闘志は衰えない。

身体が悲鳴をあげるのも無視して巨拳を弾き飛ばし、零距离でリゼットへ気功波を放った。

亜空間に呑み込む暇すらもない攻撃にさしものリゼットも命中を許し、爆煙に包まれる。

しかし危うい所でバリアが間に合ったのだろう。吹き飛びながら煙から飛び出し

たりゼットはドレスのケープ部分が破れて肩を露出してこそいるが、ダメージは深くない。

背中の光輪が輝いて吹き飛びりゼットの身体を停止させ、体勢を立て直す。そしてゆっくりと着地し、地面に膝をついているミラを見た。

ダメージの差は、もはや歴然だ。

「まだだ……まだ俺は負けん。」

俺はこの戦いで、俺自身の限界を超える！」

ミラが吠え、気が爆発的に高まった。

身体に残る全ての気を振り絞って、命すらも燃やしての最後の勝負を仕掛けるらしい。

これを避けるのは容易だ。亜空間に呑み込んで反射する事も出来る。

しかしりゼットはあえて、その二つを選択肢から除外した。

戦いに身を置く者として、ミラの男気を買ったのだ。

「受けて立ちましょう」

光輪が一際強く輝き、りゼットの身体が垂直に浮遊した。

気を集約させた両腕を頭上で組み合わせ、前へと突き出す。

それと同時に周囲に光球が顕現し、バチバチとスパークを迸らせた。

「電撃……地獄玉ああッ!!」

「……Raging blast!」

ミラの全てを込めた黒い気弾が空間すらも削りながらリゼットへと牙を剥く。

それに対し、リゼットは両腕から白い極光を放った。

二つの光球もそれと同時に気功波を発射し、リゼットの放った光の周囲を囲う二重の螺旋となって本体をサポートする。

そして。

黒と白。二つの輝きが衝突し、爆ぜた。

★

ミラが目を開くと、視界に映ったのは亜空間ではなく青い大空だった。

それを見て理解する。自分の戦いは終わったのだ、と。

微かに残った最後の記憶で、自分の全てを込めた黒い気功波が白い輝きに吞まれたのを覚えている。

そして、その先の記憶が一切ない。どうやら打ち負けて直撃を受け、意識を飛ばされたらしい。

「俺は……負けたのか」

呟き、それから視線を動かす。

身体はもう動きそうになく、起き上がる力もない。

そんなミラの近くには、既にドレスを修復し終えたりゼットが傷の一つもなく佇んでおり、どちらが勝ったのかは問うまでもなく明らかであった。

だからこのミラの言葉も確認ではなく、単に事実を事実として受け入れただけのものに過ぎない。

「ふ、ふふふ……届かなかった、か……」

俺は結局お前に、一度も勝てなかった」

地獄から往生際悪く蘇り、全てを賭けて挑んで、そして負けた。

その結果に後悔などはない。

惜しいのは、きっと次の蘇生はもうないという事だけだ。

今回のような事があった以上、己の魂はすぐに浄化装置にかけられてしまうだろ

う。

あるいはリゼットがあゝの世まで追ってきて二度目の死を与えるかもしれない。どちらにせよ、覚悟はしていた事だ。

これがラストチャンスである事は分かっていた。

だから悔いはない。この後消滅させられるとしても、それでも彼女に挑むこの数分こそがミラにとっては何にも代えがたい至高の時間だったのだ。

惜しいのは……もう二度と彼女と戦う事が出来ないという、その事実だけだ。

「……ああ……もっとお前達と、戦いたかった」

殺したいわけではない。勝って何をしたいわけでもない。

やっと分かったのだ。自分に辿り着く頂などいらなかった。

ただ戦士として歩み続ける事……戦うという事。それそのものが自分の何より望む事だったのだと。

欲しかったのは最強という名のゴールではない。どこまでも続く道こそが本当に欲しいものだった。

最強に満足して止まるのではなく、見果てぬ先を目指して歩き続ける事。

止まらない限り、道は続く。

武の道と書いて武道。孫悟空が歩み続ける果てのない高み。

それこそが、ミラの見付けた新たな道であった。

最強の証明など最早どうでもよく、全てを賭して戦えるという事自体が戦士として最高の宝だったのだ。

しかしそれに気付いたのはあまりに遅く、数々の悪行を積み重ねた後であった。そんな彼に、リゼットではなくセルが語りかける。

「ならば傷が癒えた後でそうするがよからう」

「……何？」

セルは可笑しそうに笑い、リゼットを見る。

するとリゼットは不機嫌そうにセルから視線を逸らしてしまった。

「どういう事だ？」

「簡単な話だ。どうやら我が星の神はお前に止めを刺す気などないらしい。

孫悟空の事を甘い甘いと言ってはいるが、彼女も大概人の事を言えんという事だ。」

悪党には冷徹になれても、そうでない相手には無慈悲になり切れんのだよ」

「セル」

「事実だろう？　そう咎めるような眼で私を見ないでくれ」

リゼットは、決して誰彼構わず慈悲をかける性格ではない。

少なくとも悟空のように明確な悪人まで見逃す事はしないし、止めを刺すべき場面では躊躇なくそれを実行してしまうだけの冷徹さを備えている。事実、一度はミラやトワの事も遠慮なく消し去っている。

未来の知識がなければベジータですら出会い頭で始末していただろう。

だがそれは結局の所、この惑星や己が愛する人々を守ろうとする意思から来るものであって、殺す事そのものを好んでいるわけではない。

だから、もう惑星の脅威でも何でもなく、ただの戦士となったミラを無理に殺める理由が彼女の中には無くなってしまったのだ。

ここがターレスとの違いだ。ターレスは理由などなくとも相手を殺せる。

それ自体が彼にとっては楽しい事だからだ。

しかしリゼットは理由がなければそこまでは踏み切れない。情を捨て去る事が出

来ない。

純粹にリゼットとの戦いのみを求めた今のミラはもう悪ではない。

そればかりか、どこまでも真つすぐに己を追うミラの姿はリゼットにとって眩しいものですらあった。

その在り方はまるで孫悟空のようで、普段は自ら封じている情がどうしても顔を覗かせてしまう。

リゼットは慈悲を切り捨てて冷徹に徹する事が出来る。

だが切り捨ててまで無理矢理相手に止めを刺しているという事は、結局の所本質的には甘いという事でしかなく、そもそも甘さを捨てる必要もなく相手を殺してしまえるターレスやベジータ、ピッコロには遠く及ばない。

「俺に、生きろというのか？」

「……………勘違いしないで頂きたいのですが、貴方が再び悪行に手を染めるようならば、その時こそ私は貴方を裁きます。今はあくまで様子見だという事を忘れないで下さい」

「直訳するとお前はもう悪人ではないから殺したくない、生きろ。という事だ」

「セル！」

「そんなに怒るな。おお恐い恐い」

リゼットに怒鳴られてセルが肩をすくめる。

しかしその顔はリゼットをからかうように笑みが張り付いており、彼女を煽っているのが一目瞭然だ。おお、うざいうざい。

「私はこれから閻魔様に苦情と、事の終始を報告して来ます。ポポ、彼の手当てを」
「はい、神様」

リゼットはポポに手当を命じて、その場から逃げるように転移した。

彼女にしてもずっと敵対までしてきた、ある意味ライバルでもあったミラのこの変化にどう対応していいか分からないでいるのだろう。

ミラはそんな彼女に苦笑してしまい、空を見上げた。

どうやら、自分は彼女の慈悲によって生かされるらしい。本人は認めないだろうが、随分と慈悲深い神様だ。

そして、今は素直にそれを嬉しく思った。前までの自分ならば情けをかけられた事を恥と思っただろうし、今でも少しは恥じる心がある。

しかしそれ以上に、また挑めるという事だけが嬉しかった。

(すまないな、トワ。お前があれだけ望んでいた暗黒魔界の復活だが、俺はそれを果たせそうもない。

いや、元より興味などなかったのだろう。俺はただ強い相手と戦えればそれで満足で、自分の強さを再認識する事しか考えていなかった。

そして俺は見付けてしまった……俺が最も望んでいた、全てをぶつける事が出来る宿敵を)

ミラは己と同化してしまったトワへ、心の中で詫びた。

在りし日の彼女ならば、こんな自分を見て不甲斐ないと怒っただろうか。

それとも失敗作を嘲っただろうか。

しかしミラはある意味において、トワすらも予想しなかった成功作だったのだ。今や彼は創造主の想定を超えたパワーを得、自らの意思で独り立ちをしている。しばらくはこの星で生きよう。そうミラは考えた。

越えるべき壁と、多くの強い戦士がいる……戦いに不便しないこの惑星で。

俺は戦士として更なる高みへと至りたい。それが、トワの命令すらも超えて彼が

自分自身で得た心からの望みであった。

リゼット「……………」
 T T T T T T T ……

閻魔（こ……この女の目……養豚場のブタでもみるかのように冷たい目だ。

残酷な目だ……『かわいそうだけどあしたの朝にはお肉屋さんの店先にならぶ運命なのね』ってかんじの！）

リゼット「……何か……言う事がありますか？」

閻魔「」

サイケ鬼「閻魔様羨ましいオニー」

※閻魔相手ならば無慈悲になり切れるリゼットの図。

【神殿の住民】

Mr・ポポ

セル

魔人ブウ

ゴッドガードン×
15

兎人参化&兎団

タピオン

ミノシア

ミラ【NEW!】

第百十五話 戦士達の日常

今回はただの平和回です。

【変わり者の父】

都会で車を見かけないという事はほとんどない。

車道の近くであれば、大体何処を見ても車の一台くらいは視界に入るものだし、車道ともなれば車が走ってない事のほうが珍しいくらいだ。

真夜中や早朝でもない限り、大体車は走っている。

今もまた、青になった信号の前を一台の車が通過して行った。

その運転席でハンドルを回しているのは悟空だ。

服装は白のシャツの上からオレンジ色のジャケットというラフなもので、袖の部分だけが黒いのがお洒落だ。

肩には『59』と書かれているが、この数字が何を意味しているのかは着ている

悟空も知らない。

しかし59という数字は語呂合わせで悟空とも読める為、このデザインはそれに気に入っていた。

下は緑色のジーパンと、普段の胴着姿ばかりの悟空を知る者から見れば新鮮な恰好と言えるだろう。

リゼットが見れば、『原作でセルゲーム前に着ていた服だ』と思ったかもしれない。

助手席にはチチ、後部座席には悟飯とビーデル、パン、悟天……それから格闘技世界チャンピオンのMr・サタンが座っていて、更に後ろには多くのベビー用品が積まれていた。

時間が経つのは早いもので、パンが生まれてからそろそろ一年が経過する。なので少し早い誕生日祝いとして、息子夫婦を連れて一家揃っての買い物と洒落込んでいるのだ。

勿論発案者はチチであり、悟空は荷物持ちとして付き合わされた形になる。

「すみません、義父^{おとう}さん。買い物に付き合っ^てて頂いて」

「気にすんな。オラもパンには元気に育って欲しいからな」

ビーデルの控えめな声に悟空が軽く答える。

悟空はサタンほど露骨ではないが、彼は彼なりにパンの成長を楽しみにしていた。気付けば自分もお爺さんで、孫はそろそろ一歳になる。

サイヤ人なのでまだまだ若い時期は続くが、心は若いままではられない。

勿論若い奴等に負ける気はないが、自分も年を取ったと実感してしまう。

今は亡き義理の祖父……孫悟飯もこんな気持ちだったのだろうか。

そう思うと、何だか少し嬉しくなった。

「そっちこそいいのか？ サタンが全額負担なんてよ。

オラも少しくらいなら金を出せるぞ。

最近どこも不作らしくて、野菜が高く売れるんだ」

「いえいえ、そこはこのMr・サタンにお任せを。パンちゃんに必要な物は全て私が揃えてみせましょう」

悟空の問いにMr・サタンが答える。

悟飯とビーデルの結婚により親戚となった彼との関係は良好だ。

最初こそ世界チャンピオンという事で傲慢さが目立っていたが、根は悪い男ではない。

今ではすっかり打ち解け、悟空とは爺さん仲間として気軽に話せる仲となっている。

ちなみに悟空に敬語なのは、付き合ううちに孫一家の常識離れた強さに嫌でも気付く羽目になってしまったからだ。

しかしそんな和気藹々とした空間の中でただ一人、チチだけが不機嫌であった。彼女は悟空を横目で睨む。

いや、正確には……彼の青い髪を睨んでいた。

「悟空さ。頼むから買物物の時くらい超サイヤ人はやめてけろ」

「いや、超サイヤ人じゃなくて超サイヤ人ブルー……」

「どっちでもいいだ！ 何で最近いつも超サイヤ人なんだべか！

おかげで『またチチさんの旦那さん、髪染めたの？』とか言われるだ！」

「おう、それなんだけだよ。ずっとブルーを続ける事で無駄な気の消耗を抑えられるようになってな。」

ブルーは強えんだけど気の消耗が激しい上にすぐ息切れしちまって、強さも十分の一以下にまで落ちちまう。

けど、気を体内に留める事で今までよりずっと……」

「そんな事聞いてねえだ！」

悟空のどこかズレた返答を聞き、チチが叫んだ。

彼は最近、ずっと青い髪を維持したまま日常生活を送っている。

家にいる時も風呂に入る時も、食事中も……挙句仕事中までずっとブルーのままだ。

別にそれで誰かに迷惑をかけているわけではないのだが、夫が変な髪色のままというのはあまり視覚的に嬉しくない。

その分、修行と称してどこかに行く事は減ったし、畑仕事も今まで以上にやってくれるので収入は増えたのだが……チチはやはり、本来の黒い髪の悟空が好きなのだ。

なので出来ればブルーは止めて欲しかった。

「まあ待ってくれて。もうちょっとで何か完成しそうなんだ」

しかしそこは根っからの武道家、孫悟空だ。

常識がないわけではないが、しかし強くなりたい欲求がそれを上回る。

最近ウイスの所に行かないのも、日常生活でブルーを慣らすという修行に専念しているからでしかない。

それどころか、最近はりゼットから自律気弾の使い方を教わって自分の分身に畑仕事をさせ始めた。

どう見ても後にサボる布石である。仕事を分身に任せて自分は修行に行く気だ。しかもこれで畑の規模が拡大して収入が数倍に膨れたので文句も言えない。

パオズ山の豊かな自然で育まれた悟空の野菜は評判もよく、通常の野菜より高く買い取られている。

最近では高級レストランなどでも使われているらしい。

「……ったく。店に入る時はやめてけろ」

「ああ、分かっているって」

結局チチが折れ、悟空は視界の端に赤信号を捉えてブレーキを踏んだ。

そんな二人の会話をビーデルとサタンは興味深そうに聞いている。

なんというか、常人離れした凄い会話であった。

「……ん？」

不意に、今まで緩んでいた悟空の顔が引き締まった。

それは、信号を無視して追い抜きをかけた一台のトラックを見付けたからだ。

トラックは交差点から入って来た別の車が見えておらず、車の方もブレーキが間に合わない。

当然のように二台がぶつかり、更にそれに巻き込まれて数台の車が横転してしまった。大惨事である。

それを見るや、悟空は車を完全に停車させて瞬間移動をする。

次の瞬間には悟空がトラックの前に現れており、素手で暴走トラックを止めていた。

悟飯や悟天でも同じ事が出来ただろうが、しかし二人は両端をビードルとサタンで固められていたので咄嗟に動けなかったようだ。

「悟飯君、貴方のお父さん、相変わらず凄いわね……色んな意味で」

咄嗟に大事故の拡大を止めた悟空を見ながらビードルが言う。

そんな彼女に悟飯が笑い、「まあね」と返した。

「父さんは色々常識外れだからね。でも……」

顔をあげ、悟空を見る。

彼は横転した車を次々と戻しては中の被害者達を引っ張り出しており、感謝されていた。

そんな父を見る悟飯の顔はどこか誇らしげだ。

「僕の、自慢の父さんだよ」

「……そうね。素敵なお父さんだと思うわ」

少しズレていて、どこまでも武道家気質で、時折ドジで。

しかしそれでも、悟飯にとって孫悟空はヒーローだ。

ピッコロと同じくらい尊敬している、幼い頃から変わらない憧れである。

「じゃあ、義父^{おとう}さんに負けない恰好いパパにならないとね」

「ああ、そうだね。悟天。僕たちも行こう。父さんを手伝わないと」

「うん！」

だが憧れてばかりではない。

悟空に負けない恰好いい父親である事を娘と妻に見せたい。

故に悟飯もまた、悟空に遅れて車を降り、被害者の救助に向かった。

【修行してばかりではないです】

先日復活してリゼットと戦って以降、神殿の一員となったミラは目標であるリゼットを超える為に彼女の修行を観察していた。

敵を知れば己の弱さも見えて来る。

ここ数日彼女を観察して分かったのは、そもそもの武の練度が自分とは段違いだということだ。

なるほど、勝てないわけだと思う。

単純な戦闘力で負けている上に技術で負けているのでは勝てる要素がどこにもない。

かつてミラはリゼットに『こんなものか』と言ったことがあるが、今となってはよくぞあんな事を言えたものだと思つて自分で自分に呆れてしまう。

あんなのはパワーの差に物を言わせていただけ……戦う者としては、最初から彼

女の方が格上だったのだ。

そう思ってからミラは、まず目標に追いつく為にリゼットの修行を模倣する事にした。

真似だけで超える事が出来るなどと最初から思っていないが、真似する事で見えるものもあるはずだ。

実際リゼットの動きは参考になる。

いくつかは女性ならではのしなやかさや、彼女の小柄さだからこそ出来るような動きもあるが、完成された武というのはこの上ない教科書だ。

そしてこの日、リゼットは何故か魔人ブウの腹を触っていた。

柔らかな腹をタップしたり、触覚を撫でてみたり、ブウのお腹に頬をうずめてみたり……。

はて、あれは何をしているのだろうか。

やがてリゼットは満足そうに去り、ミラは不思議そうにしながらブウへと近づいた。

（……ブウで技を試していた？ いや、それにしては攻撃の意思が見えなかった）

とりあえずリゼットがやっていたようにブウの腹を触ってみたり叩いてみたり、触覚を引っ張ったりしてみる。

だがこれで何が強くなれるのかがまるで分からない。

こんな事は初めてだ。今までのリゼットの修行には必ず強くなれる為のヒントがあったのに、これからは一切の意義を見出せないのだ。

(分からない……これに意味はあるのか……?)

「おい、何だお前。俺に何か用か？」

「あ、いや……すまん。特に用はないんだ」

「そうか」

ミラは魔人ブウから離れ、腕を組みながら歩いた。

あれは何だったのだろう……。

もつとも、魔人ブウから見ればミラこそ「あいつ何だったんだろう」だが。

それからしばらくして、リゼットはコートを羽織ると下界へと降りた。

そこで彼女が立ち寄ったのは一つの店だ。

もしやあそこに強くなれるヒントが？ ミラもすぐに同じ店へと突入した。

そこで彼を待っていたのは猫、猫、猫の山だ。

リゼットは猫と戯れてご満悦だが、ミラは険しい顔をしているだけだった。

そんな彼の頭や肩に次々と猫がよじ登るが、ミラはそんな事にも気付かず悩んでいる。

（分からない……これに一体何の意味が……）

後日、セルに相談してみたところ「お前真面目すぎないか？」と呆れられてしまった。

曰く、リゼットのあれらの行動に意味などない。

別に彼女も修行だけして生きているわけではないのだ……という事らしい。

考えてみればミラは次期魔界王になる為に生み出され、トワに従って戦い三昧の日々を送っていた。

いわば戦いの為に生み出された存在で、それ以外の事に思考が及ばない。

戦士として純化した事で生真面目さに磨きがかかってしまい、それが空回りを生んだのだ。

どうやら、彼が地球に馴染むにはまだまだ時間が必要らしい。

【後継者】

「そういえばセル。未来の方のトランクスの世界では貴方は無事に生き残りのナメック星人を見付けたそうですけど、こちらではまだ見付からないのですか？」
修行の合間の休憩時間。

魔人ブウに付き合わされる形でゲームをやりながらリゼットは、ふと思い出したようにセルへ質問を飛ばした。

セルがこの時間に留まっているのは、生き残りのナメック星人を探す為だ。

そしてこの前、未来トランクスが来て未来が無事に平和を取り戻した事を報告してくれたのだが、そこにはあちらの世界のセルの活躍があったという。

向こうのセルは見事にやり遂げ、未来を救った。

しかしあちらよりも遥かに情報が集まりやすい現代に留まっているセルが、未だに成果を上げていない事をリゼットは不思議に思ったのだ。

「ふむ……なかなか見付け難い場所にいるようだ。それらしい情報はない。まあ、

気長にやるさ」

セルはさして気にしていないのか、落ち着いた声で言う。

別の時間の自分に先を越された事に対して、特に焦りなどは感じていないらしい。一方画面の中ではリゼットの操作するウダン皇帝というキャラクターが勢い余ってリングの外に落ちてしまった。

悔しがるリゼットと笑う魔人ブウ。

そんな二人に背を向け、セルは神殿の端まで歩き始めた。

そして氣を探り……とうに発見していたナメック星人の生き残りの氣が今日も無事に残っている事を確認する。

結論を言えば、セルはとうの昔に生き残りのナメック星人を発見していた。

しかしセルはまだ未来へ帰る氣はなかった。

その前に一つ、どうしても残しておかなければならないものがあるからだ。

だからセルはその完成具合を確認するべく飛び、カプセルコーポレーションへと向かった。

カプセルコーポレーションを訪れたセルは、そのまま真っすぐに地下へと案内さ

れた。

そこで彼が見たのは、培養液の中に眠る——一人の人造人間であった。

銀色の長髪に、桜色の肌……整った顔立ち。

それは、似ても似つかないがこの時代のセルだ。

正確にはこの時代のセルと、破棄されていたとある人造人間を融合させたハイブリット体である。

完成までに長い時間を要するセルは、この時代ではまだ完成していない。

しかし時期的に完成は間違いなく近づいて来ている。

「後、どれぐらいで完成する？」

「一年ってところかしらね」

培養液の中で眠るセルは、最初から完全体と呼んでいい。

ほかでもないセル自身の細胞を与える事で、最初から完成度の高いセルを造り出す事が可能となった。

勿論自分同様に余計な悪人の細胞は排除し、代わりに他の細胞……自分にはなかった、強力な戦士達の細胞をこの現代セルには与えていた。

例えばそれはあの第6宇宙の試合で出会ったボタモやキャベ……そしてヒットの細胞だ。

他には界王神やキビト、魔人ブウといった未来ではリゼットが出会わなかったが故に得られなかった細胞も採取済みだ。

勿論従来の戦士も当時とは比較にならない。

悟空とリゼットは神の域に達し、ピッコロはより強力になり、最近ではミラという戦士まで加わった。

それらの細胞をベースに作り出された現代セルは、間違いなくここにいる自分を遥かに超えるポテンシャルを秘めている。

ビルス、ウイスの細胞は残念ながら使っていない。

ブルマ曰く、それらの細胞を入れると強力すぎて暴走する可能性が出るからだ。「……やっぱり、完成したら帰っちゃうの？」

「ああ。潮時というやつだ」

セルがまだ現代に留まっているのは、己の後継者を造り出す為であった。

この時代には何だかんだで思い入れがあるし、自分が去った後にまた恐ろしい敵

が出現しないとも限らない。

だから自分の後を託し、この世界を守れるもう一人の自分を残したかった。

それに……正直なところ、戦力的な限界が見えてきたのだ。

セルはサイヤ人の細胞を持つが、純粋なサイヤ人でない為にゴッドや4にはなれない。

フリーザの細胞を得たが、ゴールデンフリーザと同じ形態になっても実の所そのパワーアップ倍率は超サイヤ人3よりはマシという程度だ。

ゴールデンフリーザがブルーの悟空と互角だったのは、単純な種族差……基礎能力でフリーザが上回っていたからではない。

リゼット達はまだまだ強くなる。

だが自分は……恐らく、近いうちに置いていかれる。

強さという名の特急列車から途中下車するべき時が来たのだ。

だがこの新生セルは違う。

これは、この時代の強者達をベースに生み出された完璧を超えた究極のセルだ。自分に代わり、これからの地球を守っていけるだろう。

ならば自分のこの時代での最後の役目は、この新生セルの誕生を見届けて後を託す事だ。

それが済めば、その時こそ安心して未来へ帰る事が出来る。

そして彼女を、ようやく目覚めさせる事が出来るのだ。

「そういう事だ、『私』よ。お前の完成を楽しみにしている。

ではまた、一年後に会おう」

この時代に留まれる時間はそれほど多くない。

その事に達成感と僅かな寂しさを感じながら、セルは別れの時が近付いているのを感じていた。

【戦鬪力】

孫悟空…10億

超サイヤ人ブルー…2兆

完成ブルー…6兆

※悟空が超サイヤ人ブルーを完成させました。

【超サイヤ人ブルー（完成）】

漫画版で披露された超サイヤ人ブルーの完成バージョン。

無駄に放出されていた神の気を体内に閉じ込める事でパワーアップし、安定した。漫画版よりも更に安定性を求めた結果、弱点をほぼ完全に克服した代わりに出力は漫画版の完成ブルー以下に。

気を体内に閉じ込める性質上、界王拳との併用は困難。なので通常のブルー十界王拳の出番が消えたわけではない。

安定して戦うなら完成ブルー、一瞬の爆発力ならブルー十界王拳という使い分けが可能。

第百十六話 邪悪なる龍

コントン都。

そこは以前のドミグラの襲撃によって破壊されてしまったトキトキ都を建て直した、タイムパトローラーやその卵が集う拠点とも呼べる都だ。

時間と時間の境目に存在し、あらゆる時間軸へ行き来出来るその場所は時の界王神が管理運営し、時間のイレギュラーに対応する。

そこに集まる者達に種族の隔たりはない。

地球人やサイヤ人、ナメック星人はおろかフリーザ一族や果ては魔人ブウの分身体までもが暮らし、時間を守るために日夜トレーニングを積んでいる。

通常の界王神達は時の指輪という形で並行世界の存在を認識する。

だがそれは、自分の世界から分岐した歴史、あるいは自分達の世界そのものが分岐した世界の場合の元の歴史を認識出来るに過ぎず、無限に広がる並行世界の全てを認識出来るわけではない。

彼等が知ることが出来るのはあくまで、自分達の世界と極に近い位置にある並行

世界だけだ。

そしてそれが通常の界王神の限界だ。彼等は宇宙を管理する神であっても時間を管理するのは本業ではない。

だが時の界王神から見れば時間とはそのように単純なものではなく、もっと複雑に分岐しているものだ。

リゼットがいる世界がある。リゼットがいない世界もある。

孫悟空がフリーザとの戦いで超サイヤ人にならずにクウラとの戦いで覚醒する世界があれば、そもそもクウラなど存在しない世界もある。

魔人ブウとの戦いで悟空とベジータが生き返る世界があれば、生き返らずにあの世でジャンセンバと戦う世界だってある。

破壊神ビルスが訪れる世界がある一方で、ビルスが訪れずに時間が過ぎて究極のドラゴンボール探しの旅が始まる世界もあるだろう。

並行世界とは無限だ。些細な事で分岐してしまう。

そして世界を分岐させるのは歴史を超えた者達だけではなく、その時を生きている者達の少しの気まぐれや判断の違い、運などによって変わってしまうのだ。

ビルスの例などが最たる例だ。ビルスが地球に訪れない歴史において、彼が来なかった事に理由などない。

ただ単に予言を忘れて寝過ごしただけであり、別に誰かが時間を超えて手を加えたわけではないのだ。

だが、たったそれだけの事で歴史は完全に分岐してしまい、孫悟空はゴッドにならずに究極のドラゴンボールによって子供にされ、そしていくつもの戦いを経て異なる進化である超サイヤ人4へと目覚めた。

この世界線では悟空やその仲間達は一生破壊神やその上の全王の存在すら認識せず、生涯を終えるだろう。

そしてその全てを観測している者こそが時の界王神であり、彼女の手足として各時間軸を移動して歴史を見守るのがタイムパトローラーなのだ。

そのタイムパトローラーの中でも最高責任者に任命され、日々忙しく働いている男がいる。

銀色の髪に黒いコート。かつてリゼット達と共に戦った事もある未来のトランクスだ。

彼は時の界王神が住まう時の巢へと向かい、そこで己の上司である二人の界王神と対面した。

一人は先述の時の界王神。桃色の肌に、同じく桃色の髪をした小柄な少女の姿をした神だ。

こんな外見であるが、その実年齢は7500万歳を超えているらしい。

元々は界王であったが、功績が認められて界王神に昇格したという珍しい経緯を辿っており、生まれつきの界王神だった東の界王神よりも現場への理解度は高い。

もう一人はモヒカン頭の、老いた界王神。Zソードに封印されていた事で知られる神だが、この老界王神が一体どの時間軸から来たのかは不明だ。

「お待ちせしました」

「おせえぞ、トランクス」

時の巢へ入ったトランクスにぶっきらぼうな声かけられる。

声の主は悟空に瓜二つの容姿のサイヤ人で、名をバーダックという。

本来は既に死んでいるはずの男なのだが、タイムホールに巻き込まれてトキトキ都へ訪れてしまい、その後はタイムパトローラーとしてトランクスと共に戦い続け

ている。

身に着けているのは戦闘服だが、以前とはデザインが違う。

以前の戦闘服と似た意匠ではあるが、内側には黒のアンダースーツを着込んでおり、防御力が前よりも上がっているのだ。

「それで時の界王神様。一体何が起こったのでしょうか？」

「ちょっと不味い事になったわ。とにかく、これを見て」

時の界王神がそう言い、部屋の中央にある水晶玉に手を翳す。

するとそこには改変されてしまった歴史が映し出され、その中でリセットやセル、ミラと邪悪龍が対峙していた。

邪悪龍とはドラゴンボールが限界までマイナスエネルギーを溜め込んだ時に発生してしまう邪悪な者達の事であり、リセットがボールを完全に管理しているこの世界線では誕生しないと思われる存在であった。

「じゃ、邪悪龍……！ 何故この世界に邪悪龍が！」

「ドミグラの仕業よ」

「ドミグラですって?! しかし奴は……」

「そう、リゼットちゃんと悟空君が倒したわ。けどあいつは時間差で発動する魔術を仕掛けていたのよ。」

そしてワームホールを通過して奴のマイナスエネルギーがドラゴンボールへ当たり、邪悪龍を生み出してしまった」

時の界王神が複雑そうに話し、今はもういないドミグラの所業に心を痛める。

バーダックは腕を組みながらフン、と鼻を鳴らす。

「トランクスといいセルといい、トワやミラ、ザマスときて今度は一周してまたドミグラか。」

つくづく、他の時間軸から干渉される世界線だな」

「ともかく、放ってはおけんのう。行ってくれるか？」

バーダックが軽口を叩き、老界王神がバーダックを見た。

それにバーダックも「あいよ」と返し、時の巻物を受け取る。

ドミグラの置き土産だというならば、それはタイムパトロールが関わるべき案件だ。

リゼットならば放置してもどうにかしてしまいかもしれないが、行かないわけに

はいかない。

「頼むわよ、バーダック」

時の界王神に言われ、バーダックは時間を超えた。

★

ミラとの戦いから一月が経過した。

彼は今は神殿に滞在しており、暇な時間はずっと修行に励んでいる。つまりはずっと修行しているという事だ。

かつて敵であったミラが地球に滞在し、神殿に住む事になったのには悟空達も驚いていたが、しかし驚くだけで反対する者は一人もいなかった。

何せ彼等にとって、敵だったはずの者が味方になるなど今に始まった事ではないからだ。

『ああ、今度はこいつが仲間になったんだな』程度の感覚でしかない。

故にミラはさしたる抵抗もなく受け入れられ、これには当の本人が『これでいいのか?』と不安すら感じた程だ。

しかし一月もすれば大分慣れるもので、今ではミラは神殿でセルを相手に修行を

積んでおり、セルもまたいい練習試合の相手が出来た事を喜んでいる。

そんな二人の戦いを背にリゼットはドラゴンボールを集めて浄化を行っていた。ドラゴンボールは願いを叶えるたびにマイナスエネルギーを溜め込み、それを浄化するには1000年を待たなければならない。

しかしリゼットは原作の知識によってそれが実は人によって浄化出来る物である事を知っており、悟空が四星球を飲み込んで浄化し、四星龍を味方に加えたエピソードは印象に残っている。

リゼットは別にドラゴンボールを飲み込むような事はしないが、負のエネルギーの浄化ならばお手の物だ。

なのでこうして、今ではリゼットが定期的にドラゴンボールを浄化する事でマイナスエネルギーを常に0に抑える事に成功していた。

もう昔のように精神と時の部屋に放り込む必要すらない。

念のためにナメック星のドラゴンボールも少し前に浄化しており、つまり余程のイレギュラーが起こらない限り、邪悪龍発生心配はないという事だ。

「……よし、浄化完了しました。ポポ、神殿の奥へドラゴンボールを安置しておい

て下さい」

「はい、神様」

リゼットのドラゴンボールの管理は先代とは大きく異なる。

先代はあえて地上に撒いて人々の最後の希望として球を与えていたのに対し、リゼットが取る方針は自分達の手による完全な管理、独占だ。

地球にどんな危機が迫るか分からない現状、ドラゴンボールはいつでもすぐに使える状態にしておいた方がいい。

実際未来の世界では仏心を出して地上に残していたが為に肝心な場面でピラフ一味がどうでもいい事に使用してしまい、取り返しが付かなくなったという。

いずれは地上の人間達の希望として返すかもしれないが、それは地球が完全に平和になったと確信した時だ。

少なくとも、いつ何が起ころうともおかしくない今ではない。

「徹底した管理だな。そして浄化まで完璧に行うか。

どうやらこの時間軸ではお前がいる限り邪悪龍の発生はなさそうだ」

「そういえば貴方は知っているのでしたね」

「ああ」

修行に一段落を付けたミラがリゼットへと話しかけ、そこでリゼットはミラもまた邪悪龍の事を知り得る男である事を思い出していた。

彼はあらゆる時間を飛び、エネルギーを集めていた。

つまり、邪悪龍が発生してしまったGTの時間軸を実際に見ていても何ら不思議はないという事である。

「過去にも地球以外の星で邪悪龍が発生したとポポから聞きました。貴方はその星の事も知っているのですか？」

「いや、その時代までは遡っていない。俺が見たのはこの先の未来……破壊神ビルスが訪れなかった時間軸の並行世界だ。

そこでは孫悟空達がそれまでに叶えた願いから邪悪龍が発生し、そして戦っていた」

これは間違いなくGTの世界線の事だろう。

やはり今自分が生きているこの世界は何らかの理由で分岐してしまったらしい。恐らくこのまま時間が流れてもGTと同じ流れにはなるまい。

とはいえ、ベビーやドクターミューなどは存在しているだろうからそのうち手を打つ必要はあるだろう。

ともかく邪悪龍に関しては今の所、少なくとも地球で発生する兆候はないし発生させない。

そう思考を締め括り、リゼットは顔をあげた。

それと同時に空間の歪みを感じ、事態を把握するよりも早く負のエネルギーが神殿へと直撃した。

「え……？」

呆然と振り返る。

見れば、空中には時空の穴が開いており黒い気を垂れ流している。

その向かう先は神殿のドラゴンボールだ。

浄化したばかりのドラゴンボールから負のエネルギーが溢れ出し、神殿の空を黒雲で覆う。

しかも今、時空の穴から出て来た気には覚えがあるし、絶対にありえないはずのものであった。

何故なら、この氣の持ち主は……他ならぬリゼット自身が滅したはずなのだから。

「馬鹿な……この氣は、ドミグラ……？」

そう、その氣はかつて倒したはずの魔神ドミグラのものであった。

倒し損ねたはずがない。間違いなく奴は塵に変えた。

ただ倒しただけではない。

『破壊』まで使って念入りに消滅させたのだから、生き返るとか以前の問題なのだ。生きているはずがない。ミラのように地獄から還ってこれるはずもない。

しかし混乱するリゼットを他所に、かつてドミグラと同じく各時間軸を転移していたミラが答えに辿り着いた。

「……そうか、時間差だ」

「え？」

「ドミグラは恐らく、時間差で魔術が発動するようにあらかじめ仕組んでいたに違いない。

いわば今のは奴の死に土産だ」

時間軸を超えて時間差で発動する魔術……まさしく時を司る魔神ならではの嫌が

らせだ。

これに対抗するには同じく時を翔ける力を有するしかなく、いかにリゼットでも対処出来るものではない。

出来る事は、既に起こってしまった事態に対応する事のみ。

リゼットは即座に決断を下して神殿を覆うようにバリアを展開。

これから起こるだろう戦いを、自分達だけで対処する事を決めた。

地球に飛び散らせてしまつては人々に被害を齎す。

だから、ここで始末するしかないのだ。

（今ここにある戦力は私とセル、ミラ、タピオン、ブウ、それからゴッドガードンが15体。

弱い邪悪龍ならばゴッドガードンとタピオンのみで十分。

厄介な一星龍、四星龍、三星龍を私達で抑え込めば勝てない戦いではない）

邪悪龍のうち高い戦闘力を誇るのは炎と氷の兄弟と、彼等の統括である一星龍だけだ。

他の龍も悟空達を苦戦させてはいたが、あんなのは悟空側の舐めプが原因である。

というか悟空は舐め癖を本当にどうにかすべきだろう。邪悪龍との戦いもリゼットの記憶が正しければ舐めプが原因で殆ど負けそうになっている。

ギルやパンに助けられたり、運よく雨が降ったりしていなければ死んでいてもおかしくなかった。

無論、リゼットはその轍を踏む気などない。

手の中に浄化の気を集約させ、ドラゴンボールから出て来た黒煙の龍へ問答無用で発射。

彼に一言も話す間を与えずに消し去った。

前座など用はない。これから始まる邪悪龍との戦いに向け、リゼットは出し惜しみなく神の気を解放した。

【戦闘力】

・一星龍

戦闘力…5兆

超サイヤ人4の悟空を圧倒する戦闘力の持ち主。無理矢理登場させられたせいでGTより弱い。マイナスエネルギーが足りない。

それでも超一星龍になれば50兆を超える。

・三星龍

戦闘力…1兆5000億

・四星龍…3兆

・六星龍…500億

・七&五&二星龍

この三体は条件を満たさなければ雑魚なので戦闘力設定の必要性を感じなかった。

まあ1億以下なんじゃないかな。

【GT 悟空の強さ】

・確定ではないですが、このSSに出すならノーマルで20億くらいになると思います。

あんまり基本値を高くし過ぎる気はありません。

インフレよくない。

リルドと互角だったのは界王拳のように気を倍加させていたとかで。

最大倍率を超の悟空を上回る30倍とし、後は経験と技術で埋めたとでも考えます。

ちなみにGT超一星龍は100兆くらいと考えています。

何でインフレ抑えてるのにこんな数値になるかな。

第百十七話 神殿の守護者達

リゼットが黒煙の龍を消し飛ばすと同時に、龍は七つに弾けて世界各地へと飛び散ろうとした。

だが神殿には既にリゼットが張ったバリアがある。

それも邪悪龍が苦手とする神の気——プラスのエネルギーの極地とも呼ぶべき力で張られたバリアだ。

龍はそれを突破する事が出来ず、神殿や以前ヒルデガンとの戦いの際に造った巨大リングの上などに墜落し、それぞれの姿を晒した。

地上へなどは行かせないし、地球に異常気象なども起こさせない。

ここで、出現した事すら人々には知られないままに消えて貰う。

その為にリゼットはゴッドガードン達へと出撃命令を下し、自らも敵の大將を相手にするべく飛翔する。

だがそんな彼女の前に、時空を超えてバーダックが突如として出現した。

『リゼットさん、加勢します！』

この場にはいないがトランクスの声も聞こえる。

どうやら今回は時の巢で待機しているらしい。

とはいえ、バーダック一人だけでも十分にありがたい。

「ドミグラの野郎の置き土産とくりゃあ、俺達の仕事でもあるからな。

勝手に手伝わせてもらうぜ」

それだけ言い、彼は適当な相手を見付けて飛び去った。

頼もしい援軍にリゼットが微笑み、しかしすぐに表情を引き締める。

彼女が見定めた相手は言うまでもなく敵の総大将……一星龍だ。

向こうもリゼットを最大の強敵と見なしたのか、他の戦士には目もくれずにリゼットを凝視している。

そんな一星龍の前にリゼットが着地し、二人は正面から相対した。

邪悪龍、二星龍は毒を操る龍である。

高い戦闘力こそ持たないが、周辺を毒のフィールドで満たす事で敵の戦闘力を下げて最終的には動けなくし、勝利を得る事が出来る。

しかし彼と相対するのは鋼の守護者ゴッドガードン。生物ではないそれを相手に毒など当然通用しない。

ツフル人の天才科学者ドクターライチーが造り、それを元に地球の天才科学者ブリフ博士が改良、量産したゴッドガードンは戦闘力にして50億を記録する。

これは人造人間17号や18号を遥かに凌駕する数値であり、1対1ならばボージャック以外のヘラー一族にすら勝てる強さだ。

精神と時の部屋から出た直後の超ベジータに若干劣る程度……この世界線には登場すらしていないが、セルの第二形態以上と思えばその凄まじさも理解出来るだろう。

要するに……二星龍に勝ち目などなかった。

「ま、待ってくれ、頼」

『リゼット様ノモトへハ、オレサマヲ　タオサナケレバ　イケヌゾ！』

意外と俗っぽい話し方をするゴッドガードンが容赦なく最大武装のガードンクラッシャーを発射し、二星龍へ直撃させた。

無論耐えきれぬわけではない。

二星龍は木っ端微塵に碎け散り、消滅した。

邪惡龍、五星龍は電気を吸い取り操る龍である。

その体軀は1mにも満たないが、彼は自分こそ邪惡龍最強であると信じている。実際その能力は凄まじいものだ。己の手足である電気スライムを役使し、周囲から電気を吸い取らせて己へと同化させる事で巨大化する事が出来、巨大化した後はその弾力に富んだ身体で殆どの攻撃を弾き返す。

攻撃能力も決して悪くない。必殺のドラゴンサンダーは当たれば悟空にすら通用する威力を秘めている。

しかしその戦闘力は電気を吸収すればこそ。

そもそも吸収すべき電気がないこの神殿では真価を発揮できない。

唯一の電気を帯びた相手はゴッドガードンだが……しかし彼の前に立つのは電気とは無縁なピンクの魔人だ。

無害そうな顔でニコニコと笑いながら魔人ブウは五星龍をどうやって食べるかばかり考えていた。

要するに五星龍に勝ち目などなかった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。頼む、電気を少し分け」

「お前食べちゃお」

意外と人の話を聞かない魔人ブウが容赦なくおやつ光線を発射し、五星龍へ直撃させた。

無論耐え切れるわけではない。

哀れ五星龍はチョコになってしまい、そこに追い打ちのガードンクラッシュャーが飛んで来て木っ端微塵にしてしまった。

食べようと思っていたブウは不満そうだが、マイナスエネルギーの塊である邪悪龍など食べてはお腹を壊してしまうかもしれない。

なので代わりにゴッドガードンは普通のチョコを魔人ブウに与えた。

邪悪龍、七星龍は他者に寄生してその力を自由自在に操る龍である。

ただ操るだけではない。本来の戦闘力の何倍、否、何千、何万倍もの力を発揮させる事が出来るのだ。

その倍率の凄まじさたるや、超化も出来ないサイヤ人に寄生して超サイヤ人4にダメージを与えられる程と言えは出鱈目具合が伝わるだろうか。

しかし彼と相対するのは鋼の守護者ゴッドガードン。生物ではない相手にどう寄生しろというのだ。

七星龍はドラゴンボールが本体とも言うべき変わった性質を持ち、不用意に触れた相手へ寄生する事も出来る。

だが繰り返すが相手はゴッドガードンだ。致命的なまでに相性が悪い。

更にそこに五星龍と二星龍を葬ったゴッドガードンと魔人ブウが合流し、駄目押しとばかりに他のゴッドガードンまで押し寄せた。

その差、実に16対1。鋼の守護者と魔人に囲まれてしまった七星龍はもう泣くしかない。

「た、頼む、何かに寄生するまで待ってく」

『リゼット様ノモトへハ、オレサマ達ガ ユク!』

実は意外と感情豊かなゴッドガードンズが容赦なく七星龍を取り囲んで集団リンチし、原型を無くすまで文字通り叩き潰した。

ついでに魔人ブウも参加し、追い打ちをかける。

無論耐えきれぬわけがない。

七星龍は悲鳴をあげながら、消滅した。

邪悪龍、六星龍はギャルのパンティの願いから生まれた可哀想な龍である。

悟空達とドラゴンボールの長い付き合いの中でも記念すべき最初の願いにして伝説の願いより生まれたとても哀れな彼女は、そんな願いから生まれた自分を結構恥じていた。

しかし願いは馬鹿馬鹿しくとも、その实力は侮れない。

自らが高速回転する事で竜巻を起こし、敵の攻撃を弾く攻防一体の能力は先の三体のように状況を選ぶものではなく、相手が舐めプしなければ実は一瞬でやられる雑魚だったなどというオチもない。

極めて正統派の実力者であると言える。

加えてその容姿は、並の男であれば攻撃自体を躊躇してしまうものだろう。

しかし彼女と戦うのはバーダック。かつて数多の惑星を侵略し、幾度死にかけて

も懲りなかった根っからのサイヤ人だ。

相手が女だからといっていちいち躊躇うような甘さなどあるはずもなく、何ら容赦のない怒涛の攻めで六星龍を追い詰める。

戦場に立ったならば、それは戦士だ。戦士に男も女もない。

全力で戦う事。それが彼なりの相手への敬意の表し方であり、そして流儀であった。

「そりゃあああ！」

高速回転しながら風の障壁を纏う六星龍に正面から拳を叩き込む。

拳が弾かれるというならば単純な話、弾かれないだけの速度と威力で打ち込めばいい。

あえて六星龍の回転に真っ向から歯向かうように拳を当て、己の手が血に染まるのも厭わずに繰り返す。

すると六星龍の回転が少しずつ弱まっていき、その表情には焦りが見え始めた。

「な、なんて出鱈目な奴！」

「それが俺達サイヤ人だ」

バーダックが拳打を放ち、その衝撃波で六星龍が弾き飛ばされる。

目には目、風には風。

次々と放たれる拳の風圧が六星龍を打ちのめし、地面に倒れさせた。

その拍子に六星龍の変身が解け、本来の姿——醜い龍としての素顔を出してしま
う。

だがそれを見てもバーダックの表情は変わらず、何か言う事もなかった。

「お、おのれ……妾の素顔を、見たな……」

醜い顔だと、思っているのだろう……」

「……いや、別に」

六星龍は憎しみを込めて言うが、それにバーダックは至極どうでもよさそうに返
した。

別に嘘ではない。そもそも彼は今までに多くの異星人を見て来たのだ。

今さら少し人間離れた顔を見せられた所で別に何とも思わない。

そもそもベジータの弟に至っては、明らかに美的感覚すら異なるはずのオプーナ
のような異星人を妻にしているのだ。

ましてやここは戦場。相手の外見で判断などしない。

「戦ってる最中に相手の面なんざ気にすつかよ。」

だがそうだな……アンタ、結構強かったぜ。

それに気も強い。そういうのはサイヤ人の好みのタイプだ。

アンタ、イイ女だと思うぜ。トーマの奴が生きてたら紹介してた所だ」

「……は……ははっ。なんだ、それは。」

だが……悪くない。其方もいい男ではないか。違う出会い方をしたかったのう。

惚れていたやもしれん」

「悪いが俺はこれでも妻子持ちだ。あいつ^{キネ}以外の女を愛する気はねえ」

「そうか。残念だ」

六星龍は最後の力を振り絞って女性の姿へと戻り、静かに目を閉じた。

せめて死ぬときは美しい姿で死にたい。それは彼女の女としてのプライドであった。

ましてやこの男の前で醜く死ぬのは、嫌だったのだ。

たとえそれが、見た目などを気にしない男であったとしても……それでも彼の前

では不思議と綺麗なままでありたいと思った。

もしかしたらそれは恋と呼ばれる感情だったのかもしれない。

生まれてすぐに会った男に恋をして、そして失恋をした。

そう書くとも何とも間抜けなものだが、それでも悪くないと思えた。

……自分を殺す相手が、この気高い戦士でよかった。そう、思えた。

「あばよ。嫌いじゃなかったぜ」

最後の餞別の言葉。

それを耳にすると同時に気功波の熱が彼女を飲み込み……六星龍はこの世から消え去った。

その戦いは、これまでの戦いとは格が違っていた。

黄金色に輝き、体温を太陽表面と同じ6000度にまで上昇させる事が出来る四星龍と、トワとの融合により超パワーを得たミラとの衝突は一撃ごとに神殿を覆うバリアを軋ませ、重厚な打撃音を響き渡らせる。

かつて対ヒルデガン用に建設した特設リングは二人が一步踏み込むごとに抉

れ、溶けていた。

四星龍の超高温を、ミラは全身を気で覆う事で遮断し、互角の攻防戦を繰り広げる。

互いに戦いを何よりの楽しみとする武人同士であり、そこに小細工や策はない。どこまでも愚直な力比べ、速さ比べは『どっちが強い』という子供染みた強さ比べを究極にまで昇華したものだ。

余計な邪念が一切入り込まないが故に純粹。純粹であるが故の高揚。

ミラと四星龍は命を削るような打撃戦の中でありながら、互いの技量を認め合い、この瞬間を心より楽しんでいた。

「嬉しいぞ……今の俺とここまで戦える強者がこんな所にいたとは。

そしてお前からも感じるぞ。どんな相手にも立ち向かう燃えるような闘志を」

「私も同感だ。お前ほどの男と戦える事を幸運に思う。

この四星龍が全力で戦うに相応しい戦士よ」

ミラの拳が四星龍の腹にめり込み、四星龍の拳がミラの頬を打つ。

四星龍の蹴りが顎を跳ね上げ、ミラの蹴りが延髄に決まる。

痛みすらもが心地よく思えるこの興奮、昂りはきつとりゼットには理解出来ない世界だ。

彼女もまた戦士である事に違いはないが、武術家ではあっても武道家ではない。彼女にとって戦いとは手段であり、技とは武器だ。

無論自らが強くなることに達成感を感じているだろうし、修行そのものに少しは楽しみを感じてもいるだろう。

だが戦いそのものを目的として楽しむ心はきつと彼女には分からない。

女には決して分からぬ男の世界。男同士だからこそ理解し合える狂気の境地。保身など一切考えぬ。後の事も知らぬ。

戦いを楽しむ為だけに今この時、一瞬の攻防のみに全てを費やすこの感覚。

その、何と心地良い事か。

「はあ！」

四星龍の肘がミラの頬骨を砕いた。

痛みを感じているのに感じていない、とでも言うべきこの感じを言い表す言葉を彼は知らない。

痛覚が消えたわけではない。身体どこがどれだけの力で攻撃されたかはしっかりと把握出来ている。

だがその痛みが苦にならない。怯みもしない。

「ぜあ！」

ミラの打ち下ろした拳が四星龍の頬に亀裂を入れた。

一撃ごとに拳が僅かずつ焼ける。その熱さを感じていないわけではない。

だがそんなものは気にならず、脳内麻薬が壊れたように出続ける。

勝負の果てに自分がどうなるかなど考えもしない。ただ今は、目の前のこいつに勝ちたい。

ただそれだけを想う。それだけを楽しめる。

「「おおおおおおおッ！」」

掌を握り合い、正面から力比べの姿勢へと入った。

ミラの掌が焼け、四星龍の手がミラの握力で罅割れる。

だが向ける表情は互いに笑みに彩られ、最早痛みや熱さなど高揚を高めるスパイスにしかない。

暑苦しい男が二人、幸運にも降って沸いた素晴らしい好敵手との戦いで互いを高め合いながら咆哮した。

タピオン「お、俺の出る幕がない……」

※神殿側の戦力が充実しすぎて出番のないタピオンさんの図。

とりあえず端っこの方でオカリナでも吹いてて下さい。

Q、何で未来トランクスこないんだよ

A、ゼノバースでもこいつ、こんなんやぞ

第百十八話 一氣呵成

・前話のゴッドガードンの性格に関して『ブリーフ博士の趣味?』などの感想が多く寄せられました。こいつは元々ゲームでもこんな奴です。

ちなみにこれがゲームでの実際の台詞です。

「ライチャーサマノ モトニハ オレサマヲ タオサナケレバ イケヌゾ!」

三星龍は一方的に打ちのめされていた。

冷気を操る能力を持ち、彼によって氷漬けにされた者は超サイヤ人4であろうと自力脱出は困難だ。

更に手段を選ばぬ性格を持ち、不意打ちや騙し討ち、人質すらも躊躇なく使う彼はある意味では戦いのプロフェッショナルと言えた。

四星龍とは兄弟の関係にあるが、その性格は真逆。どこまでも勝利のみを突き詰めたその在り方は彼なりの美学すら感じさせる。

しかしそれは相手が甘い相手ならばこそ通じる事だ。

孫悟空のように正々堂々とした戦士を相手にした時こそ、彼の狡猾さは真価を発揮する。

だが今、彼と戦っているのは人造人間セル。

多少の卑怯卑劣、騙し討ちなどにかかる相手ではない。

全身にスパークを纏った彼は平常時とは比較にもならぬ爆発的な戦闘力で三星龍を圧倒する。

冷凍光線は気のバリアで阻み、仮に命中してもすぐにその部位を切り捨てて脱出し、再生する。

そうして自らの攻撃を次々と命中させる事で三星龍を的確に追い詰めていた。「ま、待ってくれ。わ、私の負けです……」

ドラゴンボールは渡しましよう。い、命だけはお助けを……」

三星龍はプライドを捨てて命乞いに走った。

祈るように両手を組んで跪き、セルを見上げて懇願する。

戦士としての誇りなど微塵もないその姿にセルは興醒めしたように見下ろす。

だが三星龍はまだ戦いを諦めてなどいなかった。

セルが隙を見せた瞬間に目を攻撃し、視力を奪った一瞬で氷漬けにしてやろうと目論んでいたのだ。

いかに再生できるといっても視力を奪われれば一瞬その動きは止まるはず。

集中も途切れてバリアも消えるだろう。

その瞬間ならば勝機はある。

「ふむ、そうだな。ドラゴンボールさえあれば確かにお前などに用はない」
セルはやがて温情を見せ、三星龍の手からドラゴンボールを受け取った。

——勝機！

三星龍はニヤリと笑い、素早く片手を薙いで指先に集めた水分を刃へと変えた。
彼の最後の切り札の『ダーティークロー』は余波だけで遠く離れたビルすらも切断する威力を持つ。

その一撃でセルの眼球を裂き、間髪を容れずに目からの冷凍光線でセルの足を氷漬けにした。

「ぐわっ、眼が……！」

「ヒヤハハハ！ 油断しましたね！」

駄目押しです、両腕も封じさせて頂きましょう」

再び目から光線を放ち、セルの両腕を封じた。

いかに再生出来るといえど、自ら動かせる部位がなければ自分の身体を切断して逃れる事すら出来まい。

これで形勢逆転だ。セルはもう何も出来ない。

「か、勝った……ヒヤハハハ！」

「ま、まさか、こんな事が……この私が……」

「ヒヤハハハハハ！」

「ち、ちくしょう……ちくしょおおおおお！」

「ハ―ッハハハハハ！」

「――なんちゃって」

氷漬けにされていたセルが、突然これまでの苦渋の表情を捨てて晒った。そして三星龍はそれと同時に首に鋭利な何かが深く食い込むのを感じた。目で追えば……そこにあったのは、地面から飛び出したセルの尾だ。

それが首に突き刺さり、貫通している。

セルの方を見れば、尾を地面に突き刺していた。

「馬鹿笑いしおって。既に命を握られていた事に気付かなかったか？」

「な……あ……!？」

「お前が下手糞な命乞いを始めた時、既に私は尾を伸ばしてお前の首に突き付けていたのだ。」

欺くのに必死でそんな事すら分からなかったらしいな。

どうやら相手を騙すのは得意でも、騙されるのは苦手と見える」

そう、勝負はもう付いていた。

セルは相手の命乞いが演技である事を見破った上で遊んでいたに過ぎない。

その事を理解してしまった三星龍の顔が屈辱で染まり、吐血する。

集中が途切れ、セルを拘束していた氷すらも持続出来なくなり砕けてしまった。

「さて、このまま生体エキスを吸い取って私の一部にしてやってもいいのだが……お前にそれをやると余計なマイナスエネルギーまでセットで付いてきそうだな。腹を壊しそうだ。」

やはりこのまま消えて貰う事にしよう」

「な、何故……わざわざ騙された振りを……」

「あえて言うならば楽しむのが目的かな。」

屈辱と絶望の顔を見てみたかったのだ」

「ち、ちくしょおおおおおおお！」

「はっはっは。そうそう、その顔だ」

セルは満足そうに笑い、三星龍の首を掴んで持ち上げ、握力でへし折る。

そして掌を彼の胸へと当てた。

「じゃあな」

無慈悲に気功波を発射し、三星龍をこの世から消滅させた。

神殿の中央で対峙するのはリゼットと一星龍だ。

互いに総大将同士であり、先程から睨み合いが続いている。

だがリゼットが涼しい顔をしているのに対し、一星龍の顔は苦渋に満ちていた。

それは互いの陣営の戦局が完全にリゼット側に傾いているからであり、殆どの邪

悪龍が成す術もなく駆逐されてしまっているからだろう。

「一つ、聞いておきましょう。貴方は何時の願いから生まれた邪悪龍ですか？」

「フリーザ一味に殺された者達を蘇らせた時の願いだ。俺はその時に生まれた」

「私が気になっているのはそこです。貴方がその時に生まれた……それはよしとしましょう。」

しかしその時に発生したマイナスエネルギーは私が浄化したはず……つまり貴方はその時点で消えたはずです。

その貴方が、いかにマイナスエネルギーを得たとはいえ何故、今になって出てくるのですか」

一星龍が誕生する経緯になった願いは確かにこの世界でも叶えている。

だがそれはリゼットが浄化したはずであり、もう邪悪龍は誕生しないはずなのだ。少なくともこの、GTと全く同じ姿の一星龍にはならない。

マイナスエネルギーを注ぎ込んでも、そもそもその邪悪龍がボールの中にはいないはずなのだ。

しかも、この時間軸ではGT時間軸では叶えていない願いも存在する。

それがリゼットには不可解だった。

「確かにその通りだ。お前に対し、『今までドラゴンボールを乱用していた』と責める事は出来ん。

どうやらお前はマイナスエネルギーの危険性を理解し、完全に管理していたようだからな。むしろ大したものだと称賛すらしたくなる。

俺が真に憎いのは、ドラゴンボールを乱用して俺を誕生させた別の時間軸の孫悟空達だ」

「別の時間軸……まさか」

「そうだ。俺はこことは異なる時間軸のドラゴンボールの中で生まれたマイナスエネルギーだ。

何者かがそれを無理矢理吸い上げ、この時間軸のドラゴンボールへ宿らせ、そして俺達は生まれた。どうやらこの何者かは余程お前が憎いと見える」

一星龍の言葉にリゼットは目を細め、既にこの世にはいなかったの敵の姿を彼の背後に見た。

魔神ドミグラ……死んでも厄介な男である。

ある意味ではこの一星龍も彼の被害者という事か。

「もつとも、それだけで矛を収めはしないがな。」

生まれた以上は宇宙をマイナスエネルギーで覆い、破壊する。

それが俺達邪悪龍だ」

「でしょうね。遠慮の必要がなくて助かります」

聞くべき事はもう聞いた。ならば後は戦うのみだ。

リゼットは両手を降ろした無形の構えを取り、一星龍も咄嗟に構える。

リゼットの気はクリアな神の気。故に外面で戦闘力を図る事は出来ない。

つまり相手はまずリゼットを見た目で判断してしまい、どうしても無意識の油断が生じる。

その油断を突くようにトン、と。不意に一星龍の背中に誰かの手が触れた。

それは目の前にいるはずのリゼットだ。

ならば今、前に立っているのは何なのか……それは、気で創り出した幻影である。

第6宇宙の殺し屋ヒットの戦い方は、リゼットの戦術に新たな広がりを与えてくれた。

この、気を使つての残影も彼の技を真似たものだ。

そしてリゼットは己の気が感知されない事を利用して、幻影を残して自らは一星龍の背後へ転移していたのだ。

「ご、ふっ!？」

一星龍の口から血が吐き出された。

決して素早く打撃を与えるようなものではなく、むしろ優しく当てるような触れ方だったはずだ。

ダメージを与えるようなものではなかった。

だが見た目に反して威力は絶大だ。今、一星龍の体内では気が弾け、骨と内臓を破壊しているのだ。

これもヒットを参考にして編み出した技だ。彼の見えない打撃は発射した気が物質を透過する性質を持ち、障害物を無視して対象のみを狙い撃つ。

リゼットはこれにアレンジを加えた。

障害物を無視出来るならば、筋肉を無視出来ない道理はない。

ならばこの見えない打撃は強固な筋肉と骨を無視して直接内臓にダメージを刻む

事が出来る。

何の障害もなく敵の体内へと潜り込んだ気を内部で炸裂させる……単純だが悪辣にして強力な一撃だ。

ヒットですらやらないような悪辣な攻撃を初手で使用したりゼットは、そのまま躊躇なく光の剣で一星龍の首を落としにかかる。

「ぬお!？」

間一髪。光刀をかううじて回避するも、背中の棘の何本かがあっさりと切断されてしまう。

——強い！　それも桁外れに！

一瞬でその事を痛感させられた一星龍から完全に油断が消え、本気になる。

だが本気に移行するまでの一瞬が命取り。

その間にリゼットは既に次の攻撃へと移っている。

彼女が手を振るうと同時に一星龍の身体が気で拘束され、更に気が固形化する。

そうして完成したのは一星龍の両腕を封じて首を固定する断頭台だ。

斬首の刃が降り注ぎ、一星龍は咄嗟に気を全開にして何とか拘束を外すが今度は

頭の角が切断されてしまった。

「かああッ！」

一星龍の剛腕がリゼットへ迫る。

しかしそれが彼女の掌に触れたかと思った刹那、一星龍の身体は宙を舞っていた。地面に衝突した彼へと、リゼットが手を翳す。

「千の剣よ、在れ！」

斬撃から斬撃へと繋ぎ、更に斬撃へと続ける。

リゼットの背後に空間を埋め尽くす程の白い刃が発生し、次々と飛来しては一星龍の身体を切り刻む。

一星龍が知るはずもないがリゼットは彼の事を知っている。彼がGTのラスボスである事も知っている。

そして、リゼットの知る限りでは唯一孫悟空を実力で殺したかもしれない相手でもある。

GTでの悟空が最後にどうなったのか、何故神龍と共に去ってしまったのか……リゼットの知る限りではそこに公式からの回答はなく、ファンによる考察の域を出

ていない。

その中でも有力とされるのが『悟空は超一星龍の攻撃で死んでいて、最後の願いで一時的に生き返っていた』とするものだ。

もしそうだった場合、正面から孫悟空を殺すという偉業を為したのは彼だけだ。悟空に勝った者は数多くいれど、実力で負かして殺した者はいない。

並行世界では悟空は何度か死んでいるが、どれも負けて死んだわけではない。ラディッツの時は悟空が自ら命を捨てたに等しく、セルの時も命と引き換えに自爆を防いだだけ。

ザマスに至っては自分の情けない身体を押し付けて借り物の強い身体で殺しただけだ。

一星龍だけなのだ。実力で孫悟空を殺しまでしたのは彼しかない。

無論これはあくまで考察が正しい事を前提とした評価ではあるが……そうである可能性が高い以上、リゼットは彼を評価しているし、警戒している。

だからこそ油断はしない。たとえどれだけの実力差があろうと、慢心せずに全霊を賭して完膚無きまでに消し去る。その必殺の決意を以てこの戦いへと臨んでい

た。

飛来する刃で手足を切り裂かれながらも生き延びていた一星龍の上へとリゼットが転移し、指突で両側の頬を突いて顎を外した。

そうして無理矢理開きっぱなしにした口に指を向けてレーザーのように圧縮した気を連射。次々と口内を攻撃し、貫通して首の裏側から気が飛び出していく。

さらにそのうちのいくつかは軌道を変えて体内へ潜り込み、腹の中で爆破。徹底的に外も内も破壊してゆく。

まだ終わらない。口の中に気弾を放り込んで顎を叩いて無理矢理口を閉じさせる。

——爆破。口の中で気弾が炸裂し、一星龍の頬肉が消し飛んで鼻から下は筋肉が剥き出しの酷い有様と化してしまった。

「~~~~~!!」

声にならない絶叫をあげる一星龍の頭を掴んで今度は目に指突。

片目を潰し、指を深く差し込んだ所でまたもレーザー気弾を発射して脳にまでダメージを叩き込む。

ここまでやれば普通でなくとも死ぬが、流石に邪悪龍だ。常識が当てはまらない。身体の穴という穴から血を垂れ流しながらも、まだ気が感じられる。生きている。まだ息がある事を確認し、リゼットは素早く次の手を打った。

逆転の目は、決して残さない。余さず全て摘み取る。

孫悟空は、絶対に連れて行かせない。

「^時Inf^よin^止ite^まWo^れrl^だd」

一秒間の時間停止。

自分以外の全てが静止した世界でリゼットは、地面に転がるドラゴンボールをゲートへ閉じ込めた。

代わりに物質創造の術で偽物のドラゴンボールを配置し、そこに自らの神の気を宿らせる。

しかし全ては回収しない。一星龍の一番近くに転がっている五星球だけは偽物とすり替えずに、神の気を宿らせただけで放置した。

これで罫は完成した。後は敵が毒を飲むように仕向けるだけだ。

時間が再び動き出し、それと同時にリゼットは攻撃を再開した。

「戻りなさい、剣よ！」

先程一星龍を切り裂いて飛んで行った光の刃が旋回し、再び帰還する。

そして今度は刺突。次から次へと一星龍に突き刺さり、とにかく刺せる場所があればそこに刺さる勢いで殺到し、あっという間に彼を血達磨へと変えてしまった。勿論一星龍もやられっぱなしではない。必死に迎撃しているし撃ち落としている。

しかしそうしているとリゼット自身が飛び込み、一星龍へ怒涛の攻めを叩き込んだ。

まずは気で剣を創造して斬撃。

次に槍で突き、薙刀で腹を裂く。

一星龍が反撃の拳を出せば、背中の光輪が突然倒れてリゼットはそこに身体を通す。

すると光輪が腹付近でフラフラのように回転——突っ込んで来た一星龍の拳を割った。

怯む一星龍に畳みかけるように光輪を元に戻して今度は鉄扇を創造し、一星龍の

頬を打つ。

まだ終わらない。今度はトンファーを創り、それを宙に放り投げて一星龍の視線が一瞬そちらに向いた瞬間に蹴りを叩き込んだ。

そしてそれと同時に待機していた光の剣が殺到し、一星龍を襲う

頭、顔、首、胸、腹、股間、腕、足。身体のあるとあらゆる箇所を串刺しにし、貫通する。

その上で——爆破。突き刺さった刃が一斉に爆発し、それと同時に出番を待っていた次の剣が刺さってまた爆発する。

細胞一片すらも残さぬといわんばかりの凄惨極まる攻撃に、その戦いを見ていたバーダックが「えげつねえ……」と冷や汗をかいていた。

「あ、あ、集まれ！ ドラゴンボール！」

「……」

このままでは勝てない。

そう悟った一星龍はまだ四星龍が残っているのも気にせずにドラゴンボールへ召集をかけた。

彼は邪惡龍の頂点。故に他のドラゴンボールを取り込む事で自らの力を高める事が出来る。

四星球だけはまだ取り込めないので不完全なパワーアップになってしまいが、このままでは戦いにすらならず処刑されるだけだ。

まずは強くななくては話にもならない。

そしてリゼットはそんな彼を、ただ冷ややかに見つめていた。

ドラゴンボールを彼が必死の形相で呑み込むのすら止めず、その眼には哀れみすら感じられる。

やがてドラゴンボールを五つ飲み込んだ彼は五星龍の電気スライムの能力で身体を再構築してからリゼットを見た。

「ど、どうだ！ まだ勝負はこれからだぞ！

ドラゴンボールを取り込んだ今の俺の力は先程までの数倍はある。

いかにお前でも簡単に勝てはすまい！」

「……そうですね。もしそれが本当に成功していたならば、あるいはそのくらいの強さを得ていたのでしょう」

そう言い、リゼットは一星龍へと背を向けた。

その行為の意味が分からない一星龍は呆氣に取られ、思わず顔をしかめてしまう。

「お、おい、何の真似だ？」

「もう戦いは終わったという事です」

「何を馬鹿な事を……勝負を捨てたか？」

一星龍は考える。

なるほど、相変わらず気は感じ取れないが向こうからはこちらの気と自分の気の差が判別出来る。

それで彼女は気付いてしまったのだ。この一星龍の力が遥かに己を超えてしまった事実。

だから勝つ事を諦めた、そうに違いない。

そう思った直後、一星龍の腕が――光となって消えた。

「……あ？　な、なんだ……俺の身体が……崩れ……いや、これは、浄化されている……？」

「言ったでしょう、戦いは終わったと」

「な、なにをした？」

「貴方がドラゴンボールを取り込んでいた時、私が何もしなかった事を不思議に思わなかったのですか？」

敵が目の前で何かを企んでいるのに、止めもせず、攻撃を加えるでもなく、ただ馬鹿みたいに見守っていたとでも？」

そう、止める時間はいくらでもあった。

ドラゴンボールを一つ一つ目の前で飲み込む相手を前に何もしないなどありえない。

妨害するでもなく攻撃するでもなく、ただアホみたいに呆けて見守るなど絶対にあるわけがないのだ。

しかしリゼットはあえてそれを見送った。

何故なら……一星龍が飲み込んだそれは本物のドラゴンボールではないから。リゼットがすり替えた偽物のボールであり、それには彼女の気が宿っている。

つまり一星龍は自らの意思でプラスのエネルギーという毒薬を飲み干してしまった事になる。

これの性質が悪いのは、一つだけ本物が混ざっていた事だ。

全てが偽物ならば一星龍もおかしいと思って飲むのを止めてしまったかもしれない。

だがりゼットは、彼から一番近くにあった五星球だけは神の気を宿らせたただけですり替えなかった。

結果、それを最初に飲んだ一星龍はパワーアップの手応えを感じ、他のボールも一緒に飲み込んでしまったのだ。

背を向けたままリゼットは右手を挙げ、パチンと指を鳴らす。

「Sparkling」

技名を宣言し、それと同時に一星龍の体内で神の気が膨張し、弾けた。

身体の内側からの浄化だ。避ける事など絶対に出来ない。

一星龍は何一つ抵抗も出来ぬまま、圧倒的なプラスエネルギーの波動に蹂躪されるだけだ。

消えていく中、一星龍は驚愕の表情を浮かべていたが、やがて諦めたように抵抗を止めた。

「……ふん。マイナスエネルギーが足りなければ、こんなものか。

まあいい……俺達はドラゴンボールを使い過ぎた者への罰だ。

元より、それに該当していないこの時代に現れた事自体が間違いだったのだ」

一星龍は自嘲するように笑う。

元々この時代の人間やリゼットへの恨みなどなかった。

ただ呼び出されてしまったから、邪悪龍の使命に従って戦ったに過ぎない。

その上で負けて浄化されるというならば、それでいい。

そう、彼は思っていた。

「だが忘れるな。お前達が欲望のままにドラゴンボールを使い続けたならば、その時こそ俺達は再び現れる。」

ドラゴンボールを使う事の意味、心に刻んでおけ！」

こうして最強だったはずの邪悪龍は、その力を出す事すら出来ずに消滅を迎えた。その顔にはどこか、己の消滅を受け入れたような清々しさすら残しながら。

「……勝負ありか」

ミラの前で膝を突き、四星龍が無念そうに呟いた。

彼の前に立つミラはトワと同化した変身形態へと変わっており、その力は先程までと桁が違う。

だが勝利したはずのミラもまた、無傷ではない。

その全身は傷付き、至る所が焼けている。

だがそれでも結果を見ればミラの勝利だ。他の戦いも既に決着が付き、リゼットやセルが歩いてくる。

「俺の負けだ。殺せ」

四星龍は自身に勝機がない事を悟り、止めを促す。

他の邪悪龍にはない潔さだ。

この戦士を消してしまう事を多少惜しく思いつつもミラは掌を翳した。

「さらばだ。誇り高き龍よ」

別れの言葉を告げ、気功波を発射。

敗北を悟り、気を限界まで落とした四星龍を葬るにはこれで十分だ。

何ら抵抗せずに消えていった龍へ心の中で敬意を示し、そしてミラは自身の掌を

見詰める。

己の弱さをまた自覚する事の出来る、いい戦いだった。

この経験は必ず彼を更なる高みへと導いてくれる事だろう。

【RTA成功】

珍しくガバラらず理想タイムで勝利したりゼット。

タイムボタンを押す事で敵のパワーアップイベント中に動けるバグを利用し、攻撃して粉碎した。

どうやらイベント中でも当たり判定はあるらしい。

例えるならばそれは、ロックマン&フォルテでテングマンの足元に爆弾を仕掛けて、登場デモで暗殺するかのような非道ぶりであった。

【テングマン】

ロックマン&フォルテのボスの一人。

ロックマンのボスは登場デモ中はライフバーが空っぽであり、ポーズを決めてか

らライフが満タンになるという演出があるが、何故かテングマンはこの登場演出中に当たり判定があるらしく、彼の足元に特殊武器のリモートメイン（任意のタイミングで起爆出来る爆弾）をバグを利用して設置すると何と登場デモ中にダメージを受けて死んでしまう。

【何か優しい一星龍】

彼がGTで怒っていたのは要するに『よくも邪惡龍^{俺達}が生まれるまでドラゴンボールを乱用しやがったな！』なので、こまめに浄化していたリゼットへの怒りは最初からない。

しかし残虐ファイトの限りを尽くされた事で流石に少し怒った。

第百十九話 全王の戯れ

それは邪悪龍との戦いが終わってから数週間が過ぎた頃のことであった。

以前から続けていた修行の成果により、遂に潜在能力との完全な同化を果たしたリゼットは常にアルティメット化発動時と同じだけの力を発現出来るようにまで至っていた。

これに伴いアルティメット化という変身を失い——否、変身する必要がなくなり、今まで以上に戦力が安定した。

更にゼノバースも研磨を重ね、バーストリミット・マイナスの倍率を1〜2倍まで引き上げる事が可能となった。

短時間ならば3〜4倍も不可能ではないだろう。

そんなリゼットはその日、全王からの呼び出しを受けて宮殿にまで足を運んでいた。

悟空と同様に『全王様スイッチ』なるものを受け取ってしまったリゼットはいつでも全王を呼び出せるし、宮殿へ行くことも出来る。

そこまでは別にいい。勿論全王の相手はリゼットに心労をかけてはいたし、対応を間違えてはならないという精神的重圧もある。

しかし全王はとりあえずリゼットとの会話で不機嫌になった事は一度もないし、ゲームなどで負けてもニコニコと楽しそうに笑ったままだ。

しかし問題は、その日呼び出された用件であった。

その日は、いつもと様子が違っていた。

まず、呼び出されたのがリゼットと悟空だけではない。

ビルスや界王神も呼ばれ、更にいつもならば全王宮に通されるが今回はそこは違う開けた空間に案内された。

宙に浮かぶ僅かな足場の上にリゼット達は待機させられているが、それも一つではない。

周囲を見れば同じような足場が十二個あり、それぞれの上にはビルスと同じような服の者達と、界王神達が立っていた。

恐らくは他の宇宙の破壊神と界王神だろう。つまりは宇宙でも最高位に立つ神々が一堂に会しているわけで、この場所は彼等の集会場というわけか。

流石に少しばかり場違い感を感じてしまう。一方悟空はいつも通りの自然体であり、こういう点は流石だと思わされた。

とはいえ、気を抜いているわけではない。自然体ではあるがその表情は引き締まっており、注意深く他の神々を観察している。

「……全員、ビルス様と同じ破壊神つつう奴か。本当に十二人いるんだな」

「それに天使と界王神様もいますね」

悟空が落ち着いた声で話すが、若干の驚きもあるようだ。

話に聞いて知ってはいたが、それでもビルスとウイスクラスの強者がこんなに集まっているのを見ると宇宙は広いと思わされる。

「どうだ孫悟空？　ワクワクするか？」

「いやあ、どうかな……ワクワクすっけど、それと同じくらいおっかねえかもな」
バトルジャンキーの悟空をからかうようにビルスが声をかけるが、悟空はそれに本気半分冗談半分といった声色で答えた。

悟空といえど恐れ知らずのバトル脳ではない。

彼の珍しい一面が見れてビルスは少し愉快そうだ。

しかしそこは戦闘種族サイヤ人だ。おっかないという言葉に嘘はないのだろうが、それでも悟空の口元には好戦的な笑みが浮かんでいた。

「ほう……ビルス、お前も見ろ目が磨かれてきたようだな」

別の宇宙の破壊神から声がかけられた。

そちらを振り向けば、そこにいたのは黒い帽子を被った破壊神だ。

ビルスを始め、他の破壊神が基本的にはキツネやネズミ、象、魚人などの動物型で占められているのに対し、その破壊神は人間型の女性であった。

顔立ちはややきつめで化粧が厚いが、十分に美女と呼べる顔立ちだ。

そんな彼女の視線は何故カリゼットへ固定されている。

「うむ、良いな。第7宇宙には勿体ない美しさよ。

どうだ、その娘。我が第2宇宙へ来ぬか？」

「おいヘレス、うちの宇宙の奴を引き抜こうとするな」

「我が宇宙は愛と美の宇宙。美しきものは我が宇宙に集う事こそ真理よ」

破壊神も割と性格は様々らしい。

とはいえ、ビルスに比べると何となく人間の感性に近そうなイメージを受ける。

少しだけ、破壊神を取り換えてほしいと思ったのは内緒だ。

このアホ猫様は食べる事と寝る事しか考えてないので困る。

「全王様のご入場です！」

大神官の声が響いた。

それと同時に神々が一斉に膝を折り、リゼットも合わせて同じ事をする。

それから一秒遅れて悟空が咄嗟に真似をした。

皆が見守る中、椅子に座った全王が宙から降りてくる。

そして場を見渡し……悟空とリゼットを見付けて顔を綻ばせた。

「リゼットー」

そしてフヨフヨと飛んできた。

これには神々も驚きに目を剥き、ビルスは顎が外れんばかりに口を開ける。

そんな神々の見ている前で全王がリゼットの胸に飛び込み、反射的に抱きかかえた。

この光景に神々は一斉に叫んだ。アバー！

「よく来てくれたのね、リゼット。悟空！」

「……ええ。そちらも元氣そうで何よりです」

他の神のしている前では止めて欲しかったのだが、今更言っても仕方あるまい。全王の頭を撫で、あやしていると悟空が全王の耳元に顔を寄せて小声で話す。

「おい全ちゃん、いいのか？ みんな見てんぞ」

「いいのね」

「んー、そっかあ？」

全王は周囲の視線など知らぬとばかりに悟空の前に浮く。

こうなれば仕方がない、と悟空は腹を括ったのだろう。

おもむろに全王を抱え、そして持ち上げた。

その光景に神々は叫んだ。アババー！

「で、全ちゃん。今日はどうしたんだ？」

「ゼンチャン!？」

悟空の口から出た呼び名にビルスが目を剥いて卒倒した。

何たるマッポーめいた呼び名か！

全王はそんなビルスに目もくれずに悟空の肩に乗り、楽しそうに言う。

「あのねあのね、今度力の大会を開く事にしたのね」

「力の大会、ですか？」

「うん、そう！　宇宙全部で大会をするのね！　きつと楽しいのね！」

遂に来たか、という気持ちはあった。

以前第7宇宙と第6宇宙が試合をした後、リゼットは気絶してしまっていたがその際に全王が訪れていつか全宇宙で同じような大会をやろうと言っていた事はセルから聞かされたので知っている。

それ以降一年以上に渡って何の話もなかったもので、その話はすっかり流れてしまったのかと密かに期待していたのだが……残念ながら、単に全王が忘れていただけらしい。

どうせならばずっと忘れたままでいて欲しかったのだが、思い出してしまった以上は仕方がない。

問題は、どれだけ吹っ飛んだルールにされてしまうかだ。

何せ全王はその気になれば宇宙を消してしまえる。そんな彼が主催する以上ただの平和な武闘会で終わるはずもあるまい。

ならば考え得る最悪の事態は一つ。

「それで、勝った宇宙には……いえ……負けた宇宙は、どうなるんですか？」

「ほう……もう察しましたか。流星に聡いですね」

最初に明かされた情報だけで、ただの大会で終わるわけもないと察したりリセットへ大神官が珍しく僅かな驚きと、それ以上の感心を見せた。

普通は1の情報だけでここまで読み取る事は出来ない。

大体の者は……それこそ神々であろうとも、まずは宇宙規模の大会という事実だけに目を向けて負けた際のデメリットなど考えないだろう。

いや、考えたとしても精々がペナルティ程度の発想で止まるはずだ。

それは考えたくないから……最悪の想像から無意識に目を逸らしてしまう。

しかしリセットはもう読んでいる。恐らくはこれから己が口にするだろう事までも。

流星は、優勝候補といったところか。

「貴女が考えている通りです。敗れた宇宙は全王様が消してしまわれます」

「やはり、そうですね……」

外れていて欲しかった。今ほどリセットがそう思った事はない。

敗北、イコール、消滅。これほど残酷なルールがあるだろうか。

負ければ自分達が消える……無論それは大変な事だ。絶対に負けるわけにはいかない。

だがこのルールは勝利した際に相手の宇宙を、そこに住む全ての命を殺す事をも意味している。

11の宇宙を殺して自分達だけが生き延びるか、それとも自分達も消える側になって死ぬか。その二択しかないのだ。

「以前から全王様は宇宙が多すぎると申しておりました。

そこで人間レベルの低い宇宙……レベル7に満たない宇宙を大会に出場させ、勝利した宇宙を特別に免除してあげる事にしたのです」

「人間レベル？」

「はい。貴方の言葉に近付けらるならば……民度。魂のレベル。悪人の少ない宇宙という事ですな。」

勿論それ以外にも様々な要素がありますが、概ねそういったものと考えて頂けれ

ばよろしいかと」

人間レベルという初めて聞くランク、その基準を聞いた時点でリゼットは第7宇宙の免除はないかと判断し、自分達が出場するか否かの問いをしまい込んだ。

確認するまでもない——低い。確実に、それも致命的なまでに。

地球だけでもレッドリボン軍にグルメス国、魔族に魔神城の魔物達。ドクターウイロー。

それらはリゼットが悉く排除し、セルによって不本意ながら起こしてしまった暴走で地球人の悪の心もほとんどを消してしまったが、宇宙へ目を向ければこんなものではない。

サイヤ人にフリーザ親子。その配下の宇宙人などどれだけいるかも分からない。ヘラー一族に魔人ブウ、それに暗黒魔界などという悪人しかない世界まで第7宇宙には存在している。

魔導師ホイのような者もまだどこかにいるかもしれないし、ヒルデガンなど悪の心の集合体だ。

究極のドラゴンボール——超ドラゴンボールがあるのに究極の名を冠しているの

も微妙なので以降はダークドラゴンボールと呼称する。

ダークドラゴンボールが存在している事から見て、マシンミュータントやベビーなども宇宙の何処かにいると考えていいだろう。

サイヤ人という種族一つ取っても第6宇宙との差は歴然だ。

同じ戦闘種族でも、向こうのサイヤ人は正義の味方なのに対し、こちらでは頭の悪い野蛮な侵略者の集まりでしかなかった。フリーザと手を組む前ですら他の星々を滅ぼして回っていたという。

これで人間レベルが高くなるはずがない。

「しかし全王様は慈悲深いお方です。第7宇宙……それも地球に限り特例を出して下さいました」

「……特例、ですか？」

「はい。第7宇宙の人間レベルは元々は3・18と大変低い数字だったのですが、それがここ数年で5・96とかなり高いレベルにまで急上昇を果たしております。

その時期はリゼットさん、貴女が神に就任した時期と一致しており、原因を調べてみた所人間レベルの低い者達を貴女が排除、あるいは浄化していたおかげだとい

う事が判明しました。

暗黒魔界さえなければ7を超えていたかもしれませんね。

地球単体で見れば人間レベルは8・8。これは12宇宙全体で見てもトップクラスのレベルの高さです。素晴らしい成果であると言えるでしょう」

リゼットにとって、かつての暴走は恥ずべきものである。

仮にも神たる者が我を失い、正義を押し付けて人々の心から無理矢理に悪の芽を消し飛ばしてほとんど別人にしてしまった。……決して褒められた事ではない。

だが神々の視点から見ればリゼットの行いは正しい事だったと大神官は言う。

実際、リゼットが暴走して以降は地球での犯罪率は劇的に落ちた。

以前は町中での強盗事件などが日常茶飯事だったのが、今では犯罪に遭うどころか犯罪を目撃する確率すら圧倒的に低くなっている。

それでも犯罪が起こる事は起こるが、その数少ない犯罪ですら生活に困ったの窃盗などが大半だ。

そして地球以外に関してもリゼットはフリーザ配下の者達を倒したり、浄化したりを過去に何度か行っている。

ボージャック一味などの巨悪と呼べる者達も倒してきた。

むしろ、ここまでやってまだ7に達しない第7宇宙は少し世紀末過ぎる気がしないでもない。

「ここまで出来る者を消してしまうのは余りに惜しい。

実際これは大したものですよ。一人の力で、この短期間でここまで人間レベルを上げる事の出来た神というのは過去にいません。ましてや一惑星の神である事を考えればまさに偉業。

全王様はそう考え、特別に貴女と、貴女が守護する地球だけは負けても消さない事を宣言して下さいました。よかったですね」

……何がいいものか。

そう言いたいのを堪え、リゼットは口を噤んだ。

反論をしたい気持ちはあるが、しかしここで噛み付いても事態はよくなならないだろう。

むしろ折角地球だけは助けにくれるという条件を撤回されてしまう可能性すらある。

全王だけならいい。ゆっくりと言い聞かせて根氣よく説得すればきっと耳を傾けてくれると思う。

問題は大神官だ。この男が何を考えているのか、本当に分らない。

「お、お待ち下され大神官様！ わしらは……神はどうなるのですか!？」

そこに思わずといった様子で声を挟んだのは老界王神だ。

高齢故に死を恐れない彼だが、流石に全王による消滅は恐れる。

そして彼の疑問はこの場にいる全員の疑問だろう。

神々が固唾を飲む中、大神官はさも当然のように話す。

「勿論、天使以外は全て消えます。例外は第7宇宙の地球のみ……勿論、地球にいるからといって破壊神や界王神は対象外になりません。

負けても消えないのは地球の神が守護する住民と星のみです」

他の神々の視線が一斉に自分に向くのをリゼットは感じていた。

それはそうだ。神すら消されるこのルールの中でリゼットだけは負けても許されるのだから、怒りを買うのは当たり前前の事である。

なのでリゼットは無言で彼らの怒りを受けておく事にした。

「大会の詳しいルールや、会場が出来上がり次第連絡を送ります。

よき大会になる事を期待していますよ」

「頑張ってるね、リゼット」

「……ええ。勿論、全力でやらせて頂きます」

全王に一礼をし、大神官と目を合わせずに神殿を後にした。

本当に厄介な事になってしまった……とにかく、まずはビルスや界王神を交えて話し合う必要があるだろう。

その後しばらくして、力の大会の正式ルールが発表された。

試合開始は50時間後。

この大会には第2、第3、第4、第6、第7、第9、第10、第11の人間レベルが規定に達しなかった8宇宙が強制参加となり、勝利した宇宙以外は消滅となる。試合は無の界という空間に作り出した武舞台の上で行い、参加宇宙の戦士達が同時に戦うバトルロイヤル形式を採用。試合時間は48分間とする。

勝利条件は相手を舞台の外へ叩き落す事であり、舞空術の使用は封じられる。

また、術以外の武器の使用は禁じられ、相手を殺してしまうと反則負けとなる。

そして優勝した宇宙には褒美として超ドラゴンボールを使う事が認められる。これが大神官から伝えられた大会の全容であった。

【常時アルティメット化】

これからはアルティメット化の戦闘力が基本値として扱われます。

ただし一応変身している扱いなのでアルティメット化の状態から更にゼノバースで2000倍とかはなりません。

【人間レベル】

実はよく分らない。

結局これがどういったものなのか説明されなかったので視聴者で想像するしかないが、ビルスがサボりまくって悪人がのさばっている第7宇宙が下から二番目で、『肥溜めのような宇宙』と住人にすら言われる第9宇宙が最下位な所を見ると、やはり民度的や治安的なものではないかと思われる。

後は文明の発達とかも入っているかもしれない。

【今の全王】

原作の全王よりは大分マシになっているが、まだまだ下の世界の事をよく分かっていないお子様。

リゼットや悟空、アラレとの触れ合いで何でもかんでも消すのは止めるようになったものの、自らの関心がないものは相変わらず消しても何とも思わない。

むしろ第7宇宙を消せば地球を全王宮の近くに移動させて、いつでも遊びに行けるとか思っている。

彼から見てリゼット達以外は相変わらず、ゲーム画面のNPC程度にしか見えていない。

残念ながら今の所は『お気に入りだろうが消す』が、『お気に入りには消さない』に変わった程度。

善王になるにはまだまだ経験と時間が足りない。

一応これでも改善の方向には向かっている。

【ヘレス】

第2宇宙の破壊神。ややナルシストな神様だが、ビルスに比べるとかなり人間

に友好的。

アニメ版と漫画版でリブリアン達的美醜感覚はかなり異なり、アニメ版だと『美しきヘレス様』と言われているが、漫画版だとリブリアン達にブスと思われる可能性が高い。

少し可哀想な神様。

【リブリアン達的美醜感覚】

・アニメ版

18号の容姿をそれなりに認めている節があったり、ヘレスを『美しきヘレス様』と呼ぶなど、地球人に近い感覚を持つ。

クリリンの事は『美しくない。鼻がない』と言い、否定的。

一方でおっさん達を美しいと言ったり、デブリアンが美しい女神扱いだったり、ジミズがタキシード仮面のようなポジションだったり、おかしい部分もある。地球人と完全に感覚が違うというより、地球人よりも美しく見える物が多いというイメージ。

感覚が違うのではなく、美に対する器が広いのだろうか。

このSSではこちらを採用。

・漫画版

こちらは明確に地球人と異なる。ハゲに優しい宇宙。

18号をブスと呼び、クリリンを『非の打ち所がないイケメン』と称した。

髪と鼻がないシンプルな顔が超イケメンらしい。

つまりこの宇宙ではヴォルデモートは超イケメンである。

これはこれで面白いが、これだと自分の宇宙の神であるヘレスどころか、変身前の自分すらブスと思っている可哀想な子になってしまう。

というかこれだとカクンサとロージィまでブスになるのではないだろうか。

なのでこのSSでは漫画版の第2宇宙の設定は切り捨て、一切考慮しないものとする。

【ヴォルデモート】

ハリー・ポッターシリーズのラスボス。

お辞儀をこよなく愛する。

お辞儀をするのだ！ ポッターアアアアア!!

第二百十話 集う戦士達

・ミスって前回の話を載せてました。

地球の神殿。

そこで丸いテーブルを囲い、リゼットとビルス、ウイスと界王神、そして老界王神とキビトの6人が話し合っていた。

会議の内容は、開催が決定した全王主催の全宇宙対抗武道大会に参戦するメンバーについてだ。

まず当然ながら破壊神と界王神の参加は不可能であり、ビルスやウイスをメンバーに入れる事は出来ない。

そうなると必然的に第7宇宙で最強の戦力を保有する地球在住メンバーが中心となるわけで、今はそのうちの誰を出すかを話し合っているのだ。

「まずリゼット、お前は強制参加だ。第7宇宙の主将を務める。」

神は参加禁止だから、一時的に地球の神の座をあのタピオンとかいうのに譲っておけ。

本来はこれもアウトだが、確認したら『面白い』の一言でOKが出た」

「分かっています。しかしそうなるとタピオンは出せなくなりますね」

「問題ない。お前が出られなくなるよりはマシだ」

以前の第7宇宙と第6宇宙の試合はビルスとシャンパの二人でルールを決めていた。

そこには双子ならではの適当さもあって『地球の神くらいならまあいいや』でリゼットも出場出来たが、今回はそうはいかない。

だからリゼットには地球の神を退いてもらい、タピオンに役職を譲ることでルールの穴を抜ける事にした。

これをやってしまうと当然ながらタピオンは参加不可能になるが背に腹は代えられない。

負ければ第7宇宙が地球以外消滅してしまうこの試合に、リゼットを出せないなどという事があってはならないのだ。

「後は、まあいつものメンバーになります。悟空君、ベジータ、ターレス、セル、ピッコロは固定でいいでしょう」

「異議はない。それとあのミラとかいう奴も入れろ。」

「あいつもお前達に近い力を持っているからな」

「そのつもりです。今の彼なら……まあ悟空君達とも上手くやれるでしょうし」

この時点でメンバーは7人。

リゼット、悟空、ベジータ、セル、ターレス、ピッコロ、ミラとそうそうたる顔ぶれが決まったが、残る枠は後3つだ。

この3枠に誰を入れるかが今回の議題の中心と言ってもいい。

まずこれに、最初に意見を出したのは界王神だった。

「フリーザをドラゴンボールで蘇らせて協力してもらうのはどうでしょう？」

流石の彼もビルス様が命じれば嫌とは言えないでしょうし、第7宇宙と共に消えるのは嫌でしょうから手を貸してくれるとは思いますが」

「界王神様、それは悪手です。確かにフリーザといえど今回ばかりは協力せざるを得ないでしょうが、それでも私達の予想もしない動きに出る可能性もあるのです。」

それを警戒しながらでは全力など出せませんし、いつ裏切るか分からない味方などに背を預ける事は出来ません。

それに彼はベジータやピッコロ、ターレスといったこちらの主力との因縁が深すぎる……彼の戦闘力は確かに魅力ですが、結果的にはチームの輪を乱して全体的な戦力の低下を招くでしょう」

「う……す、すみません。いい案だと思ったのですが」

界王神の案は確かに戦力面で見れば悪いものではない。

以前の第6宇宙との試合のように、1対1の試合形式であればあるいは考えるに値しただろう。

だが今回の大会は全員が一斉に戦うバトルロイヤルだ。

このルールの中でフリーザという危険因子を易々と迎え入れる事は自滅に繋がらないか。

戦士として純化したミラとはまるでケースが異なるのだ。

「後は、魔人ブウと悟飯君も候補に入れましょう。

神の気を抜いた戦力ならばトップクラスです。

もっとも、悟飯君には悟飯君の生活もあるので、本人の意向次第ですが……」
界王神の案を蹴り、リゼットが候補に入れたのは魔人ブウと悟飯であった。

魔人ブウは純粋な戦闘力では置いていかれているものの、その能力は反則と言っている。
いい。

ダメージを受けない不死身の身体に魔術の数々、回復魔法だって使える。

おやつ光線も一見即死技だが、実際はお菓子になった時点では死んでいない。
食べるか潰すかしなければ、お菓子の状態から戻す事は可能だ。

つまりルールに抵触しない一撃死技である。

悟飯は現状では戦力としてあまり期待出来ないが、潜在能力の高さは相変わらず
ぶっちぎりだ。

精神と時の部屋と組み合わせる老界王神に能力を引き出して貰えば今からでも
十分戦力に食い込めるだろう。

流石に老界王神も今回ばかりはお礼がなければ嫌だ、などと言ってられまい。

「サイヤ人4人ですか……少しバランスが悪いですね」

「だが実際強いぞ。戦闘種族の名は伊達じゃない。」

ちょっと前まではフリーザにペコペコしてる弱い連中としか思ってたんだけどねえ」

メンバーの半分近くがサイヤ人になってしまいう事にウイスがバランスの悪さを指摘する。

しかし実際戦力で物を見ればサイヤ人だらけになってしまふのだ。

問題は……サイヤ人達は少し連携が弱いと言う所か。

尋常の勝負を望むが故に個々が突っ走るスタンドプレーに走り易い。

だがこの点はリゼットが上手く手綱を握れば問題ないだろう。

「界王神様、現在第7宇宙にはいくつ人間が住んでいる惑星があるのですか？」

「惑星サダラや惑星ベジータ、ナメック星が無くなってしまいましたので……28個でしょうか」

「……」

界王神の言葉を聞き、リゼットは目を細めた。

あえて咎めるような言葉を口にする事はなかったが……よく分かった。彼はこの宇宙に存在している星を全く把握出来ていない。

28個……ハッキリ言おう。そんなはずがない。

惑星フリーザ系統だけで最低でもNo・79まである事が確実なのにそんな少ないわけがあるか。

余談だが惑星フリーザNo・79はまだ悪人だった頃のベジータが地球から逃げて回復に専念した惑星である。確かキュイが初めて顔を見せた場所でもあったか。

惑星フリーザだけでそんなにある上に、更にフリーザの仕事は宇宙の地上げ屋だ。環境の整った惑星を他の異星人に売る仕事をしており、つまり滅ぼされる側と買い取る側が存在している事となる。

サイヤ人は下級戦士ですらが少数精鋭のチームを組んでいくつも惑星を滅ぼしているし、ベジータなど一つや二つでは利かないだろう。

更にフリーザの部下を見れば分かるように多種多様な異星人が存在している。これで28などという数字が出るはずもない。

「……その中で戦力になりそうな方は？」

「それなら東の銀河にいるレジックという戦士はどうでしょう？」

フリーザを遥かに上回る戦力を持っていますよ。

……まあ、勿論トレーニング前のフリーザという意味ですが」

次にキビトが別の惑星に住む宇宙の強豪の名を挙げた。

レジック……確かGTに登場した宇宙の用心棒だったか。

その強さは子供になって弱体化してしまったノーマルの悟空より若干上、超サイヤ人には手も足も出ずに負けるくらいだったはずだ。

推定戦闘力は……数十億といったところだろう。

「へえ、そんな奴がいるのか。ウイス、強さを測ってみろ」

「もうやっています……そうですね、確かにかなりの力の持ち主のようです。」

通常状態の悟空さんならば圧倒出来るでしょう」

ビルの命令に応えるまでもなく、ウイスは杖に映し出した映像からレジックという男の戦力を図っていた。

知られざる強豪の存在に多少の驚きを示しつつも、それ以上の感情は声色に出ない。

強い事は強い。間違いなく強い。

だが参加が決まっている七人や候補に並べられている二人と比べてしまうと、残

念ながら圧倒的に格下という他なかった。

「M2という惑星にマシンミュータントなる連中がおるらしいが、それは戦力に出来んかのう」

「あれは無理でしょう、ご先祖様」

老界王神が次の案を出す、それを界王神が否定した。

マシンミュータント……これも確かGTで出るワードだったはずだ。

まさかの時代先取りである。

「どんな連中なんだい？」

「ええと、機械ベースの生命体として、自分達こそが最も優秀な種と信じて宇宙を支配しようと目論んでいるとんでもない奴等です」

「なんだ、そのふざけた奴等は。第7宇宙の人間レベルが低いのもそいつらのせいじゃないの？」

不快だから後でついでに破壊しておく事にするよ」

「そ、そうして頂けると助かります」

これは酷い。登場すらしていないのにバッドエンド確定だ。

破壊神が破壊すると決めたならば抗う事など出来ないだろう。

どうやらリゼットや悟空が何もせずにはあべの世に送られそうだ。

しかしウイスが杖を眺め、ふむ、と呟いた。

「その必要はなさそうですよ、ビルス様。もうその星は何者かに滅ぼされています」
「へえ、そりゃ好都合だ。第7宇宙は僕が何もしなくても星を壊してくれる奴が現れるから楽でいい」

とんでもない怠け猫である。

こんなんだから第7宇宙は人間レベルが低いのではないだろうか。

それにしてもM2が滅びているとは一体どういう事か。

仲間割れでもして滅びたか、それとも外部の敵に滅ぼされたのか……。

もし後者だとすると、それは少し怖いかもしれない。

現時点ではベビーは弱いのでM2最強の実力者はリルド將軍として、彼の強さは

GT 悟空曰く『ブウ以上』だ。

それが滅ぼされたとなると、つまりそれだけの脅威が宇宙のどこかにいるという事になる。

「リゼット、あの世にいる奴で誰か使えそうなのはいいかい？

過去に君達が戦った奴でもいいからさ」

ビルスに言われ、リゼットは過去の強敵を思い浮かべた。

まずガーリックやウィローは除外。今更蘇生してもそもそも戦力外にしかならない。

ボージャックはどうだろう？ 悪党には違いないが、とりあえず第7宇宙そのものの存亡の危機となれば流石に共闘するくらいには理知的だったと思う。

しかし戦闘力を言えば正直微妙という他なく、無理に蘇生する意味をあまり感じない。

ブロリーは……いや、これは論外だ。理性の殆どないバーサーカーなど味方に加えても扱いに困る。

戦闘力的には今でも十分通用するだろうし、あの馬鹿げた成長スピードを考えればすぐにでもトップに返り咲くかもしれない。

だが彼はルールなど理解しないだろうし、敵を殺して回るのが目に見えている。死体の山が出来るだけだ。

最悪、悟空に攻撃を仕掛けて落としてしまうかもしれない。

ジャネンバとヒルデガン……話にならない。そもそもあれは会話が成立しない相手だ。

「……………」

いや、待て。

確かに会話は通じない。これは今更考えるまでもない事だ。

だがジャネンバはともかく、ヒルデガンならば魔術で制御可能なのではないだろうか？

少なくとも魔導師ホイ達はかつて魔術でヒルデガンを操っていたはずだ。

劇場版では踏み潰されてしまったが、あれはヒルデガンが進化してホイの力では制御し切れなくなったからだ。少なくとも、進化前ならばホイは確かにヒルデガンを制御出来ていた。

そしてリゼットの力は完全にヒルデガンを上回っている。単純な戦闘力でも桁が違うし、加えて今はあの時と違って神の力もあるのだ。

ならば可能かもしれない。あのヒルデガンを味方に加える事も。

「……幻魔人ヒルデガンならば、戦力的にも申し分ないでしょう。

理性のない怪物ですが、今の私なら魔術で制御出来ると思います」

「なるほど……今回は前と違って知力テストなんてものはない。それも一つの手選か。

しかしお前が脱落したら味方に攻撃しかねない危険性もあるぞ」

残る枠は三つ。候補も現在三人だ。

このまま悟飯、ブウ、ヒルデガンで決定してしまうべきか……。

リゼットは一瞬アラレちゃんを思い浮かべたが、すぐに切り捨てた。

あれは無理だ。確かに強い事は強いがチーム戦など出来そうもない。

武舞台をいきなり叩き割って味方ごと落とすのがオチだ。

「他にはパイカーハンなる戦士があゝの世最強と名高いようですが……」

「前見た時、ジャネンバにやられてましたよ」

「……」

界王神がここであゝの世の戦士であるパイカーハンの名を挙げるが、残念ながら今となっては彼は大した戦士ではない。

その強さは精々、あの時の悟空以下。

これではとても今回の戦いになどついてこれないだろう。

「うーん……じゃあヒルデガンンを蘇生させるって方向でいいかな？」

「まあそれでいきましょう」

果たしてあの怪物を目の当たりにした悟空達がどう反応するのだろうか。

幸いにして、ヒルデガンンには裏切りを働くだけの知能はないので、リゼットが上手く制御出来れば連携も十分に行える。

巨大過ぎて集中砲火を浴びる危険もあるが、煙化の能力と上手く組み合わせれば
囃としても機能するだろう。

八人目はヒルデガンンで決定だ。

ならば残る枠は二人。悟飯とブウをそのまま入れてもいいし、他の戦士を探してもいい。

だが先も言ったように悟飯は参加するかどうか分からない。

なので彼はあくまで暫定としておき、悟飯が出れない時の為の別の戦士は用意しておく必要があるだろう。

「他に候補はいるかい？」

「戦力を言えば一応ナツパですが……」

戦闘力を言えばナツパがギリギリで候補に入る。もともと今となっては彼すら候補止まりだ。

しかもナツパは既に前線を退いており、戦いの勘が若干鈍っている可能性がある。これならばまだ彼より多少弱くとも何らかの特殊能力を有する戦士を入れるべきだろう。

ならば天津飯はどうだろう？ 4人に増える事が出来る彼は案外意外な活躍を見込めるかもしれない。

悟天とトランクスは最初から候補にない。超サイヤ人といえど基礎能力の低さで微妙な強さというしかないし、それにお子様な彼等は何をしでかすか分からない。二人参加させてゴテンクスにすれば戦力は上がるが、しかしゴテンクスはすぐに調子に乗って遊ぶので正直微妙だ。

それどころか、最悪勝手な独断先行をして足を引っ張る可能性すらあるし、主戦力である悟空とベジータの弱点になるかもしれない。

こう言うってはあれだがゴテンクスを入れるくらいならば、超能力持ちの餃子を入れた方がいい。

しかしそれならばまだ16号やゴッドガードンを入れたい所だが、完全ロボットタイプの彼等は参加出来ない。

……それを言えばどのみちアラレちゃんも参加禁止か。

他には人造人間17号と18号も候補として考えていいだろう。この二人ならば17号の方がやや強いだろうか？

後はパイカーハンも一応候補だ。老界王神に頼んでアルティメットパイカーハンにすれば少しはマシになるかもしれないが……いや、駄目だ。時間がない。

それにしてもパイカーハンの事を考えていると誰か一人忘れていような気分になってくる。

何だろう。こう、パイカーハンと顔が被っていて尚且つ強いのが一人いたような……。

「あ」

——そうだ、一人いた。戦力的にも申し分のない戦士が。

性格的にも正々堂々としており、名前に邪悪を冠しているはずなのに全然邪悪じゃないあの男が。

もう死んでしまっているはずだが、しかしリゼットの知る知識では死んだ後に普通に蘇生したりもしている。

確かその方法は悟空がドラゴンボールを飲み込んでマイナスエネルギーを浄化したとかだったか。

「どうしたリゼット。何かいい事でも思い付いたか？」

「ええ。確実というわけではありませんが、試す価値はあるでしょう」

ビルスの問いにリゼットが頷いたのを見て、その場の神々の視線が彼女へ集中した。

これでうまくいけば九人目が決定し、悟飯がもし駄目ならばブウを入れればいい。……ブウが補欠扱いな辺り、この宇宙も大分世紀末だなあと改めてリゼットは思った。

「邪悪龍を一体復活させます」

「んなっ!? ば、馬鹿者! 何を考えておる!」

リゼットの口から出たとんでもない10人目に真っ先に老界王神が反発した。

それはそうだ。邪悪龍の危険性を最も知っているのが彼である。

確かに戦力にはなる。だが蘇らせた龍によってはフリーザ以上の脅威となる事は間違いない。

だがリゼットはこの方法が上手くいけば、彼が敵になる事はないと考えていた。あれは話の分かる龍だ。

「いいじゃないか。面白そうだ。

役に立たない奴だったら僕が破壊すればいい。許可する、やってみろ」

老界王神と異なり、ビルスはそれに面白そうに許可を出した。

彼にしてみれば邪悪龍など復活した所でどのみち敵ではない。

仮に全てのドラゴンボールを取り込んだ超一星龍になられても、元が大したことのない地球のドラゴンボールから発生した邪悪龍ではビルスには勝てないだろう。ビルスの賛同を得たりゼットは超能力でボールを手元に取り寄せ、掌で包む。

そのボールは……四星球。邪悪龍の中で味方に加える事が出来るとしたらこの龍だけだ。

自らの放つ神の気の波動でドラゴンボールの中のプラスエネルギーを一気に増大させ、限界まで高める。

要は邪悪龍の発生手順と逆だ。マイナスエネルギーを高め過ぎて邪悪龍が出たのと同じようにプラスエネルギーを限界以上に溜め込んでやれば溢れたエネルギーが龍となって現れる。

リゼットの知識でも、悟空が四星球を飲み込む事で四星球を正の気で満たし、正義の龍として彼を復活させていた。

その考えは当たっており、四星球が眩く輝いたと思った次の瞬間には、炎を纏った人型の龍がその場に馳せ参じていた。

彼は辺りを見渡し、そして静かに己の名を告げる。

「俺の名は四星龍……『浄化龍』四星龍だ。俺を蘇らせた理由を問おう」
……何故か、名前まで変わっていた。

ともかく、これで十人は決まった。

リゼット、悟空、ベジータ、ターレス、ピッコロ……。

そしてセル、ヒルデガーン、ミラ、四星龍ときて、最後に暫定で悟飯。彼が駄目ならば魔人ブウを出す。

恐らくはこれが現状揃える事が出来る最善のメンバーだろう。

【現在確定しているメンバー】

- ・リゼット
- ・孫悟空
- ・ベジータ
- ・ピッコロ
- ・ターレス
- ・セル
- ・ミラ
- ・ヒルデガーン
- ・四星龍

【最終候補】

・孫悟飯

老界王神＋精神と時の部屋コンボを使えば今からでもインフレ特急への乗車可能。

ただし家庭があるので出場するかは不明。

・魔人ブウ

悟飯が出れなければこちら。

修行などをしてしない性格なので戦闘力は置いていかれているが、多彩な能力を持つ。寝てしまった時は精神と時の部屋に放り込めばいい。

【候補落ち】

・復活出来ない『F』

リゼットによって完全に復活の芽を断たれた。

いつ裏切るか分からない上に、呼び戻してもどうせ向こうに有利な交換条件を突き付けて来るのは分かり切っているのでわざわざ呼び戻すメリットがない。

・ナツパ

引退してるので仕方ない。

・ブロリー

危険すぎる。

まず悟空を狙うだろうし、そうでもなくても相手選手を殺害してしまうのが目に見える。

・17号

このSSの世界では彼が強くなった理由であるセルジュニアがいない。

（漫画版で、生きていたセルジュニアとの戦いでレベルアップしていた事が判明している）

。17号は『偽セルジュニア』と呼んでいるが、本物と見ていい。というかそんなものが野生にいてたまるか）

なので多少鍛えてはいるが戦闘力は精々数十億程度。とても参戦出来るレベルではない。

リゼットに『超』の知識がないので17号が強くなる可能性に気付けなかった。

・ 18号

まあ悪くはないんだけど他のメンツを押しつけてまで参戦させる意味があるかというところ……。

・ 天津飯

強いし能力も便利なのだが流石に戦力的に厳しかった。

・ クリリン

いや無理だろ……。

・ 亀仙人

謎補正込みでも参戦決定している面子を押しつけるほどかというところ微妙。

第二百二十一話 選手決定

「おっ、いたいた。ベジータ」

リゼット達が力の大会に出る十人を決定してから数分後。

悟空はビルスやウイスと共にカプセルコーポレーションを訪れていた。

リゼットの念話により主要メンバー……つまりピッコロやターレスには話が行っており、彼等は既に神殿に到着している。

しかしそんな中で何故かベジータだけが来ないので悟空が呼びに来たのだ。

何かあったのかと思えば何もなく、ベジータは庭で腕組みをして棒立ちしている。

普段ならば真っ先に来そうなのだが……そこまで考えた悟空だが、ブルマの膨らんだ腹を見て事情を察した。

「何だ、カカロットか」

「ああ、力の大会の事はもう聞いてるよな。それでおめえだけ来ねえから呼びに来ただけだよ……」

「その事ならば悪いが俺は参加出来ん。ブルマの腹を見れば分かるだろう」

「……そっか。なら仕方ねえな」

ベジータが来なかった理由。それはブルマに第二子が生まれるからだ。

ベジータが生むわけではないが、それでも父親として側にいてやりたいのだろう。宇宙が消えるかどうかの瀬戸際に何を、と思うかもしれないが、一人の父親として子供の出産に立ち会いたいという気持ちは悟空にも分からなくはない。

特にベジータは、トランクスが生まれた時はまだあんな性格だったから出産に立ち会った事もないだろう。

だからこそ、今回の子供の出産に立ち会いたい気持ちは強いはずだ。

悟空もそれを察し、ベジータを誘う事を諦めた。

それにブルマは見た目は若々しいが、もう47歳だ。

高齢出産という事もあって、ベジータも心配なのだろう。

悟空はベジータに近寄り、ニヤニヤと笑いながら小声で話す。

「それにしてもこの歳で子供を作るとはなあ。おめえもそういう事に興味ねえような顔してやる事やってんだなあ。あんま元気すぎてブルマに無理させんなよ」

「だ、黙れ！ 貴様にはデリカシーというものがないのか!？」

「ひひっ、そう怒んなんて」

ベジータが赤面して拳を繰り出すが、悟空はヒラリと避けて距離を取った。

悟空は昔と比べて老成し、随分と大人になった。

だが大人になった反面、昔の彼では言わないような言葉が飛び出す事もある。

仮に悟空が老界王神の力を借りようとしたならば、エッチな写真を餌にするくらの悪知恵は平気で働かせるだろう。

よく言えば大人になったが、悪く言えばおっさんと化してしまっているのが今の悟空だ。

もしかしたら今の彼はもう、筋斗雲に乗れないかもしれない……。

「それにしてもおめえも変わったなあ。昔のおめえなら子供が生まれるなんて気にしなさそうだったのに」

「……フン」

「ま、そういう事なら仕方ねえ。十人目は他を当たってみっか。ブルマ、元気な赤ちゃん産めよ！」

「ええ、孫君も頑張ってね！」

お腹を膨らませたブルマに声をかけ、それから悟空はその場を後にしようとした。しかしこれに納得がいかないのがビルスだ。

何を勝手にベジータを出さない方向で話を進めているのだろう。

宇宙が消えるか否かの瀬戸際だと理解しているのだろうか、とビルスは腹が立つた。

「ふざけるな！ いいからさっさと来い、ベジータ！

別にお前が産むわけじゃないんだからいいだろう！」

「地球の常識とやらですかね。私にはよく分かりませんが……」

ビルスとウイスは流石に数億年も生きる神だけあって、人間とは考えが違う。

そもそも子孫自体が必要なさそうな彼等にはベジータの気持ちなど分からない。

そんな二人に悟空が困った顔を見せた。

「ビルス様、ベジータがいなくてもその分オラ達が戦えばいいだろ？」

「やかましい！ お前達は負けても消されないからそう言えるんだ！

もし負けたら僕は宇宙ごと消されるんだぞ！ ウイス！ 何とかしろ！」

結局その後、ウイスの術によってブルマのお腹の中の子はあっさりと外に出され

てしまい、呆気なさすぎるほどに出産が終了した。

ベジータはこれに心底複雑そうな顔をしたが、高齢出産という事もあってブルマへの負担を考えたら怒るに怒れないのだろう。

かくして、何だかんだでベジータの参戦が決定してしまった。

何だか、報われない男である。

★

「グォアアアアアアアアア!!」

地球のドラゴンボールを使い、蘇生させたヒルデガンが咆哮した。

その巨体と、肌にビリビリと感じられる圧倒的なパワーに悟空達は各々の反応を返した。

悟空やビルスは純粋にヒルデガンの実力を認め、そして期待するように笑みを。トランクスや悟天といったヒルデガンよりもパワーで劣る者達は戦慄を。

かつて母星を滅亡の危機においやられたタピオンは複雑そうな顔を。

そして地面に寝そべっている四星龍は死んだ魚のような顔をしていた。

「……なあ、これ順番逆じゃないか？　普通に考えて願いを叶えてから私を出す

べきだったんじゃないのか？」

四星龍の言葉にリゼットは思わず目を逸らした。

何故彼は地面で寝ているのか。それは彼の身体にドラゴンボールが埋まっているからだ。

これは完全にリゼットのミスである。まずヒルデガン復活の願いを叶え、それから四星龍を出すべきであった。

しかしリゼットは間違えて先に四星龍を出してしまい、いざ願いを叶えようとした所で肝心のドラゴンボールが四星龍に埋まっている事に気が付いたのだ。

しかしここでリゼットは駄目元でドラゴンボールを並べ、その中央に四星龍を寝かせて神龍を呼ぶと言う暴挙に出た。

そしたら案外何とかなるもので、本当に神龍が出たのだ。

その結果、ドラゴンボールに囲まれて寝そべる四星龍から神龍が生えるというシュールな絵が完成してしまっていた。

『願いは叶えてやった。さらばだ』

神龍が消え、ドラゴンボールは空へ浮いた。

四星龍も一緒に浮いた。

そしてドラゴンボールは弾けて飛び散り、四星龍も無表情のままどこかへ飛んでいく。

「ああっ!? 四星龍——」

その後、ドラゴンボールと一緒に四星龍も無事に回収され、事なきを得た。

しかし四星龍からリゼットへのイメージがいきなり下がってしまった気がしないでもない。

気のせいか皆の視線も若干呆れ気味だ。

そんな彼等の前でリゼットはわざとらしく咳払いをし、気を取り直して魔術を発動。

ヒルデガーンのコントロールを掌握して一言命じた。

「お手」

「……ガウ」

リゼットの差し出した手に、ヒルデガーンが大人しく自身の手を——というより

は指を乗せた。

成功だ。リゼットは完全にヒルデガーンを制御下に置いている。

リゼットの魔術の練度自体はホイやバビディとは比べるべくもなく低い。

だが、単純な実力でヒルデガーンを上回っている。

これほどに大人しく従うのは、恐らくヒルデガーン自身がリゼットを格上と認めている部分もあるのだろう。何より一度は自らを滅ぼした相手でもある。

「リゼット、こいつは何が出来るんだ？」

「まずは見た目通りの巨体を活かした力押しですね。

それと翼が生えているので舞空術禁止のルールでも空を飛べる上に、巨大なのでいざという時はこちらの足場代わりにも使えます。

それから、幻魔人の名の通りに幻となって敵のあらゆる攻撃を完全無効化出来ます。

実体化するのは攻撃に移る一瞬のみ……逆に言えば、防戦に徹すればほぼ無敵です。

更に常に幻化する事も可能なので、普段は隠しておく事も出来るでしょう」

ビルスの問いに答えながらリゼットが指を鳴らした。

するとヒルデガーンは完全にその場から消え去り、気すら感知させない。

幻化している間のヒルデガーンはこの世に存在しない幻だ。

故にあらゆる干渉を受けず、気の感知もされない。

攻撃力はゼロになるが、敵からダメージを受ける恐れもない。まさに無敵モードだ。

「なるほど……強さでも神の気を抜きで考えれば超サイヤ人3の悟空以上……加えて空を飛べて攻撃も無効か。

こんなとっておきがいたとは知らなかったよ」

「これは、今回のルールならば相当に活躍を期待出来そうですね」

ヒルデガーンの強さにビルスとウイスは満足したように頷いた。

どうやら無事に彼等の眼鏡にかなったようだ。

リゼットはタピオンの方を向き、彼に声をかける。

「すみません、タピオン。貴方には嫌な思いをさせてしまします」

「いえ、大丈夫ですよ神様。確かにヒルデガーンは恐ろしい魔人ですが、俺は別に

ヒルデガンそのものは憎んでいません……許せないのはそれを利用したホイ達魔導師です」

ヒルデガンは確かに故郷を荒らした怪物であり、一度は弟を殺した仇だ。その事実は変わらない。

だがヒルデガンはかつて、コナツツ星の悪の気を吸い込む事で星を安定させていた魔人像でもあったのだ。

それに邪悪なエネルギーを注ぎ込んで幻魔人にしてしまったのはホイ達だ。決してヒルデガンそのものが悪だったわけではない。

「俺も……勇者になる前は魔人像に祈りを捧げていた時もありました。

貴女の手で再び守り神となれるならば、それはヒルデガンにとっても、きっといい事なんだと思います」

魔人像を造った者達は決して幻魔人などを造りたかったわけではない。

コナツツ星の平和を望んで魔人像を造り上げたのだ。

邪悪な魔導師一派によりその在り方を歪められ、忌まわしき幻魔人とされてしまったコナツツ星の平和の象徴。それがヒルデガンだ。

それが世代を越え、今度は宇宙を守るために戦える。

ヒルデガンへの恐れが消えるわけではない。だが少なくとも、少しは製作者達の無念が晴れるのではないだろうか。そうタピオンは思った。

「悟空君達も異論はないですか？」

「ああ。オラはねえ」

「こ、こんな化物がいたとは……魔人ブウが可愛く見える……」

「頼もしい限りですねえ」

リゼットの問いに悟空が頷き、界王神が驚きを露にした。

ウイスは変わらず余裕の表情だ。

「それで悟飯君、本当に大丈夫ですか？」

ヒルデガンの参戦が決まり、後は暫定となっていた十人目を決めるだけだ。

悟飯かブウか……どちらを出しても問題ないくらいには強いし、悟飯が参加を望まないならばリゼットはそれを受け入れる気でいた。

しかし悟飯は決意を固めたような顔で力強く頷く。

「大丈夫です。ビーデルさんも納得してくれていますし、それに今日と明日は予定

も入れていません。

僕にも、この宇宙を守るために戦わせて下さい」

「いい返事です。では老界王神様……」

「うむ、任せとけい。こやつの潜在能力はきっちり、儂が解放しておいてやるわい」
今のままだと悟飯は残念ながら戦力外だ。

だが老界王神によって力を解放すれば一気に悟空達に追いつくとリゼットは踏んでいた。

そして悟飯の参戦にともない、魔人ブウはメンバーから外れる事となった。

しかし彼の出番がなくなったわけではない。

リゼット達が試合に出ている50分ほどの間、地球は完全に無防備となる。

そこを他の宇宙の者達が攻撃してこないとは限らないのだ。

何せ、あの大神官の余計な発言のせいで今や地球は他の宇宙からこれでもかとかばかりにヘイトを買ってしまっている。

これで狙われない、と思うのは楽観視が過ぎる。

他には、消える事を恐れて地球に移住しようと企てる者が他の宇宙から現れる可

能力がある。

それ自体は仕方のない事だし、それが善良な者で少数ならばいいが……悪質な宇宙人が大挙して押し寄せて来れば地球などあつという間に更地にされてしまうだろう。

そういう意味では、力の大会に参加出来るレベルの強者を一人残しておけるというのは気持ち的にも安心出来る。

「よし、悟飯。時間がない……今すぐに精神と時の部屋に行くぞ。

潜在能力を解放するだけで終わ리と思うな。残された時間、徹底的に俺が鍛えてやる」

「はい！ お願いします、ピッコロさん」

精神と時の部屋には老界王神と悟飯の他に、ピッコロも同行する。

彼の役目は二つ。一つは儀式の間、老界王神を精神と時の部屋の過酷な環境から守る事だ。

老界王神は肉体的には脆いので精神と時の部屋で25時間も儀式が出来るわけがない。

なのでそれが終わるまで、ピッコロが気のバリアで彼を保護しなくてはならない。そしてもう一つは、悟飯を鍛え直す事である。

いかに潜在能力を解放しようと、実戦の勘が鈍ってはい話にならない。

だから残された時間で徹底的に、悟飯を鍛え直すのだ。

悟飯達三人は精神と時の部屋へ向かい、その途中でピッコロが足を止めた。

その理由は……珍しく神殿を訪れている先代を見付けたからだ。

二人はしばらく何かを話し合い、やがてピッコロは悟飯達と共に精神と時の部屋に入って行った。

ともかく、これで第7宇宙の命運を背負う10人が決定した。

リゼットを主将に据え、悟空、ベジータ、ピッコロ、ターレス、セル、ミラ、四星龍、悟飯、そしてヒルデガーンの10人が第7宇宙の命運を決める最強メンバーとなる。

全員が全員、他の宇宙ならばエース格を名乗るだけの実力を有したオールエースだ。

ただ一人として人数合わせの弱兵などいない。10人全員が単騎で戦局をひっく

り返すだけの強さを備えている。

ならば後はこの10人で何とか勝ち抜くだけだ。

だが、今の強さに胡坐をかいているわけにはいかない。

万全には万全を重ね、出来る事は全てやるべきだろう。

リゼットはそう考え、そしてふと思う。

今の自分ならば『アレ』が出来るのではないかと。

今まで一度もやった事はないが、そう難しい事ではないと最長老は語っていた。そう、実際難しい事ではないはずだ。老界王神のように限界以上の力を与えるのではなく、元々そこにあるものを引き出すだけ。切っ掛けを与えるだけなのだ。

そしてリゼットはその感覚を身体で覚えている。最長老に引き出して貰った時。超神水を飲んだ時。老界王神に解放してもらった時。

バビディは魔術で『それ』を出した。リゼットは今やそうした魔術的な力も使う事が出来る。

出来ないはずがない。いや、出来るはずだ。

「……セル。いいですか？」

「ん？」

「少し、屈んで下さい」

セルの身長は200cmを超え、リゼットでは頭まで手が届かない。

その為少し屈んでもらい、頭に手を乗せる。

そして意識を研ぎ澄ませ……研ぎ澄ませ……。

——視えた。

セルの内側に眠る、彼自身が使い方が分かっていないだけの力が。それを抑えている蓋が。

簡単な事だ。少し蓋をどけてやればいい。

そうすれば後は勝手に、本人が発揮してくれるはずだ。

元々そこにあるものをちょっと引っ張れば、それで事は済む。

——セルの潜在能力を、引き出した。

「こ、これは……！ 馬鹿な。力だ、力が溢れてくる……！」

「貴方の潜在能力を引き出しました。次の戦いでは強い力が多い方がいいでしょう」
「い、いつの間にこのような事が出来るように？」

「つい今しがた。いえ、あるいはもつと早く出来るようになっていたのかもしれないが、出来るかもしれないと思ったのは今です」

リゼットのこの芸当に場の全員が目を丸くしていた。

それはそうだ。掌をポンと頭に乗せてパワーアップなど簡単すぎて信じられない。

最早何でもありになってきたな、この女。とビルスは呆れ顔になる。

一方でセルは強い手応えを感じていた。

出来る……今なら、あの変身が。

リゼットの行った潜在能力の引き出しは、戦闘力という意味ではセルをそこまで派手に強化していない。そこまで多くの力を余らせていたわけではないのだから、当然だ。

だがその代わりに、セルの内に眠っていたフリーザの力を引き出してしまった。無論それで今更セルの性格が変わる事などなく、要するにリゼット自身が予想していなかったパワーアップをさせてしまったというだけだ。

(……とんだサプライズを見せる事が出来そうだ)

思いがけずに会得した新たな力はまだ黙っておこう、とセルは考えた。

これは次の大会の時にサプライズとして皆に見せたい。

「お、おい、神。それは俺にも出来るのか？」

「出来ると言えば出来ますが……恐らく効果は薄いでしょう」

ベジータがリゼットに詰め寄るが、リゼットはそれに静かに答えた。

「今のは別に力を与えたわけではありません。元々持っていたものを引き出しただけです。」

しかし貴方や悟空君は既に修行で限界『以上』を極めている……無駄に余らせている力がないんです。

そういう相手に使っても意味はありません。

また、ヒルデガンもこの方法でのパワーアップは不可能でしょう。

セルも……一応は引き出しましたが、元々限界近くまで修行していたので、得た力は残念ながら微々たるものです」

悟空とベジータは既に限界を超えてその先を極め続けている。

当然余らせている力などあるはずもない。

コップに例えるならば、潜在能力とはそのコップにどれだけ水が入っているかだ。そして悟飯のように無駄に潜在能力を余らせている者とは、コップに蓋とストローを付けて上手く中身を出せないだけなのである。

だが悟空やベジータは違う。コップの容量などつくに超過して、コップそのものを大きくし続けている。

当然中身は常に一杯だ。そういう相手の潜在能力を引き出しても意味はない。勿論ヒルデガンにそんなものはない。彼は今の姿が最終最強形態だ。

繰り返すが、余らせている力がなければ意味はない。限界『以上』を与える老界王神の術とは違うのだ。

「俺はどうだ？」

「ターレスも限界を超えているので意味はありません」

「オラは？」

「先程意味がないと言ったでしょう」

「俺は？」

「ミラはトワと融合した際に解放されているようですね。潜在能力を感じません」

「ねえねえ神様、俺は？」

「僕も僕も！」

「子供のうちから楽をする事を覚えてはいけません。地道に努力して下さい」

リゼットが潜在能力を引き出せると知って次から次へと戦士達が自分では出来るかどうかを尋ねるが、それにリゼットは一つ一つ答えた。

流石に地球の主力陣はその殆どが潜在能力など余らせておらず、限界すら超えている。

実に頼もしい限りだ。

——夜。

リゼットは神殿から夜空を眺めていた。

後僅か24時間後。試合時間はたったの48分。それだけの事で宇宙の命運が決まってしまうのだ。自分達が負ければナメック星人や多くの、この宇宙に生きる人々が消えてしまう。

だが勝利すれば、第6宇宙の皆やそれ以外にも多くの命を消す事になる。

……こんなにも、勝ちたくないと思った戦いは初めてだ。

「リゼットよ」

「……先代様？」

そんなリゼットへ、先代が後ろから声をかけてきた。

彼が聖堂からここへ来ていた事にも気付かないくらい意識を逸らしていたらしい。

リゼットは先代へと向き直り、彼の眼を見る。

それは何か決意を秘めた瞳で……リゼットはそれだけで、彼が何をしようとしているのかを察してしまった。

彼もまた、この宇宙を守るために最善を尽くそうとしているのだ。

「今日はお前に別れを言いに来た」

「……合体、するのですね？」

「そうだ。ピッコロと話し合い、それが一番いいと二人で決めた」

今度の戦いは負ければ取り返しが付かない。

今までのようにドラゴンボールで蘇るなどと言ってられない。

何故なら第7宇宙が消滅してしまえば、いくらドラゴンボールといえど元に戻す事など不可能だからだ。

全王はリゼットや悟空、アラレの暮らす地球だけは負けても消さないと誓ってくれた。

だが地球以外は消すと言っているのだ。

それを止める為には、今度の戦いで勝利する以外の道はない。

勝利して超ドラゴンボールを使って他の宇宙を戻す。それしか見付からないのだ。

「今度の戦いにはより強力なドラゴンボールが必要となる。

私とピッコロが融合すれば、ダークドラゴンボールが復活する。

ドラゴンボールの力は創造主の力に比例する……融合後のピッコロが創造主という扱いになればダークドラゴンボールは超ドラゴンボール程とはいかずとも、かなりの力を発揮するだろう」

「……貴方は、それでいいのですか？」

「私は何一つ悔いておらぬよ、リゼット。今にして思えば、かつて悪の心と別れた

事すらがこの日の為であったのだ。

悪と善に別れたからこそピッコロ大魔王が生まれ、その息子が生まれた。宇宙を守る事が出来る戦士となり……私はその礎となる。全ては成るべくして成った事なのだ」

融合。それは死とも異なる消滅だ。

二人が一人となれば、ある意味ではその融合後の人物が先代であると言えるかもしれない。

だがベジットのように対等の関係での融合ではなく、融合後に先代の人格は殆ど残らない。

ベースをピッコロにし、人格も彼を優先しての融合となればそれは最早吸収であり、実質上の消滅に等しい。

ただのパワーアップの切っ掛けであり、広い知識を与えるのみだ。

「ピッコロは変わった。かつてのような粗暴さは鳴りを潜め、随分と落ち着いている。」

再び二人に別れる事は、もはやあるまい。

それに元々寿命も近かったしな……どのみち潮時だったのだよ」

先代はもう老年だ。

かつてベジータ達が地球に攻め込んで来た時点で既にその寿命は尽きる寸前であったと本人が語ってる。

それが今日まで生きて来ただけでも奇跡のようなものだ。

しかしピッコロはこれからの戦いに必要な戦士だ。老人の老衰に付き合わせるわけにはいかない。

ならばこそ、ここで融合するのが最善なのである。

「私は満足している。見出した後継者は立派にその役目を果たし、私などでは到底出来ぬ地球の守護を完璧に成し遂げて来た。あの日お前に出会った事こそが、私にとって最大の幸運だったのだ。」

……私は幸せ者だったぞ、リゼットよ」

今の地球に必要なのは老いた先代の神などではない。

歴代最強の戦力を誇る今の女神であり、そして彼女と共に戦う強き戦士だ。

そう思うからこそ、次世代の為の礎となる事を不幸とは思わなかった。

むしろ少しでも力になれる事を幸福にすら思った。

「さよならは、言いません。」

これからは一緒に……一緒に戦いましょう、先代様」

「ああ、そうだな。共に戦おう」

言葉遊びである事は分かっている。融合とは名ばかりの吸収である事も分かっている。

それでもあえてリゼットは別れを口にしなかった。

それを口にしてしまうと、本当に二度と会えなくなってしまうような気がしたから、言えなかったのだ。

先代もまたそれを察し、リゼットに合わせた。

二人は固く手を握り合い、微笑んで見詰め合う。

そして先代が手を放し、ゆっくりと背を向けた。

「ではな、リゼット。また明日、ここに来る……。」

今度は一人のナメック星人となって」

「はい……お待ちしております」

先代は去り、その背をリゼットはいつまでも見送っていた。そしてそれが、リゼットが先代を見た最後の光景であった。

★

第7宇宙のどこかにある無人の惑星。

その惑星全体を覆うようにバリアが展開され、バリアの内側では真紅の龍が天まで届く巨体を渦巻かせていた。

その足元にいるのはリゼットだ。

先代とピッコロの融合……それを聞いてからリゼットは決して使う事はないだろうと思っていたダークドラゴンボールの封印を解いた。

亜空間や精神と時の部屋に放逐していたボールを全て集め、今ここに真紅の神龍を呼び出したのだ。

『さあ願いを言え。どんな願いでも一つだけ叶えてやろう』

「……」

次なる戦いにおいて敗北は絶対に許されない。

勝たなければならない……何としても。

勝利し、最優秀選手に与えられる超ドラゴンボールの使用権さえ得れば全王と交渉し、消えてしまった宇宙を復活させる事が出来るかもしれない。

だが負けてしまえばそれは不可能となる。このダークドラゴンボールでも残念ながら消えてしまった宇宙全てを元に戻すのは不可能だろう。

だが今度の相手は数多の宇宙。未知の強者達だ。このオールエースチームですら必ず勝てるとは言えない。

相手の中にビルスなどの破壊神を上回る猛者がいないという保証などどこにもない。

ならばこそ——この身に、切り札を宿す。

「神龍よ。私の願いは——」

——そして遂に、宇宙は運命を決する朝を迎えた。

【融合して四星龍は大丈夫なのか】

・邪悪龍（今は浄化龍ですが）はボールに集まったエネルギーが実体化した存在なので一度誕生した後にボールをどうしても倒されない限り消えないものとなります。

ただしボールはもう石になっているので一度死んだら二度と復活出来ません。ただしボールが本体な七星龍だけは流石に例外です。

【第7宇宙メンバー決定】

・リゼット…1兆5500億

真ゼノバース…124兆

1～2…62兆

・ついにアルティメット化を完全に極めたりゼット。

これからはアルティメット化がほぼ素の強さ扱いになるが、これで変身しているのでこの上から更に2000倍とかはやらない。

・孫悟空…11億

完成ブルー…6兆6000億

界王拳ブルー（最大20）…44兆

・ブルーを完成させた頼りになる第七宇宙の大エースにして主人公。

ブルーの弱点を克服しているので原作『超』のように強さがブレたりしない。少なくとも伝説化ケール程度ならば軽く返り討ちにしてくれる。

・ベジータ…10億

超サイヤ人ブルー…2兆

完成ブルー…6兆

・悟空への対抗心からいつの間にかブルーを完成させていたベジータ。

後は愛の戦士キュアベジータになるだけだ。

基礎戦闘力が伸びてないのは、最近はブルマと【昨晚はお楽しみでしたね】したり、ブラの誕生まですっと家にいたから。

・ターレス…9億80000万

超サイヤ人4…1兆9600億

超フルパワーサイヤ人4…29兆4000億

・ブルーツ波を事前に過剰摂取する事で切り札の超フルパワーへの変身を可能と

した。

（詳しくは次回）

地味に基礎戦闘力も悟空達に近付いている。

・ミラ…2000億

トワ融合モード…3兆

・神の気を抜きにした純粋な強さでは最強クラス。

力の大会寸前に駆け込み乗車してきた期待のルーキー。

・セル…2000億（超サイヤ人相当）

超サイヤ人3…1兆6000億

???…3兆2000億

・リゼットに潜在能力を引き出され、パワーアップを果たした。

新たな形態も獲得しているらしく、最大戦力はミラを超える。

これが彼の最後のパワーアップイベントになるだろう。

・四星龍…3000億

黄金モード…3兆

・駆け込み乗車してきた男その2。スピードは超フルパワーのターレスを上回る。

戦闘力もやばいが、何よりやばいのは太陽と同じ温度にまで上げる事が可能という事。

数多の戦士を屠って来た太陽さんが遂に味方として参戦したかのような頼もしさである。

しかしリゼットのポカによっていきなり恰好悪い姿を晒す羽目になった。

リゼットへの心証も『落ち着きと強さを兼ね備えた女神』だったものが『案外抜けてる女神』に変わってしまった。

・アルティメットピッコロ…55兆

・遂に先代と融合し、基本戦闘値の鬼と化したピッコロさん最終形態。今こそ本当のカタツツの子の力を見せる時。

リゼット同様にアルティメット化を極め、常にこの強さを維持出来る。その強さはもう超ナメック星人ゴッドと呼んでいいレベル。

俺は今究極のパワーを手に入れたのだー！

・アルティメット悟飯…1兆8400億

・ピッコロとの修行で心身を鍛え直し、老界王神によってアルティメット化を会得した潜在能力解放悟飯。

一気に最前線に復帰し、潜在能力マンである彼のやばさを改めて知らしめてくれた。

しかし師匠が化け物すぎて未だに師匠超えが出来ない。

アニメのように前髪が生えたり消えたりはしない。ずっとこのまま。

・ヒルデガン…5000億

・飼い慣らされた幻魔人。魔人ブウとの二択だったが、奇襲性能の高さからこちらが選ばれた。

見た目は一番強そうなのに一番弱い。

兆超えを果たした他のメンバーに比べると『他にいないから入れられた』二軍感が漂うが、その性能は十分脅威的。

攻撃の瞬間以外は完全無敵なので上手く使えば十分やっていけるだろう。

大神官「……………ぶっちゃけ第七宇宙が強すぎて他の宇宙全部 VS 第七宇宙の構図にしないと結果が見えてるんですよねえ……………」

第百二十二話 第9宇宙からの襲撃

闇夜に紛れ、地球の神殿へと何者かが近付いていた。

それは一目見ただけで分かる、地球人ではない者達——宇宙人の集団だ。

彼等は第9宇宙より派遣されて来た刺客であり、その目的は第7宇宙の主力勢の暗殺であった。

人間レベルが低い宇宙を消すというこの大会において、唯一例外とされているのが第7宇宙の地球だ。

加えてこの星の神であるリゼットという女は、どうやったかは分からぬが全王に取り入っており、大神官からの覚えもいのように見えた。

どう考えてもおかしいではないか。

故に第9宇宙の界王神^{ロウ}と破壊神^{シドラ}は考えた。

あの女が全王様をそそのかし、こんな大会を開かせたのではないのか？

奴こそが今回の騒動の原因ではないか？

一度疑い出せばキリがなく、加えて人というのは一度自分が正しいと思うとなか

なか思考の軌道修正が出来ない。それは神も同じだ。

真実を追い求めていると自分では思っているが、実際は『あの女が悪い』という前提を敷き、全ての思考をその上から成り立たせている。

だからどのような考えを経ても最終的には『あの女が悪い』で収束する。考えているようで考えていないのだ。

先に結論ありきで考えて、その結論に納得出来るだけの思考過程を後から作る。故に彼らの中でリゼットは『全王をそそのかして宇宙を消そうとしている悪』であり、それ以外の結論が出ない。

だから、あの悪を殺す。

その為に第9宇宙は多くの選りすぐりの戦士を派遣し、神殿へと差し向けていた。

だが彼等は知らない。

自分達が足を踏み入れたそこが、『悪』などという言葉では表現出来ない——混沌の坩堝である事を。

「よし、あれが神殿だな」

「所詮一惑星の神殿だな。バリアを張っているが、大した事はない」

地球の神殿は侵入者を防ぐべく、別次元に潜行した上でバリアを展開している。しかしこちらは界王神と破壊神の後押しを受けた部隊なのだ。

たかが一惑星の守りなど無いに等しく、こんなものは簡単に突破出来てしまう。そしてまさにバリアを破ろうとしたその時……。

——彼らの背後に、音もなく巨大な幻魔人が出現した。

「……は？」

思わず、間の抜けた声を出したのは最後尾にいた男であった。

彼は気の探知能力に優れ、一惑星分開いた遠距離の相手であろうとその気を感じ取る事が出来る。

だからこそ言える……こんな奴は今、この瞬間まで居なかつた。

気を消して隠れていたとか、そういうレベルではない。

姿を消していたとか、そんな次元ではない。

本当に現れる瞬間まで、どこにも存在していなかったのだ。

「ゴアアアアアア！」

幻魔人——ヒルデガーンの口から灼熱の火炎が吐き出された。

完全な不意打ちで放たれたそれは一瞬で第9宇宙の刺客達を飲み込み、半数以上を墜落させる。

慌てて迎撃態勢を取った戦士達だが、その目の前でヒルデガーンは姿を消した。

「な……!? ば、馬鹿な！ 消えた！」

「よく探せ！ あんなでかいのが隠れられるはずがないんだ！」

「落ち着け！ 恐らくワープか何かだ！ よく氣を探すんだ！」

突然の奇襲に第9宇宙の刺客達は浮足立ち、騒然とする。

何とかヒルデガーンを見付けようと氣を探るが、残念ながらそれではヒルデガーンは見付けられない。

何故なら彼は幻。本当に存在していないのだから、現れる瞬間以外は見付けられないのだ。

再びヒルデガーンが姿を現し、尻尾を開いた。

すると中から細い触手が何本も飛び出し、第9宇宙の戦士達を絡め取っていく。

「ひいひい！」

「た、助け……」

次々と戦士達が捕食され、彼等は狙う側から狙われる側へと変わってしまった。叫びがあちこちで木霊し、統制が取れなくなる。

リーダー格の刺客が咄嗟に破壊玉——第9宇宙の破壊神シドラに渡されていた彼の破壊のエネルギーを投げつけるも、ヒルデガンには通じない。

再び姿を消し、対象を外した破壊玉はあろう事か味方に炸裂して破壊してしまった。

「な……なんだ……なんなんだ、この宇宙は……」

リーダー格の男が怯え、後ずさる。

すると背中が何か柔らかい、弾力のあるものにぶつかった。

恐る恐る振り返ると、彼の背後に立っていたのはピンク色の肥満体……かつて宇宙を荒らし、界王神すら手にかけてきた恐るべき存在、魔人ブウだ。

「うっ、うおおおおお！」

咄嗟に振り返り、拳を雨あられと放つ。

一撃ごとにブウの身体がへこみ、拳が埋まる。

だがおかしい……手応えがない。

息が切れるまで攻撃を続けた彼の前でブウはポヨン、と元に戻ってしまった。

「今ので終わりか？ 全然面白くないぞ」

「……あ……あ」

どんな攻撃もすり抜ける幻魔人と、どんな攻撃も通じない魔人。

その二人に挟まれ、刺客達は戦意喪失するしかなかった。

「ほれほれ、そんなものかの？」

カリン塔付近にも刺客が来ていたが、彼等はそこにいた一匹の猫にすら翻弄されていた。

カリンはヒラリヒラリと攻撃を避け、手にした杖でポコポコと刺客を叩き落していく。

それはまるで不出来な弟子に稽古をつけてやっているかのような、余裕溢れる所作だ。

そこから少し離れた場所ではゴッドガードンズの眼が闇の中で光り、次々と刺客

を捕獲している。

Mr。ポポは雷のように機敏に動いて次々と刺客を撃破し、まるで寄せ付けない。「もういいじゃろう。ブウよ、やれい！」

「飴玉になっちゃえ！」

カリンの指示に应えて魔人ブウが触角からおやつ光線を発射した。

それは次から次へと刺客に命中し、一人残さず飴玉へ変えてしまう。

ヒルデガンンによって地面に落とされた者達にまで光線は届き、更にそこにヒルデガンンが尻尾に閉じ込めていた者達まで加える事で、全滅させる。

それをカリンが念力で動かして巨大な袋の中へ全て閉じ込めると、入り口をきつく紐で結んでしまった。

その光景に、遠くから水晶で眺めていた第9宇宙の破壊神と界王神は戦慄くばかりだ。

「ば、馬鹿な……我が宇宙の精鋭達がこんな……」

「これが、第7宇宙の選手なのか……」

第9宇宙が送り込んだ戦士達は力の大会に出る者達ではない。

だがそれでも、神が直々に選んだ者達だ。その実力は第9宇宙では間違いなくトップクラスである。

それがこうも呆気なく全滅するなど、悪い夢でも見ているようだ。

そんな彼等の前で、カリンが水晶に顔を映す。

「ほう、これで見ているんじゃない？ 聞こえていますかな、第9宇宙の神よ。

貴方達が送り込んで来た者達は一人も……ああいや、そちらの破壊のエネルギーで自滅してしまった者以外は、飴玉になりましたがまだ生きております。

この者達は後でお返ししますが、このような事は止めて頂きたいものですな」
それだけ言い、映像が途切れてしまった。

向こうの方で水晶を破壊したのだろう。

しかもこちらが第9宇宙という事が完全にバレてしまっている。恐らくは心を読む能力でもあるのだろう。

第9宇宙とわざわざ言ったのは、『お前達の事などとくにお見通し』だと言われたに等しい。

しばらくロウとシドラは無言だったが、やがてロウが地面を叩く。

「おのれ、第7宇宙め……！　これほどとは……」

「むう……あの巨大な怪物は一体何だったのだ……」

「わからぬ。わからぬが……あれが向こうの宇宙の最強の戦士に違いあるまい。

ぐっ……あんなものを相手にしてはいかにトリオ・デ・デンジャーズといえど……」

「し、しかしこれで向こうの手の内がある程度読めた。あの巨大な奴とピンクのデブ。それから黒い奴と白い猫……あいつらは選手と見て間違いないだろう」

犠牲は払ったが、第7宇宙の選手をある程度晒す事が出来た。

そう思い、ロウとシドラは何とか溜飲を下げようとする。

だが彼等は知らない……今、彼等が見た中に選手は一人しかないという事を。そして彼等が最強と判断したヒルデガンすら、数合わせに過ぎないという事を、彼等は大会本番になってようやく思い知る事となるのだ。

★

遂に全宇宙の命運を賭けた力の大会が開催される時間が近付いてきた。

予想した通りに夜中に他の宇宙からの襲撃があったが、ブウ達が対処してくれたので問題はない。

向こうの自滅とはいえ、一人の死者を出してしまったのは残念であった。

ヒルデガンンを大会前に晒してしまったが、まあいいだろう。

慣らし運転をさせてもらえたいし、それにヒルデガンンはむしろ見せておく事で相手に威圧感を与える事が出来る。

今頃刺客を放ってきた宇宙はヒルデガンンやブウをどう対処するかばかり考え、他の事に意識が向かなくなっている事だろう。

リゼットはセルとヒルデガンン、ミラ、四星龍を伴ってカプセルコーポレーションへと転移し、そこで待っていた五人と合流した。

ヒルデガンンは巨大過ぎて普段は邪魔なので今は幻と化しているが、それでも近くにいた事はリゼットが感じ取っているので問題はない。

悟空達も気合いは十分で、全員が万全の状態を整えているようだ。

先代と融合したピッコロははち切れんばかりの力に溢れ、それでいて今まで以上の落ち着きを感じさせる。

ターレスは時間までカプセルコーポレーションで何かしていたのか、力が漲っているようだ。

「ねえ神様、ターレスったら信じられないのよ。一日で父さんが前に造ったブルーツ波増幅装置よりも更に強いブルーツ波を照射出来る装置を造ってくれたなんて……全く。私が天才じゃなきゃ絶対出来なかったわよ」

「……出来たんですか」

ブルマがリゼットへと愚痴るが、リゼットにとって驚きだったのはターレスの要求よりも、むしろそれを実現させてしまえるブルマの天才性であった。

ブルマは自分で天才を名乗るが、ハッキリ言って全く否定の言葉が見付からない。確かにこれが天才でなければこの世から天才なんてものはほとんど消えてしまうだろう。

「ああ。おかげでブルーツ波をたっぷり取り込ませて貰った。

今なら、ブラックと戦った時の限界を超えた超サイヤ人4にだってなれるぜ」

「準備は万端のようですね」

「誰が相手でも負ける気がしねえ」

ターレスはしっかりと彼なりの準備をしてきたようだ。

これならば余程無茶な飛ばし方をしない限り試合中に超サイヤ人4が解除され

る事はあるまい。

元々超サイヤ人4は超サイヤ人3までにあつたエネルギーの消耗という欠点を解消した変身であり、十分なブルーツ波さえあれば変身は長時間持続する。

つまり今回のルールに、かなり有利な変身と言えるだろう。

悟空とベジータは今まで通り。悟飯は既に潜在能力を解放した姿になっている。この変身は極めて自然な状態で超サイヤ人3以上の力を発揮出来るし、消耗もない。変身しておかない理由がないのだから、悟飯の判断は正しいだろう。

通常状態のまま力を発揮する暇もなく、不意打ちで落とされてしまう可能性だつてあるのだ。

そして四星龍は前回から引き続き、何とも言えないような虚無の表情を浮かべていた。

彼がこんな顔になってしまった理由は、彼の体内に埋まっている四星球——だつた石コロにあつた。

ピッコロと先代が融合したという事は、当然ドラゴンボールは石になったという事だ。

四星龍はドラゴンボールに溜まったエネルギーが実体化した存在なので、ドラゴンボールが石になろうと消える事はない。

というかこれで消えるなら、邪悪龍が出てても製作者のナメック星人が誰かと融合すれば解決出来てしまう。

いくら何でも宇宙の脅威として老界王神に恐れられていた者にそんな簡単すぎる攻略法があるわけがない。

なので四星龍は消えない。それはいい……いいのだが、しかし四星龍は複雑であつた。

四星龍の龍だから四星龍なのだ。ではただの石コロになった今、私は何なのだろう……そう思ってしまったのだ。

だってこれもう四星球じゃなくね？ 四星球じゃなくてただの石じゃん。

じゃあ私は石星龍か？ いや、星マークないからもうこれ、ただの石龍じゃね？ そんな感じで、彼は自分の存在というものについて自問自答し続けていた。

唯一の救いは、他の龍と違って彼のドラゴンボールは右腕に隠れていて普段は見えない事か。

これが一星龍のように額にドンと鎮座していたら凄く間抜けになる所であった。何であいつ頭に石埋めてるの？ とか言われてしまう。

「全員、問題ないようだな」

ビルスの言葉に四星龍が驚いた。

え？ 私はこれで問題ないと見なされるのか？

しかし誰もビルスに突っ込みを入れてくれない。

「ホホホ、頼もしい限りですね」

これから宇宙の存亡を賭けた戦いに臨むが、ビルスの顔に悲壮感はない。

このベストメンバーならば勝てると思っているからだ。

むしろこれだけのメンバーを揃えて負ける姿が想像出来ない。

十人全員が、かつて宇宙最強にして最悪と言われた魔人ブウを軽々と凌駕している。

間違いなく、今が第7宇宙最強の時代だ。力の大会が十年前や二十年前……あるいは彼等がこの世を去ってからでなくて本当によかったと思う。

「さーて、そろそろ時間です。行きますよ」

ウイスが出発を宣言し、リゼット達も彼の近くへと集まる。

もしここにいるメンバーが仲の悪い面子であればウイスは『手を繋いで輪になれ』などと悪戯を仕掛けたかもしれないが、生憎この十人にそれを言っても何の問題もなく普通に繋いでしまうだろう。

なので無駄な悪戯はせず、普通に転移をして無の界へと飛んだ。

【石龍】

四星龍である。

四星球の龍だから四星龍なのに、肝心のドラゴンボールを石にされてしまった。確かに消えないのだが、だからといって消えなきゃいいという問題ではない。例えるならばそれは角のないロンゾ族のようなもの。

キマリは通さない。

【キマリⅡロンゾ】

ファイナルファンタジー10のパーティーメンバーの一人。

ロンゾ族の青年。魔物の技を覚えて使いこなす。

青魔導士系の宿命としてくさい息も吐けるが、キスティス先生に比べるとインパクト不足。

役割分担のハッキリしているFF10では2軍落ちしやすい。

第二百二十三話 開戦

参加してない宇宙を見てみると、1、12と5、8が免除されてるわけですが、この宇宙はそれぞれ対になってる同士なんですよ。

やっぱり人間レベルの高い宇宙は対の宇宙も高いし、逆に低い宇宙は対も低いって事なのでしょうか。

到着した無の界はその名の通り、武舞台以外は何もない暗い空間だ。

他の宇宙の者達も到着し、リゼット達は早速敵の情報を集めるべく観察を始めた。無論向こうも同様にこちらを観察しており、いくつかの視線を感じる事が出来る。「やはり、こちらのヒルデガン同様に飛べるメンバーを連れてきている宇宙もありますね」

「ああ。翼を持つ者達だけは舞空術禁止のルールにも引っかからんわけだ」

「ところでセル。貴方も羽がありますが……」

「ふむ。私も舞空術ほどではないが、確かにこの羽で飛ぶ事は出来る。だが速度には余り期待せんでくれ」

セルとリゼットがまず警戒したのは、やはり飛べる者達だ。

このルールならば空を飛べる者が断然有利となる。

こちらにもヒルデガンとセルが飛べるが、やはり考える事は同じだ。飛べる者を連れて来る宇宙はやはり他にもいた。

「この武舞台は不公平が出ないよう、生まれた星の重力がかかるようになっていきます」

「そいつは有り難い。私やリゼットにとっては有利な条件だ」

生まれた星の重力、という事であればリゼット、セル、四星龍、悟飯には地球の重力がかかる。

だが悟空やベジータ、ターレスには地球の十倍の重力がかかるだろう。

ピッコロはナメック星の重力だが、ナメック星は地球と変わらないのでハンデにはならない。

ミラとヒルデガンは残念ながら若干の戦力ダウンがあるかもしれない。

総じて、地球生まれが有利なルールだ。

「第2宇宙にヤードラット星人。第4宇宙は二人ほど姿が見えん……こちらのヒルデガンと似たような能力の持ち主がいるかもしれない。とりあえず警戒すべきはこの辺りか」

ミラが注目したのは瞬間移動出来るヤードラット星人と、姿の見えない第4宇宙の二人だ。

単にカメレオンのように景色と同化するなどして姿が見えなくなっているだけならばいい。

だが最悪、こちらのヒルデガンのように実体化している時以外は無敵という可能性もある。

もしそうならば手強い相手となるだろう。

しかし改めて考えると、強い、でかい、飛べる、オマケに攻撃時以外は無敵で姿も隠せるヒルデガンの反則ぶりが半端ではない。

「おや？ 第7宇宙は九人しかいないようですが……」

大神官が不思議そうに言葉を発し、他の選手達の視線が集中する。

姿の见えない選手がいるのは第4宇宙にも言える事だ。

しかしヒルデガーンの完全なステルス性が仇となった。

恐らく大神官は第4宇宙の選手は見えてるのだ。

しかし攻撃の瞬間以外は存在していないヒルデガンまでは探知出来ないという事だろう。

あるいは気付いていて、あえて言っているのか……。

どちらにせよギリギリまでヒルデガーンを隠しての奇襲はさせてくれないらしい。

仕方ないか……そう思い、リゼットはヒルデガーンの幻化を解いた。

「グォアアアアアアアッ!!」

幻化を解除したヒルデガーンが武舞台に降り立ち、轟音を響かせる。

その巨体到大神官が感心したような声をもらし、他の宇宙の選手達はぎょつとした。

不幸にも一番近くでヒルデガンを見てしまった第4宇宙のキャウエイは腰を抜かして震えている。

強さというのは見た目では判断出来ないものだ。

一見凄い弱そうな奴が実は凄い強いというのは珍しくない。

だがこれは流石に一目で分かる。強い……それも半端ではなく。

「なんっじゃありゃあああ！」

シャンパが絶叫し、他の神々も戦慄していた。

その中で全王だけは「怪獣だー！ かっくいー！」と喜んでいる。

ペンギン村にも普通に怪獣はいるが、ヒルデガンほどの巨体は流石にいないだろう。

「第7宇宙……あんな最終兵器を隠しておったか……」

第10宇宙の界王神であり、ザマスの師でもあったゴワスがスマホのようなもので撮影しながら声を震わせる。

余談だが彼は神チューブなるものに動画を上げる神チューバーであり、最近その筋で有名ならしい。

そんな彼らの驚く姿を見ながらビルスは笑いを堪える。

そいつ、うちの選手で一番弱いんだよとカミングアウトしたい気持ちを抑えるの

にも苦勞しそうだ。

だがそもそも、第7宇宙がこんな魔境と化したのは彼がサボっていたのが原因である。

全員が見守る中でリゼットはヒルデガーンを再び幻に戻し、大神官を見る。

彼も今ので納得したのか、静かに頷いてからルール説明に移った。

「力の大会のルールを説明いたします。

制限時間は100秒タック。中央にある柱が時間と共に下がっていき、床と同じ高さになったら終了です。

術以外の武器の使用を禁止。また死亡させてもいけません。

とにかく武舞台から対戦相手を落として下さい。落とされない限り負けにはなりません。

そして、どんなに瀕死になっても回復するための道具の使用は禁止にさせてもらいます」

ルールを聞き、第7宇宙全員の視線が一瞬リゼットへと集まった。

回復の道具禁止……つまり仙豆などは使えない。

だがリゼットの使う回復の術ならば使用禁止ではない。

ならばこの大会、第7宇宙が勝ち残るにはヒルデガーンの制御も含めてリゼットを残す事が勝ちへの近道になるだろう。

彼女さえいれば、落ちない限りどれだけ瀕死になっても復帰出来るのだから。

「それで、我々はどう動けばいい？」

「チームワーク……と言ってもどうせベジータやターレスは聞かないでしょうから、暴れたい人は好きにして下さい。私が戦局を観察しつつ、必要な時はこちらから念話を飛ばします」

セルの問いにリゼットは意外にも、ほぼ無計画に等しい答えを出した。

作戦だの、チームワークだの、これらの事はいくら事前に考えても無駄だと分かっているからだ。

まず間違いないく、ベジータ、ターレスなどがスタンドプレーに走る。ミラも仲間になって間がないので下手に連携させようとすれば、かえって動きにくいだろう。悟空もそういうのは余り得意ではない。

ならばいっそ、全員の好きにさせてしまった方が第7宇宙は力を発揮出来る。

リゼットならば武舞台の状況を全て把握する事は出来るし、誰かが危なくなれば一番近い者に救援に入るよう念話で指示も出来る。

基本は自由にさせつつ、必要な時だけ指示を出す。乱暴なようだが、恐らくこれが第7宇宙の取るべき戦術だ。

出来もしないチームワークを無理にさせようとするのは、単なる悪手でしかない。
「そうこなくっちゃな。そんじゃあ神さんの許可も下りた事だし、俺は好きに暴れさせて貰うぜ」

「よっしゃ！ オラも一暴れすっか」

「俺一人で全て片付けてやろう」

ターレスが喜々として拳を鳴らし、悟空とベジータも前に一步踏み出す。

予想通り、サイヤ人純血組は最初から連携など頭に入れていない。強い奴と戦えるかどうかは彼等にとっては重要な事なのだ。

「宇宙の強者達か……楽しめそうだな」

「俺も好きにやらせて貰おうか」

続いてミラと四星龍も好戦的に前に出る。

この二人はその気になればチームプレイも出来るだろうが、やはり本質的には武人。チームプレイは出来るが、得意ではない。

特に四星龍はその力の性質上、むしろ一人の方がやりやすいだろう。

「悟飯、俺達は組んでいくぞ」

「はい、ピッコロさん」

悟飯とピッコロだけは二人組で戦いに挑むらしい。

この二人ならば信頼関係は問題なく、このメンバーの中では珍しく組んで力を発揮出来るタイプだ。

「ならば私はリゼットと組むとしようか。貴女はこのチームの生命線だから……一人くらいは護衛がいた方がいいだろう」

「助かります」

そしてセルはリゼットに付き、ヒルデガンも制御出来るのがリゼットだけなので必然的に彼女と組む事になる。

つまりここだけは二人組に見せかけた三人組だ。

第7宇宙の司令塔であり、生命線でもあるので最大の戦力が集まるのは必然の

事であつた。

「ところで、好きに動いて下さいとは言いましたが……最初の一手だけは私がやります。皆は巻き込まれないように私と共にいて下さい」

「ん？ 神様、何かやんのか？」

「ええ。私達は他の宇宙から集中砲火を浴びるのが目に見えています。

ならばいっそ、試合開始と同時に……まだ他の宇宙の態勢が整う前に……」

リゼットが全員に念話を飛ばし、次の手を伝える。

それを聞いた全員が頷き、大神官が開始を宣言した。

「力の大会！ 始め！」

「——速攻を仕掛けて、落とせるだけ落とします！」

大神官の開始宣言。それと同時に瞬間移動をし、第7宇宙全員が武舞台の中央へと転移した。

突然の移動に何人かが驚くが、遅い。

オーブニングヒットは第7宇宙が貰う。そして、同時にこれで一気に落ちて貰う。

リゼットが腕をクロスし、気を高めた。

狙うは——全方位！

「Hyper Dimension！」

リゼットを中心に、白い気が雷光を伴って全方位へと拡散した。

ハイパーディメンション——この技はリゼットを中心とした僅かな空間のみを完全空域とし、それ以外の全てに対して無差別攻撃を行う殲滅技だ。

しかも、かつてセルとの模擬戦で使った時よりも改良が加えられており、気だけではなく魔法による攻撃も重ねられていた。

これは、この大会のルールを聞いてからリゼットがまず最初に使うと決めていた技である。

一つの武舞台の上で総勢八十人が戦うバトルロイヤルと聞き、リゼットは真っ先に全方位を攻撃対象とした広範囲攻撃が必要であると考えた。

拡散する分威力は気弾や気功波に劣り、とても一对一の戦いでは使い物にならない。

それ故にリゼットは今まで、こういう全方位攻撃というものをあまり使いはしな

かった。

気の消耗が大きい上に威力が低いとなれば、使う意味がないからだ。

そういう意味では、かつて悟空との一对一の戦いでわざわざ全方位を対象とした攻撃を行ったピッコロは若かったという事なのだろう。

実際、彼はあの技が原因で気を消耗して悟空に逆転されてしまっている。

しかしバトルロイヤルとなれば話は変わる。

一对一の戦いなど望むべくもなく、戦いの最中に他の選手から奇襲されるかもしれない。

逃げ回る敵がいるかもしれない。隠れ続ける敵がいるかもしれない。狙撃してくる敵がいるかもしれない。罠を張る敵がいるかもしれない。

囲まれる可能性は常に考慮しなければならず、一对一の戦いを繰り返しては体力が保たない。

故にこそその全体攻撃。上下左右前後、その全てを攻撃対象として七十人の敵全てを駆逐する。

放たれた気と魔法の波動は、その圧力により空間すらも歪ませながら他の宇宙全

てに襲い掛かった。

この全方位攻撃に他の宇宙はほとんどの戦士が反応出来ず、弱い者は成すすべく吹き飛ばされて次々と武舞台から叩き落された。

第2宇宙は狙撃を得意とするハーミラと、飛行可能なビカル。

ヤードラット星人のジミズは瞬間移動をしても舞台全てが攻撃対象では何も出来ずに吹き飛び、気功波を跳ね返せるプランは第2宇宙の希望である乙女達を守ろうと我が身を盾にするも、技の中に気功波でも何でもない魔法が混じっていた為、その一撃でダウン。

計四人がこの先制攻撃で脱落した。

ザーロイン、ザーブト、ラバンラの男三人組はかろうじて脱落は免れるも満身創痍で失神。

実質上乙女三人のみを残しての全滅となった。

第3宇宙はニグリッシ、ナリラーマ、ザ・プリーチヨ、カトペスラの四人が何も出来ずに脱落。

ビアラは自慢の防御力で耐えきるも大ダメージを負い、ボラレータ、コイツカイ、

パンチアの三体は咄嗟にドクターパパロニを庇う事で、この初撃を僅か四人の犠牲で凌ぐという快挙を為した。

浅いダメージで済んだのはマジーカーヨだけだ。

第4宇宙は高い成長性を誇るガノスが成長の暇もなく吹き飛び、ショウサ、マジョラ、ダーコリの合計四人が脱落。

ここでファインプレーをしたのは女戦士モンナだ。

彼女は咄嗟に巨大化をする事で残る五人の戦士を守り抜き、被害を最小限に食い止めた。

ただし、その代償としてモンナ自身のダメージは決して軽いものではない。

第6宇宙は流石に強く、Dr・ロタ一人だけが『私が何故ドクターと呼ばれているか教えてやろう！』とか言いながら結局教える事が出来ずに脱落したものの、他は全員無事であった。

マゲッタが壁になり、ヒットが時飛ばしで弱いメンバーを救出したのも大きいだろう。

第9宇宙の被害は深刻だ。

『トリオ・デ・デンジャーズ』の三人がかろうじて耐えるも、それ以外の全員が叩き落とされてしまった。

この時点で第9宇宙は崖っぷちである。

第10宇宙ももう後がない。

ムリチム、ナパバ、オブニのエース格を除き、残る七人が揃って落とされた。このまさかの事態にゴワスとラムーシは啞然としている。

第11宇宙はジレンがノーダメージ。

トップとデイスポ、カーセラルも耐え、異空間を作り出せるココットもかろうじて耐えるも、他の五人が場外へと吹き飛んでしまった。

——合計32名。これが力の大会開始と同時に第7宇宙によって落とされた選手の数である。

敵の数70人とかちょっと多すぎて書ききれないんで、半分くらい落としておきますね。

とりあえず、ある程度の実力があるキャラ以外は全員サヨナラ！

リゼットのこの攻撃は相手を殺してしまわないように加減されたものですが、それでも「こいつ残っててもどうせすぐ落ちるだろ」と私が思ったキャラは容赦なく落としています。

ただ、プラン（気弾を跳ね返す奴）などの強者も一部紛れています。彼は乙女達を守るために犠牲になりました。

ちなみにリゼットが本気でこの攻撃を行っていた場合、ジレン、トップ、ヒット、ココットの4人しか残りません。

他は問答無用で全滅します。

ただし、これをやると亀仙人にも勝てないキャウエイちゃんとかが消し炭になってしまい、とても可愛そうで、リゼットも失格してしまうのでやりませんでした。あくまで加減した結果が→の数だと思って下さい。

ところでキャウエイちゃん可愛いですよね。

え？ 第2宇宙の乙女？

.....。

……まあ、デブ以外の二人はまだいいんじゃないですかね。

【RTA成功？】

最初に範囲攻撃をブチ込む事で敵を一気に減らした。

落とせる数はランダムだが、今回は運が腐って半数も落とせなかった。

ここで落とす数によってタイムが10秒以上変わる。

【真RTA】

まずヒルデガーンに乗って飛び、ヘブンズゲートで武舞台を消します。

すると一部の飛べるキャラ以外の全選手が脱落するので一瞬で勝てます。

しかしあまりに早く終わってしまうので全王が楽しめず、再走要求をされるので結果的にはタイムロスになります。

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン ザーブト

ラバンラ リブリアン

カクンサ ロージィ

第3宇宙

ビアラ ボラレータ

コイツカイ パンチア

パパロニ マジ||カーヨ

第4宇宙

モンナ シャンツア

ニンク キャウエイ

ガミサラス ダモン

第6宇宙

ヒット キャベ

カリフラ ケール

マゲツタ ボタモ

フロスト サオネル

ピリナ

第9宇宙

ベルガモ
ラベンダ

バジル

第10宇宙

ムリチム
ナパ
パ

オブニ

第11宇宙

ジレン
トッポ

デイスポ
カーセラル

ココット

第二百二十四話 猛攻、第7宇宙

「第7宇宙め、やりやがった！」

観客席で第4宇宙の破壊神であるキテラが叫んだその言葉は、他の宇宙全員の代弁でもあった。

開始と同時に仕掛ける——定石と言えば定石だ。決して珍しい手でも、想定しなかった手でもない。

だがこれは宇宙の存亡を賭けたバトルロイヤル。そんな目立つ真似をすれば他の宇宙全てに敵視されて集中砲火を浴びる危険があるし、相手側の能力によっては跳ね返される可能性だってあった。

だが第7宇宙はそれを意にもかけずに実行に移した。

これは即ち、他宇宙全てを敵に回そうと勝てるという自信……そして跳ね返されても対処出来る自信があればこそ。

故にこそ、この初手奇襲は参加宇宙全てに痛手となり、特にこれで半数以上を一気に落とされてしまった宇宙はやられたという言葉しか出て来ない。

特に第9宇宙の精神的ダメージは深刻だ。

何もかもが想定と違う。試合前に送り込んだ部隊を全滅させたあのピンクの魔人はどこに消えた。あの白い猫は？ 黒い男は？

第7宇宙の選手の何人かを暴いたとと思っていたのに、いざ蓋を開けてみれば出てきたのはあの巨大な化け物のみ。

何らかの不具合があつてあれ以外が出場出来なくなり、数合わせのメンバーを揃えたのかと最初は思った。

余裕で勝っているようで、実はあの魔人や猫もそれなりに消耗していたのかと期待した。

だが……もしかしたら、あれらは選手にすらなれなかった……二軍だったのではないか？

今武舞台にいる第7宇宙の十人は全員が、あれより強いのではないか？ そんな恐れが現実のものとなり、ロウとシドラは震えた。

しかし仕掛けた側であるリゼット達もまた、全てが上手くいったわけではなかった。

「落ちた数は32名……半分にも届きませんか。流石は宇宙の存亡を背負う者達ですわね」

「まあ、こんなものだろう。死者が出ないようにギリギリまで威力を抑え、吹き飛ばす事だけに力を注いだのではな。今のは魔人ブウ程度の力があれば耐えてしまえる攻撃だった」

リゼットの予想ではこれで半分以上は落としてしまえるはずであったが、流石にそれは相手を甘く見過ぎていたらしい。セルは予想通りといった顔で動揺すらしていない。

今放った攻撃は攻撃力をギリギリまで削り、吹き飛ばす為の衝撃のみに特化させた一撃だった。

それでも超サイヤ人に変身していない悟空くらいならば落とせる威力ではあったのだ。超サイヤ人以上でようやく耐えきれるか、というくらいだ。

これはかつて、界王神を恐れさせた魔人ブウがギリギリ耐えるかどうか、という威力だ。

戦闘のレベルが進んだ今、魔人ブウクラスですら今のリゼット達から見れば大し

た敵ではない。再生能力込みで悟空の超サイヤ人よりは若干手強いという程度の相手だ。

だがそれでも大昔には宇宙を滅ぼす手前まで行った最悪の魔人だ。そのくらいの強さでなければ耐える事すら出来ない衝撃波だった、と言えば決して弱い攻撃だなどと思うまい。

しかし、結果を見れば半分以上がまだ残ってしまっている。つまり残った者達の実力は魔人ブウと互角以上か、あるいは今の攻撃を凌げる特殊能力を持っているという事になる。

「どうします。今ので僕達全員、他の宇宙から睨まれていますよ」

「はっ、上等じゃねえか。残る敵の数は38人……つまり一人辺り3人か4人落とせばいいわけだ。楽勝だろ」

「残った連中は少しは骨もありそうだ。加減しなくていいってのは逆にやりやすいぜ」

悟飯は不安そうな声を出すか、しかしターレスとピッコロはまるで恐れていなかった。

何せここは戦闘狂ばかりを集めた第7宇宙チーム。大半は気にもしていない。むしろこれこそ望む戦場……全員が敵だというなら好都合だ。

第7宇宙は10人。他の宇宙は38人。数だけ見てもたかが三倍、四倍の差だ。

他の宇宙同士で手を組むなら勝手に組めばいいし、こちらを集中砲火したければするがいい。

悟飯を除く全員が、第7宇宙のみで他の全ての宇宙を倒すくらいの気でここに立っている。

「ここからは各自の自主性に委ねます。総員散開！」

リゼットの指示に応え、全員がそれぞれの敵を求めて走り出した。

まず悟空は一番近くにいた第9宇宙の犬のような宇宙人三人に目を付け、黄色の犬を蹴り飛ばす。

これに対し相手も即座に応戦。三人の連携で悟空へ猛攻を仕掛けるも、悟空はこれを的確にさばく。

通常状態のままであるが、戦況は悟空が圧倒的に優位だ。相手の攻撃を掠らせもせず、的確な反撃でダメージを与えつつ陣形を乱して連携をさせない。

悟空は決して相手を舐めて通常状態のまま戦っているのではない。

体力の消耗を最小限に抑える為に攻撃の一瞬のみ超化してすぐに戻っているのだ。

その変身が余りに速すぎて肉眼では捉えられず、まるで変身せずに戦っているように見えるだけだ。

「おのれ第7宇宙！ 我等『トリオ・デ・デンジャーズ』と一人で戦うつもりか！」
「まあな」

「舐めおって……！」

『トリオ・デ・デンジャーズ』は第9宇宙最強の三人だ。

長男、『潰しのベルガモ』。次男『毒のラベンダ』。そして三男『蹴りのバジル』の三兄弟で構成されるこのチームは個々の強さと、兄弟であるが故の連携の巧みさで掃き溜めのような第9宇宙で生き延び、界王神からも全幅の信頼を寄せられるま
でになった。

他の仲間達が一撃で落とされてしまった今、彼等三人が第9宇宙の希望だ。

彼等はそれを背負うに相応しい実力を持ち、界王神の期待に応えるべく全霊を賭

して悟空へと挑む。だが……。

「くっ、ぐ……っ！」

「この！」

ベルガモとバジルの攻撃を悟空は軽くないなし、隙を見て反撃で体力を削る。

ラベンダの攻撃は避け、触れる事すらさせない。

「くそ……当たりさえ、当たりさえすれば……！」

「おめえ、やっぱその手に何かあんな？ とにかく触ろうって魂胆が透けてんぞ」

ラベンダの能力は、その二つ名が示す通りの毒である。

毒を纏った腕で相手に触ればその部分から壊死させる事が可能で、触れたが最

後弱体化は避けられない。

だが悟空は天才的な戦闘の勘でラベンダの持つ危険性を感知し、彼の攻撃だけは回避していた。

「悪イが落ちてもらうぞ」

特殊能力持ちというのは、時に戦闘力差をひっくり返す。

これが1対1の戦いであればあえて受ける事かもしれないが、しかしこ

れは宇宙の未来を左右する戦いだ。

ならば舐めはしない。油断もしない。

どれほど強力な能力なのかを見てみたい気がしないでもないが、それで負けていては宇宙の皆に申し訳が立たない。故に、ここは全力で叩き落す。

悟空の蹴りがラベンダに突き刺さり、インパクトの瞬間のみブルーへと変身した。その一撃でラベンダが場外へと吹き飛び、背後から強襲しようとしたバジルをも裏拳で殴り飛ばして場外へ落とす。

その余りに圧倒的な差にベルガモは慄くばかりだ。

「勿体ねえな……こんな大会じゃなければよ、もっと楽しんで戦えたのにな」
本当はもっと、彼等の実力を引き出して戦いたかった。勝ち負け関係なく楽しみたかった。

だが、今回だけはそれが出来ない。

いくら悟空でも自分の楽しみと宇宙の命運を天秤にかけるような馬鹿な真似はしない。自分の戦いなどよりも大事な物がある事くらい分かっている。

……いや、本当を言えばこの戦い自体決して好意的に見てはいないのだ。

全王は決して悪人の類ではないと分かっているが、しかし自分の気分一つで罪のない宇宙を消そうとする行為に不信感を感じてない訳ではない。

だから超ドラゴンボールを使えるならば、消された宇宙の復活を願うつもりだし、もしもそれすら許されないならば——大神官が相手だろうと立ち向かい、全王に納得させる。その決意を既に固めている。

「お、俺は……俺は負けるわけにはいかないんだ！」

生き延びてやる！ 絶対に、俺達第9宇宙が生き延びてやるんだあああ！」

「……やりにくいな、本当によ」

戦闘を心より楽しめるはずの悟空が、今回ばかりは全く楽しめない。

だがそれでも勝たなければならない。勝利しなければ僅かな可能性すら繋げる事が出来ないのだ。

「ウホッ、男前。やらないか」

第4宇宙を相手取ったベジータの前に立ち塞がったのはニンクという巨漢の男であった。

青緑の肌をした男で、どことなく危険な香りがする。

流石のベジータも相手の放つ異様な雰囲気のにまれ、なかなか近付けない。

「強いお前が好きだ。一緒に天国にイこうぜ」

「き、気持ちの悪い奴だ……」

ニンクがベジータへと急接近し、ベジータも超サイヤ人と化して迎え撃つ。

実力は互角。スピードではベジータが勝るが、ニンクは見た目通りのパワーと耐久力を併せ持ち、なかなか厄介だ。

ベジータの拳が炸裂し、蹴りが胸板を叩く。

だがニンクはまるで怯む様子を見せない。

「っちゃあああ！　だだだだだだ！」

「ああ、いいぞ……次は気功波だ」

「くそつたれええええ！」

「くそみそでヤルってのも悪くないぜ」

こいつは嫌だ。何かよく説明出来ないが、あまり戦いたくない。

その思考がベジータの動きを鈍らせたのだらう。

もう二度と会いたくない……ベジータは心からそう思った。

ミラが相手と決めたのは最も多くの選手を残す第6宇宙であった。いや、第6宇宙というよりはその中の一人へと狙いを定めたのだ。

ヒットとミラの視線が交差し、一瞬で互いを強敵と認識する。

だがその間に、キャベとカリフラが割り込んだ。

「やらせません！」

「あんま調子に乗るなよ、第7宇宙！」

二人は超サイヤ人と化し、ミラへと飛びかかる。

だがミラもまた超サイヤ人を上回る力の持ち主だ。

変身すらせずに二人を同時に渡り合い、圧倒する。

ミラはかつて数多の時空を渡り、タイムパトローラーであるトランクスやバーダックと戦い、様々な時代の悟空やベジータとも戦ってきた強者だ。

カリフラとキャベの潜在能力がいかに凄まじいものだろうと、超サイヤ人を覚えただばかりの二人で手に負える存在ではない。

「惜しいな。お前達ならばもう少し経験を積みれば本気の俺とも戦える戦士となれただろう」

ミラは二人の秘めたる力を賞賛し、同時に勿体無く思った。

こんな大会で出会いたくなかった。

負けたら全王に消されるという、そんな大会などで戦いたくなかった。

彼等には未来がある。可能性がある。

ここで終わらなければ、きっといつか、自分すらも脅かしてくれるだろうという確信がある。

だからこそ、心底惜しい。

だがこれは負けが許されない戦いだ。故に二人を叩き落そうと拳を振り上げ――。

「ッ!!」

危険を感じ、咄嗟にガードをした腕の上から衝撃が走る。

身体ごと吹き飛ばされながらも着地したミラが見たのは拳を突き出した姿勢のヒットだ。

「ヒットさん！」

「下がれ。こいつはお前達の勝てる相手ではない」

声をあげるキャベに冷徹とも思える事実を言い、ヒットは静かに構えた。

それに対しミラは口の端を吊り上げて同じく構えを取り、変身。

元々青い肌の色は空のような清んだ青色へと変わり、髪が伸び、白い体毛が肩や腕を覆った。

いきなり出し惜しみ無しの全力だ。このヒットという男は本気で挑むに値する。

「有り難い。お前の方から来てくれるとは」

「……第7宇宙は随分と手練ればかりを集めて来たようだな」

膨れ上がったミラの氣にヒットが警戒心を強め、二人の実力者が正面から衝突した。

だが第6宇宙へ攻撃を仕掛けているのはミラだけではない。

キャベとカリフラの頭上を通過し、フロストが吹き飛んで場外へと落ちる。

元々フロストはこの大会に出る前から既に心が折れており、ほとんどやる気を見せていなかったのが当然の末路といえはそれまでなのだが……それでもかつては第6宇宙最強の拳闘士とまで呼ばれた男なのだ。決して弱くはない。

咄嗟に振り返れば、そこには神と融合した新生ピッコロと悟飯が立っていた。

「余所見している暇はないぞ。次はお前達だ」

「ちい！」

ピッコロへとカリフラ、キャベ、更にマゲッタとボタモが一斉に飛び掛かる。

だがピッコロはまずボタモへと狙いを定め、軽く蹴りを叩き込んだ。

ボタモはダメージを受けない特異体質だが、そんなのは関係ない。

ダメージにならなくても攻撃されれば威力に応じて吹き飛ばし、身体も浮く。

そして今のピッコロは界王拳と超サイヤ人ブルーを組み合わせた悟空以上の力を常に発揮し続ける第7宇宙のエースなのだ。

圧倒的なパワーでダメージを受けないはずのボタモを場外へ飛ばし、勢い余ってボタモは観客席に衝突した。

場外負けのないルールならばもっと活躍出来るだろうに、相変わらずルールに恵まれない熊だ。

ボタモを落として更にキャベへと狙いを定める。

彼を問答無用で蹴り、咄嗟に直撃を避けたはずのキャベが吹き飛んでいく。

「うわああああっ!? か、掠っただけなのに……!」

それでも尚キャベは体勢を立て直そうとするが、そんな彼の真上に突然現れたセルが追い打ちの蹴りを放って無理矢理退場させた。

「おっと失礼。ぶつかってしまったようだ」

ピッコロは思わずリゼットの方を見た。セルはそちらの護衛ではなかったのか? そう思うも、そこにもセルはいた。決して彼女の側を離れたわけではない。

リゼットは第4宇宙のシャンツァ、キャウエイ、ガミサラスの三人から集中攻撃を受けている。

マスコットのような小さな宇宙人——シャンツァが幻影を作り、その幻影を隠れ蓑にしてキャウエイと透明人間のガミサラスが仕掛けるというコンビプレーだ。

だが近くのセルが助ける様子はなく、そもそも助ける必要性すらない。

気の感知を極限まで極めたりゼットは容易くシャンツァの位置を特定してまず彼を気合い砲で吹き飛ばして脱落させ、続いてガミサラスが攻撃に移る際に僅かに発してしまった気を感じて防衛。

そのままガミサラスの腕を獲り、当て身投げにて場外に投げ飛ばした。

残されたキャウエイは気を武器化してリゼットへと挑むが、気の武器化ならばリゼットも得意とする事だ。

キャウエイよりも素早く、より強固に創り出された光剣がキャウエイの武器を弾き飛ばして戦意喪失させてしまった。

キャウエイは気の間操作という点ではセンスがあるのだが、残念ながら基礎的な力が低すぎて話にならない。

……というか気が少なすぎて亀仙人にすら勝てるか怪しい。何で第4宇宙はこんな可愛いだけで弱いのを連れてきてしまったのだろう。

戦意を喪失してへたりこむキャウエイを放置し、リゼットは別の敵を落とすべく移動を開始した。

その後にはセル（本体）が影のように付き添っている。

「四身の拳か」

リゼットの近くにいたセルを見て、ピッコロが呆れたように言う。

「ご名答。残る二人の私も他の場所でサポートを行っている」

飛行可能な上に多彩な技を持ち、オマケに増える。更にオリジナルの天津飯と

違って増えても弱体化はしない。とんだ反則性能だ。

つくづく、こいつが味方でよかったと思いいながらピッコロはおもむろに何かを掴んだ。

「な、何故分かった……!？」

ピッコロの手の中にいるのは第4宇宙の選手、昆虫人間のダモンだ。

彼は気の大きさと実際の身体のサイズが違うという特徴を持ち、気の感知に頼っている者ほど位置を特定するのが困難だ。

しかし狙った相手が悪すぎる。彼はまず、ピッコロ以外を狙うべきであった。

「へっ、生憎とナメック星人の耳は貴様等とは出来が違うんでな」

ナメック星人は遙か遠くの会話すら聞く事が出来るほどに聴力に優れている。

その彼の耳をもってすれば、己に接近する小さな襲撃者を感知するなど造作もない。

……もっとも、仮にリゼットを狙ったところでダモンではどうしようもなかっただろうが。

ピッコロはダモンを武舞台の外に捨てて脱落させ、次にマゲッタを狙う。

マゲツタは強く、重く、そして硬い。手強い相手には違いないのだが、しかしこれでも相手が悪かった。

「うわたあああアァ！」

強い、硬い、重い。だからどうした。

ならばこちらは更に強く、更に硬く、更に重い拳を放てばいい。

何の小細工もないピッコロの拳がマゲツタをガードの上から殴り、10000トンを超える超重量の身体が軽々と吹き飛んでいく。

「ば、化け物だあああああ!？」

思わずシャンパが叫ぶ中、マゲツタまでもが呆気なく脱落してしまった。

その隙を突くようにピッコロの背中に気功波が着弾した。

それを撃ったのはカリフラだ。

彼女は確かな手応えを感じ、勝ち誇ったように笑う。

「へへん、ざまあみやがれ！ 油断しやがったな！」

煙の中で今頃は倒れているだろう相手へ、嘲笑を飛ばす。

だがすぐにその笑みは凍り付く事となった。

煙が晴れた時、そこに立っていたのは全く無傷のピッコロだったからだ。

「思い切りのいい攻撃だ。だが残念だったな」

ピッコロはカリフラのセンスを誉め、それから一瞬で間合いを潰して腹を殴った。殺さないように加減したが、それでもカリフラを行動不能にするには十分な一撃だ。

彼女は呆気なく地面に崩れ落ち、超化が解けてしまった。

「あ、姐さん……よくも……よくも姐さんをオオオ!!」

姉貴分であるカリフラが倒れるのを見て、ケールが怒りを爆発させた。

まるで戦いに向いていない気弱そうな女と思っていたが、これにはピッコロとセルも僅かな驚きを見せる。

その気の爆発はかつて戦ったブローリーを彷彿とさせるもので、彼等が見ている前でケールは瞬く間に筋肉の塊となってピッコロすら上回る巨体と化す。

恐らくは怒りで基本戦闘力そのものを爆発的に上昇させたのだろう。そのパワーはセルを上回っている。

勿論セルも本気ではなく、燃費の悪い超サイヤ人3に相当する変身をしていな

いだけなのだが……それでも驚くべき強さだ。

だがそんな彼女を前にセルは、ただ不敵に笑った。

「なるほど……確かに素晴らしいパワーだ。」

この私を遥かに上回っている……パワーだけはな。

だがそれだけだ。それでは私に勝つ事は出来ん」

ここまでに落ちた選手は42名。

試合開始僅か2分にして半数が消え、残る選手は第7宇宙を含めて38名となった。

シャンパ「……………なあ、あのナメック星人、前回いなかったよな」

ヴァドス「いませんでしたね」

シャンパ「……あれ、やばいくらい強くね？」

ヴァドス「単純な強さならば恐らく破壊神とも戦えるレベルかと」

シャンパ「第7宇宙どんだけ狂ってんだよ……ビルス仕事しろよ……」

【戦闘力】

・カリフラ…9億6000万

超サイヤ人…480億

超サイヤ人2…960億

・ケール…20億（怒りで基礎能力大幅上昇）

伝説の超サイヤ人2（パワー重視）…6400億

※伝説の超サイヤ人2になった上で更にムキンクスのように筋力完全重視となった姿。

悟空がゴッドではなくブルーに変身するほどの強さで、舐めプ状態のブルー相手なら圧倒する。

ケールの変身は伝説の超サイヤ人2の上から更にムキンクスを加え、320倍という結構やばい倍率にしました。

これは漫画版でケールの変身はパワーは凄いがスピードは大した事がないというムキンクスと同じ扱いを受けていたからです。

なのでパワーはブロリーの超2すら超えますが、その分スピードがないです。

後、ブローリーと違って普通に疲れる描写もあり、戦えば戦うほど強くなるとか、そんな意味の分からない特性はありません。有情です。

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン

ザーブト

ラバンラ

リブリアン

カクンサ

ロージィ

第3宇宙

ビアラ

ボラレータ

コイツカイ

パンチア

パ
パ
ロ
ニ

マ
ジ
||
カ
ー
ヨ

第
4
宇
宙

モ
ン
ナ

キ
ャ
ウ
エ
イ

第
6
宇
宙

ヒ
ツ
ト

ケ
ー
ル

カ
リ
フ
ラ

サ
オ
ネ
ル

ピ
リ
ナ

第
9
宇
宙

ベ
ル
ガ
モ

第
10
宇
宙

ム
リ
チ
ム

ナ
パ
パオ
ブ
ニ第
11
宇
宙ジ
レ
ント
ッ
ポデ
ィ
ス
ポカ
ー
セ
ラ
ルコ
コ
ッ
ト

第二百二十五話 強者達の戦い

大神官「第2宇宙ハーミラさん、ビカルさん、ジームズさん、プランさん、脱
落
で
ご
ざ
い
ま
す。」

続いては第3宇宙……」

全王「えー、わかんないよー。もっとゆっくり言ってー」

大神官「……………」

第2宇宙ハーミラさん脱落でございます。第2宇宙ビカルさん脱落でござい
ま
す。第2宇宙ジームズさん脱落でございます。第2宇宙プランさん脱落でござい
ま
す。

第3宇宙ニグリッシさん脱落でございます。第3宇宙ナリラーマさん脱落でこ
ざ
い
ま
す。第3宇宙ザ・プリーチョさん脱落でございます。第3宇宙カトペスラ
さ
ん……」

側近（頑張れ……大神官様……！）

「よくも姐さんをオオオ!!」

カリフラが敗れた事で怒りに覚醒したケールが気を迸らせながら襲い掛かる。その前にセルが立ち塞がり、ケールの拳を受け流した。

ケールの狙いはピッコロだが、この程度ならば分身体のセルで十分あしらえるという判断だ。

仮に負けてもこのセルは四身の拳で出した分身なので痛くも痒くもない。

「おい！ 何か第7宇宙の奴、増えてんぞ！ あれいいのかよ!? 反則じゃねーの!?!」

「あれは技なので反則にはなりません」

「チクシヨオオオオ！」

いつの間にか四人に増えていたセルにシャンパが抗議するが、無情にも大神官に切り捨てられてしまった。

確かに選手の数は一十人だ。ルールでそう決められている。

だが十人のうちの一人が増えてはいけないとは、確かに言われていない。

「殺す！」

「ふん……青い奴め」

ケールとセルが衝突し、衝撃波が発生する。

伝説の超サイヤ人はパワーを増幅させ、筋肉を肥大させながらスピードも落とさないという変身だ。

その圧倒的な力の前に、かつてリゼット達は全滅寸前まで追い込まれ、セル自身も敗北を喫している。

そしてケールは更にそこから超サイヤ人2へ位階を上げ、しかもパワーを更に高めた変身を行っている。

だがセルがブロリーに敗れたのは、13年も前の話。いかに伝説といえど、今となつては超サイヤ人のバリエーションの一つでしかない。

ケールとセルが超高速の打撃戦を展開し、目まぐるしく立ち位置を変えながら火花を散らす。

ケールの拳を受け流し、逸らし、隙を見て身体的位置を反転させて攻守交替。

今度はセルが猛攻を仕掛けるが、ケールは多少のダメージなど気にせず強引に攻勢へと出て再びセルが守勢に回る。

一見互角の戦い……だが、ケールは着実にダメージが積み重なっているのに対し、セルは無傷に近い。

決してケールが戦闘力で劣っているわけではない。むしろ勝っている。

ここにいるセルは所詮分身だ。燃費の悪い超サイヤ人3相当の変身はまだ見せていない。

パワー、タフネス、気……その全てにおいてケールは分身セルを圧倒的に凌駕している。

だがいかに強かろうが当たらなければ意味はなく、力を利用してカウンターを取られては無意味を通り越して逆効果だ。

いかに頑丈だろうが避ける事をしないのでは当て放題で、一撃ごとのダメージが少なからうが、それが積み重なれば疲弊していく。

肥大した筋肉のせいでスピードは殺され、体力の消耗も馬鹿に出来ない。

理性を失っているせいで動きはひたすら直線的で、目を閉じていても当たる気が

しない。

要するに下手糞なのだ、闘い方が。

「パワーは凄まじい……あのブロリーよりも上かもしれない。

だが違うな。似ているが、やはり違う」

ケールの無秩序な力を受け流しながら、セルは既にその攻撃パターンを見切っていた。

単調だ……本当に、全くもって単調に過ぎる。

これでは、ただキレているだけ。凶暴性との完全な融合が果たされていたあのブロリーの恐ろしさはない。

ケールのは単なる暴走だ。決してこの凶暴性が素というわけではない。

元々ああいう性格だったのを無理矢理制御していただけのブロリーとは根本的に異なっている。

これでは残念ながら、本物には程遠い。

セルの蹴りがケールの腹にめり込み、未成熟な伝説を跳ね上げる。

その先に回り込み、そしてセルは肘を振り上げた。

「その変化を完全に物にしてから出直すといい。

そうすれば、お前はあのブローリをも超えるかもしれない」

彼女の可能性は広大だ。まるで海のように底が見えない。

その可能性を完全に開花させたならば、あるいはこちらが負けたかもしれない。だがとりあえず、この場での勝利はこちらのものだ。

「はあっ！」

セルの肘がケールの背中にめり込み、下へと叩き落す。

しかしケールを咄嗟に受け止める影があった。

それは気を失っていると思われたカリフラだ。

流星にサイヤ人というべきか……打たれ強く、復帰が速い。

「あ、姐さん……」

「ケール、無事か!？」

ケールも一応、まだ意識はあるらしい。

変身は解けてしまっているが、第6宇宙でもサイヤ人の異常な打たれ強さは健在という事か。

とはいえ、どちらもセルとピッコロの相手ではない。

ただ、落ちるまでの時間がほんの少し延びたに過ぎない。

ただしそれは、このままならば……だ。

「カリフラ！ そのままじゃ勝ち目がねえ！ 俺が渡したアレを使うんだ！」

「分かってる！」

シャンパの指示に応え、カリフラは自分とケールの耳に何かを付け始めた。

カリフラにとって幸運だったのは、ピッコロとセルがそれを知らなかった事だ。

その道具はポタラといい、界王神の切り札とも言うべきアイテムだ。

その効果は二人の戦士を融合させるというもので、いわば簡単に出来るフュージョンとっていい。

しかもフュージョンのように無駄なポーズを取る必要はなく、失敗する事もない。更に二人の戦闘力が同じでなくても合体出来ると、いい事尽くしだ。

この効果を知っていれば止めただろうが、しかしセルとピッコロはポタラの存在を知らなかった。

ここにいるのがリゼットならば、たとえばポタラを知らずとも『何だかよく分かり

ませんが喰らえ！』と攻撃に移行しただろうが、しかし二人はとりあえず様子見を選択した。

結果、ポタラによる融合を見送ってしまい、ここにケールとカリフラの合体戦士『ケフラ』が誕生した。

「ヒャッハー！　すげえぜ！　パワーが漲ってくる！」

現れたのはケールとカリフラを足して2で割ったような女戦士だ。

いや、カリフラの要素の方がやや強めだろうか。

しかし感じられる強さは二人の戦力の足し算ではなく、何十倍にも膨れ上がっている。

ケフラが己のパワーに喜び、ピッコロとセルは流石にこれには驚いた。

一方ビルスは道具の使用は反則だと怒っているが、全王が『面白いからいいのね』と言ってしまった事で沈黙した。

「合体か」

「これは凄まじいな。先程までとは比べものにならないパワーだ」

驚きを見せつつも、ピッコロとセルに動揺はない。

確かにパワーアップした。だがそれがどうした、という顔だ。

流石にこれには腹が立ったのか、ケフラは超サイヤ人へと変身する。

「へ……その余裕面、いつまで続くかな!？」

ケフラが吠え、ピッコロへと突進した。

そしてスパークを迸らせながら拳を放ち――。

あっさりと、ピッコロに受け止められていた。

「んなっ!？」

ケフラが驚き、慌てて腕に力を込める。

だがピッコロに掴まれた拳は微動だにせず、逃れる事が出来ない。

それどころかピッコロが掌に力を込めるだけで、ケフラの拳に耐えがたい痛みが

走った。

「ぐあああああ……! この!」

ケフラが痛みを堪えながら蹴りを放つ。

だがピッコロはこれを冷静にブロックし、反撃の拳をケフラの腹へめり込ませる。

たった一撃でケフラが崩れ、足が震えた。

「……おい。ポタラって二人の強さを単純に足したんじゃないくて、比べものにならないくらい凄い強くなるんじゃないかったのか？」

「そのはずですわ、シャンパ様」

「じゃあ何で全然勝てねーんだよ。まるで相手になってねーじゃねーか……」

「簡単ですわ、シャンパ様。あのナメック星人が更に比べ物にならないくらい強いのです」

「……………もうやだ、あの宇宙」

絶望するシャンパのしている前でピッコロが再度拳をケフラの腹に叩き込み、失神させてしまった。

それから無造作に武舞台の外へ放り投げ、合体戦士を無情に脱落させてしまう。融合戦士など、こちらは最初から用意しているのだ。

二度と戻らぬ覚悟で融合した今のピッコロに、半端な融合戦士が勝てるものか。少しだけ心配そうにこちらを見ていたりゼットに気付き、ピッコロは茶目っ気の感じられる笑みを向ける。

リゼットはそこに、居なくなってしまった先代の姿を見た気がした。

★

「戦士達ー！ 注目！」

戦いの最中、武舞台に少女の声が響いた。

全員がそちらへ視線を向ければ、高台の上に立つ少女三人の姿が目に入る。

中央に立つのは桃色の服を着た緑髪の少女。

左に立つのは青いドレスの茶髪の少女。

右に立つのは黄色のコートを羽織ったベレー帽が似合う青髪の少女。

いずれも美少女と呼んで間違いのない容姿だ。

「んー！ 時は来た！」

第2宇宙の界王神であるペルが拳を握って興奮する。

更に同じく第2宇宙の破壊神であり、クレオパトラを思わせる姿のヘレスが大仰な動作で手を振り上げた。

「今こそ戦場に可憐な花が咲く！」

ヘレスとペルはこれから行われる、己の宇宙の戦士の晴れ舞台を心待ちにしていた。

故にこそ彼女達は気付かない。

この時、既に何人かが攻撃の準備へ移行していた事を。

「咲かせましょう、響かせましょう、愛と勝利の歌を！」

三人の少女達がキラキラとした光を纏い、まるで躍るかのようにポーズを決める。まるで魔法少女物の変身シーンを思わせる姿に、戦士達も呆気にとられた。

「ブリアンブリアンブリアン！ ブリブリブリ……」

華麗なる変身シーンの最中——白い戦乙女が十体、同時に少女達へと突撃した。爆炎があがり、そこに畳み掛けるように複数の気功波が炸裂。変身すらさせずに少女達を観客席へ直送した。

まさかのお約束無視に破壊神ヘレスが「無粋な！」と叫び、少女達のリーダーであるブリアンデシャトーが立ちあがって武舞台へと文句を飛ばした。

「ちよっと何すんのよ第7宇宙！ 変身にはプロセスの全部に意味があるのよ！ 邪魔するとかありえない！」

文句の矛先は真っ先に攻撃した存在……リゼットへと向けられた。

初手の先制攻撃はともかくとして、その服装から同好の士だと思っていたのに、

とんだ裏切りだ。

しかしリゼットはその外見とは裏腹に、戦闘においては割とガチな方である。相手の顔の皮を剥いだり股間を蹴り潰したり、目玉を潰したり、耳を千切ったり、喉仏を切断したりとかなりえぐい攻撃も行うタイプであり、魔法少女からはある意味最も縁遠い外見詐欺だ。

見た目は魔法少女の最終ドレスフォーム、中身はグラップラー。リゼットとはそういう存在であった。

「いや、それは邪魔するでしょう。敵が強くなるのを待つとか、ちょっと意味が分かりません」

リゼットにとって、ここで攻撃をしないという選択肢こそなかった。

1、敵は隙だらけ。

2、敵は変身中。

3、変身が終われば多分パワーアップする。

4、この戦いは負けたら宇宙が消える

改めて考えても、やはり攻撃しない理由が何処にもない。むしろ何故攻撃されな

いと思ったのか……。

そして、それは他の攻撃した面子も同様であった。

「悪い、悪い。あんまり隙だらけだったもんだからつい……どうでもいいけど、おめえら油断しすぎなんじゃねえか？」

とは悟空。

「下らん。防げない方が悪い」

とベジータが吐き捨てる。

「貴様等、武闘会と舞踏会を間違えてるんじゃないか？　ここは戦場であって、躍る場所じゃねえ」

ターレスはむしろ乙女達のふざけた態度にこそ苛立っているようだ。

「いや、すまない。私はてっきりわざと隙を見せる事で攻撃を誘っていると思い、あえて乗ってみたのだがね……いや誤算だった。わざわざ注目まで集めておいて、まさか本当に攻撃されないと思って隙を晒す気楽な輩がいるなどと思いもしなかったのだ。許してくれ。」

ところでこれは、余計なアドバイスかもしれないが変身するなら、せめてバリア

くらい張っておく事をお勧めしよう」

セルは完全に分かってやっているのか、挑発するように皮肉交じりで謝罪をする。攻撃を仕掛けたのは以上の五名、リゼット、悟空、ベジータ、ターレス、セルであつた。

この五人からの一斉砲撃などを受けては、それは変身前の少女達が耐えきれぬはずがない。

脱落は必然の事だったと言えるだろう。

「くう……！ あ、貴女は！ 貴女だけは分かってくれると思つてたのに！」

「あの、何で私は同類扱いされてるんですかね……」

「ククク……外見のせいではないか？」

ブリアンデシャトーから謎の同類扱いを受けている事にリゼットが困惑し、セルが可笑しそうに笑う。

ここで改めてリゼットの外見を再確認するが、彼女は白金の髪を膝まで伸ばした外見年齢14歳の美少女である。

服装は白いケープ付きのドレスで、頭には天使の羽を模した髪飾り。

なるほど、向こう側と間違われても仕方がない。

「……っ」

げんなりしつつも、リゼットの意識は決して戦闘から離れてはいない。

何かに気付いたように頭上へ視線を向ける。

そこでは二つの影が超高速で衝突しながら駆け回っていた。

空を飛べないルールだが、思えば『彼』にはセルやヒルデガン同様に翼がある。

驚くべきはむしろ、宙を蹴りながらそれと互角に戦っているもう片方の方だろう。リゼットの頭上を飛び越え、二つの影が交差した。

片方は第11宇宙、プライドトルーパーズの『超速』のディスプレイ。

片方は第7宇宙、邪悪龍の一人である四星龍。

共にスピードを信条とする戦士同士、相手に何か感じるものがあつたのだろう。二人はまるで最初から示し合わせていたかのように、互いを倒すべき敵と見なし、ぶつかっていた。

紅と紫の影が武舞台の上を縦横無尽に駆け回り、弱者には残像すら捉えさせない。尻もちをついて戦意喪失しているキャウエイでは目で追う事も出来ないだろう。

「やるな！ この俺のスピードについてくるとは！」

「ふっ……そちらこそ！ 超速と名乗っているのは伊達ではないようだな！」

常人では反応すら出来ない超速の世界で男が二人、互いを認めて笑い合う。

ほとんど瞬間移動にも等しい速度でぶつかり合い、武舞台のあちこちで砂塵が舞う。

戦闘はほぼ互角……その光景に第11宇宙の界王神であるカイと破壊神のベルモッドは息を呑んだ。

「信じられない。ディスポとスピードで渡り合う戦士がいるなんて……」

「負けるな、ディスポ！ 第11宇宙一のスピードを見せてやれ！」

ディスポと四星龍の戦いはいわば、第11宇宙と第7宇宙のスピードスター対決だ。

両者共に宇宙一のスピードを誇る者同士の戦いであり、ならばこの戦いは全宇宙最速決定戦と言っても過言ではない。

だがスピードが互角ならばパワーの差が物を言う。

四星龍とディスポの拳が衝突し、ディスポが一方的に弾き飛ばされた。

「な、何だこいつのパワーは!？」

デイスポはスピードに全てを懸けている分、速さが通じなくなった時に弱さを露呈してしまう。

気付けば次第に均衡が崩れ、四星龍の拳が命中するようになっていた。

しかしデイスポもここで退くわけにはいかない。

彼等プライドトルーパーズは宇宙の命運を背負ってここに立っているのだ。

ならばこの身体が塵になろうとも、足を止めるわけにはいかないのだ。

「まだだ! まだ俺のスピードはこんなもんじゃない!」

デイスポの全身を紫のオーラが包み、更に速度が上がった。

『最高速モード』——気の全てを速度の上昇に充てる事で実現するデイスポの切り札だ。

そのスピードは超サイヤ人ブルーの悟空やゴールデンフリーザでさえも見切る事は出来ないだろう。

紫の影が駆け回り、四星龍を四方八方から打ちのめす。

一撃ごとに四星龍の体表が砕け、割れ、破片が地面に散らばっていく。

「よし、いいぞ……いけ！ いけえ！」

デイスポの優勢にベルモッドが拳を握って声援を送る。

だがカイは素直に喜ぶ事が出来なかった。

あれだけ打ちのめされているというのに第7宇宙の選手が誰も四星龍の心配を
していない。

そればかりかビルスに至っては腕組みをしたまま、余裕の笑みを浮かべているで
はないか。

何よりおかしいのは、四星龍の気がまるで減っておらず……いや、これはむしろ
増えている？

四星龍の紅の体表が次々と剥がれ、中から黄金の身体が姿を現していく。

それを見てカイはようやく、敵がまだ本気ではなかった事を悟った。

「見事な強さだ……ならば俺もここから先は本気で行くぞ！」

四星龍が吠え、その全身を灼熱の気が覆いつくした。

今まで皮膚と思われていた紅の外郭が剥がれ落ち、黄金に輝く本体がそのベール
を脱ぐ。

デイスポが今まで必死で剥がしていたものは四星龍の身体ではない。彼の溢れ出る熱エネルギーを抑え込むための制御膜に過ぎなかった。

いよいよ本気を出した四星龍の放つ熱だけで景色が揺らめき、あまりの熱さにデイスポは思わず後ずさる。

それでも意を決して拳を顔面に叩き込んだ――が。

「ぐあああつ、ああああああ！」

悲鳴を上げたのは、攻撃をしたデイスポであった。

それも仕方のない事だ。

何故なら、四星龍に打ち込んだ拳がアろう事か焼けてしまっているのだから。むしろ焼けただけで済んでいる辺り、彼の並外れた耐久力が窺えるというものだ。

「俺に拳で挑むのは無謀だぞ、第11宇宙の戦士よ。」

俺の身体は太陽の表面温度と同じ6000度まで上げる事が出来る。

お前がいかに速くとも、俺に触れるだけでお前の身体は焼け、崩れていく」

「な、なんだと……そんなふざけた事が……」

相性最悪……そう言う他ないだろう。

デイスポは気の全てを速度上昇に充てており、故に彼の攻撃はスピードを活かした打撃が主だ。

気弾系も使えないわけではないが、悲しいほどに威力が低い。

追いつめられたデイスポは一瞬、無意識のうちにジレンを見ていた。

ジレンは……動く気配がない。

ただ静かに佇んでおり、その視線は第7宇宙の中心と思われる女と、孫悟空という武道家へ向けられている。

初めから仲間に頼る気がない。頼らせる気もない。

共に舞台上上がっていてもジレンはずっと一人だ。一人で戦っているつもりだし、実際に一人でも彼は戦える。

同じプライドトルーパーズであっても本質的な部分でジレンは誰も信じていない。

（俺達が……弱いからだ……ッ！）

デイスポはジレンから視線を逸らし、四星龍を真っすぐに見た。

そうだ、彼が仲間を信じられないのは誰も彼についていけないからだ。

自分達が弱いからだ。

だが、ジレンに知って欲しい。

お前は一人ではないと。俺達がいるんだと。

たとえ及ばずとも、自分達はジレンの仲間なのだ。

だからこそ、ジレンの隣に立つ為にも、こんな所で負けるわけにはいかないのだ。

「舐めるなよ、第7宇宙！ その程度でこのデイスポ様が怯むかあああ！」

デイスポが再び駆け、四星龍へ打撃の嵐を叩き込む。

一発ごとに肉が焼け、嫌な臭いが立ち込める。

だがデイスポは止まらない。

こんな身体の痛みなど何でもない。

ジレンの隣に立てない自分の弱さこそが……心こそが、何よりも痛いのだ。

「いい覚悟だ……だが、これ以上続けられればお前の命はないぞ」

「上等オ！ だったらお前を失格で巻き添えにしてやる！」

攻防はほぼ互角だ。

デイスポはスピードで圧倒しているが、四星龍も速さには自信がある。

多少劣るけれど、防御くらいは十分に間に合う。

そしてパワーでは四星龍が勝り、互角の攻防を繰り広げていた。

だが互角では駄目だ。何故なら防御さえ間に合えば、それが四星龍の攻撃となるのだから。

四星龍に触れるという事は太陽に触れるも同じだ。

ガードに阻まれるだけでディスポの手足が焼け、炭化していく。

「戦士の気概、見せてもらった。だが残念ながらそれは出来ん。

何故なら、お前はこの一撃で落ちるからだ！」

四星龍の身体が輝き、炎が全方位に広がった。

己の熱エネルギーを周囲に放つ『フレイムフィールド』の前では逃げ場などない。

ましてやダメージの深いディスポならば尚の事だろう。

彼は四星龍の放つ熱に吞まれ、無念の叫びをあげながら吹き飛ばされた。

「ちくしょおおおおッ!!」

吹き飛び、落ちる一瞬……ジレンと目が合った。

だがジレンはまるで興味がなかったかのようにディスポから視線を逸らして腕を組

む。

そんな彼の背中を見ながら、デイスポは小さな声で詫びた。

「……すまねえな、ジレン……頼りにならねえ仲間、でよ……」

そして宇宙最速の戦士は、舞台から消えた。

残る選手は、後32名。

【戦闘力】

・ケフラ…888億

超サイヤ人2…8兆8800億

・デイスポ…2000億

最高速モード…1兆

※スピード極振りなので戦闘力の割にパワーはクッソ低い。

ただ、とにかく速いので格上相手だろうとスピードで圧倒出来る。

スピードを殺されるとマジ・カーヨとかいう変なのにも負ける。

良くも悪くも数値に左右されない。

アニメと漫画とでかなり強さが違うキャラの一人。

・孫悟空（VS ケフラ時 アニメ）…11億

超サイヤ人ブルー…2兆2000億

超サイヤ人ブルー（疲労）…2200億

※漫画版でベジータが陥った『本来のブルーの1／10の力も発揮出来ていない』状態。

界王拳20倍…4兆4000億

・ケフラ（漫画版）…444億

超サイヤ人…2兆2220億

※以下弱体化要素

・カリフラが超2に覚醒していないので通常の超サイヤ人が限度。

・ケールが暴れすぎて体力を使い果たしていた。

・伝説の超サイヤ人を制御出来ないまま融合したので両者の戦闘バランスが悪く、倍率が下がった。

（老界王神曰く『ライバル同士だからベジットは強い』らしいので、あまりに両者に開きがありすぎると倍率が下がる事とする）

・ 悟空相手に経験を積んでないのでパワーはあっても戦い方が下手なまま。格下にも負ける。

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン

ザーブト

ラバンラ

第3宇宙

ビアラ

ボラレータ

コイツカイ

パンチア

パパロニ

マジックカーヨ

第4宇宙

モンナ

キャウエイ

第6宇宙

ヒット

サオネル

ピリナ

第9宇宙

ベルガモ

第10宇宙

ムリチム

ナパパ

オブニ

第11宇宙

ジ
レン
ト
ツ
ポ
カ
ー
セ
ラ
ル
コ
コ
ツ
ト

第二百二十六話 動き始めた最強

戦いは今や、完全に第7宇宙とそれ以外の宇宙との対決となっていた。

第2宇宙は残り三人。

第3宇宙は残り六人。

第4宇宙は残り二人。

第6宇宙は残り三人。

第9宇宙は崖っぷちの残り一人。

第10宇宙は残り三人。

そして第11宇宙は残り四人。

七つの宇宙の残りを合わせても、もう僅か22人しか残っていない。

そしてこれらは全て第7宇宙のみによって齎された被害であり、肝心の第7宇宙は未だ脱落者ゼロ……このままバトルロイヤルを続ければ第7宇宙が圧倒的に有利なのは誰の目から見ても明らかであった。

こうなってしまうと、他の宇宙同士で戦っている場合ではない。

最大の脅威である第7宇宙を排除しなければ自分達の消滅が確定してしまう。ならば、第7宇宙以外の宇宙が一時的に休戦し、共通の敵を倒すべく手を組むのは必然の結果であった。

「フン！」

ピッコロがマントを翻して蹴りを放ち、第10宇宙のムリチムとナパパを同時に弾く。

先代との融合を果たした新生ピッコロの戦闘力は高い。

神の気を纏っているわけではなく、単純に明快に、ただシンプルに強い。

悟空達のように変身するわけではないし、もう界王拳を使う必要すらない。

基本戦闘力でブルーを遥かに凌駕している……これが脅威でなくて何なのだろうか。

そして消耗がないというのは悟飯にも言える事だ。

彼は第10宇宙のエースであるオブニと互角の攻防を繰り返しており、しかしまだ余裕を残している。

「フレイムフィールド！」

第7宇宙の次に多くの戦士を残している第3宇宙は、四星龍が圧倒していた。鋼鉄をも容易く融解させる彼の高熱の前に第3宇宙の改造戦士達は迂闊に近付けない。

その隙を狙うのは四人に分かれたうちの一人である分身セルだ。

彼は的確に四星龍をサポートし、改造戦士達を追い詰めている。

第6宇宙はエースのヒットを相手にミラが立ち塞がり、一進一退の攻防が続けている。

同じ宇宙のナメック星人二人も何とかヒットの救援に向かいたいが、白い戦士に阻まれて近付く事すら出来ない。

白い戦士の正体はリゼットの気で生み出された自立行動気弾だ。

それは大会に参加出来なかった天津飯やヤムチャ、クリリン、亀仙人といった地球戦士の姿をしており、それぞれの技でサオネルとピリナを苦しめる。

まるで彼らが本当にここに來て戦っているかのような、オリジナルと遜色ない技のキレであった。

いや、あるいは本当にそうなのかもしれない。

彼等もまた、宇宙を守るために戦っている。たとえ試合に出れずとも、心は仲間達と共にあるのだ。

「うおおおい!! 増えてる増えてる、第7宇宙の選手増えてるって!

それ反則だろ!?! ズルいだろおお!」

「いえ、あれはリゼットさん自身の技なので反則ではありません」

シャンパの抗議を大神官はいつもの笑みのまま切り捨てた。

しかし彼も気のせいかな笑みが引きつっており、内心では『これはどうなんだろう』と迷っているのかもしれない。

一際激しい攻防を繰り広げているのは第11宇宙の戦士であるトッポと、それに相対したターレスだ。

既にターレスは超サイヤ人4へと変身しているが、それでも圧倒し切れていない。

それは即ち、それだけトッポの実力が抜きんでている事を意味していた。

トッポは赤と黒のスーツを身に纏った肥満体型の戦士だ。いや、向こうの宇宙ではこれは肥満と呼ばないのかもしれないが、とりあえずここは地球の基準に照らし

合わせてそう表現しておく。

頭は禿げ上がり、口元には立派な髭を生やしたその姿はお世辞にも強そうとは思えない。

特に下半身など、上半身に比べて明らかにアンバランスな細さであり、見た目だけを言えば戦うまでもなく自重で潰れて勝手に倒れてしまいそうだ。

だが強い。人は見た目によらないとはこの事か。

パワーもスピードも決してターレスに劣るものではなく、二人の戦いは完全な互角であった。

「どりやりやりやりやあ！」

「ジャステイス！」

ターレスとトツポが目まぐるしく攻防を入れ替えながら互角の戦いを繰り広げる。

砂塵が巻き起こり、余波は鎌鼬のように吹き荒れ、景色が後ろへと流れていく。瞬間移動の如き速度で動いて互いの隙を窺い、殴り飛ばされたと思えばすぐに戻って来て相手を殴り飛ばす。

まさに一進一退。互いに最高に近いレベルであるが故に決め手がない。

ターレスの蹴りがトッポの膨れた腹を蹴り、トッポの不自然に大きい拳がターレスの顔を打つ。

だが両者共に殴られながらも攻撃を続行している。一步も引いていない。

その混戦の中、一際巨大な気の持ち主がリゼットへと向かって動き出した。

第11宇宙のジレンだ。

その外見は、昔のインチキな宇宙人特集などに登場したグレイという宇宙人を筋肉質にしてトップと同じ服を着せたような見た目であり、あまり脅威を感じさせるものではない。

しかしその気の圧力はどうだ。これが一人の戦士が放つ気なのか。

「さあ行け、ジレンよ……第7宇宙のリーダーであるあの女を落とすのだ。

お前の願いの為にも、この戦いは勝たねばならん」

「第7宇宙……まさかこれだけの実力者を揃えてくるとは……」

観客席で第11宇宙の破壊神であるベルモッドがジレンへ指令を下し、同じく第11宇宙の界王神であるカイは第7宇宙の平均戦闘力の高さに冷や汗を流していた。

しかし二柱にはまだ余裕があった。第11宇宙に残された戦士は僅かに四人、トツポとジレン、カーセラルとココットののみ。

だがそのうちの二人こそは第11宇宙最強の二人だ。

数など問題ではない。その数を圧倒する最強の質が二人いれば勝利は揺るがない。

いや、極論ジレンさえいれば優勝出来ると確信している。それほどにジレンは強い。

「わたくし、何だか少し不安になってきましたですよ」

第11宇宙の天使マルカリータだけは二柱と違い、少しばかり第11宇宙の負けを不安に思っているようだ。

ジレンの強さは彼女も知っている。

だがいかにジレンといえど、あれだけの実力者を揃えた第7宇宙に勝てるのだろうか。

実際、ジレンの次に強いはずのトップでさえ第7宇宙のターレス一人に抑え込まれてしまっている。

その次に強いディスポは、第7宇宙の選手の一人である四星龍によって呆気なく落とされてしまった。

だがそれでも、ベルモッドの勝利への確信は変わらない。

「問題ない。ジレンは何者にも負けぬ存在だ」

「……単純な勝ち負けで済めばいいですが……」

神々が見守る中、ジレンはゆっくりとリゼットへと近付いていく。

それにリゼットも反応し、二人は互いを……否、互いだけを視界へと入れた。

まるで時が停まったような緊張感が場を満たし、激戦の予感に周囲も戦いを止めて注目する。

「……来ますか」

「リゼット」

「まずは私一人で迎え撃ちます。セルは万一に備えて待機を」

リゼットの口から出た言葉にセルは僅かに驚きを見せた。

彼女の言う万一とは……自分が負けた時に、武舞台から落ちる前に即座に回収出来るように準備してくれという事だ。

つまりリゼットはこの戦い、負ける可能性を考慮して挑む気にいる。

リゼットですら、負けを覚悟する程の実力をジレンに感じているのだ。

ジレンの歩みに合わせるようにリゼットが歩み、その全身が白く輝いた。

背中には光輪が出現し、バーストリミット特有の白い光の粒子が舞い散る。

白い気は空中で固形化してリゼットの足に絡みつき、枷となって荒れ狂う神の気を制御した。

いきなりのゼノバース＋バーストリミット・マイナスの本気モードだ。倍率は二分の一倍でまだ余裕を残しているが、それでも今の悟空のフルパワーを凌駕している。つまりそれだけリゼットがジレンを認め、警戒しているという事だ。

戦闘態勢へと移行したりゼットの姿に第2宇宙の破壊神ヘレスは「う、美しい……ハッ！」などと言っているが、これはまあどうでもいいだろう。

やがて二人は手を伸ばせば届くほどにまで近づき、そこで足を止めた。

二人の静かな戦意に呼応するように場の空気が張り詰め、瓦礫が宙に浮きあがっては砕け散る。

「二人の戦いに全員が注目しています……この一戦は重要ですよ」

「リゼットならば問題ない。一年前にあいつはルール有りの戦いとはいえシャンパに勝っている。

そしてそれから研鑽を続けたあいつの実力は……今や破壊神クラスだ。

今のリゼットと本気でやり合えば僕ですら手こずる……勝てる人間がいるものか」

ビルスはリゼットの勝利を確信していた。

負けるはずがない。第7宇宙は十人全員が他の宇宙ならばエースを張れるだけの実力者のみで構成されている。実際、一番力の劣るヒルデガンですら他の宇宙から見れば脅威だろう。

そして、そんなオールエースの中でも最も強いのがリゼットだ。爆発力ならば孫悟空も捨てがたいが現状ではまだ彼女が勝る。

「どちらも動きませんですますね……互いに強敵と認めているようです」

「ジレンを警戒させるか……だが、それでもジレンの勝ち揺るがん。

ジレンに勝てる人間など存在しない。誰であろうとだ」

ベルモッドもまたジレンの勝利を疑ってはいなかった。

いくら相手側が強力な戦士を揃えようと関係ない。

真の最強とは、それ一人がいれば全てが片付く者を言う。

ジレンがいる限り、第11宇宙の負けは絶対に有り得ない。そう確信している。

「隙だらけだ！」

「貰ったわよ！」

睨み合うリゼットとジレンを、それぞれの背後から戦士が急襲した。

ジレンの背後からは第3宇宙のマジⅡカーヨが。リゼットの背後からは第4宇宙のモンナが襲撃をかける。

しかし二人は振り返る事すらせずに、それどころか動いてすらいらないのにマジⅡカーヨとモンナが弾かれたように吹き飛んでしまった。

否、動いていないのではない。動いた瞬間すらほとんど視認させずに殴り飛ばしたのだ。

そのままモンナはあっさりと脱落し、マジⅡカーヨはかろうじて踏み止まった。

「しっ！」

全員の視線が集中する中——リゼットが先に仕掛けた。

常人どころか、この大会に参加している選手の大半が視認出来ない程の速度でジレンへ牽制の打撃を放つ。

だが牽制といえど、ゼノバースを発動しての牽制だ。その威力は、第2宇宙のエースであったブリアンが変身するはずだったリブリアン如きでは何をされたかすら分からず四散するだけの破壊力がある。

しかしジレンには当たらない。避けられたわけでも防御されたわけでもない。圧倒的な気の圧力によって形成される気の壁に阻まれ、拳が届かないのだ。

「フン！」

今度はジレンが仕掛けた。

風を切り裂き唸る豪腕。しかし今度はジレンの攻撃が止められる番であった。リゼットの全身を覆うように展開されたバリアは生半可な攻撃では突破出来ない。

無論これも弱い攻撃ではない。

第10宇宙のエースであるオブニならば、これだけで死んでいただろう。

しかしそれも、リゼットの前ではまるで無意味だ。加減した様子見の攻撃など通

じない。

続いて今度はリゼットが先程よりも鋭く手刀を突き出し、ジレンも力を込めて打撃を放つ。

交差——両者の腕がクロスし、互いの目の先で止まった。

ジレンは眼力でリゼットの手刀を静止させ、リゼットは念動力でジレンの拳を止めている。

二人は一瞬の膠着の後に一歩下がり、目の前の敵が容易ならぬ相手であると改めて理解した。

そして睨み合い……そこから何故か動きを見せない。

「ど、どうしたのよ？　何で両方とも動かないの？」

第2宇宙のブリアンは不思議そうに言うが、その問いにヘレスは答えなかった。まるで、今行われている何かを見逃すまいとしているかのように武舞台を凝視している。

いや、彼女だけではない。破壊神や天使は全員がリゼットとジレンから目を離せずにいる。

「あ、あの、何故二人は睨み合ったまま動かないのでしょうか……」

「お前そんな事も分かんのかい。達人同士の戦いというものは、ああして静かに構えている時でも相手を観察しておるのじゃ。」

互いに隙がないからこそ、攻める機会を見付けられない。両方が強いからこそ起こる膠着じゃな」

「な、なるほど」

第7宇宙の界王神の言葉に老界王神が自分は分かっているというように語る。

だがそれを否定したのはビルスであつた。

「違う……もう開始はじまっている」

「え？」

「お前達には見えないだろうが、あの二人は今この瞬間にも超高速で攻防を繰り返しているんだ」

……どうやら老界王神の言葉は全くの的外れだったらしい。

老界王神は誤魔化すように口笛を吹き、その姿を界王神が呆れたように見ている。そうしている間にも、ビルスが語った通りにリゼットとジレンの戦闘は続いてい

た。

攻撃している瞬間すら傍目では分からない程の超高速の領域に立ち、既に何万何億と攻防を繰り返している。

ジレンの目が赤く輝き、リゼットの表情が陰しく歪む。

僅かではあるがドレスの端が破れ、頬に傷が付き、均衡が崩れつつある事をビルスを感じた。

「……ぐっ！」

そして遂に均衡が破れた。

リゼットの身体が突然後方へと弾かれ、咄嗟にリゼットの後ろに移動して受け止めたセル諸共10mほど後ろへと押しやられたのだ。

「不味い！ 直撃^{あた}った！」

「いえ、直撃はしていません。咄嗟に腕を挟んでガードしています」

リゼットが押し負けるというまさかの事態にビルスが仰天するが、ウイスは流石に冷静なものだ。

リゼットがギリギリで直撃を避けているのをしっかり見ている。

しかし直撃は避けてもダメージがないわけではない。

腕は赤く腫れ、更に腕を割り込ませたというのにリゼットの額からは一筋の血が流れていた。

それを見てビルスは焦燥を、ベルモッドは余裕を見せる。

「決まりだな……やはりジレンに勝てる奴など存在しない」

まだジレンはリゼットを倒したわけではない。一度の攻防で勝利しただけだ。

しかしその一度の攻防が全てだ。これで格付けはもう終わっている。

ベルモッドは勝利をより強く確信し、笑みを深めた。

【戦闘力】

・ジレン…110兆……？？？

アニメ版と漫画版でキャラの戦闘力差の激しい『超』では割と安定している方。漫画版ではハッキリとベルモッド以上と断言されたが、破壊神最強クラスのビルスより強いかどうかは不明。

このSSでは本気を出せばビルスより強い事しておく。

・トッポ…2兆

破壊神トッポ…30兆

アニメ版ではブルー相手にやや劣勢程度の実力だが、漫画版では完成ブルークラスに強い。

しかし漫画では破壊神化がないので最終的にはアニメ版の方が圧倒的に上。

破壊神とはいってもキュアベジータに負けるレベルなので本物の破壊神にはまだ及ばない。

シドラの破壊玉に耐えたフリーザを吹き飛ばしたのは……そもそもアレ、ビルスの吐息で消えるレベルの弱い破壊玉だし……。

ちなみにブルーのベジータと同数値だが、実際は同じではなく数千万単位での差はある。

しかし誤差なので弾いているだけ。

・マジルカーヨ…1000億

ただならぬ肉体とただならぬ精神を持つ。

デイスポを圧倒したが、単純に相性がよかつただけと思われる。

とはいえそれなりに実力もあると思われるので魔人ブウと同じ1000億としておく。

・モンナ…700億

超サイヤ人のキャベ以上、超2のキャベ未満。

リゼットの攻撃に耐えたのは重量のおかげ。

・キャウエイ…100～10000

亀仙人にも歯が立たない子。

1000歩くらい譲って、欲望パワーを制御した亀仙人が100000くらいまで戦闘力が上がっていたと考えてもやはり力の大会に出れるレベルではない。

可愛い。

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン

ザーブト

ラバンラ

第3宇宙

ビアラ

ボラレータ

コイツカイ

パンチア

パパロニ

マジルカーヨ

第4宇宙

キャウエイ

第6宇宙

ヒット

サオネル

ピリナ

第9宇宙

ベルガモ

第10宇宙

ムリチム

ナパパ

オブニ

第11宇宙

ジレン

トッポ

カーセラル

ココット

第二百二十七話 悟空の屈辱

キャウエイちゃんは雑魚かわいい。

体勢を立て直す間も与えるものと、ジレンがリゼットへと仕掛けた。

リゼットもそれに応じて即座に構えを取り、ジレンを迎え撃つ。

戦闘力は完全にジレンが上だ。彼の怒涛の攻めを前にリゼットは防戦に回ってしまっている。

バーストリミットの倍率を今以上に引き上げれば戦力で並ぶ事も不可能ではないが、それは余りに負担が大きすぎる。

リゼットが可能とするバーストリミットの最大倍率は3〜4倍だ。しかしそれを行ってしまえば以前にシャンパと戦った時と同じように自力で立つ事すら困難になるだろう。

神域化を発動したりゼットは信仰の念によって常に気が補充され続けている状態

にある。実質的に気は無限にあるとっていい。

だが気は無限でも体力は有限だ。あまり飛ばし過ぎればすぐにへばってしまふ。回復魔法はあるが、だからといって敵の目の前で疲れていては回復する暇すらないだろう。

1～2倍でもまだ負担がかかる。ここがギリギリで戦闘を続ける事が出来る限界ラインだ。

これを越えてしまえば自滅してしまうだけだ。

だからこそこれで勝ちたかったのだが……ジレンはそれを許さぬほどに、余りに強い。

放たれる拳の弾幕を避け、逸らし、最小限の動きで凌ぐ。

ジレンの筋肉の動き、視線の向き、気の移動の仕方、重心の向き、足の位置……そればかりか、ジレンの脳が発する攻撃前の僅かな攻勢の気配すらも読み、被弾を認めずに回避を続ける。

それはリゼットの膨大な経験値が為せる達人の技であり、しかしそれを以てしても攻撃に転じる暇が殆どない。

だからといってリゼットも守ってばかりではない。ジレンの動きを観察し、動きの癖を見切り、拳の弾幕をすり抜けて反撃の一打を何度か当てている。

拳打に合わせたカウンターを顔面に。重心移動の瞬間を狙い撃った掌打を胸に。ジレンの脳が発した攻撃のトリガーを読み切ったの掌底を顎に。

だがダメージは浅く、ジレンはすぐに何事もなかったかのように猛攻へと戻ってしまう。

こういうタフな手合いはリゼットが最も苦手とするタイプだ。

周囲は二人が織りなす次元違いの攻防を前に戦闘を忘れて見入り、破壊神すらもが固唾を飲んで見守る。

第4宇宙最後の選手となってしまったキャウエイなどは既に半泣きである。

いや無理、これ絶対無理、勝てないってこんなの。彼女の表情がそう物語っている。

「むん！」

「……」

ジレンの剛腕を避け、彼の大きな瞳目掛けて指突。

だが命中の直前で眼力に阻まれ、僅かに眼球を掠るだけに終わってしまう。

それでも一時的にジレンの目を封じ、死角となった側に回り込んで光の剣で斬り付ける。

それでもダメージは浅いがゼロではない。ジレンが止まり、その隙に足元を斬り払う。

ジレン自身を動かす事は出来ずとも、立っている場所が不安定になれば必然的に体勢は崩れてしまう。

体勢を崩しながらも放たれた拳を避け、彼の指を掴んで投げ飛ばした。

関節を折る気だったのだが……やたら頑丈だ。折れる気がしない。

着地すると同時にジレンが反撃へと移り、リゼットはそれを避けてカウンターを合わせる。

しゃがむ事で右ストレートを避けて腹に一撃。

左フックに対し一步下がって回避し、気弾を発射。

お得意の眼力が発動するのを察知して背後へと回り、気の刃で背中を斬り付ける。ジレンが振り返ると同時に気の武器化でトンファーを装備し、ジレンの注意が武

器に向いた瞬間に懷に潜り込んで鉄山靠を放った。

いかにジレンでも無防備を狙い撃たればダメージくらいは受ける。だが全てが浅く、動きを完全に止めるには至らない。

効いていないわけではないのだ。ただ、そのダメージは例えるならばHPが100万ある相手に10や20くらいのダメージしか与えていない、というだけである。一方でジレンの拳は一度でも直撃すればリゼットに多大なダメージを与える事だろう。

それ故に今の所は全弾回避しているものの、どうしても防戦に回ってしまう。

「リゼットが防戦一方か……!」

「ジレンを相手にここまでやるか!」

「なあ、あのトンファアの意味なくね?」

ビルスとベルモッドは必勝の信を寄せていた自宇宙のエースを手こずらせる相手がいる事に驚愕の顔を見せていた。シャンパの突っ込みなど聞いている暇がない。

だがビルスのそれが明確な焦りであるのに対し、ベルモッドのそれは賞賛だ。

ビルスはリゼットがこのまま敗れてしまう事を危惧している。

だがベルモッドはそうではない。勝つのはあくまでジレンであると確信した上で、そのジレンを相手にここまで粘るリゼットの健闘を称えているだけだ。

そしてそれは正しい。このまま戦ってもリゼットの勝ちはないだろう。

ただしそれは、彼女が一人ならばの話だ。

一方無視されたシャンパは「え、俺何かおかしい事言った？」と狼狽えていた。

「ふん！」

「!？」

ジレンを横合いからセルが蹴り付け、その巨体を吹き飛ばした。

彼の気の圧力など物ともしないパワーにジレンも僅かに警戒を見せるが、リゼットと比べれば遥かに格落ちする相手であると即座に見抜く。

ダメージなどないように地面に着地したジレンは威圧的にセルを睨み、声を発した。

「俺に勝つ気か？ やめておけ……お前では無理だ」

「セル、貴方では無理です。下がっていてください」

セルの戦闘能力は第7宇宙でもトップクラスだ。

だが彼は神の気もなければ、超フルパワーの超サイヤ人4や新生ピッコロ、合体ミラののような神の気すらも超える圧倒的なパワーはない。

どちらかといえば豊富な技や四身の拳、再生能力などで器用に立ち回るタイプだろう。

それはそれで充分過ぎる程に強いのだが、ジレンを相手にするのは無理だ。しかしセルは不敵に笑うと、全身に力を込めた。

「それはどうかな？」

「え？」

「見ているがいい……ぶるああああ！」

セルが叫び、その全身が黄金の輝きに包まれた。

超サイヤ人の輝きではない。超サイヤ人ブルーなどと同じ、神の気にも近い揺らめく炎のようなオーラだ。

そう、それはまるであのゴールデンフリーザのように。

だがおかしい、トリゼットは考えた。

確かにセルがフリーザの細胞を持っていたならばそれが出来ても不思議はない。

そう、持っていたならば。

だがここにいるセルは未来の自分が手を加え、フリーザなどの細胞を意図的にオミットしたセルのはずだ。

したがって、彼にフリーザと同じ芸当は出来ない。

そのはずだったのだ。

「セル……貴方は」

「勘違いしないで欲しいが、別に貴方を騙したわけではない。私がフリーザの細胞を持っていなかったのは本当だ。もっとも、それも以前までの話だがね」

「……！　　そうか、あのフリーザとの戦いの時に……！」

「ご名答。私はあの時、フリーザの生体エキスを頂いた。その時に奴の細胞を得ていたのだ」

黄金の輝きを身に着けたセルの戦闘力はこれで、合体ミラと並んだ。

進化しているのは悟空達だけではない。

彼もまた、強さの最前線を目指して進化を続けているのだ。

「しかし、身体の色は変わってないようですが？」

「あの色は少しばかり悪趣味すぎる。私は今の姿が一番気に入っているのだ」

ゴールデンセル、とでも言うべき新たなステージへ到達した彼だが、身体の色は依然変わらず緑のままであった。

元々あれは超サイヤ人を意識したフリーザが自ら望んであいう姿になっただけであり、セルはそんな悪趣味な姿になる気などない。

今の姿こそが完璧であり、完成していると彼は思っている。

なのでゴールデンフリーザの力を使いつつも、見た目はそのままだ。

ともかく、予想外に頼もしい戦力だ。これならば二人でいけばジレンとも戦えるかもしれない。

しかしそれでもまだ勝率は低い。下手をすれば二人揃って落とされてしまうかもしれない。

故にリゼットは……自らが最後まで残る事を諦めた。

自分が落ちてでも九人が残れば勝ちだ。ならばここは、後の事を考えずにバーストリミット・マイナスを3〜4まで解除して、セルとの共闘で確実にジレンを落とす。その後自分は確実に戦力外となるだろうが、ジレンを残す事は絶対に出来ない。

自分の脱落と引き換えにしても、ジレンだけは落とさなければ駄目だ。

「セル。私はジレンを倒す事に全力を使います。

その後は、私に代わって指揮を取って下さい」

「……いいだろう」

ここでジレンを落とせば、第7宇宙優勝の可能性が一気に高まる。

その為ならば自らが脱落するだけの価値はあるとリゼットは踏んだ。

そしていよいよリゼットが真価を発揮しようとした時、両者の間に悟空が割り込んだ。

「神様、そりゃあちょっとどうかと思うぜ。

セルにや悪いが、今ここにいる十人を纏められるのは神様だけだとオラは思っている。

全員、そう簡単に他人の指示に従うような奴じゃねえ。オラも含めてな」

悟空は今まで別の宇宙を相手にはしていたはずだ。

しかしこちらの危機に、慌てて駆け付けてきたらしい。

彼が顔色を変えて飛んでくるほどには、ジレンは次元が違うのだ。

「悟空君……しかし」

「セル、神様を連れて下がってろ！ あいつはオラがやる！」

悟空はそれだけ言うのと超サイヤ人ブルーへと変身し、界王拳の炎を纏ってジレンへと突撃した。

今の悟空の界王拳の最大倍率は無理をしてようやく20倍だ。

元々の地力も含め、リゼットには及ばない。

残念ながら悟空では相打ちにすら持ち込めない。そうリゼットは考えていた。

「いけない！ 悟空君、戻……」

「いや、これでいい！」

慌てて悟空を引き留めようとしたリゼットを、しかしセルが掴んだ。

セルは理解したのだ、悟空の真意を。

ここでリゼットとジレンを引き換えにしても恐らく第7宇宙は勝てるだろう。それだけ数を減らしたのだから。

だが、残っているのはヒットやトッポといった実力者ばかり。第3宇宙の界王神にまだ余裕があるのも気になる。きっとまだ切り札があるのだ。

もしもそれらが手を組めばまだ有り得るのだ……逆転される可能性が。

そしてそうなった時、リゼットがいなければ第7宇宙は統率を失うだろう。

無論それでも十分に強いのだが……確実ではない。

何より一番怖いのは、リゼットだけを失ってジレンが残ってしまった場合だ。奴にはまだ、何か見せていない隠された力があるような気がしてならない。

だから悟空は自らがジレンへと挑んだ。

自分の戦いを通してジレンの動きをリゼットに観察させる為に。ジレンの力を引き出す為に。

何よりも、自らのサイヤ人としての心の赴くままに。

★

悟空とジレンの戦いは一方的なものであった。

一応戦いの形にはなっているが、勝負にはなっていない。

負けが見えているものを勝負とは言わない。

20倍の界王拳すらも通じず、ダメージを与える事すら出来ない。

だがこんなのは予想出来た事。

ジレンガリゼットに押し勝った時点でこの程度強い事は分かっていた。

故に悟空は切り札の使用に踏み切る。

「オラのとっておきの技、お見舞いしてやるぜ！」

皆、オラに元気をわけてくれ！」

——元氣玉。

ドミグラとの戦い以来の使用となるこの技は、本来は星に生きる植物や動物などから僅かずつ気を借りる事で完成する。だがここは無の界だ。当然ながら本来の使い方は出来ない。

しかし第7宇宙のメンバーが気を与える事で、それ以上の元氣玉を作る事が可能となる。

これは他の皆の消耗を招いてしまう博打技だが、ジレンを倒すにはこれしかない
と悟空は考えたのだ。

そして出来上がった元氣玉は凄まじいものだ。

セル、ターレス、ピッコロ、ミラ、四星龍、悟飯といったそうそうたる戦士達の
気で出来上がった元氣玉は直撃すればビルスですら重症を負うだろう。

リゼットとベジータ、ヒルデガーンは手を貸さなかったが、それでもジレンを倒すには十分な元氣玉だ。

——ただし、当たりさえすれば。

「……駄目です、効きません」

リゼットは険しい顔をして戦いを見守る。

悟空の作り出した元氣玉がジレンへと迫っているが、リゼットにはもう結果が見えてしまっていた。

だから彼女は元氣玉に手を貸さなかったし、ヒルデガーンにも協力させなかったのだ。

「どういう事だ？ ああ威力でも通用せんというのか？」

「そうではありません。当たれば効くでしょう……当たれば」

「避けられると？」

「……元氣玉は『善』に属する技です。悪人相手ならば無類の威力を発揮しますが、悪の氣がない者には……」

リゼットの言葉にセルはハツとした顔をした。

そう、元氣玉は確かに強力な技だが欠点がある。それは邪心があっては創り出す事すら不可能な善の技であるという事。

今、リゼットが脳裏に思い浮かべているのは本来^原の世界線^作にあった一つの場面。悟空が創り出した元氣玉をクリリンが放ち、それがベジータに回避されて悟飯に向かってしまった場面だ。

あの時悟空は何と言っていたか……。

そしてジレンは、第11宇宙でどういう立場に立っている者だったか……。

「元氣玉は、悪の気がない者にとっては味方です。

……善人ならば跳ね返せるんですよ、あれは」

ジレンからは悪の気が感じられない。

それもそのはずで、彼は『プライドトルーパーズ』の一員……そう、正義の味方だ。

そしてリゼットは知らない事だが、ジレンは正義に全てを捧げた男とまで呼ばれている。

そんな男に、元氣玉が通用するはずがない。

今まで悟空が戦ってきた相手とジレンでは、根本的に違うのだ。

リゼットの危惧した通りに元気玉はジレンに通用せず、それどころか悟空へと跳ね返されてしまった。

悟空もこれに抗うが、両者が跳ね返せる以上、後は地力の勝負になる。

結果、悟空は皮肉にも自らが発した元気玉に飲み込まれる事となってしまった。

シャンパ「なあ、あのトンファァー……」

ビルス「そんな事も解らないのか？　やはりお前はまだまだだな」

シャンパ「え？」

ウイス「一見ただ無駄にトンファァーを出しているようですが、その実理に適った使い方をしております」

シャンパ「え、いや、だからそもそも使ってねーじゃん？」

ヴァドス「無意味に装備しているように見えますが、そう思わせて二重三重にフェイントを織り交ぜております。あれほどトンファァーを使いこなす方を私は見た

事
が
あ
り
ま
せ
ん。
。

シ
ャ
ン
パ
様、修
行
が
足
り
ま
せ
ん
わ
」

シ
ャ
ン
パ
「………」

シ
ャ
ン
パ
「………え？　こ
れ
俺
が
お
か
し
い
の
？
」

第二百二十八話 合体戦士アニラーザ

終わったと、誰もが思った。

ジレンはもとより、リゼットさえ悟空の敗北を確信していた。

だが彼女は失念していた。

それは孫悟空という男の底なしのセンス。そして戦闘時に働かせる頭の回転の速さだ。

己に向かって来る元氣玉の前に悟空は薄ら笑いを浮かべ、そしてあろう事か両手を広げてそれを受け入れた。

「はあああああああッ！」

悟空が吠え、全身を元氣玉の気が包み込んだ。

元氣玉が善人の味方である事も、跳ね返せる事も全て承知の上だ。

使い手である彼がそんな事も知らずに使うわけがない。

元氣玉が悟空へと吸い込まれていき、その膨大なエネルギーを全て己の力へと変えた悟空が銀色の炎を放出する。

「元氣玉の吸収……！　　そうか、その手がありましたか！」

リゼットはこの現象に覚えがあった。

この世界では悟空が超13号と戦わなかったために起きなかったが、彼女の知る本来の世界では悟空は元氣玉を吸収する事で一時的にパワーアップし、格上の敵を倒している。

悟空はそれを今、ここでやってみせたのだ。

初めから、全て計算していた……跳ね返される事まで織り込み済みで撃っていた。そのまま元氣玉が効くならばそれでよし。

効かなくても、自分に取り込んで力に変える事が出来る。

どちらに転んでもプラスの、二段構えの作戦だ。

これの上手い点は敵自身に跳ね返して貰う事である。

敵の目の前で元氣玉を吸収などすれば、あの第2宇宙の戦士達の変身のように妨害されるかもしれない。

だが敵が跳ね返してくれるなら、それを止めはしないだろう。

元氣玉を自らに取り込んだ悟空はジレンの前に着地し、静かに目を閉じる。

力は上がった。

だがそれではまだ足りない。

今の悟空には元氣玉の氣がプラスされているが、足し算では駄目だ。

単純に力を増やしただけではジレンに届かない。

だから、この力は切っ掛けに過ぎない。

そう——閉ざされたままの可能性のドアをブチ破る。その為の力だ。

溢れる氣を、完成した超サイヤ人ブルーの要領で身体の内へ閉じ込める。

全ては次なる進化の為の前準備だった。

完成ブルーすらも、その為の練習でしかない。

氣を充満させ、神の氣と融合させ……それを身体の間々まで行き渡らせる。

悟空が思い出すのは今まで戦った中で一番、勝てないと思わされた相手の姿だ。

十三年前に一度だけ見た、あの時のリゼットはまるで身体が勝手に動いて判断しているようだった。

今にして思えばあれこそが、ウイスの言う『身体が勝手に避ける』領域だったのだろう。

あの頂を見せられて以来、ずっと目指していた。追いつきたいと思っていた。

悟空にとってはゴッドもブルーも、完成ブルーすらも到達点ではない。最初から通過点に過ぎなかった。

だからこそ、悟空はようやく掴んだ手応えに笑う。

「行くぞジレン……ここからが、本当の勝負だ！」

そう言い、悟空は銀色の瞳を輝かせた。

★

——凄いと。

ただそれだけしか言葉が出なかった。

先程まで圧倒的に負けていたはずの悟空が、今はジレンを相手に一步も退かぬ戦いを繰り広げている。

悟空の髪は超サイヤ人のように変化しておらず、通常時のものだ。

だが瞳だけが銀色に輝いている。

一体何が起きているのかはリゼットにも分からない。

ただ、一つ言える事は突然悟空が強くなってジレンと互角に戦えるようになった

た、という事のみだ。

「狙っていたというわけですか……この展開を」

「恐らくはそうだろうな。最初から跳ね返させるつもりだったわけだ。

自らの殻を破る為に、元氣玉を利用したのだろう」

「全く……彼は本当に……」

本当に、いつだってこちらの予想を上回ってくれる。

敵がどんなに強くても、その度に限界を超えて驚かせてくれる。

だから、悟空がいるだけでまるで負ける気というのがしないのだ。

しかも今回の覚醒は今までのようなパワーだけの上昇ではない。

戦闘力の上昇……それも確かにあるが、凄まじいのは悟空の動きそのものだ。

攻撃に移るまでの気配が一切ない。リゼットは相手の脳が発する攻撃のトリガーを先読みする事が出来るが、今の悟空の攻撃だけは読める気が全くしない。

否、読める読めないではなく、脳が攻撃の命令など実際出していないのだ。まるで身体が勝手に判断して動いているように……。

それはまるで、かつて暴走した時のリゼットのように。

ビルスはそれを見て『身勝手の極意』と呼び、驚愕していた。

頭で判断するのではなく身体が勝手に攻撃し、回避する神々の領域。ビルスですら完全には会得していない奥義がそれだという。

リゼットも似たような事は出来る。絶大な経験値による反射で身体が動き、敵の動きを避ける事はある。

考えるよりも早く攻撃に転じる事もある。

だが彼女のそれは経験だ。悟空のように本当に身体が勝手に動いているわけではない。

「……セル」

「分かっている」

悟空の変わりぶりに驚いているリゼットだったが、背後に迫る気配を感じて視線をそちらへと向けた。

後ろにいたのは第3宇宙の面々だ。

ボラレータ、コイツカイ、パンチア。第3宇宙が誇る改造戦士三人。

そしてそれを統率するのは第3宇宙の主将、科学者パパロニだ。

彼等の相手は四星龍がしていたはずなのだが、何をしているのやら。

気を辿ってみれば……どうやら、分身セルや悟空と共にジレンに挑んでいるようだ。

セルの三体の分身は全て悟空の援護へと回り、実質五対一でジレンを叩き落そうと奮戦している。

恐らくは分身セルの判断だろう。

第3宇宙の戦士など本体の自分が片付けるから総掛かりでジレンを落とすべきだと指示を出したのだ。

あれでジレンを落としてくれればいいのだが……。

「セル、分身はゴールデン化はしないのですか？」

「ああ。ゴールデン化はエネルギーの消耗が激しい変身だからな。

分身にまでそれを可能とするだけの力を与えてしまうと、すぐに消えてしまう」
「どうやら分身のセルはゴールデン化は出来ないらしい。」

それはそれで十分強いのだが、今の悟空や四星龍と比べると大分格落ちすると言
う他ない。

隙を見て魔貫光殺砲や気円斬でも撃てば少しはマシになるだろうが、それでもジレン相手にどこまで通用するか……。

「それより貴女こそ大丈夫か？」

「少しきついですね。しばらくは抑えて戦う他ありません」

リゼットは現在、ゼノバースを発動しているものの枷のない状態であった。

これはバーストリミット・マイナスとの併用をしない、旧バージョンのゼノバースだ。

決して相手を舐めているわけではない。

元々ゼノバースとバーストリミットの併用は反動が大きく、以前はそれが原因で一時的に気が制御出来なくなってしまった事もある。

ある程度慣らした今はそんな事にはならないが、それでもジレンとのあの攻防によつて気が乱れてしまった。

少しの間、ゼノバースとバーストリミットの併用は出来ないだろう。

気の乱れだけは回復魔法ではどうしようもない。落ち着くまで待つしかないのだ。

そして、そんな消耗を見抜いたからこそ第3宇宙の戦士が来たのだ。

「第7宇宙の主将と見受ける。我が宇宙存続の為、ここで落ちて貰おう」

「ほう、あの戦いを見て挑むか。その勇気だけは大したものだ」

パパロニの言葉に、リゼットよりも先にセルが挑発で返した。

しかし決して警戒を怠っているわけではない。

リゼットとジレンの戦いはジレン優勢で進んでいたが、それでも渡り合えてはいったのだ。

この大会に参加するほどの者ならば、キャウェイ以外はあの戦いを見ただけでリゼットのレベルの高さは十分に分かるはずだろう。

それでも尚挑んで来たという事は、それだけ自信があるという事だ。

「確かに強い。私も覚悟を決めなければ戦いにすらならんだろう」

「ほう？」

「ボラレータ！ コイツカイ！ パンチア！ 行くぞ！」

パパロニが杖を振り上げ、先端が輝く。

すると名を呼ばれた三体の改造戦士が跳躍し、空中で合体を開始した。

それにしても、どう見ても完全にロボットなのだがこれは参加していいのだろうか？

一応気を感じるの、元々は生物だったのだろうと思われるが……。

メタルマンのような元からロボットのよう宇宙人を改造したのだろうか？

とはいえ、わざわざ敵の合体を待ってやる趣味などリゼットにはない。

彼女は手に気を集約させて合体の最中にある改造戦士達へと狙いを定めた。

だがそのリゼットとセルへとスライムのような何かが横から飛び付いた。

「させるかよおお！」

「おお、ただならぬ身体を持つマジーカーヨさん！ ナイス援護です！」

リゼットの邪魔に入った自分の宇宙の戦士の名を第3宇宙の界王神が嬉しそうに呼んだ。

マジーカーヨはスライム状の身体を持つ不定形の戦士で、物理的な攻撃をほとんど受け付けない。

リゼットの全身をスライムが這い、その自由を拘束するもそれは僅かな間だけだ。

「ヒルデガン！」

姿を隠していた第7宇宙最後の戦士の名をリゼットが呼ぶ。

すると空中に突然、ヒルデガンが姿を現した。

姿を消せる戦士を温存していたのは第4宇宙だけではない。ここにもいたのだ。大会前に一度見せてしまったが、ここまで姿を見せていなかったなので相手はすっかり失念していたらしい。

ヒルデガンは口から火炎を吐き出し、リゼット諸共マジーカーヨを攻撃した。これに対しリゼットとセルは即座にバリアを展開し、マジーカーヨだけが獄炎に包まれる。

「ぐっ、が、ぎゃあああああ！」

「グルウオアアアアアア！」

物理の効かないスライムには炎が効く。これはRPGの定番でもある。

炎に包まれて絶叫するマジーカーヨをヒルデガンが殴り飛ばし、更にそこにリゼットが掌を翳した。

「はっ！」

気合い砲。

不可視の一撃でマジッカーヨを吹き飛ばし、そのまま場外へと直送した。

ヒルデガンは再び姿を消し、これで第3宇宙は残り五人。

だがマジッカーヨの犠牲は無駄ではない。彼の決死の特攻が合体戦士完成までの時間を稼いでもったのだ。

「なんという怪物……強いだけでなく、普段は消えていざという時に仕掛けて来るなど厄介極まりない。やはり第7宇宙、恐るべし。

しかし、マジッカーヨさん。貴方の戦いは無駄にはなりませんでしたよ。

おかげで我が第3宇宙の生存戦略の切り札であるアニラーザ完成までの時間を稼げました」

突如膨れ上がった気にリゼットとセルが振り返れば、そこにいたのは巨大な白い怪物だ。

以前戦ったハッチヒャックに少し似ているが、感じられる気は桁違いだ。

気から判断するにその戦闘力は……あるいはフルパワーのターレスとも戦えるかもしれない。

普段のリゼットならばどうという事はないが、気が乱れている今は手強い敵だ。

「グオオオオオオ！」

「セル、侮れない相手です。気を付けて下さい」

「確かに厄介そうだ。だが私と貴方ならば倒せない敵ではない」

風圧で顔にかかった髪を指でどけながらセルへ忠告をする。

それに対し、セルは面白そうに笑いながらアニラーザを見上げた。

「往きますよ」

「ああ」

リゼットとセルが同時に消えた。

高速移動……ではない。

孫悟空の使うものと同じ瞬間移動だ。

二人が同時にアニラーザの背後に現れ、セルは蹴りを、リゼットが掌底を叩き込む。

そしてアニラーザが振り返るよりも速く瞬間移動。

悟空は瞬間移動の際に移動先の気を探知する為、一瞬の間がある。

だが気のプロに長けたりゼットとセルにその間は必要ない。悟空のように額に指

を当てる動作も要らない。

そもそもあれは気の探知に集中する為にやっているだけで、別にやらなくても瞬間移動は出来る。そうでなければ瞬間移動かめはめ波なんて技は実現しない。

「千の剣よ、在れ！」

「かめはめ波！」

リゼットが数多の刃を、セルが気功波をそれぞれ放つ。

量と質、二つの力による攻撃でまずはアニラーザの耐久度を測るつもりだ。

これに対しアニラーザは両腕をクロスして防御。有ろう事か、ほとんどダメージもなく耐え抜いてしまった。

見た目で分かっていたが、やはり相当に硬い。

「グオオオオ！」

アニラーザが何も無い空間に拳を突き出し、次の瞬間にリゼットは空間の揺らぎを感じてバックステップ。

直後、リゼットの眼前をアニラーザの拳が通過した。

かつてジャンペンバが使い、リゼット自身も得意としている空間を跳躍しての打撃

攻撃だ。

更にアニラーザの拳が今度は背後から迫るも、同じ技は二度も通じない。

リゼットは振り返りながら拳を避け、気弾を放つ。

すると空間を飛び越えて気弾がアニラーザの顔面へと炸裂した。

それと同時に胸の前で手を合わせ、右手を振りかぶって手刀を降ろす。

するとそれに合わせるように虚空から巨大な気の腕が顕現し、アニラーザの脳天へと手刀をめり込ませた。

「ゴアアアアアア！」

アニラーザが吠え、周囲をやたらめったらに攻撃する。

だが当たらない。攻撃が大雑把過ぎる。

巨大化は確かに強力だ。大きいというのはそれだけでパワーであり、重量だ。

ボクシングの階級分けを見れば、重さがいかに強さを左右するか分かるだろう。

だが人間の攻撃が羽虫に当たらないのと同じように、命中率の低下を招く事はどうしようもない。

「何故です！ アニラーザには超音波で相手の動きを感知する能力があるはず！

何故当たらぬ！」

「ピガガ……ピピ」

「モスコ様曰く、相手が音よりも速く動いているので意味を成していない、との事」
アニラーザにはその欠点を克服する機能が搭載されていた。

彼は蝙蝠のエコーロケーションと同じように、音を反射する事で相手の位置を掴む能力を有しているのだ。

だがリゼットに言わせれば、そんなものはこのレベルの戦いでは何の役にも立ち
はしない。

音より速く動くのが当たり前で、音に頼る事がいかに脆いかを彼は理解出来ていないのだろう。

エコーロケーションは『超音波を発する』、『超音波が跳ね返る』、『跳ね返って来た超音波を受信する』の三工程によって成り立つが……遅い。あまりにも悠長過ぎる。

リゼットとセルは一工程目の超音波発射の時点で既に攻撃へと入っているのだ。
したがって、受信した時にはもうその情報は全く役に立たないものとなっている。

「セル！」

「ああ！」

リゼットとセルが同時にアニラーザの膝裏を蹴り飛ばした。

いかに頑丈でも関節というのは曲がるように出来ている。そうである以上、他の部位よりも圧倒的に相手の体勢を崩しやすい。

膝を崩されて尻もちをついたアニラーザの目の前にヒルデガンが顕現し、巨腕でアニラーザの額のクリスタルを殴る。

別にそこが弱点であると知っていたわけではない。ただこれ見よがしに目立っていたので、とりあえず殴らせただけだ。

弱点ならばそれでよし。違ったならば他の場所を攻撃するだけだ。

しかし困った事に、どうやら本当にそこが弱点だったらしい。

クリスタルが罅割れたアニラーザは苦悶の声をあげてもがいている。

アニラーザも叫びながら反撃の拳を出す、ヒルデガンには当たらず突き抜けてしまった。

ヒルデガンが実体化するのは攻撃の一瞬のみ。それ以外のタイミングで攻撃を

してもヒルデガンには通用しない。

「アニラーザのエネルギー炉が！」

「ピピピ、ピガガ！」

「モスコ様曰く、『何故そこが弱点と分かった!?』だそうです」

そりゃ分かりますよ、トリゼットは内心で呆れていた。

まさか本当にここが弱点だったとは。

というかエネルギー炉なんて一番大事なものを何故外に出して、しかもあんな目立つ位置に置いてしまうのか。

ウルトラマンのカラータイマーなどでも言える事だが、弱点ならばせめて身体の内側に収納しておけと思うってしまう。

「ガアアアアアア！」

だがエネルギー炉を碎かれてもアニラーザはまだ動けるようだ。

最後の抵抗とばかりに腕を掲げ、巨大な火球を生み出す。

それに対し、リゼットとセルもまた腕を掲げて白く輝く光球を生み出した。

「ダブル——」

「——スパーキング・メテオ！」

二発の大光球を放ち、正面からアニラーザの火球を押し返す。

これにアニラーザも何とか拮抗しているが、その背後にヒルデガンが出現して無防備な背中を思い切り殴りつけた。

攻撃の時以外は実体化しないヒルデガンはその図体に反して奇襲要員として優秀だ。

何より彼が素晴らしいのは攻撃に巻き込んでも全く問題ないという事である。

アニラーザはよく戦ったと言えるだろう。エネルギー炉を壊された状態でリゼットとセルの二人を相手に拮抗し、後ろからヒルデガンに殴られ続けながらも耐えている。

だがやはり限界だ。この攻防には無理がありすぎる。

ヒルデガンが後ろからアニラーザの額を掴み、エネルギー炉を強引にもぎ取りにかかると。

こんな位置にいてはヒルデガンも巻き込まれてしまうが、そんな事は問題ではない。攻撃を止めて無敵モードになればいいだけだ。

かくしてアニラーザに抵抗の術はなく、遂にエネルギー炉を千切り取られてしまった。

それと同時にヒルデガンは姿を消し、二発の光球がアニラーザへ激突した。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

アニラーザが断末魔の叫びをあげ、武舞台の外へと叩き落される。

彼の不幸はなまじ強かった事。

強いからこそ、リゼットとセルが本気を出せた。相手を殺してしまう可能性を考

えずに全力で当たる事が出来た。

彼は弱くなかった……強いからこそ、負けたのだ。

これで第3宇宙は残り一人。いよいよ崖っぷちとなった。

【アニラーザ】

アニメ版と漫画版で恐らく一番強さが違うキャラ。

アニメ版だとブルーの悟空とベジータ、ゴールデンフリーザ、究極悟飯、17号

を同時に相手にして渡り合うという凄まじい強さを見せつけたが、漫画版だとケールの蹴り一発で落ちてしまった。

漫画版はでかいだけの雑魚。

【戦闘力】

アニラーザ…6兆

エネルギー路破壊…5000億

・エネルギー炉を割られるまではブルー級を数人同時に相手にして圧倒した事から悟空の3倍程とする。

過去のナツパ無双などから見るに3倍ほどの差があれば多人数相手でも余裕で無双可能。

弱点を分かりやすい位置に付けていたのが敗因。

エネルギー炉が割れた後も少しは頑張ってたので破壊後もそれなりの強さはあると思われる。

漫画版…5000億

・そのエネルギー炉、故障してない？

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン

ザーブト

ラバンラ

第3宇宙

ビアラ

第4宇宙

キャウエイ

第6宇宙

ヒット

サオネル

ピリナ

第9宇宙

ベルガモ

第10宇宙

ムリチム

ナパパ

オブニ

第11宇宙

ジレン

トッポ

カーセラル

ココット

第二百二十九話 模倣

「うおおおおおッ！」

「てやああああッ！」

第6宇宙のナメック星人であるサオネルとピリナが猛攻を仕掛けていた。

二人はただのナメック星人ではない。

第6宇宙に生きる全てのナメック星人が宇宙を守るために、二度と戻れぬ覚悟で融合した超ナメック星人だ。

いわば第6宇宙の全てのナメック星人……故にその強さは潜在能力を解放した悟飯とすら渡り合うレベルにまで到達している。

対し、それを迎え撃つのは先代と融合して一人のナメック星人へ戻ったピッコロだ。

未だにマントもターバンも外さない彼はサオネルとピリナの猛攻すら涼しい顔をしたまま受け流していた。

その動きからは無駄が省かれ、流れる水のように二人のパワーを受け流している。

「こ、これが……第7宇宙のナメック星人の力……!」

圧倒的な差にサオネルが呻き、そこを狙い澄ましたようにピッコロの手刀が二人を弾き飛ばした。

舞台端まで吹き飛んだ二人は何とか立ち上がるが、戦力差は絶望的だ。

だが、二人の顔はどこか清々しいものであった。

他所の宇宙ではあるが……それでも、ナメック星人は終わりではない。

こんなにも強い男がいてくれた。それが何だか嬉しかった。

「見事だ……こんなにも強い同胞がいた事を嬉しく思う……」

「……ああ、俺もだ」

ピリナの賛辞にピッコロも笑みと共に答えた。

こんな出会いでなければ互いの宇宙の事で一晚語り明かす事も出来ただろう。

それを残念に思いながらピッコロは掌を翳し、二人を吹き飛ばした。

サオネルとピリナが脱落し、これで第6宇宙で残るのはヒットのみ。いよいよ後がなくなってしまった。

……いや、後がないのは第6宇宙だけではない。

悟飯の方を見れば彼は第10宇宙のムリチムとナパパを落とし、オブニとの一騎打ちに臨んでいる。

また、第4宇宙のキャウエイは巻き込まれないように逃げ回りつつ、戦闘不能に陥っていた第2宇宙のザーブトとラバンラを発見してコソコソと舞台から落としていた。せこい。

つまりこの時点で残りは18人。いよいよ人数で第7宇宙が他宇宙の合計よりも多くなってしまうた。

しかし本番はここからだ、とピッコロは考えていた。

何故なら奴が……ジレンがまだ残っている。

★

リゼットがアニラーザを倒していた時、悟空達の戦いも佳境へと入っていた。『身勝手の極意』——神々の領域でそう呼ばれる奥義は、身体のあるゆる箇所が勝手に判断して敵の攻撃を回避し、攻撃を行うというものだ。

悟空のそれは不完全なものながら、それでもジレンと互角の攻防を繰り広げるに至っている。

だが残念ながら、これでもまだ互角止まりだ。

いわばこの状態は“兆”。身勝手の極意の入り口に足を踏み入れているに過ぎず、奥義を使ってようやくリセットが素で出来ている事に並んでいるに過ぎない。

「サイヤ人か……興味深い存在だ。

だがその熱さがお前の限界だ！」

身勝手の極意は長続きせず、悟空の拳はジレンに容易く受け止められた。

そのまま気功波で吹き飛ばされてしまった悟空を、落ちる寸前で実体化したヒルデガンが救出する。

更に追撃に入ろうとしたジレンの前に立ち塞がったのは三体の分身セル、四星龍、そして乱入してきたベジータであった。

ベジータは今まで第11宇宙のカーセラル、ココットを相手にしていたのだが、こちらが片付いたらしい。

見れば、観客席にいつの間にかカーセラルとココットが座っている。

「第7宇宙の戦士達か……止めておけ。お前達では俺には勝てん。

さっさとあの白い女か緑色の男を連れてこい」

「……舐めやがって」

ベジータの額に血管が浮かぶ。

雑魚扱いされている……そう感じたのだ。

いや、実際にそう思われているのかもしれない。

リゼットやピッコロほどの強さはなく、悟空のように界王拳を使えるわけでもない。ければ身勝手の極意に目覚めかけているわけでもない。

またしてもベジータは、悟空に先を越されたのだ。

「いつもだ……いつもあの野郎は俺の先をいきやがる……並んだと思ったら引き離しやがる……」。

な、何度目だ……これで何度目だ……いい加減にしろ……！

サイヤ人の王子を……このベジータ様を、舐めるなあああ！」

ベジータが駆け、ジレンに挑む。

次々と拳を繰り出すがその全てが呆気なく受け止められ、虫でも払うような腕の一振りで弾かれてしまった。

地面を転がり、ジレンの恐るべき強さに四星龍と分身セルが戦慄する。

ベジータはフラフラと立ち上がるも、たった一発で足に来てしまったのか、小鹿のように震えていた。

「無駄な事は止めろ。お前の拳は傲慢だ……純粹さの欠片もないその拳では俺には勝てん」

「傲慢だと？ 確かに俺は傲慢だ……だが、それは俺のプライドそのものなんだ」
ベジータは笑い、そして拳を握り込む。

またしても悟空に先を行かれた。ウイスの語っていた『身体が勝手に判断する』領域には今度こそ自分が先に行こうと思っていたのに、気付けばいつも悟空が先にいる。

だがそもそも、ベジータに身勝手の極意は向いていなかったのだろう。

彼は今、悟空に先を越された事でその事に気が付いた。

「お前も孫悟空と同じあの技を使うつもりか？」

「ふ……たった今その考えを捨てた所だ。」

アレは俺には向いていない。どうあっても自分を捨てる事など俺には出来ん。

身勝手の極意はカカロットや神が勝手にやっていた方がいい。俺は俺のやり方で限

界を超える」

ベジータと悟空は土壤が違う。

悟空は丁寧の基本を積み重ね、多くの師に学んできた武道家だ。

身勝手の極意を習得する土台が既に出来ている。

しかしベジータはそうではない。

「俺が誰かに教えを乞うというのがそもそも間違えていた……。

当然だ……俺は生まれながらのエリートだったからな。父であるベジータ王にも戦い方を教わった事などない。

カカロット達が地球でお遊びの武道会などをやっている間にも俺はずっと、宇宙で命がけの戦いを続けてきたんだ！」

殻の破り方を間違えていた。

ベジータと悟空は土壤が違うのだから、悟空向きの方法を真似ていたのではないつまで経っても二番手に甘んじるしかない。

悟空の真似をするのではなく、ベジータ独自の道を探す。

そうする事こそが悟空を超える方法だと、ベジータは気が付いたのだ。

思えばターレスは最初からその事に気付いていたのだろう。

だから彼は最初から悟空と全く異なる道へ進み、そして超サイヤ人4という彼だけの変身を手にする事が出来た。

結論を言ってしまうえば、ブルーという変身そのものがターレスやベジータなどの現場叩き上げの戦士には向いていなかったのだ。

「うおおおおおおおおおおおおおッ！！！」

ならば今こそ悟空と違う道へ進もう。

自分を捨てたりせず、どこまでも傲慢に。

力をひたすらに高めて、今こそ殻を破る。

ベジータの叫びが木霊し、武舞台が揺れる。

青かった髪が更に色濃く染まり、放つオーラにはキラキラとした輝きが含まれる。瞳にも今までとは異なる光が宿り——そしてベジータは限界を超えた。

「これが俺の全てだ！ ジレン！」

ベジータが地を蹴って突進した。

そのスピードは今までよりも速く、そして鋭い。

受けた腕に響く重さにジレンの顔が僅かに険しくなり、ベジータを侮れぬ相手と認めた。

「っちゃあああああ！　だだだだだだ！」

攻める、攻める。

ベジータの怒涛の連撃がジレンをガードの上から叩き、押し込んでいく。

しばらくジレンはそのままベジータを見ていたが、やがて彼を認めるように言う。

「確かに強くなった……認めよう。お前は強い。だが……」

次の瞬間、声が後ろから聞こえた。

ベジータが振り向くよりも速くジレンの肘が彼の頭を打ち、地面へ倒れこませる。

何をしたのかは、端から見ていたセルにも分からない。

四星龍だけがかろうじて、ジレンの動きを捉えていた。

今ジレンは、とんでもない速度でベジータの背後に回り込み、そして攻撃を仕掛けたのだ。

「それで俺に勝てるかは別問題だ」

「不味い！」

「行くぞ、セル！」

ベジータ一人では荷が重い。

そう判断し、四星龍と三体の分身セルがジレンへ挑んだ。

ベジータもすぐに起き上がり、再びジレンへと立ち向かう。

「ぶるわあああああ！」

「焼き尽くしてくれる！」

「カカロットの出番はないぜ！」

数の上では五対一。加えて一人一人が魔人ブウを遥かに凌ぐ実力者だ。

だが相手は破壊神をも超えた男。戦いが開始されてより終始、圧倒されているのは数で勝るベジータ達の方であった。

即席故の連携の拙さはあるだろう。

時には味方が邪魔になっている事もあるだろう。

だがそれでも超を付けてもいい達人が五人で攻めているのだ。普通に考えて圧倒出来ない方がおかしい。

なのに圧倒するどころかされている。いくら攻撃してもダメージがほとんど通ら

ない。

「おおおおおオオ！」

四星龍が気を全開にし、身体の温度を上げる。

今の彼は触れるだけでダメージを与える6000度の、太陽の化身だ。

しかしそれでも戦局が変化していない。

大した脅威ではない、というわけではない。十分に驚異的な能力だ。

だがそれでも変わらないほどに、ジレンが強すぎるのだ。

四星龍達の怒濤の攻めを冷静に防ぎ、弾き、避け、そればかりか隙あらば反撃す
ら行う。

ベジータの腹に剛腕が突き刺さり、分身セルを手刀で切り飛ばし、四星龍の頭を
掴んで地面にめり込ませる。

四星龍の熱すら物ともしていない。膨大な気が防御膜となり、ジレンの手を保護
してしまっている。

「ビッグバンアタック！」

「バーストアタック！」

「かめはめ波！」

四人が同時に攻撃を放つも、ジレンは膨大な気の圧力でそれを防ぎ、そればかりか跳ね返してしまった。

ベジータと四星龍の前に咄嗟に分身セルが飛び出してバリアを展開する。

これが功を奏してベジータと四星龍はダメージを少なく抑えることが出来た。だが……。

「ぎえええええええっ！」

「そ、そんな……！」

二体の分身セルが消し飛び、分身セルがこれで全滅してしまった。

そして、ダメージを抑えたと言ってもゼロではない。

ベジータと四星龍は地面に倒れ、荒く呼吸している。

ジレンはそこに止めも刺さずに背を向けた。

「戦士よ……眠……」

言いかけている最中に、空気を読まずに別方向から飛来した白い流星がジレンを殴り飛ばした。

光の正体は、アニラーザを叩き落し、こちらの援護に駆け付けてきたリゼットだ。衝撃で吹き飛んでいくベジータをヒルデガンに回収させ、ジレンと向き合う。両足には再び鎖が戻っており、ベジータ達が稼いだ時間のおかげで気の乱れは治ったようだ。

リゼットは自然体で佇みながら、先程の悟空が見せた力を思い返していた。

『身勝手の極意』——神々がそう呼んでいたあの姿は、超サイヤ人などと異なり、サイヤ人特有の変身というわけではなく、どちらかという神専用の変身のようなものであるとリゼットは考えていた。

リゼット自身も身勝手の極意に極めて近い領域におり、自然に身体が動くが、これはただの慣れと練度が齎すものであって身勝手の極意とは全く違う。

何より、リゼットが行うそれに戦闘能力の上昇効果はない。

ならば身勝手の極意とは一体何なのか。リゼットはこれを、神の気を細胞の隅々まで行き渡らせる事で成立する、『神の気の完全なコントロール』であると推測していた。

神の気のみが実現させ得る奥義。神の気と肉体の完全な同化……それこそが身勝

手の極意の正体ではないだろうか。

そして細胞の隅々まで行き渡った神の気が闘志に呼応し、身体を勝手に動かす。悟空は恐らく、その天才的なセンスを以て神の気を身体と同化させたのだ。

神の気を纏うのではなく、神の気と一つになる……それは彼が行う完成ブルーよりも更に一段階上の世界だ。

悟空は神の気を無駄に放出する事を止め、体内に閉じ込める事で完成ブルーという奥義を完成させるに至った。

だが閉じ込めただけで、一体化までは果たしていない。

無駄に放出されていた神の気を体内に閉じ込めるだけで、大幅なパワーアップが果たせたのだ。

ならば完全な同化に成功したならば、一体どれだけのパワーアップが出来るのか……。

その兆を悟空は見せつけてくれた。

（本当に……気付けば先を歩いていますね、悟空君は）

何というセンス。何という天才。

孫悟空の恐ろしい所は、この桁外れの戦闘センスにこそある。

単純な戦闘力という点で見れば元々は下級戦士だったのだろう。ベジータ曰く落ちこぼれだ。

しかしその戦闘センスは天才と呼ぶ他なく、気付けば自分もベジータも悟空の背中を見ている。

同じく戦いに生きる者として妬かずにはいられない。

孫悟空は闘争に愛されている。

(しかし、完全ではない)

見たいと思った。

孫悟空が完成させる、真の身勝手の極意を。

この大会はジレンに勝たずして第7宇宙の勝利はあり得ない。

だがジレンはあまりに強く、ベジータ、四星龍、分身セル×3の組み合わせですらまるで太刀打ち出来ない。

この分だとりゼットを含めた第7宇宙総がかりでも勝つのは難しいだろうし、仮に勝っても多大な犠牲を払ってしまうだろう。

だがそんなジレンに唯一対抗し得るのが、悟空のを見せてくれた身勝手の極意だ。まだ完成はしていない……しかし、悟空ならばきつと、切っ掛けを与えれば完成させてくれる。

故にリゼットは、悟空を飛翔させるべく彼の踏み台になる事を決意した。

「悟空君！」

ジレンと相対したまま、倒れている悟空へと声をかける。

悟空の救援にはセルが向かってくれたので、そのうち回復するだろう。

だが現状では回復してもまだ勝てない。

ならばこそ、悟空には見せておかなければならない。彼が見せた身勝手の極意“兆”の戦いを。それを外から客観的に見た時の光景というものを。

そうすればきつと、彼なら答えに辿り着けるから。

「私とジレンの戦いをよく見ていて下さい。

貴方の身勝手の極意はまだ完成していない。

完成に何が足りないのか、何が必要なのか。

貴方ならばきつと、見極められると信じています」

リゼットはそう言い、目を閉じた。

思い出すのは先程の悟空の動き。

リゼットは身勝手の極意を身に付けているわけではない。どう身に付けなければならないのかも分らない。

取っ掛かりは見たが、リゼットがこれを習得するには修練が必要だろう。

リゼットは悟空のようにぶつつけ本番でいきなり技を習得してしまえる天才ではない。

積み重ねた土台があつて初めて覚える事が出来るタイプだ。

故にこれから行うのは身勝手の極意ではなく……ただの物真似。

(確かこう……力を抜いて、意を消して……)

その時、その場の全員が驚くべき物を目にした。

その場に立っているリゼットの姿が一瞬、別の誰かに見えたのだ。

感じられる気の流れが、静かな瞳が、無形の構えが。

それはまるで、先程の孫悟空のように。

——象形拳というものがある。

より優れた者に倣い、その動きを模倣して取り入れる武だ。

獲物を狙う蠍の動きを模倣した蠍拳。蛇の動きを真似た蛇拳。

その他、虎や獅子、熊、豹、鳥など真似る先達には事欠かない。

牙を持たぬ人の身で獅子になる。爪を持たぬ人の腕で熊となる。

翼がなくとも鳥になり、鎌がなくとも蠍へと変わる。

ただの模倣。そう言われてしまえばそれまでだ。否定する要素はどこにもない。仮に火を吹いて戦うゴジラ拳なるものを完成させたとしても、所詮は真似事だろう。

しかし優れた象形拳の使い手はそこに、真実オリジナルの動物がいるかのように錯覚させるほど上手く憑依まねするという。

身近な例で言えば、狼の動きを真似た狼牙風風拳や龍の力強さを模倣した龍拳などが該当するだろうか。

特に孫悟空の龍拳に至っては気を操る事で自らが神龍と化すという離れ業までやっている。

ましてやここで真似ているのは280年の武を誇るリゼット。

それを見ているのは宇宙の存亡をかけた戦いに出るほどの達人達だ。

当然、その観察力は神がかっている。

ならばこそ見える虚像^{しんじつ}。

神がかった観察眼で、積み上げた武で、全力で孫悟空を真似る。

故に完成する——いわば、孫悟空拳とでも言うべき型。

強い意思を感じさせる瞳が、力強い動きが、立ち上る気が、そこにいるはずのりゼットを薄くしていく。

今やりゼットの実体は希薄となり——そこに込められた孫悟空^{おもい}だけが実体化を果たしていた。

「オ、オラ……？」

無論悟空本人にも見えている。

そこに立つ、身勝手の極意を発動した自分自身の姿が。

それを見てジレンは顔を険しくし、ビルスは拳を震わせていた。

「模倣^{まね}たというのか……身勝手の極意をッ！」

「恐るべき観察力、と言う他ありませんね。身勝手の極意を身に着けたわけではな

く、身勝手の極意を使った悟空さんを再現^{まね}た。

簡単に出来る芸当ではありません」

「何て奴だ……」

ウイスの説明にビルスは背筋が凍る思いを感じていた。

神の奥義である身勝手の極意を極めた者は数少ないながら存在している。ウイスもその一人だ。

だが、身勝手の極意を習得していないのに再現した者など、未だかつて存在しない。

恐るべき観察眼。恐るべき再現力。

孫悟空は闘争に愛されているが、それに比肩するほどにリゼットは武に愛されている。

そうビルスは痛感し、自らに届き得る者がこんなにも現れたこの時代に目覚める事が出来た幸運に感謝した。

「行きます」

宣言。それと同時に攻撃の気配すらなくリゼットの手刀がジレンの側頭部へめり

込んだ。

頭蓋が軋むほどの衝撃に体勢を崩しかけるも、ジレンはすぐにリゼットへ反撃の一打を放つ。

当たればカチカッチン鋼すらビスケットのように碎いてしまう比類なき剛拳。

それがリゼットの細い身体を貫く――否、貫いたはずだった。

しかしまるでリゼットの身体が宙に同化したかのように手応えがなく、フワリとジレンの背後に着地する。

直後、ジレンの身体を数多の打撃が襲い、打ちのめした。

リゼットはただ避けただけではない。

すれ違い様に、ジレンに認識させる事すら許さず光速の拳撃を雨あられと放っていたのだ。

そして今さらになってジレンの肉体が攻撃を受けた事を認識し、故に遅れてダメージが発生してしまった。

そう、ジレンは自分が殴られた事にすら気付けなかったのだ。

「おいウイス！ まさかりゼットの奴、身勝手の極意を完成……」

「いえ、あれも模倣です。身体が勝手に攻撃しているわけではありません。

あくまでリゼットさんは脳で判断してから身体を動かしています。

恐らくは悟空さんの見せた“兆”から、身勝手の極意の完成形を予想し、それを再現してみただけ……ただの先読みです。ただし、恐ろしく精度の高い未来予知にも等しい先読みですが……」

驚愕するビルスとウイスのしている前で更に戦闘は続く。

ジレンがギアを上げ、リゼットを強敵と認めて拳の弾幕を放つ。

だがこれも当たらない。

まるでリゼットがそこにいないかのように拳が空振りを続ける。

それは傍目からは避けていないようにすら見える奇妙な光景であった。

「お、おいヴァドス。もしかしてあれってヒットの技じゃないのか？　ほら、別空間に逃げるっていう……」

「いいえ、違いますよシャンパ様。リゼットさんは別空間に退避などしておりません。

しっかりと、あそこにあります」

「けど實際、拳が突き抜けてるじゃねーか？」

「避けていますよ、ちゃんと。その動きがあまりに無駄なく、最小限である為に避けていないように見えるだけです」

尚も拳を打ち続けるジレンへと、リゼットは無防備に一步近付く。

拳はやはり当たらない。当たっているように見えるのだが、悉くリゼットを突き抜けてしまっている。

“通り”抜けているのではない。“透り”抜けている。

一見すると緩やかにすら思える緩慢な速度で、残影の尾を残しながらリゼットがジレンの背後へ回り込んだ。

それに反応してジレンが拳を薙ぐも、やはり残影を捉えるのみ。

まるで流水のようにゆったりと、それでいて透り抜けるように翻弄する。

これならばいっそ、ここに居るのは幻で本体は別の場所にいると言われた方がまだマシだっただろう。

だがそれを否定するようにリゼットが掌打を放ち、ジレンの腹を打ち抜いた。

「ごっ……!?!」

ジレンが胃液を吐き、そのまま身体ごと後方へと吹き飛ばされた。

追撃はない。リゼットはそれを静かに見つめ、やがて小さく息を吐いた。

その直後にどっと汗が吹き出し、荒く呼吸を繰り返して肩を揺らす。

（流石は、神の奥義……真似るのは少し無茶でしたかね。

少し真似ただけでこの消耗とは）

身勝手を習得しないままにそれ以上の動きをするという事。

それは即ち、それだけ先を読んで動かなければならないという事だ。それだけ神経をすり減らすという事だ。

普段ならば絶対にやらないだろう。僅か数秒の優位の為に体力と精神力を大幅に削るなど愚策ではない。

だが、今回に限って言えば十分に価値があるとりゼットは確信していた。

「見ていましたか、悟空君。

今、私が見せた動きこそが貴方の辿り着く到達点……の予想図です。

私は少し真似ただけでこの様ですが、貴方なら完成させる事が出来ると確信しています」

そう言い、茫然としている悟空へと笑いかけた。

先はこれで見せた。ならば不慣れな物真似はもう終わりでいいだろう。

少しばかり体力を使い過ぎたが、それだけの価値はきつとある。

体力を消耗したりゼットヘジレンが近付いて来る。

タフな男だ。あれだけ打ったのに、もう平然としている。

「恐るべき技の冴えだ。しかしそれもここまでのようだな。お前は侮れん……ここ
で落とさせてもらう」

「悪いが、それをやらせるわけにはいかんな」

リゼットを落としたいジレンだが、しかし彼の前にまたしても新たな敵が立ち塞
がった。

それは先代と融合する事でスーパー・パワーを得た新生ピッコロだ。

気付けばジレンは第7宇宙の戦士達と一人で戦う構図になってしまっており、追
いつめられていた。

彼は戦略を間違えたのだ。

余裕を見せて最初は静観するのではなく、もっと仲間が残っているうちに戦うべ

きだった。

落ちかけたディスポや仲間を救うべきだった。

そうすれば、実力では彼に及ばないまでも壁になるくらいの事は彼等にも出来たかもしれない。

ジレンが他の戦士を倒すまでの間、第7宇宙の戦士を身を張って止める……その程度は出来ただろう。

だがジレンは仲間を見捨てた。そもそも仲間とすら思っていなかった。

だから彼は一人残され、トップもターレスに阻まれて近付けない。

「……弱者が何人群れようと、同じ事！ 第11宇宙を守る為にも、俺は負けん！

俺が……俺一人の力で……！ 俺が宇宙を、守ってみせるッ!!」

ジレンが叫び、ピッコロがターバンとマントを脱ぎ捨てる。

そして二人の超戦士が真っ向から拳を衝突させた。

・サオネル&ピリナ…1兆3000億前後

二人がかりとはいえアルティメット悟飯と互角以上に戦ってみせた。

第6宇宙のナメック星人全員が融合したナメックの化身。

どうせならこの二人で更に融合しておけばよかったのに。

アニメでは合体パワーに慣れるまで時間がかかり、本気を出せるようになったのは彼ら以外が全員落ちてから。

戦力は悪くなかったが、慣れるまでが長すぎた。

漫画版では味方のはずのケールに近付いたら暴走した彼女に叩き落されてしまった。

融合したナメックの人達が浮かばれない。

・キュアベジータ…40兆

ブルーのハートは希望の印！ 煌めく星のプリンス、キュアベジータ！

やたら格好いいBGMをバックに変身したベジータの新形態。目が綺麗。

ファンからは『キラキラベジータ』や『キュアベジータ』と呼ばれている。

ヒーローズなどでは『覚醒ベジータ』というらしい。

原作、Z、GTを含め、初めてベジータが悟空の後追いではなく独自の進化を遂げた瞬間。

界王拳 20倍ブルーと同格のような扱いだったので、そのくらいの強さとしておく。

アニメ版ではキャベとの約束を果たすために覚醒したが、このSSでは特にそんな約束はしていなかったので漫画版の流れで覚醒した。

なので強さは同じだが、友情パワーが乗っていない。

・孫悟空（身勝手の極意『兆』）…66兆

身勝手の極意を発動した悟空。しかしまだ完成ではない。

単純な戦闘力で測れる技ではないので数値があまり当てにはならず、数値以上の強さを持つ。

とはいえ20倍でダメージが通らないジレンにダメージを通してるので一応20倍よりは上と思っている。

・リゼット（身勝手模倣）…62兆

身勝手の極意を模倣したりゼット。

ただの物真似であって別に覚醒でも何でもない。

なので戦闘力はゼノバース＋バーストリミット1→2から変化なし。

敵の攻撃は単純に来る前に予測して、あたかもオート回避しているかのような精度で回避しているだけ。ぶっちゃけただけの凄いい先行入力。

ジレンにダメージを通してるのは、単純にジレンの防御が緩むタイミングを見切り始めただけ。

いかに無敵の肉体であっても、神経を注がなければ無敵の強度は保てない。

17号曰く『無防備の状態で攻撃を受ければ効く』

身勝手の極意『極』と遜色ない動きを経験と見切りと先読みと勘だけでやっているのめっちゃ疲れる。

【残り選手】

第2宇宙

ザーロイン

第3宇宙

ビアラ

第4宇宙

キャウエイ

第6宇宙

ヒット

第9宇宙

ベルガモ

第10宇宙

オブニ

第11宇宙

ジレン

トッポ

第百三十話 孤独な正義

ピッコロとジレンが正面から組み合い、手四つの姿勢となった。

二人の腕に血管が浮き上がり、どちらも負けじと力を込めていく。

パワーで勝るのはやはりジレンだ。彼の剛腕はピッコロすらねじ伏せ、じわじわと押し込んでいく。

だがこの体勢に持ち込んだ時点で有利はピッコロにある。

彼は目から怪光線を放ち、ジレンの顔へ炸裂させた。

「ぬっ……小賢しい真似を……」

ダメージは浅い。

だが怯んだ一瞬の隙を突いてピッコロが頭突きを叩き込んだ。

衝撃で手が離れ、今度は膝蹴り。ジレンを空高く吹き飛ばしてその先へ回り込む。

「つあッ！」

ダブルスレッッジハンマー。

轟音と共にジレンが落とされ、その向かう先は武舞台の外だ。

咄嗟にジレンは外へ向けて気弾を放ち、その反動で武舞台へ戻る。

そればかりか、追い打ちをかけるべく向かって来たピッコロを蹴り飛ばして武舞台の外へ弾き出した。

「ピッコロ！」

悟空が思わず叫ぶが、ピッコロの顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

彼は即座に手を伸ばしてジレンの肩を掴み、腕の長さを元に戻す。

するとその勢いでピッコロがジレンへ向けて飛び、加速を乗せた蹴りを放った。それもジレンは冷静にブロックしているが、すぐさまピッコロの次撃が放たれる。二人は落ちながらも高速の攻防を続け、腕と脚が幾度も交差して打撃音を響かせた。

そして武舞台に落ちる寸前で一度距離を取って宙返り。

地面に着地すると同時に飛び出し、二人の腕が衝突した。

だがピッコロの方が次への繋ぎが早い。

ガードされる事を予想していたように膝蹴りへ移行し、ジレンに防御を強いる。その防御すら織り込み済みだ。左足を軸に回転し、回し蹴りを側頭部にめり込

せる。

身体を支える為に思わず地面に付いたジレンの腕を蹴りで払い、無防備に倒れた瞬間に踵落とし。

ジレンはこれを、得意の眼力で防ごうとするが……それすらも強引に突破してきたピッコロの踵が彼の胸にめり込んだ。

「ぬっ……」

ジレンはすぐにピッコロの足を掴んで持ち上げつつ立ち上がり、彼を逆さにする。だがそれこそ待っていましたとばかりに、ピッコロは口からの破壊光線をジレンの顔へ打ち込んだ。

思わずピッコロを放してしまうジレン。宙に跳び、すぐに体勢を立て直すピッコロ。

単純な実力ではジレンが勝るものの、ピッコロは巧みな動きで彼に食らいついている。

「強いな……」

「いえ、強いだけではありません。巧くなっています」

ピッコロの強さにセルが感心するが、リゼットはそれだけではないと補足を入れた。

ピッコロが先代との融合で得たのは知識とパワーだけではない。

先代の経験と技術もピッコロに継承されていた。

長い年月を生きる事でのみ得られる膨大な経験値が今の彼には蓄積されているのだ。

圧倒的なパワーと経験に裏打ちされた技術。

その二つを併せ持つ今のピッコロは、ジレンといえどそう簡単には倒せないだろう。

「……これは、不味いかもしれないですますよ」

「何？」

戦いを見守っていた第11宇宙の天使マルカリータが独特な話し方で己の宇宙の不利を告げた。

それにベルモッドが振り向き、まさか、と言う。

「よく見ろ、ジレンの方が強い。手こずってはいるが、負けはしないさ」

「しかし体力を削られています。ジレンといえど体力は無限ではありません。ですが……ご覧ください」

マルカリータはそう言い、リゼット達の方を見る。

そこではリゼットがベジータ達に掌を翳し、何かを行っていた。

すると戦闘不能になっていたはずのベジータと四星龍が立ち上がり、再びセルは四人に分身している。

更にリゼットは悟空へ近づき、彼まで復活させようとしている。

「あ、あいつ……」

「どうやら味方を回復出来るようですね。

そして彼女のあの鎖付きの姿は一度使うと気が乱れて次の使用までインターバルが発生するようですが、その時間を緑色の男に稼がれてしまっています。

逆にあの男を倒しても他の戦士が出てきて、回復されてしまうでしょう。

数の利を見事に活かしていますわ」

「おのれ……小賢しい真似を……」

このままでは圧倒的に不利だ。

いかにジレンが強くても、一人ではどうしようもない事もある。

ジレンは第7宇宙の連携を前に、今は亡き師匠の事を思い出していた。

師——ギッチンはジレンが卒業する事を最後まで認めてくれなかった。

あの時のジレンは確かに今と比べれば弱かったが、それでも何故師匠が最後まで認めてくれなかったのかはジレンには分からない。

ギッチンが何故ジレンをプライドトルーパーズに入れたかも不明のままだ。

だが師匠の死はたった一つの真実をジレンに教えてくれた。

それは信頼の脆さ。無価値さ。

仲間などいなくていい。自分一人だけが最強であればいい。そうジレンは悟った。

——だって誰も……誰も、一緒に来てくれなかったじゃないか……！

「うおおおおおおお！」

ジレンが吠え、全身から紅蓮の気を解き放った。

第7宇宙を手強しと見て、ここにきて遂に力のセーブを止めたのだ。

呆れた男であった。何とこのジレンという男は今の今まで加減したまま戦ってい

たのだ。

第11宇宙最強の名に一切の偽りなし。加減したままでも界王拳20倍ブルーの悟空を寄せ付けなかった彼が本気になった今、その気の圧力は遥かな高みへと達している。

リゼットはそんなジレンの全力を肌で感じながら表情一つ変えていない。

だが頬を伝う冷や汗が、彼女の本心を雄弁に語ってしまっていた。

「でやああああ！」

ジレンが今まで以上の速度でピッコロへ迫り、拳を彼の腹へめり込ませた。

今のピッコロはリゼットを除けば第7宇宙最強の戦士だ。

リゼットのゼノバースには暴走の危険があり、バーストリミット・マイナスを使えば気が乱れる事を考えればピッコロこそが最強かもしれない。

その彼がたったの一撃でよろめき、膝を突く。

あまりの光景に戦士達が戦慄するが、即座にピッコロを救うべくベジータが飛び込んだ。

「ジレン！ 貴様の相手はこの俺だ！」

ベジータがジレンの胸板へ拳を叩き込み、更に連続して攻撃する。だがジレンは微動だにしない。

圧倒的過ぎる気の圧力で完全に攻撃を無効化してしまっている。

一切の油断を止めたジレンはベジータの首ヘラリアットを叩き込み、そのまま高速で跳躍。

その先にあった岩盤へベジータを衝突させ、貫通した。

「ぐ、あああ!？」

「消えろ、弱者よ！」

そのままダブルスレッズハンマーへ移行。

第7宇宙の戦力を前にジレンから余裕が消えた。

もう倒れている相手を落としてもせずに背中を向けて『戦士よ眠れ』などと言ったりはしない。

ジレンの本気の前に覚醒したベジータが成す術もなく地面にぶつかり、青髪が黒髪へ戻ってしまった。

そんな彼の足を掴み、振り回して場外へ放り投げる。

咄嗟に飛行出来る四星龍がベジータを受け止めるが、それはジレンの罠だ。

一瞬で四星龍の上へ跳躍した彼の蹴りで、四星龍はベジータ諸共場外へ落とされてしまい、ビルス達のいる観客席に転移した。

「第7宇宙ベジータさん、同じく第7宇宙四星龍さん、脱落でございます」

「な、なんだと……!?」

四星龍とベジータは強い。

他の宇宙ならばエースになっていてもおかしくない程に強く、神の領域にすら至っている。

それが二人一気に落とされてしまい、今まで余裕の面持ちだったビルスの顔に焦りが浮かぶ。

不味い……まさか、このメンバーでも負けるのか？

エースだけを集めたこの十人でもジレン一人に及ばないのか!?

「ちいっ!」

「合わせろ、ピッコロ!」

今度はピッコロと、分身を含めた四人のセルが突撃する。緑ばかりでとても目に

優しい。

ピッコロは正面から、セルは側面と背後から果敢に攻めるがジレンはもう防御すらしない。

腕を交差して気を解放し、目障りだとばかりに彼等を吹き飛ばした。

たったそれだけで分身セルが全滅してしまい、本体も何とかリングに不時着する。ピッコロは宙返りしつつ着地し、それと同時に飛び出した。

再びピッコロとジレンの攻防が始まるが、もうピッコロですらジレンには届かない。

ピッコロの拳を受けながらジレンが反撃し、ダメージを刻み込む。

それでも何とかピッコロも蹴りや打撃を放つも、ダメージの差が大きすぎた。

数秒の戦いの後にピッコロがリングへ落とされ、起き上がる事も出来ない。

そんな彼を無視してジレンは最も厄介なりゼットの前に、リングを碎いて着地した。

悟空の回復はまだ終わっていない。

回復する前にリゼットと悟空を仕留める気だ。

（何という気の圧力……仮にバーストリミット・マイナスを解除してフルパワーで挑んでも届く気がしない……）

果たしてリゼットとジレンの差は如何ほどだろうか。

二倍？ 三倍？ あるいはそれ以上？

どちらにせよ、ここにきて完全に戦闘力の格付けは終わった。

単純なパワー勝負をするならば、万に一つもリゼットの勝ち目はない。

「リゼットと言ったな……」

その強さは認めよう。だがお前の実力は既に見切った。お前では俺に勝てん」

「見切った、ですか……是非、どう見切ったのかを教えて頂きたいものですね」

リゼットは平静を装いながら、セルに目配せをした。

援護しろ、というわけではない。

むしろその逆。自分が一人で引き付けるから余計な手出しをするなど念押ししたのだ。

ジレンの強さの前では最早、超サイヤ人ブルー級ですら相手にならない。

仮に第7宇宙全員で襲い掛かっても目的が増えるだけで、下手をすれば数人が一

気に叩き落されてしまう。

ターレスはトッポ、ミラはヒット、悟飯はオブニの相手でこちらに来れない。ならば残された戦力はリゼット、悟空、セル、ピッコロ、ヒルデガーンのみだ。そしてピッコロが倒れ、悟空も未だ回復が終わっていない。セルもダメージが深い。

ヒルデガーンは残念ながらレベル外だ。下手に実体化させればそこで終わる。となればもう、リゼットが身体を張って止めるしかない。

(……………最悪、攻撃を受ける瞬間にわざと気をゼロにまで落とし、私が殺される事でジレンを反則負けにする事も考慮するべきかもしれないですね)

ジレンに勝つ事は困難だ。

だが道連れにするだけならば手段はある。

相手を殺してはいけないというルールを逆手に取り、あえてジレンの剛拳を無防備で受けるというのも戦略としては有効だろう。

そうすれば防御の脆いリゼットなど確実に即死し、ジレンを反則負けで退場させる事が出来る。

問題は、それを自殺と見なされてしまう可能性もある事か。

「行くぞ！」

考える間も満足に与えられぬまま、ジレンがリゼットへと迫った。繰り出される剛拳を紙一重で避け、ジレンの顎を掌打で打ち抜く。

完璧なタイミングでのカウンターだ。

脳を揺さぶるつもりで放った一撃……だがジレンは揺らがない。

まるで通用していないかのように次撃へと移行している。

これもギリギリまで引き付けてから回避し、ジレンの身体へと拳撃を雨あられと叩き込んだ。

瞬間に千発を超える光速を置き去りにした拳打の嵐。だがジレンはまるで動じずにリゼットへと拳を繰り出す。

唸りをあげてジレンの巨拳がリゼットへ炸裂し、咄嗟に張ったバリアを貫通してガードごと彼女の小柄な身体を殴り飛ばした。

「……っ！」

吹き飛びながらも空中で回転し、着地する。

脱力による威力の受け流しは成っている。だというのに、ジレンの拳を受けた腕は激しい痛みをリゼットへと訴えていた。

「流石……と言うべきでしょうかね。」

この威力、単純な戦闘力だけならば、ビルス様すら超えているかもしれません。よく分かりました。フィジカル勝負では私に勝ち目はありません。少し、小細工を使わせてもらいます」

リゼットの纏う雰囲気が変わった。

それはまるで、今まで隠していた武器を出したかのような剣呑で油断出来ない空気だ。

見た目は変わっていない。

しかし悟空には分かった。

リゼットは今、封じていた真剣を鞘から抜いたのだ。

かつて天津飯と戦った時の悟空と同じだ。

……試合用から、真剣勝負へとスイッチを切り替えた。そう確信して悟空の背を冷たいものが走る。

「あまり悪人以外にやりたい戦い方ではないのですが、そうしなければ貴方とは戦える気がしません。」

……覚悟はいいですね？　ここからの私は……ちょっと、ズルいですよ」

そう言い、リゼットは両手をダラリと下げた。

足枷のうちの一つが砕け散り、バーストリミットの倍率が3〜4倍にまで引き上げられる。

ここからはリゼットも体力度外視の本気だ。

高まる衝突の予感に、神々すら呼吸を忘れて見入っていた。

【戦闘力】

・ジレン…130兆

パワーのセーブをやめたジレン。

今までは相手を殺さないように力を抑えていた為、攻撃にはMAXでも精々60兆くらいの力しか使っていなかったが、ここからは加減なし。

その戦闘力は既にビルスを凌駕している。

・リゼット…93兆

バーストリミット3〜4倍。暴走しないギリギリラインであり、今のリゼットのフルパワー。

今までは『試合』に徹していたが、それでは太刀打ち出来ないので真剣を抜いた。

第百三十一話 ジレン、危うし

「……っ」

何かに弾かれるようにジレンが飛び出した。

何が変わったかは分からない。

だが何かが不味いと彼の直感が告げていた。

だからこそこれ以上雰囲気呑まれる前に仕留めようと焦ったのかもしれない。

ジレンがリゼットへと迫り、またも拳を繰り出す。

そこに合わせ、リゼットは極限の脱力から放たれる鞭打をジレンの股間に放った。

何の事はない一打……言うまでもなくジレンの肉体へのダメージはゼロだ。

だが次の瞬間、ジレンはこれまでのポーカークフェイスを崩して激痛にのたうち回る事となった。

「~~~~~~~~ッ！……！！？」

痛がっていた。

激痛がっていた。

苦痛いたがっていた。

辛苦いたがっていた。

イタがっていた。

あのジレンが。揺るがぬ最強の象徴が恥を捨て、汗と唾を流し、激痛にのたうっていた。

全てを忘れ去り、股間を押さえてゴロゴロと武舞台の上を転げまわるその姿に今までのような威厳はない。

「ど、どうした、ジレン！ そんなビンタが何だというのだ！」

ジレンの異常にベルモッドが立ち上がり、叫んだ。

ベルモッドとジレンの付き合いは短くない。

だがベルモッドの知るジレンは常にクールで、落ち着きを失わない男であった。強さの象徴だった。

そのジレンがあんなに痛みに悶え狂う姿など、見た事がない。

ベルモッドが説明を求めるようにリゼットを睨むと、リゼットはそれを察して簡単な説明をしてやる事にした。

「いかに肉体が強くとも、耐えられない攻撃というものがあるのです。

圧倒的弱者が強者と戦う為に編み出した、悪辣な人の技……神である貴方には縁のないものだったでしょうね」

鞭打は全身の力を抜き、それによって成立する一撃だ。つまり破壊力という点で見ればこの上なく弱い攻撃である。

実際はダメージなどない。ただ痛みのみを、この技は与える。

『ドカン！』と攻撃をすれば鍛えた大人と少女とで感じる激痛いたみは全く違う。

だが『ピシャン！』と叩かれたならば、その痛みは平等だ。

皮膚という最大の器官に対する、苦痛のみを目的とした一撃。これが当たればジレンといえど無表情ではいられない。

「趣味のいい技とは言えませんが、惜しみなく使わせて頂きます。

正攻法では勝てる気が全くしませんからね」

「そこまでして、何を超ドラゴンボールに求める？ お前の欲しいものは何だ？」

畳みかけようとするリゼットへ、尚もベルモッドが話しかけた。

ジレンが痛みから復帰するまでの時間稼ぎをする気なのだろう。

しかし時間稼ぎはこちらも好都合。悟空が復活するまでの時間が欲しいのはリゼットも同じなのだ。

なので、あえてベルモッドの話に乗る事にした。

「特に何も。あえて言うならば、第7宇宙を消させない事が目的でしょうか。

叶えたい願いはないので、そちらは他に何か叶えたい人がいれば譲りますよ」

宇宙の復活、とはまだ言わない。

ここでそれを言ってしまうと、大神官が『それはなしにしましょう』とか言い出す可能性がある。

だからギリギリまで待ち、神龍に直接言うのが確実だろう。

とはいえ、リゼットは神の言語を使えないのでビルスにでも代弁してもらう必要があるだろう。

「ふざけているのか？ そんな事でジレンの願いを阻むなど……」

ベルモッドはリゼットを強く睨み、そして少しは落ち着いてきたのか椅子へと座った。

そして、絞り出すように声を発する。

「お前たちにも教えよう、ジレンの強さへの執着の理由を。」

ジレンはある悪党に両親を殺されたんだ。そして師匠となる男に助けられ一命を取り留めた。

それからジレンは師匠の下でさらなる強さと正しい道を極めようとした。

一人、二人、三人……ジレンの周りには仲間ができた。そこに再び奴がやって来た。

仲間とともに戦った。ジレンには勝てる自信があったんだ。だが奴は強すぎた。ジレンの仲間は次々と殺された。ジレンの師匠までも奴との戦いで命を落とした。

ジレンは再び立ち上がろうとしたが生き残った門下生に立ち上がる者はいなかった。

力なき者は強者に従うしかなかったのだ。ジレンは独りになった。信頼していた連中に裏切られたジレンの悲しみは計り知れない……。

そのとき痛感したんだ。信頼など無価値だと。それと同時に理解したのさ、強さこそ正義。強さこそ絶対なのだと。

勝てば周りがついてくる。勝利すればすべてが手に入る。

そこに感情など不要。オレはそんなジレンのとてつもない強さへの渴望とその孤独心に惚れたんだ」

「……………あ、はい」

何だか、唐突にジレンの過去を語り始めたベルモッドに、リゼットはつい間拔けな声で返事をしてしまった。

いや、特にそういうの聞いてませんので……と、言いたいのを何とか堪えた結果、出て来たのがこの間拔けな声だ。

こんな所でいきなりジレン語りをされても何と言うか、反応に困る。

いや、確かに悲劇と言えば悲劇なのだろうし、壮絶と言えば壮絶なのだ。

だがいきなりそれを語られて心に響くかどうかは、全くの別問題だ。

とりあえずジレンが可哀想な男だという事だけは理解した。

しかも本人の同意なしに過去の恥部を明かされるというオマケつきだ。

彼も彼なりの叶えたい願いを抱いてこの大会に来ているのだろう。

それを踏み躪ってしまうのは心が痛むが、こちらも宇宙の存亡がかかっているの

だ。

いくら悲劇自慢をされても、それで『それは可哀想です。負けてあげましょう』などと手を抜くわけにはいかない。

第一、そんな真似をしてはそれこそジレンに失礼だろう。

「おの、れ……」

ジレンが鬼のような形相で立ち上がったのを見て、リゼットは即座に気を引き締めなおした。

立ち上がるのは最初から分かっていた事だ。

倒れた時に立ち上がるか、それともそのまま沈むか。

それは打たれた瞬間、その一瞬の心の内でこそ決まる。

『やられた！ 許してくれッ！』と思うのか？

『やられた！ 許さんッ！』と思うのか？

倒れ込むほんの数瞬の表情……心に残された闘争心の残量はその表情にこそ表れる。

そしてジレンは、実にいい貌で倒れた。

だから立ち上がる事は最初から分かっていたし、何度同じ攻撃をしても彼は立ち上がるだろう。

「……………」

こちらからは攻撃しない。あくまでジレンの攻撃待ちだ。

舐めているわけではない。こうしなければすぐに負けてしまうから、そうするしかないのだ。

ジレンと正面からやり合えば叩き潰されるのは目に見えている

故に専守防衛。ジレンの攻撃を待ち、彼自身の力も加えてカウンターで切っ落とす。

戦えば負ける。だが護身に徹すれば時間を稼ぐ事は可能だ。

武とは何か。

亀仙人ならばそれは、楽しく生きる為のものと答えるだろう。

悟空にとっては強くなるための道なのだろう。

だがリゼットにとっての武は、いつてしまえば武器だ。

弱者が強者から身を守る為の、護身……守る為の力。それこそがリゼットの考え

る武である。

ならば、彼女の真価が発揮されるのは対格上との戦闘時に他ならない。

自分よりも遥かに強い相手から身を守る、弱者の為の技術。

故にここからが——リゼットの本領発揮だ。

「おおおお！」

地を蹴り、ジレンが右拳を突き出した。

しかしそれが当たったと思った刹那、ジレンの巨体が宙を舞った。

相手の力を100%相手へ返し、完璧な合気で投げ飛ばしたのだ。

殺意や敵意を伴った攻撃であれば、それがどれだけの速度だろうと物の数ではない。

たとえ光より速かろうと、攻撃に移る前に敵意が先にリゼットへ届いてしまう。『これから攻撃するぞ』という信号が先に届いてしまうのだから、リゼットはそれに合わせて攻撃が来る前にカウンターの準備を終えればいいだけだ。

いわばこれは未来予知にも等しい絶対予測。これを抜けたくば、意を完全に消した攻撃を放つ以外に手段はない。

背中から地面に衝突し、ジレンが痛みに呻く。

リゼットの攻撃は効かずとも、ジレン自身の力を返されれば流石にダメージが通ってしまう。

「ぐおおお！」

すぐに立ち上がり、気功波を放った。

しかしそれもリゼットの前に出現した亜空間に吸い込まれ、ジレンの後頭部に炸裂する。

防御とカウンターに徹した時のリゼットの悪辣さは群を抜いている。第7宇宙一と言ってもいい。

近距離で戦おうが遠距離で戦おうが関係なく、全ての力を跳ね返されるのだ。

身勝手の極みとはまた異なる、いわば護身の極み。

これを撃ち崩すのはこの上なく困難だろう。

ジレンを最強の矛とするならばリゼットは最強の盾だ。

対技術戦で彼女を凌駕しない限り、この牙城は崩れない。

何度もジレンが攻めるが、その都度地面を転がるのは常にジレンの方だ。

向けた力をそのまま返されるなど、ジレンにとっては初めての事であった。

自分の方が強いのに。自分の方が速いのに。

誰がどう見てもジレンの方が強くて速くて硬くてデカくて重くてタフで、全ての面で勝っている。

より強い方が勝つという、この世界の絶対の法則。常識。

それが通じない。弱い者が強い者を打ちのめすという、あつてはならない現実が展開されている。

いかにジレンが強くとも、当たらなくては意味がない。

瞳を輝かせて拳のラッシュを放つも、それはもう散々見た技だ。

リゼットはジレンの拳を全て回避し、逆に渾身の蹴り上げをジレンの股間へとめり込ませた。

いかに強力な技だろうが何度も見せるものではない。こう何度も見せられてはベジータや悟空だって見切ってしまうだろう。

戦闘の天才であるベジータならばリゼット同様にカウンターを合わせる事すら可能かもしれない。

「私の強さを見切った。そう言いましたね」

ジャストヒットさせず、あえてジレンの顎の皮一枚を掠めるように拳打を放った。たったそれだけの事で難攻不落を誇ったジレンが呆気なく膝を突く。

強く顎を叩くのではなく、あえて皮一枚だけを超速で掠める。これが意外なほどに脳を揺さぶるのだ。

そこに容赦なく追撃。掌に真空を生み出し、ジレンの顔を叩いた。

『空掌』。特殊な力の操作により掌に真空を生み出し、相手の口に当てて肺の中の酸素を全て吸い出して酸欠に追い込む技である。

宇宙人であるジレンならば真空の中でも生存出来るかもしれないが、呼吸している事もまた確認している。

この世界にはフリーザのように真空でも生存出来るくせに疲労すると何故か息切れを起こす不思議生物もいるので確実とは言えないが、ジレンはその場で激しく咳き込んでしまった。

とはいえ、本来は相手の実力など無関係に一撃で失神させる技である事を考えれば、やはり地球人の常識は当てはまらない。

「確かに力も速さも体力も、フィジカル面では全てにおいて貴方が勝ります。

しかし私の強さは悟空君達のようにフィジカルに特化したものではありません」
今度は耳を狙う。

宇宙人であるが、目、鼻、口の位置が地球人と大差ない以上、そう大きな構造上の違いもないだろう。

ジレンの耳を叩き、そこから一点照射で気を送り込んだ。

地球人ならばこれで、反対側の耳から脳が飛び出して即死するだろうがやはりジレンは身体の造りが違うのだろう。

両耳の穴から鮮血を吹き出しながらダウンするも、死の気配は全くない。

言うまでもなく、リゼットは本気でこの攻撃を行っている。全く手心を加えずに殺す気でやっている。

だが矛盾しているようだが、殺す気で攻撃していてもジレンは死なないという確信があった。

ジレンは強い。強すぎるほどに強い。

だからこそ、信じる事が出来る。

自分がどれだけやっても彼は生き延びてくれると、そう信じたからリゼットは本当の戦い方を解禁したのだ。

「……………お……………ッ！」

死なないまでも効果はあった。

ジレンの手は震え、立ち上がる事すら出来ていない。

しかし立てないならばそこで終わる。リゼットとはそういう相手だ。

突然ジレンの足元が開き、彼は本能的に跳躍して難を逃れる。

ヘブンズゲート。

ガリックJr.のデッドゾーンを参考に編み出されたそれは、今や別の技と化している。

本家と異なり、空間移動として用いる事が出来るのは勿論としてゲートを出す場所すら選ばない。

その特性を理解したわけではない。

だがジレンは長年の経験から、それが受けてはならない技だと直感的に悟っていた。

まさに超一流の戦士のみが持つ戦闘勘と言えるだろう。

だがまだ終わらない。ジレンを囲むように複数のゲートが同時展開され、そこから一斉に気功波が発射された。

「ぐおおおっ！」

腕をクロスしてガードし、ダメージを抑える。

吹き飛んだ先にまたしてもゲートが開いたので気弾を撃った反動で何とか逃れば、今度はそれを読んでいたようにリゼット本人が跳んでジレンの額へ拳打を放った。

リゼットにしては珍しいグーのパンチだ。

勿論それもただの拳打ではない。拳の握りは開かず、閉じず……人が生まれてから最初に形作る赤子の手の握り。

まるで菩薩の手のような半端な握りから、完全に攻撃の意を消して攻撃を放ったのだ。

衝突——それと同時に拳を握り、一打で二度の衝撃をジレンの脳天に叩き込んだ。まだ終わらない。今度は手を開き、三発目の衝撃……その手の甲に更に掌打を打

ち込む事で一度の拳打で四発の衝撃をジレンに与えた。

一発目の衝撃に二発目、三発目、四発目の衝撃が追いつき合流する。

するとジレンの中でそれらが凄まじい破壊力を発揮し、内部から破壊せんと荒れ狂った。

「ぐっ、ああああ……！」

並の強度ならば……いや、トップ程の戦士であっても今の拳打を受けたならば頭部が砂のように砕け散っていた事だろう。

これも紛れもなく一撃必殺の殺人技だ。

それでもジレンは砕けない。

宙で回転して着地し、揺らぐ事なく構える。

——負けるわけにはいかない。

俺は柱でなければならぬ。誰にも負けぬ最強でなければならない。

二度とあの日の悲劇が繰り返されないように……弱き者達が踏みにじられない為に。

それを守る正義で在り続ける為に。

正義に全てを捧げた孤独な決意で、ジレンは雄々しく立つ。

「HEROES・GOD MISSION！」

だがそんなジレンの孤独を嘲るように、別宇宙の女神が更に畳みかける。

空を割るように光が差し込み、武舞台を照らし出した。

その光と共に天から舞い降りるのは、数えるのも馬鹿らしくなるほどの光の戦士達だ。

リゼットの気によって高められた彼等は一人の例外もなく神の領域に立っている。

それらはかつての強敵の姿を形作り、今ここに本来あり得ぬはずの第7宇宙連合軍が編成されていた。

フリーザがいた。

コルドがいた。

ボージャックが、ザンギヤが、ゴクアが、ビドーが、ブージンが。

ジャネンバがケラケラと笑い、パラガスが両手を広げる。

ガーリックJr.、ドクターウィロー、タンバリン、シンバル、ピアノ。

四星龍以外の邪惡龍達。

パイクーハンやオリブーといったあの世の戦士達。

そして伝説の超サイヤ人ブローリーが壮絶に笑った。

善悪関係なく、第7宇宙の強戦士達が一堂に集結してジレンを見下ろしている。勿論本物ではない。気をかつての強敵達の姿にただけだ。

しかしリゼットの模倣の技術をもってすれば、その戦法や技はオリジナルと遜色なく、本物をここに呼び出しているのと何も変わらない。

一人一人がヒルデガーンを凌駕する戦士達。それが数十、数百という軍勢を編成して次々と降り立つ光景は神話の一ページのようでもあり、罪人を裁きに來た天の使者にも見える。

そして敵対する宇宙にとっては最早惡夢以外の何物でもなかった。

彼等は思い違いをしていた。

リゼットは十人のうちの一人などでは断じてない。

彼女が参戦している時点でそれは、第7宇宙総軍が参戦しているに等しいのだ。

「うおおおおオオオオい!? アレありかよオオ!? あんなのありかよオオオ!

第7宇宙多すぎだろ！ あいつもう参加禁止にしろよ！ あいついるだけで無限に増えるじゃねえかああ！」

シャンパが取り乱すのも無理はない。

自分の技だから大会ルールに引っかからないといえ、いくら何でも反則過ぎる。

さしもの大神官も気のせいかな頬が引き攣っているように見える。

そしてキャウエイは物陰に隠れて岩のように蹲っていた。

見た目はともかく、これはいい構え……護身完成である。

「雑魚が何人集まろうと……俺は負けん！」

ジレンが吠え、光の軍勢にたった一人で突撃した。

それを戦士達が迎え撃ち、一対数百の絶望的な戦いが開始された。

ジレンが拳を出す度に数十人が一斉に消し飛び、だがどうしても出来てしまう隙を狙う様に次々と攻撃が炸裂する。

ジレンといえど攻撃直後の無防備を狙い撃たれば無傷ではられない。

ジャンンバの剣が背中を切り付ける。

フリーザのデスビームが胸を撃つ。

ブローリーのリアットが首にめり込む。

一星龍の蹴りが脇腹を抉る。

だがジレンは倒れない、退かない。諦めない。

どれだけ傷付こうと、彼には退けない理由がある。

——負けるものか……。

第11宇宙の英雄は絶対に負けない。

負ける事は許されない。

あの日、師匠の墓前に誓ったのだ。

俺が守って見せると……俺が最強になってみせると……。

——たとえこの身体がバラバラに碎けようと……。

「強さの先にあるものを、まだ俺は見付けていない！」

ジレンを中心として光が爆発し、神の軍勢を薙ぎ払った。

そして無防備になったリゼットへと突撃する。

あいつだ。あいつさえ倒せば第7宇宙は瓦解する。

奴を仕留めなければ勝利はない。

今度こそ決める為に放たれた豪腕。だがリゼットはこれを軽々と流し、またしても投げ飛ばしてしまった。

ジレンが地面にぶつかり、何とか立ち上がろうとするも膝を折ってしまう。それを見下ろしながらリゼットは呼吸を整える。

一見圧倒的優位に見えるが、ジレンほどの男の攻撃を全て回避し、カウンターまで合わせているのだ。

彼女もまた、その肉体的、精神的疲労は計り知れない。

「たとえ身体能力で大きく負けていようと、戦い方などいくらでもあります。

貴方が見切ったのは、私の表面上だけの強さに過ぎません」

ジレンを冷たく見下ろしながら、リゼットは悟空を見た。

セルが彼の体力を回復させているが、まだ時間がかかりそうだ。

普段ならば一瞬で回復出来るはずなのだが……やはり神の奥義は普通と違うのだろう。

もう少しだけ、ジレンの相手をする必要があるらしい。

（なるべく急いで欲しいんですけどね……）

現状はリゼットの圧倒的優位——に見える事だろう。

しかしジレンという絶対強者の攻撃に晒されて無事で済むはずがない。

ジレンの攻撃が掠っただけの脚が。完璧に受け流したはずの手が。

それぞれが激しい痛みをリゼットへと訴え続けている。

恐らく、四肢を支える骨の全てに細かい亀裂が走っている事だろう、とりゼットは考えていた。

（悟空君の気の回復量から予測するに、完全復活まで凡そ一分。

それまでは、何とかジレンを引き付けなければ）

リゼットでは“負けない”戦いは出来ても“勝つ”戦いが出来ない。ジレンはそれほどに別次元の強者なのだ。

故にこの身を的とし、悟空復活までの時間を何としても稼ぐ。

その意思の元、リゼットはジレンの全身に鞭打の嵐を叩き込んだ。

ヒット（俺には理解^{ワカ}するッ！ 五体に刻まされたあの動き、あれは孫悟空のよう

な武道家の動きではない。

むしろ俺に近い……いや、むしろ俺以上の『殺す』技だッ！

あんな戦い方があったとはッッ！

【第7宇宙総軍】

リゼットによって生み出された自立気弾の軍。

今回は部外者参加禁止なので魂の召喚はしていない。全て偽物。

しかし動きや技は限りなく本物に近い。

ちなみにクウラは何か出したくなかったので出していない。

【四重の衝撃】

ゴ布林バット。

ゴ布林バットオ。

売れんかいな（5000円）

売れんかいな（1000円）

ゴ布林バット。

ゴ布林バットオ。

売 ゝ れ ん か い な ゝ (10 円)	売 ゝ れ ん か い な ゝ (100 円)
---	--

第百三十二話 ひとりじゃない

ジレンの拳が弾幕となり、リゼットの視界を埋める。

だがその全てを避け、リゼットのしなやかな指がジレンの喉を突いた。

衝撃に咳き込み、動きを止めたジレンから素早く離れて気の鎖で拘束。更に光の刃で床をくり貫き、念動力で射出してジレンを床ごと落としにかかる。

だがジレンはすぐに鎖を引き千切り、跳躍しながら炎のような気をリゼットへと発射した。

これをリゼットは亜空間防御で防ごうとするも、紅蓮の気は軌道を変えて空間の裂け目を避けてリゼットへ襲い掛かる。

しかしリゼットは腕で円を描くように防御し、完璧に受け流してしまった。

掌自ら球を成し防御完全とす——気功波だろうが火炎だろうが、防げぬ物はない。矢でも鉄砲でも持ってこいといったところだ。ただしアラミド繊維のワイヤーだけは勘弁である。

ジレンが地面に着地し、二人は五歩分ほど離れた位置で慎重に相手の出方を観察

した。

「はあっ、はあっ、はあっ！ はあ……はあ……っ！」

「ふーっ……ふー……」

両者共に息が切れているが、消耗が激しいのはリゼットの方だ。

直撃は一度も受けていないが、汗が止めどなく流れ、足が小刻みに震えている。リゼットは対技術戦や気の治療で言うならば並ぶ者のいない達人だ。第7宇宙どころか、他の宇宙を見渡しても1、2を争う技量の持ち主だろう。

だがやはり体力がない。14歳で成長を止めてしまった彼女はどうしても悟空やベジータといった体格に恵まれた戦士と比べるとスタミナで大きく劣ってしまう。無論常人どころか、超人と呼ばれる戦士と比べてもリゼットのそれは桁外れているはずだ。

仮にリゼットと悟飯で体力比べをしても、まずリゼットが勝つ。

しかしそれは圧倒的な戦闘力差^{レベル}で引き離しているだけであり、基礎能力で上回っているわけではない。

例えるならば悟飯は体力の基本能力値が100でレベルが50、リゼットは体力

の基本能力値が20しかないがレベルが300、という感じだろうか。

故に、同等かそれ以上のレベルの相手と戦うとこうして弱点を露呈する事になってしまう。

ましてや今は常にバーストリミット・マイナスを発動し続け、一秒の間に万を超える攻防を繰り返しているのだ。

このまま戦いを続ければほんの数分でリゼットは動けなくなってしまうだろう。一方のジレンは何度も直撃を浴び、深刻なダメージもいくつか受けている。

耳からは血が流れ続けているし、急所狙いの攻撃に晒され続けたせいで最早無事な箇所はない。

しかし体力という面で言えばまだ余裕があった。

生命力という点において彼のそれはリゼットとは比較にもならない。

与えたダメージで勝っているはずのリゼットが押されている……それだけの理不尽な差がそこにはあった。

「ふー……ふー……大体……わかってきた……」。

お前の技量は恐るべきものだ……俺の上を往くと素直に認めよう……。

だが、肉体的な基礎能力を言えばそれほど恐ろしいものではない。

恐らく……元々肉体的に脆弱なタイプの星の人間なのだろう。

生まれついで肉体が根本的に戦闘向きではないのだ……そのサイヤ人達と違ってな。

だから……急所狙いか、俺の力を利用したカウンター以外の方法で俺にダメージを与える事が出来ずにいる」

「……………」

ジレンの言葉は凶星であった。

いかに気を高め、修練を積み、戦闘力を上げても生まれ持った肉体の造りはどうしようもない。

神になろうがリゼットは地球人だ。根本的な部分で戦闘向きに出来ていない。ナメック星人のように再生出来るように出来ていない。腕も伸びないし巨大化も出来ない。

サイヤ人のように死にかけたらパワーアップするだとか、超サイヤ人への変身機構を備えている事もない。

骨の質が違ふ、肉の質が違ふ。

生まれた瞬間に決定した種族差……こればかりはどう足掻いても覆せないのだ。例えば、こんな話がある。

孫悟空は幼年期にブルマに銃で撃たれた事がある。

この時の悟空の戦闘力はわずか10であり、悟飯の妻であるビーデルが近いレベルか、あるいは凌駕していると言われている。

ではビーデルの頭を銃で撃ったとして、彼女は悟空のように『痛い』で済むのだろうか。

ビーデルが舞空術なしで幼年期の悟空のように10m以上の跳躍が出来るだろうか。岩を指先だけで碎けるだろうか。地面を割れるだろうか。

悟空は野生の狼の群れを返り討ちにして夕食にする事が出来た。これらの芸当がビーデルに可能だろうか？

——否である。出来るわけがない。

これが種族の差だ。戦闘^{レベル}力が同じでも、基礎スペックが違い過ぎるのである。

地球人の戦闘力10と、サイヤ人の戦闘力10は決して互角ではない。

戦闘力とは気の総量を測る物差しでしかなく、肉体的な構造や強度の差までは正確に測れていない。

「惜しいな。お前がもっと強い惑星の住民だったならば、俺は負けていたかもしれない」

「……もう勝った気ですか？」

「ああ、勝てる。苦戦する相手である事は間違いないが、最終的には俺が勝つ。

それはお前が一番分かっている事ではないのか？

お前では俺に勝てん……自らの足で武舞台を降りろ」

「……………」

リゼットは横目で悟空を見る。

悟空も大分回復しており、気が充実しているようだ。

どうやらここまで稼いだ時間は決して無駄ではなかったらしい。

ならば出番はここで終わりだ。ジレンの言う通り、これ以上やっても勝ちはない。

故にリゼットは最後に爪痕だけを残し、悟空に譲る事にした。

「そうですね。確かに私は貴方に勝てません。」

しかし、勝つのは……“私達”です！」

「——！」

リゼットは背中中の光輪を輝かせ、その衝撃を推進力としてジレンへ肉薄した。

今まで専守防衛に徹していたリゼットのまさかの突撃にジレンの反応が一瞬遅れ、それがリゼットの置き土産を残す事となった。

気を足に集約させ、まずは蹴り。

ジレン本人を狙わず、足元の砂を巻き上げてジレンの目を晦ませる。

「小細工を！」

ジレンが剛腕を突き出すも、リゼットはこれを紙一重で回避してジレンの目に手を叩きつけた。

目潰し……ではない。

親指と人差し指の間で相手の眉間を突く事で一時的に相手の視力と判断力を奪うだけの技だ。

「しっ！」

続いて掌打！

ジレンの顎に命中させ、顎の関節を外した。

更に指に気を集め、ジレンの脳天を強打。

この一撃でジレンの頭蓋骨の縫合を外し、ジレンの目、鼻、口、耳から鮮血が溢れる。

まだ終わらない。

親指に気を集めてジレンの両耳を貫き、鮮血の華を咲かせる。

人体破壊——その苛烈な攻撃にジレンが動きを止めたのを見て気を一気に高め、バーストリミットを解除してジレンの目の前に両手を翳した。

今まで足に絡みついていた枷が碎け、背中の光輪が高速で回転を開始する。

この一撃を置き土産とし、後は悟空にバトンを託す。

「Sparking・Meteor!」

巨大な白い彗星を生み出し、ジレンを飲み込んだ。

いかにジレンでもこれは効かないわけではない。

服が破れ、肌が焼け、全身を光が蹂躪しながら凄まじい勢いで生命力が削り取られていく。

ベジータに、セルに、四星龍に、ピッコロに。

第7宇宙の強者を相手に連戦を強いられ、その上でリゼットに打ちのめされた。その彼にとってこの一撃は痛烈だ。

一瞬のみの全力を発揮したりゼットの彗星はジレンですら仕留めるほどの威力を誇っている。

——薄れゆく意識の中、ジレンは師匠の背中を見た。

俺は夢を見ているのか……ジレンはそう思い、己の敗北を悟った。

しかし師匠は言う。

何を勝手に負けた気になっているのだ、と。

そして師匠はジレンの後ろを指さし、笑った。

立てジレン。お前を支えてくれる者達の為に。

——お前は、独りじゃない。

「ジレン！」

トッポの声が聞こえる。

「ジレン！」

デイスポが叫んでいる。

「ジレン!!」

ベルモッドの、そして仲間達の声が聞こえる。

違う、俺に仲間などいない。俺は一人だ。

俺を支えてくれる者など、誰も……。

脱力感に支配されながらジレンは倒れていく。

このまま地面に背をつけてしまえば、どれだけ楽になれるだろう。

だが何故なのだろう……いつまでも倒れないのは。

不思議に思い、後ろを見る。そしてジレンは気付いた。

プライド・トルーパーズの皆が……ベルモッドが……そして今までジレンが守っ

て来た全てが彼の背中を押し、支えていた。

それは幻覚だったのかもしれない。夢だったのかもしれない。

だが確かに、心はそこにあった。

ジレンは……独りではなかった。

「うっ、おおお……おおおオオオオオ!!」

ジレンは想像を絶する苦闘の中でも折れずに拳を握り、彗星の中を突っ切った。肉体が折れようと焼けようと、それでも心は折れない。朽ちない。

魂に宿した正義がある限り、何度だって立ち上げれる。

その背中を仲間達の幻影が後押しし、加速する。

そして渾身の剛拳を一撃、リゼットへと叩き込んだ。

「こっ……ふ、う……!!」

リゼットの柔な腹にめり込ませ、少女の身体を「く」の字に折り曲げた。

そのまま脱力の防御など知らぬとばかりにリゼットを殴り飛ばし、彼女の小柄な身体が三度、四度と武舞台の上をバウンドしながら転がる。

防御に失敗したわけではない、間違はなく成功している。そうでなければリゼットなど、今の一撃で二つに千切れていただろう。

落ちる直前でセルがりゼットを受け止めるが、気は既に枯渇寸前であり、口からは血を流して小さく呻いていた。

何とか意識は保っているが、失神寸前といったところだ。

セルはすぐに治療魔術で傷を癒しにかかるが、リゼット自身の表情はどこか満足気だ。

一方で勝ったはずのジレンの顔は苦渋に満ちていた。

外れた顎を無理矢理戻し、拳を震わせる。

「俺ともあろうものが……あんな幻に救われるなど……。

今まで……今までずっと、皆が俺を支えてくれていたとでも言うのか？

俺は一人ではなかったと……。

………違う!!

俺の心の中にまだ他人に縋る弱さが残っていただけだ！

信頼など無価値！ 仲間など要らぬ！ 俺は、俺は一人だ！ 一人で戦えるッ

！」

ジレンは己に纏まりつく幻影を振り払い、叫んだ。

誰かに救われるなどあつてはならない。揺るがぬ最強でなければならない。誰に

も負けぬ正義でなければならない。

誰も追いついて来なくていい。戦えなくていい。裏切られたっていい。

俺一人が戦い、俺一人で勝てばいい。

弱かったあの時とは違う。もう誰にも奪わせないし、奪われる者も作らない。

——俺一人で皆を……仲間達を、この宇宙を守ればいい。

全ての痛みを引き受けても尚倒れぬ、巨大な柱になればいい。

だから認めてはいけないのだ……この温かさを。安心感を。

信頼などというものの存在を。

「……すみません、負けちゃいました」

「だろうな。負けない戦いを捨ててまでダメージを残す事を優先するからだ」

リゼットはジレンに勝てないまでも、負けない戦いならば出来る。

だがそれを捨ててしまえば、負けるのは当たり前だ。

しかし今回はこれでいい。個人の勝負では負けたが、最終的に自分達が勝てるならば無理をする価値がある。

だからリゼットは悔いずに、悟空を見上げた。

「悟空君……後は任せましたよ」

「ああ……勝って来る！」

バトンは悟空に託した。

そして彼はいつだって、託されたバトンという名の信頼を裏切らない。

ジレンへと歩いて行く悟空のその背中には、ただ全てを預けられるような頼もしさだけがあった。

仲間達の期待。リゼットから託されたバトン。

その全てを背負い、悟空がジレンの前に立つ。

力の大会は最終局面を迎え、ここに二人の戦士が向かい合った。

仲間達の信頼を背負い、孫悟空が立つ。

全ての信頼を振り払い、ジレンが鬼の形相で構える。

そして皆が見ている中、悟空が再び銀色の輝きに包まれた。

【カリスマガード】

頭部を抱え、蹲るようにして敵の攻撃を遮断する絶対無敵の下段ガード。

紅魔館のカリスマ当主であるレミリア・スカーレットが使いこなす。

見た目は可愛らしいが、その実強力な防御態勢である。

頭部を守り、人体で最も頑強な部位である背中で敵の攻撃を受ける。

見た目はともかくこれはいい構え……護身完成ッツ！

【レミリア・スカーレット】

東方紅魔郷のラスボス。カリスマガードの使い手。

外見は幼いが実年齢500歳以上の吸血鬼。

東方界限でも他を寄せ付けない芸の幅広さを持ち、カリスマ当主からヒロイン、熱血主人公、ラスボス、咬ませ犬、ギャグキャラ、キス魔、ロリBB A、ただのお子様とあらゆる役を完璧にこなすマルチタレント。

妹を監禁する外道な姉になる事もあれば、妹思いの優しい姉になる事もある。

持ちネタも豊富でカリスマに、それをブレイクしてのカリスマブレイク、更にそこからの再評価ネタや自虐ネタ、紅魔館爆発、酷いネーミングセンス、バシユッゴォォ、カッ、レミリア敗北！ など使いどころに困らない。

二次創作において、とりあえず困ったら出演依頼を出しておいて損のないキャラ。

『レミリアは何をしてもレミリア』と一部では言われており、その芸の幅広さは東

方芸能界の大御所の名に相應しい。

強さも元ラスポスであり吸血鬼である点で保証されている一方でチートすぎず、勝たせても負けさせても問題ないという絶妙なバランスを維持している。

本当はチルノより弱いのに見栄を張って強く見せている事にしてもいいし、逆に本当は幻想郷を支配する一歩手前までいく程の強さなのに今は力を抑えている事にしてもいい。

吸血鬼異変の『幻想郷で最も力のあった妖怪により叩きのめされた』の部分も、「実は大した騒動ではなく、ちょっと調子に乗ってたら紫に懲らしめられた」程度の扱いにしてもいいし、逆に「ガチで幻想郷総出でも手に負えなかったので真の幻想郷最強である龍神によってようやく叩きのめされた」という凄強い設定にしてもいい。

能力も「本当は大した能力がないのに運命を操れるように振舞ってるだけ」から「本当にチートすぎてレミリア自身もあまり使いたくない」まで解釈の幅が広い。

しばらくはフランドールと二人暮らしだった事にして家事全般得意にしてもいいし、咲夜がいないと何も出来ない事にしてもいい。

実はパチュリーや紫以上の切れ者として扱われることもあれば、チルノ以上の⑨にされる事もある。

かと思えば⑨の振りをしているだけで全て見抜いていたり、逆に全部解ってるような顔をして実は何も分かっていないというキャラ付けも可能。

最強から最弱、切れ者から⑨、カリスマからマスコット、善人から外道までとにかく、どんなキャラ、どんな強さにしてもしっかりそれを演じてくれる凄いいおぜうさま。

他キャラとの絡みも定番の紅魔組は勿論、対戦した事のある萃香や依姫、お気に入りの霊夢、緋想天でわざわざ答えを教えに来た紫、新聞愛読者で射命丸、カリスマセンス繋がりで希望の面の人、姉繋がりでさとり、などどのキャラとも気軽に絡ませられる。

とにかくフットワークが軽く、どこに行かせても誰と絡んでも、何をやらせても違和感がない。

何ならブロリーにラリアットされて岩盤にめり込んでても違和感がない。

SSや動画ではオリ主さんや他作品キャラなどの外来人の強さをアピールする為

の対戦相手として頻繁に出演依頼を受ける。

もし私が東方で二次創作を書くなら、確実に主人公に抜擢するだろうキャラクター！。

お嬢様可愛い。

第三百三十三話 ad a s t r a

【BGM】

普段はBGM推奨とかやらないんですけど、今回は『究極の聖戦（Off Vocal ver.）』推奨です。

歌ありだと文字を追いかけるのにあんまり適さないのでOff Vocalの方が作業用に適している気がします。

勿論強制ではないので、貴方はBGMを流さなくてもいいし『ブロリーでおどるポンポコリン』を流してもいい。

悟空が一度目を閉じ、それから静かに瞼を開けてジレンを見る。

その瞳は銀に輝き、先程と同じ白銀の光が全身を覆っている。

身勝手の極意『兆』。それを彼は自らの意思で発動してみせたのだ。

しかし任意だろうとそうでなかりうと、このままでは先程と同じで未完成だ。

いかにジレンが激しく傷付いていようと、それでもまだ届かない。ならば完成させよう。

この一戦で……闘争に身を委ねて身勝手の極意を真に極めよう。

そうする事が先に倒れたりゼットへの手向けになる。

「……行くぞ、ジレン」

静かに告げ、悟空が一瞬で距離を潰した。

身勝手の極意は勝手に身体が動く。したがってそこに予兆はなく、前動作はなく、気配すらない。

完全なノーモーションから成る攻撃は予測不可能だ。

悟空の拳が弾幕となってジレンを襲い、しかしジレンも負けじと拳で迎撃した。

二人の拳が幾度となく衝突し、その余波だけで武舞台が崩れていく。

決して気を抜けない激闘の中……悟空はおもむろに目を閉じ、己の中の闘争本能のみに心を傾ける。

余計な事は考えない。ただ身体の動くままに。

これまでに培ってきた全てが悟空を支え、悟空を動かす。そこに最早迷いは要ら

ない。

ここに来るまでに多くの師と出会い、学んできた。

祖父である孫悟飯からは武術の基本と、優しさを教えて貰った。

亀仙人からは得た力で何をするか、その心構えを教わった。

カリン様からは無駄のない身体の動きを学んだ。

リゼットは常に超えるべき壁として前を歩き、模範となってくれた。

先代神様からは気の操作を。

界王様からは様々な技を。

ウイスからは思考よりも早く身体を動かす為の基本を。

その全てが悟空の中で生きている。どれ一つとして軽んじる事など出来ない、孫

悟空の強さの源だ。

『武道は勝つ為に励むのではない。己に負けぬためじゃ』

これは亀仙人にいつか教えられた言葉だ。

そう、孫悟空はいつだって敵に勝つためではなく負けない為に戦ってきた。

だから彼は負けないのだ。

そして己に負けまいとする心が何度も限界を破り、彼を強くしてきた。

自分に負けなければ——可能性は、無限だ。

故に孫悟空に限界はない。この戦いでもまた、彼は一つの限界を超えて先へ往く。いままで通り……そして、これからも。

故に——更に高みへ！ 星のよう^{galactica}に！

「はああああアア——ッ!!」

悟空の頭髮が完全な白へ染まり、今まで以上の速度でジレンを打ちのめした。

ジレンもそれに必死に食い下がるが、攻撃がまるで当たらない。

身勝手の極意、ここに完成……その事実破壊神達が次々に立ち上がり、ビルスは歓喜に顔を歪めた。

あらゆる攻撃を避け、一方的に悟空の拳が入る。

ジレンの拳を透り抜けるように掻い潜って、彼の巨体を軽々と蹴り飛ばして壁に叩き付けた。

「ぬううう！」

ジレンが気弾を連射し、悟空を近付けまいとする。

だが悟空は右に左にフットワークを刻み、まるで気弾がすり抜けているかのようにジレンへと接近した。

そしてジレンの腹に蹴りを放ち、反撃の拳を掻い潜って腹に拳をめり込ませる。『世の中上には上がいるもんじゃ。まだまだつよいやつはゴロゴロおる。』

これしきで満足するほど武の道は甘くないぞよ。ほんとうの修行はこれから始まるんじゃ』

悟空の動きの中に一瞬、亀仙人の虚像が混じる。

リゼットの模倣と同じだ。悟空の中に息づいた師の動きが、あたかもそこに本当にいるかのよう^{さいげん}に憑依された。

亀仙流を卒業して長い時間が経ったが、それでも亀仙人の教えは悟空の中で今も生きている。

悟空はもう亀仙流ではない。だがそれでも、今でも亀仙人は尊敬出来る師匠だ。師の言う通り、世界は本当に広い。どんなに強くなっても次から次へと強い奴が現れる。

だからこそ、悟空の道はいつまでも続くのだ。

「おのれ！」

ジレンが拳の連打を放つ。

だが悟空には当たらない。

身体がジレンの動きを先読みし、あらゆる攻撃を空ぶらせる。

『そんなんじゃないや一生かかってもつかまえられるわい。おまえは相手の動きをぜんぜん読んでおらん。ただガムシヤラじゃ』

避ける最中、カリンの虚像が悟空と共にジレンの拳を避ける。

動きは最短最小限で。ただガムシヤラに動くのではなく、読み切った上で動く。

これも、幼い頃に師から教わった事だ。

避けようとするジレンの先を読んで蹴りをぶつけ、更に拳を叩き込む。

『空のように静かに構え、雷よりも素早く動くのだ』

Mr。ポポの虚像と共に回避から今度は攻撃へ。

空のような静けさから一転、雷の如き乱打がジレンを襲う。

静から動への急激な転換にジレンは対応し切る事が出来ない。

『どうせ目指すなら天下一じゃ！ 肉体も、そして心もだ！ よいな！』

今度は、界王の虚像が悟空の背後に浮かぶ。

強さとは何だろう。

ずっと目指し続けているが、それでも悟空に明確な答えはない。

ただどこまでも強くなりたい……強くなって、その先にあるものを見たい。

そこに至るにはただ身体が強いだけでは駄目だ。

心も強くなければならない……そう、教えてくれた師がいた。

その強い心があるからこそ、勝手に動く身体だって制御する事が出来る。

いかに身勝手の極意といえど、身体が動くままに任せるのでは、ただ身体に使われているだけだ。

そんなのは武ではない。

心と、身体と、そして技。この三つが高次元で備わってこそ、身勝手の極意を極める事が出来る。

『なら私は、頑張って悟空君の前を歩き続けなければなりませんね』

そして、追い続けてきた背中があった。

ジレンと戦いながらも悟空はその背中を幻視し——そして追い越してジレンへ拳

打の乱舞を放つ。

その光景を見てリゼットは思わず微笑を浮かべた。

幻視したのは悟空だけではない。

リゼット自身もまた、後ろから追いかけてきた少年が青年を経て大人となり、そして今この瞬間に自分を追い抜いて行ったのがハッキリと感じられたのだ。

亀仙人を超え、カリンを超え、Mr。ポポと先代神を超え、界王を超え、そして今、リゼットを超えた。

全ての師匠の教えを宿しながら抜き去り、皆の信頼を背負って悟空は更なる高みを目指して武道を走る。

「ま、だだァ……俺は……俺は！」

俺は、俺の強さを証明する為にも！ 負けるわけにはいかんのだあああ！

信頼など……無意味だ！ ここで負ければ俺の今まですべてが無意味になる……

俺は、勝たねばならんだあァ！」

悟空の覚醒に対抗するように、ジレンもまた己の潜在能力を開花させた。

彼にも譲れないものがある。譲りたくないものがある。

今までずっと一人の力で戦ってきた。一人で守ってきた。

トッポ達など、ジレンから見れば弱者の集まりでしかない。

自分だけでいい。俺だけが強ければいい。

この力で、全ての悪を一掃すればいい。己だけが戦って勝ち続ければ平和を守る事が出来る。

それがジレンの信念だ。

仲間など要らぬと切り捨てて、そうして得た力だ。

だから負けるわけにはいかない。絶対に負けてはならない。

でなければ、切り捨てた者達に顔向けが出来ない。

ジレンが咆哮し、真紅の炎となって悟空へと飛び掛かる。

悟空は即座に反応し、白い炎となって彼を迎え撃った。

仲間を切り捨てる事で強くなった男と、仲間と共に強くなってきた男。対極にあ

る二人の戦士が互いを高め合いながら幾度もぶつかる。

白と赤の輝きが武舞台の上を駆け巡り、その場にいる全ての者が置き去りにされた。

「みっ、見えん！ この破壊神の目にも！」

悟空達の速度はビルスの感知すら振り切り、どこまでも高みへ飛翔する。

完全に別次元のレベルへと移行してしまった悟空を見ながらベジータは悔しそうに、しかし認めるしかないという笑みを浮かべた。

「カカロット……すごい奴だよお前は。」

あのジレンは俺にはとてもかなう相手じゃなかった……。

あいつと戦えるのはお前だけだ」

ベジータは今、この時をもって理解した。

何故天才であったはずの自分が勝てなかったのか。

最初は守りたいものがあるからだと思っていた。

守りたいという強い心が得体の知れない力を生み出しているのだと……そう思った。

確かにそれもあったのだろう。だがそんなものは今のベジータだって同じだ。

ブルマを、トランクスを。そして地球を、第7宇宙を守る為に戦っている。

その心は確かにベジータを強くし、高みへと押し上げてくれた。

だがベジータの戦いはどこまでいっても勝つ為の戦いであった。勝って、己のプライドを守ろうとしていた。

だが悟空は違う。敵にも……そして何より自分自身に絶対に負けない為に限界を責めて戦い続けるのだ。

それを認めた今だからこそ、清々しくすらある気持ちでこの一言を口に出来た。「頑張れカカロット……お前がナンバーワンだ……!!」

リゼットを超え、破壊神を超え、ジレンを超え……。

そしてきつといつか、彼は大神官すらも超えていくだろう。

それが孫悟空なのだから。

「はああああ……かあああああー……ッ！」

そしてほら。もう限界を超えた。

また一つ、限界の壁を突き破った。

身勝手の極意を発動したままに髪が逆立ち、黄金に輝く超サイヤ人へと変化する。

あろうことか彼は、身勝手の極意を使ったまま超サイヤ人へと移行したのだ。

ゴッドを吸収した時と同じだ。

黄金のオーラの中に身勝手の極意の白銀のオーラが混ざり合う。

その姿にウイスが思わず立ち上がり、そして唇を釣り上げる。

その頬には珍しく汗が流れ、手は歓喜に震えていた。

「……遂に……遂に超えたかもしれませんねえ……この私すら……！」

全く、なんて人間だ。

何て面白い男だ！

悟空の動きはもはやウイスですら完全には追い切れず、神々すら超えた頂きを走破している。

白銀に輝く拳が、蹴りが。次々とジレンを打ちのめし、彼を武舞台へとめり込ませた。

それでも尚、ジレンが最後の抵抗として紅蓮の気功波を解き放つ。

だが悟空に恐れはない。ただ静かに、それでいて力強く。

この戦いを終わらせるべく構えを取るだけだ。

「か」

——最初は、小さな少年だった。

世界の広さを知らない、幼い子供でしかなかった。

「め」

だが一つのドラゴンボールから物語が始まり、多くの仲間達と出会って来た。今武舞台にいる皆だけではない。

ブルマも、ウーロンも、ヤムチャも。亀仙人や牛魔王、クリリンに天津飯、餃子にランチ。

他にも数えきれないほどの、全ての出会いが彼を強くした。

「は」

多くの敵と戦った。

最初はピラフ一味にすら苦戦していた少年は進化を続け、レッドリボン軍を倒し、ピッコロ大魔王を倒し、フリーザを倒した。

それでも尚止まらず、彼は今、神々すら驚かせるほどに成長を遂げている。

「め」

そしてこれで終わりではない。

この戦いもまた、孫悟空が歩く道の一つ。

彼の道にゴールはない。

どこまでも強く、どこまでも高く——！

仲間達の期待と信頼を背負い、そして悟空は決してそれを裏切らない。

いつだって彼は、皆が想像するよりも先の世界を見せてくれる。

「波アアーーーーッ！！！」

青白い気の奔流がジレンの気功波を一瞬で飲み込み、彼へと迫る。

この瞬間にジレンは見た。

今までに悟空が積み重ねてきた道を。戦ってきた敵を。出会ってきた仲間達を。

その影を。

……自分が振り払ってしまった、大事なものを。

悟空は決して一人ではない。

一人で戦っていても、彼の後ろにはいつだって仲間がいる。敵がいる。

その全てが彼を支え、強くし続けているのだ。

ジレンは残る力を振り絞ってかめはめ波を受け止めるが、掌が焼けて身体が押し

込まれる。

そんな彼を見ながら悟空は心からの敬意を込めて言った。

「ジレン……おめえは凄えよ。たった一人でそこまで強くなってよ……」。

おめえとはまたいつか戦いてえ……今度はオラももっと強くなるからよ。

だから……次は一人じゃなくて、おめえを支えてくれる仲間と一緒にかけっこい。

そうすりゃあおめえは今よりもうんと強くなれる。

だから——またな！」

ジレンは一人で戦っていた。

たとえ他の仲間と合わせて10人で大会に出ている、それでも彼はトップポ達と一緒に戦ってはいなかったのだ。

しかしそれがジレンの限界だ。一人で届く場所には限度がある。

だから次は本当の意味で仲間達と一緒にかけてこいと、そう悟空は言う。

その時はきつと、今よりもずっと楽しい戦いになるだろうから。

「はあああああーッ!!」

最後の駄目押しとしてかめはめ波の出力を上げ、ジレンを呑み込む。

その力の奔流の前にジレンは静かに力を抜き、そして微笑を浮かべた。敗北したというのに、妙に清々しい。

こんな男に敗れるならば悔いはない……そんな思いすら抱いてしまう。

（これが信頼……第7宇宙の……力……）

そして彼は、光に吞まれて武舞台から落ちた。

これにて、ほぼ勝敗は決した。

第7宇宙はベジータと四星龍が落ちたものの、それでもまだ八名が残留。

リゼットも戦闘不能で実質的に脱落しているようなものだが、それでもまだ武舞台から落ちていない。

第2宇宙は気絶していた事で無視されていたザーロインだけが残り、ほぼ壊滅状態。

第3宇宙は防御力自慢のピアラが残っているが、こちらはリゼットのファーストアタックのせいで満身創痍だ。

ほぼ戦闘不能と見えていい。

第4宇宙はキャウエイのみ。驚く事に未だ彼女は無傷だが、残念ながら実力がなさすぎる。

キャウエイなど、今のリゼットでも念力だけで落とせてしまう。敵ではない。可愛さだけが武器の彼女にここからどうしろと言うのだ。

第6宇宙はヒット一人を残し、全滅だ。

しかし流石というべきか、ヒットはまだ十分な体力を残しており、その脅威は失われていない。

だが、いくら彼でもここからの逆転は不可能に等しいだろう。

何より、今の彼はミラ一人に追い込まれている状態だ。

第9宇宙はベルガモのみが残っているが、悟空に手酷くやられた彼に戦闘力はもうない。

第10宇宙はオブニが残ったが、悟飯との戦いに敗れるのも時間の問題だろう。

第11宇宙はまだトップオが残っているので希望がないわけではない。

しかし彼もターレスとの戦闘のせいで疲弊し切っている。

対し、第7宇宙は全員がダメージを受けているものの、リゼット以外はまだまだ

だ戦える。

何ならセルがピッコロを回復させてもいい。

ターレス、悟飯、ミラはそれぞれ強敵と戦っていたので消耗しているが、それでもまだまだ余裕がある。

リゼットは戦闘不能だ。しかしこれもセルがいれば復帰可能である。

そして身勝手の極意を極めた孫悟空が第7宇宙にはいる。

今の悟空ならばトッポとヒットを同時に相手にしても遅れを取る事はないだろう。

——勝負あり。

試合を見ていた誰もが、第7宇宙の勝利を確信した。

「トッポォ！ 頼む、もうお前しかないんだ！」

「ヒット！ 最後まで諦めるんじゃないええ！」

「オブニ！ 望みを捨てるでない！」

第11宇宙と第6宇宙、そして第10宇宙の破壊神が最後の一人に望みを託し、叫んだ。

それに呼応するようにトッポとヒット、オブニの気が高まり、最後の戦いに挑むべく前へ踏み出す。

「もう、正義など……否。

ジレン！ お前が守ろうとした正義を守る為に、私もこの力を受け入れよう！捨てるのではない……大事なものを、捨ててしまわない為に！」

トッポがプライドを胸の奥に仕舞い込み、それよりも大切な正義を守る為に黒いオーラに染まった。

その気の性質は破壊神と同質であり、今までと比べて圧倒的だ。

しかしそれを以てしても、今の悟空と比べれば見劣りしてしまう。

「最後まで、俺の仕事に付き合ってもらおうぞ」

ヒットが外套を脱ぎ捨て、構えを取った。

危機にあつてこそ爆発的に成長する彼の潜在能力は留まる所を知らない。

敗北の瀬戸際に立たされた今の彼は、今までよりも更に鋭く強い。

「ゴワス様……貴方から学んだ広い心を以て、この最後の戦いに挑みましょう……いざ、第10宇宙ここに極まれり！」

オブニが不退転の覚悟を決め、生涯最高の力を発揮する。

「面白え！　ならこっちも、全開で行かせてもらうぜ！」

ターレスが超サイヤ人4の力を全開にし、力を一気に高めた。

身体を紅蓮のオーラが覆い、筋肉が増量する。

「お前達のような戦士と戦える事……嬉しく思う！」

ミラもまた、力を更に高めてヒットと向き合った。

彼もまたヒットと同じく、成長する戦士だ。

「……行きます！」

最後に悟飯があったけの力を解放し、更にその力を上昇させた。

彼の潜在能力に限界などないかのように、その力は天井知らずだ。

六人が最後に力の限り衝突し、眩い閃光が武舞台を覆う。

直後にトッポ、ヒット、ターレス、ミラ、悟飯、オブニの六人が同時に吹き飛び、

武舞台の外へと消えた。

結果は相打ちだ。しかし第7宇宙はまだ五人残しているので、個人戦では相打ちでも試合では第7宇宙の勝ちである。

更に唯一ノダメージのヒルデガーンがザーロイン、ビアラ、ベルガモを次々と叩き落していく。

「ウワアアアアアアオオオオオッ!!」

そして最後に一人だけ残ってしまったキャウエイは泣きながらグルグルパンチを発動し、ヒルデガーンへ突撃した。

勿論そんなものが効くわけもなくヒルデガーンに摘ままれ、ポイと落とされた。これにて、試合は終了。

五人残しての第7宇宙の勝利であった。

【ダークドラゴンボール】

赤い神龍「リゼットよ……お前は力の大会に勝つには私の力が必要だと思っていたようだが……別になくても勝てる」

リゼット「な、なんですって!?!」

赤い神龍「そして願いの使いどころはちゃんと次回にあるので、後は次回に願

の内容を判明させるだけだな、フッフッフ……」

【身勝手の極意＋超サイヤ人】

捏造形態。身勝手の極意の力を持った超サイヤ人。

見た目はただの超サイヤ人だが、オーラに銀色の輝きが混ざっている。

やはり外見的には普通の超サイヤ人が一番締めに対応しいと思ったので、そうした。

ちなみにここからのブルーとか界王拳とかは絶対無理。

というか今回限定の変身。多分もうならない。

【戦闘力】

・ジレン…130兆

フルパワー（半裸）…140兆

・孫悟空（身勝手の極意『極』）…132兆

※強さそのものはジレン以下。動きの差で実質的に互角。

身勝手＋超サイヤ人はこの戦い限定の捏造形態なので特に設定していないが200兆くらいじゃないかなと思われる。

・破壊神トッポ…30兆

まあキュアベジータに負ける程度だし、こんなものだろう。

破壊神といっても、ビルスには遠く及ばない。

・オブニ…1兆5000億

究極悟飯と互角だったが、技込みで互角でありパワーでは負けている印象だったのでこのくらいとした。

一応『オブニがいれば優勝間違いない』と言われるだけの強さはあった。

漫画版だと明らかにアニメより弱い。

（アニメだとオブニと究極悟飯は互角だが、漫画だと究極悟飯とケフラが互角で、オブニは合体前のケールに一撃で落とされる程度）

・Mr.ポポ&先代様

悟空の師匠抜きのシーンにいなかったなので追加しました。

・次回で最終話です。

最終話 さらば悟空、また会う日まで

力の大会は終わり、悟空達はそれぞれの日常へと戻って行った。

あの大会で負けた宇宙は宣言通りに全王に消されそうになったものの、しかし結果を言えば消される事はなかった。

それは悟空が彼を止めてしまったからだ。

悟空は全王へ言った。

「なあ全ちゃん、オラ達は超ドラゴンボールで消えた宇宙を元に戻す気だけどよ、つまり消しても無駄じゃねえか？」

「え？ うーん……確かに無駄だね」

何と、まさかの願いカミングアウトである。

更に悟空は畳みかけるように、全宇宙の神々が驚愕するようなどんでもない事を言い放った。

「なあ全ちゃん、今回の大会、全ちゃんは楽しかったか？」

「うん、すごいスーパード楽しかったのね」

「そっか。んじゃあよ、またやろうぜ」

何言ってるのこいつ、という感じであつた。

これにはビルスも仰天し、何て事を言うんだと喚いていた。

だが悟空は気にせずに言葉を続ける。

「もう一回なんて言わずによ、オラは何度だってやりてえな。次やる時はきっと、ジレン達はもっともっと強くなってるからよ。

それに次は他の宇宙の奴等だって、もっと強え奴等を集めて来るはずだ。楽しくなるぜ、きつと」

「うわあ……それ、楽しそうなのね！」

「だろ？ だからよ……消しちゃうの勿体ねえじゃねえか。

皆どんどん強くなるし、次はもっと楽しめる。その次はもっとだ。

勿論オラだってまだまだ強くなるぞ。全ちゃんは見たくねえか？」

「見たい！」

こんな感じで悟空が自分のペースに全王を巻き込み、次もやろうという事で宇宙消滅は免除となった。

更に次は、今回免除された宇宙も参加となり、これには免除宇宙も仰天していた。こうして全宇宙を恐怖させた力の大会は、終わってみればただの一大イベントとして過去のものとなった。

しかし大神官曰く、優勝した宇宙が他の宇宙の復活を願わなかった場合、全王はその宇宙も消して、本当に宇宙の数を4つにしてしまうつもりだったらしいので願うそのものは間違えていなかったらしい。

やはり子供に見えても本質的には超越者だ。人とは精神構造が全く違う。

あるいは単に幼すぎて罪悪感も何も抱けないだけなのか……。

ちなみに出番のなくなった超ドラゴンボールは使われる事のないまま宇宙に散らばった。

あの戦いが終わってから一月。

リゼットは今、ビルスの許可を得て第11宇宙へと来ていた。

聞いておいた情報によると、この辺りでいいはずなのだが彼の気は近くに感じない。

見渡す限り大地は荒れ果て、倒壊した建造物の跡だけが、ここにかつて人が住んでいた事を教えてくれる。

少し進めば、いくつもの墓標が建ち並ぶ場所へと出た。

不慣れな手造りで、しかし丁寧に造られただろうその墓標こそは『彼』の強さの源なのだろう。

しばらくそれを眺めながら風に吹かれていると、覚えのある力強い気が高速で接近している事にリゼットは気付いた。

やがて気の持ち主はリゼットの後ろに立ち、ゆっくりと墓へ近付いた。

「何故お前がここにいる」

「少し、貴方と話をしようと思ひまして」

リゼットが振り返ると、そこには怪訝そうな顔をしたジレンが立っていた。

あの大会で激闘を繰り広げたりゼットとジレンだが、基本的には善側に立つ二人だ。

戦う理由がない今となっては、そう陰悪になる事もなく、二人の間には穏やかな空気が流れていた。

「ここが、ベルモッド様の話していた貴方の始まりの場所なのですね」

「……そうだ。俺はここで無力さを知った。無力という名の悪を知った」

ジレンの過去は、あの試合中にベルモッドから聞いた。

というか別に聞いてもいないのに勝手に語られた。

あの時はリゼットも負けるわけにはいかなかったので思考の外に追い出してしまったが、それでもジレンの願いを自分達が踏み躪ってしまった事に違いはない。後悔しているわけではないのだ。あそこで勝たなければ今頃自分達が生きていたかは分からないし、ジレンが勝利してその願いを叶えていたなら、試合に参加した全ての宇宙が今頃は存在していなかったのだから。

全王は第7宇宙が負けても地球と自分達は残してくれると約束したが、自分達さえよければそれでよし、というわけではない。

やはり誰も消えないのが一番のハッピーエンドだ。

「ジレン、貴方の願いとは結局何だったのですか？」

「……それを話す事に意味を感じない。今となってはもう叶わぬものであり、何より正しかったのはお前達だ。俺が願いを叶えていれば、あの大会に参加した全ての

宇宙が消えていただろう」

ジレンは腕を組み、目を閉じた。

その表情はどこか、己を責めるような苦渋に満ちたものだ。

「俺は……正義に全てを捧げたと言いながら、自分の願いしか考えていなかった……」
「別にいいのではないですか？ 本当に正義に全てを捧げ、願いすら抱けないのでは、それはもう正義という名の機械です。」

貴方は人なのだから、その願いは否定されるべきではありません」

「だが孫悟空は他の宇宙を救った」

「まあ、悟空君は……色々と変わっていますから」

リゼットは微笑み、大会の前に獲得していた力を発動させた。

それは万一の時の為の切り札として得たものだが、あの大会では結局出番が来なかったものだ。

リゼットがダークドラゴンボールに願った内容……それは、『一度だけ願いを使用する権利』だ。

神龍をいちいち呼ばずとも、いつでも願いを叶える事が出来る。そんな能力をリ

ゼットは赤い神龍へと求めた。

言ってしまえばリゼットとダークドラゴンボールを接続したのだ。

つまりリゼットは、本当に危なくなったら願いを叶えられるというズルい能力を隠し持って大会に臨んでいたわけだ。

勿論使っても星の爆破はない。ダークドラゴンボールは七つ揃った状態で保管されているのだからデメリットはほぼ無しだ。

とはいえ、結局その出番は来なかったので今でもその力はリゼットの中に残っている。

ならば、とその力でリゼットは一つの願いを叶えていた。

「貴方は十分に戦ったと思います。ならば少しくらい、自分の為の望みを抱いても誰も責めはしません」

「俺は正義などではなかった。トップ達の事も利用していただけだ」

「しかし、貴方がこの宇宙で今まで救ってきたものは嘘ではないはずですよ」

リゼットはここに来る前に、第11宇宙を軽く調査していた。

すると見えて来たのは、ジレンに救われたものがいかに多く、大きいからだ。

ジレンに救われた人々がいた。

ジレンのおかげで明日を迎えられる町があった。

ジレンに守られた国があった。

ジレンのおかげで日常が続いている星がいくつもあった。

彼は紛れもなく英雄だったのだ。

その始まりの動機が何であれ、本心がどうであれ、彼が救ってきたものは決して嘘ではない。

だからリゼットはここに來たのだ。

自分が踏み躪ってしまった彼の願いを、彼に返す為に。

ついでに言うと、いくらジレンが強敵とはいえあの大会で散々えげつない攻撃を仕掛けてしまった事への詫びも兼ねている。

ああしなければ戦いにすらならなかったとはいえ、人体破壊と鞭打乱発は流石に善人に仕掛けていい技ではなかった。今は反省している。

「貴方は、もう報われてもいい」

リゼットはそう言い、ジレンを横切って歩き出した。

それと入れ替わるようにジレンの視界に映ったのは、遠くから走って来る誰かの姿だ。

しかしそれはありえないもので、ずっと昔に失ったはずのものだ。

そうだ、こんな奇跡があるはずがない。あの人たちはずっと昔に死んだはずなのだから……。

涙で視界が歪むのが分かる。ずっと保ち続けてきた強さという名の鉄仮面が剥がれるのが分かる。

——そこにいたのは、死んでしまったはずの家族と、師匠であった。

ジレンは思わず振り返り、リゼットの背を見る。

しかし、もうそこにリゼットはおらず、代わりに家族が一斉にジレンへと抱き着いた。

「……ッ、……ッッ！」

声にならず、ただジレンは大きくなったその腕で、かつて失った大切なものを抱き締めた。

もう二度と取りこぼさないように。これが夢でない事を確かめるように。

長く、孤独に歩み続けてきた。

仲間など要らぬ、強さだけが全てだと信じて戦ってきた。

だがそれは、失ってしまったものを追い求めて心の隙間を埋めようとしていたに過ぎず、本当はいつだって過去を悔いていた。

だから救ってきた、守ってきた。

自分と同じ思いをする人間を一人でも減らす為に、悪党を裁き続けてきた。そしてこの日、ようやく彼の戦いは報われたのだ。

★

第7宇宙へ戻ると、何故か悟空とベジータが戦っていた。

場所は、かつて彼等が最初に戦ったギザード荒野だ。

かつての焼き直しのように二人はあの時と同じ構えを取り、しかしあの時よりも遥かに強くなっている。

当時はトワの横やりのせいでおかしな戦いになってしまったが、それでも二人はライバル関係を今も維持しているので、やはり宿命とでも言うべき何かで繋がっているのだろう。

それにしても、やはりというか悟空は身勝手の極意の使い方を忘れてしまったようだ。使う素振りも見せない。

そんな二人を天界から見ながら、リゼットは微笑を浮かべた。

「やはり神の奥義はそう簡単なものではないようですね。もう使えなくなってしまうたようです」

「当たり前だ。そうホイホイ使われてたまるか」

リゼットの言葉にビルスが不機嫌そうに言う。

しかしその言葉の中に安堵に似た感情が籠っている事をリゼットは見逃さなかった。

彼にも、まだ抜かれたくないという気持ちがあるのだろう。

だが悟空はかつてゴッドになった後、気付けばゴッドを完全に物にしていたような男だ。

きつと身勝手の極意もそのうち、当たり前のように使い始める事だろう。

リゼットはあの時の悟空の、神の気の使い方を思い出しながら氣を操作する。

すると、僅かにではあるがリゼットの片目が銀色に変色し、全身をあの時の悟空

と同じ銀のオーラが覆った。

「っ、リゼット……お前……！」

「まだ完全ではありませんが、一度この目で完成形を見ましたからね。

ゴールが見えていれば、そこに向かうのは不可能ではありません」

身勝手の極意は極めて難易度の高い技だ。

だがこれのいい所は、超サイヤ人などと違って特定の種族しか使えないような限定変身ではないという事である。

戦闘力の爆発的な向上には神の気との融合が必要不可欠だが、リゼットは既にそこに近い領域に立っている。

まだあの時の悟空には及ばないが、それでもゴールが見えているのだからいつか辿り着けるとリゼットは確信していた。

「悟空君、あまりのんびりしている暇はありませんよ」

リゼットは不敵に微笑みながら、悟空とベジータの戦いを見続ける。

宇宙は広く、自分が予想もしていなかった破壊神だの天使だの、全王だのといった者達が現れ始めた。

この分だと、まだまだ自分達の知らぬ未知の強者があちこちに潜んでいるだろう。ドミグラやトワのように時空間に潜む強者もいるかもしれない。

そうした者達がいつまた地球を狙うか分からない以上、研鑽を怠る事は出来ない。「私だって、まだまだ置いて行かれる気はありませんから。」

だからあんまりゆっくりしていると……また、抜き返してしまいますよ？」
今は悟空が最強だ。それは認める他ない。

身勝手の極意の使い方を忘れはしただろうが、切っ掛けがあればまたいつでも発動出来るだろう。

だから今は彼の背を追いかける。

だがいつまでも追ってばかりではない。自分だってまだまだ現役なのだ。

悟空をライバルだと思っているのはベジータだけではない。

ピッコロもターレスも……置いていかれはしたが天津飯も……そして勿論自分だって悟空をライバルと思い、追っているのだ。

気付けば前にいて、そしてその背中を皆が追っている。追いかけるうちにいつしか仲間となっている。

孫悟空とは、そんな不思議な男だ。

そんな彼がいる地球だからこそ、これからも守っていききたいと思う。

リゼットの初志はこの世界を隅々まで旅する事で、その望みを捨てたわけではない。

今回は一時的に神の座を離れただけだったが、いつかは神の座をタピオンに完全に譲って、そして自らは宇宙へと旅立つと決めている。

しかしだ……それはまだ先でいいだろう。

だって、地球はこんなにも楽しくて、騒がしくて……ここよりも楽しい場所なんてないのだから。

だから、悟空達が生きている間くらいは、このまま神様をやっているでもいい。リゼットはそう思っていた。

この世界はきつと、これからも様々なトラブルや困難が待ち受けている事だろう。未知の強敵が現れる事もあるだろう。

だが、きつとまた何とか乗り越えていける。

大丈夫、ドラゴンボールが無くても、孫悟空がいるのだから……。

ドジで明るくて、優しくて。

そんな悟空がみんな大好きだから。

——悟空がいるから楽しい。だから、ドラゴンボールの物語はこれからも続いていく。

悟空「またな！」

リゼット「このSSの主人公って私じゃなかったんですか!?

これじゃ悟空君が主人公みたいじゃないですかヤダー！」

・最後の最後に主人公力の差を見せつける悟空さマジ悟空さ。

というわけで、『ドラゴンボール ad a s t r a』は完結となります。

今まで見て頂いてありがとうございました。

終わり方は、あれこれ考えてもうちょっと捻ってエピソードも長くすることも考えたのですがダラダラ書くより「え？　これで終わり？」みたいにアッサリ終わらせてしまったほうがドラゴンボールらしいかなと思ってこうしました。

少しZの最終話をパク……リスペクトして、最終話っぽくなくしています。どちらかというと何事もなくまた次の日からあっさり続きそうな感じにしたほうがそれっぽいかと。

……まあ実際、Zは最終話の後にGTが出てきて続いてしまいましたけど。

この後の展開も一応考えていますが、現状はヒーローズのアニメもモロ編もどうなるのか分からないので様子見です。

クウラとの決着もやりたいですし、いつそ未来の話としてリゼットが神様をタピオンに譲り、別の宇宙に旅立ってそのままDB以外の作品とクロスとかもやってみたりもします。

とりあえず新章まではかなり間が空くと思うので、これで一度完結とします。もし始まったら1話目はセルが未来に帰る話からスタートですかね。

ともかく、今までありがとうございました。

更新再開した時にこのSSの事を忘れていなければ、またお会いしましょう。

宇宙争乱編

プロローグ 新たなる火種

☒ 皆様こんばんは。お久しぶりです。

期間が空きすぎてもう忘れられてそうですがソロモンよ、私は帰ってきた！
新しいPC購入記念と旧PC供養に投稿する事にしました。

本当は結構前（というか数年前）にヒーローズ編自体はほぼ書き終わってて、「でもまだ新設定とか生えてきそうだし漫画版続きそうだし……」で様子見を続けていたのですがこの度、ad a s t r aとG A N T Z『焰』と一緒に書いてくれた私の相棒PCがお亡くなりになり、中のデータもあわや一緒に消えるところでした。

何とか相棒が最後の意地を見せて一度だけ起動してくれたおかげでその瞬間に全データをフラッシュメモリに避難させる事に成功しましたが、マジで肝が冷えた……。

そんなわけで書き溜めしていても消える時は消えるという事で、もう投稿してしまえと踏ん切りがつかしました。

ありがとう相棒……13年間お疲れ様。

まあ止め刺したの多分、私が「これもしかしてウイルスじゃね？」と無理やり突っ込んだフリーのクソ重いウイルスチェックソフトなだけど……。

それ入れた瞬間にクラッシュしたし……起動しなくなったし……。

（尚、新PCのウィルスバスターでフラッシュメモリをしっかりと調べて感染してなかった事は判明済み）

相棒（HP1）「ま、まだだ……まだ終わらんよ！」

無能な味方（☒）「頑張れ相棒！　今ウィルスソフトを入れてやるぞ！」

相棒（HP1）「あっ、重……やめ……」

相棒（HP0）「」

☒「相棒オオオオオオオ!!」

星々が瞬いていた。

この宇宙に星は文字通り星の数あれど、その中で命を育む星というのは驚くほど少ない。

生物が住める星というのは太陽との距離や他の星との位置関係などが奇跡的に噛み合う事で初めて出来上がる、宇宙の宝石なのだ。

しかし希少性の高い宝石であるほど、それを欲する欲深い者達も増える。

過去、この第七宇宙はそんな惑星という名の宝石を求める愚者が幅を利かせ、そしてそんな愚者に宝石を売りさばく悪質な一派が宇宙の帝王を名乗っていた。

地球に白の女神が登場した事で多少マシにはなったものの、それでもこの第七宇宙が全十二宇宙の中で下から数えた方が早いほど人間レベルが低いとされる理由の一端がそこにある。

その宇宙の帝王……フリーザ率いる軍が瓦解してから十年以上の年月が経っても、愚者はいくならない。

今でも、良質な惑星を我が物にしようと企てる者は存在しているし、これからも決していなくなるまいだろう。

過去にフリーザと蜜月の関係にあったヒータ軍も未だ捕まらず、宇宙のどこかに潜伏を続けている。

そして、そんな者達から惑星を守る為に活動している組織こそが、超銀河王ザーボン率いる第七宇宙治安組織——『永遠の美』であった。

その首領であるザーボン自身が他ならぬフリーザの元配下という経歴の持ち主だが、しかし蛇の道は蛇こそが知っている。

かつてフリーザ軍の幹部として活動していたからこそ、ザーボンはかつての自分の同類達の思考や行動が手に取るように分かり、次々と罪人達を捕えて実績と信頼を重ねていた。

ザーボンが睨みを利かせているからこそ、ヒータ軍も派手な動きが出来ずにいる。今やザーボンの権力は神々を除いた下界の人間の中ではトップと言っている。地位も名誉も手にした彼はまさに勝ち組、人生の勝者だ。

しかしそんな勝者であるはずのザーボンは今、焦りに焦っていた。

「くそっ！　よりによって『星喰い』が脱走だと!?　どうなっている!」

マントをなびかせ、銀河パトロールの母艦の中をザーボンが歩いていた。

その隣には『永遠の美』のエリート隊員であるジオラが歩き、反対側にはザーボンの片腕である傭兵レジックが並び、顔を強張らせていた。

ジオラはビレテジオンという惑星出身の宇宙警察だったが、その腕をザーボンに買われてザーボンの片腕にまで出世を果たした強者だ。

実は地球で暮らしていた時期もあり、その時には『貯金戦士キャッシュマン』とかいう妙な名前を名乗っていたようだ。

そこから数歩離れた後ろを、最近ザーボンがスカウトしてきた強豪宇宙人のアボとカドが続く。

『も、申し訳ありません！ 嚴重に警備をさせていたのですが、どうやら魔力が戻ったようで……』

ザーボンに怒鳴られているのは通信機の方こうにいる銀河王だ。

少しややこしいが『超銀河王』がザーボンで、『永遠の美』の総帥である。

そして『永遠の美』の下部組織のうちの一つである銀河パトロールを束ねるのが銀河王だ。

銀河王は一昔前の出鱈目な宇宙人特集に出る火星人のような外見をしたタコ型の

宇宙人であり、ザーボンとは外見的に彼の事があまり好きではなかった。

「言い訳などどうでもいい！ 現在の被害状況を知らせろ！」

『は、はい！ 我が銀河パトロールの被害は、警備に当たっていた隊員七人が殉職……近くの牢に閉じ込めていたコルド大王も脱走し、行方を晦ましています。

持ち去られた小型宇宙船は一艇である事から、別々に逃げたのではなく結託したと考えられます』

「……コルドもか」

ザーボンは絞り出すような声で言う。

コルド大王はザーボンにとっては、かつての上司の父だ。

既にこの世にいないはずだったコルド大王が突如復活してレジックに捕えられたのはつい最近の事。

銀河パトロールに所属するジャコ隊員の報告で分かった事だが、フリーザ軍残党がドラゴンボールを用いてフリーザを蘇生し、そのついでにコルドも復活させたらしい。

無論このような危険な輩を生かしておくべきではないと、ザーボンはすぐに死刑

にするべく手を回し、手続きや裁判も終わって後は執行を待つのみであった。

その矢先の脱走とあっては、焦りも生まれる。

「おのれ……手続きなど後回しにして、サガンボやシモレッカのようにさっさと処刑してしまうべきだった！」

『あの……お言葉ですがそれはあんまり……』

その、強引な刑の執行は世論というものがですね……各方面からも色々と苦情が……』

「ああ。そう私に進言してコルドの処刑を遅らせたのは貴様だったな。その結果がこれだ」

『う……そ、それは……』

ザーボンは悪人である。表向きは正義の治安維持組織の長だが、裏では今でも汚い事に手を染めていた。

例えば、サガンボという囚人をつい先日にも秘密裏に処刑したばかりだ。

サガンボは銀河で暴れ回っていた強盗団のリーダーだった男で、銀河パトロールに収監されていたが、ザーボンはこれを更生の見込み無しとして独断と強権発動で

死刑にしてしまった。

サガンボは大罪人だが、それでもまだ死刑判決は受けていなかった。

しかしこんなのを残し、万一にでも世に出られてはまた第七宇宙の人間レベルが下がってしまう。

それはひいては全王による宇宙消滅の危機を招きかねない。

故にザーボンは、表向きはサガンボの自殺という扱いにして彼を始末したのだ。どうせ更生しない上に無駄に力はあるから、外に出せば確実に混乱の種になる。そして生かしておけばその分、場所を取られるし食費などにもかかるだろう。

ならば生きていても邪魔なだけだ。ザーボンはそう考えた。

そしてザーボンの魔手が及んだのはサガンボだけではない。

シモレッカ、マカレニ兄弟、その他大勢の名の知れた囚人達。それらをザーボンは容赦なく地獄に送った。

ある者は表向きにはまだ生きていて収監されている事にして毒ガスで殺した。

またある者は、わざと脱走させてから『抵抗された為止むを得ず』射殺させた。

その他、病死や事故死、自殺、囚人同士の殺し合い、そしてでっち上げの罪を被

せ、裁判官を買収して形だけの裁判を経ての死刑執行……様々な偽装工作を施し、ザーボンは宇宙の癌を次々に消していったのだ。

ザーボンは美を好み、醜い者を嫌う。宇宙を汚す害虫を掃除する事に良心など痛まない。いや、そもそもこの男にそんな良心などというものの自体が存在しないのかもしれない。

彼は徹頭徹尾、己の利益と欲望のみの為だけに動いている。

外見がいかに美男子で美しい宝石や装飾品で固めていようと、その本性は昔から何も変わらない。

彼の真の姿同様に、その本性は醜悪な怪物だ。

だから、囚人の中に同郷が混ざっていようと関係なかった。

しかしそんなザーボンだが、コルド大王を取り逃がすという痛恨の失態を演じてしまった。

やはり先に殺しておくべきだったと、ザーボンは後悔する。

どうせ処刑するのだから先に始末しておいてから表向きは生きている事にして、手続きを終えた後に改めて世間に死刑を執行したと公表すればよかった。

……いや、コルドはまだいいのだ。

単独で惑星を破壊してしまえるような怪物ではあるが、それでもザーボンが信を置く片腕のレジックならば取り押さえる事が出来る。

最近配下に引き入れた元フリーザ軍のアボとカドもそれぞれがかつてのフリーザに匹敵する実力者な上、融合する事で更に力を増す事も出来る。

更にザーボン自身も、レジックによるトレーニングを受ける事で以前とは比べ物にならないほどのパワーを得ていた。

だが問題は彼等が『星喰い』と呼ぶ囚人の方にあった。

『星喰い』のモロ。

今から一千万年以上昔に、320もの惑星を死滅させたと言われる伝説の大罪人だ。

第七宇宙の界王神が把握している人間の住む星がたったの28個である事を考えれば、この囚人がいかに恐ろしく、第七宇宙の人間レベルを激減させたかが分かるだろう。

モロはコルド大王など比較対象にもならない高い戦闘力の他に、恐るべき魔力を

持っていた。

それを何とか大界王神が封じ、捕えたのだが……魔力抜きでも戦闘力が高すぎて誰も死刑を執行出来なかったのだ。

それでも長い年月の中で少しずつ弱り、ようやく寿命も近付いてきた……はずだった。

だが死を前にして生存本能が働いたとでもいうのか。

まさか今更になって、僅かとはいえ魔力を取り戻すとは。

「早急に連絡の取れる全惑星に緊急警報を出せ！」

西、東、南の銀河パトロールからも援軍を出させろ！

『永遠の美』の全力を注ぎ、何としても早急に星喰いを捕えねばならん。

奴を捕えるのが遅れるほどに第七宇宙の人間レベルが下がると見え！

この際生死は問わん、捕える事さえ出来れば死んでいてもいい！」

「それで殺せるならば、収監中にとくに殺していただろうな」

デッドオアアライブで己の権力が届く範囲内全てに緊急指令を発するが、それで殺せるならば既に殺していた。

その事をレジックに突かれ、ザーボンの顔が歪む。

「レジック……お前でもモロには勝てんか？」

「無理だ。奴は老いているが、それでも俺より遥かにパワーが上だ。

アボとカドが融合しても勝負にならないだろう」

「……そうか」

レジックは高い戦闘力を誇る傭兵だ。

最新式のスカウターで測った所、その戦闘力は100億以上の数値を叩き出した。

アボとカドは単体では50万ほどだが、融合する事で3000万を上回る。

レジックの訓練を受けたザーボンも以前とは比較にならないパワーを得て、今では2000万を超えている。

しかしそれでもモロの前では誤差に過ぎない。

「どうする？ 行き先も分からない上に手に負えないともなれば……こいつはいよいよ不味いんじゃないか？」

「……いや、行き先はわかる。

星喰いがコルドと結託してくれたのは、考えようによっては逆に好都合だったか

もしれん」

レジックの言葉に、ザーボンは確信を含んだ声で答えた。

モロだけならば何処に向かうかは読めなかっただろう。

しかしコルドが一緒にいるならば、自ずと目的地は絞られてくる。

「脱走しようがモロの寿命が尽きかけている事に変わりはない。

それに封じられた魔力も取り戻したいはずだ。

そこに、それを可能とする手段をぶら下げられれば、必ず飛びつく」

「ドラゴンボールか。ならば向かう先は地球か？」

「いや……確かにコルドは地球に恨みを持っているが、あそこは第七宇宙でも最も力のある者が集まっている。いかにモロでも今のまま向かえば無事では済まん。

ならば奴の向かうべき場所は、ナメック星だ」

悪党の思考は悪党が知っている。

かつてフリーザの近くでそのやり方を見てきたザーボンは、誰よりもあの手の輩の思考を熟知していた。

しかし問題は、行き先が分かっていたとしてもどうしようもないという事だ。

モロを討てるだけの手札がこちらにはないからだ。

相手の札がキングと分かっているのに、こちらにはエースもジョーカーもない。絶対的な力を持つ『個』の前ではいくら頭数を揃えても意味がないのだ。

多い方が勝つという戦争のセオリーが機能するのは、戦闘力差がそれほど大きくない時だけだ。

フリーザの戦闘力が53万だからといって、サイバイマンが千匹集まれば勝てるかといえば、そんな事はまずあり得ない。

強大な『個』に立ち向かうには、こちらと同じく強大な『個』を用意しなくてはならない。

『ならばメルスはどうでしょう？ 奴ならばきつとやってくれます！』

「駄目だ。アレは信用出来ん」

銀河王が自分の配下の中でも最も優秀な隊員の名を挙げるが、ザーボンに僅かの迷いもなくそれを切り捨てた。

銀河パトロールのメルスの事はザーボンも知っている。

驚くほどに優秀で、104もの惑星を担当する若き超エリート隊員だ。

性格は穏やかで物腰も柔らかく、接しやすい。

サガンボやセブンスリーといった、かつてのギニュー特戦隊に匹敵するような怪物を捕まえたのもこの男である。

だがザーボンには彼を、ある意味ではモロ以上に危険視していた。

メルスは優秀だ……いや、優秀すぎる。

一度メルスとレジックで模擬戦をさせてみたが、驚く事にレジックの攻撃が彼には掠りもしなかった。

それどころか力を利用して投げ飛ばされたり、背後を取られて銃を突きつけられる始末。

……おかしいだろう。どう考えてもありえない。

銀河パトロールはザーボンによって改革されるまで、大人のサイヤ人一人にすら手が出せずに見て見ぬ振りをしていた集団だ。

かつてのベジータどころか、ラディッツにすら恐れをなして手を出さなかったような連中の中に、どうしてあんな奴がいる。

あれほど優秀ならば、それこそかつてのフリーザ軍など容易に壊滅させる事が出

来たはずだ。

なのにメルスはそれをやらなかった。何故だ？

他にもメルスには不審な点がいくつもある。

スカウターで戦闘力を計ろうとしても上手く計れず、彼の仕事を間近で見ても時折その動きを見失ってしまう。

それはまるで、あのグルドのように時間でも止めているかのような不自然さだ。メルスは謙遜しているが、明らかに実力を隠していた。

得体がまるで知れない。底が見えない。

あの温和そうな笑みの裏で何を考えているのかがまるで分からない。

故にザーボン、メルスの事を恐れていた。

ただの優秀な隊員ならばまだいい……だが、メルスはある存在と共通点がある。さげろ。

青い肌。白い髪。表面化しない戦闘力。加えてどんな攻撃も当たらないあの回避能力。

それはまるで、ジャコからの報告にあった破壊神の付き人……『天使』のようで

はないか。

『な、何故です！　メルスは優秀で……』

「ああ、優秀だ。とても一隊員の器に収まらぬほどにな……」。

あれほどの男が都合よく突然湧いて出るなど、私にはとても思えん」

ザーボンはメルスが恐ろしかった。

メルスの正体が天使である事を心底恐れた。

もし天使ならば……あるいはそれに連なる者ならば、何故銀河パトロールにいる？

天使は中立で自らパワーバランスを崩すような真似は出来ないから、銀河パトロールを使って宇宙の秩序を守らせる気なのか？

それとも急激に権威を増している存在……即ちこのザーボンを消すべきかどうかを見定めているのでは？　そして消すべきと判断されたその時には、破壊神ビルスが来るのではないか……!!

……どちらにせよ、メルスはモロの捕縛に使えない。

何を考えているか分からない……もしかしたら天使かもしれない男など、使いた

くもない。

「……………モロに対抗出来る『個』、か」

ザーボンは少し考え、やがて意を決したように館内の通信機を手にとると宇宙船の操縦士へ連絡を入れた。

「……………操縦室、聞こえるか？　こちらはザーボンだ。

悪いが進路を変えてくれ。向かう先は北の銀河の……………」

——地球に向かってくれ。

そう言い、ザーボンは通信を切った。

【戦闘力】

ザーボン…2200万

第二形態…3000万

銀河パトロールを掌握したかつてのフリーザ軍幹部。

自分の美しさに絶対の自信を持つ一方で、自分より美しいものは許せないくせに醜い者は嫌いという困った人。

リゼットに激しいジェラシーを感じる一方で自分が心底美しいと認めた者の前では無力になるので手は出せない。

リゼットの存在を利用して成り上がり、超銀河王となった。

彼の行動は基本的に自分の地位と名誉を守る為であり、世界の平和なんてぶっちゃけ微塵も考えていないが自分を称える愚民がいなくなつては困るので結構本気で事態の解決に動く。

修行によって戦闘力を大きく伸ばしたが、今となっては誤差のレベル。

レジック…100億

『GT』で宇宙に旅立った悟空達の前に現れた最初の強敵。

ノーマルのトランクスを一蹴し、悟空を圧倒するが超サイヤ人には手も足も出なかった。

「GTの悟空はノーマルのままでも魔人ブウ以上なのでレジックも魔人ブウ以上」という考察もあった気がするが、レジックを見ても悟空は「魔人ブウ以上だ」とは評

していない。

後にリルドにはそう評価したのにレジックはそう評価しなかったのは不自然であり、この事からレジックはリルドと比べると大した事がないと考えられる。

一応GT悟空が超の悟空より基礎能力で勝る事を考慮し、この数値とした。

このSSではザーボンに雇われ、彼の片腕として働いている。

ちなみにGT悟空がノーマルのままりルドと戦えた理由としては、ナメック星でのギニュー特戦隊との戦いの時と同じく、必要な時だけ瞬間的に界王拳を使っていたのではないかと推測出来る。

アボ&カド…50万

合体…3000万

『オッス！帰ってきた孫悟空と仲間たち!!』に登場したフリーザ軍残党。

それぞれがフリーザに匹敵する実力者と言われたが、ターブルがフリーザの第二形態以降を知っているとは思えないので第一形態と思われる。

（長年フリーザに仕えていたベジータすらザーボンに聞くまで知らなかったのも、惑星ベジータ崩壊前に辺境の惑星に追いやられていたターブルが知っているのは不

自然)

戦闘後に悟空達と和解していたので、そんなに悪い二人ではない。

このSSでは『オッス！帰ってきた孫悟空と仲間たち!!』の後にザーボンによってスカウトされたらしい。

合体する事でパワーを増すが、今となっては誤差のレベル。

メルス…未知数

『銀河パトロール囚人編』で登場した新キャラ。

いきなり悟空とベジータを光線銃で倒した未知の実力者。

というか天使見習い。

見習いなのでウイスよりは弱いとしても、案外ビルスと互角くらいの強さはあるのではないだろうか。

このSSのビルスは(単純な戦闘力は)115兆くらいなので、大体そのくらいの強さだと思われる。

第1話 オッス! 帰って来た孫悟空と仲間達

以前までここに掲載していた支援イラストは第一話後書きに移動しました。

——地球。

宇宙の中で最も環境が整った、とまで評される事もあるその惑星の空で今、一人の戦士が戦っていた。

奇妙な跳ね方をした特徴的な髪は黒。同じく黒い眼には力強さが溢れている。山吹色の胴着は亀仙流のものをベースとしているが、象徴である『亀』のマークは入っていない。

かつてこの惑星を侵略する為に送り込まれ、今では地球一の戦士となった男——孫悟空だ。

彼が迎え撃つのは第9宇宙のトリオ・デ・デンジャーズ。

三人の連携を涼しい顔でかわし、いなし、蹴りで纏めて薙ぎ払う。

背後から飛び掛かるのはボタモにオッタ・マゲッタ、フロストといった第6宇宙の戦士達だ。

悟空は振り向きながら超サイヤ人ブルーに変身し、彼らも纏めて叩き落す。

地球の中核である神殿。その隣には以前ヒルデガンとの戦いの為にこの星の神が物質創造の術で作った巨大な浮遊闘技場^{リング}がそのまま残っている。

その上で今、悟空は複数の戦士を同時に相手取っていた。

悟空を取り囲むのは、いずれも宇宙の命運を背負う力の大会に選抜された他の宇宙の精鋭達……アニラーザやトップ、ジレン、ディスポ、ヒット、カリフラにケール、そしてカリフラとケールがいるのに、どういうわけか二人が合体して生まれるケフラまでいる。

そればかりか、今まで戦った強敵達までもが連携して悟空を追いつめていた。

「だっ！ そりゃー！」

『オラオラオラオラオラ！』

悟空がカリフラとケフラというあり得ないタッグを正面から迎え打ち、両者の間で無数の攻防が行われる。

この戦士達は全員、本物ではない。

この星の神——リゼットの技の一つである『ヒーローズ・ゴッドミッション』によって再現されただけの偽物である。

『ヒーローズ・ゴッドミッション』は繰気弾のような打撃性能とスーパーストカミカゼアタックのような自律行動を備えた、要は少し変わっているだけの気弾に過ぎない。

しかしそこにリゼットの観察力と模倣の技術をプラスする事によりオリジナルと遜色ない動きをさせる事が可能となる。

とはいえ万能には程遠く、所詮はリゼットの気弾に過ぎないのでリゼットより強い戦士……例えばジレンの完全再現は不可能だ。

四星龍のような太陽熱を与えることも出来ないし、ヒットは時飛ばしを使えない。それでも修行の相手としては十分だ。疑似的にはあるが、今まで戦ってきた強敵……あるいは戦えなかった強敵を相手に限りなく実戦に近い経験を積む事が出来る。

『カカロットオオオオ!』

『まずお前から血祭りに上げてやる！』

筋骨隆々の伝説のサイヤ人であるブロリーとケールが前後から悟空を挟むように飛び込み、ラリアットを同時に放った。

咄嗟に避けた悟空の頭上で二人のラリアットがクロスし、衝撃波を放つ。

まだ安心する事は出来ない。今度は五人のフリーザが突撃してきた。

第一形態、第二形態、第三形態、第四形態、そしてゴルドンフリーザだ。

偽物と分かっていてもフリーザが五人に増えて同時に奇声をあげて突撃してくる様はなかなか恐ろしい。

『ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！』

「お……っとお！」

第三形態のエクレアのような頭をしたフリーザが高速で両手を動かし、指先からのビームを連射するも悟空はこれを片手で全て弾く。

しかしその隙に第二形態フリーザが角を悟空に突き刺そうと突撃してきた。

これを避けるも今度は最終形態フリーザとゴルドンフリーザが悟空を蹴り落とし、下で待ち受けていた第一形態フリーザがアップで迎撃する。

だが悟空は直撃の瞬間に腕を挟んで防御しており、逆にカウンターで第一形態フリーザを粉碎した。

更に気を解放。全方位に気を放つ事でフリーザを全滅させた。

それでもまだ終わらない。今度はシルバー大佐、ホワイト將軍、ブルー將軍、ムラサキ曹長が同時に襲い掛かってきた。

悟空はこれをかめはめ波で同時に消し飛ばし、一息つく。

今となっては大した事のない敵も混ざっているが、そんなのはこの技にとって意味がない。

何せ術者はリゼットなのだ。ならば当然、その強さは術者に依存するので『超サイヤ人ブルーより強いチャパ王』というありえない戦士だって作り出せてしまう。だが悟空は追いつめられながらも不敵な笑みを崩さず、戦闘の最中でありながら眼を閉じた。

そして次の瞬間には瞳が銀色に輝き、敵の攻撃を全て避けてしまう。

『身勝手の極意・兆』。あの力の大会で新たに会得した技を用いて軍勢相手にも優勢に立ち回り、そのまま体力が尽きるまで戦い続けた。

「はーっ……はーっ……やっぱ身勝手の極意は持続時間が弱点だな。長く続かねえや……」

自律気弾相手の修行を終えた悟空は特設リングの上で大の字になって寝転び、激しく呼吸をしていた。

途中までは圧倒的に優勢だったのだが、結局軍勢を全滅させるまでは至っていない。

その前に身勝手の極意が時間切れを起こし、戦闘が終わってしまった。

これが実戦だったならば、そのまま袋叩きにされている所だ。

寝転ぶ悟空の近くに少女がやってきて、悟空を見下ろす。

「お疲れ様です、悟空君。手応えはありましたか？」

外見年齢は十四歳ほど。

白銀の髪に純白のドレスを着こなすこの少女こそ、先ほどまで悟空が戦っていた戦士達を具現化した張本人……この星の神を務めるリゼットだ。

リゼットは覗き込むようにして、倒れた悟空を見る。

「ぜー、ぜー……あ、ああ、神様、サンキューな。前よりは時間を少しだけ伸ばせたんだけど、やっぱどうしても途中でへばっちまうな。それに身勝手って言うても当たる時はやっぱ当たっちまう」

力の大会が終わって以降、悟空の当面の目標は身勝手の極意を完全に物にする事となっていた。

その為にこうして連日神殿を訪れてリゼットに対戦相手を用意してもらっているのだが、今の所は毎回物量に押し切られて途中で変身が解けてしまっていた。

それに、今回へばってしまった原因は他にもある。

「ところで神様、途中で何かオラにちょっといかけてなかったか? 何回か身勝手の極意がおかしな動きしたんだけどよ」

「あ、バレました? 実は対身勝手の極意用に使えそうな技を発見しまして。つい試してみたくなつたんです……これなんですけど」

そう言い、次の瞬間悟空は咄嗟に防御姿勢を取った。

しかし何も来ない。ただ、本物と錯覚するほどの『気配だけの攻撃』が来たただだ。

実際には何もされていない。リゼットは一步も動いていないし手も動かしていない。

なのにガードの上から走る衝撃……一撃の重さ、鋭さ。それがリアルに想像できてしまうほどの、真に迫った気配だった。

「……今のは？」

「イメージの押し付け……エア打撃とでも言いましょうか。悟空君ほどの達人ともなれば実際に私が攻撃する前に気配だけである程度察して動いていますし、身勝手の極意ともなれば猶更です」

悟空達は戦いの中で、実際に攻撃が来てから避けたり防いだりしているわけではない。

膨大な戦闘経験値からくる予測や見切りを混ぜ、ほんの少し先に動いているのだ。リゼットはそれを利用し、気配だけの攻撃を放つことで本物の攻撃と悟空に誤認させ、防御姿勢を取らせた、というわけだ。

「身勝手の極意は頭で考えて動いているわけではなく身体が勝手に判断して避けてしまう奥義です。」

つまり悟空君が頭で偽物の攻撃と理解していても、身体が本物の攻撃と誤認すれば勝手に回避動作を取ってしまうんですよ。けれど実際はありもしない攻撃を回避してるわけですから、それは余計な隙となります」

「なるほどなあ……流石神様だ。そういうやり方もあるんだな。

よしっ! そんなら次はそれも最初からありで頼む!」

「もう一戦するんですか? タフですねえ……」

少しの休息ですっかり回復してしまった悟空は飛び跳ねるように起き上がり、軽く体操をする。

そんな悟空を見てリゼットは困ったように笑い、しかし嫌そうな顔はしなかった。

★

全宇宙の命運を左右した力の大会から数か月ほどが経過した。

悟空が帰った後もしゼットは、神殿から地上を観察しながら世界のバランスを調整している。

大会前に一時的にタピオンに譲渡した神の座は再びリゼットに戻り、タピオンは次期地球神として修練に励んでいた。

あの大会の為に復活させた四星龍も今やこの住人だ。

最近では一星龍同様に他のドラゴンボールを取り込んだのパワーアップも可能だと判明したが、地球のドラゴンボールは石になってしまっているのでパワーアップ比率は微妙だ。

何であの人、額に石埋め込んでるの？

ここ最近では、特に大きな事件も起きずに平和が続いている。

しかし悟空達は相変わらず修行大好きで、リゼットも研鑽を続けている。

大きく地力が伸びる事はなかったが、以前まではバーストリミット・マイナスとの併用でなければ使えなかった全力のゼノバースを短時間ならば維持出来るようになり、リゼットはこれを旧来の出力を抑えたゼノバースと差別化して『ゼノバースⅡ』と名付けた。

悟空達の超サイヤ人や超サイヤ人2、3、4といった進化が羨ましかったわけではない。断じてない。

段階ごとに強化する変身恰好いいか思っていたわけではないのだ。

尚、超サイヤ人と違ってⅠ→Ⅱと移行しても見た目は何も変化しない。

それから、常時発動しているせいで今となってはほぼ素の状態となったアルティメット化の上からバーストリミットを使う事で、一応戦闘力『だけ』ならばあのジレンをも上回る事に成功した。

……ただし、こちらはゼノバースに備わっている気の無限回復が失われ、ゴッドミッションやアルティメットブラストといった燃費の悪い技が悉く使用不可能になっってしまう上に持続時間がゼノバースⅡより更に短いのでとても使い物にならない。

さながらそれは、セルの前でドヤ顔をして「僕は父さんを超えてしまったんです」と言い放ち、悟空からも「これでは勝てねえ」と駄目押しされたムキクスの如く。いくら戦闘力だけを上げて、それ以外を疎かにしては勝てる相手にも勝てない。なのでリゼットはそっと、アルティメット化十バーストリミットを封印した。そんな平和が続いたある日の事。

セルが何の前触れもなく、見知らぬ女性を神殿に連れてきた。

「……セルの彼女ですか？」

セルが女性を突然連れて来るという予想しなかった事態への、リゼットの第一声

がそれであつた。

多少不意は打たれたものの、女性を観察するとなかなか美人だという事が分かる。やや跳ねた茶髪は腰まで伸び、眼鏡をかけた目は18号とよく似た切れ目で顔立ちも整っている。

服装は赤と藍色の6面分けという、なかなか奇抜なデザインのミニワンピース。上からは白衣を羽織り、その左肩にはカプセルコーポレーションのロゴマークが刻まれていた。

足はストッキングで覆われ、両耳には金のイヤリング。リゼットにはない大人の女性らしい色気と魅力が彼女からは感じられる。

そして左手の中指に金の指輪……この位置の指輪は確か協調性が高まる、とかだったか。

対人関係や家族との接し方で悩みでもあるのだろうか？

「何故そうなる」

セルが不本意そうに言うが、それ以外に一般人をわざわざここまで連れて来る意味があるのだろうか、とりゼットは考えた。

気を感じしたところ、この女性からは大して気を感じない。

しかしここで、リゼットは己の間違いを悟った。

……違う。一般人ではない。

彼女から感じられる気は悟空や自分、ピッコロなどの気が混ざり合った……セルに限りなく近いものだったのだ。

「気が付いたようだな」

「……人造人間、ですか？ それも貴方と同じく有機体の……多くの戦士の細胞を集めたタイプのようなですね」

「その通りだ。名を人造人間21号……17号や18号と同じ人間ベースの人造人間だ。そして、この時代の私でもある」

セルの発言にリゼットは自分の耳がおかしくなったのかと思った。

このクール系美女がこの時代のセル？ いやいや、そんな馬鹿な。

自分の知るセルは目の前にいるように、緑色のセミと人を混ぜたような変なのだ。加えて言うなら、セルに性別というものはないが、それでもその人格はピッコロ同様に男性と断言していいものである。

セルTSとか一体どこの誰が得をするというのだ。

「何か変な事を考えていそうだが、この時代の私をそのまま女性体にしたわけではない。」

ドクターゲロの研究所で破棄されていた人造人間21号をベースに、この時代の私を素材として融合させたのが彼女だ。

したがって正確に言えばこの時代の私を取り込んだ別の人造人間と言った方が正しいだろう」

「……まだ研究所があったんですか」

リゼットはげんなりとした声で言う。

ドクターゲロの研究所は調べられる限り調べて、全て潰したと思っていたがまだ討ち漏らしがあったらしい。

リゼットは千里眼にも等しい遠視能力があるが、ゲロの研究所をピンポイントで検索出来るようなものではない。

生物ならば気の探知も出来るが、人造人間ではそれも不可能だ。

人造人間は、流星に今度こそ打ち止めだと思いたい。

「それで、その21号もやはり悟空君の抹殺が目的ですか？」

「いや。妙な事だが、ただ造られて放置されていただけだった。

恐らく暴走の危険性から、起動出来なかったのだろう」

「暴走、ですか？」

「ああ。こいつには魔人ブウの細胞が多く使われている。

恐らくスパイロボが採取したのだろうが……その結果、異常な食欲を抱えて慢性的なエネルギー不足に陥ると言う欠陥を抱えてしまったのだ」

セルの説明にリゼットは思わず顔を顰めた。

魔人ブウの細胞……それはいくら何でも、危険すぎる代物だ。

今でこそ魔人ブウは人並みの知性と善性を備えているが、それは太っていたけど温和で優しくった大界王神を吸収したからこそ得られたものである。

しかもその上でリゼットが悪性だけを『破壊』し、ようやく今の魔人ブウになった。

しかし魔人ブウというのは本来、貪欲に相手を吸収して進化していく存在だ。

魔導士ビビディが創ったと界王神は語っていたが、リゼットが時の部屋で調査し

た結果、実はそれは間違いであったという事も判明している。

魔人ブウそのものは太古から存在しており、ビビディはそれを目覚めさせる方法を知っていただけに過ぎない。

そして魔人ブウは永い休眠と大暴れを繰り返すうちに人間の悪しき部分をどんどん吸収し、純粹ブウと呼ばれる姿になったのだ。

つまり純粹ブウと呼ばれる、この世界では登場しなかったあの小柄なブウすら最初の魔人ブウからはかけ離れた姿の可能性が高い。

ここからはリゼットの憶測になるが、恐らく魔人ブウには元々悪も善もなく、己の力になりそうなものを無差別に吸収するだけの……言うならば生物版ビッグゲテスターのような存在だったのではないだろうか。

そこに悪の要素だけを意図的に与え、そして純粹ブウを『完成』させたのがビビディ……と思えば、彼が創ったというのもあながち間違えた表現ではなくなる。

無論、憶測だ。確証はない。

しかしどちらにせよ、魔人ブウの細胞が恐るべき貪欲さと飢えを常に抱いているのは間違いないだろう。

「ドクターゲロも危険な事をしますね……いくら彼が天才といってもそれは……」

「ああ、到底制御出来るものではあるまい……通常の方法ではな」

「……? 通常ではない方法ならば可能、とでも?」

魔人ブウの細胞は人間の手に負えるものではない。

ビビディですら結局、魔人ブウを制御する事は不可能だった。

しかしドクターゲロはやはり、人知を超えた超天才だったのだろう。

魔導士ですら制御不可能だった魔人の細胞すら制御する方法を確立しかけていた。

『リンクシステム』。21号の中の魔人細胞を制御する為にゲロが造り出したシステムだ。

こいつは、対象の中に異なる魂を注入する事でその力を制御し、抑える事が可能となる。

肉体ではなく魂を制御するのだ。理論上これで抑えられないものはない。

このシステムにより、21号の中には現在彼女とは別の魂が入り込み、食欲にブレーキをかけ続けているのだ」

「その魂こそが……」

「そう。この時代の私だ」

リゼットは思わず溜息を吐いた。

それはドクターゲロへの感心と称賛と、そして呆れと嘆きが入り混じったものだ。

……天才だ。本当に、そうとしか言いようがない。

ドクターゲロは魔導士すら制御不可能だった魔人ブウすら制御しようとしていた。

そして未完成ながら、その方法を確立した。

魂の操作と制御……それはもはや神の領域だ。

リゼットのような、地球人が神という役職を与えられただけのなんちゃって神様ではない。

閻魔や界王神といった、生まれながらの神々にしか許されない禁忌の領域である。最終的にそれを応用して見事完成にまで漕ぎつけたセルとブルマも大概だが、やはりゲロの天才性と閃きあってのものだろう。

勿体ない……本当に心底、ゲロの頭脳が勿体ないと思った。

「あ、あの!」

リゼットが考えていると、話題の女性——21号が声をあげた。

そういうば当の本人を置いて話し過ぎた。

セルが彼女をここに連れてきた意図はまだ分からないが、とりあえず今は彼女とも話しておくべきだろう。

そう思い顔をあげると、21号は委縮したようにもじもじする。

「え、ええと……初めまして、神様。私、21号と申します。

その……セルさんに言われて、今日からここに住む事になりました。

よ、よろしくお願いします!」

外見からは18号と同じクール系のイメージを抱かせたが、実際に話してみれば全くそんな事はなかった。

見た目に反して礼儀正しく、内気な性格をしているらしい。

彼女は深々と頭を下げ、この神殿に住むと言い出した。勿論リゼットは初耳である。

「セル、これはどういう事でしょう?」

「あ、あのっ、駄目でしょうか？　そ、そうですよね……いきなり私みたいなのが住むなんて、そんなの嫌ですよね……」

「あ、いえ。そういうわけではないのですが」

セルに問いかけたが、どうやら拒絶に見えてしまったらしい。

21号はしゅんとし、だんだん声が小さくなっていく。

目には涙が滲んでおり、何だかこちらが悪い事をしてしまったようだ。

慌ててリゼットが違う事を告げると、パアッ、と表情が明るくなった。

「あまり邪険にしないでやってくれ。これから、私の代わりに貴女の助けとなるのだ。

性格はあまり闘争には向かんが、それでもスペック上は私を超える人造人間だ。足手まといになる事はないだろう。

それにベースになった21号は科学者だったらしくてな……ブルマほどではないが、なかなか優れた頭脳を持っている。きっと役に立つだろう」

セルはまるで自慢の娘を紹介するように得意気に話すが、その中に無視できない言葉がある事をリゼットは聞き逃さなかった。

『私の代わり』? それはまるで、これからセルがいなくなるようではないか。

そこまで考え、リゼットは一つの答えに行き着いた。

「……そうか……見付かったのですね」

「……そういう事だ」

セルがこの神殿を去る。

それはつまり、未来へ帰るという事である。

トランクスの未来でも、彼の時代のセルが生き残りのナメック星人を見付けて宇宙復活に貢献した。

それと同じようにセルもまた、生き残りのナメック星人がどこにいるかを探り当てたのだろう。

ならば後は未来に帰り、彼の世界を救うだけだ。

セルは元々、リゼットの助けになる為にこの時代に来たのではない。

彼の世界のリゼットを救う為に、今までここにいたのだ。

「シリアルという惑星にドラゴンボールがある事が分かった。

集める球の数が二つで、恐らく地球のドラゴンボールよりも性能は低いだろう

が、未来でピッコロを復活させる程度の事は出来るはずだ。

ピッコロが蘇ればダークドラゴンボールも復活する。ダークドラゴンボールは超ドラゴンボールには劣るが強力だ……失われたものを全て取り戻す事が出来るだろう。

……この時代で色々あったが、私もいい加減自分の世界に戻らねばな。

いつまでも義母リゼットをそのままにはしておけん」

セルはそう言い、静かに笑った。

この時代での自分の役目は終わった、とセルは考えている。

最悪の未来は回避し、今やリゼットは自分よりも遥かに強い。

後継者として21号も残し、後の憂いも断った。

今後色々起こるだろうが、自分がいない分はこの時代の自分……21号が補うだろう。

「そうですね……それが一番いいでしょう」

リゼットも静かに微笑み、セルを快く送り出す事にした。

困った事もやらかしたし、セルのせいで一度は暴走もさせられたが……それでも

彼には助けられた。

セルがいなければどこかで死んでいた事は間違いないだろう。

その彼がようやく自分の世界を取り戻しに行こうと言うのだ。

ならば自分達は、もう彼がいなくても大丈夫だと送り出すべきだ。

「セル。そっちの私をよろしく頼みますよ」

「言われるまでもない」

リゼットが軽く握った拳を出し、セルもそれに合わせる。

セルにとってこの時代での戦いは前哨戦で、帰ってからが本番だ。

破壊神ビルスが来るかもしれないし、力の大会もあるかもしれない。

別の時代からゴクウブラックが飛来してくる可能性もゼロではない。

だがセルならばきつと、こっちで得た経験を元に乗り越えられるだろう。

そう信じる事が出来た。

その後セルは悟空達に見送られ、タイムマシンに乗って出発した。

今まで共に戦ってきた戦友との別れだが、寂しさはなかった。

お前なら絶対出来るという励ましと声援を送り、セルを送り出したのだ。

大丈夫……もう二度と会えずとも、心は繋がっている。

それに万一セルが駄目なようなら、その時は自分達が助けに行けばいい。

「セル！ 負けるんじゃないぞぞ！」

「ふっ。そちらもな」

悟空の声援を受け、セルはタイムマシンの中でキザに笑う。

しかしタイムマシンの中は窮屈そうで少し恰好が付かない。

考えてみれば原作のセルはタイムマシンに乗る為に卵にまで退化していたんだっけ、とりゼットは思う。

完全体のセルは第一形態に比べれば小さいので何とか入れるが、それでも2mを超えろ長身だ。とても狭そうである。

最後まで変に締まらないのは、自分の細胞のせいだろうか……。

そんな事を思いながら、タイムマシンが消えた空を、リゼットはいつまでも見続けていた。

「ちょっとアンタ! アンタでしょ、過去に戻って歴史を変えた馬鹿は!

私は時の界王神! この宇宙の時間を管理してる神様よ!

アンタ、ちょっとコントン都まで来なさい!」

「久しぶりだなセル。タイムパトローラーのトランクスだ」

「バーダックだ。悪いな、ちょっと来てもらうぜ」

「ぶるわああああ!」

もう二度と会えないかもしれない、とりゼットは考えた。

違う未来に生きるのだからもう道は交わらない……そう思った。

……しかし案外、再会の時はそう遠くないのかもしれない。

【戦闘力】

※今回は神殿メンバーのみ。数が多いので地球メンバーは次回。

・リゼット…1兆6000億

ゼノバース…6兆4000億

ゼノバースⅡ…128兆

バーストリミット(100倍)…160兆

力の大会終了後も実力を伸ばし、僅かに強くなったりゼット。

出力を抑えた旧ゼノバースと真ゼノバースを別の技として分け、倍率2000倍の旧版をゼノバース、真ゼノバースの方をゼノバースⅡと名付けた。

ようやく暴走せずにMAXを発揮出来るようになり、純粋な戦闘力だけならば破壊神を凌駕している。

(尚、最近ビルスは力に上限がない事が判明した……)

気の無限供給も健在なので、いくら戦っても気が減る事はない。体力は回復魔法で癒せるので性能的にはその気になればずっと戦っていられるはずだが、あまり長い間ゼノバースⅡを続けると暴走する危険性があるので相変わらず長期戦は安定しない。

また、ゼノバースの他にバーストリミットによる戦闘力上昇も一応可能。

こちらの方はゼノバースの利点を全部捨ててしまうので数値ほど強くない。というかゼノバースⅡより弱い。

一瞬のみの最大火力という点でも、それならゼノバースⅡにはアルティメットブラスト・QTEがあるので圧倒的にゼノバースⅡが上。

持続時間も酷く、ウルトラマンに鼻で笑われるレベル。

・21号..200億

超サイヤ人..1兆 2..2兆 3..8兆

魔人モード..20兆

魔人モード(悪)..40兆

未来セルが置き土産として残していった現代のセル。

廃棄されていた人造人間21号をベースにしており、様々な戦士の細胞を併せ持つ。

素の状態でも分離した善ブウの半分ほどの強さを持つやばい奴。

その上S細胞を保有しているので、サイヤ人でもないくせに超サイヤ人に変身可能。

魔人ブウの細胞がかなり多くを占めているようで、本気の戦闘時には桃色の肌の女版魔人ブウとでも言うべき姿になる。

『意志を持った食欲』という第二人格が存在し、そちらに主導権を渡す事で更にパワーアップ。セルのような斑点が身体に浮き出て、紫色に変化する。

普段は大人しく優しい女性だが、この状態の21号は興奮状態に入り、敵をスイーッにして食べてしまう。本人もあまりやりたがらない変身。

尚、この上から界王拳は厳しい。既に変身している状態の上、魔人化は超サイヤ人ブルーのように気操作を極めた形態ではない。だがゴッドやブルーは魔人ブルーの細胞が邪魔をして習得出来ないかもしれない。クリアな気とは一番遠い位置にいますうだし。

・ミラ…2700億

トワ融合モード…4兆500億

バーストリミット10倍…40兆5000億

すっかり神殿に馴染んだかつてのライバル。

トレーニングによってかなり強くなった。

バーストリミットも習得し、界王拳20倍ブルー悟空、キラキラベジータ、超フルパワー超サイヤ人4ターレスに並んだ。

頑張って倍率を上げればもっと強くなる。目指せ20倍!

Q、既にトワ融合モードで変身してるのに、その上から界王拳系の技っていけるん?

A、雰囲気的にブルーと近そうな感じだし、まあ短時間ならいけるかなって。

・四星龍…4000億

黄金化…4兆

界王拳10倍…40兆

リゼットのせいで色々不遇な元邪悪龍。

素の状態(黄金化は変身ではなく、熱を封じ込める外殻を捨てただけ)で強い連中は界王拳系の技を習得するだけでお手軽に戦闘力が爆伸びするから困る。

バーストリミットではなく界王拳な理由は見た目的に、こいつは界王拳の方が絶対合うから。

リゼット考案の技を使いたくなかった……とかではないと思いたい。

・ヒルデガン…5000億

バーストリミット10倍…5兆

元コナツツ星の守り神にして今は地球の守り神……のペット。

無敵のステルス能力に加えて邪念吸収強化能力を持ち、でかくて強い。

第9宇宙程度ならば力の大会メンバー10人同時に相手にしても蹂躪出来る凄
奴。

しかし第7宇宙の力の大会メンバーの中では最弱である。

残念ながら現状の立ち位置は『見た目だけ強そうだが実際は大した事ない見掛け
倒し』という悲しいもの。

バーストリミットを習得させてはみたものの、残念ながら今となってはこれでも
不足。

残念だったなヒルデガン……このインフレ特急に乗る条件は二桁兆なんだ。

最近リゼットの戯れで、芸としてビンゴダンスを覚えた。

・タピオン…80億

バーストリミット10倍…800億

次期地球神候補。一惑星の神としては強すぎるくらいに強い。

どのくらい強いかというと、初期の魔人ブウ（デブ）相手なら善戦出来るくらい

強い。

バーストリミットを習得し、界王神くらいならば一撃で倒せるようになったが、残念ながら二軍。

800億は残念ながら今となっては大して強くない。

・Mr。ポポ..10億

バーストポポ(20倍)..200億

神の付き人。タピオン同様今のレベルについてこれる強さではない。

しかし神殿に訪れた挑戦者が最初に挑む壁と思えば、あまり強すぎない方がいいのかもしれない。

挑戦者の心へし折りそうだし。

ポポ神様に色々教えてもらった。神様もっともっと凄い。

・カリン様..10億5000万

バーストカリン(20倍)..210億

カリン塔の仙猫。武の神様として伝説になっている。

正攻法でリゼットと会うには、まずこのカリンから超聖水を奪って認められなけ

ればならない。

・魔人ブウ…2000億

バーストリミット30倍…6兆

力の大会に出れなかった事を気にして修行した。

それにより善悪分離前の強さを超え、リゼットのバーストリミットを見て覚えた。
やはり天才か……。

ちなみに素の強さはこの世界では登場せず終わった悪ブウと同じくらい。

身体への負担など知った事ではないので倍率無限……と思いきや『ブウの攻撃はブウにダメージが通る』が適用されてしまうのか、反動は自傷ダメージ扱いで思ったより倍率を上げられなかった。

とはいえ、これで兆の壁を突破したので彼も一軍に復帰する目が出てきた。

休眠期に入った場合は精神と時の部屋に放り込まれて無理矢理復帰させられる。

・量産型ゴッドガードン（改）…150億

21号脅威の科学力で改良されたゴッドガードン×15。

何か強くなったが、今となつては二軍どころか三軍レベルの戦力。

ちょっと頑丈な玩具。

・ミノシア…1億

非戦闘要員のマスコット。

インフレ特急「そうだ、俺達に辿り着く場所なんかいらなかった……止まらねえ
限り道は続く!」

第2話 銀河パトロール襲来

ザーボンが地球に向かっていた頃、それとは別に一隻の宇宙船が地球の成層圏を抜けていた。

宇宙から侵入してきた招かれざる客はしばらく空中を漂っていたが、やがて目的地を発見したのかゆっくりと移動を開始する。

その向かう先は、別次元へ潜行しているこの惑星の中核——神殿だ。

宇宙船から一人の宇宙人が飛び、足に装備したブーツの噴射で空を飛ぶ。

彼はカリン塔の真上に行くと、そこに如意棒のような物を取り付けた。

恐らく余程高度な科学力を持っているのだろう。

彼が持っていたそれは、如意棒の模造品であった。

カリン塔に接続された棒はオリジナルの如意棒同様に伸び、上にある神殿へと繋がった。

すると神殿が実体化し、神殿を守るバリアも解除される。

仮にも地球の要である神殿の守りを易々と突破した宇宙船は、そのまま神殿の端

へと着地した。

その中からゾロゾロと同じ格好をした宇宙人が現れ、隊列を組む。

「いいかお前達。我々の目的はこの神殿にいる魔人ブウの確保だ。

現在魔人ブウは休眠期にあり、抵抗される事はないだろう。

しかし神殿の住人に見付かってしまえば厄介な事になる。

なので速やかに、住民を起こさないように任務を遂行しろ」

宇宙人達の中で最も位が高いと思われる男が全員に命令を発した。

外見はアメリカン・コミックのアイアンマンのデザインをそのまま真似たような

見た目をしており、かなり強そうだ。

スーツを着ているようにも見えるが、第六宇宙にもいたメタルマン同様に金属生

命体に近いタイプの宇宙人なのだろう。

彼の命令を受け、宇宙人達は訓練された無駄のない動きで行動を開始する。

地球での現在の時刻は夜……正確に言えば同じ惑星でも場所によって昼夜は違う

のだが、少なくとも神殿のあるこの場所は夜である。

そしてこの惑星の神は元々は人間であり、規則正しい生活を送っているのだから

寝ているはずである。

彼等の目的は地球への敵対ではなく、ある理由の為に魔人ブウだけを連れ去る事だ。

しかし結論から先に言うならば彼等は選択肢を間違えていた。

魔人ブウの力が必要ならば必要だと正面からこの星の神に言うべきだったし、その上で交渉のテーブルにつけばよかった。

勿論彼らなりの、そう出来ない理由はあったのだろう。

『最悪の囚人に逃げられた』という醜聞を広げたくなかったのかもしれないし、事が発覚する前に秘密裏に終わらせたかったのかもしれない。

正直に明かして、組織としての体制や甘さを批判されるのを恐れた幹部もいるのだろう。

どちらにせよ……その判断ミスのツケは小さくない。

——突如、神殿の床に光が走った。

光は図形を描くように地面を走り、やがて巨大な五角形魔法陣となる。

それと同時に地響きのような轟音を立てながら、魔法陣から怪物を象った石像が

現れた。

その怪物はセミのようなシルエットを持ち、全長は50m近くあるだろうか。まるで暴走を止めるように五芒星の角からはそれぞれ鎖が伸びており、石像の全身を縛っていた。

「な、なんだ……!?」

「か、怪物……」

宇宙人達が驚く前で石像に亀裂が走った。

自壊しているのだろうか? ——否。何かが中から現れようとしている!

罅割れた隙間からは光が溢れ、中に封じられた恐るべき怪物の体表が垣間見える。よもやの出来事に動揺する宇宙人達の前で石像が剥がれ落ちていき、中に隠された怪物——ヒルデガンが自由を取り戻していく。

凶悪な二つの目が輝き、不吉な音を立てて鎖に亀裂が走る。

「グオオオ……」

低い唸り声をあげ、ヒルデガンが力を込めた。

するとますます鎖が歪み、罅割れていく。

「オオオオオオオ！」

咆哮。それと同時に鎖が砕け、怪物が解放された。

それでもまだ手足の鎖が残っているが、もう怪物は止まらない。

ヒルデガンが歩くと鎖が伸び、しかしまるで止める事が出来ずに引き千切れていく。

やがて遂にヒルデガンの自由を戒めていた鎖が全て砕け、天をつんざく巨体が予期せぬ侵入者達を見下ろすように出迎えた。

「う……うわあああああ！」

「撃て！ 撃て！」

「待て、撃つな！」

ヒルデガンの威圧的な姿を前に、宇宙人達は恐慌を起こした。

指揮官が止めるのも聞かずに腰のホルスターからレーザー銃を抜き、ヒルデガンに向けて発射する。

だがレーザーが怪物に当たる事はなく、幻のように突き抜けてしまった。

ヒルデガンは幻魔人……攻撃の瞬間以外は幻であり、故に無敵だ。いかなる攻

撃も通じない。

「グアアアアアッ！」

明確な敵対行為を前に、ヒルデガンが攻撃に移った。

巨拳が宇宙人達へ振り下ろされ、たったの一撃で十人以上が宙を舞う。

仲間がやられた事で残された者達がますます興奮してレーザー銃を乱射するも、やはり当たらない。全てが空しく突き抜けてしまう。

そればかりかヒルデガンは煙のように消え、そして一瞬で背後に回り込んだと思っただけには尻尾で宇宙人達を捕えていた。

尻尾の先が花のように開き、中から出て来た触手が次々と宇宙人達を縛り上げては尻尾の中に連れ去っていく。

「くっ……ステルス！」

指揮官が姿を消し、ヒルデガンの背後へ移動した。

銀河パトロールの超科学による光学迷彩は、完全にその者の姿を隠す事が出来る。

そうしてヒルデガンの視界から隠れてから、特製の麻醉銃を直撃させた。

攻撃時に実体化した瞬間ならばヒルデガンに攻撃を当てる事は可能だ。

たった一度の交戦で見抜き、見事攻撃を当てた彼の健闘は称えられていいだろう。

しかし……ヒルデガンは元々、邪悪な魔導士によって偽りの命を与えられた石像である。生物ではない。

石像に麻酔銃が効くだろうか？ ……否である。効くわけではない。

「グルウオアアアアア!!」

「——!」

ヒルデガンが尻尾を薙ぎ、声すら上げる暇もなく指揮官を殴り飛ばした。

壊れた人形のように宙を舞う指揮官にヒルデガンの尾が巻き付き、圧力を加える。

「ぐあ……が……がはあ……!」

メキメキという不吉な音が自分の身体から出ているのを聞きながら、彼は死が近づいて来ている事を強く感じた。

この星を見誤った……そう言う他ない。

この惑星に住む戦士達は宇宙にも名を轟かす強豪達である事は知っていた。

しかし知っているのと見るのでは違う。彼はその脅威を今この時をもって、初めて正確に認識出来たのだ。

だが今更気付いて何になるうか。もう全ては手遅れなのだ。

やがて指揮官は意識を手放し、予期せぬ来訪者達は完全に無力化された。

★

「まさか防犯設備に銀河パトロールが引っかかるとは……」

無力化された宇宙人達を前に、リゼットは困ったように呟いた。

結論から言えば、今回無断侵入してきた一団は銀河パトロールであった。

地球の神殿は別次元に潜りつつバリアを張る事で守られているが、銀河パトロールの科学力ならば、そんな守りなど無いに等しい。

言い方は悪いが、所詮は銀河の辺境の惑星に用意された防御機能でしかないのだ。事実、過去には何度か突破されており、この神殿が戦場になった事もあった。

ならば地球とは比較にならない程の高度な科学力を持つ銀河パトロールならば簡単に突破出来てしまうだろう。

あのブリーフ博士の造り出した重力装置の技術も元々は銀河パトロールから譲っ

てもらったものなのだ。彼等の科学力は計り知れない。

そうした防御の脆弱性もあり、リゼットは無断で侵入して来る相手に対してのみ発動する防犯機能を神殿に追加した。

それが銀河パトロールの前に現れたヒルデガンである。

こちらの許可を得ずに誰かが侵入した場合、大げさな演出と共にヒルデガンが現れ、まず相手を威嚇する。

過剰演出気味な登場シーンで驚いて逃げてくれればそれでよし。もしも攻撃されれば迎撃に移行する。

防犯機能とは言うが、要するに番犬である。

安い防犯設備では心もとないから、とりあえず飼っている犬に番犬をさせてみたのではない加減さが滲み出ているが、大抵の侵入者はこれで何とかなってしまうのも事実であった。

頑張って用意したハイテクな防犯設備より、見た目が怖い大型犬が家の中に一匹いる方が効果的……というのは割とどこにでもある話だ。

例えば防犯設備を潜り抜けて家に入ってみたら、玄関に筋肉モリモリのピットブ

ルがいて、それが牙を剥きながら「まずお前から血祭に上げてやる」という顔をしていたらどうだろう。

そんな家に空き巣に入ろうと思うだろうか。

ヒルデガンは今となっては見た目が怖いだけでそんなに強いわけではないが、それでも巨大で威圧的なので視覚的には多大な効果があるし、二軍落ち寸前とはいえそこらの雑魚には負けない。

時間はかかるが、ヒルデガンだけで宇宙の星々を破壊し尽して死の宇宙にしてしまえるだけの戦闘力は持っているのだ。

「どうして銀河パトロールが来たんでしょうか？」

「この星の戦力を危険視して消しに來た可能性が高いな。

銀河パトロールは自分達が宇宙の法と思っている部分がある。

危険と判断した惑星には躊躇なく惑星破壊ミサイルを撃ち込むような連中だ」

不安そうな21号の言葉に、ミラが腕組みをしたまま答えた。

かつて数多の時間を渡り歩いた彼は当然、銀河パトロールの事も知っている。

銀河パトロールは宇宙の平和を守る治安維持組織ではあるが、一方で独善的身

勝手な部分がある。

危険と判断した惑星には警告なく惑星破壊ミサイルを撃ち込むし、隊員の一人であるジャコはうっかりからウィルス入りの絶滅爆弾を担当惑星で使い、その星を死滅させた事もあるが実質お咎めなしだった。

それでいてコルド軍などには一切手出しせず、彼等の行いを黙認していたのだから何も言えない。

「いえ、そうではなさそうです。彼等が用があるのはブウのようですね」
もしも向こうが地球を破壊しようとしているのなら、こちらも迎え撃つしかない。

しかしどうやら、銀河パトロールの目的は地球ではなくこの神殿に住む魔人ブウ……正確には魔人ブウの中に眠る大界王神にあるようだ。

隊員達の心を読む事でリゼットは彼等の目的と、何故魔人ブウを欲するのかを理解した。

現在銀河パトロールは『星喰いのモロ』という脱走犯を追っている。

このモロという囚人は千万年以上も昔にいくつもの星を滅ぼした極悪人であり、

これを脱走させてしまった事は銀河パトロール始まって以来最大と言っても過言ではない不祥事だ。

この失敗を挽回するには何としても銀河パトロールの手でモロを捕まえる必要がある。

そう考えた銀河王はモロを逮捕する為の戦力として大界王神を吸収したブウを連れてくるように部下に命じたのだ。

ちなみにこの事は、銀河王の上司である超銀河王とやらには伝えていない、銀河パトロールの独断専行らしい。

それにしても……大界王神はブウの中でまだ生きているのだろうか？

吸収されたのだから、原作でベジットがブウの中に入った時の悟飯達のように内部で囚われていたとしても不思議はない。

あの時大界王神や南の界王神がいなかったのは、太ったブウの中にいたと考えれば説明もつく。

しかしGTでサタンやパンがブウの中に匿われた時は居なかったはずだ。本当はいたが、サタン達が見付けなかっただけ……とも考えられるが。

(そういえば……)

ふと、過去の事を思い返す。

それは初めてゼノバースを発動した時の事……暴走はしていたが、それでも僅かに覚えている。

あの時リゼットは悟空達を相手に『ヒーローズ・ゴッドミッション』を発動してあの世から多くの戦士や神を召喚した。

その中には三人の界王神の姿もあったが……よく思い出してみればあの時、大界王神の姿だけは無かった気がする。

今までは『とっくに転生済みなのだろう』くらいに思っていたが、まだ生きていたとすれば？

ブウの中で今も生きているならば、召喚出来るはずがない。何故なら死んでいないのだから。

同じ条件の南の界王神は召喚出来てしまったが、こちらはブウの人格形成に何ら影響していなかったのを見るに、消化されてしまったのだろうか。

恐らく大界王神は悪ブウが善ブウを『そいつは特別だ』と言ったのと同じように、

他とは違う特別扱いだったのかもしれない。

「それで、こいつらはどうする気だ？」

「銀河パトロールと敵対する気はありませんし、治療を終えたらそのままお帰り願おうかと思えます」

ミラの問いに、リゼットは淡々と答える。

銀河パトロールには彼等なりの正義があり、宇宙の秩序を守る為に戦っている事は知っている。

その事自体はリゼットも評価しているし敬意も払う。

だが、だからといって人の神殿家に無断で侵入した挙句、同居人を誘拐しようとしたのはいただけない。

残念ながらこれでは敵対はしないが、味方にもしたくない。

『お待ちください、地球の神よ。部下の非礼は詫びましょう。』

どうか私の話を聞いて頂きたい』

銀河パトロールを追い返す事を話していると、何処かで聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その声は神殿よりも更に上……たった今成層圏を抜けてきた宇宙船から聞こえるものだ。

「この声は……超銀河王様!？」

銀河パトロールの指揮官が驚いたように声をあげた。

どうやらこの声の主が、現在宇宙治安維持組織の頂点に立っている超銀河王らしい。

以前にジャコの記憶を読んだ時から、その存在だけはリゼットも知っている。

銀河パトロールの更に上の組織である『永遠の美』の創設者であり総帥。そして地球を第一級保護指定惑星に定めた張本人だ。

その権力は、地球に例えるならば統一国家の元首にも等しい。

しかしリゼットは困惑していた。

今のリゼットからすれば、超銀河王とやらから感じられる気はそれほど大きいものではない。

数値にして2000万程……間違はなく宇宙屈指の強豪だが、ブローリーが戦いながら伸ばす戦闘力にも遠く及ばない。

だがりゼットは、この気の波長に覚えがあった。

だが……おかしい。あり得ない。

何故この気の持ち主が、銀河の支配者になっている？

困惑するりゼットの前で宇宙船が神殿の横に停止し、扉が開く。

中から数人の足音が響き、数人の部下を引き連れて遂にその男が姿を現した。

濃い緑色の髪は三つ編みにされ、肌の色は薄い緑色。

その顔立ちは秀麗で、顔だけみれば女性と見間違えそうだ。

服装はファー付きの白いコートに、その下は銀河パトロールの制服。

その男、超銀河王——ザーボンはサングラスを外して妖艶に笑った。

メルス「おーい！　ここは私が初登場して強さと存在感を見せ付ける場面のはず……」

ザーボン「天使（かもしれん奴）など使えるか！」

メルスルー「ハアッ☆」

【銀河パトロールの指揮官】

アイアンマンみたいな外見の人。

漫画版『超』で「メルス隊員は104の区域を担当する銀河パトロールナンバーワンのエリート隊員だ」と話していた。

漫画版『超』では別に指揮官なんて設定はなく、ただの背景モブだったがこのSSではザーボンの影響で組織そのものが巨大化して人数も増えたので出世している。指揮官といってもパトロール全体の指揮官ではなく、一個中隊を率いる程度の指揮官。

【戦闘力】

・孫悟空…11億2000万

超サイヤ人…560億 2…1120億 3…4480億

超サイヤ人ゴッド…1兆1200億

超サイヤ人ブルー（完成）…6兆7200億

超サイヤ人ブルー（界王拳20倍）…44兆8000億

身勝手の極意…67兆2000億〜

※『勝手に身体を強くする』能力がある事が判明。なので相手に合わせて上昇する。

・第7宇宙最強の座に君臨する我等が主人公。

身勝手の極意『極』は任意では発動出来ないが『兆』ならば任意発動可能になった。

しかしまだ完全ではなく、すぐに解けてしまう。

基礎戦闘力はやはり頭打ちなのか、あまり伸びていない。

一応数百万単位の誤差レベルでは上昇しているのだが……。

【身勝手の極意数値設定追加】

漫画版で『身体を勝手に強くする』効果が判明した。

これにより身勝手の極意は決まった倍率はなく、相手の強さに応じて追い付けるように倍率が上昇する形に変更。

変身解除すると当然それまで伸ばした分はリセットで初期値から再走となる。

スタート値は今の所はその時点のMAX値の1.5倍と設定している。後で変え

るかも。

ジレン戦で滅茶苦茶伸びたのは、それだけジレンが強かったから。

(それでもスタート時点で20倍界王拳ブルーよりは強い)

なので相手が強いと一気に強くなるが、逆にそれほど差がない相手だと思ったほどの強さにならない。

また、この『身体を勝手に強くする能力』は無限ではなく本人の肉体の頑丈さによつて上限があり、鍛えていなかったりすると自滅する。

また、戦闘力上昇効果で相手に追い付く前に一瞬でKOされるリスクもある。

常時使用している天使勢は元々が相手より格上なので戦闘力上昇効果が発生していない。

・ベジータ…10億5000万

超サイヤ人…525億 2…1050億 俺のブルマ…6300億

超サイヤ人ゴッド…1兆500億

超サイヤ人ブルー(完成)…6兆3000億

キュアベジータ…42兆

・悟空を目指し続ける永遠のライバル。

彼をナンバーワンと認めたが、それでも追いかけるのは止めない。

しかし悟空同様に頭打ちに入っているのであまり基礎能力が変わらない。

・ピッコロ…56兆

基本戦闘力の鬼。ラスボス以外ならば瞬殺してくれる頼もしい人。

強くなりすぎてマントが枷にならず、マントを着けていても外していても戦闘力が変わらない。

ちなみに色は特に変わっていない。潜在能力解放をしたのが神龍ではなく老界王神だったからだろうか。『オマケ』はされていないのでオレンジ色にはまだなれない。というかピッコロさん、大幅パワーアップの余地出て来たけどどうするんだこれ……あんなのあるって知ってたらここまで強くしなかったよ……。

これオレンジ色にしちゃったらもう誰も勝てなくなるんじゃないか……？

描写的に軽く10倍くらいは強くなってるだろうなと思うけど、こいつ10倍にしたら560兆になるんだが？ 何とか3倍くらいって事にして160兆くらいに……出来ないかなあ……？

目下最大の問題は普通にガンマ1号と2号を返り討ちにしてしまいそうな事。
スーパードヒーロー編が開始と同時に終わりそう。

「悟空とベジータを呼び戻すまでもない。俺様が全て片付けてやるぜ」

劇場版がー！ 劇場版そのものがー！ やめてくださいー！

・ターレス…10億3000万

超サイヤ人…515億 2…1030億 3…4120億

超サイヤ人4…2兆600億

超フルパワーサイヤ人4…41兆2000億

・悟空達とは別方向に進化したサイヤ人。

パワーボールなしでも超サイヤ人4に変身出来るようになった。

超フルパワーサイヤ人4も仲間の力がなくても変身出来るまで馴染んだ事で倍率が上昇している。

・孫悟飯…1兆8400億

リゼットやピッコロ同様にアルティメット化した状態が素の状態となった。漫画版と同じ状態。

漫画版は髪形（前髪がない）といい、常時アルティメットといい、何とか原作最終回のご飯の姿に近付けようとしていた形跡が見える。

（原作最終回の悟飯の目はアルティメット化や超サイヤ人と同じように目の周りの線が繋がっているような書き方）

でもそのうち修行をサボってまた弱体化する可能性あり。

というかスーパーヒーロー編で案の定弱体化した。

映画の方はともかく、漫画版ではモロ編で折角アルティメット化を常態化してたのに弱体化した。

そしてこれが潜在能力を解放した姿のはずなのに、まだ潜在能力がすごい余っている事が判明した。

悟飯ちゃんって実はすぐ戦闘力が表面化しないだけでブロリーと同じ枠なのでは……。

もうこいつ、伝説の超サイヤ人として扱っていいんじゃないかな、マジで。

ブロリー…気がどんどん高まる。すぐに表面化する。

悟飯…気がどんどん高まる。すぐ表面化せずに潜在能力という形で蓄積される。

一度解放してもまた蓄積されるのでキレる度に強くなる。
予言者ナツパ「スーパーサイヤ人……てどこか」

第3話 初手必殺

こちらに一步一步歩んでくる男を前に、リゼットは何を言えばいいのか分からなかった。

ザーボンがまだ生きているという事……それ自体はリゼットも知っていた。

悟空とフリーザの戦いが終わった後にフリーザの宇宙船でナメック星から脱出した彼の姿は遠視で確認していたし、今になってみれば何故ザーボンが生き残ったのかもある程度推測出来る。

あの時ベジータはターレスと行動を共にしていたので、恐らくザーボンに瀕死にされたベジータを拾って治療するのがフリーザ軍からターレスに変わってしまったのだ。

結果、ザーボンはベジータの生存に気付かずベジータVSザーボン二戦目が発生しなかった。

そう考えればザーボンが最後まで生き残ったのはそうおかしい話ではない。

その後も、リゼットの知る限りではザーボンの死は確認していない。

修行がてらにフリーザ軍を倒して回っていた時もザーボンを倒した覚えはないし、この事からザーボンは悪事から足を洗ってひっそりと生きているのだろうと思っていた。

もしそうなら、わざわざ追跡してまで仕留める必要はない。

悪事を今後働かないならそれでよし。もし何かやったらその時こそ倒してしまえばいい。そう考えていた。

だがとんでもない間違いだった。ひっそりと生きるどころの話ではない。

ザーボンはいつの間にか、銀河そのものを掌握していたのだ。

ミラの方を見ると、彼も意外そうな顔を隠せていない。

どうやらこの展開は、いくつものパラレルワールドを知る彼にとっても予想外で初めて見るパターンらしい。

驚くべき出世を遂げた美貌の男はリゼットの前まで着くと片膝をつき、敬うように頭を下げた。

「お会いできて光栄です、地球の神よ。

私は銀河パトロールを束ねる者……第七宇宙治安維持組織『永遠の美』の総帥、

ザーボンと申します」

「……ナメック星で、一度会った方ですね？」

これは本当にザーボンなんだろうか。

実はザーボンの双子の弟のザーボソとかじゃないでしょうね。

そう思ったリゼットは、確認の意味も兼ねてザーボンへと問いを投げかけた。
するとザーボンは薄く笑い、肯定を示す。

「覚えておられましたか。一度顔を合わせただけの私を記憶して頂けたとは、驚きです」

「正直に言って、私も驚いています」

一体ザーボンに何があったのか。

話しながらザーボンの記憶を読み、あの日ナメック星を脱出してから今日までに
彼が辿った軌跡を調べる。

そうして分かったのは、この男がリゼットを象徴として祭り上げて利用し、成り
上がったという事だ。

宇宙の治安を守っているが、決してザーボンは改心したわけでもなければ善人に

なったわけでもない。

組織を立ち上げた理由は自己保身で、フリーザを裏切った罪で処刑されるのを恐れたからだ。

だから処刑される前にこちらから打って出てフリーザ軍を壊滅させた……ただそれだけの事に過ぎない。

その後宇宙の平和を守り続けているのは、その方が名声と栄光を得られるから。悪事に手を染めなくなったのではなく、染める必要がなくなった。

そんな事をせずとも望む物を得られるだけの地位と権力と財を手に入れたのだから、わざわざ悪事などという非効率的な手段で己の名を落とす理由がない。

己の身を危険に晒さずとも優れた部下を育て上げるマニュアルを作り、それを徹底させれば『平和を守る』というつまらない使命感と正義感に突き動かされる愚かな兵が手足となり、そして愚かな兵に救われた愚民共はザーボンに感謝し、彼を祭り上げる。

己の美しい身を一切危険に晒す事なく、手を汚す必要もなく。それでいて名誉、栄光、財、その全てが転がり込んでくるのだ。この旨味を知ってしまったえば今更悪事

など、馬鹿馬鹿しくてやってられない。

ザーボンはどこまでも俗物的で自分本位で、そしてナルシストであった。

しかし困った事に、そんな彼のおかげで宇宙の秩序は保たれて犯罪率は激減し、第七宇宙の人間レベルも年々上昇している。

醜い連中が醜く争うレベルの低い宇宙は自分が頂点に立つのに相応しくない。だから醜い連中を積極的に牢にブチ込み、自分に相応しい美しい宇宙にする。それが今のザーボンの、新たな美しき野望であった。

その思考回路はある意味、第二宇宙の破壊神であるヘレスと似通った部分がある。「今の私は以前までの私ではありません。私は心を入れ替えたのです。

以前の私は、愚かな男でした」

この言葉に嘘はない。

だが言葉から聞き取れる意味とザーボンの認識は異なっている。

ザーボンは決して、悪事そのものを愚かと言っているわけではない。悔いてもいないし己が傷つけた者達に対する罪悪感も一切ない。

ただ、フリーザにいいように使われて非効率的で無駄に敵を増やすやり方を続け

ていたのが愚かだったと反省しているに過ぎなかった。

「今の私はこの宇宙を……そして美しき星々を守る為に戦っています。

私達は貴女の敵ではありません。

この美しき宇宙を守る為に、貴女の手をお借りしたいのです」

神々を除けば宇宙最高の権力者になったザーボンにとって、この第七宇宙は大事な宝石箱で、星々は大切なコレクションだ。

星のない死の宇宙など美しいとは思えないし、故に星を滅ぼす者は許せない。

宇宙を守るという考えは本心からのものだが、そこに善意など欠片もない。正義感もない。

ただ、『害虫が私のお気に入りの絵画を汚すな』という、どこまでも自分本位かつ傲慢な考えがあるだけだ。

善側に立っているように見えるのも、彼の思う『醜い害虫』が基本的に悪党だからそう見えるだけである。

故に、もしその害虫が実は可愛そうな奴だったり誰かが同情するような過去があったとしても、彼は一秒の躊躇もなく殺虫剤を吹きかけるだろう。

酷い話になるが、例えば部屋の掃除をしているとゴキブリを発見したとする。

そのゴキブリが胎の中に子供を抱えていて子供の為に必死に命乞いをしたとして、それに耳を傾ける奴はそういないだろうという話だ。

そして困った事に、そんな彼の姿は人々には『正義の為に躊躇しない頼もしい総帥』と見えてしまっているのだ。

「……話を聞きましょう」

「感謝します」

利と打算で動いてはいるが、現状は平和の為に尽力している。

それを理解してしまった以上、ここでザーボンを仕留めるという選択はリゼットには取れなかった。

本心がどうあれ、ザーボンが宇宙の平和に貢献しているのは事実なのだ。

ならば話を聞く価値はある。そうリゼットは判断した。

そしてザーボンから語られたのは、『星喰い』という脱走犯の話であり、既に隊員の記憶を読んでいたリゼットにとってはただの再確認であった。

しかし銀河パトロールとザーボンの間には、違いが一つだけあった。

「そのモロという者をブウの力で捕まえる……という事でいいのですか？」

「いえ、捕まえるだけでは生温いでしょう。」

元々奴は死刑囚ですが、執行できなかったのは強すぎて誰も死刑に出来なかったからです。

しかし今ならば貴女達がいる」

ザーボンはその語り、形のいい唇をゆがめた。

「どうせ死んでも誰も困らないような奴です。」

殺してしまっても問題はありませんよ。いや、むしろその方が私にとっては有難い」

銀河パトロールは基本的には罪人を捕まえるのが仕事である。

殺めるのはあくまで、そうせざるを得ない時の最終手段であり、まずは捕獲を前提に行動している。

しかしザーボンの思考は違う。

やはり元々はフリーザの側近を務めていた男か……彼は自分の氣に入らない者を殺す事に何の躊躇いもない。

それは正義の為に誰かを殺める覚悟をしているとか、そんなものではない。

ただ単純に、覚悟をする必要もないほどにザーボンにとっては誰かを殺すのは当然の事なのだ。

やはり根っこの部分では相容れる事は出来ない。そう思いながらも、モロを仕留める事に関してはリゼットもザーボンと同意見であった。

捕まえてもまた脱走するかもしれないし、何より過去にやった悪事が大きすぎる。とりあえず、まずはモロの気を探って遠視でもしてみようか……そう思ったところで、ザーボンの隣にいたレジックが声を出した。

「地球の神よ、モロの気を探知する時は気を付けろ。

奴の気は……酷く、気持ちが悪い。

それと、奴は気を探知された事を知る事が出来る」

何か当たり前のようにいるけど、何でこの人ここにいるんだろう？

そう思いながらも、リゼットはとりあえず頷いておいた。

レジックはGTで登場する用心棒で、かなりの実力者だ。

超サイヤ人になった悟空には及ばないが、そのレベルは宇宙全体で見てもトップ

クラスに数えていい。

ここにいる理由は……まあ、ザーボンに雇われたとかだろうか。

GTではドン・キアーなんていう小悪党に従っていたし、金さえ貰えれば契約相手は選ばないのかもしれない。

「……………」

レジックから視線を外し、目を閉じる。

そしてモロとやらの気を探した。

リゼットの知覚能力ならば遠く離れた宇宙の果てにいても見付け出す事は不可能ではない。

モロという囚人の気がどんなものなのかは分からないが、コルド大王と一緒に逃げたというのならコルドの近くにいたる気を探せばいい。

遠く、遠く……普段は探さないような遠い宙域にまで探知を伸ばし――。

「……………」

――瞬意識が飛びかけ、よろめいた。

「ど、どうしました？」

「……いえ、何でもありません」

青い顔をして額を抑えながら、何とかリゼットは意識を繋ぎとめる。

……危なかった。

危うく、もう少しで意識が吹っ飛んで暴走するところだった。

以前にもリゼットは一度、ゼノバースを扱いきれずに暴走し、問答無用で悪人を抹殺する独善の神と化した事があった。

だが今のリゼットならば信仰の念に押し潰される事もなく、その力を扱える……はずであった。

それが何故一瞬で暴走しかけてしまったのか。

それはモロの気が悪に傾いていたから——傾きすぎていたから。

星喰いの名の通り、モロは数多の惑星と、そこに暮らす生き物の命を喰らって来た。

そうしてパワーアップを重ねたモロの気は、大勢が嘆き苦しみ、悲鳴をあげているような不気味でおぞましいものだ。

そんな悪と呼ぶ事すら烏滸がましい、まさに宇宙の大敵とも呼べる気を感じした

事でリゼットの中の『悪を滅ぼす神』の面が一気に振り切れ、表に出ようとしたのだ。

リゼットの理解も想定も遥かに超えた悪の気を感じ取った事で、何を差し置いても滅却すべきという意思がリゼットの理性を飲み込みかけた。

とはいえ……暴走してもしなくても、この先やる事は変わらない。今回ばかりはリゼットの中の独善の神とリゼット自身の意思が完全にシンクロしている。

あいつは……いや、アレは何としても抹消しなければならない存在だ。

この世にいてはいけない生物だ。

故にリゼットは無言で光輪を展開し、圧倒的な神の気が荒れ狂う。

「うおおおおっ!？」

風圧だけでザーボンが吹き飛び、咄嗟にレジックが彼を掴んで後退した。

リゼットの顔からは表情が失われ、身体を白銀のオーラが覆っている。

神の気を纏い、超サイヤ人ブルーにも匹敵する強さを得るリゼット独自の技である『ゼノバース』を改良し、それを最大出力で使う事で破壊神ビルスにも匹敵する強さとなる『ゼノバースⅡ』を使ったのだ。

リゼットの光輪が輝き、手の中に破壊のエネルギーを生み出す。

その光景を前にレジックは啞然とし、そしてザーボンは「う、美しい……」と呆けた直後に怒りの形相を浮かべた。

醜いものは許せないが、それ以上に自分より美しいものは許せない。

かつてナメック星で初めて見た時と同様の敗北感を与えられた銀河の王は自らの唇を血が滲むほどに噛んで荒れ狂う激情に必死に耐えていた。

そんな彼等に目もくれる事なくリゼットは瞬間移動し、モロとコルドが乗る宇宙船の前へと転移した。

「……は？」

突然出現したりゼットの姿に呆けた声をあげたのは、フードを被った山羊の獣人のような男であった。

この男こそが星喰いのモロだ。

遅れて、宇宙船を操作していたコルドが驚愕に顔を強張らせる。

「あ、あれは……！」

「――THE BREAKERS！」

コルドが言い終えるよりも早く、リゼットが無数の光を解き放った。

先手にして必殺。話し合う余地などなく、遭遇と同時に殺意のみを技に乗せて解き放った。

この技は、力の大会後に修練によって会得した、『破壊』の力を用いた新技だ。問答無用で放たれた光は幾重にも枝分かれし、数百数千の光線となって宇宙船の逃げ場を隙間なく塞ぐように囲う。

モロは咄嗟に宇宙船の窓を突き破って脱出する事で光線を避けたが、コルドは間に合わない。

無情にも光線が宇宙船ごとコルドを飲み込み、抵抗も許さずに彼を消滅させてしまった。

「ぐっ！ 何だ、お前は！」

何とか回避したモロであったが、リゼットの攻撃はまだ終わっていない。

枝別れした光線の一本一本、その全てが意思を持っているかのように曲がり、うねり、旋回し、先回りし、モロの逃げ場を塞いでいく。

いや、実際意思を持っている。

ゴテンクスの技であるスーパーゴーストカミカゼアタックと同様に、リゼットは己の放った気弾や気功波に思考能力を与える事が出来る。

この枝分かれした数万の気功波の全てに、モロを滅ぼすという必滅の意志が宿り、自らが判断してモロの逃げ場を塞ぎ、連携し、確実に葬るべく動いているのだ。

いわば、この光線の一つ一つ……その全てが襲撃者^{レイダー}！

無数に分裂し、どこまでも追いかけて来るレイダーによって敵は確実に追い詰められ、そして破壊される。これはそういう、完全に敵を抹消する為だけの無慈悲の奥義である。

モロも必死に飛び、動き回る事で光線を上手く避けているが到底全てを振り切れるものではないし、回避された光線も軌道を変えてしつこく追ってくるのだから手に負えない。

光線が右腕を飲み込み、その瞬間モロの右腕が光の粒子になって『破壊』された。

「がっ……！」

痛みに動きが鈍り、その隙を突くように光線が同時にモロに殺到した。

正面から飛んできた光線を何とか避けるも、それを待っていたとばかりに今度は

下から突き上げるように光線が奇襲する。

それも何とか避けるが今度は背後から飛来した光線が足を掠めてモロの足を削り、続けて時間差なく別の光線がモロへと襲い掛かる。

「うっ……おおおお！」

モロは叫び声をあげ、気功波を発射した。

だが渾身の力を込めたはずの気功波は光線に触れただけで拮抗もできずに破壊され、モロに光線が襲い掛かった。

「ヒルデガン！」

リゼットの呼び出しに応じ、ヒルデガンが実体化した。

何もない場所から突然巨大な怪物が出現し、モロを鷲掴みにする。

「くっ！」

もはや回避は出来ない。そう判断したモロは魔術でバリアを展開した。

だがそんなもの知った事かとはかりに光線がバリアごとモロを飲み込み、かろうじて耐えようとしている彼をしつこく攻撃し続ける。無論ヒルデガンは命中の瞬間に幻影化して回避していた。

耐えるというのならば、耐えられなくなるまで攻撃を持続すればいいだけの話だ。仮にモロが十秒耐えられるならばこの光線はそれまでモロを呑み込み続けるだろう。

百秒耐えられるならば百秒。千秒耐えられるならば千秒、攻撃が持続し続ける。命中を許した時点で、既にモロの命運は決していた。

やがて光の激流の中でモロのシルエットが崩れていき、塵一つ残さず消滅した。だが一度では終わらない。

何度も何度も光がモロのいた場所を通過し、僅かな気の残滓すら残さぬように徹底的に、執拗に消滅させる。

モロには何が起こったかすら理解出来なかっただろう。

彼にしてみれば『誰かが自分の気を探知した』と思った数秒後には、リゼットが転移してきて攻撃を始めていたのだ。

やがて攻撃が終了し、役目を終えた破壊の光^{レイダ}が何かを追うように飛び去り、消えて行った。

モロの気は……もう、この宇宙のどこにも感じられない。

「……………」

排除すべき悪の抹消を確認し、リゼットの顔に表情が戻った。

今のリゼットならば荒れ狂うような信仰の念も、正義の意味も制御して己の理性で扱う事が出来る。

ただ、今回は想定外すぎた。まさかあんなおぞましい気がこの世に存在するとは……。

これはリゼットだけではなくモロにとっても想定外の事態だっただろう。

まさか彼も、自分の気を感じただけで『絶対殺すモード』に切り替わる女神がいるなど想定していたはずがない。

大敵を始末してようやく落ち着きを取り戻したりリゼットは周囲を見回し、モロがここにいない事を確信した。

「……まだまだ未熟、ですね」

恥じるように自分の顔を手で覆い、一言呟いた。

もう暴走しないと決めていたはずなのに飲まれかけるとは、精神鍛錬が足りていない。

とはいえ、いくら何でもあれは想定外で反則だ。

あんな、何兆何京何垓かも分からない数の人間が助けを求めて呻いているような気がこの世に存在するだなんて考えた事もなかった。

レジックは気持ち悪い気と言っていたが、そんなレベルではない。

あまりに気持ち悪すぎて理性が吹っ飛びかけるなんて、初めての経験だ。もう二度とモロの気だけは感知したくない。

「……とりあえず、地球に帰りましょう」

今はとりあえず、何も考えずにカリンを抱きしめたい気分だった。

「……あつぶないな。僕が介入しなきゃ、モロが何も出来ずにいきなり死ぬなんてつまらない展開になってたじゃないか。

勘弁してよ。折角面白そうな素材なんだからさ」

リゼットが去った後、その宙域で何者かが話していた。

その声は大人のようにでもあるが、大人になりきれない少年の声のようにも聞こえ

る。

「それにしても……あれが父さんと母さんを倒したりゼットさんかあ。

うーん、いいねえ。彼女も是非、僕の監獄惑星に招待してあげたいなあ」

暗闇の中で声の主である青年が眼鏡を輝かせる。

その顔は子供染みた無邪気さで彩られていて……どこか、トワとミラに似ていた。

【THE・ブレイカーズ】

力の大会後に習得したりゼットの新技。別名絶対殺すビーム。

名前の元ネタはゲームの『ドラゴンボールザブレイカーズ』。

『破壊』の力を付与した破壊光線『レイダー』をアホ程発射し、その全てが自らの意志で敵を追尾する。

今の所、リゼットが持つ技の中では最も殺意が高いが、高すぎて逆に使いにくい。力の大会で使用すれば即失格待ったなし。

Q、どう対処すんのこれ？

A、所詮は気功波なのでより強い気でかき消せばいい。

トッポの『破壊』もベジータのファイナルエクスプロージョンで押し切れたし、『破壊』と言っても結構何とかなる。

【戦闘力】

モロ…2500億

単純な戦闘力よりも魔力の厄介さが光る敵。ドラゴンボールではかなり珍しいタイプ。

老いた状態での強さは魔力を使ってゴッド相手に若干優位という程度。

ベジータ曰く『ブルー（漫画版でのブルーは完成ブルーを指す）の足元にも及ばない』。

しかし、向かい合った時点から既に気の吸収が始まっていたと考えるとあの時のゴッドも万全だったとは思えない。

ぶっちゃけあの時点でベジータの戦力は超3よりはマシ程度になっていたと思われる。

多分フィジカル面での強さは（あくまで今の基準で）本当に大した事がない。魔力込みで実際の強さは6000億〜8000億相当くらいだろうか。

ちなみに若返り↓魔力復活↓星々捕食↓セブンスリー吸収↓メルスコピー↓地球一体化とどんどんパワーアップした漫画版最終形態までいくと三桁兆まで届く。

【まさかのモロ編崩壊】

どちらにとっても天敵すぎて事故った。

リゼットにとってモロは気の感知をしただけでSAN値直送からの暴走を引き起こされる最悪の相手であり、モロにとってリゼットは自分の気を感じただけで『モロ絶対殺す』と発狂して即死ビームを撃ってくる最悪の相手。

どっちも幸せにならない。

リゼット「モロの気が気持ち悪すぎるヤダー！」（即死ビーム発射）

モロ「何か理不尽な理由で撃たれる即死ビームヤダー！」

ザーボン「モロ死んだんですか？ ヤッター！」

第4話 トリックスター

リゼットによるモロ襲撃から一夜が明けた。

有無を言わさぬ奇襲でモロを消し去ったリゼットは、神殿に戻るなり後の対応をMr。ポポに任せて自らはカリンを抱えて寝室に籠った。

よほどモロの気が生理的に受け付けなかったのか、朝になった今もまだ寝込んでいる。

どうやらかなり精神的にダメージ受けたようなので、しばらくリゼットは復活しないだろう。

本人曰く、『モロの気を感じる事に比べれば不意打ちで世界中の虫が頭の上に降って来る方がまだ気分的にはマシ』らしい。

そんなわけでザーボン達の目的はあっさり達成されてしまったのだが、彼等はまだ地球に留まっていた。

寝込んだリゼットを放置して『もう用はない』と帰ってしまったては、流石に今後の評判に響きかねない。ザーボンが来る前の銀河パトロールの先走りとかやらかしも

あつて猶更だ。

それに、ザーボンにはこの機会に本格的に地球と『永遠の美』との間にパイプを作っておきたいという考えもあった。

地球は北の銀河の辺境の惑星に過ぎないが、抱えている戦力は第七宇宙……いや、全十二宇宙を見渡しても最強と言っても過言ではない。

単体戦力ならば第十一宇宙のジレンが勝るが、総合的な戦力では地球が勝る。

ザーボンが片腕として頼りにしている用心棒のレジックは宇宙全体を見渡しても渡り合える者がほとんどいない強者だが、そのレジックですらこの地球では神殿に配備されているゴッドガードン一機にすら及ばないのだ。

というか何だあの強すぎるロボット。私も一機欲しいとザーボンは心から思った。

そしてそのゴッドガードンもここではちょっと頑丈な玩具みたいなものだ。

力の大会メンバー最弱のヒルデガーンの足元にも及ばず、それどころか大会に出場すらしていないカリンにも遥かに劣る。

この超戦力との間に同盟のパイプを繋げる事が出来れば、それは宇宙最強の戦力

を後ろ盾に出来るに等しい。

勿論、逆に『永遠の美』が地球の後ろ盾になる事も出来るので向こうにとっても損のない取引のはずだとザーボンも踏んでいた。

故にザーボンは神殿付近に宇宙船を停めて、リゼットが起きるまで待っているのだ。

そこに、瞬間移動で悟空を始めとする地球の戦士達が現れた。

悟空にベジータ、ピッコロにターレスの安定の地球四強揃い踏みである。地球人が一人もいないのはご愛敬だ。

ザーボン達の気は地球の戦力基準から見れば二軍どころか三軍レベルであっても、宇宙全体から見れば間違いなく超一級の戦力だ。

そんなのが神殿付近にいれば、当然地球の戦士達が気付かないはずがない。

神殿にもミラや四星龍、21号などがあるので並大抵の敵は返り討ちに出来る。なので全く心配などしていないのだが、それでも一夜が明けてまだ滞在しているようでは流石に気になるだろう。

特にベジータとターレスは、ザーボンの気に覚えがあるから尚更だ。

「お前達は……」

「これはこれは。随分とお懐かしい顔で……この星に何をしに来やがった？ ザーボンさんよ」

突然の遭遇に驚くザーボンへ、ベジータが挑発するように話しかけた。

ベジータにとってザーボンは、フリーザ同様に自分を散々扱き使ってくれた忌まわしい相手だ。

それが何故生きてここにいるのかは知らないし、銀河パトロールの連中がザーボンを守るように前に出ている理由も分からない。

しかし少なくとも、ベジータの中ではザーボンは敵であった。

そしてザーボンも、地球の戦力との間にパイプは繋ぎたいがベジータは別だと考えている。

ベジータはフリーザ配下の時からやたら反抗的だったし、プライドばかり高くて扱いにくい男だった。

いつ背後から撃ってくるか分からない味方など、ザーボンとしても必要はない。「ふっ……今の私の地位や仕事などをお前如きに話したところで到底理解出来るも

のではあるまい。

だが、私に手を出せばこの地球そのものの不利益に繋がるとだけ教えておいてやる」

「ほう？ そんな下らん脅しで俺が恐れるとでも？」

余裕そうなザーボンの表情が気に入らなかったらしく、ベジータは薄ら笑いを浮かべながら一歩前へ出た。

だがその彼の腕を悟空が掴み、諫める。

「待てよベジータ。まずは話を聞いてみようぜ。」

おめえ達の間に昔何があったかは知らねえが、見た所あのザーボンって奴は戦う気はなさそうだ」

「ちっ……貴様は知らないからそう言えるんだ、カカロット！ いいか、あの野郎はな、フリーザの命令でいくつもの星の破壊に加担して来たんだぞ！」

「いや、それを言ったらベジータだって元々は地球を壊しに来たんじゃねえか……」
「か、過去の事には触れるな！」

家庭を持ち丸くなったベジータにとって、嬉々として惑星を破壊してその住人

を殺していた過去は今となっては触れられない恥部だ。

特にトランクスには昔の自分の悪事をあまり知られたくない。

生まれたばかりのブラに教えたくないし、娘が育ってから『パパ極悪人なの？

サイテー』とか言われるのを想像すると死にたくなる。

「落ち着け、ベジータ。ザーボンの着ている服をよく見やがれ。

ありゃあ銀河パトロールの制服を改造したもんだ。

それを着ていて、しかも制服の改造を許されてるって事は相当いい地位に就いてるって事になる。

周りの雑魚共もザーボンを守るように動いてるしな。

そんなのを問答無用で殺せば……地球は宇宙中を敵に回しかねえぞ」

ターレスの言葉にベジータは動きを止めた。

宇宙を敵に回したから何だと言うのだ……とは思えなかった。

確かに戦闘力で言えば今のベジータ達を脅かす者などそうそういない。

だが何も戦闘力で勝てずとも、方法などいくらでもあるのだ。

例えば遠距離から星間弾道ミサイルなどを打ち込んで惑星そのものを破壊する手

もあるし、気が一般人並に低い隊員を送り込んで、地球上で絶滅カプセルを割るという方法もある。

ベジータ達ならばそれでも瞬間移動などを駆使して生き残り、相手を全滅させる事も出来るかもしれないが……ブルマやスノといった一般人は死ぬ可能性が高い。その危険を冒してまでザーボンを殺す意味は、あまりない。

「流石は元クラッシャー軍団首領。ベジータよりは話も分かりそうだ。

一つだけ間違いを正すならば、私は銀河パトロールに所属しているわけではない。その上部組織である『永遠の美』の総帥をやっているというだけだ」

「……そりゃあまた、随分と出世したもんだな。どんな手品を使ったんだ？」

「大した事ではない。お前達が戦闘力を伸ばしている間に私は権力という力を伸ばしていた。

ただそれだけの事だ」

ザーボンはターレスの冷静さを評価し、自らの地位を語った。

これには流石にターレスも驚き、ベジータとピッコロも顔をしかめる。

ザーボンは今の彼等から見れば弱いが、代わりに迂闊に手を出せない地位を手

入れた。

なまじ半端に強い輩よりも、ある意味遥かに厄介で性質が悪い。

悟空だけは深刻に受け止めていないのか、いつも通りの呑気な顔のままだ。

話の大きさはとりあえず理解出来るが、だからどうしたといった感じである。

「よく分かんねえけどよ、おめえ達は地球に何か悪い事をしに来たわけじゃねえし、これからも悪い事はしないって事でいいんだよな？　銀河パトロールってのは確か宇宙の平和を守ってんだろ？」

「そういう事だ。今の私はお前達の敵ではない」

「そんなら、それでいいさ」

ザーボンの言葉に悟空は意外なほど疑いを見せず、薄く笑った。

しかしこれに、当然のようにベジータが反発を見せる。

「カカロット！　貴様またそうやって……！」

いいか！　こいつがいい奴だなんて思っているなら、大間違いだぞ！

このザーボンってヤローはな！　いつだって自分の事しか考えてねえクソヤローだ！　絶対に改心などせん！」

「フン、野蛮な猿野郎が自分を棚上げてよく喚きやがる。直接殺した数を言うならば私より貴様の方が遥かに上だろうベジータ」

「なんだとお……!」

「ま、まあまあ、落ち着けて! な!」

互いに暴言を交わし、一触即発となったベジータとザーボンの間に悟空が割り込んだ。

前に出ようとするベジータの肩を押し、何とか留まらせる。

「ここでこのザーボンって奴をやっつけても何もならねえだろ。

こいつがもし何か悪い事をするってんなら、その時はオラ達がやっつけちまえればいい」

「ぐ……!」

ベジータを宥める悟空の言葉に、ザーボンは顔を強張らせた。

今のはベジータを落ち着かせるだけの言葉ではない。

あえてザーボンの目の前で言う事で、『何かしたら倒す』と警告したのも同然なのだ。

狙って言ったのか、それとも何も考えていないのか……どちらかは分からないが、ザーボンは悟空の方がベジータより厄介かもしれない、と考えた。

まるで大人の冷静さと子供の単純さを兼ね備えているようで、底が見えない。

「話は終わったようだな。それでは、まずは何があったのか説明してくれ」

いざこざが一段落した所で、これまで無言だったピッコロが口を開いた。

彼が話を振った相手は21号だ。

この中では最も説明が上手いと考えての事である。

少なくともミラ、四星龍、ポポよりはマトモな説明が期待出来そうだ。

それを受けて21号が、昨晚起こった出来事を語り始めた。



「あちゃー、また出遅れちゃったんか。オラもそのモロって奴と戦ってみたかったぞ」

説明を受け、悟空は残念そうな声を出した。

彼の知らないうちに強敵がリゼットによって葬られているというのは割とよくあるパターンだが、今回もそうなってしまったらしい。

「星喰いか……気を感じただけで寝込むとは相当だったんだろうな。ポポ、リゼットの奴は大丈夫なのか？」

「体調に問題ない。ただ気分悪いからカリン連れて行って休んでる」

「そうか……まあカリンが一緒なら大丈夫だろう」

ピッコロがリゼットを心配するというのは今までならば無かったことだが、先代と融合してからは若干リゼットに対して優しくなったようにも見える。

人格はあくまでピッコロのままだが、細かい部分では融合相手の影響も受けているのだろう。

ともかく、新たな危機は自分達が知らない間に終わっていた。

リゼットも少ししたら復活するだろうし、要するに地球は今日も平和だという事だ。

これを残念に思っているのは悟空だけである。

「孫悟空、お前はどの時代でも地球を守って戦う男だったと記憶していたが……もしかして、俺が思う程お前は正義感とかがある方ではないのか？」

「ん？ いや、オラは別に正義の味方になった覚えはねえしな。」

そりゃあフリーザみてえな悪い奴は大嫌いだけどよ……けど、やっぱ強い奴とは戦ってみてえじゃねえか」

「そ……そうだったのか……」

見ているだけの時と、実際に話してみれば全く印象が変わる相手というものがある。

孫悟空もそのタイプで、結果的には地球のヒーローのようになっていくがその本質はただのバトルジャンキーである。

勿論最低限の正義感を持っているし、悪い奴は許せないが……それはそれ、これはこれだ。

強い奴がいるなら戦いたくなるのはサイヤ人の本能であり、戦士の性である。

そんなギャップにミラは僅かな驚きを感じていた。

彼の中での孫悟空は地球を守って戦うヒーロー的なイメージが強かったのだ。

「へえ、強い奴と戦いたいんだ？　じゃあ、僕がいい場所に案内してあげるよ」

そんな不満を持て余す悟空へ、聞きなれない誰かの声がかけられた。

まず真っ先にベジータとターレスが反応して構えを取り、ピッコロが腕組みを解

く。

21号の目が弱気そうなものから一転して鋭くなり、四星龍が静かに闘志を滾らせた。

最後に悟空が表情を引き締め、ゆっくりと振り向く。

悟空達がここまで警戒している理由……それは、『声をかけられるまで誰も気付かなかった』からだ。

いくら気を抜いていたとはいえ、ここに集まっているのは宇宙屈指の強戦士達だ。それがここまで接近され、声をかけられるまで気付けないなど普通ではない。それだけでこの声の主が只者ではないと分かる。

「おめえ、なにもんだ？」

「そう警戒しないでよ。僕はフュー……君達も知っている未来の方のトランクスの“オトモダチ”さ」

そこにいたのは、青い肌の耳が尖った青年であった。

男ではあるが白い髪をポニーテールにしており、レンズが黄色い丸眼鏡を付けている。

遅いボデイラインがハッキリと出る黒いアンダーシャツに、下は黄色いズボン。腰の後ろには鞘に納められた刀が見え、飄々とした雰囲気の中に不気味さを感じられる。

眼鏡の奥の赤い瞳を動かして値踏みするように悟空達を見回し、小さく「いいねえ」と呟いた。

「トランクス……だと？」

「ああ、僕もタイムパトロールなんだ。トランクスとは、一緒に色々な時代を飛ぶ仲間だよ」

怒気の混じったベジータの言葉に、まるで恐れを見せずにフューが答えた。タイムパトロール、という言葉が出るという事は本当に未来トランクスを知っていると見て間違いないだろう。

しかしだからといって、初対面の相手が口にした『トランクスの“オトモダチ”』という言葉をそのまま信じるほど悟空達は頭がハッピーセットではない。チャクラ宙返りするサスケェ！人形も付いてきてお得だ。

事実か虚言か……そう悩む悟空達の前で、フューと名乗った青年は更なる爆弾発

言を投下した。

「トランクスは大変な事に巻き込まれている。

彼は今、監獄惑星という宇宙中の物凄く強い囚人達が閉じ込められた場所に閉じ込められているんだ。

君達の助けが必要だ。僕と一緒に、トランクスを助けに行ってくれないかい？

ねえ……お父さん？」

そう言い、フューはミラへと視線を向けた。

【戦闘力】

フュー…推定1兆以上

『超フュー』という変身もあるが、ノーマルのままでもかなり強い。

ゴッド覚醒前とはいえ悟空とベジータを同時に相手にしてあしらい、超フューになった後は超4の悟空とベジータの二人を相手にしても優位に戦うなど、最大で数十兆クラスにも届くかもしれない逸材。

暗黒王になると手が付けられない。

更に歴史改変のエネルギーを吸収する特殊能力もあるので、その可能性は未知数。ノーマルでの戦闘力も当たり前のように兆超え。

ちなみにゼノバースとヒーローズでかなり強さが違う。というかヒーローズはその時のノリでキャラの強さが変動するので参考にならない。

【フュー】

ドラゴンボールゼノバース2、ドラゴンボールヒーローズに登場するキャラクタ―。

ゼノバースとヒーローズで性格が違う。

善悪の区別がなく、いい意味でも悪い意味でも子供っぽいというキャラ性自体は共通しているがゼノバースではやや善寄りで「ハッピーな方がいい」と言い、どちらかといえば改変によって、より良い結果を引き寄せようとしているように見える。

一方ヒーローズでは自分の欲望に忠実で、実験と称して好き放題やっている。マザー3のポーキーみたいな奴。

オンラインではトワとミラの息子で、ゼノバース2とヒーローズではトワとミラの細胞から生み出された突然変異体。

このSSでもゼノバース2とヒーローズの方の設定だが、遺伝的にはまあ親子と考えていいのではないだろうか。

【チャクラ宙返りするサスケェ！人形】

時は2010年、奴は颯爽とその姿を現した。

マクドナルドのハッピーセットに出現したそれはまさに新たな光。

背中にあるレバーを押し込む事でチャクラ宙返りを披露してくれるが、割と失敗する。

その邪神の如きインパクトであつという間に話題になり、ファンを虜にした。

海外のスレでは頭の上にコイン、チェスの駒、ボトル、初音ミク、ストライクフリーダムガンダム、金魚鉢、挙句の果てに実物のスクーターまで乗せられてバランスを維持していた。

コラ画像幻術か？ イヤ……コラ画像幻術じゃない……！

……イヤ……コラ画像幻術か？ またコラ画像幻術なのか!? イヤ……。

何だアレは!?

煽り『またコラ幻術画像なのか!?

【リゼット一時離脱】

精神的ダメージを受けて戦線離脱。

頼りにならない主人公だ……。

第5話 監獄惑星

なにジョジョ？

リゼットが序盤で離脱して主人公らしくない？

逆に考えるんだ。

『主役が序盤で離脱するのはむしろドラゴンボール的』と考えるんだ。

ほら、悟空さだってフリーザ編と人造人間編は実は出番がほとんどないし……。

宇宙の外れに、一つの……と呼んでいいかは分からないが、奇妙な惑星があった。その名を監獄惑星といい、その外見は複数の惑星を巨大な鎖で縛って無理矢理一つに固めたような歪なものだ。

その惑星の前に今、悟空、ベジータ、ミラ、21号……そしてフューの五人が来ていた。

宇宙空間ではあるが21号がバリアを張る事で悟空とベジータもこの真空の中で

の活動を可能としている。

五人しか来ていない理由は、勿論フューを完全には信賴していないからだ。

それに、神殿にいるザーボンを監視する必要がある。

その為、何かあった時の為にピッコロ、四星龍、魔人ブウ、ターレス、ヒルデガー
ンは神殿に残している。

リゼットは前回から引き続きダウンしているので、今回はいない。

「さあ、ここが監獄惑星だよ。トランクスはここにいます。早く助けに行こう！」

フューが急かすように言うが、ベジータは露骨に疑いの視線をフューへ向けた。
どうにもこの男が胡散臭く見えて仕方ない。

むしろフュー自身、疑われている事を知っていてそれを楽しんでいるような……
何か悪だくみをしているが、バレルならバレルで別に構わないというような、そんな不敵さと不気味さが感じられる。

「あの……ミラさん。本当にこちらの方はミラさんのお子さんなんですか？」

「……遺伝子的な意味で、というならば間違いない。フューは俺とトワの細胞から
生み出された突然変異体だ。」

もつとも、俺達の時代のフューはまだ赤ん坊だった。そこにいるフューは俺とトワが来た未来から、更に先の時代から来たフューだろう」

「それは……大丈夫なんですか？　だって、ミラさんって元々は……その……」
21号が言い難そうに口ごもるが、言いたい事はミラに伝わっていた。

ミラは今でこそ地球の仲間だが、元々は色々な時代を飛び回り、悪戯にかき回してキリを吸収していた存在だ。

暗黒魔界の王ダーブラの妹であるトワが、ダーブラの後継者として造りあげた最高傑作こそがミラであり……そのミラの息子ならば、つまりミラの次の暗黒魔界の王という事になる。

ならばかつてのミラと同様に、暗黒魔界復活の為にフューが暗躍していると考えても何らおかしくはない。

むしろタイムパトロールをやっている、などという台詞よりよほど自然だ。

「本当だって、信じてよ。僕は確かに父さんと母さんの細胞から造り出されたけど、僕が大きくなった時は二人ともいなかったんだ。

そんな僕がどうして見た事もない暗黒魔界を復活させようとしなきゃいけないの

さ。

そんなつまらない事をするよりさ、色々な時代を見て、色々な強い人の戦いを見る方が楽しいじゃない」

フューは無邪気に笑い、暗黒魔界の復活などどうでもいいと語った。

確かに、彼の立場に立って考えてみれば今更暗黒魔界を復活させる事に興味があるとは思えない。

それでも、ベジータ達はこのフューを完全に信じる気にはなれなかった。

とはいえ露骨に疑いを顔に出しているのはベジータくらいで、悟空は表向きにはいつもの呑気な顔に戻っている。

疑わないわけではないが、信じないわけでもない。

良くも悪くも悟空は先入観がなく、自然体であった。

「おいベジータ、そろそろ行くぞ。

ここですべてフューを疑ってたってしょうがねえだろ。

それに、トランクスがここにいていうのはどうやら間違いなさそうだ。気も感じるしよ」

「……トランクスだけじゃないぞ。強い戦闘力を持つ奴があちこちにやがる。それにこれは……いくつかは、俺達も知っている気じゃないのか？」

悟空は既にこの惑星からトランクスの気を感じ取っていたが、問題はそれだけではなかった。

ベジータが言うように、覚えのある気もいくつか感じられる。

「ああ。ボージャックにコルド……それに、こいつはハッチヒャックっていうやつだ。」

どれもオラが戦えなかった奴等だ。

今となっちゃあ大した相手でもねえが……」

悟空が僅かに緊張したような声で懐かしい名前を呼んだ。

今挙げた敵は、どれも悟空が戦う事なく終わってしまった者達だ。

だからこそ悟空は戦えなかった事を惜しんでいて、名前をよく覚えていた。

だが惜しんでいたのも過去の話。どれも今となっては普通の超サイヤ人になるだけで十分倒せるレベルの敵ばかりだ。

しかし確かに倒されたはずの敵が生きてここにいるというのが気になる。

果たしてかつて倒した奴が生き返ったのか、それとも別次元の同一人物なのか。だが次の瞬間、そんな事がどうでもよくなるほどの嫌な気を二人は感じ取っていた。

「な、何だ……？　まるで何人もの人間が悲鳴をあげているような……今まで感じた事もねえような、嫌な気だ……」

「誰かは知らんがロクな奴じゃなさそうだな……」

酷く気持ち悪い……いや、そんな言葉で済ませていいレベルではない、とにかく嫌な気の持ち主がこの星にいる事を悟空達は感じ取った。

悟空達だから『気持ち悪い』だけで済んでいるが、気の感知能力に優れ過ぎたりゼットならば、この気の中に中てられるだけで気分を害して寝込むだろう。

しかし嫌悪感に悟空達が顔をしかめる中……21号だけは、うっとりとしたような顔をしていた事に誰も気付かなかった。

「……沢山の星の命が混ざり合って……ああ、何て……美味しそうなもの」
まるで極上のスイーツを前にしたかのように蕩け、舌なめずりをする。
だが悟空が振り返った時は、普段通りの弱気そうな表情に戻っていた。

「ん？ 何か言ったか？」

「あ、いえ！ 何でもありません！」

悟空に声をかけられ、21号は気を取り直すように自らの頬を叩いた。

その奇行を不思議そうに見るも、気を取り直して悟空は皆に言う。

「どうやら思っていたよりずっとやばそうだ。

こりゃあオラ達も氣ィ引き締めてかからねえと危ねえぞ。皆、準備はいいな？」

「フン、誰が相手だろうと関係ない。全員ぶっ殺せば済む話だ」

「ベジータと同意見だ。俺を滾らせてくれるほどの強い戦士がいる事を望む」

「あ、あの……私も頑張ります！」

悟空の言葉にベジータとミラが好戦的に答え、21号は若干頼りない返事を返す。

それを聞いてから悟空は先陣を切って飛翔し、その後が続いて全員が監獄惑星の中へと飛び込んだ。

外観の出鱈目さとは裏腹に、星に入ってみれば案外景色はマトモだ。

悟空達の降り立った場所は見渡す限りの荒野だが空は青く、空気も澄んでいる。ただ、上空に巨大な鎖があるせいで景観は少し残念な事になっていた。

悟空は少し周囲を観察してから額に指を当て、少しそうしてから無言で指を離れた。

「おい、何をしてるカカロット……まずはトランクスを探すぞ」

ベジータが腕組みをしながら強い語気で言った。

提案というよりは命令に近い言い方で、他の行動は認めないと言う圧力が感じられる。

余程未来の息子の事が心配なのだろう。

悟空はそんなベジータの子煩悩さに僅かに笑い、頷いた。

元々ここにはトランクスを助けに来たのだから、それで問題はない。

「待て……何かがこっちに近づいて来ているぞ！」

だがミラがいち早く巨大な気の接近に気付き、注意を促した。

一瞬遅れて悟空達も気を感じして一斉に構えるものの、21号だけは反応が遅れ、構えもせずに狼狽えていた。

やがて彼等の前に一人の男が降り立ち、その見覚えのある姿に悟空達が驚く。

「おめえは……」

悟空達の前に現れた男……それは、悟空そっくりの戦士であった。

友の形見である赤いバンダナを額に巻き、緑を基調とした戦闘服に身を包んでいる。

戦闘服の下にはフリーザ軍時代にはなかった深緑のアンダーズーツを着用し、首には赤いサポーターが巻かれていた。

以前とは少し衣装が異なっているが、悟空と瓜二つの顔に左頬の十字傷を見違えるはずがない。

かつてフリーザとの戦いに敗れてワームホールに飲み込まれ、そして未来のトランクスの願いによって時の巢に召喚された戦士にして、タイムパトロール。

その男こそは、孫悟空の父であるバーダックであった。

「見付けたぞ……フュー！」

折角の親子の再会だというのに、バーダックは悟空を気にもかけずにフューへ怒りの視線を向けた。

地を蹴り、彼の身体から気が溢れる。

外見を変えないままに超サイヤ人3を上回る力を得る、アルティメット化潜在能力解放形態だ。

更にバーダックの瞳が超サイヤ人4のように金色に染まり——驚くべきことに、人の姿のまま大猿の力を引き出す。

人の姿のまま……それでいて、超サイヤ人4にもならず大猿の力を引き出す事は決して不可能ではない。

異なる並行世界では、惑星バンパで長年暮らしたブロリーが人のまま大猿の力を引き出している世界線だって存在しているのだ。

有無を言わずフューを仕留めにかかったバーダックの前に、悟空が咄嗟に超サイヤ人ブルーへ変身して割り込んだ。

バーダックの拳を受け止めるも、以前とは比較にならないパワーに驚かされる。今のバーダックのパワーは、超サイヤ人4のターレスと比較しても見劣りしていない。

「待てよ父ちゃん。どういう事なのか説明してくれねえか？」

「……俺を父と知っているのか。どこの時代のカカロットかと思っていたが、あの世界のカカロットだったか」

バーダックが何か納得したように笑い、ようやく悟空へと意識を向けた。

悟空には分からない事だが、バーダックはタイムパトローラーとして様々な並行世界で戦っている。

例えばそれはデンデが地球の神を務めている世界線だったりもするし、あのブローリーが幼少期にバンパという小惑星に追放され、心穏やかなまま優しいサイヤ人として成長した世界線もある。

世界が違えば、同一人物であっても別人のようなものだ。

同じ孫悟空であっても年齢相応に老成した孫悟空もいれば、そこから子供に戻ってしまったたりした悟空もいるし、大人になっても純粋なままですら知らない悟空もいる。

正義感が強くて悪人を許さない悟空もいるし、逆に正義感が薄くて強い奴と戦えればそれで満足だという悟空もいる。

ベジータにしても破壊神の機嫌を損ねないように土下座しているベジータがいる一方で、別の世界では常にぶっきらぼうなくせに娘に『パパ、ヒゲださい』と言われただけでショックを受けているベジータもいる。

ターレスに至っては存在しないか、あるいは地球で悟空に殺されて終わるのがほ

とんどである。

バーダックはそれを知っており、たとえ『カカロット』であつたとしても自分の知るカカロット以外は彼にとっては息子ではなく他人なのだ。

「それなら……！」

今ここにゐる悟空が自分の息子だと認めたバーダックだったが、彼は戦いを止めなかった。

それどころか更に気を上げ、悟空へと殴りかかる。

悟空は驚きつつも冷静にバーダックの拳を逸らし、そして父の眼を見た。

交差する父と子の視線……やがて悟空はバーダックの真意を悟り、薄く笑った。

「カカロット！ テメエとは一度戦ってみたかったぜ！」

「……いいぜ。オラも実は一度やってみたかったんだ！」

二人は同種の笑みを浮かべ、拳を真つ向から衝突させた。

衝撃で二人の髪がなびき、風が吹き荒れる。

だがまるで怯む事なく悟空が蹴りを放ち、バーダックがブロックした。

回避しようと思えば出来ただろう。だがバーダックは我が子の実力を計るように

受け止め、今度は反撃のダブルスレッジハンマーを繰り出す。

大振りな一撃だ。避けようと思えば悟空ならば簡単に避ける事が出来る。

だが悟空はあえて腕を交差させてその一撃を受け止め、痺れる腕の感触に酔いしれた。

「~~~~っ……効くなあ！」

「テムエも腕を上げたようだな、カカロット！」

二人は好戦的な笑みを消さずに互いを認め合い、尚も戦闘を続行した。

普段の速度から考えれば緩慢とも思えるスピードで、一撃一撃を確かめ合うように交換する。

バーダックが攻撃すれば次は悟空。悟空の攻撃が終わるのを待ってからバーダック。

それは戦いというよりは、どこかじゃれ合いのようにも見えた。

「あっ、あの、止めなくていいんですか！ あの人、親子なんですよね!？」

「いや、その必要はないだろう」

21号はオロオロしながら突如始まった悟空とバーダックの親子の戦いに狼狽え

ているが、ミラとベジータは冷静なものだ。

悟空もバーダックも本気だが本気じゃない。

矛盾しているようだが、実際その表現が最もしっくりくるのだ。

決して加減しているわけではなく一撃一撃は全て本気で繰り出している。

しかし相手を本気で倒そうという意思が感じられず、何かを狙っているように見えた。

「いくぜ、カカロット！」

「ああ！」

バーダックが片手に気を溜め、悟空も迎え撃つようにかめはめ波の構えを取る。

そして二人が同時に技を繰り出し、衝突と同時に大爆発を引き起こした。

監獄惑星を覆う鎖が激しく揺れ、余波だけで空気が震える。

数秒の爆発の後……しかし鎖は僅かな焦げ目がついただけであった。

「ちっ……駄目か」

バーダックが忌々しそうに言う。

彼の狙いは自分と悟空の技をぶつけ、その相乗エネルギーでこの監獄惑星の鎖を

破壊してしまう事だった。

悟空もその狙いを何となく察し、バーダックに合わせたのだ。

タイムパトローラーであるバーダックがフューに攻撃を仕掛けた以上、フューは自分達に嘘を吐いていたと考えて間違いない。

となれば、彼はパトローラーなどではなくかつてのトワやドミグラと同種の敵なのだろう。

自分達がまんまと誘い出されてしまったこの惑星も、あまりいいものではあるまい、と悟空は察していた。

ベジータ達には話さなかったが、実は悟空はこの惑星に来ると同時に瞬間移動を試そうとしていた。

それは万一の時にすぐにも脱出出来るようにと、念のため瞬間移動が出来るのかを試す程度のものであったのだが、瞬間移動は出来なかった。

その時から悟空は、自分達が閉じ込められた事に気が付いていたのだ。

あえて言わなかったのはフューが敵だという確証が持てなかったからだ。

しかしバーダックが出てきた事で、その疑念も解消された。

「あっはっはっはっは！ 無駄だよオ！」

そんな事したって、その鎖は壊れやしないよ！」

「……フュー。やっぱおめえ、悪い奴か。オラ達をここに連れて来て閉じ込めるのが狙いだったんだな」

「狙いは合ってるけど、悪い奴ってのは間違いだよ。

悪い奴なんかじゃない……とーっても、凄い奴なんだよ、僕は！」
恐らくは自己顕示欲が強い性格なのだろう。

声高らかに言い、フューは両手を広げた。

本性がバレたからどうした、と言わんばかりの自信とふてぶてしさが彼からは感じられる。

「この監獄惑星は僕が作ったんだよ。凄いでしょ？」

ここには色々な時代の強い連中を閉じ込めて、戦わせているんだ！

君達もここでいーっぱい戦って、僕を楽しませてよ！」

「フュー、お前……」

ミラの咎めるような声も、フューには届かない。

フューは決して悪ではないが善でもない。

ただ自分の興味と好奇心が赴くままに行動する、自製の効かない子供なのだ。それも、能力だけは格別に高い子供だ。

故に善悪の区別はなく、その時の状況と気分次第でどちらにも傾き得る。

ある意味ではそれは、この世のどんな悪よりも性質が悪い存在だ。

「さあ、実験の始まりだ！」

故に能力だけ育ってしまった子供は、一切の悪意なく無邪気にゲームの開始を宣言した。

【孫悟空…ゼノについて】

結論から言うところのSSに孫悟空…ゼノとベジータ…ゼノはいません。

このSSだと既にそのポジションにバーダックが入ってしまっているので、孫悟空…ゼノを出すと被ります。

しかもトランクスもタイムパトローラーですので余計に入れる枠がないです。

(ヒーローズのアニメだとトランクス…ゼノと超の未来トランクスは別個体だが、ややこしいのでこっちでは統一している)

後、単純に文章メインで同じキャラが二人いるとどっちが喋ってるのか分かりにくいという。地の文で悟空…ゼノって書くのも何か間抜けだし……。

それにこれ以上悟空顔を増やしてもね……。

なので悟空…ゼノとベジータ…ゼノは出ません。

悟空…ゼノは犠牲になったのだ……。

ちなみにベジータ…ゼノの代役も一応います。ぐぐと鳴く緑の人なんですけど。

【戦闘力】

・バーダック…11億

アルティメット化…2兆2000億

フルパワー…???

修行によりアルティメット化で大猿の力も引き出せるようになった。

つまり見た目はノーマルのままだが実質、超サイヤ人4。

超サイヤ人4ということは当然、その先の超フルパワーも可能という事である。
そんな事可能なのかって？

新ブローリーもやってたようなものだし、いけるいける。

第6話 バトルジャンキー

モロの気という精神的トラップをうっかり踏み、寝込んでいたリゼットが起きてきたのは昼に差し掛かるうかという時刻であった。

まだ本調子ではないが、とりあえず何とか復活したリゼットは抱き枕代わりにしていたカリンを解放し、寝室から出る。

神殿には昨夜から引き続きザーボン率いる銀河パトロールと四星龍、魔人ブウとタピオン兄弟がいるがミラと21号の姿が見えない。

リゼットが神殿に姿を見せると同時に小走りでやってきたポポを見て、また何か起こったのだろうと察してしまった。

「神様、もう大丈夫？」

「ええ、心配をかけましたね、ポポ。ところで何かあったのですか？」

リゼットの問いにポポは、リゼットが寝ている間に訪れたフューという男の事と、それに悟空達がついていった事を話した。

全てを聞き終え、リゼットは額を押さえる。

……怪しいなんてレベルじゃない。そのフューという男はどう考えても高確率で敵だ。

タイムパトローラーだからトランクスを知っている、というのはまあ納得出来なくはないが、何故そのパトローラーがわざわざこの時代に助けを求めに来る？

今までにも何度かパトローラーと共闘はしているが、それは全てドミグラやブラックといった時間に干渉する敵がこちらに干渉してきたからだ。

その流れの中で自然と共闘の形になっていたに過ぎず、タイムパトロール側から積極的にこちらに助力を求めに来た事はない。

第一そんな真似をすれば、それこそ歴史を変えてしまうだろう。

仮に歴史を変えてでも助力が欲しいような切羽詰まった展開になったならば必ず時の界王神が出て来るはずだし、そのフューという青年は信用出来ない。

少々酷いが、有無を言わずに確保してそれから事実を問いただすべきだ。

悟空ならば違和感にも気付けたはずだが……まあ、何せ悟空だ。

悟空は馬鹿ではないが戦闘馬鹿である。

怪しいと思いつつも、強い囚人が集められた星という言葉に心が攪られてしまっ

たのだろう。

半分はフューの正体を探る為にわざと話に乗ってみたというところだろうが……もう半分は多分、ただの好奇心だ。

本当にもう、これだからサイヤ人は……。

そこまで察し、リゼットは溜息を噛み殺した。

それからすぐに悟空達の気を探すが、どこにも気が感じられない。

どうやら外に気を漏らさない、一種の封印空間の中に入ってしまったようだ。

しかしこれに関してリゼットはあまり慌てなかった。気は感じられないが、それでも監獄惑星とやらへの道標はあるだろうと思っていたからだ。

「タピオン。そのフューという人物は監獄惑星の座標を伝言として残していませんか？」

「あ、はい。確かに出かける直前に言い残して이었습니다」

タピオンは驚いたような反応をしているが、これは簡単に予想出来る事だ。

そのフューという青年は、目的は分からないが悟空達を誘い出した。

監獄惑星とやらには『強い囚人』が沢山いるというので、恐らくは悟空達と同じ

ように宇宙の各地から……あるいは様々な時代から彼が連れてきたのだろう。

つまりフューは強い戦士を集めて何かをしようとしている。

そしてリゼットは自惚れでなければ宇宙でもトップクラスに入るレベルの戦闘力の持ち主である。

そんな自分をフューという青年が放置するはずがないと思ったのだ。

「行くのですか？ お言葉ですが、それは自ら罠に嵌りにいくようなものです。

ここは外で待機し、ベジータ達が出て来るのを待つべきではないでしょうか？」
リゼットが監獄惑星に行こうとしている、と察したザーボンが慌てて待ったをかけた。

ザーボンは気を感じ出来ないが、最新型のスカウターを持っている。

そのスカウターでも悟空達の位置を特定出来ない以上、監獄惑星というのはその名の通り封印された監獄のようなものと思ってい。

いわば敵の拠点、胃袋の中だ。

そんな場所にみすみす、今や第七宇宙の正義の象徴となった地球の神を行かせるわけにはいかない。

万一リゼットがそれで死ぬような事が起これば第七宇宙は大混乱に陥る。

それはひいては、象徴を失った『永遠の美』の権威失墜にも繋がるのだ。

ベジータやソングクウとかいうサイヤ人の猿がいくら死のうがザーボンの知った事ではないが、地球の神にだけは死なれるわけにはいかない。主に自分の為に。

「勿論私自身がそのまま乗り込むわけではありません。

何が待ち受けているか分かりませんからね。

しかし悟空君達をそのまま放っておく事も出来ません」

悟空ならばきつと大丈夫だろう、という信頼はある。

しかしそれと同じくらい、悟空とベジータのサイヤ人組は状況を悪化させかねないという不安もあった。

あの二人が監獄惑星に入る事で、それに触発されてパワーアップする敵が出てしまうような気がしてならない。

そしてもしそうなった時、悟空とベジータはきつと相手が強くなるまで待ってしまおうのだろう。

何故なら彼等はサイヤ人なのだから。

リゼットが思い浮かべるのはフリーザが100%になるまで待つ悟空の姿や、セルを完全体にしようとしているベジータの姿……サイヤ人は時々こういう、明らかに不利になる事を自らやってしまう。

「ならばどうするのですか？」

「そう難しい話ではありません。要するに私が外にしながら、私が監獄惑星の中に入ればいいだけの話です」

ザーボンの問いに、リゼットは明らかに矛盾している答えを返した。

自分が外にいながら中にも入る。

それは明らかに両立不可能な事で、しかし不可能の一つや二つくらい可能にしなければこの世界ではやっていけない。

第一、この程度の事は天津飯だって簡単に出来る事だ。

リゼットはその場でゼノバースⅡを発動して光輪を背負い、この状態でのみ発動可能な技を使用した。

いや、正確には技そのものは普通の状態でも使えるのだが……気を高めた状態で使用した方が、強いのだ。

「HEROES・GOD MISSION」

ゴテンクスのスーパーゴーストカミカゼアタックとヤムチャの繰気弾をモデルに編み出したこの技は、『打撃属性の自意識を持った人型の気弾』の生成を可能とする。

これに更にリゼットの神の気を与えることで疑似的に神の領域へと昇華させて神の戦士として使役する。それが『ヒーローズ・ゴッドミッション』だ。

ここから更にあの世からの魂の召喚で魂を与える事も可能だが、それは今回はやらない。

というより、それをあまり頻繁にやると閻魔様の仕事が増えてしまう。

過去の事件の積み重ねの結果、閻魔は既にリゼットに頭が上がらないがそれでも一応上司だ。あまり苛めたくはない。

そして今回創り出す神の戦士は……リゼット自身だ。

正確には人格や思考、能力を限りなくリゼット本人に似せた紛い物か。

魂を分け与えているわけでもないので四身の拳のようにリゼット本人、というわけではない。

「よし……出来ました。いつもより気を込めているので私のフルパワーの三割くらいの強さは持っているはずです。

すぐに監獄惑星へ向かい、悟空君達の様子を見てきてください」

リゼットが指示を出すと分身リゼットはコクコクと首を縦に振り、それからヘブンズゲートで転移した。

分身とはいえ、あれはリゼットの気なので彼女の見ているものはリゼットにも見える事が出来る。

とりあえずはこれで様子見をし、監獄惑星があまりに危険なようなら悟空達を何とか連れだした後に外側から破壊してしまえばいい。

ともかく、ここから先は分身リゼットの頑張り次第だ。

★

実験の開始だけ告げてフューが消えた後、悟空達は情報を交換し合っていた。

もつとも悟空達が知っているような事はバーダックも知っていたので、実質的には一方的に情報を貰っていたただがそこを気にしてはいけない。

バーダック曰く、フューはかつてのトワやドミグラと同じような時間に干渉する

罪人であり、これまでも様々な時間に干渉してはかき乱してきたらしい。

しかしトワやドミグラと違うのは明確な悪意があつてやっているわけではない事。

フューの行動はどこまでいっても子供染みた興味と探求心から来るものであつて、そこに善悪の境はない。

いわば力だけ持っている大きな子供だ。

夏休みにカブトムシとクワガタを捕まえて一つの籠の中で戦わせている子供と何ら違わない。

いわばこの監獄惑星は籠であり、悟空達や囚人達はクワガタやカブトムシ。そして実験とは夏休みの自由研究のようなものだ。

故にフューはその時の気分と興味次第で善にも悪にもなる。トワやドミグラのよきな野心があるわけでもなく、ただひたすらに自由で自分本位なのだ。

「実験と言っていたな……フューは強い奴同士を戦わせて何がしたいんだ？」

「目的なんかありやしねえよ。言っただろ、あいつはただのガキだってな。

ただ、誰が一番強えのかを見たいだけなんだよ」

ベジータの問いに、バーダックは心底面倒くさそうに頭を掻いた。

子供はカブトムシやクワガタといった昆虫を興味本位で戦わせる。どちらが強いのかを知りたがる。

だがそれでカブトムシが勝ったとして、そのカブトムシを使って何かをしたいわけではない。

ただ単純に、純粹に知りたいだけ。手段がそのまま目的なのだ。

『×月○日、カブトムシとクワガタとカマキリとその他いっぱい戦わせたらかブトムシが一番強かったです。カブトムシはすごいです』……これだけだ。これで終わってしまう。

誰かが止めて、叱ってやらない限り止まらない。この上なく性質の悪い子供……それがフューの正体であった。

「そんなクソガキを放っておくわけにいかねえから追いかけてたんだが……トランスの野郎が逆に捕まっちゃまいやがってな……仕方ねえから俺もこの監獄惑星まで来たんだが、面倒な事に外に出る事が出来ねえ」

「なるほどなあ。そいつは大変だ。^{てえへん}」

けど、ようするにフューは誰が一番強えか見ることが出来りゃ満足するんだろ？
だったらやろうぜ！　オラも色んな強え奴と戦えるって聞いてワクワクしてんだ！」

バーダックは真面目に話しているのだが、悟空はこれに対し軽いノリで答えた。
彼の出した結論は要するに『フューの思惑に乗ってやろう』である。

これには、フューにいいようにされるのが気に入らないベジータが不機嫌を露わにした。

「カカロット、貴様……今の話を聞いていたのか？　俺達は奴にまんまと騙され
たんだぞ！」

「わかってっさ。けど、ここまで来ちまった以上はどのみち戦うしかねえだろ。
そうすりゃあトランクスともそのうち合流出来るだろうし、この星からも脱出
来るさ。」

大丈夫だ、要は負けなきゃいいんだよ」

不機嫌なベジータとは対照的に、悟空は嵌められたというのに上機嫌であった。
それもそのはずで、何の遺恨も不安もなく強敵と戦えるというのは悟空にしてみ

れば願ったり叶ったりなのだ。

前回の力の大会は、負けた宇宙が消えてしまうという状況だった為にせっかくの強敵との戦いも楽しめなかった。

自分達が勝てば悪くもない者達が消えてしまうという事実がどうしても頭を掠め、ワクワクしなかった。

その点、今回はそんな事は一切ない。純粹に未知の強敵との戦いを楽しむ事が出来る。

それを思えば騙された事くらい、悟空にとっては何という事はないのだ。

「外に出る事が出来ないとバーダックが言っただけだろうか……」

「いやあそんな事はねえと思うぞ」

呆れたように言うベジータへ、悟空は尚も明るく返した。

確かに力づくでの脱出は出来なかった。

バーダックと悟空の二人がかりでもあの鎖に罅一つ入らなかった以上、超サイヤ人ブルーの上から界王拳を20倍にしても結果は変わらないだろう。

ベジータとフュージョンすればあるいは……ということか。

しかし悟空は決して根拠もなく樂觀視しているだけではなかった。

力以外にも脱出出来る手段があると確信していたのだ。

「多分、最後の一人になれば脱出出来るような仕組みがあるんじゃないかな。なあ、父ちゃん？」

悟空はそう言い、バーダックへ視線を向ける。

するとバーダックは薄ら笑いを浮かべて肯定した。

「……気付いてやがったか。」

テメエの言う通りだ、カカロット。この星の囚人達にはどこの時間から奪って来たかは分からねえが、ドラゴンボールが渡されている。

フューが言うには、そのドラゴンボールを揃えればこの監獄惑星からの脱出も出来るらしい。

しかし何故分かった？」

「別に難しい話じゃねえさ。せっかく強え奴を集めても戦わなきゃ意味がねえだろ。だったら、戦いたくなるようにするだろって思っただけだ」

フューの目的は強者同士を戦わせる事である。

しかしせっかく集めた戦士達も、『戦う理由がない』と何もしなければ意味がない。

ならば戦いたくなるように脱出の手段を与え、そしてそれを奪い合う形にすればいい。

分かってしまえば誰でも答えに辿り着ける、単純な話であった。

「カ、カカロット、貴様まさか最初からそこまで気付いて……!?」

「まあ何となくな。この星に強え奴を集めてるって聞いた時点でそうなんじゃねえかとは思ってたんだ」

「バ、バカヤロウ！　そこまで分かっているながら何故、みすみす奴の誘いに乗ったんだ！」

悟空は最初からフューの違和感に気付いていた。

そして監獄惑星の話を聞いた時点で、この星には脱出手段が用意されている事も薄々理解していた。

恐らくはフューが信用すべきではないという事も勘付いていただろう。

だがそこまで分かっているながら何故みすみすこの星に突撃してしまったのかがべ

ジータには分らない。

憤るベジータに、悟空はあっけらかんと言う。

「何でって……だってよ、宇宙中の強え奴と戦えるっていうんだぜ？」

そんなら……ほら、戦ってみてえじゃねえか。なあ？」

「……………」

悟空の言葉にベジータは黙り込んでしまった。

彼だけではなくミラも21号も、そしてバーダックも残念な人を見るような生温かい視線を向ける。

頭は切れる。勘もいい。

フューにこれといった悪意がない事を見抜く洞察力もあり、監獄惑星に脱出手段が用意されている事まで早い段階で気付けた。

つまりフューが敵である事も、自分達を騙そうとしている事も、それがほとんど興味本位の実験のようなものである事も初見でほぼ見抜いていたという事だ。

なのに何故飛び込む？ 何故自分からノコノコ監獄惑星に入る？

この男は馬鹿なのか？ いや、馬鹿ではないのだろう。馬鹿ではここまで思考

を回せない。

しかし孫悟空は、紛れもなく戦闘馬鹿であった。

「……………貴様は時々、賢いのか馬鹿なのか分からなくなるな」

「いひひひっ」

誉め言葉とも呆れとも言えないベジータの言葉に、悟空は歯を見せて笑った。

この何とも、抜けているようでどこか鋭く、しかしやはり抜けているのが悟空という男なのだろう。

しかし不思議と、先程まであった張りつめた空気は完全に霧散していた。

ちょっと悟空のクレバーさを出してきたので、ここで駄目な部分も一つまみ…………。

ステップ1・フューの事を初見で怪しいと思いました

リゼット「やりますねえ」

ステップ2・フューの本質もほぼ初見で見抜きました

リゼット「流石です」
コウ

ステップ3・監獄惑星に脱出手段がある事も分かりました
リゼット「閉じ込められているトランクスにも脱出経路があると分かったわけ
ですね。

完全に閉じられた世界でないならば、やりようはいくらでもあります。わざわざ
飛び込む必要はもうありません。

流石は悟空君！ 完全勝利ですねヤッター！」

ステップ4・飛び込みます

リゼット「何でそうなるんですかヤダー！」

次回からやっと戦闘シーンに入れる……。

第7話 争奪戦開始

びたちよこ様より頂いたイラストを騒乱編の1話前書きに入れています。

支援絵ヤッター！

それと過去に頂いたイラストも併せて掲載させていただきました。

「カカロットの戦闘馬鹿ぶりはさておき、今の所はドラゴンボールを集める以外に脱出の手段がねえのは事実だ。

フューの野郎の思い通りになるのは気に入らねえが、この監獄惑星にいる連中にドラゴンボールを集められたら面倒臭え事になるのは間違いない」

我が子のバトルジャンキーぶりに若干呆れながら、バーダックが話を進めた。

かつては戦闘力だったの2で何の見込みも感じさせなかったガキが、よくもこう育ったものだ。

この呆れるほどの戦闘への食欲さは一体誰に似たのか……少なくとも、ギネでは

ない事だけは確かだろう。

となると、やはり自分か……そう思いながらバーダックは、懷からドラゴンボールを出して悟空へと投げ渡した。

「こいつはフューに渡されたもんだが、お前等が持ってた方がいいだろう。

お前等が持ってくれりゃ俺も身軽になれる」

バーダックが悟空達にドラゴンボールを渡したのは、互いの戦力比を考えての事だ。

バーダック一人に対し、悟空達は四人もいるので戦力が充実している。

そしてここでわざわざボールを渡したという事は、バーダックは別行動をするという事でもあった。

「一人で行動する気か？」

「いや、もう一人タイムパトロールがこの監獄惑星内に潜り込んでる。

まずはそいつと合流してトランクスの奴を探すさ。

その時に、敵に狙われやすくなるドラゴンボールはむしろ邪魔になる」

ミラの問いに頷き、バーダックは自らの考えを話した。

この星ではこれからドラゴンボールの争奪戦が始まる。

つまりボールを持っていれば嫌でも狙われるし、戦いになるという事だ。

しかしバーダックの今の目的は、まずはトランクスを探し出して合流する事であり、ドラゴンボールはむしろ邪魔だ。

ならば強敵と戦いたい悟空に渡しておいた方が互いに得をするし、こう言っでは悪いが悟空達が派手に戦ってくれば困にもなるのだ。

「そうか。気を付けろよ」

「へっ、誰に言ってるやがる。俺がそう簡単にくたばると思ってるのか？」

「……ふ。そうだったな」

ミラは単独行動をするバーダックの身を案じたが、バーダックの自信に溢れた言葉聞いて自らの気遣いはむしろ愚かなものだったと気付いて笑った。

そうだ、この男は何度も自分と戦って目的の達成を阻んで来たタイムパトローラーだ。その強さと厄介さは誰よりもミラが分かっている。

「あの……もう一人お仲間がいると仰っていましたが、どのような方なのですか？ 特徴を聞いておかないと、遭遇した時に互いの事が分からず戦いになったりする

可能性が……」

21号が、先程バーダックが口にした『もう一人のタイムパトロール』に言及した。悟空達とバーダックは味方同士だが、もう一人の方と遭遇してしまった場合に互いに味方と知らぬまま戦いになってしまうかもしれない。

その事を危惧してのものだったが、バーダックは何故か21号の不安を笑い飛ばした。

「安心しろ、そりゃあ多分ねえ」

「え？ それってどういう……」

「お前達もよく知ってる野郎だって事だ。それじゃ、俺はもう行くぜ」

バーダックはそう言い、そのまま飛び去ってしまった。

結局もう一人のタイムパトロールは分からずじまいだが、ああ言った以上は恐らく会えば一目で分かるのだろう。

今は気を隠しているのか、それらしき人物の気を感じられないが、悟空は特に気にしなかった。

バーダックがああまで言うのだから、ならば実際に会えるのを楽しみにしておけ

ばいい。

「よし、そんなじゃオラ達も行くぞ。どんな強え奴がいんのか、楽しみだなー」

「全く……緊張感のない野郎だ……」

これから、どんな強敵と戦えるのかとワクワクしている悟空へベジータが呆れたように言う。

どうにも最近は、自分の方が地球に染まっている気がする……とは、とても口に出せなかった。



トランク스가目覚めたのは、ネオンに照らされた歓楽街のような場所の一角にある倉庫の中だった。

もっとも歓楽街といっても実際は誰かが住んでいるわけではない。

ここはあらゆる時代、あらゆる場所の強者を集めて戦わせる為だけのバトルフィールド。ならばこの歓楽街も所詮は作り物に過ぎず、歓楽街を模した戦場に他ならない。

「ここは……そうか、俺はフューの奴を追って……」

目を覚ましたトランクスはすぐに自分の現状を把握し、辺りに気を張り巡らせた。時空犯罪者のフューを追跡し、この監獄惑星を突き止めた事までは覚えている。そして奴と交戦して追いつめたのだが……何故かその先の記憶がない。

フューが超サイヤ人のように髪を逆立て、気を爆発的に上昇させた事まではかろうじて記憶しているので、恐らくはその直後に自分は敗れたのだろう、と推測した。今のトランクスは以前にリゼットから修行を受けた事もあって、超サイヤ人ブルーへの変身を可能としている。

そのトランクスを倒した以上、フューの本気は超サイヤ人ブルーを完成させた悟空と同等か……それ以上と考えていい。

恐ろしい才能だと思う。あんなにふざけた男なのに、戦闘力では父であるミラを上回っているのだ。

「くそっ……こんな事では父さんに笑われてしまうな」

決して油断したつもりも、相手を侮ったつもりもなかった。

だがやはり、心の何処かに緩みがあったのかもしれない。

無理のない事だ。トランクスの世界では、トランクスこそがぶっちぎりで第七宇

宙最強の戦士であり、最近蘇ったばかりのベジータやリゼット、悟飯よりも遥かに高みにいる。

トランクスの世界の悟飯もベジータも超サイヤ人2止まりで、その先に到達出来ていない。

かつてブロリーと相打ちに持ち込んだリゼットも、命を捨てなければフルパワーでの強さは精々魔人ブウよりはマシ程度だ。

しかしトランクスは知っていたはずだ。別の時間ではもともとと凄い戦士達がいる事を。

『あの世界』の悟空やベジータ、リゼットにターレスといった超戦士達は自分よりも更に高みにいる事を知っていたはずなのだ。

……驕っている暇など一秒だってない。

そう自分に言い聞かせ、そしてトランクスは身体を起こした。

「……………ん？ これは……………」

起き上がろうと床に手をついた時、トランクスは自分のすぐ近くにドラゴンボールが置かれていた事に気が付いた。

ドラゴンボールはトランクスの知る限り、全部で六種類存在している。

まず地球の先代の神が作り上げたドラゴンボール。同じく先代の神が、大魔王と別れる前に作ったダークドラゴンボール（別名は究極のドラゴンボールだが、究極という割に性能はスーパードラゴンボールよりも下だ）。

本場ナメック星のドラゴンボールに、最強の力を持つスーパードラゴンボール。未来世界復活の足掛かりとなってくれたシリアル星のドラゴンボール。

そして暗黒魔界の暗黒ドラゴンボールの六つである。

暗黒ドラゴンボールとダークドラゴンボールの名称が思い切り被ってしまったているが、一応別のドラゴンボールである。

究極の名を冠しているくせに超の下位互換な事といい、やはり願いを叶えた後に無意味に星を壊して第七宇宙中に飛び散るような奴は駄目だ。

そんな赤い神龍の駄目な子ぶりはともかくとして、この監獄惑星にはいずれのドラゴンボールも存在しないはずである。

しかし、そこは時空を股にかける犯罪者だ。どうせどこかの時代の地球から盗んで来たのだろう。

トランクスは少し考え、ドラゴンボールを上着のポケットに仕舞ってから立ち上がった。

しばらく歓楽街を歩いていると、何か邪悪な気が自分のいる方向に向かって真っすぐ移動している事に気が付いた。

何故自分の方へ来たのかは分からない。

意味などなく、適当に気を探ってきたのかもしれないし目的があるのかもしれない。

だがどちらでもいい。来るといふのなら、倒すだけだ。

やがて気の持ち主がトランクスの前に降り立ち、ニヤリと笑う。

「おいお前……ドラゴンボールを持っているだろう。出してもらおうか」

現れたのは羊顔……いや、山羊顔だろうか？ 地球に住んでいる獣人を思わせる隻腕の男であった。

いや、実のところ外見で性別は判別出来ないのだが、声質からして男と考えていいだろう。

トランクスは相手の強さを探り、そして顔を強張らせた。

気の強大さも警戒に値するが、それ以上に感じられる気が今まで感じた事もないほど不気味すぎる。

自分だから多少気分を害するだけで済んでいるが、気の感知を極めたりゼツ^姉とならば寝込んでしまうかもしれない。

「ドラゴンボールを集めて何をする気だ？」

「お前に話す必要はない。さあどうする、渡すのか？ それとも殺されてから渡すのか？」

相手の目的は不明だ。

ならば普通は、まずそれを聞き出そうと考えるのかもしれない。

戦いの天才である父ならば、戦いの中で敵の目的を聞き出す方法を瞬時に考える事も出来ただろう。

しかしトランクスは——違った。

「そうか……ならば、何も聞かずにお前を倒してやろう」

「……っ!？」

一瞬で超サイヤ人ブルーまでギアを上げ、気を爆発させて一気に踏み込んだ。トランクスはサイヤ人の血を引いている。

だが彼は悟空やベジータのように戦いを楽しんだりはしない。楽しもうとも思わない。

倒せる敵は倒せるときに倒す……いや、殺す。

そうしなければどんどん状況が悪化して行く事を、嫌という程に経験してきた。どんな切り札を隠し持っているかも分からない。もしかしたらパワーアップするかもしれない。変身出来るのかもしれない。仲間がいて合体出来るのかもしれない。誰かを吸収して強くなれるのかもしれない。

あらゆる不測の事態に備え、それが起こらないように先んじて倒す。

それが絶望の世界を生き抜き、トランクスが覚えた事だ。

あの地獄のような未来を潜り抜けたトランクスに甘さはない。

「はあっ！」

初手にて必殺。

背中にかけていた鞘から剣を抜き、一撃で山羊顔の男を両断すべく剣を振り下ろ

す。

それを男は咄嗟に避けるが、回避される事を想定していたトランクスの蹴りが男の腹を挟った。

「ぐおっ……」

男が呻き、吹き飛ぶ。

確かな手応えを感じながらも決してトランクスは気を緩めない。

男を追って加速し、更に容赦なく剣を薙ぎ払う。

それに対し男は後ろに下がりながら気弾を放つが、トランクスは気弾を手の甲で弾きながら減速する事なく距離を詰め、零距离で気功波を叩き込んだ。

爆炎が上がり、山羊顔の男が吹き飛んでから地面に落下する。

ダメージは……妙なほどに浅い。トランクスと相手の気の量を考えれば今の一撃で倒してしまえてよかったはずなのだが……。

微かな違和感を覚えながら、しかしトランクスは攻撃の手を緩めなかった。

何かされているのかもしれないし、何かしているのかもしれない。

どちらにせよ、何かをやらせる暇を与えてはならないとだけ考え、攻撃に意識を

集中させたのだ。

「くそっ……若造がいい気になりおって。いいだろう、俺の魔力を見せ——」

何かをしようとしていた男の言葉に耳を傾ける事なく、トランクスは更に踏み込んで剣を振るう。

魔力だの何だの言っているが、そんなものを見せて欲しいと言った覚えはない。見せて欲しいとも思わない。

見せずに黙して倒れる。それがトランクスが唯一、この敵に対して望む事だ。

一撃、二撃、三撃——避けるならば当るまでと続行し、やがて山羊顔の男の右の角が血飛沫と共に宙を舞った。

結論から言えば、トランクスの判断はこの上なく正解であった。

山羊顔の男——モロは魔力によって星の力を吸い上げて利用し、更にその力を我が物として喰らう事が出来る。

彼の能力の恐ろしいところは、人造人間19号や20号といった過去にもいたエネルギー吸収タイプの敵と違い、相手に触れずとも気を吸収出来るという点にある。単純な戦闘能力ではモロは超サイヤ人ブルーとなったトランクスには及ばない。

しかし時間を与えれば力関係はあつという間に逆転し、トランクスに勝ち目はなくなっていただろう。

故に、時間稼ぎをさせずに、会話にも一切付き合う事なく速攻をかけて倒す事こそがモロを相手にした時の最善手であり、トランクスは知らぬままにそれを実行していた。

「だああっ！」

剣撃を囫にし、モロの防御が緩んだ腹を思い切り蹴り上げて空へ吹き飛ばす。

それと同時に剣を地面に刺し、空中で身動きの取れなくなったモロへすかさず両手を翳した。

トランクスの気が一気に高まり、全身をドーム状の青い光が包み込んでいく。

「完全に消え去ってしまえ！」

叫びと共にトランクスから気功波が解き放たれた。

サイクロンブラスト——トランクスが持つ切り札のうちのひとつだ。

この技は敵を上空へ打ち上げ、姿勢を直す暇を与えずに最大出力の一撃で一気に消し飛ばす大技である。

攻撃の目標が空中なので加減する必要もなく、全力で打ち込めるのが優れた点だ。
「うっ、うおおおおおおおおおーッ！」

絶叫をあげながら、青い極光にモロが飲み込まれた。

気功波はそのまま空へと飛翔して惑星を覆う鎖へと炸裂した……が、残念ながら鎖にはダメージがなかった。

いや、破壊出来なかったのは鎖だけではない。

確かにサイクロンブラストの直撃を受けたはずのモロも、全身を酷く傷付けられながらも地面に落下し、まだ生き残っていた。

（ど、どういう事だ……？ 俺は確かに本気でやった……。

……いや、迷う暇はない！ 今度こそ！）

仕留めるつもりで放ったはずの攻撃に、耐えきれないはずのモロが耐えてしまった事に驚愕したのは一瞬の事。

次の瞬間にはすぐに気を引き締め直し、トランクスは剣を抜いて駆け出していた。戦いの中で迷いが生じれば、それは隙となる。だが思考を止めれば敵に足を掬われる。

迷うな、だが思考を止めるな。戦士として洗練された精神で己を律し、トランクスは次の手を即座に打つ。

理由は分からないが気功波では倒せなかった。

敵が堅かったのかもしれないし、気功波が弱まっていたのかもしれない。もしかしたら人造人間19号や20号のように気を吸収出来るのかもしれない。

どちらにせよ、気功波では決定打にならないという事実をトランクスは認識した。だがそれならば、剣で仕留めればいいだけの話。

気功波に耐える事は出来ても、身体を両断されれば無事ではいられない。

ここまでの戦いで、斬撃が有効な事は分かっている。再生する素振りもない。

ならばこの剣で——^{リゼット}姉が授けてくれて、過去のリゼットが強化してくれたカッチン鋼の剣で叩き斬る！

「はあああああっ！」

裂帛の叫びをあげ、超サイヤ人ブルーの青い気の上から更に白い気が放出された。

——バーストリミット。リゼットが編み出した界王拳の亜種に当たる技で、トランクスはこれを未来で復活した姉から教わっていた。

超サイヤ人ブルーとの同時使用は消耗が大きく、いざという時の切り札以外には使わないように姉から言われているが、この山羊男には妙な不気味さがある。

ここで決めないと不味いと、これまでの戦いで培った戦闘勘が告げている。

だから出し惜しみなしで仕留めなければならない。その決意の元でトランクスは剣を薙ぎ払った。

モロも恐怖したように顔を引き攣らせ、腕を咄嗟に出して防御する。

だがトランクスのパワーと剣の腕ならば防御した腕ごと斬れるだろう。

……そのはずだった。

「……………!?!」

剣を振りぬく直前に脱力感が全身を襲い、トランクスの変身が解けてしまった。それでも咄嗟に気の消費量の少ない通常の超サイヤ人に再変身して剣を薙ぐが、超サイヤ人ブルーのパワーを失った状態ではモロを仕留め切るには至らない。

トランクスの剣はモロの腕に食い込み、そこで止まってしまった。

「ぐっ……おおおお！」

モロが痛みに呻きながらも咄嗟に腕を突き出し、トランクスを引き裂こうと爪を

薙ぐ。

これを間一髪で、上着を破られながらも回避したトランクスだが、次の瞬間に足元からマグマが溢れ出した。

これをトランクスは即座にバックステップする事で避けて再度ブルーに変身しようとするが、やはり変身は叶わない。

「ど、どういう事だ……変身出来ない……!？」

「はあーっ、はあーっ……お、おのれ小僧……俺の魔力さえ万全であつたなら、お前如きの力など、もっと早くに吸い尽くしてやれたものを……」

モロは半分ほど切れかけた腕から夥しい血を流しながら、忌々しげにトランクスを睨んだ。

今や二人の力関係は逆転し、ブルーに変身出来ないトランクスよりもモロの方が上だ。

しかしモロはトランクスへ追い打ちをかける事はしなかった。

いや……というより、したくても出来ない、というべきか。

「ぐっ……ふ、深手を負いすぎた……ここでお前を殺すのは容易いが、治療をせね

ばその前に俺自身が死んでしまう……。い、命拾いしたな、小僧……」

今ならばモロはトランクスに勝てる。

しかしこの深手で無理に戦えば、トランクスに勝ててもその後に死んでしまうだろう。

モロはこんな所でトランクスと刺し違える気などさらさらない。

故に、ここはトランクスを仕留める事よりも自身の保身を優先したのだ。

モロは最後に見せ付けるようにドラゴンボールを手に持ち、嫌らしく笑う。

「はっ……い、いつの間に……！」

トランクスは慌ててドラゴンボールを仕舞っていた上着を見る。

すると上着は破れており、そこに入れておいたはずのドラゴンボールもなくなっていた。

あの爪の一撃の時か！ そう気づき、トランクスは悔しそうに顔を歪める。

だがその隙にモロは飛び立っており、奪ったドラゴンボールをわざわざ見せ付けた事すら、逃亡の為の時間稼ぎだったと遅れて理解した。

「ま、待て！」

飛び去って行くモロを咄嗟に追いかけてしようとするが、身体が言う事を聞かずに片膝をついた。

残念ながら、気を吸収されすぎた。

しばらく回復に専念しなければ、今のトランクスでは満足に戦う事すら出来ないだろう。

トランクスは己の未熟さに齒噛みし、地面を叩く。

こうして、監獄惑星で行われたトランクスとモロの対決は両者痛み分けという形で終了した。

モロ「おい、舐めプしろよ」

・原作ではベジータがモロの目的を聞き出す為にわざと加減して戦いましたが、トランクスはいきなりぶっ殺しに行ったので、ギリギリ引き分けに持ち込みました。サイヤ人としては珍しいトランクスの即殺スタイルは有能だと思います。

でもモロに比べればまだまだ青いので、出し抜かれてしまいました。残念。

いやまあ、カラーリング的にはモロの方が青いんですけど。

【戦闘力】

・未来トランクス…10億4000万

超サイヤ人ブルー+バーストリミット10倍…20兆8000億

再び戦場に戻って来た青い風のHOPE。

あれからも研鑽を続けていたらしく、実力が伸びている。

トランクスには『ブルーを完成させる』という発想がないので完成ブルーに至っていないが、復活したりゼットからバーストリミットを教わって習得している。

くオマケ・未来トランクスの世界の皆さんく

・未来リゼット…15億

バーストリミット100倍…1500億

「ゼノバースって何ですか？」

・セル…1000億

フルパワー（超3相当）…8000億

フルパワー+バーストリミット…1兆6000億

「ゴールデン化……？ ブルー？ 知らん変身だな……」

・未来悟飯…3億

超サイヤ人2…300億

「つ、強くなったなトランクス……お、俺は嬉しいぞ……」

・未来ピッコロ（一応先代と融合済み）…7億5000万

界王拳15倍…112億5000万

「……………ハッキリ言ったらどうだ？ 先代と融合して強くなりはしたが、それ

でも今の戦いについてこれるレベルではないと……」

・未来ベジータ…1900万

超サイヤ人…9億5千万

（※精神と時の部屋に入る前に真っ先に超13号戦で死んだ）

←

と、思ったがあの世でジャネンバ打倒の為に修行していた設定を忘れていたので
ブウ編基準まで上方修正。

・ベジータ…5億

超サイヤ人…250億

超サイヤ人2…500億

「俺達は強くなりすぎんだ……ぶっちぎりで……な……？」

※尚、それでもトランクスに届かない模様。

・未来ターレス…1億

超サイヤ人…50億

超サイヤ人（2段階目）…60億

「美味しいモノを食い旨い酒に酔う！ こんな楽しい生活はないぜ（戦闘放棄）」

総評——トランクスとセル以外戦力外

・セルだけは死んでおらず、時間が止まっていなかったので存分に修行出来た。
しかし本編の時間軸に來たセルに比べると修行相手に恵まれなかった分、やはり弱い。

後は未來リゼットはヘブンズゲートと物質創造が出来るのでサポーターとしてはそこそこ優秀。

カッチン鋼を創造して超能力で敵に向かって投げまくれば攻撃も出来なくはない。

ただし現代リゼットと違って回復魔法は使えないし、時間停止も習得していない。気の無限回復もない。

ちなみに現代リゼットと未来リゼットの最大戦闘力差は800倍。

未来リゼットが命を捨ててバーストリミット10000倍を発動してもノーマル（正確には常時アルティメット化）のままの現代リゼットにようやく善戦出来る程度。勿論現代リゼットは時間停止禁止という条件付きで。

（命を捨てた未来リゼット1兆5000億VS実質ノーマルのままの現代…1兆6000億）

インフレって怖い。

Q、未来リゼットはゼノバース使わんの？

A、無理。暴走せずに使えるだけのメンタル強度がない。

現代リゼットは悟空がいた事でゼノバースによる信仰の波すら制御し、悟空に超えられまいとする気持ちから自然とメンタルが鍛えられていたが、未来リゼットは

悟空が死んでしまったことや絶望の未来を回避出来なかった自己嫌悪で逆にメンタルが弱体化してしまっている。

ゼノバースに耐えるだけのメンタル強度が100必要とした場合、現代リゼットは120くらいだが未来リゼットは60くらいしかない。

ちなみに元々のメンタルは80くらい。

Q、あの世で修行しなかったの？

A、ターレスは地獄行きなので修行出来る環境になかった。

一応死ぬ前に精神と時の部屋で修行はしたので、本編のボージャック戦時と同じくらいの強さはある。

ベジータは対ジャネンバの為に一時的に肉体を与えられて修行出来た。

(多分特例として閻魔が一人だけ肉体を与えると認め、悟空が名指しでベジータを呼んだ)

リゼットは何も守れなかった失意から死後は戦闘放棄でずっと修行しなかった。

悟飯はそれに付き添う形で天国で過ごし、ピッコロも悟飯に付き合う形で修行せずにGTのように天国の花畑で座禅を組んで過ごしていた。

力の大会免除されてよかった……。

もし未来で力の大会があったら、トランクス、セル、セルジュニア×8というアホみたいなチームにするしかなかっただろう。

ジレンは……セルがジレンに触れた状態で瞬間移動をして場外まで連れて行けばワンチャン……。

第8話 悪のサイヤ人

バーダックと別れた悟空達一行は、当てもなくブラブラと徘徊していた。

この監獄惑星という場所はとも、外から気付かれないようにする為……つまりは外に気を漏らさないように出来ているせいなのか、気を感じ取りにくい。

モロのような禍々しい気の持ち主の存在すら、監獄惑星に近付くまで分からなかったほどだ。

一応何人か大きな気の持ち主がいる事は分かるのでそれを頼りに移動しているのだが、実際にすぐ近くに行くまではそれが強敵かどうかは分からないだろう。

「おい、貴様等……ドラゴンボールを持っているか？ 持っているならば、このボージャック様に渡してもらおう」

悟空達の前にまず現れたのは、懐かしのボージャックであった。

かつては悟空が心臓病の時に現れ、リゼット、ターレス、トランクス、ピッコロの四人がかりで何とか倒した強敵だが、今となってはもう大した脅威ではない。

ベジータが一步前に踏み出し、超サイヤ人へと変わった。

「おいカカロット、あいつは俺がもうぞ」

「まあ構わねえけど……あいつドラゴンボール持ってんのかな？」

「さあな。そんな事はぶっ殺せば分かる」

ベジータは以前にボージャックに屈辱を味わわれた過去がある。

故にこの戦いに名乗りをあげ、悟空も特に反論はしなかった。

ボージャックには哀れな話だが、今の悟空にとって彼はもう、戦いたい強敵ではなくなっていたのだ。

軽く地面を蹴ったベジータがボージャックの知覚出来ない速度で彼の目の前まで到達し、がら空きの顎へアッパーを叩き込む。

のけぞったボージャックの胸板へ両手をあてがい……そのまま、気功波で上半身を消し飛ばした。

残念ながら当然の結果だ。戦闘力に差がありすぎる。

下半身のみとなったボージャックの死体からドラゴンボールを回収し、軽く気弾を撃って死体を消し去る。

そうしてからベジータは悟空達の所へと戻った。

「流石です、ベジータさん」

「フン。あんなクズ野郎じゃ準備運動にもならん」

21号の賞賛を不愛想に切り捨て、しょぼんとした彼女の前を通り過ぎた。

悟空は落ち込んでしまった21号に笑いかけ、「気にすんな。ベジータはいつもあんなんだぞ」と慰めている。

これでとりあえず手持ちのドラゴンボールは二つ。

後は同じように五人倒して回収すればいい。

そう考えた所で、悟空はゾワリと鳥肌が立つのを感じた。

「……見ていたぞ。貴様等、強いな」

声の方向へと視線を向けた。

そこには20mほどの岩山が聳え立っており、その上に黒髪の男が立っていた。腰まで届く長髪はラディッツを思い出させるが、男から感じられる圧倒的な気の波動はラディッツなどとは比較にもならない。

凶暴さを感じさせる真紅の双眼が印象的な一方で、鼻と口はマスクのようなもので覆われており、更に身体も拘束具らしき服で押さえつけられている。

だがこんな拘束具など男にとっては何の意味もない。

赤黒いオーラを放出し、拘束具を引き千切る。

すると中から鍛え抜かれた肉体が現れ、その気の圧力に悟空達は表情を引き締め
た。

「俺と……戦え！」

大男が気を放出し、赤黒い気弾が四方八方へとばら撒かれた。

悟空は咄嗟にそれを手で弾くが、弾いたはずの気が腕に残留して悟空の気をかき
乱す。

まるでサイヤ人の本能に訴えるような……何でもいいからとにかく暴れたくなる
ような衝動が心を蝕んでいく。

だがその程度で正気を失う程、今の悟空の精神はやわではない。

気合を入れ直し、腕に纏わりついた気を振り払う事で精神への干渉を跳ねのけて
みせた。

『あーっはっはっはァ！ 気を付けた方がいいよ！』

大男の妙な力に警戒する悟空達だったが、そこに上空からフューの声が聞こえて

きた。

本人の姿は見えない。恐らく彼はこの惑星内ならばどこにでも声を届けることが出来るのだろう。

もしかしたら、探せばスピーカーのようなものがあるのかもしれない。

『そいつの名はカンバー……悪のサイヤ人さ。』

そいつの気は触れた者の心を壊す』

悪のサイヤ人……そう言われても実の所、いまいち悟空はピンと来なかった。

悟空の知る限りではむしろ、善いサイヤ人の方が遥かに珍しいからだ。

ラディッツはどうしようもない卑怯者だったし、サイヤ人自体が他の異星人の星を奪っては売り飛ばす連中だ。

ナッパもベジータも、今でこそ地球に馴染んでいるがかつては極悪人だった。

パラガスもロクでもない奴だったし、ブロリーなどは悪いサイヤ人の代表格にして象徴みたいなものだろう。

だからこの場での悪のサイヤ人、とは単純に悪いサイヤ人という意味ではあるまい。

彼が纏っているあの赤黒いオーラ……あれはかつてないほどに邪悪で濁りきっている。まるでクリアな神の気の正反対のような力だ。

ならば悪のサイヤ人とは、かつてサイヤ人の神と戦ったというサイヤ人の事なのだろうか？

カンバーはその本人か……あるいは、同じような力を持つというだけの別人なのか……。

「戦えだど？ いいだろう……このベジータ様が相手だ！」

ベジータが前に踏み出し、拳を腰に据えて気を高めた。

その姿を見て悟空は気付く。

ベジータはいきなり『アレ』になるつもりだ。

「はああああ……でやあああああああ！」

ベジータを中心に気が爆発し、青いオーラが彼を包み込んだ。

髪は超サイヤ人ブルーよりも更に鮮やかな青に変わり、オーラの中にキラキラとした輝きが混ざる。

瞳にも輝きが宿り、今やベジータはブルーと界王拳を合わせた悟空にも匹敵する

力を得ていた。

ベジータだけが辿り着いた超サイヤ人ブルーの更に上の領域、それがこの姿だ。

「あっ、おい！　ずりいぞベジータ！」

さつきボージャックを倒したのに、また勝手に突撃しようとしているベジータへ悟空が非難の声をあげるがベジータは一度悟空を見て薄ら笑いを浮かべただけで、そのまま飛び出してしまった。

早い者勝ち、という事なのだろう。

少なくとも、次は悟空の番なんて順番は決めていなかった。

高速で飛翔するベジータを相手にカンバーも身構え、二人の拳が衝突した。

「ヌウッ……これほどの力を持つ者がまだいたか……。面白い……気に入ったぞ！」

┌

ベジータの力にカンバーが驚きと喜びを見せ、丸太のような腕で反撃に転じた。その一撃をベジータもブロックし、両者譲らぬ攻防戦へと突入する。

二人の腕と脚が幾度もぶつかり、常人では音しか聞こえないだろう超高速の打撃戦が繰り広げられる。

「なんて奴だ！ そのままでベジータと互角に戦ってやがる！」

「……強いな……恐ろしいまでに」

サイヤ人の本領は超サイヤ人などに変身してから発揮される。

にもかかわらずカンバーは変身せずに、ベジータの最終形態を相手に渡り合っていた。

いや、渡り合うところではない。むしろ圧倒しつつある。

だが21号だけは不思議そうな顔で二人の戦いを見ていた。

「……変ですね」

「ん？」

「あのカンバーというサイヤ人……確かに通常状態とは思えない程の凄まじい力を感じます。」

けど、今のベジータさんと互角に戦えるほどなのでしょうか？」

21号の言葉に、悟空も内心で同意していた。

カンバーは強い。それは確かだ。

通常のままなのに、彼から感じられる気は超サイヤ人ブルーになった悟空に匹敵

していた。

大猿のようなあの赤い目から考えるに、通常のままでも大猿の力を発揮出来るのかもしれない。

だがそれを踏まえても、ブルーを超えた今のベジータならば圧倒出来る相手のはずだ。

悟空はベジータとカンバーの戦いを観察し、やがて何かに気が付いたのか口の端を吊り上げた。

「……そういう事か」

「え？ 何か分かったのですか？」

「多分な」

何故カンバーはブルーを超えたベジータと渡り合えるのか。

悟空はそのカラクリに気付いたようだが、まだ確証はないのか口には出さない。だが彼の優れた戦闘勘は既に、答えを出しつつあるようだ。

「貴様……サイヤ人か。サイヤ人でありながら何故尻尾がない!? サイヤ人の誇りを捨てたか！」

「確かに尻尾は捨てた。だがサイヤ人の誇りまで捨てた覚えはない！」

ベジータに尻尾がない事に気付いたカンバーがベジータを非難する。

だがベジータはそれを気にせず、両手に気を溜めた。

「ガンマバーストフラッシュ！」

ベジータが両手を突き出し、修行で編み出した新技を解き放った。

名前からしてファイナルフラッシュの強化発展形の技なのだろうが、構え以外がどう違うのかは悟空にも分からない。

青い気が洪水のようにカンバーへと殺到するが、カンバーは赤黒い気を爪のようにして薙ぐことでガンマバーストフラッシュを霧散させてしまった。

「何っ!？」

「ぬおおおおお！」

驚くベジータへ、カンバーが黒い気功波を叩き込んだ。

何とか避けるものの、僅かに掠ってしまいベジータが吹き飛ばされた。

地面を二度、三度と転がって倒れ、痛みに呻く。

超サイヤ人ブルー……そしてブルーを超えたブルーは神の気によって肉体が守ら

れているはずだ。

だというのに、まるでそれが意味を成していない。簡単に貫かれてしまっている。倒れたベジータへカンバーが追い打ちをかけようとするが……その前に悟空が立ち、不敵に笑った。

「やるなあ、お前。おい、今度はオラとやろうぜ！」

選手交代だ。

ベジータはまだやれると言いたげだが、先に早い者勝ちにしたのはベジータ自身である。

ならば悟空がカンバーと戦っても、それを咎める事は出来ない。

すぐにでもブルーへ変身すると思われた悟空だったが、しかし彼は何を考えたのかブルーにはならなかった。

髪が逆立ち、黄金に染まる。

全身をスパークが覆い、そして髪が伸び始めていた。

「はあああああああああッ！」

気が爆発し、一気に変身。

黄金に輝くオーラと全身のスパーク。長い髪に眼窩上が隆起した顔。

それは今となってはブルーより遥かに劣る変身であるはずの超サイヤ人3だった。

悟空のこの意味不明な行動にベジータどころかミラと21号も哑然とする。

ベジータがブルーを超えた変身でやられたのを悟空は見ていなかったのだろうか？

「おいカカロット！ 貴様、今さら超サイヤ人3だと……？ 舐めているのか！」

「いや、そうじゃねえさ。ちっと試してえ事があるてよ……まあ見てろって」

ベジータの非難にも余裕を崩さず、悟空が構えた。

それを見てベジータも口を噤む。

悔しいが悟空は馬鹿ではない……戦闘においては天才だ。

その彼が無意味な変身などするはずがなく、恐らく何かに気付いたという事なのだろう。

「だっ！」

悟空が飛び込み、カンバーへと打撃を放った。

カンバーはそれを肘で止め、すぐに反撃へ移る。

その拳を悟空が掌で受け止めて流し、空いている方の腕でカンバーの顔面を殴りつける。

だがカンバーはクリーンヒットを貰いながらも構わず右ストレートを放ち、悟空は跳躍して回避した。

カンバーの頭に手を置いて倒立回転し、カンバーの背後へと着地する。

足が地面に着くや、その足を軸に回転して回し蹴り。カンバーの脇腹へ蹴りを叩き込んだ。

だがカンバーは振り返る事なく悟空の足を掴み、片手で悟空を振り回した。

「ぬん！」

そのまま力任せに悟空を放り投げる。

すると悟空は飛びながらも後ろに気弾を放って速度を落とす、後方宙返りをして地面に手を突く。

そこから何度も後方倒立回転を決め、ある程度距離を空けた所で一気に踏み込んでカンバーへと接近した。

悟空とカンバーが高速で戦い、砂塵が舞う。

目まぐるしく攻守交替しながら高速移動し、消えては現れて一進一退の戦いを繰り広げた。

「これは……どういう事だ？ 何故超サイヤ人3で戦えている……？」

「パワーではカンバーという男が圧倒的に勝るが、孫悟空は勘と技術で補っているな。」

だが妙だな……先程のベジータの変身よりも、むしろ3の方が戦えているように見えるが……」

悟空の思わぬ奮闘ぶりにベジータとミラは、解せないという面持ちをした。

ベジータの変身したブルーを超えたブルーは、超サイヤ人3から見て三段階上の変身である。

強さにして数十倍にも及ぶ差があるのだから、あのブルーで勝てない敵を相手に3が戦える道理がない。

そんなものがまかり通ってしまえばパワーバランスが滅茶苦茶になってしまう。しかし事実として悟空は3でカンバーと戦えていた。パワーではかなり負けて

いるが、それでも戦いになっている。

やがて悟空は納得したのか、一度カンバーと離れて変身を解除した。

「やっぱそうか。オラ、おめえの強さの秘密が何となく分かって来たぞ」

「ほう?」

「おめえのその黒い気……オラ達が使う神の気とはまるで正反対だ。そいつが神の気を蝕んで相殺しちまってんだな。」

だからおめえの前じゃブルーも、それを超えたブルーもただの超サイヤ人になっちまう」

悟空の説明にベジータがハツとし、悔しそうに顔を歪めた。

超サイヤ人ゴッド、ブルー……そしてベジータのブルー。

これらはいずれも、神の気を纏った超サイヤ人である。

いわば神の気という鎧であり剣。それを身に付ける事で強さを増しているのだ。

だがカンバーの纏う悪の気は神の気の正反対に位置し、相手を蝕む。

この二つのエネルギーが触れ合う事で相殺し合って、神の気が意味を為さなくなっていたのだ。

そうなれば後はただのパワー勝負だ。神の気を貰かれたブルーはただ髪が青いだけの超サイヤ人でしかなく、パワー負けしてしまう。

恐らくはブルーである以上、二人がポタラやフュージョンで融合しても結果は変わらないだろう。

無論融合すれば単純に地力は上がるので、単体よりはいい勝負が出来るだろうが相性負けする事に変わりはない。

その事に自分は気付けなかったのに悟空はあっさりと見抜いてしまった。

それがベジータには屈辱だった。

「孫悟空、交代しろ！ お前の言う事が正しいならば、お前はそいつに勝てん！」
ミラが悟空に交代を呼びかける。

ミラならば神の気とは無関係の純粋な強さの勝負を挑む事が出来る。

フルパワーで挑めばカンバー相手でも十分に勝てるだろう……あくまでノーマルのカンバーにならば、だが。

だが悟空はミラの交代を受け入れなかった。

「まあ待ってくれよ。まだもう一つ、試してねえ事があるんだ」

悟空は尚も余裕の笑みを浮かべ、気合を入れた。

髪が逆立ち、今度は金ではなく青に変色する。

身体から青いオーラが立ち昇り、彼の身体を包んだ。

超サイヤ人ブルーへの変身だ。だがその変身はカンバーの前では普通の超サイヤ人と何ら変わらないとたった今悟空自身が言っただけである。

故に、これはただのブルーではない。

悟空を包む神の気が揺らめき、悟空自身の中へと回帰していく。

ブルーの神の気を外に放出するのではなく、完全に身体の内へと閉じ込める。

そうする事で超サイヤ人ブルーは完成するのだ。

そう、単純な話だ。神の気が悪の気と触れ合う事で相殺されてしまうならば……

触れさせなければいい。

「さあて……今度はさっきまでみてえには行かねえぞ？」

悟空が不敵に笑い、そして一瞬でカンバーの前へ飛び込んで痛烈な拳打を顔面に叩き込んだ。

【戦闘力】

・カンバー…2000億

大猿パワー…2兆

超サイヤ人…10兆

超サイヤ人2…20兆

超サイヤ人3…80兆

黄金大猿…200兆

・俺と戦えbot。台詞の三割くらいは「俺と戦え」しか言っていない気がする。強さが全く安定しない男。その振れ幅の大きさは下手をするとな歴代トップ。

ノーマルで界王拳ベジットブルーをあしらったかと思えば、超3で超4ベジット（ゼノ）にボコボコにされたり、ゴールデンメタルクウラにフルボッコされたりと非常に判断に困る。

漫画版では超3の状態で究極カミオレンに一撃でふっ飛ばされた。

（そしてその究極カミオレンはジレンにワンパンでやられた）

というか超サイヤ人3になって逆に弱くなってないか……？

ともかく、滅茶苦茶強いのは確か。

『元々魔人ブウ以上に強い奴が超サイヤ人になったらどうなるの?』という疑問の答えを体现したようなキャラと言える。

瞳の色などから、新ブロリー同様に常到大猿パワーを発揮している可能性が高い。しかし最終形態が黄金大猿なので人間形態のままだと超サイヤ人+大猿は出来ないっぽい。

大猿時の単純な戦闘力ならばジレンを上回るが、的がでかくなって小回りも効かなくなったので多分ジレンとタイマンしたら負ける。

【カンバーがノーマルのままベジットブルーを圧倒出来た理由】

メタ的に考えると、とにかく印象に残そうと描写を盛りすぎただけと思われる。初登場時はインパクト重視で『かつてない強敵!』みたいな扱いをしたものの、後にカンバーより上のハーツを出したことで相対的に弱くせざるを得なくなり、どんどん弱体化してしまったと思われる。

結果的には、最初にこいつを盛りすぎたせいでラスボスの究極ハーツが微妙になっちゃった。

しかしこれでは考察もクソもないので、このSSでは『カンバーの持つ悪の気のせい』という事にした。

カンバーの悪の気は相手を蝕む効果があるらしいので、それによって神の気が無効化されて実質ただの超サイヤ人になっていたとする。

こうなってしまうえばゴッドだろうがブルーだろうが竜闘気を無効化されたドラゴンの騎士のようなもの。

ベジットといえど戦闘力3兆程度であり、融合前に悟空がゴールデンクウラのゴールデンスーパーノヴァを超2の状態で叩き込まれたりしてダメージを受けすぎて弱体化していたと考えればノーマルカンバー（実際には大猿モードカンバー）と互角でもおかしくはない。つまりクウラが悪い。

一方でノーマルの400倍の強さのはずの超3カンバーを相手にベジットブルーと差がないはずのベジット4が圧倒出来たのは、神の気もクソもないただのパワーゴリ押しで、単純に戦闘力で勝っていたからである。

言ってしまうえばこっちは竜闘気とかなしにフィジカルがクッソ強い超魔生物ハドラー。

ちなみにここまでこじつけても、まだ素の戦闘力でベジットを上回っている。やばい。

【ポタラの性能が悪かっただけ説】

ヒーローズで悟空とベジータが使ったポタラが本来のポタラの劣化版だった可能性もある。

二人が使用したポタラはマイが界王神から預かって来たものだが、そもそも界王神のポタラはブウ戦で悟空とベジータに壊されてしまっており、とっくになくなっている。

（実際『GT』ではポタラはなくなっただまま）

『超』では何故か当たり前のようにポタラを付けているが実はこれは以前のものよりも性能が低い安物なのではないだろうか。

以前のポタラをガンダムとするなら、実はこの時のポタラはジム……いや、ザニーのようなものだったのかもしれない。

【お前を制御する】

もう一つ注目するべきなのが、一度黄金大猿になってフューによって強制解除さ

れた後のカンバーが明らかに弱体化していた事。

それまではベジットブルーと互角以上だったはずのカンバーが突然、ゴッドの悟空でもそこそこ戦えるレベルにまで落ちてしまった。

アニメのフューはカンバーの尻尾を切る事なく元に戻しており、彼の『制御する』という言葉はハツタリではなく本当に大猿のパワーを閉じ込めてしまったと考えられる。

つまりこの時点でノーマルカンバーの戦闘力は3000億。

しかしそれでもまだ悟空の超サイヤ人よりは圧倒的に強く、悪の気で神の気を相殺しているのは変わらないので、結局悟空はパワー負けしてボコられてしまった。

【ゴールデンクウラの攻撃はノーマルカンバーに効いてない】

……単純に金クウラが弱かったんじゃないかな？

まあ、付け焼刃の変身っぽいし……見た目は一番好きなんだけど。

ヒーローズアニメのクウラは大物感を出している割に、メタル化するまでちょっと弱すぎる気がする。

人気の為にとりあえず登場させてゴールデンにした方がいいものの、その後の活躍

を全然考えておらず、格を落としたりしないので高みの見物ばかりさせていたら結果的に何の為にいたのか分からなくなった的な、そんなスタッフの苦勞があるようなないような……。

あるいは命中の瞬間だけカンバーが超サイヤ人になっていたのかもしれない。

しかしこれ書くためにヒーローズのアニメ見返したけど、カンバー君、強さブレブレすぎるって……。

第9話 乱戦

悟空とカンバーの戦いは先程までと打ってかわり、悟空が圧倒的に優勢に進めていた。

完成ブルーになった事でパワーの差が逆転したというのも大きいが、それ以上に悟空はカンバーの動きを見切っていた。

カンバーは確かに強いのだが、それは力任せの野獣の強さであって戦士の強さではない。

それはかつて戦ったブロリーを彷彿とさせるものだが、ブロリーは悟空にとって既に過去の敵だ。

今更その二番煎じが出て来たところで脅威にはならない。

「ぬうううあああああ！」

カンバーが豪腕を振り回すが、悟空にとっては駄々っ子の癩癩と変わらない。冷静にカンバーの攻撃を避け、がら空きの腹に右の蹴りを叩き込む。

更に流れるように跳躍し、左脚の蹴りを側頭部へ。

そのまま回転——カンバーに背を向けつつ廻り、今度は顔面に右脚でローリングソバット。

カンバーはよろめきながら後ずさり、しかし体勢を崩しながらも気弾を放って悟空を牽制した。

だが悟空は右へ左へとフットワークを踏み、気弾を紙一重で避けながら最短距離でカンバーとの間合いを詰めた。

ならばとカンバーが右ストレートを放つが、それを読んでいたように悟空が跳び、空中で縦回転して踵落としをカンバーの脳天へめり込ませた。

まだ終わらない。今度は着地と同時にカンバーの顎を蹴り上げ、サマーソルトキック。

弧を描くように後方へ宙返りし、そのまま地面に落ちるよりも早くかめはめ波の構えへ移行した。

「波ああア——ッ！」

かめはめ波の青白い奔流がカンバーへ炸裂し、彼の巨体を後ろへと運んで爆発を起こした。

それを確認して悟空も着地し、軽く息を吐く。

これで仕留めたなどとは全く思わない。

何せ、こちらは完成した超サイヤ人ブルーなのに対してあちらはまだ超サイヤ人にすらなっていないのだ。

「ぬおおお……おのれえ！」

かめはめ波で巻き上げた爆煙が全て吹き飛び、カンバーが姿を現した。

その姿は先程までと異なり、黄金のオーラに包まれている。

やはり超サイヤ人への変身は習得していたらしい。

これで再びパワーは逆転し、単純な戦闘力ならば今のカンバーは悟空の倍近くに至っている。

だが悟空は尚も不敵に笑みを深め、むしろカンバーのパワーアップを楽しんでいるようだった。

「オオオオオオオッ!!」

カンバーが獣のように吠え、悟空へと迫る。

戦闘力が上がれば、必然的にスピードも上昇する。先程と同じと思ってかかれ

すぐに負けてしまうだろう。

だが悟空は落ち着いたもので、カンバーの拳を紙一重で避けていく。

いくらパワーがあっても当たらなければ問題はない。

悟空はカンバーの攻撃を掻い潜りながら顎に膝蹴りを放ち、更に顔面に気弾を放ってその反動で距離を取った。

結果は……無傷。カンバーにはほとんどダメージが入っていない。

戦闘力に倍の開きが生まれれば、ダメージを通す事も困難になる。

仮に戦闘力2000にも届かない者が命を捨ててありったけの力で攻撃したとしても、戦闘力4000の相手にとっては『少し驚いた』程度で終わってしまう事もあるのだ。

戦闘力とはそれほどに残酷で、どうしようもないものである。

しかしそれは戦闘力が絶対とされてきたフリーザ軍やサイヤ人達の間での話……地球育ちである悟空にとっては戦闘力など物差しの一つでしかない。

『物差しにすらならない』とまでは言わない。確かに優れた技術や身のこなしはパワーの差を覆せるが、しかし強靱なパワーが技術を捻じ伏せる事もある。

その事実を無視して、パワーを軽視するのは技術に傾倒しすぎた危険な考えだと悟空は考えている。

パワーも大事だし、技術も大事だ。そして無論、それらを制御する心も欠かせない。

心・技・体……この三位一体を、悟空は特に意識せずに完成させつつあった。

「グオオオオオッ！」

獣のように……というよりは獣そのものと思えない咆哮をあげ、カンバーが悟空へ迫る。

その動きは直線的であるが故に余計なものがなく、最短距離を突っ走る。

どんな攻撃を受けても微動だにしない圧倒的な生命力と防御力があるならば、回避も防御も考える必要がない。

一切の保身を捨てた攻撃は、全ての力を攻撃へ転化している分脅威的だ。

圧倒的な地力を持つカンバーが超サイヤ人になり、防御を捨てて攻撃のみに専念する。それは究極の暴力と呼んでいい。

だがそんな暴力の化身を前に悟空は余裕も笑みも崩さない。

決して舐めているわけでもなければ、脅威を感じていないわけでもない。その証拠に悟空の額には汗が光っている。

だがそれ以上に強敵との戦いが楽しくて仕方がないだけだ。

こんな事を考えてはいけないのだろうか……この場を用意してくれたフューに感謝したい気持ちだ。

カンバーの拳が悟空を貫いたと思われたのは一瞬の事。すぐにそれが残像であると気付く。

残像拳——高速で動く事でその場に残像を残して敵を惑わす亀仙流の初歩とも言える技だ。

古い手ではあるが、常に気を感じし続けているような相手でもない限りは意外とこれに引っかかる。

本物の悟空は残像よりも少し先の位置に立っており、拳を突き出した無防備なカンバーに足をひっかけた。

そのまま己のパワーと勢いでカンバーが体勢を崩し、悟空はカンバーの後頭部へ回し蹴りを叩き込んで飛ばす。

更に回転。両手に生成した気弾を遠心力に乗せて投げ、カンバーの背中で炸裂させた。

「ぬうう……小賢しい！」

並の敵ならばここで終わっていただろうが、しかしカンバーは大地に足を突き刺すようにして踏みとどまった。

カンバーのパワーとタフネスは常軌を逸脱し、フィジカルモンスターと呼んではいレベルに到達している。

彼は振り返る事なく右拳を高々と掲げ、力を集約させていく。

すると腕が一回り太くなり、血管が浮き出した。

「ウウウオオオオオオッ!!」

ただ強く、何よりも強く！

一切の小細工を捨てたフィジカルの怪物は己が最も信じる腕力から繰り出される渾身の一撃を監獄惑星の大地へと叩き込んだ。

すると大地が砕け、割れ、監獄惑星全体が大きく揺れる。

まるで地面全てが爆発したように爆ぜ、悟空の身体が宙へと放り出された。

その隙を逃さずにカンバーが飛び、全力の一撃を悟空へ放つ。

悟空も咄嗟に身を振って直撃を避けつつ、更に腕でガードした。

「ぐっ!？」

だが直撃を避けて尚、ガードして尚、そんなものは関係ないとばかりに衝撃が悟空の身体を貫き、吹き飛ばした。

放たれた砲弾のように悟空が後方へ飛び、そこにあった岩山へ衝突して反対側から飛び出す。

それでもまだ勢いは止まらず、いくつもの岩山を貫通した後に後方に回転して体勢を強引に立て直し、地面を掴むようにして勢いを削ぎにかかった。

ガリガリと地面を削りながら悟空が後ろへ押しやられ、200Mほど移動した後によりやく勢いが止まった。

「……ったー！ おうっ、イテテテ！」

止まる為とはいえ地面との間で擦る形になってしまった掌は腫れ、悟空は息をフーフーとかけて冷ます。

それから追いついてきたカンバーを見上げ、彼の強さを賞賛した。

「本当にやるなあ、おめえ……オラもワクワクしてきたぞ」

悟空はカンバーの強さに対し、恐れるどころかむしろ喜びを感じていた。

今となっては悟空と互角以上に戦える強豪など、そうはいない。悟空は宇宙規模で見ても強くなりすぎてしまった。

だからこそ、こうして自分と戦える強敵というのは得難いもので、心を高揚させてくれる。

「フン、小賢しい……が、面白い！ この俺とここまで渡り合える事を褒めてやろう。」

さあ、もっと俺と戦え！ 俺をもっと楽しませろ！」

「ああ……楽しもうぜ、カンバー！」

カンバーもこの監獄惑星で巡り合えた強敵に歓喜し、更に戦意を高めていく。

サイヤ人は戦闘種族だ。目の前に好敵手がいれば、とことんまでやり合いたくなる。

そこだけは善悪関係なく共通しており、悟空とカンバーは共に好戦的な笑みを張り付けていた。

しかし、これからが本番……というところで突如、悟空の変身が解けてしまった。悟空はこの事態に驚き、自分の両手をしげしげと眺める。

「おいカカロット、何をしてやがる！ ふざけている場合じゃないだろう！」

「……………」

「おい！」

「……いや、違う。そうじゃねえ……変身出来ねえんだ……」

まだ氣を使い果たすには早すぎるはずだ。

しかし悟空は何故かガス欠に陥り、ブルーを維持出来なくなっていた。

まさか、と思いベジータ達へ向けて声を張り上げる。

「おいおめえら！ おめえ等も氣が減ってんじゃねえか!？」

「何？ そんな事は……」

「いや待て……これは……」

悟空に言われてベジータとミラの顔色が曇った。

ベジータは試しに超サイヤ人になろうとしたが変身出来ず、ミラも若干のパワーダウンをしている。

「わ、私は特に何とも……」

21号だけは異常がないが、これは彼女が人造人間だからだろう。

あるいは、彼女の中の魔人ブウの細胞によって、滅多な事では気が減らない体質になっているのかもしれない。

どちらにせよ異常事態だ。理由は分からないが、全員の気が知らぬままに失われている。

そしてそれは悟空達だけではなく、カンバーにも言える事であった。

「ぬうう……小賢しい！ 俺の戦いの邪魔をするのは何者だ！ 姿を見せろ！」
カンバーが叫び、周囲を睨みつける。

するとそれに応えるように、岩の陰から一人の男が姿を現した。

それは山羊面の、片方の角がない男だ。

彼を見ると同時に悟空は確信する。

この星に来る前から感じていた気持ちの悪い気は、こいつのものだったのだ、と。

「ふふふ……すまん。お前達のエネルギーがあまりに大きいから、つい頂いてしまった。」

おかげで俺の力も大分取り戻す事が出来た……感謝するぞ」

『星喰いのモロ』は星を、そしてそこに住む生物のエネルギーを喰う事で自らの力へ変える事が出来る。

老いて残りの寿命が少なくなっていた彼にとって、悟空やカンバーのエネルギーはまさにご馳走だ。

直接吸い取ったわけでもないのに老いていた身体は若返り、生気が蘇って来る。トランクスとの戦闘で消耗した彼は、まず自らの力を回復させる為にこの監獄惑星の気を吸い上げた。

しかしその途中で、星よりも巨大なエネルギーがぶつかっている事に気づき、より多く奪う為にこうして近くまで来ていたのだ。

触れずとも相手のエネルギーを吸収してしまえるモロだが、それでもやはり直に触れた方が吸収効率がいい。

それと同じ事で、相手との距離が近い方がより簡単に気を頂く事が出来る。

「それに……」

モロは薄ら笑いを浮かべ、指を動かした。

すると悟空達の持っていたドラゴンボールが瞬間移動したように消え、モロの手元に収まった。

彼はそれを、悟空達が取り返す暇もなく飲み込んでしまう。

「あっ！ この野郎！」

「ククク……俺にドラゴンボールまでくれて、本当に感謝する」

「ちっ！」

ベジータがすぐにモロを敵と判断して気弾を発射した。

しかしそれはあまりに短慮というものだ。

モロは迫る気弾の前に逃げる素振りも見せずに、それどころか歓迎するように口を開けた。

すると彼の口の中に気弾が吸い込まれてしまい、モロの身体が更に若々しくなった。

「なっ、なんだと!？」

「ふふふ……美味しい。こんな上質のエネルギーは初めてだ。

俺を歓迎してくれるのか？ クククク……」

モロは直接触れずともエネルギーを吸い取る事が出来る。

だがやはり、直接飲み込むエネルギーは格別だ。

残念ながらベジータの攻撃は彼の言う通りに歓迎にしかなくなっていなかった。

「さて……他にまだ隠しているドラゴンボールはないか？ あれば今すぐ寄越せ」
モロが勝ち誇った顔で、まだ隠しているドラゴンボールがあるなら差し出すように要求した。

悟空達は変身すら出来なくなり、カンバーも多少パワーダウンしてしまっている。

この状況からならば己の優位は揺らがないと思っているのだろう。

絶対に勝てる自信があるから、モロはこうして姿を現しているのだ。

「ドラゴンボールを使ってこの惑星から脱出する気か」

「そんな事は自力で出来る。俺の願いは魔力の復活だ」

ベジータの問いに、勝利を確信しているモロは上機嫌で己の目的を話した。

悟空達の力を吸い上げて若返った今、モロが欲しいのはかつて大界王神に封じられてしまった全盛期の魔力だ。

この監獄惑星からの脱出も当然目的の一つではあるのだが、そちらはドラゴン

ボールを使うまでもない。

モロの言葉を肯定するように突如地面が罅割れ、上空の鎖に亀裂が走った。

「こんな星はエネルギーを吸い尽くせば自然と自壊する。そうなった後で悠々と脱出すればいい」

星喰いの名は伊達ではない。

どんな惑星だろうがモロにとっては餌に過ぎず、エネルギーを吸い尽くされた星は滅びるだけだ。

しかしモロのこの行動は、意図せずしてこの星の管理者の逆鱗に触れた。

「……おい……星を壊すなよ。誰もそこまでやれとは言っていない……！」

モロが監獄惑星に手を出したことで、怒りの形相で管理者——フューが姿を現した。

フューにとってこの監獄惑星は一生懸命作った大事な実験場で遊技場だ。

それをモルモットに壊されるのは、とても我慢出来る事ではない。

しかしフューの怒りを受けてもモロは何処吹く風だ。

「フッ……手を出した相手が悪かったな、フューよ」

モロの後ろから現れたのは、モロと一緒に銀河パトロールから脱走したコルド大王だった。

リゼットの破壊光から間一髪で救われたのはモロだけではない。

コルドもまた救われていたのだ。

そういう意味ではフューはコルドとモロにとって命の恩人に当たるわけだが、それを感謝するような心はこの二人にはなかった。

「……こりゃあちよつと不味いな」

一方、悟空達にとってこの状況はかなり不味いものであった。

思わず悟空が弱音を吐くのも無理はないだろう。

21号以外は全員パワーダウンし、その上で敵に取り囲まれてしまっている。

フュー、モロとコルド、そしてカンバーはそれぞれ敵対しているので必ずしも全員が悟空達へ向かって来るとは言い切れないが、それでもこれはかなり厳しい。

「悟空さん。あのモロという男とは、私が戦います。」

私はどうやら、あの男の能力が効かないみたいですから」

悟空達を庇うように21号が前へ踏み出した。

現状ではモロのエネルギー吸収が通じていない彼女だけがモロに対抗出来る存在だ。

しかし悟空は21号の戦闘を見た事がない。

……というより、21号はつい先日起動したばかりでそもそも戦闘経験そのものがないのだ。

人造人間なので最初からそうしたものはインプットされているのだろうが、それでも実際の経験とそれはやはり別物だろう。

性能を言えば、少し前まで戦友として肩を並べていたあのセルに別の人造人間を融合させて強化したものだから、単純に考えてセルの上位互換と考えていい。実力は保証されている。

しかしそれでも不安は残る。

「……わかった。けど、あんま無理はすんじゃねえぞ」

「大丈夫です。私は、皆さんを守る為に造られたんですから……こういう時こそ、お役に立たないと」

21号は地球やりゼット達を守る為に、セルの後任として造り出された人造人間

だ。

それは、あの未来のセルが果たしたくても果たせなかった事でもある。

セルが起動した時には既に全てが終わっており、守ると誓ったものを守る為の戦いが出来なかった。

故にこそ、己の後任である21号にその夢を託したのだろう。

21号もそれが分かっているからこそ、今こそ戦う時だと気を引き締める。

「お前のような小娘が俺と戦うだと？ 笑わせるな」

「若く見てもらえて嬉しいですけど……見た目で判断すると怪我じゃすみませんよ」
モロの嘲笑を浴びながら、何とか強気な姿勢を保って構えた。

しかし緊張しているのがバレバレであり、腰が引けてしまっている。

加えて緊張で唇が渴いたのか、舌で潤すという『私は緊張してます』という分かりやすいサインまで出してしまっていた。

しかし何故だろうか。モロには一瞬、21号のその行為が——美味しいスイーツを前にして舌なめずりしているように見えてしまった。

どうかしている、と自分で自分を笑う。

数多の星を捕食してきた自分が、あんな女を捕食者に見間違えるなど。

「おやあ？　僕を放って勝手に戦闘開始かい？」

まあいいや。それじゃ僕は戻るけど……もう星を壊すなよ！」

モロを叱る為に来たのに、肝心のモロが21号との交戦に入ったのでフューはやる事がなくなってしまった。

なので仕方なく帰ろうとしたのだが、そのフューの前に一人の男が立ち塞がる。

「……なあに、僕に何か用？　父さん」

「ああ……お前を、止めに来た」

フューの前に立ちはだかったのは、遺伝子上は彼の父であるミラだ。

フューがこのような歪んだ人格に育ってしまったのは、自分とトワに原因があるとミラは考える。

次代の暗黒魔界の王となるべくトワはミラを造り、更にそのミラの改良型として自身とミラの細胞からフューを造った。

しかしロクな教育をせず、愛も注がず、赤子のフューを置いて二人は暗黒魔界復活の為に過去へ飛び、そして様々な時代で戦いを繰り返していた。

いわば育児放棄だ。フューは両親から何も与えられていないし、何も教わっていない。

ただ、異常なまでの力だけを残してしまった。

力と全能感だけを与えられた、育児放棄された子供……そんな存在が歪まないはずがないのだ。

だからこそ……今までの自分が間違えていたと悟った今だからこそ、ミラは己の責任としてフューを止める決意を固めた。

「はははっ……今更だよねえ。僕の事なんか放って過去に行って好き放題してたくせに、やっと楽しくなってきた今になって邪魔をするっていうの？」

フューは飄々とした声で、しかし僅かな苛立ちを込めながら言う。

それにミラは返す言葉を持たなかった。

何故なら全て事実だから。あの時の自分はフューの事など一切考えず、ただ強い奴と戦う事しか考えていなかった。

だから言葉は無粋だ。無言で変身し、気を高めた。

「いいよ、わかったよ。そんなにやりたいっていうんなら……望み通り、相手して

あげるよ」

そしてフューもまた、腰の鞘から静かに刀を抜いて構えを取った。

【戦鬪力】

超フュー…50兆

超サイヤ人4の悟空…ゼノとベジータ…ゼノを同時に相手にしたり合体戦士ともそこそこ戦えたりするやばい奴。ふざけた態度とは裏腹に滅茶苦茶強い。

【フュー育児放棄】

あくまでこのSSの解釈。もっともヒーローズでも時空の穴にバイビーのフューを投げ込んでフューが荒野で独りで育っていた描写があったが……。

ゼノバースⅡの方のフューがまだマシだったのは、ダーブラ叔父さんが一応面倒を見てくれたおかげなのかもしれない。

第10話 乱入者

モロの相手を21号が引き受け、フューの相手をミラが引き受けた。

これで再び悟空とベジータはカンバー一人と対峙する形になったわけだが、残念ながら状況は好転していない。

モロによる気の吸収でパワーダウンしてしまっているのは変わらず、超サイヤ人になる事すら出来ない。

パワーを奪われているという点ではカンバーも同じなのだが、カンバーと悟空達では内包している総エネルギーの容量が違う。

悟空を10とするならばカンバーの気は1000を上回る。仮に両者から9を吸い取ったならば悟空は一割まで弱体化してしまうが、カンバーは991になるだけで、余裕で戦闘を続行出来てしまう。

しかも最悪な事に、現在進行形でまだ吸われ続けている。

モロのエネルギー吸収は対象と向き合う必要すらなく、星から吸い上げているだけで自動的にその星にいる者のエネルギーも奪ってしまうのだ。

今はまだ弱体化しただけだが、この状況が続けば立っている事すら困難になるだろう。

「おいカカロット、仙豆は持って来ていないのか!？」

「一応持って来てるけどよ……モロを何とかしねえと仙豆を使ってもな……」

「だがこのままでは戦うどころではないぞ!」

今回の監獄惑星への誘いに応じた際、悟空は念の為に仙豆を多めに持って来ていた。

確かにベジータの言うように仙豆を使えば体力を回復する事は出来る。

だがモロの吸収は続いているのだから結局はすぐに元に戻ってしまうし、自分達が回復すればするほど、モロにエネルギーを与えてしまうのだから21号を不利にしてしまうだろう。

目先の事ばかりを考えて回復を続け、それが原因で21号がモロに負けてしまえば最悪だ。

だから悟空は仙豆の使用に踏み切るかどうかを考えていた。

「クククッ……どうやら回復手段があるようだな。」

いいぞ、いくらでも回復するがいい。その分だけ俺のご馳走が増えるだけだ。あれだけ美味しいエネルギーならばいくらでも食べたいくらいだ」

モロは上機嫌に話し、悟空達に回復手段があるならば回復しろと促した。

エネルギーを食うモロにとって悟空達のエネルギーはまさに極上のご馳走だ。

あれだけ老いて死を待ただけだった老体が若返る程に悟空達のエネルギーは素晴らしい。

悟空達が回復すればするほどモロが喜ぶ……とはいえ今のままでは戦うどころではない、というベジータの言葉はもっともだ。

ならば仙豆を使い、短期決戦でカンバーとモロを倒す以外にない。

悟空は仕方なく仙豆を使おうと、いつも仙豆を入れている小袋へ手を伸ばし……そこでベジータが、ふと何かに気付いたように表情を変えた。

「……待てよ。仙豆……そうか、仙豆か！」

おいカカロット！ 俺に仙豆を全部寄越しやがれ！」

「え？ いや、全部は流石に欲張りすぎだって……」

「そうじゃない！ いいから早くしろ。間に合わなくなっても知らんぞー！」

突然のベジータの要求に悟空は困惑する。

しかしベジータの戦いのセンスは認めていた。

この場面でベジータが無意味に仙豆を要求するとは思えず、袋ごと仙豆を渡した。ベジータは受け取ってすぐに仙豆を一粒口に入れると気を全開にして超サイヤ人ブルーに変身。

青いエネルギーを迸らせながらモロに向かって叫ぶ。

「おい貴様！ もっと俺達のエネルギーが欲しいんだってな！ ならば好きなだけくれてやろう！」

それは誰の目から見ても分かる、明らかな愚行だ。

一体何を考えているというのか……ベジータはモロに吸収されるだけだと分かっているはずなのに気を高め、そしてモロは嬉しそうに気の吸収を始めた。

みるみるうちにベジータの気が少なくなるが、ベジータの顔から笑みは消えない。むしろまるで楽しんでいるような素振りさえ見せながら、ギャリック砲の構えを取った。

それを見てモロは彼の狙いに気付いたように笑う。

「はっ！ どうせ大量の気を一気に吸わせて自滅させようってんだろ！？」

馬鹿め！ そんな子供だましに引っかかるか！ このまま吸い尽くしてくれる！」

「なるほど、やはり口からエネルギーを『食う』のか。しかもそのエネルギーを自分プラスするようだな」

「そういう事だ。つまり貴様の狙いは絶対に俺には通用しない」

「絶対に……だな？ ククク……避けるなよ……」

ベジータが笑みを深め、気を高める。

このまま撃っても食われるだけなのは明らか……しかしベジータに止めようという素振りはない。

「あいつの言う通りです！ あのまま撃っても無駄に吸収されるだけ……ベジータさんは馬鹿だ！」

この場の全員の気を吸収してもピンピンしていたような男が、ギャリック砲の一発を吸い込んだくらいで容量オーバーなど起こすものか。

ベジータのあまりに浅い作戦に21号が非難の声をあげるが、悟空は腕を組んで

事の成り行きを見守っていた。

「まあ任せてみようぜ。心配すんな……ベジータの奴は天才だ。きっと何か狙いがあるさ」

ベジータの戦いの才能は悟空も認めている。

彼は決して無駄な事など……結構過去にやらかしているが、それでもここぞという時の判断力は本物だ。

ベジータがああしている以上、そこには何か狙いがあるのだろう。

それはライバルであり、今でも競い合う男へのある種の信頼でもあった。

「ギャリック砲ーっ!!」

「馬鹿め！」

ベジータの掌から紫色の奔流が発射され、モロは大喜びで口を開いた。

それを見てベジータは口の端を吊り上げ、その場からダッシュした。

自ら発射した少し遅めのギャリック砲を抜いてモロの前に現れ、そして大口を開けたモロへ何かを投げた。

「そらっ、良いモンやるよ！」

何かがモロの口に入り、飲み込んでしまう。

それと同時にベジータは高速移動で退避した。

直後によろめいたモロの肩にギャリック砲が着弾し、モロが地面を転がる。

今のギャリック砲はただの魅せ技に過ぎなかったので見た目の派手さと比べて、実はそこまで威力はない。

だからモロのダメージも浅いのだが、問題はあの程度のギャリック砲を回避出来なかった事にあった。

「ぐ……お……!!？」

な、何だこれは……腹が……腹が膨れて……。

き、気持ちが悪い……！」

モロは腹を押さえながらヨロヨロと立ち上がる。

彼の腹は奇妙に膨れ上がり、まるで妊婦のような有様となっていた。

しかし変わったのはそれだけではなく、失われたはずの角や腕が再生してしまっている。

ベジータは一体何を彼に食わせたのだろうか。

その正体を悟空が悟り、ハッとしたような顔になった。

「そうか……ベジータ、おめえ！ 仙豆を食わせやがったな！」

「そういう事だ。随分腹を空かせているようだったからな……俺様からの大サービスだ」

ベジータがモロに食わせたのは仙豆だ。

それもあの様子を見るに一粒ではなく、かなりの量を同時に放り込んだのだろう。仙豆は便利な回復アイテムのように思われているが、本来の用途はカリン様の食料である。

一粒食べれば十日は何も食べなくても生きていけるほどに栄養に優れた仙豆だが、どんな薬も取り過ぎれば毒となる。

リゼットは少食であるという理由で仙豆を満足に活用出来ずに一度食べてしまえばしばらくは仙豆を再使用出来ない。

過ぎた満腹感はまだ辛いだけだ。

それと同じで、ベジータによって多くの仙豆を無理矢理食わされたモロは、満腹になり過ぎたのだ。

あれでは満足に動く事さえ出来ないだろう。

「どうだ、もう腹は減っていないだろう？ 感謝しろよ……俺の優しさにな」

「き、貴様あ……」

モロにとって気とは、『食う』という表現を用いていたように食料である。

故に、何も食べられなくなるほどに満腹にしてやれば気も吸収出来ないのではないのかとベジータは考え、賭けに出た。

仮に外れていてもモロを不調にする事は出来るはずだし、少なくとも今よりはマシになると思ったのだ。

結果は……大成功。モロのエネルギー吸収がなくなり、大分楽になった。

そもそも気を主食とするモロにとって、固形物はあまり食べ慣れた物ではない。今のモロは言ってしまうえば、胃袋にセメントを詰められて満腹感だけを与えられたようなものであった。

「やるなあベジータ！ ところでオラ達の分の仙豆はちゃんと残してるよな？」

「貴様に心配されるまでもない。まだ三つ残している」

いくらモロのエネルギー吸収を封じても、既に吸収されてしまった気はどうしよ

うもない。

なのでベジータは自分と悟空と、ミラの分の仙豆だけはしっかりと残していた。

「ミラ！」

「すまん、助かる」

まずベジータはミラに仙豆を投げ、ミラもそれをすぐに食べて回復する。

次に悟空に袋を返そうとしたのだが、その瞬間にモロの目が光った。

やられっぱなしでは終わらないという事だろう。

超能力でベジータの手から仙豆を入れた袋が弾き飛ばされ、地面に落ちて転がる。

そのまま岩の隙間に入り込んでしまい、どこにいったか分からなくなってしまった。

「いいっ!？」

「し、しまったあ！」

まさかの不意打ちに悟空が目を見開き、ベジータも顔を青褪めさせる。

油断大敵である。いつも変なところでサイヤ人は詰めが甘い。

モロが嘲笑い、そしていい加減待ちくたびれたカンバーは悟空達を厳しく睨んで

いた。

「おい……いつまで待たせる気だ。早く俺と戦え……」

「ま、待ってくれ！ ちょっとタンマ！ タンマ！ ちょっとだけ！ なっ!？」

「俺と戦え……」

悟空がヘラヘラと笑いながら両手を合わせてカンバーに待ってもらおうよう頼むが、カンバーは聞く耳持たずだ。

むしろ彼にしては十分待った方なのかもしれない。

どちらにせよ、このままカンバーとの戦闘が再開されれば悟空とベジータに成す術はない。

まさに絶体絶命の危機……だが突如として上空から何かが飛来してカンバーを吹き飛ばした。

『悟空君、無事ですか？』

カンバーを吹き飛ばして降り立ったのは、白く輝く……というよりは本当に真っ白なりゼットだ。

少なくとも生身ではないだろう。

悟空はすぐに、ここにいるリゼットが本物ではなく気で創られた分身であると見抜いた。

「お、おう、何とかな。神様は……そりゃあ気の分身か」

『ええ。ここにいる私は本体ではありません。しかし援護くらいならば出来るはずです』

今ここにいるリゼットは本人ではない。ただの爆発しないゴーストカミカゼアタックだ。

しかしゴーストカミカゼアタックが自我を持ち、話せるのと同様にこの分身も会話をする事が出来る。

加えて大量の気を注がれたこの分身は悟空の完成ブルーを上回る戦闘力を有していた。

そして本体もこの分身を通してこの映像を見ているので、実質的には弱体化したりゼット本人がいるのと変わらない。

ただし本体と違って、所詮は分身に過ぎないのでやられてしまっても全く問題がないというメリットがある。

「また新しい奴が来たか……だが貴様が誰であろうと関係ない。

ここに来た以上は、力だけが物を言う。さあ、俺と……戦え！」

男だろうと女だろうと、ここにいるならばカンバーにとっては敵だ。

ならばやる事は一つ……ただ、闘争あるのみ。

サイヤ人の凶暴性と好戦性を極限まで備えたカンバーの頭にあるのは、『闘争』の二文字のみ。

それ以外は興味がないし、万事どうでもいい。

大事なのは相手が強いのか弱いのか。自分を楽しませてくれるのか。ただそれだけだ。

カンバーの興味が分身リゼットへ向かい、悟空はこれを好機と考えた。

「悪い神様、しばらくそいつを抑えててくれねえか？」

『ええ、構いませんが……何かあったのですか？』

「仙豆をどっかに落としちゃってさ。モロって奴に気を吸収されちゃってっから、このままじゃ戦えねえ」

『なるほど、気の吸収ですか。道理で……』

悟空の説明にリゼットが納得し、頷いた。

実はこの星に来た時に、何かに引っ張られるような感覚があったのだ。

ならばまず倒すべきはモロである。

とはいえ、そのモロは今は21号が相手しているのでリゼットの相手はカンバーしかない。

というより誰かがカンバーを抑えておかないと悟空達が負けてしまう。

元々援護用にこの分身体は送り込まれたのだから、ならばその役目を果たすまで。リゼットはカンバーを前に静かに一歩踏み出し、構えを取った。

「行くぞォ！」

カンバーが走り、一瞬でリゼットとの距離を潰した。

圧倒的なパワーに支えられた踏み込みは、そのまま凄まじい加速となってカンバーの巨体を弾丸のように放つ。

リゼットはそんなカンバーを軽く、蠅でも追い払うかのように手の甲で叩き、力のベクトルを僅かにずらした。

するとカンバーはまるで自らリゼットを避けるように軌道を変え、明後日の方向

にあった岩山へと自身のパワーとスピードで突っ込んでしまった。

リゼットは何か特別な事をしたわけではない。正真正銘、ただ払っただけ……横から力を加えたただけだ。

カンバーが吹き飛んだのは、カンバー自身のパワーとスピードが原因である。

前に進む力が強い程、横からの力に対しては無防備となる。

鉄板をも貫く銃弾が、柔らかな観葉植物の葉に掠っただけで軌道を変える事もある。

高速で走る電車が強風に煽られるだけで倒れる事もある。

カンバーは、彼自身の前に進む力が強すぎるが故に吹き飛んでしまったのだ。

『……厄介ですね』

カンバーの初撃をいなしたりゼットは、己の手を見て困ったように呟いた。

カンバーの放つ悪の気に触れた手先が削れてしまっている。

彼の持つ悪の気は神の気を相殺し、消し去ってしまおう。

そして今のリゼットは神の気で創られた分身だ。つまり相性としては最悪というわけである。

しかし悪の気は何も一方的に神の気に勝るわけではない。

相殺——悪の気が神の気を消すように、神の気もまた悪の気を消すことが出来る。

つまり出力で勝っていればこちらが打ち勝ち、貫通させる事も可能なのだ。

加えてリゼットは通常の気で神の気を覆うようにその場で分身体の構成を変化させた。

これで大分マシになるだろう。

「ぬうう……妙なまやかしを！」

カンバーが起き上がり、リゼットへと飛び込んで拳を放った。

それを冷静に避け、手首を取る。

すると自ら投げられるかのようにカンバーが廻った。

小手返し——手首を極められているため、相手は脊髓反射で投げに身を任せてしまふ。

カンバー自身には自ら投げられた自覚などない為、摩訶不思議な現象にしか思えないだろう。

「があああ！」

不安定な姿勢のままカンバーが拳を突き出した。

リゼットならば容易く避けられるはずの一撃……だがリゼットは避けなかった。カンバーの拳がリゼットの腹を貫いたのと同時にリゼットがカンバーの両耳を叩いて空気を送り込み、鼓膜を破裂させる。

リゼットのダメージは見た目に反して皆無だ。

何故なら今ここにいるのは気で作り出した分身体。人の形をしているものの、臓腑も骨も肉もない。

したがって人体急所は存在せず、気が完全に霧散しない限りは腹を貫かれようが首を飛ばされようが頭を破壊されようが問題ないのだ。

ある種、疑似的な不死身といってもいい。

分身体であるが故にその戦力はオリジナルには及ばない。

だが分身体であるが故に……本体にある、『打たれ弱い』という弱点がこの分身にはなかった。

いわば攻撃力とスピードが下がった代わりに不死身と化したりゼットがこの分身体だ。

故にオリジナルでは出来ないような無茶な事も、この分身なら出来てしまう。

『はっ!』

地を踏みしめ、攻撃に使う各関節を連結加速させた。

背骨を含む全身27か所の関節を回転・連結加速させる事で、瞬間的に音速に達する正拳突きと成す。

勿論関節などないが、無いからこそいくらでも作る事が出来る。

そればかりか本来あり得ないほどの多関節を構築し、加速部位を増やす事すら可能だ。

それらを一齐に駆動して放たれる正拳は、普段とは比較にならない速度を生み出す。

もしもこの技術を使えばミスター・サタンですらマッハを超え、その衝撃で自らの腕を破壊してしまうだろう。

ならば元々マッハなど超越した速度で戦い、加えて肉体の破壊と無縁のこの分身ならばどうか。

「ぐおお……お!？」

リゼットの拳が炸裂し、カンバーが膝を折った。

そこに休む間を与えずに両手で突きを放つ。

その突きは高速で捻りつつ繰り出され、そしてカンバーに当たる事なく彼の首スレスレを通過して行った。

外したのだろうか？ 否、そうではない。

リゼットの今の一撃はカンバーの腕の神経を断ち切る為に放たれたものだ。

気を纏わせた指をカンバーの脊椎に突き入れ、そして振じりながら神経を切断した。

その動きが速すぎて外したように見えるだけである。

「……ッッ!!」

ブラン、とカンバーの両腕が文字通り糸が切れたように垂れた。

いくら力もうと意識しようと、腕はピクリとも動かない。

当たり前だ。神経そのものを切断されたのだから、脳からの指令自体が腕にまで届いていないのだ。

だがリゼットの攻撃に容赦はなく、光速の蹴りがカンバーの顎に命中して無理矢

理起き上がらせる。

続けてもう一度蹴りを放ち、鞭のようにしならせた多関節連結による超加速の一撃がカンバーの股間へとめり込んだ。

「~~~~~ッッ!!」

カンバーの巨体が浮き上がり、吹き飛ぶほどの威力で急所を蹴る。

しかもただの蹴りではない。多関節連結を用いて光速を超え、そして鞭打ちの痛み——リゼットが普段から多用する鞭打まで組み合わせている。

つまりこれは、超光速鞭打による金的というあまりにもえげつない一撃であった。そしていかにカンバーといえど、痛みがないわけではない。

飛び出さんばかりに目玉を剥き、顔から滝のような汗を流して空中で痙攣している。

そんなカンバーへリゼットが手を向けて物質創造術を発動した。

一人乗り用のポッドにカンバーの巨体を無理矢理詰め込み、リゼット自身は気身分身であるのをいい事に少女の姿を捨てて別の姿へと切り替わる。

先ほどまでリゼットだった分身体は次の瞬間にはカンバーと同等の体格を誇る伝

説の超サイヤ人ブロリーへと変わっており、ポッドを持ち上げた。

『ウオオオオオオオオオオオオ!!』

ご丁寧に声までしっかり変わっていた分身ブロリーがポッドを圧迫してカンバーの身動きを封じ、投げ飛ばした。

カンバーは気を解放して無理矢理ポッドを破壊して脱出するが、その僅かな時間で分身は姿を変えて懷に潜り込んでいた。

今度はジャネンバ。物質創造で作りに出した剣を装備した彼が、その刃の冴えを魅せる。

連続して刀が振るわれてカンバーの全身を刻み、またも変化。

第6宇宙の殺し屋ヒットとなり、カンバーの顔の急所を滅多打ちにする。

カンバーも負けじと反撃の拳を突き出す——が、それは分身体に命中すると同時に絡め捕られてしまった。

分身体は気付けば第3宇宙の誇るただならぬ肉体を持つマジッカーヨと化しており、カンバーを捕まえてしまったのだ。

そこから更に変化し、アラレちゃん。

頭突きの一発でカンバーを空高く吹き飛ばしてから分身体はリゼットへ戻った。そして空を舞うカンバーに掌を向けて物質創造術で止めを刺しにかかる。

『シリストレイント』

カンバーの両手両足にカチカッチン鋼の拘束具が嵌められた。

その重量は一つ20万トンで合計で80万トンだ。

以前ミラとの戦いで出した重りは4000トンだったので、実にその200倍の重さとなる。

悟空ですら通常状態ならば10トンで動けなくなることを思えば破格の重量だ。

重量が想像しにくければ、カンバーに十匹のゴジラがぶら下がっているとでも思えばいい。

『ギャロウズ』

続けてカチカッチン鋼で首に拘束具を創造し、それを念力で浮かせた。

するとカンバーの首に80万トンの負荷がかかり、首をへし折りにかかる。

カンバーの顔がみるみる青くなり、口の端から泡を吹いている。

だがリゼットはこのままカンバーが死ぬのを待つ気はなく、更なる追い打ちへと

移行した。

『千の剣よ、在れ！』

宣言と同時にカチカッチン鋼で創造した剣が宙に出現した。

分身リゼットはオリジナルと違い、気弾や気功波、気の具現化といった技は使わない。

使えない事はないのだが、分身リゼット自身が気で創られた分身であるが故に気の放出技は自らの身を削ってしまうのだ。

故に物質創造術で技を代用しているのである。

カチカッチン鋼の剣が一斉にカンバーに殺到し、このままカンバーを仕留めてしまふのかと誰もが思った。

だがカンバーはまだ全ての力を見せていない。

追いつめられたカンバーが遂に力の全貌を解放し、一気に気が高まった。

眉毛が消えて髪が伸び、全身をスパークが覆う。

彼を拘束していたカチカッチン鋼の拘束具が罅割れ、あまりのパワーに監獄惑星を覆う鎖すら砕け始めた。

「ぬううううおおおおおッ!!」

咆哮。

それと同時に拘束具が砕け、カンバーに迫っていた剣も一つ残らず弾き飛ばされた。

【紐切り】

高速で腕を振じりながら突き出し、敵の首に指を入れて神経を切断するヤバイ技。原典では眼の神経を切って失明させる技だが、首に視神経は通っていないのでこの作品では首の神経を切断して身体を麻痺させる技に変更されている。

【疑似不死身】

地獄先生ぬ〜べ〜に登場する陽神の術で作った身体のようなもの。

気が完全に霧散しない限り首を落とされようがバラバラにされようがノーダメージ。

リゼット最大の欠点であるライフ初期状態アーマーなしロックマンXレベルの打たれ弱さが消えているので単純な本体の下位互換ではなく、状況と相手によってはりゼット本体より強い。

また、気の分身体なので形状も自由自在でワールドヒーローズのギガスのように色々な戦士に変身する。

これにより本体には不可能な『体格で圧倒する』といった戦法も可能に。

第11話 最強の戦士

カンバーの放つ気によって監獄惑星全体が揺れる。

超サイヤ人3となったカンバーの気は、あのジレンに迫るほどに強い。

カンバーの着ている服が破れて上半身が裸となり、鍛え抜かれた身体を惜しみなく晒した。

「ヌウウウウウウッ!!」

カンバーが白目を剥いて吠え、神経を切断されたはずの腕を上げた。

彼の『悪の気』はそれ自体が腕や爪のように形状変化して腕の代わりを果たす事が出来る。

それを腕に纏わせ、動かぬはずの腕を強引に動かしてみせたのだ。

「オレト……タタカエエエエ!!」

理性を感じさせない声で叫び、リゼットへと突貫して拳の弾幕を放った。

リゼットはこれを柳のように避け、カンバーの首目掛けて腕を振りながら手刀を放った。

先程カンバーの腕の神経を切断したのと同じ技だ。

その時はリストレイント&ギャロウズによる絞殺狙いで、抵抗出来なくする事を優先して腕の神経を切断したが、今度はこの技でそのまま頸動脈切断からの殺傷を狙う。

『っ！』

しかし——刺さらない！

強靱過ぎるカンバーの首は侵入者の存在を認めず、皮膚で弾き返してしまっている。

そればかりか、カンバーに触れたりゼットの指先の方が消失してしまっていた。超サイヤ人3となった事で、カンバーの悪の気が完全にこの分身体の出力を超えてしまった。

故に、超サイヤ人3となって増大したカンバーの悪の気に触れるだけで身体が消えてしまうのだ。

今までは気の出力で上回っていた為に貫通出来ていたが、その力関係は完全に逆転した。

もう分身リゼットではカンバーに直接触れる事すら出来ない。

そのままカンバーは攻撃された事にすら気付かず、剛腕を振るった。

タイミン格的にはリゼットの手刀とほぼ同時。己の保身を考えないからこそカンバーの攻撃はタイミングを間違えれば相手の攻撃に合わせたカウンターとなる。

攻撃直後で回避出来ない必殺の隙だったが……しかしリゼットも今は生身ではない。

まるでカートゥーンアニメのギャグキャラクターのように身体がグニャリと不自然に曲がり、人には不可能な動きでカンバーの攻撃を避けてしまった。

トゥーンだから攻撃は効きまセーン。

そのまま消えてしまった指を復元しつつ距離を空ける。

「ガアアアアアアッ!!」

カンバーがリゼットへと真っすぐに飛び掛かる。

これに対しリゼットは物質創造でカチカッチン鋼の円盤を創り出した。

いや、円盤というよりは回転ノコギリといったところか。

刃の部分がギザギザになっており、相手を切る事に特化した形状となっている。

それを馬鹿のように正面から突っ込んで来たカンバー目掛けて、振り下ろすように投げつけ、回避すらしないう彼に直撃した。

カンバーに回転ノコギリがめり込み、足が止まる。

このまま左右生き別れになるとリゼットは確信した。

……が、ノコギリが回転しない。めり込んだまま止まってしまっている。

『……出鱈目ですね』

何が起こっているのかを察したりゼットは呆れ、またしても距離を取った。

カンバーが何故回転ノコギリで斬れないのか。何故刃が回転しないのか。

それは回転ノコギリがカンバーの筋肉で食い止められてしまっているからだ。

憤怒^{いかお}りの表情筋と！ 古代の上半身筋^{からだ}でツツ!!

恐るべきかな肉の宮……カンバーは面倒くさそうにノコギリを投げ捨て、そして何事もなかったかのように突撃を再開した。

酷い脳筋もいたものである。

一方でリゼットはうんざりしたような顔になり、自分はまたこの手の輩の相手をするしなければいけないのか、と思っていた。

こういう脳筋はリゼットの技術が最も通じる相手であると同時に、リゼットが最も苦手とする相手なのだ。

柔よく剛を制す。だが剛よく柔を断つ。

技術は暴力を制するが、行き過ぎた暴力は時に技術を捻じ伏せる。

技を砕くのは限らないパワーなのだ。

今のリゼットならばフルパワーを発揮すれば、超サイヤ人3のカンバーとも互角に戦える。

互角であるならば技術で勝るリゼットが一方的に勝つ事も可能だ。

悪の気による相殺も、悟空と同じく神の気を体内に閉じ込めたまま戦えば十分対処出来る。

だがそれは本体ならばの話。

ここにいる分身リゼットにそこまでの強さはないし、先述のようにカンバーに触れる事すら出来ない。

——しかしそれならば、直接触れなければいいだけの話。

物質創造術でカチカッチン鋼の刀を作り出し、筋肉の薄い部分……膝や肘などの

『角』に狙いを定めた。

「あつた！ あつたぞー！」

しかし、どうやらここで役目は終了のようだ。

悟空がようやく仙豆を発見し、喜びの声をあげたのだ。

しかしその声に反応したカンバーが振り向き、そして悟空へ向けて走り出した。今のカンバーはバーサーカーだ。目につく者全てに攻撃を仕掛ける。

それがたとえ回復していない相手だろうが関係ない。

「げっ!? ちょ、タ、タンマ！ 待ってくれ！」

流石に回復前の攻撃は不味い。

悟空が慌てるが、カンバーは構わず走る。

それを見てリゼットは静かに笑みを見せた。

『……仕方ないですね』

自分を超えたと思っていたのに、相変わらず変な所で手がかかる。

しかしそんなドジな所も合わせて、孫悟空なのだろう。

ならば仕方ない。ここは自分が捨て身で彼の為に時間を稼ぐとしよう。

そう決意し、リゼットはこの分身体で出来る最後の手段に踏み切る事を決めた。分身リゼットは気の塊である。

ならばその身を捨てれば一度限りの大技へと自らを変える事も可能なのだ。分身リゼットが発光し、人としての形を失う。

そこから放たれるのは、彼女が得意とする決め技の一つだ。

『Raging blast!』

自らを気功波へと変えて、分身リゼットがカンバーへと衝突した。

悪の気の防壁だろうが、それを上回る一撃を与えれば突破は出来る。

カンバーとぶつかる事で消失しながらも構わず進み、カンバーの身体を一気に上空へと運んだ。

そして――爆発。

空中でカンバーを巻き込んで光が爆ぜ、分身リゼットは完全に消滅してしまった。それを見届けた悟空は悔しそうに拳を握り、顔を俯かせる。

「くっ……！ すまねえ、神様……神様の死は絶対に無駄にしねえ……！」

拳を握り、震わせる。

無力感、喪失感……そうしたものが悟空の心をかき乱し、リゼットとの思い出がまるで昨日の事のように思い出された。

『そうですよ悟空君、私の死を無駄にしないで下さい！ さあ、早く仙豆で回復を！』

そしてたった今散ったばかりのはずの分身リゼットが悟空の隣で、腰に手を当てて何か言っていた。

繰り返すが分身リゼットは所詮気で作り出された分身であり、本体は今も監獄惑星の外にいる。

先に送り込んだ分身が消えた事を知ったりリゼットが、また新たな分身を送り込んで来たのだ。

つまり分身リゼットとは、本体が無事ならばいくらでも湧いて来る量産兵に過ぎない。

いわばメタルクウラのようなものであった。

「……お、おう」

この雰囲気ぶち壊しな即リスポーンには悟空も引き攣った笑みを浮かべるしか

い。

とはいえ、好機は好機。

悟空とベジータは仙豆を食べて体力を全回復させた。

モロによるエネルギー吸収も先程の仙豆ドカ食いが効いたのか起こらず、万全の状態で戻る事が出来た。

だが問題はここからだ。今のカンバーが相手では完成したブルーですら歯が立たない。

ブルーと界王拳の合わせ技は完成ブルーとの相性の悪さから普通のブルーでやる必要があるが、これでは悪の気によって相殺されてしまう。

ベジータのブルーを超えたブルーも同様だ。カンバーには通じない。

カンバーに勝つにはカンバーの悪の気の影響を受けずに戦い、なおかつカンバーを上回らなければならない。

そんな手は……残念ながら、一つしかなかった。

「おいカカロット……フュージョンするぞ」

「……ベジータ」

「腹が立つが、奴に勝つにはそれしかない」

もう単独では悟空もベジータも勝てない。

リゼットの本体が来れば三人で協力して勝てるだろうが、来るとモロの気を感じると同時に暴走してしまう可能性が高いので来る事は出来ない。

悟空にもベジータにも、一人でカンバーに勝ちたい気持ちはある。サイヤ人のプライドがある。

だがここで自分達が負けてしまえばトランクスを救出するところではない事も分かっていたし、カンバーがミラや21号に襲い掛かる可能性もある。

だからこそそのフュージョンの申し出だが、まさかベジータが言うとは……。

そう思い、悟空は嬉しそうに笑った。

ベジータが合体を好まない事は知っていた。いや、合体というよりも吸収などを含む『自分の力以外によるパワーアップ』全般をベジータは嫌っているのだ。

本来その者が持つ力ではない。だからフェアではないとベジータは考えている。ある意味でベジータは悟空以上にスポーツマンなのだ。彼の精神は武道家というよりは競技者アスリートのそれに近い。

リゼットやターレスならばそれこそ、『殺し合いの場にフェアも何もない』と断じてしまうだろう。

悟空もフェアな戦いを好む武道家だが、しかし悟空は案外これで相手が強くなる手段には目くじらを立てずに凄いものは凄いとは純粋に褒めることが出来る。

だがベジータはそうではない。彼はずっと納得がいつていなかったのだ。

本当は以前のブロリーとの戦いにも納得がいつていない。

ゴジータとなって相手を倒したのはベジータにとっては勝利ではなく敗北である。

「さあ、どうするんだカカロット！ フュージョンするのか、しないのか!？」

ベジータの問いに、悟空は堪え切れないかのように笑い声をあげた。

その反応にベジータが苛立つ。

「何が可笑しい!？」

「……いや、可笑しいんじゃないねえ。嬉しいんだ。フュージョンしてえってよ……おめえの口から聞けたのがよ」

悟空の喜びはベジータの成長に対してのものであり、そして彼が歩み寄ってくれ

た事へのものであった。

昔の、プライドを優先して常に一人で戦おうとしていたベジータからは想像出来ない姿だ。

プライドを捨てた？ いや、そうではない。

個人のプライドよりもっと大事なプライドを……何が何でも家族を、そして地球を守るというプライドをベジータは見付けてくれた。

それが悟空にとっては、本当に嬉しい事だった。

「勘違いするなよカカロット。俺は……」

「分かってるさ。自分の為じゃねえんだろ？ ましてやオラとの融合なんて本当は死んでもやりたくねえはずだ」

ベジータは決して自らの勝利の為に拘りを捨てたのではない。

自分一人の為ならば彼は喜んで死を選ぶ。そういう誇り高い男だ。

その彼が拘りを捨てたのは、この星にいる息子の為であった。

「最高だぜ、ベジータ」

せっかくベジータが歩み寄ってくれたのだから、断る理由などどこにもない。

悟空もベジータから離れ、そして反対側でフュージョンのポーズを取った。

二人はそのまま、一糸乱れぬ動きでフュージョンポーズを決め、指を合わせる。

「な、何だ!？」

レイジングブラストを受けた衝撃で正気に戻ったカンバーが戻って来た時そこにあっただのは光のドームであった。

圧倒的な気の余波によって発生した輝きの中から、先程までいなかった男が現れる。

逆立った青色の髪に額に垂れた一房の髪。

鋭い刃のようなその顔立ちは悟空のようであり、ベジータのようでもある。

メタモル星人の衣装を身に着け、戦士はカンバーを前に不敵に笑った。

「何だ貴様は……何者だ!？」

見知らぬ……だが凄まじく強い敵の出現にカンバーが戦慄き、その正体を尋ねた。それに対し融合戦士——ゴジータは静かに答える。

「俺か？ 俺は孫悟空でもベジータでもない」

言いながら、気がゴジータへと回帰し始めた。

ゴジータブルーの更に上の領域。完成ゴジータブルーへと変わろうとしているのだ。

瞬く間に神の気を全て取り込み、やがてゴジータは今まで以上の超戦士へと変わった。

「俺は……貴様を倒す者だ！」

そう宣言し、ゴジータの姿が消えた。

いや、消えたのではない。ただ速すぎて見えなかったただけだ。

ゴジータはカンバーの後ろに背を向けて立っており、そして直後にカンバーの胸板が無数の拳を受けたようにへこんだ。

「ぐおおおっ……！」

あまりの威力にカンバーのマスクから血が溢れ、膝が震える。

だがカンバーは倒れなかった。

身体がガクガクと震え、それがダメージによるものなのか恐怖によるものなのか、それとも歓喜によるものなのかはカンバー自身にも分からない。

だがどちらでもよかった。

今ここにいるのは敵だ。それも、今まで出会った事がないほどの素晴らしい強敵だ！

ならば、理解する事などそれだけで十分ではないか。

「ク、ククク……素晴らしい強さだ……！　これだ……これこそ俺が望んでいたもの！　お前こそ、俺の敵だ！　さあ……俺と……戦ええええッ!!」

「言われなくてもやってやるさ」

カンバーが喜びに顔を歪めて突撃し、ゴジータも正面からそれを迎え撃つ。

カンバーの比類なき剛拳を正面から受け止め、それ以上の威力で拳を叩き込む。よろめいた所を狙って跳躍し、顔面に膝蹴り。そこから後方宙返りしつつサマーソルトキックで顎を蹴り上げる。

空中で弧を描いて地面に降り、着地と同時に跳躍して独楽のように高速横回転した。

そして遠心力を上乗せした右の回し蹴り！　間髪を容れず更に回転して今度は左足の蹴りを打ち込む。

カンバーの巨体が派手に吹き飛び、いくつもの岩山を貫通して飛んでいく。

ゴジータはその先に一瞬で回り込んでカンバーを蹴り上げ、カンバーは空にあった鎖へと衝突してしまった。

「ぐおッ……」

鎖にぶつかって跳ね返りつつ、カンバーはゴジータへと気功波を発射した。

だがゴジータは怯まない。カンバーの気功波に手を当てて、まるでその側面を滑るようにして更に加速する。

そこから跳び、空中で三回捻り半を決めてカンバーの背後へ回り込んだ。

まだ気功波を発射している最中のカンバーを容赦なく蹴り、地面へと叩き落とす。しかしそのまま落下はさせない。またしても先回りし、落ちてきたカンバーを蹴り上げて再び空中へ輸送し、そしてまたも回り込んでダブルスレッッジハンマーで地面へ戻した。

カンバーが衝突した地面が爆ぜ、巨大なクレーターが出来上がる。

だがカンバーは震えながらも、まだ立ち上がってきた。

「ま、まだだ……！ 俺はまだ、全てを出していない！ ここからが、俺の本気だ！」

カンバーはそう言い、手の中にパワーボールを生成した。

狙いは大猿化か。そう読みながらもゴジータはカンバーを止めなかった。

同じサイヤ人だ。カンバーの気持ちは分かる。

負けるにせよ勝つにせよ、己の全てを出しきって戦いたいのだろう。

ならば迎え撃とう。そして、その上で捻じ伏せてやろう。

そう決意し、ゴジータはカンバーの変身を待った。

「弾けて、混ざれ！」

カンバーが空にパワーボールを投げ、月へと変える。

分身リゼットはこの時、パワーボールを破壊しようと捨て身レイジングブラストの準備をしていたが、いつの間にか近くに来ていたゴジータが無言で肩を掴んだ。

やらせてやりたい、という事なのだろう。

分身リゼットは困ったように肩をすくめ、そして口を尖らせた。

『サイヤ人の悪い癖ですよ、そういうの』

「悪いな。だがあいつとはとことんまでやってみたいんだ」

ゴジータはそう言い、カンバーを見上げる。

彼等の前でカンバーは見る見るうちに巨大化し、黄金の大猿へと変わっていったさあ、ここからが本番だ。

【戦闘力】

・ゴジータ…630億

超サイヤ人ブルー（完成）…378兆

・黄金大猿カンバー…200兆

Q、これもうビルスをぶっちぎってね？

A、まあ（あくまでこのSSでは）ぶっちぎってます。

このSSではビルスの戦闘力はシャンパよりちょっとだけ強い115兆に設定していますし……。

でもまあ、ビルスは力に上限がないと自称してるし、いけるいける。

多分ビルス是我儘の極意みたいに天井知らずに戦闘力が伸び続けると思われます。

しかもダメージを受けて興奮しないと戦闘力上昇効果が発生しないベジータと違って戦っているだけで上昇する考えると115兆はあくまで『10割』であって『全力』ではない……。

つまり、まだ数値は伸ばしていい……っ！

第12話 ゴジータ VS カンバー

『二人共……いえ、ゴジータ。気を付けて下さい。ブルーでのフュージョンは多分三十分も持続しません。』

もって十分……いえ、五分しか続かないものと思って下さい』

大猿と化したカンバーを相手に戦いに入ろうとしていたゴジータへ、リゼットからの忠告が飛んだ。

ゴジータはこれに意外そうに目を丸くする。

フュージョンは三十分持続するというのが彼の中の大前提であったが、それはあくまで普通に合体していればの話だ。

それは実際、滅多な事をしなければ縮まらないのだが悟空達のレベルは既にその『滅多な事』を簡単に起こせる領域にまで届いてしまっていた。

フュージョンの合体持続時間は三十分だが、リゼットの知る限りでは超サイヤ人の形態によってその時間は変わる。

超サイヤ人4ならば十分間。4よりも気の消耗が激しい3ならば僅か五分しか

合体は続かない。

いや、ゴテンクスの例を見る限り合体そのものは続くが超サイヤ人3は強制解除されてしまう。

完成したブルーに変身してのフュージョンがどれだけ続くのかは前例がない故に未知数だが、そう長く続くはずがないとリゼットは考えていた。

いかに完成させて欠点を克服したとはいえ、ブルーは元々超サイヤ人3と同じかそれ以上に燃費の悪い変身だ。

ならばもって精々十分……余裕を持つならば五分しか続かないという前提の上で戦った方がいい。

「どうやら遊んでいる時間は無さそうだな」

リゼットの忠告を受け止め、ゴジータは遊びを捨てた。

戦闘好きの性として、少しくらいはカンバーとの戦いを楽しみたい気持ちもあったのだが、どうやらそうも言ってられないらしい。

この合体中にカンバーを倒せなければ、この先厳しい戦いとなるのは間違いない。「悪いなカンバー。そういう事だから、さっさと終わりにしてやるぜ」

「ほざけえ！」

余裕たっぷりと言うゴジータへ、大猿カンバーが巨拳を繰り出した。

今の両者のサイズ差は人と羽虫のそれに等しい。

カンバーの重量は今や数十トンに上り、その超重量から繰り出される攻撃は戦闘力以上の脅威を持つ。

だが逆に、巨大化してしまったが故に隙も大きくなってしまっていた。

ゴジータは僅かに位置をずらして拳を避け、カンバーの腕の下に隠れるようにして飛ぶ。

腕を突き出したカンバーから見ればそこは己の腕のせいで死角となってしまう、ゴジータを見失う。

あつという間にカンバーの胸の前まで移動したゴジータが加速を乗せたドロップキックを放った。

するとカンバーの巨体が弾かれたように飛び、轟音を立てて地面へ倒れ込んだ。

「そらあっ！」

そこにゴジータが追いつき、カンバーの顔を踏みつけて跳躍……両手を虚空へ掲

げた。

そして振り下ろすと、気功波がまるで流星雨のようにカンバーへと降り注ぐ。

普段ならば敵の動きを牽制する為の弾幕も、カンバーの巨体ならばそのまま全て被弾してしまう。

カンバーの頭に、顔に。首に、胸に、肩に、腹に、足に、腕に、次々と気功波が炸裂した。

その気功波の中に紛れてゴジータ自身も砲弾のように急降下し、カンバーの腹へ踏みつけを行った。

「ぐっおおお!!」

するとカンバーが地面に埋没し、頑丈な監獄惑星の大地が砕けていく。

それでもカンバーは大猿ならではのタフさで動き、ゴジータを腕の中へ捕えた。だが握り潰そうと力を込めるも、ゴジータは笑みを崩さない。

額や腕に血管が浮かび、全身に力を込める。

するとカンバーの拳が内側から強引に押し開けられ、脱出されてしまった。そればかりかゴジータは素早くカンバーの指を掴み、力任せに投げ飛ばす。

「そうりゃあ!」

半円を描くようにしてキャンバーを大地へ叩き付け、今度は反対側へ。

再び半円を描き、キャンバーを痛烈に投げ飛ばした。

まだ終わらない。倒れているキャンバーの顔の前へ飛び、顎に足を引っかけてサマーソルトキックで宙へ蹴り飛ばす。

飛んでいくキャンバー目掛けて、まるで重力が反転したようにゴジータが空へ落ちた。足を空へ向けた姿勢で飛び、横回転。人間ドリルと化してキャンバーの背中へ突き刺さる。

「ぐあっ、が、ごっ、おおお!!」

キャンバーの口から鮮血が溢れ、胸からゴジータが飛び出した。

大猿の背中から胸にかけて貫いてみせたゴジータは空中で上下反転して体勢を戻し、気弾を投げる。

それはキャンバーの空洞となった胸に炸裂し、傷口をますます広げた。

だがこの程度でキャンバーは死なない。

大口を開けて口から破壊光線を放つ。

だがゴジータはその破壊の極光をあらう事か受け止め、勢いに逆らう事なく回転——遠心力を乗せてカンバーへと投げ返した。

「ぐあああああっ!？」

自らの破壊光線を浴びてしまったカンバーが絶叫し、地面へ墜落した。

ゴジータは追撃をかけるべくカンバーを追ひ、カンバーも負けじと口から気弾を弾幕として発射した。

それを前にゴジータは一切速度を落とさずに両手を身体にピタリと付けてスナップロールし、弾幕の中を突っ切った。

地面に不時着したカンバーがゴジータを叩き落すべく拳を繰り出す。

だが大雑把な拳打では互いのサイズ差もあってゴジータには当たらない。

ゴジータはカンバーの拳打を避けて腕に乗り、更にそこを足場にして疾走した。瞬く間にカンバーの顔の前まで来たゴジータを潰すべく、カンバーはもう片方の手で己の腕を叩いた。

それは腕に止まった蚊を潰すような動作であったが、しかし蚊というのは案外危機を察知して避けてしまうものだ。

ましてや今腕に乗っているのは最強の合体戦士である。

ゴジータは振り下ろされたカンバーの指と指の間に立ち、腕を組んでいた。

彼はカンバーと目が合うと口の端を吊り上げ、指を立てて「チッチ」と舌を鳴らす。

それからカンバーの側面へ瞬間移動して回し蹴りを放ち、カンバーの横面を思い切り蹴り飛ばした。

「はああああっ！」

飛んでいくカンバーへ一瞬で追いつき、今度は腹へ拳をめり込ませる。

そのまま浮上。カンバーごと空へ飛び、無防備な大猿の腹へ拳のラッシュを叩き込んだ。

「だありやりやりやりやりやあああああ！」

「ぐおっ、ごっ！ がは、ぐおっ！」

端から見ればカンバーが一人で宙に浮き、呻いているようにしか見えないだろう。両者の間にはそれだけのサイズ差があり、しかし小人の拳の一発一発がカンバーを打ちのめした。

肋骨がへし折れ、筋肉を貫かれ、そのダメージは臓腑にまで届く。

一発殴るごとにカンバーが浮上し、やがて鎖の付近まで来たところでゴジータがカンバーの上へ瞬間移動し、思い切り蹴り落とした。

「うああああああーッ!!」

カンバーが悲鳴をあげて落下し、何度目かも分からない轟音と振動が監獄惑星を襲った。

だがカンバーはまだ倒れていない。

落下の寸前に何とか姿勢を戻し、両の足で着地する事に成功している。

しかしそれすらゴジータは織り込み済みだ。真正面からカンバーに飛び込み、カンバーも拳で迎え撃つ。

一瞬の交差——ゴジータがカンバーの巨拳を搔い潜り、顔面に一撃を叩き込んだ。
「ぐああああっ!!」

カンバーが吹き飛び、ゴジータがその後を追う。

途中でゴジータの全身の気がバーニアのように噴き出して加速し、更にもう一発

!

「ぐおあ！」

カンバーが益々速度を上げて吹き飛び、ゴジータが尚も加速して追いついてもう一撃！

監獄惑星の大地をカンバーが飛び続け、進行途中にあった山に衝突して砕いてしまふ。

雖もみ回転しながら吹き飛ぶカンバーだが、彼の闘争心はまだ尽きていない。無理矢理姿勢を戻し、地面に足を付けて減速……飛び込んだきたゴジータへカウンターの右ストレートを放った。

だがゴジータの姿が消え、次の瞬間には両手に気弾を生成したゴジータが頭上から飛び込んでカンバーの顔面に気弾を炸裂させた。

——爆発。閃光。

大爆発をバックにゴジータがムーンサルトを決めつつ捻りを入れて着地し、カンバーに背を向けたまま片手を掲げる。

すると掌の上に気が凝縮され、虹色の気弾が生み出された。

スターダストブレイカー……ゴジータの切り札の一つでもあるそれは、邪悪な気

に対して強い威力を発揮する。

それを力の限りカンバーへ向けて投げつける。

すると虹色の気弾はカンバーの悪の気をも易々と貫通してカンバーへ炸裂し――
火柱となって監獄惑星の空へと昇った。

「ぐううあああああああー……ッ……!!」

カンバーの断末魔が響き、感じられる気が一気に弱くなった。

だがまだゴジータの攻撃は終わらない。

今度は腕をクロスして気を高め、両腕を上空へと掲げる。

するとカンバーの足元から青い気が柱となって立ち昇り、更にカンバーを蹂躪した。

「があああああああ！ あああああ……!!」

ぐ……お……!! ま……まだだ……俺と………ただか……」

光で焼かれながらも戦意を失わないカンバーを前に、ゴジータは両手の手首を合わせてかめはめ波の構えを取る。

この男はまさに戦闘意欲の塊だ。

指先一本でも動くならば、決して戦いを止めようとはしないだろう。

ならばするべき事は一つ。指先一本すら動かせなくなるほどに、完膚なきまでに叩きのめすだけだ。

完全な敗北を教えてやる事……それがゴジータが彼にしてやれる、ただ一つの事であった。

「か……め……」

青白い光がゴジータの手の中に凝縮され、放射状に溢れて周囲を照らす。

大地が鳴動し、これから解き放たれるエネルギーの強大さに惑星そのものが恐れ戦いていた。

「は……め……」

ますます輝きが強まり、上空の鎖が余波だけで罅割れ、砕けていく。

強く踏みしめた大地が罅割れ、砕けた瓦礫が重力から解放されたように宙を舞う。

そしてこの戦いを終わらせるべくゴジータの止めの一撃が解き放たれた。

「波ああああァー……ッ……!!」

かめはめ波が極光となって一直線に突き進む。

直接触れていないはずの大地が抉れ、溶解し、そしてカンバーへと直撃した。

先程よりも更に巨大な火柱が上がり、監獄惑星の空を貫いて宇宙まで光が溢れた。

「ぐがああああああああああー！ー！ー！！！」

カンバーの断末魔が響き渡り、そして爆炎の中で巨体が地響きを立てて崩れ落ちた。

炎の向こうに見えるカンバーのシルエットが小さくなっていき、感じられる気が限りなくゼロまで落ちた。

爆炎でゴジータが照らされ、腰の布が風になびく。

ゴジータは無言で炎を見詰めていたが、やがて静かに緊張を解いた。

戦闘を放棄したのだろうか？

いや、そうではない。戦いが終わった事を確認したのだ。

ゴジータの視線の先ではカンバーが人間に戻って倒れており、その全身は激しく傷付いている。

自慢の尻尾も最後の一撃で完全に焼き切れてしまったらしく、どこにも見付けられない。

ゴジータはふっと柔らかく笑い、そして確認するようにリゼットを見た。

それに対してリゼットも微笑み、「お見事」と称賛を送る。

戦いは終わった。

文句なしの、ゴジータの完全勝利であった。

★

「行きます！」

悟空達とは別の場所で、一つの戦いが行われていた。

白衣を翻して21号が果敢に攻め、モロは余裕の笑みでそれを避けている。

モロは気の吸収能力こそ脅威的だが、単純な強さはキャンパーと比べれば……い

や、悟空達と比較しても今のレベルから見ればそこまで怖い相手ではない。

仙豆の食べ過ぎによって動きが鈍っている今ならば尚の事だろう。

精々超サイヤ人2よりは強い程度で、魔法込みで考えても超サイヤ人3で十分

対処出来てしまうレベルに過ぎない。

しかし彼と対峙した瞬間から気の吸収は始まっており、知らず弱体化させられてしまう。故に実際はゴッドやブルーを上回リかねない……というのがモロだ。

だが21号にはその能力が通じず、しかも今は仙豆を無理矢理食わされたせいで食欲が出ない。

とはいえ、それでも21号と比べればモロが勝る。

ましてや今のモロはカンバーや悟空達の気を奪ったことで若返っており、素の戦闘力でも超サイヤ人3の悟空を上回っていた。

魔法込みで考えるならば、ゴッドクラスの強さはあると見ていい。

21号の拳打や蹴りを軽々と避け、掌を翳して超能力で吹き飛ばした。

「あうっ！」

21号は何も抵抗出来ずに宙を舞い、その先にあった湖の上を水切り石のように何度も跳ねてから水の中へ沈んでいく。

ここまでの僅かな攻防でモロは既に21号のアンバランスさを見抜いていた。格闘技術はある。そのレベルも驚くべき水準に達している。

だがそれだけだ。技術はあっても経験が不気味なほどに感じられない。

まるで今日出撃したばかりの新兵に無理矢理歴戦の兵士の技術だけをインストールしたようなチグハグさが21号にはあった。

しかも元々の気質が戦士ではないのだろう。

ここぞという場面での思い切りに欠け、モロから見ればまるで隙だらけであった。「フン……相手にならんな。やはり先程の感覚は俺の思い違いだったか」戦う前、モロは一瞬21号が捕食者に見えた。

だが蓋を開けてみれば、何ら大した事のない女だ。まるで恐れるに値しない。さっさと止めを刺してしまうか……そう考えた所で、湖から21号が飛び出した。だがその姿は先程までと異なり、髪が金色に染まっている。

加えて瞳の色も緑に変わっており、明らかに雰囲気異なっていた。

それは前任のセルも習得していた超サイヤ人への変身であった。

超サイヤ人への変身は、サイヤ人のみが持つS細胞の量が関係している。

このS細胞を体内で生成出来るのはサイヤ人のみだが、サイヤ人からS細胞を他種族へ移す事は不可能ではない。

セルと21号は様々な細胞を集めて造られた人造人間であり、当然S細胞も保有している。

故に彼女達はサイヤ人ではないにもかかわらず、こうして超サイヤ人へと変身す

る事が出来るのだ。

「はあああああっ！」

更に21号が力を上げ、前髪が逆立った。

全身にスパークが走り、放たれる気の波動だけで暴風が巻き起こる。

「ほう、少し力が上がったか？ どのみち俺の敵ではなさそうだがな」

モロは余裕を崩さなかったが、内心では警戒していた。

実の所、この時点で単純な強さでは21号はモロを大きく凌駕していた。

強さだけを語るならば今の21号はブルーの悟空に匹敵している。

モロにはまだ超能力があり、魔法もあるがそれでも両者の強さはかなり接近したと見ていい。

「たああああっ！」

21号が走り、モロへ近接戦闘を挑む。

モロもそれを正面から受け、満腹のハンを感じさせずに21号の攻撃を凌いでいた。

「やっ、はあ！」

「ぐ……」

拳打、肘打ち、膝蹴り、足払い、回し蹴り……様々な技を駆使して21号が攻撃し、モロのガードがこじ開けられていく。

やがて21号の蹴りが遂にモロの膨れた腹に命中し、彼を弾き飛ばした。

この戦闘が始まってから初のクリーンヒットである。

モロは吹き飛びながらも体勢を崩さず、地面に着地する。

しかし着地しても尚身体は止まらず、地面に二本の線を描きながら10Mほど後方へ移動させられてしまった。

「たああああ！」

ここが好機と見た21号が走り、モロへ向かう。

だがモロは素早く片手を上げ、それに呼応するように地面から星のエネルギーが迸って21号を遮る障壁と化した。

更に周囲の岩石が浮かび上がり、一斉に21号目掛けて飛来する。

21号を多少手強いと見たモロが正面からの打撃戦を止めて本来の戦い方……即ち、魔力と超能力を駆使した戦術へ切り替えたのだ。

「くっ！」

岩石を次々と破壊する21号だが、そこに星のエネルギーが襲い掛かった。

惑星の持つ力というのは侮れないものがある。

元氣玉はほんの少しずつ気を分けてもらっただけで凄まじい威力を発揮するし、住民含めた地球全ての気を集めれば、魔人ブウすら消滅させる事が出来るだろう。惑星は今となつては簡単に破壊されてしまう存在だが、だからといって惑星を破壊出来る者よりも惑星の力が劣るわけではない。

ただ、破壊するよりも命を育む事の方が何十倍もエネルギーを必要とするというだけの話なのだ。

それを無理矢理吸い上げて攻撃出来るというのは、実質的に全ての攻撃が元氣玉クラスだという事になる。

「はっ！」

モロが手を翳すと同時に星のエネルギーが隕石のように21号へ降り注いだ。

更に地面が割れてマグマが噴き出し、21号の逃げ場を塞ぐ。

後ろからも地面を割りながら星のエネルギーが迫り、どこに逃げても攻撃を受け

る状況に追い詰められてしまった。

逃げ場なし……完全に包囲された状況で21号は腕をクロスして更に気を高めた。
「はああああああーっ！」

気が爆発的に上昇し、21号に殺到していた星のエネルギーが跳ね返された。

その中心部で21号の眼鏡が砕け、眉毛が薄くなる。

全身を覆うスパークがさらに強まり、髪は膝に届くほどに長くなっていた。

超サイヤ人3——4やゴッドといった特殊な進化を除けば超サイヤ人の最終形態であり、21号が発する気の圧力は既に完成ブルーの悟空を超えている。

「またパワーが上がったと……!? くそ……こいつは一体何なんだ!？」

戦慄するモロへ、星のエネルギーを突っ切って21号が右ストレートを放った。

先程までと同じく軽々と避けるが、今度は21号もそれを予期していたようにストレートから肘打ちへ変えてモロの横面を殴打する。

更に左手でモロの首を掴み、逃げられなくしてから膝蹴り。

これをモロは咄嗟に受け止めるが、21号はすぐに次の攻撃へと移行してモロに防戦を強いた。

（上がっているのはパワーだけではない！ 判断の速さも、思い切りも、全てが上がっている！

こ、こいつ……慣れ始めているのか!? 俺との戦いで、この短時間で学習しているのか!?)

天井知らずに上がり続ける21号のパワーにモロは気圧されていた。

『敗北』……その二文字が脳裏を過ぎり、背筋が凍える。

そんなはずはない。そんな事はある得ない。

そう自らに言い聞かせるも、どうしてもモロは嫌な予感を拭い去る事が出来なかった。

【カンバー超サイヤ人4になれない問題】

超サイヤ人4に覚醒する条件は知っての通り『黄金大猿状態で理性を保つ』事である。

そしてカンバーは黄金大猿状態で普通に話せるので条件は満たしている。

にもかかわらずカンバーの最終形態は何故か黄金大猿であり、4 になれない。ヒーローズでもこの辺りは一切説明されていないのだが、理由として以下の三点が考えられる。

1、そもそも S 細胞足りてないんじゃない？

超サイヤ人への覚醒には S 細胞が一定量必要であり、S 細胞は穏やかでなければ増えない。

カンバーは元々伝説の超サイヤ人枠みたいなもので生まれつき大量の S 細胞を保有していて超サイヤ人 3 までは難なく覚醒したが、4 には足りていなかったのではないだろうか。

そして穏やかさと全くの無縁なので今も S 細胞を増やせず黄金大猿が限界になっている……という可能性がある。

Q、それ言ったら旧ブローリーどうなるねん？

A、ブローリーこそサイヤ人そのものだった……。

生まれつきの桁外れの S 細胞は、成長するにしたがって、親の私が恐怖を感じるほど、増殖し、凶暴化していった……。

私は、科学者にブロリーを自在にコントロールできる装置を作らせた……。

その結果ブロリーは穏やかになった。

そして穏やかになった結果生まれついでの特外れのS細胞は、成長するにしたがつて、親の私が恐怖を感じるほど、増殖し、凶暴化していった……。

2、理性がなさすぎる

一応会話は出来るものの、悪の気を見るとカンバーは常に暴走状態にあると言える。

殺意の波動に目覚めたリュウだって「心の臓止めてくれる!」「我、拳極めたり」「血がオレを呼んでいる」などの日本語を一応話すが、じゃああいつ理性保ってると言えるか? と問われるとかなり微妙。

なので超サイヤ人4の「理性を保っている」判定に引っかかっていないのかもしれない。

Q、旧ブロリーは?

A、ブロリーが暴走しているなどと、その気になっていたお前の姿はお笑いだった。ブロリーはあれが素でございます。

3、実はなれる？

実は超サイヤ人4になれるが、キンバは馬鹿なので「でかい黄金大猿の方が強い」と勘違いしており、大猿形態しか使っていない可能性がほんの少しだけある。

第13話 人造人間21号

人造人間21号は元々は17号や18号と同じ人間ベースの有機体人造人間であった。そのベースとなった人間はレッドリボン軍の科学チームに所属していた女性科学者だ。

見た目は若々しいがこう見えて既婚者であり、子を持つ母でもあった。

しかし研究中の事故によって彼女の息子の一人は原形を留めずに吹き飛び、そして彼女自身もまた生きている事が奇跡的としか言えない程の重傷を負った。

いや、重傷というよりはもうほとんど死んでいたと断言してもいいかもしれない。それほど凄惨な事故で、そして目を覆うような重体だったのだ。

しかし幸か不幸か、彼女の夫はレッドリボン軍内でも強い発言力を持つ科学者であつた。

義理人情などとは無縁なマッドサイエンティストであつたが、しかしそんな男でも妻と我が子に対してだけは愛情のようなものがあつたらしい。

男は原形すら残していなかった我が子をモデルとした完全な機械タイプの人造人

間を作り、そしてかろうじて元の形を残していた妻をベースに有機タイプの人造人間を作り上げた。

しかし人造人間化するにしても当時の技術では妻を蘇らせる事は出来なかった。主要臓器をあまりに多く失いすぎていたのだ。

そこで男は妻を冷凍保存し、いつの日にか彼女を蘇らせるべくコンピュータを造り上げた。

コンピュータへの命令は一つ……『スパイロボを使い、妻を蘇らせ得る細胞を集めて人造人間として完成させろ』。

しかしこの研究は結局、男が存命のうちは日の目を見る事は無かった。

代わりに、この技術を用いて多くの戦士の細胞を持つ究極の人造人間の構想が出来たり、そのプロトタイプとして13号、14号、15号の作成にも着手したがどれも本命ではなかった。

しかし男の死後、スパイロボットは彼の求めていた細胞を遂に発見した。

無限とも思えるような再生力を持つ魔人……即ち、ブウの細胞である。

スパイロボットは魔人ブウの細胞を採取し、そして21号へと投与した。

これにより、遂に長年沈黙を続けていた最後の人造人間開発プロジェクトが始動し、コンピュータが21号を作り始めたのだ。

魔導士すら制御出来なかった魔人ブウの細胞を地球人ベースの人造人間に与えれば、魔人の細胞が強すぎて人格すら侵食してしまうかもしれない。コンピュータはそう計算したが、しかし構わずに21号の開発を進めた。

彼が21号の夫から与えられた命令は21号を完成させる事だけだったからだ。したがって完成した後になんか、機械であるソレが考慮するはずもなかった。

このまま放っておけば21号は魔人ブウの能力を持つ人造人間として完成し、そして自分が作られた理由も分からぬまま魔人ブウの細胞に振り回され、食欲に支配されて悟空達と敵対していただろう。

しかしそうはならなかった。

未来から来たセルが研究所で眠っていた彼女を発見し、持ち去ってしまったからだ。

その後21号はカプセルコーポレーションに移され、この時代のセルと融合させ

られた。

融合したセルの人格は暴走しがちな食欲の人格と統合し、多少の落ち着きを得て眠りに就いた。

こうして21号は暴走の危険性を従来よりも大幅に下げ、最強の人造人間として完成したのだ。

だが暴走の可能性はあくまで減っただけだ。

21号の中には今も、他者を捕食しようとしているもう一人の21号が眠っていた。

★

攻防が長引くほどに21号の攻撃はより鋭く、より速くなっていた。

21号はセルと同じく数多の超戦士の細胞を受け継いだハイブリッド体であり、完成した時点で戦闘技術だけは持っていた。

だが元になった人間が戦士ではなく科学者であった為に、それを活かせる経験が彼女の中には無かった。

それがモロとの戦いの中で急速に成長し、覚醒を始めていた。

モロという強敵と出会った事で足りなかった経験を埋め、戦士として開花し始め

たのだ。

「やあああっ！」

地を蹴って走り、勢いを付けた飛び蹴りをモロへ放つ。

モロはこれを当然のように横に跳ぶことで避けて気弾を用意した。

攻撃を回避された21号が通過するのを待ち、それから背中に撃ち込んでやろうという心算だ。

だが21号はモロのすぐ横で急停止し、蹴りの軌道を変えてモロの顔面に足裏を直撃させた。

「ぐおっ……」

モロがよろめき、そこに21号が追い打ちをかける。

拳打をモロの胸板へ叩き込んでダウンさせ、すかさず跳躍して回転。両膝を折り曲げ、倒れているモロの胸へ痛烈にめり込ませた。

地面に蜘蛛の巣状の亀裂が走り、モロが空気と唾液を吐き出す。

そのままマウントポジションを取り、モロの顔面を右へ左へと殴打した。

モロもバリアを張って凌いでいるが、それでも全く防げていない。

「ぐっ……がはっ！ コ、コルドォ！」

身動きの取れなくなったモロが、唯一の仲間の名を叫んだ。

すると今まで黙っていたコルド大王が21号へ飛び蹴りを放つ。

かつては宇宙を支配下に置いていたコルド大王だが、今となっては大した相手ではない。

しかしその油断が不味かったのだろうか。コルドの蹴りが予想外の威力で21号の側頭部へ命中し、彼女を蹴り飛ばした。

「う、嘘!? コルド大王にこんなパワーがあるはずが……！」

21号は飛ばされつつも即座に地面に手を突き、側転をして体勢を立て直した。ダメージは無いが、しかし動揺はあった。

21号の持つデータでは、コルド大王のパワー値はたかだか2億程度だ。とても超サイヤ人3の自分を蹴り飛ばせるレベルではない。

今の21号の戦闘力は数値にしておよそ8兆、実に4万コルドに相当している。蹴り飛ばすどころか、蚊に刺されたほども感じないはず……それだけの絶対的な差があるのだ。

しかし事実としてそれが実現してしまっている。

ならばその原因はやはり、モロにあると考えていいだろう。

「まさかパワーの譲渡……？」

エネルギーを奪うだけではなく、それを誰かに与えて強くする事も出来るって言うの……!？」

「ご名答。これで形勢逆転だな」

モロがゆっくりと起き上がり、そしてコルドと並んで嫌らしい笑みを浮かべた。彼がわざわざ自分よりも遥かに力の劣るコルド大王を連れてきた理由がこれであつた。

モロはエネルギーを吸い上げ、それを味方に与える事で最強の兵を作り出す事が出来る。

ならばコルド自身は勿論として、コルドの部下もモロの駒に出来るといふ事だ。だからこそ、大勢の配下を持つコルドを連れていたのだ。

『永遠の美』によってその数を大きく減らし、今や地下勢力同然にまで落ちぶれたコルド軍であるが、それでもコルド大王が一声かければ宇宙中から集結するだろう。

それはモロにとつては貴重な戦力となる。

「ふははははは！」

コルド大王が高笑いしながら21号へ挑み、その豪腕を叩き付けた。

21号もこれを腕でガードするが、その直後に足元から星のエネルギーが迸った。エネルギーの奔流に吹き飛ばされ、空中で不安定な姿勢になる。

その隙を突き、コルド大王がダブルスレッッジハンマーで21号を強打した。

一瞬で地面へ叩き落され、しかし落ちた瞬間にまた星のエネルギーで吹き飛ばされる。

「……くっ！」

何とか空中で姿勢を直し、モロを仕留めべく飛翔した。

だが行く手を阻むようにまたしても星のエネルギーが噴出し、壁となって21号を止める。

いや、止めてくれるだけならまだマシだっただろう。

実際はその逆で、動きを止めてしまった21号の後ろに素早く回り込んだコルド大王に背中を蹴られ、無理矢理エネルギーの壁へぶつけられた。

「きゃあああああっ！」

エネルギーの奔流に晒され、21号の着ている白衣が焼けた。

地面に倒れ込み、その頭をモロが踏みつける。

「勝負あったな。貴様はエネルギーを奪って養分にする事も出来ん……ここですと死んでもらおうか」

モロが勝ち誇ったように笑い、気弾を生成した。

21号は悔しそうに歯を食いしばり、地面に指を突き立てる。

自分の弱さが情けなかった。悔しかった。

地球の皆を守る為にと作られ、セルに後を託されたのに役目も果たせずに負けようとしている自分が許せなかった。

だからこそ……まだ、終わるわけにはいかない！

「っああああああああ!!」

21号が叫び、彼女から気が放たれた。

まるで暴風のように気が荒れ狂い、モロを吹き飛ばす。

変化はそれだけに留まらない。

肌の色が濃い桜色へと変色していき、髪は白髪へと変わっていった。

服も破れ、即座に再構築されて別の衣装へと早変わりしていく。

「ま、また変わるのか……何なのだ、こいつは！」

際限なく上昇を続ける21号のパワーにモロがうんざりしたように言い、後ずさった。

彼の見ている前で21号の変化は尚も続き、最後に一際眩しい光が視界を覆った。やがて光が収まり、そこに立っていたのは先程までの21号ではなかった。

髪は白く、肌は桜色で尻尾まで生えている。

耳も尖り、その姿はもう地球人には見えない。

服装も先程までの肌を隠したものとまるで異なり、下半身は白いズボン、上半身は胸を隠す黒い布だけという大胆な恰好へ変わってしまった。

首、腰、腕、足は金色の装飾が飾り立て、その全体像は言うならば『女性版魔人ブウ』とでも言うべきものだ。

変化を終えた21号は静かにモロとコルド大王を見据え、そして自分に言い聞かせるように言う。

「私は……負けるわけにはいかないんです！」

「ふん、ほざけ！ 姿を多少変えようが、今の私の敵ではないわ！」

「待て、コルド！」

21号の変化をハッターと思ったのか、コルド大王が構わず突撃した。

彼に気を感じする能力はない。故に21号の変化を虚偽脅しと思ってしまったのだろう。

あるいはモロに与えられた力によって増長していたのかもしれない。

モロの制止を聞かずに飛び出したコルド大王は勝利を確信した笑みのまま21号へ挑みかかる。

それに対し21号はおかしな行動に出た。

距離が空いているにもかかわらず、何故か地面に腕を突き刺したのだ。しかしその奇行の答えは疑問に思うよりも早く出る事となった。

何と21号の腕が地面から飛び出し、コルドの顎を打ち抜いたのだ。

魔人ブウの細胞を持つ彼女は、その気になれば腕や足などいくらでも伸ばす事が出来る。

その機能を活かし、地面の中で腕を伸ばして奇襲をかけたのだ。

「それっ！」

体勢を崩したコルドへ、腰を捻って尻尾の一撃を放った。

尻尾は見た目に反してまるで鞭のようにしなり、コルド大王の身体を浮かす。

それを追って21号も跳躍し、更に腰を振って尻尾を打ち込んだ。

「やっ、はあ！」

続けて今度は後方に回転し、遠心力を乗せた尻尾の一撃でコルド大王を更に上へ飛ばす。

間髪を容れず赤いオーラを纏い、コルドへ体当たりをぶちかました。

「そこね！」

休む事なく左フックを打ち込み、横回転して尻尾を叩きつける。

そこから流れるように後方回転して尻尾で顎を跳ね上げ、またしても左フック。

そしてまた尻尾で頬を張り、廻りながら気弾を掌に出してコルド大王の腹へ叩き

込み、爆発させた。

「終わりよ！」

赤いオーラを纏っての体当たりを再び行い、今度はコルド大王を地面へと運んだ。頭突きと地面でコルドを挟み込み、彼が浮いた瞬間に指先に気を集中させて身体の内側へ向けて大きく振りかぶった。

そして切り裂くように指を外側へ薙ぐ——すると地面が爆発し、コルド大王を爆炎が包み込んだ。

その流れるような猛攻は先程までとはまるで別人で、次々と決まる攻撃は流麗ですらあった。

Wonderful!

「ぐああああああっ！」

コルドが絶叫し、地面に墜落した。

その身体は一応原形を残しているものの、全身が焼け焦げていてもう戦える状態ではなかった。

白目を剥き、生きているのかすら怪しい。

頼りにならない味方の醜態にモロが舌打ちし、21号を睨む。

「はあ……はあ……」

「……フン。どうやら大分消耗の激しい姿のようだな。たったあれだけの動きでも息が切れているか」

このまま21号との戦いが続くようならば撤退も考えるべきかもしれない。

そう考えていたのだが、21号の姿を見てモロは考えを変えた。

21号は確かにコルドを下したが、何故かもう息切れを起こしている。

恐らくは相当消耗の激しい変身なのだろう。莫大なパワーは得られるが長続きしないようだ。

そう判断し、このまま攻撃するべきだとモロは決断を下した。

「はあ……はあ……美味しそう……違う、駄目……我慢、しなきゃ……」

モロは気付いていない。

21号の息切れは消耗によるものではなく……自らの内から生じている、ある衝動を必死に我慢しているが故のものである事を。

【ワンダホー！】

正しくはWonderful。

『ドラゴンボールファイターズ』で30〜39ヒットのコンボを決めるとどこからともなく聞こえてくる合いの手。

他にもエクセレントやアメジシングといったものがある。

デストロイとフェイタルケイオウはない。

折角の格闘ゲーム出身なので少しだけ元ゲー再現をさせてみた。

コンボはアーク格闘ゲームの基本。

一. シネツシネツシネツシネツシネツシネツ
／＼トベウカヤ

テンゾヨ—テンゾヨ—テンゾヨ—ヒヤクヰツケン

一・ホクトウジ"ヨ—タ"ジジ

ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./
 ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./ ヲル -./

$\lambda \lambda$ $-\cdot \gamma \lambda \lambda$ $-\cdot \gamma \lambda \lambda$ $-\cdot \gamma \lambda \lambda$ $- \cdot \diagdown$ $- \cdot \diagup$ $- \cdot \lambda^{\circ} \lambda^{\circ} \lambda^{\circ}$

シ。ハ。ニ。ノ。ヲ。モ。ト。ス。ル。コ。ト。

!

第14話 急転

ゲロ「サイヤ人編の悟空をベースに、年齢から考えてそれまでのような急激なパワーアップは出来ないと予想して、サイヤ人編悟空のMAXの戦闘力32000の3750倍強いフリーザを遥かに上回る17号と18号より強い16号を雑魚扱い出来る完全体セルすら上回る最強の人造人間21号に妻を改造しました」

やっぱこいつおかしいよ……。

「はあっ……はあ……はあ……」

21号の異常は収まるどころか更に悪化していた。

目はギラつき、身体はまるで禁断症状でも出ているかのように痙攣している。

まるで隙だらけであったが、しかしその不気味さを前にモロはなかなか攻め込む事が出来ずにいた。

そしてその判断は半分正しかった。

モロは21号が弱っているかと思っているが、21号の気は減っていない。むしろ上昇し続けている。

ならば無防備に飛び込むのは得策ではない。

しかし半分は間違いであった。

飛び込まないのは好判断だったが、ここから逃げないのは悪手だ。

モロは21号が我慢している間に全力で離脱するべきだったのだ。

「駄目……もう、我慢出来ない！」

21号が叫び、気が爆発した。

彼女を中心に気が溢れ、地面が抉れる。

恐るべき事にまだ21号はフルパワーではなかったらしい。

桃色だった肌は紫に変色し、更にセルのような斑点まで浮き出した禍々しいものへと変貌していた。

目は先程までの理知的なものから一変し、白目だった部分が黒く変色してしまっていた。

瞳の色は血のような紅に変わり——そしてその顔は、獲物を前にした猛獣のそれ

へと変わっていた。

弱弱しくも優し気だった雰囲気はどこにもなく、目は恍惚として吊り上がり、口元は半月のように歪んでいる。

それは紛れもなく……捕食対象^エを見る目であった。

モロが最初感じた不吉な予感^サは決して間違いではなかったのだ。

「こ、こいつは一体……何者なんだ……」

モロは21号から距離を取るように後ずさる。

しかし21号はモロとの距離を詰めるように歩を進め、口を開いた。

「うふふふ……ああ、やっぱりとっても美味しそう。

こんなのを前にいつまでも我慢出来るわけじゃないじゃない」

21号の中に、もうモロへの恐れや警戒はなかった。

彼女にとって今やモロはただの、美味しそうな餌に過ぎない。

それだけの力の差が出来てしまったというのもあるが、その様子は最早先程までとは完全に別人であった。

そして事実、今の21号は先程とは別人と考えていい。

21号にはベースとなっている科学者の人格の他に、もう一つの人格が同居している。

それは魔人ブウの細胞を移植した際に生まれてしまった、自我を持つ食欲だ。

いわば食欲の悪魔とでも言うべきだろうか。食欲そのものであるが故にもう一人の21号は己の欲求に正直である。我慢というものを知らないし出来ない。

主人格すら乗っ取りかねないこの危険な人格は、この時代のセルと統合された事で一応リゼット達に害をなさないように調整されているしリゼットや悟空を餌と見る事はない。

だがモロは敵で、守るべき対象に入っていない。

ならば食べてしまってもいいではないか、と……こうして主人格を押しつけて表に出て来てしまったのだ。

「ち、近寄るな！」

モロが本能的な恐怖を感じ、星のエネルギーで壁を作り上げた。

しかし今の21号にはもう、そんなものは通用しない。

それどころか、エネルギーの壁を前に舌なめずりをするとおもむろに顔を突っ込

む。

少しして顔を上げた時には頬が膨らんでおり、モゴモゴと口を動かしてから飲み込んでしまった。

「ん……美味しっ。メインの前としては悪くないわね」

「……は？ え……な……食った、のか……!? 星のエネルギーを……」

「何をそんなに驚いてるのよ。まさかエネルギーを食べるのが自分だけとでも思ってたの？」

驚くモロの前で21号は軽々とエネルギーの壁を突破し、反応すら出来なかった哀れな餌の顔を掴んで持ち上げる。

今の21号の強さは、第六宇宙の合体戦士であるケフラすら大きく上回っている。モロのエネルギー吸収も通じず、それでいてモロとの間には何倍……いや、何十倍もの差が生まれてしまった。

こうなってはもうモロに勝ち目などない。

まさしく天敵としか言いようがなかった。

「貴方はどんな味がするのかしら」

舌なめずりをし、モロを掴んだ掌から怪光線を発射した。

桜色のその光線は魔人ブウが使うおやつ光線と同じものだ。

本人の好みを反映してか変化させるものはスイーツに限定されるが、基本的には一撃必殺の強力な技である。

おやつ光線を浴びてしまったモロは21号の手の中でエクレアへと変わってしまい、それを見て21号はうっとりと頬を緩めた。

「うふふ……いったきまーす」

まずは軽く一口。

ご馳走を一度に食べきるなんて勿体ない事はせずに、味わうように少量食べる。エクレアの五分の一ほどを齧り取り、ゆっくりと咀嚼して舌の上で転がしてその甘味を存分に味わった。

「っんー！ 最っ高！ 星のエネルギーが凝縮されてて、凄く甘しくて美味しい！ 点数を付けるなら、98点ってところね！」

本人にしか分からない事だが、スイーツに変えた際の味は対象の持つ気の質や量が影響している。

簡単に言えば強い者ほど美味しいという事だ。

しかし強ければいいわけではなく、例えば無理矢理量産しただけのクローンなどはあまり美味しくない。

モロは実力は微妙だったが、しかし星の力を蓄えているだけあって味わい深い。

21号も大満足の味とボリュームだ。

だが更に食べようとしたところで手の中のエクレアが暴れ、モロに戻って21号から離れてしまった。

「き、貴様……お、俺を喰ったのか……!？」

「あら、流石に魔法には強いね。もう戻っちゃうなんて」

モロは衰えたとはいえ、かつては宇宙を震撼させたほどの魔法の使い手だ。

その力をもって、エクレアにされた状態から自力で元に戻ったのは称賛に値するだろう。

だが喰われた部分が元に戻るわけではなく、モロからは片足が失われていた。

「その足じゃもう満足に動けないわね」

食べ損ねてしまったが、しかし21号は特に動じていなかった。

何故ならモロはまだここにいるのだから、またお菓子にして食べればいいだけの話でしかない。

クスクスと笑いながらモロへ近づき、指先を向ける。

「それじゃ、もう一回スイーツになってみましょうか。」

次はどこがなくなるのかしらね？」

「や、やめろ……」

モロの嘆願など勿論聞き入れるはずがない。

おやつに『食べないで』と言われたところでそれを止めるのかという話だ。

遥か昔にはモロ自身もまた、幾度も他者に対してやって来た事でしかない。

ただ、今回は食われる側だった……それだけの事なのだ。

21号は無情の笑顔でモロへの返答とし、再び指先から光線を放った。

「いっただきまゝす！」

★

監獄惑星が崩壊を始めていた。

モロによるエネルギー吸収に始まり、星のエネルギーの乱用。

更に大猿カンバーとゴジータの戦いの余波を受けて監獄惑星は限界を迎えつつあったのだ。

大地は罅割れ、町は倒壊していく。

至る所からマグマが火柱のように上がり、誰が見ても監獄惑星の寿命は後僅かしか残っていないかった。

「ああ……ああっ！ 僕の実験場が！ 監獄惑星があー！」

まるで泣き出す寸前の子供のような声をあげながらフューが空中で取り乱す。しかし今は戦闘の最中だ。

フューの隙を逃さずにミラが拳打を放ち、咄嗟に避けたフューの頬を掠った。

「酷い、あんまりだ！ 僕はただ実験を楽しんでただけなのに、どうしてこんな事をするんだ!？」

「さあな」

我が子の嘆きを無視してミラが一瞬でフューの上へ移動し、踵落としを決めた。何とか防御したもののフューの身体が地面へと急降下し、その後をミラが追った。二人は落ちながらも高速の攻防を繰り広げ、打撃の鈍い音が連続して響き渡る。

実力は驚くべき事にミラよりもフューが勝る。

まるで超サイヤ人のように髪を逆立てた彼は黒いオーラに包まれ、普段以上の力を発揮していた。

名前をあえて付けるならば超フューとでも言うべきだろうか。

「邪魔をするなよ！ こんな所で遊んでる場合じゃないんだ！」

実力で勝るフューだったが、戦闘は全くの互角であった。

それは彼の戦闘経験が浅いというのもあるが、それ以上に他の事に気を取られているからだ。

フューはミラとの戦いに全く意義を見出していない。

それよりも今は、自分の研究室がどうなっているのかの方が100倍大事だ。

しかしこうなった原因であるモロや悟空達を連れてきたのはフュー自身であり、ミラを連れてきたのもフューだ。

ならば全ては自業自得であり、同情の余地は一切ない。

「全くよく言うぜ。俺達をここに連れてきたのはお前自身だろうが」

後ろから聞こえた声にぞっとし、フューは咄嗟にその場から跳び退いた。

そこにいたのは呆れたような顔をして腕を組んでいるベジータだ。

隣には悟空と分身リゼットもあり、カンバーとの戦いが既に決着している事を嫌でも理解させられた。

更に状況はフューにとって悪い方向へと進み、新たな乱入者がフューの逃げ道を塞ぐように飛翔してきた。

「何だ、もう終わりにかけてんじゃないか」

「そのようですね。流石は悟空さん達です」

やって来たのはタイムパトローラーのバーダックとトランクスだ。

どうやら無事に合流出来たようで、ベジータは顔には出さないが未来の我が子の無事を見て安堵していた。

しかし安堵と同時に軽く驚いてもいた。

それは、トランクスの隣にいる見覚えのある緑の異形を視界に捉えたからだ。

悟空も驚きは同じだったようで、久しぶり……でもない戦友へと声をかけた。

「セル！ 父ちゃんの仲間って誰かと思ったらおめえだったんか！」

そう、トランクスの隣にいたのは緑色のセミ……ではなく、セルであった。

本来ならばいつの時代のセルか分からない所だが、気の巨大さから見ても共に戦ったセルと見て間違いはあるまい。

セルもそれを肯定するように笑う。

「久しぶりだな、諸君。元氣そうで何よりだ」

「久しぶりって……ついこの前別れたばかりだろ」

「そちらから見ればそうかもしれないが、私はあれから色々あってな……お前達と会うのは一年ぶりとなる。

しかし今は再会を喜んでいる時ではあるまい」

戦友との思わぬ再会に湧きかけたが、今はフューを追いつめている最中だ。

セルに言われて悟空も気を引き締め、フューと対峙した。

「観念しろ、フュー！ お前がこの惑星に集めた戦士は全員、元の時代に返した！」

トランクスが剣を抜き、フューに突きつける。

先程まではタイムパトローラーでもこの惑星から脱出する事は出来なかったが、それもゴジータとカンバーの戦いに加えてモロによる吸収とエネルギーの乱用で惑

星そのものが限界を迎えた事で事態が変わった。

フューがこの惑星に集めたモルモットの大半は既に彼等タイムパトローラーによって倒され、元の時代に送還済みだ。

全てのエリアを回ったわけではないが、少なくとも感知出来る限りではもうこの惑星に人はいない、とトランクス達は考えている。

そして残るドラゴンボールも全て回収し、今はバーダックが持っていた。

「ぐ……ぐぐ……なんだよ、皆して本気になっちゃってさ！」

………いいよ！ 分かったよ、君達の勝ちだ！

もう僕はこんな星に用はない、さっさと次の実験に向かう事にするよ！ それじゃあね！」

自分に勝ち目がないと悟ったのだろう。

フューは若干自棄になりながら負けを認め、そして空間転移で姿を消した。

とはいえ、それで『はいさようなら』と逃がすわけにはいかない。

ここで逃がしてしまえば、今度はフューがどの時代に迷惑をかけるか分からないのだ。

なので分身リゼットがフューの気を探知してゲートを開いた。

まだフューはこの時代から脱出していない。ならば捕えるのはこれが最後のチャンスだ。

悟空達は頷き合い、そしてフューを捕まえるべくゲートを潜った。

ゲートが繋いだ先は、研究所と思われる建物の中だ。

「ここは……？」

「この監獄惑星の心臓部だ。フューはここから惑星内の戦いを観察してデータを集めていたのだろう。」

この時代から離れる前に研究データだけは回収しておきたかったようだな」

ベジータの問いにセルが答え、低空飛行で通路を高速で飛んで行く。

その後を悟空達も続き、研究所の廊下を駆け抜けた。

セルはやがて、大きな扉に守られた一室の前へ辿り着き、有無を言わずに蹴り破った。

悟空達は知らない事だが、タイムパトローラーとフューの戦いはかなり長く続いている。

フューは好奇心の赴くままにあらゆる時代にちよっかいをかけ、タイムパトローラーを翻弄し続けていた。

時間移動が出来る者というのは逃げに徹すると本当に厄介で、足取りを掴むのも苦勞させられる。

しかもミラやトワのように特定の目的を持たず、執着もせずに飄々と逃げ回るのだから捕まえる難易度はミラやトワ以上だ。

それが今回は研究データを用意してしまった為に、それを置いて逃げる事が出来なかった。

ならばこれは千載一遇の好機だ。絶対にここで捕まえなくてはならない。

「……フュー」

『不安ですか、ミラ？』

いつになく覇氣のない声色のミラに、リゼットが話しかける。

フューはミラとトワの息子……いや、トワの腹から生まれたわけではなく、あくまで二人の遺伝子から作り出された突然変異体なので正確には親子ではないのかもしれないが、それでもミラにとっては息子のようなものだ。

だからこそミラは今、過去の過ちを悔いていた。

かつてのミラは強い奴と戦い、勝利する事しか知らなかった。

フューへの愛情があったかと問われれば、『無かった』と断言出来てしまう。

ミラにとってのフューとは、特に興味を惹く事のない、トワの新しい玩具でしかなかったのだ。

そんな自分が今更何をするというのか。

何を言っても響く事などないだろうし、フューの神経を逆撫でするだけだろう。「不安か……そうだな。あいつとどう接すればいいのか俺にはまるで分らない。俺はあいつの事をトワの新しい玩具としか考えていなかった」

別に嫌っていたわけではない。だからといって父として愛していたわけでもないし、そもそも我が子と思った事もない。

無関心だった
どうでもよかったのだ。

ミラ自身もまたトワの創造物であったが故に、自分と同じような存在が増えただけとしか認識していなかった。

後継機、量産型、代替え品……言い方は色々あるが、概ねそうしたものと考えて

いた。

それでも当時は自分が最強だと思っていたし、歯牙にもかけていなかった。

「俺にはあいつへかける言葉がない。その資格もない」

『難しく考えすぎではないですか？』

迷うミラに、リゼットが安心させるように言う。

『言葉なんて向かい合ってから考えればいいのではないのでしょうか。もし出てこなければ自然と話せるようになるまで何日でも向かい合えばいい。≪時間≫は貴方達の味方なのだから』

「リゼット……」

『私が見た所あの青年……いえ、少年は悪人ではありません。ちょっとやりすぎている部分がありますが、本質的にはただの好奇心旺盛な子供です。出来ることが多い分、派手になってしまっていますけどね』

リゼットはフューに対して、特に悪人だとか倒すべき敵だという印象を抱いていない。

確かにやっている事は問題だが、そこに悪意が感じられないのだ。

それを『自分を悪と認識していない悪』と言われてしまえば、その通りなのだが、それでも過去に相對してきた極悪人達と比較すれば全然マシだと思えてしまう。

……正直、モロという存在を知った後なので大分基準が緩くなってしまうのは否めない。

アレと比べてしまえばフューなど、ただのヤンチャで可愛い子供だ。

しかしモロを除いても、やはりフューはそこまで酷い悪党ではないと思えた。

とはいえ、だからといって無罪放免というわけではない。

今はよくてもエスカレートすればどんな酷い事になるか分からないし、そうなる前に誰かが叱って止めてやる必要がある。

そしてその役目は、ミラにしか出来ないというリゼットは思っていた。

『まずは彼を止めましょう。大丈夫、私達も力を貸しますから、きっと上手いきますよ』

「……すまない。恩に着る」

リゼットの励ましを受け、ミラは力強く前を向いた。

そうだ、まずはフューを止めてやるのが最優先だ。これ以上罪を重ねてしまう前

に。

その上でフューと向き合い、恨み言を聞こう。許されなくてもいいから謝って、殴られよう。

そう決意したミラは速度を速めて先頭を走る。

——そして扉の先にあったのは、誰もが予想していなかった光景だった。

「遅かったな、地球の神……そしてタイムパトロール共よ」

鋼鉄の尻尾が床を叩き、甲高い音を鳴らした。

そこにいたのは、全身が銀色に輝く一人の男であった。

まるでよく磨かれた鏡のように輝き、周囲の景色を反射するメタリックな腕はフューの首を掴み、持ち上げている。

フューは口から血の泡を吹いて痙攣しており、よく見れば男から伸びた無数のコードがフューの全身に突き刺さって体液を吸い上げていた。

ミラとの戦いで疲弊している状態で超フューに変身する間もなく、奇襲でやられ

てしまったのだろう。

男は悟空達を無視して分身リゼットを睨みつける。

『……貴方……は……』

「久しぶりの再会……と言いたところだが、互いに本体ではない端末同士とはな。だが端末といえど、俺の事は忘れてはいまい？」

それに余計な奴が随分と多いようだな」

カシャン、と硬質な足音を立てて男が一步踏み出した。

無論その姿をリゼットが忘れるはずがない。

フリーザとよく似たシルエットでありながら彼よりも身長は高く、筋肉質に仕上がっている。

しかしそのボディも今は銀色に覆われ、非生物的な固い冷たさしかなかった。

「だが好都合だ」

「お前達が揃い踏みというのは、考えようによってはここで邪魔者を排除出来るとも考えられる」

「決着を付ける時に、前のように邪魔が入っては面倒だ」

「地球の神以外はここで死んでもらおうか」

「喜べ。貴様らの上質なエネルギーはビッグゲテスターに捧げられ、俺の本体を更に強くする」

カシャン、カシャン、と。

次々と足音が響き、部屋のあちこちから男が無数に姿を現した。

廊下の向こうからも整列して男が数えきれないほど行進し、硬質な足音が耳障りに響く。

『……やはり蘇っていたんですね』

リゼットが唇を真一文字に結び、遂に再会の時を果たした宿敵を睨む。

『……クウラ！』

リゼットに名を呼ばれ、男——クウラは不敵に笑い、フューの首を握り潰した。

・セル…2500億（超サイヤ人相当）

フルパワー（超サイヤ人3相当）…2兆

ゴルドンセル…5兆

?????..???

過去を改変した罪でタイムパトローラーにスカウトされた強力若本。

ちなみに彼の世界も無事に皆を蘇生させてハッピーエンドに持ち込んだらしい。
元の時代に戻った後に色々と経験を積んだようで、大幅なパワーアップを遂げている。

フリーザ細胞は思っていた以上に凄かった。

ゴルドン化も以前より安定し、出力が上昇している。

・メタルクウラ（量産型）…10兆 ×10000体

ラップのおにちゃん。フリーザのBrother。

クウラップとメタルクウラップを引っ提げて堂々の帰還。

一応本編ではシリアスな宿敵として扱うのでラップを披露する機会は来ない。
ちなみにこいつらは前座であって本体ではない。

第15話 復活の「C」

メタルクウラに掴まれていたフューが乱雑に床に捨てられた。

首の骨を握り碎かれているものの、それでも生きているのは彼が人造的に造り出された突然変異体だからだろう。

しかし誰の目から見ても虫の息であり、口からは血の泡を吐き出して痙攣している。

そんな哀れな青年の胸をメタルクウラが踏みつけ、何かがへし折れる音が響いた。「この愚か者は、自分だけは安全圏にいると勘違いした。

いざとなれば自分だけは別の時間に逃げる事が出来るという甘えが、他の囚人共と同じように俺を監獄惑星へ引き入れるという選択に繋がった。

フン……このクウラ様を他のサンプルと同じとでも思ったか」

メタルクウラの声には隠し切れない……いや、そもそも隠す気すらない侮蔑がありありと浮かんでいた。

フューの事をあまり快くは思っていないのだろう。

その証拠に、フューを踏みつける力はますます強まり、凄惨な音が響き続けている。

「だが自分だけは安全だと勘違いしたガキというのは扱いやすいな。

おかげで俺はメタルクウラをこの惑星に送り込み、様々な時代の強者のデータを
取り込む事が出来た」

フューはどうやら、悟空達と同じようにメタルクウラまで監獄惑星に招待して
いたらしい。

そこにはメタルクウラが指摘するように『いざとなれば自分だけは大丈夫』とい
う甘えがあったのだろう。

どれだけ危険な存在を招き入れて、場が混沌としてもフューは自分は大丈夫だと
思っていた。

所詮は別の時間軸での出来事……いざとなれば時間の外にまで逃げてしまえば安
全は保障される。

それに逃げずとも、生半可な危機など跳ね返せるだけの実力と才能がフューには
あった。

フューは本人の態度や言動からも分かるように、どこまでもゲーム感覚でしかなかったのだ。

本当の意味でピンチに陥った事など一度もない。

天才故の脆さ……その緩みをメタルクウラに利用された。

勿論フューもそれを承知の上で楽しんでいたのだろう。

少しくらいスリルがあった方が楽しめると……そう思っていた。

だがそれがゲーム感覚なのだ。

その結果、手に負えない本物の悪まで招き入れてしまった。

フューは死を前にして、初めてそんな当たり前の事に気付かされていた。

「……ビッグゲテスターはあの時確かに……」

「貴様が破壊した。確かにその通りだ、地球の人造人間。

俺の復讐をわけの分からん奴に邪魔され、ビッグゲテスター諸共吹き飛ばされた屈辱は覚えているぞ」

セルの疑問に、メタルクウラは当時の怒りを思い出しながら答えた。

ビッグゲテスターは確かにセルのかめはめ波によって消滅させられた。

リゼットは知らない事だが、セルはあの後もビッグゲテスターのあった宙域を探索してチップの一つすら残っていない事を念入りに確認して間違いなくビッグゲテスターが滅んだ事を確信していた。

故にたとえクウラが蘇生したとしても、メタルクウラが生まれるはずがないのだ。

……と、セルもリゼットも思ってしまった。いや、思い込んでいた。

「お前達もとくに気付いているだろうが、俺は愚弟フリーザが蘇生させられた時に、父と共に蘇った。

そしてお前達は知るよしもないだろうが、俺達が蘇生させられた時にどんな姿だったか分かるか？

死んでから時間が経ちすぎていたのか……それとも願いを叶える龍にも好みがあるのかは分からんが、俺達は死ぬ直前の状態でこの世に戻されたのだ。

これが何を意味していると思う？」

『……まさか』

「そうだ……俺は、脳だけの状態で復活した。俺の生身の部分はそこしか残っていなかったからな。

その後俺は最新の技術によって生身の身体を完全に取り戻したが、嬉しい事にビッグゲテスターと同化していた時の知識が残っていた。

だがそうではなかった……脳と同化していたビッグゲテスターのメインコンピューターも俺の中に残ったままだったのだ。

そしてマシン惑星 M2 の残骸を取り込むことでビッグゲテスターは復活を果たした。

分かるか？ つまり俺はクウラであると同時にビッグゲテスターでもあるのだ」リゼットが知らない原作知識の中に、フリーザが復活する場面というものがある。その中でフリーザは未来トランクスによってバラバラにされた状態のまま蘇生させられているのだが……この時、フリーザはサイボーグフリーザのままであった。それと同じ事がクウラの身に起こってしまったていたのだ。

リゼットの知る限りでは、肉体がバラバラになって死んだ者がバラバラのまま復活した例はない。

クリリンもサービスで服と肉体を元に戻して貰っている。

魔人ブウに殺された人達だってお菓子になったまま復活したりはしないし、地球

を元に戻して貰った時もバラバラのまま戻したりはしなかった。

その知識が逆に落とし穴だった。

バラバラで死んだ者をバラバラのまま……脳だけで死んだ者を脳だけのまま蘇生させるなんて意地悪な事を神龍やポルンガが行うとは考えていなかった。

その原因は分らない。

神龍やポルンガにも自我があり、思考能力があるのだから願いを叶えるという仕事とは別に個人的な好みが本当にあるのかもしれない。

少なくとも原作でクリリンの服と肉体を復元したのはサービスだとポルンガ自身が断言しており、あれは彼の自由意思によって行われたものだとはハッキリ分かる。だがどちらにせよ、クウラは最悪の状態で復活していたという事になる。

「俺はメタルクウラを量産する事を考えたが、その為には良質なエネルギーが必要だった。」

しかし表の世界は地球の神の監視網に引っかかる可能性があった。

そこで俺は裏の世界……暗黒魔界へ身を隠し、あちらの星を片っ端からビッグデテスターのエネルギーへと変えていったのだ」

「な、なんだと……!?」

メタルクウラのまさかの発言に、暗黒魔界の出身であるミラが驚愕した。

暗黒魔界は魔界の王ダーブラを頂点とする裏の世界だが、ダーブラは例えるならばフリーザのようなもので、その上には更に『魔神』と呼ばれる者達が存在している。

その平均戦闘力は表の世界の比ではなく、そう簡単に滅ぼされるはずがない混沌の世界だった。

だがいかに混沌の世界でも、超サイヤ人ブルー以上の力を持つメタルクウラが無限に攻めて来てはどうしようもない。一部の実力者以外はただ搾取されるだけの餌となり、一部の実力者達ですら無限の軍勢の前ではいずれ疲弊して倒れるだろう。

「ある時、俺は宇宙に今までなかった惑星が突如出来ている事に気が付いた。

そこで俺はメタルクウラを送り込み、この愚かな小僧の技術と知識を全て奪い取ってやったのだ」

メタルクウラは勝ち誇るように言い、フューの顔に足を置いた。

メキメキと音が鳴り、フューの顔が恐怖に歪んでいく。

ズボンの股間部分には染みが広がり、フューの顔は最早以前までの実験を楽しむ飄々としたものではなくなり……ただの、怯える子供のものになっていた。

自信に満ち溢れたハンサム……手に入らぬものなどない。明日を信じるあの風貌^{かお}——。

全てが壊れ去った……虚飾、虚勢、傲慢。不遜、尊大、自我……。

『やめなさい、クウラ!』

「おい! もうそのくらいでいいだろう! そいつはもう動けねえ!」

「貴様……サイヤ人か。だがその顔、どこかで……」

メタルクウラの悪逆を前に憤りを見せる悟空に、メタルクウラは妙な懐かしさを覚えていた。

この世界線において、悟空とクウラはほとんど面識がない。

ナメック星の時はすぐにリゼットが奇襲をしかけ、クウラがメタルクウラとなった時は悟空は心臓病でダウンしていた。

故に、こうしてマトモに顔を合わせて言葉を交わしたのはこれが初の事であった。

「そうか……あの時見逃したガキか……!」

メタルクウラが思い出したのは、長い寿命を持つ彼からしてみればほんの少し前の出来事だった。

フリーザが惑星ベジータを滅ぼした時、そこから脱出する一隻のポッドをクウラは発見していた。

フリーザの甘さが招いた討ち漏らし……その場でそれを撃ち落としてしまう事は容易だったが、クウラはあえて放置した。

弟のミスなのだから、自分で片付けさせるべきだと考えたのだ。

フリーザもまだまだ甘い……あの時はそう思い、弟の愚かさを蔑んだ。

だがそれがどうだ。あの時見逃したガキは今や、忌まわしい地球の神の隣に立っている。

恐らくその戦闘力は宇宙最強クラスだろう。地球の神への復讐の邪魔になる事は間違いない。

「く……ククク……どうやら過去の甘さというものは後になって必ずツケが返って来るものらしいな」

「何……?」

「だが今の俺にかつての甘さはない」

過去の甘さが招いたもの。

それを目の前にし、メタルクウラはますますフューを踏み付ける足に力を込めた。フューの口から血が溢れ、身体がビクンと跳ねる。

「い、嫌だ……嫌だ……死ぬの……嫌だ……。僕はまだ……何も解き明かしてない……。」

助けて……父さん……母さん……助けてよ……。」

「っ、フュー！」

目前まで迫った死を前にフューが初めてミラを父と呼び、助けを懇願した。

ミラも咄嗟に飛び出し、フューを助けようとする。

だが次の瞬間メタルクウラの姿はフューごと消えており、ミラ達を見下すように天井付近を浮遊していた。

その手には瀕死のフューがゴミのように掴まれ、痙攣している。

「貴様！ フューを……離せ！」

「なんだ、このゴミを返して欲しいのか？ ……よかろう、受け取れ」

メタルクウラはまるで興味がなさそうにフューを一瞥し、ミラに向けて放り投げた。

ミラは咄嗟に我が子を受け止めるべく手を伸ばす。

そして彼の手が触れる寸前――

ミラの目の前で、見せ付けるようにしてフューが爆発した。

グシャリという嫌な音が響き、血と肉片が飛び散る。

ミラの顔にフューの血が付着し、赤く染まった視界の中でメタルクウラが嘲るように笑ったのが確かに見えた。

この瞬間をもって、フューとミラの和解の可能性は永遠に奪われた。

腹を割って向き合ってみれば、もしかしたら分かり合えたかもしれない。

父と子として、笑い合う未来があったかもしれない。

だがそれは全て『IF』になってしまった。もうミラの手がフューに届く事は、二度とない。

フューの凄惨な最期を見たミラは怒りで顔を染めたが、すぐには飛び掛からなかった。

今や四方をメタルクウラに囲まれたこの状況で下手に動くのは自殺行為だったからだ。

「フハハハハッ！ 次は貴様等がこうなる番だ！

地球の神よ……その分身を通して見ているといい。

貴様の仲間達が、その小僧のように惨たらしく殺されていく姿をな！」

メタルクウラが叫び、それと同時に全員が一斉に動いた。

ここで最も早く行動を起こしたのは悟空だ。

彼は今にもメタルクウラに飛び掛かりそうなミラの肩を掴むと、全員に向けて叫ぶ。

「皆、捕まれ！」

この密集した場所での戦闘は不利だ。

そう判断した悟空は皆に呼びかけ、ベジータ達も迷わず悟空の指示に従った。

それと同時に瞬間移動で外に出るが、メタルクウラも一斉に瞬間移動を行う事で追跡してきた。

「おめえ等も瞬間移動が出来んのか！」

「驚いたぞ！ サイヤ人の猿にそんな芸当が出来るとはな！」

悟空とベジータは完成した超サイヤ人ブルーへ変わり、ミラは戦闘形態へ、セルはゴールデンフリーザと同じ黄金の気を放出する。

バーダックも力を解放し、トランクスもブルーへと変身する。

今ここにいるのはいずれも劣らぬ強戦士達で、全員が宇宙最強クラスの力の持ち主である。

しかしそれと同格の力を持つメタルクウラが視界を埋め尽くすほどに居ては、流石に分が悪い。

「フリーザもひで奴だったけど……おめえはそれ以上だな！ なにも殺す事はなかっただろ！」

「フン、俺は弟とは違うぞ！」

悟空がメタルクウラに連続で拳を叩き込む。

だが彼のメタルの身体は戦闘力以上に頑強で、生半可な攻撃ではビクともしない。メタルクウラの一撃を瞬間移動で回避するも、すぐにメタルクウラも瞬間移動して追跡……瞬間移動の術者にしか認識出来ない亜空間の中で悟空とクウラが激しい

攻防を続ける。

「ガラクタ如きが！ 舐めるなよー！」

ベジータが果敢に挑むも、手痛いカウンターを受けて一撃で殴り飛ばされてしまった。

すぐに復帰してメタルクウラに挑むも、完成した超サイヤ人ブルーですら歯が立たない。

トランクス、セル、バーダックのタイムパトローラー三人も必死に戦っているが、それぞれが一体を相手するのがやっとだ。

怒りに燃えるミラは冷静さを失い、いいように数体のメタルクウラに翻弄され続けている。

「ちょっと、何事!？」

モロを食べようとしていた21号もこの異常事態に慌て、何が起こったのかも分からず動揺している。

そんな彼女の前にメタルクウラの一体が瞬間移動し、彼女の整った顔を痛烈に殴りつけた。

21号も魔人ブウの細胞のおかげでダメージはなく、すぐに殴り返すが……硬い！
メタリックなボディは21号の拳を正面から受けても僅かにへこんだだけで、メタルクウラは余裕の笑みを見せている。

「くっ……こいつら、数が多い癖に一人一人の強さも半端じゃねえぞ！」

「冗談じゃない！ 全員が俺やカカロットと互角……いや、それ以上だともいうのか!? こんなものどうしてんだ!？」

メタルクウラと激しい攻防戦を繰り返しながら悟空とベジータが叫んだ。

メタルクウラ一体一体の実力は、今の悟空やベジータのフルパワーに劣る程度だ。だが悟空もベジータも、フルパワーでの戦いは消耗が大きい。とてもこんな数を相手に出来るほど長続きしないだろう。

しかも生身ではなくメタルの身体を持つメタルクウラは戦闘力以上に硬く、しかも多少のダメージはすぐに再生してしまう。

また、どんな生物であっても痛みを受ければ程度の差はあれど怯み、動きが鈍る。だがメタルクウラに痛覚など存在しない。

その上再生するたびにデータを取り込み、前よりも強化されるのだ。

一体だけでも第六宇宙くらいならば滅亡させてしまえるだろう超戦力が、数百体と殺到して来る光景は最早悪夢を通り越して地獄と言っている。

「あーっ、もう！ 何なのよ！ 全然美味しそうじゃないし、最悪じゃない！」

21号がヒステリックに叫び、メタルクウラへ強烈な蹴りを叩き込んだ。

本気を出した21号の攻撃力は流石にメタルクウラの防御といえどひとたまりもなく、右半身が砕け散る。

だが砕けた場所からコードが伸び、瞬く間に復元を開始してしまう。

「無駄な事を。お前達が死にもの狂いで俺を倒したところで、俺は何度でも蘇るのだ……更に強くなってるな」

あっという間に再生が終了し、メタルクウラのバージョンアップが完了した。

そしてそのアップデート情報は本体に共有され、次からはより強いメタルクウラが生産される。

復元を止めようと思っても他のメタルクウラが邪魔をするせいで一体倒す事すら困難と化していた。

現在、悟空達の置かれた状況は最悪と言っている。

メタルクウラはいくらでも湧いて来る上に、その全てが強い。

悟空達も物量に圧倒され、このままでは全員殺されるのも時間の問題だろう。

故に外からこの光景を見ていたりゼットは分身ではなく自分自身で突入する事を決意し、転移の準備をする。

だがその直後、更なる異変が監獄惑星を襲った。

空から白い光線が雨のように降り注ぎ、メタルクウラ達を一斉に襲ったのだ。

それは『破壊』の光であった。

触れた者の強度など関係なく、触れれば問答無用で分解する破壊神の御業だ。

それが無数に、光線の一つ一つが自我を持っているように曲がりくねり、メタルクウラを消し去っていく。

「な、なんだ!？」

「この攻撃……まさか!」

『あ……これって……』

メタルクウラ達の間に動揺が走るが、悟空達と分身リゼットはすぐにこの攻撃の正体に気が付いた。

これは、リゼット本体が発射した攻撃だ。

正確に言えばこの攻撃を放ったのは昨日の事。リゼットがモロを奇襲した時に放った『破壊』が今降り注いでいる光の正体であった。

あの時リゼットはモロを抹消する為に破壊の光を放ち、そして役割を終えた破壊光は飛び去って行った。

だが破壊光は役目を果たして消えたわけではなかった。

むしろ逆……役目を果たせなかったから、仕留め損ねたモロを追いかけていたのだ。

一度必滅の意思をもって放たれた以上、何が何でも対象は破壊する。文字通り宇宙の果てまで逃げても追いかけて破壊する。

第7宇宙にいる限り、どこまで逃げても対象を破壊しない限り永遠に追跡を続ける。

これはそういう技であった。

そして一日かけて監獄惑星へ到達した破壊光は一斉に監獄惑星へ突撃し、そこにいた本命の敵をサーチして破壊を実行し始めた。

そして術者であるリゼットの仲間と、その仲間を危機に追いやっている敵を認識——自己の判断でメタルクウラを最優先破壊対象と定め、攻撃を開始した。

「ぐっ……！」

メタルクウラが瞬間移動をした。

だが瞬間移動中の亜空間に先回りしていた破壊光がメタルクウラに直撃して消滅させた。

「調子に乗るな！」

別のメタルクウラが超能力で破壊光を止めようと試みるもまるで止まらずに抹消され、また別のメタルクウラはバリア諸共消し去られた。

無限に自己再生・自己増殖・自己進化を繰り返すメタルクウラに対する最適解……それは、アップデートの暇も再生の時間も与えずに一気に壊滅させる事。破壊光はそう判断した。

破壊光は更にメタルクウラという強敵に対抗すべく無数の光線を束ねて僅か七本にまで凝縮・レベルアップを果たした。

高速移動で逃げようとしていたメタルクウラは数々の光線が囲う事で逃げ場を塞

いで破壊し、地面に倒れていたモロは転がりながら必死に光線を回避する。

その途中、モロはメタルクウラと戦っているバーダックを見付け、彼がドラゴンボールを持っていると見抜いた。

優れた魔術の使い手故だろうか……モロはドラゴンレーダーも持っていないのに、不思議とドラゴンボールの位置が分かるようになっていた。

「今だ！」

「っ！」

モロがバーダックに襲い掛かり、魔術をかける。

すると次の瞬間、バーダックが持っていたはずのドラゴンボールが全てモロの手に収まり、これで先ほど飲み込んだ分と合わせて全てのドラゴンボールがモロの物となった。

咄嗟にバーダックが反撃の蹴りを放ってモロを地面に叩き込むが、それでもドラゴンボールは手放さない。

「は、ははは……やったぞ！ これで俺はようやく魔力を取り戻——」

しかし次の瞬間、勝利を確信したモロに無情にも破壊光が殺到した。

「……え」

直撃——そして抹消。

モロがいた場所に光線が何度も命中し、そして通り過ぎた時、もうそこにモロの姿はなかった。

この攻撃に当たってしまったが最後、気を吸収出来ようが関係なく破壊される。かつて宇宙を恐怖で支配し、大界王神すら警戒させた男の、余りにも呆気なさすぎる末路であった。

「馬鹿なやつだ。ドラゴンボールを手に入れても死んじまえば意味がねえだろう」
バーダックが吐き捨てるように言い、それから仲間達の方に視線を向ける。

その先では、どういうわけか光線に追われる21号の姿があった。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと！ 何で私にまで来るのよ!？」

破壊光は何かに応じたのか、21号まで襲っていた。

いや、襲っているというのは正確な表現ではない。自分で判断出来る光線とはいえ、それでもこれはリゼットの技でありリゼットが味方を攻撃する事はない。

なので光線は21号に当たる事はなく、21号の周囲を囲んで彼女が何かを捨てる

のを待っているだけだ。

「21号、何か妙な物を吸収したのではないか？ 光線はそいつに反応しているんだ、早く捨てろ」

「ああん！ 折角食べたのにい！」

セルはすぐに、21号の中に紛れたモロの気を感じてそれが原因だと気付いた。すぐにそれを捨てるように指示し、21号は半泣きになりながら腹の肉を千切って捨てる。

するとそのピンクの肉片に破壊光が誘導され、抹消してしまった。

その後もメタルクウラの抵抗は続いたが、悉くが無意味だった。

ロックオンバスターは通じず、スーパーノヴァで迎撃を試みるも撃つ暇がない。迎撃も回避も防御も、逃げすらも許さない。

『破壊』は決して相殺出来ないわけではない。それ以上の力を以てすれば相殺する事は可能だ。

例えばここに第十一宇宙のジレンがいれば、この破壊光を拳で撃ち落とすという離れ業をやったのけただろう。

いかに『破壊』といえど、こうも拡散したのではジレンのような本物の怪物には通用しない。

しかし少なくともリゼットと量産型メタルクウラの間には、それを許さぬほどの隔絶した差がある。

やがて全てのメタルクウラを葬った光線はそこで力を失い、ようやく消滅した。ついでに分身リゼットも役目終了で消え、そこに本物のリゼットが飛び込んで来た。

「皆、無事ですか!？」

「ああ、神様、助かったぞ！ あれがなきゃオラ達皆おっ死んでたところだ！」

「悟空君、よかった……！ ともかく、脱出しますよ。」

この星はもうありません。間もなく爆発します」

監獄惑星はもう限界だ。

モロにエネルギーを吸われ、悟空達が戦い、拳句の果てに心臓部とも言えるフューの研究室までクウラが破壊し尽くしてしまった。

これでまだ自壊せずに耐えられる星など界王神界くらいだろう。

いや、あるいは最近の地球も案外耐えるかもしれないがともかく普通は碎ける。リゼットはすぐにゲートを開き、悟空達が飛び込む。

そして最後にリゼット自身は、一度だけ監獄惑星を見た。

遂にクウラと雌雄を決する時が来た。

向こうもこれ以上の時間はかけず、次は地球に攻め込んでくるだろう。

監獄惑星のメタルクウラは全て倒したが、あれは『偵察隊』に過ぎないとリゼットは確信していた。

きつと本隊はその数倍……いや、数十倍もの規模に達しているはずだ。

実際、隠れる事を止めた無数のメタルクウラの気が、遠くの宙域に数えきれないほどの規模で感じられる。

破壊神とも戦いが成立するレベルのメタルクウラで構成された、数万体……下手をすれば数十万体の大軍勢……まさしく宇宙が始まって以来最大規模・そして最強最悪の軍隊だ。

そんな化け物と戦うのかと思うと気がくじけそうになるが、無限に軍勢を出せるのはクウラだけではない。

ならば次はきつと、量と量の戦いになるだろう。

悟空は既に自分を超えているが……それでも、あの物量に対抗出来るのは自分しかないとりゼットは考える。

新たな戦いの覚悟を決め、そしてリゼットも監獄惑星を離れようとした。

「……………」

しかし何か後ろ髪を引かれる。

振り返っても、もうそこには誰もいない。

精々が、モロの気持ち悪い気の残り香くらいか。

しかしここで「気のせいか」で済ませてしまうのは後の復活フラグである。

なのでモロが倒れていた場所に『破壊』の力を込めた気弾を打ち込み、リゼットが去った後にそれは爆発を起こして監獄惑星を一周し、地表を大きく抉りながら何もかもを薙ぎ払った。

レイダー1「おう姉ちゃん、お前モロ食ったろ？」

レイダー2 「それワイらに寄越せや。な？」

レイダー3 「そうそう。それワイらの獲物やけん」

レイダー4 「それくれれば何もせんから。な？」

21号「PR……」

【神龍にも好みがある？】

ピッコロ「最長老と同じように潜在能力を解放してくれ」

神龍「オマケしておきました……」

ブルマ「小皺取って」

神龍「はい、叶えた……」（クソ面倒そう）

【暗黒魔界終了のお知らせ】

暗黒魔界には色々いたが、残念ながら全員クウラの餌食になりました。

リゼットの知らない所で悪人同士が勝手に潰し合っていた模様。

その様は聖剣伝説3のメインストーリーになれなかったボスキャラを思い出させる。

暗黒魔界にはヒーローズ最強と名高いキャラもいたのだが、そいつは若返る前に

やられた。

ついでにトワがないので本来の流れでトワが洗脳して手駒に加えるはずの戦士の悉くが不在。

【監獄惑星終了】

地球「いやー、最近の惑星は脆いっすねーWWW もっと俺を見習ってWWW」

【次は地球に攻め込んでくるだろう】

地球「」

【戦闘力】

メタルクウラ…10兆5000億（アップデート）×数万

「「「俺が宇宙最強だ！」「」」」

リゼット「敵がチートすぎてヤダー……！！！」

第16話 宇宙争乱

第七宇宙の片隅に、誰もが忘れ去った宙域があった。

遙か太古より、進んだ文明を持つ様々な異星人が用済みになった宇宙船や人工衛星を廃棄していたその宙域はやがて、増えすぎたゴミによって太陽系にも匹敵するほどの宙域と化した。

こう言うのと恰好よく聞こえるが、要するにゴミを捨てすぎてどうしようもなくなっただけだ。

いわば宇宙の墓場……だが、どういうわけかその墓場には今や一つの惑星を除いて何もなかった。

いや、よく見れば残っているそれも惑星ではない。機械の塊だ。

地球にも匹敵する大きさのそれこそは機械惑星ビッグゲテスター。

元々はただの小さなチップだったものがクウラの脳と融合し、今やクウラの分身となった機械の怪物である。

その機械惑星の付近に存在する人影が二つ。

一つは全身が金色に輝くメタルクウラ。

そのメタルクウラは他の量産型とは明らかに異なっていた。

放っている気が桁違いに強く、左眼はあえて完成させていないのか機械的な紅の輝きを放っている。

このクウラこそはビッグゲテスターのメインコンピュータにして、全てのメタルクウラを統括する存在——即ち、メタルクウラ・コアであった。

以前と違うのはフリーザ軍の最新の技術によってクウラは一度生身の身体を完全に取り戻していたというところだ。

前にメタルクウラとなった時は生身の部分が脳しかなかったが故に無理矢理機械のパーツで身体を補っていた。

だが今回のメタルクウラ・コアは生身のクウラを改造し、その上からメタルでコーティングしている。

故に、継ぎ接ぎにも等しかった前のメタルクウラ・コアとは下地が違う。

今や彼の最大戦闘力は破壊神ビルスにすら匹敵している。

クウラはもう一人の人影を注意深く観察しながら、吐き捨てるように言う。

「……監獄惑星に送り込んだメタルクウラが全滅したか。少しばかり貴様に気を取られすぎたらしい」

クウラは監獄惑星に送り込んだメタルクウラの援護を行わず、リゼットに全滅させられるのを黙って見過ごした。

その理由は今日の前にいる存在と戦い、そちらに意識を割かれていたからだ。

クウラと相對するもう一つの人影……それは紫色の体色の猫のような獣人——破壊神ビルスであった。

「どうやら君にとって困る出来事が起きたようだね」

ビルスは痒そうに鼻の頭をかき、しかし油断なく神の気を高める。

彼がここにいる理由は至って単純だ。

『仕事をしに来た』……ただ、それだけである。

働かない事に定評のある彼だが、今回第7宇宙に突如出現した大軍勢を無視する事は流石に出来なかった。

そこで彼はリゼット達に先んじてクウラの位置を突き止め、単身殴り込みをかけたのだ。

「そうでもない。駆逐されたのは先遣隊に過ぎん。たかが千体の犠牲で奴の技を一つ暴けたならば悪くない取引だ。俺は学習し、更に強くなる」

「あっそう。まあ、どっちでもいいか……どの道君はここで僕に破壊されるんだからね」

ビルスがまるで、これからコンビニで買い物をするかのような気楽さでクウラの破壊を告げた。

「君、地球に向かおうとしてるだろ。困るんだよね……あそこにはまだ美味しい物が沢山あるんだ。」

それに僕が今まで食べた中で一番美味しかった物もリゼットしか作れなくてさ。だから君に地球を攻撃されるのは迷惑なんだよ……運がなかったね」

そう言い、ビルスが一瞬でクウラの前に移動した。

破壊神の拳をクウラの鋼鉄の腕が受け止め、数秒睨み合う。

そこから無数の攻撃と防御が行われ、両者の放つ気によって空間が歪んだ。

攻防戦の最中、ビッグゲテスターの分析能力によってビルスの動きのクセを把握したクウラが一撃を加え、ビルスの腹を蹴り飛ばす。

破壊神の中でも最強クラスと名高いビルの顔が苦痛に歪み、吹き飛ばされた。しかしこの程度のダメージなど無いに等しい。ビルはすぐに宇宙空間で制止し、腹をさする。

「やるね。想像以上だよ」

「俺にとっては想像以下だ、破壊神よ。貴様の最大パワーは俺に大きく劣る。勝ち目はないぞ」

クウラの言葉にビルはむっとした表情になり、目つきを鋭くした。

「言ってくれるじゃないか。けどそれは甘い見積もりだ……破壊神の力に上限はないんだよ」

「負け惜しみは見苦しいぞ」

「負け惜しみかどうか、試してみるかい？」

ビルが笑い、クウラも笑みで返す。

どちらも自分が負けるなどと微塵も考えていない。

互いに己の力に自信を持つ絶対強者同士……そこには勝利の確信しかなかった。ビルがいよいよボールに隠された破壊神の強さの全貌を発揮しようと力み、ク

ウラも更なる力を發揮出来る戦闘フォームへの移行を決めた。

ますます戦いがヒートアップする——その時、ビルの付き人であるウイスが主の横に転移した。

「ビル様、お仕事中失礼いたします」

「後にしろ、ウイス。今は見ての通り忙しい」

「いいんですか？ 全王様がお呼びですよ？」

「なにい!？」

完全にクウラとの戦いに集中していたビルスだったが、その集中力が霧散した。この世に恐れるものなどほとんどないビルスだが、そんな彼が恐怖する数少ない絶対者が全王だ。

全王からの呼び出しは絶対。他の何を置いても駆け付けなければ最悪消滅させられてしまう。

「全王様はどうやら隠れんぼの相手が欲しいようですねえ。破壊神全員が集められていますよ」

「ぐっ……こ、こんな時にか！ だ、だったら少し待て！ すぐに終わらせる！」

「はあ」

ビルスがすぐに倒すと宣言したが、額を汗が伝った。

その理由はウイスにもよく分かる。

ウイスはクウラとビルスを見比べ、事実を突きつける。

「すぐに倒せるようには見えませんねえ」

「ぐっ……」

「それにビルス様は以前も全王様の呼び出しより昼寝を優先して無視してしまっています。

今度無視すれば最悪、消滅させられるかもしれませんよ?」

「ぐぐぐぐっ……」

ビルスは冷や汗をダラダラと流す。

このまま戦っても勝てる自信は十分ある。

しかし、難敵であるのもまた事実だった。少なくとも短時間で終わらせるのは不可能だ。

ビルスは数秒悩んだ末、高めていた気を収めてしまう。

「……命拾いしたね、クウラとやら。残念だけど急用が出来てしまった」

「おめおめと逃げ帰る前の口上としてはありきたりだな」

「……………どうせリゼットか悟空にやられてると思うけど……………もし僕が戻って来た時にまだいたら、その時は絶対に破壊してやる……………！」

ビルスは悔しそうに歯ぎしりをし、必死に怒りを抑える。

しかし悲しいかな、神の縦社会。ビルスは全王の命令を拒否する事が出来ない。破壊神は怒りに震えながら背を向け、ウイスと共にその場から消えた。

ビルスが去ったのを確認したクウラも銀色に戻り、ビッグゲテスター内に瞬間移動する。

予期せぬ乱入者だったが、本番前のお遊びとしては楽しめた。

だが遊びはここまでだ。ここからは遊び抜きで宿敵を殺しにかかる。

その一步として、まずは偵察隊を送り込んでいた監獄惑星が今どうなっているかを再確認した。

「やはり既に地球の神達は去った後か……………」

クウラの前に、監獄惑星の映像が映し出された。

そこには地表が綺麗さっぱり消し飛んだ哀れな惑星の姿が映されている。

間違はなく、地球の神による攻撃だろう。流星の念の入れようだ。

この執拗なまでに不安要素を摘み取ろうとする姿勢は、大いに参考にすべき部分がある。

「ほう……監獄惑星にいたコアエリアの連中……確かハーツと言ったな……そいつの先導によって連中も脱出したようだな……それに監獄惑星……まだ爆発していない？ それに星から生体反応……ドラゴンボール……ふ、なるほどな……生き汚い奴もいたものだ」

監獄惑星のコアエリアと呼ばれる場所には、一際強力な戦士達が閉じ込められていた事をクウラは知っていた。

あの悪のサイヤ人カンバーも、元々はコアエリアの一員だ。

カンバーの強さを考えれば、他のコアエリアの戦士も並々ならぬ実力者である事は簡単に予測が出来る。

しかしコアエリアの戦士達が現在どこにいるかは不明だ。

恐らくは他の宇宙に移動したのだろうが、これではビッグゲテスターでも捕捉し

切れない。

残念だ……もし捕捉できる距離にいたならば、メタルクウラ生産のエネルギーの一部にしてやったというのに。

「まあいい……エネルギーはもう十分にある」

コアエリアの戦士達は他の宇宙に逃げてしまったが、別段問題はない。エネルギーは既に足りている。

メタルクウラの軍団で暗黒魔界を蹂躪し、魔神と呼ばれている連中はクウラが自ら殺してビッグゲテスターのエネルギーに変えた。

強大な力を持つ魔神を全滅させるのに数年の期間を要したが、それでも最後にはクウラが笑った。

いかに魔神達が強大な力を持っていたても、際限なく増えて強化され続けるメタルクウラと昼夜問わず不眠不休の戦いを強いられれば消耗し、倒れるのは自明の理だ。むしろクウラは魔神達を高く評価していた。

これだけの条件下で数年間も粘られるなどと予想していなかったし、奴等との戦いのおかげでここまで強くなる事が出来た……暗黒魔界は最高の糧だった。

だが、それすらクウラにとっては通過点に過ぎない。

全てはあの怨敵を殺す為の準備だった。

その機が熟した今、狙うのは地球の神ただ一人。

邪魔をする奴は全て潰す。それだけだ。

クウラは中央の玉座に腰掛け、ビッグゲテスターに命令を下す。

「ビッグゲテスターよ、進路を北の銀河へ取れ。目的地は北の銀河の地球だ」

クウラがそう言うと同時に、ビッグゲテスターが動き始めた。

地球に到達するまでの予測時間は凡そ一日といったところか。

無論、その一日を遊んで過ごすつもりなどクウラにはない。

玉座からは無数のコードが伸び、クウラの腕や頭に接続されていく。

「これより移動とシールド以外の全機能をメタルクウラの量産へ向ける。余計な機能は全てカットしろ」

地球に到着する一日……それまでにメタルクウラを増やし、全戦力を出し惜しみなく投入して地球と地球の神を殺すのがクウラの計画であった。

現在ビッグゲテスターに待機しているメタルクウラの数は一五万程度。

本来はもっと多かったのだが、先述の魔神達との戦いで半数が削られてしまった。だから地球に着くまでに急ピッチで仕上げ、十倍程度には増やしておきたい。

メタルクウラも無限に湧くわけではなく、一体一体が高いエネルギーを持つ以上はどうしても製造に多大なエネルギーを要してしまう。

だからこそビッグゲテスターは他の星を食らい、エネルギーを補充する必要があった。

しかしそのエネルギーも今は足りている。

暗黒魔界という一つの宇宙に等しい世界全てを食らった今のビッグゲテスターならば百万体のメタルクウラを生み出す事も不可能ではない。

魔神達に削られた分を差し引いても十分なプラスだ。

そんな事をすればビッグゲテスターのエネルギーは枯渇してしまうだろうが、クウラには知った事ではなかった。

奴を殺せればそれでいい……それだけで、満たされる。

今のクウラにとって他の事など、全てがどうでもよかった。



「……動いていますね」

遙か遠くから隠しもしない敵意が近づいて来ている事をリゼットは感じ取っていた。

監獄惑星での戦いが終わり、無事に地球に戻ってきた悟空達は次の戦いに備えて全員が神殿で待機している。

地球の周囲には『永遠の美』の主力艦隊がザーボンの号令で集結し、空を埋め尽くす鋼の軍団を編成していた。

「どうする神様？ こっちから瞬間移動で仕掛けちまうか？」

「いえ、それはやめたほうがいいでしょう。恐らく転移を防ぐシールドのようなものが張られていると思いますし、第一悟空君達は宇宙空間では戦えません」

今すぐにこちらから瞬間移動やゲートでの転移で仕掛けるのは恐らく不可能だとリゼットは考えていた。

こちらが転移の使い手である事などクウラはとくに知っているし、その対策を何もしていないとは考えにくい。

リゼットは現在、クウラの瞬間移動を防ぐためにバリアを展開しており、向こう

も当然のように同じ事をしているだろうと考えていた。

それに上手く転移出来たとしても、そこは宇宙空間だ。

ビッグゲテスター内部もクウラとメタルクウラ、機械兵しかないと考えれば酸素があるとは考えにくい。

これでは自分やミラ、21号や魔人ブウはともかく悟空やベジータはどう考えても戦えない。

「なあ、こんな状況なんだしビルス様に協力は頼めねえのかな？」

「それなんです……さっきからコンタクトを取ろうとしているのですが、繋がりません。私の念話が届かない場所にいるようです」

流星にこんな状況ではビルスも動くだろうと期待しての悟空の発言だったが、リゼットは残念そうに首を横に振った。

どう考えても破壊神が一丸となって対処しなければ不味い状況なのだが、その破壊神と連絡が取れない。

全王宮に行く事も一瞬考えたが、それはすぐに選択肢から排除した。

全王ならば確かにメタルクウラの軍団を消せるだろうが、それは第7宇宙諸共

になってしまふ。頼る事は出来ない。

そうである以上、リゼットを含む地球戦力で迎え撃つしかなかった。

「くそっ！ 普段威張ってやがるくせに肝心な時に役に立たねえ！」

「だが神さんよ、地球で奴を迎え撃つのは危険じゃねえか？」

悪態をつくベジータの隣でターレスが腕を組み、もったもな意見を口にした。

メタルクウラを地球に引き入れてしまえば、それは実質的に敗北と言っている。

その気になればいつでも星を壊せるのだから、招き入れるリスクは犯せない。

故にリゼットは、まずはその対策をする必要があった。

「分かっています。地球を戦場にする気はありません」

リゼットは腕を振るい、地球全体にバリアを展開した。

かつてジャネンバを倒しに行く時にも使ったバリアで、これならば物理的な移動

のみならず瞬間移動なども防ぐ事が出来る。

その上から更にヘブンスゲートを多重展開し、地球を覆いつくす。

これならばそうそう突破される事はないはずだ。

「北の銀河の先……そしてビッグゲテスターの進行方向の先に生物の存在しない死

の銀河があります。そこを決戦場にしてはどうでしょう?」

宇宙の事ならばリゼットよりもザーボンの方が詳しい。

彼の提案にリゼットも頷き、そこを戦場にする事を決めた。

今回の戦いはどれだけの規模になるのかリゼット自身も予想が出来ない。

ならば少しでも周囲への被害は少ない方がいいだろう。

リゼットは目を閉じ、神殿に気を宿らせる。

すると神殿が呼応し、まるで宇宙船のように宇宙を目指して発進した。

自律気弾を膜のようにして神殿に張り巡らせる事で、その気が神殿を包んだまま移動しているのだ。

こうする事で、神殿という限られた場所での話になるが悟空やベジータが宇宙で戦う事も可能になる。

「だがどうする? 向こうはとんでもない数だったぞ。今のままやりあっても多勢に無勢だ」

ベジータの指摘に全員が顔を緊張で引き締める。

メタルクウラの正確な数は分からないが、とんでもない数に達しているのだけは

確かだ。

いかに地球の戦力が宇宙随一といっても、あの軍団とぶつかればどうなるかは火を見るより明らかだろう。

一度はメタルクウラ軍を薙ぎ払ったりゼットの破壊光線も万能ではない。

次の戦いではリゼットに匹敵する力を持つクウラ本体がいるはずなので、相殺くらいは平気でやってくるはずだ。

だが兵力を増やすのは何も向こうの専売特許ではない。その程度の事ならばリゼットでも十分に出来る。

「こちらにも兵を増やすしかないでしょうね。

……HEROES・GOD MISSION！」

リゼットの背に光輪が顕現し、空に光のカーテンが差し込んだ。

そこから次々と舞い降り、神殿の周囲を固めるのは戦乙女の姿をした神の軍勢だ。他にもリゼットしか知らない別世界の知識から、様々な姿と技を与えられている。

正義のヒーローや光の巨人、巨大ロボットに魔法少女、バリエーション豊かな大怪獣。

剣と魔法の世界の勇者とその仲間達。勇者と敵対する大魔王。

様々な創作物の主人公、英雄、救世主、強敵達が偽りの現身とはいえ一堂に会する。

リゼットによって生み出された自律行動気弾は一体一体が神の領域に踏み込み、一騎当千の実力を持つ。

今のリゼットが生み出す光の軍はまさに宇宙最強の軍団と呼んでも過言ではない。

ジレンには薙ぎ払われたが、あれはあのマッスルグレイがおかしいだけだ。

本当に何なんだろうか、あの男は。

だが今回はあの時のような即席軍隊ではない。

ジレンをもってしても突破不可能なほどの大軍勢を、時間をかけて作り出す。

「私はこれから治療カプセルに入り、兵を可能な限り量産します。

悟空君達も、戦いに備えて休んでおいて下さい」

リゼットは気は実質無限だが、体力は無限ではない。

しかしブルマに造ってもらった治療カプセルに入ったままゴッドミッションを使

い続ければ体力もほぼ無限となる。

クウラはきつと次の戦い、想像も出来ないようなメタルクウラの軍団を用意してくるに違いない。

そしてメタルクウラは一体一体、その全てが神の領域に踏み込んだ超戦士だ。

ならばこれから行われるのは、双方共に神レベルの量産兵による、宇宙が未だ体験した事のない大戦争だ。

全員が超サイヤ人ゴッドやブルー、超サイヤ人4レベルの強さを持ち、それが数万数十万と衝突するのだ。一体どうなってしまうのかリゼットも予想出来ない。だが何としても勝たねばなるまい。

そうしなければ、クウラによって全宇宙が滅ぼされてしまうだろうから。

「……一応、保険は用意しておきますか」

クウラとの戦いに手を抜く事は出来ない。

しかしだからといって地球をがら空きにするわけにもいかない。

一応何人か戦士を地球に残したし、自律気弾も置いているが……もう一つ、保険をかけておきたい。

そこでリゼットは、ある人物のいる場所へブンスゲートによる転移を行った。GTの事を考えれば、『彼』にはまだ使っていない大量のパワープールがあるはずだ。

それを引き出す事が出来れば……とリゼットは淡い期待を抱いた。

★

全王に呼び出され、宇宙を去ったのはビルスだけではない。

時を同じくして宇宙全ての破壊神が全王宮へ集められ、宇宙は束の間の破壊神不在の期間を迎えた。

それ自体は宇宙の歴史全体で見れば珍しい事ではない。

これまでも時折こうして、全王が破壊神を招集する事はあった。

だが今回に限っては——それは、最悪のタイミングであった。

監獄惑星の崩壊を切っ掛けとして行動を始めたのはクウラだけではない。

監獄惑星のコアエリアと呼ばれる場所に閉じ込められていた強豪達……『コアエリア』の戦士達もまた、自由を得た事で己の目的の為に行動を開始していた。

「第7宇宙は随分とおかしな事になっているようだな」

宇宙のどこかに造られた隠れ家で、黄色の色付きバイザーを付けた男が愉しそうに呟く。

薄い金髪をオールバックにし、肌の色は白。バイザーの奥の瞳は赤く、耳は尖っているがやや地球人に近いタイプの宇宙人だ。

素肌の上からファー付きの黒コートを羽織り、曝け出されている胸元には大きな十字傷があった。

「どうするハーツ？ 第7宇宙に行つて、両方僕達が倒しちゃう？」

自信たっぷりにそう言うのは、白い髪を逆立てた青い目の少年だった。

青目といつても地球人とは違い、眼球全てが青く不気味さを醸し出している。そんな彼に、ハーツと呼ばれたリーダー格の男は小さく笑った。

「いいやオレン。俺達は他の宇宙から攻めて行こう。」

第7宇宙は一番最後だ……デザートはとっておかないとな」

ハーツはおちやらけた口調で言い、そして溜息を噛み殺した。

デザートなどと言っているが、実の所ハーツは第7宇宙を最も危険な宇宙だと思っているからこそわざわざ避けていた。

今第7宇宙に攻め込むような真似をすれば最悪、クウラ率いる機械の軍団とリゼット率いる光の軍団に挟み撃ちにされ、瞬く間にボロクズにされてしまうだろう。あんな所に飛び込むのは自らの力すら把握出来ない馬鹿のやる事でしかない。だがどうやら、その馬鹿は味方側にいるらしい。

オレンの実力では量産されているメタルクウラの一体にすら勝てないのだが、どうも彼にはそれが分からないようだ。

彼は貴重な戦力で同志だ。今はご機嫌を取り、上手く使うしかない。

「俺達の目的は宇宙の種を育て、全王を倒し、人間の真の自由を勝ち取る事だ。必要のない戦いに飛び込む事はない」

神々が聞けば耳を疑うだろう壮大すぎる目的を話し、ハーツは笑う。

打倒全王など今まで、どんな神でも考えた事はない。

いや、あるいは考えた事くらいはあるのかもしれないが、それを表に出した者など皆無だ。

全王は誰にも倒せない、誰にも害する事が出来ないというのがこの宇宙の常識であり摂理である。

全王は破壊神の『破壊』を遥かに凌駕する力を持ち、念じるだけで何もかも消してしまえる。

だがハーツには全王に勝てる自信があった。

「ラグス、カンバーはどうだ？」

ハーツは腕を組み、隣に立つ少女へ声をかけた。

そこにいたのは、まるで水晶かガラスで彫った彫像のような少女であった。

一見ではよく出来た精巧な像としか思えないだろう。

文字通りの透き通るような肌は、彼女を通して薄っすらと向こう側の景色が見えてしまう。

「負けたのがショックだったのか、今は大人しくしているわ。けどハーツ、本当に彼を使うつもり？」

「勝手に飛び出して負けて帰って来るなんて情けないわね。もうあいつ殺しちゃおう？」

ラグスの言葉を引き継ぐように女の声がした。

それはオレンと似た容姿の白い女だ。

オレンが青い服を着ているのに対し、彼女は赤い服を着ているので区別は出来る。
「姉さんに賛成！ 弱い奴はいらない」

「まあ待て二人とも。カンバーは貴重な戦力なんだ。頭は足りないが、まだ使い道はある」

過激な事を言うカミンとオレンをなだめつつ、ハーツは薄笑いを浮かべた。

カンバーは考える頭はないが、その分パワーは超一級だ。

『弱い奴はいらない』とか言っているオレンの百倍は強い。

上手く使ってやればこれからの戦いでも十分役に立つ。

「とりあえずまずは……第6宇宙辺りから攻めていこうか。

第7宇宙ほどではないが、あの宇宙もなかなか強い奴が揃っている。

宇宙の種を育てるいい土壌になってくれるだろう」

第7宇宙ではクウラが活動を始め、そしてそれ以外の宇宙にもまた新たな脅威が迫りつつある。

破壊神不在の宇宙はまさに今、争乱の時を迎えようとしていた。

地球「た、助かった……」

Q、クウラさん、誰もいないビッグゲテスター内で玉座にぽつんと座ってるの？

A、滅ぼした星の荒野でわざわざ玉座用意して座るくらいには意識高いぞ。

【ビルス様、今回も仕事出来ず】

ビルス「僕、今回悪くない？」

・ちなみに全王は下界で何が起きてるか全く把握していない。

（未来編で宇宙全てが大惨事になっているのに悟空に呼び出されるまで気付かない）

・大神官は気付いているが中立を重んじているので何も報告していない。他天使も同様。

（未来編で宇宙全てが大惨事になっているのに全王が知らなかったという事はそういう事）

・破壊神達はビルス以外そもそも気付いていない。

・ビルスは直接戦ってある程度危険である事は知っているが現時点でのメタルクウラの数（5万體）から「リゼットならそれ以上の数で圧殺できるので自分がいなくても問題ない」と見積もってしまった。リゼットがいる事によりビルスの怠け

癖は『加速』するッ！

・ピエロは今日もジレンしか見ていない。

【宇宙争乱編】

監獄惑星編から続くドラゴンボールヒーローズの新たなストーリー。

コアエリアの戦士達が各宇宙を攻撃し、力の大会で戦った様々な宇宙の戦士達と悟空達が共闘する。

【コアエリアの戦士達】

・ハーツ

リーダー格のテラ子安。

重力を自在に操り、本気になればブルーの悟空を瞬殺するほどの強さを持つ。
打倒全王という目的を掲げてはいるが、どうにも大神官に相手にされていない節がある。

更にメタ的に言うゲームオリジナルストーリーのキャラである彼が、本編で底を見せていないどころかダメージを受けた描写すらない大神官や全王をどうにか出

来るわけがなく、彼の目的は最初から達成不可能な事が明らかであった。

宇宙の種を取り込んでもゴジータブルーに負けてしまったので、カンバーより弱い疑惑がある。

とりあえずこのSSでの強さはカンバー＞ハーツ。

・カンバー

監獄惑星から続投。

監獄惑星編ではあれだけ強敵として描かれていたのに、宇宙争乱編に入ってから一気に小物化してしまった。

それでもコアエリアの戦士達の中では強い方。

その割に味方からの扱いは悪い。

ちなみにこの次の章ではとうとうベジータ一人にさえ負けるようになった。落ちぶれっぷりが半端じゃない。

・合体ザマス

全王に消されたはずなのに何故か復活してきた緑。

このSSではそもそも合体ザマスそのものが誕生していないので出番なしである。

ビルス「(出番) 破壊☆」

ザマス「ウワアアアアアーーーーッ!!」

・ラグス

宇宙争乱の鍵を握るといふ触れ込みで登場した子。

宇宙争乱の鍵を握ると言っただけ。あれは嘘だ。

ガラスを自在に操る。

登場前に散々盛り上げて満を持して登場したのに気付いたら描写すらなくメタルクウラにボコられていた。

一体この子、何の為のキャラだったんだろう……。

一応かなり後の魔の侵略者編では囚われのヒロインとして出番がありそうな空気があるが、どちらにせよ宇宙争乱の鍵は握っていない。

・オレン&カミン

GTのベビーの二番煎じのような姉弟。

自分が最強だと思っているようだが、その実力はぶっちゃけコアエリアの戦士最弱。

単体ではカリフラとケールのタッグでも渡り合えるレベルで、合体しても17号とピッコロのタッグに負ける。

消耗してたゴッドの悟空がカリフラ&ケールタッグを相手に圧倒してたのを考えると単体ではゴッド（しかも疲れてる）未満の可能性もある。

他のコアエリアの戦士に比べると合体ありきという感じが否めない。

第17話 第6宇宙の抵抗①

そこは、ほんの少し前までは文明の栄えた美しい惑星であった。

いくつもの高層建築物が並び、人々で賑わっていた。

しかし今や空は淀み、建物は壊れて廃墟のような有様と化している。

こうなっているのはこの場所だけではない。今や惑星中が似たような状況になっており、人類の何割が死んだか分かったものではない。

時折あちこちで何かが爆発し、常人の肉眼では捉える事も出来ない超高速戦闘の打撃音が響き渡る。

ここは第6宇宙の地球だ。

かつて人類同士の戦争によって滅び、しかし超ドラゴンボールによって蘇ったそこはかつての過ちを繰り返さぬように平和な日々を過ごしていた。

しかし第七宇宙の地球に限りなく近付くように復活させられたその惑星は、住んでいる人間までは似ていなかったのだろう。

保有する戦力は悟空が地球にやってくる以前のレベルしかなく、加えてこの地球

にはカタツツの子やりゼットというイレギュラーも存在しなかった。

分かりやすく言えばピッコロ大魔王一人いれば世界征服出来てしまうレベルだ。地球は本来は銀河の辺境の惑星に過ぎず、そのレベルの低さはサイヤ人の赤ん坊一人送り込めば征服可能と判断される程度でしかない。

故に外からの侵略には無力であり……ましてやその侵略者が惑星すら簡単に壊してしまえる強者であれば、もうどうしようもなかった。

この地球の危機に真っ先に動いたのは宇宙の平和を守る第6宇宙の守護者、サイヤ人だ。

地球は美味しい物で溢れた破壊神シャンパのお気に入り、滅ぼされてしまえばシャンパは大層悲しむだろう。

しかしそのシャンパは現在全王に呼ばれて他の破壊神達と共に居なくなっており、ならば神の不在中は人間が星を守らなくてはならない。

防衛隊の若きエースであるキャベは地球の危機を知るや否や、すぐにカリフラとケールを連れて地球へと急行……現場に到着すると同時に侵略者との戦闘を開始した。

「だあああああっ！」

キャベが黄金のオーラを纏い、侵略者へと拳打を放つ。

だが侵略者はそれを軽々と片手で受け、続くキャベの連撃にも余裕をもって対応した。

キャベは第6宇宙のサイヤ人の中では最強クラスの实力者だ。

若くしてエースと呼ばれ、いくつもの功績を打ち立てている。

第七宇宙との試合では破壊神シャンパからも『宇宙最強の五人』のうちの一人として呼び出しを受け、試合後には向こうのサイヤ人の一人であるベジータから（ほぼ強制的に）指導を受け、超サイヤ人への変身能力も身に付けた。

元々宇宙最強クラスだったものが数十倍のパワーアップを経た今、その強さは第6宇宙ならば圧倒的と言っている。

極一部の实力者……同じ力の大会参加者くらいしかキャベとは戦えないだろう。それが通じていない。

キャベの拳も蹴りも、侵略者にはダメージにならずに全て受けるか避けるかされてしまっている。

「そんなものなの？ 全然盛り上がらないよ」

青い服を着た白い肌の不気味な侵略者は名をオレンといい、自らをツフル人の造り上げた最強の人造生命体であると告げた。

しかし彼とその姉を生み出したツフル人の科学者はその力を恐れ、彼等を抹殺しようとしたらしい。

人間を憎んでいるというこの人造生命体は最強を目指して造られたというだけあって、凄まじい戦闘力の持ち主だ。

超サイヤ人と化したキャベでも遊ばれてしまっており、戦いになっていない。

「そらっ！」

「ぐあ！」

オレンの蹴りがキャベの腹にめり込み、彼を近くのビルへ蹴り飛ばした。

数時間前までは人が大勢いた高層ビルをキャベが貫通し、その後にゆっくりとビルが傾いて崩落する。

キャベは更に地面を削りながら飛び、ようやく止まった時には超化が解けて倒れていた。

「キャベ！……くそっ！」

キャベの危機に彼以上の天才的な戦闘センスを持つカリフラが救援に飛んだ。

だがその前にオレンとよく似た異星人……オレンの姉のカミンが立ち塞がり、救援を阻む。

「貴女の相手は私でしょ？」

「このっ、どきやがれ！」

カリフラの実力はキャベに匹敵している。

だがキャベと比べてそこまで差があるかというところでもなく、彼女の拳も軽々とカミンに止められてしまっていた。

反撃の裏拳がカリフラの顔を打ち、鼻血が顔を汚す。

「もっと強い奴はいないのかしら？　つまらないわ」

「このクソ野郎……！」

「失礼ね。野郎じゃないわよ」

カリフラは持ち前の負けん気でカミンに挑むが、まるで相手になっていない。決して彼女が弱いわけではないのだ。

むしろその戦闘センスは天才的であり、彼女はキャベには未だ到達出来ない超サイヤ人を超えた先……超サイヤ人2への覚醒を自力で果たしていた。

しかしそれでもまだ届かない。キャベよりはマシという程度でしかない。それほどにカミンは強すぎた。

「ほら、ほら！」

カミンが颯るようにして、カリフラが倒れてしまわない程度の力で小突く。

カリフラも必死に反撃しているが、それは反撃させてもらっているだけだ。

カミンがその気になれば本当は一発でこんな戦いなど終わってしまう。

ただ、玩具を長く楽しみたいが為に加減しているに過ぎない。

「あ、姐さん……」

カリフラがボロボロにされるのを、ケールはただ見ている事しか出来なかった。ケールはパワーならば三人の中で最強と言っているが、彼女の超サイヤ人は特殊な上に制御が利かない。

そもそもどうやれば変身出来るのかすらケールにはよく分かっておらず、意識しての変身すら出来ないのだ。

カリフラは『首の後ろ辺りをゾワゾワさせればいい』などと言っているが、それは天才肌の彼女だから出来る事だ。

キャベは『怒ればいい』と言うが、闘争に向かないケールの内気な性格では怒るという事がそもそもほとんどない。

大体の場合は怒る前に落ち込んでしまう。

「やめろ……姐さんは絶対なんだ……負けない存在なんだ……」

しかし今は違った。

敬愛するカリフラが一方的に痛めつけられるのを見て、ケールの中に怒りの感情が蔓延している。

ゾワゾワと髪が逆立ち、大人しそうな顔は凶悪なそれに変わりつつあった。

「姐さんの敵は私が消す！」

やがて遂にケールがキレた。

彼女を中心として気が溢れ、世界の色が変わる。

色を変えたのは、惑星全土に一瞬にして広がった彼女自身の気であった。

それが彼女自身に回帰し、世界の色が元に戻る。

それが終わった時、そこにいたのは先程までのケールではなかった。

筋肉が膨張して明らかに骨格レベルで変化しており、その身長は2mを超えている。

髪は緑がかった金髪で逆立ち、その眼からは理性が消えて白目となっていた。

地面を踏み碎いてケールが歩み、彼女から感じられる気にオレンとカミンも僅かに興味を見せた。

「へえ……姉さん、あいつなかなかのパワーだよ」

「そうねオレン。少しは楽しめそうだよ」

「……殺す！」

余裕を崩さない姉弟へとケールが正面から飛び掛かった。

巨体に似合わない速度に若干意表を突かれるも、二人はすぐに散開してケールの突撃を回避する。

そして同時に蹴りを入れるも、ケールは僅かに揺らいただけであった。

「グウウウッ……オオオオオオオッ!!」

獣のような声をあげてオレンとカミンの足を掴み、高度を上げてから地面へと急

降下する。

そして勢いとパワーのままに二人を地面へ叩き付けた。

地球の大地が一撃で砕け、振動が世界中を襲う。

だがそんな一撃を受けた二人は液体のように身体を変化させるとケールの手から脱出して、離れた地面の中から飛び出して軽々と着地してみせた。

「姉さん、あいつそこそこやるよ」

「ええ。いい玩具が見付かったわね」

二人は笑いながら、今受けたダメージを一瞬で完治させた。

再生能力持ちというのは宇宙では珍しくもないが、ここまでのものはそう見かけない。

第七宇宙には案外いるような気がしないでもないが、それは気にはいけないだろう。

ツフルの科学力が生んだ二人はアイコンタクトを取り、そして同時にケールへと挑んでいった。

★

ケールはよく戦ったと言えるだろう。

二対一で、加えて相手はダメージを受けてもすぐに完治してしまう。

そんな中でケールは怯む事なく、防御も回避も捨てて二人を相手に暴れ狂った。何度攻撃を受けても崩れず、すぐに反撃に転じる姿は第6宇宙に言い伝えられている伝説のサイヤ人を彷彿とさせる。

だが結論を言うならばケールに勝ち目はなかった。

ほんの数分でケールは散々に痛めつけられ、地面に倒れていた。

パワーもすっかり落ちてしまい超化も解けてしまっている。

そんなケールを踏みつけ、オレンは退屈そうに話す。

「何だ、もう終わり？ 思ったより楽しめなかったな」

「そうねオレン。もう終わらせてしましましょうか」

多少は期待したものの、オレンとカミンにとってケールはただ無駄に力が強くなっただけでしかなかった。

動きは直線的で大振り。パワーに頼った変身は最初は脅威でも少し観察すればすぐに見切ってしまう。

二人はあらゆる戦闘データをインプットされており、ケールの戦いはただ退屈なだけでしかなかったのだ。

だからもうこの玩具に用はない。

そう判断して止めを刺すべく掌を向けた。

「っ!？」

だが不意に叩き付けられた殺気に反応し、同時にケールの上から跳び退いた。

それは最強の存在として造られた二人をして、思わず退いてしまうほどの濃密な殺意であった。

だが今のはほんの挨拶代わりだ。

ただ、『そこを退け』と警告したに過ぎない……少なくとも、彼にとっては。

警戒する二人の前に殺意の主はゆっくりと足音を立て、姿を現す。

それは紫色の体色をした赤い瞳の異星人であった。

端正な顔は無表情で、感情を表に出さない。

黒いコートのポケットに手を入れ、静かに男は二人へ告げる。

「界王神から仕事殺しの依頼が入った。ターゲットはお前達だ」

低く、渋い声で侵略者二人へ殺害予告を出す。

それは第6宇宙に生きる者にとつては事実上の死刑宣告に等しい。

彼に命を狙われれば逃げる術はなく、必ず死体へ変わる。

その事から付いた呼び名は――。

「ヒット……百発百中のヒットか！」

彼こそは生ける伝説。

真の第6宇宙最強が戦場へ馳せ参じた。

勿論オレンとカミンは彼の存在を知っている。

第6宇宙で『最強』を目指すならばヒットはどうしても無視出来ない存在であり、二人の製作者がヒットという生ける伝説を到達点の一つとして考えていたのは間違いない。

事実、二人にはヒットの戦闘データが刻まれているのだ。

「いいね！ 楽しくなってきた！」

オレンが子供のようにはしゃぎ、ヒットへ飛び掛かる。

それに対してヒットは時を飛ばしてオレンへ接近した。

だが飛ばしているはずの時の中でオレンが動き、ヒットの背後へ回り込んで手刀を構えた。

「時飛ばしてって奴？ 効かないよ！」

僕らには君のデータもインプットされてるんだ！」

「……………」

首を狙って手刀を薙ぐ。

だが寸前で手は首に届かず、それよりも早く振り返る事なく放たれたヒットの肘打ちがオレンの腹に突き刺さっていた。

「なるほど……それは厄介だな」

言葉の割には大して気にしていないような口調でヒットが呟き、オレンを掴んで投げ飛ばした。

そこに気弾を軽く打ち込み、まずはオレンの強度を確認する。

爆煙の中から出て来たオレンはダメージを受けているものの浅く、しかもすぐに傷が治ってしまう。

その様子を観察しながらヒットは氷の冷たさでオレンの『殺し方』を考えていた。

「オレン、そいつ強そうね！ 私が貰うわ！」

「……楽しんでるな、戦いを」

はしゃぎながら飛んでくるカミンを見ながらヒットは呆れたように言う。

バトルジャンキーには最近も出会ったばかりだが、孫悟空と違いこの姉弟には武道家としての高潔さは全くない。

この二人は戦いを楽しんでいるのではなく、自分達が一方的に相手を痛めつけるのが好きなだけだ。

そういう手合いは今までにも何度も見て来たし、何人も葬ってきた。

今回も何も変わらない。それが少女だろうが人工生命体だろうが受けた仕事を果たすだけだ。

ヒットは拳を握り、ゆっくりと腕を持ち上げた。

「そらそらそらそらァ！」

カミンが放つ拳のラッシュを、ヒットは両腕のガードでしっかりと受け止める。そうして防御を固めながらもヒットは、腕の隙間を通してカミンの動きを冷静に観察していた。

動きの癖、好みの攻撃、呼吸、足運び、視線の動き、技選びの傾向……それらを見逃す事なく把握し、そして一言呟いた。

「……見切った」

カミンのラッシュを掻い潜り、ヒットの拳がカミンの顔にめり込んだ。

一撃でカミンの鼻が折れ、顔が醜くひしゃげる。

続けて左のジャブを連射。小刻みに顔の急所を狙い撃ち、瞬く間にカミンの顔が膨れ上がる。

「っこの！」

カミンも反撃するが、ヒットはそれを避けて構わずに攻撃を続行した。

時は飛ばしていない。

だが殺し屋ヒットの真に恐るべき強さは時飛ばしなどの特殊能力にあるのではない。

彼の真に恐るべき部分はその学習能力の高さにこそある。

類稀な潜在能力と成長性を持つヒットは戦いの中でどんどん成長し、強くなっている。

気を纏った拳が面白いようにカミンの顔へ当たり、彼女の顔を右へ左へと揺らす。

「調子に乗るなあ！」

姉が劣勢と見てオレンが援護に割り込んだ。

両腕を広げて気を高めながらヒットへ近づき、目の前で気を炸裂させる。

「スマッシュブレイク！」

「……っ！」

気の爆発をしっかりと腕でガードしながら、ヒットが吹き飛ばされた。

だが目は閉じていない。ガードの隙間を通して動きを観察している。

地面に着地すると同時に拳を繰り出し、見えない拳打を飛ばした。

これをオレンとカミンは左右に散って回避し、オレンは倒れているカリフラに……

カミンはケールにそれぞれ触れた。

直後、二人は液体となってカリフラとケールの傷口に潜り込んでしまった。

するとカリフラとケールが起き上がり、冷笑を浮かべてヒットを見る。

二人はどちらも髪が白く染まっており、眼球にはターゲットマークのような線が浮かび上がっている。

顔にも奇妙な模様が浮かび上がり、明らかに普段と異なっていた。

「どうだい？ ヒット……仲間を攻撃出来るかな？」

「……乗っ取ったのか」

「そういう事！ けど、ただ乗っ取っただけじゃない！ 私達が使う事で、こい

つらが普段使っていないパワーを引き出す事が出来る！」

カリフラとケールは挟み撃ちをするようにヒットを左右から同時に襲い、拔群の

コンビネーションがヒットに防戦を強いた。

寄生により力が高まったカリフラとケールが同時に放った蹴りがヒットのガード

の上から炸裂し、彼を吹き飛ばす。

「ぐっ」

ヒットが呻き、何とかダウンを免れて着地した。

しかしまだカリフラとケールの猛攻は終わらない。

元々この二人は拔群のコンビネーションを誇る女サイヤ人二人で、そこに寄生し

たのはこれまた拔群のコンビネーションを持つツフルの姉弟だ。

それ故に以心伝心の連携を発揮し、互いが互いの隙を埋めるようにしてヒットを

攻める。

一方ヒットは相手が味方の身体を使っているせいで迂闊に殺しの技を使うわけにもいかず、時飛ばしは既に対策済みとあって苦戦を強いられていた。

「ほらほら！ もう終わり!? つまらないよ！」

「反撃くらいしたらどう!?」

人質を取っているに等しい戦い方をしながら、ツフルの姉弟はヒットの無抵抗を嗤う。

反撃の暇もなくガードの上から叩き込まれる攻撃に、最早ヒットは亀のようにガードを固めて耐える事しか出来ない。

それでも二人の攻撃の重さに徐々に押し込まれ、やがてヒットはビルを背にして完全に追い詰められてしまった。

「止めだ！」

これを好機と見なした二人はヒットを追いかけて攻撃を繰り出した。

完璧な同時攻撃！ カリフラの攻撃を防げばケールカミンの攻撃が、ケールカミンの攻撃を

防げばカリフラオレンの攻撃が当たる。

堅牢なガードも一度こじ開けられてしまえば、後はサンドバッグだ。

再びガードを上げる事も許されず、ただ一方的に殴られ続ける事になるだろう。勝った！ ツフルの姉弟は勝利を確信して渾身の一撃をヒットに放ち――。

その攻撃はヒットを突き抜けてしまった。

「し、しまった！ 気の分身……」

「俺のデータをインプットしようと、お前達自身の対応力はそれほどでもないようだな」

「！」

振り返った二人の腹に、同時にヒットの拳がめり込んだ。

容赦のない命を刈り取る殺し屋の拳……しかし、その衝撃はカリフラとケールではなく、内側にいるオレンとカミンのみに届く。

ヒットはただ一方的に打たれていたわけではない。

積み重ねた殺し屋の眼で、二人のどこに寄生虫が潜んでいるのか見極めていたのだ。

一撃でツフルの姉弟が追い出されて、先ほどまでヒットが背負っていたビルを突

き破って反対側から飛び出す。

しかし体勢を立て直す間はない。ヒットはカミンの後を追って追撃のボディブローを叩き込んだ。

「おっ……ぐ！」

身体が曲がり、血の混じった唾液を零す。

それを気にせずヒットが更にカミンの頬を殴り、倒れかけた所を今度は反対側から殴って無理矢理起こす。

アッパーで跳ね上げ、宙を舞うカミンに見えない拳を炸裂させて追い打ちをかける。

「このおお！」

オレンがヒットの背後から殴りかかる。

だがヒットは振り返らずに裏拳をオレンの顔に叩き込んで迎撃し、更に肘打ちで腹を殴打して殴り飛ばした。

そのままオレンなどいないかのようにカミンの落下先へと一瞬で滑り込み、落ちてきたカミンの顔を殴って地面へめり込ませた。

「舐めるなああ！ スマッシュ……」

オレンがヒットの背後に飛び込んで再び必殺技に入ろうとした直後、それを待っていたかのようにヒットが振り向いて見えない拳を飛ばした。

いや、実際待っていたのだろう。

技に入った直後で回避動作を行えないオレンの腹に見えない拳がめり込み、ヒットから離れた場所で爆発してしまう。

「ぐあああ……！」

オレンが地面に倒れ、何とか起き上がろうとするも彼は直後に動きを止めてしまった。

彼の前には既にヒットが近づいて来ており、拳を構えている。

冷たい氷の視線がオレンを射抜き、殺し屋から放たれる殺意を前にオレンは完全に硬直してしまっていた。

「終わりだ」

死の宣告を突き付け、そして拳を放った。

今まで多くのターゲットを葬ってきたヒットの拳は外部のみならず内部にまでダ

メーじを通し、確実に相手を死に至らしめる殺しの技だ。

オレンとカミンは高い再生能力を持つが不死身ではない。

死に至るだけのダメージを受ければ死ぬとヒットは既に見抜いていた。

故に、これで終わりだ。

もうカミンの救援も間に合わず、そもそもカミンは意識を失っている。

……そう、だから終わりのはずだったのだ。

「ぬっ……!?!」

ヒットの身体を突然、重圧が襲った。

今までにも仕事で重力の強い惑星に行った事はあるし、その時も問題なく仕事をこなしてきた。

だがそのヒットをして動けぬほどにその重力は強く、ヒットは地面に縫い付けられてしまう。

まだこんな技があったのか？

そう思うもヒットはすぐに自分でその間違いを訂正した。

違う、この攻撃はオレンでもカミンでもない。

もっと別の……この二人とは比べ物にならない恐るべき誰かの技だ。

「いいねえ、第6宇宙の伝説の殺し屋ヒット……惚れ惚れする戦いぶりだ」

ヒットは必死に身を起こしながら空を睨む。

そこでは重力を放っている者……ハーツが水晶のような妙な物体と巨大なドラゴンボールを背に佇んでいた。

【戦闘力】

・ヒット…5兆5000億

成長し続ける殺し屋。

第6宇宙最強の戦士であり、力の大会ではたった4人しかいない『第7宇宙メンバーを落としたうちの一人』に名を連ねた。

悟空との戦いや力の大会を経て以前よりも遥かに実力を増している。

その実力は完成ブルーの悟空にも引けを取らない（漫画版参考）。

・カリフラ…9億6000万

超サイヤ人…480億

超サイヤ人2…960億

力の大会から変化なし。

センスは凄いのだが流石に今のレベルで超2では……。

・ケール…20億

伝説の超サイヤ人2（パワー重視）…6400億

アニメでの力を制御するエピソードが入らなかった為、未だにパワーが制御出来ない。

第6宇宙の伝説のサイヤ人はある程度放置すると勝手に自滅するらしい。

・キャベ…9億5000万

超サイヤ人…475億

……うん。その、なんだ……破格の才能なのは間違いないんだけどね……。

・オレン…1兆2000億

・カミン…1兆2000億

初登場時こそ初登場補正で強く見えたが、実際は単体だとそこまで怖い相手ではない。

実力的には超2のベジータやトランクスでもある程度戦える程度。

（ただしベジータは見た目だけ超2でも実際には超3より上の『すげえ超サイヤ人（別名俺のブルマ）』があり、トランクスも漫画版で見た目だけ超2で実際は超3と同等という謎の変身を獲得している）

ケールとカリフラのタッグでもそこそこやりあえるので、後の合体なども考慮してこんなものだと思う。

今となってはこの数値は弱いような空気があるが、決して雑魚ではない。

というか第6宇宙だとヒットを除けばサオネルとピリナくらいしかこの姉弟を倒せない。

第18話 第6宇宙の抵抗②

「下がれ、オレン、カミン。ヒットとは俺がやる」

突如第6宇宙に現れた襲撃者達……コアエリアの戦士達を統括するハーツがゆっくりと下降して地上へ着地した。

それと同時にヒットにかけられていた重力が解除されて自由を取り戻す。

ヒットはすぐに起き上がって構えを取るが、その顔には疑問がありありと浮かんでいた。

一体この男は何者なのか？ 何故重力を解除したのか？

これほどの強豪が今までだれにも知られていなかったという不自然さや、力の大いにいなかった理由……果たしてどこの宇宙の出身なのか。

それらの疑問を、しかしヒットは口に出さずに飲み込んだ。

どんな相手にだって背景があり事情があり、歩んできた物語がある。

それを一々聞いていてはキリがないし、能力に関しては質問する事自体が愚かだ。

『お前はどんな能力で何故解除した？』などと……試合ではないのだから、丁寧

に答えるはずがない。

ここは戦場で、今やっているのは殺し合いだ。ならばやる事はいつもと変わらな
い。

相手が何であろうがどんな力を持っていようと、ただ仕事を遂行する……それだ
けだ。

「いいねえ。多くの修羅場を潜り抜け、勝利してきた男の洗練された心の動きだ。
経験の多さ故に君は俺の能力を警戒し、今この瞬間も考察している。

何故解除したのか？ 発動中は自らが動けなくなるのか、それとも何らかの制
約があるのか……と。

だが一方で、考えるばかりではなく時には大胆に飛び込む方が効果的な事もある
と、また経験で知っていて間合いを詰めるタイミングを計っているな。

多くの戦いを知る男の、美しい心の動きだ」

「……………」

「気付いたか。そうさ、俺は君の心を読んでいる。

だがその事実気付いて僅か 0・02 秒で動揺する心を律したな。流石——」

ハーツが話している最中にヒットが一瞬で彼の前へ、拳を振りかぶった姿勢で現れた。

時飛ばしによる不意打ちに、ハーツは笑みを崩さずに最初から分かっていたように首を動かして拳を回避した。

ヒットもそれを分かっていたように拳打の弾幕を放つ。

「心を読まれているならば読まれていても避け切れない速度と手数で……か。正解だ。

だが残念だったなヒット。俺は心を読まなくても……強いんだよ！」

ほとんど『壁』と言っているいいヒットの拳の雨をハーツは軽々と避け続けてみせる。

そればかりかヒットの腹に蹴りを入れ、彼を間合いの外に弾き出した。

ヒットもすぐに着地し、拳を上げてボクシングのピーカブースタイルのような構えを取る。

そこに今度はハーツが飛び込み、蹴りを放った。

これをヒットは堅牢なガードで防ぐも、蹴りの衝撃で僅かに立ち位置をずらされる。

だがヒットの視線は刃の鋭さでハーツに固定されていた。

そうして観察している。ハーツの動きを見切るべく、百発百中の瞳が彼の動きを学んでいる。

「ふむ、堅実なんだな。」

一見すると能力頼りのトリッキーな戦士に見えるが、それらの力を十全に使いこなせるのは積み上げた基礎があつてこそ。

次は……ほう？ なかなかいい方法を思いつくじゃないか」

「……随分お喋りだな」

ヒットは上空に手に向け、気弾を雨あられと発射した。

それは空で曲がり、地上へ向けて落下を始める。

どの気弾がどこに落ちるのかはヒットも知らない。何故なら狙っていないからだ。

そう、この攻撃は完全ランダムだ。ヒット自身にも当たる危険がある、思考停止の広範囲攻撃。

これならばハーツに読まれる事はない。

ヒットは落ちて来る気弾を避けながら右へ左へステップを踏み、残影を残しつつもハーツへ接近してワン・ツーを放つ。

ハーツはこれを手の甲で弾き、ヒットの腹へボディブローを放った。

ヒットはこれをバックステップで避け……落ちて来る気弾の音だけで位置を判断して横へ避けた。

ハーツも気弾に当たる事なく位置を変え、まるで読んでいるかのように気弾を避ける。

「ふふふ……観察眼がありすぎるのも考えものだな、ヒット」

「何……？」

「君はこの気弾の雨を完全にランダムで撃ったから自分でも分からないと思っている。
る。」

そして実際にランダムなんだろうが……君、気付いているかい？

自分・で・自分・の・気・弾・を・見・切・っ・て・し・ま・っ・て・い・る・じ・ゃ・な・い・か・！

「！」

落ちて来る気弾を、二人はまるで存在していないかのように滑らかに避ける。

位置の確認などせず、視線も向けず。

ヒットは積み上げた経験と予測と勘で……その優れた観察能力で自ら放ったランダム爆撃を避け、ハーツはそんなヒットの心を読む事で気弾を避けていた。

そうして気弾を避けながら二人は高速の打撃戦を交わし、数秒の後にヒットが押し負けて殴り飛ばされた。

「ぐっ……」

空中で回転して着地し、再び両腕を上げて構える。

そして時を飛ばし、ハーツの背後へ回り込んだ。

読まれている事など承知している。

だが読まれていようが背後への迎撃は体勢の問題で、どうしても手数に限られる。そう読んで背中目掛けて拳を打ち込むも、ハーツは跳躍する事で避けて後方に回転……更に身を捻って向きを変えてからヒットの拳に手を置いて片手で逆立ちをした。

そのままヒットと目を合わせて笑い、彼の頭へオーバーヘッドキックを放つ。だがヒットはこれを空いている手で防ぎ、腕を薙ぐ事でハーツを振り払う。

ハーツはこれに逆らう事なく空中で回転してから着地するが、その瞬間に時を飛ばしたヒットが目の前へ接近していた。

「しっ！」

ヒットの拳が大砲のように唸りを上げ、ハーツの頬スレスレを通過した。射線上にあった瓦礫が拳圧で吹き飛び、砕け散る。

「そらあっ！」

今度はハーツが刃のような手刀を放った。

ヒットはこれを屈んで避けるが、射線上にあった瓦礫がバターのように切断されてしまう。

そのまま二人は足を止め、超至近距離で拳の交換を開始した。

ヒットが打ち込み、ハーツが避け、ハーツが打ってヒットが避ける。

当たってもおかしくないどころか、当たらない方がおかしい距離だ。なのに当たらずに戦えているのは二人の並外れた技量故だろう。

拳が衝突し、反動で二人は距離を空けた。

「なるほど……思考を読まれるとは厄介だな。だがお前の殺し方は決まった」

そう宣言し、ヒットが静かに構える。

しかしその構えは今までと何か特別違った部分は見えない。

やや重心を落としているようにも見えるが、それだけだ。

しかしハーツは、ヒットの内面にこそ変化があると察していた。

「おかしいな、ヒット。あれだけ先を予測し続けていた君の心の声がなくなった。

何も考えていないな？ 無心というわけか。

残念だよヒット。確かに俺に心を読まれないという点では対策になっているかもしれないが、そんな愚かな手段を選ぶとは」

「……………」

「すぐに過ちを悟らせてやろう」

ハーツが余裕を含ませた笑みを浮かべ、ヒットへ接近した。

正面——と見せかけて横に回り込み、隙だらけのヒットへ拳を放つ。

だが直後、ヒットの拳が逆にハーツの顔面にめり込んでサングラスに罅が入った。

「な……………に!？」

「……………」

ヒットが無表情のまま更に畳みかける。

腕を振じって真つすぐに心臓目掛けて拳を放ち、ハーツは咄嗟にヒットの腕を蹴り上げた。

そのまま更に、素早く足を戻して無防備なヒットの腹へ前蹴りを打つ。

だがヒットはこれを時飛ばしで回避し、ハーツの背後へ回り込んだ。

後ろから放たれる右ストレート——これをハーツは危ういところで首を動かす事で避け、後ろに思い切り体勢を逸らす事でヒットの顔に後頭部を叩き付けた。

よろめくヒットに向き直り、距離を詰める。

それと同時にヒットもすぐに体勢を立て直し、迎撃に移った。

（なんて奴だ、ヒット！）

こいつ……ほとんど反射だけで戦っている！

だというのにこの正確さはどうだ！ まるで、殺人機械！）

ハーツは既に、何が起こっているのかを凡そ理解していた。

ヒットは思考を捨てている。それは間違いない。

だが優れた達人は時に、意識を失っても身体に覚え込ませた動きだけで無意識に

戦闘を続行する事がある。

ヒットはそれを、任意で出来るのだ。

身勝手の極意ではない。残念ながらヒットはまだそこまでの境地には届いていない。

だが届いていないというだけで、彼もまた技巧の極致に限りなく近い位置にいる。積み上げた経験が。彼の長い人生が。

奪ってきた命と積み重ねてきた罪が。星の数ほどこなした仕事が。

……只人では到底想像も出来ない戦歴が。全てが彼の拳に刻まれている。

その果てに、彼の肉体は自然とその動きを意識せずとも行えるまでに至っていた。『身体に覚えさせる』。言ってしまうえばそれだけの事だ。

だがこれは、どんな競技や技にも通じる基礎であり奥義である。

自転車の乗り方を覚えた者が、一々足の動かし方や重心の取り方など意識しないのと同じように、身体の方が覚えていてくれる。そして実行してくれる。

身勝手へと通ずる永く果てのない路……その道中に確かにヒットは立っていた。そして歩いている。一步一步、踏みしめるように。

その先にいる——孫悟空^{あの男}の背中に追いつくために！

「ぐ……こいつ……」

ハーツは余裕を若干なくし、顔を険しくする。

先程まで互角だった戦いは、次第にヒットが圧倒しつつあった。

思考を放棄した事でヒットの動きは機械的になり、よく見ればパターン化されたその動きを見切る事も不可能ではない。

仮にここにいたのがリゼットだったならば、思考停止したその動きの中にある決まった動作や正確さ故の隙を見抜いて痛烈なカウンターを叩き込んでいた事だろう。

無論ヒットもその程度は簡単に予測出来るので、そもそもリゼットの前で思考停止などしないだろうし、所詮これは絶対に実現しない『仮』の話でしかない。

だがそのヒットが実行に移したという事は、ハーツになら通じると確信したという事である。

そして実際効いている。

心を読む能力は強力だが、便利すぎる能力も時には考えものだ。

なまじ普段から読心に頼っているハーツは、ヒットやリゼットに比べて先を読むという事に慣れていない。

無論ハーツもまた超一流の使い手である事は疑いようもなく、十分な先読みの練度は備えている。

だがこの戦いは超一流の領域すらとうに飛び越えた神レベルの戦闘だ。

技の練度という点において、ハーツはヒットに及ばない。

その差がそのまま、攻防の優劣として現れている。

「ふふふ……いいぞヒット。こうでなくちゃ面白くない。

もっと魅せてくれ、君の力を！ 人の輝きを！」

しかし追い詰められながらも、ハーツは笑った。

決して強がりなどではなく、心底から嬉しそうな笑みをみせる。

一体どういう心理をしているのか。ハーツがヒットに向ける視線には決して嫌悪や敵意はなかった。

ただ、期待するような輝きと……あろうことか、慈しむような感情だけがあつた。

驚くべき事に殺し合いの最中にありながら、ハーツの中にはヒットへの好意しかなかったのだ。

だがヒットは動じない。

長い戦歴の中で仕留めてきた多くのターゲットの中には変わり者などいくらでもいたし、常人では理解出来ない思考の持ち主などいくらでも葬ってきた。

だから変わらない。ただ、仕事を完遂するだけだ。

ヒットとハーツの拳が幾度も交差し、打撃音が響き続ける。

その攻防の中、拳打を出したハーツが不意に何かに気付いて拳を止めようとした。今まで無言を守っていたヒットの心の声が聞こえたのだ。

そして、その狙いもハッキリと聞き取る事が出来た。

だがヒットは更に一步踏み出してハーツの拳をあえて腹で受けながら前進する。そうしてボクシングのクリンチのようにハーツの首に右腕を回して拘束し……その姿勢のまま残る左拳はハーツの腹へあてがう。

「捕えたぞ」

「しまっ……」

ヒットの拳が必中のタイミングでハーツに炸裂した。

拳の衝撃で吹き飛ぶハーツを見ながらヒットは静かに告げる。

「この一撃が必要だった……この一撃が、お前を時間の牢獄へ縛り付ける……！」
ハーツの全身が紫色の輝きに包まれ、動きが目に見えて遅くなる。

ヒットの能力は時飛ばしである事は言うまでもないが、彼はその時飛ばしをハーツに連続でかける事で彼の時間を切り離れた。

結果、本来の時間から切り離されたハーツは時間の牢獄へ閉じ込められてしまい、思うように動けなくなったのだ。

「む……こ、この程度……」

ハーツは何とか動こうとするが、その彼の前にヒットが接近した。

そして拳打を放ち、ハーツの顔を打ち抜く。

「がっ……！！」

右、左、右！

先程までと異なり、ヒットの拳が面白いようにハーツの顔に命中していく。形勢逆転だ。切り札を見事に当て、戦いの主導権は完全にヒットが握った。

しかし一方的に攻めながらもヒットの気は恐ろしい速度で減り続けていた。

本来であれば時飛ばしは連続して行うものではない。

それを連続してかけ続け、更に攻撃まで行うのはヒットにとっても消耗の大きい戦い方なのだ。

あのグルドも時間を止めながらの攻撃は消耗が大きすぎると言っていた。

時間の操作と攻撃の両立とはそんなに簡単なものではない。

それは、攻撃と停止の両立を可能としたリゼットの時間停止が僅か一秒しか持続しない事からも分かる事だ。

ヒットに残された時間はそれほど多くない。

ハーツを時間の牢獄に縛り付けている間にこの勝負を終わらせなくてはならない。
い。

「これで……終わりだ！」

一際大きく拳を引き、踏み込みと同時に全ての気を振り絞って拳に乗せた。
必殺の意を込め、狙うは心臓ただ一つ。

この一撃でハーツを仕留める！

幾度もターゲットを葬ってきた百発百中の拳が、重い音を立ててハーツの胸にめり込んだ。

「が……は……ッ」

肺の中の空気を全て押し出されたような掠れた声が響いた。

ポタポタと地面に血の斑点が落ち、受けたダメージの深さを物語っている。

胸にめり込んだ拳が抉るように捻じ込まれ、肋骨を砕くと更に吐き出す血の量が増えた。

「第 6 宇宙のヒット……ここまでとは」

ハーツの口からヒットを称える言葉が吐き出された。

だがヒットはそれに答えない。

……いや……答える事が出来ない。

何故ならハーツの拳が彼の胸にめり込み、致命傷を与えているからだ。

「いや本当に驚いたよ。まさか俺が本気を出すところまで追いつめられるとは思わ

なかった。

君を侮った非礼をどうか許してくれ、ヒット」

勝ち誇るハーツの姿は先程までとは違っていた。

まるで超サイヤ人のように髪が逆立ち、赤黒いオーラが全身を包み込んでいる。更に彼の周囲を守るようにキューブ状の気弾がいくつも浮かび、そのうちの一つがハーツとヒットの間に入ってヒットの拳を防いでしまっていた。

逆にハーツは力づくで強引に時間の牢獄を脱し、ヒットに決定打を加えている。そう。最後の戦いを制したのはヒットではない。

勝利したのはハーツの方だったのだ。

ハーツの前で第6宇宙の伝説が膝を折り、崩れ落ちた。

それを見届けてハーツが浮遊し、その後にはオレンが続く。

「ねえハーツ、僕も姉さんもまだやれたよ！ 僕らは負けてない！」

「勿論分かっているさオレン。君達は本気になればいつでもヒットに勝てた……だが、ただ遊んでいただけだろう？」

「そ、そうさ！」

「オレン、君の獲物を横取りしてすまなかった。

つい心配になって出て来てしまったんだ……。

これも君達を大事に思うからこそその事。どうか愚かな俺を許してくれ」

憤慨するオレンに、ハーツが気取ったような口調で謝罪を口にした。

するとオレンは腕を組み、仕方ないというポーズを取る。

「いいよ……ハーツの事だし、許してあげる。でも次は僕等の邪魔をしないでよ」

「ああ、分かったよ」

オレンを手のかかる子供のようにあやし、ハーツは大仰に両手を広げる。

すると彼の後ろに控えていた水晶体——『宇宙の種』が不気味な脈動を開始した。

この宇宙の種は文字通り、宇宙を一つ生み出すほどのエネルギーを秘めている。

それは宇宙を消し去ってしまう全王と対になる力で、それ故に凄まじく強い。

この宇宙の種は戦いのエネルギーを吸収する性質を持ち、この種の近くで戦う事

でエネルギーを捧げる事が出来る。

ハーツが今回第 6 宇宙を襲撃したのも、この種を育てる為であった。

「第 6 宇宙のエネルギーはもう十分だ。次の宇宙へ向かおう」

ハーツの言葉通り、第6宇宙はもう宇宙の種に捧げるエネルギーがほとんど残されてない。

星々は砕け、荒廃し、ほとんど壊滅状態に陥ってしまっている。

だからもうここに用はない。

次の宇宙へ行き、また新鮮なエネルギーを貰うだけだ。

侵略者達が去った後に残されたのは、この宇宙の為に戦った四人の戦士だけだった。

キャベ、カリフラ、ケール……そしてヒット。

この宇宙でも間違いなく上位に数えられる強戦士達は起き上がる事も出来ず、第6宇宙の敗北を象徴するかのように、崩壊していく地球の大地にただ倒れ伏していた。

★

「ふわああああ……！ 困った……これは困った……」

第6宇宙の界王神界では、太っているけど温和で優しい界王神フワが水晶の前で狼狽していた。

水晶には地球が映し出されており、その大地の上で第 6 宇宙が誇る精鋭が倒れている。

第 6 宇宙がハーツ達の襲撃を受けた際、素早くヒットへ接触して仕事の依頼をした彼はこれで第 6 宇宙は救われると確信していた。

何故ならヒットは伝説で、今までに仕事を仕損じた事など孫悟空暗殺の一件以外になかったからだ。

だがそのヒットが負けてしまった。

シャンパが全王に呼ばれて不在の今、ヒットを超える戦士はこの宇宙には存在しない。

いや、ヒットのみならずカリフラやケール、キャベだって下界の人間でありながら界王神を超えているという規格外の超戦士なのだ。

この四人で駄目ならばもうどうしようもない。仮に他の力の大会の戦士……サオネルやピリナ、マゲッタやボタモ、そしてフロストがいても結果は変わらなかっただろう。

エネルギーを奪われた第 6 宇宙はほぼ壊滅してしまい、侵略者達は次の宇宙へ

向かった。

これは第6宇宙のみならず、全ての宇宙の危機だ。

もしもこのまま全ての宇宙からエネルギーが奪われてしまえば当然人間レベルは一気に落ち……そうなった宇宙を全王がどうするかなど、考えるのも恐ろしい。

間違はなく失望され、そして価値を見出されなくなるだろう。

そうなれば待っているのは消滅だけだ。

「す、すぐに他の宇宙へ伝えなければ……この危機を！」

フワは侵略者達を止める術がない。

だが第6宇宙は駄目でも他の宇宙ならばまだ可能性はある。

第3宇宙のアニラーザならば。第11宇宙のディスポとトップ、ジレンならば。

そして第7宇宙の選手達ならば、あの恐るべき敵だってきっと倒してくれるはずだ。

フワはその可能性に縋り、すぐに他の宇宙へ連絡を飛ばした。

【他の第 6 宇宙力の大会メンバー何してたん？】

・ボタモ

別に治安維持部隊でも何でもないのでもそもそ宇宙の危機に気付いていなかった。

宇宙やべえと気付いた時はもう手遅れ。

・マゲッタ

ボタモと同様。

・サオネル&ピリナ

同じく気付いてない。

・フロスト

気付いていて、どっちに味方した方が甘い汁を吸えるかと計算してる間に全部終わった。

・ドクターロタ

宇宙の危機に気付き、宇宙船で近くまで来ていた。

「今度こそ私が何故ドクターと呼ばれているか教えてやろう！」と張り切ってい

たものの結局間に合わず、宇宙の種のエネルギー吸収を近くで喰らって失神した。

第19話 広がる争乱

フワ「……………？」

※ただ他の宇宙に助けを求めただけなのに感想欄で有能扱いされて困惑中のフワさん。

界王神への期待値のハードルが……低い……！

謎の敵集団による第6宇宙壊滅……この恐るべき報は衝撃をもって全宇宙の神々へと伝えられた。

界王神達はこの報を聞いてすぐに各々の宇宙が誇る最強の戦士達へと招集命令をかけ、第7宇宙もまた界王による念話が悟空へと届いていた。

悟空は対メタルクウラに備えて神殿で仲間達とトレーニングに励んでいた最中だったが、界王からの念話となれば無視するわけにもいかなないので一時修行を中断した。

ちなみにトランクスとセル、バーダックはまだこの時代に残っている。

クウラはこの時代の存在なのでタイムパトロールとして手出し出来ないが、それはそれとして悟空達と修行するいい機会なので残留しているらしい。

現在はベジータがトランクスに完成ブルーを教えている最中だ。

『悟空よ、聞こえるか？ 大変な事が起こってしまった。すぐにリゼットを連れてわしの所まで来てくれ。』

……というかお前達は今、どこにいるのだ？ 地球は何か封じられておるし、神殿はないし……。

界王神様がお前達に連絡出来ないと嘆いてわしの所に来てしまったぞ』

「ああ、実はちよつとこつちでも大変な事になつちまっててよ……今は神殿ごと宇宙を移動してんだ」

『大変な事だと？』

悟空達は現在メタルクウラとの決戦に向けて神殿ごと移動中である。

地球はリゼットによって外敵が侵入しないよう封じられ、万一に備えて残された自立気弾とゴッドガードン、タピオンと魔人ブウ……そしてピッコロが待機してい

た。

今や最強クラスとなったピッコロを欠いてメタルクウラの軍に挑むのは厳しいが、しかしメタルクウラ軍が地球に現れた時に安定してそれを蹴散らせるのもピッコロだけだ。

不死身かつ回復魔法を使える魔人ブウと基礎能力最強のピッコロを残しておけば、万一メタルクウラが地球に侵入しても数体程度ならば迎撃出来る。

リゼットはそう考え、あえて今回の出撃メンバーからピッコロを外した。

また、緊急時の為にダークドラゴンボールも地球に残し、何かあった時には使う許可を出している。

それから、無事潜在能力を引き出す事に成功した『彼』の存在も、心強い。

ついでに姉の方の潜在能力も引き出しておいたが、こっちはやはり『彼』ほどの伸びはない。

それでも、今の悟空の普通の超サイヤ人くらいとならばいい勝負が出来るくらいには力の上昇が出来た。

よって現在神殿にいるのはリゼットの他には悟空、ベジータ、ターレス、ミラ、

四星龍、21号、ヒルデガーンの八名である。

トランクス、バーダック、そしてセルはタイムパトロールなので数には含まれていない。

『なっ、なんだとおお!!』

「……まだ何も言ってねえじゃねえか」

『ん？ そうだったか。では早く言わんか』

界王のボケに突っ込みを入れつつも悟空は現在の状況を彼に説明した。

これには今度こそ界王は驚き、何も言えないようだ。

それはそうだ。超サイヤ人ブルー以上……つまりは神の領域に踏み込んだ量産兵など聞いたことがない。

数千、あるいは数万体のヒットが襲ってくる……と言えば、どれだけ恐ろしいのかわかるだろうか。

神殿はこれからそんな相手との決戦に臨もうとしているわけで、ある意味ハーツなどよりも余程厄介な状況にあった。

『よくもまあ、地球はそう毎回毎回おかしな事になるものだ』

「それで界王様の方はどんな事になってんだ？」

『わしの方というよりは、他の宇宙なのだが……正体不明の敵の襲撃を受けておるのだ。』

既に第6宇宙が攻撃を受け、全宇宙の神にも伝えられている。

破壊神様達が全王様の宮殿に呼ばれて動けん今、お前達と第11宇宙のジレンが最も強い……ジレンは第11宇宙を離れる事は出来んが、お前達ならば数も多いし何人かは他の宇宙に回っても大丈夫だろうと思つてな。まあ、救援要請をしようとしていたわけだが……まさかそんな事になっていたとは』

「第6宇宙なら心配いらねえさ。何たってあそこにはヒットがいる」

『……そのヒットがやられたのだ』

「なっ、何だつて!？」

界王の言葉に今度は悟空が言葉を失う番であつた。

ヒットとは二度直接戦っているから分かる。彼に勝てる者などそうはいない。

基本的な強さは元より、殺し屋として培ってきた技術と経験、更に時を飛ばす異能まで持っている彼はまさに伝説の名に恥じない男だ。

単純な強さだけを言えば、悟空達はヒットを大きく引き離している。

界王拳20倍ブルーや、超フルパワーサイヤ人4、ベジータの到達した進化したブルー。それらの超進化は確実にヒットとの間に水を開けた。

しかし、その悟空達でも戦えば必ず勝てると断言出来ないのがヒットだ。

それが敗れるなど、にわかには信じがたい。

『カリフラ、ケール、そしてキャベもやられた。全員重傷で、今は第6宇宙の界王神界で治療を受けておる』

「だ、第6宇宙はどうなっちまったんだ？」

『……ほとんど壊滅状態だ。宇宙全体のエネルギーが著しく減ってしまっている。かつてターレスが神精樹を地球に植えた事があっただろう。あの時と同じように……いや、それ以上の惨状が第6宇宙全ての惑星で起きていると思ってくれ』

「そ、そんなにか……？」

『全王様に消されるよりはマシと言えなくもないが……ここからの建て直しは超ドラゴンボールでも使わん限りは数億年を要するだろう』

「な、なんてこった……」

宇宙が具体的にどれだけ広いのかは悟空には分からない。

だがとんでもなく広く、多くの星と命がある事は知っている。

それを壊滅させるなど、只事ではない。

その襲撃者とやらが次にどこを狙うかは分からないが、ヒットに勝てるような連中となればほとんどの宇宙では手に負えないだろう。

第3宇宙のアニラーザや第11宇宙のプライド・トルーパーズなら勝てるかもしれないが、他はまず不可能と断じていい。

第9宇宙や第4宇宙に至ってはリゼットがゴッドミッションで生み出す光の戦士が一体いれば余裕で壊滅させてしまえる程度の戦力しかないのだ。

『お前達が大変な状況にある事は分かった。

だが悟空よ、何とかならんものか？ このままでは他の宇宙が滅ぼされてしま
う』

「少し待ってくれ。神様や皆と話してみる」

『うむ……すまんな、無理を言ってしまった』

「いいさ、気にすんな界王様。」

……おい皆！　ちょっと聞いてくれ！」

それから悟空は皆の修行を中断させ、リゼットの前で界王から伝えられた情報を皆に話した。

リゼットは相変わらずメディカルマシーンの中に入って兵士を量産し続けているが、このままでも会話くらいなら出来るので問題ない。

悟空からヒット敗北の事実を告げられた戦士達は流石に動揺し、警戒を露わにした。

「そうですか……まさかあのヒットが……」

リゼットが動揺を表に出さないように抑えた声で言う。

ヒットの實力はリゼットから見てもかなりのレベルに達していた。

アレに勝てる者など全宇宙を見渡してもそうそう見付からないだろう。

そのヒットを倒した以上、敵の實力は力の大会上位クラス……あるいはそれ以上と見ていい。

クウラだけでも手一杯だというのに、まさかの伏兵だ。

「どうでしょうか？ やはり私達の中から誰かが他の宇宙に向かうしかないのでは……」

「だがそれではクウラとの戦いに割く戦力が減るぞ」

21号はすぐに自分達のうちの誰かが他宇宙の救援に行く事を提案するも、ベジータがその問題点を指摘した。

対クウラに備えてリゼットは現在、大量の兵を量産している。

この兵士一体一体が完成ブルーの悟空を上回るだけの強さを備えているので、単純な強さを言えばミラや四星龍が抜けても数で補う事は可能だ。

今は数を優先しているので一体ごとの戦闘力は監獄惑星の時の分身より弱い、少し時間をかければミラや四星龍と同格の自律気弾も作れない事はない……というより、既に何体か作っている。

しかしこの兵士達は分身リゼット同様に気を使えばどんどん弱体化し、最後には消えてしまうという弱点を持つ。

それがなくても、四星龍の体温上昇は単純な戦闘力では測れない強力な能力だ。極論から言えば相手が太陽熱に耐えられないならば、たとえ戦闘力がどれだけ高

かろうが倒せてしまう。

戦闘力と生存能力は全く別物であり、悟空がいくら強くなっても宇宙空間では生存出来ないのと同じように太陽熱に耐えられない生物はどれだけ強くなってもやはり耐えられないのだ。

……とはいえ、それだけ強い者ならば大抵はバリアの一つくらい張れるのでそれで耐えてしまうのだが、四星龍の能力は対格上でも通じる優秀な能力だ。出来れば外したくない。

他にも自律気弾は内包する気の量が決まっているので悟空などのように土壇場で覚醒したり強くなったりは絶対に不可能だし、界王拳で気を自分の中から引き出すなんて真似も出来ない。やったら消えてしまう。

21号と魔人ブウの不死身も再現出来ず、ミラのように時間を超える事も出来ない。

ミラの時間跳躍はやったが最後時の界王神に睨まれてしまうので本当に最後の手段だが、万一を考えると切り札は残したい。

それと忘れられがちだが、彼はトワと融合しているので当然その能力も使える。

つまりトワ同様に『凶悪化』を使う事で味方を強くできる優秀なバッファーなのだ。

また、地獄でドクターゲロによって付与された気の吸収能力も使い方次第では優れた防御役になり、相手の気を取り込む事で一気にパワーアップも見込める。

結局のところリゼットの出す気の戦士はどこまでいっても、『躁気弾の特性を備えた超強力なスーパーゴーストカミカゼアタック』でしかない。

所詮は技の一つに過ぎないのだ。万能には程遠い。

「気の兵士を他の宇宙に回す事は出来ないのか？」

「……流星にそれは遠すぎますね」

ミラの問いにリゼットは悔しそうに首を振る。

「やはり距離があると何か問題が？」

「ええ。宇宙一つを隔てた先まで自律気弾を私から離れた場合に、どうなってしまうのかが分かりません。形を保てず霧散してしまう可能性があります」

ゴッドミッションはリゼットの技である。

ほとんど自動で動いていても、分類的にはリゼットの操作する気弾のようなもの

だ。

故に、その感知範囲外に出てまで自在に動けるほど万能かと問われると、リゼット自身にも答えは分らない。何せ一度も試した事がないのだ。

そう、ゴッドミッションには『射程距離』という問題がある。

普段はリゼットの桁外れな感知能力により射程距離などリゼット自身を含めて誰も気にした事がないし、何より射程距離と言うには長すぎる。

宇宙全域全てカバー可能というのはほとんど射程距離無限と言っている。

第7宇宙の中であれば、それこそリゼットは地球の神殿でお茶でも飲みながらどこにでもこの光の兵士を派遣する事が出来る。

だがその外までは未知数だ。最悪、派遣したはいいが何の役にも立たずに消滅するなんて事も有りえる。

逆に怖いのはメタルクウラが他の宇宙に出現する可能性だ。

あつちは技ではなく量産された個体である。

なのでゴッドミッションのような射程距離など存在せず、クウラがその気になればどの宇宙にも出現するだろう。

……クウラが全戦力を対リゼットに投入してくれている事を願うしかあるまい。
「それなのだがな。他の宇宙には私達が向かう事にしよう」

地球の戦士達も自律気弾も他の宇宙には出せない。

その手詰まりの状況を解決したのはセルであった。

彼の言う『私達』とはつまり、セル、トランクス、バーダックのタイムパトローラーだ。

この三人が動いてくれるならば戦力的にも状況判断力的にも申し分がない。

だが今までは動こうとしなかったのが何故突然動いたのか。

悟空達はそれが気になり、セルがそれを話すように視線で促した。

「実は今、時の界王神から通信が入ってな。

他の宇宙で暴れている連中が監獄惑星のコアエリアに囚われていた奴等だという事が分かった。

つまりはフューによってこの時代に連れて来られた、本来この時代に存在しない者達だ」

「つまりはこれもフューによる時間改変の一部として扱えるわけだ。そうなりやあ

俺達も動く事が出来る」

セルの説明を引き継ぐようにバードックが話し、好戦的に笑った。

やはりサイヤ人として、何もせずにいるというのは彼にとって退屈で仕方なかったのだろう。

「歴史の外から現れた敵は俺達が倒すべき存在です。ここは俺達に任せてください」最後に、短いトレーニングで超サイヤ人ブルーを完成させたトランクスが自信に満ちた声で言った。

リゼットもこの申し出を断る理由などない。

トランクス達三人ならば信じる事が出来る。頼もしい人ですよ。

だから微笑んで頷き、他の宇宙の敵は彼等に任せる事とした。

★

結論から言えば第7宇宙が救援を出すのは一手遅かった。

いや、そもそも情報が入ってからすぐに救援を出す事を決めた彼等を遅いと責めるのは酷な事なのだろう。

かといって第6宇宙の界王神であるフワや第7宇宙の界王神であるシンの動き

が遅かったわけではない。

フワはヒットが敗れてすぐに他の宇宙へ警報を飛ばしたし、シンもそれを受けてすぐに界王星へ飛んで悟空へ念話を飛ばして貰った。

彼らの行動は考え得る限りの最速^{ベスト}とまでは行かないまでも、各々の出来る範囲内で迅速^{ベタ}に動いていたのだ。

ならばこの場合は遅かったというよりは敵が早かったと言うべきか。

第6宇宙が襲撃を受けていたその時点で既に、他の宇宙にも魔の手が伸びていた……ただそれだけの事でしかないのだ。

「つまらん……これが筋肉の宇宙か？ まるで見掛け倒しだ……」

「マッチョな宇宙、よカンバー。酷い名前よね」

「どちらでもいい。名前の割に何だ、この手応えのない連中は……俺が戦うにまるで値せん」

第10宇宙のとある惑星では、力の大会に出場した第10宇宙最強の戦士達が倒れ伏していた。

その前に立つのはコアエリアの戦士であるカンバーとラグスの二人だ。

強敵との戦いを求めるカンバーはそれぞれの宇宙の二つ名を聞き、第10宇宙を名前から最も強そうだと判断して襲撃をかけた。

だが実際に戦ってみれば少しはマシと言えるのは第10宇宙最強の戦士であったオブニ一人だけ。

後は揃いも揃ってカンバーが少し撫でれば吹いて飛ぶような弱者のみ……これでは超サイヤ人になるまでもない。

「けれど宇宙の種の養分にはなるわ。とりあえず一度ハーツと合流するわよ。

この分だとそろそろ第6宇宙の方も終わってるだろうし……それに第9宇宙も片付いている頃でしょう」

不満そうなカンバーとは逆にラグスはどうでもよさそうな態度を取っていた。

別に戦闘狂というわけではない彼女にしてみれば相手の強さなどどうでもいいし、楽に終わるならそれに越したことはない。

ラグスから見て今回の戦いは強い筋肉達磨が弱い筋肉達磨をボコボコにして不満を漏らしているといった程度のものでしかないのだ。

「何と醜い宇宙だ……悪がのさばり、まるで掃き溜めではないか」

第9宇宙も第10宇宙同様に力の大会に出場した、この宇宙最強の戦士達が敗れていた。

それを見下ろし、侮蔑の言葉を吐いているのは白い男だ。

全体的なシルエットは地球人に近いが、髪のように見える部分はよく見るとイカの足のようになっている。

顔立ちはセルに近く、異形ではあるが端正な面持ちだ。

瞳の色は赤く、鋭いその瞳からは揺らがぬ決意と信念を感じさせた。

上半身は服を着ていないが、クウラ最終形態のように身体がアーマー状になっているので半裸というイメージは抱かせない。

注目すべきはその左胸で、そこには第7宇宙の銀河パトロールの証であるマークが刻まれていた。

下は黒いズボンを履き、ベルトからは赤い布が垂れている。

その男は手にした昆で地面を叩き、冷たい口調で話す。

「やはり宇宙は一度ゼロに戻し、創り直さねばならん……この第9宇宙のような

薄汚れた宇宙とは違う、悪人の存在しない善人のみの宇宙を……」

男は憂うように目を伏せ、しばらく沈黙した。

それから少し経って顔をあげ、ハーツと合流するべく歩み始めた。

「力が必要だ。あの白の女神のような、全ての悪人を消し去ってしまえる絶対的な力が……。」

そうだ、私はあの日に理想の体現を目にした……存在するならば、創る事は出来る……！」

彼の目にはもう、第9宇宙は見えていない。

その瞳にはただ、己の理想しか映っていないかった。

モロ編、宇宙争乱編（監獄惑星編）、復活の「C」編に加えてワールドミッシェン編も参戦！

【シーラス】

最後に登場したイカ頭の男。

ドラゴンボールヒーローズ・ワールドミッションのラスボス。

初代タイムパトローラーで、元々は善人だったのだが救える命を救えない（歴史に不用意に干渉できない）タイムパトローラーの任務の中で次第に歪んでいき、悪の存在しない善人だけの宇宙を創造する事を夢見始める。

その野心が遂に暴走して始まりと終わりの書を燃やそうとしたが、時の界王神によって時の狭間に追放されてしまった。クロノアさんぐう有能。

このSSでは合体ザマスが出演出来ないのです、その穴埋めとしてコアエリアの戦士に参加して貰った。

多分フューのアホが時の狭間から拉致っていたのだろう。

単純な戦闘力は超サイヤ人のトランクスを一蹴するレベルだが、ロゼのブラックからは『自分より弱い』と断言され、シーラスもそれを否定せず自分が非力である事を認めた。

その事から彼自身の強さはブルーの悟空未満と思われる。

しかし無駄に自信満々なオレンやカミンと違って己の非力を自覚しており、頭もいいのでそれを埋める為にAI生命体を作ったりする。

ちなみにこのSSでのシーラスの最終目標はヒーローズ本編とは違う。

暴走リゼット「第7宇宙全域対象悪人の悪の心だけ問答無用で消し去って善人だけの宇宙へ変える識別破壊アタック！」

巻物閲覧中のシーラス「こ、これだ……！！ これこそ私の望む到達点……！！」

時の界王神（アカン）

【崩壊する地球（第6）で気絶してたヒット達はどうかやって助かった？】

前回宇宙の種のエネルギー吸収のせいで気絶してたロタが崩壊前に目覚めて全員を拾い、ギリギリで脱出。その後連絡を終えたフワが瞬間移動で駆け付けて全員を界王神界へ避難させた事でかろうじて助かった。

ロタは今度こそ何故ドクターと呼ばれているか教えようとしたが、誰も話を聞いてくれなかった。

第 20 話 コアエリアの戦士 VS 第 11 宇宙

やべ、予約設定ミスってた……。

監獄惑星崩壊によるコアエリアの戦士解放より半日が経過した。

僅か半日で既に第 6、第 9、第 10 宇宙の三つが壊滅状態に追いやられ、それだけの宇宙が誇る精鋭達が敗れ去った。

恐るべき襲撃者達を前に、本来対処すべきはずの破壊神は未だ戻らず、破壊神以外の神々では対抗すら出来ない。

しかしだからといって全ての宇宙が一方的に怯え、踏みにじられているわけではない。

未知の襲撃者達を相手に一步も退かずに抵抗している宇宙もまた存在していた。

「貴様等にこれ以上、我等が宇宙を好きにはさせん！」

破壊神はいなくとも、破壊神候補ならば話は別だ。

第11宇宙でコアエリアの戦士達はこれまでにない抵抗を受けていた。

この第11宇宙はあの力の大会でも優勝候補として名を連ね、第七宇宙と渡り合っ
てみせた強豪宇宙だ。

第11宇宙を守るプライド・トルーパーズのリーダーであり、破壊神候補でもある
トッポはビルス等の破壊神と同じ紫のオーラを纏い、破壊の力を以て侵略者に立
ち向かっていた。

「破壊神の力か……面白い！」

しかしトッポと戦っているのはパワーだけならば本物の破壊神すら凌駕する悪の
サイヤ人、カンバーだ。

破壊のオーラすらも悪の気で相殺し、本来殴り合いが成立しないはずのトッポを
相手に超サイヤ人2の状態で互角以上の戦いを繰り広げていた。

金に変色した髪を振り乱し、全身からはスパークが迸る。

トッポの拳とカンバーの拳が正面から衝突し、余波で周囲の建造物が根こそぎ消
し飛んだ。

「第11宇宙を……舐めるなよ！」

「あははっ、強い強い！」

「姉さん、こいつ手応えあるよ！」

トップから少し離れた場所では最高速モードとなったディスポがオレンとカミンの姉弟を相手に決死の戦いを見せていた。

二人では捉えられない超速で死角に回り込み、一方的に拳と蹴りを叩き込み続ける。

だが心理的に余裕があるのは、むしろ押されているように見える姉弟の方であった。

二人は強い再生能力を持ち、少しくらいのダメージならばすぐに治してしまえる。ならばこの二人を倒すのに必要なのは再生能力など無視できる圧倒的なパワーだ。

一撃で KO されてしまえば再生もクソもない。

だがディスポの攻撃は軽かった。

彼の強みは圧倒的なスピードにあり、ジレンやトップのような拳の重さはない。無論スピードを乗せて拳を打っているのだからその分の威力はしっかりと出てい

るし、助走をつけて殴れば普段以上の重さを出す事は出来る。

だがやはり根本的な部分でパワーがないのだ。

デイスポはそのスピードで格上にだろうと勝つ事が出来る。

だがスピード頼りである為に、それが通じない場合は格下にも負けかねない。

その脆さを既にオレンとカミンは見抜いている。

だから二人はデイスポの必死の戦いを、余裕をもって受けているのだ。

「勝負あったわね」

「……そのようだな」

その戦いを上空から見ているのはコアエリアの戦士であるラグスと、第九宇宙を壊滅させた男であった。

隣には子供用の絵本に出そうなバイキンを丸っこくしたような小さな小さな物体が浮遊しており、戦いを凝視している。

「シーラス、貴方は戦わないの？ そのアムズっていうAI生命体に戦闘データを積みませるんでしょ？」

「既にデータの収集は始めている。問題はない」

シーラスと呼ばれた男は素っ気なく言い、戦いへと視線を戻した。

彼はコアエリアへ収監される前は時の狭間に封じられていた男だ。

その前は時の界王神の下で働くタイムパトローラーであり……彼はその潔癖さ故に時の界王神と袂を分かった。

彼には悪が我が物顔で歩いている事が我慢出来なかったのだ。

それがたとえ過去の、既に過ぎ去った歴史であろうと罪なき者が殺されるのが見過ごせなかった。許せなかった。

全てを救いたいと願い、そして救えない事が歴史で確定してしまっている今の宇宙を呪った。正義の脆さを嘆いた。

何故優しき者が平和に暮らせぬのか。何故悪がいつまでも滅びないのか。

やがて彼の正義感は暴走し、終わりと始まりの書を燃やす事で新たな歴史を一から創造しようと企て……時の界王神によって時の狭間に追放された。

そして今、彼の前では今の宇宙の脆い正義が打ち砕かれようとしている。

どれだけ正義が抵抗しても、今の宇宙は悪が笑うように出来てしまっている。だから救えない。守れない。

宇宙を一から創り直さぬ限り、この歪んだ世界は正せないのだ。

そう彼は信じていた。

「……そろそろ決着だな」

シーラスがそう言うと同時にデイスポが倒れた。

最高速モードはその名の通り、デイスポの最高速度で敵を寄せ付けずに叩き伏せる本気の姿だ。

だがそれほど強力なのに何故普段からそれをやらないのか。何故切り札なのか。それは至極当然の事で、動き回れば疲れるからに他ならない。

当然だ。あれだけの速度で休みなく動いているのだから疲労しないはずがないのだ。

故にこそデイスポは一度最高速モードになったからには、スタミナが切れる前に敵を倒す必要がある。

これが場外負けのルールのある力の大会ならば格上だろうが殴り続ける事で場外まで運ぶ事も出来ただろう。

だがルールのない殺し合いでは、オレンとカミンの再生能力を突破出来ないデイス

スポに打つ手はない。

彼のスタミナ切れは目に見えていた結末であり、そして彼に遅れてトッポも倒れ伏した。

その前に立つカンバーは超サイヤ人 3 へ変身しており、先程までとはパワーが違う。

そして他のプライドトルーパーズは……他の惑星へ赴いていたジレン以外の全員が、既に地に倒れていた。

その光景を見てシーラスは憂鬱そうに話す。

「正義は……悲しいほどに弱いな」

その声色にはトッポ達への嘲笑などの感情はなく、ただ哀れみだけがあった。いくら正義を謳っても、いくら信念があっても結局は力だ。

力がなければ何も守れない。悪ばかりが強いこの世界ではただ力なき者は踏みにじられる。

だからこそ、とシーラスは思う。

やはり宇宙は最初の時点から既に間違えているのだ。

それはそうだ。何せ神々の頂点がああ全王だ。

力だけを持った幼い子供だ。

そんなものを頂点に据えた宇宙が正しいわけではない。

だからこそシーラスは、打倒全王を掲げるハーツに共鳴した。

全ては、悪の存在しない正義の宇宙を創る為に……。

「――正義を弱いと云ったか？」

――威圧感が、惑星全体を襲った。

その衝撃にコアエリアの戦士全員が咄嗟に臨戦態勢を取り、無意識のうちに身構えた。

彼等は全員が本能で悟ったのだ。

何か来ると。恐ろしいまでの力を持つ何か、光速で――いや、それ以上の速度で接近していると。

その予感正しく、空から紅の流星が降り注いでカンバーを痛烈に殴り飛ばした。

「ぐああああ!？」

カンバーの巨体がいとも簡単に飛び、地面を削る。

その攻撃の主は地面を強く踏みしめ、砂塵の向こうからゆっくりと歩み出た。外見は……お世辞にも強そうとは言えない。

第六宇宙と第七宇宙の試合の時に審判を務めていたグレイのような宇宙人をそのまま筋肉質にしたような単純すぎる外見だ。

服装もトッポと同じプライドトルーパーズのユニフォームであり、それがより一層見栄えの悪さを強調してしまっていた。

だが——強い。桁外れに。

全員がその事を悟り、思わず距離を取った。

「お、おお……ジレン！ 来てくれたか！」

「待たせたな」

トッポが見上げるその男こそ第11宇宙最後の砦にして、この宇宙の英雄だ。

破壊神をも超えた別次元の男——灰色のジレン。

単体戦力ならば並み居る第七宇宙の強豪すらも抑えて全宇宙一を誇る強さの体現

者。

彼はコアエリアの戦士達など、まるで視界に入らないかのようにトッポの前に屈んだ。

「よく持ち堪えてくれた。後は俺に任せろ」

「ジ、ジレン……お前の故郷は……」

「お前達のおかげで避難が完了した。恩に着る」

「そうか……よかった……」

ジレンだけがこの危機に遅れた理由。

それはトッポやカーセラルが、ジレンだけを彼の故郷の保護に向かわせたからだ。ジレンはかつて家族や師を殺され、以来ずっと報われない戦いを続けていた事をプライドトルーパーズの面々は知っている。

だからこそ彼等は、迷うジレンを故郷に向かわせたのだ。

ジレンが到着するまでの間くらい持たせてみせる……そう約束し、そしてその誓いは果たされた。

気を失うトッポへ優し気な視線を向け、そしてジレンは立ち上がる。

その目の中には一転して、悪への怒りのみが燃え上がっていた。

「あはははっ！ 来たよ来たよ！ ジレンが来た！」

「いいわ！ 面白くなってきた！」

宇宙最強の男の登場にオレンとカミンが笑い、無邪気にはしゃいだ。

この二人にとってはジレンの怒りも正義も知った事ではない。ただ自分達が楽しめるかどうかだ。

ツフルの姉弟が笑みを浮かべながらジレンに殴りかかる。

それに対しジレンはノーガード。何の構えも取らない。いや、構える必要がない。オレンとカミンの拳はジレンに届く事すらなく、彼の発している気の壁で止まってしまうていた。

「無駄だ。お前達では俺には永遠に勝てん」

「な……何を……!？」

ジレンはまるで興味がなさそうに言い、軽く腕を薙いだ。

それだけでオレンとカミンが吹き飛び、壊れた玩具のように地面を転がる。

そうしてから彼はカンバーへ狙いを定め、ゆっくりと歩き始めた。

「ククク……分かるぞ。貴様強いな……！　俺と……戦えええええ！」

「……………」

カンバーがジレンの強さに歓喜し、右ストレートを繰り出した。

彼のパワーは流石に気の防御を突き破るが、ジレンはまるで動じずにカンバーの拳を掴む。

ジレンの超握力でカンバーの拳が軋み、その顔が苦痛に歪んだ。

その隙を逃さずにジレンの剛腕がカンバーの腹へ突き刺さり、カンバーが一步二歩と後ずさる。

たったの一撃で膝が震え、マスクから血が零れていた。

「く、くくく……いいぞ……なんという強さだ……！」

それでこそ、俺の敵に相応しい！　お、俺と……もっと戦え！」

「……獣め。お前の頭にはそれしかないのか」

カンバーが気を上げ、更に力強さが増す。

服が破れ、目からはほとんど理性が失われて白目を剥いていた。

それに対してジレンも紅の気を解放し、正面から受けて立つ。

「そりゃああー！」

カンバーが正面から剛腕を放つ。

ジレンはそれを手の甲でいなし、反撃のストレートをカンバーの顔へ叩き込んだ。マスクがひしゃげ、へし折れた歯が宙を舞う。

更に右、左、また右とジレンが拳を放ち、カンバーが左右へ揺れる。

重い打撃音が響く度に血が舞い散り、地面を赤く染めた。

カンバーもダメージを無視して反撃するが、ジレンはパワーだけの男ではない。苦し紛れの獣の攻撃など軽々と防ぎ、逆に痛烈な拳打を浴びせた。

忘れてはならない。

ジレンは、身勝手の極意を使わずに体術だけで身勝手の極意と渡り合った男なのだ。

「パワーは認めよう。だがそれだけだ」

かつてジレンは力の大会において技巧の極致とも呼べる女と戦った。

リゼットの巧妙で予測すら出来ない技の数々と比べればカンバーの攻撃の何と直線的で捻りのない事か。

かつてジレンは力の大会において武道の極致とも呼べる男と戦った。

あの孫悟空の重厚で熱い拳と比べてカンバーの拳の何と空虚で寒い事か。

大会では敵同士だったが、それでもあの二人はジレンの心に新たな風を呼び込んでくれた。

こんな仲間を頼らずに独りよがりで戦っていた男を報われていいと言ってくれた。凄いい奴だと……また戦いたいと言ってくれた。

ならば、こんな所でこんな下らない男に後れを取るわけにはいかない。

いつか孫悟空と再戦する日に……リゼットの前に立った時に……胸を張って、俺は強くなったと言う為に。

ジレンの瞳の中にある目指すべき果てはこんなに近くない。

ジレンの目指すべき壁はこんなに薄っぺらくない。

今は先にいる孫悟空に追いつく為に……こんな所で、道端に落ちている石ころになど躓いてはいられないのだ。

「お前の拳には欲望しかない」

ジレンの目が光り、数多の打撃がカンバーの全身を打ちのめし、宙へ舞い上げた。

「そんな拳では……俺には届かん！」

ジレンが吐き捨てるように言い、宙を舞うカンバーに一瞬で接近して腹へ蹴りを叩き込んだ。

繰り出された拳を受け流し、膝と肘で挟み込んで骨を破壊する。

怯むカンバーの前で前方に回転……遠心力を乗せて踵落としを脳天に決め、更に急降下。

地面に墜落し、カンバーを踏みつけた。

「ぐおおああ！」

カンバーが蹴りを出すも、これを掴んで振り回し、地面に叩き付ける。

頭を掴んで引きずり起こし、カンバーの腹に掌を当てて気弾を叩き込んだ。

カンバーはされるがままに吹き飛び、ジレンはそんな彼に背を向けて腕を組む。

——直後、爆発。

カンバーの全身を爆炎が覆い、全身が焼け爛れたカンバーが地面に墜落した。

だがコアエリアの戦士はカンバーだけではない。

ジレン目掛けていくつものガラスの破片が降り注ぎ——ジレンが睨んだだけで止

まった。

「っ！ そんな……私のガラスを、目力だけで……」

ジレンを奇襲したのはラガスであった。

彼女は物体をガラスに変え、あるいは生成して操る能力を持つ。

勿論ガラスといってもその強度は普通のガラスとは比較にならず、超サイヤ人の肉体だろうが貫いてみせるだろう。

しかしジレンはそのガラスの雨をあろう事か、目力だけで止めてしまっていた。

「邪魔だ」

一言呟き、ジレンが一瞬でラガスの上へ移動した。

あまりの速度にラガスは反応すら出来ず、呆けた顔でジレンを見上げる。

だが少女だろうが悪に容赦はしない。

ダブルスレッツジハンマーがラガスに炸裂し、その華奢な身体を地面へ叩き落した。

悲鳴を上げる間すらない。

砂塵が晴れた時、そこにはクレーターの中央で失神している……全身が罅だらけになったラガスの姿だけがあった。

「なっ……何だと……」

あまりに一方的過ぎるジレンの戦いぶりにシーラスが狼狽し、声を震わせた。

そんな彼を見てジレンは一言、軽蔑するように言う。

「下らん負け犬の目だ」

「な……に……」

「己の理想を諦め、楽な道に逃げている男の目をしている。そのような輩に正義を語る資格などない」

言うだけ言い、ジレンの剛腕がシーラスの顔面を殴り飛ばした。

棍で咄嗟にガードしたものの、何の意味もない。

シーラスが地面に激突し、瓦礫が舞い上がった。

そこに悠々と着地し、ジレンは静かに残っている敵を見る。

「ね、姉さん……こうなったら……」

「ええ、合体しかないわ……けど、そんな暇は……」

ジレンを前に、再生能力のおかげでまだ意識を保っていたオレンとカミンが切り札の使用に踏み切ろうとしていた。

彼等の切り札は合体だ。姉弟が一つになる事で一人の時とは比較にならない強さを得る事が出来る。

だが問題は、それをみすみす許すほどジレンは遅くないという事だ。

しかし二人の予想に反し、ジレンは動く様子を見せない。

それどころか腕を組み、屈辱の言葉を口にした。

「待ってやる」

「な……き、きさ、ま……！」

「待ってやると言ったんだ。お前達にまだ隠された力があるというのなら、それを全て出すといい」

この言葉にオレンとカミンの顔が同時に憤怒に染まった。

最強を自負する二人にとってジレンの態度は、舐めているとしか思えないものだ。だがこれがジレンの流儀なのだ。

あえて相手に全力を出させ、それを正面から打ち砕く事で己の無力さを思い知らせる。

それはある意味何よりも残酷な、圧倒的な正義による悪への処刑であった。

「後悔させてやる！　でやああああああ！」

オレンとカミンが同時に飛び、衝突すると同時に一人の戦士へと生まれ変わった。カミンとオレンが融合する事で生まれた超戦士——カミオレンが咆哮をあげながらジレンへ拳を叩きつける。

だがジレンは一步も動かずにカミオレンの拳を掌で受け、そして握力で彼の拳を握り潰した。

「ぐがっ、あああああ！」

「やはり、こんなものだろうな」

掴んでいる手と逆の腕でカミオレンの頭部を殴りつける。

それだけでカミオレンはひしゃげ、地面に埋まってしまった。

腕も足も、首の向きすらもが滅茶苦茶だ。たったの一撃で全身がへし折れてしまっている。

「ウガアアアアッ!!」

カンバーが血を撒き散らしながらジレンの背に飛び掛かる。

しかしジレンはこれにも一切動じる事なくカンバーの顔を掴み、持ち上げる。

「耐え抜いたか。しぶとさだけは大了なものだ」

相手を僅かばかり認めつつ、ボディブロー。

カンバーの腹筋を貫き、衝撃が身体を貫通して背中から飛び出した。

一撃で内臓はおろか骨すら碎き、カンバーが痙攣する。

「むん！」

カンバーを仕留めるべくジレンが拳を握った。

だがその瞬間、全身に負荷がかかり地面に膝をついてしまう。

どうやらまだ敵は残っていたらしい……そう思い見上げれば、そこには手を翳す

ハーツの姿があった。

「いいねえ、ジレン……素晴らしい強さだ。まさに宇宙最強の名に相応しい。

だが彼等は大事な同胞だね。ここで殺されるわけにはいかないんだ。

そう、俺の理想の実現の為に」

「……」

余裕を滲ませて話すハーツであったが、その笑みが凍った。

超重力をかけられて身動きできなくなったはずのジレンが、まるで何事もなかつ

たかのように立ち上がろうとしているのだ。

重力が弱かったか？ そう思い強めるもジレンは止まらない。

彼は揺るがぬ正義を秘めた瞳でハーツを見上げ、そして更に気を解放した。

紅蓮の気が炎のように揺らめき、その輝きはどこか身勝手の極意のオーラと似ている。

額や腕には血管が浮き出し、膨張した筋肉によってスーツは内側から破れた。

「悪党共の……理想など……」

静かに。だが燃え盛る怒りの炎を秘めて。

ジレンが悪を決して許さぬ鋼の意思でハーツを睨む。

そして一瞬で重力を振り切り、ハーツの目の前まで接近した。

「――下らんッ!!」

ジレンの巨拳が、慈悲なくハーツの腹にめり込んだ。

【戦闘力】

ジレン…60兆

本気…130兆

限界突破（半裸）…150兆

破壊神を超えた男。

相手を落とさなければ勝ちにならないルールなのに落とさずに背中を向けて「戦士よ眠れ」とか決め台詞を言ってしまう舐め癖の持ち主。

これといった異能は有していないが単純なフィジカルと気のパワーで何もかもを捻じ伏せる。

劇場版で「実は素の強さは悟空やベジータと大差ない」という設定が出たが個人的にこの設定は大歓迎。むしろ素の強さであれだと「じゃあ界王拳習得すればジレン無敵じゃん」になってしまう。

なのでジレンは「気の操作による戦闘力の上昇が滅茶苦茶上手くて、それだけで界王拳や超サイヤ人以上の戦力上昇を生み出している」とする。

なので無駄に負担のかかる界王拳系列の技は必要ない。

アニメでは広告の為に敵キャラにも見せ場を与えなければならぬのでカミンやオレンでもそこそこ戦えたりしたが、実際は究極カミオレンすら一撃 KO するくらいに実力差が開いていた。

そもそも広告アニメでは身勝手と渡り合った限界突破モードどころか、本気を出した時の炎のようなオーラすら出していないので相当接待していた事が分かる。

この SS は広告ではないので敵に見せ場を与える必要はない。結果、今回のような事になってしまった。

こらああ！ 少しは手加減しろお！

ジレン「手加減とは何だ……？」

ハーツ…5兆

スーパーハーツ…50兆

宇宙騒乱編のボス。素の状態でもヒットと渡り合えるほど強い。

だが単純な戦闘力よりも重力操作と読心の能力が厄介。

スーパーハーツは最初はブルーの悟空に圧倒されたりもしたが、本気を出したら瞬殺してしまったのでブルーでは相手にならないほど強い。

何故悟空は界王拳を使わなかったのだろう。

このSSではジレンが接待プレイをしてくれないので、いきなり大ピンチである。

カミオレン…36兆

カミンとオレンが融合してパワーアップした姿。

強くはなったが描写を見るにポタラ合体やフュージョンほどの急激なパワーアップは果たしていないように見えるので倍率はフュージョンの半分とした。

綺麗なベジータには一方的にポコポコにされる程度の実力。

一応、身勝手『兆』の悟空の攻撃数発に耐えるほどの耐久力がある。

ちなみに悲しい話だが、宇宙の種を取り込んで究極カミオレンになってもジレンの敵ではない。

その究極カミオレンは漫画版で不意打ちとはいえ超3カンバーと破壊神トッポを一撃KOしているので超3カンバーより強く見えるが、ジレンに一撃KOされてしまった。

しかしそのジレンより強いと思われる究極ハーツはブルーゴジータにポコポコにされ、そのブルーゴジータと同格のはずのベジットブルーをカンバーが圧倒したわ

けで（漫画版では互角）……うん、わけわからん。

やはり、ヒーローズで使っているポタラは不良品なのでは……？

ラグス… 1兆〜2兆

恵まれたキャラデザと『ガラス族の生き残り』という何か重そうな設定があったのに、一切活かされる事なくメタルクウラに戦闘描写すらなくやられ、そのまま出番が終了してしまった子。

肝心の戦闘力だが、殴り合うシーンがないので分かりにくい。

身勝手『兆』の悟空を KO したので強く見えるが、あれは言ってしまうえばカッチン鋼を創造して敵にブン投げているのと同じようなものなので戦闘力の数値としてはいまいち参考に出来ない。

ぶっちゃけ界王神でも同じ事が出来る。

その後、超サイヤ人 2 の未来トランクスでもそこそこ戦えてしまったので、特殊能力が強いタイプだと思われる。

シーラス… 1兆8000億

タイムパトローラーの未来トランクスを一蹴するくらいの強さはあるが、明確にブラック（ロゼ）未満であると明言されてしまった男。

なのでこのSSではどう鼻肩しても2兆未満確定である。

アムズと融合しなければ大して怖い相手でもない。

とはいえ融合前でも超4の悟空やベジータ相手に戦えているので、素の状態でも強い事は強い。

第21話 正義の化身

ベルモッド「全王様に呼び出されたせいでジレンの活躍を見逃してしまった俺の哀しみは計り知れない……………」

「ごはッ……あァ！」

ジレンの拳が深々と腹にめり込み、ハーツが苦悶の声をあげた。

かろうじて貫通はされていない。

インパクトの瞬間に咄嗟にハーツが気を跳ね上げてヒットを倒した時の本気の姿——名付けるならば『超^{スーパー}ハーツ』とでも呼ぶべき姿になり、その上で更に重力のキューブを自分とジレンの間に挟んで防御した事で、刹那のタイミングではあったが命拾いをした。

だがそれでも尚、ジレンの剛腕はキューブを砕いてハーツに突き刺さり、大打撃を与えていた。

続けてジレンが拳を打ち下ろすも、これを受けては一撃で意識をもっていかれると判断したハーツは逃げるように離脱してジレンと距離を取った。

「予想以上だ……いいだろう、俺の本気を見せてやる。震えろ……俺の力に！」
ハーツの目つきが変わり、キューブ状のエネルギーが全身を取り巻いた。

コートを脱ぎ捨て、気を最大まで高める。

そしてジレンに掌を翳し、重力を最大で叩き込んだ。

「ぬっ……ううう……ッ」

ジレンの高度が下がり、力むように歯を食いしほる。

強さとは決して気の多寡やフィジカルによる戦闘力だけで決まるものではない。
一芸に秀でた異能があれば、それは時に戦闘力を凌駕する。

そうした特殊能力はある程度の差があれば無効化されてしまう傾向にあるが、それはあくまで相手に直接働きかけるような能力の場合だ。

例えば餃子やフリーザの使う超能力などは、相手との差が開きすぎてしまえば何の効果もない。

しかしハーツの持つ異能は重力の操作であり、相手ではなく空間に作用する。

ならばジレンといえど通じない道理はなく、ジレンには現在数千……いや、数万、数十万倍という超重力が押し掛かっていた。

だが、ここにいるのはジレン。

破壊神をも超えた男だ。

「ぬううう……おおおおッ！！！」

ジレンが吠え、紅蓮の気が全身から放出された。

彼に気取った異能の類はなく、変身もない。

単純なフィジカルと気のパワー、そして卓越した技術で何もかもを捻じ伏せる。

シンプルに強くて速くてでかくてタフで疲れ知らずで、そして正確無比。

それがジレンの強さだ。

単純明快であるが故に弱点らしい弱点がない。

重力をかけられたままジレンが飛び、ハーツを殴り飛ばした。

「ぐはああッ!？」

ハーツが吹き飛び、いくつもの建造物を突き破って地面を抉った。

それでも勢いが止まらずに二転三転と回転し、まるでスーパースポールのように何

度もバウンドしてようやく地面に倒れる。

「ば……馬鹿な……っ！ 化け物か……君は……！」

ハーツが激しく咳き込み、地面を赤く濡らした。

視界が何度も暗転し、全身がガクガクと震える。

この震えがダメージによるものか、それとも別の要因によるものかは分からない。
ただ、一つだけ分かった事がある。

——このままでは絶対に勝てない。

それだけの、残酷な事実だけをハーツはやっと正しく認識した。

「と……とんでもない奴だな、君は……だが……切り札があつてよかった……」

ハーツはよろめきながら立ち上がり、両手を広げた。

すると彼の後ろに巨大な水晶——宇宙の種が現れ、ハーツに近付いていく。

「まだ完全ではないが、試すでしょう。この宇宙の種の力を！」

宇宙の種が眩い光を放ち、ハーツと一体化した。

ハーツの全身が黄金に輝き、感じられる圧力が一気に上がる。

いくつもの宇宙を壊滅状態に追い込むことで得た超パワーをその身に宿すことで

ハーツは己の力を高めたのだ。

「第2ラウンドだ！」

「何度来ようが同じだ！」

ハーツが飛翔し、ジレンが迎え撃った。

激しい打撃の音が連続して響き渡り、衝撃波が何度も拡散する。

ハーツの重力操作は戦闘力とは無関係の所にある異能だ。

したがってその出力は通常時だろうが超ハーツだろうが変化せず、先程同様にジレンに振り切られるのは分かっていた。

だが今はハーツも全力に加えて宇宙の種の後押しを受けており、スピードもパワーも増している。

だというのに、重力を浴び続けているジレンがそれと互角に渡り合うとは何の冗談だろうか。

しかもハーツは心を読み、ジレンの攻撃を先読みし続けているのに、全く有利にならない。

「ぐっ!? こ、こいつ……」

攻防の最中、ハーツは早くも痛みを訴え始めた己の四肢に驚愕した。

互角の攻防だと思っていた。だがそうではない。

ジレンの一撃一撃、その全てが確実にハーツの手足にダメージを刻んでいる。

重力で縛っても尚、ジレンは強い。

ジレンのダブルスレッズハンマーがハーツに叩き込まれ、ガードしたというのにハーツの身体が地面に高速で激突した。

爆発したように砂塵が舞い上がり、隕石でも落ちたかのようなクレーターの中心でハーツが痛み呻く。

そこにジレンが飛び込み、回転してハーツの腹を踏みつけた。

咄嗟にハーツはジレンにかかっている重力を操作して自分から遠ざけようとするが、それでもジレンは止まらない。

「ご、お……!?!」

ハーツの口から夥しい血が吐き出された。

そのハーツの髪を掴んで無理矢理引き上げ、今度は胸に豪腕をめり込ませた。まだ終わらない。ジレンの拳が弾幕となり、ハーツを痛めつける。

ハーツもやられっぱなしではない。ジレンの首に蹴りを放ち、その反動で離れて気弾を連射してぶつけた。

だが煙幕の中から飛び出したジレンの瞳が輝き、目力だけでハーツの動きが止められ、更に殴られる。

間違いなく重力はかけている。

ハーツの重力操作は、ただ上から下に働くような単純なものではない。

常にハーツに有利になるよう働き、ジレンが攻撃をする際には重力というよりはむしろ斥力となってジレンを遠ざけようとする。その威力を全力で殺しにかかる。重力と言えど、上下左右の方向は問わない。

この力により常にジレンの攻撃は軽く、逆にハーツの攻撃は重くなっているのだ。実際それは間違いなく効果を発揮しており、ジレンの攻撃によるダメージを何十分の一にまで削ぎ落している。

だというのに——重い！

ジレンの拳の一発一発、その全てが驚くほどの威力でハーツの命を削る。

弱体化させてこれか……威力を殺してこれか！

鮮血に染まる視界の中でハーツはジレンという男の底知れない強さに改めて驚愕していた。

（ま、不味い……このままでは……ッ！ 俺の理想を叶える前に、こ、殺される……）
ジレンという正義の化身を前に、ハーツの心に久しく忘れていた死への恐怖が蘇りつつあった。

何とか身体を動かしてジレンから距離を取り、荒く息を吐きながらジレンを見る。ジレンの立っている場所は常にかかり続けている超重力によってへこみ、崩落している。

だというのにジレンだけが浮遊してその場に残り続ける。

全身に力を込め、血管を浮きだして鬼の形相で佇んでいる。それが今は恐ろしく思えた。

宇宙の種がこの身に完全に馴染んでいない事を考慮しても、異常な強さだ。

「恐ろしい強さだ……俺をここまで圧倒するとはな。

だが、だからこそ惜しい……君の不自由さが哀れでならない。

なあジレン……その力を、人間の為に使わないか？

俺と共に全王を倒そう。人間の真の自由の為に」

「人間の自由だと？」

「そうだ。俺達は打倒全王を目指している。

全王が……いや、神々がいる限り人間は真に自由になる事は出来ない。

全王の気紛れ一つでいつでも消されてしまう。

君のその磨き上げた力も……そこに至る過程も……育った世界も人々も、善も悪も関係なく、子供が玩具に飽きたら捨てるのと同じように消されるんだ。

俺はその真実に気が付いた時、いてもたってもいられなくなった」

ハーツの言葉がどこまで本気で、どこまで本当なのかはジレンには分からない。何故ならジレンには心を読む力など備わっていないのだから。

だが、多くの悪人を見続けてきたジレンから見ても、少なくともハーツは嘘を吐いていないように見えた。

「俺は人間が……世界が好きだ……」。

今はこうして敵対しているが君の事も尊敬している。

正義を！ 君の魂を！ パワーを！ 尊敬している……。

ああ、人の輝きは素晴らしい。どんな逆境にあっても生きようとする魂こそが偉大なのだ。

だが全王はそれを理解しない！ 関心も持たずに消し去ってしまう」
大仰な手ぶりを交え、ハーツは演説するように語る。

その口調には熱が籠り、彼の持つ人々への愛と神々への怒りが絢交ぜになっているように感じられた。

「俺は……フューという男に過去の歴史をいくつも見せられた。その中には全王に消された世界もあった……力の大会で君達が消される世界もあった……。

神の一方的な侵略を受け、必死に抗った眩しい人々が無情に消され、世界ごと全王に消される……救いのない世界もあった……。

この理不尽を知った時、俺は何かしなければならなかった！ 何もせずにはいられなかった！

知ってしまった以上、見て見ぬ振りは出来ない。

だから俺は！ 人間が真に自由に生きられる世界を創る事を決めたのだ！
しかし全王が生きていては、それも消し去られてしまうだろう。

だから俺は全王を倒すと決めた！　そして真に人間が自由に生きる、神のいない俺の理想の世界を築き上げるのだ！」

ハーツはそこまで語り、今までとうってかわった優しい笑みを浮かべた。そしてジレンへ手を差し伸べる。

「ジレン……君もまた、世界の不条理さを嘆く男……世界の理不尽さを知っている男……」

俺と共に来い……俺と君は分かり合える。俺達で世界を救うんだ。

……同志になろう……ジレン……」

静かな、しかし妖しい色気を含んだ声でジレンを魔道へと誘う。

彼の言っている事は決して出鱈目なものではない。

全王が気紛れ一つで世界を消してしまう存在だという事もまた事実であり、それはあの力の大会でジレンも思い知った事だ。

それでも、ジレンの心に迷いなどない。

だから差し伸べられた手を無視して拳を放ち、ハーツも読心で読んでいたそれを難なく回避した。

「下らん。その人間を攻撃しておいて、人間を救うなどと宣う男を俺が信じるとでも思ったか」

「ふ……確かに、それを言われちゃあ反論出来ないな。俺——矛盾してるからさあ！」

ジレンとハーツの腕が衝突し、再び攻防が再開された。

ハーツが高速で飛び回り、反動を無視して自らに重力操作をかける事で實力以上のスピードを出す。

だがジレンは己を中心として全方位に紅蓮の気を放ち、ハーツを捉えた。

動きが鈍ったハーツの足を掴み、急降下して地面へ振り下ろした。

惑星が大きく揺れ、そのまま大地を抉りながらハーツを振り回す。

だが直後、背中から予測せぬ気弾を受けてよろめき、ハーツを離してしまった。

「オッレ！ トォ……タタカエエ……」

「……しつこい奴め！」

気弾を撃ってきたのは、仕留めたはずのカンバーであった。

マスクは完全に壊れて口が剥き出しになり、鼻は潰れて歯はほとんどへし折れて

いる。

片目は潰れ、腕は滅茶苦茶に折れ、足からは折れた骨が肉を突き破って外に露出している。

身体も至る箇所に焼け跡と打撃痕があり、抉れ、へし折れ、無事な箇所が見当たらない。

まさに半死半生……いや、もう死んでいない方がおかしい。

既に意識もないだろうに、それでもカンバーは闘争本能だけで立ち上がっていた。元々カンバーは本能だけで生きているに等しい男だ。

故に意識が失われ、理性が飛ぼうとも……身体がある限りは動き続ける。

その様はまさに戦闘欲に支配された動く屍であった。

殺さない限りカンバーは止まらない。

「ハアアアアア……ッ」

口を大猿のように大きく開き、頬が音を立てて裂ける。

口から唾液と血を滴らせ、まるで萎える気配のない闘争心だけでカンバーは最高の強敵へと向かった。

その顔面にジレンの拳が突き刺さって吹き飛ばすも、今度はハーツがジレンの背中を蹴る。

「ぬううう……小賢しい奴等め！」

ジレンが怒りに吠え、カンバーとハーツの頭を掴んだ。

それを衝突させて額を割り、更に二人同時に地面に叩き付ける。

だがジレンから離れた地面が盛り上がり、ハーツとカンバーがそこから飛び出す。地面に叩き付けられると同時にジレンの手から脱出して地面を掘り進んで距離を取ったのだ。

そのまま助走をつけて二人が並んでジレンへと挑みかかった。

「おおおおおおおッ!!」

ジレンが吠える。

「だあああああああッ！」

「グガアアアアアアアアアッ!!」

ハーツとカンバーも負けじと吠える。

三人が衝突した空間が捻じれ、その圧倒的なパワーにより罅割れた。

そして打撃戦。ハーツとカンバーが全力で攻撃し、ジレンもたった一人で互角以上で渡り合う。

ハーツとカンバーの拳が同時にジレンの顔にめり込んで気功波を発射するも、ジレンは決して倒れない。

彼の後ろには守るべき人々がいる。守るべき世界がある。

仲間達がいる。そして二度と譲ってはならない正義がある。

あの大会で孫悟空と第七宇宙の地球の神に教えてもらった。

トッポ達に教わった。

たとえ一人で戦っていても自分は一人ではないという事を。

常に支えられているのだという事を。

『だから……次は一人じゃなくて、おめえを支えてくれる仲間と一緒にかかってこい。』

そうすりゃあおめえは今よりもうんと強くなれる』

力の大会の決着の際に孫悟空に言われた言葉を思い出す。

独りじゃない……。

一度は仲間など要らぬと全てを捨てた。

信頼など無価値だと断じた。

そんな自分を、それでもトッポ達は信じてくれたのだ。そして仲間だと今も言ってくれる。

その信頼を二度と裏切らぬ為にも……。

「俺は！ もう二度と、悪に屈したりはしない！

俺が！ いや、俺達が——この宇宙を守ってみせる!!」

ジレンの気がこの期に及んで更に上昇した。

太陽よりも熱く燃え盛る炎がハーツの重力すらも吹き飛ばし、彼の顔面に拳が叩き込まれた。

轟音を立ててハーツが吹き飛び、続けてジレンの拳がカンバーの胸を貫いた。ジレンには『悪人であっても命は奪わない』という信念がある。

だから圧倒的な実力差がありながら、ラグスもシーラスも、カミオレンもかろうじて命を繋いでいる。

だがカンバーは……この戦闘意欲だけで動く男は身体が動く限り戦い続けるとい

う事をジレンは理解した。

故にこの瞬間のみ、信念の限界に迫る事をジレンは決断する。

己の独りよがりな信念よりも大切な『正義』を守る為に！

「消え失せろ オオオオオ！」

「グオオオオオオオオオ!!」

貫いたまま、腕から気を放出した。

するとカンバーは内側から焼かれ、細胞ごと滅却されていく。

宇宙まで貫く火柱が立ち昇り、カンバーの悲鳴が小さくなっていく。

数秒にも渡る業火……それが終わった時、カンバーの姿は完全に漆黒に染まり、炭化していた。

「オレ……ト……タタカ………エ………」

その言葉を最後に、カンバーが崩れ落ちた。

これでもギリギリ、かろうじて生きている。生命活動という点のみで語ればカンバーは死んでいない。

しかし死ぬのも時間の問題だろうし、仮に生き延びても二度とまともな生活は送

れないだろう。

戦士としては完全なる『死』を迎えたと断じて間違いはない。

最後の最後まで戦闘の事しか考えていない、ある意味ではサイヤ人らしい男だった。

そんな闘争心だけの獣を葬ったジレンは次にハーツを仕留めるべく、ゆっくりと歩き出す。

一步踏むごとに大地が揺れ、足跡が刻まれる。

ジレンのダメージも決して軽くない。

それでも彼は揺らがない。

何故なら彼は『最強』だからだ。

最強と信じてくれる仲間達の為に。この宇宙で暮らす全ての力なき人々の為に。そして己自身のプライドの為に。

この正義と誇りがある限り決して負けない。

正義誇りという名の馬に騎乗し、全ての悪を薙ぎ倒してどこまでも突き進む。故にこ

その誇りプライドトルーパーズある騎兵達！

決してジレンは倒れない。折れない、朽ちない、碎けない。そして諦めない。その背中には、宇宙に暮らす弱き人々全員の……そして仲間達の『信賴』が乗っているのだから。

——だがそれ故に……彼の弱点もまた、仲間であった。

「……むっ」

ジレンを、キューブ状の気が閉じ込めた。

それはこの戦闘で何度も見た、ハーツが操る独特な気だ。

だがそんなものはジレンの動きを止めるには至らない。

ジレンならばいくらでも力づくで脱出してしまえる。

だが……ジレンは動けなかった。

この気のキューブの特徴を一目で理解してしまえたから、彼は止まらざるを得なかった。

「これは……」

ジレンが苦渋に満ちた表情を浮かべる。

彼を閉じ込めているキューブは、きつと触れればその瞬間に惑星そのものを巻き

込んで大爆発を起こすだろう。

無論そんなものはジレンには効かない。

星が爆発して宇宙に放り出されようとジレンの最強は崩れない。

だが……ジレンはよくても、周囲はそうではない。

倒れている仲間達……トツポ、デイスポ……そしてプライドトルーパーズの仲間達。

この星に生きる儚い命達。

ジレンが動けば、彼自身は無事でも他が死ぬ。

「ハア……ハア……ッ。」

あまり……使いたい手ではなかったが……素直に認めよう、ジレン。

君はまさに宇宙最強だ……今の俺達では、まだ勝てない……。

だから、小細工を……使わせてもらう事にした……。」

「貴様……ッ」

ジレンの額に血管が浮かび、拳を握る。

だが動けない。彼が正義であるが故に、何もさせて貰えない。

そんなジレンの前でハーツはよろめきながらも重力操作でコアエリアの戦士達を浮遊させた。

「宇宙の種のエネルギーはもう十分集まった……」

そしてもう一つ……AI生命体アムズよ……その連中を取り込むといい」

ハーツが声をかけると、今まで空に浮いていた黒い物体が下降した。

大して脅威を感じなかった為にジレンの中での優先順位は低く、今まで気にもしていなかったが、それが不味かった。

アムズと呼ばれた黒い浮遊体はトッポに近付き、赤い光を放つ。

すると、次の瞬間にはトッポが消えてしまっていた。

「なっ……馬鹿な！ 何をした!？」

「ハア……ハア……」

そいつは……そこで倒れているシーラスと言う男が作ったAI生命体だね。

戦闘データを吸収する事でパワーアップ出来るんだ。

ゼエ……ゼエ……

そして今、トッポを吸収した……破壊神候補の力は、アムズを劇的にパワーアッ

プさせる事だろう」

「……っ！」

呼吸をするのも辛いのか、言葉が途切れ途切れになりながらもハーツがアムズの能力を説明した。

彼の言う通りにアムズの気が一気に膨れ上がり、その姿もトッポとどこか似たものになる。

続けてアムズはディスポを吸収し、更に他のプライドトルーパーズも取り込んでいく。

「や……やめろおおお！」

消えていく。

こんな自分を信じてくれた仲間達が。

仲間を見捨てた自分を、それでも見捨てずにいてくれた皆が。

もう二度と失わないと決めたのに。

今度こそ守り抜くと誓ったのに。

それなのに、ジレンは何も出来なかった。

今すぐ飛び込む事は出来る。

キューブを破壊してあのアムズという敵を砕くのにジレンならば一秒もかからない。一撃で終わる。

その後に半死半生のハーツを仕留める事もジレンならば容易いだろう。

そう……ジレンは勝とうと思えば勝てるのだ。

この星と、この星に生きる人々と、そして仲間達を見捨てて独り善がりの戦いに徹してしまえばここでハーツ達の暴虐を止める事が出来る。

それは最終的には、これから彼等によって齎される被害を食い止める事になるだろうし、結果的には被害を少なくする最善の手段かもしれない。

だが、それが出来ない。何故なら彼は……悲しいほどに、正義だから。

最後にほぼ死体と化していたカンバーを取り込み、アムズは役目を終えたように空へ戻った。

そんなアムズを睨みながらも歯噛みし、憤怒と悲しみが絢交ぜになったような表情で震えるジレンを見下ろしながらハーツは笑う。

「この宇宙で得るべきものは得た。」

カンバーを失ったのは痛手だったが……引き際は弁えないとな……。

それに……他の宇宙からお客人も来ているようだ……。

流星に今は……相手をするのは無理があるな……」

ハーツは口から血を流しながら、胸を押さえる。

コアエリアの戦士達はジレンとの戦闘では敗れたが、最終的な勝利を掴む事には成功した。

試合に負けて勝負に勝つといったところか。

だがカンバーを失い、カミンとオレン、ラグスとシーラスは重傷を負わされて瀕死……いや、ダメージを見るに最早再起不能か。おまけにハーツまでもが深手を負って満足に動く事も出来なくなった。

これがジレンたった一人によって齎された損害だというのだから、どうかしていろ。

「さらばだジレン……何よりも強かった男よ。俺は君との戦いを決して忘れない」最後にそう言い残し、コアエリアの戦士達が消え去った。

後に残されたジレンは敗北感に打ちひしがれながら、拳を震わせる事しか出来な

い。

その近くに光の柱が降り注ぎ、中から第七宇宙の界王神が姿を現した。

続けてトランクス、セル、バーダックが現れるも残念ながら一步遅い。ハーツは既に退却した後だ。

「しまった！ 遅かった……」

「ちっ、逃げ足の速え野郎だ！」

界王神が出遅れた事を悔い、バーダックがコアエリアの戦士の引き際のよさに悪態をつく。

だがジレンは、それを気にしている余裕もなかった。

彼が考えているのはたった一つだ。

奪われた仲間達を取り戻し、そしてハーツ達を今度こそ倒す。

それだけを考え、ジレンは悔しさに震える。

——このままでは終わらせない。そう、ジレンは固く心に誓った。

ジレン大暴れ終了。

結果的には負けたようなものですが、強さは十分に発揮したんじゃないでしょうか。

一応ジレン一人でコアエリアの戦士に与えたダメージは以下の通りになります。

- ・ハーツ（重傷）
- ・カンバー（退場）
- ・シーラス（再起不能）
- ・ラグス（再起不能）
- ・カミン（再起不能）
- ・オレン（再起不能）

遅れは取ったけど、力の大会編ラスボスとしての格は最小限のダメージで済んだかなと思います。

【戦闘力】

超ハーツ（IN宇宙の種）…90兆

まだ究極ではない。

宇宙の種のエネルギーが少ない状態だったが、それでもかなりの戦闘力加算となった。

これに加えて重力操作による自己バフに相手のデバフ、更に読心もあるので数値より遥かに強い。

が、数値以上に強いのはジレンにも言える事だった。

第22話 救出への光明

この世界には十二の宇宙が存在している。

十二の宇宙はそれぞれが独立した空間であり、外から見ると惑星のような球状となっている。

宇宙は環を描くように連なり、各宇宙を繋ぐ狭間は十二の宇宙のどこにも所属しない『中立空間』と呼ばれていた。以前に第七宇宙と第六宇宙が試合を行ったのもこの中立空間だ。

その中立空間に、ハーツ達コアエリアの戦士の隠れ家はあった。

ラグスの力によって作り出されたガラスの塊……その内部を拠点とし、彼等は十二の宇宙の中立空間から中立空間へと行き来していたのだ。

界王神達も全力で搜索しているが、宇宙は広すぎる。

それが十二もある上にハーツの力で宇宙から宇宙へと瞬時に移動してしまうコアエリアの戦士達を捕捉する事は困難を極めた。

界王神全員がリゼット級の感知能力を持っているならば話は別だが、話はそう都

合よくいかない。

少なくとも現状で分かるのは『リゼットが感知していない以上、少なくとも第七宇宙にはいない』という事だけだ。

だが、そのコアエリアの戦士達も今は窮地に立たされていた。

先日の第11宇宙との戦い——いや、ジレンとの戦いで受けたダメージがあまりに甚大すぎるのだ。

最大戦力であったカンバーはアムズに取り込まざるを得なくなり、ハーツ以外の全員が再起不能と呼べるほどのダメージを受け、最早死を待つだけの身となった。ハーツ自身も重傷を負い、すぐには動けないだろう。

軍事的用語においては戦闘担当の六割を喪失すれば組織的抵抗が出来ない事から全滅と定義される。

ならばこの状況は間違いなく全滅と呼んでいい。

コアエリアの戦士達はたった一人の『最強』^{ジレン}によって全滅させられてしまったのだ。

決して油断したつもりも、甘く見積もったつもりもなかった。

事前に入手した情報から十二分に評価し、難敵と認めた上で必勝を期して進撃をしたのだ。

まず、ジレンが故郷を守りに行く事でプライドトルーパーズとジレンを各個撃破する好機が生まれた。

いや、生まれたというより、ハーツの読心によって必ずそういう状況になると分かっていたというべきか。

破壊神候補であるトッポはカンバーならば捻じ伏せられる。速度が厄介なデイスポは相性で勝るカミンとオレンならば負ける要素がない。

他の雑魚はシーラスとラグスの二人だけでどうとでもなる。

そして後は、後からやって来たジレンをハーツの能力で抑え込みつつ、カンバーのパワーで叩き潰せばいい。

実際その作戦は途中までは上手くいっていた。誤算だったのはジレンが戻るのが早すぎた事……そして、ジレンがこちらの予想を遥かに超えて強すぎた事だ。

カンバーを容易く捻じ伏せ、ラグスの攻撃は通じず、カミオレンの再生能力など知らぬと叩き潰された。

ハーツの重力すら引き千切り、何もかもを正義という名の超暴力で捻じ伏せて破壊する。

何だアレは。理不尽というにも程がある。

強さの次元が違えば相性や異能などに意味はなく、等しく粉碎されるのみ。

まさに正義の化身……『わるものはせいぎのみかたにやられる』などという子供でも分かる勧善懲悪の絵空事をそのまま擬人化したかのような存在だ。

何とか撤退したものの、最早彼等の理想を叶えるどころではなくなつた。

全王を殺すどころか、天使や破壊神ですらない一人の戦士にここまでやられるなど、どうして予想出来ようか。

「……こっぴどく、やられたな……」

壁にもたれかかりながら、掠れた声でハーツが話す。

彼等が拠点としているガラスの隠れ家は今や、あちこちが罅割れていた。

この場所を維持しているラグスの命の灯火が消えようとしている証だ。

「シーラス……まだ生きているか？」

「……………ああ……………だが……………もう、目が見えん……………」

無念……だ……悪のいない理想の世界……見たかった……」

ガラスの寝台に寝かされたシーラスが、光のない瞳で届かぬ理想郷へ思いを馳せた。

時の界王神に齒向かい、裏切ってまで目指した理想。だがその理想は遙か遠く、今となってはもう手が届きそうにない。

その無念に、シーラスの目から涙が溢れた。

「俺も無念だ……君の理想は俺の理想と同じだ。

君と一緒に、神のいない人間だけの世界を……俺達の理想を……見たかった」
ハーツもまた、その声には無念が滲み出ていた。

最早彼等の計画は完全に破綻した。

宇宙の種にエネルギーを集めるどころか、当の彼等自身が生き残る事すら出来そうにない。

「時間が経てば破壊神達も各々の宇宙へ戻るだろう……タイムオーバーだ」

全王殺しにおいてハーツが最大の障害として考えていたのは、十二の破壊神達であつた。

実力で言えば大神官や天使達の方が上だが、あちらは然程脅威ではない。

天使は中立を重んじる存在であるが故に、ハーツ達に何も出来ないのだ。

善も悪も、ただあるがまま……明確な宇宙の害と分かっているのも直接の排除に移る事は出来ずに、もしそれを破ってしまえば待っているのは消滅のみ。天使とはそういう、不自由な生き物である。

出来るのはただ見守る事と導く事だけ。強力な戦士に修行を付けて送り出すくらいならば出来るが、それ以上の干渉は出来ない。

ならば怖い存在ではない。排除する方法などいくらでもある。

何なら超ドラゴンボールを集めて、その力で別の時間軸か時の狭間にでも放逐してやればいい。超ドラゴンボールならば全王を消すのは無理でも、大神官や天使くらいなら抹消出来る可能性もあるだろう。

そして天使は^{奴等}それを指をくわえて見ている事しか出来ないのだ。

厄介なのはむしろ、力の行使に制約のない破壊神達の方だ。

だから破壊神達が不在のこの好機を逃すわけにはいかなかった。

破壊神全員が全王の宮殿に呼ばれている間に今の宇宙を壊し、エネルギーを奪っ

て宇宙の種を育て、そして全王すら殺せる力を手に入れる。そういう手はずだった。だが……破壊神がいなくとも、破壊神以上の人間がいた。

それがハーツの誤算であった。

「いいえ……まだ、よ」

諦念に支配されつつあった二人に、ラグスが弱々しく声をかけた。

彼女の状態も酷いものだ。全身が罅割れ、今にも粉々になってしまいそうである。ジレンの一撃が重すぎたのだ。むしろジレンに本気で殴られて即死しなかった彼女のタフさを称えるべきだろう。

「ハーツ……私達を……アムズに吸収させて……」

そうすれば……私達は、貴方の力になれる……」

「ラグス……だがそれでは君は……」

「お願い……私は貴方の力になりたい……」。

このままじゃ、私は……何も為せないまま……」。

そんなの……あまりに、惨めすぎる……」

ラグスもシーラスも、カミンとオレンも、ただ死を待つだけの身だ。

いや、カミンとオレンは再生能力があるので峠さえ超えれば復活出来るかもしれないがそれも五分だろう。

再生出来るからといって死なないわけではない。

限度を超えたダメージを受ければ、そんなものとは無関係に死んでしまうのだ。細胞一つ残っていればどんな状態からでも完全復活してしまえる魔人ブウのような本物の化け物とは違う。

だがアムズに吸収されれば、その力はアムズへと引き継がれる。

アムズは、神々に対抗する力を得るべくシーラスが造り出した人工生命体だ。

戦闘を間近で観察する事で戦闘データを収集し、更に吸収する事で対象の力を得る事も出来る。

加えてアムズは吸収した者の複製体を生み出す能力も備えており、彼がラグスを吸収すればラグスの力を使えるのみならず、その複製を出して兵士にする事も出来るのだ。

ただし当然、吸収されたオリジナルの意識は消える事となる。

「ハーツ……私もだ。私も吸収させろ……」。

私達の理想を……こんな所で終わらせるわけにはいかない。

優しい人間達が自由に生きる事の出来る、神なき世界……それをどうか、実現させてくれ……」

シーラスに懇願され、ハーツは俯いた。

アムズに彼等を吸収させればここからの立て直しは出来る。

だがそれは理想を共にした者達との別離も意味していた。

数秒の逡巡……やがてハーツは、意を決したように顔を上げた。

「……分かった。アムズ……彼等を吸収してくれ」

その言葉と同時にアムズが、シーラス達へ取りつき同化していく。

そしてハーツは、独りとなった。

★

第11宇宙でハーツを取り逃がしてしまった後、セル達はひとまず神殿に戻っていた。

あのまま11宇宙にいても何の意味もないし、一番情報が入って来るのは結局リゼットがいる神殿だと判断したからだ。

彼等から11宇宙での戦いの顛末を伝えられた悟空達は険しい顔をして話し合う。

「そっか……あのジレンでも倒し切れなかったんか……」

「だが敵に与えたダメージは甚大だ。あれではしばらく動けんだろう」

ジレンの強さは悟空が一番知っている。

そのジレンが倒せなかったというだけで、今回の敵がどれほど厄介なのかも嫌でも分かる。

とはいえジレンも流石のもので、敵の勢力は既にほぼ壊滅しているらしい。

もうハーツ達は満足に動けないだろうとセルが予測を口にする。

「それで、そのジレンは今どうしてんだ？」

「……キューブ状のエネルギーに閉じ込められたまま、瞑想をしている」

悟空の問いに、セルはどこか困惑した様子で返答した。

セル達が到着した時、ジレンは既にキューブ状のエネルギーに閉じ込められて動きを封じられている状態だった。

ジレンならば無理矢理脱出することは可能だったが、それをしてしまうと守るべき星ごと爆破されてしまうので動くに動けなかったのだ。

「無理に破れば周囲に被害を齎す檻だ。そこで私達は、ミラをその場に連れて行ってキューブを吸収させる事を提案したのだが……断られてしまった」

どんな特性を持っていようが、気で出来ているならばミラの機能で吸収出来る。その方法ならば安全にジレンをキューブから脱出させる事が出来るだろう。

しかしその手を払いのけたのは、他でもない閉じ込められている張本人であった。「ジ、ジレンさんは一体何を考えているのでしょうか……すぐにでも出る事ができるというのに」

ジレンの意図が読めず、トランクスが非難するような口調で言う。

すぐに脱出して、戦いの場に復帰する事が出来るのに、何故それをしないのかトランクスには分からない。

いや、トランクスだけではなくこの場のほとんどの者がジレンの意図が分からずにいた。

「さあな。あれは見たところ、時間経過で消えるような生易しいものではない。ジレンもそのくらいは分かるはずだが……」

「……そっか」

皆がジレンの行動に困惑する中、セルの説明に悟空だけがふっと笑った。

「大丈夫だ、ジレンはやられっぱなしで終わる奴じゃねえ。それより、敵もダメージを受けたっていうし、これならなんとかかなりそうじゃねえか」

「そうですね。次に出てきたら、そこを皆で叩けば……」

「ちょっと待ってくれ。それだとアムズという奴に吸収された11宇宙の戦士達はどうなる？」

21号が樂觀的に言うが、そこに四星龍が待ったをかけた。

確かに敵戦力は削ったが、11宇宙も大きな被害を受けてしまっている。

トッポやデイスポを始めとするプライド・トルーパーズがアムズに吸収されてしまったのを無視して倒しては、トッポ達まで死んでしまうだろう。

「大丈夫だ。ドラゴンボールで生き返れる」

「ああ。何の問題もねえ」

あっさりとトッポ達ごと殺す事を前提にして話し始めたのはターレスとバーダックの二人だ。

流星は殺し殺されの世界で生きてきた荒くれのサイヤ人だ。

いざとなったら味方ごと仕留めてしまう事に何の躊躇もない。

いや、これでもターレスとバーダックはまだ、サイヤ人にしては味方に情がある方なのだ。

だが第11宇宙のメンバーは残念ながら彼等にとつては他人である。故に見殺しに躊躇がない。

「そんな……」

「……だが、残酷だがそれしか手がないのも事実か。

まさか都合よく吸収された者だけを引き剥がすような技などないのだからな」
同じサイヤ人でも、そういった手段に抵抗感を示すのはトランクスだ。

しかし優しさがあっても、現実問題吸収されてしまつてはどうしようもない。

四星龍は、顔を歪めながらもターレスとバーダックの出した答えこそが最適解であると結論を出した。

だがここで、四星龍の言葉を聞いた悟空が「あ」と声を出す。

「それだよ四星龍！ おめえいい事言うなあ！」

「は？」

場違いな悟空の明るい声に、四星龍のみならずその場の全員が目を丸くした。

リゼットはこの時、原作の『心配すんな。殺された人達はドラゴンボールで生き返る』と言っているシビアな悟空の事を思い出していた。

悟空はこういう時、割とドライに割り切ってしまう性格をしている。

しかし続く言葉は彼女の予想に反したものであった。

「あるんだよ！ 合体とか吸収とかされた奴を引っぺがしちまう技が！」

「え!？」

悟空のまさかの発言に、全員が声をあげた。

そんな技があるなど、リゼットも聞いた事がない。

驚く皆の前で悟空はニツ、と口角を上げてその技の名を言った。

『スピリットの強制分離』って技だ。

スピリットっていうのは気と魂の事でさ、こいつを使えば吸収やら合体やらした奴を元に戻しちまえる。

こいつはヤードラッド星人の技なんだが、オラは結局覚える事が出来なくてなあ……。

けど、気の操作も前より上手くなったし今なら覚えられるかもしれねえ」

悟空の言葉を聞いた時、リゼットが真っ先に思ったのは『何で原作で覚えなかったの?』であった。

いや、答えは分かっているのだ。悟空自身が言っているように覚えられなかったのだろうし、その時間もなかったのだろう。

ヤードラット星から戻った後は人造人間に備えて三年間修業していたが、少なくともこの時点で入手している情報ではスピリットの強制分離など全く必要になりそうにないから、純粹に実力を上げる修行のみに専念したと分かる。

その後は心臓病で倒れ、セルゲーム前に修行してセルゲームであの世行きだ。

セルゲームまでの七日間で習得出来ていればセルを退化させる事も出来ただろうが、一年以上かけて習得出来なかったものを七日間で習得出来るとも思えないし、第一敵を弱くするというのはそもそも悟空の性格に合っていない。

相手がどんな手段で強くなろうと、悟空は素直にそれを凄いと賞賛出来るし、強い相手と戦える事にワクワクする。

だから、そもそも積極的に習得しようとすら思わなかったのだろう。

それは分かる。分かるが……それでも、言わずにはいられない。

「悟空君……」

「ん？ 何だ神様」

「そんな便利な技があるなら、もっと早く言ってください！」

何でそれ話してくれなかったんですか!? ヤードラット星の事をロクに調べなかった私も私ですけど!」

リゼットはもう何か、泣きたかった。

何とか無事切り抜けられたからいいものの、セルとか魔人ブウとかを恐れてあれこれ考えていた日々は一体何だったというのか。

どれだけ吸収怖いと頭を悩ませた事か。

「いやー、悪い悪い。オラも四星龍の言葉を聞くまで忘れちゃってたんだ。

それによ、敵を弱くしちまうってなんかずるいじゃねえか」

悟空は笑いながら後頭部を搔く。

本当にこの男は時々、賢いのかただのアホなのか分からなくなる。

「……フン。俺はむしろ、合体だの融合だので力を増す奴等の方が気に喰わん。自

分の力だけで戦うべきだろう」

「固え事言うなよベジータ。オラは強え奴と戦えるんだったら、別に何でもいいぞ」
なるほど、悟空が習得出来ないわけだとリゼットは額を押さえた。

悟空の中に『相手を弱くして勝ちたい』という考えがないのだから、その技と悟空の相性は最悪である。

同じフェアを望むサイヤ人の戦士でも悟空とベジータの考えは異なっている。

悟空の考えるフェアとは一対一で互いの全力を出して戦う事であって、人質だの横槍だのがなければ後は気にしないのだろう。

そもそも自分達だって変身だの何だのと色々やっているのだから、その事を棚上げして相手のパワーアップ手段だけを非難するのも悟空としては腑に落ちないのかもしれない。

相手だけにフェアを強いるのはフェアではない。きっと悟空の中にはそういう考えがある。

一方ベジータの考えるフェアは、小細工をせずに自分の力だけで戦う、というものだ。

だから合体という手段は気に食わないし、吸収といった自分以外の力でパワーアップする輩も気に入らない。

以前の彼ならば卑怯だのフェアだのに拘りはしなかっただろう。

元々、グルドと悟飯達の戦いの最中に背後から奇襲をかけてグルドの首を切り落とし、『戦争にきたねえもクソもあると思うか』と言い切るような男だったはずだ。やはり、何だかんだで地球の影響を大きく受けているという事か。

「では、この中の誰かにヤードラット星でその技を習得して貰う……という方向でいきましよう。」

上手くいけば吸収されてしまった第11宇宙の皆を殺す事なく、敵だけを仕留める事が可能になるかもしれない。問題は誰が行くかですが……」

「スピリットのコントロールには静かな心と気操作が必要なんだ。」

オラが思うに一番適任なのは神様なんだが……」

『スピリットの強制分離』を今から戦術に組み込むならば、当然すぐに習得出来る者をヤードラット星に行かせなければならぬ。

習得に一年も二年もかかるようでは話にならないだろう。

まず、この中でそういった技との相性が最もいいのは満場一致でリゼットだ。

元々気の操作という面においては他の追隨を許さず、メタルクウラ戦では『魂に触れる』という離れ業までやってのけた点からスピリットを扱う下地は既に完成している。

技の一つである『ヒーローズ・ゴッドミッション』に至っては気で仮初の肉体を創って、そこにあの世から魂を召喚して宿らせているのだから、既に自力でスピリットの操作に行き着いていると言っても過言ではない。

過去には魔人ブウの悪の心だけを破壊した事もある。

故に彼女ならば習得に一日もかからないというのが悟空の考えであった。

「興味深い技ですし、この騒動が終われば習得したいとも思っていますが……今は無理です」

リゼットは残念そうに首を振り、ゴッドミッションによるアバター作成を続行する。

彼女は現在、近いうちに行われるだろう対メタルクウラ軍団に備えて兵士を量産している最中だ。

今、手を休めることは出来ない。

「孫悟空は相性が悪そうだな……相手を弱くするというのは好まんだろう」

「ああ。オラが前に覚える事が出来なかったのも、そういう部分が影響してたんだと思う」

ミラの言葉に悟空も頷いて肯定する。

「ミラは……」

「俺もあまり向いているとは思えんな……俺もどちらかといえば強い奴と戦いたい方だ。」

それに俺自身がトワを取り込む事で強さを得たという事もあるからな」

ミラも悟空と同じく、スティックに強さを求める戦士だ。

そしてその為の手段にあれこれケチを付ける方ではない。

強さの形も努力の形も人それぞれで、それぞれの強みと素晴らしさがある。

多くの歴史を見てきたからこそ、そう思えるようになったのだ。

「俺は……まあ言うまでもねえな。どう考えても向いてねえ」

「ああ。心を静かにするなんざ、俺達に出来るわけがねえ」

早々に諦めたのはターレスとバードックだ。

こちらは相手を弱くするという事に抵抗はないだろうが、そもその問題として単純に細かい技を使うのに向いていない。

心を静かにして戦うなど、一番この二人からは縁遠いだろう。

「俺も向いていないだろう。相手を自分の都合よく弱体化させるというのはどうもな……」

四星龍もミラや悟空と同じく、強い相手と戦いたいというタイプだ。

相手を自分の土俵に引きずり下ろすようなやり方は好ましく思っていない。

そうなる後はセル、トランクス、21号の三人が候補だろう。

セルはリゼットの細胞を多く持つために技術という点ではリゼットに次ぐ技巧派であり、戦闘においても特にこれといった拘りがない。

21号はそのセルの上位互換として造り出された存在だ。適性は高いだろう。

トランクスもサイヤ人としては落ち着いた心の持ち主で、加えて絶望の未来で戦って来た彼はまず何よりも勝利を優先する。フェアプレイでは何も守れないという事を誰よりも痛感している男だ。手段には拘らない。

そして誰もベジータを候補には入れていなかった。

「神様、俺がやります。」

奴等は元々、俺達タイムパトローラーが倒さなければならぬ相手だ。

だから俺がそのスピリットの強制分離を会得して、トッポさん達を救い出します

！」

トランクスが名乗りを上げ、リゼットも頷く。

彼ならば不足はない。適性もあるだろうし、万一ハーツ達が別の時間軸に逃げて
も彼ならば追跡出来る。

それにこの先、多くの時間軸で戦うだろう彼にとってスピリットの強制分離は必
ずや大きな力になるはずだ。

習得する為の時間は限られているが、遅しく成長した今のトランクスならば必ず
やり遂げるだろうとリゼットは確信していた。

「待て」

「父さん……」

だがここで、今まで沈黙を守っていたベジータが声を挟んだ。

言いたい事は予想出来る。

大方、『貴様にはサイヤ人の誇りがないらしいな』とでも言うのだろう。

だが次にベジータの発した言葉は、この場にいる誰もが予想していないものであった。

「……俺がやる。そのスピリットの強制分離とやら……俺が身に付けてやる」

【俺はただフエアに戦いたいだけなんだ】

漫画版『超』で飛び出したベジータの言葉。

良くも悪くも『超』のベジータは以前までとは別人であるという事を象徴している。

昔の彼なら絶対に言わなかっただろう一言。

「戦争に汚ねえもクソもあると思うか」

ベジータはどちらかといえばフエアな戦いからは一番程遠い所にいたタイプで、そういう考えを「甘すぎてヘドが出るぜ!」という側だったように思われる。

今にして思えば魔人ブウ戦のベジットの「よく言うぜ。自分だって散々吸収とかしたくせによ」という台詞はベジータの性格が強く出たものだったのかもしれない。

【AI生命体アムズ】

シーラスの作り出したAI生命体。相手を吸収してパワーアップし、更にそのコピーを生み出せる。

ぶっちゃけシーラスよりこいつの方がやばい。

【スピリットの強制分離】

他者から得た気、魂、生命エネルギーを無理矢理分離させてしまう技。

また合体や吸収による同化も解除してしまう。

ただし相手を殴らなければ効果がないので、相手が吸収してパワーアップするタイプだったとしても実力差があった場合はそもそも攻撃が当たらずにボコボコにされてしまう事もある。

ちなみにこの技でゼノバース発動中のリゼットを殴った場合、気の無限回復を阻害出来る。

ただし阻害してもまたすぐに回復が再開されるので殴り続けなければ意味がない

が、そもそもそれだけ攻撃を当てらるなら（リゼットは紙装甲なので）普通にKOした方が早い。

ところでターレスを殴ったら、今までに食べた神聖樹の実のエネルギーを放出してターレスに滅ぼされた惑星が蘇るのだろうか……？

第23話 決戦への備え

暗黒の宇宙空間を鋼の船団が飛んでいた。

それはザーボンが率いる銀河パトロールの大艦隊だ。

第七宇宙の総軍を結集したのかと思うほどの壮観たる景色の中、中心になっていたのは空飛ぶ神殿であった。

その神殿の中にある精神と時の部屋にて、リゼットは束の間の休息をとっていた。メタルクウラに対抗する為にゴッドミッションで兵士を量産しているが、リゼットも消耗しないわけではない。

気は信仰によって無限供給される。体力も治療カプセルの中ならば回復出来る。だが彼女の使うゼノバースⅡは長時間維持出来る技ではない。

そもそも完全に制御出来るようになったのもつい最近の事なのだ。

ゼノバースⅡを発動している間、常にリゼットは信仰の波に耐えて理性を保ち続けなければならない。

だからこうして、定期的に技を解除して精神を休ませる時間を取る必要があった。

精神と時の部屋で休息を取れば、タイムロスはほとんどない。

本当はここで兵士の量産が出来れば一番いいのだろうが、残念ながら精神と時の部屋は外界から隔離された異次元空間であり、リゼットが持つ気の無限回復が機能しなくなる。

つまりここでは燃費の悪すぎるゴッドミッションは使えないのだ。

それでもこうして休息が取れるだけ有難い。精神を十分に休めたりゼットは外に出て、再び兵士の量産を開始した。

戦いに備えているのはリゼットだけではない。

悟空達もそれぞれが戦いに備え、各自の方法で力を高めている。

悟空は神殿の端で宇宙を眺めながら静かに立ち、精神を統一させている。

リゼットが完成ブルー以上の戦士を量産出来る以上、完成ブルーでは最早それほど大きな戦力にはならない。

だからといってブルーと合わせての界王拳は消費が大きすぎてすぐに息切れを起こす。

ならば必要になるのはあの技……そう、身勝手の極意だ。

身勝手の極意は超サイヤ人などのように感情を爆発させる変身とは真逆で、いかに心を静かに保てるかが鍵となる。

心を静かに、身体が頭よりも先に反応する。されど身体に振り回されるのではなく心と身体を完全に同期させる。

その領域にはジレンとの戦いで一度到達したものの、まだ極めたとは言い難い。まだ悟空は、入り口に立っているだけだ。

意識して完全に操れるようにならなければ、この先の戦いには勝てないだろう。「……変だな。妙に落ち着いている。大変な時だったのによ」

悟空の心は、不思議と穏やかであった。

身勝手の極意の為に心を静かにするまでもなく、自然とその心境に悟空は達している。

今が大変な時だというのは分かっている。

しかしそれでも不思議とワクワクしてしまうのはサイヤ人の血のせいだろうか。悪い癖だ……そう思いながらも悟空は笑みを浮かべ、そしてその瞳は銀色に輝い

た。

「結局スピリットの強制分離とやらはベジータとトランクスが覚える事になったか」
「トランクスさんはともかくベジータさんは……その、大丈夫なんでしょうか？」
神殿の中央付近に立ち、悟空の背中を見ながら話しているのはセルと21号の人造人間コンビであった。

人造生命体アムズという敵に吸収されたプライド・トルーパーズを救出する為にスピリットの強制分離を誰かが習得する必要がある。

その為にヤードラット星へ飛んだのはトランクスとベジータの親子二人だ。

移動手段は勿論リゼットのヘブンズゲートで、事情は界王が向こうに伝えている。

「さてな。最悪トランクスさえ習得して戻ってくればそれでいい。それより手が止まっているぞ」

「う、うっぷ……あの、少し休憩しませんか？ 正直それ、不味……いえ、あんまり美味しくなくて……」

「我儘を言うな。とにかく今は即戦力が必要だ。そら、次だ」

青い顔をして口元を押さえる 21 号を、セルがサデイスティックな笑みで見下ろす。

その彼の足元にいるのは大量の小さなセル……彼が生み出したセルジュニア達であつた。

過去、使う機会は全くと言っていいほど訪れなかったが、セルにはセルジュニアという我が子を生み出す能力が備わっている。

このセルジュニアはセルの三割程度の力を持ち、生み出す為に多少気は消費するがそれ以外に大きなリスクもデメリットもない。

即席で戦士を量産出来るのは何もメタルクウラやリゼットだけではない。ここにもいたという事だ。

だがセルの三割程度の力しかないセルジュニアを今更量産してもメタルクウラには太刀打ち出来ないだろう。

だが使い道がないわけではない。

幸いにも今ここには、相手をお菓子にして食べる事でいくらでも強くなれる後輩

がいるのだから。

「力が上がる、飢えも満たせる。一石二鳥だろう？」

「う、うう……セルさんの意地悪！」

21号は涙目になりながらお菓子光線を放ち、セルジュニアをお菓子へ変化させた。

床に落ちたそれはドーナツにケーキ、キャラメルと見た目はどれも美味しそうだし、しかし21号にとっての味とはその戦士が持つ気の質に左右されるものであり、量産されたセルジュニアは味という点では最悪に近い。

点数を付けるならば5点にも届かないだろう。

これ、戦いが終わったら吐きそう……そう予感しながら21号は渋々不味いお菓子を頬張った。

神殿の反対側ではバーダックが右手に気を溜め、発射の構えを取っていた。

その先にいるのは今は味方のはずのミラだ。

彼に向けてバーダックは一切の躊躇なく気功波を発射し、ミラは両手を広げてそ

れを受け入れた。

すると気功波はミラの胸に吸収され、ミラの筋肉が一瞬膨れ上がる。

「ぐっ……」

「そろそろ限界か。まあこんなもんだろう」

「い、いや……まだだ！ この程度では奴等と戦えない……！」

ミラはよろめきながら、もう一度手を広げた。

彼等が今行っている事……それは気の吸収であつた。

ミラは地獄でドクターゲロの改造を受け、特殊なポーズをする事で敵の気功波を吸収して力に変える能力を手にしていた。

本来ならばこれは、別の可能性世界で人造人間17号とヘルファイター17号が融合して生まれる戦士・超17号が身に着けるはずだった能力だ。

だがリゼットを始めとして様々なイレギュラーにより本来の世界線から完全に分岐してしまったこの世界線において超17号は誕生せず、代わりにその能力を身に着けたのがミラであつた。

今、彼はその能力を使ってバーダックの気功波を何度も吸収し、パワーアップを

繰り返しているのだ。

所詮これは一時的なパワーアップ……ドーピングのようなものに過ぎない。

だが一時的であろうと力が今は必要だ。

「さあ、もう一度だ。来い！」

「……………」

「どうした？ まさかもう疲れたのか？」

「いや……変わるもんだなと思ってよ」

バーダックとミラは、かつてはタイムパトローラーとその敵という関係であった。

エネルギーと戦いを求めてあちこちの時代に現れては荒らし回るミラとトワを前

に、バーダックとトランクスは何度も苦戦を強いられた。

その時代を生きる者達を踏み躪る事に何も感じない、冷酷な魔族。

己を最強と信じて疑わない、傲慢で気に入らない野郎。

それがバーダックの知るミラという男であった。

しかし今はどうだ？ 最強の驕りは消え、ただどこまでも高みを目指す純粋な

戦士へと変わっているではないか。

……いや、あるいは、フューの敵討ちの為か。

「いいぜ、今のテメエは悪くねえ。お望み通り、好きなだけくれてやらあ！」

ミラの決意を前にバーダックは口の端を吊り上げ、そして気功波を再び発射した。

四星龍は腕を組み、足元に転がる玉を見ていた。

そこにあるのは六つの玉……いや、石……。

かつてドラゴンボールと呼ばれていたそれは、先代の神とピッコロが融合した事で力を失って石となってしまっていた。

創造主を失ったドラゴンボールは石となる。だがそれでもこれは確かにドラゴンボールで、この中にはエネルギーがあった。

「……見た目に拘っている時ではないか」

邪悪龍はドラゴンボールから生まれた龍だ。

正確には今の彼はプラスエネルギーで生まれた浄化龍だが、本質的には同じである。

今は亡き一星龍はドラゴンボールを取り込む事でパワーアップする事が出来た。

結局あの時はリゼットに仕掛けられた罠によってその後すぐに自滅するという悲しい結果に終わってしまったが、彼等にはドラゴンボールを飲み込むというパワーアップ手段があるのだ。

四星龍は意を決したように口を開き、息を吸い込んだ。

すると元ドラゴンボールが宙に浮かび、四星龍に吸い込まれていく。

やがて全てのボールを取り込んだ四星龍に変化が起こる。

額からは二本の角が生え、肩は鎧のように鋭角化し、目は赤く輝く。

そして胸にはドン、と四星球……だった石が浮かび上がり、変身が終了した。

スーパー四星龍ならぬ、スーパー石龍の完成であった。

何でこの人、胸に石埋め込んでるの？

★

「おいメルス！ お前、超銀河王様から呼び出されるなんて、一体何をやったんだ！」

「さあ……まあ、会ってみれば分かりますよ」

『永遠の美』の旗艦の中を二人の銀河パトロール隊員が歩いていた。

一人はジャコ。過去に地球に來た経験があり、悟空やリゼットとも顔見知りの隊員だ。

もう一人はメルス。ウイスに似た顔立ちと雰囲気を持つ秀麗な青年で、自称エリート。ジャコとは違う本物のエリート隊員である。

彼はやがて一つの扉の前に到着し、その先へと入っていく。

ジャコも続いて入ろうとするが彼の目の前で扉は閉まってしまい、ジャコだけが締め出される形となった。

「銀河パトロール第七艦隊所属、メルス。只今参りました」

「よく來たな。まずは座れ」

「はっ」

大きなソファに腰を掛けてメルスを値踏みするように見ているのはこの艦隊の頂点である超銀河王ザーボンだ。

その隣には傭兵レジックが控え、油断なくメルスを見ている。

「ザーボン様。私にどんなご用件でしょうか？」

「用件というよりは試したい事があってな……」

「試したい事、ですか？」

「ああ。普段はあえて触れずにいたが、今はここ一番の大事な戦いを控えている。どうしても不安要素は先に確かめておきたい」

ザーボンの言葉が終わると同時に、音もなくメルスの背後に何かが現れた。

それは白く輝く戦乙女——リゼットが創り出した自律気弾のうちの一体だ。

彼女は一瞬の迷いもなく手に持った槍でメルスに攻撃を仕掛けた。

狙いは急所から外しているが、それでも命中すれば無事では済まないだろう。

超サイヤ人ブルーを完成させた悟空にも匹敵する最強の量産兵の奇襲——それを

メルスは咄嗟に回避してしまい、しまったという顔をする。

それと同時にザーボンが手を上げ、戦乙女も槍を収めた。

「やはりな……私の考えは当たっていたようだ。メルス隊員……き、貴様は天使なのだな？」

「それは……」

「その兵士は地球の神から借りた兵士だ。実力はあのゴールデンフリーザを凌駕している。」

その奇襲を貴様は完璧に避けてみせた。まるで身体が勝手に動いたかのように……。

そんな芸当が出来る者など、天使以外にはあり得ない」

ザーボン は テーブル に 肘 を 付 け た ま ま 静 か に 語 る。

だ が よ く 見 れ ば 腕 が 小 刻 み に 震 え、額 には 汗 が 浮 か ん で い た。

当 た っ て 欲 し く な い 予 感 が 当 た っ て し ま っ た …… そ の 事 か ら 来 る 恐 怖 が 全 身 に 現 れ て い る。

や が て 冷 静 さ を 取 り 繕 う 余 裕 も な く な っ た の か、ザ ー ボ ン は 勢 い よ く 立 ち 上 が っ た。

「破壊神の犬め！ 何が目的だ！ こ、この私を消しにでも来たか!!」

「落ちて着いて下さいザーボン様！ 私はそんな……」

「ええい黙れ！ 騙されんぞ！ 何を探る為に銀河パトロールに潜り込んだのだ!?!」

「おいザーボン、落ち着け」

「これが落ちて着いていられるか！ 天使だぞ!! 勢力を増した私を目障りと見た

ビルスが差し向けて来たに違いない！ レジック、至急全戦力を……」

「落ち着けと言っている」

天使という超越者を前に乱心しかけたザーボンだが、レジックの低い声に威圧された事で黙り込んでしまった。

それから息を深く吐き、椅子に座る。

いかに権力を手にしてもザーボンはザーボンだ。

根本の部分は小物のままであった。

「……すまない、取り乱した」

ザーボンは何とか落ち着きを取り戻したような声で言うが、やはり声は震えている。

破壊神とはこの宇宙に暮らす者にとっては恐怖の対象だ。

一度破壊する対象に選ばれてしまえば抗う術は無いに等しく、虫のように潰されてしまう。

そしてその対象はビルスの気紛れによって決定され、ただ彼の気に障ったからというだけの理由で数億年の星の歴史が無に帰される事もあるのだ。

多少は人間レベルなどを考慮しているだろうが……リゼットが活動する前の第七宇宙の人間レベルを見れば、それもお察しと言う他ない。

戦闘力と言う点で語ればビルスは十二柱の中でも頂点に近いが、神としての真面目さは底辺レベルにある。

ザーボンの知る限り、過去にビルスが破壊の決断を翻したのは地球だけであった。逆に言えば、あれだけ第7宇宙に貢献した地球であろうと気に入らなければ、それだけで破壊してしまうのがビルスだ。

ザーボンがこれまでに積み上げてきた功績などビルスの前では何の判断材料にもならない。

機嫌を損ねれば破壊されるだけだ。

だからこそ、ビルスの配下である天使が今ここにいるというのはザーボンにとって多大な恐怖以外の何物でもない。

「……見抜かれてしまったては仕方ありません。

お察しの通り、私の正体は天使です。正確には天使見習いですが……。

銀河パトロールには、広い世界を学べという大神官様の命令を受け、派遣されま

した」

「広い世界を……ならば、我々と敵対する意思はないのだな？」

「その通りです。信じて下さい、私は銀河パトロールも、ザーボン様も害する意思はありません」

「……………」

「お許しが頂けるならば、これからも銀河パトロールで色々な事を学びたいと考えております」

ザーボンは深く息を吐き、素早く思考を回す。

まず、相手側にこちらを破壊する意図がないというのは朗報だ。

メルスが真実を語っている保証はないが、嘘を吐く意味もない。

そんな事をしなくとも、向こうはいつでも圧倒的な力でザーボンなど組織ごと消してしまえるのだ。

『永遠の美』が持つ戦力など、破壊神や天使から見れば無に等しい。

極端な話……リゼットが生み出す量産兵の一体ですら、『永遠の美』の全戦力が立ち向かって也太刀打ちできないだろう。

それだけの圧倒的な差が存在している。

ならば、今は本人が言っているようにこの天使を銀河パトロールの一員として扱った方がいい。

ここで変に追い返す真似をする方が大神官の不興を買う可能性がある。

「ならば天使ではなく、銀河パトロールの一員であるメルス隊員に聞こう。

我が艦隊は現在、地球と共同戦線を張ってビッグゲテスターを叩き潰すべく展開している。

今や第7宇宙における究極の悪となったメタルクウラが勝てば、この宇宙に未来はない。

そこで聞きたいのだが、貴様はどの程度までの活動が許されている？」

「天使としての力を使わなければ戦いにも参加出来ると思います……攻撃は全て、銀河パトロールの装備に頼らなければなりません」

「……そうか。ならばこれまで通り、隊員の一人として活動してくれ。

貴様の正体はここにいて私とレジックの胸の内にだけ仕舞っておこう。

ご苦労だったな。下がっていいぞ」

「はいっ！　ありがとうございます」

銀河パトロールから除隊されずに済んだメルスは、ザーボンに敬礼をしてから退室した。

その背を見届け、完全に扉が閉まってからザーボンは顔を下げて溜息を吐いた。

「よかったのか？　奴を残して」

「仕方あるまい。それに、天使の力を使えんと言ってもあの身のこなしは正直、今の私には喉から手が出る程欲しい戦力だ。

地球との共同戦線とは言っているが、実際の所我々に出来るのは精々が後方からの援護射撃や怪我人の治療くらいのもの……。

我々にはメタルクウラに通じる武器がない」

「神の領域か……俺もこの宇宙ではかなり強い方だと自負していたが、世界は広いな」

レジックの言葉にザーボンは感情を抑えた低い声で答える。

天使と分かった以上無下に扱う事は出来ない。

追い返すなど以ての外だ。

それに考えようによつては、決戦を前にして大きな戦力を確保出来たとも考えられる。

銀河パトロールの武器を使う以上、メルスがメタルクウラにダメージを与える事は出来ない。

だがメタルクウラに負ける事もないだろう。

つまり囷や時間稼ぎならば出来るのだ。

少なくとも、『こちらの隊員も戦った』という事実を作る事が出来る。

「クウラめ……いっそ、暗黒魔界と共倒れになってくれればどれだけよかったか……

！

だが私が貴様等一族の影に怯えるのもここまでだ。

見ているがいい……最後に笑うのは、このザーボン様だ……！」

ザーボンは絞り出すように言い、憎悪の籠った眼差しで宇宙船の壁を睨んだ。

この壁の向こう……遥か彼方にはきつと、ビッグゲテスターとクウラがいるはずだ。

ずっと昔からフリーザに怯え、顔色を窺いながら生きてきた。

やっと奴から解放されて権力を握ってからも、何度も復活するフリーザとクウラに怯えていた。

だがそれもここまでだ。

地球の連中を利用してクウラを始末すれば、もうあの兄弟を恐れる必要はなくなる。

そうすれば後はゆっくりと、第7宇宙での影響力と支配権を広げていけばいい。幸いにして一番厄介な暗黒魔界もクウラが潰してくれた。ならば死の世界となった暗黒魔界を掌握してしまうのもいいだろう。

表の世界に加えて裏の世界も支配してしまえば、ますますこのザーボンに齒向かえる者はいなくなる。

齒止めの利かない野心を抱え、ザーボンは秀麗な顔を醜惡な笑みで歪めていた。

「やりすぎると地球の奴等に殺されるかもしれんぞ」

「……………ま、まあ……連中を敵に回さない範囲内だな…………」

しかしレジックの忠告を受けてザーボンは日和った。

どこまでいっても、その性根は小物のままである。

メルスルー「是非貴方に知ってほしい重大な事がある。私の名前はメルス。本物の天使見習いの戦士だ。本来は私との修行で悟空さんは身勝手の極意を使いこなせるようになるはずのとてもなく頼もしい超最高イケメンです。

……………どうして悟空さんはもう身勝手の極意を使えるようになってるんですか？」

悟空「そんな事言われたってよ……」

メルスルー「私も悟空さん達と一緒に戦って存在感をアピールすれば……」

ザーボン「貴様は我が艦隊の護衛だ」

メルスルー「」

メルスルー「私がー！ 私の出番そのものがー！」

第24話 激突!! 100兆パワーの戦士たち(1)

『死の銀河』。誰が最初にそう呼んだかも分からないその場所は、かつては多くの人間が暮らす豊かな銀河であった。

そこには様々な惑星があり、惑星の神がいて、そして神に庇護された人々がいた。神の中には別の宇宙から移住してきたナメック星人もいて、そのナメック星人が生み出したドラゴンボールがあった。

ドラゴンボールの力によって銀河は繁栄し、人々は幸福に暮らしていた。

だが、世界はプラスとマイナスの均衡によって成り立っている。

片方に偏り過ぎれば必ず揺り戻しがあるものだ。

繁栄と幸福の代償——それは、ドラゴンボールより生じた邪悪龍という形で世界に牙を剥いた。

七体の邪悪龍は手始めに発生源の惑星を破壊し、強大なマイナスエネルギーは伝染病のように周囲の銀河にまで感染し、腐敗させ……そして、滅亡させた。

邪悪龍の強大すぎる力は当時の界王神——今は老界王神と呼ばれている彼の力を

もってしても手に負えるものではなく、宇宙は消滅の危機を迎えた。

だが宇宙が今も存続しているという事は、邪悪龍は滅ぼされたという事だ。運がよかった……当時を振り返り、十五代前の界王神はそう語る。

その時はたまたま、珍しい事に彼が起きていた。

そして酷く不機嫌だった。その時の彼——破壊神ビルスはシャンパとの美味しい物比べで負けたばかりだったのだ。

だからそれは宇宙を守る為というよりはただ八つ当たり近く、気分転換に惑星を破壊しようと思ったらその惑星を破壊している妙なのが七体いたから、代わりにそれを破壊した。

そうして破壊神ビルスによって邪悪龍の脅威は消えたが、マイナスエネルギーに汚染された銀河にはそれ以降生物が誕生する事はなく……今でも静寂と、かつて惑星があった名残である岩礁だけが存在し続けていた。

その死の銀河で、二つの勢力が今まさに衝突の時を迎えようとしていた。

人の科学文明の業が生み出した機械仕掛けの怪物、ビッグゲテスター。

対するは人の身から神へと登り詰めた少女が住まう神殿と、それを護衛するよう

に展開した宇宙連合艦隊。

ビッグゲテスターの周囲には数十万体のメタルクウラが配備され、その戦力は一体一体全てが神クラスだ。分かりにくければ超サイヤ人ブルーを完成させたベジータが数十万人いると思えばいい。

神殿の周囲も負けじと光の軍勢が展開され、その戦力はメタルクウラに見劣りしていない。

何とも馬鹿げた光景だとザーボンも冷や汗を流す。

信じられるだろうか……合わせれば百万を超えるだろう、この量産兵の全てが他の弱い宇宙——例えば第9宇宙程度ならば単騎で滅ぼしてしまえるなど。

決してこれは比喩表現ではない。事実、異なる時間軸において全宇宙を壊滅状態に追い込んだゴクウブラックを遥かに超える戦力を、この量産兵の全てが保有しているのだ。

そんなものが一斉に衝突してしまえば第7宇宙はどうなるのか……想像したくない。

だが、それが間もなく現実起ころうとしている。その事実にはザーボンは震えた。

「すっげえなありゃあ……思ってた以上だ。どうする？ 神様」

「まずは挨拶代わりの先制攻撃を行います。まず、読まれているでしょうけどね」
悟空の問いに対し、リゼットは淡々と答えて宙に浮いた。

背中に光輪が展開され、輪を作るように両手を胸の前に置く。

手の中に光が集束されていき、神の気によって『破壊』の力が付与された。

「……THE BREAKERS！」

リゼットの宣言と同時に手の中から光が放たれた。

数百、数千……数万。

破壊の光は無数に枝分かれし、それぞれが意思を持っているようにメタルクウラ軍団へ襲い掛かる。

一度はメタルクウラ軍団を滅した一撃……それを初手にていきなり発射したりゼットの判断に間違いはない。

だがあの時と違う事がある。

それは、今回はクウラ本人がいるという事だ。

破壊の光が突き進んだ先で、不意にキラキラと光の軌跡が現れた。

——同時に、爆発。破壊光が相殺され、メタルクウラ軍団に届く事なく消し去られてしまった。

爆発はあちこちで同時に起こり、破壊光を一つもメタルクウラへ到達させない。そればかりか光の軍勢の近くにまで光の軌跡が届き、その前に破壊光が割り込む事で光の軍勢を防御した。

互いに複数の対象を同時に攻撃・防御する事で結果的にはどちらも無傷に終わり、リゼットは予想通りといった顔でビッグゲテスターを見ていた。

ロックオン・バスター。

メタルクウラが持つ攻撃手段の一つで、指定座標にエネルギーを送り込んで爆破する厄介なものだ。

クウラはビッグゲテスター内部からそれを使用し、破壊光の全てを同時にロックオンして相殺してみせたのだろうとリゼットは推測した。

しかし、いかに広範囲に撒くために威力が分散していたとはいえ……いかに本物の破壊神の技ではないとはいえ、仮にも『破壊』の一撃を相殺してみせるとは。

今のクウラは、最早自分が知っているかつてのクウラとは完全に別人だという事

を改めて理解させられ、リゼットの表情が険しくなる。

「まずは互角か……ならば次は」

「ああ、団体さんでお越しだ」

ミラの言葉にターレスが軽口を叩いた。

それと同時に、待機していたメタルクウラが一斉に飛翔した。

「迎え撃ちなさい」

リゼットが号令を出し、光の軍勢も一斉に出撃する。

双軍は中央で衝突し、そして死の銀河のあちこちで戦いが開幕した。

量産兵の全てが強兵。弱兵は一体もない。

全員が神レベルの力で、神レベルの速度で、神レベルの技で戦う。

拳と脚を高速でぶつけ合わせ、技を打ち合い、背後を取り合い、空間転移と瞬間移動を駆使し、岩礁が余波で次々と砕け散っていく。

そしてどちらも命なき量産兵であるが故に己のダメージを一切気にしない。

メタルクウラは自身の損傷を無視して完全に壊れるまで戦闘を続行し、自律気弾も自身の身が削れる事などお構いなしに完全に消滅するまで戦いを続ける。

太陽系を消滅させるほどのエネルギーが気軽に発生し、重力が乱れ、あちこちで空間が罅割れていく。

ヒーローの姿を再現された光の戦士は一行に並んで同時に跳躍からのキックを放ち、無数のメタルクウラを爆散させる。

五色の光の戦士が次々とメタルクウラに打ち取られ、光の巨人は光線を放ちながら回転した。

巨大ロボットの形をした光の戦士がビームやサーベルで攻撃するが、メタルクウラも一斉にスーパーノヴァを投げて迎撃する。

超巨大な光の戦士が惑星サイズの岩礁を掴んで投げつけてスーパーノヴァとの衝突で大爆発が起ころも、戦いは止まらない。

メタルクウラの拳を光の戦士が素早い掌底で弾き、手刀で切断し、火炎で爆破する。

自ら攻め込まずに、近付いてくるメタルクウラをサマーソルトキックで迎撃していた光の戦士はロックオンバスターで何も出来ずに消し飛ばされた。くにへかえるんだな。

このような戦いが至る所で発生し、第7宇宙が悲鳴を上げた。

今の所……あくまで今の所はまだ、この死の銀河の外にまで影響は出ていない。自律気弾の何体かは被害を外に広げないように死の銀河全体をバリアで封じ、戦いの余波を抑え込んでいる。

更に超銀河王ザーボンが乗る戦艦の上には天使見習いのメルスが立ち、天使の力で戦いの余波を可能な限り消し去っていた。

しかしそれにも限界がある。

この戦いの規模と量は既に、天使見習いのメルスですら完全に封じる事が出来ない。

「あ、あの……これ……続けたら第7宇宙、壊れませんか？」

「……壊れる、でしょうね」

21号の不安そうな声に、リゼットは感情を押し殺したような声で答えた。

神レベルの戦士が数十万人も集まって同時にぶつかればどうなるか……そんなのは考えるまでもない。

まず、決着が付くより先に第7宇宙が滅びるだろう。

かつて超サイヤ人ゴッドの悟空とビルスが戦った時も余波で宇宙破壊の危機を招いたのだ。

量産兵単体で見ればあの時の悟空とビルスには遠く及ばないが、何せ数が数だ。こんな戦いをしては第7宇宙が先に悲鳴を上げるに決まっている。

「だから、この戦いを長引かせる事は出来ません。

これから私がビッグゲテスターに突入して本体を叩きます」

「神様、大丈夫なんか……？ オラも……」

「いえ、これは私しか出来ません。悟空君は宇宙空間で生存出来ませんし、何より悟空君には私が抜けた後を任せたいんです」

戦力を言えば、悟空を連れて行きたい気持ちは勿論ある。

だがいかに強くても悟空では、ドラゴンボールで願いを叶えたりゼットと違って宇宙空間で生存する事は出来ない。

ブローリーのようにバリアを張れば宇宙空間での戦闘も出来なくはないが、バリアを破壊されてしまえば待つのは死だけだ。

そしてそんな弱点をクウラが放置してくれるとは思えない。

それに、悟空にはここで待機して欲しい理由があった。

「いいですか、悟空君。」

恐らく私がビッグゲテスターに突入すると同時に、ロックオン・バスターによる一斉攻撃が開始され、こちらの戦力が一気に削られます」

現在、クウラによるロックオン・バスターがないのは撃つてもリゼットに相殺されてしまうからだ。

同様の理由でリゼットもブレイカーズの二撃目を発射していない。

つまりリゼットとクウラが存在が互いに抑止力となり千日手を招いている。

だから今は盤上は互角だが……リゼットが抜ければ当然、クウラは狙撃し放題となる。

これは逆も然りで、故にクウラ本人が突撃してくる事は絶対がない。

そんな事をしたが最後、リゼットによってメタルクウラ軍団が一気に削られ、数の暴力で攻撃されるのが目に見えているからだ。

互角であるが故に、この戦いは先に動いた方が圧倒的に不利となる。

酷いレベルでバランスが取れているが故に盤面は動かず、膠着状態が完成する。

だが問題は、盤そのものが持たない事だ。

この膠着状態をこのまま続けては、リゼット達はよくても第7宇宙そのものがこの戦いの余波で崩壊してしまう。

だが、クウラはそんな事は一切気にしない。

彼はもう第7宇宙での支配圏などに固執していない。

リゼットを殺す事……それが第一優先だ。リゼットを殺し、最強のプライドを取り戻す。その為だけに今ここにいる。その為ならば宇宙などいくら壊れたところで知った事ではない。

しかしリゼットはそうはいかない。

第7宇宙を守るための戦いで第7宇宙を滅ぼしては本末転倒だ。

だから不利と分かっているにも動くしかないのだ。

「メタルクウラは当然神殿にも踏み込み、私達の後ろにいる銀河パトロールにも被害が及ぶでしょう。」

だから悟空君はそうなった時の為にここに残り、メタルクウラを食い止めて欲しいのです」

「神様……けどよ……」

「ならば俺が同行しよう」

悟空に後を任せて単騎突撃をかけようとするリゼットに、ミラが声をかけた。

ミラは悟空と違い、宇宙空間でも戦闘を続行出来る戦士だ。

ミラが抜ける事で神殿の守りが薄くなってしまうが、これから敵陣に突撃するリゼットの側に一人もいないのも問題だ。

ミラは悟空の肩に手を置き、任せろと言わんばかりに頷いた。

「そういやお前等はどうするんだ？ この世界での戦いにタイムパトローラーが手を出すわけにはいかねえんだろ？」

「無論そのつもりだ。私達はここで待機している」

「だが、向こうから攻撃されたなら、そんなときや自分を守るために仕方ねえよな？」
ターレスの問いに、セルとバーダックは揃って悪どい笑みを浮かべた。

時間の秩序を守るタイムパトローラーがその時代の戦いに干渉する事は出来ない。
い。

しかし向こうが攻撃してきたならば、それは正当防衛だ。

少しくらいならば自分を守るために戦っても許される。

時の界王神が聞けば憤慨しそうな屁理屈だし、間違いなく後で小言を言われるだろう。

だがセルにとってこの時代は思い入れのある時間軸であり、バーダックにとっては他ならぬ自分自身の出身地……ならぬ出身時間軸だ。

時の界王神には悪いが、黙って見ているだけなど出来そうもない。

まああの神様は何だかんだで激甘なので、後でご機嫌取りをしておけば大丈夫だろう。

「安心しろ、孫悟空。リゼットは俺にとっても超えるべき壁だ。こんな所で死なせるつもりはない」

「ああ、分かった……頼んだぞ、ミラ」

まだ心配そうにしている悟空を安心させるようにミラが言い、悟空も彼を信頼してリゼットを任せる事にした。

だが何故だろうか。今回に限って妙な胸騒ぎを感じてしまうのは。

リゼットの強さはよく知っている。そう簡単に負ける事も死ぬ事もないはずだ。

だが今のリゼットの背中には、どこか不安というか……恐怖のようなものを感じているように見えてしまうのだ。

「神様、あまり無理はすんなよ」

「……………」

「……神様？」

「いえ……何でもありません。」

そうですね……無理は禁物……分かっています」

リゼットは、心ここに在らずといった様子で何かを眺めていた。

だがそこには何もない。ただ宇宙空間があるだけだ。

悟空に声をかけられて普段通りの彼女に戻るが、どこか地に足が付いていない。

そればかりか、次の瞬間悟空は世にも珍しいものを目にする事となった。

一歩踏み出したリゼットが突然足をもつれさせ、尻もちをついてしまったのだ。

「おっと、こいつは珍しいものを見たな。神さんがすっ転ぶなんざ、初めてじゃね

えか？」

「……そうかもしれませんね。お恥ずかしい姿をお見せしました」

リゼットは武の達人である。

普段何気なく歩いている時でも、その立ち振る舞いには隙がなく、常に芯が一本通っている。

その彼女が何もない場所で足をもつれさせるなど、今後二度と見られないかもしれない貴重な光景だ。

だが奇妙な事は続くもので、立ち上がったリゼットは今後は足を滑らせて咄嗟に抱えたミラの腕の中に収まってしまった。

「お、おい……？　本当に大丈夫か？」

「……………」

この異常事態には他ならぬリゼット自身が一番驚いた顔をしていた。

それから彼女はまた、何もない空間を見て小さく溜息を吐く。

（これは……参りましたね……）

体調は万全だ。何か不調があるわけではない。

だがどうやら、この身体は自分をビッグゲテスターに行かせたくないらしい、とリゼットは理解した。

我が身ながら本当に困ったものだと思う。

今になって……これから戦うという時になって、こんなものを見せるなんて……。リゼットの見る何もない空間——そこには、リゼットだけに見える巨大な鉄の扉が、まるで彼女に『行くな』と言っているように聳え立っていた。

★

「護身の究極形……かの？」

場所は変わって、ここは地球のカメハウス。

そこで亀仙人は弟子であるクリリンから一つの質問をされていた。

武とは何か。

明るく楽しむ為のもの、高みを目指す為のもの、己の身を守る為のもの。

個人によってその意見は様々で、きっとどれもが正しいのだろう。

その中で、最も武術というものを極めているだろう地球の神は武を『弱者が強者から身を守る為のもの』と言っている。つまりは護身術だ。

ならばその護身術を極めた先に何があるのか、クリリンは気になったのだ。

「護身の完成がパオズ山の頂とするならば——このワシをして麓を踏んだばかり」

亀仙人は地球において、武術の神としてその名を知られている。

武天老師とは武の天に至った老師という事……彼の偉業を称えたその別名からも、いかに亀仙人が武の懐の奥深くまで潜り込んでいるかが分かるだろう。

だがその彼が、未だ山の麓にしか辿り着いていない。

その事実には、クリリンは驚愕した。

「そもそも突かれたらこう躲す……蹴られたらこう捌く……。

そのような些末な技術にとらわれているようでは護身としては下の下。

真の護身を身に着けたなら、技は無用」

技が必要になるという事——護身術が必要になるという事。

それはつまり、危険と出会ってしまったっている事を意味する。

その時点で既に護身は失敗しているのだ。

敵の攻撃を自動で回避する身勝手の極意もまた、危険に出会ってしまった後の技術でしかない。

それが必要になった時点で、既に護身としては矛盾している。

もっともアレは護身術ではなく、敵を倒す為の術という面も備えているが……。

護身とは呼んで字の如く、身を護る事。敵を倒す事ではない。

ならばそもそも、危険と出会うのが一番。

危険と遭遇しなければ、それ以上に安全な事はない。

山に登る時、熊との戦い方を考えるだろうか？ いや、まずは出逢わない為の

鈴を用意するだろう。

自動で敵の攻撃を回避する身勝手の極意の更に先——それは、自動で敵との遭遇そのものを回避する事である。

「真の護身が完成したなら、クリリンよ……危うきには出逢えぬ、己の危機に気付くまでもなく……危機に辿り着けぬのじゃよ……」

亀仙人がそこまで言い終わると、弟子は次の質問をした。

それは、それならばそもそも何の為に武術があるのかという根本的な質問だ。

だが亀仙人はそれに、「バカタレ」と返して弟子の頭を杖で叩いた。

「それはずーっと前に教えたじゃろ。」

武道を習得するのはケンカに勝つ為ではなくギャルに『あらん、あなたとっても強いのねーウッフーン』と言われる為でもない。

第25話 激突!! 100兆パワーの戦士たち (2)

ミラの腕から抜け、スカートについた汚れを軽く払う。

それから今度はしっかりと脚を地に付け、行きたくないと思ふを握ねる我が身に活を入れた。

こんなものが視えてしまった以上、恐らくこの先に行けば無事では済まないのだろう。

待っているのは死か……そうならないにしても、余力が残る事はないと考えている。

少なくとも、クウラの後にはコアエリアの戦士とやらを相手にするだけの力は残らないだろう。

「ごめんなさい、悟空君。いきなりですが前言を撤回させて下さい。

無理は禁物、そう分かっていると云ったばかりですが……今回ばかりは、無理をします」

「……神様」

「きっと、この戦いが終わった後に私に余力は残らないでしょう。

そして、その隙を敵は必ず突いてきます。

だから……コアエリアの戦士との戦いは貴方達に任せていいですか？」

リゼットは真剣な眼差しで悟空を見る。

悟空も彼女のその瞳に、決死の覚悟を見た。

だから静かに頷き、せめてリゼットが後の事を気にせず戦えるように送り出す。

「分かった……コアエリアの戦士たちゅう奴等はオラが倒す」

悟空のその頼もしい言葉にリゼットは柔らかく微笑む。

「ありがとう、悟空君……貴方がいてくれるから、私は前だけを向いて戦える」

クウラを倒しても、今回の争乱は終わらない。

必ず次の危機がやって来る。

しかしリゼットは、そちらに回す余力はないと割り切る事にした。

大丈夫……後ろには孫悟空がいる。彼がいてくれるならば、自分は全ての力をこの一戦に費やすことが出来る。

そう決意し、表情を引き締めて前を向いた。

まずはあのメタルクウラ軍団を突破し、ビッグゲテスターへ突入する。

転移の類はバリアで防がれるだろうから、やるのは愚直な一点突破だ。

圧倒的な力でメタルクウラ軍団を蹴散らし、ビッグゲテスターに穴を開けて入り込むしかない。

「行きますよ、ミラ」

「ああ」

リゼットの背中中の光輪が爆発したように輝き、飛翔と同時に一気に加速した。

その後をミラが続き、無数のメタルクウラが反応するよりも早くビッグゲテスターとの距離を縮める。

奥の方に控えていたメタルクウラ達が迎撃の気功波を一斉に発射するが、リゼットは回避する素振りも見せない。

気功波の前にミラが飛び出して両手を広げる事で全て吸収し、己の力へと変換……それと同時にリゼットがビッグゲテスターへ突撃した。

「ヒルデガン！」

リゼットの呼びかけと同時にヒルデガンが一瞬実体化し、リゼットが幻魔人の

拳に己の気を纏わせて出力を上昇させる。

後押しを受けたヒルデガンが拳を叩きつけてビッグゲテスターの外壁を破壊した瞬間にリゼットは宣言通りに穴を開けて中へと飛び込んでいった。

その後をメタルクウラ達が追おうとするが、それを許さない為にミラがいる。

「電撃地獄玉！」

本来の世界線であれば超17号と呼ばれる戦士が使うはずだった大技を放ち、メタルクウラ達を蹴散らした。

それから神殿とメタルクウラ達に両手向け、魔術を行使する。

「二度と使う事はないと思っていたが……」

ミラが使ったのは、トワが得意とした強化・凶暴化魔術だ。

魔術をかけられた相手の力を高め、そして凶暴化させる。

この力を使う事で、かつてトワは様々な時代をかき乱して来た。

その力は今や、トワを取り込んだミラのものとなっている。

悟空達の身体が黒いオーラに覆われて力が増し、しかし以前のような凶暴化はない。

純粹に力をブーストさせる為だけのものだ。

一方メタルクウラの方は凶暴化効果のみを与えて暴走からの同士討ちをさせようと思ったが……駄目だ。暗黒魔界と戦っていただけあって既に対策済みだ。

しかしこれで少しは戦況もマシになるだろう。悟空達の力が高まったのを見届けたミラはすぐにリゼットの後を追ってビッグゲテスターへ飛び込む。

するとリゼットが読んでいた通りに、突入から間を置かずにビッグゲテスター内部からのロックオン・バスターによる狙撃が始まり、光の軍勢が目に見えて減り始めた。

「我等も行くぞ!」

「は、はい!」

戦況が動いたのを見て、神殿から四星龍と21号が出撃した。

四星龍は七つのドラゴンボール——だった石を取り込んだ超四星龍とでも言うべき姿になっており、21号も最初から戦闘形態へ移行している。

超四星龍は最も多くメタルクウラが密集している場所へ飛び込むとその場で獄炎のフィールドを発生させて閉じ込めた。

本来の歴史では不発にこそ終わったが、もし決まってさえいけば遙か格上のはずの超一星龍すら葬ったと言われる彼の究極技『バーニングスピン』だ。

超四星龍の表面温度が太陽の表面温度6000℃ならば、このバーニングスピンは太陽の内側に敵を閉じ込めるようなもの。

爆発時の温度は太陽の中心温度1600万℃にまで達する。

かつてクウラはリゼットとの戦いにおいて、太陽に押し付けられる事で敗北した。そして今再び、彼は太陽によって滅却されるのだ。

「バーニングスピン！」

超四星龍の掛け声と同時に超新星爆発の如き大爆発が起こり、内部のみならず外側にいたメタルクウラ達までもを諸共に焼き尽くしていく。

それでいて超四星龍自身は全くの無傷であった。

当然だ。太陽そのものと言っていい彼が太陽熱でダメージを受けるわけがない。再び彼は別のメタルクウラが密集している場所に突撃すると、同じように炎のフィールドに閉じ込めた。

今の彼はそのスピードと相まって、まさに高速で動き回る太陽だ。

この熱から逃れる術などない。

いずれアップデートにより対応されてしまうだろうが、それまでに一体でも多く破壊する！

「ご、ごめんなさい！」

21号は両手を広げ、十の指先から次々と光線を発射してメタルクウラをお菓子へ変えていた。

当たれば格上だろうが何だろうが問答無用でお菓子に変えてしまうこの技は凶悪だ。

余りに実力差がありすぎるとお菓子にしても平然と動き回る可能性もあるので決して勝ち確定の技というわけではない。

別の歴史においては魔人ブウが不用意にベジットをコーヒークャンディにした結果、宇宙最強の飴玉となった彼に逆襲されたという事もある。

しかしこの問題に関しては事前にリゼットより対処法を聞いており、21号は忠実にそれを実行していた。

なまじ頑丈な飴玉などにするから逆襲された時に困るのだ。

ならば当たっても痛くない綿飴や、ソフトクリームにしてしまえばいい。

これならば仮にお菓子に変えた後に相手に自我が残って逆襲されても、恐れるには値しない。

仮に体当たりなどすれば潰れるのは向こうの方だ。

尚、こうしてお菓子にしたメタルクウラだが、味はとても酷いものだった上に生物ではない完全な機械だったせいで食べても戦闘力の向上は見込めなかった。

それでも実質即死のこの技ならば、メタルクウラだろうと倒してしまえる。

とはいえ、何せ数が数だ。

超四星龍と21号をもってしても全てのメタルクウラを相手取れるわけではない。何体かは神殿へと近付いてしまっている。

だが神殿へ接近したメタルクウラが見たのは、その外周部分の先端で背中合わせになるようにしてこちらに半身を向ける二人のサイヤ人の姿であった。

「くくっ……団体さんのお越しだ。そんじゃ丁重にお出迎えしてやるか……なあ、カカロットよ」

「ああ。いっちょやってみるか」

悟空とターレスは瓜二つの顔で同じように不敵に笑う。

ターレスは両手を合わせてボキボキと関節を鳴らし、悟空は開いた右の掌に左の拳を軽くぶつけて闘志を高めた。

そして同時に変身——ターレスは野生を極限まで解放した超フルパワーサイヤ人4となり、悟空は外見がほとんど変化することなく、眼だけが銀色に変化する。

神の御業である『身勝手の極意・兆』だ。

身勝手の極意は敵の攻撃を回避するだけではなく、身体を強くするという効果もある。

肉体が弱ければこの強化に耐えられずに自滅してしまうが、今の悟空は身勝手の極意を使っても自滅しないだけの強さを手に入れていた。

異なる進化を果たした二人のサイヤ人が同時に飛び出し、メタルクウラ軍団と衝突し、次々と破壊する。

ターレスはあくまで力任せに、暴力的に。

悟空は洗練された技と動きで。

方向性は正反対だが、しかし二人は阿吽の呼吸で完璧な連携を見せて銀色の侵略

者を跳ね返す。

その更に奥……神殿の屋根の上で額に指を当てて気を集中しているのはセルであつた。

「ようこそ、諸君。早速だが私の歓迎を受けて貰おうか」

挑発するようにキザな言い回しをし、指先から限界まで気を集めた魔貫光殺砲を発射した。

放たれた魔貫光殺砲は容易くメタルクウラの頑強なボディを貫き、更に軌道を変えて別のメタルクウラを次々と貫いていく。

最大までチャージした魔貫光殺砲は自身の数倍の強さを持つ相手だろうと容易く貫通し、死に至らしめる。

だがこれだけではメタルクウラは死なない。すぐに再生してしまう。故にセルの攻撃もこれで終わりではない。メタルクウラが動きを止めるのを待っていたように物陰から飛び出したのは四身の拳で分裂した三体のセルだ。

気円斬。気功砲。そして兎人参化の人参変化。

格上殺しの技を駆使し、弱ったメタルクウラを次々と葬っていく。

そして攻撃はまだ続く。

「ぶるあああああ！」

セルが黒い気を解放し、体色が今までの明るい緑色から黒に近い深緑へと変わった。

フリーザの細胞を獲得したセルはこれまで、フリーザ同様に黄金の気を発する変身を可能としていたが、この変身はこれまでのものとは違う。

元の時代に帰還してから経験した様々な戦いと、タイムパトローラーとしての経験はセルを新たなステージへ押し上げていた。

その果てに得たのが、この黒い変身だ。

恐るべきはフリーザの細胞か。まだ先があったなどとは、セルも思いもしなかった。

だが今思えば、その考えこそが己の成長を止めていた原因だったのだ。

力の大会の時、一度は自分はどう強くなれないと思った。ここが限界だと勝手に自分で可能性を諦めた……何という不真面目！

見よ、限界など自分で決めない限りどこにもないのだ。

「あいつ……!」

「流石だなあセル……こりゃあオラ達もうかうかしてらんねえぞ!」

戦友の今も止まらない成長と進化にターレスと悟空が嬉しそうに笑った。

彼等の見ている前でセルは次々とメタルクウラを破壊し、獅子奮迅の活躍を見せて付ける。

「キキーツ!」

知性を感じさせない奇声を上げて両手を上空へ向けているのはセルジュニアだ。

セルにより生み出された即席戦力であるセルジュニアは単純な強さだけを言えばセルの数割程でしかない。しかもゴールデン化もブラック化も出来ないというオマケ付きだ。

ハッキリ言ってもこの戦いについてこれるレベルではないだろう。

しかしセルジュニアはセルの持つ技のほぼ全てを継承している。

そして今、彼が使っているのは術者本人の力量とは無関係の大技……元氣玉だ。

今ここには、戦闘に参加する事は出来ないが数だけは揃えた『永遠の美』の構成員達がいる。

一人一人はメタルクウラから見れば塵も同然の戦力に過ぎないが、全てのパワーを集めればメタルクウラにすら届く力となる。

そして元氣玉は本来は邪悪な心の持ち主には使えない技だが、このセルジュニアに邪心はない。

セルがあえて邪心を持たないように調整して生み出した特別製の個体だ。だからこそ、元氣玉も問題なく使う事が出来る。

「ウキヤー！」

セルジュニアが元氣玉を投げ、それが神殿に近付いていたメタルクウラ達を押し返した。

更にバーダックもメタルクウラと渡り合い、一瞬の間を見てダブルスレッジハンマーで叩き落とす。

続けて次のメタルクウラに突撃し、白い気を纏った拳で破壊した。

今のバーダックは、外見だけは平常時とほぼ変わらない。

だがその全身は、身勝手の極意に似た白いオーラに包まれていた。

「父ちゃん……それは……変身なのか？ 身勝手の極意じゃねえよな？」

「さあな、俺にも分からねえよ。ただ身勝手の極意って奴じゃねえ事だけは確かだぜ。」

ありやあ心を静かにして戦うんだろ。だったら俺のこれは違う」

バーダックは不敵に笑い、拳を固める。

「俺はいつだって、勝つ事だけを考えている。その闘志が俺に力をくれる……それだけだ！」

猛々しく吠え、バーダックがメタルクウラの群れに突撃した。

驚くべき飛躍を遂げた戦士達だが、それでも、メタルクウラは容易な相手ではない。

倒しきれなければパワーアップして再生し、戦況を悪化させてしまう。

現に今も何体かの仕留めきれなかったメタルクウラが復活し、今まで以上の力で襲い掛かってくる。

ターレスが殴り飛ばされ、高速移動からの奇襲でセルジュニアが粉々にされる。ロックオンバスターで光の戦士が消し飛ばされ、バーダックの腹にメタルクウラの鋼鉄の拳がめり込んだ。

しかし今の悟空達もまた、普段とは違う。

かつては魔人ブウを増殖させるといふ離れ業すらやってのけたトワの魔術が戦士達を後押しし、彼の力を飛躍的に高めている。

「く……ククク……この俺があいつの術に助けられるとはなあ!」

バーダックが渾身の一撃で目の前のメタルクウラの頭部を殴り壊し、追い打ちの気功波で消滅させた。

少し不満そうに、そしてどこか愉快そうに言いながらも、今するべき事は分かっている。

タイムパトローラーは本来この戦いに加わるべきではない。

だがクウラが滅ぼし、養分へと変えてしまった暗黒魔界こそは彼等の本来の敵なのだ。

言うまでもなくフューのエネルギーもクウラに加算されているだろう。

つまりクウラがここまで強くなってしまったのは暗黒魔界とフューのせいだ。これもある意味歴史改変の一つと言えるだろう。

タイムパトロールにクウラと戦う責任と使命などない。クウラはこの時代に元々

存在しているのだから、放っておくべきだ。

だがこのまま終わらせるのはバーダックもセルも納得がいかない。

……いや、そんな建前などどうでもいい。

バーダックを突き動かしているのはもっと別の、個人的でどうでもよくて、しかしだからこそ強い思いだった。

獲物の横取りをされた。

だから気に入らない。

獲物を目の前で取られて怒らない肉食獣はいない。それだけだ。

「なるほど、まずは流石と言ってやろう」

「しかし無駄だ。お前達が今、必死の思いで破壊したメタルクウラは精々百体程度」

「しかし俺は何十万と存在する」

「お前達にこの俺を倒す事など無理なのだ」

カシャン、カシャンと足音を立てて新たなメタルクウラの群れが神殿に侵入した。

全く嫌になる、絶望的な光景だ。

だがこの場にいる戦士の誰一人として絶望などしていない。

悟空もバーダックも、ターレスもセルも、21号と四星龍もただ勝利のみを信じ、メタルクウラを迎え撃つ。

「そうかもしれねえ……けど、無理と分かっている、やんなきゃなんねえ時だってあるんだ」

悟空が先頭に立ち、静かな瞳でメタルクウラを見据える。

メタルクウラは黙ってその視線を受け、そして生意気なサイヤ人への苛立ちを募らせた。

「……猿が。ムカつく野郎だ」

それだけを言い、メタルクウラが一斉に動き出す。

同時に悟空達も飛び出し、戦いがますます激化した。

★

今の所、悟空達は順調にメタルクウラを迎撃している。

だがそれも長時間はもたないだろう。

何せメタルクウラの数が数だ。

それに光の軍勢が全滅すれば、メタルクウラのロックオン・バスターが次に牙を

剥くのは悟空達だ。

そうなる前に何としてもリゼットがクウラ本体を倒す以外に勝ち筋はない。

そして向こうもきつとその程度は予測している。だからビッグゲテスターに入ってからが本番で、以前の戦いの時同様に激しい抵抗を受けるとリゼットとミラは思っていた。

「おかしい……静かすぎる」

「ああ……迎撃のメタルクウラの一体すらいけないとはどういう事だ？」

ビッグゲテスター内部を進み、感じられるクウラの気が近付いて来る中リゼットの胸中にあつたのは戸惑いであった。

中に入ってからここまで、一切何の妨害も受けていないのだ。

そればかりか『どうぞこちらです』と言わんばかりに分かりやすく道が用意され、リゼットを通している。

罠……？ 進んだ先に大量のメタルクウラが配備されていて物量で押し潰す作戦か？

そう思うも、ビッグゲテスター内部には本体らしきクウラの気以外何も感じる事

が出来ない。

だがクウラが何の侵入対策も施していないとは考えられない。

事実、ビッグゲテスターに入ると同時にミラは凶悪化の魔術が使えなくなってしまった。

量産型に無効化された時点で薄々わかっていたが、やはり魔術対策はばっちりというわけだ。

つまり、いきなりパワーアップ手段の一つを無効化されてしまった事になる。

やがて二人は開けた空間に到達し、その中央で佇む一人の男を目にした。

「来たか……待っていたぞ」

そこにいたのは銀色の男であった。

量産型のメタルクウラとほぼ同じ外見で、かろうじて違いがあるとすれば左目が空洞となっていて、中央で赤く光を放っている事くらいか。

だが、理解^{わか}る。コイツが本体だと。

感じられる気の圧力……背筋が冷えそうなあの眼……そして何より理屈抜きに感じられる存在感。それらが彼こそオリジナルのクウラであると雄弁に伝えてくれ

る。

その彼の後ろから無数のメタルクウラが出現し、リゼットとミラは身構えた。

「なるほど、気を消して潜んでいましたか……あえてここまで通したのは残りの戦力全とと本体とで私達を叩くつもりだから……」

「勘違いするな、こいつ等は貴様とは戦わん。これは邪魔な奴を排除する為に残しておいた保険だ」

そう言い、クウラはミラを心底疎ましそうに睨んだ。

それからリゼットへ視線を戻す。

「貴様だけでいい。このビッグゲテスターへ来るのは貴様一人でもいいのだ。

俺の望みは一つ……俺自身の手で貴様を完膚なきまでに叩きのめし、葬り去る事。

二度も余計な奴に邪魔はさせん」

クウラが言っているのは、以前の戦いの時の事だろう。

ナメック星で戦った時、クウラは後一步でリゼットを地獄の道連れに出来るはずだった。

だがそれはクウラが全く予期していなかったセルというイレギュラーによって阻

まれ、彼は敗北の屈辱を味わう事となったのだ。

「では、罨も何もないと？ 正真正銘、貴方一人で私と戦うと……そういう事ですか？」

「そうだ。そうでなければ俺のプライドを取り戻す事は出来ん」

ギリ、とクウラの握り拳から音がした。

表面上はクウラは冷静に見える。

だがりゼットは、彼の氷の眼差しの奥に沸々と煮え滾る憎悪が隠れているを感じた。

「俺のプライドは地に堕ちた。同じ相手に二度も負けると言うこの上ない屈辱……。

その汚点を拭い、俺は失われた最強としてのプライドを取り戻す」

カシャ、と硬質な音を立ててクウラが一步前へ踏み出た。

それからゆっくりと両手を広げ、フリーザも好んだ独特の構えを取る。

「全てはその為の下準備だった……このビッグゲテスターも多くのメタルクウラも……暗黒魔界やフューを始末した事すら、全てはこの時だけの為。

貴様と一对一の場を作る事……その上で勝利する事。

そうする事で初めて、俺は俺を取り戻せる」

勝利するだけならばきつと、クウラにはまだ他に手があったのだろう。

少なくとも一対一に拘る必要はなかった。

極端な話、真つすぐリゼットに向かわずにメタルクウラを宇宙のあちこちにバラまいて人質を取る事だってクウラには出来たのだ。

そうすればリゼットも無論対策の十や二十くらいは打ち出し、場合によってはドラゴンボールだって躊躇なく使って全力で防いだだろうが、少なくとも今よりは断然やり難かったのは間違いない。

このビッグゲテスターに罠を仕掛けてもよかった。多くのメタルクウラで弱らせてもよかった。

だがそんな真似をすれば、そうしなければ勝てないと自ら認めているも同然……。どんな言い訳をしようと、どれだけ勝ち誇ろうと、自分だけは誤魔化せない。

『もしかしたら本気で正面から戦えば俺は奴に勝てなかったのでは？』、『俺は本当に最強なのか？』……そんな心のしこりがきつと残る。

そればかりか、実力以外で勝利してリゼットを殺してしまえば最後、リゼットは

クウラの中で永遠に『実力で勝てなかった相手』となってしまふ。

二度と勝てない相手として神格化される。未来永劫、届かぬ頂となる。

……許せるものか！

そんな存在がいるなど、決してクウラは認めない。

一点の濁りもなく、言い訳の余地もなく、完全に完璧に勝利する。

そうする事で初めて、地に堕ちたプライドを取り戻せるのだ。

「お喋りはここまでだ」

話を打ち切り、クウラの気が爆発的に上昇した。

銀色だった全身がフリーザのように黄金に輝き、その気の圧力にリゼットの額から汗が流れる。

空洞の左目が鈍く輝き、そして剥き出しの殺意がいよいよリゼットに牙を剥こうとしていた。

・孫悟空（身勝手・兆＋凶悪化）…87兆3600億

・21号（セルジュニアモグモグ＋凶悪化）…65兆

・超四星龍（凶悪化）…65兆

・ターレス（凶悪化）…53兆5000億

ミラによるバックアップを受けた悟空達。

凶悪化といっても今回は戦力の向上効果のみで精神への影響はない。

21号は性格が変わってないが、これはメタルクウラがあまりに不味そうだったので食欲が表に出たがらないから。

・超フルパワーバーダック…44兆

凶悪化…57兆

漫画版で登場した謎の変身（あるいは界王拳のような技？）を使用したバーダック。

もしかしたら悟飯ビーストに近い何かなのかもしれない。

このSSではアルティメット化＋大猿パワーとの合わせ技で実質超フルパワーサイヤ人4として扱う。

・セル…2500億(超サイヤ人相当)

フルパワー(超サイヤ人3相当)…2兆

ゴールデンセル…5兆

ブラックセル…50兆

凶悪化…65兆

フリーザ細胞によりブラック化という新たな変身を獲得した。

おい誰だ、ゴールデン化が最後の強化イベントとか言った奴。

Q、どうしてミラさん、力の大会でこれ(凶悪化)やらなかったの……?

A、自分がこういう事出来るのを知らなかったから。(元々トワの技なので発想自体なかった)

ゴールデンメタルクウラ…100兆

ヒーローズであるカンバーをフルボッコにしたクウラの最新形態。

超3カンバーをボコボコにするほど強いので、当然戦闘力はカンバー以上。

とはいえ、カンバーを倒した後はオーバーヒートして撤退したのでそれほど大差

はない。

戦力だけならば今のリゼットが全力で戦えば上回る事は出来るが、何せクッソ固い上に人体急所がないのでクッソやりにくい。

これが全力ならいいのだが……。

ちなみに次章で再登場した際は何故かゴールデンフリーザと同格のような扱いを受けて、フリーザと一緒に雑に蹴散らされていた。

眼もメタルクウラ・コアっぽくなかったし、もしかして量産型……？

第26話 激突!! 100兆パワーの戦士たち (3)

「その姿は、フリーザと同じ……」

「そうだ。あえて奴のセンスに合わせて呼ぶならば、さしずめゴールデンメタルクウラといったところか……弟に出来て、兄であるこの俺に出来ない事などない。だが見た目は同じでも、中身はあんな金メッキとは違うぞ」

クウラが見せた新たな戦闘形態——黄金に輝くその姿は、以前に復活したフリーザが見せたのと同じものだ。

わざわざ弟と同じ黄金の姿を選ぶ辺り、金メッキ呼ばわりしつつも多少はフリーザの事を意識しているのだろう。

ただしフリーザが生身であったのに対し、クウラはメタル化した上で変身している。なので単純に同じ変身とは言えない。

単純な変身の段階で言えば、ゴールデンフリーザは第五形態に当たるのに対し、ゴールデンメタルクウラは第七形態に位置している。いや、メタル化しないゴールデンクウラもあると考えれば第八形態なのかもしれない。

加えて最大の違いはその戦闘力にある。

フリーザは間違いなく天才であったが、所詮はたった数か月という短い期間の集中トレーニングで得た力と新形態でしかなかった。

それだけの短期間であれだけ力を増したその天才性は驚嘆に値するが、彼のパワーアップはどこか厚みが足りていなかった。

超天才であるが故の密度の薄さ。フリーザのパワーアップには、悟空が多くの戦いの中で培ってきたような中身がない。

時間さえあればゴールデンを完全に使いこなすどころか、あるいはその先へ至ったかもしれないが……どちらにせよ、今となってはいくら考えても詮無きことだ。翻ってクウラはどうだ。天才性という点で言えばフリーザにこそ劣るが同じ一族だけあって、凄まじいものがある。

だが才能だけではない。クウラのあの黄金のボディの奥底には確かな厚みを感じる。

クウラが復活したのはフリーザと同時期のはずだ。

だが彼はリゼットの前に姿を見せる事はなかった。今日という日までの期間の全

てを、己を高める事に費やしていたからだ。

クウラ自身が言うには、彼は暗黒魔界を滅ぼしてその全てを己のエネルギーとして取り込んだという。

つまり、彼は戦っていたのだ。

リゼット達が第6宇宙を相手に対抗試合をしている時。全王と出会っていた時。未来でザマスとゴクウブラックを相手にしている時。力の大会の時……そして、日々の日常を過ごしている時。

休む事なく、暗黒魔界の軍勢やこの第7宇宙に潜んでいた別の何かを相手に戦い、牙を磨いていた。

全てはリゼット一人を殺す為だけに。今この瞬間の為に。

「どう違うかは……その身で確かめるといい！」

「……っ！」

クウラの左眼が輝き、殺意が爆発した。

同時にクウラがりゼットへ襲い掛かり、無数のメタルクウラがミラへ向かう。

リゼットは即座に今出せる最大の力を出し惜しみなく解放し、迎え撃った。

クウラは確かに強くなった。だが今のリゼットならばその上を往く事が出来る。繰り出された鋼鉄の拳を掌で軽く流し、カウンターの掌打をクウラの人中へ叩き込んだ。

……が、手を通じて伝わって来た感触は見た目通りの硬質なものだ。

すぐにリゼットは指突へ切り替えてクウラの眼球を突く。

しかしこちらも駄目だ。予想はしていたが眼球まで鋼鉄で出来ている。

クウラが蹴りを繰り出そうとするが、それに合わせてリゼットは彼の膝関節をピンポイントに蹴り抜いた。

狙いは関節破壊だったが、こちらも簡単には碎かせてくれない。無駄に頑丈に出来ている。

そのままクウラは構わず蹴りを放つが、リゼットは蹴ったままの彼の膝を踏み台にして一度後ろへと跳んで仕切り直しとした。

「まずは予想通りといったところか。お得意の人体破壊もこの身体が相手では使えない」

クウラの言葉にリゼットは何も返さなかったが、凶星であった。

人体破壊とはそもそも生身の人間を相手にする事を想定した技術だ。

生物であるならば人以外でも応用が出来なくはないし、事実リゼットはそうして宇宙人相手でもこの技術を使って来た。

どんな生物であろうと急所くらいはあるし、目や耳、鼻などの感覚器官は弱点となる。

だがメタルクウラは生物とはとても言えない。

リゼットにとってはこの上なくやりにくい相手だ。

「俺は復活した時に、一度は生身の身体を取り戻した。

だがそれを捨てて再びメタルクウラとなったのは、貴様との戦いを想定すればこそ。

生物という括りにある限り、貴様を殺すのは困難と俺は考えた」

それは一つの敗北宣言に等しかった。

クウラには、宇宙最強の一族であるという誇りと驕りがあったはずだ。

生身では勝てぬからと肉体を捨てるのは、実質的にそのままでは相手に劣っていると認めているに等しい。

メタルクウラになるのは二度目だが、以前と今回とはケースが異なる。

以前はそもそも生身の部分が脳以外残っていなかった。だから止むを得ず機械化したのだという言い訳が出来た。

だが今回は完全に自らの意志によって機械化を選択している。

リゼットはそこに、クウラが今回の戦いにかける勝利への執念を見た。

最強の誇りを取り戻す為に、最強の一族としての誇りを捨てる。今のクウラはそんな自己矛盾の上に成り立っている。

己の手で正面からリゼットを殺す事。その一点のみを目的とし、そこに至るまでに発生する矛盾を全て踏み碎いているのが今のクウラだ。

「俺は全てを捨てた。栄光も未来も、己の肉体さえも」

クウラの会話の最中に、話が終わるのも待たずにリゼットが不意打ちを仕掛けた。殺し合いの最中にありながら身体が液体化したかと思うほどの極限の脱力をし、その状態から急発進！

通常、どんな超スピードの持ち主であろうと最高速に達するまでには加速が必要となる。

だがりゼットのそれは、あろう事か加速がなかった。

初速が既に最高^{MAX}速。

予備動作なくいきなり距離を潰したりゼットの動きにクウラは反応し切れない。更にカチカッチン鋼の剣を創造し、気を纏わせた上で平突きを放った。

頑丈なメタルクウラを相手に強度で圧倒的に劣るリゼットが己の身体をぶつけては、相手に与える以上に自らがダメージを受けてしまう。

故にこそその武器使用だ。これならば決して強度負けはしない。

一撃必殺狙いで急所——メタルクウラに唯一残された生身の部分である脳があるだろう頭部を狙って剣を突き出す。

だがクウラはまるで事前に予測していたように頭を逸らし、僅かに狙いを外した。剣は彼の側頭部を削るだけに終わった。

読まれていた……！ その事実のリゼットが僅かに表情を険しくする。

「迷いのない一撃だ。美しくすらある。

そうだ、それでこそだ。そうでなくては、この身を機械へ変えた意味がない！

全てを捨てた意味がない！」

頭部を再生させながらクウラが拳を繰り出した。

それを剣の腹で受けるが、カチカッチン鋼製のはずの剣に容易く罅が入る。

即座に物質創造魔術で復元させるが、それより早くクウラの第二撃が来た。

それを掌で受け、威力に逆らう事なく脱力……クウラの攻撃の威力を完全に受け流し、リゼット自身も回転。

ターンを描くようにしてクウラの背後に回り込み、彼の背中に剣を叩き付けた。

「ぬっ……！」

クウラの尻尾がすぐに反応してリゼットを襲うが、リゼットはもうその場にいない。

既に距離を取っていたリゼットが自律気弾をその場に展開し、二十体の分身リゼットが時間差をつけてクウラに突貫した。

その中に紛れてリゼットも先程の脱力からの最高速を出し、再びクウラの脳を狙う。

だがクウラもすぐに本物に気付き、またしてもリゼットの剣は狙いを外してしまった。

クウラは自律気弾の直撃を浴びながらも、それを意に介さずリゼットの剣を掴む。効いていないわけではない。だが決定打でさえなければクウラは再生し、強化する事が出来る。

「どうした？ 随分消極的だな？」

無理もない……俺に下手な攻撃を加えても再生・強化されるだけ……。

手に負えなくなる前に一気に仕留める以外に貴様の勝ちはない」

戦いというのは戦闘力だけで決まるものではない。

単純な強さだけを言えば今のリゼットはクウラを上回っている。

だがクウラの頑丈さと再生能力、そしてアップデート機能は戦闘力以上に脅威だ。決定打以外では逆に相手を強くするだけに終わり、下手な攻撃を重ねれば手に負えなくなってしまう。

だからリゼットは最小限の攻撃でクウラを仕留めようと考えているのだが、流石にそう簡単にはやらせてくれない。

リゼットはクウラに奪われた剣をすぐに手放し、また別の剣を創造して脳を狙って剣を薙いだ。

——嘘か真か。ある高名な武道家は語った。

『刃物を持った相手は危険ではありません……刃物しか使用つかいませんから』

強力な武器があれば、それを使用つかう。

無意識下の縛り……これを当てれば勝てるという武器への依存。

それが本来無数のはずの攻撃の選択肢を一つにまで狭めてしまう。

今のリゼットはまさにそれだった。

本来ならばもっと変幻自在で苛烈なはずの攻撃がワンパターンと化している。

その姿にクウラは僅かな失望を抱きながらカウンターを合わせる。

ビッグゲテスターとの同化により高い学習能力を得た今の彼ならば、三度も同じ

攻撃を繰り返されればそれに合わせるなど造作もない。

故に完璧にリゼットの剣に合わせ——次の瞬間、クウラは信じられないものを見た。

——リゼットの片目が一瞬のみ銀色に輝き、クウラの攻撃を回避したのだ。

回避しただけならば何も驚く事などない。

だが今のリゼットの動きは明らかにおかしかった。

完全に攻撃の姿勢に入っていた。間違いなくフェイントではなかった。

なのにクウラの攻撃を避けたのだ。まるで磁石のS極とS極が反発したかのような不自然な避け方……リゼットを無視して身体が勝手に避けたような！

そのままりゼットはクウラの腹に手を当て、神の気を解き放つ。

「浄化！」
はかい

——不味い!!

クウラは本能的な『死』の気配にほとんど反射的に反応し、無理矢理後ろへ身体を逸らした。

無様でもいい。とにかくこの攻撃には当たるな！

その急ブレーキが功を奏し、何とか直撃を免れたがクウラの腹がごっそりと光の粒子となって分解され、大きな穴が空いてしまった。

もし直撃すれば上半身と下半身が分断され、それだけではなく破壊のエネルギーが全身を駆け巡って破壊されていただろう。

こちらの攻撃こそが本命だったのだとクウラは悟る。

先程までの剣でのワンパターンな攻撃はわざとだ。あえて同じ攻撃を繰り返すこ

とでクウラに学習させ、カウンターを誘った。

その上で更にカウンターを合わせ、この『破壊』を叩き込もうとしたのだ。だがまだリゼットの攻撃は終わっていない。

両手に剣を創造してクウラの両腕の関節にめり込ませ、そして手放す。

切断せずにあえて残すことで再生の邪魔をしたのだ。

続けて短刀を創造してクウラの足を突き刺し、床に縫い留める。

まだ終わらない。今度はトンファー……腕と脚を潰した今、狙いは頭一択！

これに対しクウラはノーモーションで発動出来るロックオン・バスターで迎撃を試みる……が、視界内に残っていたのはトンファーだけだ。

「はっ！」

身を屈めたりゼットが気を集中させた蹴りをクウラの腹の穴に突き刺し、更に蹴り上げる。

機械のパーツを散乱させながら更に穴が広げられ、クウラが宙を舞った。

まだ攻撃は続く。リゼットはすぐに跳躍してクウラの眼前に手を翳す。

（破壊狙いか。だがロックオン・バスターが間に合う！）

リゼットの狙いを讀んだクウラは、冷静に迎撃を選択し、リゼットを完全にロックオンした。

しかし発動しようとした瞬間にまたしてもリゼットが当たり前のように回避してしまい、今度は尻尾を破壊された。

——身勝手の極意。

それが先程からクウラの攻撃を回避している技の正体だ。

力の大会で完成形を見たりゼットは、自らもまたその領域へと踏み込む事に成功していた。

その気になれば『極』まで発動出来るが、今リゼットが使っているのは『極』でもなければその前の『兆』ですらない。

わざと性能を劣化させ、回避能力のみを残した紛い物だ。

身勝手の極意は確かに完成させた。だが完成したそれは回避のみならず攻撃も自動で行ってしまう。

精度が上がる程に最善最短の道走る……だがそれではリゼットの持ち味を殺してしまう。

相手の動揺を誘う為にわざと攻撃を外す……意識を逸らす為にわざと一か所に集中させる……あえて学習させる為に剣での攻撃を繰り返し、カウンターを誘う……そうした駆け引きもリゼットの強みだ。

だが身勝手の極意に攻撃を任せてしまつては、それは出来ない。

そしてもう一つ、リゼットが身勝手の極意をわざと半端にした理由がある。

それは身勝手の極意が持つ『身体を勝手に強くする』という効果だ。

悟空が界王拳20倍の超サイヤ人ブルーでも歯が立たなかったジレンと対等に渡り合えるようになった事から分かるように、身勝手の極意を使えば身体も強くなる。

だがそれは身勝手の極意に耐えられるだけの強靱な肉体があればこそその話。

そうでなければ身勝手の極意は術者を無視して、術者の限界すら気にせず『相手に勝てるレベルまで』身体を強化して自滅へと導くだろう。

そしてリゼットは……残念ながら、完成した身勝手の極意に耐えられるだけの強度がなかった。

これでもずっと鍛えていただけあって流石に身体の崩壊などはしなかったが、使い続けている間ずっと生命力が減り続けているのが分かったのだ。

これでは使えたものではない。

故にリゼットは自分でも使えるように身勝手の極意を改悪し、回避能力以外の全てをオミットし、その代わりに持続時間を延ばした。

そうして出来上がったそれは『極』でもなければ『兆』ですらない。

能力に戒めを設けたという意味を取り、身勝手の極意・『戒』^{かい}。そうリゼットは名付けた。

攻撃はあくまで自らの意志で。そして自力で回避し切れない攻撃のみ自動回避で避ける事で自らは攻撃へ集中する。

身体が動くままに任せるのではなく、されど蔑ろにもしない。

攻撃を頭が担当し、回避を身体が担当する自分自身との分担作業。それがリゼットの辿り着いた答えであった。

——リゼット自身は気付いていない。

彼女が身勝手の極意の劣化版と思っているその技こそ、実は天使達が使っている身勝手の極意に限りなく近い物であるという事を。

ウイス達天使は身勝手の極意を使う際に変身などしない。

自然体のまま、常に使い続けている。

身勝手の極意には変身を伴うものと、変身せずに使えるものの二種類が存在しており、悟空が力の大会で見せたのは変身を伴う身勝手の極意でしかないのだ。

いや、あの変身自体がサイヤ人の持つ変身能力と混ざる事で生まれた邪道である可能性が高く、本来身勝手の極意はそもそも変身技ではない。

リゼットが今使っている『身勝手の極意・戒』は、攻撃能力を削っているという点以外は、天使が使う身勝手の極意とほぼ同じものであった。

リゼットの振るう剣が、そして拳打が次々とクウラに入る。

クウラも頑丈さを武器に応戦するがほぼ零距离での攻防にもかかわらずクウラの攻撃はリゼットに当たらない。

一方リゼットの攻撃はクウラに一方的に当たり、今までは回避に割いていた分の力まで攻撃に回しているだけあって頑丈なはずのクウラを破壊していく。

クウラもビッグゲテスターの解析能力でリゼットの動きを学習し即対応するが、リゼットは『自分の動きを学習したクウラの動き』を予測し切ることでクウラを圧倒した。

クウラは何とか瞬間移動でリゼットから逃れるが、誰が見ても今の彼は満身創痍であった。

両腕はほぼ機能せず、足も尻尾も潰され、腹には穴が開いて機械が零れ落ちている。

身体のアちこちから火花が上がり、再生も間に合っていない。

だがりゼットは何故か不吉な予感を未だに拭えずにいた。

「――後一回」

ギギギ……と嫌な音を立ててクウラが壊れかけの腕を上げた。

持ち上げた手は、指を一本立てて『1』を示している。

「あと一回……俺は弟よりも多く変身出来る」

「っ！」

クウラの宣言を聞くと同時にリゼットは迷わず攻撃を再開した。

話に付き合ってやる義理などない。

まだ本気ではないというならば、本気を出す前に潰すのみだ。

気を集約させたりゼットの手刀をクウラは両腕でガードし、しっかりと頭を守る。

すぐにリゼットは剣を創造してガードの上から叩くが、堅牢なクウラの防御はそう簡単には崩れない。

「光栄に思うがいい」

リゼットは一度距離を空け、指先を虚空へ掲げる。

すると一瞬で数千の光の剣が出現し、一斉にクウラへ殺到した。

傷付いたメタルの身体に容赦なく剣が命中するが、それでもクウラの脳には届かない。

強固な装甲と再生能力に阻まれてしまう。

それでも確実にダメージは入っているが、頭部だけはクウラもしっかり守る。

ならばとリゼットはボールを掴むように両手を胸の前に翳し、破壊のエネルギーを集約させた。

「俺の究極の変身を見られるのは」

防御の姿勢を崩さないクウラに、リゼットが放った破壊玉が襲い掛かった。

触れれば万物を分解する破壊の御業。

だがそれが当たる直前にクウラの気が爆発的に高まり、彼を守る壁となってしま

う。

それでも破壊玉はじりじりと進んでいくが、クウラの気が高まるのを止められない。

「お前が最初で最後だぁーッ!!」

クウラの全身から白い光が放たれた。

身体が膨張し、肩部はアーマーのように変形していく。

腕や足には鋭い突起物が生え、頭部は四本の角が生えた。

両目は真紅に輝き、全身の傷が一瞬で修復されてしまう。

黄金の体表が剥がれ落ち、その下からは本来のメタルクウラと同じ銀……いや、より眩さを増した白金色^{プラチナ}の装甲が全貌を現した。

変身を終えたクウラは片手を突き出すと破壊玉を掴み、そのままゆっくりと力を込めていく。

すると破壊玉は徐々に小さくなり……やがて、握り潰されてしまった。

「……あ」

リゼットは一瞬、今の情けない声を発したのが誰か分からなかった。

遅れて自らの喉から出たものであると自覚し、弱気になっている自分に気が付く。これだったのだ。

ビッグ・ゲテスターに来る前からずっと感じていた不安。そして恐怖。

それが今、現実となって目の前にいる。

すぐに弱気な自らを律して正面からクウラを見据え、覚悟を決める。

後の事は悟空に託した。彼がいればきっと、自分が戦えなくなっても後は何とかしてくれる。

だからこそ、このクウラだけはここで自分が何としても仕留めなくてはならない。故にリゼットは——この戦いで自らが死を迎える事を覚悟した。

「さあ、始め……いや……」

——決着^{おわ}らせようか！

クウラがそう叫ぶと同時にマスク状の外殻が口元を覆い、それが第二ラウンドのゴングとなった。

【戦闘力】

・ブラチナメタルクウラ…300兆…???

遂に姿を見せたクウラの真の最終形態。

以前の最終形態を第五形態とするならメタル(第六)、ゴールデン(第七)、ゴールデンメタル(第八)ときて第九形態とも呼ぶべき姿。

究極の究を取って第究形態とか呼ぶとちょっと厨二っぽくてダサ格好いい。

フィジカルと気で完全にリゼットを凌駕している上に全身メタルなので人体急所も痛覚もない。

当然鞭打など無効。

ただ一人を殺すためだけに強さと憎悪以外の全てを捨てた男が辿り着いた境地。ブラックにする事も考えたが、それをやると(メタ的には)フリーザの後追いになってしまうので独自進化へ路線変更。

このSS世界ではフリーザはゴールデン止まりなので後追いにはならないかもしれないが、やはり別の進化をさせたかった。

フリーザが超サイヤ人を意識した結果ゴールデンになったように、クウラはリ

ゼットを意識するならプラチナに到達してええやろ、と思った結果プラチナメタルクウラになった。

・リゼット（ゼノバースⅡ）…128兆

身勝手の極意『戒』を発動したりゼット最新形態。

かつて暴走してしまった時の力をこれで完全に身に着けた事になる。

身勝手の極意は回避能力のみに極振りしており、戦闘力上昇効果はない。

単体でありながら（普通の）超サイヤ人ブルーベジットやゴジータにも比肩し得る戦闘力。

しかし相手より先に進化を見せるという特大のフラグを踏んでしまった。

もしこの作品がブリーチの二次創作だったらその時点で負け確定である。

ところでこれでリゼットはゼノバースフルパワー十身勝手という『暴走した時の自分』というゴールに至ってしまったので、ここから先は暴走時の自分を越えて行く未知の領域への挑戦になる。

この先は身勝手の極意や我儘の極意のような独自の強みを手に入れないと厳しいかもしれない。

しかし「人造人間編の頃のようにやく追いついた」と書くときと凄くしょっぱく見えてしまう。

第27話 激突!! 100兆パワーの戦士たち(4)

ビッグゲテスターの床を踏み碎き、クウラが飛翔した。

その巨体からは想像も出来ない速度は今のリゼットをして、目で追う事が出来ない。

戦闘力が上がればスピードも上がる。

今やクウラの速度は完全にリゼットを凌駕していた。

繰り出された剛腕を身体が勝手に回避し、すぐに武器を創造する。

だが創造した瞬間に鋼の拳によって刃をへし折られ、すぐに素手による攻撃へ切り替えた。

身勝手の極意はあくまで自らに迫る危険から避ける術だ。手に持っている武器までは守ってくれない。

ならばと掌底をクウラの胸に当て、強く踏み込む。

気を掌に集めて増幅させ、それを身体の内へ送り込んで炸裂させた。

いかに外側が堅かろうが内部に攻撃を浸透させる事が出来るならば、その頑丈さに意味はない。

だがそれは内部が脆ければこそ通じる話。

身体の内側まで、脳以外全て余すところなくメタル化されているクウラ相手では流石に効果が薄い。

「ふっ……そんなものか！」

クウラの蹴りがリゼットの顎目掛けて振り上げられた。

それに合わせてリゼットが後方に廻り、全ての衝撃を逃がす。

着地と同時に続けてクウラの拳打。これも頬に触れるや否やというタイミングで右足を軸に回転し、受け流す。

そのまま回転の遠心力を乗せてクウラの首に手刀を叩き込むが、まるでビクともしない。

内部攻撃は効果が薄いが、外側への攻撃はそれ以上に効果がない。

元々頑丈な装甲に加えて、今のクウラは圧倒的な氣に守られている。

肉体強度で圧倒的に劣るリゼットの打撃ではダメージにならないのだ。

リゼットは一度クウラから距離を取って構えを取る……が、次の瞬間喉からせり上がって来た灼熱に思わず口元を押さえた。

「こ……ふっ」

血が喉を伝ってドレスを赤く染め、意識が途切れかける。

受け流したはず。衝撃は完璧に逃がしたはず。

だというのに、たったの二発でこのダメージ……！

最早掠らせるだけで、勝敗が決しかねない。

リゼットはあらかじめ口の中に仕込んでおいた仙豆を噛み砕いて怪我を治し、追撃を仕掛けてきたクウラを迎え撃った。

「そらそらァ！」

「……っ！」

クウラが嵐のような攻撃を放ち、リゼットはその全てを避けて攻撃を続ける。

拳打を避けて関節を挟むように叩き、蹴りを避けて顔面に気功波を直撃させ、気功波を撃とうとしていたクウラの腕を捻り上げて逆に彼自身に当ててやる。

だが決定打以外はクウラに対して意味がない。すぐに修復してしまう。

ますます速度を上げるクウラのラッシュを避け、一度距離を空けた。

するとクウラが気功波を発射するが、リゼットは両腕を突き出して気功波を受け止め、環を描くように両手を廻して気功波を霧散させた。

今度はリゼットが両手を頭上でクロスさせ、周囲を二つの気の塊が浮遊する。

手首を合わせた状態で手を前に突き出し、全力の気功波を発射。

同時に二つの光球も桜色の気功波と化して中央の白い気功波の周囲を螺旋を描くように追従し、クウラへ迫る。

「ふっ……」

リゼット渾身のレイジングブラスト。

だがクウラはこれを片手だけで抑え込み、ほんの僅かも押される事なく余裕の表情で防ぎきってしまう。

だがそれはリゼットも想定済みだ。

クウラが一発目のレイジングブラストで僅かに動きを止めた隙にこの世の時を一秒間だけ停止させた。

そして両手を再度突き出し、気を高めていく。

同時に彼女の背で光輪が高速回転し、外側から凄まじい勢いで氣をかき集め始めた。

リゼットだけの力ではクウラに遠く及ばない。

ならば他から力を借り、実力以上の威力を叩き出せばいい。

「Ultimate blast！」

かつて破壊神シャンパに土を付けた切り札の一つがクウラに命中した。

放たれた極光はビッグゲテスターに大穴を開けて宇宙空間をも貫き、射線上にあつた岩礁を抹消していく。

そして攻撃が終わった時、そこには右半身が多少損傷しながらも依然健在のクウラの姿があつた。

「なっ……!？」

「ぐ……時間停止か……驚いたぞ！ 貴様も出来るとはな！」

損傷した部位を修復しながら、今度はクウラが——あろう事か、さも当然の事であるかのように時間を止めた。

クウラが戦い、取り込んで来た暗黒魔界の者達はタイムパトローラーを苦しめて

きた敵だ。

つまり、彼等も時間の操作を行えたのだ。そしてクウラはそれを取り込んだ。

流星に魔神ではないクウラでは完全な時間停止は出来ず、その停止時間はリゼット同様精々一秒程度しかない。

だが彼もまた時間停止の世界への入門を果たしていた。

そしてその力で先程の攻撃をかううじて避けたのだ。

停止した世界の中で走るクウラから、リゼットは咄嗟に距離を取りつつ自分に似せた自律気弾をありったけバラ撒いた。

更に瞬間移動やヘブンズゲートを試みるが……駄目だ。事前に予想はしていたが、転移系の技はビッグゲテスター内では阻害されてしまう。

やがて先に時間停止を使ってしまったリゼットの方が先に停止し、クウラが次々と進路上の自律気弾を破壊していく。

クウラの時間停止が終わるまで残り0.01秒……！

その時点でクウラの道を塞いでいた自律気弾が全滅し、遂にクウラの攻撃がリゼットを捉えた。

いかに身勝手の極意といえど、時間ごと止められてしまつては回避出来ない。時間が動き出すと同時にリゼットは威力に逆らわずに飛び、床をバウンドして倒れてしまう。

「リゼット！」

この危機にミラが飛び込もうとするが、それは無数のメタルクウラが許さない。一体一体は今のミラならば倒せるが、数が多すぎる。

しかもメタルクウラはアップデートされ続け、ミラとの力の差を着実に縮めていくのだ。

「邪魔だ、どけ！」

「邪魔は貴様だ」

「俺達の戦いは誰にも邪魔させん」

「そこで大人しく見ているがいい！ あの子の死に様をな！」

何とか突破しようとするが、メタルクウラがそれを阻む。

そうしている間にクウラが倒れているリゼットに近付き、躊躇なく踏み付けを行おうとする。

だがリゼットもこれ wait していたように身体的位置をズラし、踏み付ける為に左足を上げていたクウラの右足……を支えていた床を蹴り碎いて彼を転倒させた。

倒れている相手への攻撃手段は限られる。

この状態になればクウラは必ず踏み付けを選択すると踏み、あえて wait していたのだ。

「なにい!？」

平然と起き上がって反撃を試みたりゼットにクウラが意表を突かれた。

両者の戦闘力差やリゼットの脆さを思えば、あの一撃で終わっていてもおかしくない。

だがそれも直撃^{あた}っていればの話。

クウラの前でリゼットが爆発し、これも偽物であった事に気付かされた。それもただの自律気弾ではない。第6宇宙の殺し屋ヒットが得意とする気の分身を被せて、外見までも本物と区別出来なくした特別な自律気弾だ。

無論行動パターンや技術も本物のリゼットに限りなく近く、今この瞬間まで本物と誤認してしまっていた。

——これも偽物!? ならば本物は……! !

クウラが倒れながら咄嗟に後ろを向く。

そこにいたのは、進路の邪魔ではなかったから無視した自律気弾だ。

全身が白く、いかにも自律気弾と分かる偽物……その偽物の背中を突き破ってリゼットが飛び出し、クウラにカチカッチン鋼の塊を乗せた。

リゼットは時間が停止した世界の中で、このままでは先に動けなくなると判断するや自律気弾をバラ巻き、着ぐるみのように自律気弾を着る事で自分自身も気の偽物に擬態。同時に自分がいた場所には気の分身を被せた偽物を残し、クウラがそちらを攻撃するように誘導したのだ。

この好機を逃すまいと、次々とクウラの上にカチカッチン鋼を重ねていく。

その重量も一つ一つが十万トンを超え、全て合わせれば超サイヤ人4のターレスですら満足に身動き出来なくなるレベルだ。

まるでテトリスのように隙間なくカチカッチン鋼で埋め尽くし、クウラを圧殺しようとして積み上げていく。

だがクウラもそう簡単にやられてくれない。ビッグゲテスターの床に穴を開けて

容易く脱出し、一度宇宙を遊泳してから再びビッグゲテスターへ突撃した。

壁を貫いて飛び込んで来たクウラの拳を避けるが、クウラはリゼットのドレスのケープ部分を掴む。

身勝手の極意は本人以外は守らない。そして服を掴まれている状態からではどうしても回避出来なくなり、得意の脱力も難しくなる。

しかしリゼットは全速力で後ろに飛び、ドレスが破れるのも構わず脱出した。

クウラの手元にはケープ部分だけが残り、リゼットは肩を露出した姿となるが今更氣にした様子はない。

更に靴を脱ぎ棄てて裸足となり、全ての枷を外す。

怨敵の本気の本気を前にクウラも気分を高揚させ、高笑いをあげた。

「フハハハハハハッ！ 愉しませてもらってるぜ！」

笑いながら、クウラの左眼から火花が上がった。

クウラはリゼットに手を翳し、気弾を連射する。

リゼットもそれに合わせて気の剣を出現させ、気弾を全て迎撃した。

正面からぶつけては威力で劣るリゼットの剣は一方的に打ち消されてしまう。

だから剣の一本一本の全てが角度を変え、クウラの気弾を逸らしてリゼットへ向かわせない。

続けてクウラは虚空に指を翳し、巨大な気弾を生み出した。

かつてリゼットとの戦いでも使用したスーパードヴァが三つ浮かび、リゼットも迎撃の為に同じく虚空に指を掲げて巨大な白い気弾を生み出した。

だがこのままぶつければ戦闘力差で負けるのは目に見えている。

故に再び光輪がスパークを撒き散らしながら回転し、外から気を取り込んで威力を増幅させた。

「ぐ……っ」

リゼットの顔が一瞬苦悶に歪む。

自らの実力以上のものを出すというのは負担も大きい。

その負担の受け皿として背中の中光輪があるが、それでも気弾を生み出す際はどうしてもリゼット自身の身体を通さなければならぬ。

そこまでしてようやくスーパードヴァと同威力の巨大気弾を三つ生成し、正面からスーパードヴァにぶつけて相殺した。

その爆煙の中でリゼットとクウラが同時に接近し、互角の攻防を繰り広げる。クウラの攻撃はリゼットに当たらず、リゼットの攻撃はクウラに通用しない。ならばクウラはいかに攻撃を当てるか。リゼットはいかに攻撃を通すがこの戦いの行方を左右する。

攻防の最中、リゼットの足の指がクウラの指を掴んで、クウラ自身の力を利用して床へ叩き付けた。

クウラはすぐに立ち上がるが、その顔をリゼットの裸足が踏み付ける。

「貴様ア！ このクウラ様を足蹴に！」

屈辱と怒りでクウラが拳を上には振るうが、当たらない。

自分の真上の相手への攻撃手段というのは驚くほど少ない。

精々拳を突き出すか、気弾を撃つかくらいだろう。

リゼットはまるでクウラの顔で足踏みをするように蹴りを放ち、クウラを翻弄する。

クウラの身体を足場代わりとした連続ストンピング！ 地面に着地する事なく一方的に蹴り続ける空中殺法にクウラは手も足も出ない。

今のクウラは攻防速、全てが高次元で纏まっていてバランスがいい。そのバランスのいいクウラが一方的に、まるで赤い配管工の無限残機UPの踏み台として踏まれ続ける亀の如く翻弄されている様からも、この空中殺法の効果の高さが窺えるだろう。

しかしクウラにはここからでも使える技があった。

ピピピピピ……という音が響き、リゼットのいる座標がロックオンされる。

——爆発。だがりゼットは身勝手の極意によってロックオンバスターすら回避して跳躍……後方回転して着地し、一瞬で接近してクウラの胸に手を当てた。

同時に危機を察知したクウラは反射的に腕を挟み込む。

「浄化^{はかい}！」

クウラの腕が光の粒子に分解され、破壊は腕から肘へと伝わっていく。

破壊玉は通用しなかったが、直接触れての破壊ならばかうじて通じる。

だがクウラは肩に届く前に腕ごと切断し、すぐに修復を始めた。

クウラの頑丈な装甲を通して致命傷を与えられる技は少ない。

その数少ない有効打の一つが『破壊』だ。

だがクウラもそれは承知の上だ。故に『破壊』だけは受けてくれない。

クウラが指先を向けてデスビームを連射するが、リゼットは全弾掠りながらも回避した上でバックステップで距離を空けた。

「HEROES・GOD MISSION!」

リゼットの周囲に、彼女を守るように複数の分身リゼットが顕現した。

その戦闘力はリゼット本人には劣るが、それでも神レベルだ。

特に今回の分身は攻撃力に限れば、オリジナルのリゼットにむしろ匹敵していると言える。

分かりやすく言えば、ヤムチャの使う繰気弾がヤムチャのパンチ以下の攻撃力と言う事はないだろう。

ゴテンクスの使うSGカミカゼアタックの威力がゴテンクスの打撃や通常気弾に劣るわけがない。それでは技として欠陥品も良いところだ。

リゼットの使う自律行動気弾も本質的にはそれらと同じものののだ。

分身リゼットがクウラを囲んで四方から同時攻撃を加えるも、クウラの装甲を抜くには至らない。

「舐めるな！　メタルクウラを使わずとも、対抗する術などいくらでもあるわ！」
だが所詮は気で創り出した分身。より巨大な気をぶつけければ霧散するのが道理だ。

クウラは全ての分身リゼットを同時に照準に入れてロックオンバスターを乱射した。

ビッグゲテスターの高度な演算能力をもってすれば、敵がいくら増えようと物の数ではない。

クウラの周囲が連鎖して爆発し、分身を消し飛ばしていく。

その最中に身勝手の極意でロックオンバスターを回避した本体を発見して接近した。

またしても自律気弾を着て偽物の中に紛れ込もうとしていたようだが、それはもう学習した。二度は通用しない。

「あの妙身勝手な技は分身には使えんようだな！」

「くっ……！」

クウラが殴りかかると同時にリゼットが自律気弾の背中から飛び出して退避。残

された自律気弾が爆発した。

爆煙から飛び出したクウラが懲りずに拳打の嵐を放つが、これは当然のように全て回避される。

だが無意味ではない。

身勝手の極意は攻撃を勝手に避けるが、避ける為の体力まで与えてくれるわけではない。

いや、本来ならばそれも与えてくれるのだろうが、リゼットはその能力をオミットしてしまっている。

そして現状、クウラとリゼットの実力差は大きく開いており、つまりはそれだけの差がある相手の攻撃を避け続けているという事……実力以上の動きを強要され続けているという事だ。

だがそれ以上にリゼットを追い詰めているのは、クウラの学習能力であった。

「く……っ!？」

クウラの拳がリゼットの回避を上回り、避けた先に繰り出される。

咄嗟に受け流すが、それだけの事でリゼットの腕の骨に罅が入った。

クウラはビッグゲテスターの高度な解析能力により、リゼットの動きをリアルタイムで分析し、追いついている。

パワーでは勝っている、装甲も負ける要素がない。

ならば後は技術で上回ればチェックメイトだ。

リゼットは既に限界を超えた動きを強要されており、スタミナも尽きようとしている。

一方でクウラはますます速度を増し、角や足、肩がショートして火花を散らし続ける。

リゼットは攻撃の合間を縫ってクウラの腕に触れ、『破壊』で強引にもぎ取った。更に断面に創造した剣を突き立て、そこから気を流し込む。

「ぐおおっ！」

クウラの目や口から気が逆流し、身体中がショートを起こした。

だがそれでもクウラは止まらない。

彼の蹴りがリゼットに迫り、リゼットは跳躍してクウラの頭の上に乗った。

それから足の指でクウラの角を摘まんでバランスを取り、もう片方の足がクウラ

の目へ突き刺された。

無論クウラは眼球までメタルである為、これで失明などしない。しかし一時的に視界を塞ぐ事は出来る。

腕を再生させたクウラが頭上で両拳を合わせるようにするが、リゼットはそれより早く飛び降りていた。

そして両腕を上げたクウラの目に指突をめり込ませ、神の気を解放する。

「浄化！」
はかい

咄嗟に身をよじったクウラの頭が半分ほど消滅し、光の粒子となる。

今ので確実に脳にもダメージが入ったはずだ。

いや、というより普通に考えれば脳の一部が破壊された時点で勝負ありである。これ以上動けるわけがない。

だが彼はかつて脳だけで宇宙空間を漂い、それでも生き延びた超生命体クウラだ。常識で考える事は出来ない。

崩壊しつつある身体のうちからコードが飛び出し、リゼットの腕に絡みついた。

身勝手の極意の自動回避が間に合わず、すぐに気を纏う事でコードを強引に千切って脱出するもその次の攻撃への対処が間に合わない。

クウラの拳が遂にリゼットを捉え、小柄な身体を吹き飛ばした。

「かふっ……」

何とか脱力をして威力を流すも、それも完全ではない。

ビッグゲテスターの壁に叩き付けられ、力なく床に落ちる。

それでも何とか立ち上がるが、ここまでの戦いによる消耗と今のダメージで力なく倒れ込んでしまう。

このままでは不味いと、自らに治癒の術をかけようとする。

そこに無情のロックオンバスター。リゼットの目の前で空間が爆発した。

「あああああぁぁっ！」

悲鳴をあげ、爆発によって吹き飛ばされたりゼットが宙を舞い、床に叩きつけられる。

一瞬の隙が命取りになるクウラとの戦いの中では、回復しようとする動きすら相手の攻撃の起点となってしまう。

リゼットは迂闊さの代償を支払い、回復どころか逆に更なるダメージを負ってしまった。

何とか意識を保ってはいるが、ダメージが深すぎてすぐには動けない。

だがそれはクウラも同じだった。

首の修復をしながらも身体のアチコチから火花を放ち、修復しているはずなのに手や足からコードが飛び出している。

オーバーヒートだ。強すぎる力の代償に、クウラは機能不全寸前に追い込まれていた。

脳を半分削られてしまったせいで処理が間に合わず、強すぎる力が暴走を始めて制御不能に陥っている。

クウラはビッグゲテスターの性能の限界を超えてしまったのだ。

彼の持つ圧倒的なパワーは彼自身のボディのみならず、ビッグゲテスターまで自壊させてしまう。

リゼットを倒す為だけに生身の肉体を捨てた弊害が、ここにきて出てしまっていた。

「ハァー！　ハァー！　ま、まだまだ！　貴様を殺すまで！　俺は死なん！」

「……あ、ぐ……ま、だ……！」

クウラが自壊しながらも執念と憎悪を原動力に奮い立ち、リゼットも傷付いた身体に鞭打って立ち上がる。

どちらも限界に近い。だが先に動いたのはやはりクウラであった。

「リゼエエエエツト！　まだまだあああああ！」

クウラが魂からの叫び声をあげ、リゼットに襲い掛かった。

リゼットも震える身体で迎え撃つが、その動きには先程までのキレがない。

クウラとリゼットの間で数百数千の攻防が繰り広げられ、どちらも限界に近い中で意志の力だけで戦闘を続行する。

もう身勝手の極意を維持する事も出来なくなったりリゼットの右腕がクウラの拳で碎かれ、クウラの左肩がリゼットの破壊で消滅させられる。

それでも止まらない。クウラがリゼットの胸に足を乗せ、そのまま体重をかけて彼女を押し倒して一気に力を込めた。

身体のが骨が碎かれる嫌な音が響き、だがリゼットは吐血しながらもクウラの足に

手を添えて破壊する事で彼の足を消し飛ばした。

「ぐ、あ……ア、ギ……ま、まだ……だ……！　まだ終わらないいいいい！」

「……ええ……まだ……です」

クウラの全身がいよいよ崩壊を始め、火花が強くなる。

リゼットも吐血混じりに戦闘続行の意思を示し、幽鬼のように立ち上がった。

自壊と自己修復を繰り返しながら襲い掛かるクウラを前に、景色がスローモーションのようにゆっくりと流れる。

続けて、これまでに歩んできた道と仲間達の顔……遠い過去にあの世の住人となった両親の顔が脳裏に蘇る。

あ、これ、走馬灯現象……。

そう思うや、リゼットはスローモーションの世界で過去の幻影を振り払って現在を見る。

今は死を前にして思い出に耽っている時ではない。

死んでもこの宇宙最大の脅威を倒すために死力を尽くすべき時だ！

殻を破ったような感覚と共に意識がクリアになり、全てがスローモーションの世

界へ誘われた。

もう身勝手の極意は使えないし、この傷付いた身体で身勝手の極意を使っても回避出来ない。

ならば自分で何とかするしかない。

しかしいくらスローモーションになろうと、いくら意識がクリアになろうとダメージが消えるわけではない。

それにこの状態も長続きしないだろう。これはあくまで、死を前にして偶然引っぱり出す事に成功した僅かな底力……予備電力のようなものだ。

これではまだ、クウラの執念に届かない。残念ながら認めるしかない……クウラの勝利への執念は完全に、今のリゼットを超えていると。

悟空やベジータならばここから、限界の壁を破って覚醒の一つや二つもするのだろうか、リゼットにその引き出しはない。

怒れば超サイヤ人に変身したり、壁を超えて2や3になったり、神の力と合わせればゴッドやブルーやその先に至ったり……そういう秘められた底力は正直何度も羨んだし、ずるいと思った。

しかしリゼットは同時に思う……きっと自分がサイヤ人ほど戦いの能力に恵まれていたならば、ここまで来る事は出来なかっただろう、と。

弱くて脆い地球人だからこそ、創意工夫を凝らして、持っている武器を必死に使って、だからここまで来る事が出来た。

——刃物を持った相手は、刃物しか使用^{つか}わない。

強力すぎる武器は、心の甘えと依存を招く。

リゼットがもしサイヤ人だったのなら、その特性を十分に使い倒しただろう。

瀕死からの強化を繰り返し、自らに暗示をかけて怒りによる超サイヤ人への覚醒も容易くやってのけただろう。

今ほど身体の脆さに悩まされなかっただろうし、サイヤ人のいくらでも湧き出る底力に依^た存^よっただろう。

……そして今ほど技に熟達^{たよ}る必要がなくなり、武の研鑽を怠^たっただろう。

そうして辿り着いた強さはきつと、ただの孫悟空の劣化コピーになっていた。

ただの村娘のリゼットから始まったからこそ、今ここにいます。

悟空達とは違う強みを得て、彼等と肩を並べて戦う地球の神リゼットとして、こ

ここに立っている。

ならば羨むな、競うな——持ち味を活かせッツ!!

窮地に迫いつめられても突然戦闘力は上がらない。覚醒なんてない。

金髪にならないし、赤髪にも青髪にもならない。

サイヤ人のようにいきなり、何もない場所からジョーカーを引く事は出来ない。

今持っている手札を組み合わせて戦う以外に道はない。

それでもあえて言うならば、この土壇場における膨大な手札の組み合わせこそがリゼットなりの覚醒とでもいべきだろう。

「くたばれええええ!」

目前まで迫ったクウラが渾身の拳打を放った。

回避は間に合わない。防御しても貫かれる。

まさに絶体絶命……もはや勝負あったとクウラが確信し——

——クウラの拳が、リゼットを外して宙を貫いた。

【ゴールデンメタル↓プラチナの上昇率が低かった原因】

別に低くない。

普通のゴールデンとの間にゴールデンメタルを挟んで小刻みに上昇したから低く見えるだけで普通のゴールデンクウラと比較した場合は数十倍の上昇を果たしている。

【クウラの強さについて】

実は最大パワーは300兆ではなく、もっと上。

……なのだが、ビッグゲテスターの方がクウラのパワーに耐えられなかった。

ビッグゲテスター「クウラはん、堪忍や……堪忍やで……それ以上パワーを上げられたらワイが持たんのや……」

クウラ「なにい!？」

SORRY ANA IYO!

【なんで脳を半分削られて生きてるんですか？】
クウラだから。

フリーザなんて頭含めてバラバラの状態で蘇生されても生きてたんだし、弟に出来て兄に出来ないはずがない。

第28話 とびっきりの最強 VS 最強

「何が……起きている……!？」

クウラの困惑した声が、ビッグゲテスターに響いた。
今起きている事が信じられない。説明が出来ない。

クウラの執念を前に、もう満足に動く事すら出来ないリゼットが取った手段……
それは彼の常識を超えていた。

クウラが高速で拳を、蹴りを繰り返す。その一発一発が今のリゼットにとっては
致死の一撃。

だがその悉くが、外れている！

リゼットはほとんど避けていない。

ダメージが深く、避けるほどの体力もない。

自力での回避は最早不可能……ならば、方法の一つ。

——相手に外してもらえない。

「こんな……こんな馬鹿な事が!？」

——確實に当たるはずのクウラの拳が、リゼットの頬を掠めて明後日の方向を殴った。

リゼットは確かに、ほんの僅かに回避動作を取ったが、それでも両者の体力とスピードを考えれば回避出来るはずがない攻撃だった。

続けてクウラが殴る……当たったと確信するも、やはりリゼットを外して別の場所を殴っていた。

繰り出す拳の全てが、蹴りの悉くが、まるでリゼットを中心に斥力でも発生しているかのように逸れて行く。

(何だ……？ 避けられている……？ 違う！ 俺が外している！)

リゼットが避けているのではない。

クウラが自分で勝手に外している！

無論、クウラにリゼットに対する仏心など一切ない。放つ攻撃の一打一打、全て殺す気で、当てる気で放っている。

リゼットの動きを予測し、視線の動き、足運び、気配、これまでに収集したデータ、癖、好む傾向、それらを全てかけ合わせて、高度な予測と先読みを交えて攻撃

している。

だが、それこそがクウラが攻撃を外している理由であった。

リゼットは足運びや視線、僅かな仕草……そして身体が満足に動かない今、唯一満足に繰り出せる攻撃の気配——殺意や敵意といったものを高密度に放つことで本物の攻撃と相手に錯覚させるほどのエア打撃を駆使し、クウラの空振りを誘っているのだ。

「……どうなっている……？ 何故、クウラは攻撃を外しているんだ……？」

メタルクウラ軍団の相手をしながら、横目で戦いを見ていたミラが困惑したように呟いた。

彼の眼には、クウラが勝手に攻撃を外し続けているようにしか見えない。

そしてこれは、実際に相対したクウラにも分からない。

何故自分が攻撃を外しているのか、当の本人すら理解出来ないのだ。

「くそっ、何故だ！ 何故当たらない！ ビッグゲテスター！ 奴の動きを計算しろ！ 次の動きを割り出せ！」

クウラがむきになり、何とか攻撃を当てようと更にリゼットの動きを予測する。

見ろ、もう半死人だ。立っているのもやっとだ。当てれば倒せる！

だがそれは逆効果。予測すればするほど……読みに長けた達人であればあるほど、リゼットの誘導に乗って逆に自ら攻撃を外してしまふ。

優れた戦士ならば誰もが程度の差はあれど踏み込む、『身体が勝手に動く』領域。その到達点が身勝手の極意である事は言うまでもないが、身勝手の極意に届かないまでも優れた戦士ならば誰でも、意識する前に身体が動くのは当然の事だ。

それは戦士としての直感であり、反射であり、そして積み上げた経験そのものである。

その無意識下の動きが、支配されている。

これはいわば、身勝手の極意の逆だ。

自らの身体が勝手に動いて回避するのが身勝手の極意ならば、今リゼットがやっているのは、『敵の身体を勝手に動かして外させる』行為。

まるで自らが世界の中心であるかのように、敵の全てを支配する。

弱い地球人だからこそ、敵の攻撃に当たってはならない。

リゼットの戦いは常に当たればそこで終わりがねない即死圏内の綱渡りで、だか

ら回避の技術が飛躍的に伸び続けた。

読み間違えれば崖から転落するという状況の連続が鋭い読みを……そして敵の読みの上を往き、あまつさえ支配・誘導するという極地への到達を可能とした。

肉体的に恵まれていたならば、決してこの技には辿り着けなかっただろう。

何故リゼットがこの技の体得に至ったのか……それはきつと破壊神にも、天使にも、大神官にすら理解出来ない。何故なら到底、まともな道筋で辿り着ける領域ではないからだ。

殴り殴られが当たり前の悟空達の戦いの中に、殴られたらそこで終わりかねないほどの脆弱さで飛び込んで彼等と肩を並べるといふのは尋常な事ではない。

蜘蛛の糸ほどの細い糸の上を全力疾走して蛇の道を渡り切るかのような無謀、暴挙。

だがりゼットはその道を突き進んだ……いや、彼女にはその道しかなかったのだ。だからこそ、リゼットは彼女だけの最果てに到達した。

これこそが地球人上がりの神であるリゼットが到達した極地。集大成。

敵の攻撃を決して、中心である自分へ届かせない。

その周囲に見えない球があるように外させる。

名付けるならばさしずめ——『自己中心の極意』！

満足に身体を動かせないという窮地の最中、持っている札を組み合わせる事で、この局面でリゼットは新たな奥義を編み出したのだ。

「……はあ！」

そして、クウラが攻撃を外し無防備となった隙を狙うようにリゼットの指突がクウラの胸を突き刺し、引き裂いた。

今の消耗し切ったリゼットではもう、『破壊』すら満足に行使出来ない。

かといって呑気に回復魔法など使おうものなら、いかに自己中心の極意があっても流石に隙が大きすぎる。

この至近距離での打ち合いの最中に回復している暇などないし、どのみち両者の実力差では回復したところで直撃^{あた}ればそこで死ぬ。

だから出力は最低限。指先の上に集約し、今までのように放つのではなく纏ったまま使う。

人差し指一本のみに集めた破壊のエネルギーでクウラの装甲を裂き、内部の機械

を消し去って行く。

「ガアアアアアア!!」

クウラがリゼットを掴もうと手を伸ばす……だが、掴んだのは残像。

ビッグゲテスターの高度なコンピュータならば残像と実体の誤認などありえない。

ましてや今のダメージを負ったりリゼットの残像拳など、たかが知れている。

しかし実像と区別の付かない虚像を生み出しているのはクウラ自身だった。

秀でたボクサーがシャドーボクシングをする時、そこにはいないはずの対戦相手が外からでもハッキリ視える事があるという。

他者にも見えるほどの鮮明なリアルシャドー！

クウラは、本物のリゼットと重なるようにしてそれを生み出し、そのリアルシャドーに攻撃していた。

……いや、させられていた。

だが本物のリゼットはそこから少しずれた位置にいる。だから当たらない。勝手に外してしまう。

この自己中心の極意は決して無敵の奥義ではない。

むしろリゼットのエア打撃や視線の動き、足運びなどの本来は見逃してしまう些細な仕草や誘いに気付いてくれるほどの対達人限定の奥義である。

仮にこの奥義を何も考えていない相手……例えばブローリーやカンバー相手に使用したところで、彼等は何一つ気付かないままりゼットに攻撃をクリーンヒットさせてベジータを岩盤送りにしてしまうだろう。

だがクウラは違う。他の誰でもない、クウラだからこそ……打倒リゼットを目指し、誰よりもリゼットの動きを観察してデータを集めて来た彼だからこそ、他の誰よりもこの技が刺さるのだ。

「……ふっ！」

今度は足の指先に破壊のエネルギーを集約させ、蹴りの一閃でクウラの足を引き裂いた。

体勢を崩しながらもクウラが繰り出した拳はリゼットから僅かに逸れ、加えてリゼット自身が廻る事で完全に受け流しつつ今度は左手の指先でクウラの喉を貫いて内部コードを千切った。

十全に使えなくなったからこそ、逆に練度を増す。

今までよりも遥かに精度の上があったりゼットの『破壊』を前に、もうクウラの装甲は役に立たない。

だがクウラも馬鹿ではない。自分の攻撃が外れている原理は分らないが、とにかく外してしまうという事実は認識した。

そしてリゼットの動きがよくなったわけではない事もまた把握している。

ならば現状打開の手段として、広範囲攻撃という結論に達するのは当然の事であつた。

「消し飛ばええ！」

「——っ！」

クウラを中心として、全方位に気が放出された。

この選択は大正解である。

当たらないというならば、逃げ場のない攻撃をしてしまえばいい。

それだけでリゼットの開眼したばかりの新奥義は呆気なく破られ、リゼットが吹き飛ばされて地面を転がった。

この好機を逃すクウラではない。ここぞ好機と追い打ちの構えに入り、リゼットもすぐに起き上がって迎撃の姿勢を取る。

「うおおおおおおおお！」

「……………ああああああっ！」

クウラとリゼットが同時に手を前に翳し、気を解放した。

両者共にもう限界を超えて、自滅への道を歩み始めている。

それでも、ここで膝を折るわけにはいかない。

勝利はもう目の前に。そして敗北はすぐ後ろに。

生と死、勝利と敗北の瀬戸際で二人の気が衝突した。

「ぐううううう……………おおおおおお！」

「……………っ！」

二人の距離は僅か1m。まさに目の前で気がぶつかり合い、押し合う。

その衝突の最中、リゼットの背中の光輪が高速回転を始めた。

外から気を取り込んで、威力を上昇させて押し切るつもりだ。

同時に今まで以上の強い気がリゼットから吹き出し、威力が跳ね上がった。

——バーストリミット。過去にもゼノバースとバーストリミットの同時使用は行っていた。

制御する為にあえてマイナス方面にバーストリミットをかけるといふ本来とは逆の使い方だ。

しかし今は違う。マイナスではなく、戦闘力を倍加させる本来の使い方に戻している。

当然身体への負担は凄まじく、長時間の使用は出来ない……どころか、間違いく戦闘後には後遺症が残るだろう。最悪死ぬかもしれない。それも覚悟の上での最後の押し込みだ。

じりじりとリゼットの気がクウラの気を押し込み、勝敗の天秤がリゼットに傾く。

——だが。

「お、おオ、お……まだ、だあ……！ 俺が……この俺があ……！

三回も、同じ、相手にイ……！ 負けるかああああ……！

俺が！ 俺がァ——俺が最強なんだああああッ!!」

「——っ!？」

——憎悪。そして執念。

クウラの深紅の眼が輝き、限界を超えた反動で顔に亀裂が走った。

眼の下に罅が入り、赤い輝きが漏れる様はまるで血の涙を流しているようにも見える。

全身の至る箇所が砕け、爆発が起こる。クウラの圧倒的すぎるパワーにビッグゲテスターが断末魔の悲鳴を上げている。

だがオーバードロードを気にせずクウラが更に出力を上げ、無理矢理押し込んだ。ここで終わってもいい。粉々になろうと構わない。

この戦いに勝利さえ出来るならば！ こいつに勝てるならば！

「ぐ……う……！ ああああ……っ！」

リゼットが無茶な技の併用の反動で全身から血を流し、足が震える。

だが負けたくないのはこちらも同じだ。

ここで負けてしまえば、この鋼鉄の悪魔はきっと第7宇宙を滅ぼしてしまうだろう。

コアエリアの戦士との戦いを悟空達に託した以上……何があんでも、この男だけ

はここで仕留める！

——バーストリミット三倍——更に四倍！

限界を超えた、更にその先へ！

「はああああああああ——————————！！！！」

「うおおおおおおおお——————————！！！！」

数秒に続く押し合い……その結果、臨界を迎えた気が二人の中央で爆発し、共に吹き飛ばされた。

クウラは何度も床をバウンドし、リゼットは壊れた玩具のように壁に衝突して墜落……ピクリとも動かない。

しばらくの静寂……それを破ったのは、床を引っ掻くような音であった。

最早クウラは死んでいてもおかしくない。

いや、死んでいなければおかしい。

身体は自壊し続け、内部の機械が見えている。

配線が露出して火花を上げ、脳も半分はリゼットに破壊されたはずだ。

だが彼はそれでも執念だけでこの世に留まり、ゆっくりと立ち上がった。

それから牛歩のような歩みで宿敵に近付き、倒れているリゼットの首を掴んで持ち上げた。

リゼットは……もう動かない。

目は固く閉じられ、息も止まり……心臓も止まっている。

——リゼットは死んでいた。

恐らくは先ほどの相打ちが最後の力だったのだろう。

元々リゼットは悟空やベジータといったサイヤ人ほど強靱な生命力としぶとさを持っていない。

ピッコロのように首から上さえ無事ならばバラバラにされても再生し、命を繋ぐような出鱈目な身体も持っていない。

いかに神になろうが、元は脆い地球人の少女の肉体に過ぎない。死ぬ時は呆気なく死ぬ……そういう儚い存在でしかないのだ。

「……ふ……ふはは……」

クウラの口から笑い声が零れた。

崩壊は進み、全身には亀裂が走っている。

それでも彼は、己の崩壊すら気にせず心底からの歓喜の声をあげた。

「ふはははははは！ はーっはっはっはっははははは！」

リゼットの首を掴んでいたクウラの指がもげ、リゼットが力なく床に落ちる。

「死んだ……死んだか、地球の神よ！ 勝った……！ 俺の勝ちだ！」

ミラは信じられないという顔でその光景を凝視し、そしてクウラは外郭が剥がれてコードだけになった右手を強く握りしめた。

「この世で俺に敵う者はいない！」

クウラの勝利宣言に応じるように、ビッグゲテスターの外でいくつもの岩礁が碎け散る。

ビッグゲテスターも既に崩壊が始まっており、折角手に入れた宇宙最強の戦力もこのまま崩れていくのみだが、クウラの心には勝利の歓喜だけがあった。

「俺が宇宙最強だ！」

取り戻したプライドを掴むように左手を握りしめ、またしても宇宙の岩礁が崩壊していく。

無数のメタルクウラもビッグゲテスターの制御を離れて次々と自壊を始めてい

る。

「ハーーーーッハハハハハハハハ!!」

遂に怨敵を葬ったという達成感。

勝利の美酒に酔いしれ、クウラは笑う。

まさに彼は今、歓喜の絶頂にあった。

遂に取り戻した最強の誇りを握りしめ、胸の内を駆け巡る喜びに身を委ねる。

——ここに、地球の神は堕ちた。

ビッグゲテスター内には無情にも、最強に返り咲いた帝王の勝利の笑い声が響き渡っていた。



「んあ？ それでももし危険と出会ってしまったらどうすりゃええかじゃと？」
場所は変わってカメハウス。

そこでは亀仙人が弟子からの質問に答えていた。

護身の完成とは即ち危険に出会わぬ事。出会えぬ事。

だがそれでも出会ってしまった場合はどうすればいい？

相手がこちらを殺したくて殺したくて……逢いたくて逢いたくて……一途に追いかけて来て……。

そんな奴と出会ってしまえばどうすればいい？

しかも相手の方が強くて、どうしようもない場合は。

その疑問に亀仙人は髭を撫で、そしてあっさりと言う。

「そりゃあ……諦めて殺されてやるしかないんじゃないかのう……。

そうすれば相手の気も晴れるじゃろ……多分」

それは答えになっっているようで答えになっていない。

確かに殺されれば相手は満足するだろう。

だがそれでは護身も何もない。本末転倒ではないか。

しかし亀仙人は言葉を続ける。

「事、勝負というものに限るならばじゃが……どんな勝負も、相手が死ねばそこで終わり。

勝ちも負けもなく、それ以上先に進む事はない。

つまり、もしも完璧に『死』を擬態出来るならば……それで相手を騙す事が出来

るならば護身の勝ちという事じゃな」

……まあ、死体ごと消そうとするような相手には、一時的に満足させるだけで何の意味もないんじゃないかな。

そう言い、亀仙人はカラカラと笑った。

★

——一瞬……だった。

勝利の歓喜に酔いしれ、リゼットから視線を外したのは瞬き一瞬の間にも満たない僅かな時間だった。

クウラは決して油断するつもりはなかった。

倒れていても尚危険な相手であると認識し、常に意識の片隅にリゼットの存在を留めているはずだった。

だが勝利の歓喜が全てを上回り、クウラの心を……魂を染め上げ、刹那の間だけ全てを忘れさせ——しかしクウラはすぐに、勝利の美酒に酔う自らを律して意識を怨敵の遺体へ向けようとした。

繰り返すが一瞬の事だった。クウラがリゼットから視線を外したのは本当に一瞬

だったのだ。

「……馬鹿な……！」

装甲が剥がれ落ちたクウラの胸を、誰かの手刀が貫いていた。

勝利を確信し、クウラが気を取られた瞬間を狙った完全な奇襲。それは防御の暇も与えずにクウラを捉えた。

一体何が起こったのか……それを認識するのに数秒の時間を要し、クウラは震えながら自分の胸を見下ろした。

そこには、殺したと思ったはずの地球の神がいた。

一度は消えたはずの忌まわしい輝きを背負い、クウラに決定的な一撃を加えている。

殺したはずだ。いや、確かに死んでいた！

見間違いなどではない。勝利に浮かれて確認を怠ったのでもない！

確かに、確実に！ 死んでいるのを確認したのだ。

呼吸が止まり、心臓も止まり、生命活動を停止していた。

ビッグゲテスターの測定を経て、死亡と診断したのだ。間違いなくあの瞬間奴は死んでいた。

だがそれはリゼットの擬態であった。

心臓を含む全生命活動を停止させ、一時的に完全な仮死状態に自らを追い込む事で完成する『死』と言う名の護身。それをもってリゼットはクウラの油断を誘ったのだ。

あのまま戦闘を続行していればクウラを倒すより先に自分が死ぬ。脳を半分破壊されても動き続ける出鱈目生物を相手に正面から命の削り合いをしては分が悪い。リゼットはそう考えた。

ならば殺されるより先に死ねばいい。

正直、危険な賭けではあった。

仮死状態になっている間は完全な無防備で気の防御もゼロに落ちる。

追い打ちの気弾の一発も撃ち込まれればそこで本当に終わっていただろう。

だがあれほどに勝利と、自分を殺す事に拘っていたクウラがその怨敵の死体という確かな勝利の証をすぐに壊してしまうものだろうか？

少しくらいはそれを残し、勝利の余韻に浸るのではないか。

あるいは映画で悟空やベジータを殺さずにビッグゲテスターのエネルギーとして取り込もうとしたように身体を残そうとするかもしれない。

勿論確証はなかった。問答無用で追い打ちをかけてくる可能性も十分にあった。だから本当に賭けだったのだ。

普段は石橋を叩き、不確定要素を排除して確実な勝利を求めるリゼットが、今回ばかりは柄にもなくギャンブル同然の行動に出た。それほどまでにクウラは強かった……恐ろしかった。

そんな事はクウラには分からない。

ただ、確かに死んだはずの相手が動いているという不可解さだけがある。

だがどうでもよかった。ならば今度は念入りに死体を消滅させるだけだ！

そう決断したクウラが攻撃に移るよりも先に、リゼットが残った僅かな力を振り絞っての一撃を放つ。

「浄化」
はかい

クウラの胸の中で破壊のエネルギーが炸裂し、クウラが光の粒子となって消えて

いく。

先程までと違い、間違いなく直撃だ。

それでも万全のクウラならば耐え切ったかもしれないが、オーバーヒートを起こして弱り切った今のクウラでは抗う術がない。

「ぐおおおおおおお！ まだだ！ まだ終わるものかあああ！」

クウラが腕を伸ばし、リゼットの頭を掴む。

だが掴んだその腕が消滅し、いよいよ破壊の力はクウラの頭にまで及び始めた。それでも彼は諦めない。消えていく身体からコードを伸ばし、リゼットに絡み付かせる。

「——っ！」

リゼットに絡み付いたコードが気を吸収していく。

リゼットのエネルギーを奪い、消滅に抗おうとしているのだ。

それでもリゼットは破壊を止めず、クウラが確実に消えていく。

彼の失敗は勝利の美酒を味わってしまった事。あまりに甘美なその味に酔ってしまった事だ。

失った最強という名のプライドを取り戻した高揚感と絶頂感。それはここまで溜めに溜めただけあってまさに至上の幸福……クウラの予想すら上回るほどの勝利の美酒はクウラの心にあってはならない空白を生み出してしまった。

さっさと死体を消してしまおうべきだったのだ。追い打ちをかけるべきだったのだ

！

だがクウラは最後の最後、勝利をまさに手中に収めたその瞬間に最も外してはならない一手を遅らせた。

あるいは、もしかしたら僅かなりとも、自分を二度も負かした相手をあっさり塵にする事への拒否感があったのかもしれない。

それは、彼が遂に最後まで捨て去る事の出来なかった……最後の『甘さ』であった。

「またしても……！ またしてもオオオオ！」

——またしても、自らの『甘さ』に敗れるのか!?

クウラはこの瞬間に、自分が何よりも優先して倒すべきだった本当の敵の正体を知った。

それは自分自身！ 自らの心の中に巢喰う甘さという悪魔！

捨てたつもりだった。リゼットを殺すために傲慢さも油断も捨て去ったはずだった。

だが勝利を確信した一瞬、心の中に隙を作ってしまった。

いかに全身を鋼鉄で覆っても、心だけは鋼鉄に出来ない。

勝利への渴望、そしてそれが満たされた瞬間の歓喜。そしてほんの僅かな、己をここまで追い込んだ宿敵への――。

そうした様々な想いが、最後の最後で勝てたはずの戦いを敗北へ変えた。

勝利の為に全身を鋼鉄化したクウラに唯一残された、鋼鉄化出来なかった部分――心。

それが、クウラに残された最後にして最大の隙だったのだ。

――俺が……俺が倒すべきは、この女ではなかった！

――倒すべきだったのは……俺自身の『甘さ』……。

――それでも……それでも、尚！

「貴様はアア……！」

クウラはこの瞬間、自らの生存を完全に捨てた。

一秒後に死んでもいい。消えても構わない。

「俺にいいイイ……！」

実質的な敗北でいい。宇宙を守りきれたという名誉もやろう。

他の何もかもをくれてやっても構わない。

だから、たった一つの『結果』だけを寄越せとクウラは残された最後の力を振り絞って動かないはずの身体を執念のみで動かす。

「俺に殺されるべきなんだああああああアアアアアアアアアアアアツ!!」

血を吐くような叫びをあげ、クウラが自らの修復を投げ捨てて首だけでリゼットに食らい付こうとマスクを破って大口を開け、飛び掛かった。

狙いは頸動脈。この一撃で奴の命をもっていく！

一秒だけでいい。一秒だけ奴より長く生き延びれば己の勝利だ！

『破壊』によって無へ還っていく意識の中でクウラは最後の一瞬まで勝利のみを求め――。

——そして、結果を見届ける事なく彼の意識は完全に消滅した。

「……………」

クウラの最後の攻撃はリゼットに届かなかった。

その寸前で力尽きたように消え去り、光の粒子となって完全な消滅を迎えたのだ。そしてクウラの消滅を見届けたリゼットは一瞬、憂うような表情を見せ……そのまま意識を失った。

甘さ「貴様^{クウラ}は俺に殺されるべきなんだー！！」

クウラ「クソがァ!!」

というわけで、前から引っ張って来た憎悪モンスターと化したクウラとの決戦が終わりました。

流石にもう復活しません。これで終わりです。

頭の中でストーリーを考えていた時はもうちょっと綺麗な感じのライバルキャラになる予定だったのですが、実際に書いた結果、憎悪純度200%の和解の可能性など1mmもないスーパー憎悪モンスタークウラと化しました。

まあ綺麗なライバル枠はミラがやったし、クウラはこれでええかなって。

正直ここまで汚いクウラになるとはこの海のリハクの眼をもってしても……。

【自己中心の極意】

土壇場でリゼットが辿り着いた、ここまでの戦いの集大成。

集大成のくせに登場したその1話で破られたクッソ情けない奥義。補正が短すぎる。お前フェアリモンかよ。

エア打撃や視線の動きなどの様々な要素を組み合わせる事で相手の先読みを狂わせ、相手に攻撃を外して貰う技。

外すと言っても、実際は1センチとかそのくらいしかズレていないが、それでも回避には十分。

本来は気付かないような些細な要素を組み合わせる事で誘導しているので、相手が細かい仕草や隙に気付いてくれる達人であればあるほど、逆に刺さる。

自らを中心とし、その中心に決して敵は届かない。

ただしあくまで敵の攻撃を誘導しているだけなので、広範囲攻撃には弱いし、ブローリのような何も考えていない相手には一切効果がない。

そもそも勝手に極意名乗ってるけど、身勝手や我儘と違って別に神の力でも何でもない。

【集束破壊】

元々本家ビルの『破壊』の劣化版だったリゼット流の『破壊』をあろう事か、更に劣化させた技。

ビルの『破壊』のように相手の全身が消える事はなく、あくまで『破壊』を纏わせた指先が当たった部分にしか効果がない。ただし集束している分、指先一本のみに限れば本家を上回る。

ぶっちゃけ指先のためのメドローア。

このくらい出来ないとかウラの装甲を貫けなかった。

【死んだフリ】

死を装う事で相手の攻撃を中断させ、油断を誘う技。ズルい。

死体に対してすぐに追い打ちをかけなかったり、勝ち誇ったりする相手全般に有効。

つまりドラゴンボールの敵キャラには大体効く。

今回の戦闘でも勝利の決め手となった。

死んだフリ>やっとなどり着いた集大成

結局変に捻った技より、こういうシンプルな技の方が有用なんや！

【フェアリモン】

デジモンフロンティアに登場する主役メンバーの一人が進化するデジモン。

デジモン作品において主役メンバーの初進化回は補正がかかり、その回だけは主人公デジモンすら噛ませ犬にするほどの大活躍をするのが基本だが、このフェアリモンは初進化なのに普通に敵に負けるといえないデビューを果たした。

第29話 消えた神々

——地球、カリン塔。

そこでは、リゼット達が不在の時にもしメタルクウラや他の敵が地球に襲撃をかけて来た時の為にピッコロが残り、空を見上げていた。

空は青く、太陽もよく見える。この空には先程まで確かに地球を覆うように展開されていたはずの結界があった。

しかしそれが突然消えた事で妙な胸騒ぎがしている。

地球への敵の侵入を阻む為にリゼットが張った結界が消えた……クウラを倒し、結界を維持する必要がなくなったから消したのだと思いたい。

しかし、あの慎重なりゼットが、まだコアエリアの戦士という敵が残っている状況でそれをやるだろうか？

どうにも腑に落ちないし、自分の中の先代の神が心配していて鬱陶しい。

「どう見る、カリン」

「……よくて、死の間際……というところですかのう」

ピッコロの問いに、カリンが氣落ちしたような声で答えた。

リゼットが施した封印術の解除条件は三つ。リゼットが任意で解除するか、強引に破られるか……あるいはリゼットが死ぬか、だ。

一度施したリゼットの術は本人が死んだところで消えるような柔なものではない。

しかしリゼットはあえて、自らの死を解除条件に組み込んでいた。

それはリゼットが死んで封印がそのままになってしまうと、地球が永久に宇宙から隔離されたままになってしまうからだ。

リゼットの封印はヘブンズゲートの応用で、地球の周囲を異空間へのゲートで覆うというものである。

やり方はこうだ。まず三角形の形状にしたゲートを展開する。

それを数枚展開して繋ぎ合わせ、二十面体にして地球を囲うのだ。

こうする事によって実質的に360度ほぼ全てがヘブンズゲートの入口となり、外からは誰も侵入出来ないし、無理に飛び込めば異空間送りとなる。

更にその内側には瞬間移動を阻むバリアまで展開され、二重の防壁となっている。

これは界王神だろうと突破出来ない封印だが、逆に言えばリゼットが死んでそのままになってしまうと、誰も解除出来ず地球が宇宙から切り離された孤独の星になってしまう。

だからセーフティー機能として、リゼットが死んだら自動解除されるようになってるのだ。

状況を見るに、明らかにそれが起動したとは思えない。

無理矢理樂觀的に見るならば、よくて死の間際……瀕死状態になって解除された、という可能性もなくはないが、ピッコロもカリンも、リゼットが瀕死くらいで解除されるような脆い術を施すとは思えなかった。

「ダークドラゴンボールを使うか？」

「……いや、まだ早い。わしは信じています」

仮にリゼットが死んでいても、ダークドラゴンボールを使えば蘇生出来る。

しかし死んでいなければ無駄撃ちだ。

このドラゴンボールは万一の時の為の最後の切り札である。迂闊に使うわけにはいかなかった。

どうする事も出来ずに空を見上げるしか出来ない二人だったが、すぐ近くに二人分の気配が現れた事で振り向く。

「ピッコロさん、よかった……やっと地球に来る事が出来ました」

現れたのは界王神とキビトであった。

封印のせいで地球に来る事が出来ずに途方に暮れていた界王神だったが、リゼットの結界が消えた事で彼はようやく地球に来る事が出来たのだ。

「界王神様……リゼット達とクウラとの戦いはどうなっていますか？」

「……なんだかピッコロさんに丁寧な対応をされるというのは慣れませんね」

「む……」

ピッコロはつい最近まで、界王神の事は呼び捨てにしていたし敬語も使っていなかった。

ターレスやベジータのように乱暴な口調で接していたのだ。

それが先代との融合でこうも変わったのだから、互いに慣れないのは仕方ないだろう。

「こちらではつい先程、ビッグ・ゲテスターの崩壊を観測しました。リゼットさん

達の勝利です。

コアエリアの戦士達は11宇宙との戦い以降は動きがありません」

コアエリアの戦士達が11宇宙に手を出してジレンに手酷い目に遭わされたという情報は、界王を通してピッコロの耳にも入っている。

そしてそれから動きがないというのなら、界王神は何をしに来たのだろうか？
怪訝に思うピッコロに、界王神は自らの耳飾りを外すと、それをピッコロに差し出した。

「これは……ポタラ？ 確か第6宇宙の女サイヤ人が使っていた……」

「ええ、私達界王神の切り札です……と言っても私自身、知ったのはつい最近の事なんですけどね。」

これを、貴方達に預けておきたいのです」

「何故？」

「……嫌な予感がするのです」

界王神は何かを恐れているかのような、緊張した面持ちで話す。

「クウラは倒され、コアエリアの戦士も既に壊滅状態……これ以上何かが起こるは

ずがない……そう思いたいのですが、どうしても胸騒ぎが止まらない。まだ何かが起こる……そんな気がするのです」

界王神自身にも、今自分が感じている不安の正体は分からない。

何故なら、ただの勘だからだ。

「気のせいならばそれが一番いいのです。私の勘違いであって欲しい。

きつと貴方達から見れば私は、慎重を通り越した臆病者で、神経質に過ぎるのでしよう。

……それならば、それが一番いいのです。私の気のせいだった時は、どうか無能な神とお笑い下さい」

「界王神様……」

「しかし何かあった時、その脅威に対抗出来るのはきつと貴方達だけです。

私は界王神でありながら弱く、未熟で……情けない話ですが、その脅威に対抗する力がない」

だから、と界王神は押し付けるようにしてピッコロの手の上にポタラを置いた。

「今のうちに、貴方達にこれを預けておきたいのです」

界王神はまるで何か覚悟を決めたように微笑み、そして一歩引いた。

そしてあろう事か、ピッコロに対し、頭を深々と下げた。

「どうか……この宇宙を、守ってください」

その姿に、ピッコロはゆっくりと頷いた。

界王神が嫌な胸騒ぎがすると言っているのは、紛れもない事実なのだろう。

きっと彼は覚悟している。この先に『何か』とんでもない事が起こるという事を。そして予感している。その時自分はもしかしたら、ただでは済んでいないかもしれないと。

だから動ける今のうちにピッコロに自分の切り札を預け、宇宙の命運を託したのだ。

一つの宇宙の神たる者が、下界の民に頭を下げる……決して軽い決意ではない。己の最高神としてのプライドを投げうってでも、未熟なりに、弱いなりに……この宇宙を愛し、守ろうとしている男の姿がそこにあった。

「……どうしてその付き人^{キビト}が、貴方にそこまで忠義を尽くすのか……少し分かった気がしますよ、界王神様」

ピッコロは柔らかく笑み、界王神の決意を受け取った。

その姿に界王神も安心したように微笑み、二人は固い握手を交わす。

——界王神がこの世界から消えたのは、それからわずか、24 時間後の事であった。



クウラとの戦いは終わった。

ビッグゲテスターの残骸もセルや 21 号、四星龍やミラといった宇宙空間でも戦えるメンバーによって念入りに破壊し尽され、完全に抹消された。

神殿は『永遠の美』の護衛艦に囲まれながら地球への帰路につき、悟空達は各々次なる戦いに向けて休憩をとっている。

しかし宿敵との戦いをかろうじて制したりゼットだけは、僅かな休憩ではどうにもならない。

彼女は現在、治療カプセルの中で回復に努めており、既に身体の傷はほぼ癒えている。

しかし二日経った今も死んだように深い眠りについており、目を覚ます気配がない。

一応生きているようなのでそのうち目を覚ますとは思うのだが、セルだけは妙に顔色が悪く、落ち着かない。

決して無傷の勝利ではなかった……苦戦を予想して多めに持ってきた仙豆も無限に湧き続けるメタルクウラとの戦いでラスト一粒を残してほぼ使い切ってしまった、ターレス達も今は、銀河パトロールの医療スタッフによる治療を受けている。

無傷なのはブウに似た性質を持つ21号と、再生能力を持つセルだけだ。

しかしそれでも、結果を見れば犠牲者なしの勝利だ。

あの悪夢のような鋼鉄の軍団と戦ってのこの戦果は偉業と呼んでいいだろう。リゼットが眠りにについている今、ヘブンズゲートですぐに帰る事は出来ない。悟空やセルの瞬間移動ならば帰還も可能だが、今はここですぐに動けるように待機しているので動く理由がない。

何かあればすぐに界王から悟空へ伝言が入り、悟空がそれを皆に伝える。そういう手筈になっていたのだ。

勿論界王とは定期的にテレパシーで連絡を取り、今のところは問題なしとの返答を受けている。

ならば今は体を休めるべき時だ。いずれ来る決戦の為に、休める時は休んでおいたほうがいい。

——これは果たして、判断ミスだったのだろうか？

悟空が事態の変化に気付いたのは、疲れが大分取れてから何となく界王にコンタクトを取ろうとした時であった。

「なあ界王様、まだコアエリアの奴等は動かねえか？」

『大丈夫じゃ。問題は何もない』

コアエリアの戦士達はジレンによって実質全滅させられている。

それを考えれば、たった数日で動けるはずがない。

しかし何事にも例外があるし、念の為確認しようとした悟空の判断は決して間違えたものではなかっただろう。

そして界王からの返答もこれまでと同じ、『問題なし』であった。

「そうは言うけどよ、このまま終わるとはどうも思えねえんだよな。神様も必ずあ

いつらが動くって言ってたし、多分まだ終わってねえと思うんだ」

『心配しすぎじゃ。何かあればわしが教えてやる』

「そうかあ？ まあ、それならいいんだけどよ……でも、こういう時の神様の読みって大体当たってるんだよ……」

悟空は最初、界王の返答を何もおかしいとは思わなかった。

何せまだクウラとの戦いから二日だ。

コアエリアの戦士達もジレンにこっぴどくやられたのだし、まだ休んでいても何の不思議もない。

しかし、何かが引かなかった。

疑う根拠があるわけではなく、あえて言うならばリゼットが『必ず』隙を突かれると言った事だけだが……それがどうしても気になるのだ。

「なあ界王様、本当に問題はねえのか？ 悪いんだけどよ、ちょっとコアエリアの奴らの事を探ってみちゃあくれねえか？ 何もねえならねえでいいんだ」

『大丈夫じゃ。問題は何もない』

「界王様そればっかじゃねえか。昨日も同じ事言って……………」

悟空が無言になり、ここ二日間の界王との会話を思い出す。

界王はずっとこればかりを言っていた。

呑気なものだと思っていたが……しかしおかしい。

いくらなんでも呑気すぎやしないか？ 仮にも今は宇宙の危機のはずだ。

少なくともクウラとの戦いが終わった直後は、まだ緊張感のようなものが感じられた。しかし今はそれすらない。

悟空は嫌な予感がし、界王星に瞬間移動をしようと額に指を当てた。

そこでようやく気付く……界王の気が、感じられない。

背筋を冷たいものが走る。

いつからだ……？ いつから、界王の気はなかった？

界王星は遥か遠くにあるせいで、瞬間移動の為に意識して感知しようとしなければ界王の気を感じる事などない。

だから今の今まで、界王の気がない事に悟空は気付けなかった。

それでもかろうじてバブルスとグレゴリーの気を探知し、瞬間移動する事に成功した。

「界王様！」

界王星に移動したと同時に悟空は界王を呼んで走る。

探し人は確かにそこにいた。

いつも通りに呑気に、界王星に立っている。

「どうした？ 何も起こっていないぞ。全て問題なしじゃ」

「界王様……」

そこにいるのは確かに見覚えのある界王の姿だった。

だが悟空は嫌な予感が当たっていた事を確信してしまう。

「——じゃねえな。誰だおめえ」

悟空が一步踏み込み、界王ではない誰かを捕えようと腕を伸ばした。

そして掴んだ……その瞬間、界王の姿は嘘のように消え、悟空の手の中には一枚の札だけが残されていた。

今の界王は、この札を見せていた幻覚だったのだ。

悟空はずっと、幻の界王を相手に会話をしていた……その事に気付いた悟空は界王星中を探し回り、界王の家の中で縛られていたバブルスとグレゴリーを発見した。

「おめえ達！ 界王様はどうしたんだ!？」

「そ、それが突然消えてしまわれたのです……そして山羊のような顔の男があの札で、界王様の幻を……」

グレゴリーから話を聞き、悟空の表情が一層険しいものへと変わった。

界王が消えた……界王なのだから星から星への転移くらい、もしかしたら出来るかもしれない。

しかしバブルスやグレゴリーに何も言わず、突然自らの意思で消えるとは考えにくい。

何より今は非常事態真っ最中だ。十二宇宙のあちこちが荒らされているこの状況で、界王が悟空に何も言わずに持ち場を離れるはずがない。

つまり界王は『消えた』のではない……『消された』のだ、と悟空は考えた。

「……界王様が消えたのは、いつだ？」

「ええと、地球時間で言えば24時間ほど前です」

24時間前……つまり、クウラとの戦いを終えた翌日には界王はすり替えられていたという事か。

悟空の額を、一筋の冷や汗が伝う。

どうやって界王を消したのかは分からないが、完全に出し抜かれた事を悟空は悟った。

悟空達は、界王からの連絡が入るまでの待機としてずっと神殿にいた。何かあればすぐに界王から連絡が入るという前提で、いつでも動けるようにしていたのだ。だがその前提が24時間も前に崩壊していたとあれば、悟空達はただ無意味に一切の情報が遮断された状態で丸一日待機していた事になる。

決して長い時間ではない。だが……今の悟空達のレベルなら、惑星を滅ぼして撤収するには十分すぎる時間だ。

いくら悟空でも、他の宇宙や第7宇宙の遥か遠くで何が起きているかは分からない。

それを知る為の界王との連絡網だったし、何かあれば界王神が瞬間移動で知らせに来るだろうという安心もあった。

だがこの分だと、界王神も消えていると考えて間違いない。

「その通りです悟空さん。貴方達は出し抜かれたのですよ。」

貴方が今見た幻は第 4 宇宙の札使いダーコリさんの能力……そしてそれを取り込んだ男の仕業です」

「っ！」

悟空の心を読んだように、静かな……しかし咎めるような声が聞こえた。

咄嗟に振り向くと、そこには薄っすらと透明になりつつある大神官の姿があった。

「大神官様……!? 一体何があったんだよ!？」

「超ドラゴンボールです。下界の何者かが超ドラゴンボールを使い、神々を別の時間軸に放逐したのです。私だけはおろうじて抵抗していますが、それも長くは続かないでしょう」

「神々って……界王神様やビルス様、全ちゃんもか!？」

「はい、龍神ザラマを除く全ての神々です。ザラマだけ残されたのは、追放した先でドラゴンボールが作られる事を願いを叶えた者が警戒したからでしょう。今十二宇宙にはザラマを例外として神が一柱もおりません」

事態は、悟空の予想を遥かに超える危険な領域へ入っていた。

まさかの龍神以外の神の不在。

心のどこかで、いざとなればビルスやウイスがいるのだから最悪中の最悪にだけはならないと考えていた悟空だが、そのセーフティーネットは既に崩壊していた。「消滅ではなく放逐にした理由は、万一にも超ドラゴンボールの力ですら及ばない可能性を危惧してのものでしょうか」

「ま、待てよ！ 誰も全ちゃんに危害を加える事は出来ねえってビルス様から聞いたぞ！」

「その通りです。誰も全王様を倒す事は出来ません……しかし、移動は危害ではありません。何より全王様ご自身が抵抗なされませんから」

全王とは全宇宙の頂点であり、絶対無敵の存在だ。

実の所、全王に被害が及びそうな時は大神官がバリアを張ったりしているので本当に無敵かは怪しい部分もあるが、とにかく全王が無敵の存在というのは神々の間では常識である。

だが、だからこそ全王には決定的に欠如しているものがある。

それは『警戒心』、そして『危機感』だ。

自分が害される事など絶対ないのだから、警戒などしない。

全王にとって宇宙とはいわば、スケールの大きい町作りゲームのようなもの……画面の中のキャラクターがどれだけ強かろうと、それを前にして防御姿勢を取る事はない。

抵抗する必要など感じた事がないほどの無敵。

無敵とは字の如く『敵』が『無』いという事——故に無抵抗。防御という概念が全王にはない。

悟空は全王呼び出しスイッチを持っているが、仮に悟空が別の時間軸に行って、面識のない状態でスイッチを押したとしても、全王は抵抗せずにその場に現れるだろう。

今回はたまたま、スイッチを押したのが悪意ある者で、行き先が別の時間軸だった……それだけの話なのだ。

「神々がいねえ、か……ん？　でも待てよ？　うちの神様は今も神殿にいるぞ？」
「ほう、それはいい情報です。もしかすると、純粹な神のみが願いの対象だったのかもしれないね」

現在十二宇宙には神がいないと大神官は語ったが、例外としてリゼットだけは何

故が残ってしまったている。

この理由を大神官は、リゼットが純粹な神ではないからと推察した。

あるいは別の理由があつてあえて残したのか、願いの叶え方が悪くてリゼットだけ例外になつてしまったのか……どちらにせよ、今はその点について議論する時ではない。

「……なあ大神官様。そっちの方で気付けなかったんか？　オラが言えた事じゃねえのは分かつてるけどよ」

悟空は、もっと早く気付けなかったのかと大神官に訊ねた。

界王から連絡がある事前提で丸一日も騙され続けていた自分が言う事ではないかもしれない、と思いつつも流石にこれは言っておくべきだと思つたのだ。

大神官達や天使ならば、全王宮にいながらにして全宇宙で起きている事を観察する事は出来るはずだ。

少なくともコアエリアの戦士達が他の宇宙を襲った時点で神々がしっかり動いていれば、ここまで事態は悪化していない。

そういえば未来世界でも、ブラックとザマスが全宇宙の神々を殺していたのに全

王や大神官が対処している素振りすらなかった事を悟空は思い出した。

「いいえ、気付いておりましたよ。何も出来ませんでした」

「どういう事だ？」

「私達天使は常に中立です。善悪どちらに与する事も、戦う事ありません。そして天使の掟を破った者は消滅してしまうのです……跡形もなく」

「……！」

それは、悟空が初めて聞く天使の大きすぎる弱点であった。

十二人の天使と大神官は宇宙最強の存在だ。破壊神すら彼等には及ばない。

だが戦う事がそのまま消滅に繋がるのでは、いくら強くても宝の持ち腐れだ。

実質、脅威を排除出来ないと言っているに等しい。

つまり実際の宇宙最強戦力は破壊神で、その破壊神も界王神の方を仕留めてしまえば巻き添えで死ぬ。そして天使はそれを指をくわえて見ている事しか出来ない。

……ブラックとザマスがあれば好き勝手できるわけだ、と今更ながらに悟空は納得した。

「……戻って来る事は出来ねえのか？」

「不可能です。界王神達は念入りに時の指輪を没収されていますし、全王様は時間を渡す事は出来ませんので……それが出来るのは時の界王神ですね。ああ、そうそう、彼女は無事です。元々時間軸から切り離された場所にいるので、願いの対象外だったようです」

トランクス達の上司である時の界王神クロノアは健在……これは不幸中の幸いだった。

彼女さえ無事ならば、別の時間軸に放逐された全王達を救出する事も可能だろう。

「悟空さん……これは貴方とリゼットさんが招いた事態とも言えます」

「どういう事だ？」

「今回の件を引き起こした者達の狙いが分かった時……もう今から破壊神を派遣しても間に合わない状態でも、全王様ならば宇宙ごと消してしまうという解決方法がありました。敵は上手く身を隠し、個人を特定する時間はない……しかし超ドラゴンボールが使用された場所は分かっておりました」

「……どこだ？」

「第7宇宙。リゼットさんがクウラとの戦いの後に眠りに就いた隙を突いて侵入

したのでしょう」

全王の能力ならば、宇宙ごと消す事も、個人だけを狙って消す事も出来る。

だが敵もその事は分かっていたのだろう。

呼び出しつつも自らは姿を隠し、全王に消されないようにしたのだ。

勿論僅かな時間さえあれば、大神官がその隠蔽すら突破して犯人の特定に成功しただろうが、それよりも敵が願いを叶える方が僅かに早かった。

「全王様は第7宇宙を消す事をよしとされませんでした。貴方やりゼットさん、そしてペンギン村の友達を消したくないと……」

「全ちゃん……」

「これこそまさに私が危惧していた事です。全王様は何者にも害される事のない絶対の存在……しかし、貴方達と出会った事で友達という弱さを得てしまいました。常に公正、絶対であるはずの全王様に迷いが生じる……あつてはならぬ事です」

かつて、リゼットが全王にペンギン村を紹介した時……アラレ達と楽しそうに遊ぶ全王の姿に、どこか剣呑な視線を向けていたのが大神官であった。

きつとその時から彼なりに、危機感を抱いていたのかもしれない。

ある意味宇宙の絶対のシステムである全王に、迷いが生じる。消したいものと消したくないものの好みが出来てしまう。

それは、本来不可避のはずの全王の裁きから逃げる抜け道となってしまう。

全王とはある意味この宇宙の法則であり現象そのもの……物の落ちる速度が同じであるように、ただ、そうあるべきモノとして存在している。

その現象が好みを持ち、個人によって落下速度が変わったりしてしまったり、もうそれは法則ではない。

全王の『絶対』が崩壊する……それは宇宙の秩序を乱してしまう可能性があるのだ。

だが悟空は、嬉しそうに笑った。

「大神官様……そう固え事言うなよ。成長したんだよ、全ちゃん。喜ばうぜ」
「成長ですか……しかしそれで敵に付け込まれては……」

「大丈夫だ」

まだ不満そうな大神官に、悟空は安心させるように力強い笑みを向けた。

「オラ達が何とかする」

自信満々に悟空が言い切った。

何とか出来る根拠も、理由もない。

それでも彼の顔には何とか出来るという強い確信だけがあり、大神官は毒気を抜かれたように瞬きをした。

「全ちゃんが成長して、宇宙を消さないって選択をした事を間違いなんかにしねえ……絶対だ。」

オラ達が何とかしてやる。そこで……消さなくてよかったって、全ちゃんに思わせてみせるさ」

悟空達と出会う前の全王ならば、一瞬の迷いもなく宇宙ごと敵を消してしまっただろう。

だが全王はそれをしなかった。ならば、その成長を間違いにしては駄目だ。

いや、絶対に間違いになどさせない、と悟空は決意する。

「全ちゃんや皆に伝えてくれ。『絶対助ける。だから少しだけ、そこで遊んで待っててくれ』ってな」

「……貴方は不思議な人ですね。こんな事態だというのに……どうしてでしょう。」

貴方なら、本当に何とかしてくれそうな……そんな気がします」

「ああ、任せろ」

神々は放逐され、唯一残った神であるリゼットも今は深い眠りに就いている。

宇宙のあちこちが荒らされ、まさに今は未曾有の事態の真っ最中だ。

宇宙最高の殺し屋ヒットは倒れ、宇宙最強のジレンも出し抜かれた。

だが、それでもだ。それでも。

——この世界には、悟空がいる。

決して神ではないし、宇宙最強でもない。リゼットのように石橋を叩いて、叩きすぎて石橋ごと不安要素を潰して万全を期すタイプでもない。

ハッキリ言って隙だらけだし、間が抜けているし、ドジで楽観的で、宇宙の命運を預けるヒーローとしてはあまりに不安要素が強すぎる。

しかしそれでも、何とかしてくれそうな不思議な存在感が悟空にはあった。

道中でどんなに苦戦しても、道に迷っても、時にはコースアウトして迷走しても……それでもこの男の背を追い続けた先には、皆が笑って迎えられるゴールがある。

そう思わせてくれる存在こそが、孫悟空であった。

「……わかりました。どのみち、今は貴方達に任せるより他になさそうです。下界の人間に神々の命運を託すなど本来あってはならないのですが……」

——任せましたよ、悟空さん。

そう言い、大神官が差し出した手を悟空が掴んだ。

二人は互いを認めるようにガッシリと強く握る。

そして大神官は、最初の咎めるような表情とは打って変わった、穏やかな笑みのままその場から消え去った。

【ちょっと分かりにくかったので時系列】

・ 2 日前

クウラとの戦い終了。悟空達は地球への帰還を始める。

地球の結界消滅。界王神がピッコロにポタラを託す。

この時点ではまだ悟空が連絡を取っている界王は本物。

・ 1日前

神々が消えて界王が偽物とすり替えられる。

←

・ 現在

界王がすり替えられていた事と神々の不在を知る。

【これもしかして最初から全王に話してれば被害出なかった？】

そうでもない。

もし全王に話すor破壊神を呼ぶために全王宮に行くという選択肢を取っていた場合、全王は第7宇宙の地球を除く全てを消していた。

今回はあくまで第7宇宙の『どこに』いるかが分からなかったから消さなかっただけ。

もしかしたらリゼットや悟空が説得する事で第7宇宙を消さずにクウラだけ消してくれたかもしれないが、その場合でも第6宇宙などは消されてしまう。

多少マシになったが、それでも迂闊に頼っていい相手ではない。

第30話 悪意の結託

——時を少し遡り、リゼット達がクウラとの決戦に臨む前に話を戻そう。

異変は、その時から既に始まっていた。

第4宇宙の界王神界にて、水晶を通して下界の惨事を見ているのは第4宇宙の界王神であるクルだ。

彼は当然ながら、他の宇宙を襲ったコアエリアの戦士達の事は知っている。

既に第10宇宙、第9宇宙、第6宇宙そして強豪のはずの第11宇宙の戦士達までもが敗れ、宇宙が荒らされている。

そして破壊神不在の今、対抗し得る戦力として期待されているのが、あの力の大会で猛威を振るった修羅の宇宙——地球神リゼット率いる第7宇宙の地球在住戦士達であった。

あの十人の全員が他の宇宙ならば最強を名乗れる実力者の集まりで、最弱のヒルデガーンを除く九人はいずれも破壊神には及ばないまでも、近いレベルに到達している。

特に主将のリゼットと、大会の最後にジレンと激闘を繰り広げた孫悟空は破壊神級と認めるしかない。

だから、もし敵の動きを探知したらすぐに第7宇宙の界王神へ伝達し、界王神から界王へ、そして地球の戦士達へ伝わる手筈になっているのだ。

そして第4宇宙には今、まさに脅威が襲い掛かっていた。

……だが、情報はここで止まっていた。いや、止められていた。

「あの、クル様……すぐに第7宇宙に……」

「黙るでおじやる。神が下界の……それも別の宇宙の人間に助けを求めるなど……そのようなみっともない真似は出来ぬでおじやるよ。第一、ビルス殿の宇宙に助けなど求めようものなら、後でキテラ殿に何と言われるか」

付き人の提案を、クルが黙らせた。

第4宇宙の界王神であるクルは、神としての意識が非常に高く尊大な界王神だ。

その彼にとって他の宇宙の、たかが一惑星の神が率いる勢力に助けを求めるというのはこの上なくみっともなく恥ずかしい行いであり、「一惑星の神如きが解決できる問題を解決出来ない無能」と自らを認める行為に他ならなかった。

また、破壊神同士の仲の悪さも問題だ。

仮に今回の件でビルスが何の役にも立たなかったとしても、それでも第7宇宙は彼の宇宙だ。

つまり第7宇宙に助けを求めるというのは、キテラがビルスに借りを作る行為になってしまふ。そんな話を聞けばキテラは確実に不機嫌になるだろう。

その二つの要素により、本来すぐに第7宇宙に伝わらなければいけない情報が、第4宇宙で止まってしまっていた。

だが情報が止まっても、事態は止まらない。クルは後に、この判断を悔いる事となる。



第4宇宙の被った被害は甚大なものであった。

妙な術を操る山羊男は次々と惑星を喰らい、その力を高めていた。

彼の側にいる寡黙な男も、本来は大した事がないのだろうが山羊男の魔術によって強化される事で恐るべき強者へと変貌し、第4宇宙を苦しめた。

これ以上好き勝手にさせるわけにはいかない……第4宇宙の戦士達は辺境の惑

星で襲撃者を迎え撃った……だが……。

「こんなものか……宇宙の精鋭といえど、大した事はなかったな」

倒れ伏した第4宇宙の戦士達を見下ろして山羊男——モロが嫌らしく笑った。

監獄惑星で死んだと誰もが思った過去の大罪人。だが彼は生きていた。

あの時……破壊光に貫かれる瞬間、彼は誰にも教えていなかった能力を使っていた。

彼の隠された能力、それは『捕食』と『同化』だ。

彼はエネルギーの吸収を得意としているが、実は生物そのものを飲み込んでしまう事でその能力を我が物にする事が出来る。

そして同化能力は、その気になれば惑星との一体化すら可能とする。

彼はその能力で監獄惑星と同化し、リゼットの破壊光から逃れたのだ。

モロにとって運がよかったのは、その場にメタルクウラの軍勢がいた事。もしこれがなければ破壊光はメタルクウラの軍勢を滅ぼすのに力を使い果たさず、しつこくモロを追跡し続け、やがては監獄惑星ごとモロを消し去っただろう。

もう一つの幸運は監獄惑星が崩壊しつつあった事。

崩壊しかけていなければリゼットは念入りに監獄惑星を調べ、そして気の探知に優れた彼女はどれだけモロが気を消そうともそのおぞましい気を感じし、惑星と同化している事を見抜き、惑星ごとモロを消し去っただろう。

だが既に崩壊が決まった惑星……しかも宇宙空間では生存出来ない仲間の脱出を優先し、更にクウラとの決戦に気を取られていた彼女は、そこまで念入りに調べる事はしなかったし、地表を消し飛ばしただけで立ち去ってしまった。

……いや、おかしいだろう、とモロは思う。

倒れている相手に死亡確認をすつ飛ばして追い打ちをかけるだけならまだしも、惑星の地表全部を吹き飛ばす奴など普通いない。どれだけ念入りなんだあの女と文句を言いたくなる。

惑星と融合した状態で地表を消されるのは生きたまま全身をピーラーで削られるような苦しみだったが、モロは何とか耐え抜いた。

最後の幸運は、この監獄惑星が元々はフューの実験場であるが故に、転移機能を備えていた事。

この転移機能を使う事でモロは、大した敵のいなそうな第4宇宙へ逃れ、完全

にリゼットの探知の射程外へ逃れたのだ。

リゼットの探知は第7宇宙全域をカバーしているが、他の宇宙にまでは届かない。

そうしてまんまと安全圏へ避難したモロは用済みになった監獄惑星をパージし、ドラゴンボールを使用した。

そう、フューが監獄惑星に集めた戦士達を争わせる為に配布していたドラゴンボールだ。

これがどの時間軸から持ち出したものなのかは、モロに知るよしもない。しかしこのドラゴンボールは願いを三つ叶える事の出来る優れ物であった。

モロは一つ目の願いで傷付いた己の身体の修復を。二つ目の願いで全盛期の魔力の復活を。そして三つ目の願いで、銀河パトロールに収監され死刑執行間近であった犯罪者……『サガンボ銀河強盗団』の構成員の一人セブンスリーを己の配下として呼び寄せた。

本当は全員呼びたかったのだが、他のメンバーは超銀河王ザーボンによって既に処刑されており、セブンスリーが最後の一人だったのだ。

「どうだ、セブンスリー……能力はコピーしたか？」

モロの問いに、セブンスリーと呼ばれた、少しヒットに似た男が無言で頷く。

セブンスリー——正式名称 O G 7 3 ー I は邪な野心を抱く科学者によって作られた、命令に従うだけの殺人マシーンである。

彼だけが処刑されずに残っていたのも、自発的に悪事を働く事はなく後回しにされていたからだろう。

あるいはザーボンとは、セブンスリーの能力と自我の希薄さに目を付け、自分の命令通りに動く手駒にしたかったのかもしれない。

そんなセブンスリーの最も特筆すべき部分はコピー能力であり、相手の首元を触る事でどんな格上であろうと、戦闘力、戦い方、そして特殊能力を三十分間コピー出来る。

しかも元々のセブンスリーの強さの上にコピーが上乘せられるので、コピー後の実力はオリジナルを上回るという反則性能だ。

また、このコピー能力は同時に三人までストック可能で、任意で切り替える事が出来る。

そして第4宇宙は特殊能力の宝庫だ。純粋な実力ではなく絡め手を得意とする第4宇宙の面々が持つ能力は、使い手が変われば恐ろしい事になる。

セブンスリーがストックした能力は三つ。透明になれるカメレオンのような戦士ガミサラスの『透明化能力』。

札使いダーコリの『幻覚能力』。

そして最後はモロ自身の能力だ。

「ご苦労……では、もうお前に用はない」

「!?」

モロは満足そうに笑うと、セブンスリーを掴んで、あろう事か口に入れた。

セブンスリーのコピーは三十分しか続かない。

しかしモロの能力をコピーしたセブンスリーをモロが捕食吸収する事で、その時間制限はなくなる。

普通ならば捕食しても制限時間が変わる事はない。

しかしモロ自身の能力をモロが取り込む事で、一種のバグのような状態が完成する。

モロをコピーしたセブンスリーを捕食するというのは、自分で自分を取り込んで
いるようなものだ。

モロはこの状態を利用し、魔術を用いてセブンスリーを『元々自分の一部だった』
と己の肉体に誤認させたのだ。

完全に自分の一部として取り込んでしまう事で、制限時間は消える。

例えば三十分で消える気弾があったとして、それを術者が取り込んで気を回復し
たとしよう。

この時、三十分経ったら回復した気は減ってしまうのか……といえば、そんな事
はないだろう。

自分の一部に『戻した』時点で、そんなものはなくなっている。

その戻したパーツに、たまたま他の能力が付いていても、それはモロの魔術を
もってすれば許容範囲内だ。

セブンスリーを完全に取り込み……いや、『戻し』、モロの姿が変わった。

山羊のような顔は、セブンスリーに似た端正な顔立ちへ。肉体も引き締まり、頭
部にはモロの象徴である二本の角が残っている。

悟空達のエネルギーで若返り、ドラゴンボールで魔力も復活した。

第4宇宙の星々を喰らう事で力を増し、その上で自らをコピーさせたセブンスリーも捕食した。

その戦闘力は今や、監獄惑星で悟空達と戦った時とは比較にもならず、破壊神の領域に片足を突っ込んでいる。

「さて、このまま第4宇宙を俺の餌場にしてしまうのも悪くないな」

モロの最終的な目的は、自分が誰にも邪魔されずに星を自由に食べられる世界にする事である。

そんな事をしたらいずれは死の星だらけになって彼の食料がなくなるが、そこま
でモロは考えていない。

ただ、己の欲を満たせばいい。その後で困る事があれば、その時考えよう……
くらいの見通ししかないのだ。

今さえよければ、それでいい……モロはそんな、刹那的な快樂主義者であった。
そんな彼の背後に、一人の男が突如出現した。

「こんな場所にいたか。探したよ……星喰いのモロ」

「……貴様は？」

「俺はハーツ。神の存在しない新世界の創造を望む者……モロ、君を迎えに来たんだ」

怪訝な表情でモロが振り返る。

そこにいたのは、ファー付きのコートを羽織った優男だった。

しかし、妙に疲れている。見た所、立っているのもやっつとのようなだ。

「君の事は知っている。かつて第7宇宙の大界王神と戦い、封じられたという事も。」

神のいない世界……欲しいとは思わないか？」

「フン……神など最早俺の敵ではない」

「どうかな？ 確かに界王神は敵ではないだろう。しかしこの世界には破壊神、そして全王がいる。」

奴等を完全に排除しない限り、君の理想は叶わない」

モロは破壊神の事をあまり知らない。

全盛期の彼を止めたのは大界王神と南の界王神であり、破壊神に関してはそうい

う存在がいる程度の知識しかなかったからだ。

だが大界王神より遥かに強い神が宇宙の数だけいるとすれば、それは今のモロをしても厄介だと認める他なかった。

「なるほど、その神々の排除を貴様なら出来ると？ そのザマでか？」

「耳が痛いな。だが何も実力で排除するわけじゃない。こいつを使うんだ」

ハーツが指を鳴らす。すると空中に、七つの巨大なドラゴンボールが姿を現した。

「な、なんだアレは……ドラゴンボール……なのか？」

「超ドラゴンボール……龍神ザラマの作り出した『本物』のドラゴンボールだ。それ以外のドラゴンボールは全て、アレを削って作り出したか、その模造品を更に模造しただけの廉価版に過ぎないんだよ。当然叶えられる願いの幅はそこらのドラゴンボールとは比較にならない……少なくとも破壊神連中は、『叶えられない願いはない』と思っているようだ」

シャンパはかつて、この超ドラゴンボールを指して『本当に何でも叶う』と断言した。

この言葉が真実であるかどうかは定かではない。

もしかしたら天使や大神官、全王にまでは流石に効力が及ばない可能性もあるだろう。

しかし破壊神であるシャンパが『叶えられない願いはない』と確信しているという事は、少なくとも破壊神までは効果対象になるという事だ。

その前提条件の上で高望みせず、かつ神々を消す為の願いをハーツは考えていた。「恐らく破壊神まではこのドラゴンボールで消せるだろう。しかしそうした攻撃的な願いが天使や、その上に座する全王にまで及ぶのかは確証が持てない。だから俺はこいつに、この世に存在する全ての神々を龍神ザラマを除いて別の時間軸に放逐する事を願うつもりだ」

「別の時間軸……」

「そうだ。こことは違う時間軸……その中には、全王によって全てが消されてしまった悲しい世界がある……奴等には、そこに行ってもらおう。消せぬならばせめて己の罪を見せ付けてやりたい」

ハーツは最初、「この世に存在する全ての神を消せ」という願いを考えていた。だが超ドラゴンボールといえど、天使や大神官、全王にまで効力が及ぶか分から

ない。

そこで次に、「全王を除く全ての神を別の時間軸に放逐しろ」という願いを考え
た。

こうすれば全王を守る者はいなくなり、全王が無防備になる。

そうして守護者のいなくなった全王を、宇宙の種の力を完成させて取り込んだ自
分が倒す……いや、倒せると思っていた。

だが、ジレンに叩きのめされた事で己の思い上がりを知った。

全王は確かに仕留めたい。だがジレン一人にここまでやられた自分達が、宇宙の
種があつたとしても全王に及ぶだろうか？ 残念ながら自信はなかった。

それに全王を仕留めたいというのはハーツの我儘であって、目的地ではない。

要は全王を含む神々がこの世界からいなくなればいいわけで、無理に仕留める必
要はないのだ。

本当はこの手で仕留めてやりたい。消されていった人々の怒りを思い知らせてや
りたい。

だが、相手を低く見積もるのは駄目だ。全王だけ残して挑んで、やっぱり無理で

したでは、先に散っていった仲間達に顔向けが出来ない。

「だが神々を放逐しても最大の障害が残る……第7宇宙の人間達だ。君も監獄惑星で出会っただろう？ 彼らはきっと、神々を助けようとしてしまうだろう……人間同士で争うのは悲しい事だが、せつかく追放した神を呼び戻されては困る。残念ながら戦うしかない」

「奴等か……だがそれならば、超ドラゴンボールとやらで奴等も放逐すればいいだろう」

「生憎だが超ドラゴンボールで叶えられる願いは一つなんだよ。欲張り過ぎは駄目だ」

ハーツは、どんな願いが一番いいのか考えた。その中には勿論、神々諸共第7宇宙の戦士達を放逐する案もあった。

例えば「一定以上の力を持つ奴を全て消せ」という願いはどうだろう？

だがこれでは一番消したい全王が残る可能性が高い。

フューに見せられた他の時間軸のデータから、全王は強制転移には抗わない事が分かっている。

別の時間軸から来た孫悟空が呼び出しスイッチを押してもあっさり出現したのは確認済みだ。

だが「消す」や「殺す」では効力が及ばない可能性が高い。

ならば「一定以上の力を持つ奴を全て別の時間軸に放逐しろ」と願うか？

だがこれは、ハーツの知らないとんでもない不確定要素まで一緒に送ってしまう可能性がある。

例えば送った奴の中にドラゴンボールかそれに類する何かを作り出せる奴がいて、その力で戻ってきたらどうする。

龍神ザラマを願いから外す事を考えたのも、この為だ。

ザラマまで放逐してしまつては、放逐した先でザラマがドラゴンボールを作つて神々と一緒に戻つてきてしまう。

「神々と第7宇宙の戦士達を放逐してくれ」という願いならばかなりいい線を行っているように思えるが、この中に思いもよらぬ能力を持つ奴がいて、この状況をひっくり返してしまう可能性はゼロではない。

「色々と考えたが……どれも不確定要素が付いて来る。だから俺は欲張らない事に

した。

変に欲張って願いを複雑化して、それで全て失敗しては大間拔けだ。

まずは神々を、何もない世界へ放逐する。そこにはドラゴンボールも、それを作り出せる者もない」

実を言うと、この願いの叶え方でもまだ不安要素は残る。

時の界王神クロノアの存在だ。

シーラスの元上司である時の神。彼女ならば神々が放逐された時間軸を割り出して救出してしまう可能性が大いにある。

同時に彼女は殺してはならない、世界のシステムを担う存在でもある。

彼女が死ねば、彼女が管理している歴史——当然この世界も消えてしまう。

そして彼女を全王と同じ場所に放逐した場合、痼癪を起した全王に消されてしまう可能性がある。

実の所、全王と他の神々を同じ時間軸に放逐しようと決めたのも、これを期待しての事なのだ。

全王の幼稚で自分の事しか考えない性格ならば、遅かれ早かれ自分以外の全てを

消す。そうすれば全王は完全に一人だ。自分が全てを消した世界で永遠に孤独に彷徨っていいばいい。

それこそまさにお似合いの姿だ、とハーツは思った。

だから時の界王神はまだだ。まずは宇宙の種を成長させて新たな宇宙を創造する。

そして時の巢に攻め入り、その身柄を拘束して生かさず殺さず、宇宙のシステムとして存続させる。

もしかしたら、時の巻物を奪う事で放逐した歴史ごと全王を抹消出来るかもしれない。

それがハーツの計画なのだ。

「超ドラゴンボールは確実に神々を排除する為に使う。

その後に残る第7宇宙の戦士達は自力で倒すしかない。その為に、君の力を借りたい」

モロはその提案に考えるような素振りを見せる。

この話に乗る旨味、デメリット……そして全てが上手くいった後に、一番甘い汁

を吸える立ち振る舞い。

見た所、このハーツという男は今の自分と比べれば大した事はない。

これがリーダーでは、他もたかが知れている。

——いつでも出し抜けるし、いつでも潰せる。ならばこいつ等は使える。

そう結論を出し、モロは愉快そうに笑った。

「いいだろう。神のいない世界は俺にとっても魅力的だ。手を貸そうじゃないか」
こうして、コアエリアの戦士とモロという、二つの悪しき存在が手を組んだ。

そして、その最悪な現場を目撃してしまった哀れな戦士が二人。

小型異星人のシャンツァと、彼を胸に抱く女性キャウエイであった。

シャンツァの幻覚は全く効かず、気の具現化という能力は氣を食べるモロとの相性が悪過ぎたせいで早々に戦力外と化した二人は身を潜め、一部始終を見ていたのだ。

「ど、どうしようシャンツァ……これ、私達の手に見える?」

「無理。絶対無理。ごめんなさい」

「だ、だよね……界王神様、他の宇宙に助け求めてくれたり……」

「それも無理。多分無理」

「……詰んだ？」

実力的に、キャウエイとシャンツアにはもうどうしようもない。

そもそもシャンツアは幻覚能力を抜けば大した強さではなく、キャウエイに至っては完全な戦闘要員のはずなのに亀仙人にも遠く及ばない程度の実力しかないのだ。

そして破壊神キテラは不在で、界王神は性格的に他の宇宙に助けを求めたりしない。つまり現状、完全に詰んでいる。

「……………」

元々青い顔を更に青くしていたキャウエイだが、彼女の頭の中では必死に現状を打破するための計算が始まっていた。

あの二人に勝つのは絶対無理だ。どうしようもない。

しかし界王神相手ならばどうだ？ 勝てないまでも、不意を突いて拘束するくらい出来ないか？

勿論害する気はない。しかし状況が状況……脅して、他の宇宙に助けを求めさせるくらいしか、現状道がない！

「……シャンツァ」

「？」

「——界王神界に襲撃をかけるわよ」

「何で!？」

キャウエイは嫌がるシャンツァを抱えたまま、その場から走り出した。

何？ ジョジョ……『プラチナメタルクウラの後に敵を出しても見劣りする？』

ジョジョ、それは一人の敵だけでクウラ以上にしようとするからだよ。

逆に考えるんだ……『単体では劣っていてもいいさ』と考えるんだ。

というわけで宇宙争乱編のボスは争乱編ラスボスハーツに加えてワールドミックスヨンラスボスのアムズ、モロ編ラスボスのモロの三人体勢でいきます。

【簡単に分かる今話の流れ】

①第4宇宙がモロに攻められたよ。第4界王神は意識高い系だったので情報を他に伝えず自分の宇宙だけで何とかしようとして悟空達に情報が届かなかったよ。

②第4宇宙の戦士達、キャウエイとシャンツァ以外全滅。

③後出し能力をフル活用してどっこい生きてたモロさん、魔法カード『監獄惑星のドラゴンボール』と融合素材『セブンスリー』を使って原作最強形態をシンクロ召喚する事に成功。星喰らう道となれ！

ちなみに惑星と同化した状態で表面大地を全部『破壊』されるのは生きたまま全身の皮膚を剥がされるようなものでクソ痛かったらしい。トラウマになりそう。

モロ「死んだと思っている相手に追い打ちかけるだけならまだしも、惑星の地表全部削るとかおかしいだろ……」

④ハーツさん、モロと手を組む。「遊戯君、僕はこのエグゾ……じゃなくて神々をどうするかやっと分かったよ。こうすればよかったんだ！」他の時間軸に。

へー。
HA☆GA
アアアアア！ 絶対許さねえ！

⑤キャウエイちゃん迷走。界王神界に強盗に入る事を決意する。

【セブンスリー】

モロ編で登場したとんでもないチート能力の持ち主。正直モロよりこいつの方がやばい。

相手の首の後ろを触るだけで相手の強さと能力をコピーする。

全王の消滅能力が全王に効くかどうかは不明だが、個人的には全王を倒せるのは全王だけなんじゃないかなと思っている。

全王が二体いて互いに「消えちゃえ」とやれば両方消えるというのが個人的な予想。

つまりこいつは、現状唯一の全王以外で全王を倒し得るキャラクター……なのかもしれない。

上手くこいつを活用して全王を消滅させる二次創作なんかが今後出るんじゃないかと少し思っている。

このSSでは速攻でモロの餌になった。

ちなみにこいつだけ死刑になってなかったのはザーボンが欲をかいて自分の駒にしようと思ったから。

やはりザーボンさんは使えませんね……ベジータ倒しても海に潜らないし……ドラゴンボール全部奪われるし、負けそうになると裏切ろうとするし。

少しはドドリアさんを見習いなさい。

ちなみに原作では言われていないが戦闘力コピーには限界があるように見える。モロの能力をコピーしたはずのセブンスリーは17号&18号タッグにボコボコにされたが、当のモロ本人は明らかに17号&18号より遥かに格上だったし。

【クル】

第4宇宙の界王神。尊大で神としての意識が非常に高く、「おじやる」という古風な口調で話す。

……らしいが、アニメ本編でおじやると言った事は全くない。

また、本当にこんな奴なのかと聞かれると正直自信がない。何故ならこいつの出番そのものがほとんどないから。

第31話 超戦士達の抵抗

「かつて全王によって全てが消されてしまった時間軸がある。龍神ザラマを除くこの世界に生きる全ての神を、全ての道具を取り上げた上で、合流できないほど引き離した状態で放逐してくれ！」

ハーツは第7宇宙で超神龍を呼び出し、神の言語を用いて願いを叶える事に成功した。

神を排除する為に神の言語を用いるのは複雑な気分にはさせられたが、心を読めるハーツにとって神の言語を習得するのはそう難しい事ではなく、とうの昔に習得済みだ。

無限に等しい距離を持つ世界に、合流不可能なほど距離を離して放逐してしまえば神々は孤独となる。

一部の界王神には瞬間移動があるが、それだって気を感じ出来ないほど遠くにいる上に、どこに誰がいるのか分からないのでは合流など不可能。

無限に等しい空間の中から、何の目印もなしに相手を探し出してその場所に瞬間

移動するなど、それこそ第7宇宙の地球神の馬鹿げた感知能力があっても難しいだろう。

ハーツのやり方は狡猾だった。

宇宙空間にそのまま超神龍を呼び出しては、神々が気付いて妨害してくるかもしれない。

そこでモロが第4宇宙のダーコリからコピーした幻覚能力によって自分達を覆い、その幻覚空間の中で呼び出したのだ。

その結果、界王神も界王も超神龍が呼び出された事に気付かず、唯一気付いたのは大神官のみ。

しかしその大神官をもってしても、広大な宇宙の『どこで』『誰が』呼び出したのかまでは分からず、また分かっても彼は天使の掟により何も出来ない。

全王ならば第7宇宙諸共消す事で阻止出来たが……。

「……でも消すのは寂しい事だって、悟空とリゼットが言ってたのね。ペンギン村の皆もいなくなっちゃうのね」

——全王は消さなかった。

以前の彼ならば『そう。じゃあ消しちゃおうか』くらいの軽さであっさり消しただろう。

しかし今の彼は多少……本当に多少だが、下界を大切にすることを学んでいた。その結果、今までに数多の氣に入らないものを無慈悲に消してきた彼は、この世界から消されたのであった。

★

神々が消えてから、一日が経った。

この一日、ハーツは傷の治療に専念し、モロと、ハーツ以外のコアエリアの戦士を取り込んだアムズはそれぞれ第3宇宙と第2宇宙を侵略していた。

この恐るべき侵略者に対し、それぞれの戦士達は立ち上がった。

だが……。

「受けなさい！　これが皆の声援を受けた私の愛の力——っ!？」

第2宇宙の人々の声援を受けて巨大化したリブリアンの腹に、黒い戦士——アムズが突撃した。

たったそれだけでリブリアンの顔が苦痛に染まり、そして白目を剥いて崩れ落ち

た。

——リブリアンが敗れた。

カクンサ、ロージィ、マジリカーヨ、カトペスラ……そしてアニラーザさえも。第2宇宙と第3宇宙は、アムズとモロの二人の悪魔の為に恐怖のどん底に陥った。

そしてアムズはリブリアン達を吸収し、モロは星々を喰らってますます力を増す。そうして十分な力を得た彼等は次にいよいよ、第7宇宙へと狙いを定めたのであった。

彼等が真っ先に攻撃すべき対象として狙いを定めたのは、地球だ。

今、宇宙最強を誇る第7宇宙の精鋭達はクウラに対応する為に大半が地球から遠ざかっている。

その為、現在地球に残っている戦力は普段と比べればかなり少ない。

さしものハーツ、モロ、アムズの三人であっても地球戦力が勢揃いしては勝てたとしても甚大な被害を被る。

そこでまずは戦力の少ない地球の方を狙い、奇襲で一気に戦士達を倒して彼等の

エネルギーをアムズに与える。

その後異変に気付いた神殿組を、完成させた宇宙の種を取り込んだハーツ、多くの戦士のデータを得たアムズ、星々を喰ってパワーアップしたモロで叩くのだ。

その為にもこの地球襲撃は絶対に失敗出来ない大事な一戦である。

まずはアムズとモロの二人で地球へ向かい、モロのエネルギー吸収で弱体化させて殲滅しよう、と彼等は考えた。

彼等はこの作戦の成功を疑っていなかった。

何故なら、神を放逐した今では誰も宇宙規模の通信は行えない。

モロの生存も第7宇宙の戦士達は知る術がない。

そう思っていた……しかし。

「ドォーン!!」

「!!」

地球に迫り着く寸前……ピンク色の何かが奇声をあげ、モロに衝突した。

不意打ちを受けたモロは吹き飛び、月にめり込まされてしまう。

その後を追って月に着陸したのはピンク色の肥満体……かつて宇宙を恐怖で震撼

させ、界王神を全滅寸前まで追い込んだモロ以上の災厄——魔人ブウだ。

起き上がるモロの前でブウはニカリと笑い、普段は糸のように細めている目を僅かに開けた。

「残念、お前地球に行けない。お前ここでおしまい」

魔人ブウの後に続くように、彼の後ろに二人の戦士が降り立った。

どちらも見た目は若者で、黒髪の青年と金髪の女性だ。

人造人間17号と18号。どちらも永久エネルギー炉を搭載しており、モロのエネルギー吸収の通じない戦士であった。

「ちっ……アムズ構うな、先に行け。俺はこいつ等を片付けてからすぐに行く」

モロが先に行くように命じるが、アムズは動かない。

ただ、じっと魔人ブウを見ており、心なしか怒気のようなものを発しているように見える。

「ん？　なんだお前？　俺に何か用か？」

「……………」

アムズは答えない。ただ、魔人ブウへの敵意だけを漲らせて構えを取った。

だがそんなアムズへ、再度モロの命令が飛ぶ。

「俺は行けと行っただぞ！ 従え、ガラクター！」

「……………」

モロの命令にアムズは渋々といった様子で従い、地球へ向かった。

それでも最後にもう一度魔人ブウを見る辺り、余程魔人ブウの事が気に入らないようだ。

それからモロはブウ達に向き合い、フンと鼻を鳴らす。

「してやったり……て所か？ どうやったかは知らんが、俺達が来るのを知っていたようだな。

だが残念だったな。お前達如きでこのモロ様の相手は出来ん。その嫌な記憶を思い出させる不細工な間抜け面を恐怖に変えてやろう」

勝利を確信したように言うモロに、ブウは答えない。

いつも通りの何も考えていなさそうな顔で、18号へ振り返った。

「なあ、ぶさいくなまぬけづらってなんだ？」

「みっともない変な顔って事だよ」

18号の言葉を聞き、ブウはようやく自分の顔が侮辱された事を理解した。

すると彼は「カッチーン！」とわざわざ口に出し、わざとらしく両腕を高く突き上げた。

「怒っちゃったもーん！ 殺しちゃおー！」

ピーッ、と頭から煙を出してブウはモロへと近付いていく。

右へ、左へ。片脚だけでケンケンをするようにピョンピョン跳ぶその姿からは、まるで緊張感というものが感じられない。

ブウは「ホッ、ホッ、ホッ、ホッ」と声を発しながらモロに接近し、そして両拳を突き上げてファイティングポーズを取った。

「何だ、やる気か？ フン……どうやら見た目通りの間抜けのようだな。実力の差も理解出来んとは」

モロもまた魔人ブウを嘲笑い、拳を上げる。

かつて宇宙を荒らし回った災厄が二人。片方は無邪気に、もう片方は不敵に笑い、対峙した。

一方アムズは、地球に來ると同時に手厚い歓迎を受けていた。

彼が地球に入ると同時に周囲一帯を覆うようにバリアが展開され、彼を閉じ込めたのだ。

それは、ブルマが開発した戦闘フィールドだ。

普段からやたら組手をしたがる悟空とベジータが周囲に被害を及ぼさないように作り上げた発明品だが、こういう時にも役に立つ。

そのバリアの中でアムズを待っていたように飛來したのは、次期地球神候補タピオンを先頭にした地球の戦士達であった。

孫悟飯、ナッパ、天津飯、ヤムチャ、クリリン、餃子、兎人參化、Mr・ポポ、カリン、ゴテンクス……ほとんどは既に第一線についていけず退いた戦士達だが、それでも彼等もまた武道家だ。

地球の有事とあらばいつでも命をかけて戦う準備は出來ている。

リゼットが地球防衛の為に残していた自立気弾の戦乙女達も後ろに待機し、バリアの外にはゴッドガードンの群れがいつでも動けるように配置されていた。

「みんなー、頼んだわよー！ やっちゃえー！」

バリアの外で16号に護衛されながらブルマが拳を振り回して声援を飛ばす。

迎え撃つ準備はまさに万端。悟空やリゼットがいなくても、それでも地球の層は厚い。

かつては18000の戦闘力で地震のように全体が揺れていたくせに最近はどうとう超サイヤ人ブルーの気でも微動だにしなくなった惑星の戦士達だ。顔つきが違

う。

茫然としたようなアムズへ、悟飯がニヤリと口の端を歪めて話しかける。

「どうした？ 僕達が準備万端で待っていたのがそんなに意外だったか？ そいつは残念だったな」

今の悟飯は潜在能力を解放した姿になっており、甘さも消えて好戦的な性格へ変わっている。

その姿にクリリンは頼もしさを覚える反面、何故か少し不安になった。

「今から少し前に、異常事態を知らせてくれた娘がおってのう。おかげでモロとやらに、相性がいいブウと17号、18号をぶつけて地球への降下を阻止出来たわい」

この地球戦士達の待ってましたといわんばかりの状態は、ある一人の少女戦士の

足掻きの結果であった。

事態が動いたのは昨日の事だ。リゼット達の帰りを待ちながら仙豆をおやつにしていたカリンは、床下にある物置から声がする事に気が付いた。

もしや数年ぶりのカリン塔への挑戦者か？ 最近めっきり誰も来てくれなくなつて少し寂しく思っていたカリンは、意気揚々と物置へ行った。

しかしそこに挑戦者はおらず、代わりに声を出していたのは水晶の破片であった。以前第9宇宙が襲撃をかけて来た時に彼らが通信に用いていた水晶だ。

その時に水晶は叩き割つてやったのだが、流星は破壊神が通信に用いていた道具か。こんなになつても、まだかろうじて機能が生きていたらしい。

また他の宇宙からのイチヤモンか、と思ひげんしながら水晶の欠片を手にしたカリンだったが、向こう側の様子は予想と違っていた。

『お願い！ 誰でも……から答……！ 宇宙が……大変……！』

聞こえて来た声は若い女性のもので、そして随分と切羽詰まっていた。

一体何事かと、途切れ途切れながらも何とか事情を聞き出すと、事態はカリンが思う以上に危険な領域へ入っている事が分かった。

声の主の名はキャウエイ。第4宇宙の戦士で、第4宇宙は既に壊滅状態らしい。彼女は現在、第4宇宙の界王神界にいるらしく、そこで何と界王神を色仕掛けで騙して拘束した上で水晶を奪って、全宇宙にSOSを出したらしい。

しかし僅かに一手遅く、拘束していた界王神を含めて神々が突如消えたせいで誰も連絡を受け取れず半泣きになっていた。というか泣いていた。

敵勢力は超ドラゴンボールで神を別時間軸に追放する事を企てており、状況から見てそれは既に成功してしまった後だ。

敵の中にはモロというエネルギーを吸収する危険な奴がいて、そいつとは対峙するだけでエネルギーを吸われてしまうので正攻法では勝てない。

それらの得難い情報をキャウエイを通して入手したカリンは、こりゃいかなとカリン塔から飛び降り、ブルマ達に情報共有をしたのだ。

モロを地球に到達させた上で他の敵と一緒に戦ってしまったては、勝ち目がなくなる。

そこでモロのエネルギー吸収の影響を受けないだろう魔人ブウと17号、18号を足止め要員として出し、月で食い止めさせた。

本当はもう少し戦士を出したかったのだが、ゴッドガードンではもう人数合わせにすらならず、他の戦士ではエネルギー吸収で逆にモロを強化してしまう。

なので実力差があってもそうそう負けようがない不死身の魔人ブウにモロの相手を任せるしかなかったのだ。

それに魔人ブウならばおやつ光線や吸収による一発逆転が狙える。

また、17号は地球を発つ前にリゼットが潜在能力解放を行っており、ブルーの悟空達に近いレベルへ急上昇を果たしていた。

最大戦力のピッコロは、敵のリーダーが現れた時の為に待機だ。

ヒットやジレンが遅れを取ったという情報はピッコロも共有しており、その実力を考えると現在地球に残った戦力で敵リーダーに対抗出来そうなのがピッコロしかない。

「折角の登場で悪いがお前に時間をかけるわけにはいかない。速攻で倒させてもらうぞ」

悟飯が宣言し、消えたかと思った次の瞬間には肘打ちをアムズに叩き込んでいた。続けて蹴り上げ、吹き飛んでいるアムズの腹目掛けて飛翔し、頭突きをめり込ま

せる。

まだ終わらない。アムズの足を掴んで急降下し、建物の天井に思い切り叩きつけた。

アムズがゆっくり起き上がり、悟飯の背後へ回り込む。

しかし悟飯は振り返る事もせずに裏拳一発で迎撃し、振り向き様に回り蹴りを延髄に決めた。

アムズが派手に吹っ飛んで建物に突っ込み、倒れているアムズへ悟飯が一步一步近付いていく。

「すげえ、流石悟飯だぜ！」

「ああ。俺達も何か出来る事があるんじゃないかときてみたが……あいつは悟飯だけで十分そうだな。本当に見違えるほど逞しくなった」

悟飯の優勢をクリリンが喜び、天津飯もどこか悔しそうにしながらも悟飯を賞賛した。

「ちっ……あの時のチビガキが今やいっぱしの戦士か」

ナッパが口調とは裏腹に嬉しそうに語り、かつて自分達に怯えていた少年の成長

を喜んだ。

瓦礫を吹き飛ばしてアムズが突撃するが、悟飯は冷静にアムズの両手を掴んで突撃を止めた。

そして膝蹴りを顎に命中させ、浮き上がったアムズの上を取って回転……踵落としを脳天に直撃させて地面に送り返した。

起き上がったアムズが顔を上げると、すでにそこに悟飯はおらず、背後に立っていた。

「こっちだ、ウスノロ」

アムズが振り返ると同時に、悟飯は容赦なく追撃の蹴りを叩き込んだ。

【神の言語】

本当はカタカナにして逆さ読みにするのだが、面倒なので普通に喋らせた。なので冒頭の願いの部分は実際はちゃんと神の言語で話している。

そのうち修正するかも。

【戦闘力】

・魔人ブウ…2000億

バーストリミット30倍…6兆

戦闘力という点ではモロ相手では力不足。

モロとの差はサイヤ人編の餃子とベジータくらい大きいので正攻法では勝ち目0。

不死身の肉体と実質即死のおやつ光線でジャイアントキリングを狙う。

・孫悟飯…1兆8400億

潜在能力最強の男。キレれば大体何とかなる。

すぐに戦闘力が表面化するか、潜在能力として蓄積されるかの違いがあるだけで、割とブロリーの同類。何もしなくても無限に強さが高まり続けるバグキャラ。

・ゴテンクス…42億

超サイヤ人…2100億

超サイヤ人2…4200億

超サイヤ人3…1兆6800億

悟天&トランクス単体戦力は7000万。

数年かけての戦いごっこであっさりここまで来た。悟空に超天才と言われるだけはある。

・17号..1兆8000億

リゼットに潜在能力を引き出されて緊急参戦。

超17号にはなれないが、引き出せていないだけで膨大なパワーを眠らせていた事はGTでゲロが語っている。

その力を引き出されたので実質超17号のようなもの。

ただしエネルギー吸収能力と電撃地獄玉はミラにパクられたので使えない。

・タピオン..80億

バーストリミット10倍..800億

次期地球の神候補。普通に考えれば強いのだが地球の神としては不安の残る強さ。

……いや、一惑星の神ならこれで十分なのか？

・Mr。ポポ..10億

バーストポポ（20倍）…200億

・カリン様…10億5000万

バーストカリン20倍…210億

・兎人参化…2億

バーストラビット10倍…20億

第一線から引退して大分経つ。今回もかなり無理をして出てきた。

ところでこいつは元々獣人だったのか、アニマリンで獣人になったのかどっちなのだろう……。

・ナツパ…6億

黄金のヒゲ…300億

スパーク付きのヒゲ…600億

スパーク付きのフサフサヒゲ…2400億

かなり久しぶりの参戦。もう70歳超えのお爺さんなので正直きつい。

一応修行はしていたようだが、今となってはインフレ特急の最後尾にすら乗れない。

インフレ特急「いくらサイヤ人といったってよ、戦闘力2400億かそこらじゃ俺にとっちゃハエみたいなものだぜ」

・ 18号…400億

アニメでも17号に引っ張られるように謎に17号と同格のような扱いを受けていたがこのSSではついでにリゼットによる潜在能力解放を受けた結果17号ほどではないが超パワーアップし、悟空の普通の超サイヤ人くらいとならそこそこ戦える強さになった。

・ 天津飯…1億3000万

今でも欠かさず修行を積んでいる努力の人。とはいえ、流石にこれでは……。

・ クリリン…7500万

精神と時の部屋に入らなかったし、ブウ編以降は武道家引退してたから……。しかもこのSSでは今でも髪を生やしていて復帰していない。

一応警察業務で身体を鍛えたり、舞台裏で無我の境地なる技を身に着けたりと頑張っている。

・ ヤムチャ…打率9割

地球の誰もが知る野球界スーパースター。生きるレジェンド。

ミスターサタンと肩を並べるカリスマ性と人気を持つ。

ちなみに9割の理由は調子に乗って変なパフォーマンスを挟んで勝手に空振る事があるから。

戦闘力はクリリンと同じくらい。

・餃子…610万

置いてこい。

・ヒーローズアバター…8000億

発射された時点ではこの10倍以上の強さがあったのだが、本体からの気の供給が途絶えて二日経過したせいでかなり気が霧散して弱体化してしまっている。

かめはめ波だって宇宙空間にポンポン撃っているが、ずっと残り続けるわけではなくいつか霧散する（というかそうじゃないと大惨事）。

それと同じでヒーローズアバターも気の供給なしで日数が経つと劣化していずれ消えてしまう。

むしろ数日経過した上に術者本人が意識不明なのに気弾が消えずウロウロしてる

だけ上出来と思うしかない。

しかし、それにしてもリゼットが出した自律気弾にしては弱体化速度が速すぎる。

・モロ…80兆

星々を喰らい、自分の能力をコピーさせたセブンスリーを捕食したモロ最強形態。現状、地球残留の誰が出て相手にならないので不死身かつエネルギー吸収無効の魔人ブウをぶつけるしかない。

唯一相手出来るのはピッコロさんだが、そのピッコロさんでもエネルギー吸収能力のせいで打つ手がない。

・アムズ…????

やけに動きが悪い。

第32話 ワールドミッション

悟飯が一方的にアムズを攻め立て、アムズはロクに反撃も行えていない。

一見このまま悟飯が勝利してしまいそうな展開だが、戦いを見ているカリンは樂觀的に見る事が出来なかった。

あのアムズという敵の強さは計りにくいが、それでも感じられる存在感から考えればあの程度なはずがない。

それに先程からあれだけ悟飯の攻撃を受けているのに、ピンピンしているのも不気味だった。

「……………」

アムズの身体が光り、次の瞬間影をそのまま立体化させたような戦士達が出現した。

それも、ただの戦士ではない。あの力の大会に出場した第9宇宙の戦士達だ。

その先頭に立つフリーダーのベルガモが、まさかの増援に驚く悟飯の腹を蹴り、アムズから引き剥がした。

「ぐっ……！ あ、貴方達は……第9宇宙の……」

「悟飯よ気を付けるのじゃ！ どうやら奴は取り込んだ戦士を呼び出せるようじゃ！」

動揺する悟飯へ、カリンが警戒を促した。

続けて、ポポが影の戦士達を観察しながら話す。

「命の気配、感じられない。こいつら、本物じゃない」

「作り出された戦士って事か……まるでうちの神様みてえな事しやがる……」

ポポの説明を聞いて、クリリンがげんなりとしたように言う。

リゼットのヒーローズ・ゴッドミッションは実質無限に使い捨ての兵士を量産出来る技だが、敵になったら、あれほど厄介な技はない。

あの技の恐ろしさ、悪辣さを知っているからこそ、似たような技を使われるのは嫌でも緊張感が高まった。

「来るぞ！」

天津飯が叫び、同時に影の戦士達が散開して地球の戦士達に襲い掛かった。

真っ先に迎え撃ったのは、この中で悟飯に次ぐ実力を持つゴテンクスとナツパだ。

二人は一瞬で超サイヤ人3に変身し、敵の中心であるトリオ・デ・デンジャーズを相手取る。

他の七人の戦士をカリン、ポポ、人参化、天津飯、クリリン、ヤムチャ、餃子がそれぞれ相手にし、乱戦が始まった。

ウサギのような獣人の戦士と天津飯が衝突し、高速で繰り出される蹴りを天津飯も素早く防御しつつ反撃の手刀を叩き込む。

半魚人の姿をした戦士とヤムチャの狼牙風風拳が素早く交差し、連続して火花を散らす。

クリリンは蝙蝠のような戦士と空中戦を繰り広げ、手から糸を出す戦士は餃子の超能力で拘束していた。

力の大会出場選手といってもそのレベルはピンキリで、第9宇宙は第7宇宙に匹敵する治安の悪さの割に弱い部類に入る宇宙だ。

トリオ・デ・デンジャーズさえ除けば、地球人戦士達でも十分相手に出来る実力である。

そのトリオ・デ・デンジャーズも特殊能力にさえ気を付ければゴテンクスとナッ

パの敵ではない。

ナツパ渾身の拳打で防御したラベンダの腕が切断され、ゴテンクスに至ってはバジルとベルガモを同時に相手して尚、遊ぶ余裕があった。

「へっへーん、こっちこっちー！ おしりペンペーン！」

おちよくるように飛び回り、自らの尻を叩いて挑発までする。

地球戦士達の活躍に戦乙女達は大喜びで応援するように手を振っていた。お前等も戦え。

「ふうっ……妙な技を使った時は驚いたが、大した強さじゃなかったな」

増援の登場に一瞬驚いた悟飯だったが、仲間達でも十分対処可能と分かると余裕を取り戻した。

再びアムズへ意識を向け、構えを取り直す。

「今のがお前の切り札なら……勝てんぜ、お前は」

悟飯が勝利を確信したように言い、アムズに蹴りを放った。

吹き飛んでいくアムズに追いついて更にもう一発蹴りをお見舞いする。

ますます加速して吹き飛ぶアムズの背後に高速移動をして蹴り上げ、上空に先回

りして肘打ちで叩き落す。

悟飯の心に油断はない。リゼットも悟空も不在の今、自分が地球を守らなければならぬという強い責任感を持ってこの場に参じている。

愛する家族を守るため……この惑星の明日を守るために、一切の甘えを捨てて一氣に決める！

着地と同時にアムズと衝突して超高速の打撃戦——数秒に渡る攻防を制してアムズを殴り飛ばす。

「これで終わりだ！」

地を蹴って飛び出し、アムズの顔面に拳を叩き込んだ。

吹き飛んでいくアムズと離れるように連続で後方宙返りを繰り返し、右腕一つに全ての氣を集める。

「か、め、は、め……」

青白い氣が手の中に集約され、放射状に光が拡散される。

「波ああああああ!!」

十分に溜めたエネルギーが気功波となって発射され、アムズに直撃した。

かめはめ波が地面を削りながらアムズを運び、悟飯は地上に当ててしまわないように軌道を変える。

するとかめはめ波が空に向けて曲がり、アムズを上空へ運んでから大爆発を起こした。

確かな手応えに口の端を吊り上げ、空を見上げる。

これで倒せないにしても、大ダメージは間違いない。

煙が晴れた後にはボロボロになったアムズの姿があると信じて疑わず……だからこそ、煙が晴れたときに悟飯の笑みは消え去った。

「なっ……!?!」

——結果はまさかの、無傷。

そんなはずはない。そう思うも、現実としてアムズには傷が付いていない。

気功波を吸収する能力でも持っていたのか？　と思ひ、警戒度を僅かに上げる。そう思う悟飯の前でアムズは鈍い光を放ち、形が変わった。

それは、黒い戦士であった。

髪のように見える頭部に、セルに少し似た端正な顔立ち。

後頭部から伸びた数本の触手はまるで長髪のように足元まで伸びている。

引き締まった筋肉はケープ付きのゆったりとした衣装に包まれ、まるで聖衣を纏った修行者のようだ。

両耳はまるで鳥の翼のような形状をしており、そして何より目を引くのは背中では輝く紫色の光輪であった。

その姿は、ハッキリ言って悟飯達の知る『彼女』とは似ても似つかない。そもそも性別が違う。

だが所々に見える意匠は明らかに特定の人物を意識しており、嫌でもこの地球の守護者を連想させた。

「そ、その姿は……神様と同じ……？」

「……そうだ、地球の戦士よ」

アムズが——いや、アムズではなくなった何者かが答えた。

「改めて名乗ろう。私はシーラス。この世界の正義の弱さを嘆く者。この世の悪の根絶を切望する者。」

先程まですまなかった。内側からアムズを制御するのに専念していたもので、満

足に君の相手が出来なかった。君を無視してしまった非礼を詫びよう」

「なっ……!!」

その言葉は悟飯にとって衝撃的であった。

制御に専念だと？ 無視だと？ つまり……戦いだと思っていたのはこちらだ

けで、そもそもこいつは戦ってすらいなかったというのか？

屈辱に顔を歪める悟飯を気にせず、シーラスは続ける。

「そしてこの姿は、私の理想を限りなく体现する者を真似たもの……そう、君も知るこの惑星の神だ。

かつて彼女がこの星で見せた、悪を問答無用で浄化する絶対なる善の神としての姿……あれこそ、私の目指す理想、正義そのものだった」

「違う！ 神様はあの時の事を悔いていた！ 二度とあんな暴走をしてしまわないように必死に修行していたんだ！ 勝手な事を言うな！」

「とても残念な事だ。全ての悪を消し去り、心正しき者のみが生きる理想の宇宙を作り出せる力がありながら、彼女はそれを放棄してしまった。

いや、その事を責めはすまい。守るべき民を攻撃するまいとするその心もまた、

善なる者だからこそそのもの。ならばこそ、私が代わりに正義を遂行しよう」

シーラスの勝手な言葉に悟飯は怒りを顔に滲ませる。

「正義だと？ 他の宇宙や星を襲うのがお前の正義か！ お前達は何がやりたいんだ！」

「何者にも踏み荒らされる事のない、新たな宇宙の創生」

「新たな宇宙だと……？」

「そうだ。この宇宙からは神々を追放したが、それは通過点に過ぎん。私達は最終的に、全ての時間軸から神々を消したいのだ。そうでなければまた、ザマスのような救いがたい愚かな神が現れる……そして人々が踏み躪られる」

コアエリアの戦士達はこの時間軸から神を追放した。

追放された神々は時の指輪も取り上げたから、戻って来る事はないだろう。

だが別の時間軸からいきなり界王神や破壊神が飛来する可能性はまだ残っている。

それがあのザマスのような悪神だったら最悪だ。また人々が踏み躪られてしまう。

だからハーツとシーラスはその可能性も摘もうと考えていた。

……もつとも、この二人の間にも微妙な食い違いがあり、ハーツは『神のいない自由な世界』であれば別に悪人がいても構わないと考えているのに対し、シーラスは悪人も全て消したいと考えているし、用が済めばモロも消す事を決めている。

「私達の最終的な目標は、あらゆる時間軸から全王を含む神々を消し、そして私の目的は悪を根絶する事！ その為に我等は力を欲している……全ての時間軸を巡り、この手で全王すら殺せる力をだ！ だから私はお前達の力を取り込み、絶対の力を得なければならん！ 地球の神のように悪人を全て浄化し、全ての時間軸から神と悪を根絶し……そして最後には私もまた、最後の悪としてこの世から消えよう！」

「ふざけるなあ！」

あまりにも独善的なシーラスへの怒りで悟飯の気が膨れ上がり、今まで以上の加速でシーラスに肉薄した。

悟飯の拳がシーラスの顔を捉え、膝蹴りが腹を打つ。

「勝手な事ばかり言いやがって！ そんな事は僕が——」

怒れる悟飯の拳が更にシーラスを打つかと思われた直後、重い音が響いた。

音の出所は悟飯の腹だ。

シーラスの拳が深々とめり込んでおり、たったの一撃で悟飯は動けなくされていた。

「か……っ」

「許しは請わん。恨んでくれ」

シーラスが静かな声で言い、悟飯を叩き落とした。

悟飯は受け身も取れずに地面に激突し、二度三度とバウンドして地面を転がる。超サイヤ人ブルーに匹敵する力を持ち、あの力の大会にも参加した悟飯が一蹴された……その事実には、地球戦士達が啞然とする。

「見るがいい……これこそ、悪を一掃する力！——ヒーローズ・ワールドミッシェン！」

シーラスが手を掲げ、そして彼の宣言と同時に影の戦士が現れた。ラクス、カミン、オレン……先に倒れたコアエリアの戦士達。

トッポ、デイスポ、カーセラル……プライドトルーパーズ的面々。

リブリアン、カクンサ、ロージィ……第2宇宙の乙女達。

それらが影の戦士として顕現し、感じられる力の大きさに地球戦士達は絶望を感じずにはいられなかった。

★

モロの猛攻が魔人ブウを襲っていた。

休みなく繰り出される拳打、蹴り、気功波……そのどれもがブウを打ちのめす。一撃で腹がひしゃげ、振り下ろされた拳で頭部が陥没した。

続けて放たれた蹴りでブウが吹き飛び、岩に叩きつけられた。

しかしそれだけの猛攻を受けたブウは次の瞬間にはポヨン、とへこんでいた部分が元に戻ってしまう。

モロとブウの戦いは始まってからずっと、この展開が続いていた。

いくらモロが攻めようと、ブウは痛みを感じないしダメージも受けない。

ブウはニツ、と笑うと自らの腹を千切ってモロ目掛けて放り投げた。

ブウの肉片はドーナツの輪のようにモロの周囲に纏わり付く。

「ちっ……!!」

すぐに離れようとするモロだったが、そこに17号と18号の気弾の嵐が飛んだ。モロからしてみれば大した脅威ではない二人だが、先程からずっと疲れなど知らないようにこうして気弾でモロの邪魔をしてくる。

当たったところでダメージにならないだけの差はあるが、それでも煙を巻き上げられたり足場を崩されるだけでも面倒臭い。

「ギュッ!!」

そうして手間取っているとブウが奇声をあげ、同時に肉片がモロを縛った。

動きを封じられたモロにブウが突進して押し倒し、マウントポジションを取る。そして両腕が動かせないモロの顔面を右へ左へ好き放題に殴り始めた。

止めとばかりに触角からおやつ光線を発射するが、モロもこれだけは顔を逸らして避ける。

「ぐっ……調子に、乗るな!」

実力差にものを言わせて強引に拘束を引き千切り、ブウを蹴り飛ばした。

空を舞うブウに気弾を連射して穴だらけにしてやるも、着地したブウはやはり穴をあっさり塞いでしまいダメージがない。

物理法則も何もあったものではなかった。

気弾で消したはずの肉がどこから生えているのか全く分からない。

だがそれでも、モロにはここまでの戦いでブウの攻略法が見えていた。

「フン、大した不死身ぶりだな。だが……もう貴様の処分の仕方は分かった」

「？」

「二度と再生出来ないくらいバラバラにされれば、流石に復活出来まい！」

モロが飛び出し、目にも止まらぬ速度でブウを蹴り上げた。

一瞬で先に回り込み、ブウに掌を翳す。

驚いたようなブウにモロが薄ら笑いを向け、そして気功波発射……ブウの全身を吹き飛ばした。

バラバラになったブウの肉片がベチャベチャと地面に落下し、モロは勝利を確信した。

……が、その勝利の笑みは消える事となる。

何と、バラバラにした肉片の一つ一つが小さな魔人ブウとなり、起き上がったのだ。

「わーっ！」

「合体！」

歓声をあげて無数の小さな魔人ブウが一か所に集まりベタベタとくっついていく。

そして全てが合わさった後そこにいたのは、完全に元通りになった魔人ブウの姿であった。

「ブー！ 復活！」

「ちっ……出鱈目な生物め」

「へっへーん、俺凄いい！ 格好いい！」

腰に手を当てて、ないはずの鼻を高々と伸ばす魔人ブウの姿に、味方のはずの17号と18号も呆れ顔だ。

「やれやれ、呆れた不死身ぶりだ」

「あいつ、何したら死ぬんだい……？」

「さあな。だがあれが味方というのは頼もしい限りじゃないか」

17号と18号がブウのわけのわからない頼もしさを語り合う。

それから17号は名案を期待するように18号を見た。

「で、どうする18号？　不死身だから何とかやりあえてるが、実力差は割と絶望的だぞ」

「そうだねえ、ブウの攻撃も何発か当たってるけど全然効いちゃいないし……お菓子にする光線もあの分じゃ当たりっこないだろ」

「長期戦で勝てると思うか？」

「それより先に攻略法を見付けられると思うね。敵だって馬鹿じゃないだろ」
どちらも口にはしなかったが、ブウの殺し方は何となく見当がついていた。
バラバラにしても再生するならば、跡形もなく消し去ってしまえばいい。

そうすれば流石の魔人ブウも、どうしようもないはずだ。

当然この程度の事はモロだって思い至っているはずで、そして奴にはそれを実行するだけの強さがある。

魔人ブウもよく見ると冷や汗を流しており、決して余裕なわけではない。ただ余裕ぶっているだけだ。

「どうだブウ、勝算はありそうか？」

「……困った。ちょっと勝てない」

17号の問いに、ブウは正直に勝ち目がほとんどない事を明かした。

現状ブウは不死身的能力で善戦出来ている。

お菓子にする光線もあるので勝ち目がゼロというわけではない。

だがこのまま順当にいけばブウが負ける、というのがこの場における全員の共通見解だ。

「私達は援護くらいしか出来ないし……それも役に立ってとは思えない」

「困ったな、手詰まりだ」

「そんじゃ、切り札の出番だね」

18号が笑い、17号も頷く。

現状打開になるかもしれない切り札は持っている。

18号はポケットから耳飾りを出し、片方を17号に投げ渡した。

それは、先日ピッコロが界王神から託されたポタラだ。

ピッコロはこれを、地球残留メンバーの中で恐らく最も相性がいいだろう二人である17号と18号の姉弟に託していた。

「どうなると思う？」

「さあ？ まあ今より弱くなる事はないんじゃないかい？」

「だいたいがな」

幸いにして、この二人に合体への抵抗はなかった。

合体相手が自分の片割れとも言えるこの姉弟ならば悪くない、と両方ともが思っている。

ピッコロがこの二人に預けたのもそれが理由だ。

いざという時に合体を躊躇ったりされては困る。

「それぞれ別の耳に着けるんだったな。じゃあ俺は右だ」

「OK、私は左だね」

さしたる躊躇もなく、まるで普段と少し違うアクセサリーを付けるような気軽さで神のアイテムであるポタラを付けた。

その瞬間、17号と18号が引かれ合い、合体する。

二人が完全に一つとなり、そして立っていたのは17号を成長させたような男であった。

服装のベースは17号だが、肩の部分が露出している。

髪は金髪で、18号の髪形と同じであった。

もしこの姿をリゼットが見れば、GTの超17号に酷似した姿だと評しただろう。

「なるほど……こうなったか。名前は……そうだな、神がゲロの研究所跡から見付けたという俺達の本名を合わせてラピスラズリとでもしよう」

合体戦士——ラピスラズリは髪をかきあげ、愉快そうに笑う。

信じられないような力が自分の中から湧き上がるのが分かる。これならば戦える。

自信に満ちた笑みのままラピスラズリが地を蹴って飛び出し、ブウと戦っている最中のモロの横面を思い切り殴り飛ばした。

「ぬっ……貴様……!？」

「さあ、ここからは先程までのようにはいかないぞ」

モロが拳を放ち、ラピスラズリの頬を打つ。

だが、ラピスラズリは口の端から血を流しながらも余裕の笑みを崩さなかった。

彼は永久エネルギー式人造人間だ。痛覚は薄く、そして疲れはない。

すぐにモロに殴り返し、よろめいたモロの上にブウがのしかかった。

地面に倒れたモロの上でブウが何度も飛び跳ね、追い打ちをかける。

モロがブウを跳ね除けて口から破壊光線を打ち、ブウの頭を消し飛ばした。

だが直後にブウの頭が生え、お返しとばかりに口から光線を発射してモロに炸裂させる。

すかさずラピスラズリが飛び込み、拳と蹴りの乱打をモロに叩き込み、モロも応戦してラピスラズリの腹を殴って吹き飛ばした。

岩山に激突したラピスラズリだが、煙の中から出て来た彼はまるでケロッとしている。

その、ダメージを受けてるかどうか分からない姿にさしものモロも不気味さを感じずにはられない。

「ちっ……面倒な奴等だ……そっちの奴は大界王神に似てるというのが更に腹だたしい」

「……ダイカイオウシン？」

「お前に似てるデブだ。昔、俺の魔力を封印しやがった」

「……………」

忌々しそうに言うモロだったが、その言葉にブウが反応を見せた。

数秒沈黙し、それから何かを思い出したように不機嫌そうな顔になった。

「思い出したぞ…………お前、昔俺の友達をたくさん殺した悪い奴…………絶対許さない…………！」

「何を言って…………いや、まさか…………貴様本当に大界王神か!? 馬鹿な、何をどうしたらそんな姿に！」

ブウは大界王神ではない。だがブウの知性は彼を吸収して得られたものだ。

だからこそ大界王神という存在はブウにとって特別であり、大界王神の記憶を自分の記憶と混同していた。

いや、あるいはモロというかつての敵を前にして大界王神の記憶が覚醒したのかもしれない。

ブウは少しの間モロを睨んでいたが、この場にいない誰かと話すように一人でぶつぶつと呟きはじめ、そして頷いた。

「…………分かった、替わる」

ブウがそう言うや、彼の顔が……いや、姿が変わった。

顔立ちはほとんど変化していないが鼻がつき、頭はモヒカンに。

服装もあまり違いはないが、界王神と同じようなものとなっていて、明らかにブウとは別人であった。

「なにっ!? 貴様……大界王神!!」

「やあ、久しぶりだねモロ……相変わらず好き勝手しているようだけど……君を止める為に、ブウと替わって貰ったよ」

神が失われた世界に出現したブウ——いや、大界王神は温和な笑みを浮かべながら気を高めていく。

そして、展開についていけないラピスラズリはポカンとした顔をしていた。

【戦鬪力】

・孫悟飯… 1兆8400億↓5兆5200億（怒りでパワーアップ）

ちよっと怒るだけでパワーアップできる才能バグは健在。

しかし怒りが足りず、ワンパンKOされてしまった。

やっぱり目の前で16号の頭踏み潰してやらないと駄目か？

おめえの出番だぞ！ 16号！

・アムズ↓シーラス…60兆

様々な戦いのデータ＋取り込んだ戦士の力で大幅パワーアップしたアムズをシーラスが乗っ取った姿。外見は黒いシーラスだが、所々にリゼットのような意匠が追加されている。

ゲームでもやってきたように取り込んだ戦士を影として召喚するのでリゼットのゴッドミッションのような事が出来る。ついでにトッポの力も持っているので『破壊』も可能。

・トッポ（影）…2兆～30兆

・デイスポ（影）…1兆

・その他プライドトルーパーズ（影）…数百～数千億クラス

・第2宇宙メンバー…数百～数千億クラス

・ラグス（影）…1兆～2兆

・オレン（影）… 1兆2000億

・カミン（影）… 1兆2000億

シーラスに召喚された影の戦士達。オリジナルと同じ強さを持つ。

・ラピスラズリ… 55兆2000億

17号と18号が合体した事で誕生した戦士。

融合とはいうがぶっちゃけ、力の大半は17号のもので17号をポタラパワーで30倍の強さにしただけと言っても過言ではない。18号は添えるだけ。

とはいえ、力の差がこれだけあっても倍率マイナスがかからないのは、それだけ相性がよかったという事。

外見はヒーローズの18号を吸収した超17号そのまま。

外見がこうなった理由は18号がいい具合にヘルファイター17号の代用になったという事で。

しかし姿は超17号になっても、やはりエネルギー吸収と電撃地獄玉は出来ない。

・魔人ブウ↓大界王神… 1兆

太っているけど優しく温和な大界王神の記憶が目覚めた事で大界王神の強さも加

わって相乗効果で大幅パワーアップ。

（大界王神は南の界王神吸収純粹ブウを一蹴して即座に吸収を選ばせるくらいの強さ）

ただしブウではなくなったせいか普通にダメージを受けるようになったし、疲労もする。

ブウ特有の変な戦い方もしなくなった。

ついでにバーストリミットを習得したのはブウであって大界王神ではないのでバーストリミットもどっかいった。

弱体化じゃねえか！ さっさと戻れ！

漫画版でも絶対大界王神に主導権渡さずにブウのまま戦った方が強かったって…

…。

第33話 混沌の戦場

地球の戦士達は苦境に追い込まれていた。

シーラス本人どころか、彼が呼び出した戦士達すら地球戦士達にとっては遙か格上……本来ならばとても戦える相手ではない。

この窮地にリゼットの残した戦乙女達は頷き合い、数体が迎撃に飛び出し、残る数体が地球の戦士達に覆いかぶさった。

戦乙女達が実体を失ってクリリン達の全身を保護するように包み、クリリンはその力に驚く。

「こ、これは……？」

「す、凄い力だ。これなら俺達でも……」

今更だが、超サイヤ人ゴッドというのは神の気を纏ったサイヤ人であり、ブルーは神の気を纏った超サイヤ人だ。

そしてリゼットの残した戦乙女達は、当然ながら神の気そのものである。

それが全身を包んだ今、クリリン達は疑似的に超サイヤ人ゴッドに近い状態にあ

ると言っている。

即ち超地球人ゴッド！ あくまでこの瞬間のみだが、クリリン達全員が第一線でギリギリ戦えるだけの力を入れた。

「よし！ 行くぞ皆！」

「おおっ！」

タピオンの掛け声に天津飯、クリリン、ヤムチャ、餃子、人参化が応え、ナッパとゴテンクスも飛び出す。

デイスポの超速の乱打を三つの眼を持つ天津飯がかるうじて目で追い、必死に防御する。

ブライドトルーパーズ相手にクリリンとヤムチャ、人参化が応戦し、ゴテンクスとナッパがカミンとオレンを相手取る。

シーラスの振るう棍をタピオンが剣で受け、幾度も火花を散らした。

ラグスのガラス攻撃をカリンとポポが避け続け、残った戦乙女達が第2宇宙の戦士達を蹴散らす事でギリギリのラインでまだ戦いは成立している。

「みんな、目を閉じろ！ 太陽拳！」

クリリンが太陽拳を放ち、敵の目を晦ませる。

その隙に本家太陽拳の使い手であるが故に誰よりも早くクリリンの狙いを悟っていた天津飯が空へ飛んでいた。

「皆散れー！ 新気功砲ー！」

天津飯の指示で全員が四方に散開し、直後にザンツ！ という空間ごと削るかのような音と共に、シーラスを含む敵全てが気功砲に巻き込まれた。

神の気を纏う事で多少戦えるようになったが、所詮は下駄をはかせてもらっているだけだ。

元々の実力差がありすぎる以上、どうしてもこの戦いは不利になる。

だから天津飯はその差を少しでも埋めるべく、ここで命を捨てる覚悟で気功砲の連発に入った。

「はっ！ はっ！ はっ！ はあっ！」

天津飯の裂帛の叫びに合わせて、ザンツ、ザンツ、と気功砲が敵全体を襲う。

勿論天津飯だけに攻撃をさせたりしない。

気功砲を発射してから次の気功砲を撃つまでの僅かな間に割り込み、ゴテンクス

が攻撃に入った。

「連続死ね死ねミサーイル!!」

父ベジータ譲りの気弾連射で追い打ちをかけ、その間にクリリンとヤムチャ、餃子が気をありったけ溜めてナッパは大きく息を吸い込んだ。

「いくぞおー! 合わせろ、皆! 気功砲ー!」

「波あああー!」

「どどん波!!」

気功砲、かめはめ波、どどん波が同時に降り注ぐ。

ナッパは口から破壊光線を放ち、ゴテンクスもかめはめ波を発射した。

その全てが気功砲で空けた穴の中に飛び込み、大爆発を起こす。

これで倒せたとは流石に思わない。

だが、少しくらいは効いてくれたんじゃないかと淡い期待を抱く。

「な、何……全くの無傷、だと……?」

だが無情にも、まるでダメージが入っていなかった。

その理由はトッポだ。彼は『破壊』の力を前面に展開する事で、クリリン達の攻

撃を全て消してしまっていたのだ。

「ち、ちくしょう！」

クリリンが特大の気円斬を放つ。

だがこれも通じない。トッポの前に届くと同時に霧散してしまった。

トッポは感情のない目でクリリン達を見上げると、直後に彼等の前に姿を現す。

「は、速……」

トッポの巨大な拳が天津飯にめり込んだ。

彼を覆っていた神の気がダメージの大半を防いしてくれたが、それでも余剰ダメージだけで天津飯を失神させるには十分すぎる。

天津飯が地面に激突し、白目を剥いて動かなくなる。

「て、天さ……」

続けて餃子。トッポの手刀一発で吹き飛ばされ、天津飯のすぐ近くに墜落した。こちらもたったの一発で KO だ。彼は何が起こったかすら理解できないまま意識を断たれてしまった。

「こっ、この野郎ー！」

「よくも天津飯を！」

クリリンとヤムチャが怒りのままに飛び出し、トッポに拳を放つ。

だがトッポは一瞬で二人の背後に回り込み、拳の一撃で叩き落してしまった。

すぐに救援に向かおうとしたゴテンクスとナツパだったが、行く手を阻むようにシーラスが現れ、棍の一撃で弾き飛ばされてしまう。

タピオンが斬りかかるが、振り下ろした刃を指先で止められて腹に棍をめり込まれた。

人参化はカミンとオレンの二人がかりで袋叩きにされ、援護に向かおうとしたクリンとポポの道を塞ぐようにラグスのガラスが大量に降り注ぐ。

「い、いかん……力の差がありすぎる！」

「ミスターポポ困った……神様の留守を守れない」

カリンとポポは流石の技巧者ぶりで、今の所攻撃を一撃も受けていない。

だが戦いはいくら回避が上手くても、それだけでは勝てないのだ。

相手を倒すパワーがなければ、戦いに勝利する事は出来ない。

震える足で悟飯が立ち上がろうとするが、先程のダメージが大きすぎて膝をつい

てしまった。

そんな悟飯に、シーラスが掌を向ける。

「もう無理に立たずともよい。お前はよくやった」

シーラスの狙いは吸収であった。

彼が作り出し、そして現在同化しているAI生命体アムズは強い戦士を吸収すればするほど強くなっていく。

その在り方は皮肉にも、彼が道を踏み外す原因となった魔人ブウと全く同じだ。己の信じる正義の為に信頼を寄せてくれていた時の界王神を裏切り、一番憎んでいたはずの魔人と同じ事をする。

彼の正義はとうの昔に破綻し、歪み切っている。

それでも彼は進み続けるしかない。時の界王神と袂を分かった時に退路は失われているのだ。

「お前はここで消える。しかしお前の力は未来の正義を守るための礎となる。約束しよう……決して私はお前の犠牲を無駄にしないと」

「違う！」

シーラスの言葉に、悟飯が満足に動かない身体代わりに唯一動く口を動かした。追い詰められても折れる事のない闘志を宿した瞳でシーラスを真っすぐ睨む。

「僕は消えない。たとえここでお前達に敗れたとしても……いつの日か、僕の意味を継ぐ者が必ず立ち上がり、お前達を倒す！」

「……っ」

悟飯の真っすぐな視線を受け、シーラスが怯んだ。

悟飯の瞳の中には、歪み切ってしまった自分の姿が映っている。

シーラスは悟飯の中に、まだ時の界王神と共に歩んでいた頃の自分の姿を垣間見た。

ギリ、と歯を食いしばり、シーラスは叫んだ。

「消えるのだ！ どれだけ尊い意思を持っていようと……どれだけ正しく生きようと！ 巨大な力の前では一瞬で消されてしまう！ だから私は、二度とそのような事が起こらぬ理想の世界を作らねばなんのだ！」

シーラスが感情を露わにし、悟飯を吸収するべく掌を突き出す。

最早語る言葉はない。今はただ、一秒でも早くこの青年を目の前から消してしま

いたい。

何を吠えようと、何を信じようと、結局は力だ。力がなければ何も守れない。

シーラスの手が眼前に迫り、悟飯はこの直後に待つ己の喪失を実感して思わず目を閉じた。

——直後。

どこから飛来した一条の光線が螺旋を描きながらシーラスへ突き進み、咄嗟にシーラスは飛び退いた。

「……………!? い、今のは……………」

見覚えのある技に、悟飯が顔を上げる。

今の光線が飛んで来たのは、上からだ。

そこにあったのは、一つの高層ビル。悟飯は少しずつ視線を上げていき、頼もしい救援者の姿を探す。

そしてビルの頂点……先細りし、尖った先端の上に、彼の姿があった。

白いマントが風で逆方向になびき、姿を隠してしまっていたが、丁度いいタイミングで風向きが変わった事でその姿が露わになる。

マントをなびかせる、悟飯が心から敬愛する師……ピッコロ。

いつもと変わらぬ自信に満ちた顔で、腕組みをして彼が立っていた。

「ピッコロさん！」

「情けないぞ悟飯！　いかなる時であっても戦いを諦めるな！」

「は、はい！」

ピッコロがマントとターバンを外し、空に躍り出る。

するとトツポを始めとする影の戦士が集結し、ピッコロ一人を取り囲んだ。

だがそれでも尚、ピッコロの表情に不安や怯えはない。

「……出てきてしまったか、ピッコロ」

「仕方ない。ピッコロが来なければ全滅してた」

カリンとポポは上空を見上げながら不安そうに呟く。

ピッコロは元々、敵の大将が現れた時に迎え撃てるように待機していた。

それは、万全の状態のピッコロしか敵の大将に対抗出来る戦士がいなかったからだ。

つまりピッコロが出てきてしまったこの時点をもって、敵側のリーダーは完全に

フリー。どう動かれても誰も対応出来ない。

とはいえ、ピッコロが愛弟子の危機を放置していられるはずがなく、この事態はどのみち避けられない事だったのだろう。

「フンッ！」

トッポが『破壊』の力を纏わせたままピッコロにパンチを繰り出した。

だがピッコロはその拳を軽々と気で覆った掌で受け止め、凄まじい握力で逆にトッポの拳を押し返す。

「つあッ！」

そこから反撃。ピッコロの拳打がトッポの顔面を碎き、続く蹴りで吹き飛ばす。背後にデイスポが回り込んで蹴りを放つも、ピッコロの姿が消えてデイスポの頭に肘打ちを叩き込んだ。

カミンとオレンが同時に挑みかかり、ピッコロと高速の打撃戦を展開する。

だが一瞬の隙を突かれて手刀で弾き飛ばされ、今度はラグスがガラスの雨を降らせた。

その全てを軽快に避けながらラグスに接近し、蹴りでラグスの首をへし折る。

「はああああー!!」

ピッコロが叫びながら突進し、プライドトルーパーズへ仕掛けた。

プライドトルーパーズも迎え撃つが、ピッコロが手刀を薙ぐたびに面白いように吹き飛ばされていく。

今度は第2宇宙の戦士達。しかし結果は変わらず、手も足も出ない。

蹴り、殴り、落とし……そして悟飯は気付いた。ピッコロは全員を一か所に集めているのだと。

巨大化したリブリアンも一撃で沈め、まるで寄せ付けない。

影の戦士達は何とか立ち上がろうとするが、その前にピッコロが着地して気功砲に似た構えを取る。

「くたばれ……!」

——激烈光弾。

ピッコロの両手から放たれた気功波が影の戦士を纏めて飲み込み、抵抗も許さずに消し去っていく。

気功波は地球の大地を削りながら飛翔し、やがて宇宙へと飛び出し、消えていっ

た。

そうして取り巻きをあつさりと全滅させたピッコロはコキ、コキ、と首を軽く鳴らしてからシーラスへ視線を向ける。

「待たせたな。次は貴様があなる番だ」

「……なるほど、これは手強そうだ」

ピッコロが構え、シーラスも静かに棍を構える。

……シン、と場が奇妙に静まり返った。

強者同士が衝突する寸前特有の緊張感と静寂が場を支配し、普段なら気にならない風の音がやけに大きく聞こえる。

この場の誰も、あの戦いに割り込む事は出来ない。

それだけの圧倒的な差が、あの二人とそれ以外との間には存在しているのだ。

「……………」

「……………」

両者共に、呼吸すらせずに相手を凝視する。

このレベルの戦いでは一瞬の隙がそのまま死に繋がる。

ほんの僅かでも隙を先に見せてしまえば、次の瞬間には痛烈な一打を受けている事だろう。

緊張感が高まり——高まり——そして、膨らませすぎた風船が破裂するように、『その時』が来た。

「だっ!!」

果たして掛け声を発したのはどちらだったか。

両者が同時に飛び出し、中央で衝突した。

それだけで衝撃波が広がり、付近の建物が倒壊する。

ピッコロとシーラスは超高速の打撃戦を繰り広げながら空へゆっくりと浮遊していき、攻守を目まぐるしく入れ替えながら渡り合う。

そして互いの拳が、相手の顔面にクリーンヒットした。

★

大界王神の登場により、モロとの戦いは新たな局面を迎えていた。

憎悪を隠さず睨みつけるモロに、大界王神は両手を組み合わせ人差し指を立てると、その指先をモロへ向ける。

「さあモロ、大人しく銀河刑務所に戻るんだ。また魔力を封印されたいか」

大界王神の構えを見て、モロの額に冷や汗が流れた。

かつて宇宙を荒らし回っていたモロが魔力を失い、銀河パトロールに捕まったのもこの技を受けたからだ。

モロが強すぎて死刑執行すら出来ないような銀河パトロールが千年以上もモロを閉じ込め続ける事が出来た……と言えば、どれだけこの技がモロを弱らせていたか分かるだろう。

しかし、だからといってここで「はい分かりました」と戻るくらいならば最初から脱獄などしない。

それに今の宇宙にはモロを仕留めてしまえる強者が何人もいるのだ。

銀河刑務所に戻ったが最後、そうした強者による死刑執行が待っているのは明らかであった。

「冗談じゃない……折角得た自由を失ってたまるか！」

「なら仕方ないね……カイカイマトル!!」

大界王神の指から凝縮された神力が発射された。

本来の歴史では、大界王神は神の力を失っており、この術を使う事は出来ない。魔人ブウが分離した時、純粹ブウの方に神の力を持って行かれてしまったからだ。より正確に言うならば、本来の歴史の善のブウとはかなり特殊な条件下で発生した存在である。

まず善と悪に分離して悪が勝利し、善を吸収する。その後に体内の善のブウを引き千切られ、大界王神を吸収する以前の純粹ブウに戻る。

更にその純粹ブウが、善ブウと心を通わせたMr・サタンを襲い、中から善ブウが邪魔をし……それを不要なものと判断した純粹ブウが善ブウを『捨てる』事で本来の歴史の善ブウは発生した。

つまり正確には分離ではない、廃棄だ。純粹ブウにとって要らないものを捨てただけなのだ。

あくまで本体は純粹ブウの方であり、善ブウは切り離された老廃物に過ぎない。つまり捨てたのは『心』だけで『力』までは捨てていなかった。だから純粹ブウの方に力が残ってしまったのだ。

一方この歴史ではブウは分離を一度もしていない。

リゼットの『浄化』^{はかい}によって悪の心だけを破壊され、今のブウになっている。その為、大界王神の力が失われる事はなく、この封印術も使えたのだ。

「馬鹿め！ そんな技に今更当たるか！」

しかし今のモロはかつて大界王神と戦った時よりも強い。

素早く封印術を避け、大界王神を仕留めるべく突撃した。

大界王神はすぐに封印術の軌道を変えてモロを追尾させるが、明らかにモロよりも遅い。

このままモロが大界王神に攻撃を届かせる——その瞬間、ラピスラズリがモロを羽交い絞めにした。

「貴様……！」

「よく分からないが、アレはお前にとって嫌なものらしいな。なら、邪魔させてもらおうか」

「よせ、貴様も一緒に喰らうぞ！」

「生憎俺は魔力なんて持ってないんでな。元々ないものを封印されても別に何も困らないさ」

「よ、よせ！ やめ……ぐあああああー！」

封印術がラピスラズリごと、モロに直撃した。

ピンク色の光が月面を照らし、モロの絶叫が響く。

しかしモロは全身に力を籠めると、強引にラピスラズリを振り払ってしまった。更に気の解放で封印術までも弾き飛ばし、引き攣った笑みを浮かべる。

「ふ、ふふ……お、驚かせやがって……残念だったな大界王神……どうやら今の俺にそれは通じないらしい。俺が強くなりすぎたのか、それとも貴様が弱くなったのか……どちらにせよ、目論見は外れたらしいな」

「……！」

先程まで封印術を恐れていたモロだったが、効かないと分かった事で余裕を取り戻した。

ラピスラズリは起き上がりながら埃を落とし、残念そうに肩を落とした。

「何だ、効かないのか。それなら……ええと、誰か知らないが、ブウに戻ってくれないか？」

あいつとやり合うにはブウの不死身の身体が必要なんだ」

「……………」

ラピスラズリに冷たく言われ、大界王神は落ち込んだように無言でブウに戻った。少し可哀想だが、封印術が効かないならばもう出番はない。

戦況は再び元に戻り、モロが拳を握った。

「どれ、少しヒヤツとさせてくれた札をしようか」

「お札？ お菓子でもくれるのか？」

「もっといいものさ」

モロの言葉にブウが無邪気な反応を見せたが、勿論お菓子などくれるわけがない。モロが額の水晶に触れると、そこに第4宇宙の戦士——ダーコリの顔が映った。今の彼は捕食したセブンスリーの力により、首の後ろに手を触れる事で対象の能力をコピーする事が出来る。しかもセブンスリーと違って時間制限なしだ。

あらかじめセブンスリーにストックさせていたダーコリの能力を使い、己の気から札を生み出す。

その札をラピスラズリの影に投げると、影が縛られてラピスラズリが動けなくなってしまうた。

「なにっ……これは!？」

「そら、貰ったぞ」

動けなくなった隙にモロがラピスラズリの背後に回り込み、首を右手で掴んだ。すると右手の掌にある水晶に、ラピスラズリの顔が映り込む。

それをモロの額の水晶に合わせる事で、彼はラピスラズリの能力を獲得した。モロがコピーし、ストック出来る能力は三つまで。

そのうちの一つはモロ本人の能力なので固定として、ここまで役に立ってくれた幻覚能力を捨ててラピスラズリをコピー……同時に力も大幅に増した。

「ほう、無限のスタミナか。こいつはいい。お前の力、コピーさせてもらったぞ」
「おいおい……俺の永久エネルギーは能力じゃなくて機能だぞ。どういう理屈なんだ」

何とか影縛りから脱したラピスラズリは、あまりに不可解な現象に愚痴を零した。永久エネルギー式人造人間は、永久エネルギー炉を搭載しているから疲れないのだ。

つまり能力ではない。そういう道具を持っているだけに過ぎない。

今モロがやったのは、芭蕉扇を持っている亀仙人をコピーしたら自分も風が出せるようになったと言っているようなもの……明らかにおかしい。

体内の臓器が永久エネルギー炉と同じ仕組みになったとでもいうのか。

とにかく、理屈は不明だがモロという怪物がとんでもなく理不尽で規格外である事だけは理解させられた。

モロは続けてガミサラスの能力で透明になり、ブウの背後から首を掴んだ。
不味い、とラピスラズリは顔を強張らせる。

モロに魔人ブウの不死身の肉体や再生能力、魔法の数々が渡ったら最悪だ。もう誰も止められない。

だがモロは妙な手応えに顔をしかめ、ラピスラズリはブウを見て思わず笑ってしまった。

——首がなくなっていた。

本来首だったはずの場所はただのピンク色の塊となっており、首も顔も頭もない。

これではモロのコピーは成立せず、ただ無意味にブウに近付いただけだ。

そして驚くモロの前で、何とブウの背中から顔が生えた。

「ばあっ！」

「っ!!」

ブウが口から気功波を発射してモロを吹き飛ばし、元に戻る。

それからモロをおちよくるようにその場で「ホッ、ホッ、ホッ、ホッ」と奇声をあげながらドラミングをした。

「なるほど、これならブウの能力がコピーされる事はなさそうだ。よし、行くぞブウ」

「わかった！」

ラピスラズリとブウが突撃し、左右からモロに攻撃を仕掛ける。

どちらも単体ではモロに遠く及ばないし、ブウは本来ならば一撃で殺されてしまっただけの実力差が開いている。

だがブウはそもそもダメージを受けない上に、動きが出鱈目すぎて予測も出来ない。い。

加えて実力差があったのは先ほどまでの話。今は大界王神の意識が目覚めた事で彼の力も上乘せされてパワーアップしている。

ラピスラズリはモロにそれなりに近い実力に迫っており、何より疲れ知らずなのでこちらの相手も面倒だ。

二人の同時攻撃を捌きながらモロは考える。

なるほど、ハーツが警戒するわけだ。今の地球は主戦力のほとんどが他の敵と戦う為に離れており、地球に残っているのは力の大会にも出られなかった面子ばかりだという。

だというのにこの厄介さ……本来モロやブウのような者を破壊して宇宙の秩序を守るはずの破壊神ビルスがサボリ続け、危険な者ばかりが生まれて蟲毒のように殺し合い、その果てに強い者だけが生き残った結果だともいうのか。

モロは更に考える。正直、この戦いを続けても旨味が全くない。

何せこいつ等からはエネルギーを奪えないのだ。

エネルギーの吸収こそ何よりの至上と考えるモロにとって、これほど『美味しくない』敵は過去にいなかった。

——面倒だな。

ラピスラズリの能力はコピーし、ブウの能力はわけのわからない身体のせいでコ

ピー出来ない。

ならばもう、これ以上この二人と戦う意味はない。

それよりも地球の方が美味しそうな獲物が揃っているし、星というご馳走があるじゃないか。

彼の興味は完全に地球へ移り、最早この二人をいかに倒すかではなく、いかに撒くかに思考が移っていた。

そしてモロが今持っている能力は、まさにその望みを叶えるのにうってつけだ。「これ以上お前達と戦っても俺には何の得もない。悪いが、地球に行かせてもらおう」
「行かせるとでも？」

ラピスラズリの蹴りを右腕で防ぎ、気弾を地面に打ち込んで砂塵を発生させた。そして透明化能力により姿を消す。

所詮透明になるだけの子供騙しだが、それでも相手の視覚を騙すならばこれほど便利なものはない。

しかもラピスラズリもブウも、気の探知など出来ない戦士だ。

モロは悠々と二人から逃れ、地球へと向かって飛翔した。

それから遅れて、モロがいなくなった事に気付いた二人が地球へ向かう。

戦場は月から地球へと移行し、場はますます混沌としていく。

★

——リゼットは夢を見ていた。

クウラとの戦いで全ての力を使い果たしたリゼットは、あの世へ続く雲の道をゆっくりと歩いていた。

死ぬ事への抵抗は別になかった。

そのうち悟空達が生き返らせてくれるだろうと思っていたし、それならばちょっとした休暇だ。

世界の危機を彼らに押し付けてしまうのは神として情けないと思うが、自分に一生懸命頑張ったのだし、ちょっとくらい休んでも怒られはしないだろう。

そう思いながらあの世へ続く道を歩みだし——彼女の前に一人の女性が現れた。「リゼットちゃん、残念だけど貴女が今来ても、あの世は迎え入れてくれないわよ。私が止めちゃったからね」

それは、時の界王神だった。

だが以前に見た幼い姿ではない。背中には時計の針のような光輪を背負い、黄金に輝く大人の女性の姿を取っていた。

リゼットは知らないが、これこそ時の力を解放した時の界王神の本気の姿だ。

彼女はどこか疲れたような気配を漂わせており、大分消耗しているように見える。

「え？　なんだか疲れてるように見えるって？　そりゃそうよ……ハーツ達ったら

閻魔君まで他の時間に送っちゃったんだもの。このままじゃあの世から死者が蘇って大惨事になっちゃうから、私が介入してあの世を『時』の中に閉じ込めたわ。これで何とかあの世から死者が復活するのは阻止出来たけど……止めちゃったから、新しい死者を迎え入れる事も出来ないのよね」

あの世の時間丸ごと停止とは、流石は時の界王神である。

リゼットも時間停止は一応出来るが、規模が違う。

彼女の御業を褒めると、時の界王神は誇らしげに笑い、胸を張る。

普段の彼女ならべったんこで様にならないが、今は十分様になっていた。

「あの世が停止している今、死者はあの世に入る事も出来ずに正常に戻るまで待ち続けるしかない。けどリゼットちゃん……特殊な性質を持つ貴方なら、多分今なら

戻れるはずよ。

十分頑張ってくれた事は知っているけど……お願い。シーラス達を止めるために、もうちょっとだけ力を貸して」

時の界王神にそう言われ、リゼットは微笑んで頷いた。

そして、そこで目が覚めた。

ひとまず、状況は把握している。

自分でも理屈は分らないが、心臓病にかかった時の悟空も夢で状況を把握していたので似たようなものだろう。

今、この世界からは神が失われ、人々が必死に戦っている事もリゼットは知っていた。

自分が対象外になった理由は、願いの叶え方が悪かったからだろう。

ハーツは『この世界に生きる』と言ってしまったので、その時点で実質死んでいたりゼットだけは対象にならずこの時間軸に残ってしまったのだ。

そうして数少ない例外となった自分があの世に行って休むのは、確かに少しばか

りが休まらない、とりゼットは思った。

それにこのまま死んでしまえば、それは相打ちだ。

クウラの望んだ通り殺されてやるのは、ちょっと気に入らない結末である。

だからリゼットは、あの世が麻痺しているのをいい事に現世に帰還した。

本人が死んでないと言い張って目を覚ました。なので死んでない、最初から生きていた。ちょっと生死の境をウロチョロしてただけだ。

自己弁護、理論武装完了。精神的大勝利である。

リゼットの中のイマジナリークウラが『認められるか！』とキレ散らかしているが、気にはしていない。

まだ戦いは続いている。きつと地球では皆が頑張っている。

ならば、もうちょっとだけ頑張ってみよう。

(……あー……うん……声、出ないですね……)

目を覚まして、己の身体の状態を確認する。

治療カプセルの中にいるので怪我はもう治っているはずだが、全身が何故か痛い。声も出ないし、指一本も動かせない。

遅発性乱気症の更に酷い版だろうか。

クウラから受けたダメージはしっかりとリゼットを戦闘不能に至らしめ、今も復帰を許してくれない。

折角目を覚ましたのに、これじゃ役立たずだ。

(地球に残しておいた自律気弾は……凄く弱ってるけど一応ある……)

保険として地球に残してきた自律気弾はリゼットが瀕死だったせいかな、思った以上に消耗してしまっているが一応健在のようだ。

今のリゼットは気を出す事すら出来ないが、既に出している気に命令を下すくらいは出来るかもしれない。

気を抜けばすぐに睡魔に負けてしまいそうな微睡の中で、リゼットはこの状態で作れる事はないか……時折寝落ちしながら、思考を巡らせていた。

地球「俺のそばに近寄るなァー!!」

Q、ブウって気の感知できなかったっけ？

A、出来るのは悪ブウと純粹ブウ。デブのブウは神殿にすら気付けなかった。

Q、リゼットは教えてあげなかったの？

A、一応少しは教えてるが、基本的にブウは自分が興味のある事にしか取り組まないで……。

【超神龍の判断】

超神龍「身体は生きてるみたいやけどワイの眼は誤魔化せんで。これ死んどるわ。つまり願いの対象外や」

Q、どうしてハーツ君は願いを叶える時にこの世界に「生きる」とか言っちゃったの？

A、もしリゼットが生きていた場合はこの願いで厄介なりゼットを追放し、もし死んでいた場合は残ったところで別に脅威ではないと考えてこう願った。また、もし死んで残った場合はアムズに取り込む事も出来る。

つまりどっちに転んでもハーツ的には美味しい結果になるはずだった。

そうやって欲張った結果、追放の願いの対象外になりつつあの世が麻痺していたせいであの世に入れず戻ってきた。

欲張ったらダメだって自分で言ってたのに……ハーツ……。

【戦闘力】

魔人ブウ…2000億↓1兆

バーストリミット 30倍…30兆

大界王神の覚醒により基礎戦闘力が大幅上昇した。

これでもまだモロには及ばないが、大分レベルが近付いた。

時の界王神（時の力解放）…30兆…？…？…？

時の力を解放したクロノア。お前本当に界王神か？　と言いたくなるほど強い。

作中では話の都合上敵に負ける事が多いが、超サイヤ人ブルークラスの戦いに平然と参加したり、超サイヤ人4ゴジータと肩を並べて戦ったりと、冷静に考えるとおかしい事をしている。

また、彼女の先輩にあたるアイオスは身勝手（兆）の悟空と渡り合っており、クロノアはそのアイオスと同程度の力を持つと考えると本当はもっと強いかもしれない。

（直接対決ではクロノア側に戦意が一切なかったので負けている）

モロ…107兆

ラピスラズリをコピーし力を増した。

ストック出来るのは三つまでなので、幻覚能力を捨ててラピスラズリの能力をコピー。

セブンスリーはあくまでその時メインに使ってる能力者の戦闘力をコピーするだけだったが、モロはどういうわけか全部同時に使っている。魔術ってすごい。

一応上昇は少しだけ緩くなっている。

(漫画版でもメルスをコピーした割にそこまで強くなっていなかったの)

疑似地球人ゴッド…+8000億

自立気弾の戦闘力が上乘せされる。以上。

ちなみに同様の方法で悟空達をパワーアップさせる事は一応可能だが、悟空達レベルになると彼等が気を解放しただけで纏わりついている自立気弾が吹っ飛んでしまう。

要するに自立気弾がバリアのように身体を覆っているだけなので、内側からそれ以上の気が発生したら吹っ飛ばされてしまい、結局何の意味もない。

あくまで『自立気弾を吹っ飛ばせないくらいの格下に下駄を履かせて無理矢理自立気弾レベルの戦闘力を与える』程度のバフでしかない。

Q、これ、性能的にはリセットがクリリン達を再現して自立気弾作れば何も変わらないんじゃないか……

A、そうだよ。

Q、自立気弾が身体を覆う事で強くなるというけど、何でそれで気功波系の威力まで上がってるの？

A、纏っている自立気弾を消費してるから。なので天津飯の気功砲連射は自分を守ってくれている自立気弾をガンガン削ってしまっている。

Q、大界王神何しに出て来たん……？

A、でも大界王神様は太っていたけどやさしく温和だから……。
一応カイカイマトル当てたし、役目は果たしたかなって。

第34話 逆転の光明

ピッコロとシーラスが戦っているすぐ近くに、新たな襲撃者が大地を砕いて着地した。

それはブウと17号、18号が足止めしていたはずのモロだ。

この男だけは絶対に地球に降下させてはいけなかった。

何故なら、地球に降り立ったその瞬間から星のエネルギーを吸い上げ、そこに暮らす生き物のエネルギーも吸われてしまうからだ。

エネルギー吸収といえば過去に戦った人造人間19号と20号が思い出されるが、あんなレベルではない。

モロの吸収は直接触れていなくても発動する。対峙しただけで常に19号に掴まれているのと同じ状態になるのだ。

咄嗟にブルマが影響を最小限に止めるべくバリアを二重に張り直すが、これもどこまで被害を抑えられるか分からない。

何より、バリアの内側にいるピッコロ達がエネルギー吸収を受けるのを避ける方

法がなかった。

「モロ……来たか」

「アムズ……か？ 随分姿が変わったな」

「アムズではない。今の私はシーラスだ、覚えておけ」

シーラスがあらかさまな敵意を隠さずにモロを睨み、そのような視線を向けられる覚えのないモロが不快そうに顔をしかめる。

「何だ？ 俺に何か言いたい事でも？」

「……いや、何でもない」

シーラスの最終的な目的はこの世の悪と、愚かな神の根絶である。

当然モロも例外ではない。

今はハーツの意向で共闘関係にあるが、シーラスはモロを仲間と思っていなかった。

ハーツはいい意味でも悪い意味でも大らかだ。

あくまで最優先目標は全王含む神々の排除であり、その目的さえ達成出来てしまえばその後の事は考えていない。

ハーツの目指す『自由』とは何も平和な世の中を指すのではない。

人の愚かさも含めての自由なのだ。

だから神がいなくなった後に人同士で滅ぼし合おうと構わない。

仮にクウラガリゼットに勝利して全宇宙がメタルクウラに滅ぼされたとしても、

それはそれで人の自由な選択の結果として喜んで受け入れただろう。

無論、滅びよりは人が生き続ける世界の方がいいので目指せる範囲内でいい結果になるように努力するが、それでもハーツの在り方は矛盾に満ちていて危うい。

だからモロのような見えている爆弾であつても『愛するべき人』として迎え入れてしまふ。

ハーツは決してモロが裏切らないと思っっているわけではない。

神を消した後ならば別に裏切られてもいいさと思っただけなのだ。

モロが世界を食いつくしてしまつても、それもまた人の選んだ未来。自由な選択だ。

そんなハーツの在り方をシーラスは決して嫌いではない……だが、その点に関しては譲れない。

悪の存在しない平和で優しい世界の方がいいに決まっている。

だからモロの役目が終われば、たとえハーツが止めてもすぐに殺すと決めていた。だがそれは、今ではない。

「まあいい。折角美味そうな奴等が揃ってるんだ。エネルギーを頂くぞ」

モロが笑みを浮かべ、エネルギーの吸収を発動した。

シーラスを除くその場の全員を脱力感が襲い、ピッコロはモロを止めるべく咄嗟に飛び出す。

だがモロはピッコロの攻撃を余裕をもって受け止め、ピッコロの背後に回り込んで首を掴むと、反撃の蹴りで弾き飛ばしてしまった。

「ちっ……！」

何とかダウンせずに着地するが、こうしている間にも力が抜けていくのが分かる。これは非常に不味い事態だ。こうなるのが分かっていたから、モロだけは何とか月で足止めしようとしたのに、失敗してしまった。

形勢は完全に傾き、いかにピッコロでもここからの逆転は厳しい。

遅れてブウと見知らぬ戦士——外見からして17号と18号が合体した戦士とすぐ

に分かった——が着地し、モロが嘲笑いながら振り返った。

「来たか、間抜け共。だがもう遅い……貴様等に勝ち目はないぞ」

「ちっ……！」

ラピスラズリが歯噛みするが、残念ながら事実であった。

そもそも戦闘力でモロとアムズはこの場のほぼ全員より格上なのだ。

唯一対抗出来るピッコロはエネルギー吸収で弱り、ブウもラピスラズリもこの二人を倒すには至らない。

しかもモロはピッコロをコピーした事で更に力が増している。

まさに絶体絶命……だが、救援者は意外な場所から現れた。

——上空から、二人の男が降ってきた。

一人は黒いコートを羽織った紫色の異星人。第6宇宙最強の殺し屋、生ける伝説。百発百中のヒット。

もう一人は灰色の身体を赤いスーツで包んだ第11宇宙最強の正義の化身。灰色のジレン。

ヒットが不意打ちでモロの目の前に出現して顔面を殴り、ジレンが急降下して

シーラスの頭を掴んで地面に叩きつけた。

そのまま返す刀でモロの頭部を殴打——額の水晶を破壊する。

この一撃でモロが持つセブンスリーのコピー能力が機能停止し、せっかくコピーしたラピスラズリとピッコロの力が失われてしまった。

「お前達は……ヒット！ ジレン！ 何故ここに!？」

「仕事だ」

「仲間を取り戻しに来た」

ピッコロの疑問に、それぞれが簡潔に答えた。

神々がいない今、宇宙から宇宙へ渡るのは難しい。

しかし界王神界で治療を受けていたヒットは回復すると同時に神々の乗り物である『キューブ』を無断借用し、同様にジレンもベルモッドのキューブを勝手に使って第7宇宙へ飛来……二人はこの宇宙で合流を果たしていた。

モロはよろめきながらもヒットとジレンを睨み、シーラスも何とか立ち上がる。

「ぐ……新手か。だが誰が来ようと同じ事！」

モロがエネルギーの吸収を再び使用し、ヒットとジレンの弱体化を図る。

だが二人の顔色は変わらない。

ヒットはいつも通りの無表情で、コートのポケットに手を入れたまま無防備にモロに近付き、ジレンは全身に力を入れ……呆れた事に、身体から出て行こうとする気を無理矢理留めた。

そして次の瞬間、モロは背後から見えない拳を受けてよろめいた。

「どうやらその吸収能力も並行世界までは及ばないようだな」

攻撃を繰り返したのはいつの間にか後ろに移動していたヒットだ。直後に目の前にいたはずのヒットが消え、前にいたのは幻影だったとモロは理解した。

ヒットは時飛ばしの応用で並行世界を作り出し、その中に逃げ込む事が出来る。その力で彼はモロの吸収を上手く避けていた。

ヒットを厄介と見たモロが反撃に出ようとするが、次の瞬間にジレンの拳が頬にめり込んで地面に叩きつけられた。

あまりの威力に角がへし折れ、地面を砕いてバウンド………浮き上がった所で今度はアップー。

モロの身体がまるで車輪のようにグルングルンと廻り、血飛沫を撒き散らす。

「が……あっ！」

モロが地面を削ってダウンし、何とか顔を上げる。

すると、そこにはゴミを見るような目で見下ろすジレンの巨体があった。

「ハーツを出せ。雑魚に用はない」

「雑魚だと……この俺が、雑魚だと!？」

ジレンから下された評価に腹を立てたモロが痛みを無視してジレンの顔面に拳を叩き込んだ。

……が、無傷。

ジレンは表情一つ変える事なく、モロの渾身の拳を平然と耐えてみせた。

そこからアップ。ジレンの巨腕が腹にめり込み、モロの背中がそのまま突き破られてしまいそうなほどに盛り上がる。

「お前は雑魚い。お前の拳からは何一つとして、積み上げたものが感じられない」

「ご……お……っ」

吐瀉物混じりの血を吐き出し、モロが悶絶する。

更に追い打ち。両手を組み合わせてモロの頭部を砕かんと力を籠める。

だがシーラスが割り込んで棍を叩き込み、ジレンを弾き飛ばした。

ジレンは空中で一回転すると着地し、つまらなそうにシーラスを見る。

「誰かと思えば、あの時の負け犬か。より下らん姿になったな」

「何とでも言うがいい。全ては私の目指す正義の為……邪魔をするならば貴様もここで始末する」

「悪と手を組むのがお前の正義か。薄っぺらい、何の価値もない正義だ。

己の正義に自信がないからそうして、自分より正しく見える『誰か』を真似る。その姿こそまさに、お前の薄さの象徴そのもの……お前は所詮その程度だ」

ジレンが飛び込み、シーラスを正面から殴り飛ばした。

一瞬で追いついて更にもう一発。一撃で骨が軋み、無力感を問答無用で味わわせる。

シーラスが空中で体勢を立て直して気功波を放つ。

だがジレンは片腕だけであっさりと気功波を弾き飛ばし、つまらないものを見るようにシーラスを見上げた。

「……黙れ！ その余裕もここまでだ！ ヒーローズ・ワールドミッション！」

シーラスの使用した技を、ジレンは僅かに警戒したように見る。

力の大会で、第 7 宇宙の地球の神が使用してきたあの技はよく覚えている。

正直に言って、恐ろしい技だった。

あの時は大会という性質上、リゼットとジレンとの距離が近かったから突破出来たが、例えばお互いが視認出来ないくらい遠い位置からあれをやられてはどうしようもない。

そしてシーラスが呼び出したのは数えるのも嫌になるほどの大勢の戦士だ。

かつて第 9 宇宙が第 7 宇宙を襲撃する際に派遣した数多の戦士達……それを前にジレンは無表情で正拳突きを放つ。

それだけで全ての戦士がひしゃげ、吹き飛ばされて消滅した。

「無駄な事は止めろ。魂なき人形の拳など俺には届かん」

「……化け物め！ ならばこいつはどうだ！」

生半可な戦士を出してもジレンには通じない。

ならばとシーラスが呼び出したのは、以前にジレンが仕留めたはずの悪のサイヤ人、カンバーであった。

「俺と戦ええええええ！」

「……またこいつか」

カンバーが超サイヤ人3となり、ジレンが迎え撃つ。

ヒットとラピスラズリがモロの相手をし、再び戦いの天秤は均衡を取り戻したが、均衡では駄目だとピッコロは考えた。

後一手いる。この戦況を変えるために、もう一人、モロの吸収を無効化出来るとびきり強い戦士が必要だ。

だからピッコロは、その切り札となりうる仲間に声をかける。

「ブウ！前に伝えておいた作戦は覚えているな！」

「覚えてる。本当にやっていいのか？」

「ああ！」

ブウはピッコロの指示を受け、一度戦場から離れてピッコロ達の前に降り立った。それから魔術で全員の怪我を癒し、起き上がった悟飯達を見る。

「やったら今の俺じゃなくなる。悪い奴になるかもしれない。約束守らないかもしれない。それでもいいか？」

「……大丈夫です、ブウさん。僕達は貴方を信じてますから」

ブウの確認に悟飯達が頷き、ブウを見る。

それを聞いてブウも決心したようにゆっくりと頷き、自らの腹を千切った。

千切られた肉片は巨大化・分散して悟飯達へ飛びつき、抵抗しない彼等を優しく包み込んでいく。

そして、慌てて逃げ出した自律気弾を除くその場の全員が魔人ブウに――吸収された。

「うおおおおおおお!!」

ブウが吠え、頭から煙を出して全身が包まれる。

急激に高まる気にジレン達も戦闘を止め、思わずブウの方を見た。

そして煙の中から何かが歩み出し、次の瞬間モロとシーラス、カンバーを殴り飛ばした。

三人に攻撃を加えた何者かは両手を広げて己の姿を見せ付ける。

それは、魔人ブウであった。

だがただのブウではない。身体は今までの肥満体形から戦闘に特化させた引き締

まったものへ。

服装はピッコロの紫の胴着を引き継ぎ、顔つきも端正なものへ変わっていた。

新生魔人ブウは胴着を引き千切って引き締まった上半身を惜しみなく晒しながら、不敵に笑う。

「……どうかな諸君。無事作戦成功だよ。見たまえ、素晴らしいだろう？

この瞬間こそ未来においても二度と現れぬであろう最強の魔人の誕生だ」

圧倒的な力を漲らせる新生ブウに、シーラスが露骨に憎悪したような顔を見せた。そして戦士の追加はまだ終わらない。

取り残されてしまった自律気弾達であったが、彼女達は突然雷に打たれたように反応すると、一瞬の硬直の後に突然一か所に集まり始めた。

分散しているよりも一つになる事で、強力な一人になった方がいいと判断したのだろうか。

組み合わさったその姿はやがて、ジレン達もよく知る一人の少女と同じものへと変わっていく。

自律気弾が合わさり、その場に出現したのは気で作り出された偽りのリゼットで

あった。

ジレンは驚きに目を見開き、声をかける。

「……お前は」

『……どうやら、地球はかなり不味い事になってるみたいですわね。私自身はちょっと動けないんですけど、何とか残しておいた気弾の操作くらいは出来るみたいです』

「第7宇宙の地球の神……か……久しぶりだな」

『ええ、お久しぶりです。といっても、これはラジコンみたいなもので私自身は神殿にいるんですけどね。びっくりしましたよ。目が覚めて地球を視てみたら、とんでもない事になってるんですから』

これはただの分身リゼットではない。正真正銘、リゼット本人が操作している分身であった。

リゼットはつい先程目を覚ましたが、彼女自身はクウラとの戦いの後遺症によって戦う事が出来ない。

しかし事前に地球に残しておいた氣に命令を出すくらいはかろうじて出来る。

遠視によって地球の危機を知ったりゼットは慌てて残った自律気弾を全て融合させて己の分身にしたのだ。

モロのエネルギー吸収をバリアで遮断し、ジレン、ヒットにも同様のバリアを張った。

『さてと……本体でなくて申し訳ありませんが、地球の危機に私が何もしないわけにはいきません。』

微力ながら援護させていただきます』

「いいだろう。お前の厄介さは俺もよく知っている。味方になるならば頼もしい」
『あはは……所詮これは分身なので、あまり期待はしないで下さいね』

緊急参戦した分身リゼットを、ジレンはすんなりと受け入れた。

リゼットの厄介さは、あの力の大会で実際に戦ったジレンがよく知っている。
敵ではなく味方だというのなら、これほど有難い存在はいない、とジレンは思っていた。

「どうやら風向きが変わったようだな。これは俺も楽しさせてもらえるかな？」
『17……いえ、超17号？　でも髪が金髪？』

「ラピスラズリとでも呼んでくれ」

『では、ラピスラズリと……すみませんが、まだ楽は出来ないと思います。力を貸してくれませんか？』

「やれやれ、人使いが荒いな。まあいい、後でたつぷりと対価は請求させてもらおうぞ」

『お手柔らかに』

ラピスラズリも一行に加わり、五人は宇宙の侵略者を倒すべく前を見据えた。

『では、行きますよ！』

「ああ！」

「応！」

「……仕事を開始する」

「報酬はクルーザーがいいな。それとも現金にするか？」

リゼット、ブウ、ジレン、ヒット、ラピスラズリが飛び出した。

敵はシーラスとカンバー、モロの三人。数の上では五対三だが、油断は出来ない。カンバーとジレンが正面から組み合い、ブウは憎悪を漲らせながら突撃してきた

シーラスを相手にする。

ラピスラズリとヒットがモロの行く手を阻み、分身リゼットはモロとの相性が悪過ぎるのでシーラスの方へ向かった。

「魔人ブウ！ 宇宙の悪が！ 私は貴様の存在を決して認めん！」

「フハハハハ！ 随分嫌われたものだな。だが生憎私は貴様など知らんぞ！」

シーラスの繰り出す棍を余裕の表情で捌きながら、ブウは彼の憎悪に若干困惑していた。

とはいえ、心当たりなどそれこそ星の数ほどある。

大方、知性を獲得する前に破壊してしまった星の生き残りか関係者だろうと当たりを付けた。

リゼットが横からシーラスの膝裏に蹴りを加えて体勢を崩し、何とか踏み止まろうとした力を逆用して投げ飛ばす。

「ぐっ……この程度！」

シーラスがリゼットに棍を突き出すが、リゼットはそれを軽く受け流す。

そして軽く力を加えて逆に棍でシーラスの顎を打ち、そのまま強奪してしまった。

『いい武器ですね。借りますよ』

捻りを加えてシーラスの喉を突き、咳き込んだ所を狙って頭部を強打。

殴った勢いのままに棍を回転させてもう一度強打し、地面に沈めた。

シーラスは転がるようにしてリゼットとの距離を空けて気弾を発射……しかしリゼットは棍を回転させてその全てを弾き飛ばしてしまう。

「なっ!？」

『よっと』

驚くシーラスの前で棍を地面に突き立てて棒高跳びのように跳び、蹴りを顔面に叩き込む。

咄嗟にシーラスがストレートパンチで反撃するが、今度は棍で回転させるようにして拳を叩いて軌道を逸らし、シーラスの注意が棍に向いているのを利用して蹴りで膝を打ち抜く。

よろめいた瞬間にまたしても棒高跳び。今度は垂直に跳び、頭上から急襲した。シーラスは咄嗟にガードするが、その隙にブウが横から殴り飛ばす。

起き上がる寸前にリゼットが棍で襲撃。シーラスも反撃するが、リーチの差で一

方的にリゼットの攻撃が命中する。

更に棍を超高速回転！ あまりの速度に摩擦熱が生じ、炎の輪を生み出す。

そのまま炎の輪を射出し、シーラスをガードの上から炙った。

しかし炎はただの目晦ました。ガードしたままのシーラスの股を蹴り上げて空中に飛ばし、リゼットも跳躍。

気で構成された身体を活かして右腕が巨大なドリルに変形し、シーラスの顔を狙って高速回転しつつ突き出された。

シーラスは肩を僅かに削られつつ咄嗟に回避し、反撃の気弾を連射する。

しかしリゼットは人型を捨ててスライムのような形状に変化し、人では絶対不可能な蛇のような動きで気弾の嵐を回避し、元の姿に戻った。

「ぐっ……何故だ……絶対の正義を遂行出来る力がありながら、何故お前は、悪の存在を許している！ 私が望んでも得られぬ力を持ちながら、どうして！」

『絶対の正義ですか。その考えは危険だと私は思いますけどね』

「危険だ?! 貴様も……貴様までもが時の界王神と同じ事を言うのか！」

シーラスにとってリゼットという神は、まさに彼の目指す理想の到達点であった。

宇宙全域を攻撃範囲に含め、あらゆる悪を強制的に改心させてしまう『破壊』を振りまく、善の化身。

常に悪人ばかりが強い力を持ち、好き勝手に暴れ続ける第7宇宙という魔境にやっと生まれた全てを変え得る奇跡。そう思えた。

そしてシーラスにとって、魔人ブウという存在はまさに理想の墓場であった。

かつて初代タイムパトローラーであった彼は、純粹だった頃の魔人ブウに殺されそうになっている子供を助けた。

だがその子供が住んでいた星はブウによって破壊され、結局助ける事が出来なかった。

シーラスにとって魔人ブウとはまさに、第7宇宙という魔境を体現する悪の化身そのものののだ。

そしてシーラスは理想を捨て、歪んだ正義に生きるようになった。

そんなリゼットとブウが手を組んで、地球を守る為に己と戦うという悪夢……シーラスはおかしくなりそうだった。

どうして魔人ブウが守る側にいる？ どうして自分は……あんなにも憎んだ『悪』

と同じ事をしている？

シーラスはもう、自分が何をしているのかすら見失いかけていた。

一方モロと戦っていたヒットとラピスラズリは、モロとの戦いをこれ以上長引かせるべきではないと考えていた。

長引けば長引くほど、モロによる星への被害が大きくなっていく。

今はまだブルマの張ったバリアのおかげで地球の各地で自然災害が起きている程度だが、いずれは死の星に変えられてしまうだろう。

狙うは短期決戦。そしてそれを実現出来る男が、今この場にいる。

「ジレン！ あのモロという奴は厄介だ！ その大男は俺達^{カンバ}が引き付けておくから、そのうちに……」

「いいだろう……まずは奴を片付ける！」

ヒット達の狙いを一瞬で悟り、彼等と入れ替わるようにジレンがモロへ向かった。まずは痛烈な拳打を一発！

「ぐはっ……!!？」

モロが錐揉み回転しながら吹き飛び、その先に回り込んだジレンが両腕で叩き落す。

更に急降下して踏みつけ。モロの肋骨がへし折れ、夥しい量の血を吐き出した。モロは気弾で砂塵を巻き上げて視界を隠し、ジレンの背後に回り込むが即座に振り返ったジレンのカウンターで鼻をへし折られる。

並行世界に潜んでの奇襲すら見破る男に、この程度の小細工など通用しない。ならばと魔術を使用。地球のエネルギーを操ってジレンとの間にエネルギーの壁を作ったが、構わず突っ込んで来たジレンには通用せずに腕を掴まれてへし折られた。

「がっ……なら、これならどうだ！」

モロは残った腕で、指先一本に集束させた気功波を発射した。

魔貫光殺砲のように、一点に集中させた気功波は通常よりも強力な殺傷力を誇る。

その一撃を前にジレンは仁王立ちで応戦。

そして信じがたい事に、大胸筋で集約させた気功波を受け止め――。

「……むん！」

——そのまま弾いた。

「……は？」

思わず茫然としてしまったモロの頭を掴み、膝を顔面に叩き込む。

更に一発、二発、三発。頭を掴んだまま拳を打ち込み、モロの顔が血の色に染まる。

そのあまりにあまりな出来事に、ラピスラズリとヒットは、ただ呆れた。

シヨックから立ち直る間もなくジレンが無慈悲に拳のラッシュを放つ。魔術など知った事かと正義という名の暴行を加え、モロの腹に手を当てて気弾を叩き込んだ。

『今です、ブウ！』

吹き飛んでいくモロを見て、リゼットがブウに指示を出す。

ブウも即座に応え、指先をモロへ向けた。

シーラスが咄嗟に妨害しようとするも、リゼットが棍で足払いをして転倒させ、カンバーはヒットが時飛ばしで翻弄しつつラピスラズリが気弾の嵐を打ち込む事で近寄らせない。

「魔貫光殺砲!!」

ブウの指先からお手本を見せるように光線が放たれ、吹き飛んでいるモロの心臓を貫いた。

致命傷を受けたモロは白目を剥き、壊れた人形のように地面に落ちる。

地面を血が濡らし、溢れ出続ける血の量はもうモロが助からない事を雄弁に語っていた。

「……ち、ちくしょう……だが、まだだ……せめて、貴様等から……この星を……奪ってやる……」

這いずりながらモロは、最後の嫌がらせをしようとした。

彼は惑星と同化する能力を持っており、その力で地球と一体化してこの星を道連れにしようとしたのだ。

だが——同化出来ない。

何かに縛られているように、能力が使えないのだ。

そしてこの感覚には覚えがあった。

「ま、まさか……あの時の……大界王神の……封印……!?

さ、最後の最後まで……俺の邪魔を……」

大界王神の封印術は完全に効いていないわけではなかった。

モロの、星と同化する能力を封じ込めていたのだ。

遂に万策が尽きたモロは、哀れみを誘うような声で懇願する。

「た……たのむ……ころさ……ないでくれ……」

最後にモロが取った行動、それは命乞いだった。

もしここにいるのが孫悟空だったならば、それは有効な手段だっただろう。

モロは極悪人であり、そのモロと戦う相手はモロの悪行を止めようとしているのだから善人の可能性が高くなる。

だからこうして情に訴えかけて許しを乞うのは、意外と有効なのだ。

そしてモロの命乞いを聞いたブウは……。

「卵になれ!!」

全く躊躇せずに攻撃を続けた。

遂に一撃必殺の光線が直撃し、モロは卵となって地面を転がる。

その哀れな卵をブウが思い切り踏みつけ——モロの命は終わった。

【戦闘力】

・モロ…107兆↓135兆↓80兆

ピッコロを コピーして強くなったのも束の間、ヒットとジレンに額の水晶を破壊されて元の強さに戻ってしまった。

まあ死んだのでもう0なんですけどね。

・魔人ブウ（地球戦士吸収）…92兆

地球戦士を吸収した魔人ブウ。外見はブウ編の悟飯吸収ブウの服装をピッコロの胴着に変えた感じ。

すぐに破いてしまったので、実質上半身を裸にしただけの悟飯吸収ブウ。

大魔王とスラッグが混ざっているせいか、眼もしっかり悪ブウっぽく白目の部分が黒くなっている。

ちなみにバーストリミットは元のブウの戦闘力にかかっているので、この数値で既使用している状態。

発言がいちいち敵キャラっぽいがちゃんと味方。

×（ブウ＋吸収した全員の戦闘力）×30

○ ブウ×30＋吸収した全員の戦闘力

・分身リゼット…40兆

地球に残した自立気弾を全融合させたりゼット分身体。

本人が操作しているので技術もオリジナルと同レベル。

これ自体が気の塊なので、気を消耗する気弾、気功波系の技は使えない。

気を消費せずに相手にダメージを与えられる優秀な武器を現地調達する事に成功した。

リゼット本人が絶え間ない睡魔に抗いながら動かしているので、自己中心の極意のような集中力が必要な高難易度技は使えない。

【モロ退場】

実は生きてましたとかないです。本当にこれでモロの出番は終わりです。流石に三度目はない。

メルス「見せ場がー！ 私の見せ場そのものがー！」

トランクス（どうしてだろう……？ この人には強い親近感を覚える……）

【ジレン乱入】

語らねばなるまい……。

お前達にも教えよう。ジレンがここにやって来た方法を。

ジレンは第7宇宙に己の過ちを理解させられたんだ。

そして宿敵となる男に称えられ再戦を誓った。

それからジレンは生き返った師匠の下で更なる強さと正しい道を極めようとした。

1人、2人、3人……ジレンの周りには仲間ができた。

そこにコアエリアの戦士がやって来た。仲間と共に戦った。ジレンには勝てる自信があったんだ。

だが、奴は強すぎた。ジレンの仲間は次々と吸収された。

トップまでも奴との戦いで取り込まれた。

ジレンは再び立ち上がろうとしたが閉じ込められて動けなかった。

動くと爆発するので耐えるしか無かったのだ。ジレンは独りになった。

信頼していた連中を奪われたジレンの悲しみは計り知れない。

その時痛感したんだ。規則など無価値だと。

それと同時に理解したのさ。破壊神の乗り物を奪えば追いかけられると。

勝てば周りが戻って来る。勝利すれば全てが手に入る。そこに遠慮など不要。

俺はそんなジレンのとてつもない行動力とその大胆さに惚れたんだ。

信頼していたジレンの活躍を鑑賞する機会を奪われた俺の悲しみは計り知れない。

by
ピエロ

第35話 究極の神殺し

モロは死んだ。

しかしまだ戦いは終わらない。

シーラスと、彼が呼び出したカンバーの影を相手に戦闘は続いていた。

ジレンがカンバーを抑え込み、残る四人でシーラスの相手をしている。

『どうやら貴方のその召喚能力、一度使うと次に同じ戦士を呼び出すまである程度のインターバルが必要そうですね』

「そんな時間は与えん」

リゼットが棍のリーチを活かしてシーラスを巧みに攻め、隙を見てヒットが時飛ばしと見えない拳打で奇襲をかける。

十二宇宙全体を見渡しても技巧でトップクラスに位置する二人の連携攻撃に、シーラスは防戦一方に追い込まれていた。

だが戦う相手はこの二人だけではない。

ブウが口から気を吐き出すと、それはブウの姿によく似たオバケのような形に変

わる。

「スーパーストカミカゼアタック！ 行け！」

『ケケケー！』

オバケブウが大挙してシーラスに突撃し、シーラスは気弾をバラ撒いて誘爆させつつ距離を取る。

だが待ってましたとばかりに空中に先回りしていたラピスラズリがオーバーヘッドキック。

シーラスの頭を痛烈に蹴り、地面に送り返した。

そこにヒットが飛び込み、咄嗟にシーラスは彼に気功波を発射した。

「っ！」

だが目の前のヒットは気で作り出した分身だ。

気功波はヒットをすり抜け、直後に背後からヒットの拳がシーラスの背中に突き刺さった。

見えない気がシーラスの身体を突き抜け、内臓を傷付ける。

ヒットとシーラスの間の戦闘力の差は決して小さくない。

だがここにいるのは第6宇宙最強の殺し屋ヒット。今のシーラスをも殺し得る牙を持つ男だ。

彼の多彩な能力と殺しの技は、戦闘力の差などないかのようにシーラスを翻弄し、追い詰める。

ヒットとシーラスの差は大型の動物と小さな虫ほどに開いている。

だが強力な毒を持つ虫が自分より遥かに巨大な生物を仕留める事もあるのだ。

今度はリゼットがヒットと入れ替わるように飛び込む。

シーラスは気弾を放ち牽制するが、リゼットに避ける気配はない。

そして命中の瞬間——リゼットが二人に分かれ分裂した二人のリゼットが左右から同時に掌打を叩き込んだ。

顔を挟み込むように放たれた掌打は、内部まで衝撃を浸透させて中央……即ち脳の部分で衝突し、シーラスの脳を激しく揺さぶり、一時的な前後不覚に陥らせた。

「な……に!?」

『気の分身なら、こういう芸当も出来るんですよ』

今度は三人に分裂し、三方向からシーラスを袋叩きにした。

シーラスも反撃しようとするが、圧倒的な手数之差でその出先を潰されてしまうので対処出来ない。

三人のリゼットによるコンビネーションは完璧で、一切の隙がない。

この世に存在するあらゆる連携の中で、最もスムーズかつ偉大な連携。

連携の中の連携、キング・オブ・コンビネーション。それが唇と歯と舌だ。

リゼットAがシーラスの逃げ場を塞ぎ、リゼットBが動きを封じ、リゼットCが粉碎する。

三人のリゼットの連携は、まさにその唇、舌、歯のコンビネーションの如く、互いが互いの隙を潰す形でシーラスを閉じ込め、咀嚼するように叩きのめした。

やがて十分なダメージを与えたと判断したリゼットは再び再融合して一人に戻り、次の瞬間驚くべき事に形が変わった。

人の形を捨てて巨大な手に変形し、シーラスを掴むと何度も地面に叩き付ける。まだ終わらない。地面に倒れるシーラスを何度も掌でスタンプし、追い打ちをかける。

攻撃を終えて元に戻ろうとしているリゼットに、シーラスが立ち上がって襲い掛

かる——が、リゼットと入れ替わるように魔人ブウが割り込んだ。

「狼牙風風拳！」

狼の俊敏さと鋭さを模倣した拳法が炸裂し、シーラスの顔を右へ左へと弾く。

「ハイッハイッハイッハイッ、オウーッ!!」

締めの一撃で思い切り吹き飛ばされたシーラスは、いくつものビルを突き破って空を舞う。

だがその先にブウが回り込み、次なる技へ入った。

「排球拳ブウブウバレーいくわよーっ!!」

真面目な顔で、何故かオネエ口調で技を宣言する。

「はあーいっ!!」

そしてニヤけ面でバレーのレシーブのような構えへ入った。

落ちて来たシーラスを拾うように滑り込み、打ち上げる。

「それパース！」

シーラスが宙を舞い、何とか体勢を立て直そうともがく。

だがそれは出来ない。

飛ばされた先にいたりゼットがシーラスを上へ打ち上げたからだ。

『トース！』

リゼットの掌打を受けてシーラスが再び宙に飛ばされた。

その後を追ってブウが跳躍。空を舞うシーラス目掛けて拳を振り上げ、思い切り叩き落とした！

「アターック!!」

シーラスが轟音を立てて地面に衝突した。

ふざけた技だが、それでも使い手がブウならば、威力も桁違いだ。

地面にめり込んだ状態で何とか立ち上がろうとするシーラスだが、そのすぐ横に何かが墜落した事で顔色を変えた。

落ちて来たのは、ボロボロにひしゃげたカンバーの姿であった。

誰がやったのかなど、考えるまでもない。

砂塵の向こうから宇宙最強の男ジレンが現れ、シーラスを見下ろす。

遅れて他のメンバーも集結し、シーラスを囲んだ。

「お、おのれ……貴様のような魔人などに、この私が……仲間を吸収してまで勝ち

たいか……！」

「くっくく……勝利こそ全てなのはお前とて同じ事だろう。

まあそう絶望的になる事もなからう。すぐ楽にしてやる……ほんの少し苦しむだけだ」

シーラスの侮蔑の言葉を、嘲笑をもって返すブウを見ながらリゼットは「あれ？どっちが敵でしたっけ？」と思っていた。

随分悪人感が増してしまっているが、やはりピッコロを吸収した影響だろうか？この世界のピッコロはスラッグや大魔王と融合しているので、悪の心増し増しなのが駄目だったのかもしれない。

17号もGTの超17号のような外見になっているし、これじゃ地球を守る守護者達というよりはボスキャラ連合だ。

「待て。その男には、吸収した者達を解放させなければならん」

「問題ない。私がそいつを吸収し、お前の仲間達を分離して返してやる」

ジレンが制止するが、ブウは既に解決策を考えていたようだ。

そういえばブウの体内は合体を解除してしまう効果があるんだっけ、とり

ゼットは思い出す。

もつともポタラ合体に時間制限がある事が判明した今となつては、原作のあの合
体解除はブウの体内のせいなのか、ただの時間制限だったのか分からない。

とはいえ、試してみる価値は十分あるだろう。

「では、さようならシーラス。これからは私の一部として生きるがいい」

「……………っ！」

ブウが勝ち誇った笑みを浮かべ、悔しさに顔を歪めるシーラスへ手を伸ばす。

しかしリゼットはここで、もしシーラスを吸収したらブウの性格はどうなるんだ
ろうと不安を抱いた。

ブウの吸収は相手の性格の影響をかなり受けてしまう。

これでシーラスのような性格になってシーラスと同じ事をやり出したら目も当て
られない。

慌ててリゼットが止めようとし——それより早く、突然、空から飛来した気弾が
ブウの全身を穴だらけにしてしまった。

『ブウ!?!』

突然の奇襲にリゼットが驚き、上空を見る。

直後に全身を重圧が襲い、動けなくなってしまった。

ラピスラズリやヒットも同様に膝をつき、ジレンだけが立ったまま耐えている。

「来たか……！」

ジレンが怒りを込めて上空を睥睨んだ。

そこにいたのは、コアエリアの戦士達のリーダーであるハーツであった。

しかしその姿は以前と異なる。

全身が金色に輝いており、背中からは巨大な角が生え、その周囲にはいくつもの球体が浮かんでいる。

そして胸元には水晶が輝いていた。

「やあシーラス、危ないところだったな。助けに来たよ」

優しい気な声色で語りかけながら、重力操作でリゼットの持っていた棍をシーラスに返した。

この場で唯一重力のかかっていないシーラスはよろめきながら立ち上がり、ハーツの近くまで浮遊して移動する。

「その姿……そうか、完成したんだな」

「ああ。君達の戦いのエネルギーのおかげで宇宙の種は完成し、俺はその力を取り込んだ。」

見るがいい、この姿……これこそ究極の神殺しだ。今、俺達の悲願は王手がかかった」

ハーツが所持していた『宇宙の種』は文字通り、一つの宇宙を生み出すほどの力を秘めた存在だ。

そしてこの宇宙の種を完成させるには、莫大な戦闘エネルギーが必要となる。

その為ハーツは各宇宙を巡り、戦い、そして遂にこの宇宙の種を完成させたのだ。ハーツは感極まったように空を見上げ、ここにいない同志へ想いを馳せるように話す。

「決して楽な道ではなかった。全王が全ての破壊神を呼び寄せ、破壊神不在となったこの千載一遇の好機をものに出来なければ、その瞬間全てが終わる。各宇宙の強者達と戦いながら超ドラゴンボールを集め、そして破壊神達が戻って来る前に超ドラゴンボールで他の時間軸に追放する……果てしない遠回りだった……だがその困

難な道も、同志達のおかげで超える事が出来た。

ありがとう……カミン、オレン、カンバー、ラグス、モロ……そしてシーラス」
「戯言を！」

天を仰ぐハーツへ、ジレンが重力を振り切って突撃した。

繰り出されるジレンの拳をハーツが軽々と避け、反撃の蹴りがジレンの腹にめり込む。

宇宙最強の男が吹き飛ばされ、地面に激突する寸前に獣のように四つん這いの姿勢となって何とか不時着した。

「おのれ……まだだ！」

ジレンの形相が鬼のように険しくなり、顔中に血管が浮き上がる。

全身から紅蓮のオーラが吹き出し、その勢いで彼の着ていた服の上半身部分が千切れ飛んだ。

あの力の大会でも悟空との戦いの中で見せた彼の本気の姿だ。

だがそれを見ても尚、ハーツの絶対の自信は揺らがない。

「シーラス、ここは俺に任せてくれ。君は時の巣へ行き……全王に引導を渡してく

るがいい」

「……分かった」

シーラスが飛び立ち、追いかけようとしたジレンの前にハーツが割り込む。

他のメンバーは、ハーツからかけられている重力のせいで身動きが取れない。

地面に伏せたままリゼットはブウに目配せをし、二人は人の形を一度捨てて地面の中へ潜り込んだ。

「何をする気だ……？」

「全王を消すのさ。今、奴はかつて別の時間軸の全王によって全てが消されてしまった宇宙にいる。いや、宇宙だった空間というべきか。まずはその歴史ごと全王を消す！　これが俺の辿り着いた、唯一の全王を殺せる方法だ」

ジレンの問いに、ハーツは恍惚とした表情で答えた。

全王は殺せない。だが全王が存在している歴史は消せる。

もしかしたらそれでも全王だけは残るかもしれないが、万一生き延びても時の狭間ですらない無の空間で永遠に残されるだろう。

「だがそれだけじゃないぞ！　この時間軸以外の全て！　全王が存在する全ての

世界線を抹消する！　そうすれば全王のいないこの世界線が唯一となり、神のいない真に自由な宇宙が誕生するんだ！」

『それは誕生ではなく、自分が嫌いなものを壊してるだけです』

「!!」

語りに夢中になっていたハーツを、背後からリゼットが奇襲した。

ハーツのサングラスの上から手刀が叩き込まれ、その衝撃でラピスラズリとヒツトを縛っていた重力が消えた。

更によりめいた瞬間を狙ってピンク色の塊が飛び込む。

「いただきー！」

「っ!!」

ハーツに飛びついたのは人の形を捨てたブウだ。

ブウの持つ最大の格上殺し技、それは『吸収』である。

吸収に成功してしまえば格上だろうと関係ない。丸ごと自分の力にしてしまえる。

スライム状となってハーツの全身に纏わりついたブウを引き剥がすのは簡単では

ない。

この状態に持ち込めば最早吸収成功は確定。

そう思い勝ち誇るブウだったが、ここで異常に気が付いた。

……ハーツの身体に届いていない！

ハーツの全身を守るように展開されている重力によって阻まれ、吸収が不発に終わっている。

「残念だが、君に俺は吸収出来ない……はああっ！」

ハーツは全身から気を解放し、ブウを弾き飛ばした。

弾かれてしまったブウは離れた場所で元の姿に戻り、「小賢しい真似を」と呟いた。

「地球の神と魔人か……どうやって脱出した？」

『教えるとしても？』

ハーツの疑問を無視し、リゼットは力を抜いた無形の構えを取る。

リゼットとブウが逃れた方法は単純だ。

重力から逃れられぬなら、更に下に潜るまで。

気の塊である分身リゼットと、自在に身体を変えられるブウならばそれが可能だ。二人は地面の僅かな隙間に潜り込んで地中を泳ぎ、重力が届かない位置まで潜った後にハーツの後ろへ移動し、地中から飛び出したのだ。

「やはり俺の前に最後に立ち塞がるのも、神か。残念だよ……人の側に寄り添える神である君の事は嫌いじゃなかったんだがな」

『生憎ですが、神ではなくただの私個人として考えても貴方のやっている事は看過出来ません。』

全王君を否定する割に、やろうとしてる事がそれより酷いじゃないですか』
実の所、リゼットはハーツの考えが分からないでもないのだ。

何せリゼットは神といっても、所詮はここ三十年で地球の神に就任したばかりの新米も新米、はつきり言って神としての意識などまだまだ薄い駆け出しもいい所だ。だから気紛れで宇宙を消してしまう全王が気に入らないというハーツの言い分も分かる部分がある。

また、ザマスのような悪神がいつ現れて他の時間軸を荒らすか分かったものではない。

それを考えれば、全ての時間軸から神を消してしまいたい……と思う者が出るのも仕方ないと受け止める事が出来る。

しかしその前提の上で考えてもやはりハーツのやろうとしている事、そしてやってきた事は論外であった。

「貴様の主義主張などに興味はない。俺は俺の仕事を果たすだけだ」

「下らん思想だ。己の私欲の為に力なき者達を苦しめた時点で、貴様に大義などない」

ヒットとジレンが冷たく切り捨て、宇宙の敵を倒すべく構えを取る。

「自由か。俺には、自由に縛られているお前が一番不自由に見えるがな」

「どうでもいいさ。どのみち、貴様はここで死ぬんだ」

ラピスラズリとブウはそもそもハーツの思想そのものがどうでもいいらしく、冷めた感想だ。

あれこれ言っているが、今大事なのはハーツが敵で、向こうから攻めて来たという事実だ。

そして止めなければゴクウブラックとザマスの時の比ではない大惨事が起こると

いう未来のみである。

「どっちみち、俺も君達との戦いを避けられるとは思っていないさ。

……来い！ シーラスの後は追わせんぞ！」

ハーツが気を高め、同時にリゼット達が攻撃を繰り出す。

そして、激戦が幕を開けた。

一方、時の巢へ移動しようとしていたシーラスだが、まだこの世界に留まっていた。

それは、彼の目の前に二人の戦士が瞬間移動で現れたからだ。

「貴様……トランクス！」

「シーラス……これ以上お前の好きにはさせない！」

現れたのは、シーラスの後任である現在のタイムパトローラー、トランクス。

そしてその父ベジータであった。

ヤードラット星での修行を終えた二人が、シーラスの歪んだ野望を阻止するべく

立ち塞がる。

「よう、テメエが他の宇宙の奴等を吸収したシーラスって野郎か。

どんな化け物かと思ったが、大した事はなさそうだな。このベジータ様が一瞬で片付けてやるぜ」

ベジータが自信満々に勝利宣言をし、進化した超サイヤ人ブルーへ変身した。

一緒に戦おうとするトランクスを手で制し、一步分前へ出る。

「下がっているトランクス。こいつは俺が始末してやる」

「父さん……！」

ベジータは多対一や助太刀されるのを好まない。

何故ならそれは、一人では勝てないと宣言しているようなもので、ある種の敗北宣言に等しいからだ。

かつてのナメック星でのフリーザとの戦いのように、戦う前から明確に自分が格下と分かっているれば味方の手を借りるくらいの柔軟さは持っているが、それでもやはり彼のプライドを一番満たせるのは強敵相手に一人で勝利した瞬間だ。

このプライドはベジータがベジータである限り、決して切り離せるものではない。トランクスもそんな父の事を分かっているので、仕方なく先陣を父に譲る事にし

た。

「カカロットはまだ来ていないようだな。まあいい……奴が到着する前にこの俺が全て終わらせてやる」

ベジータが強気に笑い、そしてシーラスとの戦いが始まった。

★

界王星から戻った悟空は、すぐに今宇宙が置かれている状況を皆に話し伝えた。クウラという一つの大きな山を越えた事で無意識のうちに気が抜けていたターレス達は、予想を遥かに上回る事態に驚き、同時に自らの傷付いた身体を悔やむ。

クウラとの戦いは乗り越えたが、彼が残した傷跡は大きい。

リゼットは完全にダウン。ミラ、ターレス、四星龍、バードックも全身至る所が傷付き、骨折し、ベストコンディションからは程遠い有様であった。無論悟空もそれは同じだ。

量産型とはいえメタルクウラは一体一体全てが超サイヤ人ブルーに匹敵する強さを持ち、戦闘力以上の硬度を持ち、そして生半可な攻撃では再生強化される。

そんな怪物が圧倒的な数まで揃えて攻めて来る上に、倒す度に学習強化されてい

くのだ。

むしろ後遺症となるような大怪我をしなかっただけ、ここにいる戦士達は褒められていい。

「今、満足に戦えるのはセルと21号だけか」

四星龍が悔しそうに己の拳を見る。

彼の拳は細かい亀裂がいくつも走っており、あのメタルクウラとの戦いで受けたダメージの深さを物語っていた。

「ごめんなさい。私がブウさんのように皆さんを治す事が出来れば……」

申し訳なさそうに21号が言い、項垂れる。

魔人ブウの特性を色濃く引き継ぐ21号だが、その全てを得たわけではない。

高い再生力を持つが流石に本家魔人ブウほどの出鱈目極まる戦い方は出来ないし、ブウが持つ魔法のような力も21号はほとんど持っていなかった。

これは、ブウの魔法の力がブウ自身ではなく過去に吸収した誰かのものだからかもしれない、とブルマは語っていた。

「なあセル。神様みてえに魔法で傷を治したり出来ねえのか？」

「出来るならもうやっている」

セルは未来のリゼットの細胞を持ち、彼女が出来る事ならば全て出来る。

この事から一時期はリゼットの完全上位互換な時期もあったが、現代のリゼットは未来の自分を遥かに超えた先にいる。

時間停止や回復の魔術もその一つで、これは現代のリゼットのみが持つ特殊能力だ。

絶望のボスラッシュから魔人ブウ出現までの七年間の間に習得した技であり、セルはこの能力を持っていないのだ。

また、セル自身がそもそも怪我の治療など必要のない身体というのも大きかった。一応、未来リゼットの技術に治療系の技がないわけではない。

気を相手に分け与え、身体を循環させる事で疲れを消しつつ徐々に癒す一種の気功治療のような技ならば未来リゼットの技術にあり、セルも習得している。

だがこれは、一気に大怪我を治すような便利な技ではない。

だから力の大会でヒーラーの真似事くらいは出来たが、それでも一瞬で傷を治さなければならぬような場面ではセルも仙豆に頼る。

「ゲンキ・カプセルは……くそ、使い切っちゃったか……。おいセル」

「持っていない」

「だよなあ……」

バーダックは懷を探り、何かを探していたがやがて諦めて舌打ちをした。

タイムパトローラーであるバーダックとトランクス、セルは彼等が拠点としているコントン都やトキトキ都といった場所でゲンキ・カプセルという回復用の道具を
買う事が出来る。

これは仙豆のように腹が膨れず、傷と疲労だけを治すというリゼットが欲しがり
そんなアイテムだが、メタルクウラとの連戦で既に使い切ってしまった。

最後に全員がミラを見るが、彼も首を横に振った。

「残る仙豆は一粒か……仕方ねえ、これを割って誰か二人で……」

「いや、カカロット、そいつはお前一人で使え」

仙豆は割ってしまったても一応効果がある。

なので二つに割って誰か二人を回復させようとした悟空だったが、それをタール
スが止めた。

「今や俺達のパワーは大きくなりすぎた。二つに割った仙豆じゃとても万全には届かねえ。」

そんな半端な回復をした奴を二人用意するくらいなら、誰か一人を万全にした方がいい。そしてその一人はお前であるべきだ、カカロット」

ターレスは、回復させるべき優先対象を悟空と言いつつ切った。

他の面子も頷き、異論を挟む事はしない。

これは単純な強さの問題だ。この中では悟空が一番強い。

「そうか……なら、そうさせてもらうぞ。サンキューな、皆」

悟空もまた、確認や疑問を挟んだりしない。

リゼットが倒れた今、この中ならば自分が一番強いという自信がある。

そしてターレスの言う通り、半端に二人回復させるくらいならば、自分一人が万全になった方がいいだろうと考えた。

仙豆を食べ、傷を完全に治してフルパワーに戻る。

「よし……そんじゃあ行くぞ、セル、21号。地球は……あっちか。」

……やべえな、やたら大きい気がゴロゴロしてやがるぞ」

「問題あるまい、私達ならばな」

「ええ、急ぎましょう！」

悟空が地球のある方向を探り、そちらから感じられる大きな気で既に戦いが始まっている事を悟った。

距離があり過ぎるので集中してようやく微かに感じ取れる程度だったが……それでも、これならギリギリ瞬間移動出来る。

悟空の肩にセルと21号が手を置き、そして三人は昏迷を極めた戦場を切り拓くべくその場から消えた。

【戦闘力】

・ベジータ…11億

超サイヤ人…550億 2…1100億 俺のブルマ…6600億

超サイヤ人ゴッド…1兆1000億

超サイヤ人ブルー（完成）…6兆6000億

キュアベジータ…44兆

ヤードラット星での修行で無駄のない気の使い方を覚えたベジータ。

戦闘力もかなり上昇した。

・未来トランクス…10億9000万

超サイヤ人ブルー＋バーストリミット20倍…43兆6000億

同じくヤードラット星での修行で力を増した。

未来に残している仲間達との戦闘力格差がどんどん開いていく。

ちなみに本当の父（未来ベジータ）とは、実力差が開きすぎて未来ベジータが拗らせてるせいであまり上手くないらしい。

【排球拳】
ブウブウバレー

天津飯、ピッコロ、ゴテンクス、ブウといったこの技に関わったほぼ全員が揃ったスペシャルバーション。後は悟空がいれば完璧だった。

第36話 最終ラウンド

宇宙の種を取り込み、究極となったハーツとの戦いはジレン達を以てしても一筋縄ではいかない苦しい戦いとなった。

相手の心を読み、自在に重力を操るハーツには、そもそも近付く事すら難しい。ラピスラズリとブウが左右から同時に攻撃を繰り出すも心を読んで避け、背後に回り込んだヒットの拳は重力の壁に阻まれて届かない。

リゼットだけは本人が遙か遠くにいる為にハーツでも流石に読む事が出来ないが、所詮は地球に残しておいた自律気弾を合わせて何とか形にしただけの間に合わせの分身体。純粹な強さという点ではハーツの脅威ではない。

重力の防御を突破する事もなく、逆に軽々と吹き飛ばされてしまった。

ジレンだけが重力の壁を貫いてハーツと殴り合いが成立し、二人の間で激しい攻防戦が繰り広げられる。

殴り、防ぎ、蹴り、避け、逸らし、相殺する。

しかし今のハーツはジレンの更に上を往く。本気を出したジレンさえハーツに一

歩届かず、強烈な拳打で地面に叩き落とされてしまった。

「非力だな！ 究極の神殺しとなったこのハーツに、そんな攻撃が通じるかァ！」
彼を中心として重力波が放たれ、ヒット、ラピススズリ、ブウが吹き飛ばされた。
直後に攻撃の一瞬の隙を突いたりゼットが背後に瞬間移動をして物質創造術で作
り出した巨大な剪定用のハサミでハーツの首を狙う。

これには流石のハーツも少しばかり驚き、首を若干掠らせながらも上体を屈めて
回避し、肘打ちでりゼットを殴り飛ばした。

全員が地面を這う形となり、重力によってそのまま大地に縛り付けられる。

「俺の力に酔え！」

ハーツが腕を突き出すと、その動きに従うようにハーツの背後に浮いていた球体
が一斉に飛び出した。

球体はりゼット達を囲むように配置され、そして四方八方から同時に襲撃をかけ
る。

ジレンとヒット、ラピススズリはガードを固めて耐え、ブウは全身を穴だらけに
されながらも再生。

リゼットは全弾回避しつつ剣を創造して的確に叩き落とし、何とかこの攻撃をやりますごした。

だがまだ終わりではない。今度はハーツ自身が飛び込み、まず最初にヒットをガードごと殴り飛ばした。次にブウ、ラピスラズリ。

あえてのノーガードで相打ちを狙ったジレンの攻撃も読み切って殴り飛ばす。

最後にリゼットを狙うも、リゼットはハーツの拳を受け止めると、環を描くようにして受け流してしまう。

そのままハーツの耳を狙って指突に移行するも、またしても重力で吹き飛ばされてしまった。

「いくら君達が頑張ろうと、今の俺には敵わない！」

ハーツが腕を振り下ろすと、その場の全員に重圧がのしかかる。

「ほざけ！」

「懲りないなジレン！　だがもう君では俺には勝てない！」

動けない他の仲間を置いてジレンが飛翔し、再びハーツと渡り合う。

地上から空中へ、何度も高速移動を繰り返しながら攻防が続く。

何とか食らい付けている……だが、戦えるのがジレン一人では勝負が見えていた。「君の強さはとうに碎けているんだよ！」

ジレンの拳打を避けてハーツの蹴りがジレンの顎を揺らし、続く右ストレートが腹にめり込む。

重力を上乗せした衝撃にジレンの顔が苦悶に歪んだ。

「ふふふ……君の心の悲鳴が聞こえるよジレン。弱い自分には戻りたくないね」ハーツがジレンを噛い、腕を抜こうとした。

しかし……動かない。

ジレンもやられっぱなしではなかった。攻撃を受けると同時に力んでハーツの腕を筋肉で捕えていたのだ。

「っ！ 抜けな……」

こうなればもう心を読もうが関係ない。

ジレンの硬い拳がハーツの頬にめり込み、更に瞳を輝かせてのラッシュがハーツの全身を滅多打ちにした。

回避しようにもこれでは回避出来ず、重力をかけてもジレンはお構いなしに攻撃

を続行する。

「俺の強さが砕けたと言ったな！ 本当に砕けたかどうか、その身で確かめてみる！」

ジレンがハーツの全身を殴り続け、衝撃波が何度も地球を周回した。

以前のハーツならばこれで終わっている。だが今は、ジレンの攻撃ですら致命打に届かない。

ハーツは顔を血で染めながらも薄ら笑いを浮かべ、ジレンを蹴り飛ばして無理矢理自由になった。

更に気功波の連射。咄嗟にガードしたジレンに直撃し、爆炎を上げる。

「少し厄介だな。また大人しくしていてくれ」

ハーツがジレンを気の立方体に閉じ込め、ジレンは嫌な事を思い出したように顔を歪めた。

以前の戦いと同じだ。

無理に破れば爆発する気の立方体は、ジレン本人は無事でも周囲が助からない。だがジレンは冷静さを取り戻し、ゆっくりと気を高めていく。

高まった気の圧力で立方体を内側からこじ開け——目力で爆発を一瞬止め、刹那の間に己の周囲を膨大な気で覆い、爆発の範囲を己の周囲のみに留めた。

これにより爆発を受けるのはジレン一人だけとなり、以前辛酸を舐めさせられた攻撃を無効化する事に成功した。

そのまま煙を振り払ってジレンが飛び出し、ハーツの顔面に拳を叩き込む。

「ごお……っ!？」

「舐めるな！ 以前とは違う！」

右、左、また右。ジレンの拳がハーツの顔を滅多打ちにし、血飛沫が舞う。

ジレンは前回の戦いで閉じ込められ、屈辱を味わった。

その後彼は助けを拒み、立方体の中に残っていた。

それは、再戦の時に同じ技を使われても対応する為……どうすれば周囲に被害を出す事なく脱する事が出来るのか、ずっと考えていたのだ。

だが容易く脱出されたというのにハーツが不敵に笑い、ジレンの腕を掴む。

「それはこちらの台詞だジレン。俺も以前と同じと思うなよ！」

ハーツの膝がジレンの腹に突き刺さり、頭が下がった所でダブルスレッジハン

マー。

ジレンを地面に叩き落とし、轟音が響いた。

再度ジレンが飛翔してハーツに挑み、打撃戦を繰り広げるも重力と読心によって支えられたハーツの優位は崩れない。

ハーツの拳がジレンの頬を打ち、膝蹴りが腹にめり込む。

ジレンの目力がハーツを一瞬止めて反撃の拳がハーツの顔を打つも、ハーツの蹴りによってまたしても地面に叩き返されてしまった。

更に気弾の連射。ジレンは回避を一瞬考えるが、自らの後ろに味方がいる事に気付いて即座に回避から迎撃に切り替え、拳の連打で味方に飛ぶ気弾を全て叩き落とし、数発被弾しながらも何とか凌ぎ切った。

何とか戦えている……だが、戦況は明らかに不利だ。

「グラビティフィナーレ！」

ハーツが技名を宣言すると同時に、全員の足が地面に張り付けとなった。

地面にマス目のような模様が現れ、そして小さな立方体となって下から上へ高速浮上する。

その全てが尋常ならざる威力を持ち、動く事の出来ない全員を襲った。

そして空へ浮上した小さな立方体は上空で結合し、超巨大な立方体となって今度は上から下へ降り注ぐ。

ジレンが咄嗟に気の圧力で速度を減退させ、ラピスラズリがバリアを張る。

そしてリゼットは攻撃中のハーツの背後に回転ノコギリを創造して突撃させた。だが巨大立方体は止まらず、ハーツも寸前で気付いて重力でノコギリを止めてしまふ。

直撃の一瞬——ジレンが重力を振り切って跳躍し、巨大立方体を殴って爆発させた。

これによりジレンのみが目の前で直撃を浴びる事となり、残る四人は余波に襲われる。

「ぬうう……おおおおお！」

ジレンが吠え、気を解放して爆発のベクトルを何とか上空へ逸らした。

これにより地球への被害は最小限で済んだが、ダメージまでは消せない。

爆煙が晴れた時、リゼット達は地面に倒れ伏しており、立っているのはジレンだ

けであった。

しかもここで、最悪な出来事が発生した。

ラピスラズリが元の17号と18号に分離してしまい、ブウの戦力も若干落ちたのだ。

時間切れだ。ブウの中のゴテンクスも戻ってしまったのだろう。

ポタラの合体時間はまだ過ぎていないはずだが、それでも合体が解けてしまったのはエネルギーの使い過ぎが原因だ。

ラピスラズリのエネルギーは永久式でも、ポタラは永久ではない。

後先考えずに使っていたエネルギーはポタラの残り時間を確実に削っていたのだ。

あるいは、モロと一緒に浴びたカイカイマトルによってポタラの魔力まで封じられていたのかもしれない。

ここにきてのラピスラズリ離脱とブウ弱体化はあまりに痛い。

「ちっ……鬱陶しい技を使う……！　おい、まだ戦えるか？」

「無論だ」

「ハア……ハア……き、聞かれるまでも……ぐっ……ない」

ブウの問いにジレンとヒットが答えるが、残念ながら全員が無事ではなかった。ヒットは明らかに大きなダメージを受けており、既に立っているのもやっとだ。しかも18号は完全に気絶しており、17号も立ち上がる事が出来なかった。

「まだいける……と言いたい所なんだが、悪いな。もう動けそうにない」

17号は永久エネルギー式で疲れを知らない。だがブウのようにダメージを受けないわけではないのだ。

恐らくは手か足か、あるいはその両方の強化骨格が砕けてしまったらしく、立とうとしても立つ事が出来なかった。

『ちよつと……まずいかもですね。今ので大分、この分身を構成している気を削られてしまいました』

気の塊である分身リゼットは一見不死身に近いが、気による攻撃を受けるとどうしても霧散してしまう。

霧散すればその分戦力も落ち、戦えば戦うほど弱体化してしまう。

本体ならば気の無限回復があるのだが、流石に分身体にまでその能力はない。

しかも事態はそれだけに止まらない。

宇宙の種からハーツにエネルギーが供給され、ジレンが折角与えたダメージが消えて行ったのだ。

このエネルギーの供給元は、他でもないこの戦いそのものだ。

宇宙の種は戦いによって発生したエネルギーを吸収してハーツに与える。

つまり永久機関だ。いくら戦ってもその戦い自体がハーツのエネルギーとなってしまうのだ。

「フフフフ……勝負は見えたな？」

ハーツが勝ち誇るが、誰もそれを否定する事は出来なかった。

先程までの戦いでも劣勢だったのに、ダメージを受けた上に戦力が目に見えて減ってしまった今は更に不利だ。

ブウとリゼットは弱体化、ラピスラズリは戦線離脱。ヒットは立っているのがやっとという様子で、ジレンのダメージも決して浅くない。これでは結果は明らかだ。

「まあ、君達は頑張ったよ。それじゃあ美しく散ってくれ！」

再びハーツの後ろの球体が飛び出し、リゼット達へ向かう。

何とかこの攻撃を凌ぐべく、各々が防御、あるいは迎撃の姿勢に入り――

――どこから飛んで来た気功波が纏めて薙ぎ払った。

「悪い皆、遅くなっちゃった」

聞き覚えのある力強い声が聞こえた。

全員がそちらを振り向けば、そこには山吹色の胴着に身を包んだ戦士……孫悟空が立っていた。

後ろにはセルと21号が控え、頼もしく笑っている。

悟空は自然体のまま前へ踏み出し、ジレンとヒットへ笑みを向けた。

「そうか、でかい気の正体はジレンとヒットだったか。悪いがちょっと状況が分からねえ……探らせてもらっていいか？」

「探る？ 構わんが……一体何を」

困惑するヒットの額に手を当て、悟空が数秒目を閉じる。

そして目を開けた時、彼はこの場で起きた出来事を全て把握していた。

「そっか……色々分かったぞ。あっちでベジータと戦ってるシーラスって奴がジレンの仲間達を吸収しちまった奴だって事……ピッコロや悟飯がブウに望んで吸収されたって事……そしてハーツって奴が何をしようとしてるのかもな」

「お前、そんな能力があったのか……？」

「いや、何となくこうしたら分かる気がただけだ」

ジレンの問いに、悟空はあっけらかんと答える。

何となくで記憶を読めれば苦労はないのだが、それを当たり前のようにやってしまうのが悟空という男だ。

「つうか神様、戦って大丈夫なんか？ あんま無理すんなよ」

『ご心配には及びません。今ここにいる私はラジコンみたいなものですから。

でも、来てくれて助かりましたよ。正直手詰まりでしたから。悟空君達に事態を伝えようにも、声すら出せなくて』

「そんな状態でよくやれるなあ……器用っちゅーか何ちゅーか」

悟空が感心したように目を丸くした。

今のリゼットは、本人は軽く言っているが気を出す事すら出来ない重傷だ。恐らくは酷い睡魔のせいで本体は起きる事すら出来ないだろう。

つまり彼女は半分寝たまま、この分身体を動かしているに等しいのだ。

そんな状態でも地球を守るために戦っている辺り、少し働き過ぎな気がしないでもない。

「そんじゃあ神様、後はオウに任せてくれ。多分何とかなると思う」
悟空の言葉にリゼットも微笑んで頷き、素直に悟空に場を譲った。

何ら気負いなく前へ歩み、そして空中にいるハーツを見上げた。

ハーツもまた悟空の登場によって笑みを消し、真剣な表情で彼を見ている。ゆっくりと高度を落とし、そして地上で悟空と対峙した。

「……よう、お前がハーツって奴か」

「……その通りだ、孫悟空」

二人の間に緩やかな風が吹いた。

小石が転がる音がやけにハッキリと聞こえるが、それほどの静寂と緊張感が場を支配している事の証明でもあった。

「あんまり星や宇宙を壊すなよ。皆困ってんだろ」

「フフフ……困っている、か……この宇宙の命運を分ける戦いを見てそんな軽い表現で済ますとは大物なのか、それともただの馬鹿か……」

「さあな」

軽口を叩き合いながらも、二人の纏う気は徐々に上昇している。

説得や話し合いで戦いを回避出来る段階などとうに通り過ぎていく。その事は二人共承知していた。

戦闘を避けるのは最早不可能だし、その気もない。

悟空の全身から銀色の光が溢れ出し、瞳と髪が銀色に染まった。

身勝手の極意『極』。

まるで呼吸をするように神の奥義を使用した彼にジレンが驚き、ハーツが好戦的に笑う。

——そして弾かれたように二人が飛び出し、衝突した。

★

ベジータとシーラスが空中で激しく衝突し、高速の打撃戦を繰り広げる。

しかし戦況はシーラスが有利だ。完全に戦闘力で勝っている。

手数は互角だが、刻まれるダメージが違う。

ベジータの拳がシーラスに1か2与えるとしたら、シーラスの攻撃はベジータに5か6くらいは与えている。

明らかに殴り負けている……だがベジータは怯まず、激しく傷付きながら戦闘を続行していた。

渾身の一撃がシーラスの顔へめり込み……同時に、シーラスの身体から第9宇宙の戦士であるベルガモが飛び出して地面に墜落した。

「な、なにっ!？」

「ハア、ハア……へっ、やっと一人か。まだまだ練習が必要だな」

「何をした!」

シーラスの怒りの拳がベジータの横面にめり込む。

一瞬意識が飛びかけるが何とか持ち堪え、反撃でシーラスの脇腹を殴った。

殴り殴られ、それを数度繰り返した果てに今度は第11宇宙のココットがシーラスから引き剥がされて地面に落ちる。

「なるほど、少しコツが掴めてきたぜ……」

「何をしたと聞いている！」

「ク、ククク……『スピリットの強制分離』……らしいぜ。貴様のように他人の力で粹がる野郎から合体や吸収した奴を無理矢理引っぺがす技だ……ヤードラット星で身につけたんだよ」

「何だと……!？」

ベジータが手袋で口元の血を拭い、地面を一瞥する。

「トランクス！ そいつらを邪魔にならない場所に捨ててこい！」

「父さん、やはり一人じゃ無茶だ！ 俺も一緒に……」

「余計な真似をするな！ てめえから先にぶっ殺されたいか！

それより、さっさとしやがれ！ せっかく引き剥がしたのに、また吸収されちゃ意味がねえ！」

「……っ、分かりました」

シーラスが慌ててココットとベルガモを回収しようと方向転換するが、ベジータが先回りした。

ベジータは肩で息をしながらもあくまで不敵に笑い、自らを親指で示す。

「どこに行く。貴様の相手はこのサイヤ人の王子、ベジータ様だ」

「邪魔だ！ どけえ！」

シーラスがベジータを殴り、血飛沫が舞う。

だが負けじとベジータも殴り返し、再び泥試合が始まった。

その間にトランクスがココットとベルガモを回収し、離れた場所で隠れていたブルマの近くに運び込む。

ベジータは何度も殴られ、傷付き、もう倒れていてもおかしくない。

だが尚も倒れずに、気迫とプライドで身体を支えて反撃を繰り返す。

今度は第11宇宙のケトルが分離させられ、シーラスの力がますます弱まった。

「何故だ……何故戦える！　そこまで傷付いて何故倒れない！」

「ク……クックック……生憎だったな……む、むしろ心地いいくらいだぜ……闘争の中にこそ喜びを見出す……それが俺達サイヤ人だ」

息も絶え絶えになりながら眼だけがギラギラと輝き、ベジータが笑う。

その異様にシーラスが気圧され、背筋を冷たい何かが伝った。

同時に怒りを覚えた。

何だ、今の感覚は。何だ、今の冷たさは。

まさか恐怖？ 馬鹿な、ありえない、とシーラスは思う。

己が『悪』に恐怖を抱くなど、あつてはならない！

「おぞましい『悪』め！ 貴様などが私に勝てるはずがない！」

「サイヤ人は戦闘種族だ！ 舐めるなよー！！」

正面からの殴り合いが続く。

シーラスは最早冷静さを失っていた。

もっと落ちていて戦えば、他にいくらでも戦いようはあっただろう。

攻撃を受けてはならないというならば、そう立ち回るべきだ。

だが退いてはならないという強迫観念のようなものが彼を突き動かしていた。

ここで『悪』に恐怖して退いてしまつては、時の界王神に背いてまで選んだこの

道が……正義の名の許に犠牲にしてきた全てが瓦解する。そんな気がした。

プライドとプライドがぶつかり合い、シーラスの力とベジータの命が確実に削られていく。

だがどちらも退く意思はなく、血みどろの殴り合いは未だ終わる気配を見せなかった。

ちなみにハーツはブルーゴジータに負けたアニメ本編よりも強くなっています。

Q、どうしてベジータは一人で戦うの？ もしかして何か深い考えが？

A、ない。（いつもの悪癖を発揮してタイマンに拘ってるだけ）

Q、トランクスと一緒に戦えばもっと楽に勝てるはずなのに、そうしないのはきつと何か考えがあるんだな？

A、ない。

Q、で、でも何かきつと……。

A、ありません。

第37話 誇りの一撃

ベジータとシーラスの戦いは終わりが近付いて来ていた。

激しく傷付き、最早気を失っていない方がおかしいベジータに対し、シーラスもスピリットの強制分離によってベジータと近いレベルにまで戦力が落ちていた。

しかしそれでも二人の間の差は大きい。

ベジータは奮闘したが、これではようやく対等に近付いただけだ。

しかしそこに至るまでにダメージを受けすぎている。

それは動きにも影響し、徐々に一方的にシーラスが殴り勝つようになっていた。二人の右腕がクロスして互いの顔を狙うも、シーラスの拳だけが一方的に当たる。続けて左。シーラスのフックがベジータの鼻を折り、膝蹴りが腹にめり込んで吐血を強要する。

何とか繰り出されたベジータのアップパーをスウェーで避けて脳天に肘打ち。頭が下がった所を今度は蹴り上げる。

「ぐ……お……く、くそった……れえええ！」

ベジータが震える拳でシーラスの肩を殴った。

第10宇宙の戦士が解放され、シーラスの顔が怒りに染まる。

そこから逆襲の連打。ベジータが減多打ちにされ、気がどんどん減っていく。

それでも何とか反撃しようとベジータが構えるが……ここにきて、運はシーラスに味方した。

突然何者かが、ベジータを背後から蹴り飛ばしたのだ。

「うぐおあ!？」

予想だにしなかった奇襲にベジータが悲鳴をあげ、何棟もののビルを突き破って地面に落ちた。

ベジータを奇襲した者の正体……それは、コアエリアの戦士の一角であるカミオレンであった。

隣にはラガスもあり、冷たい目でベジータを見ている。

「あははははっ! バーカ! シーラスが吸収していたのはお前等の仲間だけじゃないんだよ!

残念だったねえ? 折角いい線いったのに、僕等を解放しちゃってさあ!」

「吸収されてたせいなのか、傷も治っているわね。これならまた、ハーツ様の御役に立てる」

スピリットの強制分離は、吸収融合した者を無理矢理分離させる。だがその対象まで選べるわけではない。

シーラスが吸収した戦士の中には彼の仲間も含まれており、それが強制分離によって解放されてしまったのだ。

しかもジレンにやられる前の万全の状態に戻っており、これでは敵を増やしてしまっただけだ。

だが今度は、彼等が予期せぬ援軍に意表を突かれる番だった。

上空から飛来した緑とピンクの異形がカミオレンとラグスを蹴り落とし、彼等を見下すように腕を組む。

「これは失礼。希望を抱かせてしまったかな？ 残念だがここには私達もいるのだよ」

「あははっ！ 美味しそうなやつが二人……どっちを先に頂こうかしらねえ」セルと21号が悪人染みた笑みを浮かべ、カミオレンとラグスの前に着地した。

一瞬目配せをし、すぐにセルはカミオレンへ、21号はラグスへ向かった。

ラグスはすぐにガラス弾による迎撃を試みるが、21号は軟体生物のように関節を無視したような避け方をしてまるで被弾しない。

それどころか彼女が地面に足を突き刺した次の瞬間、ラグスの足元から21号の足が生え、痛烈に顎を蹴り飛ばした。

吹き飛んでいくラグスの髪を伸ばした腕で掴み、目の前まで引き寄せると彼女の頬を舐めた。

「貴方はどんな味がするのかしら。フフッ、楽しみだわ」

「ひっ……!」

ゾワゾワとした感触にラグスが悲鳴をあげ、ガラスの剣で21号の腕を切断した。しかし切断された21号の腕はラグスを掴んだまままるでロケットのように飛び出し、瓦礫に押し付けてラグスを固定してしまう。

21号は何事もなかったかのように腕を再生しながら、獲物を甚振るように一歩一歩ゆっくりと近付いた。

「この……甘く見ないで!」

ラグスが21号に掌を向ける。

すると21号の全身がガラスに覆われ、動かなくなった。

ジレンとの戦いでは使う暇すらなくやられてしまったが、彼女には切り札があった。

それこそがこの、ガラスの封印術だ。

一度この術に嵌ってしまえば不死身だろうと関係なく無力化してしまえる。

分かりにくければ、唾を当てる必要のないダーブラの石化能力とでも思えばいい。

そしてこの術は魔人ブウの再生力を持つ21号だろうと例外ではなく……むしろ21号のような相手にこそ効果を発揮する。

上手くいけば強大な力を持つ神ですら封印出来る規格外の術で、それ故にハーツはラグスの事を神々との戦いで重大な役割を担う存在……宇宙争乱の鍵を握る少女と見込んでいた。

「あ、あら？ 動けないわね……」

余裕ぶっていた21号の顔から笑みが消え、冷や汗が流れた。

どうやら戦闘力差だけを見て油断しすぎたらしい。

本家魔人ブウならここで、ラグスを捕まえている腕の方から本体が再生して何事もなかったように戦闘を続けるだろうが、流石に21号はそこまで出鱈目ではない。割と本気でピンチである。

——ただしそれは、21号が一人ならばの話だ。

「油断しすぎです。私達は能力はあってもまだ経験不足なんですから、気を引き締めない」と

行動不能に陥った21号から光が飛び出し、それが21号となった。

ただしガラスに閉じ込められている21号が紫色の肌にセルのような斑点、そして白目部分が黒くなっているのに対し、新たに現れた21号は元通りのピンク色の肌をしている。

「なっ……!!」

驚くラグスをもう一人の21号が蹴り、封じられている21号に掌を翳してガラスを破壊した。

解放された21号はもう一人の21号の隣に並び、バツが悪そうにそっぽを向く。

「礼は言わないわよ、私」

「必要ありません。それより前を見て下さい」

二人の21号がラグスを見据え、気を高めた。

善悪の分離。それは本来の歴史で魔人ブウが行うはずだったものであり、そして21号もまた別の歴史では善悪が分離して敵対関係になる。

本来の21号——素体となったドクターゲロの妻『ボミ』の人格を持つ主人格が善の21号。そして抑えきれない食欲が人格を得てしまったのが悪の21号だ。

ほとんどの歴史において主人格は悪^{ボミ}人格に乗っ取られて悟空達と敵対し、討たれる運命を辿っている。

乗っ取られない歴史でも善悪分離の果てに戦い、最後は両者共に消滅という末路を迎えていた。

同一人物でありながら……いや、同一人物のコインの表と裏だからこそ、決して相容れる事のないはずの二人。

しかしこの歴史においてのみ、善悪の垣根を超えて並び立っていた。

「カミオレンみたいに融合していたのが分離したの？ いえ、どっちでもいい！
だったら二人纏めて今度こそ！」

あまりに理不尽な光景にラガスが怯むが、今更二人に増える戦士など珍しくもない。

仲間のカミオレンだって分離すればカミンとオレンの二人に増える。

再びラガスが掌を翳すが、二人の21号は左右に散って回避した。

そして挟み込むようにラガスに手刀を当て、浮きあがった所で善^ボ21号^ミが追撃を行なった。

「てっ！ やっ！ はあっ！ そこ！」

拳打、蹴り、尻尾、また蹴りと繋げて頭突きで空中に運ぶ。Good！
攻撃が途切れると同時に今度は悪^食21号^欲が繋げる。

「それっ！ やあ！ そこね！ かわせるかしら！」

勢いをつけた尾の一撃から始まり、怒涛の攻めがラガスに回避も反撃も許さない。首を掴んで気を纏わせた手刀で切りつけ、地面に投げ捨てた。Fantastic^{フアンタスティック}

！
「覚悟はいい!?」

善^ボ21号^ミが突進し、嵐のような連撃をラガスに叩き込んだ。

最後に蹴りで吹き飛ばし、その後を悪^{食欲}21号が追う。

「まだ終わりじゃない！」

途切れる事のない連携は両方共自分だからこそ出来るものだ。

セルやりゼットが行う自分自身との連携は、限りなく完璧に近いが所詮は傀儡の拳。

四身の拳と自律気弾という違いこそあるが、所詮は連携の振りをした一人技に過ぎず100%の完成度を超える事はない。

しかし21号は違う。同一人物でありながら明確に違う二人の連携は互いが互いを高め、120%の完成度を発揮する。

連携という一点において、21号はリゼットを上回るポテンシャルを秘めている。

善悪二人の連続攻撃がラグスを追い詰め、そして同時に挟み込むように気弾を放った。

「これで」

「終わりよ！」

「きゃああああああ!!」

中央で気弾が爆発し、ラグスの悲鳴が響き渡った。

ボロボロになったラグスに悪^食21号がおやつ光線を当ててカップケーキにしてしまい、掌に収めた。

ド^ラマチックフィニッシュ!! WIN!!

「ふふっ……このまま食べてしまおうかしら？」

「ダメです。折角生け捕りに出来たんですから、ちゃんとセル^{タイムパトローラー}さん達に引き渡ししましょう」

美味しそうなスイーツを前に舌なめずりする悪^食21号を善^ボ21号^ミが姉のように叱った。

どうやら分離しても、欲望に忠実な片割れとそれを抑える理性的な主人格といふこの二人の関係はあまり変わらないらしい。

★

激しい攻防が繰り広げられていた。

空中でセルとカミオレンが激しい打撃戦を行い、距離を空ける。

戦闘は互角……しかし、両者の表情には違いがあった。

カミオレンは必死さを張り付けたような顔なのに対し、セルは余裕の笑みのままだ。

カミオレンは屈辱に顔を歪め、セルに怒鳴る。

「ふざけるなよ！ お前……本気で戦っていないな!？」

「ふっふっふ……そうカリカリする事もあるまい。ちよつとしたウォーミングアップだ」

「舐めるな！ 全力でかかってこい！」

怒りを露わにするカミオレンに、セルはやれやれと肩をすくめる。

手を抜いたのは何も、遊ぶ為だけではない。

無力さを痛感させてやる事で戦意を挫き、捕獲しやすくするという狙いもあった。彼等はある意味、フューの実験に付き合わされた被害者である。

この宇宙を荒らした一連の事件は紛れもなく彼ら自身の意思によるものだが、それでもフューによって本来集うはずがなかったメンバーが集められ、決起したのもまた事実であった。

だから生け捕りに出来るならその方がよかったのだが……しかし、こうまで感情

的で愚かでは生け捕りにしてもどうせ暴れるだけだろう、とセルは考え直す。

それに 21 号の方がラグスをいい感じに弱らせてくれているし、あっちの少女はまだ話を通じそうだと。

ならばもうこいつに用はないか、とセルは結論を出した。

「では、ちょっとだけ」

セルがギアを上げ、カミオレンの背後に回り込んだ。

咄嗟にカミオレンが振り向くも、セルは今度は前に移動。余所見をしている間抜けを蹴り上げた。

「がっ!？」

宙を飛ぶカミオレンの頭上にセルが瞬間移動。

強烈なエルボーを背中に叩き込み、地面に送り返した。

すぐにカミオレンが起き上がってセルに向かうが、少しの攻防の後にまた殴り飛ばされて地面を舐める羽目になる。

「ぐっ……くそ！ お前に……寄生してやる！」

カミオレンは液体金属のような特殊な身体を持つ人造生命体だ。

彼は相手の身体に入り込む事で寄生し、その身体を自在に操る能力を持っている。カミオレンが人型を捨てて液体となり、寄生するべくセルに飛びつく……が、届く前にバリアによって阻まれてしまった。

まさかの事態に動揺するカミオレンをセルが蹴り飛ばし、瓦礫に叩きつける。

「それがお前の切り札か……残念だったな。そんなものは私には通用せん」

ギュピ、ギュピ、と独特な足音を響かせてセルが近付き、カミオレンを嘲笑しつつ見下した。

「どうしたのだ？ 先程までのニヤけ面は。笑えよ、カミオレン」

「ぐう……くそ！ くそくそくそお！ 僕を、僕を馬鹿にしがたって！ お前は許さない、許さないぞ！」

カミオレンが怒りのあまりわなわなと震え、そして次の瞬間、膨大な気を全て己の内側へ集約させて最後の攻撃に出た。

「許さなあああー……い!!」

カミオレンが、まるで風船のように膨らんだ。

あつという間にセルより巨大になり、際限なくブクブクと広がっていく。

その姿をセルは興味深そうに見上げた。

「ほう」

「へ……へっへっへ！ 今更後悔してももう遅いぞ！ 僕はもうじき、爆発する……こんな星なんかひとたまりもない……もう僕自身にも止まらないぞ」

「それは困ったな」

セルは更にカミオレンに近付く。

攻撃する気だろうか？ そう考えたカミオレンは追加の情報をセルに与える。

「おっと、攻撃しようなんて思うなよ！ 下手な刺激を与えればその瞬間僕は爆発するぞ！」

「ふっ……」

セルは思わず笑ってしまった。

全く……追いつめられたからといって、なりふり構わずこんな醜い自爆をしようとするとは何とも見苦しい。パーフェクトな自分ならばたとえ追いつめられてもこんな真似はしないだろうとセルは確信する。

同じ人造生命体であっても、こうまで差が出るとは……何とも嘆かわしいもの

だ、とセルは思った。

尚、もしこの思考をリゼットが読んでいたならば「案外似た者同士」という感想を述べただろう。

セルは限界まで膨らんだカミオレンに手を当てると、己の額に指を当てて瞬間移動をした。

そしてセルとカミオレンは、とある宇宙船の中に出現していた。

「なっ……何だお前等!？」

そこは、いくつもの培養液にセブンスリーの同型機が収められているラボのような場所であった。

この宇宙船は、セブンスリーを作り出した科学者達が所有する物だ。

セルは非道にもそこに、爆発寸前のカミオレンを連れ込んだのだ。

「すまないな、ここしか思い浮かばなかったものでね」

嘘である。セルは自らの意思でこの場所を選択し、カミオレンを運んだのだ。

かつて宇宙の何処かにきつとあると信じてドラゴンボールを探していたセルは、この宇宙のどこに誰がいて、何を企てているかをリゼット以上に把握している。

ましてや今の彼はタイムパトローラー。過去現在未来の情報の宝庫にいつでも赴けるセルにとって、リゼットの手を逃れている悪党も把握する事など造作もなく、丁度いい機会だからとこの場所に転移したのだ。

リゼットはあれでかなり甘く、少なくとも兵器を作っているだけの科学者をわざわざ狙って攻撃したりしない。だからこういう奴等や、リゼットを警戒して大きな悪事を働いていないヒータ一味のような小悪党がまだこの宇宙には残っている。

後で時の界王神にどやされるだろうが……まあ、咄嗟の事でここに移動させるしか方法がなかった、被害を最小限に抑えるための仕方のない犠牲だったとでも説明して、地球の甘いスイーツをご馳走してご機嫌取りをすればいい。

もしかしたら罰として仕事が増えるかもしれないが、それもいいだろう。

正直なところ、時折『ご褒美』として振舞われる時の界王神の手料理を上回る罰は存在しない。

……あれは酷かった。まさかこのセルともあろうものが嘔吐して一時的にとはいえ第二形態に退化させられるとは。

それを思い出せば、多少罰が与えられるくらい何て事はない。

「じゃあな」

ピッ、と指先を立ててキザに別れの挨拶をし、セルはその場から消えた。

後に残されたのはカミオレンと、何が起こっているのか把握出来ない哀れな船の乗組員と科学者だけだ。

「ち……ちくしょおおおおー……!!」

カミオレンは爆発し、巻き添えにされた哀れな科学者諸共宇宙の塵となった。

★

「父さー……ん！」

トランクスは倒れているベジータの側まで飛び、彼を抱き起そうとした。

しかし当のベジータ本人に手を振り払われ、厳しい視線を向けられてしまう。

「馬鹿野郎……俺なんかを……気にしている場合か！ 手助けはいらん……さっさとあの野郎を仕留めてきやがれ！」

ベジータに言われ、シーラスの方を見る。

シーラスは憎悪の眼差しでこちらを見ており、今すぐにでも飛び掛かって来そう
だ。

当然こちらの会話など待ってはくれないだろう。

トランクスは小さく頷き、ベジータを置いて剣を抜いた。

「父さん、少し待っていて下さい。すぐに終わらせてきます！」

トランク스가地を蹴って走り、シーラスも棍を構えて前に出る。

金属音を響かせて二つの武器が衝突し、火花を散らした。

剣と棍が何度か衝突し互角の戦いが続く。その中でトランクスは右手を柄から離して掌をシーラスに向けた。

武器に集中している時こそ、他がおざなりになる。

リゼット
師の教えを身に刻んだトランクスは意表を突く形でシーラスに気功波を放つ。

シーラスを気功波が押し込んで爆発。爆煙が晴れる前にトランク스가距離を詰めて剣を上段に振りかぶった。

咄嗟にシーラスが防御しようと棍を頭上で水平に構えるも、何とトランクスは剣を手放して屈み、シーラスに水面蹴りを見舞う。

足元を崩されたシーラスが倒れ、トランクスは剣をキャッチして下段から切り上げた。

シーラスは何とか転がる事で避けてすぐに立ち上がり、気弾を連射する。

「はっ！」

トランク스가鋭い剣閃で気弾を切り払い、接近しつつ横薙ぎ。

後ろに下がったシーラスの腹の薄皮一枚を切るも、振り切った直後の隙を突いてシーラスがトランクスの脳天に棍を振り下ろした。

直撃——する瞬間にトランク스가廻る事で威力を逃がし、逆に遠心力を乗せた踵落としがシーラスの脳天に命中した。

するとシーラスの身体からトップポが分離され、地面に倒れた。

「!! 貴様もベジータと同じ技を!？」

「そうだ! これで皆は返してもらったぞ!」

シーラスが吸収した中で最強の、そして最後の戦士を分離され、更に力が落ちた。この上アムズとまで分離させられては勝ち目がなくなってしまう。

そう考えたシーラスは逃げるように距離を空け、両手を挙げてありったけの力を込めた。

シーラスの頭上に巨大な気弾が生成され、黒いスパークが迸る。

「これ以上お前達などに手間取っているわけにはいかん！ 私は私の正義の為に、世界を救わねばならんだ！ もう二度と、あの子供のような哀れな犠牲者を出さない為に！」

シーラスが最後の勝負に出た。

彼の正義は歪み切っているが、それでも生半可な想いではない。

その執念の全てを込めた気弾はシーラスの力の限界を超え、凄まじい力を迸らせている。

「小さな悲鳴を秩序の為と見殺しにするお前らのような悪に……私が負けるわけがない！」

トランクスはシーラスの言葉にあえて反論しなかった。

時の秩序の為……世界の為。そうした理由で不幸な歴史を不幸なままにしているのは紛れもない事実だ。

トランクス自身も絶望の未来を生きてきて、もったいい歴史にしたいと思った事は何度もある。

過去を悔やんだ回数など数えきれない。

あの時に戻れたならば……あの時に悟飯さんや姉さんと一緒に戦う事が出来たならば。

今の俺があの時に戻れたならば、絶対に死なせたりしなかったのに……！

何度もそう思った。魂のないリゼットの身体を前に何度も涙を流したあの悲しみは今も覚えている。

それでも人々は『今』を生きているのだ。

悲しみも絶望もあったが、その全てが今の自分を作っている。

そうした悲しい歴史を消し去って無かった事にして、幸せな歴史だけにしても、それは救った『気になる』だけであって、何も救えていない。

「悪と呼ぶなら呼ぶがいい。だが……辛くても今を懸命に生きる人達を否定して、無かった事にするなど、俺が許さない！」

トランクスは剣を鞘に戻し、両手の付け根を合わせる。

相手に背を見せる程身体を引き、手は顔の横へ。

彼を中心としてスパーク状の気が発生し、その構えにベジータは一瞬目を見開くと、どこか嬉しそうに口の端を歪めた。

「消えてなくなれええええ！」

シーラスが黒い巨大気弾を投げた。

迫る気弾を前にトランクスは益々気を高め、そして解放する。

「ギャリック砲ーっ!!」

トランクスがこの最後の対決の決め技として選んだのは、父の技であるギャリック砲だった。

別に何かこの技を選出した理由があるわけではない。

トランクスには彼独自の技であるバーニングアタックやフィニッシュバスター、サイクロンブラストがある。悟飯譲りの魔閃光もある。

だがここでトランクスが無意識のうちに選んだのは父ベジータのギャリック砲であつた。

トランクスのギャリック砲とシーラスの気弾がぶつかり合い、徐々にトランクスが押し込まれていく。

「ぐっ……ぐぐぐ……!!」

何とか押し返そうとトランクスも力を籠め、強く地面を踏みしめる。

だが少しずつ押し込まれ、敗北は時間の問題かと思われた。

その時、トランクススの横に満身創痍のベジータが並び、気を高める。

トランクスとベジータの眼が合い、ベジータが彼にしては珍しく、僅かに優しい笑みを浮かべた。

「手の形が違うぞ、トランクス。貴様のそれはカカロット達が使うかめはめ波の形だ」

「え？」

「いいか、手の形はこう……右手の甲に左の掌を合わせる。これが正しい形だ。

そして半身を捻り、誇りを……絶対に負けるものかという想いを込めて撃つんだ

——ギャリック砲——!!」

ベジータがギャリック砲でトランクスを援護した。

もう彼には超サイヤ人ブルードころか、普通の超サイヤ人になるだけの力もない。

単純な威力で言えば、この援護はほぼ無いも同然だ。

しかしトランクスは、心の奥底から力が湧き出て来るのを感じた。万の援軍を得た気持ちだった。

「トランクス！ 踏ん張りやがれえ！」

「はいっ！」

ギャリック砲が勢いを増し、巨大気弾を押し返す。

シーラスが驚いて気弾に更に力を籠めると、またトランクス側に押し込まれ、押して押されての均衡状態となった。

こうなってしまうえば、あとは意地の勝負だ。先に少しでも力を緩めた方が負ける。

「私は負けん！ 負けるわけにはいかん！ 悪のいない世界を作るまで……世界を救うその時まで！」

しかし意地ならばシーラスに軍配が上がる。

かつて時の界王神によって時の狭間に封印され、永い時間を経て尚正義への想いを捨てきれないどころか強めてきた男だ。

想いにかけてきた時間が違う。

「ト、トランクス……もっと力を……振り絞りやがれえ……っ」

「も、もう……やってます……！」

少しずつ押し込まれ、再び窮地に迫いつめられる。

だが援軍は意外な場所からやってきた。

ハーツと悟空が戦っている方向から、小さな戦士が飛んで来たのだ。

それは、この時代のトランクスであった。

父と、そして未来の自分の奮闘を見て我慢できなくなった彼はブウに頼んで外に出して貰い、ここに馳せ参じたのだ。

「パパ、未来の俺！俺も手伝うよ！」

少年はトランクスとベジータの間に立つと超サイヤ人となり、そして見様見真似でギヤリック砲を発射した。

ベジータとトランクスはそんな、小さくとも頼もしい援軍を見て穏やかな笑みを浮かべ、負けていられないと力を籠める。

ベジータも限界を超えて超サイヤ人となり、そして最後の……三人にとって一番の援軍が、全力で声を張り上げた。

「ベジーター！ トランクスー！ やっちゃえー！ー！ー！」

それはブルマの——愛する妻の、母の声援だ。

同時にベジータと二人のトランクスが目を見開き、これまで以上の力を発揮した。

「「はあああああー！ー！ー！ー！ー！ー！」」

三つの気功波が完全にシーラスの気弾を押し返し、そして驚愕に顔を歪めるシーラスを飲み込んだ。

ベジータ「俺達のパワーが勝ったー！」

ブロリー「……………」

ベジータ「はっ!？」

／オオオオオオオオオオ／ ……／ ああおふ!？／ 宇宙の中で一番環境が整った

美しい岩盤でございます／

【親子三大ギャリック砲】

悟空、悟飯、悟天の親子三大かめはめ波があるなら、三大ギャリック砲があってもいいんじゃないかなと思ってこんな展開になりました。

地球での戦闘開始直後からずっとブルマを近くに配置してたのはこの為と言って

も過言ではない。

【カミオレン風船モード】

どこかで見たような自爆技。ヒーローズ本編でカミオレンがこんな技を使う描写は無い。

しかしカミンとオレンの技が敵の近くまで飛んで全身から爆発を起こすという技なので、使っても違和感なさそうだと思ってやらせてみた。

尚、今話のセルの後頭部には特大のブーメランが突き刺さっているが本人は気付いていない。

【少年トランクスはギャリック砲使えるの？】

不明。原作やアニメでそんな描写はない（はず）。

ただ、現代ベジータは息子好きだし、技を一通り見せてあげて「パパすごーい！」とか言われてご満悦になっていても何の違和感もない。

未来トランクスは一緒に精神と時の部屋に入った時にでも見たのではないだろうか。

【Good! Fantastical! DRAMATIC FINISH!!】

グッドとファンタステックはドラゴンボールファイターズで一定回数コンボを稼ぐと出てくるメッセージ。

ドラマチックフィニッシュは本来は特定条件下で試合を終わらせる事で出るメッセージ。

ちなみに21号はこの後ちゃんと一人に戻ります。

第38話 人の輝き

激しい戦いが続いていた。

白と黄金の流星が縦横無尽に空中を駆け回り、幾度も衝突しては大気を震わせる。悟空とハーツが高速の打撃戦を交わし、その度に二人の気の強大さに怯えるように地球が震えた。

ハーツは心を読むが、今の悟空は身体が勝手に動いている。故に心をいくら読んでも意味はない。

動きを封じようと重力を放ったその瞬間には既に悟空は視界内から消えており、跳躍して背後に回り込んでいた。

「はっ！」

「でやっ！」

振り向きながらハーツが回し蹴りを放ち、悟空も蹴りで応戦する。

二人の足が交差して衝撃波が発生し、一度距離が空いた。

だが両者共にすぐに飛び出し、すぐに打撃戦が始まる。

何度も高速移動をしてその場から消え、別の場所でもた戦う。

放たれる気弾の弾幕の中を悟空が突っ切り、僅かしかない安全圏に身体を潜り込ませて接近、ハーツを蹴り飛ばした。

重力操作で吹き飛ぶ身体を無理矢理制止して今度はハーツが悟空を殴り飛ばし、悟空もすぐに体勢を戻して接近する。

迎撃の拳を残像拳で避けて上から急襲。踏みつけるような蹴りでハーツを地面に叩き落とすも、ハーツはすぐに浮上して今度は悟空を上空へ殴り飛ばす。

同時に前に出て拳同士を衝突させ、接近した状態でハーツは両手を広げて気を溜め、悟空は両手を腰に合わせて気を溜める。

——解放。ハーツの気功波と悟空のかめはめ波が至近距離でぶつかり合い、爆煙が晴れると両者共に健在のまま向かい合っていた。

「身体が勝手に動くというのは思ったより厄介だな。君の心と違う攻撃が来る。

しかし力も速さも、純粋なスペックならば俺の方が圧倒的に上だ。既に勝負は見えた」

「そうかな？ やってみなきゃ分からねえぞ」

「分かるさ……すぐにな！」

ハーツが腕を振り下ろし、自身を中心とした広範囲に重圧をかけた。

身勝手の極意といえど、避ける隙間がなければ流石にどうしようもない。

悟空の身体に重さがのしかかり、彼の動きを封じた。

地面に足がつき、地面にマス目が現れる。

「終わりだ！ グラビティ・フィナー……」

先程リゼット達に多大なダメージを与えたハーツの技が再び炸裂する……その瞬間。

悟空はニッ、と笑うと額に指先を当てた。

瞬間移動でハーツの頭上に出現し、重力を利用して急降下——踵落としをハーツの脳天にめり込ませた。

「がっ!？」

衝撃でハーツの重力場が解けて身体が軽くなった。

その軽さを活かすように今度はハーツの前で横回転。

狙いは首筋！ しかしハーツはここまでの戦いで、既に悟空の心の声は当てに

ならないと学んでいる。

ならば勝手に動く身体は別の場所を狙うはずだ。そう考えて首のガードを逆に下げ……そのまま悟空の蹴りがハーツの首元に叩き込まれた。

「なっ……にい!？」

悟空がやった事は単純だ。

勝手に別の場所を攻撃しようとする身体を無理矢理抑え込んで、思った通りの場所を攻撃した。それだけの事に過ぎない。

ハーツは何とか距離を取ろうと後ろに飛ぶが、悟空もその後を追う。

迎撃しようとハーツが手を翳す。重力が悟空を襲い、しかし悟空はそのまま構わずに突っ切った。

「馬鹿な！」

ハーツの重力を突破した悟空にハーツが驚き、攻防が始まる。

悟空の放つ拳打、その一撃一撃が先程よりも重く、速い。

ハーツはここにきて、悟空の力がどんどん上昇している事に気が付いた。

そしてその理由もまた、悟空の心を読んで理解する。

「そうか……身勝手の極意は身体も勝手に強くする……！」

だから俺が重力をかければかけるほど、適応しようと……」

「ああ！ お前の重さに合わせてオラも強くなるんだ！」

これは決してリゼットには引き出せない身勝手の極意の強みだ。

身勝手の極意は勝手に身体が動く。

そしてそれでも届かない場合は、届くまで身体を強化する。

この強化に耐えられるだけのタフさがなければ自滅してしまうが、悟空には十分耐えうるだけの下地が備わっていた。

「だが完全ではない！ 君の身勝手の極意は、長続きしないと君の心が教えてくれる！ そしてもう、維持するのも限界だとな！」

悟空は何とか身勝手の極意を完成させた。

しかしまだ完璧に使いこなしているとは言い難い。

当たり前だ。破壊神ビルスすら未だ習得出来ない神の御業を人間が使えるだけで既に異常なのだ。

その上、こんな短い期間で使いこなされては神の立つ瀬がない。

悟空は汗をかきながら苦笑する。

「バレたか」

一度戦いは膠着状態に陥り、悟空とハーツは空中で向かい合う形となった。

ハーツの指摘は凶星である。悟空はもう身勝手の極意を維持出来ない。

ならば後はこのまま、変身が解けると同時に決着だ。

しかし悟空はこんな時だというのに笑みを抑えられず、不思議な高揚感に包まれていた。

「お前の言う通り、もうオラは身勝手の極意を使えねえ」

悟空の変身が解除され、髪が黒髪に戻ってしまった。

この瞬間ハーツの勝利が決定した……はずだ。

しかしハーツは、全く安心出来なかった。

何故なら、悟空から感じられる威圧感が……感じられる力強さが、変わっていないのだ。

「けどよ、身勝手の極意が言ってるのさ」

悟空の髪が逆立った。

黒髪が金色に点滅し、少しずつ気が膨れ上がっていく。

全身に力が漲り、眼の色が緑色へと変わる。

「——もっと先へ行けてな！」

髪が金色に染まり、全身が黄金のオーラに包まれた。

ここにきて、まさかの普通の超サイヤ人だ。

だが感じられる力の波動は、ただの超サイヤ人を遥かに超えている。

『あれは……あの時と同じ……！ けど、こんな事が』

戦いを観戦していたリゼットが驚いたように身を乗り出した。

一体何にそんなに驚いているのか分からず、ブウが目を丸くする。

「どうした？ 何にそんなに驚いている？」

『そりゃ驚きますって。とんでもない事やってますよ、悟空君……いやはや、天才というべきか、鬼才というべきか……一周回ってもうただの馬鹿と言うべきか……』

悟空が『この状態』になるのはこれで二度目だ。

力の大会でジレンと戦った時も悟空はこの奇跡のような技を使っていた。

しかしあの時と違い、リゼットも身勝手の極意を身に着けたからこそ改めて分か

る出鱈目さがある。

リゼットは引き攣った笑みを浮かべ、今悟空が行っているとしてもない事を説明した。

『……悟空君……身勝手の極意で上昇した力を維持したまま、超サイヤ人になってます』

「……は？」

思わずその場の全員が間の抜けた声を出してしまったのも無理はない。

身勝手の極意は身体を勝手に強くする。

当然その強さは変身解除時に失われるもののだが、悟空は何と変身を解除しつとも上昇した強さを留めているのだ。

初めて超サイヤ人ゴッドになった時に悟空は神の力を取り込んだ普通の超サイヤ人になった事があった。

そして今回は、身勝手の極意の力を取り込んだ超サイヤ人になったのだ。

「行くぞハーツ！ 戦いは、ここからだ！」

「本当に……本当にとんでもない奴だな君は！ 限界を超えて、尚も輝くという

のか！」

悟空とハーツが楽しそうな笑みを張り付けたまま衝突した。

ハーツは元々、人の輝きと自由を愛する男だ。

そんな彼から見て孫悟空という男は何よりも眩しく、そして自由に見えた。

何にも囚われず、神の奥義にすら囚われずに己の道を突き進む。

これが人の可能性、人の煌めき！

ハーツは戦いの最中でありながら、敵のはずの孫悟空という光に心を焼かれ、引き上げられるように高揚する。

悟空の拳がめり込み、ハーツの拳が悟空の頬を打つ。

蹴り、蹴られ、拳を組み合って膝蹴りをぶつけ合う。

痛みはある。だがその痛みが不思議と心地よかった。

もっと戦いたいと柄にもなく思ってしまう。もっとこの男の可能性を見たいと願ってしまう。

ああ、なんだこれは、とハーツは思う。

この孫悟空という男は敵だろう？ 目的を果たす為の障害だろう？

なのに何でこんな——こんなにワクワクする!!

「ハーツウウウウ!!」

「孫悟空ううう!!」

既に服はボロボロで、両者共に上半身を曝け出した痛々しい姿だ。

全身は血に塗れ、無事な箇所はない。

しかしその顔だけは場違いなほどに明るく、笑みが零れていた。

「だりやりやりやりやりやりやりやりやりやりや!」

「うおおおおおおーッ!!」

互角の攻防が続き、打撃音が休む事なく響き続ける。

姿を消して別の場所で打撃戦——また移動して打撃戦を続ける。

ハーツが重力で悟空を高く跳ね上げ、先に回り込んで殴り落とす。

更にその先に移動して蹴り上げ、三度先回りして殴り飛ばした。

悟空がいくつものビルを突き破って地面に突き刺さり、ハーツがすぐに後を追う。

立ち上がった悟空が連続で気弾を打ち、ハーツが手刀で弾く。

その一瞬の隙を逃さず瞬間移動で接近した悟空がハーツの顎を殴り、上空へ飛ば

した。

そこに追い打ちの気弾連打。咄嗟にガードしたハーツを爆煙が覆い、直後に背後に回り込んだ悟空が肘打ちを放った。

しかしハーツの姿が消えて逆に背後から攻撃される。

これを悟空も高速移動で避けて背後を取るが、ハーツもすぐに背後を取り返す。高速のバックアタックの応酬。それを制したのは悟空で、遂にハーツに炸裂した拳打が彼を地面へ向けて殴り飛ばした。

流星となって地面に激突したハーツは、しかし楽しそうに立ち上がる。

「まだまだ孫悟空！ もっと俺に魅せてみる……人の可能性を！」

ハーツの腕の周囲に重力を伴った気が渦巻き、高速回転を始めた。

それはまるで腕に竜巻を纏わせたようであり、ハーツの腕を中心に大気が吸い寄せられていく。

宇宙の種の力で回復するはずのハーツだが、悟空から与えられたダメージがそのままだ。

それはつまり、本来回復に回すはずの力すら攻撃に転化している事を意味する。

「すげえ気だ……全部の力を腕一本に集めたんだな。だったらオラも！」

黄金の気が右腕一本に集約され、ハーツはそこに解放される直前の龍を見た。

ハーツと悟空が引かれ合うように飛び出し、最大の大技を同時に放つ。

「ぶっ潰れるオオオ！ グラビティフィストオオオオ!!」

「貫けええええ！ 龍拳……爆発!!」

重力の拳と黄金の龍が衝突し、凄まじい衝撃波が吹き荒れた。

激突は数秒続き、どちらも負けじと押し合う。

やがて臨界を迎えて爆発を起こし、悟空とハーツが吹き飛ばされて離れた場所に

墜落した。

しかしまだどちらも闘志は折れていない。

よろめきながらも立ち上がり、ハーツが空高く浮上した。

「素晴らしい力だ、孫悟空……君は本当に大した奴だ。」

だが俺には負けられない理由がある。今更止まるわけにはいかないんだよ。

だから……」

ハーツが残るありったけの力を吐き出した。

瞬間、空が割れた。

ハーツが最後の攻撃として選択したのは、超重量による圧殺。

即ち、隕石であった。

このレベルの戦いになれば隕石など、本来大した脅威ではない。

軽く気功波の一発も当ててやれば簡単に碎けてしまう程度のものだ。

だが今、ハーツが呼び出した隕石にはハーツと、宇宙の種の気が宿り守っている。生半可な攻撃で碎く事は出来ない。

「俺を止めたいならば……この一撃、防いでみせろおお！」

ハーツが腕を振り下ろし、隕石が地球へ降下を始めた。

これに対し悟空はかめはめ波による迎撃を選択して構える。

だが、その肩をジレンが掴んだ。

「孫悟空、それではアレは防げん。俺との戦いで使った元気玉という技を使え」

「ジレン……けど、元気玉は作るまでに時間が」

「稼いでやる」

ジレンが悟空の前に出て、その隣にヒットとブウ、そしてリゼットが並ぶ。

「元氣玉を作るまでの時間を俺達が稼ぐ！ 奴に見せてやれ……宇宙に生きる人

間達の力を！」

「……ああ！ すまねえ、ジレン！」

悟空が超化を解除して上空に両手を挙げ、ジレンが身体の奥底からありったけの力を引き出した。

彼の全身を揺らめくような紅蓮の気が覆い、迫る隕石を相手に正面から立ち向かう。

「はあああああッ……！」

ジレンの全てを込めた気功波が隕石に衝突し、隕石の接近を止めた。

ヒットとブウもジレンを援護するように気功波を発射し、混ざりあった三つのエネルギーが隕石と押し合う。

ぶつかり合う二つの力を前に、悟空はあの一撃を破壊出来る力を求めた。

一つの惑星のエネルギーだけでは、宇宙の種には及ばない。

だから悟空はこの第7宇宙……いや、その外の12宇宙にまで規模を広げ、元気を分けてくれるように念じた。

しかし界王もない今……いや、いたとしてもそこまで悟空の声を届ける事は出来なかっただろう。

だがこの世界にはまだ、唯一残った神であるリゼットがいる。

『悟空君、貴方の声を私が中継して何とか他の宇宙にまで送ってみます』

「そんな事出来るのか!？」

『分かりません。流石に第7宇宙の外にまで思念を飛ばした経験はないので……けれど、何とかやってみます』

分身のリゼットが悟空の背に手を置き、神殿で休んでいる本体へ悟空の思念を送った。

そして本体のリゼットが、全力で思念を飛ばして各宇宙へ悟空の声を届ける。

今まで一度もやった事がないし、クウラとの戦いの後遺症が残るリゼットには困難な作業だ。

だがそんな泣き言を言っている余裕などない。

元々この戦いは、神に対する不満が表面化したものであり、本来ハーツ達の怒りを受けて戦うべきは神々のはずである。

しかもここまで宇宙が追い詰められたのは肝心の神々が不在だったせいだ。

いわば積み重ねた神の失敗、神への不満。そうしたものが牙を剥いたに過ぎず、その代償を人間に支払わせてしまっている。

ならばせめて、この宇宙に残された唯一の神として……限界を超えて戦ってくれている悟空達の為に無理の一つも出来ずして何の為に星の神か。

「よし……！ 全宇宙の皆！ オラに元気を分けてくれ！」

悟空の呼びかけに、第7宇宙の星々が応えた。

あらゆる星、あらゆる生物から元気を少しずつ分けてもらう。

ナメック星人や『永遠の美』の構成員達、そしてザーボンは少しと言わず全部持って行けとばかりに手を上げて気を送り込み、神殿に残っていたバーダック達も気を放出する。

「この声は……悟空さん!? ケールさん、カリフラさん！」

「ああ！ この手で直接ぶちのめせねえのは悔しいが……頼むぜ孫悟空！ あいつらにきつい一発かましてやれ！」

「この戦いが終わった時、何故私がドクターと呼ばれているか教えようではないか

！」

第6宇宙の戦士達も手を挙げて悟空の勝利を願い、気が悟空へ送り込まれていく。

キャベ、カリフラ、ケールは勿論の事、ドクターロタやサオネル、ピリナ、マゲッタ、ボタモ、そしてフロストも渋々と言った様子で両手を上げる。

「よし、我等の力も持って行け！」

第10宇宙からも気が流れ込み、元氣玉がどんどん大きくなっていく。

マツチヨな宇宙の戦士達はそれぞれが思い思いのポージングを決め、倒れるまでその姿勢を維持し続けた。

「よしお前達！ 我等第3宇宙の力も届けるのだ！ 合体だ！」

第3宇宙ではドクターパパロニの号令でアニラーザに合体し、全ての改造戦士が気を送り込む。

「何でもいいからとにかく勝ってー！」

第4宇宙ではキャウェイが両手を挙げて悟空を援護し、他の面々も続いた。

更にベジータによって解放された第11宇宙、第2宇宙、第9宇宙の戦士達も悟

空に望みを託す。

だが元氣玉が完成に近づく中、状況が変わった。

ジレン達の氣功波が押し負け、隕石が迫って来たのだ。

最早これまで……そう思われた中、ジレンが目を見開き、隕石へ飛び込むと両手を広げて受け止めた。

「まだだ！」

両手が焼ける。この隕石はただの隕石ではない。

ハーツの力を全て込めた一撃であり、いわば宇宙の種のエネルギー全て……一つの宇宙を生み出すほどの莫大なエネルギーが秘められているのだ。

宇宙を消してしまえる全王の対極に位置する宇宙を生み出すエネルギー。それは本来、一人の人間の力でどうこうなるものではない。

「ま……まだだ……まだ……！ 俺は……俺は……！」

自らの汗すら蒸発するほどの熱い気を噴き出し、宇宙最強が意地を見せた。

宇宙一つを生み出す程のエネルギーに後押しされた隕石を、たった一人の人間の身で受け止めて耐え凌ぐ。

ずっと、過去から逃げるように強さを追い求めてきた。強さの果てにあるものを知りたかった。

強さこそが全て。力は全てを許してくれる……過去さえも。そう信じて闇雲に強さに逃げてきた。

だが今は違う。かつては分からなかった答えが今なら分かる。

何故ここまで強くなったのか。

それはきつと、この時の為に。

どれだけ小さく儂くとも、決して踏みにじってはならぬものを守るために。その為に俺は強くなったのだ、と今ならば誇りを持って言える。

「俺は——プライドトルーパーズ、灰色のジレン!! 俺がいる限り、これ以上何一つとして踏みにじらせはせん!!」

それを教えてくれたのが後ろにいる孫悟空^{おとこ}だ。

だからこそ、こいつの前で無様は晒せない。

彼は己を信頼して元氣玉を作っている。ならばその信頼に応えるまで!

「ううおおおおおおおおおおおおおおおおお————」

ッ！！！！！」

ジレンが吠え、あろう事か隕石を僅かに押し返した。

掌が焼け、血が溢れ、それでも尚宇宙を守る正義の守護者としての誇りでこれ以上の前進を許さない。

ジレンの奮闘は決して無駄ではない。

彼が止めているその間に、他の宇宙からも続々と気が集まり、そして悟空は完成を確信した。

「出来た！ 待たせたなジレン！」

「いけええええええ！ 孫悟空！」

悟空は大きく身を逸らし、元気玉を投げつける姿勢に入る。

「受けてみるハーツ！ こいつは宇宙に暮らす皆の願いだ！ 滅茶苦茶にぶっ壊された宇宙の叫びだ！」

そして発射。超巨大元気玉が解き放たれ、隕石に衝突——砕きながらハーツ目掛けて飛翔した。

その眩い輝きを前にハーツは驚愕に顔を歪め、しかしどこか嬉しそうな表情をし

た。

「ああ……」

感極まったような声が自然と漏れる。

不思議と悔しさはなかった。むしろ、こうなる事を望んでいたような……ずっと見たかった宝物を見付けたような喜びさえあった。

敗北を悟りながらハーツは己の心を不思議に思い……そして理解した。

もしも神の力によつて捻じ伏せられたならばきつと、こんな穏やかに敗北を受け入れる事は出来なかっただろう。

だがこれは神の力ではない。人の力……人の意思だ。

ハーツが何よりも愛し、尊んだ人の光そのものなのだ。

自分が負けたのは忌まわしい神ではない。

神よりも強く、そして何より自由な人間に敗れた……そう理解し、ハーツは力を抜いた。

「なんて美しい……俺はやっぱり……人間が、好きだ……この世界に生きる、全ての人々が、俺は……」

どこまでも眩しく、愛おしい人の光。

それを抱きしめるようにハーツは両腕を広げ……。

——そのまま元氣玉に飲み込まれた。

ピエロ「……………この戦いを生で見る事の出来なかった俺の哀しみは計り知れない……………計り知れない……………」

ビルス「しつこいぞ！ リアルタイムで観戦するジレンの活躍！ アーカイブで観戦するジレンの活躍！ そこに何の違いもありゃしないだろうが!!」

ピエロ「違うのだ!! (血涙)」

【身勝手の極意＋超サイヤ人】

Q、前章第百二十三話で「多分もうならない」と言わなかったっけ？

A、た、多分は多分だから……。

まあジレン戦のは身勝手と超サイヤ人の同時発動だったのに対し、今回は身勝手↓身勝手解除↓超サイヤ人なので微妙に違うという事で……。

【元氣玉フィニッシュ】

折角全宇宙を巻き込んだ争乱なので力の大会に参加したほぼ全員の力を込めた超元氣玉フィニッシュを決め技に選んだ。

やっぱ元氣玉フィニッシュも一度くらいはやっておかないと。

Q、ピエロに何か救いはないんですか？

A、そんなもの……うちにはないよ。

第39話 争乱の果てに

「気付いていたさ。自分達が矛盾している事くらいな」

戦いは終わった。

付近は荒れ果ててしまったが、幸いにして死者はいないし、一般人の怪我人もいない。

キャウェイの通信のおかげで事前に敵の襲撃を予期できていた。だから避難は既に完了済みで、被害は最小限に留められたと言っている。

荒れた大地の上で寝転がりながら、もう立つ力も残っていないハーツは空を見上げ、今回の自分達の行動について語った。

「人間の自由を愛すると言いながら人間を攻撃する。悪のいない世界を作ると言いながら自分がその悪になり下がる。俺達はきつと最初から破綻していたんだ」

ハーツを見下ろすのは悟空を先頭にしたら、この戦いに加わった全員だ。

ブウもいつもの太っちょの姿に戻っており、吸収されていた皆も解放されていた。「だが俺は、それでも見たかったんだ。全王の……神々のいない真に自由な宇宙を。」

破壊神の気まぐれに怯える事もなく、暴走した界王神の一方的な裁きを受ける事もなく……そして全王に消される心配のない、そんな宇宙を……俺は見たかった」

ハーツは穏やかな顔で空を見上げ、憑き物が落ちたように微笑む。

「だが……安心したよ。俺が思っていたよりもずっと人は強くて……自由だ」
ハーツの身体が崩れていく。

宇宙の種という人の身に余る力と同化した代償なのだろうか。

足元から塵のように崩れて風に飛ばされていき、徐々に人の形を失っていく。

やがて崩壊は顔にまで到達し、ハーツは最後に己の運命を受け入れるように目を閉じた。

「俺も……もう、自由に——」

彼の言葉が最後まで続く事はなかった。

言葉の途中で完全にハーツという存在は塵となり、跡形もなく消え去ってしまった。

悟空はハーツだった塵を掴み、そして空へとそっと解き放った。

「またな」

たった一言の別れの言葉に万感の思いを込めてハーツを送る。

少しだけ、彼の気持ちは悟空にも分かった。

今はビルスや全王とそれなりに仲良くやれている。

だが何か一步間違えれば地球が破壊されていたかもしれないし、消されていたかもしれない。

もしそうだった時、きっと今のような関係にはなれなかっただろう。

もしかしたら怒りのままにビルスや全王に立ち向かう……そんな未来もあったかもしれない。

そんな考えを胸の内に仕舞い込み、悟空は少し離れた位置のベジータ達へ視線を向ける。

「あっちも終わったみてえだな」

ベジータ達が戦っていたシーラスという男は、もういない。

三人のギャリック砲によって完全に消滅し、彼の目指した正義はここに潰えた。

「神様、ハーツ達にやられちゃった宇宙を元に戻せねえかな？」

『勿論そのつもりです。ダークドラゴンボールで超ドラゴンボールを使える状態に

戻して、超ドラゴンボールで宇宙を元通りにしましょう』

ダークドラゴンボールから呼び出される赤い神龍は通常の神龍やポルンガよりも上の力を持つ。

この世界では上位互換に超ドラゴンボールがあるのに究極の名を冠するのは滑稽という理由で改名されてしまったが、GTでは究極のドラゴンボールとまで呼ばれた代物だ。大抵の願いはこれで何とかなる。

しかし十二宇宙全てを元通りにするのは、さすがの赤い神龍でも荷が重い。

そこでリゼットは赤い神龍を使って超ドラゴンボールを揃えて石になる前に巻き戻し、その超ドラゴンボールの願いで宇宙を戻す事を提案した。

ダークドラゴンボールならば指定した物体の時間を巻き戻すくらいは造作もない。

リゼットは早速その準備をするようにタピオンとポポに指示を出し、二人は急いでドラゴンボールを取りに向かう。

「俺の仕事は終わった。第6宇宙に帰るとしよう」

「俺もこの場に用はない。戻らせてもらう」

ヒットは元の宇宙に帰るべく歩き出し、ジレンも解放された仲間達と共に歩む。何とも素っ気ないものだが、これもまた彼等らしいと思ひ悟空は笑った。

「ジレン、ヒット！ あんがとな！ おめえ達が来てくんなきやばかったぞ！」

「俺は俺の仕事をこなしたただけだ」

「仲間を取り戻しに來ただけだ。感謝は必要ない」

ヒットとジレンは無表情で振り返り、悟空を見る。

しかしその顔はどこか穏やかで、優し氣だ。

「そっか……なあ、二人共！」

悟空は齒を見せて笑顔を浮かべ、握り拳を固める。

そしてパンチをするように突き出した。

「次会ったら、また闘ろうぜ」

こんな時まで変わらない悟空のバトルジャンキーぶりにクールな二人の眼が丸くなり、一瞬その口元が緩んだ。

見られないようにすぐに背を向けて、どちらも拳を高々と突き上げる。

——次は俺が勝つ。

言葉に出さずとも、背中と拳が雄弁にそう語っていた。

去って行く別の宇宙の好敵手を悟空が見ていると、その隣にピッコロが立った。

「全く……次から次へとライバルを増やしやがって。

だが孫、忘れるなよ。お前を倒すのはこのピッコロ様だという事をな」

僅かな嫉妬混じりの打倒宣言に悟空も好戦的な笑みで応える。

来るならばいつでも歓迎だ。彼の眼はそう言っている。

「ピッコロお前……まだ悟空を倒す事を諦めてなかったのか。そんな今更ライバル主張しなくても……」

「い、今更とは何だ、今更とは」

思い出したようにライバル主張を始めたピッコロに、クリリンが若干呆れ声で話す。

ピッコロがすっかり仲間の一員となって久しく、クリリンの中ではピッコロは悟空のライバルというよりは悟飯の師匠兼、いい感じの相棒というポジションに収まっていた。

「そ、そういえば忘れていた……お前はピッコロ大魔王だったな……」

「忘れるなよ……」

天津飯の言葉にピッコロが苦虫を噛み潰したような顔をした。

「あっ、わかった！ 父さんがどんどんライバルを増やすから、一番最初のライバルとしてピッコロさん焦ってるんだ！」

「悟飯！ そういうのは口にせんでいいっ！」

悟飯の空気を読まない発言に、どうやら図星だったらしいピッコロが突っ込みを入れた。

しかしここで、更に空気を読まずにヤムチャが口を挟む。

「おいおい、悟空の最初のライバルはこのヤムチャ様だろ。これでも俺だって悟空と互角の時期もあったんだぜ」

「え？ あんたはお腹空かせた孫君に一回優勢になっただけで、互角だった時期ないと思うけど……」

「がっ!？」

自分こそ一番最初のライバルだと主張するヤムチャに、ブルマの無慈悲な突っ込みが入る。

そうしてやいのやいのと盛り上がっていれば、当然我慢が出来なくなるのはこの男だ。

「やい貴様等！ さっきから好き勝手言いやがって！

カカロットはあ……俺のもんだ！ 勝手に手を……出すな！」

……場の空気が凍った。

クリリン達はベジータの事を「マジかこいつ」といったような顔で見えており、一斉にベジータから距離を取った。

ブルマは不機嫌になり、トランクス二人は困惑したようにベジータを見ている。一方、何故か凍り付いてしまった雰囲気^{きふくき}に当のベジータも困惑し、何故こんな空気になったか分からず間拔けな顔をした。

そして自分の発言を思い出し、失言をようやく理解する。

「クッククック……これはこれは」

「え？ え？ ベジータさんってそういう……あわわわわ」

セルはベジータの失言を察して愉快そうにし、一方付き合いの浅さからベジータをよく理解出来ずに真に受けてしまった21号は顔を赤らめている。

「人間テンパるとんでもない事を言うもんだねえ」

「見ている分には面白いな」

18号と17号は愉快的動物を見るような目でベジータを観察し、あえて口を挟まず動向を見守っていた。

「ま、待て！ 違うぞ！ そういう意味じゃ……」

「ベジータ」

「な、何だカカロット」

「悪い、オラにはチチがいるから、ちょっと……」

「違うと言ってるだろうがあ！ 貴様分かってて言ってやがるな!!」

慌てて弁明するベジータと、それをからかう皆。

そんな光景を見守り、リゼットとカリンは思わず顔を見合わせて笑い合う。

今回はかなり危なかったが、それでも終わってみればこうして悟空を中心に笑い合う光景が出来上がっている。

それがリゼットには何だか嬉しかった。

今回自分は不甲斐なくもクウラとの戦いで倒れてしまい、そんな時に地球に危機

が迫ったが……それでも、悟空がいるから不安はなかった。

本当に、彼がいてくれてよかった。心からそう思う。

『はいはい、皆。ベジータの趣味はともかくとして、ひとまずブウの治療を受けて下さい。ブウ、頼みますよ』

流石にちょっとベジータが可愛そうなのでベジータ弄りを中断させ、ブウに皆を治療してもらうように指示を出す。

ひとまず皆の治療を行い、それから宇宙を戻そう。

神々は時の界王神が何とかしてくれるだろうから、きっと大丈夫だ。

……それとついでに、超ドラゴンボールのマイナスエネルギーの浄化もやっておう、とりゼットは決めた。

流石に超ドラゴンボールから邪悪龍が出るとは思わないが、まあ念の為だ。

★

「トランクス、皆……お疲れ様」

——時の巢。

そこでは事の成り行きを見守っていた時の界王神が安心したような顔で巻物を見

ていた。

巻物の中では孫悟空と仲間達が超ドラゴンボールから金色の神龍を呼び出しており、じきにあの時間軸の宇宙は元に戻るだろう。

後は全王達が放逐された時間軸を時の界王神が探し出し、救出すれば今回のフューの実験から始まった騒乱はようやく幕を閉じる。

「全王様……いた。この時間軸かあ……」

そして時の界王神はようやく神々が放逐された時間軸を割り出し、憂鬱そうに溜息を吐いた。

そこは、何もない世界だった。

人も神も星も……それどころか宇宙すらない。

そして消した張本人であるその世界の全王は、別の時間の悟空によってタイムマシンで連れ出されており、正真正銘何もない世界であった。

すぐに救出に向かうようにトランクス達に指示を出そうとして……少しばかり、考える。

「……神々のいない宇宙、か」

彼女自身もまた神の一柱として、今回の件は決して他人事ではない。

むしろ、教訓としていつまでも心に刻んでおくべきだと時の界王神は考えている。神々は宇宙のバランスと秩序を保つ為に存在している。

だが神々は本当に正しく、公正にその力と権威を振るえているだろうか？ 自信を持って言えるだろうか？

その時の気分で星を壊す破壊神。気に入らなければ宇宙ごと消してしまふ全王。これらの存在の秩序と正義は一体誰が保証してくれるというのか。

……自分達で律していくしかない。そしてそれが崩れた時、神々は邪神となり、裁きではなく崇りへと成り下がる。

きつとハーツやシーラスから見て自分達は、もう邪神にしか見えていなかったのだろう、と時の界王神は考えた。

特に全王ともなれば、もうそれより上がない。自らで律していくしかないが、その全王はよりにもよって自制心などあるかどうかとも分らない幼子だ。

いつ消されるか分からない恐怖。それはハーツにとって何よりも許せない不自由な鎖であった。

会った事もない子供に自らの生殺与奪権を常に握られている。人生という自由が束縛され続けている。下手をすれば死後さえも……。

自由を愛するハーツはそれが耐えられなかった。

そしてそんな彼に、シーラスも同調してしまったのだ。

悪を許せぬシーラスが同調した……つまりシーラスもまた、神々を悪と見なしていたという事だ。

「……なんか……落ち込んじゃうなあ……」

ハーツとシーラスの気持ちは分らないではない。

実際、時の界王神自身もこのまま全王を戻すべきか、ほんの少しだが迷っている。このまま全王だけ隔離しておいた方が実はいいのではないか……そう思う自分がいるのを否定出来ない。

神々は全王に従い頭を垂れる。だがそこに全王への敬愛などない。忠誠も親しみもない。

あるのはただ、恐怖だけ。

『消されるのが怖いから従っている』。それだけでしかないのだ。

誰も全王の事など見ていない。

ただの恐ろしい宇宙の頂点にして神々の王。そして機嫌を損ねてはならない絶対者で……極力関わり合いになりたくないシステム。

可能なら顔を合わせたくないし言葉も交わしたくない。

それは時の界王神も同じで……実質、『全王はいない方がいい』と認めているようなものだった。

「……ダメダメ、こんな事考えちゃ。私は私のすべき事をしないと」

全王はどこまでいっても一人で、何をしていても一人遊びだ。

破壊神や界王神を招いて遊ぶ事はあるが、それも嫌々やっているだけで多少なりとも楽しんでいるのは全王一人だけ。付き合わされた方はさっさと終わって欲しいとは思わない。

他の時間軸では全王の友達として悟空が他の時間軸の全王を紹介している世界もあったが……これなどまさに一人遊びの究極だ。

まさに鏡に向かって話して、遊んでいるようなもの。

会話という形をとっても、相手も自分なのだから自分と同じ考え、同じ言葉しか

返ってこない。

逆に言えば全王の望む答えのみが返って来るので不快になる事はなく、二人の全王の間だけで完結するのである種の隔離になっているのだが……あの時間軸の悟空はそこまで考えて全王を二人にしたのだろうか？　だとしたらかなりの策士だ。

「……………っ！」

建物の外に気配を感じ、慌てて飛び出す。

感じられる気はかなり弱く、そして覚えのあるものだ。

建物——刻蔵庫の外に出ると、そこには全身がボロボロに傷付いたシーラスが立っていた。

一瞬身構えるも、もうシーラスに戦う力など残っていないとすぐに分かる。

ベジータ親子のギャリック砲を受け、命からがらここに逃げてきた、という所だろう。

咄嗟に逃げ込む場所としてこの時の巢に來たのは、古巣だからついここにきてしまったのか、それとも死に際の執念で時の巻物を狙って來たか……。

「シーラス……」

「時の……界王神………様……」

かつての上司と部下が向かい合い、居心地の悪い沈黙の時間が流れた。

今更何を話せばいいのだろうか。

言いたい事はいくらでもあったはずだ。

だが、いざ対面すると何も言葉が出てこない。

傷付き、倒れる寸前の彼に追い打ちをかけられるほど、時の界王神は無慈悲にはなれなかった。

「時の界王神様……私は……また間違えたのでしょうか……」

シーラスの絞り出すような問い。

これにYESと答えるのは簡単だし、神としてそうするべきだ。

シーラスの行動を肯定する事は、時の界王神としてあってはならない。

だから彼女は、かつて時の界王神としてシーラスを否定し、時の狭間に幽閉した。

その時はそれが正しい事だと信じていた。

しかし今は、あえて時の界王神ではなくクロノアとしてシーラスと向き合いたかった。

「……私にその問いの答えを求められたならば、私は時の界王神としてこう答える
しかないわ。」

『ええその通り。貴方は間違えていた。悔い改めなさい』……ってね。

けど神だって間違える。私達の判断が本当に正しいのかどうか……貴方が間違えていたのか……その絶対の答えなんてきつと、どこにもない」

「フ……神らしくない……答えだ」

「そうね。今の、全王様には内緒にしておいて」

時の界王神は茶目っ気たっぷりにウインクをする。

この世界で何が正しいか。その基準を突き詰めて行けば究極的には全王に行き着いてしまう。

人の善悪を法や王が決め、王の善悪を神が決め、神の善悪を更に上の神が決め……。そうして上へ上へと遡った先の終着駅が全王だ。

全王が正しいと言えは正しい。間違えていると言えは間違えている。

彼が万物の頂点である以上、彼の判断こそが善悪の絶対の基準だ。

しかし時の界王神は、時の巻物という形で世界を外側から見ることが出来る。

物語のように全王の更に外の視点からこの世界を見た時……全王を絶対に正しいと言えるのか。時の界王神には自信がなかった。

「そんな事より、まずは怪我の治療が先よ。久しぶりに私の手料理も振るまってあげるわ。お説教や言い争いはその後にしでしょ」

時の界王神はシーラスに近付き、手を差し伸べる。

シーラスはその小さな掌を見て、泣き出しそうな笑みを見せた。

「ふふ……貴方の料理か……ああ、そうだな………それも……いい……。」

「……また……あの時の………ように………」

「……シーラス？」

——シーラスは、彼女の手を掴む事は出来なかった。

その場に崩れ落ち、咄嗟に抱えた時の界王神はシーラスの軽さに驚いた。

そして確信してしまう。

ああ、何て事だ……もう終わっている。

彼から『未来』を感じない。命を感じる事が出来ない。

シーラスは時の界王神の腕の中で塵へと変わっていき、彼女はシーラスを留める

ように強く抱きしめる。

今際の際……シーラスが視たのは、時の巢で笑い合う自分達の姿。

時の界王神と、トキトキ都……後輩のトランクスもいて、そして自分もいて……。そして、悪のいない平和な世界を観測しながら何気ない日々を過ごす、そんな夢だ。

最後の最期まで幻想を抱き続け、そしてシーラスという男は完全にこの世から消滅した。

「……シーラス………あんだ、馬鹿よ………」

時の巢に独り、古くからの友人を失った少女の涙混じりの声が虚しく響いた。

【ハーツ&シーラス退場】

宇宙争乱編のボスが二人共死亡退場。これにて宇宙争乱編はエピローグを残すのみとなった。

ハーツもシーラスも味方になってもおかしくないキャラだったが、これ以上強い味方を増やしても流石に戦力過剰で動かす事も出来ず、いるだけのキャラになるのが目に見えていたので綺麗さっぱり死なせておいた。

何せ現状の戦力ですらクウラ決着編と宇宙騒乱編とワールドミッションとモロ編を同時発生させて、更にクウラにメタルクウラ無限増殖バグまで搭載するというギャグのような難易度にしてようやく互角なんだから、ここに争乱編ラスボスとワールドミッションラスボスまで加えたら本当に手に負えない。

【没シーン】

当初はシーラスはもう少しだけ生き延びて時の界王神の料理を一口だけ食べてから昇天予定だったが、実際書いてみた所、時の界王神の激マズ料理が止めになって死んだみたいになってしまったので止めた。

【没シーン2】

当初はハーツが消える前にラクスと会話をして「過去に囚われるな」とか「これからは自由に生きろ」とかハーツが伝えるシーンもあったが、実際書いたら「思ったより消えねえなコイツ」となってしまい、何かシュールになってしまったので止

めた。

多分この後あの世を経由してラグスとハーツに最後の別れの会話くらいはさせてあげていると思われる。

【神殿メンバー追加】

大界王神「やあ」

リゼット「（。A。）」

リゼット「（。A。）」

【戦闘力】

究極ハーツ…200兆

身勝手十超サイヤ人悟空…200兆

ハーツは戦いのエネルギーを吸収して自給自足で上限知らずに強くなるのもつと長引いていたらしい事になっていた。

次回、宇宙争乱編最終回。

ひとまず、今回の最終話で宇宙争乱編は完結とし、しばらくは読み専に戻ります。

ちょっと短めでしたが、まあ完結後の番外編としてなら、それなりのボリュームだったんじゃないかなと思います。

この後ですが、スーパーヒーロー編は（書く気力があれば）また少し時間を置いて番外編として書こうと思っています。

丁度今、漫画版の方でビーストと身勝手で戦っているので、比較対象がなくて強さがよく分からなかった悟飯ビーストの強さがある程度分かるかもしれないですしここは様子見です。

スーパーヒーロー編を楽しむにしてください方には申し訳ないのですが、こればかりは未完原作二次創作の避けられない宿命です。

変にフライングするとマジで取り返しつかない矛盾が出る……。

（例えば神と神の時に私がSSを書いていたら描写と発言を真に受けてゴッド＞超えられない壁＞合体戦士とかにして後々頭を抱える羽目になってました）

グラノラ編はもう書き終わってますが、これだけだと話数が少ない上に盛り上がりが少ないのでどうせならスーパーヒーロー編と一緒に出そうと思います。

なのでこっちも投稿せずにしばらく『待ち』をしようと思います。

あまり期待せずに、また始まったら思い出してやるかくらいの気持ちでいてくれるとありがたいです。

最終話 摩訶不思議アドベンチャー

現在リゼットと悟空は、タイムパトローラーの案内の許、全王達が放逐されたという時間軸を訪れていた。

コアエリアの戦士との戦いから数日が経ち、時の界王神が無事全王達が放逐された時間軸を割り出してくれたので、タイムパトローラー同伴のもと悟空とリゼットが全王回収にやって来たのだ。

数日しっかり休んだ事でリゼットの体調も回復し、今回はしっかり本体で活動している。

二人の近くにはセルが控えており、トランクスとバーダックは他の神々を回収する為に現在別行動中だ。

「あ、そうだ神様！ これ使えねえかな？」

そう言い、悟空が取り出したのは以前全王に渡された呼び出しスイッチだ。

これを押せば全王をその場に呼び出せるという、一歩使い方を誤れば大惨事を招きかねないアイテムである。

「どうなんでしょうね。私達の元居た世界とここは別ですし……でも、試してみる価値はあると思いますよ」

「だよな。そんじゃポチっとな」

悟空がスイッチオン！　するとその場に全王が出現した。

どうやらこの時間軸でも、呼び出しスイッチはしっかり機能するようだ。

全王は呼び出された事に気付いていないのか、ぼーっとした顔で……いや、それは普段からだが……遠くを見ていた。

「よっ、全ちゃん！」

「全王君、迎えにきましたよ」

「あ……悟空、リゼット」

全王はようやく二人に気付いたらしく、嬉しそうに顔を綻ばせた。
しかしまた無表情に戻ってしまい、何もない世界をじっと見る。

「どうした、全ちゃん。何か気になるもんでもあったか？」

「ううん、何もないのね。何も」

「だよなあ。全部綺麗さっぱり消えちまってるもん。宇宙まで消えちまってるっ

てのは不思議なもんだ」

この世界は、ここにいる全王が消したわけではない。

だが全宇宙を消してしまえばどうなるか、の答えがここにある。

以前の全王ならばきっと、この世界に何も思う事はなかっただろう。

ただ何もない空間を独りで浮遊し続けて、永遠を過ごしたかもしれない。

元々全王宮から出る事のない全王にとって、自分以外が消えても大して変化はない。

ただ建物がなくなって、大神官や付き人がいなくなるだけだ。

しかし今ここにいる全王は、この世界を見て今まで感じた事のない気持ちを抱いていた。

「凄くつまらない世界なのね、ここ。悟空もリゼットもいなくて、ペンギン村も無くて……凄く凄く退屈だったのね」

「……そっか」

「全王君、それは『つまらない』ではなく、『寂しい』という感情かもしれませんよ」
全王の僅かな成長を感じさせる言葉に悟空は肯定も否定もせず、リゼットは全王

の心に芽生えつつある新たな感情の名を教えた。

すると全王は何も言わずにリゼットの側まで浮遊し、意図を察したりゼットは彼を軽く抱き上げた。

「よくわからないのね。けど、多分あまり好きな感じじゃないのね」

「なあ全ちゃん。全ちゃんは、この世界を見てどうしたいって思った？」

「このままだとつまらないし、戻したいのね」

「そっか」

悟空の問いに、全王はこの世界を戻したいと答えた。それは以前までの全王ならばきつと言わなかった事だ。

彼の返答に悟空は穏やかな笑みを浮かべ、ポンポンと頭を叩く。

いくら彼と接して、分かった事がある。

全王は世界の頂点で、人間には理解不能な思考の持ち主で、無慈悲で何も考えていなくて、一見会話が成立しているように見えても根本的な部分では意思疎通など出来ない存在だ。

誰もがそう思う。界王神や破壊神ですら『全王とは何か』と問われれば、突き詰

めれば『世界の絶対のシステム』という答えに行き着くだろう。

誰も全王の事など一個人として見ていないのだ。ただ、その能力と存在の格だけを見ている。

だが悟空は思う。こいつはそこまで悪い奴じゃねえ、と。

力の大会の時だって、優勝者が他の宇宙の復活を願う事を期待していたと後から聞かされた。

彼が自分達と違うのは心じゃない。視点だ、と悟空は考える。

ずっと全王宮にいて上からしか世界を見なかった。これでは、世界も人も理解出来なくて当然でしかない。

「じゃあ戻すか。オラ達の世界に戻ってよ、また超ドラゴンボールを揃えてこの世界に戻ってくれて願おうぜ。使っちゃったばっかだから一年待たないといけねえけどよ」

「うん、それがいいのね。すぐに大神官に集めさせるのね」

「それもいいけどよ……なあ全ちゃん、冒険ってした事あるか？」

大神官に命じれば超ドラゴンボールはすぐに集まるだろう。

しかし悟空は、それでは何も変わらないと考えた。

全王に必要なのは恐怖ではない。無関心でもない。

彼の世界を広げる為の第一歩と、外に連れ出してくれる誰かの手だ。

そう……かつて、幼い頃の自分がブルマに連れられて外に出て、世界が広がったように。

「ないのね。ずっと全王宮にいるし、それで十分なのね」

「そっか。そんじゃあ、オラと同じだ。オラも子供の頃、ブルマに会うまでずっと小さな家で暮らしてた」

「冒険、楽しい？」

「ああ、色々苦労はあったが、すっげえ楽しかったぞ。知らねえもんばかりで、考えもしなかったような奴等がいてよ……全ちゃんにも、その楽しさを知ってもらいてえ」

「うわあ……僕もやりたいのね！」

二人の会話を聞いてリゼットは一瞬やめさせるかどうか考えたが、悟空のやりたいうようにやらせた方がよくなるような気がして口を挟まなかった。

今の全王には、閉じた世界から引っ張り出してくれる悟空の図々しさが要だ。この役目はきつと、破壊神も界王神も天使にも……そして、自分にも出来ない。能天気で、高く浮いている全王を何も気負わずに掴んで自分と同じ目線にまで下げてしまうような孫悟空だからこそ出来る事だ。

「そんじゃあブルマに宇宙船作って貰ってよ、オラと一緒に超ドラゴンボールを集める冒険に行こうぜ。きつと楽しいぞ」

「行きたい！」

「ああ。それに約束だったもんな、今度一緒に遊ぶってよ」

すっかり乗り気になった全王はリゼットの腕から離れて悟空の側に飛び、悟空はそんな彼を両手で掴んで高い高いをするように持ち上げた。

それからリゼットの方を見るが、言いたい事は分かる。

だからリゼットは肩をすくめ、悟空が頼み事をする前に返事をした。

「安心して下さい。他の神への説明は私の方でやっておきます」

「悪いな神様」

「それは私よりブルマに言った方がいいかもしれませんね。宇宙船を作るのは彼女

なんですから」

言うまでも無い事だが、宇宙船はとても高い。

ましてや超ドラゴンボールを探すとなれば他の宇宙まで行く事になるので、現在のカプセルコーポレーションの最新最高の宇宙船となるだろう。

その値段は屋敷が数軒余裕で建つレベルである。

だがブルマはきつと断らないだろう、とりゼットは思っていた。

それに今回のクウラ討伐とモロ討伐、そしてハーツ討伐のお礼として討伐に関わった全員に少なくない報酬が支払われているので、それで宇宙船を『永遠の美』から買う事も出来る。

……コインにザーボンの顔が刻まれた胡散臭いもので、地球では使えないが第7宇宙のほとんどの星で使えるらしい。

なのでクウラとハーツ二人の討伐に加わりハーツを倒した当人である悟空は実は宇宙全体で見ても指折りの超金持ちになっていた。実は宇宙レベルで見るとブルマより金を持っていて、惑星をいくつか買えるレベルだ。

……とはいえ地球では使えないので、本人的には使えない変なコインを大量

に押し付けられたという感覚でしかない。

「それじゃあ、戻りましょうか……私達の宇宙に」

★

神殿で空を眺めながらミラは一人、物思いに耽っていた。

空に手を伸ばし、己の手を見る。

以前よりもずっと強くなったのは間違いない。生き甲斐も感じている。

だが……遠い、と思った。

この掌は未だに何も掴めず、どこにも届いていない。

ライバルに届かないのはまだいい。追いかけるべき宿敵が強いのは嬉しい事だ。だが、せめて……せめて、助けを求める我が子にくらいは届かせたかった……。

——い、嫌だ……嫌だ……死ぬの……嫌だ……。僕はまだ……何も解き明かしてない……。

助けて……父さん……母さん……助けてよ……。

フューは、こんな自分を『父さん』と呼んでくれていた。

それは挑発の為だったのかもしれないし、皮肉を込めていただけかもしれない。

死に際のあの言葉も、その場で最も助かる可能性が高い行動を選んだだけで本心ではミラを父などと思っていなかったかもしれない。

それでも確かに父と呼び、手を伸ばしてくれたのだ。

だがその手を掴む事がミラには出来なかった。

因果応報、当然の報い……そう言われてしまえば否定など出来ない。

ミラもトワもフューも、自分の欲望の為だけに様々な時代を荒らした。命を奪ってきた。

ならばこれは当然の、相応しい末路なのかもしれない。

好き勝手してきた悪党が、より巨大な悪党に踏み潰された。まさに因果応報、然るべき結末だ。

「よお、ここにいたか」

無力感に支配されるミラに、誰かが声をかけた。

振り向けばそこにいたのはバーダック、トランクス、セルのタイムパトローラー

三人だ。

ミラはすぐに視線を前に戻し、彼らを視界から外す。

今のミラに、彼等の姿は眩しすぎたからだ。

孫悟空という息子に未来を託し、その息子は今や第7宇宙最強の戦士となったバーダック。

未来を託され、希望となったベジータの息子トランクス。

そして細胞から作り出された存在という、フューと同じ存在であるセル……。彼らを見ていると何一つ掴めていない自分が惨めに思えてくる。

「らしくねえな。大方、クウラやハーツが暴れている時はそいつらの事を考えてればよかったが、全部終わった後になってフューの死に様が響いてきたってところか」
「……分かっていいるならば放っておいてくれ」

「俺もそうしたいさ。だが、時の界王神がお前にこいつを渡していけって言うからよ」

時の界王神が話題に出た事で、ミラはもう一度後ろを振り向く。

そしてトランクスが抱えている小さな物体に気が付いた。

それは赤ん坊だ。

青い肌の目つきの悪い子供で角付きの黄色い帽子を被り、おしゃぶりをくわえて

いる。

その姿は、ミラの記憶の片隅に確かに存在していた。

「フュ……フュー……？」

「そうだ。お前が元いた時代の方のな」

監獄惑星で出会ったフューは、この赤子が歪んだ成長を遂げた未来の姿である。ならばミラとトワが元々いた時代にはまだ、放置された赤子のフューがいるという事だ。

その赤子をタイムパトロールは、時の界王神の命令を受けてこの時代に連れてきていた。

「本当はこういうのは駄目みたいなんです、今回は特例らしいです。この子が成長して、またあんな性格になって色々な時代を荒らすくらいなら、今度はしっかり親元で育ててみせろって」

「……………」

ミラは返事をしなかった……いや、出来なかった。

ただ、震える手をフューに伸ばそうとしては引っ込めてしまっている。

過去の宿敵の不器用な姿にバーダックが笑い、「渡してやれ」とトランクスに視線で指示する。

「ほら、ミラ……お前の子だろう。しっかり受け取れ」

「あ、ああ……」

トランクスに手渡され、ミラは赤子のフューを受け取った。

……軽い、と思った。

いや、こんなに軽かったのかと初めて知った。

こんなに小さな命を自分達は置き去りにしたのかと、今更になって驚愕する。

「もう置いていくなよ……残される方は、辛いんだぞ」

トランクスに言われ、ミラは小さく頷いた。

今は感情の整理が出来ない。返事をする余裕すらない。

ただ分かるのは、この小さな命を二度と手放してはならないという事だけだ。

そんなミラを残し、タイムパトローラー三人はその場から離れるとリゼットやこの時代の皆に挨拶をして回る。

トランクスはベジータとブルマ、この時代の自分へと別れを告げ、ターレスと

バーダックは無言で殴り合い、セルはりゼットと軽くやり取りをして時の巢へと帰っていった。

時の巢へと帰還した彼等は、ミラについて話し合う。

「ミラは大丈夫だろうか？ 随分呆けていたが」

「さあな。私達がそこまで気にする事ではあるまい」

トランクス疑問にセルが薄情とも思える言葉を返す。

しかし実際、この先はミラの問題だ。

自分達が気にしてもどうしようもない。

「心配いらねえよ。あいつを誰だと思ってるんだ？ 俺達を散々振り回しやがった野郎だぞ。」

この程度の問題くらい、簡単に乗り越えやがるさ」

恐らくはこの中で最もミラと戦った経験のあるバーダックが信頼にも近い言葉を放ち、トランクスとセルも納得したように笑う。

きっと大丈夫……もうミラとフューは同じ失敗をしない。

今はただ、そう信じよう。そう三人は思った。



超ドラゴンボールによって、全宇宙は元に戻った。

他の時間軸に放逐された神々も無事に帰還し、今はそれぞれの宇宙で後始末に追われている。

トランクス達タイムパトローラーも去り、全宇宙を巻き込んだ未曾有の危機はここに解決を迎えた。

今回の事件解決に多大な貢献を果たしたりゼットは地球の神から、より上位の神への昇格の話や、専用の新しい役職を作るという話、他の宇宙からの好待遇での勧誘もあったが全て拒否し、今も地球の神として日々、人々の日常を見守っている。モロやクウラ、コアエリアの戦士の排除に成功した『永遠の美』と総帥であるザーボンはずます第7宇宙内での立場を強めて他の宇宙の治安維持部隊との連携も見えてきたが、すぐ近くにいた天使メルスに過剰に怯えているせいであまり横暴な事は出来ていない。

また、今回の件で想像の遥か上だった地球の戦力を目の当たりにした事もあって、彼がフリーザと同じ暴君の道を歩む事はないだろう。

第6宇宙のサイヤ人達は二度と負けぬように日々鍛錬を重ね、ヒットは難易度の高い仕事を優先して受けるようになった。

彼等が見据える先にはきつと、あの山吹色の胴着を着た背中があるのだろう。

第11宇宙のプライドトルーパーズは結束を強め、今日も宇宙の平和を守り続けている。

その先頭を務めるのは勿論宇宙最強の戦士であるジレンだ。

彼の後ろにはいつだって守るべき人々がいて、彼の前には叩きのめされた悪党達が這い蹲っている。

信頼を知った男は強さを求める確かな理由を支えに、高みを目指して自らを鍛え続ける。

今回のハーツの争乱に神々のうちの何人かはそれぞれ思う所があったのか、今までより業務に真面目に取り組むようになったが……その一方で第7宇宙の破壊神であるビルスは平常運転で今日も惰眠を貪っている。

流石実力では最強レベルのくせに第7宇宙の人間レベルをワースト2位にした破壊神は駄目な方向に格が違う。

一方界王神の方には明らかな変化が訪れていた。

「やあ、初めましてだねリゼットさん。私は大界王神。ずっとブウの中で眠っていたけど、今回の戦いで目覚めたんだ。よろしくね」

「あ……はい。よろしくお願いします……」

地球の神殿の住人に大界王神が加わるという、まさかのビッグサプライズだ。

正確に言えば今の彼はブウの別人格のような存在なので住人は増えていないのだが、リゼットにとってはある意味今までで一番対応に困る住人だ。

リゼットは一惑星の神であり、神としての階級は最低ランクに位置している。

一方大界王神は第7宇宙の頂点だ。閻魔界王大界王神の上司の上司の上司の、そのまた上司

である。

それ自体は別にいい、今更だ。破壊神ビルスや全王と関わりを持った今となってはそこまで気にするような事ではない。

しかしその大上司が職場に自分の部下扱いで入って来たのだからかなり居心地が悪い。

「そんなに気にしないでいいよ。今の私はもう終わったはずの過去の存在だ。

ただの同居人として扱ってくれると嬉しい。それに普段はブウが表に出て、私は引っ込んでいるしね」

「は、はあ……」

そういえば、トリゼットは過去の自らの暴走を思い出す。

あの時、あの世からの魂の召喚でブウに殺された界王神達も召喚したが……よく思い返してみれば確かにあの時、大界王神がいなかった。

リゼット自身はこの事を深く考えず、神としての階級が違い過ぎて呼び出せなかったか、あるいはブウと完全に同化してしまったかのどちらかと思っていたのだが、まさか普通に出て来るとは。

勿論この大界王神復活に神々の世界は大騒ぎで、大界王神を復帰させようという話まで出たそうだ。

しかし結局当の本人が拒否した事と、今の彼は宇宙を荒らし回ったブウと同一人物という事で復帰させるわけにもいかず、結局神殿の助言役という位置づけに収まっている。

その代わり、最近では界王神がよく地球の神殿を訪れ、大界王神に教えを請う姿が

目撃されていた。

もしかしたらこれで、引き継ぎ不足も解消されるかもしれない。

そして――。

「おっ！ 全ちゃん、あっちの方から反応ありだ！ 超ドラゴンボールは近いぞ」

「やったーなのね！」

宇宙を飛ぶ、カプセルコーポレーションのマークが付いた一隻の宇宙船。

その中で悟空がドラゴンレーダーを見て喜びを示し、全王が両手を広げて万歳をした。

悟空はすぐに宇宙船内の衣装ケースの中から、全身を包むタイプのアンダースーツを取り出して着込み、その上からいつもの胴着を着込んだ。

「悟空悟空、それ何？」

「へへーっ、銀河パトロールの制服をブルマが解析して、作ってくれたんだ。

よくわかんねえけど、これを着るとオラ達サイヤ人でも宇宙で生きてられるんだぜ。すげえだろ？」

「わあ！　じゃあ悟空も僕と一緒に宇宙空間に出られるのね」

悟空はニカッ、と人懐っこい笑みを浮かべて宇宙船のハッチを開け、全王を持ち上げる自分の背に乗せた。

そして飛び出し、宇宙空間を高速で飛翔する。

星々の間を翔け、かつて雲のマシンで空を飛んでいた少年は大人となった今、星々の海を泳ぐ。

その背にはかつての自分同様に広い世界を知らなかった少年を乗せ、ドラゴンボールを指して未知の世界へと飛び込んだ。

その途中、悟空と全王は太陽を泳ぐ巨大な龍を見た。

どこか神龍に似ている青い龍で顔つきは意外と可愛らしい。

青い龍が悟空達を丸呑みしようと迫るが、悟空はアクロバティックに回転しながら龍の横をすり抜けた。

「すっげえなあ！　宇宙にはあんななんもいるんか！」

「でっかいのね！　かっくいー！」

龍は尚もしつこく悟空達を追うが、悟空は軽々と龍を翻弄して右へ左へ誘導し、

やがて龍は気付いた時には自らの身体で蝶結びを作ってしまった。

涙目になる龍をその場に残して悟空が飛び、レーダーの反応を頼りに巨大な惑星へ向かう。

超ドラゴンボールはまだ石のはずだが、ブルマが開発した最新型のレーダーならば石のままで探知してくれる。

「なあ全ちゃん、楽しみじゃねえか？ この先もきつと、あんな見た事のねえ奴が沢山いるぞ！ 宇宙にはまだまだ、オラ達の知らねえ事がいっぱいあんど！」

「うん！ とってもスーパースーパー楽しみなのね！」

「だよなー！ そんじゃ行くぞ……それー！」

悟空が速度を上げ、全王が歓声をあげた。

全王宮では大神官とウイスがその姿を見ながら、困ったように微笑む。

悟空の手にかかつては、宇宙の神々が恐れる全王もただの冒険に心躍らせる少年に早変わりだ。

その姿を水晶越しに見ている大神官は小さく溜息を吐いた。

「ウイスさん」

「はい、お父さま」

「私は全王様の、あれほど楽しそうなお顔を見た事がありません」

大神官のその言葉は、少しばかり普段の声色と違った。

それが喜びなのか、それとも悔しさから来るものなのかは本人にも分からない。分かるのは、以前ペンギン村で遊ぶ全王を見た時とは明らかに違う感情を抱いているという事だ。

「今でも私は反対なのです。全王様は常に平等であるべきです。

特定の何かに好意を持たれて、消す事に躊躇うようでは今回のように付け込まれてしまうかもしれません」

「同感です」

「しかし……何故でしょうね。そうなくても、どうしてか……何とかなってしまいそうな気がするのです」

「ふふっ……それも、同感です」

全王を背に乗せた悟空は宇宙を駆け抜け、星を越える。

この先きつと、悟空と全王は不思議な旅をするのだろう。

そしてその旅はきつと、楽しいものとなるだろう。

何故なら、この宇宙は大きな宝島なのだから。

悟空と全王は摩訶不思議なアドベンチャーを求めて、宇宙のどこかへ飛び去って行った。

宇宙争乱編（とクウラ決着編とワールドミッション編とモロ編）完ッ!!

というわけでまずは監獄惑星からスタートした一連の戦いは終わりです。

全王に関してはマジでハーツによって歴史ごと消される流れにして退場させるかどうか悩んだのですが、悟空のペースに巻き込んで成長させる方向に舵を切りました。

どうせなら、皆が恐れてしまう全王相手でも能天気巻き込んで、一緒に笑っている方が自分の中の悟空像に近かったのです。

それにこのSSの全王は未来トランクスの世界消していないからまあセーフという

事で。

ついでに大界王神とフューベイビーが神殿INしました。

フューはちゃんと成長して今度はゼノバース版に近い性格になる事でしょう。勿論他の時代に迷惑をかけないくらいの分別もプラスで。

フューの性能そのままだと流石にバランスブレイカーなのでベイビーまでナーフしておきました。これなら神殿にいてもヨシ！

それではまた、忘れてなければお会いしましょう。

ドラゴンボール ad a s t r a

著者 マジカル☆さくやちゃんスター

発行日 2024 年 4 月 13 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/177598/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
